石川啄木集

杉浦非水装幀

改造社版

○
やや遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も——
近づく日のあり。
○
かかる日に
すでに幾度会へることぞ！
成るがままに成れと今は思へり。
○
月に三十円もあれば、田舎にては、
楽に暮らせると——
ひよつと思へる。
○
今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば、
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

石川啄木

啄木と筆蹟

左上、明治三十八年夏の照影

左下、明治四十五年一月七日の署名

右上、「悲しき玩具」のノート第三十七頁

右下、「病院の窓」の原稿 第六枚

「石川啄木集」目次

序

啄木は實に不遇な短生涯を送つた。物質的に酬いられるところの極めて少なかつたばかりでなく、その思想、藝術の眞價を認められることも、決して當然な程度には達してゐなかつた。然かも彼自身、勿論この兩方面における不遇を歎じなかつたとはいへないが、それがために、その生活の意欲を減失することもなく、その表現の歸向を轉更することもなく、遂に獨自の世界を展開し得たことは、その環境に處して、彼の才情の豐富と意志の强固とによるものといはなければならぬ。

『明日の考察！これ實に我々が今日に於て爲すべき唯一である、さうして又總てである。』から彼は、その晩年の一論文の中に説いてゐる。現代の社會組織、政治組織、家族制度、教育制度、その他百般の事象に亙つて、靜かに、熱心に、深く、檢覈し、討究し、批判しなければならぬ、昨日に歸らうとする舊思想家、今日に沒頭しつゝある新思想家、それらの人々の前に、新たに明日といふ問題を提示して、これを「時代」の意志と體驗とに統合しなければならぬ。

『君、僕はどうしても僕の思想が、時代より一歩進んでゐるといふ自惚を此頃捨てることが出來ない。』

からもまた彼は、その書簡の中にいつてゐる。然かもそれは決して彼の「自惚」ではなかつた。然かも當時、極めて少數の彼の周圍のみしか、「新しき明日」への先驅者たる彼を知らなかつたのである。彼は「明日」に對する欲求と、準備と、計畫とのために、焦慮し、苦闘し、叛逆し、絶望し、諦め、悲しみ、憤り、嘆きつゝ、身を切るやうな物質生活の窮迫の中に、僅かに二十七年間の運命を終つた。彼の全精神は「明日」のために極度の緊張をなしつゝ、その肉體は遂に「今日」の傷ましい犧牲となつたのである。

然しその啄木の「明日」は遂に來た。生前においても詩集『あこがれ』のごときは、當時、天才の一少年詩人として、ロマンチシズムの時代に、詩壇の驚異とはなつたけれども、彼が「唯一」にしてまた「總て」であるとした社會認識の强調は、むしろ彼の死後、新潮社の厚意によつて出版することを得た全集三卷その他の效果が、彼への理解を全體的のものとし、その思想藝術を一般民衆のものとなしたことは否み難い。彼の遺友の一人なる予は、當時主としてその遺稿並に書簡等の蒐集、整理に當つたが、今、新たに、これらの遺作が、現代文學の代表的集約の中に加へられるに至つたことは、彼が生前の意圖と期望の空しくなかつたことを欣幸とせざるを得ない。

歌集によつて、彼は最も多くの共鳴者を得てゐるやうである。然しながら、彼にとつて、作歌は畢竟彼の「悲しき玩具」に過ぎなかつた。そこに彼の社會意識が窺ひ知られるのである。彼は小説の創作に志してゐた。そして長短種々な創作を試みたが、遂にみづから滿足し得られるものは一篇も稿を脱しえず、評論に、詩に、感想文に、彼としてはそれらすべてが「未完成」のまゝに終つたのであるが、それだけ、彼の「時代」に對する野望の强かつたことが察し得られよう。

「石をもて追はるゝ如く」彼が去つた郷里澁民村の一角には、死後「無名青年の徒」によつて一大記念碑が建てられ、啄木會と稱して各地に彼を思慕し、あるひは彼を研究考察せんとする團體の無數に設けられた事實もまた、彼が生前の信念と努力の一具現でなければならない。

昭和三年六月

土岐善麿

雲は天才である

一

六月三十日、S――村尋常高等小學校の職員室では、今しも壁の掛時計が平常の如く極めて活氣のない懶うげな悲鳴をあげて、――恐らく此時計までが學校教師の單調なる生活に感化されたのであらう、――午後の第三時を報じた。大方今は既四時近いのであらうか。といふのは、田舍の小學校にはよく有勝な奴で、自分が此學校に勤める樣になつて既に三ケ月にもなるが、未だ嘗て此時計がK停車場の大時計と正確に合つて居た例がない、といふ事である。少なくとも三十分、或時の如きは一時間と二十三分も遲れて居ましたと、土曜日毎に該停車場から、程遠くもあらぬ郷里へ歸省する女教師が云つた。これは、校長閣下自身の辯明によると、何分此校の生徒の大多數が農家の子弟であるので、時間の正確を守らうとすれば、勢ひ始業時間迄に生徒の集りかねる恐れがあるから、といふ事であるが、實際は、單純なる此村の農家の朝飯は普通の家庭に比して餘程早い。然し同僚の誰一人、敢て此時計の怠慢に對して、職務柄にも似合はず何等匡正の手段を講ずるものはなかつた。誰しも朝の出勤時間の、遲くなるなら格別、一分たりとも早くなるのを喜ぶ人は無いと見える。自分は? 自分と雖ども實は、幾年來の習慣で朝寢が第二の天性となつて居るので……。

午後の三時、規定の授業は一時間前に悉皆終つた。平日ならば自分は今正に高等科の教壇に立つて、課外二時間の授業最中であるべきであるが、この日は校長から、お互月末の調査もあるし、それに今日は妻が頭痛でヒドク弱つて居るから可成早く生徒を歸らしたい、課外は休んで貰へまいかといふ話、といふのは、破格な次第ではあるが此校長の一家四人――妻と子供二人と――は、既に久しく學校の宿直室を自分等の家として居るので、村費で雇はれた小使が、襁褓の洗濯まで其職務中に加へられ、牝雞常に晨を報ずるといふ內情は、自分もよく知つて居る。何んでも細君の顏色の曇つた日は、この一校の長たる人の生徒を遇する極めて酷だ、などいふ噂もある位、推して知るべしである。自分は舌の根まで込み上げて來た不快を辛くも嚙み殺して、今日は餘儀なく課外を休んだ。一體自分は尋常科二年の受持の代用教員で、月給は大枚金八圓也、毎月末に必ず有難く頂戴して居る。それに受持以外に課外二時間宛と來ては、他目には勞力に伴はない報酬、否、報酬に伴はない勞力とも見えようが、自分は露聊かこれに不平は抱いて居ない。何故なれば、この課外教授といふのは、自分が生れて初めて教鞭をとつて、此校の職員室に末席を涜すやうになつての一週間目、生徒の希望を容れて、といふよりは寧ろ自分の方が生徒以上に希望して開いたので、初等の英語と外國歷史の大體とを一時間宛とは表面だけの事、實際は、自分の有つて居る一切の知識、(知識といつても無論貧少なものであるが、自分は、然し、自ら日本一の代用教員を以て任じて居る。)一切の不平、一切の經驗、一切の思想、――つまり一切の精神が、この二時間のうちに、機を見て時を待つて、吾が舌端より火箭となつて迸しる。的なきに箭を放つのではない。男といはず女といはず、既に十

た、十四、十五、十六といふ年齢の五十幾人のうら若い胸、それが乃ち火を待つ許りに紅血の油を盛つた青春の火盞ではないか。火箭が飛ぶ、火が油に移る、嗚呼そのハツ／＼と燃え初むる人生の狼火の煙の香ひ！　英語で話せば世界中何處へでも行くに不便はない。たゞこの平凡な一句でも自分には百萬の火箭を放つべき堅固な弦だ。昔希臘といふ國があつた。基督が磔刑にされた。人は生れた時何物をも持つて居ないが精神だけは持つて居る。羅馬は一都府の名で、また昔は世界の名であつた。ルーソーは歐羅巴中に響く喇叭を吹いた。コルシカ島はナポレオンの生れた處だ、バイロンといふ人があつた。トルストイは生きて居る。ゴルキーが以前放浪者で、今肺病患者である。露西亜は日本より豪い。我々はまだ年が若い。血のない人間は何處に居るか。……あゝ、一切の問題が皆火の種だ。自分も火だ。五十幾つの胸にも火事が初まる。四間に五間の教場は宛然熱火の洪水だ。自分の骨露はに瘦せた拳が礑と卓子を打つ。と、躍り上るものがある、手を振るものがある、萬歳と叫ぶものがある。完たく一種の暴動だ。自分の眼瞼から感激の涙が一滴溢れるや最後、其處にも此處にも聲を擧げて泣く者、上氣して顏が火と燃え、聲も得出さで革命の檄の石像の樣に突立つ者。となれば之れ一幅生命反亂の活畫圖が現はれる、涙は水ではない、心の幹をしぼつた樹脂である、油である。火が愈々燃え擴がる許りだ。『千九百〇六年……此年〇月〇日、S―― 村尋常高等小學校内の一教場に暴動起る』と後世の世界史が、よしや記さぬまでも、この一場の恐るべき光景は、自分並びに五十幾人のジャコビン黨の胸板には、恐らく、時の破壞の手も消し難き永久不磨の金字で描かれるであらう。疑ひもなく此二時間は、自分が一日二十四時間千四百四十分の内、最も得意な、愉快な、幸福な時間で、大方自分が日々この學校の門を出入する意義も、全くこの課外教授がある爲めであるらしい。然し乍ら此日六月三十日、完全なる『教育』の模範として、既に十幾年の間身を教育勅語の御前に捧げ、口に忠信孝悌の語を繰返す事正に一千萬遍、其思想や穩健にして中正、其風采や質樸無華にして具さに平凡の極致に達し、平和を愛し溫順を衒ふの美德餘つて、獨創の見の下に布かるゝをも敢て恥辱とせざる程の忍耐力あり、現に今この S―― 村に於ては、毎月十八圓といふ村内最高額の俸給を受け給ふ――田島校長閣下の一言によつて、自分は不本意乍ら課外授業を停み、間接には馬鈴薯に目鼻よろしくといふマダム田島の御機嫌をとつた事になる不面目を施し、退いて職員室の一隅に、兒童出席簿と睨み合をし乍ら算盤の珠をさしたり減いたり、過去一ヶ月間に於ける兒童各自の出缺席から、其總數、其歩合を計算して、明日は痩犬の樣な俗吏の手に渡さるべき所謂月表なるものを作らねばならぬ。それのみなら未だしも、成績の調査、缺席の事由、食料携帶の狀況、學用品供給の模樣など、名目は立派でも殆んど無意義な仕事が少なからずあるのである。茲に於て自分は感じた、地獄極樂は決して宗教家の方便ではない、實際我等の此の世界に現存して居るものである、と。さうだ、この日の自分は明らかに校長閣下の一言によつて、極樂へ行く途中から、正確なるべき時間迄が娑婆の時計と一時間も相違のある此の蒸し熱き地獄に墮されたのである。算盤の珠のパチ／＼／＼といふ音、これが乃ち取りも直さず、中世紀末の大冒險家、地獄煉獄天國の三界を跡にかけたダンテ・アリギエリでさへ、聞いては流石に膽を冷した『パペ、サタン、パペ、サタン、アレッペ』といふ奈落の底の聲ではないか。自分は實際、この計算と來

るゝ、吝嗇な金持の爺が己の財産を勘定して見る時の様に、ニコ〳〵ものでに兎ても行れないのである。極樂から地獄！　この永劫の宣告を下したものは誰か、抑々誰か。曰く、校長だ。自分は此日程此校長の顔に表れて居る醜惡と缺點とを精密に見極めた事はない。第一に其鼻下の八字髭が極めて光澤が無い、これは其人物に一分一厘の活氣もない證據だ。そして其髭が鰻のそれの如く兩端遙かに頤の方面に垂下して居る、恐らく向上といふ事を忘却した精神の象徴はこれであらう。亡國の髭だ、朝鮮人と昔の漢學の先生と今の學校教師にのみあるべき髭だ。黒子が總計三個ある、就中大きいのが左の目の下に不吉の星の如く、如何にも目障りだ。これは俗に泣黒子と云つて、幸にも自分の一族、乃至は平生畏敬して居る人々の顔立には、つひぞ見當らぬ道具である。宜なる哉、この男、どうせ幸ひ好い目に逢ふ氣づかひが無いのだもの。……數へ來れば幾等もあるが、結句、『三莫深』の一といふ結論に歸着した。詰り、一毛の微と雖ども自分の氣に合ふ點がなかつたのである。

この不法なるクーデターの顛末が、自分の口から、生徒控處の一隅で、殘りなく我がシャコピン黨全員の耳に達せられた時、一團の暗雲あつて忽ちに五十幾箇の若々しき天眞の顔を覆うた。樂園の光明門を閉ざす鉛色の雲霧である。明らかに彼等は、自分と同じ不快、不平を一喫したのである。無論自分は、かの細君の頭痛一件まで持ち出したのではない、が、自分の言葉の終るや否や、或者はドンと一つ床を蹴つて一喝した、『校長馬鹿ッ。』更に他の聲が續いた、『鰻ッ。』『蒲焼にするぞッ。』最後に『チェースト』と極めて陳腐な奇聲を放つて相和した奴もあつた。自分は一際の微笑を彼等に注ぎかけて、静かに歩みを地獄の門に向けた。軈て十五六歩も歩んだ時、急に後の騒ぎが止んだ、と思ふと、『ワン、ツー、スリー、混鰻――』と、校舎も爲めに動く許りの鬨の聲、中には絹裂く様な鋭どい女生徒の聲も確かに交つて居る。餘りの事に振向いて見た、が、此時は既に此等革命の健兒の半數以上は生徒昇降口から嵐に狂ふ木の葉の如く戸外へ飛び出した所であつた。恐らく今日も、門前に進んで居る校長の子供の小さい頭には、時ならぬ拳の雨の降つた事であらう。然し控處にはまだ空しく歸りかねて殘つた者がある。機會を見計つて自分に何か特にお話を請求しようといふ熱心の輩、髮長き兒も二人三人見える、――總て十一二人。小使の次男なるのと、女教師の下宿して居る家の子と、（共に其縁故によつて、校長閣下から多少大目に見られて居る）この二人は自分の跡から尾いて來たまゝ、先刻からこの地獄の入口に門番の如く立つて、中の様子を看守して居る。

入口といふのは、紙の破れた障子二枚によつて此室と生徒控處とを區別したもので、校門から眞直の玄關を上ると、すぐ左である。この入口から、我が當面の地獄、――天井の低い、十疊敷位の、汚點だらけな壁も、古風な小形の窓も、年代の故で歪んだ皮椅子も皆一種人生の倦怠を表にして居る職員室に這入ると、向つて凹字形に都合四脚の卓子が置かれてある。突當りの並んだ二脚の、右が校長閣下の席で、左は検定試験上りの古手の首座訓導、校長の傍が自分で、向ひ合つての一脚が女教師のである。吾校の職員と云つば唯この四人だけ、自分が其内最も末席なは云ふ迄もない。よし百人の職員があるにしても代用教員は常に末席を仰せ付かる性質のものであるのだ。御規則とは随分陳腐な洒落である。サテ、自分の後は直ちに障子、前で宿直室になつて居る。

此職員室の、女教師の背なる壁の掛時計が

懶げなる悲鳴をあげて午後三時を報じた時、其時四人の職員は皆各自の卓子に相割據して居た。――卓子は互に密接して居るものの、此時の狀態は確かに一の割據時代を現出して居たので。――二三十分も續いた「パペ、サタン、アレッペ」といふ苦しげなる聲は、三四分前に至つて、足音に驚いて卒かに啼き止む小田の蛙の歌の如く、礑と許り止んだ。と同時に、(老いたる尊とき導師は震なくダンテの手をひいて、更に他の修羅圈内に進んだのであらう。)新らしき一陣の殺氣颯と面を打つて、別箇の光景をこの室内に描き出したのである。

詳しく說明すれば、實に詰らぬ話であるが、問題は斯うである。二三日以前、自分は不圖した轉機から思附いて、このS――村小學校の生徒をして日常朗唱せしむべき、云はゞ校歌といつた樣な性質の一歌詞を作り、そして作曲した。作曲して見たのが此時、自分が呱々の聲をあげて以來二十一年、實際初めてであるに關らず、恥かし乍ら自白すると、出來上つたのを聲の透る我が妻に歌はせて聞いた時の感じでは、少々巧い、と思はれた。今でもさう思つて居るが…。妻からも賞められた。その夜遊びに來た二三の生徒に、自分でヰオリンを彈き乍ら教へたら、矢張覺えてくれた、然も非常に面白い、これからは毎日歌ひますと云つて。歌詞は六行一聯の六聯で、曲の方はハ調四分の二拍子、それが最後の二行が四分の三拍子に變る。斯う變るので一段と面白いのですよ、と我が妻は云ふ。イヤ、それはそれとして、兎も角も自分はこれに就いて一點疚しい處のないのは明白な事實だ。作歌作曲は決して盜人、僞善者、乃至一切破廉恥漢の行爲と同一視さるべきではない。マサカ代用教員如きに作曲などをする資格がないといふ規定も無い筈だ。して見ると、自分は不相變正々堂々たるものである、俯仰して天地に恥づる處なき大丈夫である。處が、豈何んぞ圖らんや、この堂々として赤裸々たる處が却つて敵をして矢を放たしむる的となつた所以であつたのだ。ト何も大袈裟に云ふ必要もないが、其歌を自分の教へてやつた生徒は其夜僅か三人(名前も明らかに記憶して居る)に過ぎなかつたが、何んでもジャコビン黨員の胸には皆同じ色――若き生命の淺緑と湧き立つ春の泉の血の色との火が燃えて居て、脣が皆一樣に乾いて居る爲めに野火の移りの早かつたものか、一日二日と見る〳〵うちに傳唱されて、今日は早や、多少調子の違つた處のないでもないが、高等科生徒の殆んど三分の二、イヤ五分の四迄は確かに知つて居る。晝休みの際などは、誰先立つとなく運動場に一蛇のポロテージ行進が始つて居た。彼是百人近くはあつたらう、尤も野次馬の一群も立交つて居たが、口々に歌つて居るのが乃ち斯く申す新田耕助先生新作の校友歌であつたのである。然し何も自分の作つたものが大勢に歌はれたからと云つて、決して恥でもない、罪でもない、寧ろ愉快なものだ、得意なものだ。現に其行進を見た時は、自分も何だか氣が浮立つて、身體中何處か斯う擽られる樣で、僅か五分間許りではあるが、自分も其行進列中の一人と迄なつて見た位である。……問題の鍵は以後である。

午後三時前三――四分、今迄矢張り不器用な指を算盤の上に躍らせて、『パペ、サタン、パペ、サタン』を繰返して居た校長田島金藏氏は、今しも出席簿の方の計算を終つたと見えて、やをら頭を擡げて煙管を手に持つた。ポンと卓子の緣を敲く、トタンに、何とも名状し難い、狸の難產の樣な、水道の栓から草鞋でも飛び出しさうな、も少し適切に云ふと、隣家の豚が夏の眞中に感冒をひいた樣な奇響――敢て響といふ、――が、恐らく仔細に分析して見たら出損

なつた咳の一種でもあらうか、彼の巨大なる喉佛の邊から鳴つた。次いで復た幽かなのが一つ。もうこれ丈けかと思ひ乍ら自分は此時算盤の上に現はれた八四七・九といふ數を月表の出席歩合男の部へ記入しようと、筆の穗を一寸と噛んだ。此刹那、沈痛なる事甚寂の夢の中で去年死んだ黑猫の幽靈の出た樣な聲あつて、

「新田さん。」

と呼んだ。校長閣下の御聲掛りである。

自分はヒョイと顏を上げた。と同時に、他の二人——首座と女教師も顏を上げた。此一瞬からである、「パペ、サタン、パペ、サタン、アレッペ」の聲の謡と許り聞えずなつたのは。女教師は默つて校長の顏を見て居る。首座訓導はグイと身體をもぢつて、煙草を吸ふ準備をする。何か心に待構へて居るらしい。然り、この僅か三秒の沈默の後には、近頃珍らしい嵐が吹き出したのだもの。

「新田さん、」と校長は再び自分を呼んだ。餘程嚴格な態度を裝うて居るらしい。然しお氣の毒な事には、平凡と醜惡とを「教育者」といふ型に入れて鑄出した此人相には、最早他の何等の表情をも容るべき空虛がないのである。誠に完全な「無意義」である。若し強ひて嚴格な態度でも裝はうとするや最後、其結果は唯對手をして一種の滑稽と輕蔑な憐愍の情とを起させる丈だ。然し當人は無論一切御存じなし、破鐘の欠伸する樣な訥辯は一歩を進めた。「貴君に少しお聞き申したい事がありますがナ。エート、生命の森の……。何でしたつけナ、初めの句は？（と首座訓導を見る、首座は、甚だ迷惑といふ風で默つて下を見た。）ウン、左樣々々、春まだ淺く月若き、生命の森の夜の香に、あくがれ出でて、……とかいふアノ唱歌ですて。アレは、新田さん、貴君が祕かに作つて生徒に歌はせたのだと云ふ事ですが、眞實ですか。」

「譃です、歌も曲も私の作つたには相違ありませぬが、祕かに作つたといふのは譃です。蔭仕事は嫌ひですからナ。」

「デモ、さういふ事でしたつけね、古山さん先刻の御話では。」と再び隣席の首座訓導を顧る。

古山の顏には、またしても迷惑の雲が懸つた。矢張り默つた儘で、一閃の偸視を自分に注いで、煙を鼻からフウと出す。

此光景を目擊して、ハヽア、然うだ、と自分は早や一切を直覺した。かの正々堂々赤裸々として俯仰天地に恥づるなき我が歌に就いて、今自分に持ち出さんとして居る抗議は、蓋し泥鰌金藏閣下一人の頭腦から割出したものではない。完たく古山と合議の結果だ。或は古山の方が當の發頭人であるかも知れない。イヤ然うあるべきだ、この校長一人丈けでは、如何して這麼元氣の出る筈が無いのだもの。一體この古山といふのは、此村土着の者であるから、既に十年の餘も斯うして此學校に居る事が出來たのだ。四十の坂を越して矢張五年前と同じく十三圓で滿足して居るのでも、意氣地のない奴だといふ事が解る。夫婦喧嘩で有名な男で、（此點は校長に比して稍々温順の美德を缺いて居る。）話題と云つぱ、何日でも酒と、若い時の經驗談とやらの女話、それにモ一つは釣道樂、と之れだけである。最もこの釣道樂だけは、この村で屈指なもので、既に名人の域に入つて居ると自身も信じ人も許して居る。隨つて主義も主張もない、（昔から釣の名人になる樣な男は主義も主張も持つてないと相場が極つて居る。）隨つて當年二十一歳の自分と話が合はない。自分から云はせると、校長と謂ひ此男と謂ひ、營養不足で天然に立枯になつた朴の木の樣なもので、松なら枯れても枝振といふ事もあるが、何の風情もない、彼等と自分とは、毎日吸ふ煙草までが違つて居る。彼等の吸ふのは枯れた樣

の葉の粉だ、辛くもないが甘くもない、香もない。自分のは、五匁三錢の安物かも知れないが、兎に角正眞正銘の煙草である。香の强い、辛い所に甘い所のある、眞の活々した人生の煙だ。リリーを一本吸うたら目が廻つて來ましたつけ、と何日か古山の云うたのは、蓋し實際であらう。斯くの如くして、自分は常に此職員室の異分子である、纎ッ子である、平和の攪亂者と目されて居る。若し此小天地の中に自分の話相手になる人を求むれば、それは實に女教師一人のみだ。芳紀やゝ過ぎて今年正に二十四歳、自分には三歳の姉である。それで未だ獨身で、熱心なクリスチアンで、讃美歌が上手で、新教育を享けて居て、思想が先づ健全で、顏は？顏は毎日見て居るから別段目にも立たないが、頰は桃色で、髮は赤い、目は年に似合はず若々しいが、時々判斷力が閃めく、尋常科一年の受持であるが、誠に善良なナーズである。で、大抵自分の云ふ事が解る、理のある所には屹度同情する。然し流石に女で、それに稍々思慮が有過ぎる傾があるので、今日の樣な場合には、敢て一言も口を出さない。が、其眼球の輕微なる運動は既に十分自分の味方であることを語つて居る。況んや、現に先刻この女が、自分の作つた歌を誰から聞いたものか、低聲に歌つて居たのを、確かに自分は聽いたのだもの。

さて、自分は此處で、かの歌の如何にして作られ、如何にして傳唱されたかを、詳らかに說明した。そして、最後の言葉が自分の脣から出て、校長と首座と女教師と三人六箇の耳に達した時、其時、カーン、カーン、カーン、と掛時計が、懶氣に叫んだのである。突然『アーア』といふ聲が、自分の後、障子の中から起つた。恐らく頭痛で弱つて居るマダム馬鈴薯が、何日もの如く三歳になる女の兒の帶に一條の紐を結び、其一端を自身の足に繫いで、危い處へやらぬ樣にし、切爐の側に寢そべつて居たのが、今時計の音に眞晝の夢を覺されたのであらう。『アーア』と再聞えた。

三秒、五秒、十秒、と恐ろしい沈默が續いた。四人の職員は皆各自の卓子に割據して居た。この沈默を破つた一番槍は古山朴の木である。

『其歌は校長さんの御認可を得たのですか。』

『イヤ、決して、斷じて、認可を下した覺えはありませぬ。』と校長は自分の代りに答へて呉れる。

自分はケロリとして煙管を銜へ乍ら、幽かな微笑を女教師の方に向いて洩した。古山もまた煙草を吸ひ初める。

校長は、と見ると、何日の間にか赤くなつて、鼻の上から水蒸氣が立つて居る。『どうも、餘りと云へば自由が過ぎる。新田さんは、それあ新教育も享けてお出でだらうが、どうも、その、少々身勝手が過ぎるといふもんで……。』

『さうですか。』

『さうですかッて、それを解らぬ筈はない。一體その、エート、確か本年四月の四日の日だつたと思ふが、私が郡視學さんの平野先生へ御機嫌伺ひに出た時でした。さう、確かに其時です。新田さんの事は郡視學さんからお話があつたもんだで、つい私も新田さんを此學校に入れた次第で、郡視學さんの手前もあり、今迄は隨分私の方で遠慮もし、寬裕にも見て置いた譯であるが、然し、さう身勝手が過ぎると、私も一校の司配を預かる校長として、』と句を切つて一寸反り返る。此機を逸さず自分は云つた。

『どうぞ御遠慮なく。』

『不埒だ。校長を屁とも思つて居らぬ。』

この聲は少し高かつた。握つた拳で卓子をドンと打つ、驚いた樣に算盤が床へ落ちて、けたたましい音を立てた。自分は今迄校長の斯う活氣のある事を知らなかつた。或は自白する

如く、今日迄は御觀學の手前遠慮して居たかも知れない。然し彼の云ふ處は實際だ。自分は實際此校長位は屁とも思つて居ないのだもの。

この時、後の障子に、サと物音がした。マダム馬鈴薯が這ひ出して來て、様子如何にと耳を澄まして居るらしい。

『只今伺つて居りました處では、』と白ツぽくれて古山が口を出した、『どうもこれは校長さんの方に理がある様に、私には思はれますので。然し新田さんも別段お惡い處もない、唯その校歌を自分勝手に作つて、自分勝手に生徒に教へたといふ、つまり、順序を踏まなかつた點が、大に、イヤ、多少間違つて居るのでは有るまいかと、私には思はれます。』

『此學校に校歌といふものがあるのですか。』

『今迄さういふものは有りませんで御座んした。』

『今では？』

今度は校長が答へた。『現にさう云ふ貴君が作つたではないか。』

『問題は其處ですて。物には順序……』

皆まで云はさず自分は手をあげて古山を制した。『問題も何も無いぢやないですか。既に私の作つたアレを、貴君方が校歌だと云つてるぢやありませぬか。私はこのS——村尋常高等小學校の校歌を作つた覺えはありませぬ。私はたゞ、この學校の生徒が日夕吟誦しても差支のない様な、校歌といつたやうな性質のものを試みに作つた丈です。それを貴君方が校歌というて居られる。詰り、校歌としてお認め下さるのですな。そこで生徒が皆それを、其校歌を歌ふ。問題も何も有つた話ぢやありますまい。此位天下泰平な事はないでせう。』

校長と古山は顔を見合せる。女教師の目には滿足した様な微笑が浮んだ。入口の處には二人の立番の外に、新らしく來たのがある。後の障子が颯と開いて、腰の邊に細い紐を卷いたなり、帶も締めず、垢臭い木綿の細かい縞の袷をダラシなく着、胸は露はに、抱いた兒に乳房銜せ乍ら、靜々と立現れた化生の者がある。マダム馬鈴薯の御入來だ。袷には黒く汗光りのする繻子の半襟がかゝつてある。如何考へても、決して餘り有難くない御風體である。針の様に鋭どく釣上つた眼尻から、チヨと自分を睨んで、校長の直ぐ傍に突立つた。若しも、地獄の底の底で、白髪茨の如き痩せさらぼひたる斃死の狀の人が、吾兒の骨を諸手に提つて、キリ〳〵〳〵と嚙む音を、現實の世界で目に見る或形にしたら、恐らくそれは此女の自分を一瞥した時の目付それであらう。此目付で朝な夕な睨を刺される校長閣下の心事も亦、考へれば諒とすべき點のないでもない。

生ける女神——貧乏の？——は、石像の如く無言で突立つた。やがて電光の如き變化が此室内に起つた。校長は、今迄忘れて居た嚴格の態度を再び裝はんとするものゝ如く、其顔面筋肉の二三ケ所に、或る運動を與へた。援軍の到來と共に、勇氣を回復したのか、恐怖を感じたのか、それは解らぬが、兎に角或る激しき衝動を心に受けたのであらう。古山も面を上げた。然し、もうダメである。攻勢守勢既に其地を代へた後であるのだもの。自分は敵勢の加はれるに却つて一層勝誇つた様な感じがした。女教師は、女神を一目見るや否や、譬へ難き不快の霧に清い胸を閉されたと見えて、忽ちに俯いた。見れば、恥辱を感じたのか、氣の毒と思つたのか、それとも怒つたのか、耳の根迄紅くなつて、鉛筆の尖でコツ〳〵と卓子を啄いて居る。

古山が先づ口を切つた。『然し、物には總て順序がある。其順序を踏まぬ以上は、……一足飛に陸軍大將にも成れぬ譯ですて。』成程古今無類の卓說である。

校長が續いた。「其正當の順序を踏まぬ以上は、たとひ校歌に採用して可いものでも未だ校歌とは申されない。よし立派な免狀は持つて居らぬにしても、身を敎育の職に置いて月給迄貰つて居る者が、物の順序も考へぬとは、餘りといへば餘りな事だ。」

云ひ終つて堅く脣を閉ぢる。氣の毒な事たは其への字が餘り恰好がよくないので。

女神の視線が氷の矢の如く自分の顏に注がれた。返答如何にと促すのであらう。トタンに、無造作に、といふよりは寧ろ、無作法に束ねられた髮から、櫛が辷り落ちた。敢て拾はうともしない。自分は笑ひ乍ら云うた、

『折角順序々々と云ふお言葉ですが、一體如何いふ順序があるのですか。恥かしい話ですが、私は一向存じませぬので。……若し其校歌採用の件とかの順序を知らない爲めに、他日誤つて何處かの校長にでもなつた時、失策する樣な事があつても大變ですから、今敎へて貰く譯に行きませぬでせうか。」

校長は苦り切つて答へた。「順序といつても別に面倒な事はない。第一に(と力を入れて)校長が認定して、可いと思へば、郡視學さんの方へ届けるので、それで、ウム、その唱歌が學校生徒に歌はせて差支がない、といふ認可が下りると、初めて校歌になるのです。」

「ハヽア、それで何ですな、私の作つたのは、其正當の順序とかいふ手數にかけなかつたので、詰り、早解りの所が、落第なんですな。結構です。作者の身に取つては、校歌に採用されると、されないとは、完たく屁の樣な問題で、唯自分の作つた歌が生徒皆に歌はれるといふ丈けで、もう名譽は十分なんです。ハヽヽヽヽ。これなら別に論はないでせう。」

「然し、」と古山が繰り出す。此男然しが十八番だ。「その學校の生徒に歌はせるには、矢張り校長さんなり、また私なりへ、一應其歌の意味でも話すとか、或は出來上つてから見せるとかしたら穩便で可いと、マア思はれるのですが。」

「のみならず、學校の敎案などは形式的で記す必要がないなどと云つて居て、宅へ歸れば、すぐ小說なぞを書くんださうだ。それで敎育者の一人とは呆れる外はない。實に、どうも、……。然し、これはマア別の話だが。新田さん、學校には、畏くも文部大臣からのお達で定められた敎授細目といふのがありますぞ。算術國語地理歷史は勿論の事、唱歌裁縫の如きでさへ、チアンと細目が出來て居ます。私共長年敎育の事業に從事した者が見ますと、現今の細目は實に立派なもので、精に入り微を穿つ、とでも云ひませうか。彼是十何年も前の事ですが、私共がまだ師範學校で勉强して居た時分、其頃で早や四十五圓も取つて居た小原銀太郎と云ふ有名な助敎諭先生の監督で、小學校敎授細目を編んだ事がありますが、其時のと今のと比較して見るに、イヤ實にお話にならぬ、冷汗です。で、その、正實の敎育者といふものは、其完全無缺な規定の細目を守つて、一毫亂れざる底に授業を進めて行かなければならない、若しさもなければ、小にしては其敎へる生徒の父兄、また、高い月給を支拂つてくれる村役場にも甚だ濟まない譯、大にしては我が大日本の敎育を亂すといふ罪にも坐する次第で、完たく此處の所が、我々敎育者にとつて最も大切な點であらうと、私などは、既に十年の餘も、――此處へ來てからは、まだ四年と三ケ月にしか成らぬが、――努力精勵して居るのです。尤も、細目に無いものは一切敎へてはならぬといふのではない。そこはその、先刻から古山さんも頻りに主張して居られる通り、物には順序がある、順序を踏んで、認可を得た上なれば、無論敎へても差支がない。若しさうでなくば、只今諄々と申した

様な仕儀になり、且つ私も校長を拝命して居る以上は、私に迄責任が及んで来るかも知れないのです。それでは、何うもお互に迷惑だ。のみならず吾校の面目をも傷ける様になる。』

『一大要な事になるんですね。』と自分は極めて洒々たるものである。尤も此お説法中は、時々失笑を禁じえなんだので、それを噛み殺すに不少骨を折つたが。『それでつまり私の作つた歌が其完全無缺なる教授細目に載つて居ないのでせう。』

『無論ある筈がないでサア。』と古山。

『ない筈ですよ、二三日前に作つた許りですもの。アハヽヽヽ。先刻からのお話は、結局あの歌を生徒に歌はせては不可、といふ極く明瞭な一事に歸着するんですね。色々な順序の枝だの細目の葉だのを切つて了つて、肝膽を披瀝した所が、さうでせう。』

これには返事が無い。

『其細目といふ矢釜敷お爺さんに、代用教員は教壇以外にて一切生徒に教ふべからず、といふ事か、さもなくんば、學校以外で生徒を教へる事の細目とかいふものが、ありますか。』

『細目にそんな馬鹿な事があるものか。』と校長は怒つた。

『それなら安心です。』

『何が安心だ。』

『だつて、さうでせう。先刻詳しくお話した通り、私があの歌を教へたのは、二三日前、乃ちあれの出來上つた日の夜に、私の宅に遊びに來た生徒只の三人だけになのですから、何も私が細目のお爺さんにお目玉を頂戴する筈はないでせう。若しあの歌に、何か危險な思想でも入れてあるとか、又は生徒の口にすべからざる語でもあるなら格別ですが、……。イヤ餘程心配しましたが、これで青天白日潔々無罪に成りました。』

全勝の花冠は我が頭上に在り。敵は見ン事鴨緑以北に退却した。劍折れ、馬斃れ、矢彈が盡きて、戰の續けられる道理は昔からないのだ。

『私も昨日、あれを書いたのを某さん（生徒の名）から借りて寫したんですよ。私なんぞは何も解りませんけれども、大層もう結構なお作だと思ひまして、實は明日唱歌の時間にはあれを教へようと思つてたんでしたよ。』

これは勝誇つた自分の胸に、發止と許り投げられた美しい光榮の花環であつた。女教師が初めて口を開いたのである。

二

此時、校長田島金藏氏は、感極まつて殆んど落涙に及ばんとした。初めは悲しさうに女教師の顏を見て居たが、フイと首を廻らして、側に立つ[illegible]奥い女神、頭痛の化生、繻子の半襟をかけたマダム馬鈴薯を睨いだ。平常は死んだ源五郎鮒の目の樣に鈍い眼も、此時だけは激戰の火花の影を宿し留めて、極度の恐縮と憤懣の情に、さゝ濁みを持つて居る。世にも弱き夫が渾身の愛情を捧げて妻が一顧の哀憐を買はむとするの圖は正に之である。然し大理石に泥を塗つたやうな女神の面は微塵も動かなんだ。そして、唯一聲、『フン、』と云つた。噫世に誰か此の『フン、』の意味の能く解る人があらう。やがて身を屈めて、落ちて居た櫛を拾ふ。抱いて居る兒はまだ乳房を放さない。随分強欲な兒だ。

古山は、野卑な目付に憤怒の色を漲へて自分を凝視して居る。水の面の白い浮標の、今沈むかと氣が氣でない時も斯うであらう。我が敬慕に値する善良なる女教師山本孝子女史は、いつの間にかまた、ハベ、サタン、を初めて居る。

入口を見ると、三分刈のクリ〳〵頭が四つ、朱鷺色のリボンを結んだのが二つ並んで居た。

自分が振り向いた時、いづれも嫣然とした。中に一人、女教師の下宿してる家の榮さんといふのが、大きい眼をパチ〱とさせて、一種の暗號視電を自分に送つて呉れた。珍らしい悧巧な少年である。自分も返電を行つた。今度は六人の眼が皆一度にパチ〱とする。

不意に、若々しい、勇ましい合唱の聲が聞えた。二階の方からである。

春まだ淺く月若き
生命の森の夜の香に
あくがれ出でて我が魂の
夢むともなく夢むれば、……

あゝ此歌である、日露開戰の原因となつたは。自分は愕と電氣にでも打たれた樣に感じた。同時に梯子段を踏む騷々しい響がして、聲は一寸亂れる。降りて來るな、と思ふと早や姿が現はれた。一隊五人の健兒、先頭に立つたのは了輔と云つて村長の長男、脊こそ高くないが校内第一の腕白者、成績も亦優等で、ジャコビン黨の内でも最も急進的な、謂はゞ爆彈派の首領である。多分二階に人を避けて、今日課外を休まされた復讐の祕密會議でも開いたのであらう。あの元氣で見ると、既に成算胸にあるらしい。願くは復以前の樣に、深夜宿直室へ礫の雨を注ぐ樣な亂暴はしてくれねばよいが。

一隊の健兒は、春の曉の鐘の樣な冴え〲した聲を張り上げて歌ひつゞけ乍ら、勇ましい歩調で、先づ廣い控處の中央に大きい圓を描いた。ト見ると、今度は我が職員室を目蒐けて堂々と練つて來るのである。

「自主」の劍を右手に持ち、
左手に翳す「愛」の旗、
「自由」の駒に跨がりて
進む理想の路すがら、
今宵生命の森の蔭
水のほとりに宿かりぬ。

そびゆる山は英傑の
跡を弔ふ墓標、
音なき河は千載に
香る名をこそ流すらむ。
此處は何處と我問へば、
汝が故郷と月答ふ。

勇める駒の嘶くと
思へば夢はふと覺めぬ。
白羽の甲銀の楯
皆消えはてぬ、さはあれど
ここに消えざる身ぞ一人
理想の路に佇みぬ。

雪をいただく岩手山
名さへ優しき姫神の
山の間を流れゆく
千古の水の北上に
心を洗ひ……

と此處まで歌つた時は、丁度職員室の入口に了輔の右の足が踏み込んだ處である。歌は止んだ。此數分の間に室内に起つた光景は、自分は少しも知らなんだ。自分はたゞ一心に、歩んでくる了輔の目を見詰めて、心では一緒に歌つて居たのである。——然も心の聲のあらん限りをしぼつて。

不圖氣がつくと、世界滅盡の大活劇が一秒の後に迫つて來たかと見えた。校長の顏は盛んな山火事だ。そして目に見える程ブル〱と震へて居る。古山は既に椅子から突立つて、飢饉に逢つた仁王樣の樣に、拳を握つて矢張震へて居る。靑い太い靜脈が額一杯に脹れ出して居る。

榮さんは了輔の耳に口を寄せて、何か囁いて居る。了輔は目を象の鼻穴程に睜つて熱心に聞いて居る。どちかと云へば生來太い方の聲な

ので、返事をするのが自分にも聞える、

『…ナニ、此歌を？…ウム…勝つたか、ウム、然うさ、然うとも、見たかつたナ…飲まないつて、酒を？…然し赤いな、赤鰻ッ。』

最後の聲が稍々高かつた。古山は激した聲で、

『校長さん。』

と叫んだ。校長は立つた。彈機で椅子が後に倒れた。細君は未だ動かないで居る。然し其顏の物凄い事。

『彼方へ行け。』

『彼方へお出なさい。』

自分と女教師とは同時に斯う云つて、手を動かし、目で知らせた。了輔の目と自分の目と合つた。自分は目で強く壓した。

了輔は遂に驅け出した。

そびゆる山は英傑の
跡を弔ふ墓標、

と歌ひ乍ら。他の兒等も皆彼の跡を追うた。

「勝つた先生萬歳」

と鬨の聲が聞える。五六人の聲だ。中に、量のある了輔の聲と、榮さんのソプラノなのが際立つて響く。

自分の目と女教師の目と礑と空中で行き合つた。その目には非常な感激が溢れて居る。無論自分に不利益な感激でない事は、其光り様で解る。――恰も此時。

恰も此時、玄關で人の聲がした。何か云ひ爭うて居るらしい。然し初めは、自分も激して居る故か、確とは聞き取れなかつた。一人は小使の聲である。一人は？　どうも前代未聞の聲の様だ。

「…何云つたつて、乞食は矢ツ張乞食だんべい。今も云ふ通り、學校はハア、乞食などの來る所でねエだよ。校長さアが何日も云うとるだ、癖がつくだで乞食が來たら、何ねエな奴でも追拂つてしまへツて。さつさと行かつしやれ、お互に無駄な隙取るだアよ。」と小使の聲。

凛とした張のある若い男の聲が答へる。「それア僕は乞食には乞食だ、が、普通の乞食とは少々格が違ふ。ナニ、强請だんべいッて？　ヨシヨシ、何でも可いから、兎に角其手紙を新田といふ人に見せてくれ。居るッて今云つたぢやないか。新田白牛といふ人だ。」

ハテナ、と自分は思ふ。小使がまた云ふ、

「新田耕助先生ちふ若けエ人なら居るだが、はい、くぎうなんて可笑しな奴ア一人だつて居ねエだよ。耕助先生にア乞食に親類もあんめエ。間違エだよ。コレア人違エだんべエ。之エ返しますだよ。」

「困つた人だね、僕は君には些とも用がないんだ。新田といふ人に逢ひさへすれば可。ね、ただ新田君に逢へば滿足だ、本望だ。解つたか、君。…お願ひだから其手紙を、頼む。…これでも不可といふなら、僕は自分で上つて行つて、尋ぬる人に逢ふ迄サ。」

自分は此時、立つて行つて見ようかと思つた。立派な、美しい、が、何故か敢て立たなかつた。堂々たる、廣い胸の底から滯りなく出る様な聲に完たく醉はされたのであらう。自分は、何故といふ事もなく、時々寫眞版で見た、子供を抱いたナポレオンの顏を思出した。そして、今玄關に立つて自分の名を呼んで逢ひたいと云つて居る人が、屹度其ナポレオンに似た人に相違ないと思つた。

「そ、それエな事して、何うなるだアよ。俺ハア校長さアに叱られ申すだ。ちやア、マア待つて居さつしやい。兎に角此手紙丈けはあの先生に見せて來るだアから。…人違エにきまつてるだア。俺これ迄十六年も此學校に居るだアに、まだ乞食から手紙見せられた先生なんざア一人だつて無エだよ。」

自分の心は今一種奇妙な感じに捉へられた。周圍を見ると、校長も古山も何時の間にか腰を掛けて居る。マダム馬鈴薯はまだ不動の姿勢を取つて居る。女教師ももとの通り。そして四人の目は皆、何物をか期待する樣に自分に注がれて居る。其昔、大理石で疊んだ壯麗なる演戲場の棧敷から、罪なき赤手の奴隷――完たき「無力」の選手――が、暴力の權化なる巨獸、換言すれば獅子と呼ばれたる神權の帝王に對して、如何程の抵抗を試み得るものかと、興ある事に眺め下した人々の目付、その目付も斯くやあつたらうと、心の中に想はるる。

村でも「佛樣」と仇名せらるる好人物の小使――忠太と名を呼べば、雨の日も風の日も、「アイ」と返事をする――が、厚い脣に何かブツブツ呟やき乍ら、職員室に這入つて來た。

『これ先生さアに見せて呉れ云ふ乞食が來てますだ。ハイ。』

と、變な目をしてオヅ〱自分を見乍ら、一通の封書を卓子に置く。そして、玄關の方角に指ざし乍ら、左の目を閉ぢ、口を歪め、ヒョットコの眞似をして見せて、

『變な奴でがす。お氣を付けさつしやい。俺、樣々斷つて見ましただが、どうしても聽かねエだ。』

と小言で囁く。

默つて封書を手に取り上げた。表には、勢のよい筆太のメが殆んど全體に書かれて、下に見覺えのある亂暴な字體で、薄墨のあやなくにじんだ「八戸ニテ、朱雲」の六字。日付はない。

『ああ、朱雲からだ！』と自分は思はず聲を出す。裏を返せば、「岩手縣岩手郡S――村尋常高等小學校内、新田白牛樣」と先以て眞面目な行書である。自分は或事を思ひ出した、が、兎も角もと急いで封を切る。すべての人の視線は自分の痩せた指先の、何かは知れぬ震ひに注がれて居るのであらう。不意に打出した胸太鼓、若き生命の轟きは電の如く全身の血に波動を送る。震ふ指先で引き出したのは一枚の半紙、字が大きいので、文句は無論極めて短かい。

備後大に疎遠、失敬。

これ丈けで二行に書いてある。

石本俊吉此手紙を持つて行く。君は出來る丈けの助力を此人物に與ふべし。小生生れて初めて紹介狀なる物を書いた。

六月二十五日　　天野朱雲拜

新田耕サン

そして、上部の餘白へ横に

（獨眼龍ダヨ。）と一句。

世にも無作法極まる亂暴な手紙と云つぱ、蓋し斯くの如きものの謂であらう。然も之は普通の消息ではない。人が、自己の信用の範圍に於て、或る一人を、他の未知の一人に握手せしむる際の、謂はば、神前の祭壇に讀み上ぐべき或る神聖なる告文、と云つた樣な紹介狀ではないか。若し斯くの如き紹介狀を享くる人が、溫厚篤實にして萬中庸を尚ぶ世上の士君子、例へば我が校長田島氏の如きであつたら、恐らく見もせぬうちから玄關に立つ人を前門の虎と心得て、いざ狼の立塞がぬ間にと、草鞋片足で裏門から逃げ出さぬとも限らない。然も此一封が、嘗てこのS――村に呱々の聲を擧げ、この學校――尤も其頃は校舍も今の半分しか無く、教師も唯の一人、無論高等科設置以前の見すぼらしい單級學校ではあつたが、――で、矢張り穩健で中正で無愛想で、規則と順序と年末の賞與金と文部省と細君とを、此上なく尊敬する一教育者の手から、現代の初等教育を授けられた日本國民の一人、當年二十七歲の天野大助が書いたのだと知つたならば、抑々何の辭を以て其驚愕の意を發表するであらうか。實際

これでは紹介狀ドコロの話ではない。命令だ、しかも隨分亂暴な命令だ、見ず知らずの獨眼龍に出來る限りの助力をせよといふのだもの。然し乍ら、この驚くべき一文を胸轟かせて讀み終つた自分は、決して左樣は感じなんだ。敢て問ふ、世上滔々たる浮華虛禮の影が、此手紙の何の隅に微塵たりとも隱れて居るか。《一金三兩也。馬代。くすかくさぬか、これどうぢや。くすといふならそれでよし、くさぬにつけてはたゞおかぬ。うぬがうでには骨がある。》といふ、昔さる自然生の三吉が書いた馬代の請求の附狀が、果して大儒新井白石の言の如く千古の名文であるならば、簡にしてよく其要を得た我が畏友朱雲の紹介狀も亦、正に千古の名文と謂つべしである。のみならず、斯くの如き手紙を平氣で書き、又平氣で讀むといふ彼我二人の間は、眞に同心一體、肝膽相照すといふ邃きの交情でなくてはならぬ。一切の枝葉を掃ひ、一切の被服を脱ぎ、六尺似神の赤裸々を提げて、平然として目ざす城門に肉薄するのが乃ち此手紙である。此平然たる所には、實に乾坤に充滿する無限の信用と友情とが溢れて居るのだ。自分は僅か三秒か四秒の間にこの手紙を讀んだ。そして此瞬間に、躍々たる畏友の面目を感じ、其温かき信用と友情の囁きを聞いた。

『よろしい。此室へお通し申して呉れ。』

『乞食をですかッ。』

と校長が怒鳴つた。

『何たつてそれア餘りですよ。新田さん。學校の職員室へ乞食なんぞを。』

斯う叫んだのは、窓の硝子もピリ／＼とする程甲高い、幾億劫來聲を出した事のない毛蟲共が千萬疋もウヂャ／＼と集まつて雨乞の祈禱でもするかの樣な、何とも云へぬ厭な聲である。舌が無いかと思はれたマダム馬鈴薯の、突然噴火した第一聲の物凄さ。

小使忠太の團栗眼はクル／＼／＼と三廻轉した。度を失つてまだ動かない。そこで一つ威嚇の必要がある。

『お通し申せ。』

と自分は一喝を喰はした。忠太はアタフタと出て行つた、が、早速と復引き返して來た。後には一人物が隨つて居る。多分既に草鞋を脱いて、玄關に上つて居たつたのであらう。

『新田さん、貴君はそれで可いのですか。よ、新田さん、貴君一人の學校ではありませんよ。人ッ、代用のクセに何だと思つてるだらう。マア御覧なさい、アンナ奴。』

馬鈴薯が頻りにわめく。自分は振向きもしない。そして、今しも忠太の背から現はれむとする、「アンナ奴」と呼ばれたる音吐朗々のナポレオンに、渾身の注意を向けた。朱雲の手紙に「獨眼龍ダヨ」と頭註がついてあつたが、自分はたゞ單に、ヲートルローの大戰で誤つて一眼を失つたのだらう位に考へて、敢て其爲めに千古の眞骨頭ナポレオン・ボナパルトの颯爽たる威風が、一毫たりとも損ぜられたものとは信じなんだのである。或は却つて一段の秋霜烈日の嚴を増したのではないかと思つた。

忠太は體を横に開いて、ヒョコリと頭を下げる。や否や、逃ぐるが如く出て行つてしまつた。

天が下には隱家もなくなつて、今現身の英傑は我が目前咫尺の處に突兀として立ち給うたのである。自分も立ち上つた。

此時、自分は俄かに驚いて叫ばんとした。あはれ千載萬載一遇の此月此日此時、自分の雙眼が突如として物の用に立たなくなつたではないか。これ程劇甚な不幸は、またとこの世にあるべきでない。自分は力の限り二三度瞬いて見て、そして復力の限り目を睜つた。然しダメである。ヲートルローの大戰に誤つて流彈の爲め

に一眼を失ひ、却つて一段秋霜烈日の嚴を加へた筈のナポレオン・ボナパルトは、既に長しなへに新田耕助の仰ぎ見るべからざるものとなつたのである。自分の大く瞬つた目は今、數秒の前千古の英傑の立ち止つたと思うた其同じ處に、悄然として塵塚の痩犬の如き一人物の立つて居るのを見つめて居るのだ。實に天下の奇蹟である。いかなる英傑でも死んだ跡には唯骸骨を殘すのみだといふ。シテ見れば、今自分の前に立つて居るのは、或はナポレオンの骸骨であるのかも知れない。

よしや骸骨であるにしても、これは又サテサテ見すぼらしい骸骨である哉。身長五尺の上を出る事正に零寸零分、埃と垢で縞目も見えぬ木綿の袷を着て、帶にして居るのは幅狹き牛皮の胴締、裾からは白い小倉の洋袴の太いのが七八寸も出て居る。足袋は無論穿いて居ない。髮は二寸も延びて、さながら丹波栗の毬を泥濘路にころがしたやう。目は？ 成程獨眼龍だ。然しヲートルローで失つたのでは無論ない。恐らく生來であらう、左の方が前世に死んだ時の儘で堅く眠つて居る。右だつて完全な目ではない。何だか普通の人とは黒玉の置き所が少々違つて居るやうだ。鼻は先づ無難、口は少しく左に歪んで居る。そして頬が薄くて、血色が極めて惡い。これらの道具立の中に、獨り威張つて見える廣い額には、少なからず汗の玉が光つて居る、涼しさうにもない。その筈だ、六月三十日に袷を着ての旅人だもの。忠太がヒヨツトコの眞似をして見せたのも、「アンナ奴」と馬鈴薯の叫んだのも、自身の顏の見えぬ故でもあらうが、然し左程當を失して居ない樣にも思はれる。

斯う自分の感じたのは無論一轉瞬の間であつた。たとひ一轉瞬の間と雖ども、かくの如きさもしい事を、この日本一の代用教員たる自分の胸に感じたのは、實に慚愧に堪へぬ惡徳であつたと、自分の精神に覺醒の鞭撻を與へて呉れたのは、この奇人の歪める口から迸しつた第一聲である。

『僕は石本俊吉と申します。』

あゝ、聲だけは慥かにナポレオンにしても恥かしくない聲だ。この身體の何處に貯へて置くかと怪まれる許り立派な、美しい、堂々たる、廣い胸の底から滯りなく出る樣な、男らしい凛とした聲である。一葉の牡蠣の殼にも、詩人が聞けば、遠き海洋の劫初の轟きが籠つて居るといふ。さらば此男も、身體こそ無造作に刻まれた肉塊の一斷片に過ぎぬが、人生の大殿堂を根柢から搖り動かして響き渡る一撞萬聲の鯨鐘の聲を深く這裏に藏して居るのかも知れない。若しさうとすると、自分を慚愧すべき一瞬の惡徳から救ひ出したのは、此影うすきナポレオンの骸骨ではなくて、老ゆる事なき人生至奥の鐘の聲の事になる。さうだ、慥かにさうだ。この時自分は、その永遠無窮の聲によつて人生の大道に覺醒した。そして、畏友朱雲から千古の名文によつて紹介された石本俊吉君に、初對面の挨拶を成すべき場合に立つて居ると覺悟をきめたのである。

『僕が新田です。初めて。』

『初めて。』

と互に一揖する。

『天野君のお手紙はどうも有難う。』

『どうしまして。』

斯う云つて居る間に、自分は不圖或る一種の痛快を感じた。それは、隨分手酷い反抗のあつたに不拘、飄然として風の如く此職員室に立ち現れた人物が、五尺二寸と相場の決つた平凡人でなくて、實に優秀なる異彩を放つ所の奇男子であるといふ事だ。で、自分は、手づから一脚の椅子を石本に勸めて置いて、サテ屹となつ

て四邊を見た。女教師は何と感じてか凝然として此新來の客の後姿に見入つて居る。他の三人の顏色は云はずとも知れた事。自分は疑ひもなく征服者の地位に立つて居る。

『一寸御紹介します。この方は、私の兄とも思つて居る人からの紹介狀を持つて、遙々訪ねて下すつた石本俊吉君です。』

何れも無言。それが愈々自分に痛快に思はれた。馬鈴薯は「チョッ」と舌打して自分を一瞥したが、矢張一言もなく、すぐ又石本を睨め据ゑる。恐らく餘程石本の異彩ある態度に辟易してるのであらう。石本も亦敢て頭を下げなんだ。そして、如何に片目の彼にでも直ぐ解る筈の此不快なる光景に對して、殆んど無感覺な位極めて平氣である。どうも面白い。餘程戰場の數を踏んだ男に違ひない。荒れ狂ふ獅子の前に推し出しても、今朝喰つた飯の何杯であつたかを忘れずに居る位の勇氣と沈着をば持つて居さうに思はれる。

得意の微笑を以て自分は席に復した。石本も腰を下した。二人の目が空中に突き當る。此時自分は、相手の右の目が一種拔群の眼球を備へて居る事を發見した。無論頭腦の敏活な人、智の活力の盛んな人の目ではない。が兎に角拔群な眼球である丈けは認められる。そして其拔群な眼球が、自分を見る事決して初對面の人の如くでなく、親しげに、なつかしげに、十年の友の如く心置きなく見て居るといふ事をも悟つた。ト同時に、口の歪んで居る事も、獨眼龍なる事も、ナポレオンの額骨な事も、忠太の云つた「氣をつけさつしあい」といふ事も、悉皆渦の中から洗ひ去られた。感じ易き我が心は、利害得失の思慮を運らす暇もなく、彼の目に溢れた好意を其儘自分の胸の盃で享けたのだ。いくら浮世の辛い水を飲んだといつても、年若い者のする事は常に斯うである。思慮ある人は笑ひもしよう。笑はば笑へ、敢て關する所でない。自分は年が若いのだもの。あゝ青春幾時かあらむ。よしや頭が禿げてもこの熱かい若々しい心情だけは何日までも持つて居たいものだと思つて居る。何んぞ今にして早く蒸溜水の様な心に成られよう。自分と石本俊吉とは、逢會僅か二分間にして既に親友と成つた。自分は二十一歳、彼は、老けても見え若くも見えるが、自分よりは一歳か二歳兄であらう。何れも年が若いのだ。初對面の挨拶が濟んだ許りで、二人の目と目とが空中で突當る、此瞬間に二つの若き魂がピタリと相觸れた。親友に成る丈けの順序はこれで濟んだ。自分は彼と握手一番の快男兒であると信ずる。

然し其風采は？　噫其風采は！——自分は實際を白狀すると、先刻から戰時多端の際であつたので、實は稍々心の平靜を失して居た傾がある。隨つて此新來の客に就いても、觀察未だ到らなかつた點が無いと云へぬ。今、一脚の卓子に相對して、既に十年の友の心を以て仔細に心置きなく見るに及んで、自分は今更の如く感動した。噫々、何といふ其風采であらう。口を開けばこそ、音吐朗々として、眞に凜たる男兒の聲を成すが、斯う無言の儘で相對して見れば、自分はモウ直視するにも堪へぬ様な氣がする、噫々といふ外には、自分のうら若き情は、他に此感じを表はすべき辭を急に見出しかねるのだ。誠に失敬な言草ではあるが、自分は先に「悄然として曠野の痩犬の如き一人物」と云つた。然しこれではまだ悉しく此言が適切でない。一人物といふよりも、寧ろ悄然其物が形を具はしたといふ方が當つて居るかも知れぬ。

顏の道具立は如何にも調和を失して居る、奇怪である、餘程混雜して居る。然し、其混雜して居る故かも知れぬが、何處と云つて或る一つの纏まつた印象をば刻んで居ない。若し其道具

立の一つ〳〵から順々に歸納的に結論したら、却つて「悄然」と正反對な或るエックスを得るかも知れない。然し此男の悄然として居る事は事實だから仕樣がないのだ。長い汚ない頭髮、垢と塵埃に縞目もわかぬ木綿の古袷、血色の惡い痩せた顏、これらは無論其「悄然」の條件の一項一項には相違ないが、たゞ之れ丈けならば、必ずしも世に類のないでもない、實際自分も少からず遭遇した事もある。が、斯く迄極度に悄然とした風采は、二十一年今初めてゞある。無理な話ではあるが、若し然云ふを得べくんば、彼は唯一箇の不調和な形を具へた肉の斷片である、別に何の事はない肉の斷片に過ぎぬ。が、其斷片を遶る不可見の大氣が極度の「悄然」であるのであらう。さうだ、彼自身は何處まで彼自身である、唯其周圍の大氣が、凝固したる陰鬱と沈痛と悲慘の雲霧であるのだ。そして、これは一時的であるかも知れぬが、少なからぬ「疲勞」の憔悴が此大氣をして一層「悄然」の趣を深くせしむる陰影を作して居る。或は又、「空腹」の影薄さも這裏に宿つて居るかも知れない。

禮を知らぬ空想の翼が電光の如くひらめく。

偶然にも造化の惡戲によつて造られ、親も知らず兄弟も知らずに、蟲の啼く野の石に捨てられて、地獄の鐵の壁から傳はつてくる大地の冷氣に育くまれ、常に人生といふ都の外濠傳ひに、影の如く立ち竝ぶ冬枯の柳の下を、影の如くそこはかと走り續けて來た、所謂自然生の大放浪者、大慈の神の手から直ちに野に捨てられた人肉の一斷片、――が、或は今自分の前に居る此男ではあるまいか。さうとすると、かの音吐朗々たる不釣合な聲も、或日或時或機會、蝗を喰ひ野蜜を嘗め、駱駝の毛衣を着て野に呼ぶ豫言者の口から學び得たのかと推諒する事も出來る。又、「エイ、エイッ」と馬丁の掛聲勇ましき黑塗馬車の公道を驀つて、常に人生の横町許り彷徨いて居る朱雲が、かゝる男と相知るの必ずしも不合理でない事もうなづかれる。然し、それにしては「石本俊吉」といふ立派な紳士の樣な名が、どうも似合はない樣だ。或は又、昔は矢張慈母の乳も飲み慈父の手にも抱かれ、愛の搖籃の中に溫かき日に照され清淨の月に接吻された兒が、世によくある奴の不運といふ高利貸に、親も奪はれ家も取られ、濁りなき血の汗を搾り搾られた擧句が、冷たい苔の下に落ちた青梅同樣、長しなへに空の日の光といふものを遮られ、酷薄と貧窮と恥辱と飢餓の中に、年少脆弱、然も不具の身を以て、健氣にも單身寸鐵を帶びず、眠る間もなき不斷の苦闘を持續し來つて、肉は落ち骨は痩せた壯烈なる人生の戰士　が、乃ち此男ではあるまいか。朱雲は嘗て九圓の月俸で、かゝる人生の戰士が暫しの休息所たる某監獄に看守の職を奉じて居た事がある。して見れば此二人が必ずしも接近の端緒を得なんだとはいへない。今思ひ出す、彼は嘗て斯う云うた事がある、「監獄が惡人の巢だと考へるのは、大いに間違つて居るよ、勿體ない程間違つて居るよ。鬼であるべき筈の囚人共が、政府の官吏として月給で生き、劍をブラ下げた我々看守を、却つて鬼と呼んで居る。其筈だ、眞の鬼が人間の作つた法律の網などに懸るものか。囚人には淚もある血もある、又よく物の味も解つて居る、實に立派な戰士だ、たゞ悲しいかな、一つも武器といふものを持つて居ない。世の中で美い酒を飲んでる奴等は、金とか地位とか皆それ〴〵に武器を持つて居るが、それを、その武器だけを持たなかつた許りに戰がまけて立派な男が柿色の衣を着る。君、大臣になれば如何な現行犯をやつても、普通の巡査では手を出されぬ世の中ではないか。僕も看守だ、が、同僚と喧嘩はしても、まだ囚人の頰片

に指も觸つた事がない。朝から晩まで夜叉の樣に怒鳴つて許り居る同僚もあるが、どうして此僕にそんな事が出來るものか。』

然し此想像も亦、敢て當れりとは云ひ難い。

何故となれば、現に今自分を見て居るこの男の右の眼の、親しげな、なつかしげな、心置きなき和かな光が、別に理由を説明するでもないが、何だか、「左樣ではありませぬ」と主張して居る樣に見える。平生いかに眼識の明を誇つて居る自分でも、此咄嗟の間には十分精確な判斷を下す事は出來ぬ。が兎も角、我が石本君の極めて優秀なる風采と態度とは、決して平凡な一本路を終始並足で歩いて來た人でないといふ事丈けは、完全に表はして居るといつて可い。まだ一言の述懷も説明も聞かぬけれど、自分は斯う感じて無限の同情を此悄然たる人に捧げた。自分と石本君とは百分の一秒毎に、密接の度を强めるのだ。そして、旅順の大戰に足を折られ手を碎かれ、兩眼また明を失つた敗殘の軍人の、輝く金鵄勳章を胸に飾つて乳母車で通るのを見た時と、同じ意味に於ての痛切なる敬意が、また此時自分の心頭に雲の如く湧いた。

茲に少しく省略の筆を用ゐる。自分の問に對して、石本君が、例の音吐朗々たるナポレオン聲を以て詳しく説明して呉れた一埒は、大略次の如くであつた。

石本俊吉は今八戸（青森縣三戸郡）から來た。然し故鄕はズット南の靜岡縣である。土地で中等の生活をして居る農家に生れて、兄が一人妹が一人あつた。妹は俊吉に似ぬ天使の樣な美貌を持つて居たが、其美貌祟りをなして、三年以前、十七歳の花盛の中に悲慘な最期を遂げた。公吏の職にさへあつた或る男の、野獸の如き貪婪が、罪なき少女の胸に九寸五分の冷鐵を突き立てたのだといふ。兄は立派な體格を備へて居たが、日清の戰役に九連城畔であへなく陣歿した。「自分だけは醜い不具者であるから未だ誰にも殺されないのです、」と俊吉は附加へた。兩親は仲々勉強で、何一つ間違つた事をした覺えもないが、どうしたものか兄の死後、格段な不幸の起つたでもないのに、家運は漸々傾いて來た。そして、俊吉が十五の春、土地の高等小學校を卒業した頃は、山も畑も他人の所有に移つて、少許の田と家屋敷が殘つて居た丈けであつた。其年の秋、年上な一友と共に東京へ夜逃をした。新橋へ着いた時は懷中僅かに二圓三十錢と五厘あつた丈けである。無論前途に非常な大望を抱いての事。稚ない時から不具な爲めに受けて來た恥辱が、押ふべからざる復讐心を起させて居たので、この夜逃も詰りは其爲めである。又同じ理由に依つて、上京後は勞働と勉學の傍ら熱心に柔道を學んだ、今ではこれでも加納流の初段である、然し其頃の悲慘なる境遇は兎ても一朝一夕に語りつくす事が出來ない、饑ゑて泣いて、國へ歸らうにも旅費がなく、翌年の二月、さる人に救はれる迄は定まれる宿とてもなかつた位。十六歳にして或る私立の中學校に這入つた。三年許りにして其保護者の死んだ後は、再び大都の中央へ礫の如く投げ出されたが、兎に角非常な勞働によつて僅少の學費を得、其學校に籍だけは置いた。昨年の夏、一月許り病氣をして、ために東京では飯喰ふ道を失ひ、止むなく九月の初めに、友を便つて乞食をしながら八戸迄東下りをした。そして、實に一週間以前までは其處の中學の五年級で、朝は早く八戸タイムスといふ日刊新聞の配達をし、午後三時から六時迄四時間の間は、友人なる或菓子屋に頼まれて名物の八戸煎餅を燒き、都合六圓の金を得て辛くもの生命を繋ぎ、又學費として、孤食寂寞き苦學自炊の日を送つて來たのだといふ。年齡は二十二歳、身の不具で弱くて小さい所以は、母の胎

内にもケ月しか我慢がしきれず、無理矢理に娑婆へ暴れ出した罰であらうと考へられる。
　天野朱雲氏との交際は、今日で丁度半年目である。忘れもせぬ本年一月元旦、學校で四方拜の式を濟ましてから、特務曹長上りの豫備少尉なる體操敎師を訪問して、苦學生の口には甘露とも思はれるビールの馳走を受けた。まだ醉の醒めぬ顏を、ヒューと矢尻を研ぐ北國の正月の風に吹かせ乍ら、意氣揚々として歸つてくると、時は午後の四時頃、とある町の彼方から極めて異色ある一人物が來る。漸とお芽出度うと晴衣の正月元日に、見れば自分と同じ樣に裾から綿も出ようといふ古綿入を着て、羽織もなく、帽子もなく、髮は蓬々として熊の皮を冠つた如く、然も癪にさはる程悠々たる歩調で、洋杖を大きく振り廻し乍ら、目は雪曇りのした空を見詰めて、……。初めは狂人かと思つた。近いて見ると、五分位に延びた漆黑の鬚髯が殆んど其平たい顏の全面を埋めて、空を見詰むる目は物凄くもギラ〳〵する巨大なる洞穴の樣た。隨分非文明な男だと思ひ乍ら行きずりに過ぎようとすると、其男の大圈に振つて居る太い洋杖が、發矢と許り俊吉の肩先を打つた。『何をするツ。』と身構へると、其男も立止つて振返つた。が、極めて平氣で自分を見下すのだ。癪にさはる。先刻も申上げた通り、これでも柔術は加納流の初段であるので、一秒の後には其非文明な男は雪の堅く氷つた路へ、撻と許り倒れた。直ぐ起き上る。打つて來るかと再身構へると、矢張平氣だ。そして破鐘の樣な聲で、怒つた風もなく、
『君は元氣のいい男だね！』
自分の滿身の力は、此一語によつて急に何處へか逃げて了つた。トタンに復、
『面白い。どうだ君、僕と一しよに來給へ。』
『君も變な男だね！』
と自分も云つて見た。然し何の效能も無かつた。變な男は悠々と先に立つて歩く〳〵。自分も默つて其後に從つた。見れば見る程、考へれば考へる程、誠に奇妙な男である。此時まで斯ういふ男は見た事も聞いた事もない。一種の好奇心と、征服された樣な心持とに導かれて、三四町も行くと、
『此處だ。獨身ぢやから遠慮はない。サア。』
『此處』は、廣くもあらぬ八戸の町で、新聞配達の俊吉でさへ知らなかつた位な場處、と云はば、大抵どんな處か想像がつかう。薄汚ない横町の、晝猶暗き路次を這入つた突當り、豚小舍よりもまた酷い二間間口の裏長屋であつた。此日、俊吉が此處から歸つたのは、夜も既に十一時を過ぎた頃であつた。その後は殆んど夜毎に此小舍へ通ふやうになつた。變な男は乃ち朱雲天野大助であつたのだ。『天野君は僕の友人で、兄で、先生で、そして又導師です。』と俊吉は告白した。
　家出をして玆に足掛八年、故郷へ歸つたのは三年前に妹が悲慘な最期を遂げた時唯一度である。家は年々に零落して、其時は既に家屋敷の外父の所有といふものは一坪もなかつた。四分六分の殘酷な小作で、漸やく煙を立てて居たのである。老いたる母は、其儘俊吉をひき留めようと云ひ出した。然し父は一言も云はなかつた。二週間の後には再び家を出た。その時父は、『壯健で豪い人になつてくれ。それ迄は死なないで待つて居るぞ。石本の家を昔に還して呉れ。』といつて、五十餘年の勞苦に疲れた眼から大きい涙を流した。そして、何處から工面したものか、十三圓の金を手づから俊吉の襯衣の内衣嚢に入れて呉れた。これが、父の最後の言葉で、又最後の慈悲であつた。今は再びこの父を此世に見る事は出來ない。
　と云ふのは、父は五十九歲を一期として、二

週間以前にあの世の人と成つたのである。この通知の後者に達したのは、實に一週間前の雨の夕であつた。『この手紙です。』といつて一封の書を袂から出す。そして、打濕つた聲で話を續ける。

『僕は泣いたです、傍の菓子屋から、傘がないので風呂敷を被つて歸つて來て見ると、宿の主婦さんの渡してくれたのが、此手紙です。いくら讀み返して見ても、矢張り老父が死んだとしか書いて居ない、そんなら何故電報で知らして呉れぬかと怨んでも見ましたが、然し私の村は電信局から十六里もある山中なんです。丁度其日が一七日と氣がつきましたから、平常嫌ひな代數と幾何の教科書を賣つて、三十錢許り貰ひました。それで花を一束と、それから能く子供の時に老父が買つて來て呉れました黒玉――アノ、黒砂糖を堅くした樣な小さい玉ですネ、あれを買つて來て、寫眞などもありませんから、この手紙を机の上に飾つて、そして其花と黒玉を手向けたんです。……其時の事は、もう何とも口では云へません。殘つたのは母一人です、そして僕は、二百里も遠い所に居て、矢張一人ボッチです。』

彼は一寸句を切つた。大きい涙がポロ〳〵と其右の眼からこぼれた。自分も涙が出た。何か云はうとして口を開いたが、聲が出ない。

『その晩は一睡もしませんでした。彼是十二時近くだつたでせうが、線香を忘れて居たのに氣が付きまして、買ひに出掛けました。寝て了つた店をやう〳〵叩き起して、買ふには買ひましたが、困つたです、雨が篠をつく樣ですし、矢張風呂敷を被つて行つたものですから、其時はもうビショ濡になつて居ます。どうして此線香を濡らさずに持つて歸らうかと思つて、藥種屋の軒下に暫らく立つて考へましたが、店の戶は直ぐ閉るし、後は急に眞暗になつて、何にも見えません。雨はもう、騒々ツと鳴つて酷い降り樣なんです。望の綱がスッカリ切れて了つた樣な氣がして、僕は生れてから、隨分心細く許り暮して來ましたが、然し此時の位、何も彼もなくたゞ無暗にもう死にたく〳〵なつて、呼吸もつかずに目を瞑る程心細いと思つた事はありません。斯んな時は涙も出ないですよ。

『それから、其處に立つて居たのが、如何程の時間か自分では知りませんが、氣が付いた時は雨がスッカリ止んで、何だか少し足もとが明るいのです。見ると東の空がポーッと赤くなつて居ましたつけ。夜が明けるんですネ。多分此時まで失神して居たのでせうが、よく〳〵も濡れずに立つて居たものと不思議に思ひました。線香ですか？ 線香はシッカリ握つて居ました、堅く。しかし濡れて用に立たなくなつて居るのです。

『また買はうと思つたんですが、濡れてビショビショの袂に一錢五厘しか殘つて居ないんです。……一把二錢でしたが……。本を賣つた三十錢の內、國へ手紙を出さうと思つて、紙と狀袋と切手を一枚買ひましたし、花は五錢でドッサリ、黒玉も、たゞもう父に死なれた口惜まぎれに、今思へば無考な話ですけれども、十五錢程買つたのですもの。仕方がないから、それなり歸つて來て、其時は夜も程白んで居ましたが、復此手紙を讀みました。處が成る可く早く國に歸つて呉れといふ事が、繰り返し〳〵書いてあるんです。昨夜はチッとも氣がつかなかつたですが、無論讀んだには讀んだ筈なんで、多分父が死んだといふ、たゞそれ丈けで頭が一杯だつた故でせう。成程、父と同年で矢張四十九になる母が唯一人殘つたのですもの、どう考へたつて歸らなくちやならない、且つ自分でも翼があつたら飛んで行きたい程、一刻も早く歸り度いんです。然し金がない、一錢五厘しか無い、

草鞋一足だつて二錢は取られますアね。新聞社の方も、實は何日でも月初めに前借してるんで駄目だし、それに今月分の室賃はまだ拂つて居ないのだから、財産を皆賣つた所で五錢か十錢しか殘りさうも無い。財産と云つたものの、蒲團一枚に古机一つ、本は漢文に讀本に文典と之丈け、あとの高い本は皆借りて寫したんですから賣れないんです。尤もまだ毛布が一枚ありましたけれども、大きい穴が四ツもあるのだから矢張駄目なんです。室賃は月四十錢でした、長屋の天井裏ですもの。兒玉――菓子屋へ行つて話せば、幾何か出して貰へんこともなかつたけれど、然し今迄にも度々世話になつてましたからネ。考へて考へて、去年東京から來た時の經驗もあるし、尤も餘り結構な經驗でもありませんが、仕方が無いから思ひ切つて、乞食をして國まで歸る事に遂々決心したんです。貧乏の位厚顏な奴はありませんネ。此決心も、僕がしたんでなくて、貧乏がさせたんですネ。それでマア決心した以上は一刻の猶豫もなりませんし、國へは直ぐさう云つて手紙を出しました。それから、九時に學校へ行つて、退校願を出したり、友人へ告別したりして。尤も告別する様な友人は二人しかありませんでしたが、……所が校長の云ふには、「君は國へ歸るに旅費などはあるのかナ。」と、斯ういふんです。僕は、乞食して行く積りだつて、さう答へた所が、「ソンナ無謀な破廉恥な事はせん方が可だらう。」と云ひました。それではどうしたら可でせうと問ひますと、「マア能く考へて見て、何とかしたら可ぢやないか。」と抜かしやがるんです。癪に觸りましたネ。それから、歸りに菓子屋へ行つて其話をして、新聞社の方も斷つて、古道具屋を連れて來ました。前に申上げた樣な品物に、小倉の校服の上衣だの、硯だのを加へて、値踏みをさせますと、四十錢の上は一文も出せないといふんです。此方の困つてるのに見込んだのですネ。漸やくの次第で四十五錢にして貰つて、賣つて了つたが、殘金僅か六錢五厘では、いくら慣れた貧乏でも誠に心細いもんですよ。それに、宿から借りて居た自炊の道具も皆返して了ふし、机も何もなくなつてるし、薄暗い室の中央に此不具な僕が一人坐つてるのでせう。平常から鈍い方の頭が、昨夜の故でスッカリ勞れ切つて、ボンヤリして、一老父が死んで、「これから乞食をして國へ歸るのだ」といふ事だけが、漠然と頭に殘つてるんです。此漠然として目的も手段も何もない處が、無上に悲しいんで、たゞもう聲を揚げて泣きたくなるけれども、聲も出ねば涙も出ない。何の事なしにたゞ辛くて心細いんですネ。今朝飯を喰はなかつたので、空腹ではあるし、國の事が氣になるし、昨夜の黒玉をつかんで無暗に頬ばつて見たんです。

『それから愈々出掛けたんですが、一時頃でしたらう、天野君の家へ這入つたのは。天野君も以前は大抵夜分でなくては家に居なかつたのですが、學校を罷めてからは、一日外へ出ないで、何時でも蟄居して居るんです。』

「天野は罷めたんですか、學校を？」

『エ？　左樣々々、君はまだ御存じなかつたんだ。罷めましたよ、遂々。何でも校長といふ奴と、――僕も二三度見て知つてますが、鯰髭の随分變挺な高麗人でネ。その校長と素晴しい議論をやつて勝つたんですとサ。それで二三日經つと突然免職なんです。今月の十四五日の頃でした。』

『さうでしたか。』と自分は云つたが、この石本の言葉には、一寸顏にのぼる微笑を禁じ得なかつた。何處の學校でも、校長は鯰髭の高麗人で、議論をすると屹度敗けるものと見える。

然し此微笑も無言三秒とは續かなかつた。石本の沈痛なる話が直ぐ進む。

「學校を罷めてからといふもの、天野君は始終考へ込んで許り居たんですがネ。「少し散歩でもせんと健康が衰へるんでせう。」といふと、「馬鹿ッ。」と云ふし、「何を考へてるのです。」ッて云へば、「君達に解る樣な事は考へぬ。」と來るし、「解脫の路に近づくのでせう、」なんて云ふと、「人生は隧道だ。行くところまで行かずに解脫の光が射してくるものか。」と例の口調なんですネ。行つた時は、平生のやうに入口の戶が閉つて居ました。初めての人などは不在かと思ふんですが、戶を閉めて置かないと自分の家に居る氣がしないとアノ人が云つてました。其戶を開けると、「石本か。」ッて云ふのが癖でしたが、この時は森として何とも云はないんです。不在かナと思ひましたが、歸つて來るまで待つ積りで上り込んで見ると、不在ぢやない、居るんです。居るには居ましたが、僕の這入つたのも知らぬ風で、木像の樣に俯向いて矢張考へ込んで居るんですナ。「何うしました？」と聲をかけると、ヒョイと首を上げて、「石本か。君は運命の樣だナ。」と云ふ。何故ですかッて聞くと、「さうぢやないか、不意の侵入者だもの。」と淋しさうに笑ひましたッけ。それから、「なんだ其顏は、陰氣な運命だナ。そんな顏をしてるよりは、死ね、死ね……それとも病氣か。」と云ひますから、「病氣には病氣ですが、ソノ運命と云ふ病氣に取り付かれたんです。」ッて答へると、「左樣か、そんな病氣なら、少し炭を持つて來て呉れ、湯を沸すから。」と再淋しく笑ひました。天野君だつて一體サウ陽氣な顏でもありませんが、この日は殊に何だか斯う非常に淋しさうでした。それがまた僕は悲しいんですネ。……で、二人で湯を沸して、飯を喰ひ乍ら、僕は今から乞食をして鄕國へ歸る處だッて、何から何まで話したのですが、天野君は大きい涙を幾度も／＼零して呉れました。僕はモウ父親の死んだ事も鄕國の事も忘れて、コンナ人と一緒に居たいもんだと思ひました。然し天野君が云つて呉れるんです、「君も不幸な男だ、實に不幸な男だ。が然し、餘り元氣を落すな。人生の不幸を滓まで飲み干さなくては眞の人間に成れるものぢやない。人生は長い暗い隧道だ、處々に都會といふ骸骨の林があるッ限。それにまぎれ込んで出路を忘れちや可けないぞ。そして、脚の下にはヒタ／＼と、永劫の悲痛が流れて居る、恐らく人生の始めよりも以前から流れて居るんだナ。それに行先を阻まれたからと云つて、其儘歸つて來ては駄目だ、暗い穴が一寸暗くなる許りだ。死か然らずんば前進、唯この二つの外に途は無い。前進が戰鬪だ、戰ふには元氣が無くちや可かん。だから君は餘り元氣を落しては可けないよ。少なくとも君だけは生きて居て、そして戰ふまで、壯烈な最期を遂げるまで、戰つて呉れ給へ。血と涙さへ涸れなければ、武器も不要、軍略も不要、赤裸々で堂々と戰ふのだ。この世を嫌になつては其限だ、少なくとも君だけは厭世的な考へを起さんで呉れ給へ。今までも僕と語合つた通り、現時の社會で何物かよく破壞の斧に値せざらんやだ。全然破壞する外に、改良の餘地もない今の社會だ。建設の大業は後に來る天才に讓つて、我々は先づ根柢まで破壞の斧を下さなくては不可。然しこの戰ひは激して容易な戰ひではない。容易でないから一層元氣が要る。元氣を落すな。君が赤裸々で乞食をして鄕國へ歸るといふのは、無論遺憾な事だ、然し外に仕方が無いのだから、僕も贊成する。尤も僕が一文無しでなかつたら、君の樣な身體の弱い男に乞食なんぞさせはしない。然し君も知つての通りの僕だ。ただ、何日か君に話した新田君へ手紙をやるから、新田には是非逢つ

て行き給へ。何とか心配もしてくれるだらうから。僕にはアノ男と君の外に友人といふものは一人も無いんだから喃。」と云つて、先刻差上げた手紙を書いてくれたんです。それから種々話して居たんですが、暫らくしてから、「どうだ、一週間許り待つて呉れるなら汽車賃位出來る道があるが、待つか待たぬか。」と云ふんです。如何してと聞くと、「ナーニ此僕の財產一切を賣るのサ。」と云ひますから、ソンナラ君は何うするんですかツて問ふと、暫し沈吟してましたつけが、「僕は遠い處へ行かうと思つてる。」と答へるんです。何處へと聞いても唯遠い處と許りで、別に話して呉れませんでしたが、天野君の事ツてすから、何でも復何か痛快な計畫があるだらうと思ひます。考へ込んで居たのも其問題なんでせうネ。屹度大計畫ですよ、アノ考へ樣で察すると。』

さうですか、天野はまた何處かへ行くと云つてましたか。アノ男も常に人生の裏路許り走つて居る男だが、甚麼計畫をしてるのかネー。」

『無論それは僕なんぞに解らないんです。アノ人の言ふ事行る事、皆僕等凡人の意想外ですからネ。然し僕はモウ頭ッから敬服してます。天野君は確かに天才です。豪い人ですよ。今度だつて左樣でせう、自身が遠い處へ行くに旅費だつて要らん筈がないのに、財產一切を賣つて僕の汽車賃にしようと云ふのですもの。これが普通の人間に出來る事ツてすかネ。さう思つたから、僕はモウ此厚意だけで澤山だと思つて辭退しました。それからまた暫らく、別れともない樣な氣がしまして、話してますと、「モウ行け」と云ふんです。「それでは之でお別れです。」と立ち上りますと、少し待てと云つて、鍋の飯を握つて大きい丸飯を九つ拵へて呉れました。僕は自分でやりますと云つたんですけれど、「そんな事を云ふな、天野朱雲が最後の友情を享けて潔く行つて呉れ。」と云ひ乍ら、涙を流して僕には背を向けて孜々と握るんです。僕はタマラナク成つて大聲を揚げて泣きました。泣き乍ら手を合せて後姿を拜みましたよ。天野君は確かに豪いです。アノ人の位豪い人は決してありません。……（石本は眼を瞑ぢて涙を流す。自分も熱い涙の溢るるを禁じ得なんだ。女教師の啜り上げるのが聞えた。）それから、また坐つて、「これで愈々お別れだ。石本君、生別又兼死別時、僕は慇懃に袖を引いて再逢の期を問ひはせん。君も敢てまたその事を云ひ給ふな。ただ別れるのだ。別れて君は鄕國へ歸り、僕は遠い處へ行くまでだ。行先は死、然らずんば戰鬪。戰つて生きるのだ。死ぬのは否、死と雖ども新たに生きるの謂だ。戰の門出に泣くのは兒女の事ぢやないか。別れよう。潔く元氣よく別れよう。ネ、石本君。」と云ひますから、「僕だつて男です、潔くお別れします。然し何も、生別死別を兼ぬる譯では無いでせう。人生は成程暗い坑道ですけれど、往來皆此路、君と再び逢ふ期が無いとは信じられません。逢ひます、屹度再逢ひます、僕は君の外に賴みに思ふ人もありませんし、屹度再何處かで逢ひます。」と云ひますと「人生は左樣都合よくは出來て居らんぞ。……然し何も、君が死にに行くといふではなし、また、また、僕だつて未だ死にはせん……決して死にはせんのだから、さうだ、再逢の期が遂に無いとは云はん。ただ、それを賴りに思つて居ると失望する事がないとも限らない。詰らぬ事を賴りにするな。又、人生の事々しき戰士が、人を賴りにするとは弱い話だ。……僕は此八戶に來てから、君を得て初めて一道の慰藉と幸福を感じて居た。僅か半歲の間、匆々たる貧裡半歲の間とは云へ、僕が君によつて感じ得た幸福は、長しなへに我等二人を親友とするであらう。僕が心を決して遠い處へ行かんとする

時、君も亦黙然として遙かに故園を去る、——此八戸を去る。好し、行け、去れ、去つて再び問ふこと勿れ。ただ、願はくは朱雲天野大助と云ふ世外の狂人があつたと丈けは忘れて呉れ給ふな。……解つたか、石本。」と云つて、デッと僕を凝視るです。「解りました。」ツて頭を下げましたが、返事が無い。見ると、天野君は兩膝に手をついて、俯向いて目を瞑つてました。解りましたとは云つたものの、僕は實際何もかも解らなくなつて、只斯う胸の底を掻きむしられる樣で、ツイと立つて入口へ行つたです。目がしきりなく曇るし、手先が慄へるし、仲々草鞋が穿けなかつたですが、やう〳〵紐をどうやら結んで、丸餅の新聞包を取り上げ乍ら見ると、噫、天野君は死んだ樣に突伏してます。「お別れです。」と辛うじて云つて見ましたが、自分の聲の樣で無い、天野君は突伏した儘で、「行け。」と怒鳴るんです。僕はモウ何とも云へなくなつて、大聲に泣き乍ら驅け出しました。路次の出口で振返つて見ましたが、無論入口に出ても居ません。見送つて呉れる事も出來ぬ程悲しんで呉れるのかと思ひますと、有難いやら嬉しいやら怨めしいやらで、丸餅の包を兩手に捧げて入口の方を拜んだと迄は知つてますが、アトは無宙で驅け出したです。……人生は何處までも慘苦です。僕は天野君から眞の弟の樣にされて居たのが、自分一生涯の唯一度の幸福だと思ふのです。」

語り來つて石本は、痩せた手の甲に涙を拭つて悲し氣に自分を見た。自分もホッと息を吐いて涙を拭つた。女教師は卓子に打伏して居る。

啄木鳥に

（何處よりかたづね來にけむ、十月九日、庭前十歩ともへだてぬ老いの梅の幹に來て、我が見てあるにもおぢず、しきりに木を啄くけたゝましけるに。）

鳥よ、などここには來しや。
めしうどのいぶみにまみれ、
光なき葉萎えの樹樹に
巣くひぬる罪のけらむし、
いかに、汝がつよき嘴、
ひねもすも啄き暮らすも
喰みつくすすべあるべしや、
斧いらず、太古の民の
足あとよ、鬱蒼たなる
白雲と落日の山の
八千とせを天のみ射せる
いのちの木、その髓にしも
なが糧はさはにあるらむ。
鳥よ、などここには來しや。
ここは、これ、秋の原の
つめたきにうたぞ咒りつつ、
灰に照る入相の日の
あたたみに涙は垂るる
さびし兒の愁ひの宿り、——
夢にのみ心の華の
まどかなる匂ひ吸ふなる
罪の巣——羨まし、汝、
鳥よ、などここには來しや。

（黄草集より）

葬列

久し振で歸つて見ると、嘗ては『眠れる都會』などと時々土地の新聞に罵られた盛岡も、五年以前とは餘程その趣を變へて居る。先づ驚かれたのは、昔自分の寄寓して居た姉の家の、今裕福らしい魚屋の店と變つて、丁度自分の机を置いた邊と思はれるところへ、吊された大章魚の足の、極めてダラシなく垂れて居る事である。昨日二度、今朝一度、都合三度此家の前を通つた自分は、三度共大章魚の首縊を見た。若しこれが昔であつたなら、恁う何日も賣れないで居ると、屹度、自分が平家物語か何かを開いて、『うれしや水鳴るは瀧の水日は照るとも絶えず、……フム面白いな。』などと唸つてるところへ、腐れた汁がボタリ〳〵と、襟首に落ちようと云ふもんだ。願くは、今自分の見て居る間に、早く何處かの内儀さんが來て、全體では餘計だらうが、アノ一番長い足一本だけでも買つて行つて呉れれば可いに、と思つた。此家の隣屋敷の、時は五月の初め、朝な〳〵學堂へ通ふ自分に、目も覺むる淺緑の此上なく嬉しかつた枳殻垣も、いづれ主人は風流を解せぬ醜男か、さらずば道行く人に見せられぬ何等かの祕密を此屋敷に藏して置く底の男であらう、今は見上げる許り高い黒塗の板塀になつて居る。それから少許行くと、大澤河原から稻田を横ぎつて一文字に、幅廣い新道が出來て居て、これに隣り合つた見すぼらしい小路、――自分の極く親しくした藻外といふ友の下宿の前へ出る道は、今廢道同樣の運命になつて、花崗石の截石や材木が處狹きまで積まれて、その石や木の間から、尺もある雜草が離々として生ひ亂れて居る。自分は之を見て唯無上に心悲しくなつた。暫らく其材木の端に腰掛けて、昔の事を懷うて見ようかとも思つたが、イヤ待て恁な白日中に、宛然人生の横町と謂つた樣な此處を彷徨いて何か明處で考へられぬ事を考へて居るのではないかと、通りがかりの巡査に怪まれでもしては、一代の不覺と思ひ返して止めた。然し若し此時、かの藻外と二人であつたなら、屹度外見を憚らずに何か詩的な立廻を始めたに違ひない。兎角人間は孤獨の時に心弱いものである。此の變遷は、自分には毛も難有くない變遷である。恁な變樣をする位なら、寧ろ依然『眠れる都會』であつて呉れた方が、自分並びに『美しい追憶の都』のために祝すべきであるのだ。以前平屋造で、一寸見には妾の八人も置く富豪の御本宅かと思はれた縣廳は、東京の某省に似せて建てたとかで、今は大層立派な二階立の洋館になつて居るし、盛岡の銀座通と誰かの冷評した肴町吳服町には、一度神田の小川町で見た事のある樣な本屋や文房具店も出來た。就中破天荒な變化と云ふべきは、電燈會社の建つた事、女學生の靴を穿く樣になつた事、中津川に臨んで洋食店の出來た事、荒れ果てた不來方城が、幾百年來の蔦衣を脱ぎ捨てて、岩手公園とハイカラ化した事である。禿頭に産毛が生えた樣な此舊城の變方などは、自分がモ少し文學的な男であると、噫、汝不來方の城よ!! 汝は今これ、漸くに覺醒し來れる盛岡三萬の市民を下瞰しつつ、……文明の儀表なり。昨の汝が松風明月の怨長なへに盡きず……なりしを知るものにして、今來つて此盛裝せる汝に對するあらば、誰かまた我と共に跪づいて、汝を讃するの辭なきに苦しまざるものあらむ。疑ひもな

く、汝はこれ文明の僊境なり、新時代の樂園なり。…然れども思へ、——我と共に此一片の石に對して深く〳〵思へ、昨日汝を此城頭に立曳いて、鐘聲を載せ來る千古一色の薫風に立ち、涙を萋々たる草裡に落したりし者、よくこの今日あるを豫知せりしや否や。…然らば乃ち、春秋いく度か去來して世紀また新たなるの日、汝が再び昨の運命を繰返して、蒿萊雜草の底に埋もるるなきを誰か今にして保し得んや。…噫已んぬる哉。』などとやつてのける種になるのだが、自分は毛頭左樣な考は起さなんだ。何故といふまでもない、漸く開園式が濟んだ許りの、文明的な、整然とした、別に俗氣のない、そして依然昔と同じ美しい遠景を備へた此新公園が、少からず自分の氣に入つたからである。可愛い兒供の生れた時、この兒も或は年を老つてから悲慘な死樣をしないとも限らないから、いつそ今斯うスヤ〳〵と眠つてる間に殺した方が可いかも知れぬ、などと考へるのは、實に天下無類の不所存と云はねばならぬ。だから自分は、此公園に上つた時、不圖次の樣な考を起した。これは、人の前で、殊に西洋人の前では、些と憚つて然るべき種の考であるのだが、茲は何も率直で云ふのでなくて、順序に白狀するのだから、別段差閊もあるまい。考といふと傲だ。此公園を公園でなくして、ツマリ自分のものにして、人の入られぬ樣に厚い枳殻垣を繞らして、本丸の跡には、希臘か何處かの昔の城を眞似た大理石の家を建てて、そして、自分は雪より白い衣をドノンマリと肩に垂らして、露西亞の百姓の樣な服を着て、唯一人其家に住む。終日讀書をする。晴れた夜には大砲の樣な望遠鏡で星の世界を研究する。曇天か或は雨の夜には、室中幾行燈の發明に苦心する。空腹を感じた時は、電話で川岸の料食店から上等の料理を取寄せる。尤も此給仕人は普通一奴では面白くない。齡は奈何でも構はぬが、十八歳で容の好い女、曙色か淺緑の簡單な洋服を着て、兩袖をかけて、音のしない樣に綿を厚く入れた足袋を穿いて、始終無言でなければならぬ。掃除をするのは面倒だから、可成散らかさない樣に氣を付ける。そして、一年に一度、昔羅馬皇帝が凱旋式に用ゐた輦——それに擬ねて[illegible]人のアヌンチヤタが乘廻した車、に擬ねた車に乘つて、市中を隈なく廻る。若し途中で、或は乞食、或は盲人、或は癩を病む者、などに逢つたら、(その前に能く催眠術の奥義を究めて置いて、其奴の頭に手が觸つた丈で癒して了る。……考へた時は大變面白かつたが、[illegible]いて見ると、[illegible]然たりだ。[illegible]は[illegible]く[illegible]ふ所以である。

立花滿一と呼ばるる自分は、今から二十[illegible]前に、此盛岡を距てた[illegible]村に生れた。其處の村校の尋常科と高等科で卒業した十歳の春、感心にも唯一人[illegible]この不來方城下に[illegible]來つて、[illegible]後八[illegible]の、夏休暇毎の歸省を除いては、今も此土地で育つた。[illegible]がさる[illegible]とした舊藩士の[illegible]で、隨つて此舊城下蒼古の市には、自分のために、伯父なる人、伯母なる人、また從兄弟なる人達が少なからずある。その上自分が十三四歳の時には、今は亡くなつた上の姉さへ此盛岡に嫁付いたのであつた。自分は此等緣邊のものを代る代る喰ひ廻つて、そして、高等小學から中學と、漸々文の林の奥へと進んだのであつた。……[illegible]ば、自分の今猶生々とした少年時代の追想——何の造作もなく心と心がピタリ握手して共に泣いたり笑つたり喧嘩したり[illegible]した[illegible]友人の事や、或る上級の[illegible]と一緒に、[illegible]何處かナポレオンの肖像に[illegible]れてから、不圖軍人志願の心を起して[illegible]を一番眞面目にやつた時代の事や、ビスマークの

偉を讀んでは、直小比公氣取の態度を取つて、級友の間に反目の種を蒔いた事や、生來虚弱で歴史が好きで、作文が得意であつた處から、小ギボンを以て自任して、他日是非印度衰亡史を著はし、それを印度語に譯して、かの哀れなる亡國の民に愛國心を起さしめ、獨立軍を擧げさせる、イヤ其前に日本は奈何かしてシャムを手に入れて置く必要がある。……其時は自分はバイロンの轍を蹈んで、筆を劒に代へるのだ、などと論じた事や、其の後、或るうら若き美しい人、潤める星の樣な雙眸の底に、初めて人生の曙の光が動いて居ると氣が附いてから、遙かに夜も晝も香はしい夢を見る人となつて、明暮『若菜集』や『暮笛集』を懷にしては、程近い田圃の中にある小さい寺の、古い栗樹の下の墓地へ行つて、青草に埋れた石塔に腰打掛けて一人泣いたり、學校へ行つても、倫理の講堂で『禍』と『亂れ髮』を出して讀んだりした時代の事や、——すべて慕かしい過去の追想の多くは、皆この中津河畔の美しい市を舞臺に取つて居る。盛岡は實に自分の第二の故郷なんだ。『美しい追憶の都』なんだ。

十八歳の春、一先づこの第二の故郷を退いて、第一の故郷に歸つた。そして十幾ケ月の間閑雲野鶴を友として暮したが、五年以前の秋、思立つて都門の客となり、さる高名な歴史家の書生となつた。翌年は文部省の檢定試驗を受けて、歴史科中等教員の免狀を貰うた。唯茲に一つ殘念なのは、東洋のギボンを以て自ら任じて居た自分であるのに、試驗の成績の、怪しい哉、左程上の部でなかつた事である。今は茨城縣第〇中學の助教諭、兩親と小妹とをば、昨年の暮任地に呼び寄せて、餘裕もない代り、別に窮迫もせぬ家庭を作つた。

今年の夏は、校長から常陸郷土史の材料蒐集を囑託せられて、一箇月半の樂しい休暇を全く其爲めに送つたので、今九月の下旬、特別を以て三週間の賜暇を許され、展墓と親戚の廻訪と、外に北上河畔に於ける厨川柵を中心とした安部氏勃興の史料について、少しく實地踏査を要する事があつて、五年振に此盛岡には歸つて來たのである。新山堂と呼ばるる稻荷神社の直背後の、母とは二歳違ひの姉なる伯母の家に車の轅を下させて、出迎へた五年前に比して別に老の見えぬ伯母に、『マア、浩さんの大きくなつた事!』と云はれて、新調の背廣姿を見上げ見下しされたのは、實に一昨日の秋風すずろに蒼古の市に吹き渡る穩やかな黄昏時であつた。

遠く岩手、姫神、南昌、早池峯の四峯を繞らして、近くは、月に名のある鑪山、黄牛の背に似た岩山、杉の木立の色鮮かな愛宕山を控へ、河鹿鳴くなる中津川の淺瀬に跨り、水音緩き北上の流に臨み、貞任の昔忍ばるる夕顔瀬橋、青銅の擬寶珠の古色滴る許りなる上中の二橋、杉土堤の夕暮虹の如き明治橋の眺めもよく、若しそれ市の中央に巍然として立つ不來方城に登つて瞰下せば、高き低き茅葺柾葺の屋根々々が、茂れる樹々の葉陰に立ち竝んで見える此盛岡は、實に誰が見ても美しい日本の都會の一つには洩れぬ。誰やらが初めて此市に遊んで、『杜陵は東北の京都なり。』と云つた事があるさうな。『東北の京都』と近代的な言葉で云へば餘り感心しないが、自分は『みちのくの平安城』と風雅な呼方をするのを好む。

この美しい盛岡の、最も自分の氣に入つて見える時は、一日の中では夜、天候では雨、四季の中では秋である。この三を綜合すると、雨の降る秋の夜が一番好い事になるが、然しそれでは完全に過ぎて、餘り淋し過ぎる。一體自分は歴史家であるから、開闢以來此世界に現れ

た、人、物、事、に就いては、少くも文字に殘されて居る限りは大方知つて居るつもりであるが、未曾て、『完全なる』といふ形容詞を眞正面から冠せることの出來る奴には、一人も、一個も、一度も、出會した事がない。隨つて自分は、『完全』といふ事には極めて同情が薄いのである。完全でなくて構はぬ、ただ拔群であれば可い。世界には隨處に『不完全』が轉がつて居る。其故に『希望』といふものが絶えないのだ。此『希望』こそ世界の生命である、歴史の生命である、人間の生命である。或る學者は『歴史とは進化の義なり。』と說いて居るが、自分は『歴史とは希望の義なり。』と生徒に敎へて置いた。世界の歴史には、隨分間違つた希望のために時間と勞力とを盡して、そして『進化』と正反對な或る結果を來した例が少なくない。此『間違つた希望』と『間違はない希望』とを鑑別するのが、正當なる歴史の意義ではあるまいかと自分は思ふ。自分一個の私見では、六千載の世界史の中、ペリクリース時代の雅典以後、今日に到る部分は、『間違つた希望に依る進化、換言すれば、墮落せる希望に依る墮落』の最も大なる例である。斯う考へると、誠に此世が情なく、心細くなるが、然し此點が却つて面白い、頗る面白い。

自分は『完全』といふものは、人間の考へ得る範限内は決して此世界に來ないものと假定して居る。（何故なれば、自分は『完全になる』とは、水が氷になる如く、希望と活動との死滅する事であると解釋して居るからだ。）だから、我等の過去は僅々六千載に過ぎぬが、未來には幾百千億萬年あるか知れない。この無限の歴史が、乃ち我等人間の歴史であると思ふと、急に胸が轟いた樣に感じがする。無限無際の生命ある『人間』に、三千年位の墮落は何でもないではないか。加之、嘗て完全に近かつた雅典の人間より、遙かに完全に遠かつた今の我々の方が、却つて／＼大なる希望を持ち得るではないか。……斯く、眞理よりも眞理を希求する心、完全よりも完全に對する希望を尊しとする自分が、夜の盛岡の靜けさと淋しさは愛するけれども、奈何して此三つが一緒になつて三足揃つた完全な鋼、重くて黑くて冷たくて堅い、雨ふる秋の長い、夜といふ大きい鋼を頭から被る辛さ切なさを忍ぶことが出來よう。雨と夜と秋との盛岡が、何故殊更に自分の氣に入るかは、自分の知つた限りでない。多分、最近三十幾年間の此市の運命が、乃ち雨と夜と秋との運命であつた爲めでがなあらう。

昨日は、朝まだきから降り初めた秋雨が、午後の三時頃まで降り續いた。長火鉢を中に相對して、『新山堂の伯母さん』と前夜の續きの長話――雨の絲の如くはてしない物語をした。自分の父や母や光ちやん、妹の事、伯母さんの四人の娘の事、八歲で死んだ源坊の事、それから自分の少年時代の事、と、これら凡百の話題を緯にして、話好の伯母さんは自身四十九年間の一切の記憶の絲を經に入れる。此はてしない、蕭やかに嬉しさの籠つた追懷談は、雨の盛岡の蕭やかな空氣、蕭やかな物音と、全く相和して居た。午時近くなつて、隣町の方から、『豆腐ア』といふ、低い、呑氣な、永く尾を引張る呼聲が聞えた。嗚呼此『豆腐ア』！　これこそは、自分が不幸にも全五年の間忘れ切つて居た『盛岡の聲』ではないか。此低い、呑氣な、尾を引張る處が乃ち、全く雨の盛岡式である。此聲が蕭やかな雨の音に漂うて、何十度か自分の耳に怪しくひびいた後、漸く此家の門前まで來た。そして、遠くで聞くも近くで聞くも同じやうな一種の錆聲で、矢張低く呑氣に『豆腐ア』と、呟やく如く叫んで過ぎた。伯母さんは敢て氣が付かなかつたらしい。軈て、十二時を報ずるステーションの工場の汽笛が、シッポリ濡れた樣な

唸りをあげる。と、此市に天主教を少し許り響かせてゐる四家町の教會の鐘がガラン〳〵鳴り出した。直ぐに其の音を打消す他の響が傳はる。これは不來方城畔の鐘樓から、幾百年來同じ鯨音を陸奥の天に響かせて居る巨鐘の聲である。それが精確に十二の數を撞き終ると、今迄あるかなきに聞えて居た市民三萬の活動の響が、礑と許り止んだ。『盛岡』が今今日の晝飯を喰ふところである。

「オヤマア私とした事が、……御飯の支度まで忘れて了つて、……」

といつて、伯母さんはアタフタと立つた。そして自分に云つた、

「清さん、豆腐屋が來なかつたやうだつたね。」

此伯母さんの一擧一動が悉く雨の盛岡に調和して居る。

朝行つた時には未だ蓋が明かなかつたので食後改めて程近い錢湯へ行つた。大きい蛇目傘をさして、高い足駄を穿いて、街へ出ると、矢張自分と同じく、大きい蛇目傘、高い足駄の男女が歩いて居る。皆無言で、そして泥汁を撥ね上げぬ樣に、極めて靜々と、一足毎に氣を配つて歩いて居るのだ。兩側の屋根、低い家には、時に十何年前の同窓であつた男の見える事がある。それは大抵大工か鍛冶屋か荒物屋かである。又、小娘の時に見覺えて置いた女の、今は髮の結ひ方に氣をつける姉さんになつたのが、其處此處の門口に立つて、呆然往來を眺めて居る事もある。此等舊知の人は、決して先方から話かける事なく、目禮さへ爲る事がない。これは、自分には一層雨の盛岡の趣味を發揮して居る如く感ぜられて、仲々奥床しいのである。總じて盛岡は、其人間、其言語、一切皆克く雨に適して居る。人あり、來つて盛岡の街々を彷徨ふこと半日ならば、必ず何街か理髮床の前に、銀杏髷に結つた丸顏の十七八が立つて居て、そして、中なる剃手と次の如き會話を交ふるを聞くであらう。

女『アノナハーン、アエツダケアガナハーン、昨日スアレー、彼ノ人アナーハン。』

男『フンフン、御前ハンモ行タケスカ。フン、眞ニソダチナハン。アレガラナハン、家サ來ルヅギモ面白ガタンチエ。ホリヤ〳〵、大變ダタアンステア。』

此奇怪なる二人の問答には、少くとも三幕物に書き下すに足る演劇的の事實が含まれて居る。若し一度も盛岡の土を踏んだことのない人で、此會話の深い〳〵意味と、其誠に優美な調子とを聞き分くる事が出來るならば、恐らく其人は、大小說家若くは大探偵の資格ある人、然らずば軒の雨滴の極めて蕭やかな、懶氣な、氣の長い響きを百日も聞き慣れた人であらう。

澄み切つた鋼鐵色の天蓋を被いて、寂然と靜まりかへつた夜の盛岡の街を、唯一人犬の如く彷徨く樂みは、其昔、自分の夜毎に繰返すところであつた。然し、五年振で歸つて僅か二夜を過した許りの自分は、其二夜を遺憾乍ら屋根の下にのみ明かして了つたのである。尤も今は電燈の爲めに、昔の樂みの半分は屹度失くなつたであらう。自分は茲で、古い記憶を呼び覺して、夜の街の感想を說くことを、極めて愉快に感ずるのであるが、或一事の蟠るありて、今往時を切實に忍ぶことを遮つて居る。或る一事とは、乃ち昔自分が夜の盛岡を彷徨いて居た際に起つた大奇談である。――或夜自分は例によつて散歩に出懸けた、仁王小路から三戸町、三戸町から赤川、此赤川から櫻山の大鳥居へ一文字に、畷といふ十町の田圃路がある。自分は此十町の無人境を一往返するを敢て勞としなかつた。のみならず、一寸路を逸れて、かの有名な田中の石地藏の背を星明りに撫づるをさへ、決して躊躇せなんだ。そして、平生の癖の松前追分を口笛でやり乍ら、ブラリ〳〵と引返して來ると、途中

で外套を着、頭巾を目深に被つた一人の男に逢つた。然し別段氣にも留めなかつた。それから急に思出して、自分と藻外と三人鼎足的關係のあつた花郷を訪ねて見ようと、少しく足を早めた。四家町は寂然として、唯一軒理髪床の硝子戸に燈光が射し、中から話聲が洩れたので、此處も人間の世界だなと氣の付く程であつた。間もなく花屋町に入つた。斷つて置くが、此町の隣が密淫賣町の大工町で、藝者町なる本町通も程近い。花郷が宿は一寸職業の知れ難い家である。それも其筈、主人は或る田舍の村長で、此本宅には留守居の祖母が唯一人、相應に暮して居る。此祖母なる人の弟の子なる花郷は、此家の二階に本城を構へて居るのだ。二階を見上げると、障子に燈火が射して居る。ヒヨウと口笛を吹くと、矢張ヒヨウと答へた。今度はホーいゝホケキヨとやる（これは自分の名の暗號であつた。）復ヒヨウと答へた。これだけで訪問の禮は既に終つたから、平生の如く入つて行かうと思つて、上框の戸に手をかけようとすると、不意、不意、暗中に鐵の如き手あつて自分の手首をシタタカ握つた。愕然し乍ら星明で透して見たが、外套を着て頭巾を目深に被つた中脊の男、どうやら先刻坂で逢つた奴に似て居る。

『立花、俺に見附つたが最後ぢやぞツ。』

驚いた、眞に驚いた。この聲は我が中學の體操教師、須山といふ豫備曹長で、校外監督を兼ねた校中第一の意地惡男の聲であつた。

『先刻田圃で吹いた口笛は、あら何ぢや？ 俗歌ぢやらう。後を尾けて來て見ると、矢張口笛で密淫賣と合圖をしてけつかる。……』

自分は手を握られた儘、開いた口が塞がらぬ。

『此間職員會議で、貴様が毎晩一人で外出するが、行先がどうも解らん、大に怪しいちふ話が出た。貴様の居る仁王小路が俺の監督範圍ぢやから、俺は赤髯（校長）のお目玉を喰つたのぢや、けしからん、不埒ぢや。其處で俺は三晩つづけて貴様に尾行した。一昨夜は吳服町で綺麗な簪を買つたのを見たから、何氣なく聞いて見ると、妹へ遣るのだと譃吐いたな。昨晩は古河端のさいかちの樹の下で見はぐつた。今夜といふ今夜こそ現場を見屆けたぞ。案の說大工町ぢやつた。貴様は本町へ行く位の金錢は持つまいもんナ。……ハハア、軍隊なら營倉ぢや。』

自分の困憊の狀察すべしである。恰も此時、洋燈片手に花郷が戸を明けた。彼は極めて怪訝に堪へぬといつた樣な顏をして、盛岡辯で、

『何しあんした？』

と自分に問うた。自分は直に元氣を得て、逐一事情を話し、更に須山に向いて、

『先生、此町は大工町ではごあんせん、花屋町でごあんす。小林君も淫賣婦ではごあんせんぜ。』と云つた

須山は答へなかつたが、花郷は手に持つ洋燈を危氣に動かし乍ら、酒醉た聲をあげて叫び出した。

『立花白蘋君の萬歳々々！』

『立花、貴様餘ツ程氣を附けんぢや――不可ぞ。よく覺えて居れッ。』

と怒鳴るや否や、須山教師の黑い姿は、忽ち暗中に沒したのであつた。

自分は既に、五年振で此市に來て十日間觀察した種々の變遷と、それを見た自分の感想とを叙べ、又此市と自分との關係から、盛岡は美しい日本の都會の一つである事、此美しい都會が、雨と夜と秋との場合に最も自分の氣に入るといふ事を叙べ、そして、雨と夜との盛岡の趣味に就いても多少の記述を試みた。そこで今自分は、一年中最も樂しい秋の盛岡――大穹窿

が無邊際に澄み切つて、空中には一微塵の影だもなく、田舍口から入つて來る炭賣薪賣の馬の、冴えた〲鈴の音が、市の中央まで明瞭響く程透徹であることや、雨滴式の此市の女性が、嚴肅な、赤裸々な、明晳の心の樣な秋の氣に打たれて、『ああ、ああ、今年もハア秋でごあんすなつす——。』と、口々に言ふ其微妙な心理のはたらきや、其處此處の井戸端に起る趣味ある會話や、乃至此女性的なる都會に起る一切の秋の表現、——に就いて出來うる限り精細な記述をなすべき機會に逢着した。

が、自分は、其秋の盛岡に關する精細な記述に代ふるに、今、或る他の一記事を以てせねばならぬのである。

『或る他の一記事』といふのは、此場合に於て決して木に竹をつぐ底の突飛たる記事ではないと自分は信ずる。否、或は、此記事を選む方が却つて一層秋の盛岡なるものを適切に表はす所以であるのかも知れない。何故なれば、此一記事といふのは、美しい盛岡の秋三ヶ月の中、最も美しい九月下旬の一日、乃ち今日ひと日の中に起つた一事件に外ならぬからである。

實際を白狀すると、自分が先刻晩餐を濟ましてから、少許調査物があるからと云つて話好の伯母さんを避け、此十疊の奥座敷に立籠つて、餘り明からぬ五分心の洋燈の前に此筆を取上げたのは、實は、今日自分が偶然に路上で出會した一事件——自分と何等の關係もないに不拘、自分の全思想を根柢から搖崩した一事件——乃ち以下に書き記す一記事を、永く〲忘れざらむためであつたのだ。然も自分が此稀有なる出來事に對する極度の熱心は、如何にして、何處で、此出來事に逢つたかといふ事を說明するために、實に如上數千言の不要なる記述を試むるをさへ、敢て勞としなかつたのである。

斷つて置く、以下に書き記す處は、或は此無限の生命ある世界に於て、殆んど一顧の價だに無き極々些末の一事件であるのかも知れない。されば若し此一文を讀む人があつたなら、その人は、『何だ立花、君は這麼事を眞面目腐つて書いたのか。』と頭から自分を嘲笑ふかも知れない。が然し、此一事件は、自分といふ小なる一人物の、小なる二十幾年の生涯に於て、親しく出會した事件の中では、最も大なる、最も深い意味の事件であると信ずる。自分は恁信じたからこそ、此市の名物の長澤屋の豆銀糖でお茶を飲み乍ら、稚ない時から好きであつた伯母さんと昔談をする樂みをさへ擲ち去つて、明からぬ五分心の洋燈の前に、筆の進りに汗ばみ乍ら此苦業を續けるのだ。

又斷つて置く、自分は既に此事件を以て、親ら出會した事件中の最大事件と信じ、其爲に二十幾年養ひ來つた全思想を根柢から搖崩された。そして、今新らしい心的生涯の原頭に立つた。

然だ、今自分の立つて居る處は、慥かに『原頭』である。自分はまだ、一分も、一厘も、此大問題の解決に步を進めて居らぬのだ。或は今夜此筆を擱く迄には、何等か解決の端を發見するに到るかも知れぬが、……否々、それは望むべからざる事だ。此新たに掘り出された『ローゼッタ石』の、表に刻まれた神聖文字は、如何にトマス・ヨングでもシャムポリヲンでも、プシウスでも、とても十年二十年に讀み了る事が出來ぬ樣に思はれる。

自分が今朝新山祠畔の伯母の家を出たのは、大方八時半頃でがなあつたらう。昨日の雨の名殘の潦が路の處々に行く人の姿々を映して居るが、空は手掌程の雲もなく美しく晴れ渡つて、透明な空氣を岩山の上の秋陽がホカ〱と溫めて居た。

加賀野新小路の親緣の家では、市役所の衞生係なる伯父が出勤の後で、瘦せこけた伯母の出

して呉れた麥煎餅は、昨日の雨の香を留めたのであらう、少なからず濕々して居た。此家から程近い住吉神社へ行つては、昔を語る事多き大公孫樹の、まだ一片も落葉せぬ枝々を、幾度となく仰ぎ見た。此樹の下から左に折れると門内の嶮しい藪路、それを東に一軒許で、天神山に達する。しん〳〵と生ひ茂つた杉木立に圍まれて、苔蒸せる石甃の兩側秋草の生ひ亂れた社前數十歩の庭には、ホカ〳〵と心地よい秋の日影が落ちて居た。遠くで鷄の聲の聞えた許り、神寂びた宮居は寂然として居る。周匝にひびく駒下駄の音を石甃に刻み乍ら、拜殿の前近く進んで、自分は圖らずも懷かしい舊知己の立つて居るのに氣付いた。舊知己とは、社前に相對してぬかづいて居る一雙の石の狛である。詣づる人又人の手に撫でられて、其不恰好な頭は黑く、青光りがして居る。そして、其又顏といつたら、蓋し是れ天下の珍といふべきであらう、唯極めて無造作に凸凹を造へた丈けで醜くもあり、馬鹿氣ても居るが、克く見ると實に親しむべき愛嬌のある顏だ。全く世事を超脫した高士の俤、イヤ、それよりも一段俗に離れた、俺は生れてから未だ世の中といふものが西にあるか東にあるか知らないのだ、と云つた樣な顏だ。自分は昔、よく、友人と此處へ遊びに來ては、「石狛よ、汝も亦詩を解する奴だ。」とか、「石狛よ、汝も亦吾黨の士だ。」とか云つて、幾度も幾度も杖で此不恰好な頭を擲つたものだ。然し今日は、幸ひ杖を携へて居なかつたので、丁寧に手で撫でてやつた。目を轉ずると、杉の木立の隙から見える限り、野も山も美しく、薄紅葉して居る。宛然一幅の風景畫の傑作だ。周匝には心地よい秋草の香が流れて居る。此香は又自分を十幾年の昔に返した。郷校から程近い平田野といふ松原、晴れた日曜の茸狩に、この秋草の香と初茸の香とを嗅ぎ分けつつ、いとけなき自分は、其處の松蔭、此處の松蔭と探し歩いたものであつた。——

晝餐をば神子田のお苑さんといふ從姉（新山堂の伯母さんの二番目娘で、自分より三歳の姉である。）の家で濟ました。食後、お苑さんは、去年生れた可愛い赤坊の小さい頭を撫で乍ら、「ひとつ御世話いたしませうか、浩さん。」と云つた。「何をですか。」「アラ云はなくつても解つてますよ。綺麗な奥樣をサ。」と樂しげに笑ふのであつた。

歸路には、馬町の先生を訪ねて、近日中に厨川柵へ一緒に行つて貰ふ約束をした。馬町の先生といへば、說明するまでもない。此地方で一番有名な學者で、俳人で、能書家で、特に地方の史料に就いては、極めて該博精確な研究を積んで居る、自分の舊師である。

幅廣き美しい內丸の大逵、師範學校前の巨鐘が、澄み切つた秋の大空に、無邊際な胸から搾り出す樣な大聲音をあげて午後の三時を報じた時、自分は丁度其鐘樓の下を西へ歩いて居た。立派な縣廳、陰氣な師範學校、石割櫻で名高い裁判所の前を過ぎて、四辻へ出る。と、雪白の衣を着た一巨人が、地の底から拔け出た樣にヌッと立つて居る。——

これは此市で一番人の目に立つ壯大な二階立の白堊館、我が懷かしき母校である。巨人？　然だ、慥かに巨人だ。嘗に盛岡六千戶の建築中の巨人である許りでなく、また我が記憶の世界にあつて、總ての意味に於て巨人たるものは、實にこの堂々たる、巍然たる、秋天一碧の下に兀として聳え立つ雪白の大校舍である。昔、自分は此巨人の腹中にあつて、或時は小ナポレオンであつた、或時は小ビスマークであつた、或時は小ギボンであつた、或時は小クロムウエルであつた、又或時は、小ルーソーとなり、小バイロンとなり、學校時代のシル

レルとなつた事もある。嘗て十三歳の春から十八歳の春まで全五年間の自分の生命といふものは、實に此巨人の永遠なる生命の一小部分であつたのだ。噫、然だ、然だつけ、と思ふと、此過去の幻の如き巨人が、怎やら搖ぎ出す樣に見えた。が、矢張動かなんだ、地から生え拔いた樣に微塵も動かなんだ、秋天一碧の下に雪白の衣を着て突立つたまま。

印度衰亡史は云はずもの事、まだ一册の著述さへなく、茨城縣の片田舍で月給四十圓の歷史科中等教員たる不甲斐なきギボンは、此時、此歷史的一大巨人の前におのづから頭の低るるを覺えた。

白色の大校舍の正面には、矢張白色の大門柱が、嚴めしく竝び立つて居る。この門柱の兩の袖には、又矢張白色の、幾百本と數知れぬ木柵の頭が竝んで居る。白！　白！　白！　此白は乃ち、此白い門に入りつ出つする幾多うら若き學園の逍遙者の、世の塵に染まぬ潔白な心の色でがなあらう。柵の前には一列をなして老いた櫻の樹が立つて居る。美しく紅葉した其葉は、今傾きかけた午後三時の秋の日に照されて、いと物靜かに燃えて見える。五片六片、簇目見ゆる根方の土に散つて居るのもある。柵と櫻樹の間には一條の淺い溝があつて、掬ばば凝つて掌上に晶ともなるべき程澄みに澄んだ秋の水が、白い柵と紅い櫻の葉の影とを浮べて流れて居る。柵の頭の尖端々々には、殆んど一本毎に眞赤な蜻蛉が止つて居る。

自分は、えも云はれぬ懷かしさと尊さに胸を一杯にし乍ら此白門に向つて歩を進めた。溝に架した花崗石の橋の上に、髮ふり亂して垢光りする襤褸を着た女乞食が、二歲許りの石塊の樣な兒に乳房を銜ませて坐つて居た、其周圍には五六人の男の兒が立つて居て、何か祕々と囁き合つて居る、白巨殿前、此一點の醜惡！　此醜惡をも、然し、自分は敢て醜惡と感じなかつた。何故なれば、自分は決して此土地の盛岡であるといふことを忘れなかつたからである。市の中央の大逵で、然も白晝、穢ない〳〵女乞食が土下座して、垢だらけの胸を披けて人の見る前に乳房を投げ出して居る！　この光景は、大都乃至は凡ての他の大都會に決して無い事、否、有るべからざる事であるが、然し此盛岡には常に有る事、否、之あるがために却つて盛岡の盛岡たる所以を發揮して見せる必要な條件であるのだ。されば自分は、之を見て敢て醜惡を感ぜなんだのみならず、却つて或る一種の興味を覺えた。そして靜かに門内に足を入れた。

校内の案内は能く知つて居る。門から直ぐ右に折れた、ヅカ〳〵と小使室の入口に進んだ。

『鹿川先生は、モウお退出になりましたか。』

鹿川先生といふは、抑々の創始から此學校と運命を倶にした、既に七十近い、德望縣下に鳴る老儒者である。されば、今迄此處の講堂に出入した幾千と數の知れぬうら若い求學者の心よりする畏敬の情が、自ら此老先生一身に集つて、其瘦せて千年の鶴の如き老軀は、宛然これ生きた教員の儀表となつて居る。自白すると自分の如きも昔十幾人の教師に教を享けたるに不拘、今猶しみ〴〵と思出して有難さに淚をこぼすのは、唯此鹿川先生一人であるのだ。

今日の訪問の意味は、云はずと解つて居る。

自分の問に對して、三秒か五秒の間答がなかつたが、霎時して、

『イヤー立花さんでアごあせんか？　こりや怎うもお久振でごあんした喃。』

と、聞覺えのある、錆びた〳〵聲が應じた。

ああ然だ、この聲の主を忘れてはならぬ。鹿川先生と同じく、此校創立以來既に三十年近く勤續して居る正直者、歩振の可笑したところから附けられた、『家鴨』といふ綽名をも矢張三十

年近く呼ばれて居る阿部老小使である。

「今日はハア土曜日でごあんすから、先生方は皆お歸りになりあしたでア。」

土曜日？　お〻然であつた。學校教員は誰しも土曜日の來るを指折り數へて待たぬものがない。自分も其教員の一人であり、且つ又、この一週七曜の制は、黄道十二支と共に、五千年の昔、偉大なるアッケデヤ人の創めたもので、其後希臘人は此制をアレキサンデリヤから輸入し、羅馬人は西暦紀元の頃に八日一週の舊制を捨てて此制を採用し、ひいて今日の世界に到つたものである、といふ事をさへ、克く研究して知つて居る癖に、怎うして今日は土曜日だといふ事を忘却して居たものであらう、誠に頓馬な話である。或は自分は、滯留三日にして早く、既に盛岡人の呑氣な氣性の感化を蒙つたのかも知れない。

此小使室の土間に、煉瓦で築き上げた大きな竈があつて、其上に頗る大きな湯釜が、昔の儘に湯を沸らして居る。自分は此學校の一年生の冬、百二十人の級友に唯二つあてがはれた煖爐には、力の弱いところから近づく事も出來ないで、よく此竈の前へ來て晝食のパンを噛つた事を思出した。そして、此處を立去つた。

門を出て、昔十分休毎によく藻外と花郷と三人で樂しく語り合つた事のある、玄關の上の大露臺を振仰いだ。と、丁度此時、[illegible]の門前に立つて居た兒供の一人が、頓狂な聲を張上げて叫んだ。

「アレノ＼、がんこア來た、がんこア來た。」

がんことは盛岡地方で、葬列といふ事である。此聲の如何に鋭かつたかは、自分が悠々たる追憶の[illegible]の中から、俄かに振返つて、其兒供の指す方を見たのでも解る。これは丁度、門口へ來た配達夫に、「石川さん、電報です。」と穩かに云はれるよりも、「電報ッ。」と喚つて投げる樣なけたたましい聲で叫ばれる方が、一層其電文が心配なと同じ事で、自分は實際、甚麼珍しい葬列かと、少からず慌てたのであつた。

此頓狂なる警告は、嘘ではなかつた。幅廣く、塵も留めず美くしい、温かな秋の日に照された大道を、自分が先刻來たと反對な方角から、今一群の葬列が徐々として音なく練つて來る。然も此葬列は、實に珍らしいものであつた。唯珍らしい許りではない、珍らしい程見すぼらしいものであつた。先頭に立つたのは、處々裂けた一對の高張、次は一對の蓮華の造花、其次は直ぐ棺である。此棺は白木綿で包まれた上を、無造作に荒繩で縛されて、上部に棒を通して二人の男が擔いだのであつた。この後には一群の送葬者が隨つて居る。數へて見ると、一群の數は、驚く勿れ、たつた六人であつた。驚く勿れとは云つたものの、自分は此時少なからず驚いたのである。更に又驚いたのは、此六人が、揃ひも揃つて何れも、少しも悲し氣な處がなく、嚴肅な點もなく、恰も此見すぼらしい葬式に會する事を恥づるが如く、苦い顏をして蹌々然と歩いて來る事である。自分は、宛然大聖人の心の如く、透徹な無邊際の碧穹の直下、[illegible]な大道を、この哀れ果敢なき葬列の靜々と練り來るを見て、或る名状し難き衝動を心の底の底に感じた。そして、此光景は蓋し、天が自分に示した最も冷嚴なる滑稽の一であらうなどと考へた。と又、それも一瞬、これも一瞬、自分は、これは囚人の葬式だ、と感じた。

理由なくして囚人の葬式だナと、不吉極まる觀察を下すなどは、此際隨分突飛な話である。が、自分には其理由がある。――たしか十一歳の時であつた。早く妻子に死別れて獨身生活をして居た自分の伯父の一人が、窮迫の餘り人と共に何か法網に觸るる事を仕出來したとかで、狐森一番戸に轉宅した。註、狐森一番戸は乃ち盛岡監獄署なり。此時年齢が既に六十餘の老

體であつたので、半年許り經つて遂々獄裡で病死した。此「悲慘」の結晶した遺骸を引取つたのは、今加賀野新小路に居る伯父である。葬式の日、矢張今日のそれと同じく唯六人であつた會葬者の、二人は乃ち新山堂の伯母さんとお苑さんと自分とであつた。自分は其時稚心にも猶この葬式が普通でない事、見すぼらしい事を知つて、行く路々ひそかに肩身の狹くなるを感じたのであつた。されば今、かの六人の遙々然たる歩振を見て、よく其心をも忖度する事が出來たのである。

　これも亦一瞬。

　列の先頭と併行して、櫻の樹の下を來る一團の少年があつた。彼等は逸早くも、自分と共に立つて居る『警告者』の一團を見付けて、驅け出して來た。兩團の間に交換された會話は次の如くである。『何處のがんこだ？』『狂人のよ、繁のよ。』『アノ高沼の繁狂人のが？』『ウム然よ、高沼の狂人のよ。』『ホー。』『今朝の新聞にも書かさつて居だずでや、繁ア死んで好えごとしたつて。』『ホー。』

　高沼繁？　狂人繁！　自分は直ぐ此名が決して初對面の名でないと覺つた。何でも、自分の記憶の底に沈んで居る石塊の一つの名も、たしか『高沼繁』で、そして此名が、たしか或る狂人の名であつた樣だ。――自分が恁う感じた百分の一秒時、忽ち又一事件の起るあつて、少からず自分を驚かせた。

　今迄自分の立つて居る石橋に土下座して、懷中の赤兒に乳を飮ませて居た瞽の女乞食が、此時卒かに立ち上つた。立ち上るや否や、茨の髮をふり亂して、帶もしどけなく、片手に懷中の兒を抱き、片手を高くさし上げ、裸足になつて驅け出した、驅け出したと見るや否や、疾風の勢を以て、かの聲無く靜かに練つて來る葬列に近づいた。近づいたなと思ふと、骨の髓までキリ〳〵と泌む樣な、或る聽取り難き言葉、否、叫聲が、喝と許り自分の鼓膜を突いた、呀ッと思はず聲を出した時、かの聲無き葬列は礑と進行を止めて居た、そして棺を擔いだ二人の前の方の男は左の足を中有に浮して居た。其爪端の處に、彼の穢ない女乞食が撞と許り倒れて居た。自分と並んで居る一團の少年は、口々に、聲を限りに、『あやア、お夏だ、お夏だツ、狂女だツ。』と叫んだ。

　『お夏』と呼ばれた彼の女乞食が、或る聽取り難い言葉で一聲叫んで、棺に取縋つたのだ。そして、彼の擔いで居る男に蹴倒されたのだ、この非常なる活劇は、無論眞の一轉瞬の間に演ぜられた。

　噫、噫、この『お夏』といふ名も亦、決して初對面の名ではなかつた。矢張自分の記憶の底に沈んで居る石塊の一つの名であつた。そして此名も、たしか或る狂女の名であつた樣だ。

　以上二つの舊知の名が、端なく、我が頭腦の中でカチリと相觸れた時、其一刹那、或る莊嚴な、金色燦然たる一光景が、電光の如く湧いて自分の兩眼に立ち塞がつた。

　自分は今、茲に霎時、五年前の昔に立返らねばならぬ。時は神無月末の或る朝まだき、處は矢張此の新山祠畔の伯母が家。

　史學研究の大望を起して、上京を思立つた自分は、父母の家を辭した日の夕方、この伯母が家に着いて、晩れゆく秋の三日四日、あかぬ別れを第二の故郷と偕に惜まれたのであつた。

　一夜、伯母やお苑さんと隨分夜更くるまで語り合つて、枕に就いたのは遠近に一番鷄の聲を聞く頃であつたが、翌くる朝は恁うしたものか、例になく早く目が覺めた。枕頭の障子には、わづかに水を撒いた許りの薄光が、聲もなく動

いて居る。前夜お苑さんが、物語に氣を取られて雨戸を閉めるのを忘れたのだ。まだ〱、早いな、と思つたが、大望を抱いてる身の、宛然初陣の曉と云つたやうな心地は、目がさめてから猶溫かい臥床を離れぬのを、何か安逸を貪る所業の樣に感じさせた。自分は、人の眠を妨げぬやうに靜かに起きて、柱に懸けてあつた手拭を取つて、サテ音させぬ樣に障子を明けた。秋の朝風の冷たさが、颯と心地よく全身に沁み渡る。庭へ下りた。

井戸ある屋後へ廻ると、此處は半反歩許りの野菜畑で、霜枯れて地に伏した里芋の廣葉や、紫の色褪せて葉許りの茄子の、痩せた骸骨を並べてゐる畝や、抜き殘された大根の剛ばつた葉の上に、東雲の光が白々と宿つて居た。否これは、東雲の光だけではない、置き餘る露の珠が東雲の光と冷かな接吻をして居たのだ。此野菜畑の突當りが、一重の木槿垣によつて、新山堂の正一位樣と背中合せになつて居る。滿天滿地、闃として脈搏つ程の響もない。

顔を洗ふべく、靜かに井戸に近いた自分は、敢て喧ましき吊車の音に、この曉方の神々しい靜寂を破る必要がなかつた。大きい花崗石の臺に置いた洗面盥には、見よ見よ、溢れる許り盈々と、毛程の皺さへ立てぬ秋の水が、玲瓏として銀水の如く盛つてあるではないか。加之此一面の明鏡は又、黄金の色のいと鮮かな一片の小扇さへ載せて居る。――すべての木の葉の中で、天が下の王妃の君とも稱ふべき公孫樹の葉、――新山堂の境内の天聳る母樹の枝から、星の降る夜の夜心に、ひらり〱と舞ひ離れて來たものであらう。

自分は惝怳として之に見入つた。この心地は、かの我を忘れて魂、無何有の境に逍遙ふといふ心地ではない。謂はば、東雲の光が骨の中まで沁み込んで、身も心も水の如く透き徹る樣な心地だ。

較々霎時して、自分は徐ろに其一片の公孫樹の葉を、水の上から摘み上げた。そして、一滴二滴の銀の雫を口の中に滴らした。そして、いと丁寧に塵なき井桁の端に載せた。

顔を洗つてから、可成音のせぬ樣に水を汲み上げて、盥の水を以前の如く清く盈々として置いて、さて彼の一片の小扇をとつて以前の如くそれに浮べた。

恁して自分は、云ふに云はれぬ或る清淨な滿足を、心一杯に感じたのであつた。

起き出でた時よりは餘程明るくなつたが、まだまだ日の出るには程がある。家の中でも隣家でも、誰一人起きたものがない。自分は靜かに深呼吸をし乍ら、野菜畑の中を彼方此方と歩いて居た。

だん〱進んで行くと、突當りの木槿垣の下に、山の端はなれた許りの大滿月位な、シッポリと露を帶びた雪白の玉菜が、六個七個並んで居た。自分は、霜枯れ果てた此畑中に、ひとり實割れるばかり豐かな姿を見せて居る此野菜の王を、少なからず心に嬉しんだ。

不圖、何か知ら人の近寄る樣なけはひがした。菜園滿地の露のひそめき乎？　否々、露に聲のある筈がない。と思つて眼を瞑じた時、自分はいゝ、ひやりと許り心を愕かした。そして、呼吸をひそめた。

前にも云つた如く、今自分の前なる古い木槿垣は、稻荷社の境内と此野菜畑との境である。そして此垣の外僅か數尺にして、朽ちて見える社殿の最後の柱が立つて居る。人も知る如く、稻荷社の背面には、高い床下に特別な小龕を造られてある。これは、夜な〱正一位樣の御使なる白狐が來て寢る處とかいふ事で、かの鰯の頭も信心柄の殊勝な連中が、時に豆腐の油揚や干鰯、乃至は強飯の類の心籠めた供物を入

れ置くところである。今自分は、落葉した木槿垣を透して、此白狐の寳殿を内部まで窺ひ見るべき地位に立つて居たのだ。

然し自分のひやりと許り悸いたのは、敢て此處から牛の様な白狐が飛び出したといふ譯ではなかつた。

此古い社殿の側縁の下を、一人の異装した男が、破草履の音も立てずに、此方へ近づいて來る。脊のヒョロ高い、三十前後の、薄髯の生えた、痩せこけた頬に些の血色もない、塵埃だらけの短かい袷を着て、穢れた白足袋を穿いて、色褪せた花染メリンスの女帯を締めて、赤い木綿の截片を頸に捲いて……、俯向いて足の爪尖を瞠め乍ら、薄笑をして近づいて來る。

自分は一目見た丈けで、此異装の男が、盛岡で誰知らぬものなき無邪氣な狂人、高沼繁であると解つた。彼が日々喪狗の如く市中を彷徨いて居る、時として人の家の軒下に一日を立ち暮らし、時として何か索むるものの如く同じ道を幾度も〳〵往來して居る男である事は、自分のよく知つて居る處で、又、嘗て彼が不來方城頭に跪いて何か呟やき乍ら天の一方を拜んで居た事や、或る夏の日の眞晝時、丁度課業が濟んでゾロ〳〵と生徒の群り出づる時、中學校の門前に衛兵の如く立つて居て、出て來る人ひとりひとりに慇懃な敬禮を施した事や、或る時、美人の名の高かつた、時の縣知事の令夫人が、招魂社の祭禮の日に、二人の令孃と共に参拜に行かれた處が、社前の大廣場、人の群つて居る前で、此男がフイと人蔭から飛び出して行つて、大きい淺黄色の破風呂敷を物をも云はず其盛装した令夫人に冠せた事などは、皆自分の嘗て親しく目撃したところであつた。彼には父もあり母もある、また家もある。にも不拘、常に此新山堂下の白狐龕を無賃の宿として居るといふ事も亦、自分の聞き知つて居た處である。

異装の男の何人であるかを見定めてからは、自分は平生の通りの心地になつた。そして可成彼に曉られざらむ様に息を殺して、好奇心を以て仔細に彼の擧動に注目した。

薄笑をして俯向き乍ら歩いてくる彼は、軈て覺束なき歩調を進めて、白狐龕の前まで來た。そして礑と足を止めた。同時に『ウッ』と聲を洩して、ヒョロ高い身體を中腰にした。ヂリ〳〵と少許づゝ少許づゝ退歩をする。——此名狀し難き道化た擧動は、自分の危く失笑せむとするところであつた。

殆んど高潮に達した好奇心を以て、自分は彼の睨んで居る龕の内部を覗いた。

今迄毫も氣が付かなんだ、此處にも亦一個の人間が居る。——男ではない。女だ。赤縞の、然し今はただ色に穢れはてた、肩揚のある綿入を着て、グル〳〵巻にした髪には、よく七歳八歳の女の兒の用ゐる赤い簪をチョイと插して、二十の上を一つ二つ、頸筋は垢で眞黒だが顔は圓くて色が白い……。

これと毫厘寸法の違はぬ女が、昨日の午過、伯母の家の門に來て、「お頼のまをす、お頼のまをす。」と呼んだのであつた。伯母は臺所に何か働いて居つたので、自分が「何處の女客ぞ。」と怪しみ乍ら取次に出ると、腹が減つて腹が減つて一足も歩かれないエハンテ、何卒何か、と、いきなり手を延べた。此處へ伯母が出て來て、幾片かの鳥目を恵んでやつたが、後で自分に悉話した。——アレはお夏といふ女である、雫石の旅宿なる兼平屋(伯母の家の親類)で、十一二の時から下婢をして居たもの。此頃其處の宿の主人が來ての話によれば、稚い時は左程でもなかつたが、年を重ぬるに從つて段々愚かさが增して來た。此年の春早く連合に死別れたとかで獨身者の法界屋が、其旅宿に泊つた事がある。お夏の擧動は其夜甚だ怪しかつた。翌朝法

界屋が立つて行つた後、お夏は門口に出て、其男の行つた秋田の方を眺め〳〵、幾等叱つても嚇しても二時間許り家に入らなかつた。翌朝主人の起きた時、お夏の姿は何處を探しても見えなかつた。一月許り前になつて偶然歸つて來た。が其時はモウ本當の愚女になつて居て、主人であつた人に逢うても、昔の禮さへ云はなんだ。半年有餘の間、何をして來たかは無論誰も知る人はないが、歸つた當座は二十何圓とかの金を持つて居つたさうナ。多分乞食をして來たのであらう。此盛岡に來たのは、何日からだか解らぬが、此頃は毎日彼樣して人が門に立つ。そして、云ふことが何時でも「お賴のまをす、腹が減つて、だ。モウ確然普通の女でなくなつた證據には、アレ清さんも見たでせう、乞食をして居乍ら、何時でもアノ通り紅をつけて新らしい下駄を穿いて居ますよ。夜は甚麼處に寢るんですかネー。――

　此お夏は今、狭い、暗い納屋の中にベタリと坐つて、ポカンとした顔を入口に向けて居たのだ。餘程早くから目を覺まして居たのであらう。

　中腰になつてお夏を睨めた繁は、何と思つたか、犬に逐はれた猫のする樣に、脣を尖らして一聲「フウー」と咜んだ。多分平生自分の家として居る場所を、他人に占領された憤怒を洩したのであらう。

　お夏は亦何と思つたか、卒かに身を動かして、斜に背を繁に向けた。そして何やら探す樣であつたが、取り出したのは一個の小さい皿紅皿である、呀と思つて見て居ると、唾に濡した小指で其紅を融かし初めて二度三度薄からず脣へ塗りつけた。そして、チョイト恥かしげに繁の方に振向いて見た。

　繁はゾク〳〵と其身を動かした。

　お夏は再び口紅をつけた。そして再び振向いて恥しげに繁を見た。

　繁はゴツと喉を鳴らした。

　繁の氣色の較々動いたのを見たのであらう、お夏は懐しく三度口紅をつけた。そして三度振向いた、が、此度は恥し氣にではない。身體さへ少許捩向けて、そして、そして、繁を瞶き乍らニタ〳〵と笑つた。紅をつけ過した脣に、日に燃ゆる牡丹の樣な口が、顔一杯に擴がるかと許り大きく見える。

　自分は此時、全く現實といふ觀念を忘れて了つて居た。宛然、ヒマラヤ山あたりの深い深い巖の谷の底で、猿と共に年を老つた猿共が、千年に一度演る芝居でも行つて見て居る樣な心地。

　お夏が頰の斷れる許りニタ〳〵〳〵と笑つた時、繁は二度聲を出して「ウッ」と唸つた、と見るや否や、矢庭に飛びついてお夏の手を握つた。引張り出した。此時の繁の顔！ 泣く顔でもない、泣くのでもない。自分は辭を知らぬ。

　お夏は矢張ニタ〳〵と笑ひ乍ら、繁の手を曳くに任せて居る。二人は低い緣の下まで行つて見えなくなつた。社前の裏庭へ出たのである――

　自分も往還を越へた、裏庭の見渡される場所へ。周圍たる廣庭の中央には、雲を凌いで立つ一株の大公孫樹があつて、今、一年中唯一度の盛装を凝して居た。葉といふ葉は皆黄金の色、晩の光の中で微動もなく、碧々として薄り光澤を流した大天蓋に鮮かな輪郭をとつて居て、仰げば宛然金色の雲を被て立つ巨人の姿である。

　二人が此公孫樹の下まで行つた時、葉は何故か日暎に囁いた。お夏は頷いた樣である。

　忽ち極めて頓狂な調子外れな聲が、繁の口から出た。

「ヨシキタ、ホラ〳〵。」

「ソレヤマタ、ドッコイショ。」

とお夏が和した。二人は、手に手を取つて踊り出した。

跡といつても、元より狂人の亂雜である。足をとらはれてお夏の倒れることもある。撻と衝き當つて二人共々重なり合ふ事もある。繁が大公孫樹の幹に打衝つて度を失ふ事もある。そして、恁いふ事のある毎に、二人は腹の底から出る樣な聲で笑つて〳〵、笑つて了へば、『ヨシキタホラ〳〵』とか、『ソレヤマタドッコイショ』とか、『キタコラサッサ』とか調子をとつて、再び眞面目に踊り出すのである。

玲々と聲あつて、神の笑ひの如く、天上を流れた。――朝風の動き初めたのである。と、巨人は其被て居る金色の雲を斷り斷つて、昔ツォイスの神が身を化した樣な、黄金の雨を二人の上に降らせ初めた。嗚呼、嗚呼、幾千萬片と數の知れぬ金地の舞の小扇が、縺れつ解けつヒラヒラと、二人の身をも埋むる許り。或ものは又、見えざる絲に吊らるる如く、枝に返らず地に落ちず、光ある風に身を揉ませて居る。空に葉の舞、地に人の舞！ 之を見るもの、上なるを高しとせざるべく、下なるを卑しとせざるべし。黄金の葉は天上の舞を舞うて地に落つるのだ。狂人繁と狂女お夏とは神の御庭に地上の舞を舞うて居るのだ。

突如、梵天の大光明が、七彩赫灼の耀を以て世界開發の曙の如く、人天三界を照破した。先づ雲に隱れた巨人の頭を染め、ついで、其金色の衣を目も眩く許りに彩り、軈て、普ねく地上の物又物を照し出した。朝日が山の端を離れたのである。

見よ、見よ、踊りに踊り、舞ひに舞ふお夏と繁が顏のかがやきを。瘦せこけて血色のない繁は何處へ行つた？ 頭筋黑々ポカンとしたお夏は何處へ行つた？ 今此處に居るのはこれ、天の日の如くかがやかな顏をした、神の御庭の朝の舞に、遙か下界から選び上げられた二人の舞人である。金色の葉がしきりなく降つて居る。金色の日光が鮮かに照して居る。其葉其日光のかがやきが二人の顏を恁染めて見せるのか？ 否、然ではあるまい、恐らくは然ではあるまい。

若し然とすると、それは一種の虛僞である、此莊嚴な、金色燦然たる境地に、何で一點たりとも虛僞の陰影の潛むことが出來よう。自分は、然でないと信ずる。

全く心の働きの一切を失つて、唯、恍として、茫として、蕩として、目前の光景に我を忘れて居た自分が、此時僅かに胸の底の底で、あるかなきかの聲で囁くを得たのは、唯次の一語であつた。――曰く、『狂者は天の寵兒だと、プラトーンが謂つた。』と。

お夏が聲を張り上げて歌つた。

『惚れたーアー惚れたーのーオ、若松樣アよーオー、ハア惚れたよーツ。』

『ハア惚れた惚れた惚れたよやさー。』

と繁が次いだ。二人の天の寵兒が測り難き全智の天に謝する衷心の祈禱は、實に此の外に無いのであらう。

電光の如く湧いて自分の兩眼に立ち塞がつた光景は、宛然幾千萬片の黄金の葉が、さといふ音もなく一時に散り果てたかの樣に、一瞬にして消えた。が此一瞬は、自分にとつて極めて大切なる一瞬であつた。自分は此一瞬に、目前に起つて居る出來事の一切を、よくよく解釋することが出來た。

疾風の如く棺に取縋つたお夏が、蹴られて撻と倒れた時、懷の赤兒が『ギャッ』と許り烈しい悲鳴を上げた。そして此悲鳴が唯一聲であつた。自分は飛び上る程吃驚した。ああ、あの赤兒は、つぶされて死んだのではあるまいか。……

病院の窓

野村良吉は平日より少し早目に外交から歸つた。二月中旬過の、珍らしく寒さの緩んだ日で、街々の雪がザクザク融けかかつて來たから、指先に穴のあいた足袋が氣持惡く濡れて居た。事務室に入つて、受付の廣田に聞くと、同じ外勤の上島も長野も未だ歸つて來ないと云ふ。時計は一時十六分を示して居た。

暫時其處の煖爐にあたつて、濡れた足袋を赤くなつて燃えて居る煖爐に自暴に擦り付けると、シュッシュッと厭な音がして、變な臭氣が鼻を撲つ。苦い顏をして階段を上つて、懷手をした儘耳を欹てて見たが、森閑として居る。右の手を出して、垢着いた毛絲の首卷と毛羅紗の鳥打帽を折釘に懸けて、其手で扉を開けて急がしく編輯局を見廻した。一月程前に來た竹山と云ふ編輯主任は、種々の新聞を取散らかした中で頻りに何か書いて居る。主筆は例の如く少し曲つた廣い背を此方に向けて、煖爐の傍の窓際で新着の雜誌らしいものを讀んで居る。「何も話して居なかつたナ」と思ふと、野村は少し安堵した。今朝出社した時、此二人が何か密々話合つて居て、自分が入ると急に止めた。——それが少なからず渠の心を惱ませて居たのだ。役所廻りをして、此間やつた臨時種痘の成績調やら辭令やらを寫して居ながらも、四六時中それが氣になつて「何の話だらう？　俺の事だ、乾度俺の事に違ひない。」などと許り考へて居た。

ホッと安堵すると妙な笑が顏に浮んだ。一足入つて、扉を閉めて、

『今日は餘程道が融けましたねす。』

と、國訛りの、ザラザラした聲で云つて、心持頭を下げると、竹山は、

『早かつたですナ。』

『ハア、今日は何も珍らしい材料がありませんでした。』

と云ひ乍ら、野村は煖爐の側にあつた椅子を引ずつて來て腰を下した。古新聞を取つて性急に机の塵を拂つたが、硯箱の蓋をとると、誰が使つたのか墨が磨れて居る。「誰だらう？」と思ふと、何だか譯もなしに不愉快に感じられた。立つて行つて、片隅の本箱の上に積んだ原稿紙を五六十枚攫んで來て、懷から手帳を出して手早く頁を繰つて見たが、これぞと氣乘のする材料も無かつたので、「不漁だ、不漁だ。」と呟いて机の上に放り出した。頭がまたクサクサし出す樣な氣がする。兩の袂を探つたが煙草が一本も殘つて居ない。野村は顏を曇らせて、磨れて居る墨を更に磨り出した。

編輯局は左程廣くもないが、西と南に二つ宛の窓、新築した許りの社なので、室の中が氣持よく明るい。五尺に七尺程の粗末な椴松の大机が据ゑてある南の窓には、午後一時過の日射が硝子の塵を白く染めて、机の上には東京やら札幌小樽やらの新聞が幾枚も幾枚も擴げたなりに散らかつて居て、丁度野村の前にある赤インキの大きな汚染が、新らしい机だけに、胸が苛々する程血腥い厭な色に見える。主筆は別に一脚の塗机を西の左の窓際に据ゑて居た。

此新聞は、昔貧小な週刊であつた頃から、釧路の町と共に發達して來た長い歷史を持つて居て、今では千九百何號かに達して居る。誰やらが「新聞界の桃源」と評しただけあつて、主筆と上島と野村と、唯三人でやつて居た頃は隨分暢氣なものであつたが、遠からず紙面やら販路や

らを擴張すると云ふので、社屋の新築と共に竹山主任が來た。一週間許り以前に長野と云ふ男が助手といふ名で入社つた。竹山が來ると同時に社内の空氣も紙面の體裁も一新されて、野村も上島も怠ける譯にいかなくなつた。

　野村は四年程以前に竹山を知つて居た。其竹山が來ると聞いた時、アノ男が何故怎麼釧路あたりまで來るのかと驚いた。と同時に、云ふに云はれぬ不安が起つて、口には出さなかつたが、惡い奴が來る事になつたもんだと思つて居た。野村は、假令甚麼に自分に好意を持つてる人にしても、自分の過去を知つた者には顏を見られたくない經驗を持つて居た。けれども、初めて逢つた時は流石に懷しく嬉しく感じた。

　野村の聞知つた所では、此社の社長の代議士が、怎した事情の下にか知れぬけれど、或實業家から金を出さして、去年の秋小樽に新聞を起した。急造の新聞だから種々な者が集まつたので、一月經つか經たぬに社内に紛擾が持上つた。社長は何方かと云へば因循な人であるけれど、資本主から迫られて、社の創業費を六百圓近く着服したと云ふ主筆初め二三の者を追出して了つた。と、怎したのか知らぬが他の者まで動き出して、編輯局に唯一人殘つた。それは竹山であつたさうな。竹山は其時一週間許りも唯一人で新聞を出して見せたのが、社長に重んぜられる原因になつて、二度目の主筆が兎角竹山を邪魔にし出した時は、自分一人の爲に折角の社を騷がすのは本意で無いと云つて、誰が留めても應かずに遂々退社の辭を草した。幸ひ此方の社が擴張の機運に際して居たので、社長は隨分と破格な自由と待遇を與へて竹山を伴れて來たのだと云ふ事であつた。打見には二十七八に見える老けた所があるけれど、實際は漸々二十三だと云ふ事で、髭が一本も無く、烈しい氣象が眼に輝いて、少年らしい活氣の溢れた、何處か恁うナポレオンの肖像畫に肖通つた所のある顏立で、愛想一つ云はぬけれど、口元に絶やさぬ微笑に誰でも人好がする。一段二段の長い記事を字一つ消すでなく、スラスラと淀みなく綺麗な原稿を書くので、文選小僧が先づ一番先に竹山を讃めた。社長が珍重してる、だけに恐ろしく筆の立つ男で、野村もそれを認めぬではないが、年が上な故か怎しても心から竹山に服する氣にはなれぬ。酒を喰つた時などは氣が大きくなつて、思切つて竹山の蔭口を叩く事もある位で、殊にも此男が喋々しく話をする時は、昔の事――強ひて自分で忘れて居る昔の事――を云ひ出されるかと、それは〳〵人知れぬ苦勞をして居た。

　野村は力が拔けた樣に墨を磨つて居たが、眼は凝然と竹山の筆の走るのを見た儘、種々な事が胸の中に急がしく往來して居て、さらでだに不氣味な顏が一層險惡になつて居た。竹山も主筆も恰も知らぬ人同志が同じ汽車に乘り合した樣に、互にそ知らぬ態をして居る。何方も傍に人が居ぬかの樣に、見向くでもなければ一語を交すでもない。渠は此態を見て居て又候不安を感じ出して來た。乾度俺の來るまでは二人で何か――俺の事を話して居たに違ひない。恁うと、今朝俺の出社したのは九時半……否十時頃だつたが、それから三時間餘も恁う默つて居ると云ふ事はない。乾度話して居たのだ。不圖すると俺の來る直き前まで……或は其時既に話が決つて了つて、丁度其處へ俺が入つたのぢやないか知ら。と、上島にも長野にも硯箱があるのに、俺ンのを使つたのは誰であらう。然うだ、此椅子も煖爐の所へ行つて居た。アレは社長の癖だ。社長が來たに違ひない。先刻事務の廣田に聞いて來れば可かつたのにと考へたが、若しかすると、二人で相談して居た所へ社長が來て、三人になつて三人で俺の事を色々惡口し

合つて、……然うだ、此事を云ひ出したのは竹山に違ひない。上島と云ふ奴は黠い男だ。以前は俺と毎晩飲んで歩いた癖に、此頃は馬鹿に竹山の宿へ行く。行つて俺の事を喋つたに違ひない。好し、そんなら俺も彼奴の事を素破拔いてやらう、と氣が立つて來て、卑怯な奴等だ、何も然うこそこそ相談せずと、退社しろなら退社しろと睨り云つたら可いぢやないか、と自暴糞な考へを起して見たが、退社といふ辭が我ながらムカムカしてる胸に冷水を浴せた樣に心に響いた。

飢餓と恐怖と困憊と悔恨と、眞暗な洞穴の中を眞黒な衣を着てゾロゾロと行く乞食の群！

野村は目を瞑つた。

白く波立つ海の中から、檣が二本出て居る樣が見える。去年の秋、渠が初めて此釧路に來たのは、丁度竹の浦丸といふ汽船が、怎した誤謬からか港内に沈沒した時で、二本の檣だけが波の上に現れて居た。風の寒い濱邊を、飢ゑて疲れて、古袷一枚で彷徨き乍ら、其檣を眺むるともなく眺めて「破船」といふ事を考へた。そして渠は、濡れた巖に突伏して聲を出して泣いた事があつた。……野村は一層堅く目を瞑つた。と、又其時の事、子供を伴れた夫婦者の乞食と一緒に、三晩續けて知人岬の或神社に寢た事を思出した。キイと云ふ子供の夜泣の聲。垢だらけの襟を披けて乳をやる母親は、鼻が推潰した樣で、土に染みた樣な異な臭氣を放つて居たが、……噫、淺間しいもんだ、那麼時でも[illegible]を、と思ふと其夫の、見るからに物凄い鬚面が目に浮ぶ。心は直ぐ飛んで、遠い遠い小坂の鑛山へ行つた。物凄い鬚面許りの坑夫に交つて、十日許りも坑道の中で鑛車を推した事があつた。眞黒な穴の口が見える。それは昇降機を仕懸けた竪坑であつた。噫、俺はアノ穴を見る恐怖に耐へきれなくなつて、坑道の入口から少し上の、此と許り草があつて女郎花の咲いた處に半日寢轉んだ。母、生みの母、[illegible]で眼を惡くしてる母が、アノ時甚麼に懷しくなつかしく思はれたらう……母の額に大きな疵があつた。然うだ、父親が酔拂つて、[illegible]を投げた時、母は左の手で……血だらけになつた母の顏が目の前に……。

ハッとして目を開いた野村は、微かな身慄を胸に覺えて、墨磨る手が動かなくなつて居た。

母――と云ふ考へが又浮ぶ。母が親ら書く平假名の、然も、一度二度繰返して推讀しなければ解らぬ手紙！ 此間返事をやつた時は、馬鹿に景氣の可い樣な事を書いた。景氣の可い樣な事を書いてやつて安心させたのに、と思つて四邊を見た。竹山は[illegible]で頰杖を突き乍ら、書きさしの原稿を睨んで居る。不圖したら今日[illegible]切後に宣告するかも知れぬ、と云ふ[illegible]渠の顏に心を[illegible]した。其顏面には[illegible]てピクピク顫へて居た。

内心の[illegible]き不安を表はすかの樣に、ヒクピク顳顬の肉を痙攣けさせて居るのは渠の癖であつた。色のドス黑い、光澤の消えた顏に、何方かと云へば輪郭の正しい、醜くない方であるけれども、硝子玉の樣にキラキラ輝光りのする大きい眼と、キリリと結ばれる事のない脣とが、顏全體の調和を破つて、初めて逢つた時は前科者ぢやないかと思つたと主筆の云つた如く、何樣物凄く不氣味に見える。少し前に屈んだ中背の、歳は二十九で、髯は[illegible]生えないが、六七本許りも眞黒なのが頤に生えて五分位に延びてる時は、其人相を一層險惡にした。

渠が其地位に對する不安を抱き初めたのはつい此頃の事で、以前[illegible]に監視人とかを務めたといふ、主筆と同國生れの東野が、編輯助手として入つた日からであつた。今迄上島と二人で隔日に校正をやつて居た所へ、校正を一人入れるといふ竹山の話は嬉しかつたものの、逢つ

て見ると長野は三十の上を二つ三つ越した、牛の様な身體の、牛の様な顔をした、随分と不恰好で氣の利かない男であつたが、「私は木下さん(主筆)と同國の者で厶いまして」と云ふ挨拶を聞いた時、俺よりも確かな傳手があると思つて、先づ不快を催した。自分が唯十五圓なのに、長野の服装の自分より立派なのは、若しや俺より高く雇つたのぢやないかと云ふ疑ひを惹起したが、それは翌日になつて十三圓だと知れて安堵した。が、三日目から今迄野村の分擔だつた商況の材料取と警察廻りは長野に歩かせる事になつた。竹山は「一日も早く新聞の仕事に慣れる様に」と云つて、自分より二倍も身體の大きい長野を、手酷しく小言を云つては毎日毎日使役ふ。校正係なら校正だけで澤山だと野村は思つた。加之、渠は恁麼釧路の様な狭い所では、外交は上島と自分と二人で十分だと考へて居た。時々何も材料が無かつたと云つて、遠い所は廻らずに來る癖に。

浮世の戰ひに疲れて、一刻と雖ども安心と云ふ氣持を抱いた事の無い野村は、適切長野を入れたのは自分を退社させる準備だと推諒した。と云ふのは、自分が時々善からぬ事をしてるのを、渠自身さへ稀には思返して淺間しいと思つて居たので。

渠は漸々筆を執上げて、其處此處手帳を飜反へして見てから、二三行書き出した。そして又手帳を見て、書いた所を讀返したが、急がしく墨を塗つて、手の中に丸めて机の下に投げた。又書いて又消した。同じ事を三度續けると、何かしら鈍い壓迫が頭腦に起つて來て、四邊が明るいのに自分だけ陰氣な所に居る様な氣がする。これも平日の癖で、頭を右左に少し振つて見たが、重くもなければ痛くもない。二三度やつて見ても矢張同じ事だ。が、今にも頭が堪へ難い程重くなつてズクズク疼き出す様な氣がして、渠は痛くもならぬ中から顔を顰蹙めた。そして、下唇を噛み乍らまた書出した。

「支廳長が居つたかえ、野村君?」

と、突然に主筆の聲が耳に入つた。

「ハア、支廳長ですか?　ハア居まし……一番で行きました。」

『今朝の一番汽車か?』

『ハア、札幌の道廳へ行きましたねす。』と急がしく手帳を見て、『一番で立ちました。』

『札幌は解つてるが、…戸川課長は居るだらう?』

『ハア居ります。』

野村は我乍ら滑稽い程狼狽へたと思ふと、赫と血が上つて顔が熱り出して、澤山の人が自分の後に立つて笑つてる様な氣がするので、自暴に亂暴な字を、五六行息つかずに書いた。

「ぢや君、先刻の話を一應戸川に打合せて來るから。」

と竹山に云つて、主筆は室を出て行つた。「先刻の話」と云ふ語は熱して居る野村の頭にも明瞭と聞えた。支廳の戸川に打合せる話なら俺の事ぢやない。ハテそれでは何の事だらうと頭を擧げたが、何故か心が臆して竹山に聞きもしなかつた。

『君は大變顔色が惡いぢやないか。』と竹山が云つた。

『ハア、怎も頭が痛くツて。』と云つて、野村は筆を擱いて立つ。

「そらア良くない。」

「書いてると頭がグルグルして來ましてねす。」と煖爐の方へ歩き出した。大袈裟に顔を顰蹙めて右の手で後腦を抑へて見せた。

『風邪でも引いたんぢやないですか?』と鷹揚に云ひ乍ら、竹山は煙草に火をつける。

『風邪かも知れませんが、…先刻支廳から出て坂を下りる時も、妙に惡寒がしましてねす。

餘程溫い日ですけれどもねす。』と云つたが、竹山の鼻から出て頭の邊まで下つて、更に頬を撫でて昇つて行く柔かな煙を見ると、モウ耐らなくなつて『何卒一本。』と竹山の煙草を取つた。『咽喉も少し變だどもねす。』

『そらア良くない。大事にし給へな。何なら君、今日の材料は話して貰つて僕が書いても可いです。』

『ハア、些と許りですから。』

込絡かつた足音が聞えて、上島と長野が連立つて入つて來た。上島は平日にない元氣で、

『愈々漁業組合が出來る事になつて、明日有志者の協議會を開くさうですな。』

と云ひ乍ら、直ぐ墨を磨り出した。

『先刻社長が見えて其麼事を云つて居た。二號標題で成るべく景氣をつけて書いて呉れ給へ。尤も、今日は單に報道に止めて、此方の意見は二三日待つて見て下さい。』

長野が牛の様な身體を慇懃に運んで机の前に出て、『アノ商況でムいますな。』と揉手をする。

『ハ、野村君は今日頭痛がするさうだから僕が聞いて書きませう。』

『イヤソノ、今日は何にも材料がありませんので。』

『材料が無いツて、昨日と何も異動がないといふのかね？』

『え、異動がありませんでした。』

『越後米を積んで、雲海丸の入港つたのは、昨日だつたか一昨日だつたか、野村君？』と竹山が云つた。長野が慣れるうち、取つて來た材料を話して野村が商況——と云つても小さい町だから十行二十行位のものだが——を書く事にしてあつたのだ。

『ハア、昨日の朝ですから、原田の店あたりでは輸出の豆粕が大分手打になつたらうと思ひますがねす。』

『つい聞きませんでしたな。』と云つて、長野はい、きまり惡げに先づ野村を見た目を竹山に移した。

『警察の方は？』

『違警罪が唯一つムいました。今書いて差上げます。』と硯箱の蓋をとる。

野村は眉間に深い皺を寄せて、其様美味さうに煙草を吸つて居たが、時々頭を振つて見るけれど、些とも重くもなければ痛くもない。咽喉にも何の變りがなかつた。軈てまた机に就いて、成るべく厭に見える様に額を顰めたり後頭を抑へて見たりし乍ら、手帳を繰り初めたが、不圖髭を捻つて居る戸川課長、[illegible]を思出した。課長は今日俺の顔を見ると笑つて居て、何かの話の序にアノ事——三四日前に其立病院の看護婦に催眠術を施けた事を揶揄つた。課長は無論唯若い看護婦に施けたと云ふだけで揶揄つたので、實際又醫者や藥劑師や他の看護婦の居た前で施けたのだから、何も訝しい事が無い。無いには無いが、若しアノ時アノ暗示を與へたら怎であつたらう、と思ふと、其梅野といふ看護婦がスッカリ眠つて了つて、横に臥れた時、白い職服の下から赤いものが喰み出して、其下から圓く肥つた眞白い腿の出たのが眼に浮んだ。渠は操られる様な氣がして、俯いた儘變な笑を浮べて居た。

上島は燐寸を擦つて煙草を吹かし出した。と、渠はまたも喉から水が出る程喫みたくなつて、『君は何日でも煙草を持つてるな。』と云ひ乍ら一本取つた。何故今日はアノ娘が居なかつたらう、と考へる。それは潮崎町の下にある角の、渠が何日でも寄る煙草屋の事で、モウ大分借が溜つてるから、すぐ顔を紅くする銀杏返しの娘が店に居れば格別、口喧しやの老母が居た日には怎しても貸して呉れぬ。今日何故娘が

居なかつたらう？ 俺が行く時は何日でも俯いて了ふが、恥かしいのだ、乾度恥かしいのだと思ふと、それにしてもと其娘が寄席で頻りに煎餅を喰べ乍ら落語を聞いて居た事を思出す。頭に被さつた鈍い壓迫が何時しか跡なく剝げて了つて、心は上の空、野村は眉間の皺を努めて深く／＼し乍ら、それからそれと町の女の事を胸に數へて居た。

兎角して渠は漸々三十行許り書いた。大儀さうに立上つて、その原稿を主任の前に出す時、我乍ら餘り汚く書いたと思つた。

「目が眩む樣なもんですから滅茶々々で、……」

「否、有難う。」と竹山は何氣なく禮を云つたが、平日の癖で直ぐには原稿に目もくれぬ。渠も亦平日の癖でそれを一寸不快に思つたが、

「あとは別に書く樣な事もありませんが。」と竹山の顏色を見て

「怎も御苦勞。何なら家へ歸つて一つ汗でも取つて見給へ。大事にせんと良くないから。」

「ハア、それぢや今日だけ御免蒙りますからね。」と云つて、出來るだけ元氣の無い樣に皆に挨拶して、編輯局を出た。眼をキラギラ光らして舌を出し乍ら、埃つぽい首卷を卷いて居たが、階段を降りる時は再び漸と顏を蹙めて、些と時計を見上げたなり、事務の人々には言葉もかけず戸外へ出て了つた。と、鈍い歩調で二三十歩、俛首れて歩いて居たが、四角を右に曲つて、振顧つてもモウ社が見えない所に來ると、渠は遽かに顏をあげて、融けかかつたザクザクの雪を蹴散し乍ら、勢ひよく足を急がせて、二町の先に二階の見ゆる其立新聞へ。

催促される心配も、皺だらけな母の顏も、鈍い壓迫と共に消えて了つて、勝誇つた樣な匿い笑が其顏に漲つて居た。

四年以前、野村が初めて竹山を知つたのは、まだ東京に居た時分の事で、其頃渠は駿河臺のトある竹藪の崖に臨んだ、可成な下宿屋の一室に居た。

今でも記憶えて居る人があるか知れぬが、其頃竹山は郷里に居ながら、頻りに種々の東京の雜誌に詩を出して居た、若々しい感情を拘束もなく華やかな語に聯ねた其詩――と云ふ迄もなく、稚氣と驕傲に富んでは居たが、當時の詩壇ではそれでも人の目を引いて、同じ道の人の間には、此年少詩人の前途に大きな星が光つてる樣に思ふ人もあつた。竹山自身も亦、抑へきれぬ若い憧憬に胸を唆かされて、十九の秋に東京へ出た。渠が初めて選んだ宿は、かの竹藪の崖に臨んだ駿河臺の下宿であつた。

某新聞の文界片信は、詩人竹山靜雨が上京して駿河臺に居をトしたが近々其第一詩集を發刊するさうだと報じた。

此新聞が緣になつて、野村は其同縣出の竹山が自分と同じ宿に居る事を知つた。で、渠は早速名刺を女中に持たしてやつて、竹山に交際を求めた。最初の會見は、緣側近く四つ五つ實を持つた橙の樹のある、竹山の室で遂げられた。

野村は或學校で支那語を修めたと云ふ事であつた。其頃も神田のさる私塾で支那語の教師をして居て、よく、皺くちやになつたフロックコートを、朝から晩まで着て居た。外出る時は乾度中山高を冠つて、象牙の犬の頭のついた洋杖を、大業に振つて歩くのが癖。

其頃、一體が不氣味な顏であるけれども、まだ前科者に見せる程でもなく、ギラギラする眼にも若い光が殘つて居て、言語も今の樣にぞんざいでなく、國訛りの「ねす」を語尾につける事も無かつた。

半月許りして其下宿屋は潰れた。公然の禁

業は罷めて、牛込は神樂坂裏の、或る閑靜な所に移つて素人下宿をやるといふ事になつて、五十人近い止宿人の中、願はれて、又願つて、一緒に移つたのが八人あつた。野村も竹山もその中に居た。

野村が其頃頻りに催眠術に熱中して居て、何とか云ふ有名な術者に二ケ月もついて習つたとさへ云つて居た。竹山も時々其不思議な實驗を見せられた。或時は其爲に野村に對して一種の恐怖を抱いた事もあつた。

渠は又、或教會に籍を置く基督信者で、新教を奉じて居ながらも、時々は舊教の方が詩的で可いと云つて居た。竹山は、無論渠を眞摯な信仰のある人とも思はなかつたが、それでも机の上には常に讃美歌の本が載つて居て、歌ふのは一度も聞かなかつたが、皺くちやのフロックコートには、小形の聖書が何日でも衣嚢に入れてあつた。同じ教會の信者だといふハイカラな女學生が四五人、時々野村を訪ねて來た。其中の一人、脊の低い、鼻まで覆被さつた庇髪をつき出したのが、或時朝早く野村の室から出て便所へ行つた。「信者たる所以は彼處だ！」と竹山は考へた事があつた。

渠は又、時々短かい七五調の詩を作つて竹山に見せた。讃美歌まがひの、些とも新らしい所のないものであつたが、それでも時として、一句一句、針の樣に胸を刺す所があつた。韻文には適からぬから小說を書いて見ようと思ふと云ふのが渠の癖で、或時其書かうとして居る小說の結構を竹山に話した事があつた。筋も梗概も忘れて了つたが、肉と靈と、實際と理想と、其四辻に立つて居る男だから、主人公の名は辻某とすると云つた事だけ竹山は記憶して居た。無論此小說は、渠の頭腦の中で書かれて、頭腦の中で出版されて、頭腦の中で非常な好評を博して、遂々頭腦の中で忘られたのだ。一體が、机の前に坐る事のない男であつた。

小說に書かうとした許りでなく、其詩に好んで題材とし、又其眞摯なる時によく話題に選ぶのは、常に「靈と肉の爭鬪」と云ふ事であつた。肉と靈！　渠は何日でも次の樣な事を云つて居た。曰く、「最初の二人が罪を得て樂園を追放れた爲に、人間が苦痛の鄕、涙の谷に住むと云ふのは可いが、そんなら何故神は、人間をして更に幾多の罪惡を犯さしめる機會、乃ち肉と云ふものを人間に與へたのだらう？」又或時渠は、不意に竹山の室の障子を開けて、恐ろしいものに襲はれた樣に、凄じい位眼を光らして、頰一體を波立つ程荒々しくさせ乍ら、「肉の叫び！　肉の叫び！」と云つて入つて來た事があつた。其頃の渠の顏は、今の樣に四六時中癇癪を起してる事は稀であつた。

渠は大抵の時は煙草代にも窮してる程であつた。が、時として非常な贅澤をした。日曜に教會へ行くと云つて出て行つて、夜になるとゲデンゲンに醉拂つて歸る事もあつた。

竹山は毎日の樣に野村と顏を合せて居たに不拘、怎したものか餘り親しくしはなかつた。却つて、駿河臺では野村と同じ室に居て、牛込へは時々遊びに來た渠の從弟といふ青年に心を許して居たが、其青年は、頗る率直な、眞摯な、冒險心に富んで、何日でもニコニコ笑つて居る男であつたけれど、談一度野村の事に移ると、急に顏を曇らせて「從兄には弱つて了ひます。」と云つて居た。

渠は又時々、鄕里にある自分の財産を親類が怎とかしたと云つて、其訴訟の手續を同宿の法學生に訊いて居た事があつた。それから、或時宿の女中の十二位なのに催眠術を施けて、自分の室を閉鎖めて、半時間許りも何か小聲で頻りに訊ねて居た事があつた。隣室の人の洩れ聞いたんでは、何でも其財産問題に關した事で

あつたさうな。渠は平生、催眠術によつて過去の事は勿論、未來の事も豫言させる事が出來ると云つて居た。

竹山の親しく見た野村良吉は、大略前述の樣なものであつたが、渠は同宿の人の間に頗る不信用であつた。野村は女學生を蕩して弄んで、おまけに金を捲上げて居るとか、牧師の細君と怪しい關係を結んでるさうだとか、好からぬ噂のみ多い中に、お定と云つて豐橋在から來た、些と美しい女中が時々渠の室に泊るといふ事と、宿の主婦――三十二三で、細面の、眼の表情の滿干の烈しい、甚麼急がしい日でも髮をテカテカさして居る主婦と、餘程前から通じて居るといふ事は、人々の間に殆んど確信されて居た。それから、其お定といふのが、或朝竹山の室の掃除に來て居て、二つ三つ戲談を云つてから、恁麼話をした事があつた。

『野村さんて、餘程面白い方ねえ。』

『怎して？』

『怎してツて、ホホ、、、。』

『可笑い事があるんか？』

『あのね、……駿河臺に居る頃は隨分だつたわ。』

『何が？』

『何がツて、時々淫賣婦なんか伴れ込んで泊めたのよ。』

『其麼事をしたのか、野村君は？』

『默つてらつしやいよ、貴方。』と云つたが、『だけど、云つちや惡いわね。』

『マア云つて見るさ。口出しをして止すツて事があるもんか。』

『何日だつたか、あの方が九時頃に醉拂つて歸つたのよ、お竹さんて人伴れて。え、其人は其時初めてよ。それも可いけど、突然、一緒に居た政男さん（從弟）に怒鳴りつけるんですもの、政男さんだつて怒りますわねえ。丁度空いた室があつたから、其晩だけ政男さん其方へお寢みになつたんですけど、朝になつたら面白いのよ。』

『馬鹿な。怎したい？』

『野村さんがお金を出したら、要らないつて云ふんですつて、其お竹さんと云ふ人が。そしたらね、それぢや再來いツて其儘歸したんですとさ。』

『可笑くもないぢやないか。』

『マお聞きなさいよ。そしたら其晩再來ましたの、野村さんは洋服なんか着込んでらつしやるから、見込をつけたらしいのよ。私其時取次に出たから明細見てやつたんですが、これ〳〵と頭へ手をやつて、よりもモット前髮を大きく取つた銀杏返しに結つて、衣服は洗洒しだつたけど、可愛い顏してたのよ。尤も少し青かつたけど。』

『酷い奴だ。また泊めたのか？』

『默つてらつしやいよ、貴方。そしたら野村さんが、鎌倉へ行つたから二三日歸らないツて云へと云ふんでせう。私可笑くなつたから默つて上げてやらうかと思つたんですけどね、吩咐つた通りに云ふと、穩しく歸つたのよ。それから主婦さんと私と二人で散々揶揄つてやつたら、マア野村さん酷い事云つたの。』と竹山の顏を見たが、『あの女は息が臭いから駄目なんですツて。』と云ふなり、疊に突伏して轉げ歩いて笑つた。

牛込に移つてから二月許り後の事、丁度師走上旬であつたが、野村は小石川の何とか云ふ町の坂の下の家とかを、月十五圓の家賃で借りて、「東京心理療院」と云ふ看板を出した。そして催眠術療法の效能を述立てた印刷物を二千枚とか市中に撒いたさうな。其後二度許り竹山を訪ねて來たが、一度はモウ節季近い凩の吹き荒れて、灰色の雲が低く軒を掠めて飛ぶ不快

な日で、野村は「患者が一人も來ない。」と云つて悄氣返つて居た。其日は服裝も見すぼらしかつたし、云ふ事も「清い」とか「美しい」とか云ふ詞澤山の、神經質な厭世詩人みたいな事許りであつたが、珍らしくも小半日落着いて話した末、一緒に夕飯を食つて、歸りに些と許りの借りた金の申譯をして行つた。一番最後に來たのは、年が新らしくなつた四日目か五日目の事で、呂律の廻らぬ程醉つて居たが、本郷に居ると許りで、詳しく住所を云はなかつた。歸りは雨が降り出したので竹山の傘を借りて行つた限、それなりに二人は四年の間殆んど思出す事もなかつたのだ。が、唯一度、それから二月か三月以後の事だが、或日巡査が來て、野村の事を詳しく調べて行つたと、下宿の主婦が話して居た事があつた。

　其四年間の渠の閲歴は知る由もない。渠自身も常に其麼話をする事を避けて居たが、それでもチョイチョイ口に出るもので、四年前の渠が知つてなかつた筈の土地の事が、何かの機會に話頭に上る。靜岡にも居た事があるらしく、雨の絲の木隱に白い日に金閣寺を見たといふから、京都にも行つたのであらう。石井孤兒院長に逢つた事があると云つて非常に敬服して居たから、岡山へも行つたらしい。取わけ竹山に想像を費さしたのは、横濱の棧橋に毎日行つて居た事があるといふ事と、其處の海員周旋屋の内幕に通曉して居た事であつた。鹿角郡の鑛山は尾去澤も小坂もよく知つて居た。釧路へは船で來たんださうで、札幌小樽の事は知らなかつたが、此處で一月半許りも、眞砂町の或蕎麥屋の出前持をして居たと云ふ事は、町で大抵の人が知つて居た。無論これは方々に職業を求め兼ねた末の事であるが、或日曜日の事、不圖思付いて木下主筆を其自宅に訪問した。初めは人相の惡い奴だと思つたが、黒木綿の大分汚なくなつた袴を穿いて居たのが、蕎麥屋の出前持をする男には珍らしいと云ふので、偏狹者の主筆が買つてやつたのだと云ふ。

　主筆は時々、「野村君は支那語を知つてる癖に何故北海道あたりへ來たんだ?」と云ふが、其度渠は「支那人は臭くて可けません。」と云つた樣な答をして居た。

　北國の二月は暮れるに早い。四時半にはモウ共立病院の室々に洋燈の光が華やぎ出して、上履の辷る程拭込んだ廊下には食事の報知の拍子木が輕い反響を起して響き渡つた。

　と、右側の或室から、さらでだに前屈みの身體を一層屈まして、垢着いた首卷に頤を埋めた野村が飛び出して來た。廣い玄關には洋燈の光のみ眩しく照つて、人影も無い。渠は自暴棄に足を下駄に突懸けたが、下駄は翻筋斗を打つて三尺許り彼方に轉んだ。

　以前の室から、また二人廊下に現れた。洋服を着た男は悠然と彼方へ歩いて行つたが、モ一人は白い兎の跳る樣に驅けて來ながら、『野村さん〳〵、先刻お約束したの忘れないでよ。』と甲高い聲で云つて玄關まで來たが、渠の顏を仰ぐ樣にして笑ひ乍ら、『今度欺したら承知しませんよ、眞實ですよ、ねえ野村さん。』と念を推した。これは此病院で評判の蓮野といふ看護婦であつた。

　渠は唯唸る樣な聲を出しただけで、チラと女の顏を見たつきり、凄じい勢ひで戸外へ出て了つた。落着かない眼が一層恐ろしくギラギラして、赤黒く脂ぎつた顏が例の烈しい痙攣を起して居る。少なからず醉つて居るので、吐く呼氣は酒臭い。

　戸外はモウ人顏も定かならぬ程暗くなつて居た。ザクザクと融けた雪が上面だけ凍りかかつ

て、夥しく歩き悪い街路を、野村は寒さも知らぬ如く、自暴に昂奮つた調子で歩き出した。「何を約束したつたら？」と考へる。何かしら持つて來て貸すと云つた！　本？　否俺は本など一册も持つて居ない。だが、確かに本の事だつた筈だ。何の本？　何の本だつて俺は持つて居ない。馬鹿だ、マア怎でも可いさと口に出して呟いたが、何故那麼事を云つたらうと再考へる。

渠は二時間の間此病院で過した。煙草を喫みたくなつた時、酒を飲みたくなつた時、若い女の華やいだ聲を聞きたくなつた時、渠は何日でも此病院へ行く。調劑室にも、醫員の室にも、煙草が常に卓子の上に備へてある。渠が、横山――左の蟀谷の上に二錢銅貨位な禿があつて、好んで新體詩の話などをする、二十五六のハイカラな調劑助手に强請つて、赤酒の一杯二杯を美味さうに飲んで居ると、屹度誰か醫者が來て、私室へ伴れて行つて酒を出す。七人の看護婦の中、青ざめた看護婦長一人を除いては、皆、美しくないまでも若かつた。若くないまでも、少くとも若々しい態度をして居た。人間の手や足を切斷したり、腸、腹を切開したりするのを、平氣で手傳つて二の腕まで血だらけにして居る輩であるから、何れも皆男といふ者を怖れて居ない。怖れて居ない許りか、好んで敗けず劣らず無駄口を叩く。中にも梅野といふのは、一番美しくて、一番お轉婆で、そして一番ハイカラで、實際は二十二だといふけれど打見には十八位にしか見えなかつた。野村は一日として此三つの慾望に餓ゑて居ない日は無いので、一日として此病院を訪れぬ日はなかつた。

渠が先づ入るのは、玄關の直ぐ右の明るい調劑室であつた。此室に居る時は、平生と打つて變つて渠は常に元氣づいて居る。新聞の材料は總て自分が供給する樣な話をする。如何なる事件にしろ、記事になるとならぬは唯自分一箇の手加減である樣な話をする。同僚の噂でも出ると、フフンと云つた調子で取合はぬ。渠は今日また頻りに其麼話をして居たが、不圖小宮洋服店の事を思出した。が、渠は怎したものか、それを胸の中で壓潰して了つて考へ込む樣にした。横山助手は、まだ半分しか出來ぬと云ふ『野菫』と題した新體詩を出して見せた。渠はズッとそれに目を通して、唯「成程」と云つたが、今自分が或非常な長篇の詩を書き初めて居ると云ふ事を話し出した。そして、それが少くとも六ケ月位かかる見込だが、首尾克く脱稿したら是非東京へ行つて出版する。僕の運命の試金石はそれです、と熱心に語つた。梅野は無論其傍に居た。彼女は調劑の方に廻されて居るので。

それから渠は小野山といふ醫者の室に伴れて行かれて、正宗とビールを出された。醫者は日本酒を飲まぬといふので、正宗の一本は殆んど野村一人で空にした。梅野とモ一人の看護婦が來て、林檎を剝いたり、鯣を燒いたりして呉れたが、小野山が院長から呼びに來て出てゆくと、モ一人の方の看護婦も立つた。渠は遽かに膝を立直して腕組をしたが、懵乎とした頭腦を何かしら頻りに突く。暫し無言で居た梅野が、「お酌しませうか。」と云つて白い手を動かした時、野村の頭腦に火の樣な風が起つた。「オヤ、モウ空になつててよ。」と女は瓶を倒した。野村は醉つて居たのである。

少し話したい事があるから、と渠が云つた時、女は「さうですか。」と平氣な態度で立つた。二人は人の居ない診察所に入つた。

煖爐は冷くなつて居た。うそ寒い冬の黄昏が白い窓掛の外に迫つて居て、モウ薄暗くなりかけた室の中に、種々な器械の金具が佗し氣に光つて居る。人氣なき廣間に籠る藥の香に、梅

野は先づ身慄ひを感じた。
「梅野さん、僕を、酔つてると思ひますか、酔はないで居ると思ひますか?」と云つて、野村は矢庭に女の腕を握つた。其聲は、恰も地震の間際に聞えるゴウと云ふ地鳴に似て、低い、澤のない聲ではあつたが、恐ろしい力が籠つて居た。女は眼を圓くして渠を仰いだが、何とも云はぬ。
「僕の胸の中を察して下さい。」と、さも情に迫つた樣な聲を出して、堅く握つた女の腕を力委せに引寄せたと思ふと、酒臭い息が女の額に亂れて、一方の手が肩に掛る。梅野は敏捷く其手を擦り拔けて、卓子の彼方へ逃げた。
二人は小さい卓子を相隔てて向ひ合つた。渠は、右から、左から、再び女を捉へようと焦慮るけれど、女は其度男と反對の方へ動く。妙に落着拂つた其顏が、着て居る職服と見分がつかぬ程眞白に見えて、明確ならぬ顏立の中に、瞬きもせぬ一雙の眼だけが遠い空の星の樣。其顏と柔かな肩の辺りが郭然と白い輪郭を作つて、仄暗い藥の香の中に浮んで、右に左に動くのは、女でもない、人でもない、影でもなければ、幻でもない。若樹の櫻が時ならぬ雪の衣を着て、雪の重みに堪へかねて、ユラリユラリと搖れるのだ、ユラリユラリと動くのだ、が、野村の眼からは、唯モウ抱けば温かな柔かな、梅野でも誰でもない、推せば火が出る樣な女の肉體だけ見える。
何分經つたか記憶が無い。その間に渠の頭腦は、表面だけ益々苛立つて來て、底の底の方が段々空虛になつて來る樣な氣分になつた。それでも一生懸命女を捉へようと悶躁いて居たが、身體はブルブル顫へて居て、左の手をかけた卓子の上の、硝子瓶が二つ三つ、相觸れてカチカチと音を立てて居た。
ガタリと扉が開いて、小野山が顏を出した。
「此處でしたか、何處へ行つたと思つたら。」と、極りが惡さうにした顏に一寸眼を光らして、ヅカヅカ入つて來た。
「怎したんです?」と梅野へ。
「アッハハハ。」と、女は底拔な高い聲を出して笑つたが、モウ安心と云ふ樣に溜息を一つ吐いて「野村さんが面白い事仰しやるもんですからね、私逃げて來たの。」
「何です、野村さん?」と醫者は妙に笑つて野村を見た。野村は氣が拔けた樣に、石像の如く立つて、目には女を見た儘、身動もせぬ。
「また催眠術をかけて呉れるからッて仰しやるの。」と女は引取つた。「そしたら私の行きたい所は何處へでも伴れてつて見せるし、逢ひたい人には誰にでも逢はせて下さるんですッて。だけど私、還日でせう、皆に笑はれて、懲らしてるんですもの。ぢや施けて下さいつて、欺して逃げて來たもんだから、野村さんに追驅けられたのよ。」
「然うでしたか。」
野村は、發作的に右の手を一寸前に出したが、
「アハハハ。ぢや此次にしませう、此次に。次には乾度ですよ、乾度施けますよ。」と變に剛ばつた聲で云つて、物淒く「アッハハハ。」と笑つたが、何時持つて來たとも知れぬ卓子の上の首卷と帽子を取つて、首に捲くが早いか飛び出して來たのであつた。
脈といふ脈を、アルコールが驅け廻つて、血の循環が沸り立つ程早い。さらでだに苛立勝の心が、タスカローラの底の泥まで濁らせる樣な大時化を喰つて、唯モウ無暗に神經が昂ぶつて居る。野村は頤を深く首卷に埋めて、何處といふ目的もなく、街から街へ廻り歩いて居た。

女は渠の意に随はなかつた！　然し乍ら渠は、此侮辱を左程に憤つては居なんだ。醫者の小野山！　彼奴が悪い、失敬だ、人を馬鹿にしてる。何故アノ時顏を出しやがつたか。馬鹿な。俺に酒を飲ました。酒を飲ますのが何だ。失敬だ、不埒だ。用も無いのに俺を探す。默つて自分の室に居れば可いぢやないか。默つて看護婦長と乳繰合つて居れば可いぢやないか。看護婦？　イヤ不圖したら、アノ、モ一人の奴が小野山に知らしたのぢやないか、と疑つたが、看護婦は矢張女で、小野山は男であつた。渠は如何なる時でも女を自分の味方と思つてる。如何なる女でも、時と處を得さへすれば、自分に抱かれる事を拒まぬものと思つて居る。且夫れ、よしや知らしたのは看護婦であるにしても、アノ時アノ室に突然入つて來て、自分の計畫を全然打壞したのは醫者の小野山に違ひない。小野山が不埒だ、小野山が失敬だ。彼奴は俺を馬鹿にしてる。……

知らぬ間に邂逅した山羊の様な眼をして、女は卓子の彼方に立つた！　然しアノ眼に、俺を厭がる色が些とも見えなかつた。然うだ、吃驚したのだ。唯吃驚したのだ。尤も俺も悪かつた。モ少し何とか優しい事を云つてからでなくちやならん筈だ。餘り性急にやつたから悪い。それに今夜は俺が醉つて居た。醉つた上の悪戯と許り思つたのかも知れぬ。何にしても此次だ、今夜は成功しかねたが此次、此次、……

だが、モウ五分間アノ儘で居たら？　然う然う、俺が出て來る時何とか云つた。ハテ何だつたらう？　唖「約束を忘れるな。」か！「約束」は適切だ。女といふものは一體、男に憎まれる事が嫌ひなものだ。況んや自分の嫌つても居ない男にをやだ。殊に俺は新聞記者だ。新聞記者に憎まれたら最後ぢやないか。幸ひに竹山の奴まだ土地の事情に頭暗だ。俺が云ひさへすれや何でも書く。彼奴に書かしたら又、素的に捏ね廻して書くからエライ事になる。イヤ待て、待て、若しも竹山がアノ病院に出入する様になるとしたら、然うだ、矢張一番先に梅野に眼をつけるに違ひない。竹山の下宿は病院の直ぐ前だ。待て〳〵、此次は明日の晩にしよう。明日の晩にしよう。善は急げだ。

若し小野山さへ來なかつたら、と考へが再同じ所に還る　アノ卓子が無かつたら怎だつたらう？　否、アノ卓子を俺が別の場所へ取除けちやつたら怎だつたらう？　女は二三歩後方にたじろぐ。そして、輕く尻餅を突いて、そして、そして、「許して下さい。」と囁いて、暗の中から眞白な手を延べる。……噫、彼奴、彼奴、小野山の奴、アノ畜生が來た許りに……。

渠は恁麼事を止度もなく滅茶苦茶に考へ乍ら、目的もなく唯町中を彷徨き廻つて居た。何處から怎歩いたか自身にも解らぬ。洲崎町の角の煙草屋の前には二度出た。二度共硝子戸越に、中を覗いて見たが、二度共例の恥かしがる娘が店に坐つてなかつた。暗い街から明るい街、明るい街から暗い街、唯モウ無暗に驅けずり廻つて、同じ坂を何度上つたか知れぬ。同じ角を何度曲つたか知れぬ。

が、渠は矢張明るい街よりも、暗い街の方を多く選んで歩いて居た。そして、明るい街を歩く時は、頭髗が紛糾かつて四邊を甚麼人が行かうと氣にも止めなかつたに不拘、時として右側に逸れ、時として左側に寄つて歩いて居た。一町が間に一軒か二軒、煙草屋、酒類屋、罐詰屋、さては紙屋、呉服屋、蕎麦屋、菓子屋に至る迄、渠が其馬鹿に立派な名刺を利用して借金を拵へて置かぬ家は無い。必要があればドンドン借りる。借りるけれども初めから返す豫算があつて借りるのでないから、流石に渠は其家の人に見られるのを厭であつた。今夜に限らず、借金の

ある店の前を通る時は、成るべく反對の側の軒下を歩く。

幸ひ、誰にも見付かつて催促を受ける樣な事はなかつた。が唯一人、浦見町の暗闇を歩いてる時に、

『オヤ野村さんぢやなくつて？　マア何方へ行つしやるの？』と女に呼掛けられた。

渠は唸る樣な聲を出して、ズキリと立止つて、胡散臭く對手を見たが、それは渠がよく遊びに行く郵便局の小役人の若い細君であつた。

『貴女でしたか。』

と云つて其儘行過ぎようとしたが、女がまだ歩き出さずに見送つてる樣だつたので、引返して行つて、鼻と鼻と擦合ひさうに近く立つた。

『貴女お一人で何方へ？』

『姉の所へ行つて來ましたの。マア貴方は醉つていらつしやるわね。』

『醉つて？　然うです、然うです、少し飮つて來ました。だが女一人で此路は危險ですぜ。』

『慣れてますもの。』

『慣れて居ても危險は矢張危險ぢやないですか。危險！　若しかすると悠うしてる所へ石が飛んで來るかも知れません、石が。』と四邊を見廻したが、一町程先方から提灯が一つ來るので、渠は一二歩後退つた。『僕だつて一人歩いてると、チト危險な事があります。』

『マア。ですけど今夜は、宅が風邪の氣味で寢んでるもんですから、厭だつたけど一人行つて來ましたの。』

『然うですか。』と云つたが、フン、宅とは何だい？　俺の前で嘵ぶらなくたつて、貴樣みたいな者に手をつけるもんか。と云ふ氣がして、ツイと女を離れたなり、スタスタ驅け出した。醒さい笑に眼は暗ながらキラキラ光つて居た。

恁麼風に、渠は一時間半か二時間の間、盲目滅法驅けずり廻つて居たが、其間に醉が全然醒めて了つて、緩んだと云つても零度近い夜風の寒さが、犇々と身に沁みる。頭を埋めた首卷は、夜目にも白い呼氣を吸つて、雪の降つた樣に凍つて居た。雲一つない鋼鐵色の空には、槍の穗よりも鋭い星が無數に燦いて、降つて來る光が、氷り果てた雪路の處々を、鏡の缺片を散らかした樣に照して居た。

三度目か四度目に支那坂をトりる時、渠は辷るまいと大事を取つて運んで居た足を不圖留めて、寥々とした內港の夜色を見渡した。冷い風が喉から胸に吹き込んで、紛糾した頭腦の熱さまでスウと消える樣な心地がする。星明りに淸りと浮んだ阿寒山の雪が、[illegible]の空を北に限つて、川向ふの一區域に燈光を群がらせた停車場から、鋭い汽笛が反響も返さず暗を劈いた。港の中には汽船が二艘、四つ五つの火影がキラリキラリと水に散る。何處ともない波の音が、絕間もない單調の波動を傳へて、斷きの鈍り出した渠の頭に聞えて來た。

と、渠は烈しく身顫ひをして、再しても身を屈ませ乍ら、大事々々に足を一つ出したが、遽かに腹が減つて來て、足の力もたどたどしい。喉からは變な水が涌いて來る。二時間も前から鳩尾の所に重ねて、懷に入れておいた手で、寢衣の上からズウと下腹まで摩つて見たが、米一粒入つて居ぬ程凹んで居る。渠はモウ一刻も耐らぬ程食慾を催して來た。それも其筈、今朝九時頃に朝飯を食つてから、夕方に小野田の室で酒を飮んで鯣の燒つたのを舐つた限なのだ。

淺間しい事ではあるが、然しこれは渠にとつて今日に限つた事でなかつた。渠は米町裏のトある寺の前の素人下宿に宿つて居るけれど、モウ二月越下宿料を一文も入れてないので、五分と顏を見てさへ居れば、直ぐそれを云ひ出す宿の主婦の面が厭で、起きて朝飯を食ふと飛び出

した儘、晝飯は無論食はず、社から退けても宿へ歸らずに、夕飯にあり付きさうな家を訪ね廻る。でなければ、例の新聞記者と肩書を入れた名刺を振廻して、拒られるまでは蕎麥屋牛肉屋の借食をする。それも近頃では殆んど八方塞がりになつたので、少しの機會も逸さずに金を得る事許り考へて居るが、若し怎しても夕飯に有付けぬとなると、渠は何處かの家に坐り込んで、宿の主婦の寢て了ふ十時十一時まで、用もない喫茶談を人の迷惑とも思はぬ。十五圓の俸給は何處に怎使つて了ふのか、時として二圓五十錢といふ疊付の下駄を穿いたり、馬鹿に派手な羽織の紐を買つたりするのは人の目にも見えるけれど、殘餘が怎なるかは、恐らく渠自身でも知つて居まい。

饑ゑた時程人の智くなる時はない。渠は力の拔けた足を急がせて、支廳坂を下りきつたが、左に曲ると南側の軒燈明るい眞砂町の通衢。二町許りで、ト或る角に立つた新築の旅館の前まで來ると、渠は遙かに足を緩めて、十五六間が程を二三度行きつ戻りつして居たが、先方から來た外套の頭巾目深の男を遣過すと、不圖後前を見廻して、ツイと許り其旅館の隣家の軒下に進んだ。

硝子戸が六枚、其内側に吊した白木綿の垂帛に洋燈の光が映えて、廂の上に大きなペンキ塗の看板には、「小宮洋服店」と書いてあつた。

渠は突然其硝子戸を開けて、腰を屈めて白木綿を潛つたが、左の肩を上げた其影法師が、二分間許りも明瞭と垂帛に映つて居た。

此家は、三日程前に、職人の一人が病死して葬式を出した家であつた。

三十分許り經つと、同じ影法師が再もや白木綿に映つて、「態々お出下すつたのに何もお構ひ申しませんで。」といふ女の聲と共に、野村は戸外へ出て來た。

十間も行くと、旅館の角に立止つて後を振顧つたが、誰も出て見送つてる者がない。と、渠は徐々歩き出しながら、袂を探つて何やら小さい紙包を取出して、旅館の窓から洩れる火光に披いて見たが、

『何だ、唯一圓五十錢か！』

と口に出して呟いた。下宿料だけでも二月分で二十一圓！　少くとも五圓は出すだらうと思つたのに、と聞えぬ樣にブツブツ云つて、チョッと舌打をしたが、氣が付いた樣に急がしく四邊を見廻した。それでも渠は尚惜しさうに五十錢銀貨三枚を探つて見て、包紙は一應反覆して何か書いてあるかと調べた限、皺くちやにして捨てて了つたが、又袂を探して、ヘナヘナになつた赤いレース絲で編んだ空財布を出して、それに銀貨を入れて、再び袂に納つた。

さてこれから怎したもんだらう？　と考へたが、二三軒向うに煙草屋があるのに目を付けて、不取敢行つて「敷島」と「朝日」を一つ宛買つて、一本點けて出た。モ少し行くと右側の狹い小路の奧に蕎麥屋があるので、一旦其方へ足を向けたが、「イヤ、先づ竹山へ行つて話して置かう。」と考へ付いて、引返して旅館の角を曲つたが、一町半許りで四角になつて居て、左の角が傑の共立病院、それについて曲ると、病院の横と向合つて竹山の下宿がある。

竹山の室は街路に臨んだ二階の八疊間で、自費で据付けたと云ふ暖爐が盛んに燃えて居た。身の廻りには種々の雜誌やら、夕方に着く五日前の東京新聞やら手紙やらが散らかつて居て、竹山は讀みさしの厚い本に何かしら細かく赤インキで註を入れて居たが、渠は入ると直ぐ、ホーツと額を打つ暖氣に又候思出した樣に空腹を感じた。來客の後と見えて、支那燒の大きな

菓子鉢に、マシマローと何やらが堆かく盛つて、煙草盆の側にあるのが目に付く。明るい洋燈の光と烈しい氣象の渾く竹山の眼とが、何といふ事もなしに渠の心を狼狽させた。

「頭痛が癒りましたか？」と竹山に云はれた時、その事はモウ全然忘れて居たので、少なからず周章したが、それでも流石、

「ハア、頭痛ですか？　イヤ今日は怎も失禮しました。あれから向うの共立病院へ來て一寸と診て貰ひましたがねす。ナニ何でもない、酒でも飲めば癒るさッて云ふもんですから、宿へ歸つて今迄寢て來ました。主婦の奴が玉子酒を拵へてくれたもんですから、それ飲んで寢たら少し汗が出ましたねす。まだ喉の方が些と痛みますどもねす。」と云つて、「明日」を取出した。「少し聞込んだ事があつたんで、今廻つて探つて見ましたが、ナーニ嘘でしたねす。」

「然うかえ。でもマア悠乎寢んでれば可かつたのに、御苦勞でしたな。」

「小宮と云ふ寫眞屋がありますねす。」と云つて、野村は鋭どい眼でチラリと竹山の顏を見たが、「彼家で去年の暮に東京から呼んだ職人が、肺病に罹つてつい此間死にましたがねす。それが矢張、小宮の嬶が、病氣してて稼がないので、ウント虐待したつて噂があつたんですから、行つてみましたがねす。」

「成程。」と云つたが、竹山は平日の樣に念を入れて聞く風でもなかつた。

「ナーニ、丁度アノ隣の理髮店の嬶が、小宮の嬶と仲が惡いので、其麼事を云ひ觸らしたに過ぎなかつたですよ。」と云つて、軽く「ハッハハ」と笑つたが、其實渠は其噂を材料に、若しや小宮の家は一寸有福でもあり、[illegible]五圓には仕ようと思つて、昨日も一度押かけに行つたが、亭主は留守といふので歸り、先日再行つて、矢張亭主は居ないと云つたが、嬶の奴頻りに其を辯解してから、何れ又夫がお目にかかつて詳しく申上げるでせうけれどもと云つて、一圓五十錢の紙包を出したのだ。

これと云ふ話も出なかつたが、渠は頻りに「ねす」を振廻はして居た。一體渠は同じ岩手縣でも南の方の一關近い生れで、竹山は盛岡よりも北の方に育つたから、南部藩と伊達藩の區別が言葉の調子にも明白で、少しも似通つた所がないけれども、同縣人といふ感じで渠をしてよく國訛りを出させる。それに又渠は、其國訛りを出すと妙に言葉が滑し、聞える樣な氣がするので、目上の者の前へ出ると殊更「ねす」を澤山使ふ癖があつた。

程なくして渠は辭して立つたが、竹山は別に見送りに立つでもなかつた。で、自分一人室の中央に立上ると、妙に頭から足まで竹山の鋭い眼に見られる樣な心地がして、疊觸りの惡い自分の足袋の、汚なくなつて穴の明いてるのが心恥かしく思はれた。

戸外へ出ると、一寸と明暗の前で足を緩めたが、眞砂町へ來ると急に、早速質らしい足袋を買つて、狭い小路の奥の[illegible]屋へ上つた。

二階の四疊半許りの清潔ない室、座蒲團を持つて入つて來たのが、女中でなくて、印半纏を着た若い男だつたので、渠は聞えぬ程に舌打をしたが、「天麩羅二つ。」と吩附けてやつて、ドシリと胡坐をかくと、不取敢急がしく足袋を穿き代へて、古いのを床の間の隅ッこの、燈光の屆かぬ暗い所へ投出した。「敷島」を出して成るべく悠然と喫ひ出したが、一分經つても、二分過ぎても、まだお誂へが來ない。と、渠は立つて行つて其古足袋を、窓の下の隅に、小さな鼠穴が明いてる所へヘシ込んで了つた。

間もなく下では何か物に驚いた樣子がして、續いて笑聲が起つたが、渠は「敷島」を美味さうに吹かしながら、呼吸を深くして腹を凹ました

り、出したり、今日位腹を減らした事がないなどと考へて居た。
所へ階段を上る足音がしたので、來たナと思つたから、腹の運動を止めて何氣ない顏をして居ると、以前の若い男が小腰を屈めて障子を明けた。
『ヘイ、これは旦那のお足袋ぢやムいませんか？　鼠が落こちたかと思つたら、足袋が降つて來たと云ふので、臺所ぢや貴方、吃驚いたしましたんで。ヘイ、全く、怎も、ヘイ。』と、妙な薄笑をし乍ら、今し方壁の鼠穴へヘシ込んだ許りの濡れた古足袋を、二つ揃へて敷居際に置いたなり、障子を閉めて狐鼠々々下りて行く。
　呆然として口を開いた儘聞いて居た渠は、障子が閉まると、クワッと許り上氣して顏が火の出る程赤くなつた。恥辱の念と憤怒の情が、ダイナマイトでも爆發した樣に、身體中の血管を破つて、突然立上つたが、腹が減つてるのでフラフラと蹌踉く。
　よろめく足を踏み耐へて、室から出ると、足音荒く階段を下りて來たが、例の女中が丁度丼を二つ載せた膳を持つて來た所で、
『オヤ。』
　と尻上りに叫んで途を披いた。
『モウ要らん。』
　と凄じく怒鳴るや否や、周章下駄を突懸けて、疾風の樣に飛出したが、小路の入口でイヤと云ふ程電信柱に額を打付けた。後では、男女を合せて五六人の高い笑聲が、「ドッ」と許り喊の聲の樣に聞えた樣であつた。
　二町許り驅けて來ると、セイセイ呼吸が逸んで來て、胸の動悸のみ高い。まだ忌々しさが殘つて居たが、それも空腹には勝てず、足を緩めて、少し動悸が治ると、梅澤屋と云ふ休坂下の蕎麥屋へ入つた。
「お誂へは？」
　と反歯の女中に問はれて、「天麩羅」と云はうとしたが、先刻の若い男の顏がチラと頭に閃いたので、
「何でも可い。」と云つて了つた。
『天麩羅に致しませうか？　それとも月見なり五目なり、柏も直ぐ出來ますが。』
「咳、その、何れでも可い、柏でも可い。』
　かくて渠は、一滴の汁も殘さず柏二杯を平らげたが、するとモウ心にも身體にも坐りがついて、先刻の事を考へると、我ながら滑稽くなつてつい口に出して笑つて見る。手を叩いて更に「天麩羅二つ」と吩咐けた。
　それも平らげて了ふと、まだ何か喰ひたい樣だけれど、モウ腹が大分張つて來たので、止めた。と、眠氣が催すまでに惡落着がして來て、悠然と改めて室の中を見廻したが、「敷島」と「朝日」と交代に頻に喫ひながら、遂々ゴロリと横になつた。それでも、階段に女中の足音がする度、起直つて知らん振をして居たが、恁麼工合にして渠は、階下の時計が十時を打つまで、隨分長い間此處に過した。一度、手も拍たぬのに女中が來て、「お呼びでムいますか？」と襖を開けたが、それはモウ歸つて呉れと云ふ謎だと氣が付いたけれど、悠然と落着いて了つた渠の心は、それしきの事で動くものでない。
　恁許り悠然した心地は渠の平生に全くない事であつた。顏には例の痙攣も起つて居ない。物事が凡て無造作で、心配一つあるでなく、善とか惡とか云ふ事も全く腦裡から消えて了つて、渠はそれからそれと靜かに考へを廻らして居たが、第一に多少の思慮を費したのは、小宮洋服店から如何にしてモト金を取るべきかと云ふ問題であつた。それには自分一人よりも相棒のある方は都合が可いと考へついたが、渠は其人

選にアレかコレかと迷つた末、まだ何も知らぬ長野の奴を引張り込まうと決心した。

と、渠は其長野の馬鹿に氣の利かぬ事を思ひ出して、一人で笑つた。それは昨日の事、奴が竹山から東京電報の飜譯を命ぜられて、唯五六通に半時間もかかつて居たが、

『ええ一寸伺ひますが、……怎もまだ慣れませんで(と申譯をしておいて、)カンカインとは怎かくんでせうか?』

『感化院さ。』と云つて竹山が字を書いて見せた。すると、

『ア然うですか。ぢやモ一つ、ええと、鎌田といふ大臣がありましたらうか? 一寸聞きなれない樣ですけれど。』

『無い。』

『然うですか喃。イヤ其、電文にはカナダとあるんですけど、金田といふ大臣は聞いた事がないから、鎌田の間違ぢやないかと思ひまして。』

『ドレ見せ給へ。』と竹山は其電報を取つて、『何だ、加奈太大臣ルミュー氏ぢやないか。今度日本へ來た加奈太政府の勞働大臣さ。』

『然うですか。怎も慣れませんもので。』

これで皆が思はず笑つたので、流石に長野も恥かしくなつたと見えて、顏を眞赤にしたが、今度は自分の袂を曳いて、『陸軍ケイホウのケイホウは怎書きませう。』と小聲で訊ねる。『警報さ。』と書いて見せると、『然うですか、怎も有難う。』と云つたが、『何だい、何だい?』と竹山が云ふので、『陸軍ケイホウです。』と答へると、『ケイホウは刑罰の刑に法律の法だぜ。』と云ふ。俺もハツとしたが、長野は『・然うですか。』と云つたきり、俺には何とも云はず、顏を赤くした儘、其敎へられた通り書いて居た。すると竹山は、以後毎日東京や札幌の新聞を讀めと長野に云つて、

『鎌田といふ大臣のあるか無いかは理髮店の亭主だつて知つてるぢやないか。東京新聞を讀んで居れば、閣下の問題の何であるかが解るし、翌日の議會の日程に上る法律案などは、札幌小樽の新聞の電報に載つてるし、毎日新聞さへ讀んでれば電報の譯せん事がない筈なんだ。昨晩だつて君、九時頃に來た電報の『北海道官有林附與問題』といふのを、君が『不用問題』と書いたつて、工場の小僧共が笑つてたよ。』

長野の眞赤にした大きい顏が、暫時渠の眼を去らないで、悠然とした笑を續けさせて居た。

それから渠は、種々と竹山の事も考へて見た。竹山が折角東京へ乘込んで詩集まで出して居ながら、新聞記者などになつて北海道の隅ッこへ流れて來るには、何かしら其處に隱れた事情があるに違ひない。屹度暗い事もして來たんだらう、然うでなければ、と考へて、渠は四年前の竹山について、それかこれかと思出して見たが、一度下宿料を半金だけ入れて、殘額は二三日と云つたのが、遂々十日も延びたので、下宿のアノ主婦が少し心配して居たつた外、これぞと云ふ事も思出せなかつた。

竹山の下宿は社に近くて可い、と思ふ。すると又病院の事が心に浮ぶ。それとなき微笑が口元に湧いて、梅野の活潑なのが喰ひつきたい程可愛く思はれる。梅野は美しい、白い。脊は少し低いが……アノ眞白な肥つた腕、と思ふと、渠の口元は益々綻んだ。醫者の小野山も殆んど憎くない。不圖したら彼奴も此頃では、看護婦長に飽きて梅野に目をつけてるのぢやないかとも考へたが、それでも些とも憎くない。梅野は美しいから人の目につく、けれども矢張彼女は俺のもんさ。末は怎でも今は俺のもんさ。彼女の擧動はまだ男を知つて居ないらしいが、年齡に若く見える癖に二十一たつていふから、モウ男の肌に觸れてるかも知れぬ。それも構はんさ。大概の女は、表面こそ處女だけれども、モ

ウ二十歳を越すと男を知つてるから喃。・・

十時の時計を聞くと、渠は勘定を濟ませて蕎麥屋から出た。休坂を上つて釧路座の横に來ると、二十日程前に十軒許り燒けた火事跡に、雪の中の所々から、眞黑な柱や棟木が倒れた儘に頭を擡げて居た、白い波の中を海馬が泳いで居る樣に。

少し行くと、右側のとある家の窓に火光がさして居る。渠は其窓際へ寄つて、コツコツと硝子を叩いた。白い窓掛に手の影が移つて半分許り曳かれると、窓の下の炬燵に三十五六の蒼白い女が居る。

『蝶吉さんは未だ歸らないの？』

と優しい低い聲で云つた。

『え、未だ。』と女は窓外を覗いたが、『マア野村さんですか。姐さん達は十二時でなくちや歸りませんの。』

これは渠がよく遊びに行く藝者の宅で、蝶吉と小駒の二人が、「小母さん」と呼ぶ此女を雇つて萬事の世話を賴んで居る。日暮から十二時過までは、何日でも此陰氣な小母さんが一人此炬燵にあたつてるので、野村は時として此小母さんを何とか仕ようと思ふ事がないでもない。女は窓掛に手をかけた儘、入れとも云はず窓外を覗いてるので、渠は構はず入つて見ようとも思つたが、何分にも先刻程から氣が悠然と寬大になつてるので、つひぞ起した事のない「可哀さうだ。」といふ氣がした。

「又來るよ。」と云ひ捨てた儘、渠は窓側を離れて、「主婦はモウ大丈夫寢たナ。」と思ひ乍ら家路へ歩き出した。

四角を通越して浦見町が米町になる。二町許り行くと、左は高くなつた西寺と呼ぶ眞宗の寺、それに向合つた六軒長屋の取突の端が渠の宿である。例の如く入口も窓も眞暗になつて居る。渠は成るべく音のしない樣に、入口の硝子戸を開けて、閉てて、下駄を脫いで、上框の障子をも開けて閉てた。此室は長火鉢の置いてある六疊間。亭主は田舍の村役場の助役をして居るので、主婦と其甥に當る十六の少年と、三人の女兒とが、此室に重なり合ふ樣になつて寢て居るのだが、渠は慣れて居るから、其等の顏を踏付ける事もなく、壁側を傳つて奥の襖を開けた。

此室も亦六疊間で、左の隅に据ゑた小さい机の上に、赤インキやら黑インキやらで散々樂書をした紙笠の、三分心の洋燈が、螢火ほどに點つて居た。不取敢その心を捻上げると、パッと火光が發して、暗に慣れた眼の眩しさ。天井の低い、薄汚い室の中の亂雜が一時に目に見える。ゾクゾクと寒さが背に迫るので、渠は顏を顰めて、火鉢の火を掘つた。

同宿の者が三人、一人は入口の横の三疊を占領してるので、渠は郵便局へ出て居る佐久間といふ若い男と共に此六疊に居るのだ。佐久間はモウ寢て居て、然も此方へ顏を向けて眠つてるが、例の癖の、目を全然閉ぢずに、口も半分開けて居る。渠は、スヤスヤと眠つた安らかな其顏を眺めて、聞くともなく其寢息を聞いて居たが、何かしら恁う自分の心が冷えて行く樣な氣がする。此男は何時でも目も口も半分開けて寢てるが、俺も然うか知ら。俺は口だけ開けてるかも知れぬ、などと考へる。

煙草に火をつけたが、怎したものか美味くない。氣がつくとそれは「朝日」なので、袂を探して「敷島」の袋を出したが、モウ三本しか殘つて居なかつた。馬鹿に喫んで了つたと思ふと、一本出して惜しさうに左の指で弄り乍ら、急いで先のを、然も吸口まで燒ける程吸つて了つた。で、「敷島」に火をつけたが、それでも左程

美味くない。口が荒れて來たのかと思ふと、煙が眼に入る。渠は澁い顏をして、それを灰に突込んだ。

眼を閉ぢずに寢るとは珍しい男だ、と考へ乍ら、また佐久間の顏を見た。すると、自分が一生懸命「閉ぢろ、閉ぢろ。」と思つて居ると、佐久間は屹度アノ眼を閉ぢるに違ひないと云ふ氣がする。で、下腹にウンと力を入れて、ギラギラする眼を恐ろしく大きくして、下脣を噛んで、佐久間の寢顏を睨め出した。寢息が段々急しくなつて行く樣な氣がする。一分、二分、三分、……佐久間の眼は依然として瞬きもせず半分開いて居る。

何だ馬鹿々々しいと氣のついた時、渠は半分腰を浮かして、火鉢の緣に兩腕を突張つて、我ながら恐ろしい形相をして居た。額には汗さへ少し滲み出して居る。渠は平手でそれを拭つて腰を据ゑると、今迄顏が熱つて居たものと見えて、血が頭からスウと下りて行く樣な氣がする。動悸も少ししてゐる。何だ、馬鹿々々しい、俺は怎して恁う時々、淺間しい馬鹿々々しい事をするだらうと、頻りに自分と云ふものが輕蔑される。……

止度もなく、自分が淺間しく思はれて來る。限りなく、淺間しいものの樣に思はれて來る。瞳は忽ち曇んで、喉がセラセラする程胸が苛立つ。渠は此世に於て、此自蔑の念に襲はれる程厭な事はない。

と、隣室でドサリといふ物音がした。咄嗟の間に渠は、主婦が起きて來るのぢやないかと思つて、ビクリとしたが、唯寢返りをしただけと見えて、立つ氣色もせぬ。ムニャムニャと少年が寢言を云ふ聲がする。漸と安心すると、動悸が高く胸に打つて居る。

處々裂けた襖、だらしなく吊下つた壁の衣服、煤ばんで雨漏の痕跡がついた天井、片隅に積んだ自分の夜具からは薄汚い古綿が喰み出してる。ズーッと其等を見廻す渠の顏には何時しか例の痙攣が起つて居た。

噫、淺間しい！　恁う思ふと、渠はポカンとして眠つて居る佐久間の顏さへ見るも厭になつた。渠は膝を立直して小さい汚い机に向つた。

埃だらけの硯、歯磨の袋、楊枝、皺くちやになつた古葉書が一枚に、二三枚しかない封筒の束、鐵筆に紫のインキ瓶、フケ取さへも載つて居る机の上には、中判の洋罫紙を紅いリボンで厚く綴ぢた、一冊の帳面がある。表紙には『浮世の夢』と[illegible]た字で書いて、下には小さく、野村[illegible]川。——

渠は直ちにそれを取つて、第一頁を披いた。

これは渠が十日許り前に青山の宿で夕飯を御馳走になつて、色々と詩の話などをした時思立つたので、今日病院で横山に吹聴した、其所謂六ケ月位かかる見込だといふ長篇の詩の稿本であつた。渠は、其題の示す如く、此大叙事詩に、天地初發の曉から日一日と成された、絶大なる創造の事業を謳つて、アダムとイヴの追放に人類最初の悲哀の由來を敍し、其掟られたる永遠の運命を說いて、最後の卷には、神と人との間に、朽つる事なき梯子をかけた、耶蘇基督の出現に、人生最高の理想を歌はむとして居る。そして、先づ以て、涙の谷に落ちた人類の深き苦痛と悲哀と、その悲哀に根ざす靈魂の希望とを歌ふといふ序歌だけでも、優に二三百行位になる筈なので、渠は此詩の事を考へると、話に聞いただけの、隨つて左程[illegible]いとも面白いとも思はなかつた、ダンテの神聖喜曲にも劣らぬと思ふので、其時は、自分が今こそ恁麼釧路あたりの新聞の探訪をしてゐるけれど、今に見ろ、今に見ろ、と云ふ樣な氣になる。

嗚呼々々、太初、萬有の

いまだ象を……

と、渠は小聲に抑揚をつけて讀み出した。が、書いてあるのは唯十二三行しかないので、直ぐに讀終へて了ふ。と繰返して再讀み出す。再讀終へて、再讀み出す。恁うして渠は、ものの三十遍も同じ事を續けた。

初は、餘念の起るのを妨げようと、凝然と眉間に皺を寄せて苦い顏をしながら讀んで居たが、十遍、二十遍と繰返してるうちに、何時しか氣も落着いて來て眉が開く。渠は腕組をして、一向に他の事を思ふまいと、詩の事許りに心を集めて居たが、それでも時々、ピクリピクリと痙攣が額に現れる。

軈て鐵筆を取上げた。幾度か口の中で云つて見て、頭を捻つたり、眉を寄せたりしてから、

「人祖この世に罪を得て、」と云ふ句を亞いで、

人の子枕す時もなし。

ああ、

と書いたが、此「ああ」の次が出て來ない。で、渠は思出した樣に煙草に火をつけたが、不圖次の句が頭腦に浮んだので、口元を歪めて幽かに笑つた。

ああ、み怒りの雲の色、
審判の日こそ忍ばるれ。

と、手早く書きつけて、鐵筆を擱いた。この後は甚麼事を書けばよいのか、まだ考へて居ないのだ。で、渠は火鉢に向直つて、頭だけ捻つて、書いただけを讀返して見る。二三遍全體を讀んで見て、今度は目を瞑つて今書いた三行を心で誦し出した。

―人の子枕す時もなし。ああみ怒り……審判の日……。―人の子枕す……―然うだ、實際だ。人の子は枕する時もない。人の子は枕する時もない。世界十幾億の人間、男も、女も、眞實だ。人の子は枕する時もない。實際然うだ、寢ても不安、起きても不安！　夢の無い眠を得る人が一人でもあらうか！　金を持てば持つたで惡い事を、腹が減れば減つたで惡い事を、噫、寢てさへも、寢てさへも、實際だ、夢の中でさへも惡い事を！　夢の中でさへも俺は、噫、俺は、俺は、俺は……

恐ろしい苦悶が地震の樣に忽ち其顏に擴がつた。それが刻一刻に深くなつて行く。瞬一瞬に烈しくなつて行く。見ろ、見ろ、人の顏ぢやない、全く人の顏ぢやない。鬼？　鬼の顏とは全くだ。種々な事が胸に持上がつて來る。渠はそれと戰つて居る。思出すまいと戰つて居る。幾何壓しつけても持上がる。あれもこれも持上がる。終には幾十幾百幾千の事が皆一時に持上がる。渠は一生懸命それと戰つて居る。戰つて戰つて、刻一刻に敗けて行く。瞬一瞬に敗けて行く。

―俺は親不孝者だ！」と云ふ考へが、遂に渠を征服した。胸の中で「一圓五十錢！」と叫ぶ。脅喝、詐僞、姦通、強盗、喰逃……二十も三十も一時に喊聲をあげて頭腦を蹂躪る。見まい、聞くまい、思出すまいと、渠は矢庭に机の上の「創世乃卷」に突伏した。それでも見える、母の顏が見える。胸の中で誰やら「貴樣は罪人だ。」と叫ぶ、「警察へ行け。」と喚く。と渠は、横濱で唯十錢持つて煙草買ひに行つた時、二度三度呼んでも、誰も店に出て來なかつたので、突然「敷島」を三つ浚つて逃げた事を思出した。渠はキリキリと齒を喰しばつた。噫、俺は一日として、俺は何處へ行つても、俺は、俺は……と思ふと、凄じい髯面が目の前に出た。それは渠が釧路へ來て泊る所のなかつた時、三晩一緒に暮した乞食だ。知人岬の神社に寢た乞食だ。俺はアノ乞食の嬶を二度××た！　乞食の嬶を、この髯面の嬶を……髯面がサッと朱を帶びた。カインの顏だ。アダムの子のカインの顏だ。何處へ逃げても御空から大きな眼に睨められたカインの

眼だ。土穴を掘つて隱れても大きな眼に睨められたカインの眼だ。噫、カインだ、カインだ、俺はカインだ！

俺はカインだ！　と總身に力を入れて、兩手に机の縁を攫んで、突然身を反らした。歯を喰しばつて、堅く堅く目を閉ぢて、頭が自づと後に垂れる。胸の中が搔裂かれる樣で、スーッと深く息を吸ふと、パッと目があいた。と、空から見下す大きな眼！　洋燈の眞上に徑二尺、眞黑な天井に圓く描かれた大きな眼！　「俺はッ」と渠は聲を絞つた。

ーウ、ーと聲がしたので、電氣に打たれた樣に、全身の毛を逆立てた。渠の聲が高かつたので、佐久間が夢の中で唸つたのだ。渠は恐ろしき物を見る樣に佐久間の寢顏を凝視めた。眠れりとも、醒めたりともつかぬ、半ば開いた其眼！　其眼の奧から、誰かしら自分を見て居る。誰かしら自分を見て居る。……

野村はモウ耐らなくなつて、突然立上つた。「俺は罪人だ、神樣！」と心で叫んで居る。襖を開けたも知らぬ。長火鉢に躓いたも知らぬ。眞暗で穿つたか解らぬが、兎に角下駄らしいものを足に突懸けて、渠は戸外へ飛出した。

門寺の横の坂を、側目も振らず上つて行く。胸の上に堅く組合せた拳の上に、冷い冷い涙が、頰を傳つてポタリポタリと落つる。「神樣、神樣。」と心は續け樣に叫んで居る。坂の上に鐵色の空を劃つた教會の屋根から、今しも登りかけた許りの二十日許りの月が、帽子も冠らぬ渠の頭を斜めに掠めて、後に長い長い影を曳いた。

十二時半頃であつた。

寢る前の平生の癖で、竹山は窓を開けて、煖爐の火氣に鬱した室内の空氣を入代へて居た。闃とした夜半の街々、片割月が雪を殊更寒く見せて、波の音が遠い處でゴウゴウと鳴つて居る。

直ぐ目の下の病院の窓が一つ、パッと火光が射して、白い窓掛に女の影が映つた。其影が、右に動き、左に動き、手をあげたり、屈んだり、消えて又映る。病人が惡くなつたのだらうと思つて見て居た。

と、眞砂町へ拔ける四角から、黑い影が現れた。ブラリブラリと俛首れて歩いて來る。竹山は凝と月影に透して視て居たが、怎も野村らしい。帽子も冠つて居ず、首卷も卷いて居ない。

其男は、火光の射した窓の前まで來ると、遽かに足を留めた。女の影がまた暫時窓掛に映つた。

男は、足音を忍ばせて、其窓に近づいた。息を殺して中を覗つてるらしい。竹山も息を殺してそれを見下して居た。

一分も經つたかと思ふと、また女の影が映つて、それが小さくなつたと見ると、ガタリと窓が鳴つた。と、男は強い彈機に彈かれた樣に、五六歩窓側を飛び退つた。「呀ッ」と云ふ女の聲が聞えて、間もなく火光がパッと消えた。窓を開けようとして、戸外の足音に驚いたものらしい。

男は、前よりも俛首れて、空氣まで凍つた樣な街路を、ブラリブラリと小さい影を曳いて、洲崎町の方へ去つた。

翌日、野村良吉が社に出たのは十時少し過であつた。ピクリピクリと痙攣が時々顏を襲うて、常よりも一層沈んで見えた。冷たい疲勞の壓迫が、重くも頭腦に被さつて居る。胸の底の底の、ズット底の方で、誰やら泣いて居る樣な氣がする。何の爲に泣くとも解らないが、何れ

誰やら泣いて居る氣がする。
　氣が拔けた樣に惘乎として編輯局に入ると、主筆と竹山と、モ一人の洋服を着た見知らぬ男が、煖爐を取圍いて、竹山が何か調子よく話して居た。
　野村が其煖爐に近いた時、見知らぬ男が立つて禮をした。渠も直ぐ禮を返したが、少し周章氣味になつてチラリと其男を見た。二十六七の、少し吊つた眼に才氣の輝いた、皮膚滑かに苦味走つた顏。
『これは野村新川君です。』と主筆は腰かけた儘で云つた。そして渠の方を向いて、『この方は今日から入社する事になつた田川勇介君です。』
　渠は電光の如く主筆の顏を偸視たが、大きな氷の塊にドシリと頭を撃たれた心地。
『ハア然うですか。』と挨拶はしたものの、總身の血が何處か一處に塊つて了つた樣で、右の手と左の手が交る〲に一度宛、發作的にビクリと動いた。色を變へた顏を上げる勇氣もない。
「アノ人は面白い人でして、得意な論題でも見つかると、乾度先づ給仕を酒買にやるんです。冷酒を呷りながら論文を書く、なんか、アノ温厚い人格に比して怎やら奇蹟の感があるですな。』
と、田川と呼ばれた男が談り出した。誰の事とも野村には解らぬが、何れ何處かの新聞社に居た人の話らしい。
「然う然う、其麼癖がありましたね。一體一寸一寸奇拔な事をやり出す人なんで、書く物も然うでしたよ。怎麼下らん事をと思つてると、時時素的な奴を書出すんですから。」と竹山が相槌を打つ。
『那麼いふ男は、今の時世ぢや全く珍しい。』と主筆が鷹揚に嘴を容んだ。「アレでも若い時分は隨分やつたもので、私の縣で自由民權の論を唱導し出したのは、全くアノ男と何とか云ふモ一人の男なんです。學問があり演說は巧し、剩に金があると來てるから、宛然火の玉の樣に轉げ歩いて、熱心な遊說をやつたもんだが、七八萬の財產が國會開會以前に一文も無くなつたとか云ふ事だつた。』
『全く惜しい人です喃、函館みたいな俗界に置くには。』と田川は至極感に打たれたと云ふ口吻。
　野村は遂々怎麼話に耐へ切れなくなつて、其室を出た。事務室に下りて煖爐にあたると、受付の廣田が「貴方新しい足袋だ喃。俺ンのもモウ怎麼になつた。」と自分の破けた足袋を撫でた。工場にも行つて見た。活字を選り分ける女工の手の敏捷さを、解版臺の傍に立つて見惚れて居ると、「貴方は氣が多い方ですな。」と職長の筒井に背を叩かれた。文選の小僧共はまだ原稿が下りないので、阿彌陀鬮をやつてお菓子を買はうと云ふ相談をして居て、自分を見ると「野村さんにも加擔ツて貰ふべか。」と云つた。
　機械場には未だ誰も來て居ない。此頃着いた許りの、新しい三十二面刷の印刷機には、白い布が被けてあつた。便所へ行く時小使室の前を通ると、昨日まで居た筈の、横着者の爺でなく、豫て噂のあつた如く代へられたと見えて、三十五六の小造りの男が頻りに洋燈掃除をして居た。嗚呼アノ爺も罷めさせられた、と思ふと、渠は云ふに云はれぬ惡寒を感じた。何處へ行つても恐ろしい怖ろしい不安が爽に跟いて來る。胸の中には絕望の聲――「今度こそ眞當の代人が來た。汝の運命は今日限りだ。アト五時間だ、イヤ三時間だ、二時間だ、一時間だッ!」
　上島に逢へば此消息を話して貰へる樣な氣がする。上島は正直な男だ、と考へて、二度目に二階へ上る時、
「上島君はまだ來ないのか、君?」

と實田に聞いて見た。

「モウ先刻に來て先刻に出て行きましたよ。」

と答へた。然うだ、十時半だもの、俺も外交に出なけやならんのだが、と思つたが、出て行く所の話ぢやない。編輯局に入ると、主筆が椅子から立ちかけて、

「それぢや田川君、私はこれから一寸社長の宅に行きますから、君も何なら一緒に行つて、顏出しして來たら怎です？」

「ア然うですか、ぢや何卒伴れてつて頂きます。」

と田川も立つた。二人は出て行く。野村も直ぐ後から出て、應接室との間の狹い廊下の、突當りの室へ行つた。モウ決つてる！　決つてる！　嗚呼俺は今日限りだ！

明日から怎しよう、何處へ行かう、などと云ふ考へを起す餘裕もない。「今日限り！」と云ふ事だけが頭腦にも胸にも一杯になつて居て、モウ張裂けさうだ。兎毛一本で突く程の刺戟にも、忽ち頭蓋骨が眞二つに破れさうだ。

また編輯局に入つた。竹山が唯一人、凝然と椅子に凭れて新聞を讀んで居る。一分、二分、……五分！　何といふ長い時間だらう。何といふ恐ろしい沈默だらう。渠は腰かけても見た、立つても見た、新聞を取つても見た、火鉢に手を翳しても見た。窓際に行つても見た。竹山は凝然と新聞を讀んで居る。

「竹山さん。」と、遂々耐へきれなくなつて渠は云つた。悲氣な眼で對手を見ながら、顫ひを帶びて怖々した聲で。

竹山は何氣なく顏を上げた。

「アノー、一寸應接室へ行つて頂く譯に、まゐりませんでせうかねえ？」

「え？　何か用ですか、秘密の？」

「ハア、其、一寸其……」と目を落す。

「此室にも誰も居ないが。」

「若し誰か入つて來ると……。」

「然うですか。」と竹山は立つた。

入口で竹山を先に出して、後に跟いて狹い廊下を三歩か四歩、應接室に入ると、渠は靜かに扉を閉めた。

割合に廣くて、火の氣一つ無い空氣が水の樣だ。壁も天井も純白で、眞夜中に吸込んだ寒さが、指で壓してもスウと腹まで傳りさうに冷く見える。青唐草の被帛をかけた圓卓子が中央に、窓寄りの暖爐の周圍には、皮張りの椅子が三四脚。

竹山は先づ腰を下した。渠は卓子に左の手をかけて、立つた儘火の無い暖爐を見て居たが、

「甚麼事件です？」

と竹山に訊かれると、怎やら自分の足下に落して、

「甚麼事件と云つて、何、其、外ぢやないんですがねえ。」

「ハア。」

「アノ、」と云つたが、此時渠は不意に、自分の考へて居る事は杞憂に過ぎんのぢやないかと云ふ氣がした。が、「實は其、」と再、一寸口を噤んで「私は今日限り罷めさせられるのぢやないかと思ひますが……」と云つて、妙な笑を口元に漂はしながら竹山の顏を見た。

竹山の眼には機敏な觀察力が、鋭く閃いた。「今日限り？　それは又怎してです？」

「でも、」と渠は再目を落した。「でも、モウお決めになつてるんぢやないかと、私は思ひますが、かねえ。」

「僕にはまだ、何の話も無いんですがね。」

「ハア？」と云ふなり、渠は胡散臭い目付をして、チラリと對手の顏を見た。白ッぱくれてるのだとは直ぐ解つたけれど、また何處かしら、話が無いと云つて貰つたのが有難い樣な氣もする。

暫らく默つて居たが、『アノ、田川さんといふ人は、今度初めて釧路へ來られたのですかねす？』

『然うです。』と云つて竹山は注意深く渠の顏色を窺つた。

『今迄何處に居た人でせうか？』

『函館の新聞に居た男です。』

『ハア。』と聞えぬ程低く云つたが、霎時して又、『二面の方ですか、三面の方ですか？』

『何方もやる男です。筆も兎に角立つし、外交も仲々拔目のない方だし……。』

『ハア。』と再低い聲。『で、今後は？』

『サア、それは未だ決めてないんだが、僕の考へぢやマア、遊軍と云つた樣な所が可いかと思つてるがね。』

渠は心が頻りに苛々してるけれど、竹山の存外平氣な物言に、取つて掛る機會がないのだ。

一分許り話は斷えた。

『アノ、』と渠は再び顏をあげた。『ですけれども、アノ方が來たから私に用がなくなつたんぢやないですかねす？』

『其麼譯は無いでせう。僕はまだ、モ一人位入れようかと思つてる位だ。』

『ハ？』と野村は、飲込めぬと云つた樣な眼付をする。

『僕は、五月の總選擧以前に六頁に擴張しようと考へてるんだが、社長初め、別段不賛成が無い樣だ。過般見積書も作つて見たんだがね。六頁にして、帶廣のアノ新聞を買つて了つて、釧路十勝二ケ國を勢力範圍にしようと云ふんだ。』

『ハア、然うですかねす。』

『然うなると君、帶廣支社にだつて二人位記者を置かなくちやならんからな。』

渠の頭腦は非常に混雜して來た。嗚呼、俺は罷めさせられるには違ひないんだ、だが、竹山の云つてる處も道理だ。成程然うなれば、まだ一人も二人も人が要る。だが、だが、ハテナ、一體社の擴張と俺と、甚麼關係になつてるか知ら？ 六頁になつて……釧路十勝二ケ國を……帶廣に支社を置いて……田川が此方に居るとすると俺は要らなくなるし――田川が帶廣に行くと、然うすると俺も帶廣にやられるか知ら……ハテナ……斯うと……それはまだ後の事だが……今日は怎か知ら、今日は？……

『だがね、君。』と、稍あつてから低めた調子で竹山が云つた時、其聲は渠の混雜した心に異樣に響いて、『矢張今日限りだ』といふ考へが征矢の如く閃いた。

『だがね、君。僕は率直に云ふが、』と竹山は聲を落してから眼を外らした。『主筆には君に對して餘り好い感情を有つてゐない樣な口吻が、時々見えぬでも無い。……』

ソラ來た！と思ふと、渠は冷水を浴びた樣な氣がして、腋の下から汗がタラタラと流れ出した。と同時に、怎やら頭の中の熱が一時に引いた樣で、急に氣がスッキリとする。凝と目を据ゑて竹山を見た。

『今朝、小宮洋服店の主人が主筆ン所へ行つたさうだがね。』

『何と云つて行きました？』と不思。

『サア、田川が居たから詳しい話も聞かなかつたが……。』

竹山は口を噤んで渠の顏を見た。

『竹山さん、私は、』と平氣な顫聲を絞つた。『私はモウ何處へも行く所のない男です。種々な事をやつて來ました。そして方々歩いて來ました。そして私はモウ行く所がありません。罷めさせられると其限です。罷めさせられると死にます。死ぬ許りです。飢ゑて死ぬ許りです。貴君方は飢ゑた事がないでせう。嗚呼、私は何處へ行つても大きな眼に睨められます。眼

つてる人も私を視て居ます。そして、』と云つて、ギラギラさして居た目を竹山の顏に据ゑたが、『私は、自分の職責は忠實にやつてる積りです。毎日出來るだけ忠實にやつてる積りです。毎晩町を歩いて、材料があるかあるかと、それ許り心懸けて居ります。そして、昨晩も遲くまで、』と急に句を切つて、堅く口を結んだ。

『然う昨晩も、』と竹山は呟く樣に云つたが、ニヤニヤと妙な笑を見せて、『病院の窓は、怎でした？』

野村はタジタジと二三步後退つた。噫、病院の窓！　梅野とモ一人の看護婦が、寢衣に着換へて淡紅色の扱帶をしてた所で、足下には燃える樣な赤い裏を引覆した、まだ身の溫りのありさうな衣服！　そして、白い脛が！　白い脛が！

見開いた眼には何も見えぬ。口は蟇の樣に開けた儘、ピクリピクリと顏一體が痙攣けて、兩側で不恰好に汗を握つた拳がブルブル顫へて居る。

『神樣、神樣。』と、何處か心の隅の隅の、ズッと隅の方で……。

（五月二十六日脫稿）

蹄のあと

（安井日高子が著書「蹄のあと」（グスターフ傳）に贈するの詩）

雲わかれ、光天に、
生の火の人の胸に、
もえし日を思ほへばや、
あな尊と、この國國、
野に谷に、音もこもれ、
ありし日の蹄のあと
花ぞ咲ける。

選られ兒の胸にもえし
火よ、神のさかえなれば、
あはれ、火のつるぎ、草をなぎ立てし戰の野の
駒光る蹄のあと、
さくは、見よ、花鈴蘭、
香も高けれ。

しろがねの花の鈴や、
かをりこそ美し響き。

鳴るは、世のとこしなへに
絶えし光の功績、また、
朽ちし世の親の幸日、
年毎に野邊にかへる
とはの祭よ。

けに、この世、また詩の際、
花と火と野邊に舞ひ、
選られ兒の胸に、蹄の
火の蘭よ、落ちて、花と
咲きつ、また、火とも照れり。
かくて、見よ、花の鈴の
音こそたえね。

ありし日の蹄のあと、
打伏して思ほへばや、
鈴蘭よ、――勝利の猛者が、
紅き血にさきし花よ、――
えられ兒の氣負ひし駒
蹄の音、その幸をし
今に傳ふ。

（黄草集より）

天鵞絨

一

理髮師の源助さんが四年振で來たといふ噂が、何か重大な事件でも起つた樣に、口から口に傳へられて、其午後のうちに村中に響き渡つた。

村といつても狹いもの。盛岡から青森へ、北上川に縺れて逶迤と北に走つた、坦々たる其一等道路（と村人が呼ぶ）の、五六町並木の松が斷絶えて、兩側から傾き合つた茅葺勝の家並の數が、唯九十何戶しか無いのである。村役場と駐在所が中央程に向合つてゐて、役場の隣が作右衞門店、萬荒物から酢醬油石油莨、罎詰の酒もあれば、前掛半襟にする布帛もある、箸で斷れぬ程堅い豆腐も賣る。其隣の郵便局には、此村に唯一つの軒燈がついてゐるけれども、每晚點火る譯ではない。

お定がまだ少かつた頃は、此村に理髮店といふものが無かつた。村の人達が其頃、頭の始末を奈何してゐたものか、今になつて考へると、隨分不便な思をしたものであらう。それが、九歲か十歲の時、大地主の白井樣が盛岡から理髮師を一人お呼びなさるといふ噂が、恰も今度源助さんが四年振で來たといふ噂の如く、異樣な驚愕を以て村中に傳つた。間もなく、とある空地に梨箱の樣な小い家が一軒建てられて、其家が漸々壁塗を濟ませた許りの處へ、三十恰好の、脊の低い、色の黑い理髮師が遣つて來た。頗るの淡白者で、上方辯の滑かな、話巧者の、何日見てもお愛想が好いところから、間もなく村中の人の氣に入つて了つた。それが乃ち源助さんであつた。

源助さんには、お內儀さんもあれば子息もあるといふ事であつたが、來たのは自分一人。愈々開業となつてからは、其店の大きい姿見が、村中の子供等の好奇心を刺戟したもので、お定もよく同年輩の遊仲間と一緒に行つて、見た事もない白い瀨戶の把手を上に捻り下に捻り、辛と少許入口の扉を開けては、種々な道具の整然と列べられた室の中を覗いたものだ。少許開けた扉が、誰の力ともなく、何時の間にか身體の通るだけ開くと、田舍の子供といふものは因循なもので、盜みでもする樣に怖な怯り、二寸三寸と物も言はず中に入つて行つて、交代に其姿見を覗く。許な事には、少許離れて寫すと、顏が長くなつたり、扁くなつたり、目も鼻も歪んで見えるのであつたが、お定は幼心に、これは鏡が餘り大き過ぎるからだと考へてゐたものだ。

月に三度の一の日を除いては、此日には源助さんが白井樣へ上つて、お家中の人の髮を刈つたり顏を剃つたりするので、大抵村の人が三人四人、源助さんの許で莨を喫しながら世間話をしてゐぬ事はなかつた。一年程經つてから、白井樣の番頭を勤めてゐた人の息子で、薄野呂なところからノロ勘と綽名された、十六の勘之助といふのが、源助さんに弟子入をした。それからといふものは、今迄近づき兼ねてゐた子供等まで、理髮店の店を遊場にして、暇な時には、よく太閤記や義經や、蒸汽船や加藤淸正の譚を聞かして貰つたものだ。源助さんが居ない時には、ノロ勘が錢函から銅貨を盜み出して、子供等に餡麵麭を振舞ふ事もあつた。振舞ふといつても、其實半分以上はノロ勘自身の口に入る

ので。

源助さんは村中での面白い人として、衆人に調法がられたものである。春秋の彼岸には、お寺よりも此人の家の方が、餅を澤山貰ふといふ事で、其代り又、何處の婚禮にも葬式にも、此人の招ばれて行かぬ事はなかつた。源助さんは、啻に話巧者で愛想が好い許りでなく、葬式に行けば青や赤や金の紙で花を拵へて呉れるし、婚禮の時は村の人の誰も知らぬ「高砂」の謠をやる。加之何事にも器用な人で、割烹の心得もあれば、植木弄りも好き、義太夫と接木が巧者で、或時は白井樣の子供衆のために、大奉八枚張の大紙鳶を拵へた事もあつた。其處此處の夫婦喧嘩や親子喧嘩に仲裁を怠らなかつたは無論の事。

左う右うしてるうちに、お定は小學校も尋常科だけ卒へて、子守をしてる間に赤い袖口が好になり、髮の油に汚れた手拭を獨自に洗つて冠る樣になつた。土土用が過ぎて、肥料つけの馬の手綱を執る樣になると、もう自づと男羞しい少女心が萌して來て、盆の踊に夜を明すのが何よりも樂しい。隨つて、ノロ勘の朋輩の若衆が、無駄口を戰はしてゐる理髮師の店にも、おのづと見舞ふ事が稀になつたが、其頃の事、源助さんの息子さんだといふ、親に似ぬ色白の、春のすらりとした若い男が、三月許りも來てゐた事があつた。

お定が十五(?)の年、も少許で盆が來るといふ暑氣盛りの、踊に着る浴衣やら何やらの心構へで、娘共にとつては一時も氣の落着く暇がない頃であつた。源助さんは、郷里(と言つても、唯上方と許りしか知らなかつたが、)にゐる父親が死んだとかで、俄かに荷造をして、それでも暇乞だけは家毎にして、家毎から御餞別を貰つて、飼馴した籠の鳥でも逃げるかの樣に村中から惜まれて、自分でも甚く殘惜しさうにして、二三日の中にフイと立つて了つた。立つ時は、お定も人々と共に、一里許りのステイションまで見送つたのであつたが、其歸途、とある路傍の田に、稻の穗が五六本出初めてゐたのを見て、せめて初米の餅でも搗くまで居れば可いのにと、誰やらが呟いた事を、今でも夢の樣に記憶えて居る。

何しろ極く狹い田舍なので、それに足下から鳥が飛立つ樣な別れ方であつたから、源助一人の立つた後は、祭禮の翌日か、男許りの田植の樣で、何としても物足らぬ。閑人の誰彼は、所在無げな顏をして、呆然と門口に立つてゐた。一月許りは、寄ると觸ると行つた人の噂で、立つ時は白井樣で二十圓呉れたさうだし、村中からの御餞別を合せると、五十圓位集つたらうと、羨ましさうに計算する者もあつた。それ許りぢやない、源助さんは此五六年に、百八十兩もおツ貯めたげなと、知つたか振をする爺もあつた。が、此源助が、白井樣の分家の、四六時中リュウマチで臥てゐる奧樣に、或る特別の慇懃を通じて居た事は、唯一人知る者がなかつた。

二十日許りも過ぎてからだつたらうか、源助の禮狀の葉書が、三十枚も一度に此村に舞込んだ。それが又、それ相應に一々文句が違つてると云ふので、人々は今更の樣に事々しく、源助の萬事に才が廻つて、器用であつた事を語り合つた。其後も、月に一度、三月に二度と、一年半程の間は、誰へとも限らず、源助の音信があつたものだ。

理髮店の店は、其頃兎や角一人前になつたノロ勘が讓られたので、唯一軒しか無い商賣には、其間が拔けた無駄口に客を減らす事もなく、かの凸凹の大きな姿見が、今猶人の顏を長く見せたり、扁く見せたりしてゐる。

其源助さんが四年振りで、突然遣つて來たといふのだから、もう殆ど忘れて了つてゐた村の人

達が、男といはず女といはず、腰の曲つた老人や子供等まで、異様に驚いて目を瞠つたのも無理はない。

二

それは盆が過ぎて二十日と經たぬ頃の事であつた。午中三時間許りの間は、夏の最中にも劣らぬ暑氣で、澄みきつた空からは習との風も吹いて來ず、素足の娘共は、日に燒けた礫の熱いのを避けて、軒下の土の濕りを歩くのであるが、裏畑の梨の樹の下に落ちて死ぬ蟬の數と共に、秋の香が段々深くなつて行く。日出前の水汲に素袷の襟元寒く、夜は村を埋めて了ふ程の蟲の聲。田といふ田には稻の穗が、琥珀色に寄せつ返しつ波打つてゐたが、然し、今年は例年よりも、作が遙と劣つてゐると人々が呟しあつてゐた。

春から、夏から、待ちに待つた陰暦の盂蘭盆が來ると、村は若い男と若い女の村になる。三晩續けて徹夜に踊つても、猶踊り足らなくて、雨でも降れば格別、大抵二十日盆が過ぎるまでは、太鼓の音に村中の老人達が寢つかれぬと口說く。それが濟めば、苟くも病人不具者でない限り、男といふ男は一同泊掛で東嶽に萩刈に行くので、娘共の心が譯もなくがつかりして、一年中の無聊を感ずるのは此時である。

それも例年ならば、收穫後の嫁取婿取の噂に、嫉妬交りの話の種は盡きぬのであるけれども、今年の樣に作が惡くては、田畑が生命の百姓村の悲さに、これぞと氣の立つ話もない。其處へ源助さんが來た。

突然四年振で來たといふ噂に驚いた人達は、更に其源助さんの服裝の立派なのに二度驚かされて了つた。萬の知識の單純な人達には何色とも呼びかねる、茶がかつた灰色の中折帽は、此村で村長樣とお醫者樣と、白井の若旦那の外に冠る人がない。絹甲斐絹の裏をつけた羽織も、袷も、縞ではあるが絹布物で、角帶も立派、時計も立派、中にもお定の目を聳たしめたのは、づつしりと重い總革の旅行鞄であつた。

宿にしたのは、以前一番懇意にした大工の兼さんの家であつたが、其夜は誰彼の區別なく其家を見舞つたので、奧の六疊間に三分心の洋燈は暗かつたが、入交り立交りする人の數は少くなく、潮の樣な蟲の音も聞えぬ程、賑かな話聲が、十一時過ぐるまでも戸外に洩れた。娘共は流石に、中には入りかねて、三四人店先に腰掛けてゐたが、其家の總領娘のお八重といふのが、座敷から時々出て來て、源助さんの話を低聲に取次した。

源助さんは、もう四十位になつてゐるし、それに服裝の立派なのが一際品格を上げて、擧動から話振から、昔よりは遙かに容體づいてゐた。隨つて、其昔「お前」とか「其方」とか呼び慣してゐた村の人達も、期せずして皆「お前樣」と呼んだ。其夜の話では、源助は今度函館にゐる伯父が死んだのへ行つて來たので、汽車の歸途の路すがら、奈何しても通抜が出來なかつたから、突然ではあつたが、なつかしい此村を訪問したと云ふ事、今では東京に理髮店を開いてゐて、熟練な職人を四人も使つてゐるが、それでも手が足りぬ程忙しいといふ事であつた。

此話が又、響を打つて直ぐに村中に傳はつた。

理髮師といへば、餘り上等な職業でない事は村の人達でも知つてゐる。然し東京の理髮師と云へば、怎やら少し意味が別なので、銀座通の寫眞でも見た事のある人は、早速源助さんの家の立派な事を想像した。

翌日は、各々自分の家に訪ねて來るものと思つて、氣早の老人などは、花莫蓙を押入から出して爐邊に布いて、澁茶を一摑み隣家から貰つ

て來た。が、源助さんは其日朝から白井樣へ上つて、夕方まで出て來なかつた。

其晩から、かの立派な鞄から出した、手拭やら半襟やらを持つて、源助さんは殆んど家毎に訪ねて歩いた。

お定の家へ來たのは、三日目の晩で、晝には野良に出て皆留守だらうと思つたから、態々後廻しにして夜に訪ねたとの事であつた。そして、二時間許りも麥煎餅を噛りながら、東京の繁華な話を聞かせて行つた。銀座通りの賑ひ、淺草の水族館、日比谷の公園、西鄕の銅像、電車、自動車、宮樣のお葬式、話は皆想像もつかぬ事許りなので、聞く人は唯もう目を睜つて、夜も晝もなく渦卷く火炎に包まれた樣な、凄じい程な華やかさを漠然と頭腦に描いて見るに過ぎなかつたが、淺草の觀音樣に鳩がゐると聞いた時、お定は其麽所にも鳥なぞがゐるか知らと、異樣に感じた。そして、其麽所から此人はまあ、怎して此處まで來たのだらうと、源助さんの得意氣な顏を打瞶つたのだ。それから源助さんは、東京は男にや職業が一寸見付り惡いけれど、女なら幾何でも口がある。女中奉公しても月に四圓貰へるから、お定さんも一二年行つて見ないかと言つたが、お定は唯俯いて微笑んだのみであつた。怎して私などが東京へ行かれよう、と胸の中で呟やいたのである。そして、今日隣家の松太郎といふ若者が、源助さんと一緒に東京に行きたいと言つた事を思出して、男ならばだけれども、と考へてゐた。

三

翌日は、例の樣に水を汲んで來てから、朝草刈に行かうとしてゐると、秋の雨がしと〳〵降り出して來た。廐には未だ二日分許り秣があつたので、隣家の松太郎の姉に誘はれたけれども、父爺が行かなくても可いと言つた。仕樣事なさに、一日門口へ立つて見たり、中へ入つて見たりしてゐたが、蛇目傘をさした源助さんの姿が、時々彼方此方に見えた。禿頭の忠太爺と共に、お定の家の前を通つた事もあつた。其時、お定は何故といふ事もなく家の中へ隱れた。

一日降つた蕭かな雨が、夕方近くなつて霽つた。と、穢らしい子供等が家々から出て來て、馬糞交りの泥濘を、素足で捏ね返して、學校で習つた唱歌やら流行歌やらを歌ひ乍ら、他愛もなく騷いでゐる。

お定は果然と門口に立つて、見るともなく其を見てゐると、大工の家のお八重の小な妹が駈けて來て、一寸來て呉れといふ姉の傳言を傳へた。

また昨日の樣に、今夜何處かに酒宴でもあるのかと考へて、お定は愼ましやかに水浴を濟してから、大工の家へ行つた。お八重は門口に待つて居て、何か四邊を憚る樣子で、密と裏口へ伴れて出た。

『何處さ行げや？』と大工の妻は爐邊から聲をかけたが、お八重は後も振向かずに、

『裏さ。』と答へた儘、戸を開けると、雞が二羽、こツこツといひながら中に入つた。

二人は、裏畑の中の材木小屋に入つて、積み重ねた角材に凭れ乍ら、雨に濕つた新しい木の香を嗅いで、小一時間許りも密々話つてゐた。

お八重の話は、お定にとつて少しも思設けぬ事であつた。

『お定さん。お前も聞いたべす、源助さんから昨晩、東京の話を。』

『聞いたす。』と靜かに言つて、お八重の顏を打瞶つたが、何故か、東京の話と言つただけで、胸が遽かに動悸がして來る樣な氣がした。

稍あつて、お八重は、源助さんと一緒に東京に行かぬかと言ひ出した。お定にとつては、無論思設けぬ相談ではあつたが、然し、盆［illegible］が

つかりした心に源助を見た娘には、必ずしも全然縁のない話でもない。切りなしに騒ぎ出す胸に、両手を重ねたから、お定は大きい目を瞬つて、言葉少なにお八重の言ふ所を聞いた。
　お八重は、もう自分一人は確然と決心してる様な口吻で、聲は低いが、眼は若々しくも輝く。親に言へば無論容易に許さるべき事でないから、默つて行くと言ふ事で、請賣の東京の話を長々として後、怎せ生れたからには恁麼田舍に許り居た所で詰らぬから、一度は東京も見ようぢやないか。「若い時ア二度無い」といふ流行唄の文句まで引いて、熱心にお定の決心を促すのであつた。
　で、其方法も別に面倒な事は無い。立つ前に密り衣服などを取纏めて、幸ひ此村から盛岡の停車場に行つて驛夫をしてる千太郎といふ人があるから、馬車追の權作老爺に頼んで、豫じめ其千太郎の宅まで屆けて置く。そして、源助さんの立つ前日に、一晩泊で盛岡に行つて來ると言つて出て行つて、源助さんと盛岡から一緒に乘つて行く。汽車賃は三圓五十錢許りなさうだが、自分は郵便局へ十八圓許りも貯金してるから、それを引出せば何も心配がない。若し都合が惡いなら、お定の汽車賃も出すと言ふ。然しお定も、二三年前から田の畔に植ゑる豆を自分の私得に貰つてゐて、それを賣つたのやら何やらで、矢張九圓近くも貯めてゐた。
　東京に行けば、言ふまでもなく女中奉公をする考へなので、それが奈何に辛くとも野良稼ぎに比べたら、朝飯前の事ぢやないかとお八重が言つた。日本一の東京を見て、食はして貰つた上に月四圓、此村あたりの娘には、これ程好い話はない。二人は、白粉やら油やら元結やら、月々の入費を勘定して見たが、それは奈何に諸式の高い所にしても、月に一圓とは要らなかつた。毎月三圓宛殘して年に三十六圓、三年辛抱するとすれば百圓の餘にもなる。歸りに半分だけ衣服や土産を買つて來ても、五十圓の正金が持つて歸られる。
「末藏が家でや、唯四十圓で家屋敷白井様に取上げられたでねえすか。」とお八重が言つた。
「雖然なす、お八重さん、源助さん眞に伴れてつて呉えべすか？」とお定は心配相に訊く。
「伴れて行くともす。今朝誰も居ねえ時聞いて見たば、伴れてつても可えツて居たもの。」
「雖然、あの人だつて、お前達の親達さ、申譯なくなるべす。」
「それでなす、先方ア着いてから、一緒に行つた樣でなく、後から追驅けて來たで、當分東京さ置くからつて手紙寄越す樣にしたものす。」
「あの人だばさ、眞に世話して呉える人にや人だども。」
　此時、懷手してぶらりと裏口から出て來た源助の姿が、小屋の入口から見えたので、お八重は手招ぎしてそれを呼び入れた。源助はニタリニタリ相好を崩して笑ひ乍ら、入口に立ち塞つたが、
『まだ、日が暮れねえのに情夫の話ぢやか、天井の鼠が笑ひますぜ。』
　お八重は手を擧げて其高聲を制した。「あの、源助さん、今朝の話ア眞實でごあんすよ。」
　源助は一寸眞面目な顔をしたが、また直ぐに笑を含んで、「応、好し〱、此老爺さんが引受けたら間違ッこはねえが、何だな、お定さんも謀叛の一味に加つたな？」
「謀叛だと、まあ！」とお定は目を大きくした。
「だがねえお八重さん、お定さんもだ。まあ熟く考へて見る事たね。俺は奈何でも構はねえが、彼方へ行つてから後悔でもする樣ぢや、貴女方自分の事たからね。汽車の中で乳飲みたくなつたと言つて、泣出されでもしちや、大變な事になるから喃。」

『誰ア其麼に……。』とお八重は肩を聳かした。

『まあさ。然ら直ぐ怒らねえでも可いさ。』と源助はまたしても笑つて、『一度東京へ行きや、もう怎麼所にや一生歸つて來る氣になりませんぜ。』

お八重は「歸つて來なくても可い。」と思つた。お定は「歸つて來られぬ事があるものか。」と思つた。

程なく四邊がもう薄暗くなつて行くのに氣が付いて、二人は其處を出た。此時までお定は、まだ行くとも行かぬとも言はなかつたが、兎も角も明日決然した返事をすると言つて置いて、も一人お末といふ娘にも勸めようかと言ふお八重の言葉には、お末の家が寡人だから勸めぬ方が可いと言ひ、此話は二人限の事にすると堅く約束して別れた。そして、表道を歩くのが怎やら氣が咎める樣で、裏路傳ひに家へ歸つた。明日返事するとは言つたものの、お定はもう心の底では確然と行く事に決つてゐたので。

家に歸ると、母は勝手に手ランプを點けて、夕餉の準備に急はしく立働いてゐた。お定は馬に乾秣を刻つて鹽水に掻廻して與つて、一擔ぎ水を汲んで來てから夕餉の膳に坐つたが、無暗に氣がそは〳〵してゐて、麥八分の飯を二膳とは喰べなかつた。

お定の家は、村でも兎に角食ふに困らぬ程の農家で、借財と云つては一文もなく、多くはないが田も畑も自分の所有、馬も青と栗毛と二頭飼つてゐた。兩親はまだ四十前の働者、母は眞の好人物で、吾兒にさへも強い語一つ掛けぬといふ性、父は又父で、村には珍らしく酒も左程嗜まず、定次郎の實直といへば白井樣でも大事の用には時に選り上げて使ふ位で、力自慢に若者を怒らせるだけが惡い癖だと、老人達が言つてゐた。祖父も祖母も四五年前に死んで、お定を頭に男兒二人、家族といつては其丈で、長男の定吉は、年こそまだ十七であるけれども、身體から働振から、もう立派に一人前の若者である。

お定は今年十九であつた。七八年も前までは、十九にもなつて獨身でゐると、餘され者だと言つて人に笑はれたものであるが、此頃では此村でも十五十六の嫁といふものは滅多になく、大抵は十八十九、隣家の松太郎の姉などは二十一になつて未だ何處にも縁づかずにゐる。お定は、打見には一歳も二歳も若く見える方で、脊恰好の婷乎としたさまは、農家の娘に珍らしい位、丸顔に黒味勝の眼が大きく、鼻は高くないが、笑窪が深い。美しい顔立ではないけれど、愛嬌に富んで、色が白く、漆の様な髪の生際の揃つた工合に、得も言へぬ艶かしさが見える。稚い時から極く穏しい性質で、人に抗ふといふ事が一度もなく、口惜い時には物陰に隠れて泣くぐらゐなもの、年頃になつてからは、村で一番老人達の氣に入つてるのが此お定で、「お定ッ子は穏しく可え噺。」と言はれる度、今も昔も顔を染めては、「俺知らねえす。」と人の後に隠れる。

小學校での成績は、同じ級のお八重などよりは遙と劣つてゐたさうだが、唯一つ得意なのは唱歌で、其爲に女教員からは一番可愛がられた。お八重は此反對に、今は他に嫁づいた異腹の姉と一緒に育つた所爲か、我儘の、我の強い兒で、娘盛りになつてからは、手もつけられぬ阿婆摺になつた。顔も亦、評判娘のお澄といふのが一昨年赤痢で亡くなつてから、村で右に出る者がないので、目尻に少し險しい皺があるけれど、面長のキリリとした輪郭が田舎に惜しい。此反對な二人の莫逆に親密なのは、他の娘共から常に怪まれてゐた位で、また半分は嫉妬氣味から、「那麼阿婆摺と一緒にならねえ方が可えす。」と、態々お定に忠告する者もあつた。

お定が其夜枕についてから、一つには今日何

にも働かなかつた爲か、怎しても眠れなくて、三時間許りも物思ひに耽つた。眞黒に煤けた板戸一枚の彼方から、安々と眠つた母の寝息を聞いては、此母、此家を捨てて、何として東京などへ行かれようと、すぐ涙が流れる。と、其涙の乾かぬうちに、東京へ行つたら源助さんに書いて貰つて、手紙だけは怠らず寄越す事にしようと考へる。すると、すぐ又三年後の事が頭に浮ぶ。立派な服裝をして、絹張の傘を持つて、金を五十圓も貯めて來たら、兩親だつて喜ばぬ筈がない。嗚呼其時になつたら、お八重さんは甚麼に美しく見えるだらうと思ふと、其お八重の、今日日を輝かして熱心に語つた美しい顔が、怎やら嫉ましくもなる。此夜のお定の胸に、最も深く刻まれてるのは、實に其お八重の顔であつた。怎してお八重一人だけ東京にやられよう！

それからお定は、小學校に宿直してゐる藤田といふ若い教員の事を思出すと、何日になく激しく情が動いて、私が之程思つてるのにと思ふと、熱かい涙が又しても枕を濡らした。これはお定の片思ひなので、否、實際はまだ思ふといふ程思つてるでもなく、藤田が四月に轉任して來て以來、唯途で逢つて叩頭するのが嬉しかつた位で、つい十日許り前、朝草刈の歸りに、背負うた千草の中に、桔梗や女郎花が交つてゐたのを、村端で散歩してゐた藤田に二三本呉れぬかと言はれた、その時初めて言葉を交したに過ぎぬ。その翌朝からは、毎朝咲殘りの秋の花を一束宛、別に手に持つて來るけれども、藤田に逢ふ機會がなかつた。あの先生さへ優しくして呉れたら、何も私は東京などへ行きもしないのに、と考へても見たが、又、今の身分ぢや兎ても先生のお細君さんなどに成れぬから、矢張三年行つて來るが第一だとも考へる。

四晩に一度は屹度忍んで寝に來る丑之助――兼大工の弟子で、男振りもよく、年こそまだ二十三だが、若者中で一番幅の利く――の事も、無論考へられた。恁る田舍の習慣で、若い男は、忍んで行く女の數の多いのを誇りにし、娘共も亦、口に出していふ事は無いけれ共、通つて來る男の多きを喜ぶ。さればお定は、丑之助がお八重を初め三人も四人も情婦を持つてる事は熟く知つてゐるので、或晩の如きは、男自身の口から其情婦共の名を言はして擽つて遣つた位。二人の間は別に思合つた譯でなく、末の約束など眞面目にした事も無いが、怎かして寝つかれぬ夜などは、今頃丑さんが××××ゐるかと、嫉いて見た事のないでもない。私とお八重さんが居なくなつたら、丑さんは屹度お作の所に許りゆくだらうと考へると、何かしら妬ましい様な氣もした。

胸に浮ぶ思の數々は、それからそれと果しも無い。お定は幾度か一人で泣き、幾度か一人で微笑んだ。そして、つい、うと〳〵となりかゝつた時、勝手の方に寝てゐる末の弟が、何やら聲高に寝言を言つたので、はツと眼が覺め、嗚呼あの弟は淋しがるだらうなと考へて、睡氣交りに涙ぐんだが、少女心の他愛なさに、二人の弟が貰ふべき嫁を、誰彼となく心で選んでゐるうちに、何時しか眠つて了つた。

四

目を覺ますと、弟のお清書を横に逆まに貼つた、枕の上の煤けた櫺子が、僅かに水の如く仄めいてゐた。誰もまだ起きてゐない。遠近で二番鶏が勇ましく時をつくる。けたたましい羽搏きの音がする」

お定はすぐ起きて、寝室にしてゐる四疊半許りの板敷を出た。手探りに草履を突かけて、表裏の入口を開けると、廐では乾秣を欲しがる馬の、破目板を蹴る音がゴト〳〵と鳴る。大桶を

二つ擔いで、お定は村端の樋の口といふ水汲場に行つた。

例になく早いので、まだ誰も來てゐなかつた。漣一つ立たぬ水槽の底には、消えかかる星を四つ五つ鏤めた黎明の空が深く沈んでゐた。清冽な秋の曉の氣が、いと冷かに襟元から總身に沁む。叢にはまだ夢の樣に蟲の音がしてゐる。

お定は暫時水を汲むでもなく、水鏡に寫つた我が顏を瞶めながら、呆然と昨晚の事を思出してゐた。東京といふ所は、ずつと〳〵遠い所になつて了つて、自分が怎して其麽所まで行く氣になつたらうと怪まれる。矢張自分は此村に生れたのだから、此村で一生暮らす方が本當だ。怎うして毎朝水汲に來るのが何より樂しい。話の樣な繁華な所だつたら、乾度怎ういふ澄んだ美しい水などが見られぬだらうなどと考へた。と、後に人の足音がするので、振向くと、それはお八重であつた。矢張桶をぶら擔いで來るが、寢くたれ髮のしどけなさ、起きた許りで腫ぼつたくなつてゐる瞼さへ、殊更艶かしく見える。あの人が行くのだもの、といふ考へが、呆然とした頭をハッと明るくした。

『お八重さん、早えなッす。』

『お前こそ早えなッす。』と言つて、桶を地面に下した。

『ああ、まだ蟲ア啼いてる！』と、お八重は少し顏を歪めて、後毛を搔上げる。遠く近くで戶を開ける音が聞える。

『決めたす、お八重さん。』

『決めたすか？』と言つたお八重の眼は、急に晴々しく輝いた。『若しもお前行かなかつたら、俺一人奈何すべと思つてだつけす。』

『だつてお前怎しても行くべえす？』

『お前も決めたら、一緒に行くのす。』と言つて、お八重は輕く笑つたが、『そだつけ、大變だお定さん、急がねえばならねえす。』

『怎してす？』

『怎してつて、昨晚聞いたら、源助さん明後日立つで、早く準備せッてゐたす。』

『明後日？』と、お定は目を瞠つた。

『明後日！』と、お八重も目を瞠つた。

二人は暫し互みの顏を打瞶つてゐたが、『でヤ、明日盛岡さ行がねばならねえな。』と、お定が先づ我に歸つた。

『然うだす。そして今夜のうちに、衣服たの何包んで、權作老爺さ賴まねえばならねえす。』

『だらハア、今夜すか？』と、お定は再目を瞠つた。

左う右うしてるうちに、一人二人と他の水汲が集つて來たので、二人はまだ何か密々語り合つてゐたが、軈て滿々と水を汲んで擔き上げた。そして、すぐ二三軒先の權作が家へ行つて、『老爺ア起きたがす？』と、表から聲をかけた。

『何時まで寢てるべえせア。』と、中から胴間聲がする。

二人は目を見合して、ニッコリ笑つたが、桶を下して入つて行つた。馬車追の老爺は丁度爐の前で乾秣を刻むところであつた。

『明日盛岡さ行ぐすか？』

『明日がえ？　行ぐどもせア。權作ア此老年になるだが、馬車曳つぱられえでヤ、腹減つて斃死るだあよ。』

『だら、少許持つてつて貰ひてえ物が有るがな。』

『何程でも可えだ。明日ア歸り荷だで、行ぐ時ア空馬車曳つぱつて行ぐのだもの。』

『其麽に澤山でも無えす。俺等も明日盛岡さ行ぐども、手さ持つてけば邪魔だです。』

『そんだら、ハア、お前達も馬車さ乘つてつた

ら可がべせア。』

二人は父目を見合して、二言三言諜し合つてゐたが、

『でア老爺な、俺等も乘せでつて貰ふす。』

『然うした御座え。唯、菓子の掛茶屋さ行つたら、盛切酒一杯買ふだアせ。』

『買ふともす。』と、お八重は晴やかに笑つた。

『お定ッ子も行ぐのがえ？』

お定は一寸狼狽へてお八重の顏を見た。お八重は再笑つて、『一人だば淋しだで、お定さんにも行つて貰ふべがと思つてす。』

『ハア、俺ア老人だで可えが、黑馬の奴ア意屈しねえで喜ぶでヤ。だら、明日ア早く來て御座え。』

此日は、二人にとつて此上もない忩がしい日であつた。お定は、水汲から歸ると直ぐ朝草刈に平田野へ行つたが、莫迦に氣がそは〳〵して、朝露に濡れた利鎌が、兎角休み勝になる。離れ離れの松の樹が、山の端に登つた許りの朝日に、長い影を草の上に投げて、葉毎に珠を綴つた無數の露の美しさ。秋草の香が初蕈の香を交へて、深くも胸の底に沁みる。利鎌の動く毎に、サッサッと音して臥る草には、萎枯れた桔梗の花もあつた。お定は胸に往來する取留もなき思ひに、黑味勝の眼が曇つたり晴れたり、一背負だけ刈るに、例より餘程長くかゝつた。

朝草を刈つて來てから、馬の手入を濟ませて、朝餉を了へたが、十坪許り刈り殘してある山手の畑へ、父と弟と三人で粟刈に行つた。それも午前には刈り了へて、弟と共に黑馬と栗毛の二頭で家の裏へ運んで了つた。

母は裏の物置の側に荒蓆を布いて、日向ぼッこをしたがら、打殘しの麻絲を砧つてゐる。三時頃には父も田廻りから歸つて來て、廐の前の乾秣場で、鼻唄ながらに鉈や鎌を研ぎ初めた。

お定は唯もう氣がそは〳〵して、別に東京の事を思ふでもなく、明日の別れを悲むでもない、唯何といふ事なくそは〳〵してゐた。裁縫も手につかず、坐つても居られず、立つても居られぬ。

大工の家へ裏傳ひにゆくと、丁度お八重一人ゐた所であつたが、もう風呂敷包が二つ出來上つて、押入の隅に隱してあつた。其處へ源助が來て、明後日の夕方までに盛岡の停車場前の、松本といふ宿屋に着くから、其處へ訪ねて一緒になるといふ事に話をきめた。

それからお八重と二人家へ歸ると、父はもう鉈鎌を研ぎ上げたと見えて、薄暗い爐邊に一人踏込んで、莨を吹かしてゐる。

『父爺や。』とお定は呼んだ。

『何しや？』

『明日盛岡さ行つても可えが？』

『お八重ッ子どがえ？』

『然うしや。』

『八幡樣のお祭禮にや、まだ十日もあるべえどら。』

『八幡樣までにや、稻刈が初るべえな。』

『何しに行ぐだあ？』

『お八重さんが千太郎さま宅さ用あつて行くで、俺も伴れてぐ言ふでせア。』

『可がべす、老爺な。』とお八重も喙を容れた。

『小遣錢があるがえ？』

『少許だばあるども、吳えらば吳えで御座え。』

『またお八重ッ子から、御馳走になるべな。』

と言つて、定次郎は腹掛から五十錢銀貨一枚出して、上框に腰かけてゐるお定へ投げてよこした。

お八重はチラとお定の顏を見て、首尾よしと許り笑つたが、お定は父の露疑はぬ樣を見て、穩しい娘だけに胸が迫つた。さしぐんで來る淚を見せまいと、ツイと立つて裏口へ行つた。

五

夕方、一寸でも他所ながら暇乞に、學校の藤田を訪ねようと思つたが、其暇もなく、農家の常とて夕餉は日が暮れてから濟ましたが、お定は明日着て行く衣服を疊み直して置くと云つて、手ランプを持つた儘、寢室にしてゐる四疊半許りの板敷に入つた。間もなくお八重が訪ねて來て、さり氣ない顏をして入つたが、

『明日着て行ぐ衣服すか？』と、態と大きい聲で言つた。

『然うす。明日着て行くで、疊み直してるす。』と、お定も態と高く答へて、二人目を見合せて笑つた。

お八重は、もう全然準備が出來たといふ事で、今其風呂敷包は二つとも持出して來たが、此家の入口の暗い土間に隱して置いて入つたと言ふ事であつた。で、お定も急がしく萌黄の大風呂敷を擴げて、手廻りの物を集め出したが、衣服といつても唯六七枚、帶も二筋、頓心には色々と不滿があつて、この袷は少し老けてゐるとか、此袖口が餘り開き過ぎてゐるとか、密々話に小一時間もかゝつて、漸々準備が出來た。

父も母もまだ爐邊に起きてるので、も少許待つてから持出さうと、お八重は言ひ出したが、お定は些と躊躇してから、立つて明りの煤けた櫺子に手をかけると、端の方三本許り、格子が何の事もなく取れた。それを見たお八重は、お定の肩を叩いて、

『この人アまあ、可え工夫してること。』と笑つた。お定も心持顏を赧くして笑つたが、風呂敷包は、難なく其處から戶外へ吊り下された。格子は元の通りに直された。

二人はそれから權作老爺の許へ行つて、二人前の風呂敷包を預けたが、戶外の冷かな夜風が、耳を聾する許りな蟲の聲を漂はせて、今夜限り此生れ故鄕を逃げ出すべき二人の娘に、いふ許りない心悲しい感情を起させた。所々降つて來さうな秋の星、八日許りの片割月が浮雲の端に澄み切つて、村は家竝の屋根が黑く、中央程の郵便局の軒燈のみ淋しく遠く光つてゐる。二人は、何といふ事もなく、もう濕聲になつて、斷々に語りながら、他所ながらも家々に別れを告げようと、五六町しかない村を、南から北へ、北から南へ、幾度となく手を取合つて吟行うた。路で逢ふ人には、何日になく懷しく此方から優しい聲を懸けた。作右衛門店にも寄つて、お八重は手巾を二枚買つて、一枚はお定に呉れた。何處ともない笑聲、子供の泣く聲もする。とある居酒屋の入口からは、火光が赤く洩れて街路を横さまに白い線を引いてゐたが、蟲の音も憚からぬ醉うた濁聲が、時々けたたましい其店の嚊の笑聲を伴つて、喧嘩でもあるかの樣に一町先までも聞える。二人は其騷々しい聲すらも、なつかしさうに立止つて聞いてゐた。

それでも、二時間も歩いてるうちには、氣の紛れる話もあつて、お八重に別れてスタ〳〵と家路に歸るお定の眼には、もう涙が滲んでゐず、胸の中では、東京に着いてから手紙を寄越すべき人を彼是と數へてゐた。此村から東京へ百四十五里、其麼事は知らぬ。東京は仙臺といふ所より遠いか近いか、それも知らぬ。唯明日は東京にゆくのだと許り考へてゐる。

枕に就くと、今日位身體も心も急がしかつた事がない樣な氣がして、それでも、何となく物足らぬ樣な、心悲しい樣な、恍乎とした疲心地で、すぐうと〳〵と眠つて了つた。

ふと目が覺めると、消すを忘れて眠つた枕邊の手ランプの影に、何處から入つて來たか、蟋蟀が二疋、可憐な羽を顫はして啼いてゐる。遠くで誰やら若者が吹く笛の音のする所から見れば、

まだ左程夜が更けてもゐぬらしい。

と櫺子の外にコツコツと格子を叩く音がする。あゝ之で目が覺めたのだなと思つて、お定は直ぐ起き上つて、密りと格子を脱した。丑之助が身輕に入つて了つた。

手ランプを消した。

一時間許り經つと、丑之助がもう歸準備をするので、これも今夜限だと思ふと、お定は急に愛惜の情が喉に塞つて來て、熱い涙が流るゝ如く溢れた。別に丑之助に未練を殘すでも何でもないが、唯もう悲さが一時に胸を充たしたので、お定は矢庭に兩手で、力の限り男を抱擁めた。男は暗の中にも、つひぞ無い事なので吃驚して、目を圓くしてゐたが、やがてお定は忍音に歔欷し初めた。

丑之助は何の事とも解りかねた。或は此お定ッ子が自分に惚れたのぢやないかとも思つたが、何しろ餘り突然なので、唯目を圓くするのみだ。

『怎したけな？』と囁いてみたが、返事がなくて一層歔欷く。と、平常から此女の穩しく優しかつたのが、俄かに可憐くなつて來て、丑之助は再、

『怎したけな、眞に？』と繰返した。『俺ア何か惡い事でもしたげえ？』

お定は男の胸に密接と顔を推着けた儘で、強く頭を振つた。男はもう無上にお定が可憐くなつて、

『だら怎しただよ？　俺ア此頃少許忙しくて四日許り來ねえでたのを、汝ア憤つたのけえ？』

『譃だ！』とお定は囁く。

『譃でねえでヤ。俺ア眞實に、汝アせえ承知して吳えれば、夫婦になりてえど思つてるのに。』

『譃だ！』とお定はまた繰返して、一層強く男の胸に顔を埋めた。

暫しは女の歔欷く聲のみ聞えてゐたが、丑之助は、其漸く間斷々々になるのを待つて、

『汝ア頬片、何晩來ても天鵞絨みてえだな。十四五の娘子と寢る樣だ。』と言つた。これは此若者が、殆んど來る毎にお定に言つてゆく讚辭なので。

『十四五の娘子共とも寢てるだべせア。』とお定は鼻をつまらせ乍ら言つた。男は、女の機嫌の稍直つたのを見て、

『譃だあでヤ。俺ア、酒でも飲んだ時ア他の女子さも行ぐども、其麼に浮氣ばしてねえでヤ。』

お定は、胸の中で、此丑之助にだけは東京行の話をしても可からうと思つて見たが、それではお八重に濟まないといつて、此儘何も言はずに別れるのも殘惜しい。さて怎したものだらうと頻りに先刻から考へてゐるのだが、これぞといふ決斷もつかぬ。

『丑さん。』と稍あつてから囁いた。

『何しや？』

『俺ア明日……』

『明日？　明日の晩も來るせえ。』

『そでねえだ。』

『だら何しや？』

『明日俺ア、盛岡さ行つて來るす。』

『何しにせヤ？』

『お八重さんが千太郎さん許さ行くで、一緒に行つて來るす。』

『然うが。八重ッ子ア今夜、何とも言はながつけえな。』

『だらお前、今夜もお八重さんさ行つて來たな？』

『然うだねえでヤ。』と言つた　、男は少許狼狽へた。

『たら何時逢つたす？』

『何時ッて、八時頃にせえ。ホラ、あのお芳ッ子許の店でせえ。』

『譃だす、此人ア。』

『怎してせえ？』と益々狼狽へる。

『怎しても怎うしても、今夜日ャ暮れッとがら、俺アお八重さんと許り歩いてだもの。』

『だつて。』と言つて、男はクスクス笑ひ出した。

『ホレ見らせえ！』と女は稍聲高く言つたが、別に怒つたでもない。

『明日汽車で行くだか？』

『權作老爺の荷馬車行くで。』

『だら、朝早かべせえ。』と言つたが、『小遣錢奥えべかな？　ドラ、手ランプ點けろでャ。』

お定が默つてゐたので、丑之助は自分で手探りに燐寸を擦つて手ランプに移すと、其處に脫捨ててある襯衣の衣嚢から財布を出して、一圓紙幣を一枚女の枕の下に入れた。女は手ランプを消して、

『餘計だす。』

『餘計な事ア無えせア。もつと有るものせえ。』

お定は、平常ならば怎麼事を餘り快く思はぬのだが、常々添寢した男から東京行の餞別を貰つたと思ふと、何となく嬉しい。お八重には怎麼事が無からうなどと考へた。

先刻の蟋蟀が、まだ何處か室の隅ッこに居て、時々思出した樣に、哀れな音を立ててゐた。此夜お定は、怎しても男を抱擁めた手を弛めず、夜明近い鷄の頻りに啼立てるまで、廐の馬の鬣を振ふ音や、ゴトゴト破目板を蹴る音を聞きながら、これといふ話もなかつたけれど、丑之助を歸してやらなかつた。

六

其翌朝は、グッスリと寢込んでゐる所をお八重に起されて、眠い眼を擦り〳〵、麥八分の冷飯に水を打懸けて、形許り飯を濟まし、起きたばかりの父母や弟に簡單な挨拶をして、村端れ近い權作の家の前へ來ると、方々から一人二人水汲の女共が、何れも眠相な顏をして出て來た。荷馬車はもう準備が出來てゐて、權作は噂に何やら口小言を言ひながら、脚の太い黑馬を曳き出して來て馬車に繫いでゐた。

『何處へ？』と問ふ水汲共には『盛岡へ。』と答へた。二人は荷馬車に布いた茣蓙の上に、後向になつて行儀よく坐つた。傍には風呂敷包。馬車の上で髮を結つて行くといふので、お八重は別に櫛やら油やら懷中鏡やらの小さい包みを持つて來た。二人共木綿物ではあるが、新しい八丈擬ひの縞の袷を着てゐた。

軈て權作は、ピシャリと黑馬の尻を叩いて、『ハイ〳〵。』と言ひながら、自分も馬車に乘つた。馬は白い息を吐きながら、首を向けて歩き出した。

二人は、まだ頭腦の中が全然覺めきらぬ樣で、呆然として、段々後方に遠ざかる村の方を見てゐたが、道路の兩側はまだ左程古くない松並木、曉の冷さが爽かな松風に流れて、叢の蟲の音は細い。一町許り來た時、村端れの水汲場の前に、白手拭を下げた男の姿が見えた。それは、毎朝早く顏洗ひに來る藤田であつた。お定は膝の上に握つてゐた新しい手巾を取るより早く、少し伸び上つてそれを振つた。藤田は立止つて凝然と此方を見てゐる樣だつたが、下げてゐた手拭を上げたと思ふ間に、道路は少許曲つて、並木の松に隱れた。と、お定は今の素振を、お八重が何と見たかと氣がついて、心羞かしさと落膽した心地でお八重の顏を見ると、其美しい眼には涙が浮んでゐた。それを見ると、お定の眼にも遽かに涙が湧いて來た。

盛岡へ五里を古い新しい松並木、何本あるか數へた人はない。二人が髮を結つて了ふまでに二里過ぎた。あと三里は權作の無駄口と、二人が稚い時の追憶談、

理髪師の源助さんは、四年振で突然村に來て、七日の間到る所に驩待された。そして七日の間東京の繁華な話を繰返した。村の人達は異樣な印象を享けて一同多少づゝ羨望の情を起した。もう四五日も居たなら、お八重お定と同じ志願を起す者が、三人も五人も出たかも知れぬ。源助さんは滿腹の得意を以て、東京見物に來たら必ず自分の家に寄れといふ言葉を人每に殘して、七日目の午後に此村を辭した。好摩のステイションから四十分、盛岡に着くと、約の如く松本といふ宿屋に投じた。

不取敢湯に入つてると、お八重お定が訪ねて來た。一緒に晩餐を了へて、明日の朝は一番汽車だからといふので、其晩二人も其宿屋に泊る事にした。

源助は、唯一本の銚子に一時間も費りながら、東京へ行つてからの事——言語を可成早く改めねばならぬとか、二人がまだ見た事のない電車への乘方とか、掏摸に氣を付けねばならぬとか、種々な事を詳く喋つて聞かして、九時頃に寢る事になつた。八疊間には寢具が三つ、二人は何れへ寢たものかと立つてゐると、源助は中央の床へ滑り込んで了つた。仕方がないので、二人は右と左に離れて寢たが、夜中になつてお定が一寸目を覺ました時は、細めて置いた筈の、自分の枕邊の洋燈が消えてゐて、源助の高い鼾が、怎やら疊三疊許り彼方に聞えてゐた。

翌朝は二人共源助に呼起されて、髮を結ふも朝飯を食ふも匆卒に、五時發の上り一番汽車に乘つた。

七

途中で機關車に故障があつた爲、三人を載せた汽車が上野に着いた時は、其日の夜の七時過であつた。長い長いプラットフォーム、潮の樣な人、お八重もお定も唯小さくなつて源助の兩袂に縋つた儘、漸々の思で改札口から吐出されると、何百輛とも數知れず列んだ腕車、廣場の彼方は晝を欺く滿街の燈火、お定はもう之だけで氣を失ふ位お魂消て了つた。

腕車が三輛、源助にお定にお八重といふ順で驅け出した。お定は生れて初めて腕車に乘つた。まだ見た事のない夢を見てゐる樣な心地で、東京もなければ村もない、自分といふものも何處へ行つたやら、存るものは前の腕車に源助の後姿許り。唯懵乎として了つて、別に街々の賑ひを仔細に見るでもなかつた。燦爛たる火光、千萬の物音を合せた樣な轟々たる都の響。其火光がお定を溶かして了ひさうだ。其響がお定を壓潰して了ひさうだ。お定は唯もう膝の上に載せた萌黄の風呂敷包を、生命よりも大事に抱いて、胸の動悸を聽いてゐた。周匝を數限りなき美しい人立派な人が通る樣だ。高い高い家もあつた樣だ。

少し暗い所へ來て、ホッと息を吐いた時は、腕車が丁度本郷四丁目から左に曲つて、菊坂町に入つた所であつた。お定は一寸振返つてお八重を見た。

軈て腕車が止つて、「山田理髪店」と看板を出した明るい家の前。源助に促されて硝子戸の中に入ると、目が眩く程明るくて、壁に列んだ幾面の大鏡、洋燈が幾つも幾つもあつて、白い物を着た職人が幾人も幾人もゐる。何れが實際の人で何れが鏡の中の人なやら、見分もつかぬうちに、また源助に促されて、其店の片隅から疊を布いた所に上つた。

上つたは可いが、何處に坐れば可いのか一寸周章いて了つて、二人は暫し其處に立つてゐた。

源助は、

『東京は流石に暑い。腕車の上で汗が出たから喃。』と言つて、突然羽織を脫いで投げようとすると、三十六七の小作な內儀さんらしい人がそ

れを受取つた。

「怎だ、俺の留守中何も變りはなかつたかえ?」

「別に。」

源助は、長火鉢の彼方へドッカと胡坐をかいて、

『さあ〳〵、お前さん達もお坐んなさい。さあ、ずつと此方へ。』

「さあ、何卒。」と内儀さんも言つて、不思議相に二人を見た。二人は人形の樣に其處に坐つた。お八重が叩頭をしたので、お定も遲れじと眞似した。源助は、

『お吉や、この娘さん達はな、そら俺がよく話した南部の村の、以前非常い事世話になつた家の娘さん達でな。今度是非東京へ出て一二年奉公して見たいといふので、一緒に出て來た次第だがね。これは俺の嬶ですよ。」と二人を見る。

「まあ然うですか。些とお手紙にも其麼事があつたつて、新太郎が言つてましたがね。お前さん達、まあ遠い所をよくお出になつたことねえ、眞に。」

「何卒ハア……」と、二人は血を吐く思で漸く言つて、穩しく頭を下げた。

「それにな、今度七日遊んでるうち、此方の此お八重さんといふ人の家に厄介になつて來たんだよ。」

「おや然う。まあ甚麼にか宅ちや御世話樣になりましたか。眞に遠い所をよく入來つた。まあまあお二人共自分の家へ來た積りで、緩り見物でもなさいましよ。』

お定は此時、些とも氣が付かずに何もお土産を持つて來なかつたことを思つて、一人胸を痛めた。

お吉は小作りなキリリとした顏立の女で、二人の田舍娘には見た事もない程立居振舞が敏捷い。黑繻子の半襟をかけた唐棧の袷を着てゐた。

二人は、それから名前や年齡やをお吉に訊かれたが、大抵源助が引取つて返事をして呉れた。負けぬ氣のお八重さへも、何か喉に塞つた樣で、一言も口へ出ぬ。況してお定は、以後先、怎して那麼滑かな言葉を習つたもんだらう」と、心細くなつて、お吉の顏が自分等の方に向くと、また何か問はれる事と氣が氣でない。

「阿父樣、お歸んなさい。』と言つて、源助の一人息子の新太郎も入つて來た。二人にも挨拶して、六年許り前に一度お定らの村に行つた事があるところから、色々と話を出す。二人は再之の應答に困らせられた。新太郎は六年前の面影が殆ど無く、今はもう二十四五の立派な男、父に似ず脊が高くて、キリリと角帶を結んだ恰好の好さ、髮は綺麗に分けてゐて、鼻が高く、色だけは昔ながらに白い。

一體、源助は以前靜岡在の生れであるが、新太郎が二歲の年に飄然と家出して、東京から仙臺盛岡、其盛岡に居た時、恰も白井家の親類な酒造家の隣家の理髮店にゐたものだから、世話する人あつてお定らの村に行つてゐたので、父親に死なれて鄕里に歸ると間もなく、目の見えぬ母とお吉と新太郎を連れて、些少の家屋敷を賣拂ひ、東京に出たのであつた。其母親は去年の暮に死んで了つたので。

お茶も出された。二人が見た事もないお菓子も出された。

源助とお吉との會話が、今度死んだ函館の伯父の事、其葬式の事、後に殘つた家族共の事に移ると、石の樣に堅くなつてるので、お定が足に痲痺がきれて來て、膝頭が疼く。泣きたくなるのを漸く辛抱して、凝と疊の目を見てゐる辛さ。九時半頃になつて、漸々、疲れてゐるだらうから。」と、裏二階の六疊へ連れて行かれた。立つ時は足に感覺がなくなつてゐて、危く前に仆らうとしたのを、これもフラフラしたお八重に抱

きついて、互ひに辛さうな笑ひを洩らした。
風呂敷包を持つて裏二階に上ると、お吉は二人前の蒲團を運んで來て、手早く延べて呉れた。そして狹い床の間に些と腰掛けて、三言四言お愛想を言つて降りて行つた。

二人限になると、何れも吻と息を吐いて、今し方お吉の腰掛けた床の間に膝をすれ〳〵に腰掛けた。かくて十分許りの間、田舍言葉で密々話し合つた。お土產を持つて來なかつた失策は、お八重も矢張氣がついてゐた。二人の話は、源助さんも親切だが、お吉も亦、氣の隔けぬ親切な人だといふ事に一致した。鄕里の事は二人共何にも言はなかつた。

訝しい事には、此時お定の方が多く語つた事で、阿婆摺と謂はれた程のお八重は、始終受身に許りなつて口寡にのみ應答してゐた。枕についたが、二人とも仲々眠られぬ。さればといつて、別に話すでもなく、細めた洋燈の光に、互ひに顏を見ては穩しく微笑を交換してゐた。

八

翌朝は、枕邊の障子が白み初めた許りの時に、お定が先づ目を覺ました。嗚呼東京に來たのだつけ、と思ふと、昨晩の足の痲痺が思出される。で、膝頭を伸ばしたり屈めたりして見たが、もう何ともない。階下ではまだ起きた氣色がない。世の中が森と沈まり返つてゐて、腕車の上から見た雜沓が、何處かへ消えて了つた樣な氣もする。不圖、もう水汲に行かねばならぬと考へたが、否、此處は東京だつたと思つて幽かに笑つた。それから二三分の間は、東京ぢや怎して水を汲むだらうといふ樣な事を考へてゐたが、お八重が寢返りをして此方へ顏を向けた。何夢を見てゐるのか、眉と眉の間に皺を寄せて苦し相に息をする。お定はそれを見ると直ぐ起き出して、聲低くお八重を呼び起した。

お八重は、深く息を吸つて、パッチリと目を開けて、お定の顏を怪訝相に見てゐたが、

「ア、家に居だのでヤなかつけな。」と言つて、ムクリと身を起した。それでもまだ得心がいかぬといつた樣に周匝を見廻してゐたが、

「お定さん、俺ア今夢見て居だつけおんす。」と甘える樣な口調。

「家の方のすか？」

「家の方のす。ああ、可怖がつた。」と、お定の膝に投げる樣に身を凭せて、片手を肩にかけた。

其夢といふのは恁うで。——村で誰か死んだ。誰が死んだのか解らぬが、何でも老人だつた樣だ。そして其葬式が村役場から出た。男も女も、村中の人が皆野送の列に加つたが、巡査が劍の柄に手をかけながら、「物を言ふな、物を言ふな。」と言つてゐた。此の村端から東に折れると、一町半の寺道、其半ば位まで行つた時には、野送の人が男許り、然も皆洋服を着たり紋付を着たりして、立派な帽子を冠つた髭の生えた人達許りで、其中に自分だけが腕車の上に縛られてゆくのであつたが、甚麼人が其腕車を曳いたのか解らぬ。杉の木の下を通つて、寺の庭で三遍廻つて、本堂に入ると、棺桶の中から何ともいへぬ綺麗な服裝をした、美しいお姬樣の樣な人が出て中央に坐つた。自分も男達と共に坐ると、「お前は女だから。」と言つて、ずつと前の方へ出された。見た事もない小僧達が奧の方から澤山出て來て、鐃や太鼓を鳴らし初めた。それは喇叭節の節であつた。と、例の和尙樣が拂子を持つて出て來て、綺麗なお姬樣の前へ行つて叩頭をしたと思ふと、自分の方へ步いて來た。高い足駄を穿いてゐる。そして、自分の前に突立つて、「お八重、お前はあのお姬樣の代りにお墓に入るのだぞ。」と言つた。すると何時の間にか源助さんが側に來てゐて、自分の耳に口をあてて、「厭だと言へ、厭だと言へ。」と

敎へて呉れた。で、『厭だす。』と言つて横を向くと、（此時寢返りしたのだらう。）和尙樣が廻つて來て、鬚の無い顎に手をやつて、丁度鬚を撫で下げる樣な工合にすると、赤い〳〵血の樣な鬚が、延びた〳〵、臍のあたりまで延びた。そして、眼を皿の樣に大きくして、「これでもか？」と怒鳴つた。其時目が覺めた。

お八重がこれを語り了つてから、二人は何だか氣味が惡くなつて來て、暫時意味あり氣に目と目を見合せてゐたが、何方でも胸に思ふ事は口に出さなかつた。左う右うしてゐるうちに、階下では源助が大きな欠をする聲がして、續てお吉が何か言ふ。五分許り過ぎて誰やら起きた樣な氣色がしたので、二人も立つて帶を締めた。で、蒲團を疊まうとしたが、お八重は、

『お定さん、昨晩持つて來た時、此蒲團どア表出して疊まさつてらけすか、裏出して疊まさつてらけすか？』と言ひ出した。

『さあ、何方だたべす。』

『何方だたべな。』

『困つたなア。』

『困つたなす。』と、二人は暫時、呆然立つて目を見合せてゐたが、

『表なやうだつけな。』とお八重。

『表だつたべすか。』

『そだつけぞ。』

『そだたべすか。』

恁て二人は蒲團を疊んで、室の隅に積み重ねたが、何麼に早く階下に行つて可いものか怎か解らぬ。怎しようと相談した結果、兎も角も少時待つてみる事にして、室の中央に立つた儘周匝を見廻した。

『お定さん、細え柱だなす。』と大工の娘。奈何樣、太い材木を不體裁に組立てた南部の田舍の家に育つた者の目には、東京の家は地震でも搖れたら危い位、柱でも鴨居でも細く見える。

『眞にせえ。』とお定も言つた。

で、昨晩見た階下の樣子を思出して見ても、此室の疊の古い事、壁紙の所々裂けた事、天井が手の屆く程低い事などを考へ合せて見ても、源助の家は、二人及び村の大抵の人の想像した如く、左程立派でなかつた。二人はまた其事を語つてゐたが、お八重が不圖、五尺の床の間にかけてある、緣日物の七福神の掛物を指して、

『あれア何だか知たすか？』

『惠比須大黑だべす。』

二人は床の間に腰掛けたが、

『お定さん、これア何だす？』と圖中の人を指す。

『槌持つてるもの、大黑樣だべアすか。』

『此方ア？』

『惠比須だす。』

『すたら、これア何だす？』

『布袋樣す、腹ア出てるもの。あれ、忠太老爺に似たぞ。』と言ふや、二人は其忠太の恐ろしく肥つた腹を思出して、口に袂をあてた儘、暫しは子供の如く笑ひ續けてゐた。

階下では裏口の戶を開ける音や、鍋の音がしたので、お八重が先に立つて階段を降りた。お吉はそれと見て、

『まあ早いことお前さん達は。まだ〳〵寢んでらつしやれば可いのに。』と笑顏を作つた。二人は勝手への隔の敷居に兩手を突いて、『お早エなつす。』を口の中だけに言つて挨拶をすると、お吉は可笑さに些と橫向いて笑つたが、

『怎もお早う。』と晴やかに言ふ。

よく眠れたかとか、鄕里の夢を見なかつたかとか、お吉は昨晩よりもズット慣々しく種々な事を言つてくれたが、

『お前さん達のお鄕里ぢや水道はまだ無いでせう？』

二人は目を見合せた。水道とは何の事やら、

其話は源助からも聞いた記憶がない。何と返事をして可いか困つてると、
『何でも一通り東京の事知つてなくちや、御奉公に上つても困るから、私と一緒に入來しやい。教へて上げますから。』と、お吉は手桶を持つて下り立つた。「ハ。」と答へて、二人も急いで店から自分達の下駄を持つて來て、裏に出ると、お吉はもう六間許り先方へ行つて立つてゐる。
何の事はない、郵便函の小さい様なものが立つてゐて、四邊の土が水に濡れてゐる。
『これが水道ッて言ふんですよ。可ござんすか。それで恁うすると水が幾何でも出て來ます。』と、お吉は笑ひながら栓を捻つた。途端に、水がゴウと出る。
『やあ。』とお八重は思はず驚きに聲を出したので、すぐに羞かしくなつて、顏を火の様にした。お定も口にこそ出さなかつたが、同じ「やあ。」が喉元まで出かけたつたので、これも顏を紅くした。が、お吉は其中に一杯になつた桶と空なのと取代へて、
『さあ、何方なり一つ此栓を捻つて御覽なさい。』と、宛然小學校の先生が一年生に教へる様な調子。二人は目と目で互に讓り合つてゐて、仲々手を出さぬので、
『一寸とも怖い事はないんですよ。』とお吉は笑ふ。で、お八重が思切つて、妙な手つきで栓を力委せに捻ると、特別な仕掛がある譯でないから水が直ぐ出た。お八重は何となく得意になつて顏を、輕く聲を出して笑ひながら、お定の見た。
歸りはお吉の辭するも諾かず、二人で桶を一つ宛輕々と持つて勝手口まで運んだが、背後からお吉が、
『まあお前さん達は力が強い事!』と笑つた。此語の後に潛んだ意味などを察する程に、怜悧いお定ではないので、何だか賞められた様な氣がして、密と口元に笑を含んだ。
それから、顏を洗へといはれて、急いで二階から淺黃の手拭やら櫛やらを持つて來たが、鏡は店に大きいのがあるからといはれて、怖る怖る種々の光る立派な道具を飾り立てた店に行つて、二人は髮を結ひ出した。間もなく、表二階に泊つてる職人が起きて來て、二人を見ると、「お早う。」と聲をかけて妙な笑を浮べたが、二人は唯もうきまりが惡くて、顏を赤くして頭を低れてゐる儘、鏡に寫る已が姿を見るさへも羞しく、堅くなつて匆卒に髮を結つてゐたが、それでもお八重の方はチョイ〳〵横眄を使つて、職人の爲る事を見てゐた樣であつた。
すべてが恁麼工合で、朝餐も濟んだ。其朝餐の時は、同じ食卓に源助夫婦と新さんとお八重お定の五人が向ひ合つたので、二人共三膳とは食へなかつた。此日は、源助が半月に餘る旅から歸つたので、それ〳〵手土産を持つて知邊の家を廻らなければならぬから、お吉は家が明けられぬと言つて、見物は明日に決つた。
二人は、不器用な手つきで、食後の始末にも手傳ひ、二人限で水汲にも行つたが、其時お八重はもう、一度經驗があるので上級生の様な態度をして、
『流石は東京だでヤなつす!』と言つた。
かくて此日一日は、殆んど裏二階の一室で暮らしたが、お吉は時々やつて來て、何呉となく、女中奉公の心得を話してくれるのであつた。お定は、生中禮儀などを守らず、つけ〳〵言つてくれる此女を、もう世の中に唯一人の賴りにして、嘗て自分等の村の役場に、盛岡から來てゐた事のある助役様の內儀さんよりも親切な人だと考へてゐた。
お吉が二人に物言ふさまは、若し傍で見てゐる人があつたなら、甚麼に可笑かつたか知れぬ。言葉を早く直さねばならぬと言つては、先づ短

いのから稽古せよと、「かしこまりました。」とか「行つてらツしやい。」とか「お歸んなさい」とか「左様でございますか。」とか、繰返し〲敎へるのであつたが、二人は胸の中でそれを擬ねて見るけれど、仲々お吉の様にはいかぬ。郷里言葉の「然だすか。」と「左様でございますか。」とは、第一長さが違ふ。二人には「で」に許り力が入つて、兎角「さいで、ございますか。」と二つに切れる。

「さあ、一つ口に出して行つて御覧なさいな。」とお吉に言はれると、二人共すぐ顏を染めては、「さあ」「さあ」と互ひに讓り合ふ。

それからお吉はまた、二人が餘り穏なしくして許りゐるので、店に行つて見るなり、少許街上を歩いてみるなりしたら怎だと言つて、

「家の前から昨晩俥で來た方へ少許行くと、本郷の通りへ出ますから、それは〲賑かなもんですよ。其處の角には勸工場と云つて何品でも賣る所があるし、右へ行くと三丁目の電車、左へ行くと赤門の前――赤門といへば大學の事ですよ。それ、日本一の學校、名前位は聞いた事があるんでせうさ。何に、大丈夫氣をつけてさへ歩けば、何處まで行つたつて迷兒になんかなりやしませんよ。角の勸工場と家の看板さへ知つてりや。」と言つたが、「それ、家の看板には恁う書いてあつたでせう。」と示指で疊に「山田」と覺束なく書いて見せた。「やまだと讀むんですよ。」

二人は稍得意な笑顏をして頷き合つた。何故なれば、二人共尋常科だけは卒へたのだから、山の字も田の字も知つてゐたからなので。

それでも仲々階下にさへ降り澁つて、二人限になれば何やら密々話合つては、袂を口にあてて聲立てずに笑つてゐたが、夕方近くなつてから、お八重の發起で街路へ出て見た。成程大きなペンキ塗の看板には「山田理髪店」と書いてあつて、花の様なお菓子を飾つた菓子屋と向ひあつてゐる。二人が右視左視して、此家忘れてはなるものかと見廻してると、理髪店の店からは四人の職人が皆二人の方を見て笑つてゐた。二人は交代に振返つては、もう何間歩いたか胸で計算しながら、二町許りで本郷館の前まで來た。

盛岡の肴町位だとお定の思つた菊坂町は、此處へ來て見ると宛然田舍の様だ。ああ東京の街！　右から左から、刻一刻に滿干する人の潮！　三方から電車と人とが崩れて來る三丁目の喧囂は、宛がら今にも戰が初りさうだ。お定はもう一歩も前に進みかねた。

「勸工場は、小さいながらも盛岡にもある。」お八重は本郷館に入つて見ないかと言出したが、お定は「此次にすべす。」と言つて澁つた。で、お八重は決しかねて立つてゐると、車夫が寄つて來て、頻りに促す。二人は怖ろしくなつて、もと來た路を驅け出した。此時も背後に笑聲が聞えた。

第一日は恁くて暮れた。

九

第二日目は、お吉に伴れられて、朝八時頃から見物に出た。

先づ赤門、「恁麼學校にも教師ア居べすか？」とお定は囁いたが、「居るのす。」と答へたお八重はツンと濟してゐた。不忍の池では海の様だと思つた。お定の村には山と川と田と畑としか無かつたので。さて上野の森、話に聞いた銅像よりも、木立の中の大佛の方が立派に見えた。電車といふものに初めて乘せられて、淺草は人の塵溜、玉乘に汗を握り、水族館の地下室では、源助の話を思出して帶の間の財布を上から抑へた。人の數が掏摸に見える。凌雲閣には餘り高いのに怖氣立つて、遂々上らず。吾妻橋に出

ては、東京では川まで大きいと思つた。兩國の川開きの話をお吉に聞かされたが、甚麼事をするものやら遂に解らず了ひ。上潮に末廣の長い尾を曳く川蒸氣は、仲々異なものであつた。銀座の通り、新橋のステイション、勸工場にも幾度か入つた。二重橋は天子樣の御門と聞いて叩頭をした。日比谷の公園では、立派な若い男と女が手をとり合つて歩いてるのに驚いた。

須田町の乘換に方角を忘れて、今來た方へ引返すのだと許り思つてるうちに、本鄕三丁目に來て降りるのだといふ。お定はもう日が暮れかかつてるのに、まだ引張り廻されるのかと氣が氣でなくなつたが、一町と歩かずに本鄕館の橫へ曲つた時には、東京の道路は訝しいものだと考へた。

理髮店に歸ると、源助は黑い額に靑筋を立てて、長火鉢の彼方に怒鳴つてゐた。其前には、十七許りの職人が平蜘蛛の如く僻つてゐる。此間から見えなかつた斬髮機が一梃、此職人が何處かに隱し込んで置いたのを見付かつたとかで。お定は二階の風呂敷包が氣になつた。

二人はもう、身體も心も綿の如く疲れきつてゐて、晝頃何處やらで蕎麥を一杯宛食つただけなのに、燈光がついて飯になると、唯一膳の飯を辛と喉を通した。頭腦は朦朧としてゐて、これといふ考へも浮ばぬ。話も興がない。耳の底には、まだ轟々たる都の轟きが鳴つてゐる。

幸ひ好い奉公の口があつたが、先づ四五日は緩り遊んだが可からうといふ源助の話を聞いて、二人は夕餐が濟むと間もなく二階に上つた。二人共「疲れた。」と許り、べたりと橫に坐つて、話もない。何處かしら非常に遠い所へ行つて來た樣な心地である。淺草とか日比谷とかいふ語だけは、すぐ近間にある樣だけれど、それを口に出すには遠くまで行つて來なけやならぬ樣に思へる。一時間前まで見て來た色々の場所、あれも〳〵と心では數へられるけれど、さて其景色は仲々眼に浮ばぬ。目を瞑ると轟々たる響。玉乘や、勸工場の大きな花瓶が、チラリ、チラリと心を掠める。足下から鳩が飛んだりする。

お吉が「電車ほど便利なものはない。」と言つた。然しお定には、電車程怖ろしいものはなかつた。線路を橫切つた時の心地は、思出しても冷汗が流れる。後先を見廻して、一町も向うから電車が來ようものなら、もう足が動かぬ、漸つとそれを遣り過して、十間も行つてから思切つて向側に驅ける。先づ安心と思ふと胸には動悸が高い。況して乘つた時の窮屈さ。洋服着た男とでも肩が擦れ〳〵になると、譯もなく身體が縮んで了つて、些と首を動かすにも頸筋が痛い思ひ。停るかと思へば動き出す。動き出したかと思へば停る。しつきりなしの人の乘降、よくも間違が起らぬものと不思議に堪へなかつた。電車に一町乘るよりは、山路を三里素足で歩いた方が遙か優しだ。

大都は其凄まじい轟々たる響を以て、お定の心を壓した。然しお定は、別に鄕里に歸りたいとも思はなかつた。それかと言つて、東京が好なのでもない。此處に居ようとも思はねば、居まいとも思はぬ。一刻の前をも忘れ、一刻の後をも忘れて、穩しいお定は疲れてゐるのだ。たゞ疲れてゐるのだ。

煎餠を盛つた小さい盆を持つて、上つて來たお吉は、明日お湯屋に伴れて行くと言つて、下りて行つた。

九時前に二人は蒲團を延べた。

三日目は雨。

四日目は降りみ降らずみ。九月ももう二十日

を過ぎたので、殘暑の汗を洗ふ雨の絲を、初秋めいたうそ寒く白く見せて、蒼々と山を濡らす音が、山中の村で聞くとは違つて、妙に陰氣な心を起させる。二人は徒然として相對した儘、言葉少なに郷里の事を思出してゐた。

午餐が濟んで、二人がまだお吉と共に勝手にゐたうちに、二人の奉公口を世話してくれたといふ、源助と職業仲間の男が來て、先樣では一日も早くといふから、今日中に遣る事にしたら怎だと言つた。

源助は、二人がまだ何にも東京の事を知らぬからと言ふ樣な事を言つてゐたが、お吉は、行つて見なけや何日までだつて慣れぬといふ其男の言葉に贊成した。

遂に行く事に決つた。

で、お吉は先づお八重、次にお定と、髮を銀杏返しに結つてくれたが、お定は、餘り前髮を大きく取つたと思つた。帶も締めて貰つた。

三時頃になつて、お八重が先づ一人源助に伴なはれて出て行つた。お定は急に淋しくなつて、七輪の床の間に腰かけて、小さい胸を痛めてゐた。眼には大きい涙が。

一時間許りで源助は歸つて來たが、先樣の奧樣は淺白な人で、お八重を見るや否や、これや水道の水を半年もつかふと、大した美人になると言つた事などを語つた。

早目に晩餐を濟まして、今度はお定の番。すぐ近い坂の上だといふ事で、風呂敷包を提げた儘、黄昏時の雨の霽間を源助の後に跟いて行つたが、何と挨拶したら可いものかと胸を痛めながら悄然と歩いてゐた。源助は、先方でも眞の田舍者な事を御承知なのだから、萬事間違のない樣に奧樣の言ふ事を聞けと繰返し教へて呉れた。

眞砂町のトある小路、右側に「小野」と記した軒燈の、點火り初めた許りの所へ行つて、「此の家だ。」と源助は入口の格子をあけた。お定は終ぞ覺えぬ不安に打たれた。

源助は三十分許り經つて歸つて行つた。

竹筒臺の洋燈が明るい。茶棚やら箪笥やら、時計やら、箪笥の上の立派な鏡臺やら、八疊の一室にありとある物は皆、お定に珍らしく立派なもので。黑柿の長火鉢の彼方に、二寸も厚い座蒲團に坐つた奧樣の年齡は二十五六、口が少しへの字になつて鼻先が下に曲つてゐるけれども、お定には唯立派な奧樣に見えた。お定は洋燈の光に小さくなつて、石の如く坐つてゐた。

銀行に出る人と許り聞いて來たのであるが、お定は銀行の何たるも知らぬ。其旦那樣はまだお歸りにならぬといふ事で、五歳許りの、眼のキヨロキヨロした男の兒が、奧樣の膝に横になつて、何やら繪のかいてある雜誌を見つつ、時々不思議相にお定を見てゐた。

奧樣は、源助を送り出すと、其儘手づから洋燈を持つて、家の中の部屋々々をお定に案内して呉れたのであつた。玄關の障子を開けると三疊、横に六疊間、奧が此八疊間、其奧にも一つ六疊間があつて主人夫婦の寢室になつてゐる。臺所の横には、お定の室と名指された四疊の細長い室で、二階の八疊は主人の書齋。

さて、奧樣は、眞白な左の腕を見せて、長火鉢の緣に臂を突き乍ら、お定のために明日からの日課となるべき事を、細々と說くのであつた。何處の戸を一番先に開けて、何處の室の掃除は朝飯過で可いか。來客のある時の取次の仕方から、下駄靴の揃へ樣、御用聞に來る小僧等への應對の仕方まで、聞のない事に諄々と喋り續けるのであるが、お定には僅かに要領だけ聞きとれたに過ぎぬ。

其內、旦那樣がお歸りになると、奧樣は座を讓つて、反對の側の、先刻まで源助の坐つた座

蒲團に移つたが、
「貴郎、今日は大層遲かつたぢやございませんか？」
「ああ、今日は重役の鈴木ン許に廻つたもんだからな。（と言つてお定の顏を見てゐたが）これか、今度の女中は？」
「ええ、先刻菊坂の理髪店だつてのが伴れて來ましたの。（お定を向いて）此方が旦那樣だから御挨拶しな。」
「ハ。」と口の中で答へたお定は、先刻からもう其挨拶に困つて了つて、肩をすぼめて切ない思ひをしてゐたので、恁う言はれると忽ち火の樣に赤くなつた。
「何卒ハ、お賴申します。」と、聞えぬ程に言つて、兩手を突く。旦那樣は、三十の上を二つ三つ越した、髭の厳めしい立派な人であつた。
「名前は？」
といふを冒頭に、年齡も訊かれた、郷里も訊かれた、兩親のあるか無いかも訊かれた。學校へ上つたか怎かも訊かれた。お定は言葉に窮つて了つて、一言言はれる毎に穴あらば入りたくなる。足が耐へられぬ程痺れて來た。
稍あつてから、「今夜は何もしなくても可いから、先刻教へたアノ洋燈をつけて、四疊に行つてお寢み。蒲團は其處の押入に入つてある筈だし、それから、まだ慣れぬうちは夜中に目をさまして便所にでもゆく時、戸惑ひしては不可から、洋燈は細めて危なくない所に置いたら可いだらう。」と言ふ許可が出て、奧樣から燐寸を渡された時、お定は甚麽に嬉しかつたか知れぬ。
言はれた通りに四疊へ行くと、お定は先づ兩脚を延ばして、膝頭を輕く拳で叩いて見た。一方に障子二枚の明りとり、晝はさぞ薄暗い事であらう。窓と反對の、奧の方の押入を開けると、蒲團もあれば枕もある。妙な臭氣が鼻を打つた。
お定は其處に膝をついて、開けた襖に片手をかけた儘、一時間許りも身動ぎをしなかつた。先づ明日の朝自分の爲ねばならぬ事を胸に數へたが、お八重さんが今頃怎してゐる事かと、友の身が思はれる。郷里を出て以來、片時も離れなかつた友と別れて、源助にもお吉にも離れて、ああ、自分は今初めて一人になつたと思ふと、穩しい娘心はもう涙ぐまれる。東京の女中！郷里で考へた時は何ともいへぬ華やかな樂しいものであつたに、……然ういへば自分はまだ手紙も一本郷里へ出さぬ。と思ふと、兩親の顏や弟共の聲、馬の事、友達の事、草刈の事、水汲の事、生れ故郷が詳らかに思出されて、お定は緊と涙の目を押瞑つた儘、「阿母、許してけろ。」と胸の中で繰返した。
左う右うしてるうちも、神經が鋭くなつてゐて、壁の彼方から聞える主人夫婦の聲に、若しや自分の事を言やせぬかと氣をつけてゐたが、時計が十時を打つと、皆寢て了つた樣だ。お定は、若しも明朝寢坊をしてはと、漸々涙を拭つて蒲團を取出した。
三分心の置洋燈を細めて、枕に就くと、氣が少し輕然した。お八重さんももう寢たらうかと、又しても友の上を思出して、手を伸べて掛蒲團を引張ると、何となくフハリとして綿が柔かい。郷里で着て寢たのは、板の樣に薄く堅い、荒木綿の絣の皮をかけたのであつたが、これは又源助の家で着たのよりも柔かい。そして、前にゐた幾人の女中の汗やら髮の膩やらが浸みてゐるけれども、お定には初めての、黒い天鵞絨の襟がかけてあつた。お定は不圖、丑之助がよく自分の頰片を天鵞絨の樣だと言つた事を思出した。
また降り出したと見えて、蕭かな雨の音が枕に傳はつて來た。お定は暫時恍乎として、自分

の顔を天鵞絨の襟に擦つて見てゐたが、幽かな微笑を口元に漂はせた儘で、何時しか安らかな眠に入つて了つた。

十

目が覚めると、障子が既に白んで枕邊の洋燈は昨晩の儘に點いてはゐるけれど、光が鈍く滋々と幽かな音を立ててゐる。寝過しはしないかと狼狽へて、すぐ寝床から飛起きたが、誰も起きた様子がない。で、昨日まで着てゐた衣服は手早く疊んで、萌黄の風呂敷包みから、荒い縞の普通着（郷里では無論普通に着なかつたが）を出して着換へた。帶も紫がかつた繻子ののは疊んで、幅狭い唐縮緬の丸帶を締めた。

奥様が起きて來る氣色がしたので、大急ぎに蒲團を押入に入れ、劃の障子をあけると、

『早いね。』と奥様が聲をかけた。お定は臺所の板の間に膝をついてお叩頭をした。

それからお定は吩咐に隨つて、焜爐に炭を入れて、石油を注いで火をおこしたり、縁側の雨戸を繰つたりしたが、

『まだ水を汲んでないぢやないか？』

と言はれて、臺所中見廻したけれども、手桶らしいものが無い。すると奥様は、

『それ其處にバケツが有るよ。それ、それ、何處を見てるだらう、此人は。』と言つて、三和土になつた流場の隅を指した。お定は、指された物を自分で指して、叱られたと思つたから顔を赤くしながら、

『これでごあんすか？』と奥様の顔を見た。バケツといふ物は見た事がないので。

『然うとも。それがバケツでなくて何ですかよ。』と稍御機嫌が悪い。

お定は、恁麼物に水を汲むのだもの、俺には解る筈がないと考へた。

此家では、「水道」が流場の隅にあつた。長火鉢の鐵瓶の水を代へたり、方々雑巾を掛けさせられたりしてから、お定は小路を出て一町程行つた所の八百屋に使ひに遣られた。奥様は葱とキャベーヂを一個買つて來いといふのであつたが、キャベーヂとは何の事か解らぬ。で、恐る〳〵聞いて見ると、「それ恁麼ので」と兩手で圓を作つて、白い葉が堅く重なつてるのさ。お前の郷里にや無いのかえ。」と言はれた。で、お定は、

『ハア、玉菜でごあんすか。』と言ふと、

「名は怎でも可いから早く買つて來なよ。」と急き立てられる。お定はまた顔を染めて戸外へ出た。

八百屋の店には、朝商ひへ買出しに行つた車がまだ歸つて來ないので、昨日の賣殘りが列べてあるに過ぎなかつたが、然しお定は、其前に立つと、妙な心地になつた。何とやらいふ葉に茄子が十許り、蔕切れさうによく出來た玉菜が五個六個、それだけではあるけれ共、野良育ちのお定には此上なく懐かしい野菜の香が、仄かに胸を爽かにする。お定は、しとどに露を帶びた茄畑を眞面に描き出した。ああ、あの紫色な茄子の畝！　這ひ蔓つた葉に地面を隱した瓜畑！　水の様な曉の光に風も立たず、一夜さを鳴き細つた蟲の聲！

萎びた黒繻子の帶を、ダラシなく尻に垂れた内儀に、「入來しやい。」と聲をかけられたお定は、もうキャベーヂといふ語を忘れてゐたので、唯「それを」と指さした。葱は生憎一把もなかつた。

風呂敷に包んだ玉菜一個を、お定は大事相に胸に抱いて、假且郷里の事を思ひながら主家に歸つた。勝手口から入ると、奥様が見えぬ。お定は窃りと玉菜を出して、膝の上に載せた儘、暫時は飽かずも其香を嗅いでゐた。

「何してるだらう、お定は？」と、直ぐ背後から

聲をかけられた時の不愍さ！

　朝餐後の始末を兎に角に終つて、旦那樣のお出懸に知らぬ振をして出て來なかつたと奥樣に小言を言はれたお定は、午前十時頃、何を考へるでもなく呆然と、臺所の中央に立つてゐた。

　と、他所行の衣服を着たお吉が勝手口から入つて來たので、お定は懐かしさに我を忘れて、「やあ」と聲を出した。お吉は些と笑顔を作つたが、

『まあ大變な事になつたよ、お定さん。』

『怎したべす？』

『怎したも怎うしたも、お鄕里からお前さん達の迎へが來たよ。』

『迎へがすか？』と驚いたお定の顔には、お吉の想像して來たと反對に、何ともいへぬ嬉しさが輝いた。

　お吉は暫時呆れた樣にお定の顔を見てゐたが、『奥樣は彼居しやるだらう、お定さん。』

　お定は頷いて障子の彼方を指した。

『奥樣にお話して、これから直ぐお前さんを伴れてかなけやならないのさ。』

　お吉は、お定に取次を賴むも面倒といつた樣に、自分で障子に手をかけて、『御免下さいまし。』と言つた儘、中に入つて行つた。お定は臺所に立つたなり、右手を胸にあてて奥樣とお吉の話を洩れ聞いてゐた。

　お吉の言ふ所では、迎への人が今朝着いたといふ事で、昨日上げた許りなのに誠に申譯がないけれど、これから直ぐお定を歸してやつて呉れと、言葉滑らかに願つてゐた。

『それはもう、然ういふ事情なれば、此方で置きたいと言つたつて仕樣がない事だし、伴れて歸つても構ひませんけど、』と奥樣は言つて、『だけどね、漸つと昨晩來た許りで、まだ一晝夜にも成らないぢやないかねえ。』

『其處ン所は何ともお申譯がございませんのですが、何分手前共でも迎への人が來ようなどとは、些とも思懸けませんでしたので。』

『それはまあ仕方がありませんさ。だが、鄕里といつても隨分遠い所でせう？』

『ええ、ええ、それはもう遙と遠方で、南部の鐵瓶を拵へる處よりも、まだ餘程田舍なさうでございます。』

『其麽處からまあ、よくねえ。』と言つて、『お定や、お定や。』

　お定は、怎やら奥樣に濟まぬ樣な氣がするので、怖る〳〵行つて坐ると、お前も聞いた樣な事情だから、まだ一晝夜にも成らぬのにお前も本意ないだらうけれども、この内儀さんと一緒に歸つたが可からうと言ふ奥樣の話で、お定は唯顔を赤くして堅くなつて聞いてゐたが、軈てお吉に促されて、言葉少なに禮を述べて其家を出た。

　戸外へ出ると、お定は直ぐ、

『甚麽人だべ、お内儀さん？』と訊いた。

『いけ好かない奥樣だね。』と言つたが、『迎への人かえ？何とか言つたつけ、それ、忠吉さんとか忠次郎さんとかいふ、禿頭の腹の大かい人だよ。』

『忠太ッて言ふべす、そだら。』

『然う〳〵、其忠太さんさ。面白い語な人だねえ。』と言つたが、『來なくても可いのに、お前さん達許り詰らないやね、態々出て來て直ぐ伴れて歸られるなんか。』

『眞に然うでごあんす。』と、お定は口を噤んで了つた。

　稍あつてから再、『お八重さんは怎したべす？』と訊いた。

『お八重さんには新太郎が迎ひに行つたのさ。』

　源助の家へ歸ると、お八重はまだ歸つてゐな

かつたが、腰までしか無い短い羽織を着た、布袋の樣に肥つた忠太老爺が、長火鉢に源助と向合つてゐて、お定を見るや否や、突然、

『七日八日見ねえでる間に、お定ッ子ア遙と美え女子になつた喃。』と、四邊構はず高い聲で笑つた。

お定は路々、郷里から迎ひが來たといふのが嬉しい樣な、また、其人が自分の嫌ひな忠太と聞いて不滿な樣な心地もしてゐたのであるが、生れてから十九の今まで毎日々々聞き慣れた郷里言葉を其儘に聞くと、もう胸の底には不滿も何も消えて了つた。

で、忠太は先づ、二人が東京へ逃げたと知れた時に、村では兩親初め甚麼に驚かされたかを語つて、源助さんの世話になつてるなれば心配はない樣なものの、親心といふものは又別なもの、自分も今は急がしい盛りだけれど、強ての賴みを辭み難く、態々迎ひに來たと語るのであつたが、然し一言もお定に對して小言がましい事は言はなかつた。何故なれば忠太は其實、矢張源助の話を聞いて以來、死ぬまでには是非共一度は東京見物に行きたいものと、家には働手が多勢ゐて自分は閑人なところから、毎日考へてゐた所へ、幸ひと二人の問題が起つたので、構はずにや置かれぬから何なら自分が行つて吳れても可いと、不取敢氣の小さい兼大工を說き落し、兼と二人でお定の家へ行つて、同じ事を遠廻しに諄々と喋りて立たのであるが、母親は流石に涙顏をしてゐたけれども、定次郞は別に娘の行末を悲觀してはゐなかつた。それを漸々納得させて、二人の歸りの汽車賃と、自分のは片道だけで可いといふので、兼から七圓に定次郞から五圓、先づ體の可い官費旅行の東京見物を企てたのであつた。

軈てお八重も新太郞に伴れられて歸つて來たが、坐るや否や先づ險しい眼尻を一層險しくして、凝と忠太の顏を睨むのであつた。忠太は、お定に言つたと同じ樣な事を、繰返してお八重にも語つたが、お八重は返事も碌々せず、脹れた顏をしてゐた。

源助の忠太に對する馳待振は、二人が驚く許り奢つたものであつた。無論これは、村の人達に傳へて貰ひたい許りに、少許は無理な事までして外見を飾つたのであるが。

其夜は、裏二階の六疊に忠太とお八重お定の三人枕を並べて寢せられたが、三人限になると、お八重は直ぐ忠太の膝をつねりながら、

『何しや來たす此人ア。』と言つて、執念くも自分等の新運命を頓挫させた罪を詰るのであつたが、晩酌に陶然とした忠太は、間もなく高い鼾をかいて、太平の眠に入つて了つた。するとお八重は、お定の穩しくしてるのを捉まへて、自分の行つた橫山樣が、何とかいふ學校の先生をして、四十圓も月給をとる學士樣な事や、其奧樣の着てゐた衣服の事、自分を大層可愛がつてくれた事、それからそれと仰々しく述べ立てて、今度は仕方がないから歸るけれど、必ず再自分だけは東京に來ると語つた。そしてお八重は、其奧樣のお好みで結はせられたと言つて、生れて初めての廂髮に結つてゐたに、奧樣から拜領の、少し油染みた橄欖のリボンを大事相に插してゐた。

お八重は又、自分を迎ひに來て吳れた時の新太郞の事を語つて、「那麼親切な人ア家の方にや無えす。」と讃めた。

お定はお八重の言ふが儘に、唯穩しく返事してゐた。

その後二三日は、新太郞の案內で、忠太の東京見物に費された。お八重お定の二人も、もう仲々來られぬだらうから、よく見て行けと言ふので、毎日其隨伴をした。

二人は又、お吉に伴れられて行つて、本郷館

で些少な土産物をも買ひ整へた。

十一

お八重お定の二人が、郷里を出て十二日目の夕、忠太に伴れられて、上野のステイションから歸郷の途に就いた。

貫通車の三等室、東京以北の諸有國々の訛を語る人々を、ぎつしりと詰めた中に、二人は相並んで、布袋の樣な腹をした忠太と向合つてゐた。長い〳〵プラットフォームに數限りなき掲燈が晝の如く輝き初めた時、三人を乘せた列車が緩やかに動き出して、秋の夜の暗を北に一路、刻一刻東京を遠ざかつて行く。

お八重はいはずもがな、お定さへも此時は妙に淋しく名殘惜しくなつて、密々と其事を語り合つてゐた。此日は二人共庇髮に結つてゐたが、お定の頭にはリボンが無かつた。

忠太は、棚の上の荷物を氣にして、時々其を見上げ〳〵しながら、物珍らし相に乘合の人々を、しげ〳〵見比べてゐたが、一時間許り經つと、少し身體を屈めて、

『尻ア痛くなつて來た。』と呟やいた。『汝ア痛くねえが？』

『痛くねえす。』とお定は囁いたが、それでも忠太がまだ何か話欲しさうに屈んでゐるので、『家の方でや玉菜だの何ア大きくなつたべなす。』

『大きくなつたどもせえ。』と言つた忠太の聲が大きかつたので、周圍の人は皆此方を見る。『汝ア共ア逃げでがら、まだ二十日にも成んめえな。』

お定は顏を赤くしてチラと周圍を見たが、その儘返事もせず俯いて了つた。お八重は顏を蹙めて、忌々し氣に忠太を横目で見てゐた。

十時頃になると、車中の人は大抵こくり〳〵と居睡を初めた。忠太は思ふ樣腹を前に出して、グッと背後に凭れながら、口を開けて、時時鼾をかいてゐる。お八重は身體を捻つて、背中合せに腰掛けた商人體の若い男と、頭を押接けた儘、眠つたのか眠らぬのか、凝としてゐる。

窓の外は、機關車に悪い石炭を焚くので、雨の樣な火の子が横樣に、暗を縫うて後方に飛ぶ。

懷手をして、固い頤を襟に埋めて俯いてゐるお定は、郷里を逃げ出して以來の事を、それからそれと胸に數へてゐた。お定の胸に刻みつけられた東京は、源助の家と、本郷館の前の人波と、八百屋の店と、への字口の鼻先が下向いた奥樣とである。この四つが、目眩ろしき火光と轟々たる物音に、遠くから包まれて、ハッと明るい。お定が一生の間、東京といふ言葉を聞く毎に、一人胸の中に思出す景色は、恐らく此四つに過ぎぬであらう。

軈てお定は、懷手した左の指を少し許り襟から現して、柔かい己が頰を密と撫でゝ見た。小野の家で着て寢た蒲團の、天鵞絨の襟を思出したので。

暫く間、窓の外が明るくなつたと思ふと、汽車は、とある森の中の小さい驛を通過した。お定は此時、丑之助の右の耳朶の、大きい黒子を思出したのである。

新太郎と共に、三人を上野まで送つて呉れたお吉は、さぞ今頃、此間中は眠らぬ物入をしたと、寢物語に源助にこぼしてゐる事であらう。

二筋の血

夢の樣な幼少の時の追憶、喜びも悲みも罪のない事許り、それからそれと朧氣に續いて、今になつては、皆、仄かな哀感の霞を隔てて麗かな子供芝居でも見る樣に懷かしいのであるが、其中で、十五六年後の今日でも猶、鮮やかに私の目に殘つてゐる事が二つある。

何方が先で、何方が後だつたのか、明瞭とは思出し難い。が私は六歲で村の小學校に上つて、二年生から三年生に進む大試驗に、私の半生に唯一度の落第をした。其落第の時に藤野さんがゐたのだから、一つは慥か二度目の二年生の八歲の年、夏休み中の出來事と憶えてゐる。も一つも、暑い盛りの事であつたから、矢張其頃の事であつたらう。

今では文部省令が嚴しくて、學齡前の子供を入學させる樣な事は全く無いのであるが、私の幼かつた頃は、片田舍の事でもあり、左程面倒な手續も要らなかつた樣である。でも數へ年で僅か六歲の、然も私の樣に尩弱い者の入學るのは、餘り例のない事であつた。それは詰り、平生私の遊び仲間であつた一歲二歲年長の子供等が、五人も七人も一度に學校に上つて了つて、淋しくて〳〵耐らぬ所から、每日の樣に好人物の父に强請つた爲なので、初めの間こそお前はまだ餘り小いからと禁めてゐたが、根が惡い事ぢや無し、父も內心には喜んだと見えて、到頭或日學校の高島先生に願つて呉れて、翌日からは私も、二枚折の紙石盤やら硯やら石筆やらを買つて貰つて、諸友と一緒に學校に行く事になつた。されば私の入學は、同じ級の者より一ケ月も後の事であつた。父は珍らしい學問好で、用のない冬の晚などは、字が見えぬ程煤びきつて、表紙の襤褸になつた孝經やら十八史略の端本やらを持つて、茶話ながらに高島先生に敎はりに行く事などもあつたものだ。

其頃父は三十五六、田舍には稀な程晚婚であつた所爲でもあらうか、私には兄も姉も、妹もなくて唯一粒種、剛い言葉一つ懸けられずに育つた爲めか脊丈だけは普通であつたけれども、ひよろ〳〵と瘦せ細つてゐて、隨分近所の子供等と一緒に、裸足で戶外の遊戲もやるにかゝはらず、怎したものか顏が蒼白く、駈競でも相撲でも私に敗ける者は一人も無かつた。隨つて、さうして遊んでゐながらも、時として密り一人で家に歸る事もあつたが、學校に上つてからも其性癖は變らず、樂書をしたり、校庭を滑り拔けたりして先生に叱られる事は人並であつたけれど、兎角卑屈で、寡言で、黑板に書いた字を讀めなどと言はれると、直ぐ赤くなつて、俯いて、返事もせず石の如く堅くなつたものだ。自分から進んで學校に入れて貰つたに拘はらず、私は遂學科に興味を有てなかつた。加之時には晝休に家へ歸つた儘、人知れず裏の物置に隱れてゐて、午後の課業を休む事さへあつた。病身の母は、何日か私の頭を撫でながら、此兒も少し他の子供等と喧嘩でもして呉れる樣になれば可いと言つた事がある。私は何とも言はなかつたが、腹の中では、喧嘩すれば俺が敗けるもの、と考へてゐた。

私の家といふのは、村に唯一軒の桶屋であつたが、桶屋だけでは生計が立たぬので、近江屋といふ近鄕一の大地主から、少し許り田を借りて小作をしてゐた。隨つて、年中變らぬ麥勝の飯に粘氣がなく、時偶夜話に來る人でもあれ

ば、母が取あへず米を一摑み程十能で煎つて、茶代りに出すといふ有樣であつたから、私なども、年中つぎだらけた布の股引を穿いて、腰までしかない洗洒しの筒袖、同じ服裝の子供等と共に裸足で步く事は慣れたもので、頭髮の延びた時は父が手づから剃つて呉れるのであつた。名は楢澤新太郎といふのだが、村の人は誰でも「楢屋の新太」と呼んだ。

學校では、前にも言つた如く、些とも學科に身を入れなかつたから、一年から二年に昇る時は、三十人許りの級のうち尻から二番で漸と及第した。惡い事には、私の家の兩隣の子供、一人は一級上の男で、一人は同じ級の女の兒であつたが、何方も其時半紙何帖かを水引で結んだ御褒賞を貰つたので、私は流石に、子供心にも情ない樣な氣がして、其授與式の日は、學校から歸ると、例の樣に戶外に出もせず、日が暮れるまで大きい圍爐裏の隅に蹲つて、浮かぬ顏をして火箸許り弄つてゐたので、父は夕飯が濟んでから、黑い羊羹を二本買つて來て呉れて、お前は一番稚いのだからと言つて慰めて呉れた。

それも翌日になれば、もう忘れて了つて、私は相變らず時々午後の課業を休み〳〵してゐたが、七歲の年が暮れての正月、第三學期の初めになつて、學校には少し珍らしい事が起つた。それは、佐藤藤野といふ、村では倫べる者の無い程美しい女の兒が、突然一年生に入つて來た事なので。

百何人の生徒は皆目を聳てた。實際藤野さんは、今想うても餘り類のない程美しい兒だつたので、前髮を眉の邊まで下げた顏が圓く、黑味勝の眼がパッチリと明るくて、色は飽迄白く、笑ふ每に笑窪が出來た。男生徒は言はずもの事、女生徒といつても、赤い布片か何かで無造作に髮を束ねた頭を、垢染みた淺黃の手拭に包んで、雪でも降る日には、不恰好な雪沓を穿いて、半分に截つた赤毛布を頭からスッポリ被つて來る者の多い中に、大きく菊の花を染めた、派手な唐縮緬の衣服を着た藤野さんの姿の交つたのは、村端の泥田に蓮華の花の咲いたよりも猶鮮やかに、私共の眼に映つたのであつた。

藤野さんは、其以前、村から十里とも隔たらぬ盛岡の市の學校にゐたといふ事で、近江屋の分家の、呉服屋をしてゐる新家といふ家に、阿母さんといふ人と二人で來てゐた。

私共の耳にまで入つた村の噂では、藤野さんの阿母さんといふ人は、二三年も前から眼病を患つてゐた新家の御新造の妹なさうで、盛岡でも可也な金物屋だつたのが、怎した破目かで破產して、夫といふ人が首を縊つて死んで了つた爲め、新家の家政を手傳ひ旁々、亡夫の忘れ形見の藤野さんを伴れて、世話になりに來たのだといふ事であつた。其阿母さんも亦、小柄な、色の白く美しい、姉なる新家の御新造にも似ず、いたつて快活な愛想の好い人であつた。

村の學校は、其頃まだ見窄らしい尋常科の單級で、外に補習科の生徒が六七人、先生も高島先生一人限りだつたので、教場も唯一つ。級は違つてゐても、鈴の樣な好い聲で藤野さんが讀本を讀む時は、百何人が皆石筆や筆を休ませて、其方許り見たものだ。殊に私は、習字と算術の時間が厭で〳〵耐らぬ所から、よく呆然して藤野さんの方を見てゐたもので、其度先生は竹の鞭で私の頭を輕く叩いたものである。

藤野さんは、何學科でも成績が可かつた。何日であつたか、二年生の女生徒共が、何か授業中に惡戲をしたといつて、先生は藤野さんを例に引いて誡められた事もあつた樣だ。上級の生徒は、少しそれに不服であつた。然し私は

何も怪まなかつた。何故なれば、藤野さんは其頃、學校中で、村中で、否、當時の私にとつての全世界で、一番美しい、善い人であつたのだから。

其年の三月三十日は、例年の如く證書授與式、近江屋の旦那樣を初め、村長樣もお醫者樣も、其他村の人達が五六人學校に來られた。私も、秘藏の袖の長い衣服を着せられ、半幅の白木綿を兵子帶にして、皆と一緒に行つたが、黒い洋服を着た高島先生は、常よりも一層立派に見えた。教場も立派に飾られてゐて、正面には日の丸の旗が交叉してあつた。其前の、白い覆布をかけた卓には、松の枝と竹を立てた、大きい花瓶が載せてあつた樣に憶えてゐる。勅語の捧讀やら「君が代」の合唱やらが濟んで、十何人かの卒業生が、交る交る呼出されて、皆嬉し相にして卒業證書を貰つて來る。其中の優等生は又、村長樣の前に呼ばれて御褒賞を貰つた。續て、三年二年一年といふ順で、新たに進級した者の名が讀上げられたが、怎したものか私の名は其中に無かつた。「新太ア落第だ、落第だ。」と言つて周圍の子供等は皆私の顏を見た。私は其時甚麼氣持がしたつたか、今になつては思出せない。

式が濟んでから、近江屋樣から下さるといふ紅白の餅だけは私も貰つた。皆は打伴れて勇ましげに家に歸つて行つたが、私共落第した者六七人だけは、用があるからと言つて先生に殘された。其中には村端の掛立小屋の娘もあつて、潸々泣いてゐたが、私は、若しや先生は私にだけ證書を後で呉れるのではないかといふ樣な、理由もない事を心待ちに待つてゐた樣であつた。

軈て一人々々教員室に呼ばれて、それ〴〵に諭められたり勵まされたりしたが、私は一番後廻しになつた。そして、「お前はまだ年もいかないし、體も弱いから、も一年二年生で勉强して見ろ。」と言はれて、私は聞えぬ位に「ハイ」と答へて叩頭をすると、先生は私の頭を撫でて、「お前は餘り穩し過ぎる。」と言つた。そして卓子の上のお盆から、麥煎餅を三枚取つて下すつたが、私は其時程先生のお慈悲を有難いと思つた事はなかつた。其室には、村長樣を初め二三人の老人達がまだ殘つてゐた。

私は紙に包んだ紅白の餅と麥煎餅を、兩手で胸に抱いて、悄々と其處を出て來たが、昇降口まで來ると、唯もう無暗に悲しくなつて、泣きたくなつて了つた。喉まで出懸けた涙は辛うじて胸に收めたが、先生の有難さ、友達に冷笑れる羞かしさ、家へ歸つて何と言つたものだらうといふ樣な事を、子供心に考へると、小さい胸は一途に迫つて、涙が留度もなく溢れる。すると、怎して殘つてゐたものか、二三人の女生徒が小使室の方から出て來た樣子がしたので、私は何とも言へぬ羞かしさに急に動悸がして來て、ぴたりと柱に凭懸つた儘、顏を見せまいと俯いた。

すた〳〵と輕い草履の音が後ろに近づいたと思ふと、「何したの、新太郎さん？」と言つた聲は、藤野さんであつた。それまで一度も言葉を交した事のない人から、恁う言はれたので、私は思はず顏を上げると、藤野さんは、瞶乎として眼に柔かな光を湛へて、凝と私を瞶めてゐた。私は直ぐ又俯いて、下唇を噛締めたが、それでも歔欷が洩れる。

藤野さんは暫く默つてゐたが、「泣かないんだ、新太郎さん。私だつて今度は、一番下で漸と及第したもの。」と、弟にでも言ふ樣に言つて、「明日好い物持つてつて上げるから、泣かないんだ、皆が笑ふから。」と、私の顏を覗き込む樣にしたが、私は片頬を柱に擦りつけて、覗かれまいとしたので、又すた〳〵と行つて了

つた。藤野さんは何學科も成績が可かつたのだけれど、二學期になつてから入つたので、一番尻で二年生に進級したのであつた。
　其日の夕暮、父は店先でトン〳〵と桶の箍を嵌めてゐたし、母は水汲に出て行つた後で私は悄然と圍爐裏の隅に蹲つて、もう人顔も見えぬ程薄暗くなつた中に、焚火の中へ竹屑を投入れては、チロ〳〵と舌を出す様に燃えて了ふのを餘念もなく眺めてゐたが、裏口から細い聲で、「新太郎さん、新太郎さん。」と呼ぶ人がある。私はハッと思ふと、突然土間へ飛び下りて、草履も穿かずに裏口へ駈けて行つた。
　藤野さんは唯一人、戸の蔭に身を擦り寄せて立つてゐたが、私を見ると莞爾笑つて、「まあ、裸足で。」と、心持眉を顰めた。そして急がしく袂の中から、何か紙に包んだ物を出して私の手に渡した。
『これ上げるから、一生懸命勉強するッこ。
私もするから。」と言ふなり、私は一言も言はずに茫然立つてゐたので、すた〳〵と夕暗の中を走つて行つたが、五六間行くと後ろを振返つて、手を額の前で左右に動かした。誰にも言ふなといふ事だと氣が附いたので、私は頷いて見せると、其儘またすた〳〵と梨の樹の下を。

紙包の中には、洋紙の帳面が一册に半分程になつた古筆、淡紅色メリンスの布片に捲いたのは、鋏で拵へた玩具の懐中時計であつた。
　其夜私は、薄暗い手ランプの影で、鉛筆の心を舐めながら、贈物の帳面に、讀本を第一課から四五枚許り、丁寧に謄寫した。私が初めて文字を學ぶ喜びを知つたのは、實に其時であつた。
　人の心といふものは奇妙なものである。二度目の二年生の授業が始まると、私は何といふ事もなく學校に行くのが愉くなつて、今迄は飽きて飽きて仕方のなかつた五十分宛の授業が、他愛もなく過ぎて了ふ様になつた。竹の鞭で頭を叩かれる事もなくなつた。
　廣い教場の、南と北の壁に黒板が二枚宛、高島先生は急がしさうに其四枚の黒板を廻つて歩いて教へるのであつたが、二年生は、北の壁の西寄りの黒板に向つて、粗末な机と腰掛を二列に並べてゐた。前の方の机に一團になつてゐる女生徒には、無論藤野さんがゐた。
　新學年が始まつて三日目かに、私は初めて先生に賞められた。默つて聞いてさへ居れば、先生の教へる事は乾度解る。記憶力の強い子供の頭は、一度理解したことは仲々忘れるものでない。知つた者は手を擧げろと言はれて、私の手を擧げぬ事は殆んど無かつた。
　何の學科として嫌ひなものはなかつたが、殊に私は習字の時間が好であつた。先生は大抵私に水注の役を吩附けられる。私は、葉鐵で拵へた水差を持つて、机から机と廻つて歩く。机の南端には一つ〳〵硯が出てゐるのであつたが、大抵は虎斑か黒い石なのに、藤野さんだけは、何石なのか紫色であつた。そして、私が水を注いでやつた時、些と叩頭をするのは藤野さん一人であつた。
　氣の揉めるのは算術の時間であつた。尤も藤野さんも其年八歳であつたのに、豐吉といふ兒が同じ級にあつて、それが私等よりも二歳か年長であつた。體も大きく、頭腦も發達してゐて、私が知つてゐる事は大抵藤野さんも知つてゐたが、又、二人が手を擧げる時は大抵豐吉も手を擧げた。何しろ子供の時の二歳違ひは、頭腦の活動の精不精に大した懸隔があるもので、それの最も顯著に現はれるのは算術である。
　豐吉は算術が得意であつた。
　問題を出して置いて、先生は別の黒板の方へ

廻つて行かれる。そして又歸つて來て、『出來た人は手を擧げて。』と、竹の鞭を高く擧げられる。それが、少し難かしい問題であると、藤野さんは手を擧げながら、若くは手を擧げずに、乾度後ろを向いて私の方を見る。私は、其眼に滿干する微かな波をも見逃す事はなかつた。二人共手を擧げた時、殊にも豐吉の出來なかつた時は、藤野さんの眼は喜びに輝いた。豐吉も藤野さんも出來なくて、私だけ手を擧げた時は、邪氣ない羨望の波が寄つた。若しかして、豐吉も藤野さんも手を擧げて、私だけ出來ない事があると、氣の毒相な眼眸をする。そして、二人共出來ずに、豐吉だけ誇りかに手を擧げた時は、美しい藤野さんの顏が瞬く間暗い翳に掩はれるのであつた。

藤野さんの本を讀む聲は、隣席の人にすら聞えぬ程に讀む他の女生徒と違つて、凜として爽やかであつた。そして其讀方には、村の兒等にはない、一種の抑揚があつた。私は、一月二月と經つうちに、何日ともなく、自分でも心附かずに其抑揚を眞似る樣になつた。友達はそれと氣が附いて笑つた。笑はれて、私は改めようとするけれども、いざとなつて聲立てて讀む時は、乾度其抑揚が出る。或時、小使室の前の井戸側で、六七人も集つて色々な事を言ひ合つてゐた時に、豐吉は不圖其事を言ひ出して、散々に笑つた末、『新太と藤野さんと夫婦になつたら可がんべえな。』と言つた。

藤野さんは五六歩離れた所に立つてゐたつたが、此時、『成るとも。成るとも。』と言つて皆を驚かした。私は顏を眞赤にして矢庭に駈出して了つた。

いくら子供でも、男と女とは矢張男と女、學校で一緒に遊ぶ事などは殆んど無かつたが、夕方になると、家々の軒や破風に夕餉の煙の靉く街道に出て、よく私共は寶奪ひや鬼ごッこをやつた。時とすると、それが男組と女組と一緒になる事があつて、其麼時は誰しも周圍が暗くなつて了ふまで無中になつて遊ぶのであるが、藤野さんが鬼になると、乾度私を目懸けて追つて來る。私はそれが嬉しかつた。奈何に庇弱い體質でも、私は流石に男の兒、藤野さんはキッと口を結んで執く追つて來るけれど、容易に捉らない。終ひには息を切らして喘々するのであるが、私は態と捉まつてやつて可いのであるけれど、其處は子供心で、倒逆も〳〵身を飜して意地惡く逃げ廻る。それなのに、藤野さんは鬼ごッこの度、矢張私許り目懸けるのであつた。

新家の家には、藤野さんと從兄弟同志の男の兒が三人あつた。上の二人は同年と三年、末兒はまだ學校に上らなかつたが、何れも餘り成績が可くなく、同年輩の近江屋の兒等と極く仲が惡かつたが、私の朧氣に憶えてゐる所では、藤野さんもよく二人の上の兒に苛責られてゐた樣であつた。何日か何處かで叩かれてゐるのを見た事もある樣だが、それは明瞭しない。唯一度私が小さい桶を擔いで、新家の裏の井戸に水汲に行くと、丁度其處の裏門の柱に藤野さんが倚懸つてゐて、一人潸々泣いてゐた。怎したのだと私は言葉をかけたが、返事はしないで長い袂の端を前齒で嚙んでゐた。さうなると、私は性質としてもう何も言へなくなるので、自分まで妙に涙ぐまれる樣な氣がして來て、默つて大柄杓で水を汲んだが、桶を擔いで歩き出すと、『新太郎さん。』と呼止められた。

『何す？』

『好い物見せるから。』

『何たす？』

『これ。』と言つて、袂の中から丁寧に、美しい花簪を出して見せた。

『綺麗だなす。』

『……。』
『買つたのすか？』
藤野さんは頭を振る。
『貰つたのすか？』
『阿母さんから。』と低く言つて、二度許り歔欷あげた。
『富太郎さん（新家の長男）に苛責られたのすか？』
『二人に。』
私は何とか言つて慰めたかつたが、何とも言ひ様がなくて、默つて顏を瞶めてゐると、『これ上げようかな？』と言つて、花簪を弄つたが、『お前は男だから。』と後に隱す振をするなり、涙に濡れた顏に美しく笑つて、バタ〳〵と門の中へ驅けて行つて了つた。私は稚い心で、藤野さんが二人の從兄弟に苛責られて泣いたので、阿母さんが簪を呉れて賺したのであらうと想像して、何といふ事もなく富太郎のノッペりした面相が憎らしく、妙な心地で家に歸つた事があつた。
何日しか四箇月が過ぎて、七月の末は一學期末の試驗。一番は豐吉、二番は私、藤野さんが三番といふ成績を知らせられて、夏休みが來た。藤野さんは、豐吉に敗けたのが口惜いと言つて泣いたと、富太郎が言囃して歩いた事を憶えてゐる。
休暇となれば、友達は皆、本や石盤の置所も忘れて、毎日々々山蔭の用水池に水泳に行くものであつた。私も一寸々々一緒に行かぬではなかつたが、怎してか大抵一人先に歸つて來るので、父の仕事場にしてある店先の板間に、竹屑やら鉋屑の中に腹這になつては、汗を流しながら讀本を復習つたり、手習をしたりしたものだ。そして又、目的もなく軒下の日陰に立つて、時々藤野さんの姿の見えるのを待つてゐたものだ。
すると、大變な事が起つた。
八月一杯の休暇、其中旬頃とも下旬頃とも解らぬが、それは〳〵暑い日で、空には雲一片なく、腦天を焙りつける太陽が宛然火の樣で、習との風も吹かぬから、木といふ木が皆死にかかつた樣に其葉を垂れてゐた。家々の前の狹い溝には、流れるでもない汚水の上に、薄く浮つた泡が數限りなく腐つた泥から湧いてゐて、日に曝された幅廣い道路の礫は足を焼く程暖く、蒸された土の溫氣が目も眩む許り胸を催嘔せた。
村の後ろは廣い草原になつてゐて、草原が盡きれば何十町歩の青田、それは皆近江屋の所有地であつたが、其青田に灌漑する、三間許りの野川が、草原の中を貫いて流れてゐた。野川の岸には、近江屋が年中米を搗かせてゐる水車小屋が立つてゐた。
春は壺菫に秋は桔梗女郎花、其草原は四季の花に富んでゐるので、私共はよく遊びに行つたものだが、其頃は一面に萱草の花の盛り、殊にも水車小屋の四周には澤山咲いてゐた。小屋の中には、直徑一間もありさうな大きい水車が、朝から晩までギウ〳〵と鈍い音を立てて廻つてゐて、十二本の大杵が斷間もなく米を搗いてゐた。
私は其日、晒布の袖無を着て帶も締めず、黒股引に草履を穿いて、額の汗を腕で拭き拭き、新家の門と筋向になつた或駄菓子屋の店先に立つてゐた。
と、一町程先の、水車小屋へ曲る路の角から、金次といふ近江屋の若者が、血相變へて驅けて來た。
『何しただ？』と誰やら聲をかけると、
『藤野樣ア水車の心棒に捲かれて、杵に搗かれただ。』と大聲に喚いた。私は僞とも眞とも解ら

らず、唯強い電氣にでも打たれた樣に、思はず聲を立てて「やあ。」と叫んだ。

と、其若者の二十間許り後から、身體中眞白に米の粉を浴びた、鬚面の骨格の逞ましい、六尺許りの米搗男が、何やら小脇に抱へ込んで、これも疾風の如くに駈けて來た。見るとそれは藤野さんではないか！

其男が新家の門の前まで來て、中に入らうとすると、先に知らせに來た若者と、肌脱ぎした儘の新家の旦那とが飛んで出て來て、「醫者へ、醫者へ。」と叫んだ。男は些と足淀して、直ぐまた私の立つてゐる前を醫者の方へ駈け出した。

其何秒時の間に、藤野さんの變つた態が、よく私の目に映つた。男は、宛然鷲が黄鳥でも攫へた樣に、小さい藤野さんを小脇に抱へ込んでゐたが、美しい顏がグタリと前に垂れて、後には膝から下、雪の樣に白い脚が二本、力もなくブラ〳〵してゐた。其左の脚の、膝頭から斜めに踵へかけて、生々しい紅の血が、三分程の幅に唯一筋！

其直ぐ後を、以前の若者と新家の旦那が駈け出した。旦那の又直ぐ後を、白地の浴衣を着た藤野さんの阿母さん、何かしら手に持つた儘、火の樣に熱した礫の道路を裸足で・・・

其キッと堅く結んだ口を、私は、鬼ごッこに私を追駈けた藤野さんに似たと思つた。無論それは一秒時の何百分の一の短かい間。

これは、百度に近い炎天の、風さへ動かね眞晝時に起つた光景だ。

私は、鮮かな一筋の血を見ると、忽ち胸が嘔氣を催す樣にムッとして、目が眩んだのだから、阿母さんの顏の見えたも不思議な位。無中になつて其後から駈け出したが、醫者の門より二三軒手前の私の家へ飛び込むと、突然仕事してゐた父の膝に突伏した儘、氣を失つて了つたのださうな。

藤野さんは、恁うして死んだのである。

も一つの追憶も、其頃の事、何方が先であつたか忘れたが、矢張夏の日の赫灼たる午後の出來事と憶えてゐる。

村から一里許りのK停車場に通ふ荷馬車が、日に二度も三度も、村端から眞直に北に開いた國道を塵塗れの黒馬の蹄に埃を立てて往返りしてゐた。其日私共が五六人、其空荷馬車に乘せて貰つて、村端から三四町の、水車へ行く野川の土橋まで行つた。一行は皆腕白盛りの百姓子、中に蒼天を照りつける日を怖れて大きい蓮の葉を帽子代りに頭に載せたのもあつた。

土橋を渡ると、兩側は若松の並木、其蔭の松原の夏草の中に、汚い襤褸をした一人の女乞食が俯臥に寝てゐて、傍には、生れて滿一年と經たぬ赤兒が、嗄れた聲を絞つて泣きながら、草の中を這廻つてゐた。

それを見ると、馬車曳の定老爺が馬を止めて、「怎したたゞ。」と聲をかけた。私共は皆馬車から跳下りた。

女乞食は、大儀相に草の中から顏を擡げたが、垢やら埃やらが流るゝ汗に斑ちて、鼻のひしやげた醜い面に、謂ふべからざる疲勞と苦痛の色。左の眉の上に生々しい疵があつて、一筋の血が頬から耳の下に傳つて、胸の中へ流れてゐる。

「馬に蹴られて、歩けねえだもん。」と、絶え入りさうに言つて、又俯臥した。

定老爺は、暫く凝と此女乞食を見てゐたが、「村まで行つたら可がべえ。醫者樣もあるし巡査も居るだア。」と言捨てて、ガタ〳〵荷馬車を追つて行つて了つた。

私共は、ズラリと女の前に立竝つて見てゐた。稍あつてから、豐吉が傍に立つてゐる勘太

郎といふのの肩を叩いて、「汚ねえ乞食だでア喃。首玉ア眞黒だ。」

草の中の赤兒が、怪訝相な顏をして、四邊になつた儘私共を見た。女はビクとも動かぬ。

それを見た豐吉は、遽かに元氣の好い聲を出して、「死んだどウ、此乞食ア。」と言ひながら、一掴みの草を採つて女の上に投げた。「草かけて埋めてやるべえ。」

すると、皆も口々に言罵つて、豐吉のした通りに草を投げ初めた。私は一人遠くに離れてゐる樣な心地でそれを見てゐた。

と、赤兒が稍大きい聲で泣き出した。女は草の中から顏を擡げた。

「やあ、生きた〳〵。また生きたでア。」と喚きながら、皆は豐吉を先立てて村の方に逼げ出した。私は怎したものか足が動かなかつた。

醜い乞食の女は、流れた血を拭かうともせず、どんよりとした疲勞の眼を怨し氣に睜つて、唯一人殘つた私の顏を凝と瞶めた。私も瞶めた。其、埃と汗に塗れた顏を、傾きかけた夏の日が、強烈な光を投げて憚りもなく照らした。頰に流れて頸から胸に落ちた一筋の血が、いと生々しく日を射た。

私は、目が眩いて四邊が暗くなる樣な氣がすると、忽ち、いふべからざる寒さが體中を戰かせた。皆から三十間も遲れて、私も村の方に駈け出した。

然し私は、怎したものか先に駈けて行く子供等に追つかうとしなかつた。そして、二十間も駈けると、立止つて後を振返つた。乞食の女は、二尺の夏草に隱れて見えぬ。更に豐吉等の方を見ると、もう乞食の事は忘れたのか、聲高に「吾は官軍」を歌つて駈けてゐた。

私は其時、妙な心地を抱いてトボ〳〵と歩き出した。小い胸の中では、心にちらつく血の顏の幻を追ひながら、「先生は不具者や乞食に惡口を利いては可ないと言つたのに、豐吉は那麼事をしたのだから、たとひ豐吉が一番で私が二番でも、私より豐吉の方が惡い人だ。」といふ樣な事を考へてゐたのであつた。

あはれ、其後の十幾年、私は村の小學校を最優等で卒へると、高島先生の厚い情によつて、盛岡の市の高等小學校に學んだ。其處も首尾よく卒業して、縣立の師範學校に入つたが、其夏父は肺を病んで死んだ。間もなく、母は隣村の實家に歸つた。半年許りして、或事情の下に北海道に行つたとまで知つてゐるが、生きてゐるとも死んだとも、消息を受けた人もなければ、尋ねる的もない。

私は二十歳の年に高等師範に進んで、六箇月前にそれも卒へた。卒業試驗の少し前から出初めた惡性の咳が、日ましに募つて來て、此鎌倉の病院生活を初めてからも、既に四箇月餘りを過ぎた。

學窓の夕、病室の夜、言葉に文に友の情は沁み〴〵と身に覺えた。然し私は、何故か多くの友の如く戀といふものを親しく味つた事がない。或友は、君は餘りに內氣で、常に警戒をし過ぎるからだと評した。或は然うかも知れぬ。或友は、朝から晩まで黃卷堆裡に沒頭して、全然社會に接せぬから機會がなかつたのだと言つた。或は然うかも知れぬ。又或友は、知識の奴隸になつて了つて、氷の如く冷酷な心になつたからだと冷笑した。或は實に然うなのかも知れぬ。

幾人の人を癒やし、幾人の人を殺した此寢臺の上、親み慣れた藥の香を吸うて、濤音遠き枕に、夢むともなく夢むるのは十幾年の昔である。ああ、藤野さん！　僅か八歳の年の半年餘の短い夢、無論戀とは言はぬ。言つたら人も

笑はうし、自分でも悲しい。唯、木陰地の濕氣にも似て、日の目も知らぬ淋しき半生に、不圖天上の枝から落ちた一點の紅は其人である。紅と言へば、あゝ、かの八月の炎天の下、眞白き脛に流れた一筋の血！　まざ〳〵とそれを思出す毎に、何故といふ譯もなく私は又、かの夏草の中に倒れた女乞食を思出すのである。と、直ぐ又私は、行方知れぬ母の上に怖しい想像を移す。咯血の後、昏睡の前、言ふべからざる疲勞の夜の夢を、幾度となく繰返しては、今私の思出に上る生の母の顏が、もう眞の面影ではなくて、かの夏草の中から怨めし氣に私を見た、何處から來て何處へ行つたとも知れぬ、女乞食の顏と同じに見える樣になつたのである。病める冷き胸を抱いて、人生の淋しさ、孤獨の悲しさに遣瀨もない夕べ、切に戀しきは、文字を學ぶ悅びを知らなかつた以前である。今迄に學び得た知識それは無論、極く零碎なものではあるけれ共、私は其爲に半生の心血を注ぎ盡した。其爲に此病をも得た。而して遂に、私は果して何を敎へられたであらう？　何を學んだであらう？　學んだとすれば、人は何事をも眞に知り得ざるものだといふ、漠然たる恐怖唯一つ。

あゝ、八歲の年の三月三十日の夕！　其以後、先づ藤野さんが死んだ。路傍の草に倒れた女乞食を見た。父も死んだ。母は行方知れずになつた。高島先生も死んだ。幾人の友も死んだ。軈ては私も死ぬ。人は皆散り〳〵である。離れ離れである。所詮は皆一樣に死ぬけれども、死んだとて同じ墓に眠れるでもない。大地の上の處々、僅か六尺に足らぬ穴に葬られて、それで言語も通はねば、顏も見ぬ。上には青草が生える許り。

男と女が不用意の歡樂に耽つてゐる時、其不用意の間から子が出來る。人は偶然に生れるのだと思ふと、人程痛ましいものはなく、人程悲しいものはない。其偶然が、或る永劫に亙る必然の一連鎖だと考へれば、猶痛ましく、猶悲しい。生れなければならぬものなら、生れても仕方がない。一番早く死ぬ人が、一番幸福な人ではなからうか?!

去年の夏、久し振りで故鄕を省した時、栗の古樹の下の父が墓は、幾年の落葉に埋れてゐた。淸光童女と記した藤野さんの小さい墓碑は、字が見えぬ程雨風に侵蝕されて、萱草の中に隱れてゐた。

立派な新築の小學校が、昔草原であつた、村の背後の野川の岸に立つてゐた。變らぬものは水車の杵の數許り。

十七の歲、お蒼前樣の祭禮に馬から落ちて、右の腕を折り左の眼を潰した豐吉は、村役場の小使になつてゐて、私が訪ねて行つた時は、第一期地租附加稅の未納督促狀を、額の汗を拭き〳〵謄寫版で刷つてゐた。

野ばら

水無月ふかきうるほひの
朧ろの淵のみ空より、
祭女の花笠の
ふと後見るなよびかに
宵月の影野にひくし。

せせらぎ添ひの畔路の
片側薄き靄の色、——
野菜若芽の枝枝に
ともせる百の匂ひの灯、
今、ほのじろく燃るなる。

（『黄草集』より）

鳥影

其一

（一）

小川靜子は、兄の信吾が歸省するといふので、二人の妹と下男の松藏を伴れて、好摩の停車場まで迎ひに出た。もと〱鋤一つ入れたことのない荒蕪地の中に建てられた小さい三等驛だから、乘降の客と言つても日に二十人が關の山、それも大抵は近村の百姓や小商人許りなのだが、今日は姉妹の姿が人の目を牽いて、夏草の香に埋もれた驛内も常になく艷めいてゐる。

小川家といへば、郡でも相應な資産家として、また、當主の信之が郡會議員になつてゐる所から、主なる有志家の一人として名が通つてゐる。總領の信吾は、今年大學の英文科を三年に進んだ。何と思つてか知らぬが、この暑中休暇を東京で暮すと言つて來たのを、故家では、村で唯一人の大學生なる吾子の夏毎の歸省を、何よりの誇見で樂みにもしてゐる、世間不知の母が躍起になつて、自分の病氣や靜子の緣談を理由に、手酷く反對した。それで信吾は、格別の用があつたでもなかつたが、案外溫しく歸ることになつたのだ。

午前十一時何分かに着く筈の下り列車が、定刻を三十分も過ぎてるのに、未だ着かない。姉妹を始め、三四人の乘客が皆もうプラットフォームに出てゐて、遙か南の方の森の上に煙の見えるのを、今か今かと待つてゐる。二人の妹は、裾短かな、海老茶の袴、下髮に同じ朱鷺色のリボンを結んで、譯もない事に笑ひ興じて、追ひつ追はれつする。それを羨まし氣に見ながら、同年輩の見窄らしい裝をした、洗洒しの白手拭を冠つた小娘が、大時計の下に腰掛けてゐる、目のショボ〱した婆樣の膝に凭れてゐた。

驛員が二三人、驛夫室の入口に倚つ懸つたり、蹲んだりして、時々此方を見ながら、何か小聲に語り合つては、無遠慮に哄と笑ふ。靜子はそれを避ける様に、ズッと端の方の腰掛に腰を掛けた。銘仙矢絣の單衣に、白茶の縞珍の帶も配色がよく、生際の美しい髮を油氣なしのエス卷に結つて、幅廣の鼠のリボンを生溫かい風が煽る。化粧つてはゐないが、七難隱す色白に、長い睫毛と恰好のよい鼻、よく整つた顏容で、二十二といふ齡よりは、誰が目にも二つか三つは若い。それでゐて、何處か恁う落着いた、と言ふよりは寧ろ、沈んだ處のある女だ。

六月下旬の日射がもう正午に近い。山國の空は秋の如く澄んで、姬神山の右の肩に、綿の様な白雲が一團、彫出された様に浮んでゐる。燃ゆる様な、好摩が原の夏草の中を、驀地に走つた二條の鐵軌は、車の軋つた痕に烈しく日光を反射して、それに疲れた眼が、遙か彼方に快い蔭をつくつた、白樺の木立の中に、蕩々と融けて行きさうだ。

靜子は眼を細くして、恍然と兄の信吾の事を考へてゐた。去年の夏は、休暇がまだ二十日も餘つてる時に、信吾は急に言出して東京に發つた。それは靜子の學校仲間であつた平澤淸子が、醫師の加藤と結婚する前日であつた。淸子と信吾が、餘程以前から思ひ合つてゐた事は、靜子だけがよく知つてゐた。

今度歸るまいとしたのも、或は其、己に背い

た清子と再び逢ふまいとしたのではなからうかと、靜子は女心に考へてゐた。それにしても歸つて來るといふのは嬉しい、恁う思返して呉れたのは、綿々と訴へてやつた自分の手紙を讀んだ爲だ、兄は自分を援けに歸るのだと許り思つてゐる。靜子は、今持上つてゐる縁談が、種々の事情から兩親始め祖父までが折角勸めるけれど、自分では奈何しても嫁く氣になれない、此心をよく諒察つて、好く其間に斡旋してくれるのは、信吾の外にないと信じてゐるのだ。

「來た、來た。」と、脊の低い驛夫が叫んだので、フォームは俄かに色めいた。も一人の髯面の驛夫は、中に人のゐない改札口へ行つて、「來ましたよウ」と怒鳴つた。濃い煙が、睦しい野末の青葉の上に見える。

（二）

凄じい地響をさせて突進して來た列車が停ると、信吾は手づから二等室の扉を排けて身輕に降り立つた。乗降の客や驛員が、慌しく四邊を驅ける。汽笛が澄んだ空氣を振はして、汽車は直ぐ發つた。

荷札扱ひにして來た、重さうな旅行鞄を、信吾が手傳つて、頭の禿げた松藏に背負してゐる間に、靜子は熟々其容子を見てゐた。ネルの單衣に涼しさうな生絹の兵子帶、紺キャラコの夏足袋から、細い柾目の下駄まで、去年の信吾とは大分違つてゐる。中肉の、脊は婷乎として高く、靜子には態と徽章も附けてないから、打見には誰にも學生と思へない。何處か厭味のある、ニヤケた顔ではあるが、母が、妹の靜子が聞いてさへ可笑い位自慢にしてるだけあつて、男には惜しい程肌理が濃く、色が白い。秀でた鼻の下には、短い髭を立ててゐた。それが怎やら老けて見える。老けて見えると同時に、妹の目からは、今迄の馴々しさが額から消え失せた樣にも思はれる。輕い失望の影が靜子の心を掠めた。

「何を其麼に見てるんだ、靜さん？」

「ホホ、兄樣少し老けたわね。」と、靜子は莞爾する。

「あゝ之か？」と短い髭を態とらしく捻り上げて、「見落されるかと思つて心配して來たんだ。ハハハ。」

「ハハハ。」と松藏も聲を合せて、背の鞄を搖り上げた。

「怎だ、重いだらう？」

「何有、大丈夫でごあんす。年は老つても、」と又搖り上げて、「さあ、松藏が先に立ちますべ。」

連立つて停車場を出た。靜子は、際どくも清子の事を思浮べて、枕形の洋傘を突いた信吾の姿が、吾兄ながら立派に見える。高が田舍の開業醫づれの妻となつた彼の女が、今度この兄に逢つたなら、甚麼氣がするだらうなどと考へた。

二町許りも構内の木柵に添うて行くと、信號柱の下で踏切になる。小川家へ行くには、此處から線路傳ひに南へ辿つて、松川の鐵橋を渡るのが一番の近道だ。二人の妹は、早く歸つて阿母さんに知らせると言つて、足並揃へてズン〱先に行く。松藏は大股にその後に跟いた。

信吾と靜子は、相竝んで線路の兩側を歩いた。梅雨後の勢のよい青草が熱蒸れて、眞正面に照りつける日射が、深張の女傘の投影を、鮮かに地に印した。靜子は、この夏は賑やかに樂く暮せると思ふと、逢つたら先づ話して置かうと考へてゐたことも忘れて、もう怡々した心地になつた。

「皆が折角待つてることよ。」

「然うか。實は此夏少し勉強しようと思つたん

だがね。」
「勉強は家でだつて出來ない事なくつてよ。其麼にお邪魔しないわ。」
『それも然うだが、子供が大勢ゐるからな。』
『だつて阿母さんが那麼に待つてますもの。』
「その阿母さんの病氣ッてな甚麼だい？　タント惡いんぢやないだらう？』
『え〻、其麼に惡かアないんですけれど……。』
「臥てゐるか？』
「臥たり起きたり。例のリウマチに、胃が少し惡いんですつて。』
「胃の惡いのは喰過だ。朝から煙草許り喫んでゐて、意屈まぎれに種々な物を間食するから惡いんだよ。」
『でもないでせうが、一體阿母さんは丈夫ぢやないのね。』
「若い時の應報さ。』
「まあ！」と目を大きく瞠つた。母のお柳は昔盛岡で名を賣つた藝妓であつたのを、父信之が學生時代に貫馴染んで、其爲に退校にまでなり、家中反對するのも諾かずに無理に落籍したのだとは、まだ女學校にゐる頃叔母から聞かされて、譯もなく泣いた事があつた……が、今迄終ぞ恁麼言葉を兄の口から聞いた事がない。靜子は、宛然自分の祕密でも言ひ現された樣な氣がして、さつと面を染めた。

（三）

信吾も少し言過ぎたと思つたかして直ぐに、
「だが何か服藥はしてるだらうね？」
『え〻。……加藤さんが毎日來て診て下さるのよ。』
「然うか。』と言つて、また態とらしく、『然うか、加藤といふ醫師があつたんだな。」
靜子はチラリと兄の顏を見た。
「醫師が毎日來る樣ぢや、餘り輕いんでもないんだね？』
「然うぢやないのよ。加藤さんは交際家なんですもの。』
「フム、交際家か！』と短い髭を捻つて、
「其麼風ぢや相應に繁昌つてるんだらう？』
『え〻、宅の方へ廻診に來る時は、大抵自轉車よ。でなけや馬に乘つて來るわ。』
『ほう、景氣をつけたもんだな。そして何か、もう子供が生れたのか？』
『……まだよ。」と低い聲で答へて目を落した。
『それぢや清子さんも暇があつて可いんだらう。』
「え〻。」
「女は子供を有つと、もう最後だからな。』
靜子は妙にトチッて、其儘口を噤んで了つた。
人は長く別れてゐると、その別れてゐた月日の事は勘定に入れないで、お互ひにまだ別れなかつた時の事を基礎に想像する。靜子は、清子が加藤と結婚した事について、少からず兄に同情してゐる。今度歸つて來て、毎日來る加藤と顏を合せるのも、兄は甚麼に不愉快な思ひをするだらう、などとまで狹い女心に心配もしてゐた。そして、何かしらそれに關した事を言出されるかと、宛然、自分の持つてゐる鋭い刃物に對手が手を出すのを、ハラ〳〵して見てゐる樣な氣がしてゐたが、信吾の言葉は、故意かは知れないが餘りに平氣だ、餘りに冷淡だ。今迄の心配は杞憂に過ぎなかつた樣にも思ふ。又、兄は自ら僞つてるのだとも思ふ。そして、心の底の何處かでは、信吾がモウ清子の事を深く心にとめても居ないらしい口吻を、何となく不滿に感じられる。その素振を見て取つて、信吾は亦自分の心を妹に勝手に忖度されてる樣な氣がして、これも默つて了つた。
二人は竝んで歩いた。蒸す樣な草いきれと、乾いた線路の土砂の反射する日光とで、額は何

時しか汗ばんだ。静子の顔は、先刻の怡々した光が消えて、妙に眞面目に引緊つてゐた。十間許り前を行く松藏の後姿は、荷が重くて屈んでるから、大きい鞄に足がついた樣だ。

稍あつてから信吾は、『あの問題は、一體奈何なつてるんだい？』と妹を見返つた。

『あの問題ッて、…松原の方？』と兄の顔を仰ぐ。

『あゝ。餘程切迫してるのかい？』

『さうぢや無いんですけれど……』

『手紙の樣子ぢや然う見えたんだが。』

『さうぢや無いんですけど。』と繰返して、『怎せ貴兄の居る間に、何んとか決めなけやならない事よ。』

然うか、それで未だ先方には何とも返事してないんだね？』

『えゝ。兄樣の歸つてらしやるのを待つてたんだわ。』

信吾は少し言ひ淀んで、『昨日發つ時にね、松原君が上野まで見送りに來て呉れたんだ……。』

静子は默つて兄の顔を見た。松原政治といふのは、近衛の騎兵中尉で、今は乘馬學校の生徒、静子の縁談の對手なのだ。

（四）

『發つ四五日前にも、』と信吾は言葉を次いだ。『突然訪つて來て大分夜更まで遊んで行つた。今度の問題に就いちや別段話もなかつたが、（僕もモウ二十七ですからねえ。）なんて言つてゐたつけ。』

静子は默つて聞いてゐた。

『休暇で歸るのに見送りなんか爲て貰はなくつても可いと言つたのに、態々俥でやつて來てね。麥酒や水菓子なんか車窓ン中へ抛り込んでくれた。皆樣に宜敷つて言つてたよ。』

『然うでしたか。』と氣の無さ相な返事である。

『皆樣にぢやない静さんにだらうと、餘程言つてやらうかと思つたがね。』

『まあ！』

『ナニ唯思つた丈さ。まさか口に出しはしないよ。ハッハハ。』

この松原中尉といふのは、小川家とは遠縁の親戚で、十里許りも隔つた某村の村長の次男である。兄弟三人皆軍籍に身を置いて、三男の狷介と云ふのが静子の一歳下の弟の志郎と共に士官候補生になつてゐる。

長男の浩一は、過る日露の役に第五聯隊に從つて、黒溝臺の悪戰に壯烈な戰死を遂げた。——これが静子の悲哀である。静子は、女學校を卒へた十七の秋、親の意に從つて、當時歩兵中尉であつた此浩一と婚約を結んだのであつた。

それで翌年の二月に開戰になると、出征前に是非式事をしようと小川家から言出した。これは浩一が、生きて歸らぬ覺悟だと言つて堅く斷つたが、静子の父信之の計ひで、二月許りも青森へ行つて、浩一と同棲した。

浩一の遺骨が來て盛んな葬式が營まれた時は、母のお柳の思惑で、静子は會葬することも許されなかつた、だから、今でも表面では小川家の令嬢に違ひないが、其實、モウ其時から未亡人になつてるのだ。

その夏休暇で歸つた信吾は、さらでだに内氣の妹が、病後の如く色澤も失せて、力なく沈んでるのを見ては、心の底から同情せざるを得なかつた。そして慰めた。信吾も其頃は感情の荒んだ今とは別人のやうで、血の熱かい眞摯な、二十二の若々しい青年であつたのだ。

九月になつて上京する時は、自ら兩親を說いて、静子を携へて出たのであつた。兄妹は本郷眞砂町の素人屋に室を並べてゐて、信吾は

高等學校へ、靜子は某々の美術學校へ通つた。
當時少尉の松原政治が、兄妹に接近し初めたのは、其後間もなくの事であつた。
『姉さん。』と或時政治が靜子を呼んだ。靜子はサッと顔を染めて俯向いた。すると『僕は今迄一度も、貴女を姉さんと呼ぶ機會がなかつた。これからもモウ其機會がないと思ふと、實に殘念です。』と眞面目になつて言つた事がある。靜子も其初め、亡き人の弟といふ懷しさが先に立つて、政治が日曜毎の訪問を喜ばぬでもなかつた。
何日の間にかパッタリと足が止つた。其間に政治は、同僚に捲込まれて酒に親む事を知つた。そして一昨年の秋中尉に昇進してからは、また時々訪ねて來た。然しモウ以前の單純な、素朴な政治ではなかつた。或時は微醺を帶びて來て、此々擽る樣な事を言つた事もある。又或時は同じ中隊だといふ、生半可な文學談などをやる若い少尉を伴れて來て、態と其前で靜子と親しい樣に見せかけた。そして、靜子が次の間へ立つた時、『怎だ、仲々美いだらう？』と低い聲で言つたのが襖越しに聞こえた。靜子は心に憤つてゐた。
昨年の春、母が産後の肥立が惡くて二月も患つた時、看護に歸つて來た儘靜子は再び東京に出なかつた。そして、此六月になつてから、突然政治から結婚の申込みを受けたのだ。
『それで、兄樣は奈何思つて？』と、靜子は、竝んで歩いてゐる信吾の横顔を眤と見つめた。

（五）

『奈何つて言つた所で、問題は頗る簡單だ。』
『然う？』と靜子は兄の顔を覗く樣にする。
『簡單さ。本人が厭なら仕樣がないぢやないか。』
『そんなら可いけど……』と莞爾する。
『だがまあ、お父さんやお母さんの意見も聞いて見なくちやならないし、それに祖父さんだつて何か理窟を言ふだらうしね。』
『ですけど、私奈何したつて嫁かないことよ。』
『さう頭つから我を張つたつて仕方がないが、マア可いよ、僕に任して置けや心配する事は無い。お前の心はよく解つてるから。』
『眞箇？』
『ハハハ。まるで小兒みたいだ。』と信吾は無造作に笑ふ。
靜子も聲を合せて笑つたが、『ま、嬉しい。』と言つて額の汗を拭く。顔が晴やかになつて、心持や聲も華やいだ。
『兄樣、アノ面白い事があつてよ。』
『何だ？』
『叔父さんが私に同情してるわ。』
『叔父さんて誰？　昌作さんか？』
『えゝ。』と言つて、さも可笑相な目附をする。昌作といふのは父信之の末の弟、兄妹には叔父に違ひないが、齢は靜子よりも一つ下の二十一である。
『今度の事件にか？』
『然うよ。過日奥の縁側で、祖母さんと何か議論してるの。そして靜子々々つて何か私の事言つてる樣なんですからね、惡いと思つたけど私立つて聞いたことよ。そしたら、（結婚といふものは戀愛によつて初めて成立するもので、他から壓制的に結びつけようとするのは間違だ。）なんて、それあ眞面目よ。すると祖母さんが、（あゝ〱然うだらうともさ。）が可笑しいぢやありませんか。壓制的なんて祖母さんに解るもんですかねえ。ホヽヽヽ。』
『そして奈何した。』
『奈何もしやしないけど、面白かつたわ。そして折角祖父さん許り攻撃してるのよ。舊時代の思想だの何のつてね……お父さんやお母さんの

事は言へないもんだから。』
『フム、然うか。…それで奈何する氣なんだらう、今後。』
『南米に行きたいんですつて。』
『南米に？ そんな事で學校も廢したんだな。』
『それ許りぢやないわ。今年卒業するのでしたのを落第したんですもの。』
『中學も卒業せずに南米に行つたつて奈何なるもんか。それに旅費だつて大分費る。』
『全體で二百圓あれア可いんですつて。』
『何處から出す積りだらう。家ぢや出せまいし…。』
『出せないことは無いと思ふわ。』
『だつて餘り無謀な計畫だ。』
『…ですけど、お母さんも少し酷いわね、昌作叔父さんに。私時々さう思ふ事があつてよ。』
『それや昌作さんが惡いんだ。そして今は何をしてるだらう？ 唯遊んでるのか？』
『歌を作つてるのよ。新派の歌。』
『歌？ 那麼恰好してて歌を作るの？ ハハハ。』
『仲々得意よ。そして少し天狗になつてるけど、眞個に巧いと思ふのもあるわ。』
『莫迦な。其麼事してるから駄目なんだ。少し英語でも勉強すれや可いのに。』

この時、重い地響が背後に聞えた。二人は同時に振返つて見て、急がしく線路の外に出た。信吾の乘つて來た列車と川口驛で擦違つて來た、上りの貨物列車が、凄じい音を立てて、二人の間を飛ぶが如くに通つた。

其　二

（一）

人通りの少い青森街道を、盛岡から北へ五里、北上川に架けた船綱橋といふを渡つて六七町も行くと、若松の並木が途絶えて見すぼらしい田舍町に入る。兩側百戸足らずの家並の、十が九までは古い茅葺勝で、屋根の上には百合や萱草や桔梗が生えた、昔の道中記にある澁民の宿場の跡がこれで、村人はたゞ町と呼んでゐる。小いながらも呉服屋、菓子屋、雜貨店、さては荒物屋、理髪店、豆腐屋まであつて、素朴な農民の需要は大抵此處で充される。町の中央の、四隣不相應に嚴しく土塀を繞した酒造屋と向ひ合つて、大きい茅葺の家に村役場の表札が出てゐる。

役場の外に、郵便局、駐在所、登記所も近頃新しく置かれた。小學校は、町の南端れ近くにある。直徑尺五寸もある太い丸太の、頭を圓くして二本植ゑた、それが校門で、右と左、手頃の棒の先を尖らして、無造作に鐵線で繋いだ木柵は、疎らで、不規則で、歪んで、破れた鎧の袖を展べた樣である。

柵の中は、左程廣くもない運動場になつて、二階建の校舍が其奧に、愛宕山の鬱蒼した木立を背負つた樣にして立つてゐる。

日射は午後四時に近い。西向の校舍は、後ろの木立の濃い綠と映り合つて殊更に明るく、授業は既に濟んだので、坦かな運動場には人影もない。夏も初めの鮮かな日光が溢れる樣に流れた。先刻まで箒を持つて彷徨つてゐた、年老つた小使も何處かに行つて了つて、隅の方には隣家の鷄が三羽、柵を潛つて來てチヨコ〳〵遊び廻つてゐる。

と、門から突當りの玄關が開いて、女教師の日向智惠子はパッと明るい中へ出て來た。其拍子に玄關に隣つた職員室の窓から賑やかな笑聲が洩れた。

クッキリとした、輪郭の正しい、引緊つた顏を眞正面に西日が照すと切のよい眼を眩しさ

うにした、紺飛白の單衣に長過ぎる程の紫の袴――それが一歩毎に日に燃えて、靜かな四邊の景色も活きる樣だ。年齢は二十一二であらう。少し鳩胸の、肩に程よい圓みがあつて、歩き方がシッカリしてゐる。

門を出て右へ曲ると、智惠子は些と學校を振返つて見て、「氣障な男だ。」と心に言つた。故もない微笑がチラリと口元に漂ふ。

家々の前の狹い淺い溝には、腐れた水がチョロチョロと流れて、緣に打込んだ杭が朽ちて白い菌が生えた。屋根が低くて廣く見える街路には、西並の家の影が疎な鋸の歯の樣に落ちて、處々に馬を脫した荷馬車が片寄せてある。鷄が幾群も、其下に出つ入りつ、零れた米を土埃の中に漁つてゐた。會つて頭を下げる小兒等に、智惠子は一々笑ひ乍ら會釋を返して行く。

一人、煮締めた樣な淺黃の手拭を冠つて、赤兒を背負つた十一二の女の兒が、とある家の軒下に立つて妹らしいのと遊んでゐたが、智惠子を見ると、鼻のひしやげた顏で卑しくニタニタ笑つて、垢だらけの首を傾げる。智惠子は側へ寄つて來た。

『先生！』

『お松、お前また此頃學校に來なくなつたね？』

と、柔かな物言ひである。

『これ。』と背中の兒を搖つて、相變らずニタニタと笑つてる。子守をするので學校に出られぬといふのだらう。

『背負つてでも可いからお出でなさい。ね、子供の泣く時だけ外に出れば可いんだから。』

お松はそれには答へないで、『先生ア今日お菓子喰つてらけな。皆してお茶飮んで……。』

『ホホヽヽ。』と智惠子は笑つた。『何處から見てゐたの？……今日はお客樣が被來たから然うしたの。お前さんの家でもお客さんが行つたらお茶を出すんでせう？』

『出されえ。』

信吾は歸省の翌々日、村の小學校を訪問したのであつた。

（二）

智惠子の泊つてゐる濱野といふ家は町でもズット北寄の――と言つても學校からは五六町しかない――寺道の入口の小い茅葺家がそれである。智惠子が此家の前まで來ると、洗洒しの筒袖を着た小造りの女が、十許りの女の兒を上框に腰掛けさせて髮を結つてやつて居た。

それと見た智惠子は直ぐ笑顏になつて、溝板を渡りながら、

『只今。』

『先生、今日は少し遲う御座んしたなッす。』

『ハ。』

『小川の信吾さんが、學校にお出で御座んしたらう？』

『え、被來てよ。』と言つた顏は心持赧かつた。

『それに、今日は三十日ですから少し月末の調べ物があつて……』と何やら辯疏らしく言ひながら、下駄を脫いで、『アノ、郵便は來なくつて小母さん？』

『ハ、何にも……然う〳〵、先刻靜子さんがお出でになつて、アノ、兄樣もお歸省になつたから先生に遊びに被來て下さる樣にッて。』

『然う？　今日ですか？』

『否。』と笑を含んだ。『何日とも被仰らな御座んした。』

『然うでしたか。』と安心した樣に言つて、『祖母さんは今日は？』

『少し好い樣で御座んす。今ぐ眠つてあんすから。』

『夜になると何日でも惡くなる樣ね。』と言ひながら、直ぐ横の破れた襖を開けて中を覗いた。

薄暗い取散らかした室の隅に、臥床が設けてあつて、汚れた蒲團の襟から、彼方向の小い白髪頭が見えてゐる。枕頭には、漆の剝げた盆に茶碗やら、藥瓶やら、流通の惡い空氣が、藥の香と古疊の香に濕つて、氣持惡くムッとした。

智恵子は稍暫しその物憐れな室の中を見てゐたが、默つて襖を閉めて、自分の室に入つて行つた。

上り口の板敷から、敷居を跨げば、大きく焚火の爐を切つた、田舍風の廣い臺所で、其爐の横の滑りの惡い板戶を明けると、六疊の座敷になつてゐる。隔ての煤けた障子一重で、隣りは老母の病室 —— 疊を布いた所は此二室しかないのだ。

東向に格子窓があつて、室の中は暗くはない。疊も此處は新しい。が、壁には古新聞が手際惡く貼られて、眞黑に煤けた屋根裏が見える、壁側に積重ねた蒲團には白い毛布が被つて、其に並んだ箪笥の上に、枕時計やら鏡臺やら、種々な手道具の類が整然と列べられた。

脫いだ袴を疊んで、桃色メリンスの袴下を、同じ地の、大きい菊模樣を染めた腰合せの平生着に換へると、智恵子は窓の前の机に坐つて、襟を正して新約全書を開いた。——これは基督教信者なる智恵子の自ら定めた日課の一つ、五時間の授業に相應に疲れた心の兎もすれば弛むのを、恁うして勵まさうとするのだ。

展かれたのは、モウ手擦のついてゐる例の馬太傳第二十七章である。智恵子は心を沈めて小聲に讀み出した。縛られた耶蘇がピラトの前に引出されて罪に定められ、荊の冠を冠せられ、其面に唾せられ、雨の樣な嘲笑を浴びて、遂にゴルゴタの刑場に、二人の盜人と相竝んで死に就くまでの悲壯を盡した詩 ——『耶蘇また大聲に呼はりて息絕えたり。』と第五十節迄讀んで來ると、智恵子は兩手を強く胸に組合せて、稍暫し默禱に耽つた。何時でも此章を讀むと、言ふに言はれぬ、深い〳〵心持になるのだ。

軈て智恵子は、昨日來た友達の手紙に返事を書かうと思つて、墨を磨り乍ら考へてゐると、不圖、今日初めて逢つた信吾の顏が心に浮んだ。……

（三）

丁度此時、信吾は學校の門から出て來た。

長過ぎる程の紺絣の單衣に、輕やかな絹の兵子帶、丈高い體を少し反身に何やら勢ひづいて學校の門を出て來た信吾の背後から、

『信吾さん！』と四邊憚からぬ澄んだ聲が響いて、色褪せた紫の袴を靡かせ乍ら、一人の女が急ぎ足に追驅けて來た。

『呀！』と振返つた信吾は笑顏を作つて、『貴女もモウ歸るんですか？』

『ハ、其邊まで御同伴。』と馴々しく言ひ乍ら、羞む色もなく男と竝んで、『マア私の方が這麽に小さい！』

矢張女教師の、神山富江といつて、女にしては脊の低い方ではないが、信吾と竝んでは肩先までしか無い。それは一つは、葡萄色の緒の、穿き減した低い日和下駄を穿いてる爲でもある。肉の緊つた青白い細面の、醜い顏ではないが、少し反齒なのを隱さうとする樣に薄い脣を窄めてゐる。かと思へば、些細の事にも其齒を露出にして淡白らしく笑ふ。よく物を言ふ眼が間斷なく働いて、解けば手に餘る程の髮は黑い。天賦か職業柄か、時には二十八といふ齡に似合はぬ若々しい擧動も見せる。一つには未だ子を持たぬ爲でもあらう。

富江には夫がある。これも盛岡で學校教師をしてゐるが、人の噂では二度目の夫だとも言ふ。それが頗る妙で、富江が此村に來てからの三年の間、正月を除いては、農繁の休暇にも

暑中の休暇にも、盛岡に歸らうとしない。それを怪んで訊ねると、
「何有、私なんかモウお婆さんで、夫の側に喰附いてゐたい齢でもありません。」と笑つてゐる。對手によつては、女教師の口から言ふべきでない事まで平氣で言つて、恥づるでもなく冗談にして了ふ。
村の人達は、富江を淡白な、さばけた、面白い女として心置なく待遇つてゐる。殊にも小川の母——お櫻にはお氣に入りで、よく其家にも出入する。其麼事から、この町に唯一軒の小川家の親戚といふ、立花といふ家に半自炊の様にして泊つてゐるのだ。服裝を飾るでもなく本を讀むでもない。盛岡には一文も送らぬさうで、近所の内儀さんに融通してやる位の小金は何日でも持つてゐると言ふ。
街路は八分通り蔭つて、高聲に笑ひ交してゆく二人の、肩から横顔を明々と照す傾いた日もモウ左程暑くない。
「だが何だ、神山さんは何日見ても若いですね。」と揶揄ふ様に甘つたるく舌を使つて、信吾は笑ひながら女を見下した。
『奢りませんよ。』と言ふ富江の聲は訛つてゐる。『ホヽヽ、いくら髭を生やしたつて其麼年老つた口は利くもんぢやありませんよ。』
「呀、また髭を……」
「寄つてらつしやい。』と富江は俄かに足を留めた。何時しか己が宿の前まで來たのだ。
『次にしませう。』
『何故？　モウ虐めませんよ。』
「御馳走しますか？』
『しますとも……。』
と言つてる所へ、家の中から四十五六の汚らしい裝をした、内儀さんが出て來て、信吾が先刻寄つて呉れた禮を諄々と述べて、夫もモウ歸る時分だから是非上れと言ふ。夫の金藏といふ此家の主人は、二十年も前から村役場の書記を勤めてゐるのだ。
信吾がそれを斷つて歩き出すと、
『信吾さん、それぢや屹度押しかけて行きますよ。』
『あゝ被來い、歌留多なら何時でもお相手になつて上げるから。』
「此方から教へに行くんですよ。』と笑ひ乍ら、富江は薄暗い家の中へ入つて行つた。
と、信吾は急に取濟した顔をして大股に歩き出したが、加藤醫院の手前まで來ると、フト物忘れでもした様に足を緩めた。

（四）

今しもその、五六軒彼方の加藤醫院へ、晩餐の準備の豆腐でも買つて來たらしい白い前掛の下女が急ぎ足に入つて行つた。
「何有、たかが知れた田舍女ぢやないか！』と、信吾は足の緩んだも氣が附かずに、我と我が挑む心を嘲つた。人妻となつた清子に顔を合せるのは、流石に快くない。快くないと思ふ心の起るのを、信吾は自分で不愉快なのだ。
寄らなければ寄らなくても濟む、別に用があるのでもないのだ。が、狹い村内の交際は、それでは濟まない。殊には、さまででもない病氣に親切にも毎日廻診に來てくれるから是非顔出しして來いと母にも言はれた。加之今日は妹の靜子と二人で町に出て來たので、其妹は加藤の宅で兄を待合して一緒に歸ることにしてある。
「疚しい事があるんぢやなし……」と信吾は自分を勵ました。『それに、加藤は未だ廻診から歸つてゐまい。」と考へると、「然うだ。玄關だけで挨拶を濟まして、靜子を伴れ出して歸らうか。」と、つい卑怯な考へも浮ぶ。
「清子は甚麼顔をするだらう？』といふ好奇心

が起つた。と、

「私はあの、貴方のお言葉一つで……」と言つて眤と瞳を据ゑた清子の顏が目に浮んだ。――それは去年の七月の末加藤との緣談が切迫窮つて、清子がとある社の杜に信吾を呼び出した折のこと。――その眼には、「今迄この私は貴方の所有と許り思つてました。然う思つたのは間違でせうか？」といふ、心を張りつめた美しい質問が淚と共に光つてゐた。二人の上に垂れた楓の枝が微風に搖れて、葉洩れの日影が淸子の顏を明るくし又暗くしたことさへ、鮮かに思出される。

稚い時からの戀の最後を、其時、二人は人知れず語つたのだ。……此追憶は、流石に信吾の心を輕くはしない。が、その時の事を考へると、「俺は强者だ。勝つたのだ。」といふ淺間しい自負心の滿足が、信吾の眼に荒んだ輝きを添へる……。

取濟ました顏をして、信吾は大勝に杖を醫院の玄關に運んだ。

昔は町でも一二の濱野屋といふ旅籠屋であつた、表裏に二階を上げた大きい茅葺家に、思切つた修繕を加へて、玄關造にして硝子戶を立てた。その取つてつけた樣な不調和な玄關には、「加藤醫院」と瘦爪らしい楷書で書いた、まだ新しい招牌を揭げた。――開業醫の加藤は、もと他村の者であるが、この村に醫者が一人も無いのを見込んで一昨年の秋、この古家を買つて移つて來た、生れ村では左程の信用もないさうだが、根が人好きのする男で、技術の巧拙より患者への親切が、先づ村人の氣に入つた。そして、村長の娘の淸子と結婚してからは馬を買ひ自轉車を買ひ、田舍者の目を驚かす手術臺やら機械やらを置き飾つて、隣村二ケ村の村醫までも兼ねた。

信吾が落着いた聲で案内を乞ふと、小生意氣らしい十七八の書生が障子を開けた。其處は直ぐ藥局で、加藤の弟の代診をしてゐる愼次が、何やら薄紅い藥を計量器で計つてゐた。

『や、小川さんですか。』と計量器を持つた儘で、『さ何卒お上り下さいまし。』と無理に擬ねた樣な訛言を使つた。

そして、「姉樣、姉樣。」と聲高く呼んで、『兄もモウ歸る時分ですから。』

『ハ、有難う。妹は參つてゐませんですか？』

其處へ横合の襖が開いて淸子が出て來た。信吾を見ると、「呀。」と抑へた樣な聲を出して、膝をついて、「ようこそ。」と言ふも口の中。信吾はそれに挨拶をし乍らも、頭を下げた淸子の耳の、薔薇の如く紅きを見のがさなかつた。

「さ何卒。靜さんも待つてらつしやいますから。」

『否、然うしては……』と言はうとしたのを止して、信吾は下駄を脫いだ。處女らしい淸子の擧動が、信吾の心に或る皮肉な好奇心を起さしめたのだ。

（五）

二十分許り經つて、信吾兄妹は加藤醫院を出た。

一筋町を北へ、一町許り行くと、傾き合つた汚ならしい、家と家の間から、家路を左へ入る、路は此處から、水車場の前の小橋を渡つて、小高い廣い麥畑を過ぎて、坂を下りて、北上川に架けられた、鶴飼橋といふ吊橋を渡つて十町許りで大字川崎の小川家に行く。落ちかけた夏の日が、熟して割れた柘榴色の光線を、青々とした麥畑の上に流して、眞正面に二人の顏を彩つた。

信吾は何氣ない顏をして步き乍らも心では淸子の事を考へてゐた。僅か二十分許りの間、座には靜子も居れば、加藤の母や愼次も交る〳〵

挨拶に出た。信吾は極く物慣れた大人振つた口をきいた。清子は茶を薦め菓子を薦めつつ唯淑かに、口數は少なかつた。そして男の顏を眞正面には得見なかつた。

唯一度、信吾は對手を、"奥樣"と呼んで見た。清子は其時俯いて茶を注いでゐたが、返事はしなかつた。また顏も上げなかつた。信吾は女の心を讀んだ。

清子の事を考へると言つても、別に過ぎ去つた戀を思出してゐるのではない。また、豫期してゐた樣な不快を感じて來たのでもない。寧ろ、一種の滿足の情が信吾の心を輕くしてゐる。一口に言へば、信吾は自分が何處までも勝利者であると感じたので。清子の擧動がそれを證明した。そして信吾は、加藤に對して少しの不快な感も抱いてゐない、却つてそれに親しまう、親しんで而して繁く往來しよう、と考へた。

加藤に親しみ、清子を見る機會を多くする、——否、清子に自分を見せる機會を多くする。此方が、清子を思つては居ないが、清子には何時までも此方を忘れさせたくない。それ許りでなく、猫が鼠を弄る如く敗者の感情を弄ばうとする、荒んだ戀の驕慢は、も一度清子をして自分の前に泣かせて見たい樣な希望さへも心の底に孕んだ。

『清子さんは些とも變らないでせう。』と何かの序に靜子が言つた。靜子は、今日の兄の應待振の如何にも大人びてゐたのに感じてゐた。そして、兄との戀を自ら捨てた女友が、今となつて何故那麼未練氣のある擧動をするだらう。否、清子は自ら恥ぢてゐるのだ、其候に臆すのだ、と許り考へてゐた。

『些とも變らないね。』と信吾は短い髭を捻つた、『幸福に暮してると年は老らないよ。』

『さうね。』

其話はそれ限になつた。

『今日隨分長く學校に被居たわね。貴兄智惠子さんに逢つたでせう？』

『智惠子？　ウン日向さんか、逢つた。』

『何う思つて、兄樣は？』と笑を含む。

『美人だね。』と信吾も笑つた。

『額許りぢやないわ。』と靜子は眞面目な眼をして、『それや好い方よ心も。私姉樣の樣に思つてるわ。』と言つて、熱心に智惠子の性格の美しく清い事、其一例として、濱野(智惠子の宿)の家族の生活が殆んど彼女の補助によつて續けられてゐる事などを話した。

信吾は其話を、腹では眞面目に、表面はニヤニヤ笑ひ乍ら聽いてゐた。

二人が鶴飼橋へ差掛つた時、朱盆の樣な夏の日が岩手山の巓に落ちて、夕映の空が底もなく黄橙色に霞んだ。と、丈高い、頭髮をモヂャモヂャさした、眼鏡をかけた一人の青年が、反對の方から橋の上に現れた。靜子は、

『アラ昌作叔父さんだわ。』と兄に囁く。

『オーイ。』と青年は遠くから呼んだ。『迎ひに來た。家でも待つてるぞ。』

言ふ間もなく踵を返して、今來た路を自棄に大股で歸つて行く。信吾は其後姿を見送り乍ら、憐れむ樣な輕蔑した樣な笑ひを浮べた。靜子は心持眉を顰めて、『阿母さんも酷いわね。迎ひなら昌作さんでなくたつて可いのに！』と獨語の樣に呟いた。

其三

（一）

曉方からの雨は午少し過ぎに霽つた。庭は飛石だけ先づ乾いて、子供等の散かした草花が生生としてゐる。池には鯉が跳ねる。池の彼方が芝生の築山、築山の眞上に姿優しい姫神山が浮んで空には斷れ〴〵の白雲が流れた。——そ

れが開放した東向の緣側から見える地上に發散する水蒸氣が風なき空氣に籠つて、少し蒸す様な午後の三時頃。

『それで何で御座いますか、え〻、お食事の方は？ 矢張お進みになりませんですか？』と言ひ乍ら、加藤は少し腰を浮かして、靜子が薦める金盥の水で眞似許り手を洗ふ。今しもお柳の診察――と言つても每日の事でホンの型許り――が濟んだところだ。

『ハア、怎うも。……それでゐて恁う、始終何か喰べて見たい様な氣がしまして、一日口按排が惡う御座いましてね。』とお柳も披つた襟を合せ、片寄せた煙草盆などを醫師の前に直したりする。

痩せた、透徹るほど蒼白い、鼻筋の見事に通つた、險のある眼の心持吊つた――左褄とつた昔を忍ばせる細面の小造りだけに遙と若く見えるが、四十を越した證は額の小皺に爭はれない。

『胃の所爲ですな。』と頷いて、加藤は新しい手巾で手を拭き乍ら坐り直した。

『で何です、明日からタカヂャスターゼの錠劑を差上げて置きますから、食後に五六粒宛召上つて御覽なさい。え？ 然うです。今までの水藥と散藥の外にです。碎々と不味う御座いますから、微温湯か何かで其儘お嚥みになる様に。』と頤を突出して、喉佛を見せて嚥み下す時の様子をする。

見るからが人の好さ相な、丸顏に髭の赤い、デップリと肥つた、色澤の好い男で、襟の塞つた背廣の、腿の邊が張り裂けさうだ。

茶を運んで來た靜子が出てゆくと、奧の襖が開いて、卷莨の袋を摑んだ信吾が入つて來た。

『や、これは。』と加藤は先づ挨拶する、信吾も坐つた。

『ようこそ。暑いところを每日御足勞で……。』

『怎う致しまして。昨日は態々お立寄り下すつた相ですが、生憎と芋田の急病人へ行つてゐたものですから失禮致しました。今度町へ被來たら是非何卒。』

『ハ、有難う。これから時々お邪魔したいと思つてます。』と莨に火を點ける。

『何卒さう願ひたいんで。これで何ですからな、無論私などもお話相手には參りませんが、何しろ狹い村なんで。』

『で御座いますからね。』とお柳が引取つた。『これが(頤で信吾を指して)退屈をしまして、去年なんぞは貴方、まだ二十日も休暇が殘つてるのに無理無體に東京に歸つた樣な譯で御座いましてね。今年はまた私が這麼にブラ〳〵してゐて思ふ様に世話もやけず、何彼と不自由をさせますもんですから、もう昨日あたりからポツポツ小言が初りましてね。ホ、、。』

『然うですか。』と加藤は快活に笑つた。

『それぢや今年は信吾さんに逃げられない樣に、成るべく早くお癒りにならなけや不可ませんね。』

『え〻もうお蔭樣で、腰が大概良いもんですから、今日も恁うして朝から起きてゐますので。』

『何ですか、リウマチの方はもう癒つたんで？』

と信吾は自分の話を避けた。

『左樣、根治とはまあ行き難い病氣ですが、……』

『何卒。』と信吾の莨を一本取り乍ら、『撒里矢爾酸曹達が阿母さんのお體に合ひました樣で……』

とお柳の病氣の話をする。

開放した次の間では、靜子が茶棚から葉鐵の鑵を取出して、麥煎餅か何か盆に盛つてゐたが、それを持つて彼方へ行かうとする。

『靜や、何處へ？』とお柳が此方から小聲に呼止めた。

『昌作さん許へ。』と振返つた靜子は、立ち乍ら母の顏を見る。

『誰が來てるんだい?』と言ふ調子は低いながらに窘める樣に鋭かつた。

（二）

『山内樣よ。』と、靜子は温なしく答へて心持顏を曇らせる。

『然うかい三尺さんかい!』とお柳は蔑む色を見せたが、流石に客の前を憚つて、『ホヽヽヽ。』と笑つた、『昌作さんの脊高に山内さんの三尺ぢや釣合はないやね。』

『昌作さんにお客?』と信吾は母の顏を見る。其間に靜子は彼方の室へ行つた。

『然うだとさ。山内さんて、登記所のお雇さんでね、月給が六圓だとさ。何で御座いますね。』と加藤の顏を見て、『然う言つちや何ですけれど、那麼小い人も滅多にありませんねえ、家ぢや子供らが、誰が教へたでもないのに三尺さんといふ綽名をつけましてね。幾何叱つても山内さんを見れや然う言ふもんですから困つて了ひますよ。ホヽヽ。七月兒だつてのは眞個で御座いませうかね?』

『ハッハヽヽ。怎うですか知りませんが、那麼に生れついちやお氣の毒なもんですね。顏だつても綺麗だし、話して見ても色ンな事を知つてますが……』

『えゝえゝ。』とお柳は俄かに眞面目臭つた顏をして、『それやもう山内さんなんぞは、體こそ那麼でも、兎に角一人で喰つて行くだけの事をしてらつしやるんだから立派なもんで御座いますが、昌作叔父さんと來たらまあ怎うでせう! 町の人達も無小川の剩れ者たつて笑つてるだらうと思ひましてね。』

『其麼ことは御座いません……』と加藤が何やら言はうとするのを、お柳は打消す樣にして、

『學校は勝手に廢めて來るし、あゝして毎日碌してゐて何をする積りなんですか。私は這麼性質ですから諄々言つて見ることも御座いますが、人の前ぢや眼許りパチ〱さしてゐて、カラもう現時の青年の樣ぢやありませんので。お宅にでも何ぞつた時は何とか忠告して遣つて下さいましよ。』

『ハヽヽ。否、昌作さんにした所で何か屹度大きい御志望を有つて居られるんでせうて。それに何ですな、譬へ何を成さるにしても、あの御體格なら大丈夫で御座いますよ。……昌作さんも何ですが、(と信吾を見て)失禮乍ら貴君も好い御體格ですな。五寸……六寸位はお有りでせうな? 何方がお高う御座います?』

氣の無い樣な顏をして煙を吹いてゐた信吾は、『さア、何方ですか。』と、吐月峯に莨の吸殼を突込む。

『何方ももう脊許り延びてカラ役に立ちませんので、……電信柱にでも賣らなけや一文にもなるまいと申してゐますんで。ホヽヽヽ。』と、お柳は取つて附けた樣に高笑ひする。加藤も爲方なしに笑つた。

十分許り經つて加藤は自轉車で歸つて行つた。信吾は玄關から直ぐ書齋の離室へ引返さうとすると、

『信吾や、まあ可いぢやないか。』と言つて、お柳は先刻の座敷に戻る。

『お父樣は今日も役場ですか?』と、信吾は緣側に立つて空を眺めた。

『然うだとさ、何の用か知らないが……町へ出さへすれや何日でも昨晩の樣に醉つぱらつて來るんだよ。』と、我子の後姿を仰ぎ乍ら眉を顰める。

『爲方がない、交際だもの。』と投げる樣に言つて、敷居際に腰を下した。

『時にね。』とお柳は顏を和げて、『昨晩の話だね、お父樣のお歸りで其儘になつたつけが、お

いた。山内は臆病らしく二人を見てゐる。

『讀まなくちや爲様が無い！』と嘲る様に對手の顔を見て、『讀まなくちや崇拜もしない。何處を崇拜するんです？』と揶揄ふ様な調子になる。

『信吾や。』と隣の室からお柳が呼んだ。『富江さんが來たよ。』

昌作はジロリと其方を見た。そして信吾が山内に挨拶して出てゆくと、不快な冷笑を憚りもなく顔に出して、自棄に麥煎餅を頬張つた。

次の間にはお柳が不平相な顔をして立つてゐて、信吾の顔を見るや否や、『何だねお前、那麼奴等の對手になつてさ！　九月になれや何處かの學校へ代用教員に遣るつて、阿父様が然う言つてるんだから、那麼愚物にや構はずにお置きよ。お前の方が愚物になるぢやないか！』と、險のある眼を一層險しくして譴める様に言つた。

彼方の室からは子供らの笑聲に交つて、富江の燥いだ聲が響いた。

其　四

（一）

遠くから見ただけの人は、智惠子をツンと取澄した、愛想のない、大理石の像の様に冷い女とも思ふ。が、一度近づいて見ては、その滑かな美しい肌の下に、ぱつちりとした黒味勝の眼の底に、温かい心を感ぜずには居られぬ。

同情の深い智惠子は、宿の子供――十歳になる梅ちやんと五歳の新坊――が、もう七月になつたのに垢染みた袷を着て暑がつてるのを、例もの事ながら見るに見兼ねた。今日は幸ひ土曜日なので、授業が濟むと直ぐ歸つた。そして、歸途に買つて來た――一圓某の安物ではあるが――白地の荒い染の反物を裁つて、二人の單衣を仕立に掛つた。

障子を開けた格子窓の、直ぐ下から青い田が續いた。其青田を貫いて、此家の横から入つた寺道が、一町許りを眞直に、寶徳寺の門に隱れる。寺を圍んで蓊鬱とした杉の木立の上には、姫神山が金字塔の様に見える。午後の日射は青田の稲のそよぎを生々照して、有るか無きかの初夏の風が心地よく窓に入る。壁一重の軒下を流れる小堰の水に、蝦を掬ふ子供等の叫び、さては寺道を山や田に往き返りの男女の暢氣の濁聲が手にとる様に聞える――智惠子は其聞苦しい訛にも耳慣れた。去年の秋轉任になつてから、もう十ケ月を此村に過したので。

隣室からは、床に就いて三月にもなる老女の、閑かな呻き聲が聞える。主婦のお利代は門口に持出して、先刻からパチャ〳〵と洗濯の音をさしてゐる。智惠子は白い布を膝に被けて、餘念もなく針を動かしてゐた。

子供の衣服を縫ふ――といふ事が、端なくも智惠子をして亡き母を思出させた。智惠子は箪笥の上から、葡萄色天鵞絨の表紙の、厚い寫眞帖を取下して、机の上に展いた。

何處か俤の肖通つた、四十許りの品の良い女の顔が寫されてゐる。智惠子はそれに懷しい氣な眼を遣り乍ら針の目を運んだ。亡き母！

……智惠子の身にも悲しき追憶はある。生れたのは盛岡だと言ふが、まだ物心附かぬうちから東京に育つた――父が長い事農商務省に技手をしてゐたので――十五の春御茶の水女學校に入るまで、小學の課程は皆東京で受けた。智惠子が東京を懷しがるのは、必ずしも地方に育つた若い女の虚榮と同じではなかつた。十六の正月、父が俄かの病で死んだ、母と智惠子は住み慣れた都を去つて、盛岡に歸つた。――唯一人の兄が縣廳に奉職してゐたので。――浮世の悲哀といふものを、智惠子は其の時から知つた。間もなく母は病んだ。兄には善からぬ行

があつた。智恵子は學校にも行けなかつた。敎會に足を入れ初めたのは其頃で。

長患ひの末、母は翌年になつて遂に死んだ。程なく兄は或る藝妓を落籍して、夫婦になつた。智恵子は其賤しき女を姉と呼ばねばならなかつた。遂に兄の意に逆らつて洗禮を受けた。

智恵子は堅くも自活の決心をした。そして、十八の歳に師範學校の女子部に入つて、去年の春首尾克く卒業したのである。兄は今青森の大林區署に勤めてゐる。

父は嚴しい人で、母は優しい人であつた。その優しかつた母を思出す毎に智恵子は東京が戀しくてならぬ。住居は本郷の弓町であつた。四室か五室の廣からぬ家ではあつたが、……玄關の隣の四疊が智恵子の勉強部屋にされてゐた。衡門から筋向ひの家に、それは〳〵大きい楠が一株、雨も洩さぬ程繁つた枝を路の上に擴げてゐた。——靜子に訊けば、それが今猶殘つてゐると言ふ。

「彼の邊の事を、怎う變つたか詳しく小川さんの兄樣に訊いて見ようか知ら！」とも考へてみた。そして、「訊いた所で仕方がない！」と思返した。

と、門口に何やら聲高に喚る聲が聞えた。洗濯の音が止んだ。「六錢。」といふ言葉だけは智恵子の耳にも入つた。

（二）

すると、お利代の下駄を脱ぐ音がして、輕い跫音が次の間に入つた。

何やら探す樣な氣勢がしてゐたが、罹りと銅貨の相觸れる響。——霎時の間何の物音もしないと、老女の枕元の障子が靜かに開いて、窶れたお利代が顏を出した。

「先生、何とも……」と小聲に遠慮し乍ら入つて來て、

「あの、これが來まして……」と言ひにくさうに膝をつく。

「何です？」と言つて、見ると、それは厚い一封の手紙、（濱野お利代殿）と筆太に書かれて、不足税の印が捺してある。

「細かいのが御座んしたら、あの、一寸二錢だけ足りませんから。」

「あ、然う？」と皆まで言はせず輕く答へて、智恵子はそれを出してやる。お利代は極り惡氣にして出て行つた。

智恵子は不圖針の手を留めて、「子供の衣服よりは、お錢で上げた方が好かつたか知ら！」と考へた。そして直ぐに、「否、まだ有るもの！」と、今しも机の上に置いた財布に目を遣つた。幾何かの持越と先月分の俸給十三圓、その内から下宿料や紙筆油などの雜用の拂ひを濟まし、今日反物を買つて來て、まだ五圓許りは殘つてゐるのである。

お利代は直ぐ引返して來て、櫛卷にした頭に小指を入れて搔き乍ら、

「眞個に何時も〳〵先生に許り御迷惑をかけて。」と言つて、潤みを有つた大きい眼を氣の毒相に瞬く。左の手にはまだ封も切らぬ手紙を持つてゐた。

「まあ其麽こと！」と事も無げに言つたが、智恵子は心の中で、此女にはもう一錢も無いのだと考へた。

「今夜あの衣服を裁縫つて了へば、明日幾何か取れるので御座んすけれど……唯四錢しか無かつたもんですから。」

「小母さん！」と智恵子は口早に壓附ける樣に言つた。そして優しい調子で、

「私小母さんの家の人よ。おやなくつてよ。」

初めて聞いた言葉ではないが、お利代は大きい眼を瞠つて凝と智恵子の顏を見た、何と答へて可いか解らないのだ。

母は早く死んだ。父は家産を傾して行方不知れぬ。先夫は良い人であったが、梅といふ女兒を殘して之も行方知れず、今は函館にゐるが。二度目の夫は日露の役に從って歸らずなった。何か軍律に背いた事があって、死刑にされたのだといふ。七十を越した祖母一人に子供二人、己が手一つの仕立物では細い煙も立て難くて、一昨年から女教師を罷めた。去年代った智惠子にも居て貰ふことにした。この春祖母が病み附いてからは、それでも足らぬ。足らぬ所は何處から出る？ 智惠子の懷から！

言って見れば赤の他人だ。が、智惠子の親切は肉身の姉妹も及はぬ、とお利代は思ってゐる。美しくって、優しくって、確固した氣立、溫かい情……かくまで自分に親しくしてくれる人が、またと此世にあらうか、と、悲しきお利代は夜更けて生活の爲の裁縫をし乍らも、思はず智惠子の室に向いて手を合せる事がある。智惠子を有難いと思ふ心から、智惠子の信ずる神樣をも有難いものに思った。

『あの……小母さん。』と智惠子は稍躊躇ひ乍ら、机の上の財布を取って其中から紙幣を一枚、二枚、三枚……若しや輕蔑したと思はれはせぬかと、直ぐにも出しかねて右の手に握ったが、

『あの、小母さん、私小母さんの家の人よ。ね。だからあの毎日我儘許りしてるんですから惡く思はないで頂戴よ。ね。私小母さんを姉さんと思ってるんですから。』

『それはもう……』と言って、お利代は目を落して疊に片手をついた。

『だからあの、惡く思はれる樣だと私却って濟まないことよ。ね。これはホンのお小遣よ。祖母さんにも何か……』と言ひ乍ら握ったものを出すと、俯いたお利代の膝に龍鍾と霰の樣な淚が落ちる。と見ると智惠子はグッと胸が迫った。

『小母さん！』と、出した其手で矢庭に疊に突いたお利代の手を握って、『神よ！』と心に呼んだ。願くば御惠を垂れ給へ！』瞑ぢた其眼の長い睫毛を傳って、美しい露が溢れた。

（三）

『あゝ。』といふ力無い欠伸が次の間から聞えて、『お利代、お利代。』と、嗄れた聲で呼び、老女が眼を覺まして、寢返りでも爲たいのであらう。

智惠子はハッとした樣に手を引いた。お利代は淚に濡れた顏を擧げて、『は、只今。』と答へたが、其顏に言ふ許りなき感謝の意を湛へて、『一寸。』と智惠子に會釋して立つ。急がしく淚を拭って、隔ての障子を開けた。

其後姿を見送った目を、其處に置いて行った手紙の上に移して、智惠子は眤と呼吸を凝した。神から授かった義務を果した樣な滿足の情が胸に溢れた。そして、私に出來るだけは是非して上げればならぬ！と、自分に命ずる樣に心に誓った。

『あゝ、よく寢た。もう夜が明けたのかい、お利代？』と老女の聲が聞える。

『ホホヽヽ、今午後の三時頃ですよ祖母さん。お氣分は？』

『些とも平生と變らないよ。ナニか、先生はもうお出掛か？』

『否、今日は土曜日ですから先刻にお歸りになりましたよ。そしてね祖母さん、あの、梅と新坊に單衣を買って來て下すって、今縫って下すってるの。』

『噢、然うかい。それぢやお前、何か御返禮に上げなくちや不可ないよ。』

『まあ祖母さんは。何日でも昔の樣な氣で……』

『ホヽヽ。然うだったかい。だがねお利代、お

前よく氣を附けてね、先生を大事にして上げなけれや不可ないよ。今度の先生の樣に良い人はお前、何處に行つたつて有るものぢやないよ。』と子供にでも訓へる樣に言ふ。

智惠子はそれを聞くと、又しても眼の底に涙の鍾るを覺えた。

『ア痛、ア痛、寢返りの時に限つてお前は邪慳だよ。』と、今度はお利代を叱つてゐる。智惠子は氣が附いた樣に、また針を動かし出した。

五分許り經つてお利代が再び入つて來た時は、何を泣いてか其頰に新しい涙の痕が光つてゐた。

『御氣分が宜い樣ね?』

『はア。もう夜が明けたかなんて惚けて……』と少し笑つて、『皆先生のお蔭で御座います。』

『まあ小母さんは……』と同情深い眼を上げて、『小母さんは何だわね、私を家の人の樣にはして下さらないのね。』

『ですけれど先生、今もあのお祖母さんが、先生の樣な人は何處に行つても無いと申しまして……』と、流石は世慣れた齡だけに厚く禮を述べる。

『辛いわ、私!』と智惠子は言つた。『何も私なんかに然う被仰る事はなくつてよ、小母さんの樣に立派な心掛を有つてる人は、神樣が助けて下さるわ。』

『眞個に先生、生きた神樣つたら先生の樣な人かと思ひまして……』

『まあ!』と心から驚いた樣な聲を出して、智惠子は涼しい眼を瞠つた。『其麼事被仰るもんぢやないわ。』

『はア。』と言つてお利代は俯いた。今の言葉を若しやお世辭とでも取られたかと思つたのだらう。手は無意識に先刻の手紙に行く。

『あら小母さん、お手紙御覽なさいよ。何處からです?』

『はア。』と目を上げて、『函館からですの。……あの、梅の父から。』と心持極り惡氣に言ふ。

『ま、然う?』と輕く言つたが、惡い事を訊いたと心で悔んだ。

『あの、先月……十日許り前にも來たのを、返事を遣らなかつたもんですから……』

と言つてる時、門口に人の氣勢。

『日向さんは?』

『靜子さんですよ。』と囁いてお利代は急いで立つ。

『小母さん、これ。』と智惠子は先刻の紙幣を指したのでお利代は、『それでは!』と受取つて室を出た。

（四）

挨拶が濟むと、靜子は直ぐ、智惠子が片附けかけた裁縫物に目をつけて、『まあ好い柄ね。』

『でも無いわ。』

『貴女の?』

『まさか! 這麼小いの着られやしないわ。』と、笑ひ乍ら縫掛けのそれを抓んで見せる。

『梅ちやんの?』と少し聲を潛めた。

『え、新坊さんと二人の。』

『然う?』と言つて、靜子は思ひあり氣な眼附をした、無論、智惠子が買つて兇れたものと心に察したので。

智惠子は身の周圍を取片附けると、改めて嬉し氣な顏をして、『よく被來つたわね!』

『貴女は些とも被來つて下さらないのね?』

『濟まなかつたわ。』と何氣なく言つたが、一寸目の遣場に困つた。そして、微笑んでる樣な靜子の目と見合せると色には出なかつたが、ポッと顏の赧むを覺えた。靜子清子の外には友も無い身の、（富江とは同僚乍ら餘り親しくしなかつた。）小川家にも一週に一度は必ず訪れる習慣であつたのに、信吾が歸つてからは、何といふ事

なしに訪ねようとしなかつた。

「今日お忙しくつて？」

「否。土曜日ですもの、緩りしてらしつても可いわね？」

「可けないの。今日は私、お使ひよ。」

「でもまあ可いわ。」

「あら、貴女のお迎ひに來たのよ。今夜あの、宅で歌留多會を行りますから母が何卒ツて。……被來るわね？」

「歌留多、私取れなくつてよ。」

『まあ、貴女御謙遜ね？』

「眞箇よ。隨分久しく取らないんですもの。」

「可いわ。私だつて下手ですもの。ね被來るわね？」と靜子は姉にでも甘える樣な調子。

『然うね？』と智惠子は、心では行く事に決めてゐ乍ら、餘り氣の乘らぬ樣な口を利いて、「誰々？集るのは？」

『十人許しよ。』

「隨分大勢ね？」

「だつて、宅許りでも選手が三人ゐるんですもの。」

「オヤ、その一人は？」と智惠子は調戯ふ樣に目で笑ふ。

「此處に。」と頤で我が胸を指して、「下手組の大將よ。」と無邪氣に笑つた。

智惠子は、信吾が歸つてからの靜子の、常になく生々と噪いでゐることを感じた。そして、それが何かしら物足らぬ樣な情緒を起させた。自分にも兄がある。然し、その兄と自分の間に、何の情愛がある？

智惠子は我知らず氣が進んだ。「何時から？靜子さん。」

「今直ぐ、何にも無いんですけど晩餐を差上げてから始めるんですつて。私これから、清子さんと神山さんをお誘ひして行かなけやならないの。一緒に行つて下すつて？濟まないけど。」

「は。貴女となら何處までも。」と、笑つた。

軈て智惠子は、「それでは一寸。」と會釋して、「失禮ですわねえ。」と言ひ乍ら室の隅で着換に懸つたが、何を思つてか、取出した衣服は其儘に、着てゐた紺絣の平常着へ、袴だけ穿いた。

其後姿を見上げてゐた靜子は、思出す事でもあるらしく笑を含んでゐたが少し小聲で、

「あの、山内樣ね。」

「え。」と此方へ向く。

「アノウ……」と、智惠子の眞面目な顏を見ては惡いことを言出したと思つたらしく、心持極り惡氣に頰を染めたが、「詰らない事よ。……でも神山さんが言つてるの。あの、少し何してるんですつて、神山さんに。」

「何してるつて、何を？」

「あら！」と靜子は耳まで紅くした。

「まさか！」

「でも富江さん自身で被仰つたんですわ。」と、自分の事でも辯解する樣に言ふ。

『まあ彼の方は！』と智惠子は少し驚いた樣に目を瞠つた。それは富江の事を言つたのだが、靜子の方では、山内の事の樣に聞いた。

程なくして二人は此家を出た。

（五）

二人が醫院の玄關に入ると、藥局の椅子に凭れて、處方簿か何かを調べてゐた加藤は、やをら其帳簿を伏せて快活に迎へた。

「や、婦人隊の方は少々遲れましたね、昌作さんの一隊は二十分許り前に行きましたよ。」

「然うで御座いますか、あの愼次さんも被來つて？」

「は。弟は歌留多を取つた事がないてんで弱つてましたが、到頭引つ張られて行きました。まお上がんなさい。こら、清子、清子。」

そして、清子の行く事も快く許された。

『貴君も如何で御座いますか？』と智惠子が言つた。

『ハツハヽヽ私は駄目ですよ、生れてから未だ歌留多に勝つた事がないんで…だが何です、負傷者でもある樣でしたら救護員として出張しませう。』

淸子が着換の間に、靜子は富江の宿を訪ねたが、一人で先に行つたといふ事であつた。

三人の女傘が後になり先になり、穗の揃つた麥畑の中を、睦し氣に川崎に向つた。丁度鶴飼橋の袂に來た時、其處で落合ふ別の道から來た山内と出會した。山内は顏を眞赤にして會釋して、不卽不離の間隔をとつて、いかにも窮屈らしい足取で、十間許り前方をチョコ〳〵と步いた。

程近い線路を、好摩四時半發の上り列車が凄じい音を立てゝ過ぎた頃、一行は小川家に着いた。噪いだ富江の笑聲が屋外までも洩れた。岩手山は薄紫に暮けて、其肩近く靜なる夏の日が傾いてゐた。

富江の外に、校長の進藤、準訓導の森川、加藤の弟の愼次、農學校を卒業したといふ馬顏の沼田、それに巡廻に來た松山といふ巡査まで上り込んで、大分話が賑つてゐた。其處へ山内も交つた。

女組は一まづ別室に休息した。富江一人は彼室へ行き此室へ行き、宛然我家の樣に振舞つた。お柳は朝から口喧しく臺所を指揮してゐた。

晩餐の際には、嚴めしい口髭を生やした主人の信之も出た。主人と巡査と校長の間に持上つた鮎釣の自慢話、それから、此近所の山にも猿が居る居ないの議論——それが濟まぬうちに晩餐は終つて巡査は間もなく歸つた。

軈て信吾の書齋にしてゐる離室に、歌留多の札が撒かれた。明るい五分心の吊洋燈二つの下に、入交りに男女の頭が兩方から突合つて、其下を白い手や黑い手が飛ぶ。行儀よく並んだ札が見る間に減つて、開放した室が刻々と蒸熱くなつた。智惠子の前に一枚、富江の前に一枚……頰と頰が觸れる許りに頭が集る。『春の夜の——』と山内が妙に氣取つた節で讀上げると、

『萬歲ッ。』と富江が金切聲で叫んだ。智惠子の札が手際よく拔かれて、第一戰は富江方の勝に歸した。智惠子、信吾、沼田、愼次、淸子の顏には白粉が塗られた。信吾の片髭が白くなつたのを指さして、富江は聲の限り笑つた。一同もそれに和した。沼田は片肌を脫ぎ、森川は立襟の洋服の鈕を脫して風を入れ乍ら、乾き掛つた白粉で皮膚が痙攣る樣なのを氣にして、頰を妙にモグ〳〵さしたので、一同は又笑つた。

『今度は復讐しませう。』と信吾が言つた。

『ホヽヽ。』と智惠子は唯笑つた。

『新しく組を分けるんですよ。』と、富江は誰に言ふでもなく言つて、急しく札を切る。

（六）

二度目の合戰が始つて間もなくであつた。靜子の前の、ただ有明の札に、對合つた昌作の手と靜子の手と、殆んど同時に落ちた。此方が先だ、否、此方が早いと、他の者まで面白づくで騷ぐ。

『敗けてお遣りよ。昌作さんが可哀想だから。』と、見物してゐたお柳が喙を容れた。不快な顏をして昌作は手を引いた。靜子は氣の毒になつて、無言で昌作の札を一枚自分の方へ取つた。昌作はそれを邪慳に拂ひ返した。其合戰が濟むと、昌作は無理に望んで讀手になつた。そして到頭終ひまで讀手で通した。

何と言つても信吾が一番上手であつた。上の句の頭字を五十音順に列べた其配列法が、最

尠少からず富江の怨みを買つた。しかし富江も仲々信吾に劣らなかつた。そして組を分ける毎に、信吾と敵になるのを喜んだ。二人の戰ひは隨分目覺ましかつた。

信吾に限らず、男といふ男は、皆富江の敏捷い攻撃を恐れた。富江は一人で喋ぎ切つて、遠慮もなく對手の札を拔く、其拔方が少し汚なくて、五回六回と續くうちに、指に紙片で繃帶する者も出來た。そして富江は、一心になつて目前の札を守つてゐる山内に、隙さへあれば遠くからでも襲撃を加へることを怠らなかつた。其度、山内は上氣した小い顏を擧げて、眼を三角にして怨むが如く富江の顏を見る。「ホヽヽ。」と、富江は面白氣に笑ふ。靜子と智惠子は幾度か目を見合せた。

一度、信吾は智惠子の札を拔いたが、汚なかつたと言つて遂に札を送らなかつた。次で智惠子が信吾のを拔いた。

「イヤ、參りました。」と言つて、信吾は強ひて、一枚貰つた。

其合戰の終りに、信吾と智惠子の前に一枚宛殘つた。昌作は立つて來て覗いてゐたが、氣合を計つて、

「千早ふる――」と叫んだ。それは智惠子の札で、信吾方の敗となつた。

「マア此人は！」と、富江はしたゝか昌作の背を平手で擲しつけた。昌作は赤くなつた顏を勃とした樣に口を尖らした。

可哀想なは愼次で、四五枚の札も守り切れず、イザとなると可笑しい身振をして狼狽く。それを面白がつたのは嫂の清子と靜子であるが、其狼狽方が故意とらしくも見えた。滑稽でもあり氣の毒でもあつたのは校長の進藤で、勝敗がつく毎に、鯰髭を捻つては、一年を老ると馱目です喃。」と嘲してゐた。一度昌作に代つて讀手になつたが、間違つたり吃つたりするので、二十枚と讀まぬうちに富江の抗議で罷めて了つた。

我を忘れる混戰の中でも、流石に心々の色は見える。靜子の目には、兄と清子の間に遠慮が明瞭と見えた。清子は始終敬虔くしてゐたが、一度信吾と並んで坐つた時、いかにも極り惡氣であつた。その清子の目からは亦信吾の智惠子に對する擧動が、全くの無意味には見えなかつた。そして富江の阿婆摺れた調子、殊にも信吾に對する狎々しい態度は、日頃富江を心に輕んじてゐる智惠子をして多少の不快を感ぜしめぬ譯にいかなかつた。

九時過ぎて濟んだ。茶が出、菓子が出る。殘りなく白粉の塗られた顏を、一同は互ひに笑つた。消さずに歸る事と、誰やらが言出したが、智惠子清子靜子の三人は何時の間にか洗つて來た。富江が不平を言出して、三人に更めて附けようと騷いだが、それは信吾が宥めた。そして富江は遂に消さなかつた。森川は上衣の釦をかけて、乾いた手巾で顏を拭いた。宛然厚化粧した樣になつて、黑い齒の間の一枚の入齒が、殊更らしく光つた。妖怪の樣だと言つて一同がまた笑つた。

軈てドヤ〳〵と歸路についた。信吾兄妹も鶴飼橋まで送ると言つて一同と一緒に戶外に出た。雲一つなき天に片割月が傾いて、靜かにシツトリとした夜氣が、相應に疲れてゐる各々の頭腦に、水の如く流れ込んだ。

（七）

淡い夜霧が田畑の上に動くともなく流れて、月光が柔かに濕うてゐる。夏もまだ深からぬ夜の甘さが、草木の魂を蕩かして、天地は限りなき靜寂の夢を罩めた。見知らぬ鄕の音信の樣に、北上川の水瀨の音が、そのしつとりとした空氣を顫はせる。

男も女も、我知らず深い呼吸をした。各々の疲れた頭腦は、今までの華やかな明るい室の中の樣と、この夜の村の靜寂の間の關係を、一寸心に見出しかねる……と、眼の前に歌留多の札がちらつく。歌の句が片々に混雜つて、咬るやうに耳の底に甦る。『あの時――』と何やら思出される。それが餘りに近い記憶なので却つて全部まで思出されずに消えて了ふ。四邊は靜かだ。濕つた土に擦れる下駄の音が、取留めもなく縺れて、疲れた頭が直ぐ朦々となる。

霎時は皆無言で足を運んだ。

田の中を透つた路が細い。十人は長い不規則な列を作つた。最先に沼田が行く。次は富江、次は愼次、次は校長……森川山内と續いて、山内と智惠子の間は少し途斷れた。智惠子のすぐ後ろを、丈高い信吾が歩いた。

智惠子は甘い悲哀を感じた。若い心はウットリとして、何か知ら、自分の知らなかつた境を見て歸る樣な氣持である、『詰らなく騷いだ!』とも思へる『樂しかつた!』とも思へる。そして、心の底の何處かでは、富江の阿婆摺れた噪ぎ方が、不愉快でならなかつた。そして、何といふ調もなしに直ぐ後ろから跟いて來る信吾の跫音が、心にとまつてゐた。

其姿は、何處か、夢を見てゐる人の樣に悄然として、髮も亂れた。

先づ平生の心に歸つたのは富江であつた。

『ね、沼田さん。あの時そら貴方の前に「むべ山」があつたでせう? あれが私の十八番ですの。屹度拔いて上げませうと思つて待つてると、信吾さんに相が無くなつて、貴方が「むべ山」と「流れもあへぬ」を信吾さんへ遣つたでせう? 私癪になつちまひましたよ。ホホヽヽ。』と、先刻の事を喋り出した。『ハハヽヽ。』と四五人一度に笑ふ。

『森川さんの憎いつたらありやしない。那麼に亂暴しなくたつて可いのに、到頭「聲きく時」を裂いちまつた。……』

と、富江は氣に乗つて語り續ぐ。

信吾は、間隔が隔つてゐる爲か、何も言はなかつた。笑ひもしなかつた。其心は眼前の智惠子を追うてゐた。そして、其後の清子の心は信吾を追うてゐた。其又後ろの靜子の心は清子を追うてゐた。そして、四人共に何も言はずに足を運んだ。

路が下田路に合つて稍廣くなつた。前の方の四五人は、甲高い富江の笑聲を圍んで一團になつた。町歸りの醉漢か、何やら呟き乍ら蹣跚とした歩調で行き過ぎた。

と、信吾は智惠子と相並んだ。

『奈何です、此靜かな夜の感想は?』

『眞箇に靜かで御座いますねえ。』と、少し間を置いて智惠子は答へる。

『貴女は何でせう、歌留多なんか餘りお好きぢやないでせう?』

『でもないんで御座いますけれど……然し今夜は、眞箇に樂しう御座いました。』と遠慮勝に男を仰いだ。

『ハハヽヽ。』と笑つて信吾は杖の尖でコツコツ石を叩き乍ら歩いたが、

『何ですね、貴女は基督教信者でせう?』

『ハ。』と低い聲で答へる。

『何か其方の本を貸して下さいませんか? 今迄つい宗教の事は、調べて見る機會も時間もなかつたんですが、此夏は少し遣つて見ようかと思ふんです。幸ひ貴女の御意見も聞かれるし……。』

『御覧になる様な本なんぞ……あの、私こそ此夏は、靜子さんにでもお願ひして頂いて、何か拜借して勉強したいと思ひまして……。』

『否、別に面白い本も持つて來ないんですが、御覧になるなら何時でも……。すると何ですか、

『此夏は何處にも被行らないんですか？』
『え。まあ其積りで……。』
路は小さい杜に入つて、月光を遮つた青葉が風もなく四邊を香はした。

（七）

仄暗い杜を出ると、北上川の水音が俄かに近くなつた。
『貴女は小說はお嫌ひですか？』と、信吾は少し唐突に問うた。其の時はもう肩も摩れ〳〵に竝んでゐた。
『一槪には申されませんけれど、嫌ひぢや御座いません。』と落着いた答へをして閃と男の横顏を仰いだが、智惠子の心には妙に落着がなかつた。前方の人達からは何時しか七八間も遲れた。後ろからは淸子と靜子が來る。其跫音も何うやら少し遠ざかつた。そして自分が信吾と竝んで話し乍ら步く……何となき不安が胸に萌してゐた。
立留つて後の二人を待たうかと、一步每に思ふのだが、何故かそれも出來なかつた。
『あれはお讀みですか、風葉の「戀ざめ」は？』
と信吾はまた問うた。
『あの發賣禁止になつたとか言ふ……？』
『然うです。あれを禁止したのは無理ですよ。尤もあれたけぢや無い、眞面目な作で同じ運命に逢つたのが隨分ありますからねえ。折角拵へた御馳走を片端から犬に喰はれる樣なもんで……ハヽヽ。「戀ざめ」なんか別に惡い所が無いぢやないですか？』
『私はまだ讀みません。』
『然うでしたか。』と言つて、信吾は未だ何か言はうと脣を動かしかけたが、それは罷めてニヤニヤと薄笑を浮べた。月を負うて步いてるので、無論それは女に見えなかつた。
信吾は心に、何ういふ連想からか、かの「戀ざめ」に描かれてある事實――否あれを書く時の作者の心持、否、あれを讀んだ時の信吾自身の心持を思出してゐた。
五六步步くと、智惠子の柔かな手に、男の手の甲が、木の葉が落ちて觸る程輕く觸つた。寒いとも溫かいともつかぬ、電光の樣な感じが智惠子の胸を掠めて、體が自ら剛くなつた。二三步すると又觸つた。今度は少し强かつた。
智惠子は其手を口の邊へ持つて來て輕く故意とらしからぬ咳をした。そして、礑と足を留めて後ろを振返つた。淸子と靜子は肩を竝べて、二人とも俯向いて十間も彼方から來る。
信吾は五六步步いて、思切り惡さうに立留つた。そして矢張り振返つた。目は、淡く月光を浴びた智惠子の横顏を見てゐる。コツ〳〵と杖の尖で下駄の鼻を叩いた。其顏には、自ら嘲る樣な、或は又、對手を蔑視つた樣な笑が浮んでゐた。
淸子と靜子は、霎時は二人が立留つてゐるのも氣附かぬ如くであつた。淸子は初から物思はし氣に俯向いて、そして、物も言はず、出來るだけ足を遲くしようとする。
『濟まなかつたわね、淸子さん、恁麽に遲くしちやつて。』と、も少し前に靜子が言つた。
『否。』と一言答へて淸子は寂しく笑つた。
『だつて、お宅ぢや心配してらつしやるわ、屹度。尤も愼次さんも被來たんだから可いけど……。』
『靜子さん！』と、稍あつてから力を籠めて言つて、眤と靜子の手を握つた。
『恁うして居たいわ、私……。』
『え？』
『恁うして！　何處までも、何處までも恁うして步いて……』
靜子は譯もなく胸が迫つて、握られた手を强く握り返した。二人は然し互ひに顏を見合さな

かつた。何處までも恁うして歩く！　此美しい夢の樣な言葉は華かな歌留多の後の、疲れて瞭乎として、淡い月光と柔かな露に包まれて、底もなき甘い夜の靜寂の中に蕩けさうになつた靜子の心をして、譬もなき咄嗟の同情を起さしめた。

『此女は兄に未練を有つてる！』といふ考へが、暫く後に靜子の感情を制した。厭はしき懼れが、胸に湧いた。然しそれも清子に對する同情を全くは消さなかつた。女は悲しいものだ！と言ふ樣な悲哀が、靜子に何も言ふべき言葉を見出させなかつた。

『恁うです。少し早く歩いては？』と信吾が呼んだ。二人は驚いて顏を擧げた。

（八）

其夜、人々に別れて智惠子が宿に着いた時はもう十時を過ぎてゐた。

ガタピシする入口の戸を開けると、其處から見通しの臺所の爐邊に、薄暗く火屋の曇つた、紙笠の破れた三分心の吊洋燈の下で、物思はし氣に悄然と坐つて裁縫をしてゐたお利代は、『あ、お歸りで御座いますか。』と急しく出迎へる。

『遲くなりまして、新坊さんももうお寢み？』

『は、皆寢みました。先生もお泊りかと思つたんですけれど……』と言ひ乍ら先に立つて智惠子の室に入つて、手早く机の上の洋燈を點す。臥床が延べてあつた。

お泊りかと思つたといふ言葉が、何故か智惠子の耳に不愉快に響いた。今迄お利代の坐つてゐた所には、長い手紙が擴げたなりに透逸つてゐた。ちらとそれを見乍ら智惠子は室に入つて、『マア臥床まで延べて下すつて、濟まなかつたわ、小母さん。』

『何の、先生。』と笑顏を見せて、『面白う御座んしたでせう？』

『え……』と少し曖昧に濁して、『私、疲れちやつたわ。』と邪氣なく言ひ乍ら、袴も脫がずに坐る。

『誰方が一番お上手でした？』

『皆樣お上手よ。私なんか今迄餘り歌留多も取つた事がないもんですから、敗けて許り。』と莞爾する。ほつれた髮が額に亂れてゐる所爲か、其顏が常よりも艶に見えた。

成程智惠子は遊戲などに心を打込む樣な性格でないと思つたので、お利代は感心した樣に、『然うでせうねえ！』と大きい眼をパチ〳〵する。

それから二人は、一時間前に漸々寢入つたといふ老女の話などをしてゐたが、お利代は立つて行つて、今日函館から來たといふ手紙を持つて來た。そして、

『先生、恁うしたものでせうねえ？』と愁はし氣な、極り惡氣な顏をして話し出した。其手紙はお利代の先夫からである。以前にも一度來た。返事を出さなかつたので又來た。梅といふ子が生れた翌年不圖行方知れずになつてからもう九年になる。其長い間の詫を細々書いて、そして、自分は今函館の或商會の支店を預る位の身分になつたから、是非共過去の自分の罪を許して、一家を擧げて函館に來てくれと言つて來たのである。そして、自分の家出の後に二度目の夫のあつた事、それが死んだ事も聞知つてゐる。生れた新坊は矢張り自分の子と思つて育てたいと優しくも言葉を添へた。——

身を入れて其話を聞いてゐた智惠子は、愼しいお利代の口振りの底に、此悲しい女の心は今猶その先夫の梅次郎を慕つてゐる事を知つた。そして無理もないと思つた。

無理もないと思ひつゝも、智惠子の心には思ひもかけぬ怪しき陰翳がさした。智惠子は心から此哀れなる寡婦に同情してゐた。そして自己

に出來るだけの補助をする——人を救ふといふことは樂しい事だ。今迄お利代を救ふものは自己一人であつた。然し今は然うでない！

誰しも怎麼場合に感ずる、一種の不滿を、智惠子も感ぜずに居れなかつた。が、すぐにそれを打消した。

「で御座いますからね。」お利代は言葉をついだ。「まあ何方にした所で、祖母さんの病氣を癒すのが一番で御座いますがね。……何と返事したものかと思ひまして。」

「然うね。」と云つて、智惠子は睫毛の長い眼を瞬いてゐたが、「私なんかに御相談して下すつて。……あの小母さん、兎も角今のお家の事情を詳しく然う言つて上げた方が可かなくつて？　彼行る方が可いと、まあ私だけは思ふわ。だけど怎うせ今直ぐとはいかないんですから。」

「然うで御座いますねえ。」とお利代は俯向いて言つた。實は自分も然う思つてゐたので。

（九）

「然うなすつた方が可いわ、小母さん。」と智惠子は俯向いたお利代の胸の邊を眤と瞶めた。

「然うで御座いますねえ。」と同じ事を繰返して、稍あつてお利代は思ひ餘つた樣な顏をあげたが、『怎うせ行くとしよしても、それやまあ祖母さんが何うにか、あの快癒つてからの事で御座いますから、何時の事だか解りませんけれども、何だかあの、生れ村を離れて北海道あたりまで行つて、此先何うなることかと思ふと……。』

「それやね、決めるまではまあ、間違ひはないでせうけれど、先方の事も詳しく何して見てから……。」

「其處ンところはあの、確乎だらうと思ひますですが……今日もあの、手紙の中に十圓だけ入れて寄越して呉れましたから……。」

『おや然うでしたか。』と言つたが、智惠子はそれに就いての自分の感想を成るべく顏に現さぬ樣に努めて、「兎も角お返事はお上げなすつた方が可いわ。矢張り梅ちやんや新坊さんの爲には……。」と、智惠子はお利代の思つてゐる樣な事を理を分けて說いてみた。說いてゐるうちに、何か怎う、自分が今善事をしてると云つた樣な氣持がして來た。

「然うで御座いますねえ。」と、お利代は大きい眼を屢叩き乍ら、未だ瞭りと自分の心を言出しかねる樣で、「怎うして先生のお世話を頂いてると、私はもう何日までも此儘で居た方が幾ら樂しいか知れませんけれども。」

『私だつて然う思ふわ、小母さん、眞箇に……』と言ひかけたが、何かしら不圖胸の中に頭を擡げた思想があつて言葉は途斷れた。『神樣の思召よ。人間の勝手にはならないんですわね。』

『先生にしたところで、』と、お利代は智惠子の顏をマジ〳〵と瞶め乍ら、『怎うせ御結婚なさらなければなりませんでせうし……。』

『ホホヽ。』と智惠子は輕く笑つて、『小母さん、私まだ考へても見た事が無くつてよ、自分の結婚なんか。』

話題はそれで逸れた。程なくしてお利代が出てゆくと、智惠子はやをら立つて袴を脫いで、丁寧にそれを疊んでゐたが、何時か其手が鈍つた。そして再び机の前に坐ると、眤と洋燈の火を瞶めて、時々氣が附いた樣に長い睫毛を屢叩いてゐた。隣室では新坊が目を覺まして何かむづかつてゐたが、智惠子にはそれも聞えぬらしかつた。

智惠子の心は平生になく混亂つてゐた。お利代一家のことも考へてみた。お利代の悲しき運命、——それを怎うやら怎うやら切拔けて來た心根を思ふと、實に同情に堪へない。今は加藤醫院になつてる家、あの家が以前お利代の

育つた家、――四年前にそれが人手に渡つた。其昔、町でも一二の濱野屋の女主人として、十幾人の下女下男を使つた祖母が、癒る望みもない老の病に、彼樣して寢てゐる心は怎うであらう！　人間の一生の悲痛が時あつて智惠子の心を脅かす。……然し、此悲しきお利代の一家にも、思懸けぬ幸福が湧いて來た！　智惠子は神の御心に委ねた身乍らに、獨ぼッちの寂しさを感ぜぬ譯にいかなかつた。

　行末怎うなるのか！　といふ眞摯な考への横合から、富江の噪いだ笑聲が響く。つと、信吾の生白い顏が頭に浮ぶ、――智惠子は嚴肅な顏をして、屹と自分を窘める樣に脣を噛んだ。『男は淺猿しいものだ！』と心で言つて見た。青森にゐる兄の事が思出されたので。――

　嫂の言葉に返事もせず、竈の下を焚きつけ乍らも聖書を讀んだ頃が思出された。亡母の事が思出された。東京にゐた頃が思出された。

　遂に、あの頃のお友達は今怎うなつたらうと思ふと、今の我身の果敢なく寂しく頼りない、張合のない、孤獨の狀態を、明白に見せつけられた樣な氣がして、智惠子は無上に泣きたくなつた。そして兩手を胸の上に組んで、長く／＼祈つた、長く／＼祈つた。

侘しき山里の夜は更けて、隣家の馬のゴトゴトと羽目板を蹴る音のみが聞えた。

其五

（一）

何日しか七月も下旬になつた。

かの歡留多會の翌日信吾は初めて智惠子の宿を訪ねたのであつた。其時は、イブセンの飜譯の一二册に、『イブセン解說』と題して信吾自身が書いた、五六頁許りの評論の載つてゐる雜誌を態々持つて行つて貸して、智惠子からはルナンの耶蘇傳の飜譯を借りた。それを手初めに信吾は五六度も智惠子を訪ねた。

　信吾は智惠子に對して殊更に尊敬の態度を採つた。時としては、もう幾年もの親しい友達の樣な口も利くが、概して二人の間に交換される會話は、這麼田舍では聞かれた事のない高尙な問題で、人生とか信仰とか創作とかいふ語が多い。信吾は好んで其麼問題を擔ぎ出し、對手に解らぬと知り乍ら、六ケ敷い哲學上の議論までする。氣をつけて聞けば、其謂ふ所に、或は一貫した思想も意見も無かつたかも知れぬ。又、其好んで口にする新しい哲人の名に就いて信吾自身の有つてゐる知識も疑問であつたかも知れぬ。それは兎も角、信吾が其麼事を調子よく喋る時は、血の多い人のする樣に、大仰に眉を動したり、手を振つたり、自分の言ふ事に自分で先づ感動した樣子をする。

『僕は不思議ですねえ。怎うして貴女と話してると、何だか自然に眞面目になつて、若々しくなつて、平生考へてゐる事を皆言つて了ひたくなる。この二三年は何か怎う不安があつて、言はうと思ふこともつい人の前では言はなかつたりする樣になつてゐたんですが……實に不思議です。自分の思想を聞いてくれる人がある、否、それを言ひ得るといふ事が、既に一種の幸福を感じますね。』

　と或時信吾は眞面目な口振で言つた。然しそれは、或は次の如く言ふべきであつたかも知れぬ。

『僕は不思議ですねえ。怎うして貴女と話してると、何だか自然に芝居を演りたくなつて來て、つい心にない事まで言つて了ひます。』

　智惠子の方では、信吾の足繁き訪問に就いて、多少村の人達の思惑を心配せぬ譯にいかなかつた。狹い村だけに少しの事も意味あり氣に囃し立てるのが常である。[illegible]、其麼事があつては[illegible]

に心外の至りであると智惠子は思つた。それで成るべく寡言に、隙のない樣に待遇つてはゐるが、偏に落ちぬ事があり乍らも信吾の話が珍しい。我知らず熱心になつて、時には自分の考へを言つても見るが、其麼時には、信吾は大袈裟に同感して見せる。歸つた後で考へてみると、男には矢張り氣障な厭味な事が多い。殊更に自分の歡心を買はうとするところが見える。
『邪した性質の人だ！』と智惠子は考へた。
　智惠子を訪れた日は、大抵その足で信吾は富江を訪ねる。富江は例に變らぬ調子で男を迎へる。信吾はニヤ〳〵心で笑ひ乍ら川崎の家へ歸る。
　暑氣は日一日と酷しくなつて來た。殊にも今年は雨が少なくて、田といふ田には水が十分でない。日中は家の中でさへ九十度に上る。
　今朝も朝から雲一つ無く、東向きの靜子の室の障子が、カッと眩い朝日を受けて、其室の暑氣が思ひやられる。靜子は朝餐の後を、母から兄の單衣の縫直しを吩咐つて、一人其室に坐つた。
　ちらと鳥影が其障子に映つた。
『靜さん、其單衣はね……』と言ひ乍ら信吾が入つて來た。
『兄樣、今日は屹度お客樣よ。』
『何故？』
『何故でも。』と笑顏を作つて、『そうら御覽なさい。』
　其時また鮮かな鳥影が障子を横ざまに飛んだ。
『ハヽヽ。迷信家だね。事によつたら吉野が今日あたり着くかも知れないがね。』

（三）

『あら、四五日中にお立ちになるつて昨日のお手紙ぢやなかつたの？』
『然うさ。だがあの男の豫定位あてにならないものは無いんだ。雷みたいな奴よ、雲次第で何時でも鳴り出す……』と信吾は其處に腰を下して、
『オイ、此衣服は少し短いんだから、長くして呉れ。』
『然う？』と、靜子は解きかけたネルの單衣に尺を使つて見て、『七寸…六分あるわ。短かなくつてよ、幾何電信柱さんでも。』
『否短い。本人の言ふ事に間違ひつこなしだ。そら、其處に縫込んだ揚があるぢやないか。それ丈下して呉れ。』
『だつて兄樣、さうすれば九寸位になつてよ。可いわ、そんなら八寸にしときませう。』
『吝だな。も少し負けろ。』
『ぢや八寸一分？』
『もつと負けろ、氣に合はないから着ないつて言つたら怎うする？』
『それは御勝手。』
『其麼風でお嫁に行かれるかい？』
『厭よ、兄樣。』と信吾を睨む眞似をして、『だつて一分にすると、これより五分長くなるわ。可いでせう？　その吉野さんて方、この春兄樣と京都の方へ旅行なすつた方でせう？』
『うん。』と言ひ乍ら、手を延ばして、靜子の机の上から名に高き女詩人の『舞姬』を取る、本の小口からは、橄欖色の栞の房が垂れた。
『長くお泊りになるんでせう？』
『八月一杯遊んで行く約束なんだがね。飽きれば何日でも飛び出すだらう、彼奴の事だから。』と横になつて、
『オイ、此本は昌作さんのか？』と頁を繙る。
『え。兄樣何か持つてらつしやらなくつて、其方のお書きになつたの。』
『否、遂買はなかつたが、この「舞姬」のあとに「夢の華」といふのがあるし、近頃また「常夏」と

いふのが出た筈だ。』

『あら其方のぢやなくつてよ。其方ンなら私も知つてるわ。…その吉野さんのお書きになつたの。』

『吉野が？』と妹の顏を見て、『彼奴の詩は道樂よ。時々雜誌に匿名で出したのだけさ。本職は矢張洋畫の方だ。』

『然う？』と靜子は鋏の鈴をころ〳〵鳴らし乍ら、『展覽會なんかにお出しなすつて？』

『一度出した。あれは美術學校を卒業した年よ。然うだ、一昨年の秋の展覽會——そうら、お前も行つて見たぢやないか？　三尺許りの幅の、「嵐の前」といふ畫があつたらう？』

『然うでしたらうか？』

『あれだ、夕方の暗くなりかゝつた室の中で、青白い顏をした女が、厭な眼附をして、眞白な猫を抱いてゐたらう？　卓子の上には擴げた手紙があつて、女の頭へ覆被さる樣に鉢植の匂ひあらせいとうが咲いてゐた。そして窓の外を不愉快な色をした雲が、變な形で飛んでゐた。』

『見た樣な氣もするわ。それでなんですの、「嵐の前」が？』

『然うよ、その畫の意味はあの頃の人に解らなかつたんだ。日本のコロウよ、中々偉い男だ。』

『コロウて何の事？』

『ハッハヽヽ。佛蘭西の有名な畫家だ。』

『然う！』と言ひは言つたが、日本のコロウと云ふ意味は無論靜子に解りつこはない。唯偉い事を言つたのだと思つて、『其麼方なら何故其後お出しにならないでせう？』

『然うさ、まあ自重してるんだらう。彼奴が今度描いたら乾度滿都の士女を驚かせる！　俺には近頃いろんな友人が出來たが、吉野君なんか其中でもまあ話せる男だ。』と、暗に自分の偉くなつた事を吹聽する樣な調子で言ふ。

『姊樣、姊樣。』と叫び乍ら、芳子といふ十二三の妹がどたばた驅けて來た。

『何ですねえ、其麼に驅けて！』

『でも。』と不平相な顏をして、『日向先生が被來したんだもの！』

『おや！』と靜子は兄の顏を見た。先程障子に映つた鳥影を思出したので。

（三）

二三日經つと小學校も休暇になる。平生宿直室に寢泊りしてゐる校長の進藤は、もう師範出のうちでも古手の方で、今年は盛岡に開かれた體操と地理歷史教授法の夏期講習會に出席しなければならなかつた。それで、休暇中の宿直は準訓導の森川が引受ける事になつてこれは土地の者の齋藤といふ年老つた首席教員と智惠子と富江の三人は、それ〴〵村内に受持を定めて、兎角亂れ易い休暇中の兒童の風紀の、校外取締をすることになつた。富江は今年も矢張盛岡の夫の家へは歸らないので。智惠子にも歸るべき家が無かつた。無い譯ではない。兄夫婦は青森にゐるけれど、智惠子にはそれが自分の家の樣な氣がしない。よしや歸つたところで、あたら一月の休暇を不愉快に過して了ふに過ぎぬのだ。同窓の親しい友から、何處かの溫泉場にでも共同生活をして樂しい夏を暮さうではないか、と言つて來たのもあるが、宿のお利代の心根を思ふと、別に譯もなくそれが忍びなかつた。結局智惠子は、八月二日に大澤の溫泉で開かれる筈の師範時代の同級會に出席する外には、何處にも行かぬことに決めた。

それで智惠子は、誰しも休暇前に一度やる樣に、八月一月に自分の爲すべき事の豫定を立てたものだ。そのうちには、色々の事に遮られて何日とはなく中絶してゐた英語の獨修を續ける事や、最も好きな歷史を繰返して讀む事や、色々あつたが、信吾の持つて歸つた書を成るべく澤

山借りに來ましたといふのも其一つであつた。
　今日は折橋の日曜日、讀み了へたのを返して何か別の書を借りようと思つてまだ暑くならぬ午前の八時頃に小川家を訪ねたのだ。
　直ぐ歸る積りだつたのが無理に引き留められて、晝餐も御馳走になつた。午後はまた餘り暑いといふので、到頭四時頃になつて、それでも留めるのを漸くに暇乞して出た。田舍の素封家などにはよくある事で、何も珍しい事のない單調な家庭では、騷がしくなるまで無理に客を引き留める、客を待遇さうとするよりは、寧ろそれによつて自分らの無聊を慰めようとする。
　平生の儘で靜子が送つて出た。稍も萎えた大形の浴衣にメリンスの幅狹い平常帶、素足に臺下駄を突掛けた無造作な扮裝で、已が女傘は疊んで、智惠子と肩も摩れ〳〵に睦しげに列んだ。智惠子の方も平常着ではあるが、袴を穿いてゐる。何時しか二人はモウ鶴飼橋の上に立つた。
　此處は村での景色を一處に聚めた。北から流れて來る北上川が、觀音下の崖に突當つて西に折れて、透徹る水が淺瀨に跳つて此吊橋の下を流れる。五六町行つて、川はまた南に曲つた。この橋に立てば、川上に姬神山、川下に岩手山、月は東の山にのぼり、日は西の峰に落つる。折柄の傾いた赤い日に宙に浮んだ此橋の影を、虹の影の如く川上の瀨に横たへて。
　南岸は崖になつてゐるが、北の岸は低く河原になつて、楊樹が密生してゐる。水近い礫の間には可憐な撫子が處々に咲いた。
　二人は鋼線を太い綱にした欄干に凭れて西日を背に受け乍ら、涼しい川風に袂を飄らせた。
「そら、彼は屹度昌作さんよ。」と、靜子は今しも川上の瀨の中に立つてゐる一人の人を指さした。鮎を釣けてゐるのであらう、網笠を冠つた脊の高い男が、腰まで水に浸つて頻りに竿を動かしてゐる。種鮎か、それとも釣つたのか、ヒラリと銀色の鱗が波間に躍つた。
「だつて、昌作さんが那麼！」と智惠子も眸を据ゑた。
「あら、鮎釣には那麼扮裝して行くわ、皆……昌作さんは近頃毎日よ。」と言つてる時、思ひがけなくも轆々といふ音響が二人の足に響いた。
　一臺の俥が、今しも町の方から來て橋の上に差懸つたのだ、二人は期せずして其方に向いたが、
「あら！」と靜子は聲を出して驚いて忽ち顏を染めた。女心は矢よりも早く、已が服裝の不行儀なのを恥ぢたので。

（四）

　近づく俥の音は遠雷の如く二人の足に響いて、吊橋は心持搖れ出した。
　洋服姿の俥上の男は、麥藁帽の頭を俯向けて、膝の上に寫生帖に何やら書いてゐる……。
　一目見て靜子は、兄の話で今日あたり來るかも知れぬと聞いた吉野が、この人だと知つた。好摩午後三時着の下り列車で着いて、俥だから線路傳ひの近道は取れず、態々本道を澁民に廻つて來たものであらう。智惠子も亦、話は先刻聞いたので、すぐそれと氣が附いた。
『お孃樣、お孃樣許のお客樣を乘せて來ただあ。』と、車夫の元吉は高い聲で呼びかけ乍ら轅を止めて、
「あれがはあ、小川樣のお孃でかんす。」と俥上の人に言ふ。顏一杯に流れた汗を小汚い手拭でブルリと拭つた。
　智惠子は、自分がその小川家の者でない事を現す樣に、一足後へ退つた。その時、傍の靜子の耳の紅くなつてゐた事に氣がついた。
「あ、然うですか。」と、俥上の人は鉛筆を持つた手で帽子を脫つて、

『僕は吉野滿太郎です。小川が――小川君が居ませうか？』と武骨な調子でいふ。
『は。』と靜子は案つた樣な聲を出して、『あの、今日あたりお着き遊ばすかも知れないと、お噂致して居りました。』
『然うですか。ぢや手紙が着いたんですね。』と親しげな口を利いたが、些と俯向加減にして立つてゐる智惠子の方を偸み視て、
『失禮しました、俥の上で。…お先に。』と挨拶する。
『私こそ…。』と靜子は初心らしく口の中で言つて頭を下げた。
『どつこいしよ。』と許り、元吉は俥を曳出す。二人は其後を見送つて呆然立つてゐた。
吉野は、中脊の、色の淺黑い、見るから男らしく引緊つた顏で、力ある聲は底に錆を有つた。すぐ目に附くのは、眉と眉の間に深く刻まれた一本の皺で烈しい氣象の輝く眼は、美術家に特有の何か不安らしい働きをする。
俥が橋を渡り盡すと、路は少し低くなつて、繁つた楊柳の間から、新しい吉野の麥藁帽が見える。橋はその時まで、少し搖れてゐた。
『私、甚麼に困つたでせう、這麼扮裝をしてて！』と靜子は初めて友の顏を見た。
『其麼に！　誰だつて平常には…』と慰め顏に言つて、
『貴女の許は、これからまた賑かね。』
其はほんの、うつかりして言つたのだが、智惠子の眼は[illegible]淚ましさうであつた。
『まあ、だから貴女も毎日被來いよ。これからお休みなんですもの。』
『有難う。』と言つて、『私もうお別れするわ。何卒皆樣に宜しく！』
『一寸。』とその袂を捉へて、『可いわよ智惠子さん、も少し。』
『だつて。那麼に日が傾いちやつた。』と西の空を見る。眼は赤い光を宿して星の樣に若々しく輝いた。
『構はないぢやありませんか、智惠子さん。家へ被來いな又！』
『この次に。』と智惠子は沈着いた聲で言つて、『貴女も早くお歸りなすつたが可いわ。お客樣が被來つたぢやありませんか。』と妹にでも言ふ樣に。
『あら、私のお客樣ぢやなくつてよ。』と、靜子は少し顏を染めた。心では、吉野が來た爲に急いで歸つたと思はれるのが厭だつたので。
それで、智惠子が袂を分つて橋を南へ渡り切るまでも、靜子は鋼線の欄に凭れて見送つてゐた。
智惠子は[illegible]深い眼を足の爪先に落して、歸路を急いだが、其心にあるのは、何の樣に、今日一日を空に過したといふ事ではない。[illegible]にまり！と自ら慰め乍ら、[illegible]子が何がなしに羨まれた。が、[illegible]の前まで來た頃は、自分にも解らぬ一種の希望が胸に湧いてゐた。
で、家に入るや否や、お利代に泣き附いて何か強請つてゐる五歲の新坊を、矢庭に兩手で高く差上げて、
『新坊さん、新坊さん、何うしたんですよう。』と手荒く揉つたものだ。
新坊は、常にない智惠子の此擧動に喫驚して、泣くのは礑と止めて不安相に大きく眼を睜つた。

其　六

（一）

靜子の緣談は、最初、隨分性急に申込んで來て、兎に角も信吾が歸つてからと返事して置いたのが、既に一月、怎うしたのか其儘になつて、

何の音沙汰もない、自然、家でも忘られた樣な形勢になつてゐた。

結句それが、靜子にとつては都合がよかつた。母のお柳が、別に何處が惡いでなくて、兎角優れぬ勝の、口小言のみ喧しいのへ、信吾は信吾で朝晩の惣菜まで、故障を言ふ性だから、人手の多い家庭ではあるが、靜子は矢張日一日何かしら用に追はれてゐる。それも一つの張合になつて、兄が歸つてからといふもの、靜子はクヨクヨ物を思ふ心の隙もなかつた。

一體この家庭には妙な空氣が籠つてゐる。隱居の勘解由はもう六十の坂を越して體も弱つてゐるが、小心な、一時間も空には過されぬと言つた性なので、小作に任せぬ家の周圍の菜園から桑畑林檎畑の手入、皆自分が手づから指揮して、朝から晩まで戸外に居るが、その後妻のお藤とお柳との仲が兎角面白くないので、同じ家に居ながらも、信之親子と祖父母や其子等(信之には兄弟なのだが)とは、宛然他人の樣に疎疎しい。一家顔を合せるのは食事の時だけなのだ。

それに父の信之は、村方の肝煎から諸附合、家にゐることとては夜だけなのだ。從つて、總攝してお柳が一家の權を握つて、其一顰一笑が家の中を明るくし又暗くする。見よう見まねで靜子の二人の妹——十三の春子に十一の芳子、まだ七歳にしかならぬ三男の雄三といふまで、祖父母や昌作、その姉で年中病床についてゐるお千世などを輕蔑する。其麼間に立つてゐる温なしい靜子には、それ相應に氣苦勞の絶えることがない。實際、信吾でも歸つて色々な話をしてくれたり、來客でもなければ、何の樂みもないのだ。尤も、靜子は其麼事があつても、自分で自分の境遇に反抗し得る樣な氣の強い女ではないのだが。

畫家の吉野滿太郎が來たのは、又しても靜子に一つの張合を增した。吉野の、何處か無愛想な、それでゐてソツのない態度は、先づ家中の人に喜ばれた。左程長くはないが、信吾とは隨分親密な間柄で、(尤も吉野は信吾を寧ろ弟の樣に思つてるので)この春は一緒に畿内の方へ旅もした。今度はまた信吾の勸めで一夏を友の家に過す積りの、定つた職業とてもない、暢氣な身上なのだ。

言ふまでもなく信吾は、この遠來の友を迎へて喜んだ。それで取敢へず離室の八疊間を吉野の室に充てゝ、自分は母屋の奥座敷に机を移した。吉野と兄の室の掃除は、下女の手傳もなく主に靜子がする。兎角、若い女は若い男の用を足すのが嬉しいもので。

それ許りではない、靜子には一つ吉野に對して好感情を持つべき理由があつた。初めて逢つた時それは氣が附いたので。吉野は顔容些とも似ては居ないが、その笑ふ時の目尻の皺が、怎うやら、死んだ浩一——靜子の許嫁——を思出させた。

生憎と、吉野の來た翌日から、雨が續いた。それで、客も來ず、出懸ける譯にもいかず、二日目三日目となつては吉野も大分退屈をしたが、昌作のお蔭で小川の家庭の樣子などが解つた。昌作も鮎釣にも出られず、日に幾度となく吉野の室を見舞つて色々な話を聞いたが、畫の事と限らず、詩の話、歌の話、昌作の平生飢ゑてる樣な話が多いので、もう早速吉野に敬服して了つた。

降りこめた雨が三十一日(七月)の朝になつて漸く霽つた。と、吉野は、買物旁々、舊友に逢つて來ると言つて、其日の午後、一人盛岡に行くことになつた。

(二)

雨後の葉月空が心地よく晴れ渡つて、日を埋

むる好摩が原の青草は、綠の火の燃ゆるかと許り生々とした。

　小川の家では折角下男に送らせようと言つて呉れたのを斷つて、敎へられた儘の線路傳ひ、手には洋杖の外に何も持たぬ背廣扮裝の輕々しさ、畫家の吉野は今しも唯一人好摩停車場に辿り着いた。

　男神の如き岩手山と、名も姿も優しき姫神山に挾まれて、空には塵一筋浮べず、溢るゝ許りの夏の光を漂はせて北上川の上流に跨つた自然の若々しさは、旅慣れた身ながらも、吉野の眼には新しかつた。その色彩の單純なだけに、心は何となき輕快を覺え、唆かす樣な草葉の香りを胸深く吸つては、常になき健康を感じた。日頃、彼の頭腦を支配してゐる種々の形象と種々の色彩の混雜つた樣な、何がなしに氣を焦立たせる重い壓迫も、彼の老ゆることなき空の色に吸ひ取られた樣で、彼は宛然、二十前後の青年の樣な足取で、ついと停車場の待合所に入つた。

　眩い許りの戶外の明るさに慣れた眼には、人一人居ない此室の暗さは土窖にでも入つた樣で、暫しは何物も見えず、ぐら〳〵と眩暈がしさうになつたので、吉野は思はず知らず洋杖に力を入れて身を支へた。手巾を出して額の汗を拭き乍ら、衣囊の銀時計を見ると、四時幾分と聞いた發車時刻にもう間がない。急いで盛岡行の赤切符を買つて改札口へ出ると、

『向側からお乘りなさい。』

と敎へ乍ら脊の低い驛夫が鋏を入れる。チラと其時、向側のプラットフォームに葡萄茶の袴を穿いた若い女の立つてゐるのが目についた。それは日向智惠子であつた。

　智惠子の方でも其時は氣が附いて居たが、三四日前に橋の上で逢つた限り、名も知り顏も知れど、口一つ利いたではなし、されぱと言つて、乘客と言つては自分と其男と唯二人、隱るべき樣もないので、素知らぬ振も爲難い。夏中逗留するといへば、怎うせ又顏を合せなければならぬのだ。

　それで、吉野が線路を橫切つて來るのを待つて、少し顏を染め乍ら輕くS卷の頭を下げて會釋した。

『や、意外な處でお目に懸ります。』と餘り偶然な邂逅を吉野も少し驚いたらしい。

『先日は失禮致しました。』

『怎うしまして、私こそ……。』と、脫つた帽子の鍔緣に切符を插みながら、「フム、小川の所謂近世的婦人が此女なのだ！」と心に思つた。

　そして、帽を脫つて智惠子に向ひ合つて、『僕で靜子さんから承つたんですが、貴女は日向さんと被仰るんですね？』

『は、左樣で御座います。』

『何れお目に懸る機會も有るだらうと思つてましたが、僕は吉野と申します。小川に居候に參つたんで。』

『お噂は、豫て靜子さんから承つて居りました。』

『來たよう。』と驛夫が向側で叫んだので、二人共目を轉じて線路の末を眺めると、遠く機關車の前部が見えて、何やらキラ〳〵と日に光る。

『今日は何處まで？』

『盛岡までで御座います。』

『成程、學校は明日から休暇なさうですね。何ですか、お家は盛岡で？』

『否。』と智惠子は愼しげに男の顏を見た。『學校に居りました頃からの同級會が、明後日大澤の溫泉に開かれますので、それであの、盛岡のお友達をお誘ひする約束が御座いまして。』

『然うですか。それはお樂しみで御座いませう。』と鷹揚に微笑を浮べた。

『貴方は何處へ？』

『矢張りその盛岡までです。』

吉野は不圖、自分が平生になく流暢に喋つてゐたことに氣が附いた。

列車が着くと、これは青森上野間の直行なので車内は大分込んでゐる。二人の外には乘る者も、降りる者もない。漸くの事で、最後の三等車に少しの空席を見附けて乘込むと、その扉を閉め乍ら車掌が號笛を吹く。慌しく汽笛が鳴つて、ガタリと列車が動き出すと、智惠子はヨラヨラと足場を失つて、思はず吉野に凭り掛つた。

（三）

吉野は窓際へ、直ぐ隣つて智惠子が腰を掛けたが、少し體を動しても互の體溫を感ずる位窮屈だ。女は、何がなしに自分の行動――紹介もなしに男と話をした事――が、はしたない様な、否、はしたなく見られた様な氣がして、「だつて、那麽切懸だつたんだもの。」と心で辯疏して見ても、怎やら氣が落着かない。乘合の人人からジロジロ顏を見られるので、仄りと上氣してゐた。

北上山系の連山が、姫神山を中心にして、左右の袖を擴げた様に東の空に連つた。車窓の前を野が走り木立が走る。時々、夥しい草葉の蒸香が風と共に入つて來る。

程なく列車が轟と音を立てゝ松川の鐵橋に差かゝると、窓外を眺めて默つてゐた吉野は、

「あ、あれが小川の家ですね。」

と言つて窓から首を出した。線路から一町程離れて、大きい茅葺の家、その周圍に四五軒農家のある――それが川崎の小川家なのだ。

首を出した吉野は、直ぐと振返つて、

「小川の令妹が出てますよ。」

『あら。』と言つて、智惠子も立つたが、怎う思つてか、外から見られぬ様に、男の後ろに身を隱して、そつと覗いて見た。

靜子は妹共と一緒に田の中の畔路に立つて、手巾を振つてゐる。妹共は何か叫んでるらしいが、無論それは聞えない。智惠子は無上に心が騷いだ。

帽子を振つてゐた吉野が、再び腰を掛けた時は、智惠子は耳の根まで紅くして極り惡る氣に俯向いてゐた。靜子の行動が、偶然か、はた心あつて見送つたものか、はた又吉野と申合せての事か、それは解らないが、何れにしても智惠子の心には、萬一自分が男と一緒に乘つてゐる事を、友に見られはしないかといふ心配が、强く動悸を打つた。吉野はその、極り惡る氣な樣子を見て、「小川の所謂近代的婦人も案外初心だ！」と思つたかも知れない。

その實男も、先刻汽車に乘つた時から、妙に此女と體を密接してゐることに壓迫を感じてゐるので。それを紛らかさうとして、何か話を初めようとしたが、兎角、言葉が喉に塞る。其麽筈はないと自分で制しながらも、斷々に、信吾が此女を莫迦に讃めてゐた事、自分がそれを兎や角冷かした事を思出してゐたが、腰を掛けるを切懸に、

「貴女は、何日お歸りになります？」と何氣なく口を切つた。

「三日に、あの歸らうと思つてます。」

『然うですか。』

「貴方は？」

「僕は何日でも可いんですが、矢張り三日頃になるかも知れません。」と言つたが不圖思ひついた事がある様に、「貴方は盛岡の中學に圖畫の教師をしてる男を御存じありませんか？　渡邊金之助といふ？」

『存じて居ります。』と、智惠子は驚いた様な顏をする。『貴方はあの、あの方と同じ學校を……？』

『然うです。美術學校で同級だつたんですが、

…あゝ御存知ですか！　然うですか！』と鷹揚に頷いて、『甚麼で居るんでせう？　まだ結婚しないでせうか？』

『え、まだ爲さらない樣ですが。』と、瞬つた眼を男に注いで、『貴方はあの、渡邊さんへ被行るんで御座いますか。』

『え、突然訪ねて見ようと思ふんですがね。』と、少し腑に落ちぬ樣な目附をする。

『まあ、左樣で御座いますか！』と一層驚いて、『私もあの、其家へ參りますので…渡邊さんの妹樣と、私と矢張り同じ級で御座いまして。』

『妹樣と？　然うですか！　これは不思議だ！』と吉野も流石に驚いた。

『あの、久子さんと仰います…。』

『然うですか！　ぢや何ですね、貴女と僕と同じ家に行くんで！　これは驚いた。』

『マア眞個に！』と言ひ乍ら、智惠子は忽ち或不安に襲はれた。靜子の事が心に浮んだので。

其　七

（一）

富岡と森川は一日の留守居を神山富江に頼んで、銀座に出懸けた。

休暇になつてからの學校ほど伽藍堂に寂しいものはない。建物が大きいのと平生耳を聾する樣な喧騷に充ちてるのとで、日一日、人ッ子一人來ないとなると、俄かに荒れはてた樣な氣がする。常には目立たぬ塵埃が際立つて目につく。職員室の卓子の上も、硯箱やら帳簿やら、皆取片附けられて了つて、其上に薄く塵が落ちた。

懶いチクタクの音を響かせてゐる柱時計の下で、富江は森川の歸りを待つ間の退屈に額に汗をかきながら編物をしてゐた。暑い盛りの午後二時過、開け放した窓から時々戸外を眺めるが、烈々たる夏の日は目も痛む程で、うなだれた木の葉にそよとの風もなく、大人は山に、子供らは皆川に行つた頃だから、四邊が妙に靜まり返つてゐる。其處へブラリと昌作が、遣つて來た。

『暑いでせう外は。先刻から眠くなつて〳〵爲樣のないところだつたの。』と富江は椅子を薦める。年下の弟でも遇らふ樣な素振りだ。

それに慣れて了つて、昌作も挨拶するでもなく、『暑い〳〵。』と帽子も冠らずに來た髮のモヂャモヂャした頭に手を遣つて、荒い白絣の袖を肩に捲り上げた儘腰を下した。

『森川君は？』

『鮎釣に行つたの。釣れもしないくせに。』

『すると何だな、貴女が留守役を仰附かつてるたんだな。ハハヽヽ、好い氣味だ。』

『口の惡い！　何が好い氣味なもんですか。其麼事を言ふとお茶菓子を買ひませんよ。』と睨んで見せる。

『フム。』と昌作は妙に濟し込んで、『御勝手に。』

『まあ口許りぢやない人が惡くなつたよ、子供の癖に！』と言ひながら、手を延ばして呼鈴の綱を引いて、『然う〳〵、一昨日は御馳走樣。お客樣はまだ歸つてらつしやらないの？』

『あーい。』と彼方で眠さうな聲。

『まだ。今日か明日歸るさうだ。吉野樣がゐないと俺は薩張り詰らないから、今日は莫迦に暑いけれども飛出して來たんだ。』

『生憎と日向樣もまだ歸らないの。』と富江は調戲ふ眼附で青年の顏を見た。其處へ白髮頭の小使が入つて來て用を聞いたので、女は何かお菓子を買つて來いと命ずる。

『そら、到頭買ふんだ。』と昌作はしたり顏。

『私が喰べるのですよ、誰が昌作さんなんかに上げるもんですか。』と減らず口を叩いて、『よ、昌作さん、ハイカラの智惠子さんもまだ歸らないの。』

『フム。』
『何がフムですか。昌作さんの歌を大變賞めてるから、行つて御禮を被仰よ。』
『フム。家の信吾ぢやないし。』
『え？　信吾さんが？』
『知らない。』
『信吾さんが行くの？　マア好い事聞いた。ホヽヽヽ、マア好い事聞いた。』
と、富江は弾けた様に一人で騒いで、
『マア好い事聞いた、信吾さんが智恵子さんの許へ行くの。今度逢つたらうんと揶揄つて上げよう。ホホヽヽ。』
昌作は冷やかに其顔を眺めてゐたが、
『可けない〳〵。其麼話、吉野さんの前なんかで言つちや可けませんぞ。』
『あら、怎うして？』と忙しい眼づかひをする。
『だつて、詰らないぢやないですか。』
『詰らない？　言ひますよ私。』
『詰らない！　第一吉野さんの前で其麼事が言へますか？　豪い人だ。信吾の友達には全く惜しい人だ。』
『まあ、大層見識が高くなつたのね？』
すると昌作は、忽ち不快な顔をして默つた。
『甚麼に豪いの、その方は？』
『時にですな、』と昌作は附かぬ事を言ひ出した。『今日は貴女に用を頼まれて來たんだ。』
『オヤ、誰方から？』
其時小使が駄菓子の袋を恭しく持つて入つて來た。

（二）

『當てゝ御覧なさい。』と昌作はしたり顔に拗ねる。
其顔を、富江はマジ〳〵と見てゐたが、小使の出てゆくのを待つて、
『信吾さんから？』
ピクリと昌作の眉が動いた。そして眼鏡の中で急しく瞬きをし乍ら顔を大きく横に振る。
『そんなら、誰方？』
『無論、貴女の知つた人からだ。』と小憎らしく済したものだ。
『憤つたい！』と自暴に體を顫はせて、
『よ、誰方からつてばさ。』
『ハッ、ハヽ、解りませんか？』と、何處までも高く踏んで出る。
『好いわ、もう聞かなくつても。』
『それぢや俺が困る。實はですね。』
『知りません。』
『登記所の山内君からだ。以前貴女から「戀愛詩評釋」といふ書を借りたことがあるさうだ。それを又讀みたいから俺に借りて來て呉れと言ふんですがね。』
『オヤ、何故御自分で被來らないでせう？』
『だつて寢てるんだもの。』
『ぢやもう、床に就いたの？』と低めに言つて、胡散臭い眼附をする。
『一昨日俺と鮎釣に行つて、夕立に會つたんですよ。それで以て山内は弱いから風邪を引いたんだ。』
『あら昌作さん、山内さんは肺病だつてんぢや有りませんか？』
『肺病？』と正直に驚いた顔をしたが『譃だ！』
『譃なもんですか。始終那麼妙な咳をしてゐたぢやありませんか。……加藤さんがそ言つてるんですもの。』
『肺病だと？』
『え。』と氣がさした様に聲を落して、『だけど私が言つたなんか言つちや厭よ。よ、昌作さん貴方も傳染らない様に用心なさいよ。』
『莫迦な！　山内は那麼小さい體をしてるもんだから、皆で色々な事を言ふんだ。俺だつて咳はする――』

『馬の樣な咳を。ホホヽヽ。』と富江は笑つて、

『誰がまた、那麼一寸法師さんを一人前の人待遇にするもんですか。』

そして取つて附けた樣にホホヽヽと又笑つた。

『だから不可い。』と呂作は錆びた聲に力を入れて、『體の大小によつて人を輕重するといふ法はない。眞箇に俺は憤慨する。家の奴等も皆然うだ。』

『然うでないのは日向のハイカラさん許りでせう？』

呂作は聞かぬ振をして、『英吉利の詩人にポープといふ人が有つた。その詩人は佝僂で跛足だつたさうだ。人物の大小は體に關らないさ。』と、三文雜誌ででも讀んだらしい事を豪さうに喋る。

『大層力んで見せるのね。だけれど山内樣は別に大詩人でもないぢやありませんか？』

『それは別問題だ。……』と正直に塞つて、『それは然うと、今言つた書を貸して下さい。』

『家に置いてあるの。』

『小使を遣つて取寄せて呉れるさ。』と覦む樣な調子で。

『肺病患者なんかに！』と獨言つ樣に言つて、『あのね、呂作さん。』と可笑しさを怺へた樣な眼附をする。『然う言つて下さいな山内さんに。あのね、評釋なんか無くつて解るぢやありませんかつて。』

『え？　何ですつて？』と呂作は眞面目に腑に落ちぬ顏をする。

『ホホヽヽ。』と、富江は一人高笑ひをした。そして、『書はね、後で誰かに屆けさせますよ。』

一時間程經つて、呂作は、來た時の樣にプラリと、帽子も冠らず、單衣の兩袖を肩に捲くり上げて、長い體を妙に氣取つて、學校の門を出た。

そして川崎道の曲角まで來た時、三町彼方から、深張りの橄欖色の傘をさした、海老茶の袴を穿いた女が一人、歩いて來るのに目をつけた。『ハハア、歸つて來たナ。』と呟いて、足を淀めたが、ついと横路へ入る。

三日前に畫家の吉野と同じ汽車に乘合せて、大澤温泉に開かれた同級會へ行つた智惠子は、今しも唯一人、町の入口まで歸つて來た。

（三）

小川家の離室には、畫家の吉野と信吾とが相對してゐる。吉野は三十分許り前に盛岡から歸つて來た所で、上衣を脱ぎ、白綾の夏襯衣の、その鈕まで外して、胡坐をかいた。

その土産らしい西洋菓子の函を開き茶を注いで、靜子も其處に坐つた。母屋の方では、キャッキャッと妹共の騷ぐのが聞える。

『だからね。』と吉野は其友達の噂を續けた。『僕は中學の畫の教師なんかやるのが抑も愚だと言つて遣つたんだ。奴だつて學校に居た時分は夢を見たものよ。尤も僕なんかより遙と常識的な男でね。靜物の寫生なんかに凝つたものだ。だが奴が級友の間でも色彩の使ひ方が上手でね、活きた色彩を出すんだ。何色彩を使つても習慣を破つてるから新しいんだよ。何時かの展覽會に出した風景と靜物なんか、黒人仲間ぢや評判が好かつたんだよ。其奴が君、遊びに來た中學生に三宅の水彩畫の手本を推薦してるんだからね。……僕は悲しかつたよ。否悲しいといふよりは癪に障つたよ。何といふのかな、那麼工合で到頭埋もれて了ふのを、平凡の悲劇とでも言ふかな……。』

『だつて君。』と信吾は委細呑込んだと言つた樣な顏をして、『其人にだつて家庭の事情てな事が有らあな。一年や二年中學の教師をした所で、畫才が全然滅びるつて事も無からうさ。』

『それがよ、家庭の事情なんて事がてんで可くない。生活問題は誰にしろ有るさ。然し藝術上の才能は然うは行かない。其奴が君、戰つても見ないで初めつから生活に降參するなんて、意氣地が無いやね。……とまあ言つて見たんさ、我身に引較べてね。』
『ハヽヽ。君にも似合はんことを言ふぢやないか。』とゴロリ横になる。
其處へ、庭に勢ひのいゝ下駄の音がして、昌作が植込の中からヒョックリと出て來た。今しも町から歸つて來たので。
『やあ、お歸りになりましたな。』と吉野に聲をかける。
『否、も少し先に。今日も貴方は鮎釣でしたか？』
『否。』と無造作に答へて縁側に腰を掛けた。
『吉野さん、貴方、日向さんと同じ汽車でしたらう？』
『え？』と靜子が聞耳を立てる。
『然う、然う。』と、吉野は今迄忘れてゐたと言つた樣に言つて、靜子の方に向いた。『それ、過日橋の上に貴女と二人立つてゐた方ですね。あの方と今日同じ汽車に乗りましたよ。』
『あら智惠子さんと、然うでしたか！　よくお解りになりましたね。』と莞爾、何氣なく言つた。
『否その、何です、今話した渡邊の家で紹介されたんです。渡邊の妹君と親友なんださうで、偶然同じ家に泊つた譯なんです。』と、吉野は急しく眼をぱちつかせ乍ら、無意識に煙草に手を出す。
『オヤ然うでしたの！』
『然うかい！』と信吾も驚いて、『それは奇遇だつたな。實に不思議だ。』
『別段奇遇でも無からうがね。唯逢つただけよ。』と、吉野は顏にかゝる煙草の煙に大仰に眉を寄せる。
『昌作さんは何ですか、日向さんに逢つて來たの？』と信吾が横になつた儘で問うた。
『否。歸つて來た所を遠くから見ただけだ。』
『よつぽど遠くからね？　ハヽヽ。』
昌作はムッとした顏をして、返事はせずに、吉野の顏色を覗つた。
然うしてる所へ、母屋の方には賑かな女の話聲。下女が前掛で手を拭きながらバタ〳〵驅けて來て、『若旦那樣、お孃樣、板垣樣の叔母樣が盛岡からお出アンした。』
『アラ今日被來たの。明日かと思つたら。』と、靜子は吉野に會釋して怡々と下女の後から出て行く。
『父の妹が泊懸に來たんだ。一寸行つて會つてくるよ。』と信吾も立つた。昌作は何時の間にか居ない。
吉野は眉間の皺を殊更深くして、ぢつと植込の邊に瞳を据ゑてゐた。

其八

（一）

智惠子は渡邊の家に一泊して、渡邊の妹の久子といふのと翌一日大澤の温泉に着いたのであつた。その夕方までには、二十幾名の級友大方臨溪館といふ温泉宿の二階に、縣下の各地方から集つた。
兎角女といふものは、學校にゐる時は如何に親しくても、一度離れて了へば心ならずも疎くなり易い。それは各々の境遇が變つて了ふ爲めで、智惠子等のそれは、卒業してからも同じ職業に就いてるからこそ、同級會といふ樣なものも出來るのだ。三年の月日を姉と呼び妹と呼んで一棟の寄宿舍に起臥を共にした間柄、校門を辭して散々に任地に就いてからの一年半の間に、身に心に變化のあつた人も多からう

が、さて相共に顏を合せては、自から氣が樂しかつた寄宿舍時代に歸つた。數限りなき追憶が口々に語られた。氣輕な連中は、階下の客の迷惑も心づかず、その一人が彈くヴァイオリンの音に伴れてダンスを初めた。恁くて此若い女達は翌二日の夜更までは何も彼も忘れて樂みに醉うた。缺席したのは四人、その一人は死に、その一人は病み、他の二人は懷姙中のことで。——結婚したのはこの外にも五六人あつた。

各々の任地の事情が、また、事細かに話し交された。語るべき友の乏しいといふ事、頭腦の舊い校長の惡口、同じ師範出の男教員が案外不眞面目な事、師範出以外の女教員の劣等な事、これらは大體に於て各々の意見が一致した。中に一人、智惠子の村の加藤醫師と遠縁の親戚だといふのがあつた。その女から、智惠子は清子に宛てた一封の手紙を託された。

その手紙を屆けるべく、智惠子は澁民に歸つた翌日の午前、何氣なく加藤醫院を訪れたのであつた。

玄關には、腰掛けたのや、上り込んだのや、薄汚ない扮裝をした通ひの患者が八九人、詰らな相な顏をして、各自に藥瓶の數多く並んだ棚や、此藥を分量してゐる小生意氣な藥局生の手先などを眺めてゐた。智惠子が其處へ入ると、有つ丈の眼が等しく其美しい顏に聚つた。

『奧樣は？』

『ハイ。』と答へて、藥局生は匙を持つた儘中に入つてゆく。居竝ぶ人々は狼狽へた樣に居住ひを直した。諄々と挨拶したのもあつた。

今朝髪を洗つたと見えて、智惠子は房々した長い髪を、束ねもせず、緑の雲を被いた樣に、肩から背に豐かになびかせた。白地に濃い葡萄色の矢絣の新しいセルの單衣に、帶は平常のメリンス、そのきちんとしたお太鼓が搖めく髪に隱れた。

少し手間取つて、倉皇と小走りに清子が出て來た。

『まあ日向先生、何日お歸りになりましたの？さ何卒。』

『は有難う。昨日夕方に歸りました許りで。』

『お樂みでしたわねえ。さ何卒お上り下さいまし、……あの小川さんのお客樣も被來てますから。』

『はア。』と智惠子は、脱ぎかけた下駄を止めた。

『吉野さんとか被仰る、畫をお描きになる……貴女にも盛岡でお目にかゝつたとか被仰つてで御座いますよ。』

『あの、吉野さんが？』

『え。宅が小川さんで二三度お目にかゝりました相で、……昌作さんとお二人。さ何卒。』

『は有難う。あのう……』と言ひ乍ら智惠子は懷から例の手紙を取出して、手短に其由來を語つて清子に渡した。

『まア然うでしたか。それは怎うも。……それは然うと、さ、さ。』と、手を引く許りにする。

『あの一寸學校に行つて見なければなりませんから、何れ後で。』

『あら日向樣、其麼貴女……』と、清子が捉へる袂を、スイと引いて、

『眞箇よ、奧樣。何れ後で。』

智惠子は逃げる樣にして戸外に出た、と、忽ち顏が火の樣に熱つて、恐ろしく動悸がしてるのに氣がついた。

（二）

加藤の玄關を出た智惠子は、無意識に足が學校の方へ向つた。莫迦に胸騷ぎがする。

「何故那麼に狼狽へたらう？」恁う自分で自分に問うて見た。

「何故那麼に狼狽へたらう？　吉野さんが被來てゐたとて！　何が怖かつたらう！　清子さん

も可笑しいと思つたであらう！　何故那麼に狼狽へたらう？　何も譯が無いぢやないか！」
　理由は無い。
　智惠子は一歩毎に顏が益々上氣して來る樣に感じた。何がなしに、吉野と昌作が後ろから急ぎ足で追驅けて來る樣な氣がする。それが、一歩一歩に近づいて來る……
　其麼事は無い、と自分で譴めて見る、何時しか息遣ひが忙しくなつてゐる。
　取留めもなく氣がそはついてるうちに歩くともなくもう學校の門だ。つと入つた。
　職員室の窓が開いて、細い釣竿が一間許り外に出てゐる。宿直の森川は、シャツ一枚になつて、一生懸命釣道具を弄つてゐた。
　不圖顏を上げると、
「オヤ日向さん、何時お歸りになりました？」
『は、あの、昨日夕方に。』と、外に立つて頭を上げる。洗ひ髮がさらりと肩から胸へ落つる。智惠子は、うるさい樣にそれを手で後ろにやつた。
『面白かつたでせう？　さ、まあお上りなさい。』
「否、あの。」と息が少し切れる。「あの私宛の手紙でも參つてゐませんでせうか？」

『奈何でしたか！　あ、來ませんよ、神山樣の方の間違です。まお上りなさい。」
「は有難う御座います。一寸あの、一寸、後ろの山へ行つて見ますから。」
『山へ？　蕈狩はまだ早いですよ。ハヽヽ。まア可いでせう？」
「は、何れ明日でも。」と行掛ける。
「あ日向樣、貴女に少しお願ひがありますがね。」
「何で御座いますか？」
『何有、眞の些とした事ですがね。』と、森川は笑つてゐる。
『何で御座いますか、私に出來る事なら……』と智惠子は何時になく焦かし相な顏をした。
『出來る事ですとも。』また笑つて、『その何ですよ、過日、否昨日か、神山樣にも一日お願ひしたんですがね。その、私は鮎釣に行きますから、御都合の可い時一日學校に被來つて下さいませんか？』
『は、可う御座いますとも。何日でも貴方の御出懸けになる時は、あの大抵の日は小使をお寄越し下されば直ぐ參ります。」
「然うですか。ぢやお願ひ致しますよ、濟みません。』

「何日でも……」と言つて智惠子は、足早に裏の方に廻つた。
　裏は直ぐ雜木の山になつて、下暗い木立の奧がこんもりと仰がれる。校舍の屋根に被さる樣になつた青葉には、楢もあれば栗もある。鮮かな色に重なり合つて。
　便所の後ろになつてゐる上り口から、智惠子はスタ〳〵と坂を登つた。
　木立の中から、心地よく濕つた風が額へ吹く。と、そのこんもりした奧から樂しさうな晝杜鵑の聲。
　聲は小迷ふ樣に、彼方此方、梢を渡つて、若き胸の轟きに調べを合せる。
　智惠子は躍る樣な心地になつて、つと青葉の下陰に潜り込んだ。

（三）

　やゝ急な西向の傾斜、幾年の落葉の朽ちた土に下駄が沈んで、綠の屋根を洩れる夏の日が、處々、虎斑の樣に影を落して、そこはかとなく搖めいた。細き太き、數知れぬ樹々の梢は參差として相交つてゐる。
　唆かす樣な青葉の香が、頰を撫で、髮に戲れて、夏蔭の夢の甘さを吹く。

『クク、、クウ。』と、すぐ頭の上、葉隱れに晝杜鵑が啼く。醉つた樣な、樂しい樣な、切ない樣な、若い胸の底から漂ひ出る樣な聲だ。その聲が、ク、ク、ク、と後を刻んで、何處ともなき青葉の戰ぎ！

と、少し隔つた彼方から、『クク、、クウ。』と同じ聲が起る。

『クク、、クウ。クク、、クウ。』と、後ろの方からも。

『漂へる聲』とライダル湖畔の詩人が謳つた。それだ、全くそれだ。甘き青葉の香を吸ひ、流れるこの鳥の聲を聞いては、身は詩人でなくても、魂が胸を出て、聲と共にそこはかとなく森の下蔭を小迷うてゆく思がする。

聲の在所を覓むる如く、キヨロ〳〵と落着かぬ樣に目を働かせて、徑もなき木陰地の濕りを、智惠子は樹々の間を其方に拔け此方に潛る。夢見る人の足取とは是であらう。髮は肩に亂れ、胸に波打ち、はら〳〵と顏にも懸る。それを拂はうとするでもない。

故もなく胸が騷いでゐる。醉つた樣な、樂しい樣な、切ない樣な……宛ら葉隱れ鳥の聲の、何か定めなき思ひに、總身の脈を亂してゐる。

『クク、、クウ。』と鳥の聲。

「私ほど辛い悲いものはない！」

係う譯のないことを、何となしに心に言つてみた。何が辛いのか、何が悲しいのか、それは自分では解らない。たゞ然う言つて見たかつたのだ。言つた所で、別に辛くも悲しくもない。

「吉野さんが町に、加藤の家に來てゐる。」智惠子に解つてるのは之だけだ。

初めて逢つたのは鶴飼橋の上だ。その時の、俥の上の男の容子は、今猶明かに心に殘つてゐる。然し言葉を交したでもない。友の靜子は耳の根迄紅くなつてゐた。その靜子は又、自分とあの人が端なくも汽車に乘合せて盛岡に行く時、田圃に出て手巾を振つた。靜子の底の底の心が、何故か自分に解つた樣な氣がする。

『何故あの時、私はあの人の後ろに隱れたらう？』係う智惠子は自分に問うて見る。我知らず顏が紅くなる。

其晩、同じ久子の家に泊つた。久子兄妹とあの人と自分と、打伴れて岩手公園に散歩した。

甘き夏の夜の風を、四人は甚麼に嬉しんだらう！　久子の兄とあの人との會話が、解らぬ乍らに甚麼に面白かつたらう！

『君は天才なんだ。』係う久子の兄が幾度か眞摯に言つた。何かの話の時、『矢張り女といふものは全く放たれる事が出來ん。男は結局一人ぼつちよ、死ぬまで。』とあの人が言つた！

翌日久子と大澤に行つて、昨日午前再び下小路なる久子の家まで歸つた。

『日向樣は何日お歸りになります？』係うあの人が言つた。

『明日になさいた、ねえ！』と久子が側から言つた。『吉野さんも然う遊ばせな何卒。』

『否、僕は今日午後に發ちます。』

遂に同じ汽車で歸つて、再會を約して好摩が原で別れた。

『それだけだ。』と智惠子は言つて見た。何が(それだけ)なのか解らぬ。(それだけ)が何れだけなのか解らぬ。

解つてるのは、その吉野が今昌作と二人加藤の家にゐる事だけだ。或はもう、加藤の家を出たかも知れぬ。出て而して、何處へ？　何處へ？

『クク、、クウ。』といふ聲は遙と後ろに聞えた。智惠子は何時しか雜木の木立を歩み盡きて、幾百本の杉の暗く茂つた、急な坂の上に立つてゐた。

きつと其下の方を見てゐたが、何を思つてか、智惠子は忽しく其急な坂を下り初めた。

（四）

ダラ／＼と急な杉木立の、年中日の目を見ぬ仄暗い坂を下り盡すと、其處は町裏の野菜畑が三角形に山の窪みへ入込んで、其奥に小かな柾葺の屋根が見える。大窪の泉と云つて、杉の根から湧く清水を大きい掘桶に湛へて、雨水を防ぐ爲に屋根を葺いた。町の半數の家々ではこの水で飯を炊ぐ。

蓊鬱と木が蔽さつてるのと、桶の口を溢れる水銀の雫の様な水が、其處らの青苔や圓い石を濡らしてるのとで、如何な日盛りでも冷い風が立つてゐる。智恵子は不圖渇を覺えた。まだ午食に餘程間があると見えて、誰一人水汲が來てゐない。

重い柄杓に水を溢れさせて、口移しに飲まうとすると、サラリと髮が落つる。髮を被いた顔が水に映つた。先刻から斷間なしに熱つてるのに、四邊の青葉の故か、顔が例よりも青く見える。

智恵子は二口許り飲んだ、齒がキリ／＼する位で、心地よい冷さが腹の底までも沁み渡つた。と、顔の熱るのが一層感じられる。「怎うして青く見えたか知ら！」と考へ乍ら、裏畑の細徑傳ひ急ぎ足に家へ歸つた。

『貴方も被來らなくつて？』

『否。』とお利代は何氣ない顔をしてゐる。『あら、何處へ行つてらつしつたんですか？　お髮に木の葉が附いて。』

『然う？』と手を遣つて見て、『學校の後ろの山を歩いて見ましたの。』

『お一人で？』

『否、子供達と。』と、うつかり言つたが、智恵子は妙に氣が引けた。

『先生、俺も行きたいなア。』と梅ちやんが甘える。

『俺も、俺も。』と新坊は氣早に立ち上つて雀躍する。

『ホヽヽ。もう行つて來たの。この次にね。』

と言ひ乍ら、智恵子は己が室に入つた。

「來なかつた！」と思ふと、ホッと安心した様な氣持だ。と又、今にも來るかといふ新しい心配が起る。戸外を通る人の跫音が、急しく心を亂す。戸口の溝の橋板が鳴る度、押へきれぬ程動悸がする。

「奈何したといふのだらう？」と自分の心が疑はれる。莫迦な！　と叱つても矢張り氣が氣でない。強ひて書を讀んで見ても、何が書いてあつたか全然心に留らない。新坊が泣き出しでもすると譯もなく腹立しくなる。幾度も／＼室の中を片附けてゐるうちに、午食になつた。

『小母さん、私の顔紅くなつて？』と箸を動しながら訊いた。

『否。些とも。』

『然う？　ぢや平生より青いんでせう。』

『否。何ともありませんよ。怎うかなすつたんですか？』

『怎うもしないんですけれど、何だかホカ／＼するわ。目の底に熱がある様で……。』

『暑いところを山へなんか被行つたからでせうよ。今日はこれから又甚麽に蒸しますか！』

何がなしに氣が急いて、智恵子はさヽつさと箸を捨てた。何をするでもなく、氣がそは／＼して、妙な暗さが心に湧いて來る。「怎うもしないのに！」と自分に辯疏して見る傍から、「屹度加藤さんで午餐が出て、それから被來る。」といふ考が浮ぶ。髮を結はう、結はうと何回となく思ひ附いたが、簞笥の上の鏡に顔を寫しただけ。到頭三時近くなつた。

「世の中が詰らない！」と言つた様な失望が、漠然と胸に湧く。自省の念も起る。氣を紛らさうと思つて二人の子供を呼んだ。智恵子の拵へて

くれた浴衣をだらしなく着た梅ちゃんと、裸體に腹掛をあてた新坊が喜んで來た。

『何か話をして上げませう？　新坊さんは桃太郎が好き？』

『嫌。』と頭を振つて、『山さ行く。』

『先生、山さ連れてつて。』と梅ちゃんも甘えかかる。

『ホヽヽ、何方も山へ行きたいの？　山はこの次にね……』

と言つてる所へ、入口に人の訪るゝ氣勢。智惠子は屹と口を結んだ。俄かに動悸が強く打つ。

（五）

胸を轟かして待つた其人では無くて訪ねて來たのは信吾であつた。智惠子は何がなしにバツが惡く思つた。

信吾は常に變らぬ容子作らも、何處か落着かぬ樣で、室に入ると不圖氣がさした樣に見廻して坐つたが、今まで客のあつたとも見えぬ。

『吉野君が來なかつたですか？』

『否。』と對手の顏色を見る。

『來ない？　然うですか、何處へ行つたかなア。』

『はてナ、』と、信吾は是非逢はねばならぬ用でもある樣に考へる。

『あの、お一人でお出懸けになつたんで御座いますか？』

『昌作と二人です、今朝出たつ限まだ歸らないんですが、多分貴女ン許かと思つて伺つたんです。』

何故此家に居ると思つたか、此家に來ると其人が言つて出たのか、又、若し眞に用があるのなら、午前中確かに居た筈の加藤へ行つて聞けば可い。言方は樣々あつたが、智惠子は膝に目を落して、唯、『否。』と許り。

危ない藝當を行つてるといふ樣な氣がして、心が咎める。

『はてナ。』と、信吾はまた大袈裟に考へ込む態を見せて、『實は何です、家に親類の者が來てゐて僕は今朝出られなかつたんですが、一寸今、用が出來たもんですから探しに來たんです。』

『何方か外に お尋ねになつたんで御座いますか？』

『否、』と信吾は少し困つて、『…眞直に此方へ。』

『此家へ被來るとでも被仰つて、お出懸けになられたんで御座いますか？』

『然うぢやないんですが、唯、多分然うかと思つたんで。』

『奈何してで御座いますか？』

『ハッハハ。』と、男は突然大きく笑つた。『逢ひましたね。それぢや何處へ行つたかなア！』

智惠子は默つて了つた。

『盛岡でお逢ひになつたんですつてね、吉野に？』

『え。渡邊さんといふお友達の家に參りましたが、その方の兄さんとお親しい方だとかで……あの、些とお目に懸つたんで御座います。』

『巧く言つてやがらア、畜生奴！』と、心の中。『甚麽男です、貴女の見る所では？』

智惠子は不快を感じて來た。『奈何ッて、別に……。』

『僕はあゝした男が大好ですよ。僕の知つてる美術家連中も少くないが、吉野みたいな氣持の好い、有望な男は居ませんよ……』と、信吾は誇張した言方をして、女の顏色を見る。

『然うで御座いますか。』と言つた限、智惠子は眞面目な顏をしてゐる。

話は遂にはずまなかつた。智惠子には若しや怎うしてる所へ其人が來はせぬかといふ心配がある。そして、其人に關する事を言ひ出されるのが、何がなしに侮辱されてる樣な氣がする。

信吾は信吾で、妙に皮肉な考へ許り頭に浮んだ。
それでも、四十分許り向ひ合つてゐて不圖氣が附いた樣にして信吾はその家を辭した。

「畜生奴！」恁う先づ心に叫んだ。

元が用があつて探しに來たのでも無いのだから、その儘家路を急いだ。父は留守。母は二三日前からまた枕に就いた。其處へ饒舌の叔母が子供達と共に泊りに來たのが、今朝も信吾は其叔母に捉まつて出懸けかねた。吉野は昌作を伴れて出懸けた。午後になつて父が歸ると、信吾は何となく吉野と智惠子の事が氣に掛つた。それは一つは退屈だつた爲めでもある。も一つには、その二人が自分の紹介も待たずして知己になつたのが、譯もなく不愉快なのだ。隱して置いた物を他人に勝手に見られた樣な感じが、信吾の心を焦立せてゐる。

『今日は奈何して、あゝ冷淡だつたらう？』と、智惠子の事を考へ乍ら、信吾は強く杖を揮つて、路傍の草を自暴に薙ぎ倒した。

其九

（一）

叔母一行が來て家中が賑つてる所へ、夕方から村の有志が三四人、門前寺の梁に落ちたといふ川鱒を持つて來て酒が始つたので、病床のお柳までが鉢卷をして起きるといふ混雜、客自慢の小川家では、吉野までも其席に呼出した。燈火の點く頃には、少し酒亂の癖のある主人の信之が、向鉢卷をしてカッポレを踊り出した。

朝から昌作の案內で町に出た吉野の歸つた時は、先に歸つた信吾が素知らぬ顏をして、客の誰彼と東京談をしてゐた。無理強ひの盃四つ五つ、それが悉皆體中に循つて了つて、聞苦しい土鄙の川狩の話も興を覺えた。眞赤な顏をした吉野は、主人のカッポレを機に密乎と離室に逃げ歸つた。

其緣側には、叔母の子供等や妹達を對手に、靜子が何やら低く唱歌を歌つてゐた。

『あゝ、悉皆醉つちやつた。』恁う言つて吉野は緣に立つ。

『御迷惑で御座いましたわね。お苦しいんですか其麼に？』

燈火に背いた其笑顏が、何がなしに艷に見えた。涼しい夜風が遠慮なく髮を翫る。庭には植込の繁みの中に螢が光つた。子供達は其方にゆく。

『飮みつけないもんですからね。然し氣持よく醉ひましたよ。』と言ひ乍ら、吉野は庭下駄を穿いた。其實、顏がぽつぽと熱るだけで、格別醉つた樣な心地でもない。

『夜風に當ると可う御座いますわ。』

『え、些と歩いて見ませう。』と、酒臭い息を涼しい空に吹く。月の無い頃で、其處此處に星がちらついた。

『靜や、靜や。』と母屋の方からお柳の聲がした。

吉野はブラリ〳〵と庭を拔けて、圃路に出た。追駈ける樣な家の中の騷ぎの聲の間々に、靜かな麥畑の彼方から水の音がする。暗を縫うて見え隱れに螢が流れる。

夜涼が頰を舐めて、吉野は何がなしに一人居る嬉しさを感じた。恁うして田舍の夜路を、何の思ふことあるでもなく、微醉の足の亂れるでもなく、しつとりとした空氣を胸深く吸つて、ブラリ〳〵と辿る心地は、渠が長く〳〵忘れてゐた事であつた。北上川の水音は漸々近くなつた。足は何時しか、町へ行く路を進んでゐた。

轟然たる物の響の中、頭を壓する幾層の大厦に挾まれた東京の大路を、苛々した心地で人なだれに交つて歩いた事、兩國近い河岸の割烹店の窓から、目の下を飛ぶ電車、人車、驅足を

してる樣な忙しい人々、さては、濁つた大川を上り下りの川蒸汽、川の向岸に立列んだ、強い色彩の種々の建物などを眺めて、取り留めもない、切迫塞つた苦痛に襲れてゐた事などが、怎うやらずつと昔の事、否、他人の事の樣に思はれる。

吉野は、今日町に行つて加藤で御馳走になつた事までも、既う五六日も十日も前の事の樣に思はれた。自分が餘程以前から此村にゐる樣な氣持で、先刻逢つて酒を强ひられた許りの村の有志――その中には清子の父なる老村長もゐた――の顏も、可也古くからの親しみがある樣に覺えた。

いつしか高畠の杜を過ぎて、鶴飼橋の支柱が、夜目にそれと見える樣になつた。急に高まつた川瀬の音が、靜かな、そして平かな心の底に、妙にしんみりした響きを傳へる。と、その川瀬の音に交つて、子供らの騷ぐ聲が聞え出した。

橋の袂まで來た。不圖子供らの聲に縺れて、低い歌が耳に入る。

『……か―みは―あ―い―なり。』

灰白い人の姿が、朧氣に橋の上に立つてゐる。

（二）

橋の上の灰白い人影、それは智惠子であつた。

信吾の歸つた後の智惠子は、妙に落膽して氣が沈んだ。今日一日の己が心が我ながら怪まれる。

『奈何したといふのだらう？　私はあの人を、思つてる……戀してるのか知ら！』

『否！』と强く自ら答へて見た。自分は假にも其麼事を考へる樣な境遇ぢやない、兩親はなく、一人ある兄も手頼りにならず、又成らうともせぬ。謂はばこの世に孤獨の自分は、傍目もふらずに自活の途を急がねばならぬ。それだのに、何故這麼……？

焦れに焦れて待つた其人の、遂に來なかつた失望が、冷かに智惠子の心を嘲つた。二度と這麼事は考へまい！　と思ふ傍から、『矢張り女は全く放たれる事が出來ない。男は結局孤獨だ、死ぬまで。』と久子の兄に言つた其人の言葉などが思出された。書を讀む氣もしない。學校へ行つてオルガンでも彈かうと考へても見た。うつかりすると取り留めのない空想が湧く……。

日が暮れると、近所の女子供が螢狩に誘ひに來た。案外氣輕に智惠子はそれに應じて、宿の二人の子供をも伴れて出た。出る時、加藤の玄關が目に浮んだ。其處には數々の履物に交つて赤革の夏靴が一足脫いであつた。小川のお客樣も來てゐると清子の言つたその時、智惠子は、あ、これだ！と其靴に目を留めたつけ！

村で螢の名所は二つ、何方に爲ようと智惠子が言ひ出すと、子供らは皆舟綱橋に伴れてつて吳れと强請んだ。

『彼方には男生徒が澤山行つてるから、お前達には取れませんよ。』恁う智惠子が言つた。女兒等は、何有男に敗けはしないと口々に騷いだが、結句智惠子の言葉に從つて鶴飼橋に來た。

夏の夜、この橋の上に立つて、夜目にも著き橋下の波の泡を瞰下し、裾も袂も涼しい風にはらめかせて、數知れぬ囁きの樣な水音に耳を澄した心地は長く／＼忘られぬであらう。南岸の崖の木々の葉は、その一片々々が光るかと見えるまで、無數の螢が集つてゐて、それが時を計つて、ポーッと一度に青く光る。川水も青く底まで透いて見える。と、一度にスッと暗くなる。また光る、また消える、また光る……。其中から、迷ひ出る樣に風に隨つて飛ぶのが、

上から下から、橋の下を滑り、上に立つ人の鬢を掠める。低く飛んだのが誤つて波頭に呑まれてその儘あへなく消えるものもある。
低くなつた北岸の川原にも、圓葉楊の繁みの其方此方、蒼く瞬く星を鏤めた其隈々には、暗に仄めく月見草が、しと／＼と露を帶びて、一團づつ處々に吹き亂れてゐる。
女兒等は直ぐ川原に下りて、キヤツ／＼と騷ぎ乍ら流れる螢を追つてゐる。智惠子は何がなしに、唯何がなしに橋の上にゐたかつた。其麼事は無い！　と否み乍らも、何がなしに、若しや、若しや、といふ朦乎した期待が、その通り路を去らしめなかつた。
今日一日の種々な心持と違つた、或る別な心持が、新しく智惠子の心を領した。そこはかとなき若い悲哀――手頼りなさが、消えみ明るみする螢の光と共に胸に往來して、他にとも自分にとも解らぬ、一種の同情が、自と呼吸を深くした。
幸福とは何か？　這麼考へが浮んだ。神の愛にすがるが第一だ、と自分に答へて見た。不圖智惠子は、今日一日全く神に背いて暮した樣な氣がして來た。『神に遁れる、といふ樣な事も有得るですね。』と、何時だつたか信吾の言つた言葉も思ひ出された。智惠子の若い悲哀は深くなつた。遂に讃美歌を歌ひ出した。
『…やーみ路をーてーらせりー、かーみはーあーいーなりー。』
「愛」といふ語が何がなく懷しかつた。そして又繰り返した。『…あーいーなりー…。』
下駄の音が橋に傳はつた。智惠子は鋭敏にそれを感じて、つと振返つた。が、待構へてでも居た樣に、不思議に動悸もしない。其人とは蟲が知らしたのだが…。

（三）

『日向樣ぢやありませんか？』恁う言つて、吉野は近づいて來た。
『まア、貴方で御座いましたか！　昨日は失禮致しました。』
『僕こそ。』と言ひながら、男は少し離れて鐵線の欄干に靠れた。『意外な所で又お目にかゝりましたね。貴女お一人ですか？』
『否、子供達に強請まれて螢狩に。貴方も御散歩？』
『え。少し酒を飲まされたもんですから、密乎逃げ出して來たんです。實に好い晩ですねえ！』
『えゝ。』
不圖話が斷れた、橋の下の川原には女兒等が無中になつて螢を追つてゐる。
智惠子は、胸を欄干に推當てた故か、幽かに心臟の鼓動が耳に響く。其間にも崖の木の葉が、光り又消える。
『貴女は、時々被來るんですか、此處等に？』
『否。…滅多に夜は出ませんですけれど。…今日は餘り暑かつたもんで御座いますから！』
『あゝ然うですか！』
話はまた斷れた。
『隨分澤山な螢で御座いますねえ！』と、今度は智惠子が言つた。
『えゝ、東京ぢや迚も見られませんわねえ。』
『左樣で御座いませうねえ。』
『あ、貴女は以前東京に被居たんですつてね？』
『えゝ。』
『餘程以前ですか？』
『六七年前まで御座います。』
『然うでしたか！』と、吉野はただ何か言はうとしたが、立ち入つた身の上の話と氣が附いて、それなり止めた。
二人は又接穗なさに困つた。そして長い事默してゐた。吉野は既う顏の熱りも忘られて、醉

ひ醒めの侘しさが、何がなしの心の望と戰つた。つい四五日前までは不見不知の他人であつた若い美しい女と、恁うして唯二人人目も無き橋の上に竝んでゐると思ふと、平生烈しい內心の壓迫を享け乍ら、遂今迄その感情の滿足を圖らなかつた男だけに、言ふ許りなき不安が、「男は死ぬまで孤獨だ！」といふ渠の悲哀と共に、胸の中に亂れた。

若しも智惠子が、渠の嘗て逢つた樣な近づき易い世の常の女であつたなら、渠は直ぐに強い懺悔の念を誘ひ起して自ら此不安から脱れたかも知れぬ。然し眼前の智惠子は、渠の目には餘りに淸く餘りに美しく、そして、信吾の所謂近代的女性で無いことを知つた丈に其不安の興奮が强かつた。自嘲の意が醉ひ醒めの侘しさを掻き亂した。艶かな洗髮を肩から背に波打たせて、凝と川原に目を落して、これも烈しく胸を騷がせてゐる智惠子の歴然と白い横顔を、吉野は不思議な花でも見る樣に眺めてゐた。

と、飛び交ふ螢の、その一つが、スイと二人の間を流れて、宙に舞ふかと見ると、智惠子の髮を辷つて襟に留つた。パッと青く光る。

「あ、」と吉野は我知らず聲を立てた。智惠子は顔を向ける。其拍子に螢は飛んだ。

「今螢が留つたんです、貴女の髮に。」

「まア！」と言つて、智惠子は暗ながら颯と顔を染めた。今まで男に凝視られてゐたと思つたので。

で、二人の目は期せずして其一疋の螢の後を追うた。フラ〳〵と頭の上に漂うて、風を喰つた樣に逆まに川原に逃げる。

「あれ、先生の方から！」と、子供の一人が其螢を見附けたらしく、下から叫んだ。

「あれ！　あれ！」

「先生！　先生！」と女兒等は騷ぐ、螢はツイと逸れて水の上を橫ざまに。

「先生！　下へ來て取つて下ンせ！」と一人が甘えて呼ぶ。

「今行きますよ。」と智惠子は答へた。下からは口を揃へて同じ事を言ふ。

「行つて見ませう！」と吉野が言つて欄干から離れた。

「は、參りませう。」

「御迷惑ぢやないんですか貴女は？」

「否、」と答へる聲に力籠つた。「貴方こそ？」

（四）

畦は足を濡く川原の石も、夜露を吸つて心地よく冷えた。處々に咲き亂れた月見草が、闇に仄かに匂うてゐる。その間を縫うて、二人はそこはかとなく小迷うた。

「その感想――孤獨の感想ですね。」と、吉野は平生の興奮した調子で語り續けてゐた。「大都會の中央の、轟然たる百萬の物音の中にゐて感ずる時と、恁うした靜かな村で感ずる時と、それア違ひますよ。矢張り何ですかね、新しい文明はまだ行き渡つてゐないんで、一歩都會を離れると、世界にはまだ〳〵ロマンチックが殘つてるんですね。畢竟夢が殘つてるんですね。」

「は！」

「夢を見る暇も無い都會の烈しい戰爭の中で、間斷なしの壓迫と刺戟を享けながら、切迫塞つた孤獨の感を抱いてる時ほど、自分の存在の意識の强い事はありませんね。それア苦しいですよ。苦しいけれど、矢張り新しい生活は其烈しい戰爭の中で營まれるんですね、……が、です、田舍へ來ると違ひます。田舍にはロマンチックが殘つてます。夢が殘つてます、敍情詩が殘つてます。先刻も一人歩いてゐて然う思つたんです、がこの靜かな廣い天地に自分は孤獨だ！と感じてもですね、それが何だか恁う、嬉しい

様な氣がするんです。切迫塞つた苦しい、意識を刺戟する感じでなくて、餘裕のある、敍情的な調子のある……畢竟周圍の空氣がロマンチックだから、矢張り夢の様な感じですね。……僕は苦しくつて堪らなくなると何時でも田舍に逃げ出すんです。今度も然うです、畢竟、僕自身にもまだロマンチックが澤山殘つてます。自分の藝術から言へば出來るだけそれを排斥しなきや不可い。然しそれが出來ない！ 抽象的に言ふと、僕の苦痛が其努力の苦痛なんです、そして結局の所――」と激した調子で續けて來て、「結局の所、何方が個人の生存――少くとも僕一個人の生存に幸福であるか解らない！」と聲を落した。

智惠子は眤と俯向いて、出來る丈け男の言ふ事を解さうと努めながら歩いてゐた。

「貴女は寂しい――孤獨だと思ふことがありますか？」と、突然吉野が問うた。

「御座います！」と、智惠子は低く、力を籠めて言つて、男の横顔を仰いだ。

『貴女は親兄弟にも友人にも言へない様な心の聲を何に發表されるんです？ 歌にですか、涙にですか？』

『神様に……』

「神様に！」と、男は鸚鵡返しに叫んだ。「神様に！ 然うですねえ、貴女には神があるんですねえ！ 僕にはそれが無い！ 以前にはそれを色彩と形に現せると思つてゐたんですが、又、實際幾分づつ現してゐたんですが、それがもう出來なくなつた。」と言ひ乍ら、吉野は無造作に下駄を脱ぎ裾を捲つて、ヒタ〳〵と川原の石に口づけてゐる淺瀨にザブ〳〵と入つて行く。

「モウパッサンといふ小説家は自己の告白に堪へかねて死んだと言ひますがねえ……ア、氣持が好い、怎うです、お入りになりませんか？』

「は。」と言つて智惠子は莞爾笑つた。そして、矢張り跣足になり裾を遠慮深く捲つて、眞白な脛の半ばまで冷かな波に沈めた。

「まア、眞個に……！」

吉野は膝頭の隱れる邊まで入つて行く。二人は暫し言葉が斷れた。螢が飛ぶ。子供らも二人の態を見て、我先にと裾を捲つて水に入つた。相對した彼岸の崖には、數知れぬ螢がパーッと光る。川の面が一面に燐でも燃える様に輝く。

「あれッ！」「あれッ、新坊さんが！」と魂消つた叫聲が女兒らと智惠子の口から迸しつた。五歳の新坊が足を淩はれて、呀といふ間もなく流れる。と見た吉野は、突然手を擧げて智惠子の自ら救はんとするを制した。

「大丈夫！」唯一言手早く尻をからげてザブザブと流れる子供の後を追ふ。子供は刻々中流へ出る、間隔は三間許りもあらう。水は吉野の足に絡る。川原に上つた子供らは聲を限りに泣き騷いだ。

（五）

川底の石は滑かに、流れは迅い。岸の智惠子が俄かの驚きに女兒等の泣き騷ぐも構はず、はらはらしてる間に、吉野は危き足を踏みしめて十二三間も夜川の瀨を追驅けた。波がザブ〳〵と腰を洗つた。

螢の光と星の影、處々に波頭の蒼白く飜へる間を、新坊はツブ〳〵と流れて行く。

ゲイと手を延ばすと、小い足が捉つた。

「大丈夫！」と吉野は聲高く呼んだ。

「捉りましたか？」と智惠子の聲。

「捉つた！」

吉野は、濡れに濡れて呼吸も絶えたらしい新坊の體を、無造作に拘擁へて川原に引返した。其處へ、騷ぎを聞いて通行の農夫が一人、提灯を下げて降りて來た。

「何したべ？　誰が死んだがナ？」
「何有、大丈夫！」と、吉野は水から上つた。
丁度橋の下である。
「新坊さん、新坊さん！」と智惠子は慌てゝ子供に手を添へて、「まア眞箇に！　怎うしませう！」と顫へてゐる。
「大丈夫ですよ。」と吉野は落着いた聲で言つて、子供の兩足を持つて逆樣に、小さい體を手荒く二三度振ると、吐出した水が吉野の足に掛つた。
女兒等は恐怖に口を噤んで、ブル〳〵顫へて立つてゐる。小いのはシク〳〵泣いてゐた。
「瀨が迅えだでなア！　これやはア先生許の子供だナ。」と、農夫は提灯を翳した。
と、吉野は手早く新坊の濡れた着衣を脫がせて、砂の上に仰向に臥せた。そして、それに跨る樣にして、徐々と人工呼吸を遣り出す。
可憐な小い顏を、提灯の火が薄く照らした。
智惠子は、シッカリと吉野の脫ぎ捨てた下駄を持つた手を、胸の上に組んで、口の中で何か祈禱をしながら、熱心に男のする態を見てゐた。
大きい螢が一疋、スイと子供の顏を掠めて飛んだ。
「畜生！」怎う言つて農夫がそれを拂つた。
「わア――」と、眠から覺めた樣な鈍い泣聲が新坊の口から洩れた。
「新坊さん！」と、智惠子は驚喜の聲を揚げて、矢庭に砂の上の子供に抱着いた。
「生きた！　生きた！」と女兒等も急に騷ぐ。
新坊の泣き聲も高くなつた。眼も開いた。
「死んだんぢやないんだよ、初めつから。」と、吉野もホッと安心した樣な顏を上げて、笑ひながら女兒等を見廻した。
「はア、大丈夫だ。」と農夫も安心顏。
「何とはア、此處ア瀨が迅えだで、子供等にや危ねえもんせえ。去年もはア……」と、暢氣に喋り立てる。
「わア――」と新坊はまた泣く。
「その着物を絞つて下さい、日向樣。イヤ、それより溫めてやらなくちや。」と、吉野は裙やら袖やら濡れた己が着物の帶を解いて、肌と肌、泣く兒をピッタリと抱いて前を合せる。
「私抱きませう。」と智惠子が言つた。
「構ひません。冷くて氣持が好いですよ。さ、もう泣かなくて可い、好い兒だ！　好い兒だ！……イヤ、怎うしてるよりや家へ歸つて寢かした方が好い。然う爲ませう日向樣！　此儘お送りしますから。溫めなくちや、惡い！」
「そンだ、其方が好うがんす。」と農夫も口を添へる。
「濟みません、貴方！」と、智惠子は心を籠めて言つて、「私がうつかりしてゐて這麼事になつて……」
「然うぢやない、僕が惡いんです。僕が先に川に入つて見せたんだから！」
「否、私……夢見る樣な氣持になつてゐて、つい……。」
その顏を、吉野はチラリと見た。

（六）

星影疎らに、川瀨の音も遠くなつた。熟した麥の香が、暗い夜路に漂うてゐる。
先に立つた女兒等の心々は、まだ何か恐怖に囚はれてゐて、手に手に小い螢籠を携へて、密々と露を踏んでゆく。譯もなく歔欷けてゐる新坊を、吉野は確乎と懷に抱いて、何か深い考へに落ちた態で、その後に跟いた。
智惠子は、片手に濡れた新坊の着物を下げて、時々心配顏に子供の顏を覗き乍ら、身近く吉野と肩を並べた。胸は感謝の情に充溢になつてゐる

て、それで、口に餘り利けなかつた。
『阿母様！』、新坊は思ひ出した様に時々呼んで、わアーと力なく泣く。
『もう泣かないの、今阿母様の處へ伴れてつて下さるわねえ、新坊さん、もう泣かないの。』と、智恵子は横合から頻に慰める。
『眞個に私、……貴方が被來らなかつたら、私は何したて御座いませう！』
『其麼事はありません。』
『だつて私、萬一の事があつたら、宿の小母さんに甚麼にか……』
『日向様。』と、吉野は重々しい調子で呼んだ。『僕は貴女に然う言はれると、心苦しいです。誰だつてあの際あの場處に居たら、あれ位の事をするのは普通ぢやありませんか？』
『だつて、此兒の生命を救けて下すつたのは、現在貴方ぢや御座いませんですか！』
『日向様。』と吉野は又呼んだ。『も少し眞摯に考へて見ませう……若しあの際、彼處に居たのが貴女でなくて別の人だつたらですね、僕は同じことを行るにしても、もつと違つた心持で行つたに違ひない。』
『まア貴方は、……』
『言つて見れば一種の僞善だ！』
然う言ふ顔を、智恵子は暗ながら眤と仰いだ。何か言はうとしても言へなかつた。
『僞善です！』と、男は自分を叱り附ける様に重く言つた。僕は今、自分の心が何物かに征服される様に感じてゐる。それから脱れようとして恁麼事を言ふのだ。『僞善です！　人が善といふ名の附く事をする、その動機は二つ有ります。一つは自分の感情の滿足を得る爲め、畢竟自分に甘える爲め、も一つは他に甘える爲めです。』
『貴方は――』と言ふより早く、智恵子の手は突然男の肩に捉まつた。烈しい感動が、女の全身に溢れた。強く〳〵其顔を男の二の腕に摩り附けて、
『貴方は……貴方は……』と言ひ乍ら、火の様な熱い涙が瀧の如く、男の肌に透る。
吉野は端と足を留めて、乾と脣を噛んだ。眼も堅く閉ぢられた。
『わアー――』と、驚いた様に新坊が泣く。
はしたない事をした、といふ感じが矢の如く女の心を掠めた。と、智恵子は、も一度『貴方は！』と迸しる様に言つて、肩に捉つた手を烈しく男の首に捲いた。
『先生！』と、五六間前方から女兒等が呼ぶ。
『行きませう！』と男は促した。
『は。』と云ふも口の中。身も世も忘れた態で、顔は男の體から離しともなく二足三足、足は男に縺れる。
『日向様！』と男は足を留めた。
『お許し下さい！』と絶え入る様。
『僕は東京へ歸りませう！』と言ふ目は眤と暗い處を見てゐる。
『……何故で御座います？』
『……餘り不思議です、貴女と僕の事が。』
『……』
『歸りませう！　其方が可い。』
『遣りません！』と智恵子は烈しく言つて、男の首を強く絞める。
『あゝ――』と吉野は唸る様に言つた。
『お、お歸りになりますまい、私のこ、心が……』
『日向さん！』と、男の聲も烈しく顫へた、『其言葉を、僕は、聞きたくなかつた！』
矢庭に二つの××××れた。熱した麥の香の漂ふ夜路に、熱かい×××××竊かに三度四度鳴つた。

（七）

其夜、母に呼ばれて母屋へ行つた靜子が、用

た濟まして再び庭に出て來た時は、もう吉野の姿が見えなかつた。植込の蔭、築山の上、池の畔、それとなく尋ね廻つて見たが、矢張り見えなかつた。

客は九時過ぎになつて歸つた。父の信之は醉倒れて了つた。お柳は早くから座を脱して寢てゐたが、

「靜や、吉野樣はもうお寢みになつたのかえ。」

「否、醉つたから散歩して來るつて出てらしつてよ。」

「何時頃？」

「二時間も前だわ。何處へ被行たでせう！」

「昌作さんとかえ？」

「否、お一人。松藏でもお迎ひにやつて見ませうか？」

「然うだねえ。」

「大丈夫だよ。」と言ひ乍ら、赤い顏をした信吾が入つて來た。

「彼奴の事だ、橋の方へでも行つてブラ／＼してるだらう。それより俺は頭が痛くて爲樣がないから、寢かして呉れよ。」

「お先に？」

「歸つたら然う言つて呉れ。そして床を延べて置いてくれ。あゝ醉つた！」

で、靜子は下女に手傳はして、兄を寢せ、座敷を片附けてから、一人離室に入つた。夜氣が濕りと籠つて、人なき室に洋燈が明るく照いてゐる。

一枚だけ殘して雨戸も閉め、散亂つた物を丁寧に片寄せて、寢具も布き、蚊帳も吊つた。不圖靜子は、智惠子さん許へ被行たのか知ら！といふ疑ひを起した。だつて、夜だもの。「然し。」「豈夫。」といふ考へが霎時胸に亂れた。

「それにしても奈何なすつたらう！」靜子は、何がなしに此室に居て見たい樣な氣がした。で、夏座蒲團を布いた机の前に坐つて、心持洋燈の火を細くした。

「秋になつたら私が此室にゐる樣にしようか知ら！」

机の上には、書が五六册。不圖其中に、黑い表紙の寫生帳が目に附いた。靜子は何氣なく其れを取つて、或所を披いた。

と、靜子の眼は輝いた。顏が染まつた。人なき室をキヨロ／＼と見廻して又それを熱心に見る。――鉛筆の走書の粗末ではあるが、書かれてあるのは擬ひもなく靜子自身の顏ではないか！

Erste Eindruck（第一印象）、と獨逸語で其上に書かれた。それは然し、何の事やら靜子には解らなかつた。

靜子は、氣がさした樣に、俄かにそれを閉ぢて以前の樣に書の間に重ねた。そして、逃げる樣に室を出た。心はそこはかとなく動いて、若々しい鼓動が頻りに胸を打つた。

次の頁にも、その次の頁にも、智惠子の顏の書かれてあることは、靜子は遂に知らなかつた。

間もなく庭に下駄の音がした。靜子は妙に躊躇つた上で、急いで又離室に來た。一枚殘した雨戸から、丁度吉野が上るところ。

「怎うも遲くなつちやつて。」

「否。お歸り遊ばせ。」

怎う云つたが、男の顏を見る事は出來なかつた。俯向いた顏は仄りと紅かつた。急いで洋燈を明るくする。

「實に濟みませんでした。這麼に遲くなる積りぢやなかつたんですが……」

「否、貴方。あの、兄はお酒を過して頭痛がすると言つて、お先に……」

「然うですか。僕は悉皆醒めちやつた。もう何時頃でせう？」

「十時、で御座いませう。」

吉野はどかりと机の前に坐つた。と靜子は、今し方自分が其處に坐つた事が心に浮んで、「お寢み遊ばせ。」と言ふより早く障子を閉めて、緣側に出た。吉野はグタリと首を垂れて眼を瞑つた。着衣はシットリと夜氣に萎えてゐる。裾やら袖やら、川で濡らした此着衣を、智惠子とお利代が強つて勸めて乾かして吳れたのだ。その間、吉野は誰の衣服を着てゐたか！

「智惠子！　智惠子！」と吉野の心は叫んだ。其處に額を密と左の二の腕に手を遣つて見た。其處に額を押附けて、智惠子は何と言つた!?

『貴方は‥貴方は‥‥‥！』

其十

（一）

吉野が新坊の命を救けた話は、翌朝朝飯の際に吉野自身の口から、簡單に話された。

同じ話がまた、前夜其場に行合せた農夫が、午頃何かの用で小川家の臺所に來た時、稍詳しく家中の耳に傳へられた。老人達は心から吉野の義氣に感じた樣に、それに就いて語つた。信吾と靜子は、顏にも言葉にも現されぬ或る異つた感じを抱かせられた。

昌作はまた、若しもそれが信吾によつて爲されれた事なら甚麼にか不愉快を感じたらうが、何がなしに蟲の好く吉野だつたので、その豪いことを誇張して繼母などに說き聞せた。そして、かの橋下の瀨の迅い事が話の起因で、吉野に對つて頻りに水泳に行く事を慫慂めた。昌作の吉野に對する尊敬が此時からまた加つた。

其翌日か翌々日、叔母と其子等は盛岡に歸つて行つた。この叔母は、數ある小川家の親戚の中でも、殊更お柳と氣心が合つてゐた。といふよりは、夫が非職の郡長上りか何かで、家が餘り裕かで無いところから、お柳の氣褄を取つては時々恁うして遣つて來て、その都度家計向の補助を得てゆくので。お柳は、松原からの緣談がもう一月の餘もバタリと音沙汰がないのを內々心配してゐたので、密かにこの叔母に相談した。女二人の間には人知れず何事かの手筈が決められた。叔母は素知らぬ顏をして歸つて了つた。

叔母を送つて好摩の停車場に行つた下男と下女は、新しい一人の人を小川家に導いて歸つた。それは外ではない、信之の次男、靜子とは一歲劣りの弟の、志郎といふ士官候補生だ。

志郎は兄弟中での腕白者、お柳の氣には餘り入らぬが、父の信之からは此上なく愛されてゐる。靜子と緣談の持上つてゐる松原家の三男の猾介とは少さい時からの親友で、一緒に陸軍に志し試驗も幸ひと同時に及第して士官學校に入つた。一日から二十日間の休暇を一週間許り仙臺に遊んで、確とした前知らせもなく歸つて來たのだ。

或る日、母のお柳は志郎を呼んで、それとなく松原中尉の噂を訊いて見た。その返事は少からずお柳を驚かせた。

『松原の政治か！　彼奴ア駄目だよ、阿母樣、猾介なんかも兄貴に絕交して遣らうなんて云つてゐた。』

『奈何してだい、それはまた？』

『奈何してつて、那麼馬鹿はない。それや評判が惡いよ、此年の春だつけかなア、下宿してゐた素人屋の娘を孕ませて大騷ぎを行つたんだよ。友人なんか仲に入つて百五十圓とか手切金を遣つたさうだ。那麼奴ア吾々軍人の面汚しだ。』

お柳は猶その話を詳しく訊いた上でその事は當分靜子にも誰にも言ふなと口留めした。

志郎は淡白な軍人氣質、信吾を除いては誰とも仲が好い、緩々話をするなんかは大嫌ひで、

毎日昌作と共に川にゆく、吉野とも親しんだ。――

常ならぬ物思ひは、吉野と信吾と靜子の三人の胸にのみ潜んだ。そして、三人とも出來るだけそれを顔に表さぬ樣に努めた。智惠子の名は、三人とも怎うしたものか成るべく口に出すことを避けた。

吉野は醫師の加藤と親しんで、寫生に行くと言つて出ては、重ねて其家を訪ねた。

智惠子は唯一度、吉野も信吾も居らぬ時に遊びに來たッ限であつた。

暑い〱八月も中旬になつた。螢の季節も過ぎた。明日は舊暦の盂蘭盆といふ日、夕方近くなつて、門口から嗄いだ聲を立てながら神山富江が訪ねて來た。

（二）

富江が來ると、家中が急に賑かになつて、高い笑聲が立つ。暑さ盛りをうつら〱と臥てゐたお祖母は今し方起き出して、東向の縁側で靜子に髮を結はしてる樣子。その縁側の邊から、富江の華かな聲が時々聞えてゐたが、何やら鋭く笑ひ捨てゝ、縁側傳ひに足音が此方へ來る。

信吾も晝寢から覺めた許り、不快な夢でも見た後の樣に、妙に燻んだ顔をして胡坐を搔いてゐた。富江の聲や足音は先刻から耳についてゐる。が、心は智惠子の事を考へてゐた。

或は一人、或は吉野と二人、信吾は此月に入つてからも三四度智惠子を訪ねた。二人の話はもう以前の樣に逸まなくなつた。吉野が來てからの智惠子は、何處となく變つた點が見える。されば と言つて別に自分を厭ふ樣な樣子も見せぬ。

かの新坊の溺死を救けた以來、吉野が一人で、或は昌作を伴れて、智惠子を訪ねることも、信吾は直ぐに感附いてゐた。二人の友人の間には何日しか大きい溝が出來た。信吾は苛々して不快な感情に支配されてゐる。

いつそ結婚を申込んでやらうか、と考へることがないでもない。が、信吾は左程までに深く智惠子を思つてるのでもないのだ。高が田舍の女教員だ！ といふ輕侮が常に頭にある。確乎した女だとも思ふ。確固した、そして美しい女だけに、信吾は智惠子をして他の男――吉野を思はしめたくない。何といふ理由なしに、自分には智惠子に思はれる權利でもある樣に感じてゐる。吉野を歸して了ふ工夫はないだらうか！ 一體那麽考へまでも時として信吾を惱ました。

そして又、靜子の吉野に對する素振も、信吾の目に快くはなかつた。總じて年頃の兄が年頃の妹の男に親しまうとするのを見るのは、樂しいものではない。平生戀といふものに自由な信條を抱いてる男でも、其麽場合には屹度自分の心の矛盾を發見する。

『戶籍上は兎も角、靜子はもう未亡人ぢやないか！』

信吾の頭には恁麽皮肉さへも宿つてゐる。これと際立つところはないが靜子が吉野の事といへば何より大事にしてゐる、それが唯癪に障る。理由もなく不愉快に見える。――

『まア、起きてらつしつたんですか！』と、富江は開け放した縁側に立つた。

『貴女でしたか！』

『オヤ、別の人を待つてゐたの？』

『ハッハハ。不相變不減口を吐く！ 暑いところを能くやつて來ましたね。』

『貴方が晝寢してるだらうから、起して上げようと思つて。』

『乾度神山さんが來ると思つたから、恁うしてチャンと起きて待つてたんですよ。』

『其麽事誰方から習つて？ ホホヽ、まア何と

いふ呆然した顏！　お顏を洗つて被來いな。」と言ひ乍ら、遠慮なく笑つた。

「敵はない、敵はない。それぢや早速仰せに從つて洗つて來るかな。」

「然うなさいな。もう日が暮れますから。」と言つて、無造作に其處に落ちてゐる小形の本を取る。

立ち上つた信吾は、「ア、其奴ア可けない。」と、それを取返さうとする。富江は素早く其手を遁げ頗らしい態をして、「何ですの、これ？　小說？」

黃ろい本の表紙には、『Three Loves』と書かれた、文科の學生などの間に流行つてゐる密輸入のアメリカ版の怪しい書だ。

「ハッハハ。」と信吾は手を引込ませて、「まア小說みたいなもんでせう。」

「みたいなナンテ……確乎教へたつて好いぢやありませんか？　私は讀めるんぢやなし……。」

「それが讀めたら面白いですよ。」と、信吾はニヤニヤ笑つてゐる。

「日向樣の眞似をして私も英語をやりませうか？」と言つて、富江は皮肉に笑つてる眼で男を仰いだ。

そして直ぐ何か思出した樣に聲を落して、「然う然う、信吾さん、面白い話がありますよ。」

「甚麼？」

「まアお顏を洗つてらつしやいな。」

（三）

顏を洗つて來た信吾は、氣も爽々した樣で、ニヤニヤ笑ひながら座についた。

「あら、貴方のお髭は洗つても落ちませんね。」

「冗談ぢやない。それより何です、面白い話といふのは？」

「詰らない事ですよ。」

「其麼に自重せなくつても可いぢやないですか？」

「其麼に聞きたいんですか？」

「貴女が言ひ出して置いた癖に。」

「ホホヽヽ。そんなら言ひませうか。」

「聞いて上げませう。」

「あのね……」と、富江は探る樣な目附をして、笑ひ乍ら眞正面に信吾を見てゐる。

信吾は、其話が乾度智惠子の事だと察してゐる。で、恁う此女に顏を見られると、操られる樣な、かつがれてる樣な氣がして、妙に紛らかす機會がなくなつた。

「何です？」と少し苛々した調子で言つた。

「ホホヽヽ。」と富江は又笑つた。「或人がね。」

「或る人ッて誰？」

「まア。」

「可し可し。その或る人が怎うしたんです？」

「あの方をね。」と離室の方を顋で指す。

「吉野を。」と信吾の眼尻が緊つた。

「ホホヽヽ。」

「吉野を怎うしたんです？」

「……ですとサ。ホホヽヽ。」

「豈夫？　神山樣の口には戸が閉てられない。」と言つて、何を思つてか膝を搖つて大きく笑つた。

目的が外れたといふ樣に、富江は急に眞面目な顏をして、「眞箇ですよ。」

「豈夫？　誰が其麼事言つたんですか？」

「矢張り聞きたいんでせう？」

「聞きたいこともないが……然し其奴ア珍聞だ。」

「珍聞？」と、また勝誇つた眼附をして、「貴方も餘程頓馬ね！」

「怎うして？」

「怎うしてだと！　ホホヽヽ。」と、持つてゐる書で信吾の膝を突く。

「それより神山さん、誰が其麼事言つたんです

か？」

「確かな所から。」

「然し面白いなア。ハッハハ。眞個だつたら實に面白い。可し〳〵、一つ吉野に揶揄つてやらう。」と、一人態と面白さうに言ふ。

「其麼に面白くつて？」

「面白いさ。宛然小說だ！」

「然うね。この話は誰より一番信吾さんに面白いの。ね、然うでせう？」

「それはまた、怎うした譯です？」

「ね、然うでせう？　然うでせう？」と、男を壓迫る樣に言つて、探る樣な眼を異樣に輝かした。そして、彈機でも外れた樣に、「ホヽヽ。」と笑つた。

「ハヽヽヽ。」と、信吾も爲方なしに笑つて、「實に雄辯家だな神山さんは！」

「雄辯家？　怎うせ然うよ。今の話も私が拵へただけだから！」

「否、其意味ぢやないんですよ。誰です、それを言つたのは？」

嬌態を嘲る樣に睨と見て、「矢張り氣に懸るわれ、信吾さん！」

「莫迦な！」と言つたが、女に自分の心を探られてゐるといふ不快が信吾の頭を掠めた。「それより奈何です、その吉野の方へ行つてみませんか？」

「行きませう。」

信吾はつと立つて緣側に出ると、「吉野君。」と大きく呼んだ。

「何だ？」と落着いた返事。

「晝寢してたんぢやないのか！　今神山さんが來たが、其方へ行つても可いか？」

「來たまへ。」

「行きませう。」と富江を促して、信吾は先に立つ。富江は何か急に考へる事でも出來た樣な顏をして、默つてその後に蹤いた。緣側傳ひ、蔭つた庭の植込に、蜩が鳴き出した。

（四）

今年の春の巴里のサロンの畫譜を披いて、吉野は何か昌作に說明して聞かしてゐた。一通りの挨拶が濟むと、富江はすぐ立つて、壁に立掛けてある書きかけの水彩畫を見る。信吾はゴロリと横になつて、その畫のことを吉野と語る。

「昌作さん。」と富江が呼びかけた。「貴方昨日町へ被行つて？」

「行つた。山内へ見舞に。」

「奈何でしたの、御病氣は？」と笑つてゐる。

「それや可哀想ですよ。寢たり起きたりだが、今年中に死ぬかも知れないなんて言つてるもの。」

「其麼に惡いかねえ。それや可哀想だ。何しろあの體だからなア。」と信吾は別に同情した風もなく言ふ。

「故國に歸るさうだ、四五日中に。」

「昌作さん。」と富江は又呼んだ。そして急しく吉野と信吾の顏を見廻して、「好い物上げませうか、貴方に？」

「何です？」

「好い物なら僕も貰ひたいな。」

「信吾さんにはいや。ねえ昌作樣、上げませうか？」

「何だらうな！」と昌作は躊躇する。

「二人が喧嘩しちや可けないから僕が貰ひませうか？」と吉野は淡白に笑ふ。

「ねえ昌作さん、貴方にも見せなくちや可けませんよ。」

「可し、志郎と二人で見る。」

「否、貴方一人で見なくちや可けないの。」と言ひながら、富江は何やら袂から出して、掌に忍ばせて昌作に渡す。

呂作は極り惡るさうにそれを受けた。そして、『可し、可し。』と言ひながら庭下駄を穿いて、『オイ、志郎！　好い物があるぞ。』と聲高に母屋の方へ行く。

『あら可けませんよ、人に見せちや。』と富江は其後ろから叫んで、そして、面白さうにホヽヽ、と笑つた。

　二人は好奇心に囚はれた。『何です、何です？』と信吾が言ふ。

『何でもありませんよ。』と、澄し返つて、吉野の顏をちらと見た。

『怪しいねえ、吉野君。』

『ハッハハ。』

『豈夫！　信吾さんたら眞箇に人が惡い。』と何故か富江は少し愼しくしてゐる。

其處へ、色のいゝ甜瓜を盛つた大きい皿を持つて、靜子が入つて來た。『餘り甘味くないんですけれど…………』

『何だ？　甜瓜か！　赤痢になるぞ。』と信吾が言つた。

『マ　兄樣は！』と言つて、『眞箇でせうか　神山樣、赤痢が出たつてのは？』

『眞箇には眞箇でせうよ。隔離所は三人とか收容したつてますから。ですけれど大丈夫ですわねえ、餘程離れた處ですもの。』

『ハヽヽ。神山さんが大丈夫ッてのなら安心だ。早速やらうか。』と信吾が最先に一片摘む。

　縁側に、裾短かの筒袖を着た志郎と呂作が入つて來た。

『やア志郎さん、今迄晝寢ですか？』と吉野が手巾に手を拭き乍ら言つた。

『否。僕は晝寢なんかしない。高畑へ行つて號令演習をやつて來て、今水を浴つたところです。』

『驚いた喃。君は實に元氣だ！』

　呂作は何か亢奮してる態で、肩を聳かして胡坐をかいた。

『何だい彼物は、呂作さん？』と信吾が訊く。

『莫迦だ喃！』と呂作は呟く樣に言つて、昵と眼鏡の中から富江を見る。『然し俺は山内に同情する。』

　富江は笑ひながら、『あら可けませんよ、此處で喋つては。』

『僕も見た。』と志郎が口を入れた。『オイ呂作さん、皆に報告しようか？』

『言へ、言へ。何だい？』と信吾は弟を唆かす。　呂作は默つて腕組をする。

『言はう。』と志郎は快活に言つて、『あれは肺病で將に死せんとする山内謙三の艶書です。終り。』

『まア、志郎さんは酷い！』と、流石に富江も狼狽する。

『艶書？』と、皆は一度に驚いた。

『それが怎うしたの、志郎さん！』と靜子が訊く。

　呆れてゐる信吾の顏を富江は烈しい目で凝視めてゐた。

其十一

（一）

　前日に富江が來て、急に夕方から歌留多會を開くことになり、下男の松藏が靜子の書いた招待狀を持つて町に馳せたが、來たのは準訓導の森川だけ。智惠子は病氣と言つて不參。到頭肺病になつて了つた山内には、無論使者を遣らなかつた。

　智惠子の來なかつたのは、來なければ可いと願つた吉野を初め、信吾、靜子、さては或る計畫を抱いてゐた富江の各々に、歌留多に氣を逸ませなかつた。其夜は詰らなく過ぎた。

　靜子の生涯に忘るべからざる盆の十四日の

日は、晴々と明けた。風なく、雲なく、麗かな靜かな日で、一年中の愉樂を盆の三日に盡す村人の喜悅は此上もなかつた。

村に禪寺が二つ、一つは町裏の寶德寺、一つは下田の喜雲寺、何れも朝から村中の善男善女を其門に集めた。靜子も、母お柳の代理で、養祖母のお政や子供等と共に、午前のうちに參詣に出た。

その歸路である。靜子は妹二人を伴れて、寶德寺路の入口の智惠子の宿を訪ねた。智惠子は、何か氣の退ける樣子で迎へる。

「怎うなすつたの、智惠子さん？　風邪でもお引きなすつて？」

「否、今日は何とも無いんですけれど、昨晚丁度お腹が少し變だつた所でしたから……折角お使を下すつたのに、濟みませんでしたわねえ。」

「心配したわ、私。」と、靜子は眞面目に言つた。「貴女が被來らないもんだから、詰らなかつたの歌留多は。」

「あら其麼事は有りませんわ。大勢被行つたでせう、神山さんも？」

「けどもねえ智惠子さん、怎うしたんだか些とも氣が進まなかつてよ。驚いたのは富江さん許り……可厭ねあの人は！」

「……那麼人だと思つてれヤ可いわ。」

靜子は、その富江が山内の艶書を昌作に吳れた事を話さうかと思つたが、何故か二人の間が打解けてゐない樣な氣がして、止めて了つた。

三十分許り經つて暇乞をした。

二人は相談した樣に、吉野のことは露程も口に出さなかつた。

靜子が家へ歸ると、信吾は待ち構へてゐたといふ風に自分の室へ呼んで、そして、何か怒つてる樣な打切棒な語調で、智惠子の事を訊いた。靜子は有の儘に答へた。

「然うか！」と言つた信吾の態度は、宛然、其麼事は聞いても聞かなくても可いと言つた樣であつたが、靜子は征矢の如く兄の心を感じた。そして、何といふ事なしに、「兄樣に宜しくと言つてよ、智惠子樣が！」と言つて見た。智惠子は何とも言つたのではないが。

「然うか！」と、信吾は又卒氣なく答へた。そして、晝飯が濟むと、フラリと一人出て、町へ行つた。

信吾が出かけて間もなくである。月の初めに子供らを伴れて來た盛岡の叔母が、見知らぬ一人の老人を伴れて來た。叔母は墓參の爲めと披露した。連の男は松原家から賴まれて來たのだとは直ぐ知れた。言ふまでもなく靜子の緣談の事で。

父の信之、祖父の勘解由、母お柳、その三人と松原家の使者とは奧の間で話してゐる。叔母も其席に出た。靜子は今更の樣に胸が騷ぐ。兄の居ないのが恨めしい。若しや此話から、自分と死んだ浩一との事が吉野に知れはしないかと思ふと、その吉野にも顏を見せたくなかつた。

室に籠つたり、臺所へ行つたり、庭に出たり、兎角して日も暮れかゝつた。信吾はそれでも歸つて來ない。夕方から一緒に盆踊を見に行く筈だつたのだが。

晩餐の時、媒介者が今夜泊るのだと叔母から話された。信吾は全く暗くなつても歸らぬ。母お柳の勸めで、兄とは町へ行つて逢ふことにして、靜子は吉野と共に、妹達や下女を伴れて踊見物に出ることになつた。

（二）

丁度鶴飼橋へ差掛つた時、圓い十四日の月がゆら〳〵と姬神山の上に昇つた。空は雲一片なく穩かに晴れ渡つて、紫深く黝んだ岩手山が、くつきり夕照の名殘の中に浮んでゐる。

仄りと暗い中空には、弱々しい星影が七つ八つ、青ざめて瞬いてゐた。月は星を呑んで次第次第に高く上る。町からはもう太鼓の響が聞え出した。

たとひ何を言つたとて妹共には解る筈がない。吉野と肩を竝べて歩みを運ぶ靜子の心は、言ふ許りなく動悸いてゐた。家には媒介者が來てゐる。松原との緣談は靜子の絕對に好まぬ所だ、その話の成行が恁うして歩いてゐ乍らも心に懸らぬではない。否、それが心に懸ればこそ、靜子は種々の思ひを胸に疊んだ。

—若し此人（吉野）が自分の夫になる人であつたら！　否、若し此人が現在自分の夫であつたら！—

月明かに靜かな四邊の景色と、遠い太鼓の響とは、靜子の此心持に適合しかつた。靜子は妹共の罪なき言葉に吉野と聲を合して笑ひ乍ら、何がなき心强さと嬉しさを禁ずることが出來なかつた。よし何事が次いで起らなかつたにしても、靜子は此夜の心持を忘れる事は出來ぬであらう。

松原からの緣談は、その初め、當の對手の政治に對する嫌惡の情と、自分が其人の嫂であつたことに就ての、道德的な考へやら或る侮辱の感やらで、靜子は兄に手賴つて破談にしようとした。が、一度吉野を知つてからの靜子は、今迄の理由の外に、も一つ、何と自分にも解らぬが、兎にも角にも心の底に强い賴みが出來た。

丁度橋の上に來た時である。

—此處で御座いましたわねえ、初めてお目に懸つたのは！—

恁う靜子は憚々しく言つてみた。月は其夢みる樣な顏を照した。

—然うでしたねえ！—と吉野は答へた。そして、何か思出した樣に少し俯向いて默つた。

その態度は、乾度あの時の事を詳しく思ひ出してるのだと靜子に思はせた。靜子も强ひて其時の事を思ひ出して見た。二人が今、互ひに初めて逢つた時を思ひ出してるといふ感が、女の心に言ふ許りなき滿足を與へた。

が、吉野の胸にあつたのは其事ではなかつた。渠は、信吾が乾度智惠子の家にゐると考へた。そして今自分らが訪ねて行つたら、何と信吾が譃を吐いて、夕方までに歸らなかつた申譯をするだらうと想像してゐた。

町に入ると、常ならぬ華やかな光景が、土地慣れぬ吉野の目に珍しく映つた。家々の軒には、怪し氣な畫や、豐年滿作などの字を書いた古風の行燈や提灯が揭げてある。街路の兩側には、門々に今を盛りと樺火が焚いてある。其赤い火影が、一筋町の賑ひを樂しく照して、晴着を飾つた往來の人の顏が何れも〳〵醉つてゐる樣に見える。

町は樂し氣な密語に充ちた。寄太鼓の音は人人の心を誘ふ。其處此處に新しい下駄を穿いた小兒らが集つて、樺火で煎餅などを燒いてゐる。火が爆ぜて火花が街路に散る。年長な小兒らは勢ひ込んで其列んだ火の上を跳ねてゆく。丁度夕餉の濟んだところ。赤い着物を着て女兒共は打ち連れて太鼓の音を的にさゞめいて行く。

町も端れの智惠子の宿の前には、消えかゝつた樺火を取卷いて四五人の小兒等がゐた。梅ちやん！　梅ちやん！—と妹共が先づ驅け寄る。其後から靜子は、—梅ちやん、先生は？—と優しく言ひながら近づいた。

靜子は直ぐ氣が附いた。梅ちやんの着てゐる紺絣の單衣、それは嘗て智惠子の平常着であつた！

あな我が君のなつかしさよ、
まみゆる日ぞまたるる。
君は谷の百合、峰のさくら、
うつし世にたぐひもなし。

家の中からは幽かに讃美歌の聲が洩れる。信吾は居ない！　恁う吉野は思つた。
「先生！　先生！」と、梅ちゃんは門口から呼ぶ。

（三）

智惠子に訊くと、信吾は一時間許り前に歸つたといふ。
『まア何處へ行つたんでせうねえ。夕方までに歸つて、私達と一緒に又出かける筈でしたのよ。これから何處へ行くとも言はなかつたんでせうか？』
「否、何んとも、別に。」と言つて、智惠子は意味ありげに、目で吉野を仰いで、そして俯向いた。
『歩いてゐたら逢ふでせうよ。』と吉野は鷹揚に言つた。「恁うです、日向さんも被行いませんか、盆踊を見に？」
「はア……まアお茶でも召し上つて……」
「直ぐ被行いな、智惠子さん。何か御用でも有つて？」と靜子も促す。
「否。」
「行きませう！　僕は盆踊は生れて初めてなんです。」と、吉野はもう戸外へ出る。

で、智惠子は一寸奧へ行つて、帶を締直して來て、一緒に往來に出た。
樺火は少し頽れた。踊がもう始まつたのであらう、太鼓の音は急に高くなつて、調子に合つてゐる。唄の聲も聞える。人影は次第々々にその方へながれて行く。
提灯を十も吊した加藤醫院の前には大束の薪がまだ盛んに燃えてゐて、屋内は晝の如く明るく、玄關は開け放されてゐる。大形の染の浴衣に水色縮緬をグル〳〵巻いた加藤を初め、清子、藥局生、下女、皆玄關に出て往來を眺めてゐた。
『やア、皆樣お揃ひですナ。』と、加藤から先づ聲をかける。
『お涼みですか。』と吉野が言つて、一行はゾロゾロと玄關に寄つた。
『Guten Abend, Herr Yosino！ハハヽヽ。』と、近頃通信教授で習つてるといふ獨逸語を使つて、加藤は肥つた體を搖ぶる、晩酌の後で殊更機嫌が可いと見える。
「さ、まアお上りなさい、屹度被來ると思つたからチャンと御馳走が出來てます。』
「それは恐れ入つた。ハハヽヽ。」
傍では、靜子が兄の事を訊いてゐる。
「先刻一寸被行つて、直にまた來ると被仰つて直ぐお歸りになりましたわ。」と清子が言つた。
「うん、然う〳〵。」と加藤が言つた。「吉野さん、愈々盆が濟んだら來て頂きませう。先刻信吾さんにお話したら夫れは可い、是非書いて貰へと被仰つてでしたよ。是非願ひませう。』
「小川君にお話しなすつたですか！　僕は何日でも可いんですがね。」
『眞箇に、小川さんに被居るよりは御不自由でも被居いませうが、お書き下さるうちだけ是非何卒……」と清子も口を添へる。そして靜子の方を向いて、
『あの、何ですの、宅があの阿母樣の肖像を是非吉野さんに書いて頂きたいと申すんで、それで、お書き下さる間、宅に被行つて頂きたいんですの。」
「大丈夫、靜子さん。」と加藤が口を出す。「お客樣を横取りする譯ぢやないんです。一週間許り吉野さんを拜借したいんで……直ぐお返ししますよ。」
「ホヽヽ、左樣で御座いますか！』と愛想よく言つたものの、靜子の心は無論それを喜ばなかつ

った。
　吉野は無理矢理に加藤に引張り込まれた。女連は霎時其處に腰を掛けてゐたが、軈て清子も一緒になつて出た。
　町の丁度中程の大きい造酒家の前には、往來に盛んに篝火を焚いて、其周圍、街道なりに楕圓形な輪を作つて、踊が初まつてゐる。輪の内外には澤山の見物。太鼓は四挺、踊子は男女、子供らも交つて、まだ始まりだから五六十人位である。太鼓に伴れて、手振り足振り面白く歌つて廻る踊には、今の世ならぬ古色がある。揃ひの浴衣に花笠を被つた娘等もある。編笠に顏を隱して、醉つた身振りの可笑しく、唄も歌はず踊り行く男もある。月は既に高く上つて、樂し氣に此群を照した。女連は、睦し氣に語りつ笑ひつし乍ら踊を見てゐた。
　と、輕く智惠子の肩を叩いた者があつた。靜子清子が少し離れて誰やら年增の女と挨拶してる時。

（四）

　振向くと、何時醫院から出て來たか吉野が立つてゐる。
「あら！」智惠子は恁う小聲に言つて、若い血が顏に上つた。何がなしに體の加減が良くないので、立つてゐても力が無い。幾挺の太鼓の強い響きが、腹の底までも響く。——今しもその太鼓打が目の前を過ぎる。
　吉野は無邪氣に笑つた。
　二人は並んで立つた、立並ぶ見物の後ろだから人の目も引かぬ。
（私ーとーー）と、好い聲で一人の女が音頭をとる。それに續いた十人許りの娘共は、直ぐ聲を合せて歌ひ次いだ。——

（——お前ーはーア御門ーのーとびーらー
ア、朝ーにーイわかーれーてエ、ー晩に逢ふ——）

　同じ樣な花笠に新しい浴衣、淡紅色メリンスの襷を端長く背に結んだ其娘共の中に、一人、脊の低い肥つたのがあつて、高音中音の冴えた唄に際立つ次中音の調子を交へた。それが態と道化た手振りをして踊る。見物は皆笑ふ。
　ドドドンと、先頭の太鼓が合を入れた。續いた太鼓が皆それを遣る。調子を代へる合圖だ。踊の輪は淀んで唄が止む、下駄の音がゾロ〱と縺れる。
（ドドドコドン、ドコドン——）と新しく太鼓が鳴り出す。——ヨサレ節といふのがこれで。
——淀んだ輪がまたそれに合せて踊り初める。何處やらで調子はづれた高い男の聲が、最先に唄つた——

（ヨサレー茶屋のかーア、花染ーのーーたすーきーーイーー）

「面白いですねえ。」と、吉野は智惠子を振返つた、「宛然古代に歸つた樣な氣持ちやありませんか！」
「えゝ。」智惠子は踊にも唄にも心を留めなかつた樣に、何か深い考へに落ちた態で懶まし氣に立つてゐた。
　と見た吉野は、「貴女何處かまだ惡いんぢやないんですか？　お體の加減が。」
「否、たゞ少し……」
　俄かに見物が笑ひどよめく。今しも破蚊帳を法衣の樣に纏つて、顏を眞黑に染めた一人の脊の高い男が、經文の眞似をしながら巫山戲て踊り過ぎるところで。
「吉野さん！」智惠子は思ひ切つた樣に恁う囁いた。
「何です？」
「あの……」と、眤と俯向いた儘で、「私今日、あの、困つた事を致しました！」
「……何です、困つた事ツて？」

智惠子は不圖顏を上げて、何か辛さうに男を仰いだ。『あの、私小川さんを憤らして歸してよ。』

『小川を!? 怎うしたんです?』

『そして、瞭然言つて了ひましたの。……貴方には甚麽に御迷惑だらうと思つて、後で私……』

『解りました、智惠子さん!』怎う言つて、吉野は強く女の手を握つた。『然うでしたか!』と、がつしりした肩を落す。

智惠子はグンと胸が迫つた。と同時に、腹の中が空虛になつた樣でフラ〳〵とする。で男の手を放して人々の後に蹲んだ。

目の前には眞黑な幾本の足、彼方の篝火がその間から見える。――智惠子は深い谷底に一人落ちた樣な氣がして涙が溢れた。

『あら、先刻から彼來つて?』と後ろに靜子の聲がした。

吉野の足は一二尺動いた。

『今來た許りです。』

『然うですか! 兄は怎うしたんでせう、今方々探したんですけれど。』

『學校ですと、乾度。』と淸子が傍から言ふ。

『すや、日向さんは?』と、靜子は周圍を見廻す。

智惠子は立ち上つた。

『此處にいらしつたわ!』

『立つてると何だかフラ〳〵して、私蹲んでゐましたの、先刻から。』

『然う! まだお惡いんぢやなくつて。』と靜子は思ひ遣り深い調子で言つた。そして(惡いところをお誘ひしたわねえ)(家へ歸つてお寢みなすつては?)と、同時に胸に浮んだ二つの言葉は、何を憚つてか言はずに了つた。

『何處かお惡くつて?』と、淸子は醫師の妻。

『否、少し……も少し見たら私歸りますわ。』

（五）

さうしてる間にも、淸子は嫁の身の二三度家へ行つて見て來た。その度、吉野に來て一杯飮めと加藤の言傳てを傳へた。

信吾は來ない。

月は高く昇つた。其處此處の部落から集つて來て、太鼓は十二三梃に增えた。笛も三人許り加つた。踊の輪は長く〳〵街路なりに楕圓形になつて、その人數は二百人近くもあらう。男女、事々しく裝つたのもあれば、平常服に白手拭の頰冠をしたのもある。十歲位の子供から、醉の紛れの腰の曲つたお婆さんに至るまで、夜の更け手足の疲れるも知らで踊る。人垣を作つた見物は何時しか少くなつた。――何れも皆踊の輪に加つたので――二箇所の篝火は赤々と燃えに燃える。

月は高く昇つた。

強い太鼓の響き、調子揃つた足擦れの音、華やかな、古風な、老も若きも戀の歌を歌つてゐる此境地から、不圖目を上げて其靜かな月を仰いだ心持は、何人も生涯に幾度となく思浮べて、飽かずも其甘い悲哀に醉はうとするところであらう。――殊にも此夜の智惠子は思ふ人と共にゐる樂みと、體內の病苦と、咬る樣な素朴な烈しい戀の歌と、そして、何かなき賴りなさに心が亂れて、その沈んで行く氣持を強い太鼓の響に搔き亂される樣に感じながら、踊には左程の興もなく、心持眉を顰めては、眤と月を仰いでゐた。

怒りと嘲りを浮べた信吾の顏が、時々胸に浮んだ。智惠子は、今日その信吾の厚かましくも言ひ出でた戀を、小氣味よく拒絕して了つたのだ。

立つたり蹲んだりしてる間に、何がなしに腹が脹つて來て、一二度輕く嘔吐を催すやうな氣分にもなつた。早く歸つて寢よう、と幾度か思

つた。が、この歡樂の境地に——否、靜子と共に吉野を一人置いて行くことが、矢張り快くなかつた。居たとて別に話——智惠子は今日の出來事を詳しく話したかつた——をする機會もないが、矢張り一寸でも長く男と一緒にゐたかつた。

軈て、下腹の底が少しづつ痺れる樣に痛み出した。それが段々烈しくなつて來る。隙を見て、智惠子は思ひ切つてつと男の傍へ寄つた。

「私、お先に歸ります。」

「其麽に惡くなりましたか？」

「少し……少しですけれどもお腹がまた痛んでくる樣ですから。」

「可けませんねえ！　怎うです加藤さんに被行つたら？」

「否、ホンの少しですから……あの、明日でも被來つて下さいませんか？　何卒。」

「行きます、是非。」と言つて、吉野は強く女の手を握つた。女も握り返した。

「好い月ですわねえ！」

智惠子は猶去り難げに恁う言つた。そして、皆にも挨拶して一人宿の方へ歸つてゆく。月を浴びた其後姿を、吉野は少し離れた所に佇んで、遠く見送つてゐた。

智惠子は痛む腹に力を入れて、堅く齒を喰縛りながら、幾回か後ろを振返つた。町の賑ひは踊の場所に集つて、十間離れたらもう人一人ゐない。霜の置いたかと許り明るい月光に、所々篝火の跡が黒く殘つて、軒々の提灯や行燈は半ば消えた。

天心の月は、智惠子の影を短く地に印した。太鼓の音と何十人の唄聲とは、その月までも屆くかと、風なき空に漂うてゆく。——華やかな舞樂の場から唯一人歸る智惠子は、急に己が宿が厭になつた。

と言つて、足は矢張り宿の方へ動く。追つて來てくれぬ男を怨めしくも思つた。あの人が東京へ歸ると、屹度今夜のことを手紙に書いて寄越すだらうとも思つた。そして、二人の間に取交された約束が、唯一生忘るまいといふ事だけなのを思つて、智惠子は今夜といふ今夜、初めて切實に、それだけでは物足らぬことを感じた。智美子も女である。力強き男の腕に抱かれたら、あはれ、腹の痛みも忘れようものを！

二町許り來る、と智惠子は俄かに足を早めた。不圖、怺へきれぬ程に便氣を催して來たので。

（六）

程なく吉野や靜子等も歸路に就いた。信吾には遂に逢はなかつた。吉野は智惠子の病氣の氣に懸らぬではないが、寄つて見る譯にも行かぬ。

それから小一時間も經つた。

富江の宿の裏口が開いて、月影明るい中へヒョクリと信吾が出た。續いて富江も出た。

「好い月！」恁う富江が言つた。信吾は自ら嘲る樣な笑ひを浮べて、些と空を仰いだが別に興を催した風もない。ハヽ、と輕く笑つた。

太鼓の響と唄の聲が聞える。四邊は森として、何處やらで馬の強く立髮を振る音。

「一寸、其麽に濟まさなくたつて可いわよ。」

「疲れた！」と、信吾は低く呟く樣に言つた。

「マ酷い！　散々人を虐めて置いて。」

「ハヽヽ。おや左樣なら！」

「一寸々々、眞箇よ明日の晩も。」

「ハヽヽ。」と男は妙に笑つてスタ〳〵と歩き出す。富江は家へ入つた。

人なき裏路を自棄に急ぎながら、信吾は淺猿しき自嘲の念を制することが出來なかつた。少し下向いた其顏は不愉快に堪へぬと言つた樣に

曇つた。
『莫迦！』と聲に出して罵つた。それは然し誰に言つたのでもない。
　信吾の心が生れてから今日一日ほど動搖した事がない。また今日一日ほど自分で見識を下げたと思つたことはない。彼は智惠子を訪ふと、初めは盛んに氣焰を吐いた。現代の學者を糞味噌に罵倒し盡し、言葉を極めて美術家仲間の內幕などを攻撃した。そして甚麼話の機會からか、智惠子を口說いてみた。彼は有らゆる美しい言葉を竝べた、女は眤と俯向いてゐた。
　最後に信吾は言つた。
『智惠子さん、貴女は哀れな僕の述懷を、無論無意味には聞いて下さらないでせうね？』
『……』
『智惠子さん！』と、情が迫つたといふ樣に聲を顫した。『僕は貴女から何も報酬を望むのではありません。智惠子さん、唯、唯、です、僕は貴女から、僕が常に貴女の事を思つても可いと許して頂けば可いんです、それだけです。それさへ許して頂けば、僕の生涯が明るくなります……』
『小川さん！』と女は屹と顏をあげた。其顏は眉毛一本動かなかつた。『私の樣なもののことを然う言つて下さるのはそれや有難う御座いますけれど。』
『は?!』
『何卒その事は二度と仰しやつて下さらない樣にお願ひします。』
　信吾は眤と腕を組んだ。
『失禮な事を申す樣ですが……』
『ウ、……何故でせう？』
『……別に理由はありませんけれど……。』
『あゝ、貴女には僕の切ない心がお解りにならないでせう！』と、さも落膽した樣に言つて、『然しです、何か理由が、然う被仰るからには有らうぢやありませんか？　それを話して頂く譯にいかないんですか？』
『……』
『智惠子さん！　僕がこれだけ恥を忍んで言つたのに、理由なくお斷りになるとは餘りです、餘りに侮辱です。』
『ですけれど……』
『そんならです。』と、信吾は今迄の事は忘れて新らしい仇の前にでも出た樣に言つた。其眼は物凄く輝いた、『僕は唯一つ聞かして頂きたい事があります。智惠子さん、怎うでせう、聞かして下さいますか？』
『……私の知つてをります事ならそれは……』
『無論御存じの事です。』と信吾は肩を聳かした。『話は全然別の事です。僕は僕の一切を犧牲にして、友人たる貴女と吉野の幸福を祝ひます。』
　智惠子は胸を刺されたやうにピクリとした。然し一寸も動かなかつた。顏色も變へなかつた。
『怎うです。』と男は更に突込んだ。『貴女は僕の祝ひを享けて下さいますか、それを聞かして下さい。』
『……』
『僕は今言つた事を凡て取消して、友人としての眞心からお二人の爲に祝ひます。怎うです、享けて下さいますか？』
『……』
『何卒享けて下さい！』と信吾は毒々しく迫る。
　智惠子の顏はクヮッと許り紅くなつた。そして、『有難う御座います。』と明かに言放つた。

（七）

　智惠子の宿から出た信吾の心は、強い屈辱と憤怒と、そして、何かしら弱い者を虐めてやつた時の樣な思ひに亂れてゐた。怎うなると彼

は、今日自分の遣つた事は、豫ての企んで遣つたので、それが巧く思ふ壺に嵌つて智惠子に自白させたかの樣に考へる。我と我を瞞まうとする心を、強ひて其麼風に考へて抑へて見た。

信吾は、成るべく平靜な態度をして、その足で直ぐ加藤醫院を訪ね、學校を訪ねた。彼は夕方までに歸つて、吉野や妹共と一緒に蹈を見物に出る約束を忘れてはゐなかつた。が、何の意味もなく、フンと心で笑つてそれを打消した。

其時の信吾は、平常よりも餘程機嫌が好い樣に見えた。然し彼は、詰らぬ世間話に大口を開いて笑へば笑ふ程、何か自分自身を嘲つてる樣な氣がして來て、心にも無い事を一口言へば一口言ふ丈、胸が苛立つて來る。高い笑聲を發して、彼は遂に學校から飛び出した。

もう日暮近い頃であつた。

自嘲の念は烈しく頭を亂した。何故那麼事を言つたらう？ 莫迦な、もう智惠子の顏を見ることが出來なくなつた！ と彼は悔いた、何故もつと早く、——吉野の來ないうちに言はなかつたらう?!

『畜生奴！ 到頭白状させてやつた。』恁う彼は口に出して言つて見た。が、矢張り彼は女から享けた拒絶の恥辱を、全く打消すことが出來なかつた。よし彼女を免職させる樣にしてやらうか！ 否、それよりは何うかして吉野を追拂はう！

彼の心は荒れに荒れた。町端れから舟綱橋まで、國道を七八町滅茶苦茶に歩いて、そして、恐ろしい復讐を企てながら歸るともなく歸つて來た。が、彼は人に顏を見られたくない。町端れから又引返して、今度は舊國道を門前寺村の方へ辿つた。

月が昇つた。

途斷れ〲に、町へ來る近村の男女に會つた。彼は然しそれに氣がつかぬ。何時しか彼は吉野との友情を思ひ出してゐた。

『何有！ 知らん顏をしてゐればそれで濟む。豈夫智惠子が言ひは爲まい。』と彼は少し落着いて來た。

『然し、』と彼は又しても吉野が憎くなる。『あの野郎奴、（有難う御座います。）とはよくも言ひやがつた！』

信吾の憤りは再發した。（有難う御座います。）その言葉を幾度か繰返して思ひ出して、遂に、頭髮を搔き挘りたい程腹立たしく感じた。

そして、彼の癖の、ステッキを強く揮つて、自暴にヒュウと空氣を切つた。

『信吾さん！』と女の聲。彼は驚いた樣に顏を上げると、富江が白地の浴衣に月影を滴らせて、近づいて來る。草履を穿いてるのか足音がしない。

『あ、神山さんでしたか！』と一寸足を留めて、直ぐまた歩き出さうとする。

『まア、何處へ被行るの？』

答もせずに信吾は五六歩歩いて、そしてクルリと自暴に體を向直した。

『ハヽヽ。何處へ行つたんです貴女こそ？』

『生徒の家へ招待れて、門前寺の……一人で散歩するなんて氣が利かないぢやありませんか、貴方は！』

『貴女だつて一人ぢやないか！』

『ホヽヽ。どうして智惠子樣を誘つて上げなかつたの？』

『莫迦な！』

『あら。月夜の散歩にはハイカラさんの手でも曳かなくちや詰らないぢやありませんか？ 眞個に！』

『何を言ふんです。』と信吾は苛々しく言つた。

そして、突然富江の手を取つて、『僕は貴女の迎ひに來たんだ！』

『まア巧い事を！』と、富江は左程驚いた風もなく笑つてゐる。

信吾は、女の餘りに平氣なのが癪に障つた。そして、不圖怖ろしい考へが浮んだ。物言はずに女の手を堅く握る。

富江も暫しは口を利かないで、唯笑つてゐた。そして、『私の手なんか駄目よ、信吾さん！ 女の手の樣ぢやないでせう？』

『……』

『私は女ぢやないんですよ。』

『富江樣！』と言ひながら、信吾は無遠慮に女の肩に手をかけた。『そんなら貴女は第三性ですか？ ハハヽヽ』

『あら痛い！』と言つたが逃げようともせぬ。そして、急に眞面目な顏をして眈と男の顏を見ながら、『眞箇よ、私石女なんですもの。子供を生まない女は女ぢやないんでせう？』そして、袂を口にあてて急にホホヽヽと笑ひ出した。

其夜は信吾は十時過までも富江の宿にゐた。宿の主人の老書記は臨時に村役場に詰めてゐる。主婦と子供らは隣に行つて留守であつた。

で、彼が家へ歸つてくると、玄關の戸がもう閉つてゐた。信吾は何がなしにわが家ながら閾が高い樣な氣がして成るべく音を立てぬ樣にして入つた。

（八）

家に入つた信吾の心は、妙に噪んでゐた。彼は富江と別れて十幾町の歸路を、言ふべからざる不愉快な思ひに追はれて來た。烈しい××××××××××しい疲勞が、今日一日の苛立つた彼の心を猶更に苛立たせた。『淺猿しい、淺猿しい！』と、彼は幾度か口に出して自分を罵つた。彼はもう此儘人知れず何處かへ行つて了ひたい樣な氣がした。飽くを知らざる××の飢ゑた獸を思出すと、言ふべからざる嫌惡の念が起る。そして又、段々家へ近付くにつれて、畫家の吉野に對する自暴腹な怒りが強く發した。其怒りが又彼を嘲る。信吾は人に顏を見られたくなかつた。

で、成るべく音立てぬ樣に縁側傳ひに自分の室に行く。家中もう寢て了つたと見えて、森としてゐた。と、客室に續く縁側に輕い足音がして、靜子が出て來た。四邊は薄暗い。

『あら兄樣、遲かつたわねえ、何處に居たんですか、今迄？』

『何處でも可いぢやないか！』と、聲は低く、然し慳貪だ。

『まア！』

信吾は、わが仇の吉野の室に妹が行つてゐたと思ふと、抑へきれぬ不快な憤怒が洪水の樣に頭に溢れた。

『貴樣こそ何處に行つてるんだ？ 夜夜中人が寢て了つてから！』

靜子は驚いて目を丸くして立つてゐる。それが、何か嚴しく詰責でもされる樣で、信吾の憤怒は更に燃える。

『極道野郎！ 何處に行つてるんだ？』と言ふより早く一つ靜子を擲つた。

靜子は矢庭に袂を顏にあてた。

『兄樣……其樣……』

『此方へ來い。』と、信吾は荒々しく妹の手を引張つて、自分の室に入るとドッと突倒した。

『此畜生！ 親や兄の眼を晦まして、……』

『わッ。』と靜子は倒れた儘で聲をあげた。先刻町から歸つてから、待てども／＼兄が歸らぬ、母も叔母も何とも言つてくれぬだけ媒介者としての話の成行が氣にかゝつた。自分から聞かれる事でもなく、手頼るは兄の信吾、その信吾が今日

媒介者が來たも知らずにゐると思ふと、もう心配で心配で堪らなくなつて、今も密と吉野の室に行つて、その歸りの遲きを何の爲かと話してゐたのである。
　靜子は故なき兄の疑ひと怒が、口惜しい、恨めしい、辯解をしようにも喉が塞つて、たゞ堅く〳〵袖を噛んだが、それでも泣き聲が洩れる。
「莫迦野郎！」と、信吾は又しても唸る樣に言つて、下唇を噛縛り、堅めた兩の拳をブルブル顫はせて、恐しい顏をして突立つてゐる。
　靜子は死んだ樣に動かない。
「よし。」と信吾はまた唸つた。「貴樣はもう松原に遣る。貴樣みたいなものを家に置くと、何をするか知れない。」
「マ。」と言つて、靜子はガバと起きた、「兄樣……其松原から今日人が來て……それで……」
　手荒く襖が開いて、次の間に寢てゐる志郎と昌作が入つて來た。
「怎うしたんだい兄樣？」
「默れ！」と信吾は怒鳴つた。「默れ！　貴樣らの知つた事か。」
　そして、亂暴に靜子を蹴る、靜子は又ドタリと倒れて、先よりも高くわッと泣く。
「何だ？」と言ひ乍ら父の信之も入つて來た。
「何だ？　夜更まで歩いて來て信吾は又何を其麼に騷ぐのだ？」
「糞ツ。」と云ひさま、信吾は又靜子を蹴る。
「何をするツ、此莫迦！」と、昌作は信吾に飛びつく。志郎も兄の胸を抑へる。
「何をするツ、貴樣らこそ。」と、信吾はもう無中に咆り立つて、突然志郎と昌作を薙倒す。
「こらツ。」と父も聲を勵して、信吾の肩を攫んだ。「何莫迦をするのだ！　靜は那方へ行け！」
「糞ツ。」と許り、信吾は其手を拂つて手負猪の樣な勢ひで昌作に組みつく。
「貴樣、何故俺を抑へた?!」
「兄樣！」
「信吾ツ！」
　ドタバタと騷ぐ其音を聞いて、別室の媒介者も離室の吉野も驅けつけた。帶せぬ寢卷の前を抑へて母のお柳も來る。
「畜生！　畜生！」と、信吾は無暗矢鱈に昌作を擲つた。

其十二

智惠子は、前夜腹の痛みに堪へかねて蹰から歸つてから、夜一夜苦しみ明した。お利代が寢ずに看護してくれて、腹を撫つたり、溫めたタヲルで罨法を施つたりした。トロ〳〵と交睫むと、すぐ烈しい便氣の塞迫と腹痛に目が覺める。翌朝の四時までに、都合十三回も便所に立つた。が、別に通じがあるのではない。
　夜が清々と明放れた頃には、智惠子はもう一人で便所にも通へぬ程に衰弱した。便所は戸外にある。お利代が醫師に驅附けた後、智惠子は怺へかねて一人で行つた。行くときは壁や障子を傳つて危な氣に下駄を穿かけたが、歸つて來てそれを脫ぐと、もう立つてる勢がなかつた。で、臺所の板敷を辛と這つて來たが、室に入ると、蒲團の裾に倒れて了つた。抉られる樣に腹が痛む。子供等はまだ起きてない。家の中は森としてゐる。窓際の机の上にはまだ洋燈が朦然點つてゐた。
　智惠子は堅く目を瞑つて、幽かに唸りながら、不圖、今し方戸外へ出た時まだ日の出前の水の樣な朝光が、快く流れてゐた事を思ひ出した。
「もう夜が明けた。」と覺束なく考へると、自分は何日からとも知れず、長い〳〵間恁うして苦しんでゐた樣な氣がする。程經てから前夜の事

が思ひ出された。それも然し、ずつとずつと以前の事のやうだ。

「今日あの方が來て下さるお約束だつた！　然うだ、今日だ、もう夜が明けたのだもの！……。然すると今日は盆の十五日だ。昨日は十四日……然うだ、今日は十五日だ！」

喧しく雀が鳴く。智惠子はそれを遙と遠いところの事の樣に聞くともなく聞いた。

『先生！　先生！』と遠くで自分を呼ぶ。不圖氣がつくと、自分は其處で少し交睡みかけたらしい。お利代は加藤醫師を作れて來て、心配氣な顏をして起してゐる。

「先生、まア態々所に寢て、お醫師樣が被來いましたよ。」

「まア濟みません。」然う言つてお利代に手傳はれ乍ら臥床の上に寢せられた。

室には夜ッぴて點けておいた洋燈の油煙やら病人の臭氣やらがムッと籠つてゐた。お利代は洋燈を消し、窓を明けた。朝の光が涼しい風と共に流れ込んで、髮亂れ、眼凹み、皮膚の澤なく痩んだ智惠子の顏が、もう一週間も其餘も病んでゐたものゝ樣に見えた。

加藤は先づ經過の病狀を訊いた。智惠子は痛さを怺へて問ふまゝに答へる。

「不可ませんなア！」と醫師は言つた。そして診察した。

脈も體溫も少し高かつた。舌は荒れて、眼が充血してゐる。そして腹を見た。

『痛みますか？』と、少し脹つてゐる下腹の邊を押す。

「痛みます。」と苦し氣に言つた。

『此處は？』

「其處も。」

『フム。』と言つて、加藤は腹一帶を輕く擦りながら眉を顰めた。

それからお利代を案内に裏の便所へ行つて見た。

「赤痢だ！」と、智惠子は其時思つた。そして吉野に逢へなくなるといふ悲みが湧いた。

智惠子の病氣は赤痢——然も稍烈しい、チブス性らしい赤痢であつた。そして午前九時頃には擔荷に乘せられて隔離病舍に收容された。お利代の家の門口には「交通遮斷」の札が貼られて、家の中は石炭酸の臭氣に充ち、軒下には石灰が撒かれた。

丁度智惠子が隔離病舍に入つた頃、小川の家では、信吾が遲く起きて、そして、今日の中に東京に歸らして呉れと父に談判してゐた。父は叱る、信吾は激昂する。結局「勝手になれ」と言ふ事になつて、信吾は言ひがたい不愉快と憤怒を抱いてぷいと發つた。それは午後の二時過。

吉野は加藤との約束があるので、留まる事になつた。そして直ぐにも加藤の家に移る積りだつたが、色々と小川家の人達に制められて、一日だけ延ばした。小川家には急に不愉快な、そして寂しい空氣が籠つた。

日が暮れると、吉野は一人町へ出た。そして加藤から智惠子の事を訊かされた。吉野は直ぐ智惠子の宿を訪ねた。町には矢張り樺火が盛んに燃えてゐた。彼は裏口から廻つて暫時お利代と話した。そして、石炭酸臭い一封の手紙を渡された。それは智惠子が鉛筆の走り書。——然う書いてあつた。

『御心配下さいますな。決して御心配下さいますな。お目にかゝれないのが何より——病の苦痛より辛う御座います。吉野樣、何卒私がなほるまでこの村にゐて下さい。何卒、何卒。

乾度四五日で癒ります。あなたは必ず私のお願ひを聞いて下さる事と信じます。

ちゑ

よしの樣まゐる

其十三

（一）

智恵子の容體は、最初隨分危險であつた。隔離病舍に收容された晩などは知覺が朦朧になり、妄語まで言つた位。てつきりチブス性の赤痢と思つて加藤も弱つたのであるが、三日許りで危險は去つた。そして二十日過になると、赤痢の方ももう殆んど癒つたが、體が極度に衰弱してゐるところへ、肺炎が兆した。そして加藤の勸めで、盛岡の病院に入ることになつた。

吉野は病める智恵子と共に澁民を去つた。彼は有ゆるものを犧牲に拂つても、必ず智恵子を助けねばならぬと決心してゐた。

信吾去り、志郎去り、智恵子去り、吉野去つて二月の間に起つた種々の事件が、一先づ結末を告げた。

八月も末になつた。そして、靜子は新しく病を得た。

靜子の緣談は本人の希望通りに破れて了つた。この事で最も詰らぬ役を引受けたのは例の叔母で、月の初めに來た時、お柳からの祕かの依賴で、それとなく松原家を動かし、媒介者を同伴して來るまでに運んだのであるが、來て見るとお柳の態度は思ひの外、對手の松原中尉の不品行（志郎から聞いた）を楯に、到頭破談にして了つた。

靜子は、何處といふことなく體が良くなかつた　加藤は神經衰弱と診察した。そして、每日散步ながら自分で藥取に行く樣に勸めた。で、日每に午前九時頃になると、何がなしに打沈んだ顏をして靜子は、白ハンカチに包んだ藥瓶を下げて町にゆく姿が、鶴飼橋の上に見られた。

そして靜子は、一時間か二時間、屹度淸子と睦しく話をして歸る。

或る日の事であつた。二人は醫院の裏二階の瀟洒した室で、何日もの樣に吉野の噂をしてゐた。

靜子は怎うした機會からか、吉野と初めて逢つた時からの事を話し出して、そして、かの寫生帖の事までも仄めかした。

淸子は熱心にそれを聞いてゐた。

『靜子さん。』と淸子は、眤と友の俯向いた顏を見ながら、しんみりした聲で言つた。『私よく知つてるわ、貴女の心を！』

『あら！』と言つて靜子は少し顏を赤めた。

『何？　淸子さん、私の心つて？』

『隱さなくても好かなくつて、靜子さん？』

『……』

默つて俯向いた靜子の耳が燃える樣だ。淸子は、少し惡い事を言つたと氣がついて、接穗なくこれも默つた。

『淸子さん。』と、稍あつてから靜子は言つた。其眼は潤んでゐた。『私……莫迦だわねえ！』

『あら其麽！　私惡い事言つて……』

『ぢやなくつてよ。私却つて嬉しいわ……』

『……』

淸子の眼にも淚が湧いた。

『ねえ、淸子さん！』と又靜子は鼻白んで言つた。『詰らないわねえ、女なんて！』

『眞箇よ、靜子さん。』と、淸子は全く同感したといふ樣に言つて、友の手を取つた。

『然う思つて、貴女も？』と、淸子の顏を見るその靜子の眼から、美しい淚が一雫二雫頰に傳つた。

『靜子さん！』と、淸子は言つた。『貴女……私の事は誤解してらつしやるわね！』

然う言つて、突然靜子の膝に突伏した。

『あら、貴女の事ッて何に？』

（二）

二人は暫時言葉が無かつた。

靜子はそれを、屹度兄の信吾の事とは察した。が、兄の事を思ふだけに、何と訊いて可いか解らなかつた。

稍あつてから、『え？　何の事私が誤解してるツて？』と靜子が又言ふ。

『言はずに置くわ、私っ』と、思ひ切り惡く言つて、清子は漸く首を上げる。

『あら何うして？』

『兄の事……ぢやなくつて？』

清子は靡し氣に俯向いた。

『清子さん、私何も、貴女の事惡くなんか思つてゐやしなくつてよ。』

『あら然うぢやなくつてよ。それは私だつて能く知つてことよ。』

二人は懷し氣に眼を見合せた。

『私此の家に來た事、貴女可怪いと思つたでせう？』と、稍あつて清子は極り惡相に言つた。

『でもないわ……今になつては。』と、靜子は心苦し氣である。靜子は、あの事あつて以來兄信吾の心が解りかねた。そして、その兄の不徳を、今又一つ聞かねばならぬといふ氣がすると、流石の兄妹であれば辛くない譯に行かぬ。が、又、目前の清子を見ると、この世に唯一人の自分の友が此人だと言ふ限りない慕しさが胸に湧いた。

『濟まないわ、このお話するのは！』

『マ清子さん！……貴女其麼に……私になら何だつて言つて下すつたつて可いわ。貴女許りよ、私姉さんの樣に思つてるのは！』

『……私ね……眞箇の姉妹になりたかつたの、貴女と。』然う言つて清子は靜子の手を握る。

『解つてよ。』と、靜子は聞えるか聞えぬかに言つて、眤と眼を瞑ぢた。其眼から涙が溢れる。

『嬉しいわ、私は。』と清子は友の手を強く引く。二人の涙は清子の膝に落ちた。

そして言つた。『私信吾さんに逢つて頂いてよ、此方の方の話があつた時……忘れないわ、去年の七月二十三日よ、鶴飼の上の觀音樣の杜で。』

『……』

『私甚麼に……男の方は矢張り氣が强いわねえ！』

『何と言つて其時、兄が？』

『……此家へ來る事を勸めて下すつたわ、あの、兄樣は。』

『マ然う！』靜子は強く言つた。そして、『……濟まなかつたわ清子樣、眞箇に私……今迄知らなかつたんですもの。』と言ふなり、清子の膝に泣伏した。

『何も其樣に！』と清子も泣聲で言つて、そして二人は相抱いて暫く泣いた。

『詰らないわねえ、女なんて！』と、稍あつて靜子はしみ〴〵言ふ。

『眞箇ねえ！』と清子は應じた。

二人の親しみは增した。

九月が來た。

信吾の不意に發つて以來、富江は長い手紙を三四度東京に送つた。が、葉書一本の返事すらない。そして富江は不相變何時でも噪いでゐる。

肺を病んだ五尺足らずの山内は、到頭八月の末に盛岡に歸つて了つた。聞けば智惠子吉野と同じ病院に入つたといふ。

濱野の家——智惠子の宿では、祖母の病が惡くもならず癒くもならぬ。

お利代は一生懸命裁縫に勵んでゐる。時には智惠子から習つた讃美歌を、小聲で子供らに歌つて聞かしてる事もある。村では好からぬ噂を立てた。それはお利代も智惠子に感化れて、

耶蘇信者になつたので、早く祖母の死ぬ事を毎晩神に祈つてるといふので。――そして、祖母の死ぬのを待つて函館の先の夫の許へ行くのだ、と傳へられた。

快く晴れた或日の午前であつた。昌作は浮かぬ顏をして町を歩いてゐた。そして郵便局の前へ來ると、懷から二枚の葉書を出してポストに入れた。――昌作は米國に行くことも出來ず、明日發つて十里許りの山奥の或小學校の代用教員に赴任することになつた。――その葉書は盛岡の病院なる智惠子と山内に宛てたもの。山内には手短く見舞の文句と自身の方の事を書いたが、智惠子への一枚には、氣取つた字で歌一首。

『秋の聲まづ逸早く耳に入るかゝる性有つ悲むべかり』

澁民村に秋風が見舞つた。

(附記。この一篇は作者が新聞小説としての最初の試作なりき。回重ぬる六十回。時歳末に際して豫期の如く事件を發展せしむる能はず、茲に一先づ擱筆するに到れるは作者の多少遺憾とする所なり。他日若し幸ひにして機會あらば、作者は稿を改めて更に智惠子吉野を主人公としたる本篇の續篇を書かむと欲す。)

馬車の中

花咲かず、雨のふる日の
街をゆく馬車の中なる
年若き我は旅人。
わが泣くをとがめ給ふな。
函館の少女子達よ、
煙草吹く年寄達よ、
情ある乘合人よ。

わが泣くをとがめ給ふな。
そそけたる髮に霜おき、
皺ふかく、面瘦せはてし、
貧しげの媼の君ぞ
わが側に坐りたまへる。
よく見れば、さにもあらねど、
その顏よ、ああ、故鄕に
ただ一人居給ふ母に
いと似たり。縞目もわかず
褪せし衣、そもまた似たり。
袖口のきれしも似たり。
など、かく、と、そは我知らず、
見れば、ただ、涙し流る。

年若き我は旅人、
わが泣くをとがめ給ふな、
情けある乘合人よ。

(『ハコダテの歌』より)

戀

板硝子しめたる窓をうつ雨の
絲ほの白く、灯はあはく、夜ぞふけてゆけ。
病心、寢がへりうてば、黝める
赭土の壁の床の間に、ああ、芍藥の
一輪よ、あでにうつむく。――すさまじき
煙の海の色に似る壁の中より
拔けいでし白斑の淡紅ぞほのに燃ゆ。――
寢らえぬ心つぶ立ちて、君をこそ思へ。

凄まじくか黑き海の人の生の
前に立つなる我が魂のつかれたる眼に
ふとうきし君は芍藥、――名も知らず、
我こそさめて夢むなれ。――ああ、花萎む
明日は來め、君も行くらむ、かくてまた、
古鄕の瓶に、何の花、咲むとするらむ。

(『ハコダテの歌』より)

赤痢

凸凹の石高路、その往還を右左から挾んだ低い茅葺屋根が、凡そ六七十もあらう、何の家も、何の家も、古びて、穢なくて、壁が落ちて、柱が歪んで、隣々に倒り合つて辛々支へてる樣に見える。家の中には生木の薪を焚く煙が、物の置所も分明ならぬ程に燻つて、それが、日一日破風と誘ひ合つては、腐れた屋根に這つてゐる。兩側の狹い淺い溝には、襤褸片や葫蘿蔔の切端などがユラ〳〵した涅泥に沈んで、黝黒い水に藻萍の樣な濁つた泡が、ブク〳〵浮んで流れた。

駐在所の髯面の巡査、隣村から應援に來た今一人の脊のヒョロ高い巡査、三里許りの停車場所在地に開業してゐる古洋服の醫師、赤焦けた黒繻子の袋袴を穿いた役場の助役、消毒具を携へた二人の使丁、この人數は、今日も亦家毎に巡行診斷を行つて歩いた。空は、仰げば目も眩む程無際限に澄み切つて、塵一片飛ばぬ日和であるが、稀に室外を歩いてるものは、何れも何れも申合せた樣に、心配氣な、浮ばない顏色をして、跫音を偸んでる樣だ。其家にも、此家にも、怖し氣な面構をした農夫や、アイヌ系統によくある、鼻の低い、眼の濁つた、青脹れた女などが門口に出で、落着の無い不恰好な腰附をして、往還の上下を眺めてゐるが、一人として長く立つてるものは無い。子供等さへ高い聲も立てない。時偶胸に錐でも刺された樣な赤兒の悲鳴でも聞えると、隣近所では妙に顏を顰める。素知らぬ態をしてるのは、干からびた鹽鱒の頭を引擦つて行く地種の痩犬、百年も千年も眠つてゐた樣な張合のない顏をして、日向で欠伸をしてる眞黒な猫、往還の中央で媾んでゐる雞くらゐなもの。村中濕りかへつて巡査の靴音と佩劍の響が、日一日、人々の心に言ひ難き不安を傳へた。

鼻を刺す石炭酸の臭氣が、何處となく底冷えのする空氣に混じて、家々の軒下には夥しく石灰が撒きかけてある。――赤痢病の襲來を被つた山間の荒村の、重い恐怖と心痛に充ち滿ちた、目もあてられぬ、そして、不愉快な狀態は、一度その境を實見したんで無ければ、迚も想像も及ぶまい。平常から、住民の衣、食、住――その生活全體を根本から改めさせるか、でなくば、初發患者の出た時、時を移さず全村を焼いて了ふかするで無ければ、如何に力を盡したとて豫防も糞も有つたものでない。三四年前、この村から十里許り隔つた或村に同じ疾が猖獗を極めた時、所轄警察署の當時の署長が、大英斷を以て全村の交通遮斷を行つた事がある。お蔭で他村には傳播しなかつたが、住民の約四分の一が一秋の中に死んだ。尤も、年々何の村でも一人や二人、五人六人の患者の無い年はないが、巧に隱蔽して置いて牻牛兒の煎藥でも服ませると、何時しか癒つて、格別傳染もしない。それが、萬一醫師にかゝつて隔離病舍に收容され、巡査が家毎に怒鳴つて歩くとなると、噂の擴がると共に疫が忽ち村中に流行して來る――と、實際村の人は思つてるので、疫其者より巡査の方が嫌はれる。初發患者が見附かつてから、二月足らずの間に、隔離病舍は狹隘を告げて、更に一軒山蔭の孤家を借り上げ、それも滿員といふ形勢で、總人口四百内外の中、初發以來の患者百二名、死亡者二十五名、全癒者四十一名、現患者三十六名、それに今日

の診斷の結果で又二名增えた。戸數の七割五分は何の家も患者を出し、或家では一家を擧げて隔離病舍に入つた

秋も既う末――十月下旬の短かい日が、何時しかトップリと暮れて了つて、霜も降るべく鋼鐵色に冴えた空には白々と天の河が横はつた。さらでだに蟲の音も絕え果てた冬近い夜の寥しさに、まだ宵ながら、家々の戸がピッタリと閉つて、通る人もなく、話聲さへ洩れぬ。重い重い不安と心痛が、火光を蔽ひ、門を鎖し、人の喉を締めて、村は宛然幾十年前に人間の住み棄てた、廢郷かの樣に闃乎としてゐる。今日は誰々が顏色が惡かつたと、何れ其麽事のみが住民の心に徂徠してるのであらう。

其重苦しい沈默の中に、何か怖しい思慮が不意に閃く樣に、此のトッ端の倒りかゝつた家から、時々ハッと火花が往還に散る。それは鍛冶屋で、トンカン、トンカンと鐵砧を擊つ鋭い響が、地の底まで徹る樣に、村の中程まで聞えた。

其隣がお由と呼ばれた寡婦の家、入口の戸は鎖されたが、店の煤び果てた二枚の障子――その處々に、朱筆で直した痕の見える平假名の淸書が横に逆樣に貼られた――に、火光が映つてゐる。凡そ、村で人氣のあるらしく見えるのは、此家と鍛冶屋と、南端れ近い役場と、雜貨やら酒石油などを商ふ村長の家の四軒に過ぎない。

ガタリ、ガタリと重い輛の音が石高路に鳴つて、今しも停車場通ひの空荷馬車が一臺、北の方から此村に入つた。荷馬車の上には、スッポリと赤毛布を被つた馬子が胡坐をかいてゐる。と、お由の家の障子に影法師が映つて、張のない聲に高く低く節附けた歌が聞える。

『あしきをはらうて救けたまへ、天理王のみこと。……この世の地と、天とをかたどりて、夫婦をこしらへきたるでな。これはこの世のはじめだし。……一列すまして甘露臺。』

歌に伴れて障子の影法師が踊る。妙な手附をして、腰を振り、足を動かす。或は大きく朦乎と映り、或は小く分明と映る。

『チョッ。』と馬子は舌鼓した。『フム、また狐の眞似演てらア！』

『オイ、お申婆でねえか？』と、直ぐ又大きい聲を出した。丁度その時、一人の人影が草履の音を忍ばせて、此家に入らうとしたので。『アイサ。』と、人影は暗い軒下に立留つて、四邊を憚る樣に答へた。『隣の兄哥か？ 早かつたなす。』

『早く歸つて寢る事た。怎麽時何處ウ徘徊くだべえ。天理樣拜んで赤痢神が取附かねえだら、ハア、何で醫者藥が要るもんかよ。』

『何さ、ただ、お由嬶に一寸用があるだで。』と、聲を低めて對手を宥める樣に言ふ。

『フム。』と言つた限で荷馬車は行き過ぎた。

お申婆は、軈て物靜かに戸を開けて、お由の家に姿を隱して了つた。障子の影法師はまだ踊つてゐる。歌もまだ聞えてゐる。

『よろづよの、せかい一れつみはらせど、むねのはかりたものはない。』

『そのはずや、といてきかしたものはない。しらぬが無理ではないわいな。』

『このたびは、神がおもてへあらはれて、なにか委細をときかす。』

横川松太郎は、同じ縣下でも遙と南の方の、田の多い、養蠶の盛んな、或村に生れた。生家はその村でも五本の指に數へられる田地持で、父作松と母お安の間の一粒種、甘やかされて育つた故か、體も脾弱く、氣も因循で學校に入つても、勵むでもなく、怠るでもなく、十五の春にな

つて高等科を卒へたが、別段自ら進んで上の學校に行かうともしなかつた。それなりに十八の歳になつて、村の役場に見習の格で雇書記に入つたが、丁度その頃、暴風の樣な勢で以て、天理教が附近一帶の村々に入り込んで來た。

或晩、氣弱者のお安が平生になく眞劍になつて、天理教の有難い事を父作松に說いたことを、松太郎は今でも記憶してゐる。新しいと名の附くものは何でも嫌ひな舊弊家の、剩に名高い吝嗇家だつた作松は、仲々それに應じなかつたが、一月許り經つと、打つて變つた熱心な信者になつて、朝夕佛壇の前で誦げた修證義が、「あしきを攘うて救けたまへ。一つ御神樂歌」と代り、大和の國の總本部に參詣して來てからは、自ら思立つてか、唆かされてか、家屋敷所有地全部賣拂つて、工事費額二千九百何十圓といふ、巍然たる大會堂を、村の中央の小高い丘陵の上に建てた。神道天理教會××支部といふのがそれで。

その時に、松太郎は兩親と共に着のみ着の儘になつて、其會堂の中に布教師と共に住む事になつた。(村役場の方は四ケ月許りで罷めて了つた。)最初、兩親や布教師と一緒になつて御神樂を踊らねばならなかつたのには、少からず弱つたもので、氣恥しくて厭だと言つては甚麽に作松に叱られたか知れない。その父は、半歳程經つて、近所に火事のあつた時、人先に水桶を携つて會堂の屋根に上つて、足を辷らして落ちて死んだ。天晴な殉教者だと口を極めて布教師は作松の德を讚へた。母のお安もそれから又半歳經つて、腦貧血を起して死んだ。

兩親の死んだ時、松太郎は無性涙を流したが、それは然し、悲しいよりも驚いたから泣いたのだ。他から鄭重に悼辭を言はれると、奈何して俺は左程悲しくないだらうと、それが却つて悲しかつた事もある。其後も矢張その會堂に起臥して、天理教の教理、祭式作法、傳道の心得などを學んだが、根が臆病者で、これといふ役にも立たない代り、惡い事はカラ出來ない性なのだから、家を潰させ、父を殺し、母を死なしめた、その支部長が、平常可愛がつて使つたものだ。また渠は、一體甚麽人を見ても羨むといふことのない。――羨むには羨んでも、自分も然う成らうといふ奮發心の出ない性で、從つて、食ふに困るではなし、自分が無財産たといふことも左程苦に病まなかつた。時偶、雜誌の口繪で縹緻の好い美人の寫眞を見たり、地方新聞で金持の若旦那の艶聞などを讀んだりした時だけは、妙に然う危險な――實際危險な、考へば、密々とこの會堂や地面を自分の名儀に書き變へて、裁判になつても敗けぬ樣にして置いて、突然賣飛ばして了はうとか、平常心から敬つてゐる支部長を殺さうとかいふ、全然理由の無い反抗心を抱いたものだが、それも獨寢の床に人間並の出來心を起した時だけの話、夜が明けると何時しか忘れた。

兎角する間に今年の春になると、支部長は、同じ會堂で育て上げた、松太郎初め六人の青年を大和の本部に遣つた。其處で三ケ月修行して、一教師の資格を得て歸ると、今度は、縣下に各々區域を定めて、それ〳〵布教に派遣されたのだ。

さらでだに元氣の無い、色澤の惡い顏を、土埃と汗に汚なくして、小い竹行李二箇を前後に肩に掛け、紺絣の單衣の裾を高々と端折り、重い物でも曳摺る樣な足取で、松太郎が初めて南の方から此村に入つたのは、雲一つ無い暑さ盛りの、丁度八月の十日、眩い〳〵日が徐々西の山に辷りかけた頃であつた。松太郎は、二十四といふ齡こそ人並に取つてはゐるが、生來の氣弱者、經驗の無い一人旅に今朝から七里餘の知らない路を辿つたので、心の髓までも疲れ切つ

てゐた。三日、四日と少しは慣れたものの、腹に一物も無くなつては、「考へて見れば目的の無い旅だ！」と言つたやうな、朦乎した悲哀が、精々した唾と共に湧いた。それで、村の入口に入るや否や、吠えかゝる痩犬を半分無意識に怕い顔をして睨み乍ら、脹けた様な頭を捽り、有らん限りの智慧と勇氣を集めて、「兎も角も、宿を見附ける事た。」と決心した。そして、口が自からポカンと開いたも心附かず、臆病らしい眼を怯々然と兩側の家に配つて、到頭、村も端れ近くなつた邊で、三國屋といふ木賃宿の招牌を見附けた時は、渠には既う、現世に何の希望も無かつた。

翌朝目を覺ました時は、合宿を頼まれた二人――六十位の、頭の禿げた、鼻の赤い、不安な眼附をした老爺と其娘だといふ二十四五の、旅疲勞の故か張合のない淋しい顏の、其癖何處か小意氣に見える女。（何處から來て何處へ行くのか知らないが、路銀の補助に賣つて歩くといふ安事を、松太郎も勸められて一本買つた。）――その二人は既う發つて了つて穢ない室の、補布だらけな五六の蚊帳の隅つこに、脚を一本蚊帳の外に投出して、仰けに臥てゐた。と、渠は、前夜同じ蚊帳に寢た女の寢息や寢返りの氣勢に酷く弱い頭を惱まされて、夜更まで寢附かれなかつた事も忘れて、慌てて枕の下の財布を取出して見た。變りが無い。すると又、突然褌一つで蚊帳の外に跳び出したが、自分の荷物は寢る時の儘で壁側にある。ホッと安心したが、猶念の爲に内部を調べて見ると、矢張變りが無い。「フフ、、。」と笑つて見た。

「さて、何う爲ようかな？」――恁う渠は、額に八の字を寄せ、夥しく蚊に喰はれた脚や、蚤に攻められて一面に紅らんだ横腹を自棄に搔き乍ら、考へ出した。昨日着いた時から、火傷か何かで左手の指が皆内側に曲つた宿の嚊の待遇振が、案外親切だつたもんだから、松太郎は理由もなく此村が氣に入つて、一つ此地で傳道して見ようかと思つてゐたのだ。「さて、何う爲ようかな。」恁う何回も何回も自分に問うて見て、仲々決心が附かない。「奈何爲よう。奈何爲よう。」と、終ひには少し慎つたくなつて來て、愈々以て決心が附かなくなつた。と、言つて、發たうといふ氣は微塵もないのだ。「兎も角も。」この男の考へ事は何時でも此處に落つる。「兎も角も、村の様子を見て來る事に爲よう。」と決めて、朝飯が濟むと、宿の下駄を借りて戸外に出た。

前日通つた時は百二三十戸も有らうと思つたのが數へて見ると六十九戸しか無かつた。それが又穢ない家許りだ。松太郎は心に喜んだ、何がなしに氣強くなつて來た。渠には自信といふものが無い。自信は無くとも傳道は爲なければならぬ。それには、成るべく狹い土地で、そして成るべく教育のある人の居ない方が可いのだ。宿に歸つて、早速亭主を呼んで訊いて見ると、案の如く天理教はまだ入り込んでゐないと言ふ。そこで松太郎は、出來るだけ勿體を附けて自分の計畫を打ち明けて見た。

三國屋の亭主といふのは、長らく役場の小使をした男で、身長が五尺に一寸も足らぬ不具者で、齡は四十を越してゐるが、髭一本あるでなし、額の小皺を見なければ、まだホンの小若者としか見えない。小鼻が兩方から吸込まれて、物言ふ聲が際立つて鼻にかゝる。それが「然うだなッす……』と小苦面に首を傾げて聞いてたが、松太郎の話が終ると、「何しろハア。今年ア作が良くねえだハンテな。奈何だべなア！神様さア喜捨る錢金が有つたら石油でも買ふべえドラ。」

「それがな。」と、松太郎は臆病な眼附をして、「何もその錢金の費る事で無えのだ。私は其麼

者で無え。自分で宿料を拂つてゐて、一週間なり十日なり、無料で近所の人達に聞かして上げるのだッさ、今のその、有難いお話な。』

氣乘りのしなかつた亭主も、一週間分の前金を出されて初めて納得してそれからは多少言葉遣ひも改めた。兎も角も今夜から近所の人を集めて呉れるといふ事に相談が纏つた。日の暮れるのが待遠でもあり、心配でもあつた。集つたのは女子供が合せて十二三人、それに大工の弟子の三太といふ若者、鍛冶屋の重兵衞。松太郎は暑いに拘らず木綿の紋附羽織を着て、杉の葉の蚊遣の煙を澁團扇で追ひ乍ら、教祖中山美支子の一代記から、一通りの教理まで、重々しい力の無い聲に出來るだけ抑揚をつけ諄々と說いたものだ。

『ハハア、そのお人も矢張りお嫁樣に行つたのだなッす?』と、乳兒を抱いて來た嚊が訊いた。

『左樣さ。』と松太郞は額の汗を手拭で拭いて、『お美支樣が丁度十四歲に成られた時にな、庄屋敷村のお生家から三昧田村の中山家へ御入輿に成つた。有難いお話でな。その時お持になつた色々の調度、箪笥、長持、總てで以て十四荷――一荷は擔ぎで、畢竟平たく言へば十四擔ぎ有つたと申す事ぢや。』『ハハア、有難い事だなッす。』と、飛んだところに感心して、『ナントお前樣、此地方ではハア、今の村長樣の嚊樣でせえ、箪笥が唯三棹――、否、全體で三棹でその中の一棹はハア、古い長持だつけがなッす。』

二日目の晚は嚊共は一人も見えず、前夜話半ばに居眠をして行つた子供連と、鍛冶屋の重兵衞、三太が二三人朋輩を伴れて來た。その若者が何彼と冷評しかけるのを、眇目の重兵衞が大きい眼玉を剝いて叱り附けた。そして、自分一人夜更まで殘つた。

三日目は、午頃來の雨、蚊が皆家の中に籠つた點燈頃に、重兵衞一人、麥煎餅を五錢代許り買つて遣つて來た。大體の話は爲て了つたので、此夜は主に重兵衞の方から、種々の問を發した。それが、人間は死ねば奈何なるとか、天理王の命を信ずるとお寺詣りが出來ないとか、天理教でも魚籃觀音の樣に、假に人間の形に現れて蒼生を濟度する事があるとか、概して教理に關する問題を、鹿爪らしい顏をして訊くのであつたが、松太郎の煮え切らぬ答辯にも多少得る所があつたかして、

『然うするとな、先生、』と、此時から松太郎を然う呼ぶ事にした、『俺にも餘程天理教の有難え事が解つて來た樣だな。耶蘇は西洋、佛樣は天竺、皆渡來物だが、天理樣は日本で出來た神樣だなッす?』

『左樣さ。兎角自國のもんでないと惡いでな。加之何なのぢや、それ、國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊、大苫邊尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉冊尊、それから大日孁尊、月夜見尊、この十柱の神樣はな、何れも皆立派な美德を具へた神樣達ぢやが、わが天理王の命と申すは、何と有難い事でな、この十柱の神樣の美德を悉皆具へて御座る。』

『成程。それで何かな、先生、お前樣は一人でも此村に信者が出來ると、何處へも行かねえつて言つたけが、眞箇かな? それ聞かねえと飛んだブマ見るだ。』

『眞箇ともさ。』

『眞箇かな?』

『眞箇ともさ。』

『愈々眞箇かな?』

『ハテ、奈何して譃なもんかなア。』と言ひは言つたが、松太郞は餘り兎く訊かれるので何がなしに二の足を踏みたくなつた。

『先生、そンだらハア、』と、重兵衞は突然膝を乘出した。『俺が成つてやるだ。今夜から。』

『信者にか?』と、鈍い眼が俄かに輝く。

『然うせえ。外に何になるだア！』
『重兵衞さん、そら眞箇かな？』と、松太郎は間拔けた様な頓狂な聲を放つた。三日目に信者が出來る、それは渠の豫想しなかつた所、否、渠は何時、自分の傳道によつて信者が出來るといふ確信を持つた事があるか？

この鍛冶屋の重兵衞といふのは、針の様な髯を顏一面にモヂャ〳〵さした、それは〳〵逞しい六尺近い大男で、左の目が潰れた、眇目鍛冶と子供等が呼ぶ、齢は今年五十一とやら、以前十里許り離れた某町に住つてゐたが、鉈、鎌、鉞などの荒道具が得意な代り、此人の鍛つた庖丁は刃が脆いといふ評判、結局は其土地を喰詰めて、五年前にこの村に移つた。他所者といふが第一、加之、頑固で、片意地で、お世辭一つ言はぬ性なもんだから、兎角村人に親しみが薄い。重兵衞はそれが平生の遺恨で、些つとした手紙位は手づから書けるを自慢に、益々頭が高くなつた。規定以外の村の費目の割當などに、最先に苦情を言ひ出すのは此人に限る。其處へ以て松太郎が來た。聽いて見ると間違つた理窟でもなし、村寺の酒飲和尚よりは神々の名も澤山に知つてゐる。天理様の有難味も了解んで了解めぬことが無ささうだ。好矣、俺が一番先に信者になつて、村の奴等の鼻毛を拔いてやらうと、初めて松太郎の話を聽いた晩に寢床の中で度胸を決めて了つたのだ。尤も、重兵衞の遠縁の親戚が二軒、遙と隔つた處にゐて、既から天理教に歸依してるといふ事は、豫て手紙で知つてもゐ、一昨年の暮弟の家に不幸のあつた時、その親戚からも人が來て重兵衞も改宗を勸められた事があつた。但し此事は松太郎に對して噯にも出さなかつた。

翌朝、松太郎は早速××支部に宛てて手紙を出した。四五日經つて返書が來た。その返書は、松太郎が逸早く信者を得た事を祝して其傳道の前途を勵まし、この村に寄留したいといふ希望を聽許した上に、今後傳道費として毎月五圓宛送る旨を書き添へてあつた。松太郎はそれを重兵衞に示して喜ばした上で、恁ういふ相談を持ち掛けた。

『奈何だらうな、重兵衞さん。三國屋に居ると何んの彼ので日に十五錢宛貪られるがな。そすると月に積つて四圓五十錢で、私は五十錢しか小遣が殘らなくなるでな。些し困るのぢや、私は神様に使はれる身分で、何も食物の事など構はんのぢやが、稗飯でも構はんによつて、もつと安く泊める家があるまいかな。奈何だらうな、重兵衞さん。私は貴方一人が手頼ぢやが……』

『然うだなア！』と、重兵衞は重々しく首を傾げて、薪雜棒の様な腕を拱いだ。月四圓五十錢は成程この村にしては高い。それより安くても泊めて呉れさうな家が、那家、那家と二三軒心に無いではない。が、重兵衞は何事にまれ此方から頭を下げて他人に賴む事は嫌ひなのだ。

翌朝、家が見附かつたと言つて重兵衞が遣つて來た。それは鍛冶家の隣りのお由寡婦が家、月三圓で、その代り粟八分の飯で忍耐しろと言ふ。口に似合はぬ親切な爺だと、松太郎は心に感謝した。

『で、何かな、そのお由といふ寡婦さんは全くの獨身住かな？』

『然うせえ。』

『左様か。それで齢は老つてるだらうな？』

『ワッハハ。心配する事ア無え、先生。齢ア四十一だべえが、村一番の醜婦の巨女だア、加之ハア、酒を飲めば一升も飲むし、甚麼男も手餘にする位の惡醉語堀だで。』と、嚇かす様に言つたが、重兵衞は、眼を圓くして驚く松太郎の顏を見ると俄かに氣を變へて、

『そだどもな、根が正直者だおの、結句氣樂な女せえ喃。』

話は急にして、其日すぐお由の家に移轉つた。重兵衛の後に跟いて怖々と入つて來る松太郎を見ると、生柴を大爐に折焚べてフウ／＼吹いてゐたお由は、突然、

「お前が、俺許さ泊めて吳ろづな？」と、無遠慮に叱る樣に言ふ。

『左樣さ。私はな……』と、松太郎は少し狼狽へて、諄々初對面の挨拶をすると、

『何有ハア、月々三兩せえ出せば、死るまでも置いて遣べえどら。』

移轉祝の積りで、重兵衛が酒を五合買つて來た。二人はお由にも天理教に入ることを勸めた。

「何有ハア、俺みたいな惡黨女にや神樣も佛樣も死る時で無えば用ア無えどもな。何だべえせえ、自分の居ッ家が然でなかつたら工合が惡かんべえか？　然だらハア、俺ア酒え飮むつき邪魔さねえば、何方でも可いどら。」と、お由は黑鐵漿の剝げた穢ない齒を露出にして、ワツハヽヽと男の樣に笑つたものだ。鍛冶屋の門と此の家の門に、「神道天理教會」と書いた、丈五寸許りの、硝子を嵌めた表札が揭げられた。

こゝに住つてからの事、何樣事なしの松太郎はブラリと宿を出て、其處此處に赤い百合の花の咲いた畑徑を、唯一人東山へ登つて見た。何の風情もない、饅頭笠を伏せた樣な芝山で、逶迤した徑が嶺に盡きると、太い杉の樹が鬱々と、八九本立つてゐて、二間四方の荒れ果てた愛宕神社の祠。

その祠の階段に腰を掛けると、此處よりは少し低目の、同じ形の西山に眞面に對合つた。兩山の間が淺い凹地になつて、浮世の廢道と謂つた樣な、塵白く、石多い、通り少ない往還が、其底を一直線に貫いてゐる。兩つの丘陵は中腹から耕されて、夷かな勾配を作つた畑が家々の裏口まで迫つた。村が一目に瞰下される。

その往還にも、昔は、電信柱が行儀よく並んで、毎日午近くなると、調子面白い喇叭の音を澄んだ山國の空氣に響かせて、赭く黃ろく塗つた圓太郎馬車が、南から北から、勇しくこの村に躍り込んだものだ。その喇叭の音は、二十年來礑と聞こえずなつた。隣村に停車場が出來てから通りが絕えて、電信柱さへ何日しか取除かれたので。

その頃は又、村に相應な旅籠屋も三四軒あり、俥も十輛近くあつた。荷馬車と駄馬は家毎の樣に置かれ、畑仕事は女の內職の樣に閑却されて、旅人對手の渡世だけに收入も多く、人氣も立つてゐた。夏になれば氷屋の店も張られた。——それもこれも今は纔かに、老人達の追懷談に殘つて、村は年毎に、宛然藁火の消えてゆく樣に衰へた。生業は奪はれ、村税は高くなり、諸式は騰り、增えるのは子供許り。唯一輛殘つてゐた俥の持主は五年前に死んで曳く人なく、轅の折れた其俥は、ついこの頃まで其家の裏井戶の傍で見懸けられたものだ。旅籠屋であつた大きい二階建の、その二階の格子が、折れたり歪んだり、晝でも鼠が其處に遊んでゐる。今では三國屋といふ木賃が唯一軒。

松太郎は其樣事は知らぬ。血の氣の薄い、顎の無い、氣病の後の樣な弛んだ顏に眞面な午後の日を受けて、物珍らし相にこの村を瞰下してゐると、不圖、生れ村の父親の建てた會堂の丘から、その村を見渡した時の心地が胸に浮んだ。

取り留めのない空想が一時に湧いた。愚さの故でもあらう、汗ばんだ、生き甲斐のない顏が少し色ばんで、鈍い眼も輝いて來た。渠は、自分一人の力でこの村を教化し盡した勝利の曉の、今迄ぞ夢にだに見なかつた大いなる歡喜を空に描き出した。

「會堂が那處に建つ！」と、屹と西山の嶺に瞳

を据ゑる。

「然うだ、那處に建つ！」恁う思つただけで、松太郎の目には、その、純白な、綺に見る城の樣な、數知れぬ窓のある、巍然たる大殿堂が鮮かに浮んで來た。その高い、高い天蓋の尖端、それに、朝日が最初の光を投げ、夕日が最後の光を懸ける……

　渠は又、近所の誰彼、見知り越しの少年共を、自分が生村の會堂で育てられた如く、育てて、教へて……と考へて來て、周圍に人無きを幸ひ、其等に對する時の嚴かな態度をして見た。

「抑々天理教といふものはな――」

と、自分の教へられた支部長の聲色を使つて、眼の前の石塊を睨んだ。

「すべて、私念といふ卑劣い心があればこそ、人間は種々の惡き企圖を起すものぢや。罪惡の源は私念、私念あつての此世の亂れぢや。可いかな？　その卑劣い心を人間の胸から攘ひ淨めて、富めるも賤きも、眞に四民平等の樂天地を作る。それが此教の第一の目的ぢや。解つたぞな？」

　恁う言ひ乍ら、渠はその目を移して西山の巓を見、また、凹地の底の村を瞰下した。古の尊き使徒が異教人の國を望んだ時の心地だ。

壓潰した樣に二列に列んだ茅葺の屋根、其處からは雞の聲が間を置いて聞えて來る。習との風も無い。最中過の八月の日光が躍るが如く溢れ渡つた。氣が附くと、畑々には人影が見えぬ。丁度、盆の十四日であつた。

　松太郎は、何かなしに生き甲斐がある樣な氣がして、深く深く、杉の樹脂の香る空氣を吸つた。が、霎時經つと眩い光に眼が疲れてか、氣が少し焦立つて來た。

「今に見ろ！　今に見ろ！」

　這麼事を出任せに口走つて見て、渠はヒョクリと立ち上り、杉の根方を彼方此方、態と興奮した樣な足調で歩き出した。と、地面に匍つた太い木の根に躓いて、其機會にまだ新しい下駄の鼻緒が、フッツリと斷れた。チョッと舌鼓して蹲踞んだが、幻想は迹もない。渠は腰に下げてゐた手拭を裂いて、長い事掛つて漸くとそれをすげた。そしてトボ〱と山を下つた。

　穗の出初めた粟畑がある、ガサ〱と葉が鳴つて、

「先生樣ア！」

と、若々しい娘の聲が、突然、調戲ふ樣な調子で耳近く聞えた。松太郎は礑と足を留めて、キョロキョロ周圍を見廻した。誰も見えない。

粟の穗がフイと飛んで來て、胸に當つた。

「誰だい？」

と、渠は少し氣味の惡い樣に呼んで見た。カサとの音もせぬ。

「誰だい？」

　二度呼んでも答が無いので、苦笑ひをして歩き出さうとすると、

「ホホヽヽ。」

と澄んだ笑聲がして、白手拭を被つた小娘の顏が、二三間隔つた粟の上に現れた。

「何ぞ、お常ッ子かい！」

「ホホヽヽ。」と、又笑つて、「先生樣ア、お前樣狐踊踊るづア、今夜俺と一緒に踊らねえすか？　今夜から盆だす。」

「フフヽヽ。」と松太郎は笑つた。そして急しく周圍を見廻した。

「なツす、先生樣ア。」とお常は飽迄曇りのないクリ〱した眼で調戲つてゐる。十五六の、色の黑い、晴れやかな邪氣無い小娘で、近所の駄菓子屋の二番目だ。松太郎の通る度、店先にゐさへすれば、乾度この眼で調戲ふ。落花生の殼を投げることもある。

　渠は不圖、別な、全く別な、或る新しい生き甲斐のある世界に、お常のクリ〱した眼の

中に發見した。そして、ツイと自分も粟畑の中に入つた。お常は笑つて立つてゐる。松太郎も、口元に[illegible]つた樣な笑ひを浮べて胸に動悸をさせ乍ら近づいた。

この事あつて以來、松太郎は妙に氣がそはついて來て、暇さへあれば、ブラリと懷手をして畑徑を歩く樣になつた。わが歩いてる徑の彼方から白手拭が見える。と、渠は既うホクホク嬉しくてならぬ。知らん振りをして行くと、娘共は乾度何か調戲つて行き過ぎる。

『フフ、、。』

と、惡うまア、自分の威嚴を傷けぬ程度で笑つたものだ。そして、家に歸ると例になく食慾が進む。

近所の人々とも親しみがついた。渠の仕事は、その人々に手紙の代筆をして呉れる事である。日が暮れると鍛冶屋の店へ遊びに行く。でなければ、お常と約束の場所で逢ふ。お由が何處かへ振舞酒にでも招ばれると、こつそりと娘を連れ込む事もある。娘の歸つた後、一人ニヤニヤと厭な笑ひ方をして、爐端に胡坐をかいてると、乾度、お由がグデングデンに醉拂つて、對手なしに惡言を吐き乍ら歸つて來る。

『何だ此畜生奴、奴ア何故此家に居る！　ウン此[illegible]奴、何だ！　寢ろ？　カラ小癪な！　默れ、この野郎。默れ默れ、默らねえか？　此畜生奴、乞食、癩病、天理坊主！　早速と出て行け、此畜生奴！』

突然、這麼事を口汚なく罵つて、お由はドタリと上り框の板敷に倒れる。

『まア、まア。』

と言つた調子で、松太郎は、繼母でも遇ふ樣に、寢床の中に引擦り込んで、蒲團をかけてやる。渠は何日しか此女を扱ふ呼吸を知つた。惡口は幾何吐いても、別に抗爭ふ事はしないのだ。お由は寢床に入つてからも、五分か十分、勝手放題に怒鳴り散らして、それが止むと、太平な鼾をかく。翌朝になれば平然としたもの。前後の詫を言ふ事もあれば言はぬ事もある。

此家の門と鍛冶屋の門の外には、「神道天理教會」の表札が揭げられなかつた、松太郎は別段それを苦に病むでもない。時偶近所へ夜話に招ばれる事があれば、役目の說教もする、それが又、奈何でも可いと言つた調子だ。或時、痩馬喰の嚊が、子供が腹を病んでるからと言つて、御供水を貰ひに來た。三四日經つと、麥煎餅を買つて御禮に來た。後で聞けばそれは赤痢だつたといふ。

二百十日が來ると、馬のある家では、泊り懸けで馬糧の萩を刈りに山へ行く。其若者が一人、山で病附いて來て醫者にかゝると、赤痢だと言ふので、隔離病舍に收容された。さらでだに、岩手縣の山中に數ある痩村の中でも、珍しい程の貧乏村、今年は作が思はしくないと弱つてゐた所へ、この出來事は村中の額を曇らせた。又一人、又一人、遂に忌はしき疫が全村に蔓延した。恐しい不安は、常でさへ巫女を信じ狐を信ずる住民の迷信を煽り立てた。御供水は酒屋の酒の樣に需要が多くなつた。一月餘の間に、新しい信者が十一軒も增えた。松太郎は世の中が面白くなつて來た。

が、漸々病勢が猖獗になるに從れて、渠自身も餘り丈夫な體ではなし、流石に不安を感ぜぬ譯に行かなくなつた。其時思ひ出したのは、五六年前――或は渠が生れ村の役場に出てゐた頃かも知れぬ――或新聞で香竄葡萄酒の廣告の中に、傳染病豫防の效能があると書いてあつたのを讀んだ事だ。渠は恁ういふ事を云出した。『天理樣は葡萄がお好きぢや。お好きな物を上げてお賴みするに病氣なんかするものぢやないがな。』

流石に巡查の目を憚つて、日が暮れるのを

待つて御供水を貰ひに來る嬶共は、有手無手の小錢を引攫いて葡萄酒を買つて來る樣になつた。松太郎はそれを贄卓に供へて、祈禱をし、御神樂を踊つて、その葡萄酒を勿體らしく御供水に割つて、持たして歸す。殘つたのは自分が飲むのだ。お由の家の臺所の棚には、葡萄酒の空瓶が十八九本も竝んだ。

奈何したのか、鍛冶屋の響も今夜は例になく早く止んだ。高く流るゝ天の河の下に、村は死骸の樣に默してゐる。今し方、提灯が一つ、フラフラと人魂の樣に、役場と覺しき門から迷ひ出て、半町許りで見えなくなつた。

お由の家の大爐には、チロリ〳〵と焚火が燃えて、居並ぶ種々の顏を赤く黑く隈取つた。近所の嬶共が三四人、中には一番遲れて來たお申婆もゐた。

祈禱も御神樂も濟んだ。松太郎はトロリと醉つて了つた、だらしなく横坐に胡坐をかいてゐる。髮の毛の延びた頭がグラリと前に垂れた。葡萄酒の瓶がその後に倒れ、漬物の皿、破茶碗などが四邊に散亂つてゐる。『其處に寢えがす?お由殿、寢たら可がべず。』と、一人の顏のしやくんだ嬶が言つた。

『何有!』

恁う言つて、お由は腰に支つた右手を延べて、燃え去つた爐の柴を燻べる。髮のおどろに亂れかゝつた、その赤黑い大きい顏には、痛みを怺へる苦痛が刻まれてゐる。四十一までに持つた四人の夫、それを皆追出して遣つた惡黨女ながら、養子の金作が肺病で死んで以來、口は減らないが、何處となく衰へが見える。亂れた髮には、白いのさへ幾筋か交つた。

『眞箇だぞえ。寢れば癒るだあに。』とお申婆も口を添へる。

『何有!』とお由は又言つた。そして、先刻から三度目の同じ辯疏を、同じ樣な詰らな相な口調で附け加へた。『晩方に庭の臺木さ打倒つて撲つたつけア。腰ア痛くてせえ。』

『少し揉んで遣べえが!』とお申。

『何有!』

『ワッハハ。』氣懈い笑ひ方をして、松太郎は顏を上げた。

『ハッハハ。醉へエばア寢たくなアるウ、〳〵と唄ひさして、)寢れば、それから何だつけ?吃、何だつけ?ハッハハ。あしきを攘うて救けたまへだ。ハッハハ。』と、又グラリとする。

『先生樣ア醉つたなッす。』と、‥‥皺くちやの一人が隣へ囁いた。

『眞箇にせえ。歸るべえが?』と、その隣りのお申婆へ。

『まだ可がべえどら。』と、お由が呟く樣に口を入れた。

『こら、家の嬶、お前は何故、今夜は酒を飲まないのだ。』と松太郎は又顏を上げた。舌もよくは廻らぬ。

『フム。』

『ハッハハ。さ、私が踊ろか。否、醉つた、すつかり醉つた。ハハ。神がこの世へ現はれて、か。ハッハハ。』と、坐つた儘で妙な手附。

ドヤ〳〵と四五人の跫音が戸外に近づいて來る。顏のしやくつたのが逸早く聞耳を立てた。

『また隔離所さ誰か遣られるな。』

『誰だべえ?』

『お常ッ子だべえな。』と、お申婆が聲を潛めた。『先刻、俺ア來る時、巡査ア彼家へ行つたけどら。今日檢査の時ア裏の小屋さ隱れたつけア、誰か知らせたべえな。昨日から顏色ア惡くてらけもの。』

『そんでヤハアお常ッ子も罹つたアな。』と囁いて、一同は密と松太郎を見た。お由の眼玉はギ

ロリと光つた。

松太郎は、首を垂れて、涎を流して、何か『ウ。』と唸つてゐる。

跫音は遠く消えた。

『歸るべえどら。』と、顏のしやくつたのが先づ立つた。松太郎は、ゴロリ、崩れる如く横になつて了つた。

それから一時間許り經つた。

松太郎はポカリと眼を覺ました。寒い。爐の火が消えかゝつてゐる。ブルッと身顫ひして體を半分擡げかけると、目の前にお由の大きな體が横たはつてゐる。眠つたのか、小動ぎもせぬ。右の頬片を板敷にベタリと附けて、其顏を爐に向けた。幽かな火光が怖しくもチラ〳〵とそれを照らした。

別の鋭さが松太郎の體中に傳はつた。見よ、お由の顏！　背を喰縛つて、眼を堅く閉ぢて、ピリ〳〵と眼尻の筋肉が痙攣けてゐる。髪は亂れたまゝ、衣服も披かつたまゝ……。

氷の樣な恐怖が、松太郎の胸に斧の如く打込んだ。彼は今、生れて初めて、何の虚飾なき人生の醜惡に面接した。酒に荒んだ、生理作用を失つた、四十女の淺猿しさ！

松太郎はお由の[illegible]を[illegible]らぬ。

『ウ、ウ、ウ。』

とお由は唸つた。眼が開き相だ。松太郎は何と思つたか、又ゴロリと横になつて、眼を瞑つて、息を殺した。

お由は二三度唸つて、立ち上つた氣勢。下腹が痺れて、便氣の窘逼に堪へぬのだ。昵と松太郎の寢姿を見乍ら、大儀相に枕を跨つて、下駄を穿いたが、その寢姿の哀れに小さく見すぼらしいのがお由の心に憐愍の情を起させた。俺が居なくなつたら奈何して飯を食ふだらう？と思ふと、何がなしに理由のない憤怒が心を突く。

『えゝ此譃吐者、天理も糞も……』

これだけを、お由は苦し氣に怒鳴つた。そして裏口から出て行つた。

渠は、ガバと跳び起きた。そして後をも見ずに次の間に驅け込んで、蒲團を引出すより早く、其中に潛り込んだ。

間もなくお由は歸つて來た。眠つてゐた筈の松太郎が其處に見えない。兩手を腹に支つて、額を強く顰めて、お由は棒の樣に突つ立つたが、出掛けに言つた事を松太郎に聞かれたと思ふと、言ふ許りなき怒氣が肉體の苦痛と共に發した。

『畜生奴！』と先づ眉間聲が突つ走つた。『畜生奴！　畜！　譃吐者！　天理坊主！　よく聽け、コレア、俺ア赤痢に取り附かれたぞ。畜生奴！　譃吐者！　畜生奴！　ウン……』

ドタリとお由が倒つた音。

寢床の中の松太郎は、手足を動かすことを忘れでもした樣に、ピクとも動かぬ。あらゆる手頼の綱が一度に切れて了つた樣で、暗い暗い、深い深い、底の知れぬ穴の中へ、獨りぼつちの魂が石塊の如く落ちてゆく、落ちてゆく。そして、堅く瞑つた兩眼からは、涙が瀧の如く溢れた。瀧の如くとは這麽時に形容する言葉だらう。抑へても溢れる。抑へようともせぬ。噛りついた蒲團の裏も、枕も、濡れる、濡れる、濡れる。……

足跡

冬の長い國のことで、物蔭にはまだ雪が殘つて居り、村端れの溝に芹の葉一片青んではゐないが、晴れた空はそことなく霞んで、雪消の路の泥濘の處々乾きかゝつた上を、春めいた風が薄ら温かく吹いてゐた。それは明治四十年四月一日のことであつた。

新學年始業式の日なので、S村尋常高等小學校の代用敎員、千早健は、平生より少し早目に出勤した。白墨の粉に汚れた木綿の紋附に、裾の擦り切れた長目の袴を穿いて、クリ〳〵した三分刈の頭に帽子も冠らず――渠は帽子も有つてゐなかつた。――亭乎とした體を眞直にして玄關から上つて行くと、早出の生徒は、毎朝、控所の彼方此方から驅けて來て、恭しく渠を迎へる。中には態々渠に叩頭をする許りに、其處に待つてゐるのもあつた。その朝は殊に其數が多かつた。平生の三倍も四倍も……遲緩勝な成績の惡い兒の顏さへ其中に交つてゐた。健は直ぐ、其等の心々に溢れてゐる進級の喜悦を想うた。そして、何がなく心が曇つた。

渠はその朝解職願を懷にしてゐた。

職員室には、十人許りの男女――何れも穢ない扮裝をした百姓達が、物に怖えた樣にキョロキョロしてゐる尋常科の新入生を、一人づつ伴れて來てゐた。職員四人分の卓や椅子、書類入の戸棚などを竝べて、さらでだに狹くなつてゐる室は、其等の人數に埋められて、身動きも出來ぬ程である。これも今來た許りと見える女敎師の並木孝子は、一人で其人數を引受けて少し周章いたといふ態で、腰も掛けずに何やら急がしく卓の上で帳簿を繰つてゐた。

そして、健が入つて來たのを見ると、『あ、先生!』と言つて、ホッと安心した樣な顏をした。

百姓達は、床板に膝を突いて、交る〳〵先を爭ふ樣に健に挨拶した。

『老婆さん、いくら探しても、松三郎といふのは役場から來た學齡簿の寫しにありませんよ。』と、孝子は心持眉を顰めて、古手拭を冠つた一人の老女に言つてゐる。

『ハア。』と老女は當惑した樣に眼をしよぼつかせた。

『無い筈はないでせう。尤も此邊では、戸籍上の名と家で呼ぶ名と違ふのがありますよ。』と、健は喙を容れた。そして老女に、

芋田の鍛冶屋だつたね、婆さんの家は?』

『ハイ。』

『いくら見てもありませんの。役場にも松三郎と届けた筈だつて言ひますし……』と孝子はまた初めから帳簿を繰つて、『通知書を持つて來ないもんですから、薩張分りませんの。』

『可怪いなア。婆さん、役場から眞箇に通知書が行つたのかい? 子供を學校に出せといふ書附が?』

『ハイ。來るにア來ましたども、弟の方のな許りで、此兒(と顎で指して、)のなは今年ア來ませんでなす。それでハア、持つて來なごあんさす。』

『今年は來ない? 何だ、それぢや其兒は九歳か、十歳かだな?』

『九歳。』と、その松三郎が自分で答へた。膝に補布を當てた股引を穿いて、ボロ〳〵の布の無い尻を何枚も〳〵着膨れた、見るから腕白らしい兒であつた。

『尤も、あの歳なら去年の學齢だ。無い筈ですよ、それは今年だけの名簿ですから。』

『去年ですか。』私は又、其點に氣が附かなかつたもんですから……。』と、孝子は少しきまり惡氣にして、其兒の名を別の帳簿に書き入れる。

『それぢや何だね、』と、俺は又老女の方を向いた。『此兒の弟といふのが、今年八歳になつたんだらう。』

『ハイ。』

『何故それは伴れて來ないんだ？』

『ハイ。』

『ハイぢやない。此兒は去年から出さなけれアならないのを、今年まで延したんだらう。其麼風なや不可い、兄弟一緒に寄越すさ。遲く入學さして置いて、卒業もしないうちから、子守をさせるの何のつて下げて了ふ。其麼風だから、此達の奴は徴兵に採られても、大抵上等兵にも成らずに歸つて來る。』

『ハイ。』

『親が惡いんだよ。』

『ハイ、そでごあんすどもなす、先生樣、兄弟何方も一年生だら、可笑ごあんすべアすか？』と、老女は黒齒の落ちた齒を見せて、テレ隱しに追從笑ひをした。

『構ふもんか。弟が内務大臣をして兄は[illegible]の部長をしてゐた人さへある。一緒な位何でもないさ。』

『ハイ。』

『婆さんの理窟で行くと、兄が死ねば弟も死ななけれアならなくなる。俺の姉は去年死んだけれども俺は恁うして生きてゐる。然うだ、過日死んだ馬喰さんは、婆さんの同胞だつていふぢやないか？』

『アッハヽヽ。』と、居並ぶ百姓達は皆笑つた。

『婆さんだつて其通りチャンと生きてゐる。ハヽ。兎に角弟の方も今年から寄越すさ。明日と明後日は休みで、四日から授業が始まる。その時此兒と一緒に。』

『ハイ。』

『眞箇だよ。寄越さなかつたら俺が迎ひに行くぞ。』

さう言ひながら立ち上つて、俺は孝子の隣の卓に行つた。

『お手傳ひしませう。』

『濟みませんけれども、それでは何卒。』

『あもう八時になりますね。』と、實は孝子の頭の上に掛つてゐる時計を見上げた目を移して、障子一重で隔てた宿直室を、顎で指した。『まだ飯を出さないんですか？』

孝子は笑つて點頭いた。

その宿直室には、校長の安藤が家族——妻と二人の子供——と共に住んでゐる。朝飯の準備が今漸々出來たところと見えて、茶碗や皿を食卓に並べる音が聞える。無精者の細君は何やら呟々子供を叱つてゐた。

新入生の一人々々を、學齢兒童調書に突合して、俺はそれを學籍簿に記入し、孝子は新しく出席簿を拵へる。讀本を買はねばならぬかとか、石盤は石石盤が可いか紙石盤が可いかとか、塗板も有たせねばならぬかとか、父兄は一人々々同じ樣な事を繰返して訊く。孝子は一々それに答へる。すると今度は俺の前に叩頭をして、子供の平生の行狀やら癖やら、體の弱い事などを述べて、何分よろしく〳〵と頼む。新入生は後から〳〵と續いて狭い教員室に溢れた。

忠一といふ、今度尋常科の三年に進んだ校長の長男が、用もないのに怖々しながら入つて來て、甘える樣な姿態をして俺の卓に倚掛つた。

『彼方へ行け、彼方へ。』と、俺は烈しい調子で、隣室にも聞える樣に叱つた。

『は。』と言つて、猾さうな、臆病らしい眼附で健の顏を見ながら、忠一は徐々と後退りに出て行つた。爲樣のない横着な兒で、今迄健の受持の二年級であつたが、外の敎師も生徒等も、校長の子といふのでそれとなく遠慮してゐる。健はそれを、人一倍嚴しく叱る。五十分の授業の間を敎室の隅に立たして置くなどは珍しくない事で、三日に一度は、罰として放課後の敎室の掃除當番を吩附ける。其麼時は、無性者の母親がよく健の前へ來て、抱いてゐる梅ちやんといふ兒に胸を披けて大きい乳房を含ませながら、

『千早先生、家の忠一は今日も何か惡い事しあんしたべすか?』などと言ふことがある。

『は。忠一さんは日增しに惡くなる樣ですね。今日も權太といふ子供が新しく買つて來た墨を、自分の机の中に隱して知らない振りしてゐたんですよ。』

『こら、彼奴』『け。』と、校長は聞きかねて細君を叱る。

『それだつてなす、毎日惡い事許りして千早先生に御迷惑かける樣なんだハンテ、よくお聞き申して置いて、後で私もよツく吩附けて置くべと思つてす。』

健は平然として卓隣りの秋野といふ老敎師と話を始める。校長の妻は、まだ何か言ひたげにして、上吊つた眉をピリ〳〵させながら其處に立つてゐる。然うしてるところへ、掃除が出來たと言つて、掃除監督の生徒が通知に來る。

『黑板も綺麗に拭いたか?』

『ハイ。』

『先生に見られても、少しも小言を言はれる點が無い樣に出來たか?』

『ハイ。』

『若し粗末だつたら、明日また爲直させるぞ。』

『ハイ。立派に出來ました。』

『好し。』と言つて、健は莞爾して見せる。『それでは一同歸しても可い。お前も歸れ。それからな、今先生が行くから忠一だけは敎室に殘つて居れと言へ。』

『ハイ。』と、生徒の方も嬉しさうに莞爾して、活潑に一禮して出て行く。健の恁麼訓導方は、尋常二年には餘りに嚴し過ぎると他の敎師は思つてゐた。然しその爲に健の受持の組は、他級の生徒から羨まれる程規律がよく、少し物の解つた高等科の生徒などは、何彼につけて尋常二年に笑はれぬ樣にと心懸けてゐる程であつた。

軈て健は二階の敎室に上つて行く。すると、校長の妻は密乎と其後を跟けて行つて、敎室の外から我が子の叱られてゐるのを立ち聞きする。意氣地なしの校長は校長で、これも我が子の泣いてゐる顏を思ひ浮べながら、明日の敎案を書く……

健が殊更校長の子に嚴しく當るのは、其兒が人一倍惡戲に長けて、横着で、時にはその生先が危ぶまれる樣な事まで爲出かす爲めには違ひないが、一つは渠の性質に、其麼事をして或る感情の滿足を求めると言つた樣な點があるのと、又、然うする方が他の生徒を取締る上に都合の好い爲めでもあつた。渠が忠一を虐めることが嚴しければ嚴しい程、他の生徒は渠を偉い敎師の樣に思つた。

そして、女敎師の孝子にも、健の其麼行動が何がなしに快く思はれた。時には孝子自身も、人のゐない處へ忠一を呼んで、手嚴しく譴めてやることがある。それは孝子にとつても或る滿足であつた。

孝子は半年前に此學校に轉任して來てから、日一日と經つうちに、何處の學校にもない異樣な現象を發見した。それは校長と健との妙な對照で、健は自分より四圓も月給の安い一代用

教員に過ぎないが、生徒の服してゐることから言へば、健が校長の樣で、校長の安藤は女教師の自分よりも生徒に侮られてゐた。孝子は師範女子部の寄宿舍を出てから二年とは經たず、一生を教育に獻げようとは思はぬまでも、授業にも讀書にもまだ相應に興味を有つてる頃ではあり、何處か氣性の確固した、判斷力の勝つた女なので、日頃校長の無能が女ながらも齒痒い位、殊にも、その妻のだらしの無いのが見るも厭で、毎日顏を合してゐながら、碌すつぽ口を利かぬことさへ珍しくない。そして孝子には、萬事に生々とした健の烈しい氣性――その氣性の輝いてゐる、笑ふ時は十七八の少年の樣に無邪氣に、眞摯な時は二十六七にも、もつと上にも見える渠の眼、（それを孝子は、寫眞版などで見た奈勃翁の眼に肖たと思つてゐた。）――その眼が此學校の精神でもあるかのやうに見えた。健の眼が右に動けば、何百の生徒の心が右に行く、健の眼が左に動けば、何百の生徒の心が左に行く、と孝子は信じてゐた。そして孝子自身の心も、何時しか健の眼に隨つて動く樣になつてゐる事は、氣が附かずにゐた。

齡から言へば、孝子は二十三で、健の方が一歳下の弟である。が、健は何かの事情で早く結婚したので、その頃もう小兒も有つた。そして其家が時として其日の糧にも差支へる程貧しい事は、村中知らぬ者もなく、健自身も別段隱す風も見せなかつた。或る日、健は朝から浮かぬ顏をして、十分の休み毎に欠伸許りしてゐた。

「奈何なさいましたの、千早先生、今日はお顏色が良くないぢやありませんか？」

と孝子は何かの機會に訊いた。健は出かゝつた生欠伸を噛んで、

「何有。」と言つて笑つた。そして、

「今日は煙草が切れたもんですからね。」

孝子は何とも言ふことが出來なかつた。健が平生人に魂消られる程の喫煙家で、職員室に入つて來ると、甚麼事があらうと先づ煙管を取り上げる男であることは、孝子もよく知つてゐた。卓隣りの秋野は其煙草入を出して健に薦めたが、渠は其日一日喫まぬ積りだつたと見えて、煙管も持つて來てゐなかつた。そして、秋野の煙管を借りて、美味さうに二三服續け樣に喫んだ。孝子はそれを見てゐるのが、何がなしに辛かつた。宿へ歸つてからまで其事を思出して、何か都合の好い名儀をつけて、健に金を遣る途はあるまいかと考へた事があつた。又去年の一夏、健が到頭古袷を着て過した事、それで左程暑くも感じなかつたといふ事なども、渠自身の口から聞いてゐたが、村の噂はそれだけではなかつた。其夏、毎晩夜遲くなると、健の家――或る百姓家を半分劃つて借りてゐた――では、障子を開放して、居たゝまらぬ位杉の葉を燻しては、中で頻りに團扇で煽いでゐた。それは多分蚊帳が無いので、然うして蚊を逐出してから寢たのだらうといふ事であつた。其麼に苦しい生活をしてゐて、渠には些とも心を痛めてゐる風がない。朝から晩まで、眞に朝から晩まで、子供等を對手に怡々として暮らしてゐる。

孝子が初めて此學校に來た秋の頃は、毎朝昧爽から朝飯時まで、自宅に近所の子供等を集めて「朝讀」といふのを遣つてゐた。朝な〳〵、黎明の光が漸く障子に仄めいた許りの頃、早く行くのを競つてゐる子供等――主に高等科の――が戶外から聲高に友達を呼び起して行くのを、孝子は毎朝の樣にまだ臥床の中で聞いたものだ。冬になつて朝讀が出來なくなると、健は夜な夜な九時頃までも生徒を集めて、算術、讀方、綴方から歷史や地理、古來の偉人の傳記逸話、年上の少年には英語の初步なども授けた。此二月村役場から話があつて、學校に壯丁教育の夜學を開いた時は、三週間の期間を十六日まで健が

一人で敎へた。そして終ひの五日間は、毎晩裾から吹き上げる夜寒を怺へて、二時間も三時間も敎壇に立つた爲めに風邪を引いて寢たのだといふ事であつた。

それでゐて、健の月給は唯八圓であつた。そして、その八圓は何時でも前借になつてゐて、二十一日の月給日が來ても、いつの月でも健には、同僚と一緒に月給の渡されたことがない。四人分の受領書を持つて行つた校長が、役場から歸つて來ると、孝子は大抵紙幣と銀貨を交ぜて十二圓渡される。檢定試驗上りの秋野は十三圓で、古い師範出の校長は十八圓であつた。そして、校長は氣の毒相な顏をし乍ら、健にはぞんざいな字で書いた一枚の前借證を返してやる。渠は平然としてそれを受取つて、クルクルと圓めて火鉢に燻べる。淡い焰がメラ〳〵と立つかと見ると、直ぐ消えて了ふ。と、渠は不揃ひな火箸を取つて、白くなつて小く殘つてゐる其灰を突く。突いて、突いて、そして上げた顏は平然としてゐる。

孝子は氣の毒さに見ぬ振りをしながらも、健の其態度をそれとなく見てゐた。そして譯もなく胸が迫つて、泣きたくなることがあつた。其麽時は、孝子は用もない帳簿などを弄つて、人後まで殘つた。月給を貰つた爲めに怡々して早く歸るなどと、思はれたくなかつたのだ。

孝子の目に映つてゐる健は、月給八圓の代用敎員ではなかつた。孝子は或る時その同窓の女友達の一人へ遣つた手紙に、この若い敎師のことを書いたことがある。若しや詰らぬ疑ひを起されてはといふ心配から、健には妻子のあることを詳しく記した上で、

『私の學校は、この千早先生一人の學校と言つても可い位よ。奧樣やお子樣のある人とは見えない程若い人ですが、男生でも女生でも千早先生の言ふことをきかぬ者は一人もありません。そら、小野田敎諭がいつも言つたでせう――敎育者には敎育の精神を以て敎へる人と、敎育の形式で敎へる人と、二種類ある。後者には何人でも成れぬことはないが、前者は百人に一人、千人に一人しか無いもので、學んで出來ることではない、謂はば生來の敎育者である――ツて。千早先生はその百人に一人しかない方の組よ。敎授法なんかから言つたら、先生は亂暴よ、隨分亂暴よ。今の時間は生徒と睨めツくらをして、敗けた奴を立たせることにして遊びましたよなどと言ふ時があります。(遊びました)といふのは譃で、先生は其麽事をして、生徒の心の散るのを御自分の一身に集めるのです。さうしてから授業に取り懸るのです。偶に先生が缺勤でもすると、私が掛持で尋常二年に出ますの。生徒は決して、私ばかりでなく誰のいふことも、聞きません。先生の組の生徒は、先生のいふことでなければ聞きません。私は其麽時、「千早先生はさう騷いでも可いと敎へましたか?」と言ひます。すると、直ぐ靜肅になつて了ひます。先生は又、敎案を作りません。その事で何日だつたか、巡つて來た郡視學と二時間許り議論をしたのよ。その時の面白かつたこと! 結局視學の方が敗けて胡麻化して了つたの。

『先生は尋常二年の修身と體操を校長にやらして、その代り高等科(校長の受持)の綴方と歷史地理に出ます。今度は千早先生の時間だといふ時は、鐘が鳴つて控所に生徒の列んだ時、その高等科の生徒の顏色で分ります。

『尋常二年に由松といふ兒があります。それは生來の低腦者で、七歲になる時に燐寸を弄んで、自分の家に火をつけて、ドン〳〵燃え出すのを、手を打つて喜んでゐたといふ兒ですが、先生は御自分の一心で是非由松を普通の子供にすると言つて、暇さへあればその由松を膝の間に坐らせて、(先生は腰かけて、)上から睨と見下

しながら、肩に手をかけて色々なことを言つて聞かせてゐます。その時だけは由松も大人しくしてゐて、終ひには屹度メソ〳〵泣き出して了ひますの。時として先生は、然うしてゐて十分も二十分も默つて由松の顏を見てゐることがあります。二三日前でした、由松は先生と然うしてゐて、突然眼を瞑つて背後に倒れました。先生は靜かに由松を抱いて小使室へ行つて、頭に水を掛けたので子供は蘇生しましたが、私共は一時喫驚しました。先生は、「私の精神と由松の精神と角力をとつて、私の方が勝つたのだ。」と言つて居られました。その由松は近頃では清書なんか人並に書く樣になりました。算術だけはいくら骨を折つても駄目ださうです。

秀子さん、そら、あの寄宿舍の談話室ね、彼處の壁にペスタロッチが子供を敎へてゐる畫が掛けてあつたでせう。あのペスタロッチは瘦せて骨立つた老人でしたが、私、千早先生が由松に物を言つてるところを橫から見てゐると、何んといふことなくあの畫を思ひ出すことがありますの。それは先生は、無論一生を敎育事業に獻げるお積りではなく、お家の事情で當分あゝして居られるのでせうが、私は然麼人を長く敎育界に留めて置かぬのが、何より殘念な事と思ひます。先生は何か人の知らぬ大きな事を考へて居られる樣ですが、私共には分りません。然しそのお話を聽いてゐると、常々私共の行きたい行きたいと思つてる處――何處ですか知りませんが――へ段々連れて行かれる樣な氣がします。そして先生は、自分は敎育界の獅子身中の蟲だと言つて居られるの。又、今の社會を改造するには先づ小學敎育を破壞しなければいけない、自分に若し二つ體があつたら、一つでは一生代用敎員をしてゐたいと言つてます。奈何して小學敎育を破壞するかと訊くと、何有ホンの少しの違ひです、人を生れた時の儘で大きくならせる方針を取れや可いんですと答へられました。

一然し秀子さん、千早先生は私にはまだ一つの謎です。何處か分らないところがあります。ですけれども、毎日同じ學校にゐて、毎日先生の爲さる事を見てゐると、どうしても敬服せずには居られませんの。先生は隨分苦しい生活をして居られます。それはお氣の毒な程です。そして、先生の奧樣といふ人は、矢張り好い人で、優しい、美しい、（但し色は少し黑いけれど。）親切な方です。……」

と書いたものだ。實際それは孝子の思つてる通りで、この若い女敎師から見ると、健が月末の出席歩合の調べを怠けるのさへ、コセ〳〵した他の敎師共より偉い樣に見えた。が、流石は女心で、例へば健が郡視學などと揶揄半分に議論をする時とか、父の目の前で手嚴しく忠一を叱る時などは、傍で見る目もハラハラして、顏を擧げ得なかつた。

今も、健が聲高に忠一を叱つたので、宿直室の話聲が礑と止んだ。孝子は耳敏くもそれを聞き附けて忠一が後退りに出て行くと、

『まア、先生は！』と低聲に言つて、口を窄めて微笑みながら健の顏を見た。

『ハハヽヽ。』と、渠は輕く笑つた。そして、眼を圓くして直ぐ前に立つてゐる新入生の一人に、

『可いか。お前も學校に入ると、不斷先生の斷りなしに入つては不可いといふ處へ入れば、今の人の樣に叱られるんだぞ。』

『ハ。』と言つて、其兒はピョコリと頭を下げた。火傷の痕の大きい禿が後頭部に光つた。

『忠一イ。忠一イ。』と、宿直室から校長の妻の呼ぶ聲が洩れた。健と孝子は目と目で笑ひ合つた。

軈て、埃に染みた、黑の詰襟の洋服を着た校長の安藤が出て來て、健と代つて新入生を取

り扱つた。健は自分の卓に行つて、その受持の教務にかゝつた。

九時半頃、秋野教師が遲刻の辯疏を爲い〳〵入つて來て、何時も其室の柱に懸けて置く黑繻子の袴を穿いた時は、後から〳〵と來た新入生も大方來盡して、職員室の中は空いてゐた。健は卓の上から延び上つて、其處に垂れて居る索を續け樣に強く引いた。壁の彼方では勇しく號鐘が鳴り出す。今か〳〵とそれを待ちあぐんでゐた生徒等は、一しきり春の潮の湧く樣に騷いだ。

五分とも經たぬうちに、今度は秋野がその鐘索を引いて、先づ控所へ出て行つた。と、健は校長の前へ行つて、半紙を八つに疊んだ一枚の紙を無造作に出した。

『これ書いて來ました。何卒宜しく願ひます。』

笑ふ時目尻の皺の深くなる、口髭の下向いた、寒さうな、人の好ささうな顏をした安藤は、臆病らしい眼附をして其紙と健の顏を見比べた。前夜訪ねて來て書式を聞いて行つたのだから、展けて見なくとも解職願な事は解つてゐる。

そして、妙に喉に絡まつた聲で言つた。

『然うでごあんすか。』

『は。何卒。』

綴ぢ了へた許りの新しい出席簿を持つて、立ち上つた孝子は、チラリと其疊んだ紙を見た。そして、健が四月に罷めると言ふのは豫々聞いてゐた爲めであらう、それが若しや解職願ではあるまいかと思はれた。

『何と申して可いか……ナンですけれども、お決めになつてあるのだば爲方がない譯でごあんす。』

『何卒宜しく、お取り計ひを願ひます。』

と言つて健は、輕く會釋して、職員室を出て了つた。その後から孝子も出た。

控所には、級が新しくなつて列ぶべき場所の解らなくなつた生徒が、ワヤ〳〵と騷いでゐた。秋野は其間を縫つて歩いて、『先の場所へ列ぶのだ、先の場所へ。』と叫んでゐるが、生徒等は、自分達が皆及第して上の級に進んだのに、今迄の場所に列ぶのが不見識な樣にでも思はれるかして、仲々言ふことを聞かない。と見た健は、號令壇を兼ねてゐる階段の上に突立つて、『何を騷いでゐる。』と呶鳴つた。耳を聾する許りの騷擾が、夕立の霽れ上る樣にサッと收つて、三百近い男女の瞳はその顏に萃まつた。

『一同今迄の場所に今迄の通り列べ。』

ゾロ〳〵と足音が亂れて、それが鎭まると各級は皆規則正しい二列縱隊を作つてゐた。闃乎として話一つする者がない。新入生の父兄は、不思議相にしてそれを見てゐた。

渠は緩りした歩調で階段を降りて、秋野と共に各級をその新しい場所に導いた。孝子は新入生を集めて列を作らしてゐた。

校長が出て來て壇の上に立つた。密々と話聲が起りかけた。健は後ろの方から一つ咳拂ひをした。話聲はそれで又鎭まつた。

『えゝ、今日から明治四十年度の新しい學年が始まります……』と、校長は兩手を邪魔相に前で揉みながら、低い、怖々した樣な聲で語り出した。二分も經つか經たぬに、『三年一萬九百日。』と高等科の生徒の一人が、妙な聲色を使つて言つた。

『叱ッ。』と秋野が制した。潛笑ひの聲は漣の樣に傳はつた。そして新しい密語が其に交つた。

それは丁度今の並木孝子の前の女教師が他村へ轉任した時――去年の十月であつた。――安藤は告別の辭の中で『三年一萬九百日』と誤つて言つた。その女教師は三年の間この學校にゐたつたのだ。それ以來年長の生徒は何時もこの事を言つては、校長を輕蔑する種にしてゐる。

丁度この時、健もその事を思ひ出してゐたので、も少しで渠も笑ひを洩らすところであつた。

　寄話の聲は漸々高まつた。中には聲に出して何やら笑ふのもある。と、孝子は草履の音を忍ばせて健の傍に寄つて來た。

『先生が前の方へ被入ると宜うござんす。』

『然うですね。』と渠も囁いた。

　そして靜かに前の方へ出て、階段の最も低い段の端の方へ立つた。場內はまた水を打つた樣に闃乎とした。

　不圖渠は、總有生徒の目が、諄々と何やら話を續けてゐる校長を見てゐるのでなく、渠自身に注がれてゐるのに氣が附いた。例の事ながら、何となき滿足が渠の情を唆かした。そして、幽かに脣を歪めて微笑んで見た。其處にも此處にも、幽かに微笑んだ生徒の顏が見えた。

　校長の話が濟んで了ふまでも、渠は其處から動かなかつた。

　それから生徒は、瘦せた體の何處から出るかと許り高い渠の號令で、各々その新しい教室に導かれた。

　四人の職員が再び職員室に顏を合せたのは、もう十一時に間のない頃であつた。學年の初めは諸帳簿の綴變へやら、前年度の調べ物の殘りやらで、雜務が仲々多い。四人はこれといふ話もなく、十二時が打つまでも孜々とそれを行つてゐた。

『安藤先生。』と孝子は呼んだ。

『ハ。』

『今日の新入生は合計で四十八名でございます。その內、七名は去年の學齡で、一昨年のが三名ございますから、今年の學齡で來たのは三十八名しかありません。』

『然うでごあんすか。總體で何名でごあんしたらう？』

『四十八名でございます。』

『否、本年度の學齡兒童數は？』

『それは七十二名といふ通知でございます、役場からの。でございますから、今日だけの就學步合では六十六、六六七にしか成りません。』

『少ないな。』と校長は首を傾けた。

『何有、毎年今日はそれ位なもんでごあんす。』と、十年もこの學校にゐる土地者の秋野が喙を容れた。『授業の初まる日になれば、また二十人位ア來あんすでア。』

『少ないなア。』と、校長はまた同じ事を言ふ。

『奈何です。』と健は言つた。『今日來なかつたのへ、明日明後日の中に役場から又督促さして見ては？』

『何有、明々後日にならば、二十人は屹度來あんすでア。保險附だ。』と、秋野は鉛筆を削つてゐる。

『二十人來るにしても、三十八名に二十……殘部十五名の不就學兒童があるぢやありませんか？』

『督促しても、來るのは來るし、來ないのは來なごあんすぜ。』

『ハハヽヽ。』と健は譯もなく笑つた。『可いぢやありませんか、私達が草鞋を穿いて步くんぢやなし、役場の小使を步かせるのですもの。』

『來ないのは來ないでせうなア。』と、校長は獨語の樣に意味のないことを言つて、卓の上の手焙の火を、煙管で突ついてゐる。

『一學年は並木さんの受持だが、御意見は奈何です？』

　然う言ふ健の顏に、孝子は一寸薄目を與れて、

『それア私の方は……』と言ひ出した時、入口の障子がガラリと開いて、淺黃がかつた縞の古袷に、羽織も着ず、足袋も穿かぬ小造りの男が、セカ〱と入つて來た。

『やア、誰かと思つたば東川さんか。』と、秋野

は言つた。
『其麼に吃驚する事はねえさ。』
然う言ひながら東川は、型の古い黒の中折を書類入の戸棚の上に載せて、
『ヤアお急しい樣でごあんすな。好いお天氣で。』と、一同に挨拶した。そして、手づから椅子を引き寄せて、遠慮もなく腰を掛け、校長や秋野と二言三言話してゐたが、何やら氣の急ぐ態度であつた。その横顏を健は凝と凝視めてゐた。齢は三十四五であるが、頭の頂邊が大分圓く禿げてゐて、左眼が潰れた眼の上に度の強い近眼鏡をかけてゐる。小形の鼻が尖つて、見るから一癖あり相な、拔け目のない顏立ちである。
『時に。』と、東川は話の斷れ目を待ち構へてゐた樣に、椅子を健の卓に向けた。『千早先生。』
『何です？』
『實は其用で態々來たのだがなす、先生、もう出したすか？　未だすか？』
『何をです？』
『何をッて。其麼に白ばくれなくても可ごあんすべ。出したすか？　出さねえすか？』
『だから何をさ？』
『解らない人だなア。辭表をす。』
『あゝ、その事てすか。』
『出したすか？　出さねえすか？』
『何故？』
『何故ッて。用があるから訊くのす。』
よくツケ〳〵と人を壓迫ける樣な物言ひをする癖があつて、多少の學識もあり、村で健が友人扱ひをするのは此男の外に無かつた。若い時は青雲の夢を見たもので、機會あらば宰相の位にも上らうといふ野心家であつたが、財産のなくなると共に徒らに村の物笑ひになつた。今では村會議員に學務委員を兼ねてゐる。
『出しましたよ。』と、健は平然として答へた。
『眞個すか？』と東川は力を入れる。
『ハヽヽ。』
『だハンテ若い人は困る。人が甚麼に心配してるかも知らないで、氣ばかり早くてさ。』
『それ〳〵、煙草の火が膝に落ちた。』
『これだ！』と、呆れたやうな顏をしながら、それでも急いで吸殻を膝から拂ひ落して、『先生、出したつても今日の事だから、まだ校長の手許にあるべアハンテ、今の間に戻してござれ。』
『何故？』
『いやサ、詳しく話さねえば解らねえが……實はなす。』と穩かな調子になつて、『今日何も知らねえで役場さ來てみたのす。そすると稗市助役が、一寸別室で呼ぶだハンテ、何だと思つて見だば先生の一件さ。昨日逢つた時、明日辭表を出すつてゐだつけが、何しろ村教育も漸々發展の緒に就いた許りの時だのに、千早先生に罷められては誠に困る。それがと言つて今は村長も留守で、正式に留任勸告をするにも都合が惡い。何れ二三日中には村長も歸るし、七日には村會も開かれるのだから、兎も角もそれまでは是非待つて貰ひたいと言ふのです。それで畢竟は稗市助役の代理になつて、今俺ア飛んで來たどころす。解つたすか？』
『解るには解つたが、……奈何も御苦勞でした。』
『御苦勞も糞も無えが、なす、先生、然う言ふ譯だハンテ、何卒一先づ戻して貰つてござれ。』
戻して貰へ、といふ、その「貰へ」といふ語が矜持心の強い健の耳に鋭く響いた。そして、適確した調子で言つた。
『出來ません、其麼事は。』
『それだハンテ困る。』
『御好意は十分有難く思ひますけれど、爲方がありません、出して了つた後ですから。』
秋野も校長も孝子も、鳴を潛めて二人の話を聞いてゐた。

一出したと言つたところです、それが未だ學校の中にあるうちだけ、謂はば未だ内輪だけの事でアねえすか?』
『東川さん、折角の御勸告は感謝しますけれど、貴方は私の氣性を御存知の筈です。私は一旦出して了つたのは、奈何あつても、譬へそれが自分に不利益であつても取り戻すことは厭です。内輪だらうが外輪だらうが、私は其麽事は考へません。』
然う言つた健の顏は、もう例の平然とした態に歸つてゐて、此上いくら言つたとて動きさうにない。言ひ出しては後へ退かぬ健の氣性は、東川もよく知つてゐた。
東川は突然椅子を捻ぢ向けた。
『安藤先生。』
その聲は、今にも喰つて掛るかと許り烈しかつた。來すナ、と健は思つた。
『は?』と言つて、安藤は目の遣り場に困る程周章いた。
『先生ア貴方達に千早先生の辭表を受け取つたすか?』
『は。……いや、それでごあんすでは。今も申上げようかと思ひあんしたども、お話中に容喙するも惡いと思つて、默つてあんしたが、先刻その、[illegible]鐘が鳴つて今始業式が始まるといふ時、お出しになりあんしてなす。ハ、これでごあんす。』と、硯箱の下から其解職願を出して、『何れ後刻で緩くりお話しようと思つてあんしたつたども、今迄その暇がなくて一寸此處にお預りして置いた譯でごあんす。何しろ思ひ懸けないことでごあんしてなす。ハ。』
『その書式を教へたのは誰だ?』と健は心の中で嘲笑つた。
『然うすか、解職願お出しエんしたのすか? 俺ア少しも知らなごあんしたオなす。』と、秋野は初めて知つたと言ふ風に言つた。『千早先生も又、甚麽御事情だかも知れねえども、今急にお罷めアねえくとも宜うごあんすべアすか?』
『安藤先生、』と東川は呼んだ。『そせば先生も、その辭表を一旦お戻しやる積りだつたのだなす?』
『ハ。然うでごあんす。何れ後刻でお話しようと思つて、受け取つた譯でアごあんせん、一寸お預りして置いただけでごあんす。』
『お戻しやれ、そだら。』と、東川は命令する樣な調子で言つた。『お戻しやれ、お聞きやつた樣な譯で、今それを出されでア困りあんすでば。』
『ハ。奈何せ私も然う思つてだのでごあんすアハンテ、お戻しすあんす。』と、顏を曇らして言つて、頰を凹ませてヂウ/\する煙管を強く吸つた。戻すも工合惡く、戻さぬも工合惡いといつた態度である。
健は横を向いて、煙草の煙をフウと長く吹いた。
『お戻しやれ。俺ア學務委員の一人として勸告しあんす。』
安藤は思ひ切り惡く椅子を離れて、健の前に立つた。
『千早さん、先刻は急しい時で……』と諄々辯疏を言つて、『今お聞き申して居れば、役場の方にも種々御事情がある樣でごあんすゝ、一寸お預りしただけでごあんすから、兎に角これはお返し致しあんす。』
然う言つて、解職願を健の前に出した。その手は顫へてゐた。
健は待つてましたと言はぬ許りに急に難しい顏をして、霎時、凝と校長の揉手をしてゐるその手を見てゐた。そして言つた。
『それでは、直接郡役所へ送つてやつても宜うございますか?』
『これはしたり!』
『先生。』『先生。』と、秋野と東川が同時に言つ

た。そして東川は續けた。
「然うは言ふもんでアない。今日は俺の顔を立てゝ呉れても可いでアねえすか？」
『ですけれど……それア安藤先生の方で、お考へ次第進退するのを延さうと延すまいと、それは私には奈何も出來ない事ですけれど、私の方では前々から決めてゐた事でもあり、且つ、何が何でも一旦出したのは、取るのは厭ですよ。それも私一人の爲めに村教育が奈何の愆うのと言ふのではなし、却つてお邪魔をしてる樣な譯ですからね。』と言つて、些と校長に横眼を與れた。
「マ、マ、然うは言ふもんでア無えでばサ。前々から決めておいた事は決めて置いた事として、茲はまア村の頼みを肯いて呉れても可いでアねえすか？　それも唯、一週間か其處いら待つて貰ふだけの話だもの。」
「兎に角お返ししあんす。」と言つて、安藤は手持無沙汰に自分の卓に歸つた。
『安藤先生。』と、東川は又喰つて掛る樣に呼んだ。「先生もまた、も少し何とか言ひ方が有りさうなもんでアねえすか？　今の樣でア、宛然俺に言はれた許りで返す樣でアねえすか？　先生には、千早先生が何れだけこの學校に要のある人だか解らねえすか？」
『ハ？』と、安藤は目を怖々さして東川を見た。意氣地なしの、能力の無い其顔には、ありありと當惑の色が現れてゐる。
と、健は、然うして擦つた揉んだと果てしなく諍つてるのが、——校長の困り切つてるのが、何だか面白くなつて來た。そして、つと立つて、解職願を又校長の卓に持つて行つた。
「兎に角之は貴方に差上げて置きます。奈何なさらうと、それは貴方の御權限ですが……」
と言ひながら、傍から留めた秋野の言葉は聞かぬ振をして、自分の席に歸つて來た。
「困りあんしたなア。」と、校長は兩手で頭を押へた。
眇目の東川も、意地惡い興味を覺えた樣な顔をして、默つてそれを眺めた。秋野は煙管の雁首を見ながら煙草を喫んでゐる。
と、今迄何も言はずに、四人の顔を見廻してゐた孝子は、思ひ切つた樣に立ち上つた。
『出過ぎた樣でございますけれども……あの、それは私がお預り致しませう。……千早先生も一旦お出しになつたのですから、お厭でせうし、それでは安藤先生もお困りでせうし、役場には又、御事情がお有りなのですから……』
と、心持息を逸ませて、呆氣にとられてゐる四人の顔を急しく見廻した。そして默りと肥つた手で靜かにその解職願を校長の卓から取り上げた。
「お預りしても宜しうございませうか？　出過ぎた樣でございますけれど。」
『は？　は。それア何でごあんす……』と言つて、安藤は密と秋野の顔色を覗つた。秋野は默つて煙管を咬へてゐる。
月給から言へば、秋野は孝子の上である。然し資格から言へば、同じ正教員でも一人は檢定試驗上りで、一人は女ながらも師範出だから、孝子は校長の次席なのだ。
秋野が預るとすると、男だから、且つは土地者だけに種々な關係があつて、屹度何かの反響が起る。孝子はそれも考へたのだ。そして、
「私の樣な無能者がお預りしてゐると、一番安全でございます。ホホヽヽ。」と、取つてつけた樣に笑ひながら、校長の返事も待たず、その八つ折りの紙を袴の間に挾んで、自分の席に復した。その顔はぽうッと赧らんでゐた。
常にない其行動を、健は目を圓くして眺めた。
「成程。」と、その時東川は膝を叩いた。「並木

先生は偉い。出來した、出來した、なアる程それが一番だ。』と言ひながら健の方を向いて、
『千早先生も、それなら可がべす?』
『並木先生。』と健は呼んだ。
『マ、マ。』と東川は手を擧げてそれを制した。
『マ、これで可いでば。これで俺の役目も濟んだといふもんだ。ハハヽヽ。』
そして、急に調子を變へて、
『時に、安藤先生。今日の新入學者は何人位ごあんすか?』
『ハ!……えゝと……えゝと、』と、校長は周章いて了つて、無理に思ひ出すといふ樣に眉を顰めた。『四十八名でごあんす。然うでごあんしたなす。並木さん?』
『ハ。』
『四十八名すか? それで例年に比べて多い方すか、少ない方すか?』
話題は變つて了つた。
『秋野先生。』と言ひながら、胡麻鹽頭の、少し腰の曲つた小使が入つて來た。
『お客さアら見えて來たアす。』
『然うか、何用たべな?』と、秋野は小使と一緒に出て行つた。
腕組をして眤と考へ込んでゐた健は、その時つと立ち上つた。
『お先に失禮します。』
『然うすか?』と、人々はその顏——屹と口を結んだ、額の廣い、その顏を見上げた。
『左樣なら。』
健は玄關を出た。處々乾きかゝつてゐる赤土の運動場には、今年初めての黃ろい蝶々が二つ、フハ〳〵と縺れて低く舞つてゐる。隅の方には、柵を潜つて來た四五羽の雞が、コッ〳〵と遊んでゐた。
太い丸太の尖を圓めて二本植ゑた、校門の邊へ來ると、何れ女生徒の遺失したものであらう、小さい赤櫛が一つ泥の中に落ちてゐた。健はそれを足駄の齒で動かしてみた。櫛は二つに折れてゐた。
健が一箇年だけで罷めるといふのは、渠が最初、知合ひの郡視學に會つて、昔自分の學んだ鄕里の學校に出てみたい、と申込んだ時から、その一箇年の在職中も、常々言つてゐた事で、又、渠自身は勿論、渠を知つてゐるだけの人は、誰一人、健を片田舍の小學教師などで埋もれて了ふ男とは思つてゐなかつた。少さい時分から覇氣の壯んな、才氣の溢れた、一時は東京に出て、まだ二十にも足らぬ齡で著書の一つも出した渠——その頃數少なき年少詩人の一人に、千早林鳥の名のあつた事は、今でも記憶してゐる人も有らう。——が、侘しい百姓村の單調な其日々々を、朝から晩まで、熱心に又樂しさうに、育ち卑しき洟垂しの兒女等を對手に遊つてゐるのは、何も知らぬ村の老女達の目にさへ、不思議にも詰らなくも見えてゐた。
何れ何事かやり出すだらう! それは、その一箇年の間の、四圍の人の渠に對する思惑であつた。
加之、年老つた兩親と、若い妻と、妹と、生れた許りの女兒と、それに渠を合せて六人の家族は、いかに生活費のかゝらぬ片田舍とは言へ、又、倹約家の母親がいかに倹つてみても、唯八圓の月給では到底食つて行けなかつた。女二人の手で裁縫物など引き受けて遣つてもゐたが、それとても狹い村だから、月に一圓五十錢の收入は覺束ない。
そして、もう六十に手の達いた父の乘雲は、家の慘狀を見るに見かねて、それかと言つて何一つ家計の補助になる樣な事も出來ず、若い時は雲水もして歩いた僧侶上りの、思ひ切りよく飄然と家出をして了つて、この頃漸く居處が確まつた樣な狀態であつた。

健でないにしたところが、必ず、何かもつと收入の多い職業を見附けねばならなかつたのだ。

『健や、四月になつたら學校は罷めて、何處さか行くべアがな？』と、渠の母親——背中の方が頭よりも高い程腰の曲つた、極く小柄な渠の母親は、時々心配相に恁う言つた。

『あゝ、行くさ。』と、其度渠は恁麼返事をしてゐた。

『何處さ？』

『東京。』

東京へ行く！　行つて奈何する！　渠は以前の經驗で、多少は其名を成してゐても、詩では到底生活されぬ事を知つてゐた。且つは又、此頃の健には些とも作詩の興がなかつた。

小說を書かう、といふ希望は、大分長い間健の胸にあつた。初めて書いてみたのは、去年の夏、もう暑中休暇に間のない頃であつた。『面影』といふのがそれで、晝は學校に出ながら、四日續け樣に徹夜して百四十何枚を書き了へると、渠はそれを東京の知人に送つた。十二三日經つて、原稿はその儘歸つて來た、また別の人に送つて、また歸つて來た。三度目に送る時は、四錢の送料はあつたけれども、添へてやる手紙の郵稅が無かつた。健は、何十通の古手紙を出してみて、漸々一枚、消印の逸れてゐる郵劵を見つけ出した。そしてそれを貼つて送つた。或る雨の降る日であつた。妻の敏子は、到頭金にならなかつた原稿の、包紙の雨に濡れたのを持つて、渠の居間にしてゐる穢しい二階に上つて來た。

『また歸つて來たのか？　アハヽヽヽ。』と渠は笑つた。そして、その儘本箱の中に投げ込んで、二度と出して見ようともしなかつた。

何時の間にか、渠は自信といふものを失つてゐた。然しそれは、渠自身も、周圍の人も氣が附かなかつた。

そして、前夜、短い手紙でも書く樣に、何氣なくスラ／＼と解職願を書きながらも、學校を罷めて奈何するといふ決心はなかつたのだ。

健は、何時もの樣に亭乎とした體を少し反身に、確乎した步調で步いて、行き合ふ兒女等の會釋に微笑みながらも、始終思慮深い眼附をして、

『罷めても食へぬし、罷めなくても食へぬ……。』と、その事許り思つてゐた。

家へ入ると、通し庭の壁際に据ゑた小形の竈の前に小く蹲んで、干菜でも煮るらしく、鍋の下を焚いてゐた母親が、『歸つたか。お腹が減つたつたべアな？』と、強ひて作つた樣な笑顔を見せた。今が今まで我家の將來でも考へて、胸が塞つてゐたためであらう。

縞目も見えぬ洗ひ晒しの双子の筒袖の、袖口の擦り切れたのを着てゐて、白髮交りの頭に冠つた淺黃の手拭の上には、白く灰がかゝつてゐた。

『然うでもない。』と言つて、渠は足駄を脫いだ。

上框には妻の敏子が、垢着いた木綿物の上に女兒を負つて、額にかゝるほつれ毛を氣にしながら、ラムプの火屋を研いてゐた。

『今夜は客があるぞ、屹度。』

『誰方？』

それには答へないで、

『あゝ、今日は急しかつた。』と言ひながら、健は勢ひよくドン／＼梯子を上つて行つた。

（その一、終）

（予が今までに書いたものは、自分でも忘れたい、人にも忘れて貰ひたい。そして、予は今、予にとつての新らしい覺悟を以てこの長篇を書き出してみた。他日になつたら、また、この作をも忘れたく、忘れて貰ひたくなる時があるかも知れぬ。——啄木）

葉書

××村の小學校では、小使の老爺に煮炊をさして校長の田邊が常宿直をしてゐた。その代り職員室で使ふ茶代と新聞代は宿直料の中から出すことにしてある。宿直料は一晩八錢である。茶は一斤半として九十錢、新聞は郵稅を入れて五十錢、それを差引いた殘餘の一圓と外に炭、石油も學校のを勝手に使ひ、家賃は出さぬと來てゐるから、校長はどうしても月に五圓宛得をしてゐる。此木田老訓導は胸の中で斯う勘定してゐる。その所爲でもあるまいが校長に何か宿直の出來ぬ事故のある日には、此木田訓導に乾度差支へがある。代理の役は何時でも代用教員の甲田に轉んだ。も一人の福富といふのは女教員だから自然と宿直を免れてゐるのである。

その日も、校長が缺席兒童の督促に出掛けると言ひ出すと、此木田は春蠶が今朝から上簇しかけてゐると言つて、さつさと歸り支度をした。校長も、年長の生徒に案内をさせる爲めに待たしてあるといふので、急いで靴を穿いて出懸けた。出懸ける時に甲田の卓の前へ來て、

『それでは一寸行つて來ますから、何卒また。』

と言つた。

『は。御緩り。』

『今日は此木田さんに宿直して貰ふ積りでゐたら、さつさと歸つて了はれたものですから。』

校長は目尻に皺を寄せて、氣の毒さうに笑ひ乍ら斯う言つた。そして、冬服の上着のホックを丁寧に脫して、山櫻の枝を手頃に切つた杖を持つて外に出た。六月末の或日の午後である。

校長の門まで出て行く後姿が、職員室の窓の一つから見られた。色の變つた獨逸帽を大事さうに頭に載せた恰好は何時見ても可笑しい。そして、何時でも脚氣患者のやうに足を引摺つて步く。甲田は何がなしに氣の毒な人だと思つた。そして直ぐ可笑しくなつた。やかまし屋の郡視學が巡つて來て散々小言を言つて行つたのは、つい昨日のことである。視學はその時、此學校の兒童出席の步合は、全郡二十九校の中、尻から四番目だと言つた。畢竟これも職員が缺席者督促を勵行しない爲めだと言つた。その責任者は言ふ迄もなく校長だと言つた。好人物の田邊校長は『いや、全くです。』と言つて頭を下げた。それで今日は自分が先づ督促に出かけたのである。

この步合といふ奴は始末にをへないものである。此邊の百姓にはまだ、子供を學校に出すよりは家に置いて子守をさした方が可いと思つてゐる者が少なくない。女の子は殊にさうである。忙しく督促すれば出さぬこともないが、出て來た子供は中途半端から聞くのだから、教師の言ふことが薩張解らない。面白くもない。教師の方でも授業が不統一になつて誠に困る。二三日經てば、自然また來なくなつて了ふ。然しそれでは步合の上る氣づかひはない。其處で此邊の教師は、期せずして皆出席簿に或る手加減をする。そして、譃だと思はれない範圍で、步合を誤魔化して報告する。此學校でも、田邊校長からして多少その祕傳をやつてるのだが、それでさへ仍且尻から四番目だと言はれる。誠に始末にをへないのである。甲田は初めそんな事を知らなかつた。ところがこんなことがあつた。二月の修業證書授與式の時に、此木田の受持の組に

無缺席で以て賞品を貰つた生徒が二人あつた。甲田は偶然その二人が話してるのを聞いた。一人は、俺は三日休んだ筈だと言つた。一人は俺もみんなで七日許り休んだ筈だと言つた。そして二人で、先生が間違つたのだらうか何うだらうかと心配してゐた。甲田は其時思ひ當る節が一つも二つもあつた。そこで翌月から自分も實行した。今でもやつてゐる。それから斯ういふことがあつた。或る朝田邊校長が腹が痛いといふので、甲田が掛持して校長の受持つてる組へも出た。出席簿をつけようとすると、一週間といふものは全然出缺が附いてない。其處で生徒に訊いてみると、田邊先生は時々しか出席簿を附けないと言つた。甲田は竊かに喜んだ。校長も矢張り遣るなと思つた。そして女教師の福富も矢張り、遣るだらうか、女だから遣らないだらうかといふ疑問を起した。或時二人限ゐた時、直接訊いてみた。福富は眞顔になつて、そんな事はした事はありませんと言つた。甲田は、女といふものは正直なものだと思つた。

そして、

『それぢや遣らないのは貴方だけです。』と言つた。福富は目を圓くして、

『まア、校長さんもですか。』と驚いた。

『無論ですとも。盛んに遣つてますよ。』

そこで甲田は、自分がその祕訣を知つた抑々の事から話して聞かした。校長は出席簿を疎々つけないけれども、月末には確然と步合を取つて郡役所に報告する。不正確な出席總數プラス不正確な缺席總數で割つたところで、結局其處に出來る步合は矢張り不正確な步合である、初めから虛僞の報告をする意志が無いと假定したところで、その不正確な步合を正確なものとして報告するには、少なくとも其間に立派に犯罪の動機が成り立つ。いくら好人物で無能な校長でも、この步合は不正確だからといふので、態々控へ目にして報告するほどの頓馬では無いだらうといふのである。そして斯ういふ結論を下した。田邊校長のやうに意氣地のない、不熱心な、無能な教育家は何處に行つたつてあるものぢやない。田邊校長のゐるうちは、此村の教育も先づ以て駄目である。だから我々も面倒臭い事は好い加減にやつて置くべきである。それから郡視學も郡視學である。あの男は、郡視學に取り立てられるといふ話のあつた時、毎日手土產を以て郡長の家へ日參したさうである。すると、郡長は、君はそんなに郡視學になりたいのかと言つたさうである。それから又、近頃は每日君のお蔭で麥酒は買はずに飮めるが辭令を出して了へば、もう來なくなるだらうから、當分俺が握つて置かうかと思ふと言つたさうである。これは噓かも知れないが、何しろあんな郡視學に教育の何たるかが解るやうなら、教育なんて實に下らんものである。あの男は、自分が巡回に來た時、生徒が門まで出て來て叩頭すれば、德育の盛んな村だと思ひ、帳簿を澤山備へて置けば整理のついた學校だと思ふに違ひない。それから又、教育雜誌を成るべく澤山買つて置いて、あの男が來た時、机の上に殖べて見せると、屹度昇給さして吳れる。これは請合である。あんな奴に小言を言はして置くよりは、初めからちやんと步合を誤魔化しておく方が、どれだけ賢いか知れぬ。――

甲田は、斯ういふ徹底しない論理を、臆病な若い醫者が初めて鋭利な外科刀を持つた時のやうな心持で極めて熱心に取り扱つてゐた。そして、慷慨に堪へないやうな顏をして口を噤んだ。太い左の眉がぴり／＼動いてゐた。これは彼にとつては珍らしい事であつた。甲田は何かの拍子で人と爭はねばならぬ事が起つても、直ぐ、・心になるのが莫迦臭いやうな氣がして、笑はなくても可い時に笑つたり、不意に

自分の論理を持出して對手を笑はせたりする。滅多に熱心になることがない。そして、十に一つ我知らず熱心になると、太い眉をぴり〳〵させる。福富も何時かしら甲田の調子に呑まれて了つて、眞面目な顏をして聞いてゐたが、聞いて了つてから、

「ほんとにさうですねえ。莫迦正直に督促して歩いたりするより、その方が餘程樂ですものねえ。」と言つた。それから間もなくその月の月末報告を作るべき日が來た。甲田と福富とは歸りに一緒に玄關から出た。甲田は、「何うです、讒傳を遣りましたか？」と訊いた。女教師は禁られたやうに笑ひ乍ら、

「いゝえ。」と言つた。

「何故遣らないんです？」甲田は、當然すべき事をしなかつたのを責めるやうな聲を出した。すると福富は、今月の自分の組の步合は六十二コンマの四四四である。先月よりは二コンマの少しだけ多い。段々野良の仕事が急がしくなつて滯納の多くなるべき月に、これ以上步合を上げては、督學に疑はれる懼れがある。尤も、今後若し六十四以下に下るやうな事があつたら、仕方がないから私も今度その讒傳を遣るつもりだと說明した。甲田は、女といふものは實に氣の小さいものだと思つた。すると福富は又媚びるやうな目附をして斯う言つた。

「ほんとはそれ許りぢやありませんの。若しか先生が、私に彼樣言つて置き乍ら、御自分はお遣りにならないのですと、私許り詰りませんもの。」

甲田は、あははと笑つた。そして心では、對手に横を向いて嗤はれたやうな侮辱を感じた。「畜生！ 矢つ張り年を老つてる哩！」と思つた。福富は甲田より一つ上の二十三である。

――これは二月も前の話である。

甲田は何時しか、考へるともなく福富の事を考へてゐた。考へると言つたとて、別に大した事はない。福富は若い女の癖に、割合に理智の力を有つてゐる。相應に物事を判斷してゐれば、その行ふ事、言ふ事に時々利害の觀念が閃く。師範學校を卒業した二十三の女であれば、それが普通なのかも知れないが、甲田は時々不思議に思ふ。小說以外では餘り若い女といふものに近づいた事のない甲田には、何うしても若い女に冷たい理性などがありさうに思へなかつた。斯う思ふのは、彼が年中青い顏をしてゐるヒステリイ性の母に育てられ、生來の跛者で、脊が低くて、三十になる今迄嫁にも行かずに針仕事許りしてゐる姉を姉としてゐる故かも知れぬ。彼は今迄讀んだ小說の中の女で、『思出の記』に出てゐる敏子といふ女を一番なつかしく思つてゐる。然し彼が頭の中に描いてゐる敏子の顏には、何處の隅にも理性の影が漂つてゐない。浪子にしても『金色夜叉』のお宮にしても、矢張りさうである。甲田は女の智情意の發達は、大抵彼處邊が程度だらうと思つてゐる。そして時々福富と話してるうちに自分の見當違ひを發見する。尤もこれが必ずしも彼を不愉快にするとは限らない。それから又、甲田は、尋常科の一二年には男よりも女の教師の方が可いといふ意見を認めてゐる。理由は、女だと母の愛情を以てそれらの頑是ない子供を取扱ふ事が出來るといふのである。ところが、福富の教壇に立つてゐる所を見ると、母として立つてるのとは何うしても見えない。横から見ても縦から見ても、教師は矢張り教師である。福富は母の愛情の代りに五段教授法を以て教へてゐる。

そんな事を、然し、甲田は別に深く考へてゐるのではない。唯時々不思議なやうな氣がするだけである。そして、福富がゐないと、學校が張合がなくなつたやうに感じる。福富は滅多な風邪位では缺勤しないが、毎月、月の初めの頃

に一日だけ休む。此木田は或る時、福富さんは乾度毎月一度お休みになりますな。」と言つて、妙な笑ひ方をした。それを聞いて甲田も、成程さうだと思つた。すると福富は、「私は月給が強いもんですから。」と答へた。甲田は大變な事を聞かされたやうに思つて、見てゐると、女教師はそれを言つて了つて少し經つてから、心持顏を赤くしてゐた。福富の缺勤の日は、甲田は一日物足らない氣持で過して了ふ。それだけの事である。互ひに私宅へ訪ねて行く事なども滅多にない。彼はこの村に福富の外に自分の話對手がないと思つてゐる。これは實際である。そして、決してそれ以上ではないと思つてゐる。人氣の無いやうな、古い大きな家にゐて、雨滴の音が耳について寢られない晩など、甲田は自分の神經に有機的な壓迫を感じて人には言はれぬ妄想を起すことがある。さういふ時の對手は乾度福富である。肩の辺り、腰の周りなどのふつくらした肉附を思ひ浮べ乍ら、幻の中の福富に對して限りなき侮辱を能へる。然しそれは其時だけの事である。毎日學校で逢つてると、平氣である。唯何となく二人の間に解決のつかぬ問題があるやうに思ふ事のあるだけである。そして此問題は、二人の問題ではなくて、「男」といふものと「女」といふものとの間の問題であるやうに思つてゐる。時偶母が嫁の話を持ち出すと、甲田は此世の何處かに「思出の記」の敏子のやうな女がゐさうに思ふ。福富といふ女と結婚の問題とは全く別である。福富は角ばつた顏をした、色の淺黒い女である。

　福富は、毎日授業が濟んでから、三十分か一時間位づつオルガンを彈く。さうしてから、明日の教案を立てたり、その日の出席簿を整理したりして歸つて行く。福富は何時の日でも、人より遲く歸るのである。甲田が時々田邊校長から留守居を賴まれて不服に思はないのは之が爲めである。甲田は擔當の掃除をし乍ら、生徒控所の彼方の一學年の教室から聞えて來るオルガンの音を聞いて居た。バスの音とソプラノの音とが、即かず離れずに縺れ合つて、高くなつたり低くなりして漂ふ間を、福富の肉聲が、浮いたり沈んだりして泳いでゐる。別に好い聲ではないが、圓みのある、落居いた溫かい聲である。「——主ウの一手ェにーすーがーれエるー、身イはー安ウけエしー」と歌つてゐる。甲田は、また遣つてるなと思つた。

　福富はクリスチャンである。よく讚美歌を歌ふ女である。甲田は、何方かと言へば、クリスチャンは嫌ひである。宗教上の信仰だの、社會主義だのと聞くと、そんなものは無くても可いやうに思つてゐる。そして福富の事は、讚美歌が好きでクリスチャンになつたのだらうと思つてゐる。或る時女教師は、どんなに淋しくて不安心なやうな時でも、聖書を讀めば自然と心持が落着いて來て、日の照るのも雨の降るのも、敬虔な情を以て神に感謝したくなると言つた。甲田は、それは貴方が獨身でゐる故だと批評した。そして、餘程穿つた事を言つたと思つた。すると福富は、眞面目な顏をして、貴方だつて何時か、乾度神樣に縋らなければならない時が來ますと言つた。甲田は、そんな風な姉ぶつた言振をするのを好まなかつた。

　少し經つとオルガンの音が止んだ。もう止めて來ても可い位だと思ふと、ブウと太い騷がしい音がした。空氣を拔いたのである。そしてオルガンに蓋をする音が聞えた。

　愈々やつて來るなと思つてゐると、誰やら玄關に人が來たやうな樣子である。「御免なさい。」と言つてゐる。全で聞いたことのない聲である。出て見ると、脊の低い若い男が立つてゐた。そして、

「貴方は此處の先生ですか？」と言つた。

『さうです。』
『一寸休ませて呉れませんか？　僕は非常に疲れてゐるんです。』
甲田は返事をする前に、その男を頭から足の爪先まで見た。髪は一寸五分許りに延びてゐる。痩犬のやうな顔をして居る。片方の眼が小さい。風呂敷包みを首にかけてゐる。そして、垢と埃で臺なしになつた、荒い紺絣の袷の尻を高々と端折つて、帶の代りに牛の皮の胴締をしてゐる。その下には、白い小倉服の太目のズボンを穿いて、ダブダブしたズボンの下から、草鞋を穿いた素足が出てゐる。誠に見すぼらしい恰好である。年は二十歳位で、脊丈は五尺に充たない。袷の袖で狭い額に滲んだ膩汗を拭いた。
『たゞ休むだけですか？』と甲田は訊いた。
『さうです、休むだけでも可いんです。今日はもう十里も歩いたから、すつかり疲れて居るんです。』
甲田は一寸四邊を見廻してから、
『裏の方へ廻りなさい。』と言つた。
小使室へ行つて見ると、近所の子供が二三人集つて、爐邊に胡坐かいて遊んでゐた。大きい鐵瓶が掛つてゐて、その前に腰掛が置いてある。

間もなくその男が入つて來て、一寸會釋をして、草鞋を脱がうとする。
『土足の儘でも可いんです。』
『さうですか、然し草鞋を脱がないと、休んだやうな氣がしません。』
斯う言つて、その男は憐みを乞ふやうな目附をした。すると甲田は、
『其處に盥があります。水もあります。』と言つた。その時、輕い控所を横ぎつて職員室に來る福富の足音が聞えた。子供等は怪訝な顔をして、甲田とその男とを見てゐた。
若い男は、草鞋を脱いで上つて、腰掛に腰を掛けた。甲田も、此儘放つて置く譯にもいかぬと思つたから、向ひ合つて腰を掛けた。
『君は此學校の先生ですか？』と、男は先刻訊いたと同じ事を言つた。但、『貴方』と言つたのが、『君』に變つてゐた。
『さうです。』と答へて、甲田は對手の無遠慮な物言ひを不愉快に思つた。そして、自分がこんな田舍で代用教員などをしてるのを恥づる心が起つた。同樣に、煙草が無くて手の遣り場に困る事に氣が附いた。
『あ、煙草を忘れて來た。』と獨言をした。そして立つて職員室に來てみると、福富は、

『誰か來たんですか？』と低聲に訊いた。
『乞食です。』
『乞食がどうしたんです？』
『一寸休ませて呉れと言ふんです。』
福富は腑に落ちない顔をして甲田を見た。此學校では平常乞食などは餘り寄せつけない事にしてあるのである。甲田は、煙草入と煙管を持つて、また小使室に來た。そして今度は此方から訊いた。
『何處から來たんです？』
『××からです。』と、北方四十里許りにある繁華な町の名を答へた。そして、俄かに思ひ出したやうに、
『初めて乞食をして歩いてみると、仲々辛いものですなア。』と言つた。
甲田は先刻から白い小倉のズボンに目を附けて、若しや窮迫した學生などではあるまいかと疑つて居た。何だか此男と話して見たいやうな氣持もあつた。が又、話さなくても可いやうにも思つて居た。すると男は、一刻も早く自分が普通の乞食でないのを白かにしようとするやうに、
『僕は××の中學の三年級です。今郷里へ歸るところなんです。金がないから乞食をして歸る

つもりなんです。郷里は水戸です――水戸から七里許りあるところです。』と言つた。

甲田は、此男は嘘を言つてるのではないと思うた。たゞ、水戸のものが××の中學に入つてるのは隨分方角違ひだと思つた。それを聞くのも面倒臭いと思つた。そして斯う言つた。

『何故歸るんです？』

『父が死んだんです。』學生は眞面目な顔をした。『僕は今迄自活して苦學をして來たんですがねえ。』

甲田は、自分も父が死んだ爲めに、東京から歸つて來た事を思ひ出した。

『何時死んだんです？』

『一月許り前ださうです。僕は去年××へ來てから、郷里へ居所を知らせて置かなかつたんです。まさか今頃父が死なうとは思ひませんでしたからねえ。だもんだから、東京の方を方々聞合して、此間やう〳〵手紙を寄越したんです。僕が歸らなければ母も死ぬんです。これから歸つて、母を養はなければならないんです。學校はもう止めです。』

斯う言つて、小さい方の左の目を一層小さくして、堅く口を結んだ。學業を中途に止めるのを如何にも殘念に思つてる樣子である。甲田は又此男は嘘を言つてるのではないなと思つた。

『東京にもゐたんですか？』と訊いて見た。

『ゐたんです。K――中學にゐたんです。ところがK――中學は去年閉校したんです。君は知りませんか？ 新聞にも出た筈ですよ。』

『さうでしたかねえ。』

『さうですよ。そらア君、あん時の騷ぎつてなかつたねえ。』

『そんなに騷いだんですか？』

『騷ぎましたよ。僕等は學校が無くなつたんだもの。』そして、色々其時の事を面白さうに話した。然し甲田は別に面白くも思はなかつた。ただ、東京の學校の騷ぎをこんな處で聞くのが不思議に思はれた。學生は終ひに、K――中學で教頭をしてゐて、自分に目を掛けてくれた某といふ先生が、××中學の校長になつてゐたから、その人を手頼つて××に來た。K――で三年級だつたが、××中學ではその時三年に缺員が無くて二年に入れられた。××でも矢張り新聞配達をしてゐたと話した。

甲田は不圖思ひ出した事があつた。そして訊いてみた。『××中學に、與田といふ先生がゐませんか？』

『與田？ ゐます、ゐます。數學の教師でせう？ 彼奴ア隨分點が辛いですな。君はどうして知つてるんです？』

『先に○○の中學にゐたんです。そして××へ追拂はれたんです。僕等がストライキを遣つて。』

『あ、それぢや君も中學出ですか？ 師範ぢやないんですね。』

甲田は此時また、此學生の無遠慮な友達扱ひを不愉快に感じた。甲田は二年前に○○の中學を卒業して、高等學校に入る積りで東京に出たが、入學試驗がも少しで始まるといふ時に、父が急病で死んで歸つて來た。それからは色々母と爭つたり、ひとり悶えても見たが、どうしても東京に出ることを許されぬ。面白くないから、毎日馬に乘つて遊んでゐるうちに、自分の一生なんか何うでも可いやうに思つて來た。そのうちに村の學校に缺員が出來ると、緣つゞきの村長が母と一緒になつて勸めるので、當分のうちといふ條件で代用教員になつた。時々、自分は何か、足飛びな事を仕出かさねばならぬやうに焦々するが、何をして可いか目的がない。さういふ時は、世の中は不平で不平で耐らない。それが濟むと、何もかも莫迦臭くなる。去年の秋の末に、福富が轉任して來てからは、餘り煩悶

もしないやうになつた。

學生は、甲田が中學生と聞いて、グッと心易くなつた樣子である。そして、

「君、濟まないがその煙草を一服喫ましてくれ給へ。僕は昨日から喫まないんだから。」と言つた。

學生は、甲田の渡した煙管を受取つて、うまさうに何服も喫んだ。甲田は默つてそれを見てゐて、もう此學生と話してるのが嫌になつた。斯うしてるうちに福富が歸つて了ふかも知れぬと思つた。すると學生は、

「僕も今日のうちに○○市まで行く積りなんだが、行けるだらうかねえ、君。」と言つた。

「行けない事もないでせう。」と、甲田はそつけなく言つた。學生はその顏を見てゐた。

「何里あります？」

「五里。」

「またそんなにあるかなア。」と言つて、學生は嘆息した。そして又、美味さうに煙草を喫んだ。甲田は默つてゐた。

稍あつて學生は、決心したやうに首をあげて、

「君、誠に濟まないが、いくらか僕に金を貸してくれませんか？　郷里へ着いたら、何とかして是非返します。僕は今一圓だけ持つてるんだけれど、これは郷里へ着くまで成るべく使はないやうにして行からと思ふんです。さうしないと不安心だからねえ。いくらでも可いんです。屹度返します、僕は君、今日迄三晩共社に泊つて來たんです。木賃宿に泊つてもいくらか費るからねえ。」と言つた。

甲田は、社に泊るといふことに好奇心を動かした。然しそれよりも、金さへ呉れゝば此奴が歸ると思ふと、うれしいやうな氣がした。そして職員室に行つてみると、福富はまだ歸らずにゐた。甲田は明日持つて來て返すから金を少し貸して呉れと言つた。女教師は、「少ししか持つてきませんよ。」と言ひ乍ら、橄欖色のレース絲で編んだ金入を帶の間から出して、卓の上に逆さまにした。一圓紙幣が一枚と五十錢銀貨一枚と、外に少し許り細かいのがあつた。福富は、

「呉れてやるんですか？」と問うた。

甲田はただ「えゝ。」と言つた。そして、五十錢の銀貨をつまみ上げて、

「これだけ拜借します。あれは學生なんです。」

そして小使室に來ると、學生はまだ煙草を喫んでゐた。

屹度爲替で返すといふことを繰返して言つて、學生はその金を請けた。そして甲田の名を聞いた。甲田は、「返して貰はなくても可い。」と言つた。然し學生は諾かなかつた。風呂敷包みから手帳を出して、是非教へて呉れと言つた。萬一金は返すことが出來ないにしろ、自分の恩を受けた人の名も知らずにゐるのは、自分の性質として心苦しいと言つた。甲田は矢張り、「そんな事は何うでも可いぢやありませんか。」と言つた。學生は先刻から其處にゐて二人の顏を代る代る見てゐた子供に、この先生は何といふ先生だと訊いた。甲田は可笑しくなつた。又、面倒臭くも思つた。そして自分の名を教へた。

間もなく學生は、禮を言つて出て行つた。出る時、○○市までの道路を詳しく聞いた。今夜は是非○○市に泊ると言つた。時計は何時だらうと聞いた。三時二十二分であつた。出て行く後姿を福富も職員室の窓から見た。そして、後で甲田の話を聞いて、「氣の毒な人ですねえ。」と言つた。

ところが、翌朝甲田が出勤の途中、福富が後から急ぎ足で追ついて來て、

「先生、あの、昨日の乞食ですね、私は今朝途

ひましたよ。」と言つた。何か得意な話でもする調子であつた。甲田は、そんな筈はないといふやうな顏をして、
「何處で？」と言つた。

福富の話はかうであつた。福富の泊つてゐる家の前に、この村で唯一軒の木賃宿がある。今朝早く、福富がいつものやうに散歩して歸つて來て、家の前に立つてゐると、昨日の男がその木賃宿から出て南の方――○○市の方――へ行つた。間もなく木賃宿の嚊が外に出て來たから、訊いて見ると、その男は昨日日が暮れてから來て泊つたのだといふ。

「人違ひですよ、屹度。」と甲田は言つた。然し心では矢張りあの學生だらうと思つた。すると福富は、

「否、違ひません、決して違ひません。」と主張して、衣服の事まで詳しく言つた。そして斯う附け加へた。

「屹度、なんですよ。先生からお金を貰つたから歩くのが厭になつて、日の暮れまで何處かで寢てゐて、日が暮れてから密と歸つて來て此村へ泊つて行つたんですよ。」

さう聞くと、甲田は餘り好い氣持がしなかつた。學校へ行つてから、高等科へ來てゐる木賃宿の子供を呼んで、これ／＼の男が昨晩泊つたかと訊いた。子供は泊つたと答へた。甲田は愈、俺は欺されたと思つた。そして、其奴が何か學校の話でもしなかつたかと言つた。子供は、何故そんな事を聞かれるのかと心配相な顏をし乍ら、自分は早くから寢てゐたからよくは聞かないが、家の親爺と何か先生の事を話してゐたやうだつたと答へた。

「どんな事を？」と甲田は言つた。

「どんな事つて、なんでもあの先生のやうな人をこんな田舍に置くのは、惜しいもんだつて言ひました。」

甲田は苦笑ひをした。

その翌日である。丁度授業が濟んで職員室が顏揃ひになつたところへ、新聞と一緒に甲田へ宛てた一枚の葉書が着いた。甲田は、「○○市にて、高橋次郎吉」といふ差出人の名前を見て首を捻つた。裏には斯う書いてあつた。

My dear Sir, 閣下の厚情萬謝々々。身を乞食にやつして故郷に歸る小生の苦衷御察し被下度、御恩は永久に忘れ不申候。昨日御別れ致候後、途中腹痛にて困難を極め、午後十一時漸く當市に無事安着仕候。乍他事御安意被下度候。何れ故郷に安着の上にて letter を差上げます、末筆乍ら I wish you a happy

六月二十八日午前六時○○市出發に臨みて

甲田は噴出した。中學の三年級だと言つたが、これでは一年級位の學力しかないと思つた。此木田老訓導は、「何うしました？何か面白い事がありますか？」と言ひ乍ら、立つて來てその葉書を見て、

「やア、英語が書いてあるな。」と云つた。

甲田はそれを皆に見せた。そして彼の學生に金を與れてやつた事を話した。○○市へ行くと言つて出て行つて、密り木賃宿へ泊つて行つた事も話した。終ひに斯う言つた。

「矢張り氣が咎めたと見えますね。だから途中で腹が痛くて困難を極めたなんて、好い加減な譃を言つて、何處までもあの日のうちに○○に着いたやうに見せかけたんですよ。」

「然し、これから二度と逢ふ人でもないのに、何うしてこの葉書なんか寄越したんでせう？」と田邊校長は言つた。そして、「何ういふ積りかな。」と首を傾げて考へる風をした。

葉書を持つてゐた福富は、この時「日附は昨日の午前六時にしてありますが、昨日の午前六時

なら丁度此村から立つて行つた時間ぢやありませんか。そして消印は今朝の五時から七時迄としてありますよ。矢張り今朝〇〇を立つ時書いたんでせうね。」と言つた。

すると此木田が突然大きい聲をして笑ひ出した。

「甲田さんも隨分好事な事をする人ですなア。乞食してゐて五十錢も貰つたら、俺だつて歩くのが可厭になりますよ、第一、今時は大概の奴ア英語の少し位噛つてるから、中學生だか何だか、知れたもんぢやないぢやありませんか。」

この言葉は、甚く甲田の心を害した。たとひ對手が何にしろ、旅をして困つてる者へ錢を呉れるのが何が好事なものかと思つたが、たゞ苦笑ひをして見せた。甲田は此時もう、一昨日錢を呉れた時の自分の心持は忘れてゐた。對手が困つてるから呉れたのだと許り信じてゐた。

「いや、中學生には中學生でせう、眞個の乞食なら、誰にしろ何にしろこんな葉書まで寄越す筈がありません。」と校長が口を出した。「英語を交ぜて書いたのは面白いぢやありませんか。初めのマイデヤサーだけは私にも解るが、終ひの文句は何といふ意味です？甲田さん。」

「私は貴方に一つの祝福を與する――」でせうか？」と福富は低い聲で直譯した。

此木田は立つて歸り支度をし乍ら、

「假に中學生にしたところで、態々人から借りて呉れてやつて騙されるより、此方なら先づ寝酒でも飲みますな。」

「それもさうですな。」と校長が應じた。「呉れるにしても五十錢は少し餘計でしたな。」

「それぢやお先に。」と、此木田は皆に會釋した。

と見ると、甲田は先刻からムシヤクシヤで、今何とか言つて此の此木田父爺を取紋めてやらなければ、もうその機會がなくなるやうな氣がして、口を開きかけたが、さて、何と言つて可いか解らなくなつて、徒らに目を輝かし、唇をぴりぴりさした。そして直ぐに、何有、今言はなくても可いと思つた。

此木田は歸つて行つた。間もなく福富は先刻の葉書を持つて來て甲田の卓に置いて、「年老つた人は同情がありませんね。」と言つて笑つた。そして讃美歌を歌ひに、オルガンを置いてある一學年の教室へ行つた。今日は何か初めての曲を彈くのだと見えて、同じところを斷々に何度も繰返してるのが聞えた。

それを聞いてゐながら、甲田は、卓の上の葉書を見て、成程あの爺の學生に錢を呉れたのは詰らなかつたと思つた。そして、呉れるにしても五十錢は奮發し過ぎたと思つた。

友藻外に

落月は、臨終の人の魂の如、
しぼみぬ、さては、ゆらゆらに木の間を下りて、
春淺き丘の小草の根に入りぬ。
このしづけさに、何ものか息もつくべき。
身の内の脈のひびきを、遠方ゆ
たづねきならむ友人の胸のあがきと
あざやかに我は聞くなり。この夜頃、
月入る方の君は今、何を思ふや、
うづたかき黄卷に照る燈火は、
月入れど、猶消さざるや。夢に逢はまし。

（『黄草集』より）

道

〇郡教育會東部會の第四回實地授業批評會は、十月八日の土曜日にT——村の第二尋常小學校で開かれる事になつた。選擇科目は尋常科修身の、一學年から四學年までの合級授業で、謄寫版に刷つた其の教案は一週間前に近村の各學校へ教師の數だけ配布された。

隣村のS——村からも、本校分校合せて五人の教師が揃つて出懸ける事になつた。其の中には赴任して一月と經たぬ女教師の矢澤松子もゐた。『貴方もお出でになつては何うです？』斯う校長に言はれた時、松子は無論行くべきものと思つてゐたやうに、『參ります。』と答へた。山路三里、往復で六里あると聞いても、左程驚きもしなければ、躊躇する態もなかつた。

机を向ひ合してゐる準訓導の今井多吉は、それを見ながら前の女教師を思ひ出した。獨身にしては老け過ぎる程の齢をしてゐた其の女の、甲高い聲で生徒を叱り飛ばした後で人前も憚らず不興氣な顔をしてゐる事があつたり、『女』といふを看板に事々に勞を惜んで、樂な方へ樂な方へと廻つてばかりゐたのに比べて、齢の若いとは言ひながら、松子の何の不安もなげに温なしく自分の新しい境遇に處して行かうとする明るい心は、彼の單調な生活に取つて此頃一つの興味であつた。前の女教師の片意地な基督教信者であつた事や、費用をはぶいて郵便貯金をしてゐる事は、それを思ひ出す多吉の心に何がなしに失望を伴つた。それだけ松子の思慮の淺く見える物言ひや、子供らしく口を開いて笑つたりする擧動が、彼には埃だらけな日蔭のやうに沈んでゐる職員室の空氣を明るくしてゐるやうに思はれた。

『今井さんは何うです？』と、校長は人の好ささうな顔に笑ひを浮べて言つた。

『煎餅を喰ひにですか。』と若い準訓導は高く笑つた。『行きますとも。』

校長も笑つた。髭の赤い、もう五十面の首席訓導も笑つた。此前の會が此の學校に開かれた時、茶受に出した麥煎餅を客の手を出さぬうちに今井が一人で喰つて了つた。それが時々此の職員室で思ひ出されては、其の都度新しい笑ひを繰返してゐたのである。話に聞いてゐる松子も、聲を出して一緒に笑つた。

それは二三日前の事であつた。

其の日が來た。秋の半ば過の朝霧が家並の茅葺屋根の上半分を一樣に消して了ふ程重く濃く降りた朝であつた。S——村では、霧の中で鷄が鳴き、赤兒が泣き、馬が嘶いた。山を負うた小學校の門の前をば、村端れの水汲みに大きい桶を擔いだ農家の女が幾人も幾人も、霧の中から現れて來て霧の中へ隱れて行つた。日の出る時刻が過ぎても霧はまだ消えなかつた。

宿直室に起臥してゐる校長が漸く起きて顔を洗つたばかりのところへ、二里の餘も離れた處にある分校の目賀田といふ老教師が先づ來た。草鞋を解き、腰を延ばし、端折つた裾を下して職員室に入ると、挨拶よりも先に、『何といふ霧でしたらう、まア。』と言つて、呆れて了つたといふやうな顔をして立つた。

取敢へず、着て來た色の褪めた木綿の紋附を脱いで、小使が火を入れたばかりの火鉢の上に翳した。羽織は細雨に遭つたやうにしつとりと濡れてゐて、白い水蒸氣が渦卷くやうに立つた。『慣れた路ですけれども、足許しか見えない

もんだから何だか知らない路に迷つてゐるやうでしてなア、いや、五里霧中とは昔の人はよく言つたものだと思ひました哩。：：蝙蝠傘を翳してるのに、拭いても拭いても顔から雫が滴るのですものなア。』こんな事を言ひながら頻りと洟水を啜つた。もう六十からの老人であるが、資格はたゞの準訓導であつた。履歴を訊せば、藩の學問所の學頭をした人の嗣で、縣政の布かれてからは長らく漢學の私塾を開いてゐたとかいふ事である。

羽織が大概乾いた頃に女教師が來た。其の扮裝を見上げ見下して、目賀田は眼を圓くした。

「貴方は下駄ですかい？」

「え。」

又見上げ見下して「眞個に下駄で行くのですかい？」

「そんなに惡い路で御座いませうか？」

「下駄では少し辛いでせうよ、矢澤さん。」と校長が宿直室から聲を懸けた。

「さうでせうか。」と言つて、松子は苦もなく笑つた。「大丈夫歩いてお目にかけますわ。慣れてるんですもの。」

「坂がありますよ。」

「大丈夫、先生。」

「そんな事を言はないで、今のうちに草鞋を買はせなさい。老人は惡い事は言はない。三里と言つても隨分上つたり下つたりの山路ですぞ。」

さう言つて目賀田は、目の前に嶮しい坂が幾つも幾つも見えるやうな目附をした。松子は又笑つた。心では自分が草鞋を穿いて此の人達と一緒に歩いたら、どんな恰好に見えるだらうと想像して見た。そして、何もそんなにしてまで行かなくても可いのだと思つてゐた。

さうしてるところへ、玄關に下駄の音がして多吉が入つて來た。

「貴方もか、今井さん？」と目賀田が突然問ひかけた。

「何です？」

「貴方も下駄で行くのですかい？」

「えゝ。何うしてです？」

「何うしてもないが、貴方方が二人——貴方は男だからまア可いが、矢澤さんが途中で歩けなくなつたら、皆で山の中へ捨てゝ來ますぞ。」

言葉は笑つても、心は憎惡であつた。

多吉は、「それア面白いですね。誰でも先に歩けなくなつた人は捨てゝ來る事にしませう。」聲を高くして、「ねえ、先生。」

障子の彼方にはがちやりと雜巾の音がした。

校長が、「私は可いが、目賀田さんがそれぢやア却つてお困りでせう。」

「老人は別物さ。」と目賀田も言ふ。

多吉は子供らしく笑つた。

『然し、靴なんかよりは下駄の方が餘程歩きいいんですよ。——それア草鞋は一番ですが。ね貴方は矢張り草鞋ですか？」

「俺かな？　俺は草鞋さ。』

こう言つて老人は横を向いて了つた。「可愛氣のない人達だ。」と眼が言つた。

やがて髭の赤い首席の雀部が遲れた分疏をしながら入つて來た時、校長ももう朝飯が濟んだ。埃と白墨の粉の染みた詰襟の洋服に氣替へ、黒い鈕を懸けながら職員室に出て來ると、目賀田は繼布だらけな莫大小の股引の膝を火鉢に焙りながら、緩りとした調子で雀部と今朝の霧の話を始めてゐた。其の容子は、これから又隣村まで行かねばならぬ事をすつかり忘れてゐるもののやうにも見えた。故意に出發の時刻を遲くしようとしてゐるのかとも見えた。

「蝙蝠傘を翳してるのになア、貴方、それだのに此の禿頭から始終雫が落ちて來るのですものなア。」

こんな事を言つて、後頭にだけ少し髪の殘つてゐる滑かな頭をつるりと撫でゝ見せた。皆は笑つた。笑ひながら多吉は、此の老人にもう其の話を結末にせねばならぬ暗示を與へる事を氣の毒に思つた。それと同時に、何かなしに此の老人が、頭の二つや三つ擲つてやつても可い程卑しい人間のやうに思はれて來た。

校長にも同じやうな心があつた。老人の後ろに立つてゐて、お附合のやうに笑ひながら窓際の柱に懸つてゐる時計を眺め、更に大形の懷中時計を衣嚢から出して見た。

雀部は漸く笑ひ止んで、揶揄ふやうな口を利いた。

「あの帽子は何うしたのです？　冠つて來なかつたのですか？」

「あれですか？　あれはな。」目賀田は何の爲めともなく女教師の顏を偸むやうに見た。「ははは、遺失して了ひました喃。」

『ほう。惜しい事をしたなア。却々好い帽子だつたが……。もう三十年近く冠つたでせうな？』

『さア、何年から。……自分から言つては可笑しいが、買つた時は――新しい時は見事でしたよ。汽船で死んだ倅が横濱から土産に買つて來て呉れたのでな。羅紗は良し……それ、島内といふ郡長がありましたな。あの郡長が巡回に來て、大雨で一晩泊つた時、手に取つてひつくら返しひつくら返し見て褒めて行つた事がありました喃。……外の事は何にも褒めずにあの帽子だけをな。」

「何うして遺失したんです？」と多吉は眞面目な顏をして訊いた。

「それがさ。」老人は急に悄氣た顏附をして若い教師を見た。それから其の眼を雀部の鞜面に移した。

「先月、それ、郡視學が巡つて來ましたな？」

「はア、來ました。」

「あの時さ。」と目賀田は少し調子づいた。「考へて見れば好い面の皮さな。老妻を虐めて鷄を殺さしたり、罐詰の正宗を買はしたり、剰にうんと油を絞られて、お歸りは停車場まで一里の路をお送りだ。――それも爲方がありませんさ。――ところで汽車が發つと何うにも胸が收まらない。例よりは少し小つ酷く譴られたのでな。――俺のやうな老碌を捕まへてからに、ヘルバロトが何うの、ペスタ何とかが何うの、何段教授法だ、兒童心理學だと言つたところで何うなるつてな。いゝはいゝは何う教へたつていゝろはいいさ。さうでせう、雀部さん？　一二が二は昔から一二が二だもの。……」

女教師は慌てて首を竦めて、手巾で口を抑へた。

「まあさ、さう笑ふものではない。老人の愚痴は老人の愚痴として聞くものですぞ。――いや先生方の前でこんな事を言つちや濟まないが、――まま、そ言つたやうな譯でね、停車場から出ると突然お芳茶屋へ飛び込んだものさ。はは。」

『解つた、解つた。そして醉つて了つて、誰かに持つて行かれたかな？』と雀部は煙草入を衣嚢に藏ひながら笑つた。

「いや／＼。」目賀田は骨ばつた手を擧げて狼狽へて打ち消した。『誰が貴方、犬でもなければア、あんな古帽子を持つて行くもんですかい。冠つて出るには確に冠つて出ましたよ。それ、あのお芳茶屋の娘の何とかいふ子な、去年か一昨年まで此方の生徒だつた。――あれが貴方、むつちりした手つ手で、「はい、先生樣。」と言つて渡して呉れたのを、俺はちやんと知つてる。それからそれを受取つて冠つたのも知つてますものな。――ところがさ、家へ歸ると突然老妻の奴が、「まア、そんなに醉つ拂つて……帽子は

何うしたのです？」と言ふんでな。はてな、と思つて、斯うやつて見ると、それ。――」手を頭へやつて、ぴたりと叩いて見せた。「はゝゝゝ」

多吉はそれを機に椅子を離れた。

「浮氣だものな、此のお老人は。」さう言つて雀部もう此の話の尻を結んだ積りであつた。

「莫迦な。」目賀田はそれを追駈けるやうに又手を擧げた。「貴方ぢやあるまいし。……若しや袂に入れたかと思つて袂を探したが、袂にもない。――」

「出懸けませうか、徐々。」

手持無沙汰に立つてゐた校長がさう言つた。

「さうですね。」と雀部も立つ。

「もう時間でせうな。」後ろを振向いてさう言つた目賀田の額は、愈々諦めねばならぬ時が來たと言つてるやうに多吉には見えた。老人はこそこそと逭けるやうに火鉢の傍から離れて、隅の方へ行つた。

校長は蔵つた懐中時計をまた出して見て、

「丁度七時半です。……丁度可いでせう。授業は十一時からですから。」

「目賀田さんは御苦勞ですなア。」兩手を衣嚢に入れて、がつしりした肩を怒らせながら、雀部は同情のある口を利いた。

「年は老るまいものさな。……何有……然し五里や十里は……まだまだ……」

斷々に言ひながら、體を搖り上げるやうにして裾を端折つてゐる。

そして今度は羽織に袖を通しかけて、「時にな、校長さん。」と言ひ出した。「俺の處に六角時計ですな、あれが何うも時々針が止つて爲樣がないのですが、役場に持つて來たら直して貰へるでせうな？」

話の續きは玄關で取り交された。

臨時の休みに校庭はひつそりとして廣く見えた。隅の方に四五人集つて何かしてゐた近所の子供等は、驚いたやうに頭を下げて、五人の教師の後姿を見送つた。教師達の出て行つた後からは、毛色の惡い一群の鷄が餌をあさりながら校庭へ入つて行つた。

霧はもう名殘りもなく霽れて、澄みに澄んだ秋の山村の空には、物を溫めるやうな朝日影が斜めに流れ渡つてゐた。村は朝とも晝ともつかぬやうに唯物靜かであつた。

水銀のやうな空氣が歩みに隨つて額や手に當り、涼氣が水薬のやうに體中に染みた。

「頭腦が透き通るやうだ。」と多吉は思つた。暫くは誰も口を利かなかつた。

村端れへ出ると、殿になつて歩いて來た校長は、「今井さん。今日は不思議な日ですな。」と呼びかけた。

「何うしてです？」

「靴を穿いた人が二人に靴でない人が三人、髭のある人が二人に髭のない人が三人、皆二と三の關係です。」

「さうですね。」多吉は物を捜すやうに皆を見廻した。そして何か見附けたやうに、俄かに高く笑ひ出した。

「さう言へばさうですな。」と脊の高い雀部も振返つた。「和服が三人に洋服が二人、飲酒家が二人に飲まずが三人。ははは。」

「飲酒家の二人は誰と誰ですい？」目賀田は不服さうな口を利いた。

『貴方と私さ。』

「俺もかな？――」

後の言葉は待つても出なかつた。

雀部は元氣な笑ひ方をした。が、其の笑ひを中途で罷めて、遺失物でもしたやうに體を屈めた。見ると、衣嚢から反古紙を出して、朝日に融けかけた路傍の草の葉の露に濡れた靴の先を拭いてゐた。

拭きながら、「ははは。」と笑ひの續きを笑つ

た。『日賀田さんは飲酒家でない積りと見える。』

多吉は噴出したくなつた。月給十三圓分で買つた靴だと何日か雀部の誇つた顔を思ひ出したのである。雀部の月給は十四圓であつた。多吉は心の中で、一靴を大事にする人が一人……と數へた。

「蝙蝠傘も日賀田さんと矢澤さんの二人でせう。皆二と三の關係です。』と校長は又言つた。

『それからまだ有りますよ。』多吉は温なしく言つた。『老人が三人で若い者が二人。』

『私も三人のうちですか？』

『可けませんか？』

多吉は揶揄ふやうな目附をした。三十五六の、齢の割に頰の削けた血色の悪い顔、口の周圍を圍むやうに下向きになつた薄い髭、濁つた力の無い眼光――冗談ぢやない。これでも若い氣か知ら。さらいふ思ひは眞面目であつた。

『貴方は髭が有るから爲方がないですよ。』

松子は噴出して了つた。

『校長さん、校長さん。』雀部は靴を拭いて了つて歩き出した。『矢澤さんは一人で、あとは皆男ですよ。これは何うします？』

『さらですな。……これだけは別問題です。さうして置きませう。』

雀部は燥ぎ出した。『私が女に生れて、矢澤さんと手を取つて歩けば可かつたなア。ねえ、矢澤さん。さうしたら――』

『貴方が女だつたら、……』四五間先にゐた日賀田が振返つた。『……飲酒家の春高の赤髭へ、……』

言ひ方が如何にも憎さげであつたので、校長は腹を抱へて了つた。松子もしまひには澀くなる程笑つた。

程なく上の黒い里道が往還を離れて山の裾に添うた。右側の田はやがて畑になり、それが段々幅狭くなつて行くと、岸の高い溪川に朽ちかかつた橋が架つてゐた。

橋を渡ると山であつた。

高くもない雜木山芝山が、透り迤つた路に縫はれてゐた。然し松子の足を困らせる程には嶮しくもなかつた。足音に驚いて、幾羽の雉子が時々藪蔭から飛び立つた。けたたましい羽音は其の度何の反響もなく頭の上に消えた。

雜木の葉は皆觸れば折れさうに硬ばつて、濃く淡く色づいてゐた。風の無い日であつた。

芝地の草の色ももう黄であつた。處々に背を出してゐる黒い岩の邊りなどには、誰も名を知らぬ白い小さい花が草の中に見え隠れしてゐた。霜に襲はれた山の氣がほかほかする日光の底に冷たく感じられた。校長は、何と思つたか、態々それ等の花を摘み取つて、帽子の縁に插して歩いた。

日賀田は色の褪せた繻子の蝙蝠傘を杖にして、始終皆の先に立つた。物言へば疲れるとでも思つてゐるやうに言葉は少なかつた。校長と雀部が前になり後になりして其の後ろに跟いた。二人の話題は、何日も授業批評會の時に最も多く口を利く××といふ教師の噂であつた。雀部は其の教師を常から名を言はずに『あの眇目さん』と呼んでゐた。意地悪な眇目の教師と飲酒家の雀部とは、小さい時からの競爭者で、今でも仲が好くなかつた。

多吉と松子は殿になつた。

とある芝山の頂に來た時、多吉は路傍に立ち止つた。そして、『少し先に歩いて下さい。』と言つた。

『何故です？』

『何故でも。』

其の意味を解しかねたやうに、松子はそれで

も歩かなかつた。

すると多吉は突然今來た方へ四五間下つて行つた。そして横に逸れて大きい岩の蔭に體を隱した。岩の上から帽子だけ見えた。松子は初めて氣が附いて、一人で可笑しくなつた。

間もなく多吉は其處から引き返して來て、松子の立つてゐるのを見ると、笑ひながら近づいた。

「何うも濟みません。」

『私はまた、何うなすつたのかと思つて。』

二人は笑ひながら歩き出した。と、多吉は後ろを向いて、「斯うして二人歩いてる方が可いぢやありませんか？」

そして、返事も待たずに、「少し遲く歩かうぢやありませんか。……何うです、あの恰好は？」

多吉は坂下の方を指した。

「えゝ。」松子は安心したやうな目附をした。

「日賀田先生はあゝして先になつてますけれども、歸途には乾度、容易になりますよ。」

「其の時は二人で手を引いてやりますか？」

「嫌ですよ、私は。」

「止せば可いのに下駄なんか穿いて、なんて言はれないやうだと可いですがねえ。」

「あら、私は大丈夫よ。乾度歩いてお目にかけますわ。」

「尤も、老人が先にまゐつて了ふのは順序ですね。御覽なさい。あゝして年の順でてくてく坂を下りて行きますよ。ははは。面白いぢや有りませんか？」

『えゝ。先生は隨分お口が惡いのね。』

「だつて、面白いぢやありませんか？　あツ、躓いた。御覽なさい、あの日賀田爺さんの恰好。」

『ほほほほ。……ですけれど、私達だつて矢張り坂を下りるぢやありませんか？』

「貴方もお婆さんになるつて意味ですか？」

「まア厭。」

「厭でも應でもさうぢやありませんか？」

「そんなら、貴方だつて同じぢやありませんか？」

僕は厭だ。」

「厭でも應でも。ほほほほ。」

「人が惡いなア。――然し考へて御覽なさい。僕なんかお爺さんになる前に、まだ何か成らなければならんものがありますよ――あゝ、此方を見てる。」俄かに大きい聲を出して、「先生、少し待つて下さい。」

半町ばかり下に三人が立ち止つて、一樣に上を見上げた。

「何うです、あの帽子に花を插した態は？」多吉は少し足を早めながら言ひ出した。『脚の折れた歪んだピアノが好い音を出すのを、死にかゝつたお婆さんが戀の歌を歌ふやうだと何かに書いてあつたが、少々似てるぢやありませんか。」

「貴方が僕の小便するのを待つてゐたよりは餘程滑稽ですね。」

「隨分ね。私は何をなさるのかと思つてゐただけぢやありませんか？」

「いや失敬。冗談ですよ。貴方と校長と比べるのは酷でした。」

「もうお止しなさいよ。校長が聞いたら怒るでせうね？」

「あの人は一體あゝいふ眞似が好きなんですよ。それ、此間も感情教育が何うだとか斯うだとか言つてゐたでせう？」

「えゝ。あの時は私可笑しくなつて――」

「眞個ですよ。――優美な感情は好かつた。あんな事をいふつてのは一種の生理的なんですねえ。」

『え？』

「貴方はまだ校長の細君に逢つた事はありませんでしたね？」

「えゝ。」

「大將細君には頭が上らないんですよ。――聟ですからね。それに餘り子供が多過ぎるもんですからね。」
「……」
「實際ですよ。土芋みたいにのつぺりした、眞黒な細君で、眼ばかり光らしてゐますがね。ヒステリイ性でせう。それでもう五人子供があるんです。」
「五人ですか？」
「えゝ。こんだ六人目でせう。またそれで實家へ歸つてるんださうですから。」
『もうお止しなさい。聞えますよ。』
「大丈夫です。」
さう言つたが、多吉は矢張りそれなり口を噤んだ。間隔は七八間しかなかつた。
雀部は下から揶揄つた。「……今井さん、矢澤さん。」
校長も嗄れた聲を出して呼んだ。「少し早く歩いて下さい。」
「急ぎませう。急ぎませう。」と松子は後から急き立てた。
追着くと多吉は、「貴方がたは仲々早いですね。」
「早いも遲いもないもんだ。何をそんなに――話してゐたのですか？」と雀部は兩手を上衣の衣嚢に突込んで、高い體を少し前へ屈めるやうにしながら、眼で笑つて言ふ。『目賀田さんは、若い者は放つて置く方が可いつて言ふ説だけれども、私は少し――ねえ、校長さん。」
『全く、ふふふふ。」
「濟みませんでした。下駄黨の敗北ですね。――だが、今私達が何をまア話しながら來たと思ひます？」
「……？」と目賀田が言つた。すると校長も、
『何だか知らないが、遠くからは何うも……」
「困りましたなア。そんな事よりもつと面白い事なんですよ。貴方がたの批評をしながら來たんですよ。」
「私達の？』
「何ういふ批評です？」雀部と校長が同時に言つた。
「えゝ、さうなんです。上から見ると、てくてく歩いてるのが面白いですもの。』
『それだけですか？』
「怒つちや可けませんよ。――貴方がたが齡の順で歩いてゐるんでせう？ だから屹度あの順で死ぬんだらうつて言つたんです。はははは。上から見ると一歩一歩お墓の中へ下りて行くやうでしたよ。」
「これは驚いた。」校長はさう言つて、態とでもない様に眼を圓くした。そして、も一度、『これは驚いた。」
「何を驚くのだらう。」と、多吉は可笑しく思つた。が、彼の豫期したやうな笑ひは誰の口からも出なかつた。
稍あつて雀部は、破れた話を繕ふやうに、「すると何ですね、私は二番目に死ぬんですね。厭だなア。あああ。」
「今井さんも今井さんだ。」と、目賀田は不味い顏をして言ひ出した。「俺のやうな老人に死ぬ話は眞平だ。」
青二才の無禮を憤る心は十分あつた。
「さう一概に言ふものぢやない、目賀田さん。」雀部は皆の顏を見廻してから言つた。「私は今井さんのやうな人は大好きだ。竹を割つたやうな氣性で、何のこだはりが無い。言ひたければ言ふし、食ひたければ食ふし……今時の若い者は斯うでなくては可けない。實に面白い氣性だ。』
「そ、そ、さういふ譯ぢやないのさ。雀部さん、貴方のやうに言ふと角が立つ。俺も好きさ。今井さんの氣性には俺も惚れてゐる。……たゞ、

俺の嫌ひな話が出たから、それで嫌ひだと言つたまでですよ。なア今井さん、さうですよなア。』
『全く。』校長が引き取つた。『何ももう、何もないのですよ。』
『困つた事になりましたねえ。』
さう言ふ多吉の言葉を雀部は奪ふやうにして、
『何も困る事はない。…それぢや私の取越苦勞でしたなア。はゝゝ。これこそ墓穴の近くなつた證據だ。』
『いや、今も雀部さんのお話だつたが、食ひたければ食ひ、言ひたければ言ふといふ事は、これで却々出來ない事でしてねえ。』
校長は此處から話を新しくしようとした。
『また麥煎餅の一件ですか？』
斯う言つて多吉は無邪氣な笑ひを洩した。それにつれて皆笑つた。危く破れんとした平和は何うやら以前に還つた。
老人も若い者も、次の話題の出るのを心に待ちながら歩いた。
すると、目賀田は後ろを振向いた。
『今井さん。今日は俺も煎餅組にして貰ひませうか。飲むと歸途が歸途だから歩けなくなるかも知れない。』
「勝利は此方にあつた。」と多吉は思つた。そして口に出して、『今日は帽子が無いから可いぢやありませんか？』
『今日は然し麥煎餅ぢやありませんよ。』
雀部は言葉を插んだ。
『何でせう？』
『栗ですよ。栗に違ひない。』
『それはまた何故ね？』と目賀田は溫なしく訊いた。
『田宮の吝嗇家だもの、一錢だつて餘計に金のかゝる事をするもんですか。屹度昨日あたり、裏の山から生徒に栗を拾はして置いたんでせうさ。まア御覽なさい、屹度當るから。』
『成程、雀部さんの言ふ通りかも知れませんね。』二三度首を傾げて見てから、校長も同意した。
坂を下り盡すとまた溪川があつた。川の縁には若樹の漆が五六本立つてゐて、目も覺める程に熟しきつた色の葉の影が、黃金の牛でも沈んでゐるやうに水底に映つてゐた。川上の落葉を載せた淸く淺い水が、飴色の川床の上を幽かな歌を歌つて流れて行つた。S――村は其處に盡きて、橋を渡ると五人の足はもうT――村の土を踏んだ。
路はそれから少し幅廣くなつた。出つ入りつする山と山の間の、土質の惡い畑地の中を緩やかに逶つて東に向つてゐた。日はもう高く上つて、路傍の草の葉も乾いた。畑の中には一軒二軒と壓しつぶされたやうな低い古い茅葺の農家が、其處此處に散らばつてゐた。狼のやうな顏をした雜種らしい犬が、それ等の家から出て來て、遠くから臆病らしく吠え立てた。
多吉にも松子にも何となく旅に出たやうな感じがあつた。出逢つた男や女も、多くはただ不思議さうに見迎へ見送るばかりであつた。偶に禮をする者があつても、行き違ふ時はこそこそと擦り抜けるやうにして行つた。
居村の路を歩く時に比べて、親しみの代りに好奇心があつた。
『田が少ないですね。』多吉は四邊を見渡しながら、そんな事を言つて見た。山も、木も、家も、出逢ふ人も、皆それ〴〵に特有な氣分の中に落着いてゐるやうに見えた。そして其の氣分と不時の訪問者の自分等とは、何がなしに昔からの他人同志のやうに思はれた。讀んだ事のない本の名を聞いた時に起す心持は、やがて此の時の多吉の心持であつた。

『粟と稗と蕎麥ばかり食つてゐるから、此の村の人の才る葉は石のやうに堅くて眞黑だ。』雀部はそんな事を言つて多吉と松子を笑はせた。さういふ批評と觀察の間にも、此の中老の人の言葉には、自分の生れ、且つ住んでゐる村を誇るやうな響きがあつた。

『此の村の女達の半分は、今でもまだ汽車を見た事がないさうです。』といふ風に校長も言つて聞かせた。

それ等の言葉は必ずしも多吉の今日初めて聞いたものではなかつた。然し彼は、汽車に近い村と汽車に遠い村との文化の相違を、今漸く知つたやうな心持であつた。地圖の上では細い筆の軸にも隱れて了ふ程の二つの村にもさうした相違のあるといふ事は、若い準訓導の心に、何か知ら大きい責任のやうな重みを加へた。

それから彼此一里の餘も歩くと、山と山とが少し離れた。其處は七八町歩の不規則な形をした田になつてゐて、刈り取つた早稻の始末をしてゐる農夫の姿が、機關仕掛の案山子のやうに彼方此方に動いてゐた。田の奧は山が又迫つて、二三十の屋根が重なり合つて見えた。

馬の足跡の多い畔路を歩き盡して、其の部落に足を踏み入れた時、多吉も松子もそれと聞かずにもう學校の程近い事を知つた。物言はぬ人のみ住んでゐるかとばかり森閑としてゐる秋の眞晝の山村の空氣を搖がして、其處には音とも聲ともつかぬ、遠いとも近いとも判り難い、一種の底深い騷擾の響が、忘れてゐた自分の心の聲のやうな親みを以て、學校教師の耳に聞えて來た。

何となく改まつたやうな心持があつた。草に埋もれた溝と、梅や桃を植ゑた農家の垣根の間の少し上りになつた凸凹路を、まだ二十歩とは歩かぬうちに、行手には二三人の生徒らしい男の兒の姿が見えた。其の一人は突然大きい聲を出して『來た。來た。』と叫んだ、年長の一人はそれを制するらしく見えた。そして一緒に、敵を見附けた斥候のやうに駈けて行つて了つた。日賀田は立止つて端折つた裾を下し、校長と雀部をやり過して、其の後に跟いた。

雨風に朽ちて形ばかりに立つてゐる校門が見えた。農家を造り直した見すぼらしい茅葺の校舍も見えた。門の前には兩側に竝んでゐる二三十人の生徒があつた。大人のやうに脊のひよろ高いのもあれば、海老茶色の毛絲の長い羽織の紐を總角のやうに胸に結んでゐるのもあつた。一目見て上級の生徒である事が知れた。

『甘くやつてる哩。』と多吉は先づ可笑しく思つた。それは此處の學校の教師の周到な用意に對してであつた。

一行が前を通る時に、其生徒共は待ち構へてゐたやうに我遲れじと頭を下げた。『ふむ。』と校長も心に點頭くところがあつた。氣が附くと、其の時はもう先に聞えてゐた騷擾の聲が鎭まつてゐて、校庭の其處からも此處からもぞろぞろと子供等が駈けて來て交る〳〵禮をした。水槽の水に先を爭うて首を突き出す牧場の仔馬のやうであつた。

『さアさア、何卒。』ひどく訛りのある大きい聲が皆の眼を玄關に注がせた。其處には脊の低い四十五六の男が立つて、揉手をしながら愛想笑ひをしてゐた。色の黑い、痘痕だらけの、蟹の甲羅のやうな道化た顏をして、白墨の粉の着いた黑木綿の紋附に裾短い袴を穿いた――それが眞面目な、教授法の熟練な教師として近郷に名の知れてゐる、二十年の餘も同じ山中の單級學校を守つて來た此處の校長の田宮であつた。

『もう皆さんはお揃ひですか。』

『さうであす。先刻から貴方がたのお出をお待ち申してゐたところでごあした。』

『お天氣で何よりでしたなア。』

「眞個にお蔭さまであした。――さア、ま、まア何卒。」

『□□の先生はもう來ましたか。』と雀部は路すがら話した肋田の教師の事を訊いた。

『××さんは今日の第一着であした。さ、さ、まア――』

「何卒お先きに。」と目賀田は校長を顧る。

「私は一寸、便所に。」

さう言つて校長は校舍の裏手に廻つて行つた。雀部は靴を脱いで上り、目賀田は危なつかしい手つきをして草鞋の紐を解きかけた。下駄を穿いた二人はまだ外に立つてゐた。生徒共は遠卷きに卷いて此の樣を物珍らし氣に眺めてゐた。

『生徒が門のところで禮をしましたね。』女教師が多吉に囁いた。

『えゝ。今日は授業批評會ですからね。』と多吉も小聲で言ふ。

「それぢや臨時でせうか。」

「臨時でなかつたら馬鹿氣てゐるぢやありませんか。――批評會は臨時ですからね。」

「えゝ、」

「生徒は正直ですよ。待つと言へば待るし、待るなと言へば居ないし、……學校にゐるうちだけはね。」

其處へ校長が時計を出して見ながら、便所から歸つて來た。

「丁度十時半です。」

『さうですか。』

「丁度三時間かゝりました。一里一時間で、一分も違はずに。」

さう言つた顏は如何にもそれに滿足したやうに見えた。

多吉は何故かなしに笑ひ出したくなつた。そして松子の方を向いて、

「貴方がゐないと、もつと早く來られたんですね。」

「丁度に來たから可いでせう。」靴を脱ぎながら校長が言つた。

『何が丁度だらう。』と、多吉はまた心の中に可笑しくなつた。誰も何とも定めはしないのに。」

「そんなら私、歸途には早く歩いてお目にかけますわ。」松子は鼻の先に皺を寄せて、甘えるやうに言つた。

それから半時間ばかり經つと、始業の鐘が嗄れたやうな音を立てゝ一しきり騒がしく鳴り響いた。多くは裸足の儘で各自校庭に遊び戲れてゐた百近い生徒は、その足を拭きも洗ひもせず、吸ひ込まれるやうに暗い屋根の下へ入つて行つた。がた／＼と机や腰掛の鳴る音。それが鎭まると教師が兒童出席簿を讀み上げる聲。――「瀧澤長之助、木下捨次、木下佐五郎、四戸佐太、佐々木申松……」

「はい、はい……」と生徒のそれに答へる聲。

愈々批評科目の授業が始つた。「これ前の修身の時間には、皆さんは何を習ひましたか。何といふ人の何をしたお話を聞きましたか。誰か知つてゐる人は有りましえんか。あんまお梅さん？　さうであした。お梅さんといふ人の親孝行のお話であした。誰か二年生の中で、今其のお話の出來る人が有りましえんか。」――斯ういふ風に聞き苦しい田舍教師の言葉が門の外までも聞えて來た。門に向いた教室の格子窓には、窓を背にして立つてゐる參觀の教師達の姿が見えた。

がた／＼と再び机や腰掛の鳴る音の暗い家の中から聞えた時は、もう五十分の授業の濟んだ時であつた。生徒は我も我もと先を爭うて明るい處へ飛び出して來た。が、其の儘家へ歸るでもなく、年長の子供等は其處此處に立つて何かひそ／＼話し合つてゐた。門の外まで出て來

て、「お力い、お力い。」と聲を屈めねばならぬ程の高い聲を出して友達を呼んでゐる女の子もあつた。

教師達は五人も六人も玄關から出て來て、交る交る裏手の便所へ通つた。其の中には雀部もゐた、多吉もゐた。多吉は大きい欠伸をしながら出て來て、笑ひながら其邊にゐる生徒共を見廻した。多くは手織の縞か盲目地の無尻に同じ股引を穿いたそれ等の服裝は、彼の教へてゐるS——村の子供とさしたる違ひはなかつた。それでも「汽車に遠い村の子供」といふ感じは何處となく現れてゐた。生徒の方でも目引き袖引きして此の名も知らぬ若い教師を眺めた。

『おいおい。』さう言ひながら多吉は子供等の[illegible]に近づいて行つた。「お前達は善い先生を持[illegible]だね。」

子供等は互ひに目を見合つて返事を譲つた。前の方にゐたのは逃げるやうに皆の後ろへ廻つた。

『お前達は何を一番見たいと思つてる？』多吉はまた言つた。

それにも返事はなかつた。

「何か見たいと思つてる物があるだらう？……誰も返事をしないのか？　は〻〻。T——村の生徒は石地藏みたいな奴ばかりだと言はれても可いか？」

子供等は笑つた。

「物を言はれたら直ぐ返事をするもんだ、お前達の先生はさう教へないか？　此方から何か言つて返事をしなかつたら、毆つても可い。先方で毆つて來たら此方からも毆れ。もつとはきはきしなけア可かん。』

『己ア軍艦見たい、先生。』

道化た顏をしたのが後ろの方から言つた。

「軍艦？　それから？」

「己ア蓄音機だなア。』と他の一人が言ふ。

『ようし。軍艦に蓄音機か。それでは今度は直ぐ返事をするんだぞ。可いか？』

「はい。」と皆一度に言つた。

「お前達は汽車を見た事があるか？』

「有る。」「無い。」と子供等は口々に答へた。

『見た事があるけれども、乘つた事ア無い。』

脊の高いのが皆の後ろから言つた。

『さアさア皆歸れ歸れ。』といふ大きな聲が其の時多吉の後ろから聞えた。皆は玄關の方を見た。其處には此處の校長が兩手を展げて敷居の上に立つてゐた。

『今井先生、さア何卒。』また聲を大きくして、「今日は學校にお客樣があるのだから、お前達が騒がしくてはならん。」

多吉は笑ひながら踵を返して、休みの日にS——村へ遊びに來たら、汽車を見に連れてつてやると子供等に言つた。そして中へ入つて行つた。

校庭のひつそりした頃に、腰の曲つた小使が草箒を持つて出て來て、玄關から掃除に取りかかつた。草鞋、靴、下駄、方々から集つた教師達の履物は丁寧に並べられた。皆で十七八足あつた。其の中に二足の女下駄の、一つは葡萄茶、一つは橄欖色の緒の色が引き立つてゐた。

「此處でまた待つて居ますか？」多吉は後ろに跟いて來る松子を振返つて言つた。

『え〻。少し寒くなつて來たやうですね。』

多吉は無造作に路傍の石に腰を掛けた。松子は少し離れて納戸色の傘を杖に蹲んだ。

其處はもうS——村に近い最後の坂の頂であつた。二人は幾度か斯うして休んでは、寄路をして遅れた老人達を待つた。待つても待つても來なかつた。さうして又歩くともなく歩き出して、到頭此處まで來てしまつた。

日はもう午後五時に近かつた、光の海のやうに明るい雲なき西の空には、燃え落つる火の玉のやうな晩秋の太陽が、中央山脈の上に低く沈みかけてゐた。顫へるやうな弱い光線が斜めに二人の横顏を照した。そして、周圍の木々の葉裏にはもう夕暮の陰影が宿つて見えた。

行く時のそれは先方にゐるうちに大方癒つてゐたので、二人はさほど疲れてゐなかつた。が、流石に斯うして休んでみると、多吉にも膝から下の充血してゐる事が感じられた。そして頭の中には話すべき何物もなくなつてゐるやうに輕かつた。

授業の濟んだ後、菓が出た、酒が出た、栗飯が出た。そして批評が始まつた。然し其の批評は一向にはずまなかつた。それは一つは、思ひ掛けない出來事の起つた爲めであつた。

『それでは徐々皆さんの御意見を伺ひたいものであす。』さう主人役の校長が言出した時、いつもよく口を利く側になつてゐる頭の禿げた眇目の教師が、俄かに居ずまひを直して、八疊の一間にぎつしりと坐り込んでゐる教師達を見廻した。

『批評に移る前に――と言つては今日の會を冒瀆するやうで誠に濟まない譯ですが――實は一つ、私から折入つて皆さんの御意見を伺つて見たい事があるのですが……自分一箇の事ですから何ですけれども、然し何うも私としては默つてゐられないやうな事なので。』

一同何を言ひ出すのかと片唾をのんだ。常から笑ふ事の少ない眇目の教師の顏は、此の日殊更苦々しく見えた。そして語り出したのは次のやうな事であつた。――先月の末に郡役所から呼び出されたので、何の用かと思つて行つて見ると、郡視學に別室へ連れ込まれて意外な事を言はれた。それは外でもない。自分が近頃……といふ噂があるとかで、それを詰責されたのだ。

『實に驚くではありませんか？ 噂だけにしろ、何しろ私が先づ第一に、獨身で斯うしてゐなさる山屋さんに濟みません。それに私にしたところで、教育界に身を置いて彼此三十年の間、自分の耳の聾だつたのかも知れないが、今迄つひぞ惡い噂一つ立てられた事がない積りです。……自讃に過ぎぬかも知れないが、それは皆さんもお認め下さる事と思ひます。……實に不思議です。私は學校へ歸つて來てから、口惜しくつて口惜しくつて、男泣きに泣きました。』

…………。

『……口にするも恥づるやうなそんな噂を立てられるところを見ると、つまり私の教育家としての信任の無いのでせう。さう諦めるより外仕方がありません。然し何うも諦められません。――一體私には、何處かさういふ噂でも立てられるやうな落度があつたのでせうか？』

一同顏を見合すばかりであつた。と、多吉はふいと立つて外へ出た。そして便所の中で體を搖つて一人で笑つた。苦り切つた××の眇目な顏と其の話した事柄との不思議な取合せは、何うにも斯うにも可笑しくつて耐らなかつたのだ。「あの老人が男泣きに泣いたのか。」と思ふと、又しても新しい笑ひが口に上つた。

多吉の立つた後、一同また不思議さうに目を見合つた。すると誰よりも先に口を開いたのは雀部であつた。

『何うも驚きました。――然し何うも、郡視學も郡視學ではありませんか？ ××さんにそんな莫迦な事のあらう筈のない事は、苟くも瘋癲白癡でない限り、何人の目も一致するところです。たとひそんな噂があつたにしろ、それを取上げて態々呼び出すとは……』

『いや今日私のお伺ひしたいのは、そんな事ではありません。視學は視學です。……それより

も一體何うしてこんな噂が立つたのでせう？」

と、語氣が少し强かつた。

「誰か、生徒の父兄の中にでも、何かの行き違ひで貴方を恨んでる――といふやうなお心當りもありませんのですか？」

仔細らしい顏をした一人の教師が、山羊のやうな顎の鬚を撫でながらさう言つた。

「斷じてありません。色々思ひ出したり調べたりして見ましたけれども。」と强く頭を振つて××は言つた。「此の一座の中になくて何處にあらう？」といふやうな怒りが眼の中に光つた。

或者は窃かに雀部の顏を見た。

それも然し何うやら斯うやら收りがついた。が、貼田の教師はそれなり餘り口を利かなかつた。從つて肝腎の授業の批評は一向榮えなかつた。シとス、チとツなどの教師の發音の訛りを指摘したのや、授業中一學年の生徒を閑却した傾きがあつたといふ說が出たぐらゐで、座は何となく白けた。さうしてる處へ其の村の村長が來た。盃が俄かに動いて、話は全くの世間話に移つて行つた。

三時になつて一同引き上げる事になつた。門を出た時、半分以上は顏を赤くしてゐた。中にも足元の確かでない程に醉つたのは目賀田であつた。

路の岐れる毎に人數が減つた。とある路傍の屋根の新らしい大きい農家の前に來た時、其處まで一緒に來た村長は、皆を誘つて其の家に入つて行つた。其處には村の誇りにしてある高價な村有種馬が飼はれてあつた。

家の主人は喜んで迎へた。そして皆が廐舍を出て裏庭に廻つた時は、座敷の緣側に薄縁を布いて酒が持ち出された。それを斷るは此處等の村の禮儀ではなかつた。

多吉と松子は、稍あつてから一足先に其の家を出て來たのであつた。

二人は暫くの間坂の頂に押默つてゐた。

「乾度醉つてらつしやるのでせうね？」

「えゝ、さうでせう。眞箇に爲樣がない。」と言つて、多吉は卷煙草に火を點けた。

然し二人は、日の暮れかゝる事に少しも心を急がせられなかつた。待つても待つても來ない老人達を何時までも待つてゐたいやうな心持であつた。

稍あつて多吉は、「僕も年老つて飲酒家になつたら、あゝでせうか？ 實に意地が汚ない。目賀田さんなんか盃より先に口の方を持つて行きますよ。』

「えゝ。そんなに美味いものでせうか？』

「さア。……僕も一度うんと飲んだ事がありますがね。何だか變な味がするもんですよ。』

「何時お上りになつたんです？」

「兄貴の婚禮の時。皆が飲めつて言ふから、何糞と思つてがぶ〳〵やつたんですよ。さうすると瞼が段々重くなつて來ましてねえ。莫迦に動悸が高くなるんです。これア變だと思つて横になつてると、目の前で話してる人の言葉がずつと遠方からのやうに聞えましたよ。……それから終ひに、綺麗な衣服を着た兄貴のお嫁さんが、何だか僕のお嫁さんのやうに思はれて來ましてねえ。僕はまだ嫁なんか貰ふ筈ぢやなかつたがと思つてるうちに、何時の間にか眠つちやつたんです。』

「面白いのね。お幾歳の時です。』

「十七の時。』

多吉は腰掛けた石の冷氣を感じて立ち上つた。そして今來た方を見渡したが、それらしい人影も見えなかつた。

「何うしたんでせう？』

「眞箇にねえ。……斯うしてると川の音が聞えますね。』

『川の音？』

二人は耳を澄ました。
『聞えるでせう？』
『聞えませんよ。』
『聞えますよ、此の下に川があつたぢやありませんか？』
『さう言へば少し聞えるやうですね。……うむ、聞える。彼處まで行つて待つてることにしませうか？』
『さうですね。』
『實に詰らない役だ。』
『眞個にね。私がゐなかつたら先へいらつしやるのでせう？』
『はゝ。』と多吉は高く笑つた。
二人は坂を下つた。
溪川の水は暮近い空を映して明るかつた。二人は其の上の橋の、危なげに丸太を結つた欄干に背を寄せて列んだ。其處からもう學校まで十一二町しかなかつた。
『此處で待つて來なかつたら何うします？』
『私は何うでも可くつてよ。』
『それぢや先に歸る事にしますか？』
『歸つても可いけれども、何だか可笑しいぢやありませんか？』
『そんなら何時までも待ちますか？』
『待つても可いけれど……』
『日が暮れても？』
『私何うでも可いわ。先生の可いやうに。』
『若しか待つてるうちに日が暮れて了つて、眞暗になつたところへ、山賊でも出て來たら何うします？』
『厭ですわ、嚇かして。』
『其處等の藪ががさ／＼鳴つて、豆絞りの手拭か何か頬冠りにした奴が、にゆつと出て來たら？』
『出たつて可いわ。先生がいらつしやるから。』
『僕は先に逃げて了ひますよ。』
『私も逃げるわ。』
『逃げたつて敵ひませんよ。後ろから襟首をぐつと捉まへて、命が欲しいか金が欲しいかと言つたら何うします？』
『お金を遣るわ。一圓ばかししか持つてないから。』
『それだけぢや足らないつて言つたら？』
『そしたら……そしたら、先に逃げた先生がどつさり持つてるから、あの方へ行つてお取りなさいつて言つてやるわ。ほゝゝ。』
『失敗つた。此の話はもつと暗くなつてからするんだつけ。』
『隨分ね。……もう驚かないから可いわ。』
『眞個ですか？』
『眞個。驚くもんですか。』
『それぢや若し……若しね。』
『何が出ても大丈夫よ。』
『若しね、……』
『えゝ。』
『罷めた。』
『あら、何故？』
『何故でも罷めましたよ。』
多吉は眞面目な顔になつた。
『あら、聞かして頂戴よう。ねえ、先生。』
『……。』と多吉は思つた。そして、『罷めましたよ。貴方が喫驚するから。』
『大丈夫よ。何んな事でも。』
『眞個ですか？』
多吉は駄目を推すやうに言つた。
『えゝ。』
『少し寒くなりましたね。』
松子は男の顔を見た。もう日が何時しか沈んだと見えて、周圍がぼうつとして來た。溪川の水にも色が無かつた。
松子は、と、くつ／＼と一人で笑ひ出した。笑つても笑つても罷めなかつた。終ひには多吉

も僞方なしに一緒になつて笑つた。
『誰がそんなに可笑しいんです？』
『何でもないこと。』
『厭ですよ。僕が莫迦にされてるやうぢやありませんか？』
『あら、さうぢやないのよ。』松子は漸く笑ひを引込ませた。
『女には皆――の性質があるといふが、眞箇か知ら。』と不圖多吉は思つた。そして言つた。『女にも色々ありますね。先のお婆さんは却々笑はない人でしたよ。』
『先のお婆さんとは？』
『貴方の前の女先生ですよ。』
『まア、可哀想に。まだ二十五だつたつてぢやありませんか？』
『獨身の二十五ならお婆さんぢやありませんか？』
『獨身だつて……。そんなら女は皆結婚しなければならないものでせうか？』
『二十五でお婆さんと言はれたくなければね。』
『隨分ね、先生は。』
『さうぢやありませんか？』
『先の方とは、先生はお親しくなすつたでせうね？』
『始終怒られてゐたんですよ。』
『嘘ばつかし。大層眞面目な方だつたさうですね？』
『えゝ。時々僕が飛んでもない事を言つたり、子供らしい眞似をして見せるもんだから、其の度怒られましたよ。それが又面白いもんですからね。』
『……飛んでもない事つて何んな事を仰しやつたんです？』
『女は皆――の性質を持つてるつて眞箇ですかつと言つたら、貴方とはこれから口を利かないつて言はれましたよ。』
『まア、隨分酷いわ。……誰だつて怒るぢやありませんか、そんな事を言はれたら。』
『さうですかね。』
『怒るぢやありませんか？ 私だつて怒るわ。』
すると今度は多吉の方が可笑しくなつた。笑ひを耐へて、『今怒つて御覧なさい。』
『知りません。』
『あはゝゝ。』と多吉は遂に噴出した。そしてすつかり敵を侮つて了つたやうな心持になつた。
『矢澤さん。先刻僕が何を言ひかけて罷めたか知つてますか？』
『仰しやらなかつたから解らないぢやありませんか？』
『僕が貴方を――ようとしたら、何うしますつて言ふ積りだつたんです。あはゝゝ。』
『可いわ、そんな事言つて。……眞箇は私も多分さうだらうと思つたの。だから可笑しかつたわ。』
其の笑ひ聲を聞くと多吉は何か的が外れたやうに思つた。そして女を見た。
周圍はもう薄暗かつた。
『まア何うしませう、先生？ こんなに暗くなつちやつた。』と、暫くあつて、松子は俄かに氣が急き出したやうに言つた。
多吉には、然し、そんな事は何うでもよかつた。――ものが、急に解らないものになつたやうな心持であつた。
『可いぢやありませんか？ これから眞箇に嚇して、貴方に本音を吐かして見せる。』
『厭、私、嚇かすのは。』
『厭なら一人お歸りなさい。』
『ねえ、何うしませう？ あれ、あんなにお星樣が見えるやうになつたぢやありませんか。』
『そんなに狼狽へなくても可いぢやありませんか、急に？』
『えゝ。……ですけれども、何だか變ぢやあり

ませんか?……』
『はゝ。……あれア滑稽でしたね。……。あの老人が……と思ふと、僕は耐らなくなつたから便所へ逃げたんですよ。』
『えゝ。先生がお立ちになつたら、皆變な顏をしましたわ。』
『だつて可笑しいぢやありませんか。あの女の人も一緒になつて憤慨するんだと、まだ面白かつた。』
『可哀想よ、あの方は。……眞個に私あのお話を聞いてゐて、恐くなつたことよ。』
『何が?』
『だつてさうぢやありませんか?……。あの方のは噂だけかも知れないけれども、噂を立てられるだけでも厭ぢやありませんか?』
『僕は隨分可笑しかつた。口惜しくつて男泣きに泣いたなんか僞つてるぢやありませんか?』
『一體あれは眞個でせうか? 誰か中傷したんでせうか?』
『さア、貴方は何と思ひます?』
『解らないわ。……』
『我田引水ですね。』
『おかさないのよ。ですけれども、何だかそんなな氣がするわ。』

『男の方では……。』
『えゝ。まアそんな……。そしてあの山屋さんて方、屹度私、意志の弱い方だと思ふわ。』
『さうかも知れませんね……。』
『ですけれど、誰でせう、視學に密告したのは?』
『それア解つてますよ。――老人達があんな子供らしい惡戲をするなんて、可笑しいぢやありませんか?』
『眞個だわ。……私達の知つてる人でせうか?』
『知れてるぢやありませんか?』
『雀部先生ね。屹度さうだわ。――大きい聲では言はれないけれども。』
『あ、お待ちなさい。』と言つて多吉は聞耳を立てた。
溪川の水がさら〳〵と鳴つた。
『聲がしたんですか?』
『默つて。』
二人は坂を見上げた。空は僅かに夕映の名殘りをとゞめてゐるだけで、光の淡い星影が三つ四つ數へられた。
『あら、變だわ。聲のするのは彼方ぢやありませんか?』と、稍あつて松子は川下の方を指した。

『さうですね。……變ですね。』
『若しか外の人だつたら、私達が此處に斯うしてるのが可笑しいぢやありませんか?』
『あゝ、あれは雀部さんの聲だ。さうでせう? さうですよ。』
『えゝ、さうですね。何うして彼方から……』
多吉は兩手で口の周圍を包むやうにして呼んだ。『先生い。何處を歩いてるんでせう?』
『おう。』と間をおいて返事が聞えた。確かに川下の方からであつた。
間もなく夕暗の川縁に三人の姿が朧氣に浮び出した。
『何うしてそんな方から來たんです?』
『今井さん一人ですか?』
『矢澤さんもゐます。餘り遲いから今もう先に歸つて了はうかと思つてゐたところでした。』
『いや、濟みませんでした。』
『何うしてそんな方から來たんです? 其方には路がなかつたぢやありませんか?』
『いや、失敗失敗。』
それは雀部が言つた。
『狐にでも魅まれたんですか?』
『今井さん、温なしく貴方と一緒に先に來れば可かつた。』へと〳〵に疲れたやうな目賀田の

聲がした。
『いやもう、狐なら可いが、雀部さんに魅まれてさ。』
『それはもう言ひつこなし。降參だ、降參だ。』
と雀部がいふ。
其の内に三人とも橋の上に來た。
『あゝ疲れた。』校長は欄干に片足を載せて腰かけた。『矢澤さん、どうも濟みませんでした。』
『いゝえ。何うなすつたのかと思つて。』
『眞箇に濟みませんでしたなア。』と雀部は言つた。『多分もう學校へ歸つてオルガンでも彈いてらつしやるかと思つた。』
『今井さん、まア聞いて下さい。』目賀田老人は腰を延ばしながら訴へるやうな聲を出した。
『……彼處で、止せば可いのに好加減飲んでね。雀部さん達はまだ俺より若いから可いが、俺はこれ此の通りさ。そしたら雀部さんが、近路があるから其方を行つて、貴方がたに追附からぢやないかと言ふんだものな。贊成したのは俺も惡いが、それはそれは嶮い坂でね。剰に辛と此の川下へ出たら、何うだえ貴方、此間の洪水に流れたと見えて橋が無いといふ騷ぎぢやないか。それからまた半里も斯うして上つて來た。いやもう、これからもう雀部さんと一緒には歩かない。』
『はゝゝ。』と多吉は笑つた。
『然しまア可かつた。彼處に橋が有つたら、危なくお二人を此處に置去りにするところでしたよ。』
『私はもう默つてる。何うも四方八方へ私が濟まない事になつた。』と雀部は笑ひながら頭を掻いた。
『ところで、誰方か紙を持つてませんかな？　俺は今まで耐へて來たが……一寸皆さんに待つて貰つて。』
紙は松子の袂から出た。
『少し臭いかも知れないから、も少し先へ行つて休んでて下さい。今井さん、これ頼みます。』
さう言つて目賀田は蝙蝠傘を多吉に渡し、痛い物でも踏むやうな腰附をして、二三間離れた橋の袂の藪蔭に蹲つた。禿げた頭だけが薄すりと見えた。
『置去りにしますよ、目賀田さん。』さう雀部は揶揄つた。然し返事はなかつた。
四人は橋を渡つた。そして五六間來ると其處等の山から切り出す花崗石の石材が路傍に五つ六つ轉がしてあつた。四人はそれ〱其上に腰掛けた。
『あゝ疲れた。』校長はまた言つた。
『眞箇に疲れましたなア。』と雀部も言つた。
『斯う疲れると、もう何も彼も要らない。……彼處の家でも皆で二升位飲んだでせうね？』
『一升五合位なもんでせう。皆下地のあつたところへ酒が惡かつたから、一層利いたのですよ。』
『此處へもう、寢て了ひたくなつた。』校長は薄暗い中で體をふら〱さしてゐた。
『目賀田さんは隨分弱つたやうですね。』と多吉が言つた。
『いや眞箇に氣の毒でした。彼處の橋のない處へ來たら、子供みたいにぶつ〱言つて歩かないんだもの。』
『あの態ぢや何うせ學校へ泊るんでせうね？』
『とても歸れとは言はれません。』校長が言つた。『一體お老人は、今日のやうな遠方の會へは出なくても可ささうなもんですがねえ。』
『校長さん、さうは言ひなさるな。誰が貴方、好き好んで出て來るもんですか？　高い聲では言はれないが、目賀田さんは私ア可哀想だ。――老朽の準訓導でさ。何時罷めさせられるかも知れない身になつたら……』
『それはさうです。全くさうです。』

『それを今の郡視學の奴は、あれア莫迦ですよ。何處の世に、父親のやうな老人を捉まへてからに何だの彼だの――あれあ餘程莫迦な奴ですよ。莫迦でなけれあ人非人だ。』

酒氣の名殘があつた。

『解りました。』と舌たるい聲で校長が言つた。

話が切れた。

待つても待つても目賀田は來なかつた。到頭雀部は大きな欠伸をした。

『あゝ眠くなつた。目賀田さんは何うしたらうなあ。まさかあの儘寢て了つたのぢやないだらうか。』

『今來るでせう。あゝ、小使が風呂を沸かしておけば可いがなあ。』

さう言ふ校長の聲も半分は欠伸であつた。水の音だけがさら／＼と聞えた。

『俺はまだ二十二だ。――さうだ、たつた二十二なのだ。』今井は何の事ともつかずに、さう心の中に思つて見た。

そして卷煙草に火を點けて、濃くなりまさる暗の中にぽかり／＼と光らし初めた。

松子はそれを、隣りの石から凝と目を据ゑて見つめてゐた。

年老いし彼は商人

年老いし彼は商人。
靴、鞄、帽子、革帶、
ところせく列べる店に
坐り居て、客のくる每、
盡日や、はた、電燈の
青く照る夜も更くるまで、
てらてらに禿げし頭を
禮あつく千度下げつつ、
なれたれば、いと滑らかに
數數の世辭をならべぬ。
年老いし彼はあき人。
かちかちと生命を刻む
ボンボンの下の帳場や、
簿記臺の上に低れたる
其頭、いと面白し。

その頭低るる度每、
彼が日は短くなりつ、
年こそは重みゆきけれ。
かくて、見よ、髮の一條
落ちつ、また、二條、三條、
いつとなく拔けたり、遂に
面白し、禿げたる頭。
その頭、禿げゆくままに、
白壁の土藏の二階、
黄金の寶の山は
積まれたり、いと堆かく。
（日もはゆし、暗の中にも。）

埃及の昔の王は
わが墓の大金字塔を
つくるとて、ニルの砂原、
十萬の黑兵者を
二十年も役せしといふ。
年老いしこの商人も
近つ代の榮の王者、
幾人の小僧つかひて、
人の見ぬ土藏の中に
きづきたり、寶の山を。――
これこそは、げに、目もはゆき
新世の金字塔ならし、
靈魂の墓の標の。

（『ハコダテの歌』より）

我等の一團と彼

一

人が大勢集つてゐると、おのづから其の間に色別けが出來て來る——所謂黨派といふものが生れる。これは何も珍らしいことではないが、私の此間までゐたT——新聞の社會記者の中にもそれがあつた。初めから主義とか、意見とかを立てて其の下に集まつたといふでもなく、又誰もそんなものを立てようとする者もなかつたが、ただ何時からとなく五六人の不平連がお互ひに近づいて、不思議に氣が合つて、そして、一種の空氣を作つて了つたのだ。

先づ繁々往來をする。遠慮のない話をする。內職の安著述の分け合ひをする。時々は誘ひ合つて、何處かに集まつて飲む。——それだけのことに過ぎないが、この何處かに集まつて飲む時が、恐らく我々の最も得意な、最も樂しい時だつた。氣の置ける者はゐず、酒には弱し、直ぐもう調子よく醉つて來て、勝手な熱を吹いては夜更かしをしたものだ。何の、彼のと言つて騷いでるうちには、屹度社中の噂が出る。すると誰かが、赤く充血した、其の癖何處かとろんとした眼で一座を見𢌞しながら、慷慨演說でもするやうな口調で、「我黨の士は大いにやらにやいかんぞ。」などと言ひ出す。何をやらにや可かんのか、他から聞いては一向解らないが、座中の者にはよく解つた。少くとも其の言葉の表してゐる感情だけは解つた。「大いに然り。」とか、「やるとも。」とか卽座に同意して了ふ。さあ、斯うなると大變で、何れも此れも火の出るやうな顏を突き出して、明日にも自分等の手で社の改革を爲遂げて見せるやうなことを言ふ。平生から氣の合はない同僚を、犬だの、黴菌だの、張子だの、麥酒罎だのと色々綽名をつけて、糞味噌に罵倒する。一人が小皿の緣を箸で叩きつけて、「一體社では我々紳士を過するの途を知らん。あんな品性の下劣な奴等と一緒にされちや甚だ困る。」と力み出すと、一人は、胡坐をかいた股の間へ手焙りを擁へ込んで、それでも足らずにじりじりと躪り出しながら、「さうぢや。徒らに筆を弄んで食を偸む。なう。文明の盜賊とは奴等の事ぢや。社會の[illegible]ぢや。我輩は不敏といへども奴等よりはまだ[illegible]な心を有つとる。學問をせなんだ者は眞に爲樣がないなあ。」と酒臭い息を吹いてそれに應ずる。——そして我々は、何時誰が言ひ出したともなく、自分等の一團を學問黨と呼んでゐた。

尤も、醉が醒めて、翌日になつて出勤すると、まるで樣子が違つた。誰を見てもけろりと忘れたやうな顏をして濟ましてゐる。「昨夜は愉快だつたなあ。」と偶に話しかけてみても、相手はただ、「うむ。」と言つて妙な笑ひ方をして見せる位のことだ。命令が出ると何處へでも早速飛び出して行つた。惡い顏をする者もなければ、怠ける者もなかつた。他の同僚に對しても同じで、殊更に輕蔑するの、口を利かぬのといふことはしない。ただ少し冷淡だといふに過ぎない。が、何か知ら事があると、連中のうちで、紙片を圓めたのを投げてやつて、眼と眼を見合はせて笑ふとか、不意に背中をどやしつけて、それに託けて高笑ひをする位のことはやつた。意氣地がないと言へばそれまでだが、これは然しさうあるべき筈だつた。反對派と言つたところで、何も先方が

此方に對抗する黨派を結んでゐたといふでもない。言はば、我々の方で勝手に敵にしてゐただけの話だ。自分等の意見を行ふ地位にゐないといふ外には、社に對してだつて別に大した不平を持つてゐたのでもないのだから。――それに、これは餘り人聞きの好いことではないが、T――新聞は他の社よりも月給や手當の割がずつと好かつた……

この「我が黨の士」の中に、高橋彦太郎といふ記者があつた。我々の間では年長者の方で、もう三十一二の年齡をしてゐたが、私よりは二三箇月遲れて入社した男だつた。先づ履歴から言ふと、今のY――大學がまだ專門學校と言つてゐた頃の卒業生で、卒業すると間もなく中學教師になり、一年ばかり東北の方に行つてゐたらしい。それから東京へ歸つて來て、或政治雜誌の記者になり、實業家の手代になり、遂々新聞界に入つて、私の社へ來る迄に二つ、三つの新聞を渉り歩いた。――ざつとこんなものだが、詳しいことは實は私も知らない。一體に自分に關した話は成るべく避けてしない風の男だつた。が、何かの序に、經濟上の苦しみだけは學生時代から嘗め盡したやうなことを言つたことがある。彼が、新聞になつたのは、恩のある母（多分繼母だつたらう）を養ふ爲で、それが死んだから早速東京へ歸つたのだといふ話も聞いたやうに記憶してゐる。細君もあり、子供も三人かあつたが、何處で何うして結婚したのか、それは少しも解らない。此方から聞いて見ても「そんな下らぬ話をする奴があるものか。」といふやうな顏をして、てんで對手にならなかつた。第一我々の仲間で、その細君を見たといふ者は一人もない。郊外の、しかも池袋の停車場から十町もあるといふ處に住んでゐて、人を誘つて行くこともなければ、又、いくら勸めても、もつと近い處へは引越して來なかつた。

最初半年ばかりは、社中にこれといふ親友も出來たらしく見えなかつた。何方かと言へば口が重く、それに餘り人好きのする風采でもないところへ、自分でも進んで友を求めるといふやうな風はなかつた。「高橋さあん。」と社會部の編輯長が呼ぶと、默つて立つて其の前へ行く。「はい。」と言つて命令を聞き取る。上等兵か何かが上官の前に出た時のやうだ。渡された通信の原稿を受け取つて來て、一通り目を通す。それから出懸けて行く。急くでもない、急かぬでもない。他の者のやうに、「何だ、つまらない。」といふやうな顏をすることもなければ、眼を輝かして、獲物を見附けた獵犬のやうに飛び出して行くこともない。電話口で交換手に怒鳴りつけることもなければ、誂へた辨當が遲いと言つて給仕に劍突を喰はせることもない。そして歸つて來て書く原稿は、若い記者のよくやるやうな、頭つ張りばかり强くて、結末に行つて氣の拔けるやうなことはなく、穩しい字でどんな事件でも相應に要領を書きこなしてあるが、其の代り、これといふ新しみも、奇拔なところもない。先づ誰が見ても世慣れた記者の筆だ。書いて了ふと、片膝を兩手で抱いて、頭腦を椅子の背に靠せて、處々から電燈の線の吊り下つた、煙草の煙で燻ぶつた天井を何處といふことなしに眺めてゐる。話をすることもあるが、話の中心になることはない。猶更子供染みた手柄話をすることはなかつた。つまり、一口に言へば、何一つ人の目を惹くやうなところの無い、或は、爲ない男だつた。

私も、この高橋に對しては、平生餘り注意を拂つてゐなかつた。同じ編輯局にゐて、同じ社會部に屬してゐたからには、無論毎日のやうに言葉は交はした。が、それはたゞ通り一遍の話で、對手を特に面白い男とか、厭な男とか思ふやうな機會は一度もなかつた。これは一人私ば

かりでもなかつたらしい。ところが或時、僕の連中、（其の頃漸く親しくなりかけた許りだつたが、）が或處に落ち合つて、色々の話の末に、社中の職員の扱下しを始めた。先づ上の方から、羽振りの好い者から、何十人の名が大概我々の口に上つた。其の中に高橋の事も出た。

「おい、あの高橋といふ奴な、彼奴も何だか變な奴だぜ。」と一人が言つた。

「さうぢやなう。僕も彼奴に就いちやあ考へとるんぢやが、一體あの男あ彼の儘なんか、それとも高く留まつてるんか？」

「高く留まつてるんでもないれ。」と他の一人が言つた。「何うもさうではないやうだね。あれで却々親切なところがあるよ。僕は此間の赤十字の總會に高橋と一緒に行つたがね。」

最初の一人は、「それは彼奴は色んな事を知つとるぜ。何時か寒石老人と說文の話か何かしとつた。」

「さうぢや。僕も聞いとつた。何しろ彼の男あ一癖あるな。第一まあ彼の面を見い。ぼんとして人の話を聞いとるが、却々油斷ならん人相があるんぢや。」

斯う言つたのは劍持といふ男だつた。皆は聲を合はせて笑つたが、心々に自分の目に映つてある高橋の風采を思ひ浮べてみた。中脊の、日本人にしては色の黑い、少しの優しみもないほどに角ばつた顏で、濃い頰髯を剃つた痕が何時でも靑かつた。そして其の眼が――私は第一に其の眼を思ひ出したので――小い、鋭い眼だつた。そして言つた。

「一癖はあるね、確かに。」

然し、それは言ふまでもなくほんの其の時の思ひ附きだつた。

劍持はしたり顏になつて、「僕はな、以前から高橋を注意人物にしとつたんぢや。先づ言ふとな、彼の男には二つの取柄がある。阿諛を使はんのが一つぢや。却々頑としたところがある。そいから、我々新聞記者の通弊たる自己廣告をせん事ぢや。高橋のべちやくちや喋りをるのは聞いたことがないぢやらう？　ところがぢや、僕の經驗に據ると、彼あした外貌の人間にや二種類ある。第一は、あれつきりの奴ぢや。顏ばかり偉さうでも、中味のない奴ぢや。自己廣告をせなんだり、阿諛を使はなんだりするのは、そんな事する才能がないからなんぢや。所謂見かけ倒しといふ奴ぢやな。そいから第二はぢや。此奴は始末に了へん。一言にして言ふと謀反人ぢやな。何か知ら身分不相應な大望を有つとる。さうして常に形勢を窺うとる。僕の郷里の中學に體操教師があつてなあ、其奴が體操教師の癖に、後になつて解つたが、校長の椅子を覗つとつたんぢや。嘘のやうぢやが嘘ぢやない。或時其の校長の惡口が土地の新聞に出た、何でも黨派を孕ましたとか言ふんぢや。すると其の教師が體操の時間に僕等を山に連れて行つて、大きな松の樹の下に圓陣を作らしてなあ、何だか樣子が違ふ喃と思つとると、平生とはまるで別人のやうな能辯で以て、慷慨激越な演說をおつ始めたんぢや。君達四年級は――其の時四年級ぢやつた――此の學校の正氣の中心ぢやから、現代教育界の腐敗を廓清する爲にストライキをやれえちふんぢや。」

「やつたんか？」

「やつた。さうして一箇月の停學ぢや。體操教師は免職よ。――其奴がよ、何處か思ひ出して見ると高橋に肖とるんぢや。」

「すると何か、彼の高橋も大望を抱いてゐると言ふのか？」

「敢てさうぢやない。敢てさうぢやないが、然し肖とるんぢや。實に肖とるんぢや。高橋がよく煙草の煙をふうと天井に吹いとるな？　あれまで肖とるんぢや。」

「其の教師の話は面白いな。然し劍持の分類はまだ足らん。」某村高橋の噂を持ち出した安井といふのが言つた。「あんな風の男には、また一つの種類がある。それはなあ、外ではあんな工合に一癖ありさうに、構へとるが、内へ歸ると細君の前に頭が舉らん奴よ。しよつちゆう尻に布かれて本人も亦それを喜んでるんさ。愛情が濃かだとか何とか言つてな。彼あして塵つべらしい顏をしとる時も、奚ぞ知らん、細君の機嫌を取る工夫をしとるのかも知れんぞ。」

これには皆噴き出して了つた。啻に噴き出したばかりでなく、大望を抱いてゐるといふ劍持の觀察よりも、毎日顏を合はせながら別に高橋に敬意を有つてゐるでもない我々には、却つて安井の此の出鱈目が事實に近い想像の樣にも思はれた。

が、翌日になつて見ると、劍持の話した體操教師の話は不思議にも私の心に刻みつけられたやうに殘つてゐた。それは私自身も、劍持と同じく、半分は教師の言葉で中學時代にストライキをやつた經驗を有つてゐた爲だつたかも知れない。何だか其の教師が懷しかつた。そして、それに關聯して、おのづと同僚高橋の擧動に注意するやうになつた。

四五日經つと、其の月の社會部會の開かれる日が來た。我々の一團は、會議などになると、妙に皆沈默を守つてゐる方だつた。で、其の日も、編輯長の持ち出した三つか、四つの議案は、何の異議もなく三十分かそこいらの間に通過して了つた。其の議案の中には、近頃社會部の出勤時間が段々遅れて、十一時乃至十二時になつたが、今後宿直の勤務に當つてゐる者は、午前九時までに相違なく出社する事、といふ一箇條もあつた。

會議が濟むと皆どやどやと椅子を離れた。そして、沓音騒がしく、編輯局に入つて行つた。我々も一緒に立つた。が、何時もの癖で、立つた機會に欠伸をしたり、伸びをしたりして、二三人會議室の中に殘つた。すると、も一人我々の外に殘つた者があつた。高橋だ。矢張皆と一緒に立つたが、其の儘窓際へ行つて、何を見るのか、ぢつと外を覗いてゐる。

安井は廊下の靜かになるのを待ちかねたやうに、直ぐまた腰を掛けて、

「今日の會議は、何時もよりも些と意氣地が無さ過ぎたなう？」

「何故君が默つとつたんぢや？」劍持はさう言つて、ちらと高橋の後姿を見た。そして直ぐ、「若し君に何か言ひたい事があつたならぢや。」

「大いにある。僕みたいなものが言ひ出したつて、何が始まるかい？」

「始まるさ。何んでも始まる。」

「これでも賢いぞ。」

「心細い事を言ふなう。」

「然し、考へて見い。第一版の締切が何時？ 五時だらう？ 午後五時だらう？ 午前九時に出て來て、何の用が有るだらう？ 十時、十一時、十二時……八時間あるぞ。今は昔と違つてな、俥もあれば、電車もある。乘つたことはないが、自動車もある世の中だ……」

「高橋君。」私は卷煙草へ火を點けて、斯う呼んで見た。安井はふつと言葉を切つた。

「うむ？」と言つて、高橋は顏だけ此方へ捻ぢ向けた。其の顏を一目見て私は、

「何を見てゐたのでもないのだ。」と思つた。そして、

「今の決議は我々朝寢坊には大分徹へるんだ。九時といふと、僕なんかまだ床の中で新聞を讀んでゐる時間だからねえ。」

「僕も朝寢はする。」

さう言つて、靜かに私の方へ歩いて來た。何んとか次の言葉が出るだらうと思つて待つたが、

高橋はそれぎり口を噤んで、默つて私の顏を見てゐる。爲方がないから、

「此間内の新聞の社説に、電車會社が營業物件を虐待するつて書いてあつたが、僕等だつて同じぢやないか？ 朝の九時から來て、第二版の締切までゐると、彼是十時間からの勤務だ。」

「可いさ。外交に出たら、家へ寄つて緩り寢をして來れば同じ事だ。」

これが彼の答へだつた。

劍持は探りでも入れるやうに、

「僕は又高橋君が何とか意見を陳べてくれるぢやらうと思うとつた。」

「僕か？ 僕はそんな柄ぢやない。なあに、これも矢つ張資本主と勞働者の關係さ。一方は成るべく樂をしようとするし、一方はなるべく多く働かせようとするし……この社に限つたことぢやないからねえ。どれ、行つて辨當でも食はう。」

そして入口の方へ歩きな出しがら、獨語のやうに、「金の無い者は何處でも敗けてゐるさ。」

後には、二人妙な目附をして顏を見合はせた。

が、其の日の夕方、劍持と私と連れ立つて歸る時、玄關まで來ると一足先に歸つた筈の高橋が便所から出て來た。

「何うだ、飲みに行かんか？」

突然に私はさう言つた。すると、

「さうだね、可いね。」と向うも直ぐ答へた。

一緒に歩きながら、高橋の樣子は、何となくさういふ機會を得たことを喜んでゐるやうにも見えた。そして彼は、少し飲んでも赤くなる癖に、いくら飲んでも平生と餘り違つたところを見せない男だつた。飲んでは話し、飲んでは話しして、私などは二度ばかりも醉ひが醒めかけた。それでも話は盡きなかつた。いざ歸らうとなつた時は、もう夜が大分更けて、例の池袋の田舍にゐる高橋には、乘つて行くべき汽車も、電車もない時刻だつた。

「また社の宿直の厄介になるかな。」と彼は事も無げに言つた。家へ歸らぬことを少しも氣にしてゐないやうな樣子だつた。

「僕ん處へ行かんか？」

「泊めるか？」

「泊めるとも。」

「よし、行く。」

其の晩彼は遂々私の家に泊まつた。

二

かくして高橋彦太郎は我々の一團に入つて來た。いや、入つて來たといふは適切でない、此方からちよつかいを出して引き入れて了つた。

先づ私の目に附いたのは、それから高橋の樣子の何といふことなしに欣々としてゐることであつた。何處が何うと取り立てて言ふほどの事はなかつたが、(又それほど感情を表す男ではなかつたが、)同じ膝頭を抱いて天井を睨めてゐるにしても、其の顏の何處かに、世の中に張合ひが出來たとでもいふやうな表情が隱れてゐた。私はそれを、或る探檢家が知らぬ土地に踏み込んでゐて、此處を斯う行けば彼處へ出るといふ樣な見當をつけて、そしてそれに相違のないことを竊と確めた上で、一人で樂しんでゐるやうなものだらうと思つてゐた。餘りそぐはぬ比喩のやうだが、その頃、高橋が我々と一緒に飲みに行つて、剩けに私の家へまで泊まつたのを、彼自身にしては屹度何か探檢をするやうな心持だつたらうと私は忖度してゐたのだ。

が、そんな樣子は、一月か、二月の間には何時となく消えて無くなつて了つた。これは、私が其の樣子を見慣れて了つたのか、乃至は高橋自身そんな氣持に慣れて了つたのか、其處はよく解らない。兎に角、見たところ以前の高橋に還つて了つた。然しそれかと言つて、我々と彼

との間に出來た新らしい關係には、これと言ふ變化も來なかつた。と言ふよりも、初めは互に保留してゐた多少の遠慮も、日を經るとともに無くなつて行つた。そして、先づ最初に此の新入者に對する隔意を失つたのは、斯く言ふ私だつた。私は何故か高橋が好きだつた。

親しくなるにつれ、高橋の色々の性癖が我々の目に附いた。それは、大體に於いて、今まで我々の見、若くは想像してゐたところと違はなかつた。彼は孤獨を愛する男だつた。長い間下積の境地に闘つて來た人といふ趣きが何處かにあつた。彼は路を歩くにも一人の方を好んだ。そして、無論餘り人を訪問する方ではなかつた。

が、時とすると、二晩も、三晩も續けて訪ねて來ることもあつた。さういふ時彼は何か知ら求めてゐた。ただ其の何であるかが我々に解らない場合が多かつた。それから彼は、平生の口の重いに似合はず、よく調子よく喋り出すことがあつた。そしてそれには隨分變つた特徴が有つた。

例へば我々が、我々の從事してゐる新聞の紙面を如何に改良すべきか、又は社會部の組織を如何に改造すべきかに就て、各自意見を言ひ合ふとする。高橋も初めはちよくちよく口を利いて居るが、何時とはなしに口を噤んで了つて、煙草をぷかぷか吹かしながら、話す者の顏を交る交る無遠慮に眺めてゐるか、さもなければ、ごろりと仰向けに臥て了ふ。この仰向けに臥て、聞くでもなく、聞かぬでもなく人の話を聞いてゐるのが彼の一つの癖だつた。そして、皆があらまし思ふ事を言つて了つた頃に、ひよくと起きて、

「それは夢だ。今からそんな事を言つてゐると、我々の時代が來るまでには可い加減飽きて了ふぞ。」といふやうなことを言ふ。

其の所謂我々の時代のまだ〳〵來ないこと、恐らくは永久に來る時の無いことをば、我々もよく知つてゐた。我々ももう野心家の教師に煽てられてストライキをやるやうな齡ではなかつた。が、高橋にさう言はれると、不思議なことには、「成程さうだつた。」といふ樣な氣になつた。つまり高橋は、走つて來る犬に石でも拋り附けるやうに、うまく頃合を計つて言葉を插むから、それで我々の心に當るのだ。そして妙に一種の感慨を催して來る。それを見て高橋は、「ははは。」と格別可笑しくも無ささうに笑ふ。

一體高橋には、人の意表に出でようとしてゐたのか、或はそれが彼の癖だつたのか解らないが、人が何か言ふと、結末になつて、ひよいと口を入れて、それを轉覆かへして了ふやうな、反對の批評をする傾向があつた。其の癖、それが必ずしも彼の本心でないやうな場合が多かつた。

社の同僚に逢坂といふ男があつて、その厭味たつぷりな、卑しい、唾でもひつ掛けてやりたいやうな調子が、常に我々の連中から穢い物か何ぞのやうに取扱はれてゐた。或時安井が其奴から、「君は何時でも背廣ばかり着てゐるが、いくら新聞記者でも人を訪問する時にや相當の禮儀が必要ぢや。僕なんか貧乏はしよるが、洋服は五通り持つとる。」と言はれたと言つて、ひどく憤慨してゐたので、我々もそれにつれて逢坂の惡口を言ひ出した。すると、默つて聞いてゐた高橋はひよいと吸ひさしの卷煙草を遠くの火鉢へ投げ込んで、

「僕は然しさほどにも思はないね。」

如何にも無造作な調子で言つた。

「何故？」と劍持は叱るやうに言つた。

「何故つて、君、逢坂にやあれで却々可愛いところがあるよ。」

安井は少しむきになつて、

「君は彼あいふ男が好きか？」

「好き、嫌ひは別問題さ。だが、君等のやうに言ふと、第一先あ逢坂と同じ社にゐるのが矛盾になるよ。それほど彼奴が共に齒すべからざる奴ならばだ、……先あ何方にしても僕は可いがね。」

さう言つて、何と思つたか、ごろりと横になつて了つた。

「可くはないさ。聞かう、聞かう。」安井は追つ掛けるやうに言つた。「君が何故あんな奴を好くんか、それを聞かう。」

高橋は一寸の間、丁度安井の言葉が耳に入らなかつたやうに、返事もしなければ、身動きもしなかつた。「何故斯う人の言ふことに反對するだらう？」私はさう思つた。すると、彈機仕掛みたいにむくりと起き返つて、皮肉な目附をして我々の顔を一わたり見渡した。そして、

「言つても可いがね。……言ふから、それぢやあ結末まで聞き給へ。可いかね？ 君等は何といふか知らないが、無邪氣といふことは惡徳ぢやあないね？ 賞めるべきことでは決してないが、然し惡徳ぢやあないね、可いかね？ 逢坂は無邪氣な男だよ。實に無邪氣な男だよ。――」

「それはさうさ。然し――」私は言はうとした。

高橋は鋭い一瞥を私に與へて、「例へばだ、社で誰が一番給仕に怒鳴りつけるかといふと、政治部の高見と僕等の方の逢坂だ。高見君はあれあ、鉛筆が削つても、削つても折れると言つて、小刀を床に敲き附ける癇癪持だから、爲様がないが、逢坂のまあ彼の聲は何といふ聲だえ？ それに彼の恰好よ。まるで給仕を噛み殺して了ひさうだ。さうして其の後で以て直ぐ、〇〇だとか、××だとか、すべて自分より上の者に向ふと彼の通りだ。世の中にや隨分見え透いた機嫌の取り方をする者もあるが、あんなのは滅多にないよ。他で見てゐて唾を引つ掛けたくなる。それに、暇さへあれば我々の間を廻つて歩いて、彼の通り幇間染みた事を言ふ。かと思ふと又、機會さへあれば例の自畫自賛だ。でなければ何さ、それ、『我々近代人』と來るさ。ははは。……體彼奴は、今の文學者連中と交際してるのが、餘つ程得意なんだね。そして其奴等の口眞似をして一人で悦に入つてるんだ。淫賣婦が馴染客に情死を迫られて、逃げ出すところを後から斬り附けられた記事へ、個人意識の強い近代的女性の標本だと書いた時は、僕も思はず噴き出したね。ね？

「ところがだ、考へてみると、それが皆僕の前提を肯定する材料になる。無邪氣でなくて誰があんな眞似が出來る？ 我々自身を省るが可い。我々だつて、何時でも逢坂を糞味噌に貶してゐるが、底の底を割つてみれば彼奴と同じぢやないか？ 下の者には何も遠慮をする必要がない。上の者には本意、不本意に拘らず、多少の敬意を表して置く。これあ人情だ。同時に處世の常則だよ。同僚にだつてさうだ、誰だつて惡く云はれたくはないさ。又自分の手柄は君等にしろ、無論僕等にしろ、成るべく多くの人に知らせたいものだよ。流行言葉も用つて見たしな。たゞ違ふのは、其の同じ心を、逢坂が一尺に發表する時に、我々は一寸か二寸で濟まして、置くだけのことだ。何故其の違ひが起るかと云ふと、要するに逢坂が實に無邪氣な人間だといふに歸する。所謂天眞爛漫といふ奴さ。さうしてだね、何故我々が、其の同じ心を逢坂のやうに十分、若くは十分以上に發表することを敢てしないかといふと、之は要するに、何の理由か知らないが、兎に角我々には自分で自分に氣羞かしくそんな事が出來ないんだ。そして其の理由はといふと、――此處ではつきり説明は出來ないがね。――正直に先あ自分の心に

問うて見給へ。決して餘り高尙な理由ではないぜ。――」
「君は無邪氣、無邪氣つて言ふが、君の言ふのは畢竟教養の問題なんぢや。」劍持はしたり顏になつて言つた。「さうぢやないか？ 教育と人格の問題よ。其處が學問黨と非學問黨の別れる處なんぢや。」
「すると、何か？ 人格といふ言葉は餘り抽象的な言葉だから、暫く預かるとして、教養といふことだね。つまるところ、教養が有るといふことと、自己を欺く――少くとも、自己を韜晦するといふことと同じか？」
「高橋君。」安井が横合から話を奪つて、「君は無邪氣は惡德だとか、惡德でないとかいふが、そんなことは我々に全く不必要ぢやないか？ 我々の言つたのは、善惡の問題ぢやあ無い。好惡の問題だよ。逢坂の奴の性質が無邪氣であるにしろ、ないにしろ、兎に角奴の一擧一動に表れとるところが、我々の氣に喰はん。頭の先から足の先まで氣に喰はん。氣に喰はんから氣に喰はんといふに、何の不思議もないぢやないか？」
「それがさ。――ああ面倒臭いな。――先あ考へてみるさ。氣に喰はんから氣に喰はんといふに何の不思議はない。それは我々が我々の感情を發表するに何の拘束も要らんといふことだ。それも可いさ。然し發表したつて何になる？ 可いかね？ 君はまさか逢坂がいくら氣に喰はんたつて、それで以て逢坂と同じ日の下に、同じ空氣を吸つてることまで何うかしようとは思はんだらう？ 現に同じ社にゐて同じ社會部に屬してゐる。誰だつてあんな奴と一緒に生きてるのが厭と言つて死ぬ莫迦はないさ。先方を殺す者もない。さう言ふと大袈裟だが、實際我々が、感情の命令によつて何れだけ處世の方針を變へて可いかは、よく解つてる話ぢやないか？――逢坂が昨日、自分の方が先に言ひ附けたのに、何故外の用を先にしたと言つて給仕を虐めてゐたつけが、感情を發表するに正直だといふ點では、我々は遠く逢坂に及ばないよ。さうだらう？ 若し其の逢坂が我々の唾棄すべき人間ならばだ、我々の今の樣な言動を同時に唾棄しなくつちやならんぢやないか？ あんな奴の蔭口を利くより、何かもう少し氣の利いた話題はたいもんかねえ。」
高橋は一座を見廻した。我々は誰も皆、少し煙に捲かれたやうな顏をしてゐた。
「それはさうさ。話題はいくらでもあるが、然し可いぢやないか？ 我々は何も逢坂を攻擊して快とするんぢやない。言葉は座興だもの。」と私は言つた。
「座興さ、無論。それは僕だつて解つてるよ。僕が言つたんだつて矢張座興だよ。故意に君等を攻擊したんぢやないよ。」
「此奴は隨分皮肉に出來てる男さね。――つまり君のいふのは平凡主義さ。それはさうだよ。人間なんて、君、そんなに各自違つてるんぢやないからねえ。」
安井は妙な所で折れて了つた。一人、劍持だけはまだ何か穩かでない目附をしてゐた。
「はははは。」と高橋は、取つて着けたやうに、戲談らしい笑ひ方をした。「然し僕は喋つたねえ。僕はこんなに喋ることは滅多にないぜ。――然し實を言ふと、逢坂は僕も嫌ひだよ。あんな下劣な奴はないからねえ。」
「さうだらう？」安井は得意になつた。
「君も何だね、隨分彼奴を虐待しとるなう？」
逢坂がぶく／＼肥つた身體を、足音を偸むやうにして運んで來て、不恰好な鼻に鼻眼鏡を載せた顏で覗き込むやうにしながら、「君の今朝の記事には大いに敬服しましたよ。M――新聞で書いとるのなんか、ちつとも成つちよらん。

先刻彼等の社會部長に會つたから、少し僕等の方の記事を讀んで下さいと言つてやつた。」

などと言ふと、高橋は、先づしげしげ相手の顏を見て、それから外方を向いて、「いくらでも勝手に徴發してくれ給へ。」といつたやうな冷淡な顏をするのが常だつた。

私は讀者から目を出して、

「君は、僕、人に反對する時に限つて能辯になる癖があるね。——餘程旋毛曲りだと見える。よく反對したがるからね？」

「さうぢやないさ。」

「さうだよ。」

「僕は公平なんさ。物にはすべて一得、一失有りつてね。小學校にゐる頃から聞いたんぢやないか？ 兩面から論じなくちやあ議論の正鵠は得られない。」

「嘘を吐け！」

「嘘なもんか。——と言ふとまた喧嘩になるか！——尤もさういふ所もあるね。僕にはね、人が何か言ふと、自分で何か考へる時でもさうだが、直ぐそれを別の立場に移して考へる癖があるんだ。其の結果が時として好んで人に反對するやうに見えるかも知れない。」

「それは何方が正直で言ふ言葉か？」

「僕は何時でも正直だよ。——然し、正直でも不正直でも可いぢやないか？ 君は一體餘り單純だから困るよ。此處にゐる連中は、何れだつて多少不穩な人間共にや違ひないが、就中不穩なのは君だよ。人の言葉を一々正直か、不正直か、極めてかゝらうとするし、言つたことは直ぐ實行したがる。餘り單純で、僕から見ると危險で爲樣がない。危險なばかりぢやない、損だよ。單純な性格は人に愛せられるけれども、また直ぐ飽かれるといふ憂ひがあるからね。」

「それはさうぢや。よく當つとる。」と劍持も同意した。「それが龜山（私の名）の長所で、同時に缺點よ。」

「飽きたら勝手に飽くさ。」と私は笑つた。

三

その頃だつた。

或晩高橋が一人私の家へやつて來て、何時になくしめやかな話をした。「劍持は豪いところが有るよ。彼の男は今に發展する。」そんな事も言つた。それが必ずしも態とらしくは聞こえなかつた。其の晩高橋は何でも人の長所ばかりを見ようと努めてゐるやうだつた。

「僕にもこれで樗牛にかぶれてゐた時代が有つたからねえ。」

何の事ともつかず高橋はそんな事も言つた。そして眼を細くして煙草の煙を眺めてゐた。煙はすうつと立つて、微かに亂れて、机の上の眞白な洋燈の蓋に這ひ廻つた。戸外には雨が降つてゐた。雨に[illegible]火事半鐘のやうな音が二三度聞こえた。然し我々はそれを聞いても[illegible]なかつた。

「僕はこれで夢想家に見えるところがあるかね？」

高橋はまたそんな事も言つた。そして私の顏を見た。

「見えないね。」私は言下に答へた。「然し見えないだけに、君の見てる夢は餘程しつかりした夢に違ひない。……誰でも何かの夢は見てるもんだよ。」

「さうかね？」

「さう見えるね。」

高橋は幽かに微笑んだ。

稍あつてまた、

「僕等はまだ、まだ修行が足らんね。僕は時々さう思ふ。」

「修行？」

「僕は今までそれを、つまり僕等の理解がまだ、

まだ足らない所爲だと思つてゐた。常に鋭い理解さへ持つてゐれば、現在の此の時代のヂレンマから脱れることが出來ると思つてゐた。然しさうぢやないね。それも大いに有るけれども、そればかりぢやないね。我々には利己的感情が餘りに多量に有る。」

「然しそれは何うすることも出來ないぢやないか？　我々の罪ぢやない、時代の病氣だもの。」

「時代の病氣を共有してゐるといふことは、あらゆる意味に於いて我々の誇りとすべき事ぢやないね。僕が今の文學者の『近代人』がるのが嫌なのも其處だ。」

「無論さ。――僕の言つたのはさういふ意味ぢやない。何うかしたくつても何うもすることが出來ないといふだけだ。」

「出來ないと君は思ふかね？」

「出來ないぢやないか。我々が此の我々の時代から超越しない限りは、――時代を超越するといふのは、樗牛が墓の中へ持つて行つた夢だよ。」

「さうだ。あれは悲しい夢だね。――然し僕は君のやうに全く絶望してはゐないね。」

「絶望」といふ言葉は不思議な響を私の胸に傳へた。絶望！　そんな言葉を此の男は用ふのか？　私はさう思つた。

二人は暫らく默つてゐた。やがて私は、

「そんなら何うすれば可い？」

「何うと言つて、僕だつてさう確かな見込がついてるんぢやないさ。技師が橋の架替の設計を立てる樣にはね。――然し考へて見給へ。利己といふ立場は實に苦しい立場だよ。これと意識する以上はこんな苦しい立場は無いね。さうだらう？　つまり自分以外の一切を敵とする立場だものね。だから、周圍の人間のする事、言ふ事は、みんな自分に影響する。善にしろ惡にしろ、必ず直接に影響するよ。先方が其の積りでなくつても此方の立場がそれだからね。そしてしよつちゆう氣の安まる時が無いんだ。まあ見給へ。利己的感情の熾んな者に限つて、周圍の景氣が自分に都合がよくなると直ぐ思ひ上る。それと反對に、少しでも自分を侵すやうな、氣に食はんことが有ると、急に氣が滅入つて下らない鬱憤らしでもやつてみたくなるんだね、そんな時は隨分向う見ずな事もするんだよ。――それや世の中にはさういふ人間は澤山有るがね。有るには有るけれども、大抵の人はそれを意識してゐないんだね。其の時、其の時の勝手な感情で自分を欺いてるんだね。」

「それやさうだ。」

「ところが氣が附いて見給へ。こんな苦しいことは無いだらう？　一方では常に氣を安めずに周圍の事に注意しながら、同時に常にそれによつて動く自分の感情を抑へつけてゐなくちやならんことになるんだ。だから一旦さういふヂレンマに陷つた者が、それから脱れよう、脱れようとするのは、もう結局、義務の範圍ぢやないよ。必死だよ。出來る、出來ないは問題ぢや無いんだ。時代の病氣だから何う、斯うと言ふのは、畢竟まだ其處まで行かん人の言ふことつたよ。或は其處まで行く必要の無い人かね。」

「敗けたな！」と私は思つた。そして、「いや、僕も實は其處の處まで行つてゐないよ。――然し可いぢやないか？　僕は可いと思ふな。感情が動いたら動いたで、大いに動かすさ。誰に遠慮も要らん。――要するに僕は、自由に呼吸してゐさへすれば男子の本領は盡きると思ふね。」

「君の面目が躍如としてる。君は羨むべき男さ。」とう言つて高橋は無遠慮に私の顏を眺めた。まるで私を弟扱ひにでもしてるやうな眼だつた。

「失敬な事を言ふな。」言ひながら私は苦笑ひをした。

「僕はまだこんな話をしたことは無いがねえ。」とやがて彼は言ひ出した。「僕はこれでしよつちゆう氣の變る男だよ。僕みたいに氣の變り易い男はまあ無いね。しよつちゆう變る。」
「誰だつてそれはさうぢやないか？」
「さうぢやないね。――それにね、僕はこれでも己惚れを起すことが有るんだぜ、己惚れを。滑稽さ。時々斯う自分を非凡な男に思つて爲樣が無いんだ。ははは。尤も二日か、三日だがね。長くて一週間位だがね。さうして其の後には反動が來る。――あんな厭な氣持はないね。何うして此の身體を苛んでやらうかと思ふね。」
高橋は拙い物でも口に入れたやうな顏をした。
「ふむ。」と私は考へる振りをした。然しいくら考へたとて、私の頭腦は彼の言葉の味を味ふことが出來なかつた。「何うして斯う自分を虐めてゐるんだらう？ ただこんなことを言つて見るのか知ら？」私はさう心の中で呟いた。
「意志だ。意志を求めてゐるんだ。然し意志の弱い男ぢやないがなあ。」やがて又私はさう思つた。すると私の心は、丁度其の頃内職に翻譯しかけてゐた或本の上に辷つて行つた。其の本の著者はロオゼンフェルトだつた。意志といふ言葉とロオズヴェルトといふ名とは不思議にも私の頭腦の中で結び着き易かつた。
高橋は堅く口を結んで、向ひ合つた壁側の本箱を見てゐた。其處には凹凸のある硝子戸に歪んだなりの洋燈の影が映つてささやかな藏書の背皮の金字が冷かに光つてゐた。單調な雨滴の音が耳近く響いた。
「大きい手を欲しいね、大きい手を。」突然私はさう言つた。僕はさう思ふね。大きい手だ。社會に對しても、自分に對しても。」
「然うだ。」といふ返事を期待する心が私に有つた。然し其の期待は外れて了つた。
高橋は眉も動かさなかつた。そして前よりも一層堅く口を結んだ。私は何かしら妙な不安を感じ出した。
「大きい手か！」稍あつて彼は斯う言つた。何となく溜息を吐くやうな調子だつた。「君ならさう言ふね。――今君と僕の感じた事は、多分同じ事だよ。ね？ 同じでなくても似たり、寄つたりの事だよ。それを君の形式で發表すると、『大きい手』といふ言葉になるね。」
「君ならそれぢやあ何と言ふ？」
「僕か？ 僕なら、――要するに何方でも可い話だがね。――僕なら然しさうは言はないね。第一、考へて見給へ。『大きい手』といふ言葉には誇張が有るよ。誇張はつまり空想だ。空想が有るよ。我々の手といふものは、我々の意志によつて大きくしたり小くしたりすることは出來ない。如何に醫術が進んでもこれは出來さうがない。生れつきだよ。」斯う言つて、人並はづれて小い、其の癖ぼく／＼して皮の厚さうな、指の短い手を出して見せた。「つまり大きい手や大きい身體は先天的のものだ。露西亞人や、亞米利加人は時としてそれを有つてるね。ビスマアクも有つてゐた。然し我々日本人は有たんよ、我々が後天的にそれを欲しがつたつて、これあ畢竟空想だ。不可能だよ。」
「それで君なら何と言ふ？」私は少し焦り出した。
「僕なら、さうだね。――假に言ふとすると、まあさうだね、兎に角『大きい手』とは言はないね。――冷い鐵の玉を欲しいね、僕なら。――『玉』は拙いな。『鐵の如く冷い心』とでも言ふか。」
「同じぢやないか？ 大きい手、鐵の如き心、強い心臟……つまり意志ぢやないか？」
「同じぢやないね。大きい手は我々の後天的に

有つことが出來ないけれども、鐵の如き冷い心なら有つことが出來る。――修行を積むと有つことが出來る。」

「ふむ。飽くまでも君らしい事を言ふね。」

「君らしい？」反響のやうにさう言つて、彼はひたと私の眼を見つめた。其の眼……何といふ皮肉な眼だらうと私は思つた。

「君らしいぢやないか。」

高橋はごろりと仰向けに臥て了つた。そして兩手を頭に組ひながら、

「君等は、僕を何う見てるのかなあ。何んな男に見えるね？　僕は何んな男だかは、僕にも解らないよ。――誰か僕の批評をしとつた者は無いかね？」

私は肩の重荷が輕くなつて行くやうに感じた。此處から話が變つて行くと思つたのだ。

そして、思出した儘に、我々がまだ高橋と親しくならなかつた以前、我々の彼に就いて話つたことを話して聞かせた。僕の體操教師の、僞だ、そればかりではない。高橋が話の途中から起き上つて、丁度他人の事でも聞くやうに面白さうにしてるのに釣り込まれて、安井の言つた無駄口までもつい喋つて了つた。――後で考へるに、高橋が其の時面白さうにしてゐたも無理は無い。彼は自分に關する批評よりも、其の批評をした一人、一人に就いて何か例の皮肉な考へ方をしてゐたに違ひない……が、私の話が濟むと、彼は急に失望したやうな顔をして、また臥轉んで了つた。そして言ふには、

「其の批評は、然し、當つてると言へば皆當つてるが、當らないと言へば皆當らないね。」

「ははは。それはさうさ。僕等がまだ君に接近しない時の事だもの。――然し當つたとすれば何の程度まで當つてる？」

「さうさね。――先づ其の細君の尻に布かれるといふ奴だね。大分當つてるよ。僕は平生、平氣で尻に布かれてゐるよ。全くだよ。尤も餘り重いお尻でも無いがね。夫婦といふものが、君、互ひに自分の權利を主張して、しよつちゆう取つ組み合ひをしたり、不愉快な思ひをしたりしてるよりは、少し位は莫迦らしくても、機嫌を取つて、騙して置く方が差引勘定して餘つ程得だよ。時間も得だし、經濟上でも得だよ。それ、芝居を好きな奴にや、よく役者の眞似をしたり、聲色をつかつたりして得意になつてる奴が有るだらう？　僕は彼あいふ奴にや、目の玉を引繰返して滑稽な手附をしてるところを活動寫眞に撮つておいて、何時か正氣でゐる時見せてやると可いと思ふね。さうしたら大抵の奴は二度とやらなくなるよ。夫婦喧嘩もそれだね。考へるとこれ程莫迦らしい事は無いものな。それよりや機嫌を取つておくさ。先方がにこ／＼してゐれや此方だつて安んじてゐられる。……といふと大分甘く取れるかね。然し正直のところ、僕は僕の細君を些とも愛してなんかゐないよ。これは先方もさうかも知れない。つまり生活の方便さ。それに、僕の細君は美人でも無いし、賢婦人でも無いよ。無くつても然し僕は構はん。要するに自分の眼中に置かん者の爲めに、分でも時間を潰して、剩けに不愉快な思をするのは下らん話だからね。」

「そらあ少し酷い。」

「酷くても可いぢやないか？　先方がそれで滿足してる限りは。」と言ひながら起き上つた。「尤も口ではさう言つても、其處にはまた或調和が行はれてゐるさ。」

「それはさうかも知れない。――然し兎に角我々の時代は、もう昔のやうな、一心同體といふやうな羨ましい夫婦關係を作ることが出來ない約束になつて來てるんだよ。自然主義者は舊道德を破壞したのは俺だといふやうな面を

してゐるが、あれは尤も本末を顛倒してる。舊道徳に裂罅が割れたから、其の裂罅から自然主義といふ様なものも芽を出して來たんだ。何故其の裂罅が出來たかといふと、つまり祖先の建てた家が、我々の代になつて其間の構へだの、便所の附け處だの、色々不便なところが出來て來た樣なものだ。それを大工を入れて修繕しようと、それは各自の勝手だが、然しいくら建て代へたつて、家其のものの大體には何の變化も無い。形と材料とは違つても、土臺と屋根と柱と壁だけは必ず要る。破壊なんて言ふのは大袈裟だよ。それから又、其の裂罅を何とかして彌縫しようと思つて、一生懸命になつてる人も有るが、あれも要するに徒勞だね。我々の文明が過去に於て經來つた徑路を全然變へて了はない以上は、漆を詰めようが、砂を詰めようが、乃至は金で以て塗りつぶさうが、裂罅は矢張り裂罅だ。さうして我々は、其の裂罅を何うすれば可いかといふ事に就いちや、まだまるで盲目なんだ。彼あか、斯うかと思ふことは有る。然しまだそれに決めて了ふまでには考へが熟してゐない。また時機でもない。先あ東京の家を見給へ。今日の東京は殆んどあらゆる建築の様式を取込んでゐる。つまり彼れなんだ。何時とはなく深い谷底に來て了つて、何方へ行つて可いか、方角が解らない。そこで各自勝手に、木の下に宿を取る者もあれば、小屋掛けをする者もある。それからそれ、巖窟を見つける者もある。ね？　色々の事をしてるが、たゞ一つ解つてるのは、それが皆其の晩一晩だけの假の宿だといふことだ。明日になれば皆で何方かへ行かなければならんといふことだ。」

「君の言ふことは實に面白いよ。――然し僕には、何うも矢つ張り、面白いといふだけだね。第一、今の日本が君の話のやうに、さう進歩してるか知ら――若しそれが進歩といふならだね。それに何だ、それあ道徳にしろ、何にしろ、すべての事が時代と共に變つて行くさ。變つては行くけれども、其の變り方が、君の言ふやうな明瞭な變り方だとは僕は思はんね。我々が變つたと氣の附く時は、もう君代りのものが出來てる時ぢやないのか？　そして其の新舊二つを比較して、我々が、變つたと氣が附くのぢやないのか？　――例へば我々が停車場へ人を送つて行くね。以前は皆汽笛がぴいと鳴ると、互ひに帽子を脱つて頭を下げたもんだよ。ところが今は必しもさうでない。現に僕は、昨日も帽子も脱らず、頭も下げないで友人と別れて來たよ。然しそれを以て直ぐ、古い禮儀が廢れて新しい禮儀がまだ起らんとはいへん。我々は帽子を脱る代りに握手をやつたんだからな。――しかもそれが、帽子を脱ることを止めようと思つてから握手といふ別の方法に考へ及んだのか、握手をするのも可いと思つてから帽子を脱るのを止めたのか解らないぢやないか。そればかりぢやない。僕は現在時と場合によつて帽子を脱るとともあれば、握手することもある。それで些とも不便を感じない。――世の中といふものは實に微妙に推移して行く者だと僕は思ふね。常に新陳代謝してゐる。其の間に一分間だつて間隙を現すことは無いよ。君の言ふ裂罅なんて、何處を見たつて見えないぢやないか？」

高橋は笑つた。「さう言ふ見方をしたつて見えるものか。――そして其の例は當らないよ。」

「何故當らん？」

「君の言ふのは社會的現象のことだ。僕の言つたのは時代の精神のことだよ。」

「精神と現象と關係が無いと言ふのか？」

「現象は――例へば手だ。手には神經はあるけれども思想はない。手は何にでも觸ることが出來るけれども、頭の内部には觸ることは許されない。――」

「さうか。そんなら先あそれでも可いよ。――さうすると今の細君問題は何うなるんだ？」
「何うと言つて、別に何うもならんさ。」
「矢つ張りその何か、甘くない意味に於て尻に布かれるといふことになるんか？」
「つまりさうさ。夫婦關係の問題も今言つた一般道德と同じ運命になつて來てるんだ。個人意識の勃發は我々の家庭組織を不安にしてる。――不安にしてるが然し、家庭其のものを全然破壞するほど危險なんぢやないぜ。これは僕は諸君に主張するよ。――これだけは君も認めるね？ 今は昔と違つて、未亡人の再婚を誰も咎めるものはないからな。それから何んだ、何方か一人が夫婦關係を繼續する意志を失つた際には、我々はそれを引止める何の理由を有たん。――これは君の言葉を一寸拜借したんだぜ。此間佐伯の細君に逃げられた時君はさう言つたからな。――尤もこれらは誰にも解る皮相の事さ。然し兎も角、我々の夫婦といふものに就いての古い觀念が現狀と調和を失つてるのは事實だ。今もさうだがこれからは益々さうなる。結婚といふものの條件に或修正を加へるか、或ひは別に色々の但書を附加へなくちやあ、何時まで經つてももう一度壞れた調和が還つて來ない。考へて見給へ。今に女が、私共が夫の飯を食ふのはハウスキイピングの勞力に對する當然の報酬ですなんて言ふやうになつて見給へ。育兒は社會全體の責任で、親の責任ぢや無いとか、何とか、まだ、まだ色々言はうと言ひさうな事が有るよ。我々男は、口では婦人の覺醒とか、何とか言ふけれども、誰だつてそんなに成ることを希望してゐやせんよ。否でも、應でも喧嘩だね。だから早く何とかしなくちやならんのだが、困ることには我々にはまだ、何の條項を何う修正すれば可いか解らん。何んな但書を何處へ附け加へれば可いか解らん。色々考へが有るけれども、其の考へと實際とはまだ隨分距離が有る。其處で今日のやうな時代では、我々男たる者は、其の破綻に對して我々の拂はねばならぬ犧牲を最も少くする方法を講ずるのが、一番得策なことになつて來るんだ。さうして其の方法は二つある。」
「一つは尻に布かれる事だ。」
「さうさ。も一つは獨身で、宿屋住ひをして押通すことだ。一得、一失はあるが、要するに此の二つの外に無いね。ところが此處に都合の可い事が一つあるんだよ。ははは。それは外では無いが、日本の女の最大多數は、まだ明かに自分等の狀態を意識してはゐないんだ。何れだけ其の爲めに我々が助かるか知れないね。布かれて見ても案外女のお尻の重くないのは、全く其のお蔭だよ。比較して見たんぢやないがね。」
私は噴き出して了つた。「君は實に手數のかかる男だねえ。細君と妥協するにまでそんな手數がかかるんか？」
「手數のかかる筈さ。尻に布かれるつてのは僕の處世のモットオだもの。」
「これで先あ安井の說話は片が附いた譯か。」
「――それあ當らなかつたのは無理が無いね。第一僕等は、君がこんな巧妙なる說話者だとは思ひ掛けなかつたからなあ。」
「巧妙なる說話者か？ 餘り有難い武名でも無いね。」
「ははは。――それからも一つの方は何うなんだ？ 野心家だつて方は？」
「ストライキの大將か！ それも半當りだね。――いや、矢つ張り當らないね。」
「然し君が何か知ら野心を抱いてる男だつてことは、我々の輿論だよ。」
「何んな野心を？」
「それは解るもんか、君に聞かなけれあ。」

「僕には野心なんて無いね。」
「そんな事があるもんか。誰だつて野心の無い者は無いさ。──野心と言ふのが厭なら希望と言つても可い。」
「僕には野心は無いよ。たゞ、結論だけは有る。」
「結論？」
「斯くせねばならんと言ふのではなく、斯く成らねばならんと言ふ──」
「君は一體、決して人に底を見せない男だね。餘り用心が深過ぎるぢやないか？ 底を見せても可い時にまで理窟の網を張る。」
「底？ 底つて何だ？ 何處に底が有るんだ？」
「心の底さ。」
「そんなら君は、君の心の底はこれだつて僕に見せる事が出來るか？」
高橋は擽みかけるやうに、「人はよく、少し親しくなると、心の底を打明けるなんて言ふさ。然しそれを虚心で聞いて見給へ。內緒話か、僻見か、空想に過ぎない。厭なこつた。噂の不足や、他で聞いてさ、氣羞かしくなる自惚れを語つて何うなる？ 社の校正に此の頃妙な男が入つて來たらう？ 此間僕は電車で一緒になつたから、『何うです、君の方の爲事は隨分氣が塞るでせうね？』つて言つたら、『いや、貴方だから打明けて言ひますが、實に下らないもんです。』とか何とか、役者みたいに抑揚をつけて言つたよ。郷里の新聞で三面の主任をしたとか何とか言ふんだ。僕は『左樣なら。』つて途中で下りて了つた。」
私はそれには答へないで、
「君は社會主義者ぢやないか？」
「何故？」
「劒持が此間さう言つとつた。」
高橋は眤と私を見つめた。
「社會主義？」
「でなければ無政府主義か。」
世にも不思議な事を聞くものだと言ひさうな、眼を大きくして呆れてゐる顏を私は見た。其處には少しも疑ひを起させるやうなところは無かつた。
やがて高橋は、
「劒持が言つた？」
「ぢや無からうかといふだけの話さ。」
「僕は社會主義者では無い。」と高橋は言ひ澁るやうに言ひ出した。──「然し社會主義者で無いといふのは、必ずしも社會主義に全然反對だといふことでは無い。誰でも仔細に調べて見ると多少は社會主義的な分子を有つてるものだよ。彼のビスマアクでさへ社會主義の要求の幾分を內政の方面では採用してるからね。──と言ふのは、社會主義のセオリイがそれだけ普遍的な眞理を含んでゐるといふことよりも、寧ろ、社會的動物たる人間が、何れだけ其の共同生活に由つて下らない心配をせねばならんかといふことを證據立てゝゐるんだ。」
「よし。そんなら君の主義は何主義だ？」
「僕には主義なんて言ふべきものは無い。」
「無い筈は無い。──」
「困るなあ、世の中といふものは。」高橋はまた寢轉んだ。「──言へば言つたで誤つて傳へるし、言はなければ言はんで勝手に人を忖度する。──君等にまで誤解されちや詰らんから、それぢや言ふよ。」さう言つて起きて、
「僕には實際主義なんて名づくべきものは無い。昔は有つたかも知れ無い。これは事實だよ。尤も僕だつて或考へは有つてるさ。僕はそれを先刻結論といつたが、假に君の言ひ方に從つて野心と言つても可い。然し其の僕の野心は、要するに野心といふに足らん野心なんだ。そんなに金も欲しくないしね。地位や名譽だつてさうだ。そんな者は有つても無くても同じ者

だよ。」
「世の中を救ふとでも言ふのか？」
「救ふ？　僕は誇大妄想狂ぢや無いよ。――僕の野心は、僕が死んで、僕等の子供が死んで、僕等の孫の時代になつて、それも大分年を取つた頃に初めて實現される奴なんだよ。いくら僕等が焦心つたつてそれより早くはなりやしない。可いかね？　そして假令それが實現されたところで、僕一個人に取つては何の增減も無いんだ。何の增減も無い！　僕はよくそれを知つてる。だから僕は僕の野心を實現する爲めに何等の手段も方法も採つたことはないんだ。今の話の體操教師のやうに、自分で機會を作り出して、其の機會を極力利用するなんてことは、僕にはとても出來ない。出來るか、出來ないかは別として、從頭そんな氣も起つて來ない。起らなくても可いんだよ、時代の推移といふ者は君、存外几帳面なもんだよ、色んな事件が、毎日毎日發生するね、其の色んな事件が人間の社會では何んな事件だつて單獨に發生するといふことは無い、皆何等かの意味で關聯してる。さうして其の色んな事件が、また、何等かの意味で僕の野心の實現される時代の日一日近づいてる事を[illegible]ててゐるよ。僕は[illegible]ひにして其等の事件は人より一日早く聞くことの出來る新聞記者だ。さうして毎日、自分の結論の間違ひで無い證據を得ては、獨りで安心してるさ。」
「君は時代時代といふが、君の思想には時代の力ばかり認めて、人間の力――個人の力といふものを輕く見過ぎる弊が有りはしないか？　僕は佛蘭西の革命を考へる時に、ルッソオの名を忘れることは出來ない。」
「さうは言つて了ひたくないね。僕はただ僕自身を見限つてるだけだ。」
「何うも僕にははつきり呑み込めん。何故自分を見限るんか？　それだけ正確と信ずる結論を有つてゐながら、其の爲めに何等實行的の努力をしないといふ筈は無いぢやないか？　僕は人間の一生は矢張自己の發現だと思ふね。其の外には意味が無いと思ふね。」
「さうも言へないことは無いが、さうばかりでは無いさ。生殖は人間の生存の最大目的の一つだ。可いかね？　君の言葉をそれに適用すると、墮胎とか、避姙とかいふ行爲の說明が出來ないことになる。」
「それとこれとは違ふさ。」
「僕は極めて利己的な怠け者だよ。――其の點を先づ第一に了解してくれ給へ。――人間が或目的の爲めに努力するとするね。其の努力によつて費すところと、得るところと比べて、何方が多いかと言ふと、無論費すところの方が多い、これは非凡な人間には解らないか知れないが、凡人は誰でも知つてゐる。尤も、差引損にはなつても、何の努力もしないで、從つて何の得るところも無いよりは優つてゐるか知れないが、其處は怠け者だ。昔はこれでも機會さへ來るなら大いにやつて見る氣もあつたが、今ぢやもうそんな元氣が無くなつた。面倒くさいものね。近頃ではそんな機會を想像することも無くなつちやつた。――それに何だ。人類の幸福と――ぢやなかつた。僕は人類だの、人格だの、人生だの、凡てあんな大袈裟な、不確な言葉は嫌ひだよ。――ええと、うんさうか、人類ぢやない、我々日本人がだ。可いかね？　我々日本人の國民生活が、文化の或る當然の形式にまで進んで行くといふ事とだ――それが果して幸福か、幸福でないかは別問題だがね――それと、僕一個人の幸不幸とは、何の關係も無いものね。僕はただ僕の祖先の血を引いて、僕の兩親によつて生れて、そして、次の時代の犧牲として暫らくの間生きてゐるだけの話だ。僕の一生は犧牲だ。僕はそれが厭だ。僕は僕の運命に極力

反抗してゐる。僕は誰よりも平凡に暮らして、誰よりも平凡に死んでやらうと思つてゐる。」
　聞きながら私は、不思議にも、死んだ私の父を思浮べてゐた。父は明治十——十年代に於て、私の郷里での所謂先覺者の一人であつた。自由黨に屬して、幾年となく政治運動に憂身を窶した擧句、やうやう代議士に當選したは可かつたが、最初の議會の會期半ばに肓腸炎に罹つて開院式の行はれた日にはもう墓の中にあつた。それは私のまだ幼い頃の事である。父が死ぬと、五六萬は有つたらしい財產が何時の間にか無くなつてゐて、私の手に殘つたのは、父の生前の名望と、其の心血を灑いだといふ民權要義一部との外には何も無かつた——。
　次の時代の犧牲？　私は父の一生を、一人の人間の一生として眺めたやうな氣がした。父の理想——結論は父を殺した。そして其の結論は、子たる私の幸福とは何の關係も無かつた。——
　高橋は、言つて了ふと、「はは。」と短い乾いた笑ひを洩らして、兩膝を抱いて、鬚の跡の青い顋を突き出して、天井を仰いだ。其の顋と、人並外れて大きく見える喉佛とを私は默つて見つめてゐた。喉佛は二度ばかり上つたり、下つたりした。私は相手の心の、靜かにしてゐるに拘はらず、餘程いらいらしてゐることをそれとなく感じた。私の心は、先刻からの長い會話に多少疲れてゐるやうだつた。そして私は、高橋の見てゐる世の中の廣さと深さに、彼と私との年齡の相違を感じてみた。然しそれは單に年齡の相違ばかりではないやうでもあつた。父に就いての連想は、妙に私を沈ませた。
「君はつまり、我々日本人の將來を何うしようと言ふんだ？——君はまだそれを言はんね。」
　ややあつて私はさう言つた。
「夢は一人で見るもんだよ。ねえ、さうだらう？」
　それが彼の答へだつた。そして俄かに、これから何か非常に急がしい用でも控へてゐるやうな顏をした。

四

　連中のうちに松永といふ男が有つた。人柄の穩しい、小心な、そして蒲柳の質で、社の畫工の一人だつた。十三四の頃から畫伯の某——門に學んで、美術學校の日本畫科に入つてゐる頃は秀才の名を得てゐたが、私に油繪に心を寄せて、其の製作を匿名で或私設の展覧會に出したことが知れて師匠から破門され、同時に美術學校も中途で廢して、糊口の爲めに私の社に入つたとかいふことだつた。
　不幸な男だつた。もう三十近い齡をしてゐながら獨身で、年とつた母と二人限りの淋しい生活をしてゐたが、女にでも有りさうな、柔しい物言ひ、擧動の裡に、常に抑へても抑へきれぬ不平を藏してゐた。從つて何方かといふと狷介な、容易に人に親しまぬ態度も有つた。
　或時風邪を引いたと言つて一週間ばかり社を休んだが、それから後、我々は時々松永が、編輯局の片隅で力の無い咳をしては、頰を紅くしてゐるのを見た。妙な咳だつた。我々はそれとなく彼の健康を心配するやうになつた。
　二月ばかり經つと、遂に松永はまた社を休むやうになつた。「松永さんは肺病だとよ。」給仕までがそんな噂をするやうになつた。そろそろ暑くなりかける頃だつた、間もなく一人の新しい畫工が我々の編輯局に入つて來た。我々は一種の恐怖を以て敏腕な編輯長の顏を見た。が、其の事は成るべく松永に知らせないやうにしてゐた。
　高橋が或日私を廊下に伴れ出した。
「おい、松永は死ぬぞ。今年のうちには屹度死

ぬぞ。」
「何故？ そんな事は無いだらう？」私は先づ驚いてさう言つた。
「いいや、死ぬね。」高橋は何處までもさう信じてゐるやうな口調だつた。
「然し肺病だつて十年も、二十年も生きるのがあるぢやないか？ 僕の知つてゐる奴にもう六七年になるのが有る。適度の攝生さへやつてゐれや肺病なんて怖いもんぢやないつて、其奴が言つてるぜ。」
「さういふのも有るさ。」
「松永はまだ咯血もしないだらう。」
「うん、まだしない。――僕はこれから行つて見てやらうと思ふが、君も行かんか？」
「今日は夜勤だから駄目だ。」
「さうか。それぢや明日でも行つてやり給へ。――死ぬと極つた者位可哀さうなものは無いよ。」
さう言つてもう行きさうにする。私は慌てゝ呼止めて、
「そんなに急に惡くなつたんか？ 四五日前に僕の行つた時はそんなでも無かつたぜ。」
「別段惡くも見えないがね。――實はね、僕は昨日松永の見舞に行つたら、本人は案外呑氣な事を言つてゐるけれども、何となく斯う僕は變な氣がしたんだ。それから歸りに醫者へ行つて聞いたさ。」
「そら可かつた。」
「ところが可かないんだ。聞かない方が餘つ程可かつた。――醫者は松永のやうな不完全な胸廓は滅多に見たことが無いと言つた。且つ、松永の肋骨が二本足らないんだとさ。」
「それは松永が何時か言つてたよ。」
「さうか。醫者は乾度七月頃だらうと言ふんさ。今迄生きてゐたのが寧ろ不思議なんださうだ。それに松永の病氣は今度が二度目だつて言ふぜ。」
「へえ！」
「尤も本人は知らんさうだ。醫者が聞いた時もそんな覺えは別に無いと言つたさうだね。何でも肺病といふ奴は、身體の力が病氣の力に勝つと、病氣を一處に集めてそれを傳播させないやうに包んで了ふやうな組織になるんだつてね。醫者の方じやテクニックでは何とか言つたつけ――それが松永の右肺に大分大きい奴が有るんだとさ。自分の知らないうちに病氣をしてるなんて筈は無いつて僕が言つたら、醫者が笑つてたよ。貴方のお家だつて、貴方の知らないうちに何度泥棒に這入られたか知れないぢやありませんかつて。」
「ふむ。すると今度はそれが再發したんか？」
「再發すると同時に、左の方ももう大分侵されて來たさうだ。彼の身體で、彼の病氣で、咯血するやうになつたらもう駄目だと言ふんだ。長くて精々三月、或は最初の咯血から一月と保たないかも知れないと言ふんだ。――人間の生命なんて實に險呑なもんだね。ふつと吹くと消えるやうに出來てる。――」
私は兎角うの言葉も出なかつた。
何故高橋が、それから後、松永に對して彼れだけの親切を盡したか？ それは今だに一つの不思議として私の胸に殘つてゐる。松永と高橋とは決して特別の親しい間ではなかつた。また高橋は美術といふものに多くの同情を有つてゐる男とも見えなかつた。「畫を描いたり、歌を作つたりするのは、僕には子供らしくて兎てもそんな氣になれない。」さう言ふ言葉を私は何度となく聞いた。そして、松永が高橋と同じやうな思想を有つてゐたとも思はれず、猶更二人の性格が相近かつたとは言はれない。にも拘らず、その頃高橋の同情は全く松永一人の上に傾け盡くされてゐた。暇さへあれば市ケ谷の奥の松永

の家へ毎日のやうに行つてゐる風だつた。
　初めは我々は多少怪んでも見た。やがて慣れた。そして、松永に關する事はすべて高橋に聞くやうになつた。彼も亦松永の事といへば自分一人で引受けてゐるやうに振舞つた。脈搏がいくら、熱が何度といふことまで我々に傳へた。「昨日は松永を洗湯に連れてつてやつた。」そんなことを言つてることもあつた。
　或日私はまた高橋に廊下へ連れ出された。應接間は二つとも塞がつてゐたので、二人は廊下の突當りの不用な椅子などを積み重ねた、薄暗い處まで行つて話した。其處には晝ながら一疋の蚊がゐて、うるさく私の顔に纏つた。
「おい、松永は遂々喀血しちやつた。」さう彼は言つた。
　醫者が患者の緣邊の者を別室に呼んで話す時のやうな事務的な調子だつた。
「遂々やつたか？」
　言つて了つてから、私は、今我々は一人の友人の死期の近づいたことを語つてゐるのだと思つた。そして自分の言葉にも、對手の言葉にも何の感情の現れてゐないのを不思議に感じた。
　それから彼は、松永を鄕里へ還すべきか、否かに就いて、松永一家の事情を詳しく語つた。
　不幸な畫工には、父も財産も無かつたが、鄕里には素封家の一人に數へられる伯父と、小さいながら病院を開いてゐる姉婿とが有つた。彼の母は早くから鄕里へ歸るといふ意見だつたが、病人は何うしても東京を去る氣が無い、去るにしても、房州か、鎌倉、茅ケ崎邊へ行つて一年も保養したいやうな事ばかり言つてゐたといふ。
「それがね。」と高橋は言つた。「僕は松永の看護をしてゐて色々貴い知識を得たが田舍で暮した老人を東京みたいな處へ連れて來るのは、一寸考へると幸福なやうにも思はれるが、さうぢやないね。寧ろ悲慘だね。知つてる人は無し、風俗が變つてるし、それに第一言葉が違つてる。若い者なら直ぐ直つちまふが、老人はさうは行かない。松永の御母さんなんか、もう來てから足掛四年になるんださうだが、まだ彼の通り奧州辯まる出しだらう？　一寸町へ買物に行くにまで、笑はれまいか、笑はれまいかつておどおどしてゐる。交際といふものは無しね。都會の壓迫を一人で背負つて、毎日毎日自分等の時代と子供の時代との相違を痛切に意識してるんだね。」
「そんな事も有るだらうね。僕の母なんかさうでも無いやうだが。」
「それは人にもよるさ。――それに何だね、松永君は豫想外に孤獨な人だね。彼あまでとは思はなかつたが、僕が斯うして毎日のやうに行つてるのに、君達の外には誰も見舞に來やしないよ。氣の毒な位だ。畫の方の友達だつて一人や、二人有つても可ささうなもんだが、殆ど無いと言つても可い。境遇が然らしめたのだらうが、好んで交際を絶つてゐたらしい傾きも有るね。彼の子と彼の御母さんと――齡が三十も違つてゐてね。――毎日淋しい顔を突き合はしてゐるんだもの、彼んな病氣になるも無理は無いと僕は思つた。」
「それで何か、松永君はまだ畫の方の野心は持つてるんだね？」
「それがさ。」高橋は感慨深い顔色をした。「隨分苦しい夢を松永君も今まで見てゐたんだね。さうして其の夢の覺め際に肺病に取つ附かれたといふもんだらう。」
「今はもう斷念したんか？」
「斷念した――と言つて可いか、しないと言つて可いか。――斷念しようにも斷念のしようが無いといふのが、松永君の今の心ぢやないだらうか？」

「さうだらうね。――誰にしてもさうだらうね。」

言ひながら私は、壁に凭れて腕組みをした。耳の邊には蚊が唸つてゐた。

「此間ね。」高橋は言ひ續いだ。「何とかした拍子に先生莫迦に昂奮しちやつてね、今の其の話を始めたんだ。話だけなら可いが、結末には男泣きに泣くんだ。――天分の有る者は誰しもさうだが、松永君も自分の技術に就いての修養の足らんことは苦にしなかつたと見えるんだね。さうして大きい夢を見てゐたんさ。B――の家から破門された時が一番得意な時代だつたつて言つたよ。それから其の夢が段々毀れて來たんで、止せば可いのに第二の夢を見始めたんだね、作家になる代りに批評家になる積りだつたさうだ。――それ、社でよく松永君に展覧會の批評なんか書かしたね。あんなことが何れ動機だらうと思ふがね。――ところが松永君は、いくら考へても自分には、將來の日本畫といふものは何んなもんだか、まるで見當が附かんと言ふんだ。さう言つて泣くんだ。つまり批評家に成るにも批評の根柢が見附からないと言ふんだね。焦心つちや可かんて僕は言つたんだが、松永君は、焦心らずにゐられると思ふかなんて無理を言ふんだよ。それもさうだらうね。――松永君は日本畫から出て油畫に行つた人だけに、つまり日本畫と油畫の中間に彷徨してゐるんだね。尤もこれは松永君ばかりぢやない、明治の文明は皆それなんだが。――」

聞きながら私は妙な氣持に捉はれてゐた。眼はひたと對手の顏に注ぎながら、心では、健康な高橋と死にかゝつてゐる肺病患者の話してゐる樣を思つてゐた。顏に脂汗を滲ませて、咳入る度に頰を紅くしながら、激した調子で話してゐる病人の衰へた顏が、まざ／＼と見える樣だつた。そして、それをじろ／＼眺めながらふん／＼と言つて臥轉んでゐる高橋が、何がなしに殘酷な男のやうに思はれた。

さうした高橋に對する反感を起す機會が、それから一週間ばかり經つてまた有つた。それは松永が退社の決心をして、高橋に連れられて社に來た時である。私は或る殺人事件の探訪に出かけるところで、玄關まで出て私の車夫を呼んでゐると、丁度二人の俥が轅を下した。松永はなつかしさうな眼をしながら、高橋の手を借りて俥から下りた。そして私と向ひ合つた。私はこの病人の不時の出社を訝るよりも、先づ其の屋外の光線で見た衰弱の甚だしさに驚いた。朝に烈しい雷鳴のあつた日で、空はよく霽れてゐたが、何處か爽かな涼しさがまだ空氣の中に殘つてゐた。

私は手短かに松永の話を聞いた。聲に力は無かつたが、顏ほど陰氣でもなく、却つて怡々してゐるやうなところもあつた。病氣の爲めに半分生命を喰はれてゐる人とは思はれなかつた。

「そんなにしなくたつて可ささうなもんだがなあ。秋になつて涼しくなれば直ぐ快復するさ。」

私はそんな風に言つてみた。

「病氣が病氣ですからねえ。」

「醫者も秋になつたらつて言ふんだ。」と高橋は言つた。「だから松永君も僕も、轉地は先あ病氣の爲めに必要な事として、茅ケ崎あたりが可いだらうつて言ふんだが、御母さんが聞かん。松永君も何だよ、先あ夏の間だけ郷里で暮らす積りで歸るんだよ。」

「それにしても、退社までしなくつたつて可いぢやないか？」

「それは此の病人の主張だから、爲方が無いんだ。今出て來る時まで僕は止めたんだけれど、頑として聞かん。」

「ははは。」と松永は淋しい笑ひ方をした。

それから二三分の間話して私は俥に乘つた。そして七八間も挽き出した頃に、振り返つて見たが、二人の姿はもう玄關に見えなかつた。

その時私は、何故といふこともなく、松永の彼の衰へ方は病氣の所爲ではなくて、高橋の殘酷な親切の結果ではあるまいかといふやうな氣がした。醫學者が或る病毒の經過を兎のやうな穏しい動物に由つて試驗するやうに松永も亦高橋の爲めに或る試驗に供されてゐたのではあるまいかと……。

後に聞いたが、編輯長は松永の退社に就いて、最初却々聞き入れなかつたさうだ。半年なり、一年なり緩り保養してゐても、社の方では別に苦しく思はない、さう言つたさうだ。松永は大分それに動かされたらしかつた。然し遂に退社した。間もなく我々は、もう再び逢はれまじき友人と其の母とを新橋の停車場に送つた。其の日高橋はさつぱり口を利かなかつた。そして一人で切符を買つたり、荷物を處理したりしてゐた。やがて我々はプラットフォームに出た。松永の母は先づ高橋にくどくどと今までの禮を述べた。それから我々にも一人々々にそれを繰り返した。丁度私の番の濟んだ時だつた、不圖私は高橋の顏を見た。——高橋は側を向いて長い欠伸をしてゐた。そして急がしく瞬きした。涙のやうなものが兩眼に光つた。

汽車が立つて了つて、我々はプラットフォームを無言の儘に出た。そして停車場の正面の石段を無言の儘に下りた。

「ああ。」高橋は投げ出すやうな調子で背後から言つた、「松永も遂々行つちやつたか！」

「やつたのは君ぢやないか！」

安井が調戯ふやうに言つて振り返つた。

「僕がやつた？ 僕にそれだけの力が有るやうに見えるか？」

安井は氣輕な笑ひ方をして、「誰か松永君の寫眞を持つてる者は無いか？ 何時か一度撮つとくと可かつたなあ。」

「劍持のところに、松永の書いた鉛筆の自畫像が有つた筈だ。」と私が言つた。

其の日我々の連中で見送りに來なかつたのは、前の日から或事件の爲めに鎌倉へ出張してゐる劍持だけであつた。

五

「龜山君、君は碁はやらないのか？」

高橋は或日編輯局で私にさう言つた。松永に別れて四五日經つた頃だつた。

「碁は些とも知らん。君はやるか？」

「僕も知らん。そんなら五目並べをやらうか？ 五目並べなら知つとるだらう？」

「やらうか。」

二人は卓子の上に放棄らかしてあつた碁盤を引き寄せて、たわいの無い遊戲を始めた。丁度我々外勤の者は手が透いて、編輯机の上だけが急がしい締切時間間際だつた。

側には逢坂がゐて、うるさく我々の石を評した。二人は態と逢坂の指圖の反對にばかり石を打つた。勝負は三四回あつた。高橋は逢坂に、

「どうだ、僕等の五目並べは商賣離れがしてゐて却つて面白いだらう？」と調戯つた。

「何をしとるんぢや、君等は？」言ひながら劍持が來て盤の上を覗いた。「ほう何といふこつちや！ 髭を生やして子供の眞似をしとるんか？」

「忙中閑ありとは此の事よ。君のやうに賭碁をやるやうに墮落しちや、かういふ趣味は解らんだらう？」と私は笑つた。

「生意氣をいふなよ。知らんなら知らんと言ふもんぢや。さうしたら僕が本當の碁を教へてやる。」

「僕に教へてくれ給へ。」高橋が言つた。「僕は以前から稽古したいと思つてるんだが、餘り上手な人に頼むのは氣の毒でね。――」

「何？ 僕を下手だと君は心得をるんか？ そらあ失敬ぢやが君の眼ん玉が顚覆かへつちよる。驥足未だ老いず、焉んぞ駑馬視せらるゝ理由あらんやぢや。はは。」

「初めから駑馬なら何うだ？」私が言つた。

「僕の首が短いといふんか？ それは詭辯ぢや。凡そ碁といふものは、初めは誰でも笊に決つとる。笊を脱いで而して麒麟は麒麟となり、駑馬は駑馬となつて再び笊を被る。――」

「中には其の二者を兼ねた奴が有る。」私は興に乘つて無駄口を續けた。

「我々みたいに碁を知らん者に向つては麒麟で、苟くも烏鷺の趣味を解した者の前には駑馬となる奴よ。つまり時宜に隨つて首を伸縮させる奴よ。見給へ。君はさうしてると、胴の中へ頭が嵌り込んだやうに見えるが、二重襟をかけた時は些とは可い。少くとも、頭と胴の間に多少の距離の有ることを誰にでも認めさせる程度に首が伸びる。」

「變な事を言ふなあ。烏鷺の趣味を解せん者は、そんな事を言うて喜ぶんぢやから全く始末に了へん。」

「劍持君。」と高橋は横合から言つた。「君本當に僕に碁を教へてくれんか？ 教へるなら本當に習ふよ。」

さう言ふ顏は強ち戯談ばかりとも見えなかつた。

「本當か、それは？」劍持は一寸不思議さうに對手の顏を見て、「……ああ、何か？ 君は松永が郷里へ歸つたんで、何かまた別の消閑法を考へ出さにやならんのか？」

私は冷りとした。

「戯談ぢやない。肺結核と碁と結び附けられてたまるもんか。」さう言つて高橋は苦笑ひをした。

幸ひと其の時、劍持は電話口へ呼び出された。高橋は給仕に石を片附ける事を云ひ附けて、そして卷煙草に火を點けて、何處へともなく編輯局を出て行つた。

其の頃から彼の樣子はまた少し變つた。私は彼の心に何か知ら空隙の出來たことを感じた。そして其の空隙を、彼が我々によつて滿たさうとしてはゐないことをも感じてゐた。

松永の病氣以前のやうに、時々我々の家へ來ることは無くなつた。社の仕事にも餘り氣乘りのしないやうな風だつた。人に目立たぬ程度に於て、遲く出て來て早く歸つた。急がしい用事を家に控へてゐて、一寸のがれに出歩いてゐる人のやうに私には見えた。

「些とやつて來ないか？ 高橋さんは何うなすつたらうつて僕の母も言つてる。」などと言ふと、「ああ、君ん處にも隨分御無沙汰しちやつたねえ。宜敷言つてくれ給へ。今日は可かんが何れ其の内に行く。」さう言ひながら矢張來るでもなかつた。偶にやつて來ても、心の落着かぬ時に誰もするやうに、たわいの無い世間話を態と面白さうに喋り立てて、一時間とは尻を据ゑずに歸つて行つた。

「おい、龜山君、僕は此の間非常な珍聞を聞いて來たぞ。」或日劍持がさう言つた。二人の乘つた電車が京橋の上で停電に會つて、いくら待つても動かぬところから、切符を棄てて直ぐ其處のビイヤホールで一杯やつた時の事だつた。

「何だい、珍聞た？」編輯局の笑ひ物になつてゐる有るか無しかの髭をナプキンで拭きながら私は聞いた。

「珍聞ぢや。はは。然も隱れたる珍聞ぢや。」

「持たせるない。」

二人が其處を出て、今しも動き出したばかりの電車の、幾臺も、幾臺も空いた車の續くのを見ながら南傳馬町まで歩く間に、劍持は氣が咎める樣子で囁くやうに私に語つた。——高橋の細君が美人な事。然も妙な癖のある美人な事。彼が嘗て牛込の奧に室借をしてゐた頃、其の細君と隣室にゐた學生との間に變な樣子が有つて、其の爲に引越して了つた事——それが其の話の内容だつた。

　何處から聞き込んだものか、學生の名前も、其の學生が現在若い文士の一人に數へられてゐる事も、又其の頃高橋の細君には既に子供の有つた事も、劍持はよく詳しく知つてゐた。

「何時聞いた？」電車に乘つてから私は言つた。

「一月ばかり前ぢや。」

「もう外の連中も知つてるんか？」

「莫迦言へ。僕をそんな男と思ふんか？……社で知つとるのは僕一人ぢや。君もこんな事人に言つちや可かんぞ。安井なんか正直な男ぢやが、おつちよこちよいで可かん。」

　私は誓つた。劍持は實際人の祕密を喋り散らして喜ぶやうな男では無かつた。無遠慮で、口が惡くて、人好きはしなかつたが、交際つて見ると堅固た道德的感情を有つてゐる事が誰にも解つた。彼は自分の職務に對する強い義務心と共に、常に弱者の味方たる性情を抱いてゐた。我々が不時の出費などに苦む時の最も賴母しい相談對手は彼だつた。ただ彼には、時として、善く言へば新聞記者的とでもいふべき鋭い猜疑心を、意外な邊に働かしてゐるやうな癖があつた、私は時々それを不思議に思つてゐた。

　それから間もなくのことであつた。或晩安井が一人私の家へ遊びに來た。

「君は今日休みだつたんか？ さうと知らずに僕は社で待つてゐて、つまらん待ぼけを喰つちやつた。」坐るや否や彼はさう言つた。

「何か用か？」

「いゝや。ただ逢ひたかつたんだ。劍持は田舍版の編輯から賴まれて水戸へ行つたし——我が黨の士が居らんと寂寥たるもんよ。それに何だ、高橋の奴今日も休みやがつたよ。僕は高橋に大いに用が有るんだ。來たら冷評してやらうと思うとつたら、遂々來なかつた。」

「さうか。それぢやもう三日休んだね。——一體何の用が起つたんだらう、用なんか有りさうな柄ぢやないぢやないか！」

「用なもんか。社の方には病氣屆を出しとるよ。」

「假病か！」

「でなくつてさ。彼の身體に病氣は不調和ぢやないか？」

「高橋君の假病は初めてだねえ。——休んだのが初めてかも知れない。」

「感心に休まん男だね。」

「矢つ張り何か用だらう？」

「それがよ。」安井は勢ひ込んで、そして如何にも面白さうに笑つた。「僕は昨日高橋に逢つたんだよ。」

「何處で？」

「淺草で。」

「淺草で？」

「驚いたらう？ 僕も初めは驚いたよ。何しろ意外な處で見附けたんだものな。」

「淺草の何處にゐたんだ？」

「まあ聞き給へ。昨日僕は〇〇さんから活動寫眞の弊害調査を命ぜられたんでね。早速昨夜淺草へ行つて見たんさ。可いかね？ さうして二三軒歩いてから、それ、キネオラマをやる三友館てのが有るだらう？ 彼れへ入つたら、先生ぼかんとして活動寫眞を見てゐるんぢやな

いか。」

「ははは。活動寫眞をか？ そして何と言つた？」

「何とも言はんさ。先あ可いかね。僕が入つて行つた時は何だか長い芝居物をやつてゐて、眞暗なんだよ。それが濟んでぱつと明るくなつた時、誰か知つてる者はゐないかと思つて見廻してゐると、ずつと前の方の腰掛に、絽の紋附を着てハナマを冠つた男がゐるんだ。そして其奴が帽子を脫つて、手巾で額を拭いた時、おや、高橋君に肖てるなと僕は思つたね。頭は角刈りでさ。さうしてると、其奴がひよいと後を向いたんだ。何うだい。矢つ張りそれが高橋よ。」

「へえ！ 子供でも連れて行つたんか？」

「僕もさう思つたね。さうでなければ田舍から親類でも來て、それで社を休んで方々案內してるんだらうと思つたね。」

「さうぢやないのか？」言ひながら私は、安井の言ふ事が何となく信じられないやうな氣持だつた。

「一人さ。」安井は續けた。「何うも僕は不思議だと思つたね。さうして次の寫眞の間に、横手の、便所へ行く方のずつと前へ行つてゐて、こんだよく見付けてやらうと思つて明るくなるのを待つてゐると、矢張擬ひなしの高橋ぢやないか。しかも頗る生眞面目な顏をして、卷煙草を出してすぱすぱ吸ひながら、花聟みたいに濟ましてゐるんぢやないか！ 僕は危く噴き出しちやつたね。」

「驚いたね。高橋君が活動寫眞を見るたあ思はなかつた。――それで何か、君は言葉を懸けたんか？」

「懸けようと思つたさ。然し何しろ四間も五間も、離れてるしね。中へ入つて行かうたつて、彼の通りぎつしりだから入れやしないんだ。汗はだくだく流れるね。よく彼んな處の中央へ入つてるもんだと思つたよ。」

「それぢや高橋君は、君に見られたのを知らずにゐるんか？」

「知らんさ。彼れ是れ一時間ばかり經つて入代りになつた時、先生も立つて歸るやうな樣子だつたから、僕も大急ぎで外へ出たんだが、出る時それでも二三分は暇を取つたよ。だから辛と外へ出て來て探したけれども、遂々行方知れずさ。隨分振つてるなあ！」

「一體何の積りで、活動寫眞なんか見に行つたんだらう？」

「解らんね、それが。僕は默つて、寫眞よりも高橋君の方ばかり見てゐたんだが、其の內に段段目が暗くなるのに慣れて來てね。面白かつたよ。惡戯小僧の寫眞なんか出ると、先生大口開いて笑ふんぢやないか？ 周圍の愚夫愚婦と一緒にね。」

話してるところへ、玄關に人の訪ねて來たけはひがした。家の者の出て挨拶する聲もした。

「ああ、さうですか。安井君が。」さういふ言葉が明瞭と聞えた。

「高橋だ。」

「高橋だ。」

安井と私は同時にさう言つて目を見合はした。そして妙に笑つた。

「やあ。」言ひながら高橋は案內よりも先に入つて來た。燈火の加減でか平生より少し脊が低く見えた。そして、見慣れてゐる袴を穿いてゐない所爲か、何となく見すぼらしくも有つた。

「やあ。」私も言つた。「噂をすれば影だ。よくやつて來たね。」

「僕の噂をしてゐたのか？」さう言つて緣側に近い處に坐つた。「病人が突然やつて來て、喫驚したらう？ 夜になつても矢つ張り暑いね。」

「君の病氣はちやんと診察してるよ。」それは安井が言つた。

「當り前さ。僕が本當の病人になるのは、日本中の人間が皆、梅毒と結核の爲に死に絶えて了つてからの事だ。」
「そんなら何故社を休んだ？」私は皮肉な笑ひ方をして聞いた。
「うむ。……少し用が有つてね。」
「其の用も知つてるぞ。」
「何の用だい？」
「自分の用を人に聞く奴があるか？」
「知つてると云ふからさ。」
「君は昨夜何處へ行つた？」
「昨夜か？　昨夜は方々歩いた。何故？」
「安井君。彼れは何時頃だつたい？」私は安井の顏を見た。
安井は態と眞面目な顏をしながら、「さうさなう、八時から九時までの間頃だ。」
「八時から九時……」高橋は鹿爪らしく小首を傾けて、「ああ、其の頃なら僕は淺草で活動寫眞を見てゐたよ。」
二人は噴き出して了つた。
高橋は等分に二人の顏を見て、「何が可笑しいんだい？　君等も昨夜行つてたのか？」
「何うだ、天網恢々疎にして洩さずだらう？」
安井は言つた。
「ふむ、それが可笑しいのか？　さうか。君等も行つてたのか？　龜山君も？」
「僕は行かんよ。安井が行つたんだよ。」
「道理で……安井も大分近頃話せるやうになつたなあ。」さう言つて無遠慮に安井の顏を見た。
安井は對手の平氣なのに少してれた樣子で、「戲談ぢや無い。僕はまだ君のやうに、彼處へ行つて大口開いて笑へやしないよ。」
「高橋君。」私は言つた。「君こそ社を休んで活動寫眞へ行くなんて、近頃大分話せるやうになつたぢやないか？」
高橋は私の顏に目を移して、そして子供のやうな聲を立てて笑つた。
「そんな風に書くから社の新聞は賣れるんだよ。君等は實に奇拔な觀察をするなあ。」
「だつてさうぢやないか？」私も笑つた。
「そんなら活動寫眞と、君が社を休んだ理由と何れだけ關係が有るんだ？」
「莫迦な事を言ふなあ！　社を休んだのは少し用が有つて休んだんだよ。實は四五日休んで一つ爲事しようかと思つたんだよ。それが出來なかつたから、ぶら〳〵夕方から出懸けて行つたまでさ。」
「何んな爲事だい？」
「爲事か？　なあに、何うせ下らんこつたがね。」
「ははは。活！　活！　へりもか？」
一寸間を置いて、高橋は稍眞面目な顏になつた。「君等は僕が活動寫眞を見に行つたつて先刻から笑ふが、そんなに可笑しく思はれるかね？　安井君は何うせ新聞の種でも探しに行つたらうが、先あ一度、そんな目的なしに彼處へ入つて見給へ。好い氣持だよ。彼處には何百人といふ人間が、彼の通りぎつしり詰まつてるが、奴等――と言つちや失敬だな――彼の人達には第一批評といふものが無い。損得の打算も無い。各自急がしい用を有つた人達にや違ひないが、彼處へ來るとすつかり忘れて、ただもう安い値を拂つた樂しみを思ふさま味はうとしてる。尤も中には、女の手を握らうと思ふ奴だの、掏摸だの、それから刑事だのも入り込んでるだらうが、それは何十分の一だ。」
「僕は其奴等を見に行つたんさ。」と安井が口を入れた。
「さうだらう。僕もさう思つてゐた。新聞記者といふ者はそれだから厭だよ。賴んでも只は起きない工夫ばかりしてゐる。」
私は促した。「それで活動寫眞の功德は何處

遂に在るんか？」

「つまり批評の無い場所だといふところにあるさ。――此間まで内の新聞に、方々の實業家の避暑に就ての意見が出てゐたね。彼れを讀むと、十人の八人までは避暑なんか爲なくても可いやうに言つてる。ああ言つてるのはつまり、彼等頭取とか、重役とか、社長とかいふ地位にゐるものは、周圍の批評に比較的無關心で有り得る境遇にゐるからなんだよ。山へ行きたいの、海へ行きたいのといふのは、畢竟僕の所謂批評の無い場所へ行きたいといふ事なんだからね。所が僕等のやうな一般人はさうは行かん。先あ誰にでも可いから、其の人の現在に於ける必要と希望とを滿たして、それでもまだ餘る位の金をくれて見給へ。屹度海か、山へ行くね。十人に九人までは行くね。人がよく夏休みになると、借金してまで郷里へ歸るのは、一つは矢張りそれだよ。さうして復東京へ戻つて來ると、屹度、『故郷は遠くから想ふべき處で歸るべき處ぢやない。』といふのも、矢張りそれだよ。故郷だつて山や、河ばかりぢやない。人間がゐる。然も自分を知つてる人間ばかりゐる。二日や、三日は可いが、少し長くなると、其處にもまた批評の有る事を發見して厭になるんだ。」

高橋は入つて來た時から放さなかつた扇を疊んで、ごろりと横になつた。そして續けた。「僕なんかも、金と時間さへ有つたら、早速何處かへ行くね。成るべく人のゐない處へ行くね。だが、自然といふものには、批評が無いと同時に餘り無關心過ぎるところが有る。我々が行つたつて些とも關つちやくれない。だから僕みたいな者は、海や、山へ行くと直ぐもう飽きちやつて、爲る事に事を缺いて自分で自分の批評を始めるんだ。其處へ行くと活動寫眞は可いね――僕は今迄新聞記者の生活ほど時間の經つに早いものは無いと思つてゐたら、活動寫眞の方はまだ早い。要らないところはぐんぐん飛ばして行くしね。それに何だよ、活動寫眞で路を歩いてる人を見ると、普通に歩いてるのが僕等の驅足位の早さだよ。駈けるところなんか滅法早い。僕は昨夜自動車競走の寫眞を見たが、向うの高い處から一直線の坂を、自動車が砂煙を揚げて鐵砲玉のやうに飛んで來るところは好かつたねえ。身體がぞくぞくした。あんなのを見てると些とも心に隙が無い。批評の無い場所にゐるばかりでなく、自分にも批評なんぞする餘裕が無くなる。僕は此の頃、活動寫眞を見てるやうな氣持で一生を送りたいと思ふなあ。」

「自動車を買つて乘り廻すさ。」安井は無造作に言つた。

六

松永に別れた夏――去年の夏は其のやうにして過ぎた。高橋の言草では無いが我々新聞記者の生活ほど慌しく、急がしいものは無い。誰かも言つた事だが、我々は常に一般人より一日づつ早く年を老つてゐる。人が今日といふところをば昨日と書く。明日といふべきところを今日と言ふ。朝起きて先づ我々の頭腦に上る問題は、如何に明日の新聞を作るべきかといふ事であつて、如何に其の一日を完成すべきかといふ事では無い。我々の生活は實にただ明日の準備である。そして決してそれ以上では無い。日が暮れて爲事の終つた時、我々にはもう何も殘つてゐない。我々の取扱ふ事件は其の日、其の日に起つて來る事件で有つて、決して前から豫期し、乃至は順序を立てて置くことを許さない。――春がさうして過ぎ、夏がさうして過ぎる。一年の間、我々は只人より一日先、一日先と駈けてゐるのだ。

さういふ私の身體にも、秋風の快さはそれ

となく沁みた。もう町々の氷屋が徐々店替をする頃だつた。私にも新らしい背廣が出來た。或朝私は平生より少し早目に家を出て電車に乘つた。そして、ただ一人垢染みた白地の單衣を着た、苦學生らしい若い男の隅の方に腰掛けてゐるのを見出した。「秋だ！」私は思つた。——實際、其の男は私が其の日出會つた白地の單衣を着たただ一人の男だつた。私はそれとなく、此の四五日の間に、東京中の家といふ家で、申し合せたやうに夏の着物を疊んで藏つて了つたことを感じた。

其の日私は、何の事ともなく自分の爲事を早く切り上げて、そして早々と歸つて來た。丁度方々の役所の退ける時刻だつた。

「貴方は龜山さんぢや有りませんか！」

訛りの有る、寂びた聲が電車の中でさう言つた。

「ああ、△△君でしたか！」私も言つた。彼は私の舊友の一人だつた。然も餘り好まない舊友の一人だつた。然し其の時、私は少しも昔の感情を思出さなかつた。そしてただ何がなしに懷しかつた。

「三四年振りでしたねえ。矢つ張りずつと彼時から東京でしたか？」私は言つた。

「は。ずつと此方に。遂々腰辨になつて了ひました。」

丁度私の隣の席が空いたので、二人は並んで腰を掛けた。平たい、表情の無い顏、厚い脣、黑い毛蟲のやうな眉・・・其等の一々が少しも昔と違つてゐないのを、私は何故か嬉しいやうに見た。そればかりではない、彼の白襯衣の汚れ目も、また周圍構はぬ高聲で話しかける地方人の癖をも、私は決して不快に思はなかつた。二人は思出す儘に四五人の舊友に就いて語つた。そして彼は、長く逢はずに、且つ私の方では、思出すこともなく過してゐたに拘らず、よく私の近狀を知つてゐた。

「先月でしたか、靜岡の製絲工場を視察にいらしたやうでしたね？」そのやうに彼は言つた。

「ええ。」私は輕く笑つた。彼はT——新聞の讀者だつた。

家へ歸つて來ると、何の理由もなく私は机の邊を片附けた。そして座蒲團から、緣先に吊した日避けの簾まで、すべて夏の物を藏はせて了つた。嬉しいやうな、新らしい氣持があつた。さうして置いて、私は其の夜新橋で別れて以來初めての手紙を、病友松永の爲に書いた。

蟹に

潮滿ちくれば穴に入り
潮落ちゆけば這ひ出でて、
ひねもす横に歩むなる
東の海の砂濱の
かしこき蟹よ、今此處を、
運命の浪にさらはれて、
心の龜の燈明の
汝が眼よりも小やかに
滅えみ明るみすなる子の、
行方も知らに、草臥れて、
辿り行くとは、知るや、知らずや。

（ハコダテの歌」より）

あこがれ

(此書を尾崎行雄氏に獻じ併て遙に故郷の山河に捧ぐ)

沈める鐘

(序　詩)

一

渾沌霧なす夢より、暗を地に、
光を天にと劃ちしその曙、
五天の大御座高うもかへらすとて、
七寶花咲く紫雲の『時』の輦
瓔珞さゆらぐ軒より、生と法の
進みを宣りたる無間の巨鐘をぞ、
永遠なる生命の證と、海に投げて、
蒼穹はるかに大神知ろし立ちぬ。

時世は流れて、八百千の春はめぐり、
榮光いく度さかえつ、また滅びつ、
さて猶老なく、理想の極まりなき
日と夜の大地に不斷の響をあげて、
(何等の靈異ぞ)劫初の海底より
『祕密』の響きを沈める鐘ぞ告ぐる。

二

朝に、夕に、はた夜の深き息に、
白晝の嵐に、撞く手もなきに鳴りて、
絶えざる巨鐘、――自然の胸の聲か、
永遠なる『眠』か、無窮の生の『覺醒』か、
幽かに、朗らに、或は雲にどよむ
高潮みなぎり、悲戀の咽び誘ひ、
小貝の色にも、枯葉のさゝやきにも
ゆたかにこもれる無聲の愛の響。

三

惱める心に、沸ける靈の脣に、
滴り玉なす光の清水めぐみ、
香りの雲吹く聖土の青き花を
あこがれ戀ふ子に天なる樂を傳へ、
救濟の主よ、沈める鐘の聲よ。
ああ汝、尊とき『祕密』の旨と鳴るか、
ひとたび汝が聲心の絃に添ふや、
地の人百たり人爲の埓を超えて、
天馬のたかぶり、血を吐く愛の叫び、
自由の精氣を耀く靈の影を
あつめし瞳に涯なき涯を望み、
黄金の光を歷史に染めて逝ける。
彫る名はさびたれ、かしこに、ここの丘に、
墓碣、――をしへのかたみを我は仰ぐ。

暗這ふ大野に裂けたる裾を曳きて、
我また今きく、天與の命を告ぐる
劫初の深淵ゆただよふ光の聲。――
光に溢れて我はた神に似るか。
大空地と斷て、さらずば天よ降りて
この世に遍充つ詩人の王座作れ。

(甲辰三月十九日)

杜に立ちて

秋去り、秋來る時劫の刻み受けて
五百秋朽ちたる老杉、その眞洞に
黄金の鼓のたばしる音傳へて、
今日また木の闇を過ぐるか、こがらし姫。
運命せまくも惱みの黒霧落ち
陰靈いのちの痛みに唸く如く、

楫を搖りては遠のき、また寄せくる
無間の潮に漂ふ落葉の聲。
ああ今、來りて抱けよ、戀知る人。
流轉の大浪すぎ行く虚の路、
そよげる木の葉ぞ闃かに落ちてむせぶ。――
驕樂かくこそ沈まめ。――見よ、綠の
薫風いづこへ吹きしか。胸燃えたる
束の間、げにこれたふとき愛の榮光。

(癸卯十一月上旬)

白羽の鵠船

かの空みなぎる光の淵を、魂の
白羽の鵠船しづかに、その青渦
夢なる櫂にて深うも漕ぎ入らばや。――
と見れば、どよもす高潮音匂ひて、
樂聲さまよふてなの靄の帕を
遠きてぞ浮きくる面影、(百合姫なれ)
虚空の生襞玲々あけぼの染、
常樂ここにと和らぐ愛の瞳。

運命や、寂寥兒遺れる、されど夜々の
ゆめ路のくしびに、今知る、哀愁世の
終焉は靈光無限の生の門出。
瑠璃水たたへよ、不滅の信の小壺。
さばこの地に照る日光は氷るとても
高歡久遠の座にこそ導かるれ。

(癸卯十一月上旬)

啄木鳥

いにしへ聖者が雅典の森に撞きし、
光ぞ絶えせぬみ空の『愛』の火もて
鑄にたる巨鐘、無窮のその聲をぞ
染めなす『綠』よ、げにこそ靈の住家。
聞け、今、巷に喘げる塵の疾風
よせ來て、若やぐ生命の森の精の
聖きを攻むやと、終日、啄木鳥、
巡りて警告夏樹の幹にきざむ。

往きしは三千年、永劫猶すすみて
つきざる時の箭、無象の白羽の跡
追ひ行く不滅の教よ。――プラトオ、汝が
浮きを高きを天路の榮と云ひし
靈をぞ守りて、この森不斷の糧、
奇かるつとめを小さき鳥のすなる。

(癸卯十一月上旬)

隱沼

夕影しづかに番の白鷺下り、
槇の葉枯れたる樹下の隱沼にて、
あこがれ歌ふよ。――『その昔、よろこび、そ
は
朝明、光の搖籃に星と眠り、
悲しみ、汝こそとこしへ此處に朽ちて、
我が喰み銜める泥土と滲け沈みぬ。』――
愛の羽寄り添ひ、青瞳うるむ見れば、
築地の草床、涙を我も垂れつ。

仰げば、夕空さびしき星めざめて、
しのびの光よ、彩なき夢の如く、
ほそ絲ほのかに水底に鎖ひける。
哀歡かたみの翰廻は猶も堪へめ、
泥土に似る身ぞ。ああさは我が隱沼、
かなしみ喰み去る鳥さへえこそ來めや。

(癸卯十一月上旬)

人に聲ぐ

君が瞳ひとたび胸なる祕鏡の

ねむれる曇りを射しより、醒め出でたる、
瑠璃羽や、我が魂、日を夜を羽搏ちやまで、
雲渦ながるる天路の光をこそ
導きたる幻眩き愛の宮居。
あこがれ淨きを花霧匂ふと見て、
二人し抱けば、地の事破壞のあとも
追ひ來し理想の投影ぞとほほゑまるる。
こし方、運命の氷雨を凌ぎかねて、
詩歌の小笠に紅の緒むすびあへず、
愁ひの谷をしたどりて足惱みつれ、
峻しき生命の坂路も、君が愛の
炬火心にたよれば、暗き空に
雲間を星行く如くぞ安らかなる。

(癸卯十一月十八日)

樂聲

日暮れて、樂堂萎れし櫻の花の
香りに醉ひては集へる人の前に、
こは何、波渦沈める蒼き海の
遠音と浮きて來て音色ぞ流れわたる。——
靈の羽ゆたかに白鳩舞ひくだると
仰げば、一絃、忽ちふかき淵の
底なる嘆きをかすかに誘ひ出でて、
虛空を遙かに哀調あこがれ行く。
光と暗とを黃金の鎖にして、
いためる心を捲きては、遠く遠く
見しらぬ他界の夢幻に繫ぎよする
力よ自由なる樂聲、あゝ汝こそ
天なる快樂の名殘を地につたへ、
魂をしきよめて、世に充つ痛恨訴ふ。

(癸卯十一月卅日)

海の怒り

一日のつかれを眠りに葬らむとて、
日の神天より降り立つ海中の玉座、
照り映ふ黃金の早くも沈み行けば、
さてこそ落ち來し黑影、海を山を
領ずる沈默に、こはまた、恐怖吹きて、
眞暗にさめたる海神いかる如く、
巖鳴り碎けて、地を嚙む叫號の聲、
矢潮をかまけて、狂瀾陸を呪ふ。
寄するは夜の胸盾とる祕密の敵。——
墮落てはこの世に、暗なき遠き昔の
信のおとづれ囁やく波もあらで
ああ人、眠れる汝等の額に、罪の
記徵を刻むと、かくこそ潮狂ふに、
月なき荒磯邊、身ひとり怖れ惑ふ。

(癸卯十二月一日)

荒磯

行きかへり砂這ふ波の
ほの白きけはひ追ひつつ、
日は落ちて、暗湧き寄する
あら磯の枯藻を踏めば、
(あめつちの愁ひか、あらぬ、)
雲の裾ながうなびきて、
老松の古葉音もなく、
仰ぎ見る幹からびたり。
海原を鵠かすめて
その羽音波に碎けぬ。
うちまろび、大地に呼べば、
小石なし、涙は凝りぬ。
大水に足を浸して、
黝ずめる空を望みて、
ささがにの小さき瞳と
魂更に胸にすくむよ。

秋路行く雲の疾影の
日を掩ひて地を射る如く、
ああ運命、下りて鋭斧と
胸の門割りし身なれば、
月負ふに痺れたるむくろ、
姿こそ濱菅に似て、
うちそよぐ愁ひを砂の
冷たきに印し行くかな。

(癸卯十二月三日夜)

夕の海

汝が胸ふかくもこもれる祕密ありて、
常劫夜をひたす底なる泥岩影
黑蛇ねむれる鱗の薄青透き、
無限の寂寞墓原領ずと云ふ。
さはこの夕和、何の意、ああ海原。——
遠波ましら帆入日の光うけて
華やかにもまたしづまる平和、げに
百合花添へ眠る少女の夢に似るよ。
白堊かざれる墓には汚穢充つと
神の子叫びし。外裝ぞはかないかな。
花夢きえては女の胸罪ぞ宿り、
夕和落ちては、見よ、海黑波わく。
醉はむや、再び。平和——妖の酒に
咲き浮く泡なる。沈默の白墓なる。

(癸卯十二月五日夜)

森の追懐

落ち行く夏の日綠の葉かげ洩れて
森路に布きたる村濃の染分衣、
涼風わたれば夢どもゆらぐ波を
胸這ふおもひの影かと眺め入りて、
靜夜光明を戀ふ子が清歡をぞ、
身は今、木下の百合花あまき息に
醉ひつつ、古事繪卷に慰みたる
一日のやはらぎ深きに思ひ知るよ。

遠音の柴笛ひびきは低かるとも
鋤負ふまめ人又なき快樂と云ふ。
似たりな、追懐、小さき姿ながら、
沈める心に白羽の光うかべ、
葉隱れひそみてささなく杜鵑の
春花羅綾褪せたる袖を卷ける
胸毛のぬくみをあこがれ歌ふ如く、
よろこび幽かに無間の調べ誘ふ。

野梅の葩溶きたる清き彩の
罪なき望みに雀躍り、木の間縫ひて
摘む花多きを各自に誇りあひし
昔を思へば、十年の今新たに
失敗の跡なく、痛恨の深創なく、
黑金諸輪の運命路遠くはなれ、
乳よりも甘かる幻透き浮き來て、
この森綠の搖籃に甦へりぬ。

胸なる小甕は『いのち』のつよき酒を盛るに堪
へで、
蝕にぞ悲哀の塚邊に缺くるとても、
底なる滴に尊とき香り殘す
不滅の追懐まばゆく輝やきなば、
何の日靈魂終焉の朽あらむや。
啼け杜鵑よ、この世に春と靈の
きえざる心を君我れ歌ひ行かば、
歎きにかへりて人をぞ淨めうべし。

(癸卯十二月十四日稿　森は郷校のうしろ。この年の春まだ淺き頃、漂浪の子病を負うて故山にかへり、藥餌漸く怠たれる夏の日、ひとり幾度か杖を曳きてその森にさまよひ、往時の追懷に寂寥の胸を慰めけむ。極月炬燵の樂寢、思ひ起しては惆悵に堪へず、乃ちこの歌あり。)

おもひ出

翼酢色水面に褪する
夕雲と沈みもはてし
よろこびぞ、春の青海、
眞白帆に大日射す如、
あざやかに、つばらつばらに、
涙なすおもひにつれて
うかびくる胸のぞめきや。

ひとたびは、夏の林に
吹鳴らす小角の響きの
うすどよむけはひ裝ひて、
みかりくら狩服人の
駒鼓めて[illegible]ひくる如、
戀鳥の鳥笛たつしく
よろこびぞ胸にもえにし。

燃えにしをいのちの野火と
おのづから香に醉ひて、
花實の天領おくり
あこがるる魂をはなてば、
小さき胸ちひさき乍ら

照りわたる玉の常宮、
瑯玕の宮柱立て、
瓔珞の透簾かけて、
ゆゆしともかしこく守る
夢の門。――門や朽ちけむ、
いつしかに碎けあれたる
宮の跡、霜のすさみや、
礎のただに冷たく。――
息吹けば君を包みし
紫の靄もほろびぬ。
ふたりしてほほゑみ汲みし
井をめぐる朝顔垣の
繩さへも、秋の小霧の
はれやらぬ深き濕りに
我に似て早や朽ちはてぬ。

ああされど、サイケが燭、
かげ搖れて、戀の小胸に
纔涙のこぼれて燒ける
いにしへの痛みは云はじ。
とことはに心きざめる
新釀を、空想の翅の
彩羽もてつくろひかざり、
白絹のひひなの[illegible]に

少女子のぬかづく如く、
うち秘めて齋き行かなむ
もえし血の名殘の胸に。

（癸卯十二月末）

いのちの舟

大海中の詩の眞珠
浮藻の底にさぐらむと、
風信草の花かをる
古巣の岸をとめて飛ぶ
海の燕の翅の如、
いのちの小舟かろやかに。
愛の帆章額に彫り、
鳴る青潮に乗り出でぬ。

遠海面に陽炎の
夕彩はゆる夢の城、
夏花雲と立つを見て、
そこに、秘めたる天の路
ひらきもやする門あると、
貢する珠、歌の珠、
のせつつ行けば、波の穗と
よろこび深く胸を燃る。

悲哀の世の黒潮に
はてなく浮ぶ椰子の實の
むなしき殼と人云へど、
岸こそ知られ、死の疾風
い捲き起らぬうたの海、
光の窓に凭る神の
瑪瑙の盞の覆らざる
うまし小舟を我は漕ぐかな。

（甲辰一月十二日夜）

孤境

老樫の枯樹によりて
墓碣の丘邊に立てば、
人の聲遠くはなれて、
夕暗に我が世は浮ぶ。

想ひの羽いとすこやかに
おほ天の光を追へば、
新たなる生花被衣
おのづから胸をつつみぬ。

苔の下やすけくねむる
故人のやはらぎの如、
わが世こそ靈の聖なる
白露の花のあけぼの。

いたみなき香りを吸へば、
つぶら胸光と透きぬ。
花びらに袖のふるれば、
愛の歌かすかに鳴りぬ。

ああ地に夜の荒みて
黒霧の世を這ふ時し、
わが息は天に通ひて、
幻の影に醉ふかな。

（甲辰一月十二日夜）

錦木塚

（昔みちのくの鹿角の郡に女ありけり。よしある家の流れなればか、かかる邊つ國はもとより、都にもあるまじき程の優れたる姿なりけり。日毎に細布織る筬の音にもまさりて、政子となむ云ふなる其名のをちこちに高かりけり。隣の村長が子いつしか見そめていといたう戀しにけるが、女はた心なかりしにあらねど、よしある家なれば父なる人のいましめ堅うて、心ぐるしうのみ過してけり。長の子ところの習はしのままに、女の門に錦木を立つる事千束に及びぬ。ひと夜一本の思ひのしるし木、千夜を重ねては、いかなる女もさからひえずとなり。やがて千束に及びぬれど政子いつかなうべなふ樣も見えず、男遂に物ぐるほしうなりて涙川と云ふに身をなくしてけり。政子も今は思ひえたへずやありけむ、心の玉は何物にも代へじと同じところより水に沈みにけり。村人共二人のむくろを引き上げて、つま戀ふ鹿をしのび射にするやつばら乍らしかすがにこのことのみにはむくつけき手にあまる涙もありけむ、ひとつ塚に葬りて、にしき木塚となむ呼び傳へける。花輪の里より毛馬内への路すがら、今も旅するひとは、涙川の橋を渡りて程もなく、草原つづきの丘の上に、大きなる石三つ許り重ねて木の標など結ひたるを見るべし。かなしとも悲しき物語のあとかた、草かる人にいづこと問へばげにそれなりけり。傳へいふ、昔年々に都へたてまつれる陸奥の細布と云ふもの、政子が織り出しけるを初めなりとかや。）

にしき木の巻

高原に夕草床布きまろびて
淡日影旅の額にさしくる丘、
千秋古る吐息なしてい湧く風に
ましら雲遠つ昔の夢とうかび、
彩もなき細布ひく天の極み、
ああ今か、浩蕩なる蒼扉つぶれ

愁知る神立たすや、日もかくろひ
その命令の音なき聲ひびきわたり、
枯枝のむせび深く胸をゆれば
窈冥霧わがひとみをうち塞ぎて、
身をめぐる幻、——そは百代遠き
邊つ國の古事なれ。ここ錦木塚。

立ちかこみ、秋にさぶる青垣山、
生くる世は朽葉なして沈みぬらし。
吹鳴せる小角の音も今流れつ、
狩馬の蹄も、はた弓弦さわぐ
をたけびもいと新たに丘をすぎぬ。
天さかる鹿角の國、遠いにしへ、
茅葺の軒並めけむ深草路を、
ああその日麻絹織るうまし姫の
柴の門行きはばかる長の若子、
とぢし目は胸戸ふかき夢に凝る、
うなたれて、千里走る勇みも消え、
影の如たどる歩みうき近づき來る

和胸も愛の細緒繰りつむぐか、
はた秋の小車行く地のひびきか。
筬の音せせらぎなす蔀の中
愁ひ曳く歌しづかに漂ひくれ。

え堪へでや、小笛とりて戸の外より
たどたどに節あはせば、歌はやみぬ。
くろがねの柱ぬかむ力あるに
何しかもこの袖垣くぢきえざる。
戀ひつつも忍ぶ胸のしるしにとて
今日もまた錦木立て、夕暗路を、
花草にうかがひよる霜の如く、
いと重き歩みなして今かへり去るよ。

八千束のにしき木をばただ一夜に
神しろす愛の門に立て果つとも、
束縛の荒繩もて千捲まける
女の胸は珠かくせる磐垣淵、
永き世を沈み果てて、浮き來ぬらし。
眞黑木に小垣結へる哭澤邊の
神社にして、甕据ゑ、祈る奈良の子らが
なげきにも似つらむ我がいたみはもと、
長の子のうちかなしむ歌知らでか、
筬の音胸刻みて猶流るる。
男のなげく怨みさはに目にうつれば、
涙なす夕草露身もはらひかねつ。

のろひ矢の巻（長の子の歌）

わが戀は、波路遠く丹曾保船の
みやこ路にかへり行くを送る旅人が
袖かみて荒礒浦に泣きまろぶ
夕ざれの深息にしたぐへむかも。
夢の如影消えては胸しなえて、
あこがるる力の、はた泡と失せぬ。

遠々き春の野邊を、奇琴なる
やは風にさまされては、猶夢路と
玉蜻と白う搖るるおもかげをば
追ふたべに、いづくよりか狹霧落ちて、
砂漠のみちことごと閉ぢし如く、
小石なす涙そでに包み難し。

しるしの木妹が門に立てなむとて
千夜あまり聞きなれたる筬の音の
ああそれよ、生命刻む鋭き氷斧か。
はなたれて行方知らぬ獵矢のごと、
前後暗こめたる夜の虛に
あてもなく滅び去なむ我にかある。

新衣映く被き花束ふる
をとめらに立ちまじりて歌はむ身も、
かたくなと知らず、君が玉の腕
この胸にまかせむとて、心たぎり、

いく百夜ひとり来ぬる長き路の
さてはただ終焉に導く綱なりしか。

呪ひ矢を暗の鳥の黒羽に矧ぎ、
手にとれど、瑠璃のひとみ我を射れば、
腕枯れて、彊弓弦をひく手は無し。
三年凝るうらみの毒、牙にぬれるも
かなしや、己が魂に沁みわたりて
時じくに髄の水の凋れうつろふ。

愛ならで、罪うかがふ女の心を
きよむべき玉清水の世には無きを、
なにしかも、暁の庭前水銹ふかき
古眞井に身を潔めて布を織るか。
筬の手をしばし代へて、その白苧に
丹雲なしもゆる胸の絲添へずや。

ああ願ひ、あだなりしか、錦木をば
早や千束立てつくしぬ。あだなりしか。
朝霜の蓬が葉に消え行く如、
野の水の茨が根にかくるる如、
色あせし我が幻、いつの日まで
沈淪わく胸に住むに堪へうべきぞ。

わが息は早や迫りぬ。黒波もて
魂誘ふ大淵こそ、靈の海に
みち通ふ常世の死の平和なれ。
うらみなく、わづらひなく、今心は
さながらに大天なる光と透く。
さらば姫、君を待たむ天の花路。

筬の音の巻（政子の歌）

さにづらひ棲ながせる雲の影も
夕暗にかくれ行きぬ。わがのぞみも
深黒み波しづまる淵の底に
泥の如また浮きこずほろび行きぬ。

涙川つきざる水澄みわしれど、
往きにしは世のとこしへ手にかへらず。
人は云ふ、女のうらみを重き石と
胸にして水底踏める男の子ありと。

枯蘆のそよぐ歌に、葉のことごと、
我をうらみ、たえだえなす聲ぞこもれ。
見おろせば、暗這ふ波ほのに透きて
我をさそふ不知界のさまも見ゆる。

眞袖たち、身を淨めて長年月、
斷りぬる我が涙の盡足らでか、
狂ほしや、好きに導けと頼みかけし
一條の運命の絲、いま斷たれつ。

來ずあれと待ちつる日ぞ早や來りぬ。
かねてより捧げし身、天のみちに
美靈のあと追はむはやすかれども、
いと痛き世のおもひ出また泣かるる。

石戸なす絆累かたき牢舎にして
とらはれの女のいのち、そよ、古井に
あたたかき光知らず沈む黄金、
かがやきも榮えも、とく銹の喰みき。

鹿聞くと人に供せし湯の澤路
秋摺りの錦もゆるひと枝をば
うち手折り我がかざしにさし添へつつ、
笑ませしも昨日ならず、ああ古事。

半蔀の明りひける狭庭の窓、
絲の目を行き交ひする筬の音にも、
いひ知らず、幻湧き、胸せまりて、
うとき手は愁ひの影添ふに痩せぬ。

ほだし、(ああ魔が業なれ。)眼を鋭く
みはり居て、我が小胸は萎え果てき。
その響き、心を裂く旋をとりて
あてもなく泣き祈る我は愚かや。

心の目内裏にのみひらける身は、
靈鳥の隱れ家なる夢の國に
安き夜を眠りもせず、醒めつづけて、
氣の沮む重羽搏に血は氷りぬ。

錦木を戸にたたすと千夜運びし
我が君の歩ます音夜々にききつ。
その日數かさみ行くを此いのちの
極み知る暦ぞとは知らざりけれ。

戀ひつつも人のうらみ生矢なして
雨とふる運命の路など嶮しき。
なげかじとすれど、あはれ宿世せまく
三年をか辿り來しに早や涯なる。

瑞風の香り吹ける木蔭の夢、
黑霧の夢と變り、そも滅びぬ。
絶えせざる思出にぞ解き知るなる
終の世の光、今か我がいのちよ。

玉蔓かざりもせし綠の髮
切りほどき、祈り、淵に投げ入るれば、
ひろごりて、黑綾なす波のおもて、
聲もなく、夜の大空颪もきえぬ。

朽藻なす我が髮いま沈み入りぬ。――
さては女のうらみ生きて、とはの床に
夫が胸をい捲かむとや、罪深くも。――
青火する死の吐息ぞここに通ふ。

ひとつ星目もうらみて淡く照るは、
我を待つと浩蕩の旗さぶしむ夫か。
愛の宮天の花の香りたえぬ
苑ならで奇縁を祝ぐ世はなし。

いざ行かむ、(君しなくば、何のいのち。)
悵み充つ世の殼をば高く脱けて、
安息に、天臺に、さらば、さらば、
我が夫在す花の床にしたひ行かむ。

(甲辰の年一月十六、十七、十八日稿　この詩もと前後六章、二人の死後殿子の父の述懷と、葬りの日の歌と、天上のめぐり合ひの歌とを添ふべかりしが、筆を擱きしよりこゝ一歲、興會再び捉へ難きがまゝに、乍遽前記三章のみをこの集に輯む。)

鶴飼橋に立ちて

(橋はわがふる里澁民の村、北上の流に架したる吊橋なり。岩手山の眞望を以て詩人賞し措かず。春曉夏暮いつといつとも別ち難き趣あれど、我は殊更に月ある夜を好み、友を訪うてのかへるさなど、幾度かこゝに低徊微吟の興を擅にしけむ。)

老尼の長裳の黑き襞に
くゆれる煙の縈む如く、
川瀬をながるる暗の色に
淡夢心の面帕して、
しづかに射しくる月の影の
愁ひにさゆらぐ夜の調、
息なし深くも胸に吸へば、
古代の奇琴音をそへて
螢火湧く如、瑠璃の靄の
遠宮まぼろし鮮に透くよ。

八千歲天裂く高山をも、
夜の帳とぢたる地に眠る
わが兒のひとりと瞰下しつつ、
大鳳生羽の翼あげて

はてなき想像の空を行くや、
流れて盡きざる『時』の川に
相嚙みせめぎてわしる水の
大波侵さず、怨嗟きかず、
光と暗とを作る宮に
詩人ぞ聖なる靈の主。

見よ、かの路なき天の路を
雲車のまろがりいと靜かに
(使命や何なる曙の神の
跡追ひ驅けらし、白蓮
桂の香降らす月の少女、
(わが詩の驕りのまのあたりに
象徴成りぬる榮のさまか。)
きよまり凝りては瞳の底
生火の胸なし、愛の苑に
石神立つごと、光添ひつ。

魂ときやはらぎ破らじとか
夜の水遠くも音沈みぬ。
そよぐは無限の生の吐息、
心臓のひびきを欄につたへ、
月とし語れば、ここよ永久の
詩の領朽ちざる鶴飼橋。

よし身は下ゆく波の泡と
かへらぬ暗黒の淵に入るも、
わが魂封じて詩の門守る
いのちは月なる花に咲かむ。

（甲辰一月二十七日）

落瓦の賦

（幾年の前なりけむ、猶杜陵の學舍にありし頃、秋のひと日、友と城外北郊のほとりに名たゝる古刹を訪ひて、菩提老樹の風に嘯ぶく所、琴者胡弓を按じて沈思頗る興に入れるを見たる事あり。年進み時流れて、今寒寺寂心の身、一夕銅鉦の搖曳に心動き、追懷の情禁じ難く、乃ち筆を取りてこの一篇を草しぬ。）

時の進みの起伏に
（かの音沈む磬に似て、）
反れて千年をかへらざる
法の響を、又更に、
灰冷えわたる香盤の
前に珠數繰る比丘尼らが
細き頌歌に呼ぶ如く、
今、草深き秋の庭、
夕べの鐘のただよひの
幽かなる音をともなひて、
古りし信者の名を彫れる
苔も彩なき朽瓦、
遠き昔の夢の跡
語る姿の悵ましう
落ちて脆くも碎けたり。

立つは伽藍の壁の下、――
雨に、嵐に、うたかたの
罪の瞳を打とぢて
胸の鏡に宿りたる
三世の則の奇しき火を
怖れ尊とみ手を合はせ
うたうて過ぎし天の子の
袖に摺れたる壁の下。――
ゆふべ色なく、光なく
白く濁れる戶に凭りて
落ちし瓦の破片の上
旅の愁の影淡う
長き袂を曳きつつも、
轉手やはらに古琴の
古調一彈、いにしへを
しのぶる歌を奏でては、
この世も魂ももろともに
沈むべらなる音の名殘

山彦

花草銜みて五月の杜の木蔭
囀ずる小鳥に和せて歌ひ居れば、
伴奏仄かに若葉のゆめの如く
見えざる谷より山彦ただよひ來る。——
春日の小車沈める轍の音か、
はた彼の幼時の追憶聲と添ふか。——
綠の柔息深くも胸に吸ひて、
默せば、猶且つ無聲にひびき渡る。

ああ汝、天部にどよみて、再た落ち來し
のこんのひびきよ。さらずば地の心の
聊耳無垢なる虛洞のかへす聲よ、
山彦！　今我れ淸らに心明けて
ただよふ光の見えざる影によれば、
我が歌却りて汝が響の名殘傳ふ。

（甲辰三月十七日）

曉鐘

蓮座の雲渦光の門に覆くや、
萬朶の葩瞑目の美にゆらぎ、
くれなゐ波たつ櫻の塔花頂、
下枝の夢吹く黄金の風に乘りて
ひびくよ、曉鐘、——無終の大頌給ふり
雲輦音なく軋らせ曙の神が
むらさき紐ある左手の愛の鈴の
餘韻か、——朗らに高薫亂し走る。

見よ今、五音の整調流れ流れ
光の白彩しづかに園に撒けば、
（淨化の使命に勇みて、春の神も
袖をや搖りけめ、）綾雲融くる如く、
淡色焔と枝毎かぜに燃えて、
散る花燎亂滿地に錦延べぬ。

（甲辰三月十六日）

暮鐘

聖徒の名を彫る伽藍の壁に沁みて
『永遠なる都』の滅亡を宣りし夕べ、
はたかの法輪無礙の聲をあげて
夢呼ぶ寶樹の林園搖れる時よ、
何らの音をか天部の樂に添へて、
暮鐘よ、ああ汝、劫初の穹に鳴れる。
天風二萬里地を吹き絶えぬ如く、
成壞の八千年今猶ひびきやまず。

入る日を送りて、夜の息さそひ出でて、
榮光聖智を無間に葬り來て、
青史の進みと、有情の人の前に
永劫友なる『祕密』よ、ああ今はた、
詩歌の愁ひに素甕の澱と沈み
夢凝きわが魂『無生』に乘せて走れ。

（甲辰三月十六日）

夜の鐘

鐘鳴る、鐘鳴る、たとへば灘の潮の
雷音落ちては新たに高む如く、
（莊嚴なるかな、『祕密』の淸き矜り、）
雲路にみなぎり、地心の暗にどよみ、
月影朧ろに、霧衣白銀なし、
大夢罩めたる世界に漂ひ來て、
晝なく、夜なく、過ぎても猶過ぎざる
劫遠法土の暗示を宣りて渡る。
影なき光に無終の路をひらく
『祕密』の叫びよ、滿林夢にそよぐ

逝きてかへらぬ黃金の世。
葉を落す白晝、
百鳥の生の謠
あれどよめく綠搖籃の
枝濡れて地に
照りかへる强き日の
夏をつかれて、かをる吐息に
姬は悵みぬ、常安の
涼影甘き詩の海。

山彼遠く
沈む日の終焉の瞳、
今か沈みて、焰の白矢、
涯なき涯を
わかれ行く魂の如、
うすれ融け行く地の黃昏に
姬は祈りぬ、大天の
靈ふいのちの夢の鄕。

ひと日、日すでに
沈みゆき、乳香の
夜の律調を戀ふ百合姬が
待夜ののぞみ、

その望み先づ破れて、
暗に揺どる嵐の征矢に
姬はたふれぬ、殘る香の
いと傷ましき夢の花。

水無月ふかき
森かげの一つ百合、
見えて見えざる世にあこがれし
ああその夢の
罌粟花のにほひ猶、
あまりに高く淸らかなれば、
姬は萎れぬ、夜嵐の
妬みに折る信の枝。

香柏の根に
（幻や、げに）あはれ
夢の名殘を葬むり去りて、
去りて嵐の
血寂びたる矢叫びは
いづち行きけむ。——ただ其夜より
姬は匂ひぬ、靑玉の
天壇い照る藝の燭。

（甲辰五月十一日夜）

しらべの海

（上野女史に捧げたる）

淡紅染め卯月の日に醉ふ香樺の
律調のあけぼの漸やく春ぞ老いて、
歌聲うるむや、柔音の海に深く
古世の思をうかべぬ。——ああほのぼの、
ゆらめく藝の焰の波の中に、
花摺被衣よ、行きても猶透きつつ、
（心は悵みぬ、ああその痛き姿。）
五百年あらたに沈淪べる愛を呼ばふ。

凝りては瞳の暫しも動きがたく、
藝の燭火しづかに我を導きて、
透影狩衣光の海にわしる。
見よ今、やはら手轉ずる樂の姬が
眼光みなぎる天路の夢の匂ひ、
光の搖曳流るる律調の海。

（甲辰五月十五日）

五月姬

夢の谷、

新影あまき
五月そよ風匂ひたる
にほひ紫吹く桐の
夢の谷、
青草眠る
みどり小床に五月姫、
白晝うるほふ愛の夢。

まぼろしの
姫がおもわは
ハイアシンスの滴露の
黄金したたりたまめける
水盤の
そしらぬ光。
夢は波なき波なれや、
香青の戀の彩。

黒髪の
さゆらぎ似たり、
むらさき房の桐の花。
花はゆらぎて、わかやげる
紅の唇
ほほゑみ添へば、
白羽夢の羽かろらかに
小蝶とまりぬ、愛の香に。

婀風の
けはひやはらに
額にたれたる小百合花。
小百合にほへば、我が[illegible]の
むね聞き
ゆめも匂ひぬ、
谷もにほひぬ、天地の
光も夢のにほひ園。

夢の谷、
ゆめこそ深き
ここぞ匂ひの愛の宮。
宮の玉簾むらさきの
英華に
今ひるがへれ、
シャロンの野花、谷百合に
ひるがへりたる愛の旗。
姫が目は
外にとぢたる、
とぢたる園の愛の門。
園をうかがちて、丘こえて、
をどりつつ
生の小獺の
おとづれ来なば、姫が夢
柘榴と咲かめ、甘き夢。

まぼろしの
さめてさめざる
(げにさもあれや、)生の谷
谷はつつみぬ、いにしへゆ
まぼろしの
さめてさめざる
光、平和、愛の夢、
眠りに生くる五月姫。

(甲辰五月十六日)

ひとりゆかむ

日はくれぬ。
(愁ひのいのち)
幻想の森に、いざや
ひとりゆかむ。
萬有音をひそめて、
(ああ我がいのち)おもひでの
妙樂の夜あまき森。

（夜のおもひ
　いのちのおもひ）
戀成りぬ。
（夢見のいのち）
忘我の森に、いざや
ひとりゆかむ。
花罌粟にほひゆるみて、
（ああ我がいのち）つく息の
みどりうす靄ゆらぐ森。
（夜のにほひ
　戀のにほひ）
戀破れぬ。
（なけきのいのち）
祈りの森に、いざや
ひとり行かむ。
面影、いのるまに〳〵
（ああ我がいのち）天の生
あらたに繋る愛の森。
（夜のいのり
　いのちのいのり）
月照りぬ。
（あでなるいのち）
幻想の森に、いざや
ひとりゆかむ。
ほのぼの、月の光に
（ああ我がいのち）故郷の
黄金花岸うかぶ森。
（夜のいのち
　ああ我がいのち）

（甲辰五月十七日）

花守の歌

夜はあけぬ。
生の迎ひに
心の住家、園の
門を明けむ。
光よ、花に培かへ。
夢より夢の關据ゑて、
孤境の園に花を守る。

花咲くや、
愛の白百合、
愛はほのぼの、夢の
關に明けて、
露吹、香蕊
我にそなへぬ、我が守る
幻、光、生の園。

はなやかに
黄金よそほふ
姫の百人、好に
ほこり見せて、
ゆたかに門をよぎりぬ。——
それには似じた、わが胸の
あでなる夢に生くる花。

日は闌けぬ、
晝の沈默。——
かかる日なりき、我は
ひとりゆきぬ、
新たに生や香ると。
守る孤境の園を出て
黄金よそほふ市の宮。

いかめしき
門守の姫ら、
我をこばみぬ、「園の
鍵を捨てよ。」

うつろの笑み、宮居の
權力うしろに、おどろきて
我はかへりき、わが園に。

つちかへば、
花はおのづと
天にむかひぬ。これや
生の極か。
ねむれば園は花樓、
雲の隠家よ。我が守る
小さき園生に我ぞ王。

やはらぎの
愛歌わたるや、
花の大波、園に
しらべ搖りて、
天なる夢の故郷
匂ひ海原さながらに、
光と透きぬ孤境園。

日はくれぬ、
夢の守りに
心の住家、いざや
門をさゝむ。

夜なく日なき闇には
夢より夢の階据ゑて、
天路ひからむ鍵鎖めぬ。

夜よ降りて
ものみな包め。
わが守る園の門には
暗は許りず。
我が園、今か世界に
光をつくる源の
孤境の園に我ぞ王なれ。

（甲辰五月十九日）

月と鐘

（とある風琴の曲に合はせむとて友のために作れる小歌）

あまぢはるかに故里の
樂の名殘をつぐるとて、
さくらの苑におぼろなる
夢の色ひく月の影。

花は眠れど、人の子の
夢なりがたき旅ごころ、
とはの眠りに入れよとて
月に泣くらむ夜半の鐘。

偶感二首

（甲辰五月二十日の曉近き頃、ふと目ざめて、岩手ゆく春の夜風にうるほふ殘燈の下、靈き世の眠りに我のみさめて、筆を染めける。）

我なりき

ほのかに夜半に漂ふ鐘の音の
いのちぞ深きまぼろし、——『我』なりき。
『我』こそげにや觸れても觸れ難き
流るる幻。されば人よ云へ、
時より時に跡なき水泡ぞと。

ああそよ、水泡ひと度うかびては
時あり、始あり、また終あり。
瞬き消えぬ。——いづこに？ そは知らず、
あとなき跡は流れて、人知らず。

瞬時、さなり瞬時、それ既に
永久なる鎖かがやく一閃。
無生よ、さなり無生よ、それやはた、
とはなる生の流轉の不現影。——

或ひは人よ、汝等が自らを
みづから蔑す詭論の肉の聲。

ああ人、さらばいのちの源泉の
見えざる『我』を『彼』とぞ汝呼べよ。
無生の生に汝等が還る時、
有生の生の閃光まばゆきに
『彼』とぞ我は遊ばむ、靈の國。

見えざる光、動かぬ夢の影、
音なき音よ、久遠の響きよ、
まぼろし、それよ、『まことの我』なりき。
『彼』こそ靈の白瀾、——『我』なりき。
ほのかに夜半にただよふ絃の音の
光を纏ふまぼろし、——『我』なりき。

閑古鳥

曉迫り、行く春夜はくだち、
燭影淡くゆれたるわが窓に、
一聲、今我れききぬ、しののめの
呼笛か、夜の別れか、閑古鳥。

ひと聲聞きぬ。ああ否、我はただ、
(傷める胸の叫びか、重息の
はるかに愁ひの洞にどよみ來て
おのづとかへる響か、ああ知らず。)
ただ知る、深きおもひの淵の底、
見えざる底を破りて、何者か
わが胸つける刃ありと覺ゆるのみ。

をさなき時も青野にこの聲を
ききける日あり。今またここに聞く。
詩人の思ひとこしへ生くる如、
不滅のいのち持つらし、この聲も。

永遠！　それよ不滅のしばたたき、
またたき！　はたや、暫しのとこしなへ。
この生、この詩、(しばしのとこしなへ、)
或は消えめ、かの聲消えし如、
消えても更に(不滅のしばたたき、)
たとへばこの世終滅のあるとても、
ああ我生きむ、かの聲生くる如。

似たりな、まことこの詩とかの聲と。
これげに彌生鶯春を讃め、
世に充つ藝の聖花の盗み人、
光明の敵、いのちの賊の子が
おもねり甘き醉歌の類ならず。

健闘、つかれ、くるしみ、自矜に
光のふる里しのぶ眞心の
いのちの血汐もえ立つ胸の火に
染めなす驕り、不斷の靈の糧。
我ある限りわが世の光なる
みづから叫ぶ生の詩、生の聲。

さればよ、あはれ世界のとこしへに
いつかは一夜、有情の(ありや、否)
勇士が胸にひびきて、閑古鳥
ひと聲我によせたるおとなひを、
思ひに沈む心に送りえば、
わが生、わが詩、不滅のしるしぞと、
靜かに我は、友なる鳥の如、
無限の生の進みに歌ひつづけむ。

ほととぎす

(甲辰六月九日、夏の小山の凉しき禪房の窓に、白百合の花など添へたる文籍を讀みつつ、岩野泡鳴兄に文を認めぬ。時に聲あり、彷彿として慈心一味の調を傳へ來る。屋後の森に杜鵑の啼く也。乃ち匆々として文の中に記し送りけり。)

若き身ひとり靜かに凭る窓の

細雨、夢の樹影の中でも。
雫にぬれて今啼く、古への
ながきほろびの夢呼ぶほととぎす。
おお我が小鳥、ひねもす汝が歌ふ
哀歌にこもれ、いのちの高き聲。——
そよ、我がわかき嘆きと矜ぶりの
つきぬ源、勇みとたたかひの
糧にしあれば、汝が歌、我が叫び、
これよ、相似る『愁』の兄弟ぞ。
愁ひの力、(おもへば、わがいのち)
黃金の歌の鎖とたえせねば、
ほろべる夢も詩人の嘆きには
あらたに生きぬ。愁よ驕りなる。

マカロフ提督追悼の詩

(明治三十七年四月十三日、我が東郷大提督の艦隊大擧して旅順港口に迫るや、敵將マカロフ提督之を迎撃せむとし、[illegible]令を下して其旗艦ペトロパフロスクを港外に進めしが、武運や拙なかりけむ、我が沈置水雷に觸れて、巨艦一瞬、提督も亦艦と運命を共にした。)

嵐よ默せ、暗打つその翼、
夜の叫びも荒磯の黑潮も、
潮にみなぎる鬼哭の啾々も
暫し唸りを鎭めよ。萬軍の
敵も味方も汝が矛地に伏せて、
今、大水の響に我が呼ばふ
マカロフが名に暫しは鎭まれよ。
彼を沈めて、千古の浪狂ふ、
弦月遠きかなたの旅順口。

ものみな聲を潛めて、極冬の
落日の威に無人の大砂漠
劫風絶ゆる不動の滅の如、
鳴りをしづめて、ああ今あめつちに
こもる無言の叫びを聞けよかし。
きけよ、——敗者の怨みか、暗濤の
世をくつがへす憤怒か、ああ、あらず、——
血汐を呑みてむなしく敗艦と
共に沈みし旅順の黑漚裡、
彼が最後の瞳にかがやける
偉靈のちから鋭どき生の歌。

ああ偉いなる敗者よ、君が名は
マカロフなりき。非常の死の波に
最後のちからふるへる人の名は
マカロフなりき。胡天の孤英雄。

君を憶ふに、身はこれ敵國の
東海遠き日本の一詩人、
敵乍らに、苦しき聲あげて
高く叫ぶよ、(鬼神も跪づけ、
敵も味方も汝が矛地に伏せて、
マカロフが名に暫しは鎭まれよ。)
ああ偉いなる敗將、軍神の
選びに入れる露西亞の孤英雄、
無情の風はまことに君が身に
まこと無情の翼をひろげき、と。

東亞の空にはびこる暗雲の
亂れそめては、黃海波荒く、
殘艦哀れ旅順の水寒き
影もさびしき故國の運命に、
君は起ちにき、み神の名を呼びて、——
亡びの暗の叫びの見かへりや、
我と我が威に輝やく落日の
雲路しばしの勇みを負ふ如く。
壯なるかなや、故國の運命を
擔うて勇む胡天の君が意氣。
君は立ちにけり、旅順の狂風に
檣頭高く日を擊す提督旗。——

その旗、かなし、波間に捲きこまれ、
見る／＼君が故國の運命と、
世界を撫づるちからも海底に
沈むものとは、ああ神、人知らず。

四月十有三日、日は照らず、
空はくもりて、亂雲すさまじく
故天にかへる邊土の朝の海、
（海も狂へや、鬼神も泣き叫べ、
敵も味方も汝が鋒地に伏せて、
マカロフが名に暫しは跪づけ。）
萬雷波に躍りて、大軸を
碎くとひびく刹那に、名にしおふ
黄海の王者、世界の大艦も
くづれ傾むく天地の黑漏裡、
血汐を浴びて、腕をば拱ぎて、
無限の憤怒、怒濤のかちどきの
渦巻く海に瞳を凝らしつつ、
大提督は靜かに沈みけり。

ああ運命の大海、とこしへの
憤怒の頭擡ぐる死の波よ、
ひと日、旅順にすさみて、千秋の
うらみ遺せる秘密の黑潮よ、

ああ汝、かくてこの世の九億劫、
生と希望と意力を呑み去りて
幽暗不知の界に閉ぢこめて、
如何に、如何なる證を、永遠の
生の光に理示すぞや。
汝が迫害にもろくも沈み行く
この世この生、まことに汝が目に
映るが如く値のなきものか。

ああ休んぬかな。歷史の文字は皆
すでに千古の涙にうるほひぬ。
うるほひけりな、今また、マカロフが
おほいなる名も我身の熱涙に。——
彼は沈みぬ、無間の海の底。
偉靈のちからこもれる其胸に
永劫たえぬ悲痛の傷うけて、
その重傷に世界を泣かしめて。
我はた惑ふ、地上の永滅は、
力を仰ぐ有情の涙にぞ、
仰ぐちからに不斷の永生の
流轉現ずる瞳ときひらめきか。
ああよしさらば、我が友マカロフよ。
詩人の涙あつきに、君が名の

叫びにこもる力に、願くは
君が名、我が詩、不滅の信とも
なぐさみて、我この世にたたかはむ。

水無月くらき夜半の窓に凭り、
燭にそむきて、靜かに君が名を
思へば、我や、音なき狂瀾裡、
したしく君が渦巻く死の波を
制す最後の姿を觀るが如、
頭は垂れて、熱涙せきあへず。
君はや逝きぬ。逝きても猶逝かぬ
その偉いなる心はとこしへに
偉靈を仰ぐ心に絶えざらむ。
ああ、夜の嵐、荒磯のくろ潮も、
敵も味方もその領地に伏せて
火焔の聲をあげてぞ我が呼ばふ
マカロフが名に暫しは鎮まれよ。
彼を沈めて千古の浪狂ふ
弦月遠きかなたの旅順口。

（甲辰六月十三日）

金甌の歌

あけぼの光纏へる青雲の、

ときはかきはに眠と暗となき
幻、律べ、さまよふ聖字の中、
新たに匂ふいのちのほのぼのと
我は生れき。大日の灼やきに
玉髄湛ふ黄金の花瓶を
青摺綾のたもとに抱きつつ。

羅かへし、しづかに白龍の
石階踏めば、星皆あつまりて、
裳裾を縫へる緑のエメラルド。
歩み動けば、小櫛の弦の月、
白銀らるむ兜の前の星。
瞰下すかなた、仄かに讃頌の
夜の聲夢の下界をどよもしぬ。

白晝の日引めぐれる苑の夏、
かをる檸檬の樹蔭に休らへば、
闘ぎたたかふ浮世の市超えて、
見わたすかなた、青波鳴る海の
自然の樂のひびきの起伏に
流るる光、それ我が金甌の
みなぎる匂ひ漂ふ影なりき。

白帆立り、大波、大山の
海には破船、山には魔の叫び、
陸なる罪の館に災禍の
交々起る嵐の夜半の窓、
戰慄せまるまなこた閉ぢぬれば、
あてなるさまや、胸なる金甌の
おもてまろらに光の香はみちて、
たえざる天の糧をば湛へたる。

いただきそそる巖に佇めば、
世は夜ながら、光の隈もなく、
無韻のしらべ、朝の鐘の如、
胸に起りて千里の空を走せ、
山、河、郷も、舟路もおしなべて
投げたる影にみながら包まれぬ。

野川氾濫れて岸邊の雛菊の
小花泥水になやめる姿見て、
あまりに痛き運命を我泣くや、
水にうつれる小花のおもかげに、
幻ふかく湛ふる金甌の
底にかがやく生火の文字にして、
いのちの主の涙は宿れりき。

想ひの翼ひまなく、筬の如、
あこがれ、嘆き、勇みの經緯に、
見ゆる、見えざるいのちの機織れば、
天地つつみひろごる帕の中、
わが金甌のおもてに、榮光の
七燭いてる不老の天の樂、
ほのかに浮びただよふ影を見ぬ。

ああ人知るや、わが抱く金甌は
（そよわがいのち）尊とき神の影、
生きたる道、生きたる天の樂、
いのちの光、ひめたる我なりき。
涯なく限りなきこの天地の
力を力とぞする彼よ、げに
我が金甌の生火の髓の水。

されば我がゆく路には、ものみなの
戰ひ、愁ひ、よろこび、怒り、皆
我と守れる心の閃めきに
融けて唯一の生命にかへるなる。
ああ我が世界、すなはち、人の、また
み神の愛と力の世界にて、
眠と富の入るべき國ならず。

天地知ろす源、創造の

[illegible]の光に生れし我なれば、
わが聲、涙、おのづと古郷の
缺くる事なきいのちと愛の音に、
見よや、天なる眞名井の水の如、
玉盃あふれつきせぬ金剛の
雫流れて凝りなす詩の珠。

（甲辰六月十五日）

アカシヤの蔭

たそかれ淡き搖曳やはらかに、
收まる光暫しの名殘なる
透影投けし碧の淵の上、
我ただひとり一日を漂へる
小舟を寄せて、アカシヤ夏の香の
木蔭に櫂をとどめて休らひぬ。

流れに涯も知らざる大川の
暫しと淀む翠江、夢の淵！
見えざる靈の海原、花岸の
ふる鄕とめて生命の大川に
ひねもす浮びただよふ夢の我！
夢こそ暫し宿れるこの岸に
ああ夢ならぬ香りのアカシヤや。

野末に匂ふ薄月しづかなる
光を帶びて、微風吹く每に、
英房ゆらぎ、眞白の波湧けば、
みなぎる薫りあまきに蜜の蜂
群る羽音は暮れゆく野の空に
猶去りがての呟やき、夕の曲。

纜結ひて忘我の步みもて、
我は上りぬ、アカシヤ咲く岸に。——
春の夜櫻おぼろの月の窓
少女が歌にひかれて忍ぶ如。

ああ世の戀よ、まことに淀の上の
アカシヤ甘き匂ひに似たらずや。
いのちの川の夢なる青淵に
夢ならぬ香の雫をそそぎつつ、
　幻過ぐるいのちの舟よせて、
流るる心に光の鎖なす
にほひのつきぬ思出結ぶなる。

淀める水よ、音なき波の上に
沒藥撒くとしたたるアカシヤの
その香、はてなく流るる汝が旅に

消ゆる日ありと誰かは知りうるぞ。
ああ我が戀よ、心の奧ふかく
汝が投げたる光と香りとの
（たとひ、わが舟巖に覆へり、
或は暗の嵐に迷ふとも、）
沈む日ありと誰かは云ひうるぞ。

はた此の岸に溢るる平和の
見えざる光、不斷の風の樂、
光と樂にさまよふ幻の
それよ、我が旅はてなむ古鄕の
黃金の岸のとはなる榮光と
異なるものと誰かははかりえむ。
ああ汝水よ、われらはふるさとの
何處なりしを知らざる旅なれば、
アカシヤの香に南の國おもひ、
戀の夢にし永遠なる世を知るも、
そは罪なりと誰かはさばきえむ。

ああ今、月は靜かに萬有を
ひろごり包み、また我心を
光に融かしつくして、我すでに
見えざる國の宮居に、アカシヤと
吹きぬるかともやはらぐ愛の岸、

無垢なる花の匂ひの幻に
神かの姿けだかき現かな。

水も淀みぬ、アカシヤ香も増しぬ。
いざ我が長きいのちの大川に
我も宿らむ、暫しの夢の岸。——
暫しの夢のまたたき、それよ、げに、
とはなる脈のひるまぬ進み搏つ
まことの靈の住家の證なれ。

(甲辰六月十七日)

ひとつ家

にごれる浮世の嵐に我怒りて、
孤家、荒磯のしじまにのがれ入りぬ。
捲き去り、捲きくる千古の浪は碎け、
くだけて悲しき自然の樂の海に、
身はこれ寂寥兒、心はただよひつつ、
靜かに思ひ出、——岸なき過ぎ來し方、
あてなき生命の舟路に、何處へとか
わが魂孤舟、梶をば向けて行く、と。
夕浪[illegible]、底なき胸のどよみ、
その色、音、皆不朽の調和もて、
捲きては碎くる入日のこの束の間——
沈む日我をば、我また沈む日をば
凝視めて叫ぶよ、無始なる暗、さらずば
無終の光よ、渾てを葬むれとぞ。

(甲辰六月十九日)

壁なる影

夜風にうるほひ、行春淡き
有明燭の火影ぞ搖れて、
ああ今、ほのかに、幻ふかく
起伏さだめぬ影こそ壁に。

詩歌の愁ひに我が身は痩せて、
くだつ夜、低唱、無興の窓に。
こは何、落ちくる壁なる影よ、——
靜かに、靜かに、捲きてはひらく。

たとへば、大海青波鳴りて
涯なき涯にとただよふそれか、
或は、無終の歷史の上に
湧き、また沈める流轉の跡か。

めぐれる影にと思ひ耽る。——
ああ今、我聞く、音なき波に
遠灘どよもす響ぞこもれ、——
思の青渦、とく、またゆるく。

とく、またゆるかに影こそ搖れば、
うかべる光に心は漂ふ。——
この影、幻、ああ聞きがたき
天海『祕密』のそのおとづれか。

思は高めば、影また深く、
見えざる文こそ壁には照れる。——
幾夜の我が友、そよ、わがいのち、
祕密に泳げる我が影なりき。

燈火うするる。薄れよ。暗も
心の壁なる我が影消さじ。
ああ我汝に謝す、我が夜は明けば、
この影、まことの光に生きむ。

(甲辰六月二十日)

鷗

藻の香に染みし白晝の砂枕、
ましろき鷗、ゆたかに、波の穗を

光の獨にわけつつ、碎け去る
汀の漏にえものをあさりては、
わが足近く翼を休らへぬ。

諸手をのべて、高らに吟ずれど、
鳥驚かず、とび去らず、
ぬれたる砂にあゆみて、退き、また
寄せくる波をむかへて、よろこびぬ。

つぶらにあきて、青海の
匂ひかがやく小瞳は、
眞珠の光あつめし翠の壺。
はてなき海を家とし、歌として、
おのが翼を力と遊べばか、
汝が行くところ、瞳の射る所、
猜疑、怖れ、さげすみ、あなどりの
さもしき陰影は隱れて、密着し、

ああ逍遙よ――おきての網の中
立ちつつまれてあたりをかへり見る
むなしき鎖解きたる逍遙よ、
それただ我ら自然の寵兒らが
高行く天の世に似る路なれや。
來ても聞けかし、今この鳥の歌。――

さまよひなれば、自由なる戀の夢、
あけぼの開く白藻の香に宿り、
起伏つきぬ五百重の浪の音に
光と暗はい湧きて、とこしへの
勇みの歌は、ひるまぬ生の樂。

ああ我が友よ、願ふは、暫しだに、
つかる日なき光の白羽をぞ
翼なき子の腕にもゆるさずや。
汝があるところ、平和、よろこびの
軟風かよひ、黃金の日は照れど、
人の世の國はがれの風長く、
自由の花は百年地に委して
不朽と詩とこの自然はほろびたり。

（甲辰八月十四日夜）

光の門

よすがら堪へぬなやみに眼は沮み、
黒蛇ねむる、八百千の巖の
暗嘯あはす迷ひの森の中、
あゆみにつるる朽葉の咽ぶ音も
罪にか誘ふ陰府のあざけりと
心責めつつ、あこがれたどり來て、
何かも、どよむ響のあたらしく
胸にし入るに、驚き見まもれば、
今こそ立ちぬ、光の門に、我れ。

ああ我が長き悶の夜は退き、
香もあたらしき朝風吹きみちて、
吹き行く所、我が目に入るところ、
自由と愛にすべての暗は消え、
かなしき鳥の叫びも、森影も、
うしろに遠き谷間にかくれ去り、
立つは自然の搖床、しろがねの
砂布きのべし朝の海の上。

不朽の勇み漲る大洋の
張りたる胸は、はてなく、紫の
光をつみて、東に、潔高き
白旗のぼる雲際とよもしぬ。
ああその光、――青渦底もなき
海底守る秘密の國よりか。
はた夜と暗と夢なき大空の
紅玉匂ふ玉階すべり來し
天華のただちか、或は我が胸の
生火の焰もえ立つならめきか。――

蒼空かぎり、海路と天の門の
落ち合ふ所、日輪おごそかに
あたらしき世の希望に生れ出で、
海と陸とのとこしへ抱く所、
ものみな荒む黒影夜と共に
葬り了へて、長夜の虚洞より、
わが路照らす日ぞとも、わが魂は
今こそ高き叫びに醒めにたれ。

明け立ちそめし曙光の逆もどり
東の宮にかへれる例なく、
一度醒めし心の初日影、
この世の極み、眠らむ時はなし。
ああ野も山も遥鳴る海原も
百千の鐘をあつめて、新らしき
光の門に、ひるまぬ進軍の
歓呼の調の鬨をば作れかし。

よろこび躍り我が踏む足音に
驚き立ちて、高きに[illegible]雲雀
うたふや朝の迎への愛の曲。
その曲、浪に、風に、香藻に
い[illegible]る中に光の響撒けば
わ[illegible]、百[illegible]の[illegible]、

さきよふ業の八百潮うつくしき
曙光の空に翔け行き、翅をのべて、
名だたる猛者が弓弦鳴りて、ひき
射出す征矢もとどかぬ蒼穹を、
青海、巷、高山、深森の
わかちもあらず、皆わがいとし見つ
覚めたる朝の姿と臨むかな。

(甲辰八月十五日夜)

寂寥

片破月の淋しき黄の光
破窓洩れて、老尼の袈裟の如、
静かに纏ふるかに、[illegible]みさしつ
机の上、さては世界の闇に落ちぬ。
草舍の軒をめぐるは千歳の
なげきの緒のたてぬき織り交ぜて
しらべぞ繁き百間の夢の跡。
夜の鐘遠く、月も消えはてに、
ああ美しき名よ、寂寥！
天地眠りにつきて、今こそは
汝がいと深き吐息と脈搏の、
かとけ[illegible]めて[illegible]思ひわ[illegible]と
すべての[illegible]一心に[illegible]、

壁には淋しき我が影。堆たかく
乱れて膝をかこめる黄巻は
さながら遠き谷間の虚洞より
飛け出で来る秘密の精の如——
かかる夜幾夜、見えざる界より、
美しき名よ、寂寥！
汝この室を着なく、月影の
銀色夜衣纏ひてすべり入り、
なつかし妻の如くも親しげに
ほほゑみ見せて傍へに坐りけむ。

見よ、汝が吐息静かに吹く所、
人の心の曇りは拭はれて、
あたりの物の動きに、飾らざる
まことの我の姿の明らかに
[illegible]るを[illegible]め、汝が脈搏つ所、
すべての音は消みて、ただ深き
心の海に浮ぶ大波の
寄せては寄する響のきこゆなる。
美しき名よ、寂寥！
ああ汝こそは、[illegible]とを手をもて
この人生の覆面をまき去ると
[illegible]る有情の使者か。

汝がおとづれは必ず和らかに、
またいと閑く、恰も風の如。
二人のあるや、汝が眼に一すぢに
貫ぬくとても、胸にこそぞ来て、
その微笑もまことに荘厳に、
たとへば百合の白刃の剣もて
守れる晴の沈黙の森の如、
辭なき言葉四壁にみちみちて、
おのづと下る瞼はまた起きず。
美しき名よ、寂寥！

かくて再び我をば去らむとき、
涙は涸れて、袂はうるほへど、
あらたに胸にもえ立つ生命の
石炭こそ汝が遺せる記念なれ。

美しき名よ、寂寥！
嘗ては我も多くの世の人が
厭へる如く、汝をばいとへりき。
そはただ春の陽炎もゆる野に
とび行く蝶の浮きたる心には、
汝が手のあまり霜には似たればぞ。
さはあれ、汝やまことに涯もなき
大瀛にして、不断の動揺に、

眞面目に、常に高きに進み行く
心の奥の寶をぞ秘めたれば、
遂には深き崇高き運命の
勇士の胸の門をばひらくなり。

美しき名よ、寂寥！
たとへば汝は秘密の古鏡、
人若し姿映さば、いろいろの
假象はすべて、濡れたる草の葉の
日に乾く如、忽ち消えうせて、
おもてに浮ぶまろらの影二つ、——
それ、かざりなき赤裸の『我』と、また
『我』をしめぐる自然の偉いなる
不朽の力、生火の燃ゆる門。
げに寂寥にむかひて語る時、
人皆すべて眞の『我』が言葉、
『我』が魂をもて眞を語るなる。

美しき名よ、寂寥！
汝また長き端なき鎖にて、
とこしへ我を繋ぎて奴隷とす。
家をば出でて自然に對する時、
うづ巻く潮の底より、天そそる
秀峰高き際より、さてはまた、

黄に咲く野邊の小花の葉蔭より
雀躍り出でて、胸をば十重二十重
鞭と捲きつつ、尊とき天の名の
示現の前、頭を下げしむる、
それその力、ああまた汝にあり。

美しき名よ、寂寥！
戀する者の胸よりも若しも汝が
おとづれ絶たば言語も開きえぬ
心の奥の叫びを語るべき
慰安の友の滅びて、彼遂に
たへぬ惱みに物にか狂ふべし。
またかの善と眞を慕ふ子に、
若し汝行きて、みづから自らに
教ふる時を與ふる勿りせば、
遂には彼の心も枯るるらむ。

美しき名よ、寂寥！
寂寥人を殺すと誰か云ふ。
靈なきむくろ、花なき醜草は
汝がおごそかの吐息に、げに或は
死にもやすべし。朽木に花咲かず。
ああ寂寥よ、汝が脈搏つところ、——
我と我との交はる所にて、

うちめぐらせる靈氣の八重垣に
詩歌の花の戀しきみ園あり。
そこに我が魂しづかにさまよふや、
おのづと起る吟きの聲は皆、
歴史と常の制規を脱け出でて、
親しく人と自然を司どる
慈光の神に捧ぐる深祈禱。
あふるる涙、それまた世の常の
涙にあらず、まことの生命の
源ふかく歸依する瑞の露。

美しき名よ、寂寥！
汝こそげにも心の在家にて、
見えぬ奇かる界に門ひらき、
またこの生けるままなる世の態に
埋れて大き靈性の隱れ花
かしこに、ここに、各自の胸にさへ
咲けるを示し、無言の教垂れ、
想ひをひきて自然の路告ぐる
豐麗無垢の綾とき靈の友。
ああこの世界ひとりの『人』ありて、
若し我が如く、美し寂寥の
壁に抱かれ、處と時を超え、
あこがれ泣くを樂しと知るあらば、
我この月の光に融け行きて、
彼には問はむ、『榮華と黄金の
まばゆき土の値や幾何』と。

(甲辰八月十八日夜)

秋風高歌

《雜詩十章甲辰初秋作》

黄金向日葵

我が戀は黄金向日葵、
曙いだす濤にさめ、
夕の風に眠るまで、
日を趁ひ光あくがれ、まろらかに
眩ゆくめぐる豐熱の
彩どり饒きこがねの花なれや。

これ夢ならば、とこしへの
さめたる夢よ、こがねひぐるま。
これ影ならば、あたたかき
瑞雲まとふ照日の生ける影。

圓らかなれば、天蓋の
遮りもなき光の宮の如。
まばゆければぞ、王者にすなる如。
百花、見よや芝生にぬかづくよ。
今はた、似たり、かなたの日輪も、
わが戀の日にあこがれて
ひねもすめぐるみ空の向日葵に。

(八月二十二日)

我が世界

世界の眠り、我れただひとり覺め、
立つや、草這ふ夜暗の丘の上。
息をひそめて横たふ大地は
わが命に行く車にて、
星鏤めし夜天の清濶は
わが被きたる笠の如。

ああこの世界、或は朝風の
光とともに、再びもとの如、
我が司配はなるる時あらむ。
されども人よ知れかし、我が胸の
思の世界、それこの世界なる
すべてを超えし不動の國なれば、
我悲しまず、また失はず、

よし、この世界、再びもとの如、
貴く人の世界となるとても。

（八月二十二日）

黄の小花

夕の野路を辿りて、黄に咲ける
小花を摘めば、涙はせきあへず。

ああ、ああこの身、この花、小さくも
いのちあり、また仰ぐに光あり。
この野に咲ける、この世に捨てられし
運命よ、いづれ、大慈悲の
かゝれて見えぬ恵みの業ならぬ。

よし我、黄なる花の如、
霜にたふる時あるも、
再び、もらす事なき天の手に
還るをうべき幸もてり。

ああこの花の心を解くあらば
我が心また解きうべし。
心の花しひらきなば、
またひらくべし、見えざる園の門。

（八月二十二日）

君が花

君くれなゐの花薔薇、
白絹かけてつゝめども、
色はほのかに透きにけり。
いかにやせむとまどひつつ、
墨染衣袖かへし
掩へども掩へどもいや高く
花の香りは溢れけり。

ああ秘めがたき色なれば
頬にいのちの血ぞ熱り、
つつみかねたる香りゆゑ
瞳に星の香も浮きて、
作はりがたき戀心、
熄えぬ火盞の火の息に
君が花をば染めにけり。

（九月五日夜）

波は消えつつ

波は消えつつ、砕けつつ
底なき海の底より湧き出でて、
朝より真晝、晝より夜に朝に
不斷の叫びあげつつ、帶の如、
この島根をば纏ふなり。
ああ詩人の興來の
波も、消えつつ、砕けつつ。
はかり知られぬ『祕密』の胸戸より、
劫風ともに千古の調にして、
不滅の教宣りつつ、勇ましく
人の心の岸には寄するかな。

（九月十二日夜）

柳

ああ君こそは、青淵の
流轉の波に影浮けて
しなやかに立つ柳なれ。

流轉よ、さなり流轉よ、それ遂に
夢ならず、また影ならず、
照る世の生日進み行く
生命の流れなればか、春の風
燻じて波も香にをどり、
ひと雨毎に萌づる
愛の小櫛の色にして、
見よ今、枝の新装、
青淵波もたのしげに

世は皆戀の深緑。

(九月十四日)

愛の路

高きに登り、眺むれば、
乾坤愛の路通ふ
青海原のはてにして、
安らかに行く白帆影。――
波は休まず、撓まずに
相啣み、くだけ、動けども、
安らかに行く白帆影。

路のせまきに、せはしげに
蠢めく人よ、來て見よや、――
花を虐げ、景を埋め、
直なるみちをつくるとて、
狭き小暗き愁嘆の
牢獄に落ちし子よ、見よや、――
大海みちはなくして、縦横の
みちこそ開け、愛の路。

(九月十四日)

落ちし木の實

秋の日はやく樹屋の屋根に入り、
ものさびれたる夕をただひとり
紙障をあけて、庭面にむかふ時、
庭は風なく、落葉の音もたえて、
いと靜けきに、林檎の紅の實は
かすかに落ちぬ、波なき水潦。

夕のあはき光は篝目の
ただしき地に隈なくさまよひて、
猶暮れのこるみ空の心のみ
一きは明くうつせる水潦、
今色紅の木の實の落ち來しに
にはかに波の小渦立てたれど、
やがてはもとの安息うかべつつ、
再び空の心を宿しては、
その遠蒼き光に一粒の
りんごのあたり縁どりぬ。

ああこの小さき木の實よ、八百千歳、
かくこそ汝や靜かに落ちにけむ。
またも年の昔に、西人が
想ひに耽る庭にとおとなひて、
尊とき神の力の一鎖、
かくこそ落ちて、彼には語りけめ。

我今人のこの世のはかなさに
つらさに泣きて、運命の遠き路、
いづこへ、若きかよわきこのむくろ
運ばむものと秘かに惑へりき。
落ちぬる汝を眺めて、我はまた、
辛からず、はたはかなき影ならぬ
たふとき神の力の世をば知る。

汝何故にかくまで靜けきぞ、――
人はみづから運命に足りかねて、
さびしき廣み、はてなき暗の野の
躓き、にがき悲哀の實を喰むに、
何故汝のかくまで安けきぞ、――
足るある如く、落ちては動かずに
心に何か深くも信頼る如。

夜の歩みは漸く迫り來て、
羽弱か、群に後れし夕鴉
寂ある聲に友呼ぶ高啼きや、
水面にうきしみ空の明るみも
消えては、せまきわが庭黝みぬ。
ああこの暗の吐息のただ中よ、
灯ともす事も、我をも忘じては、
よみがへりくる心の光もて

黒き土のさまなる木の實をば
打眺めつつ、静かに蹲づく。
（九月十九日夜）

秘密

花馥ゆる御簾の蔭、
琴柱をおいて少女子の
小指やはらにしなやかに、
絃より絃に轉ずれば、
さばしり出づる幻の
人間はしめの樂の宮、
あゝこの宮を眺め置きて
とこあらたなる琴の胸、
秘密ならずと誰か云ふ。

八千年人の手に染まぬ
神の世界の大胸に
深くするどくおごそかに
我が目うつれば、ちよろづの
詩は珠なし、清水なし、
光の川と溢れくる。
あゝこの水の美しく
休むことなく湧き出るを
秘密なりとは誰か知る。（九月十九日夜）

あゆみ

始めなく、また終りなき
時を刻むと、柱なる
時計の針はひびき行け。
せまく、短かく、過ぎやすき
いのち刻むと、わが足は
ひねもす路を歩むかも。
（九月十九日夜）

『秋風高歌』畢

江上の曲

水緩やかに、白雲の
影をうかべて、野を劃る
川を隔てて、西東、
西の館ににほひ髪
あでなる姫の歌絶えず
東の岸の草蔭に
牧の子ひとり住ひけり。

姫が姿は、弱肩に
波うつ髪の緑なる
雲を被きて、白鹿の
天の階ふむ天津女が
羽衣ぬげるたたずまひ。
牧の子が笛、それ、野邊の
白き羊がうら若き
瞳をあげて大天の
圓らの夢にあこがるる
おもひ無垢なる調なりき。

されども川の西東、
水の碧の胸にして、
月は東に、日は西に
立ちならびたる姿をば
静かに宿す時あれど、
二人が瞳、ひと日だに
相逢ふ事はなかりけり。

ふたりが瞳ひと日だに
あひぬる事はあらざれど、
小窓、欄の花心地
春日燻ずる西の岸、
とある日、姫が紫の
とばりかかげて立たす時、
緑草野の丘遠く
いとも和らに、たのしげに

舟の心のただよひて、
綠藻なびく野を西へ、
水面をこえて浮びくる
牧の子が笛聞きしより、
何かも胸に影曳き
むかしの夢の灰かにも
おとづれ來らむ思ひにて、
晝はひねもす、日を又日、
姫があでなる俤は、
寶野みどりのあめつちを
枠のやうなる浮彫と、
やかたの窓に立たしけり。

また、夕されの露の路、
羊を追うて牧の子が
草の香深き岸の舍に
かへり來ぬれば、かすかにも
薄光さす川面に
さまよひわたる黄昏の
美し調に魂ひかれ、
ただ何となくその歌の
跡を慕しみ、虚ろ心、
柳木の蔭に舟を
漕ぎて、夜な夜な牧の子は
西の岸にと漕ぎ行きぬ。

ああ、ああ、されど日を又夜、
ふたりが瞳、ひとたびも
相あふ時はあらざりき。
姫が思ひはただ遠き
晝の野わたるたえだえの
笛のしらべの心にて、
牧の子が戀、それやはた、
帳ゆらめく窓洩れて
灯影とともにゆらぎくる
清しき歌の心のみ。

俤は夢見ぬ、「かの野邊の
しらべぞ、夜半のわが歌の
天よりかへる反響なれ。」
また夢見けり、牧の子も、
「かの夜な夜なの歌こそは、
白晝わが吹く小角の音の
地心に沁みし遺韻よ。」と。

牧の子は野に、いと細き
希望の節の笛を吹き、
姫はさびしく、紫の
とばりを深み、夜半の窓、
人なつかしのあこがれの
柔き黄昏うるませて、
かくて日毎に姫が目は
牧野こわしり、夜な夜なに
牧の子が漕ぐうつろ舟
西なる岸につながれて、
櫻花散る行衛や、
行きて、いのちの狂ひ火の
狂ふ焔の深緑、
ただ燃えさかる夏の風
野こえてここにみまひけり。

ああ夏なれば、日ざかりの
光にきほふ野の羊、
草踏み亂し、埒を超え、
泉の緣のたはぶれに
鞭をおそれぬこをどりや、
西の岸にも、葉櫻に、
南蠻鳥は眞夏鳥、
來て啼く歌は、かがやかの
生ける幻諷ふ姫、
ふる里とほき南の
燃えにぞ燃ゆる戀の曲、

照る日うつろひ、瞳をあげて、
のみど高らに歌ふれど、
さびしや、二人、日を又夜、
[illegible]はあらざりき。
胸に[illegible]いのちの火
その焔にぞ焼かれつつ、
ああ焼かれつつ、かくて猶、
堪へがたなき夢追うて、
水ゆるやかの大川の
（隔てよ、さあれ浮橋の）
西と東に、はかなくも
影に似る戀つながれぬ。

夏また行きぬ。かくて猶、
ああ夢遠きあこがれや、
はかなき戀はつながれぬ。
牧場の草に、『秋』はまづ
[illegible]来て、小桔梗に、
[illegible]にいろいろの
[illegible]も、
[illegible]吹く風も遠々に、
[illegible]を葉と水に散る
[illegible]さへ、
夢逢ふ[illegible]になつかしく

また堪へがたき淋しさを
この天地にさそひ来ぬ。

ひと夜、月いと明くして、
咽びに似たる漣の
岸の調も何となく、
底ひ知られぬ水底の
秘めたる戀の音にいづる
おとなひの如聞かれつつ、
まろらの月のおもて、また
わが心をばうつすとも
見えて、ああその戀心
いと堪へがたき宵なりき。
牧の子が舟ゆるやかに
東の岸をこぎ出でぬ。

高窓洩れて、夢深き
月にただよふ姫が歌、
今宵ことさら澄み入りて、
ああ大川も今しばし
流れをとどめ、天地の
よろづの魂もその聲の
波にし融けて浮き沈み、
ただ天心の月のみが
光をまして、その歌の
切なる節へ聴くが如、
この世の外の白鳥の
かがなき音を律べもて、
水面しづかにいわたれば、
しのびかねてや、牧の子は
櫂なげすてて、中流の
水にまかする獨木舟、
舟をも身をも忘れ果て、
息もたえよと一管の
笛に心を吹きこみぬ。

たちまち姫が歌やみて、
窓はひらけぬ。月影に
今こそ見ゆれ、玲瓏の
光に浮ぶ姫が面。
小手をばあげて招けども、
纜なき舟はとどまらず。
舟も流れて、人も流れて、
笛のしらべも遠のくに、
呼ぶ名知らねば、姫はただ
憧れにし歌をうたひつつ、
背をのびあがり、のびあがり、
あなやと思ふまたたきに、

袖ひらめきて、窓の中
姿は消えぬ。川のおも
月は百千にくだかれぬ。

かくてこの夜の月かげに
[illegible]魂も、笛の音も
はてなき天にとけて去り、
かなしき戀の夢のあと
埋木の舟ともろともに、
人知れがたき海原の
秘密の底に流れけり。

（甲辰九月十七日夜）

枯林

うち[illegible]の落葉の
[illegible]、[illegible]なく、
[illegible]
[illegible]へる
[illegible]枯の丘の林に、
日また日、吹き荒みたる
[illegible]たたか[illegible]てて、
[illegible]
[illegible]

ほころびの空の光に
明に透く幹のあひだを
羽搏らし移りとびつつ、
けおさるる冬の沈默を
破るとか、いとせはしげに、
羽強の胸毛赤鳥
山の鳥小さき啄木鳥
木を啄く音を流しぬ。

さびしみに胸を捲かれて、
うなだれて、黄葉のいく片
猶のこる楢の木下に
佇めば、人の世は皆
遠のきて、終滅に似たる
冬の晩、この大地に、
落ちて行く日と、かの音と、
我とのみあるにも似たり。

枝を折り、幹を撓めて
吹き過ぎし破壊のこがらし
あともなく、いとおごそかに、
八千とせの歴史の如く、
また戰さ跡の如くに、
しじまれる楢の林を

わが領と、寒さも怖ぢず、
氣負ひては、音よ坎々、
冬木立つ幹をつつきて
しばらくも絶間あらせず。
いと深く、かつさびれたる
その響き遠くどよみて、
山彦は山彦呼びて、
今はしも、消えにし音と
また殘る音の經緯
織りかはす葉の夕浪、
かすかなるふるひを帶びて、
さびしみの潮路遠く、
林こえ、枯野をこえて、
夕天に、また夕地に
くまもなく溢れわたりぬ。

われはただ氣も遠々に、
痩肩を楢にならべて、
骨の如、動きもえせず、
目を瞑ぢて、額をたるれば、
かの響き、今はた我の
さびしみの底なる胸を
何者か鋭きくちはしに
つつきては、靈呼びさます

世の外の聲とも覺ゆ。
ああ我や、詩のさびし兒、
若うては心よわくて、
うたがひに、はた悲哀に
かく此處に立ちもこそすれ。
今聞けよ、小さき鳥に、——
いのちなき滅の世界に
ただひとり命に勇みて、
ひびかすは心のあとよ、
生命の高ききほひよ。
強ぶるふ猛、のうなりは
勝ちほこる彼の凱歌か、
はた或は、我をあざける
矜りの笑ひの聲か。
かく思ひわが頭は
いや更に胸に埋りぬ。
細腕は枯枝なして
ちからなく膝邊にたれぬ。
しづかにも心の絃に
祈りする歌も添ひきぬ。

日は既に山に沈みて
たそがれの薄影重く、
せはしげに樹々をめぐりし
啄木鳥は、こ度は近く、
わが凭れる楢の老樹の
幹に來て、今日のをはりを
いと高く髄に刻みぬ。

（甲辰十一月十四日）

天火盞

戀は、天照る日輪の
みづから燒けし蠟涙や、
こぼれて、地に盲ひし子が
冷に閉ぢける胸の戶の
夢の隙より入りしもの。

夢は、夢なる野の小草
草が天さす隙間より
おちし一點の火はもえて、
生野、生風、生焰、
いのちの野火はひろごりぬ。

日光うけては日向葵の
花も黃金の火の小盃。
燒かれて我も、胸もゆる
戀のほむらの天火盞、
君が魂をば燒きにける。

（甲辰十一月十八日）

壁畫

破壞が住みける堂の中、
讃者群れにしいにしへの
さかえの色を猶とめて
壁畫は壁に蝕ばみぬ。
おもひでこそは我胸の
かべゑなるらし。熄えぬ火の
炎のかをり傳へつつ、
沈默に吼ける戀の影。

古りぬと壁畫こぼちなば、
たえぬ信のいのちしも
何によりてか記すべき。
蝕ばみぬとて思出の
絲をし斷たば、如何にして、
聖きをつなぐ天の火の
光に、かたき戀の戶に
心の城を守るべき。

（甲辰十一月十八日）

炎の宮

女は熱におかされて、
[illegible]の床に[illegible]らく、——
「我は炎の宮を見き。
宮は、[illegible]は生[illegible]の
緑にもゆる若き火の、
たちまちかはる[illegible]火湧、
赤龍をどる天塔や。
見ませ、今はた漸々に、
ああ我が夫よ、神々し、
御堀に咲く黄の花と
もゆる炎の我が宮を。
やがては融けて白光の
雲輪い照る日とならば、
君をつつみて地の上に
天の[illegible]立ちぬべし。」
「見ませ、」と云ふに、「何處に、」と
問へば、「此處よ、」と、真白なる
腕に抱く玉の胸。——
顔には、いまはの[illegible]、
[illegible]の涙、また[illegible]の涙の

寄せてはかへすときめきを
照らすは月の白き影。

（甲辰十一月十八日）

のぞみ

一

やなぎ浸る
月はかすかに
額を射て、ほの白し。
かすかなる『のぞみ』の歌は、
砂原にうちまろぶ
若人の琴にそひぬ。

つきかげは
やや傾ぶきぬ。
川柳に風やみぬ。
おもへらく、ああ我が望み、
かたぶきぬ、衰へぬ。
夢のあと、あはれ何處。

二

月かげの
沈むにつれて、
白き額また垂れぬ。
ああいのち、そはかの薔薇、
蕾なる束の間の
まだ咲かぬ夢の色か。

あるは又、
なげきの丘に
ふと萌えし夢小草、
根をひたすなげきの水に
培はれ、かなしみの
穢と咲く黄の小花か。

わが望み、
（夢の起伏、）
ゆめなれば、砂の上の
身は既に夢の殘骸、
かたぶきぬ、おとろへぬ、
夢のあと、あはれいづく。

三

月落ちて、
心沈みて、
聲もなき闇の中、
琴は[illegible]のこる一絃、

雲路にも星一つ、
『のぞみ』をば地に斷たず。

たれし額、
やゝにあがりぬ。
彼は云ふ、わが望み、
夢ならば永世の夢よ、
うつり行く『時』の影、
起伏は皆夢ぞと。

わかうどは
きれたる絃を
星かげにつなぎつつ、
起ちあがり、又勇ましく
ほほゑみて、砂の原
趁ひ行きぬ、生命の影を。

（甲辰十一月十九日）

眠れる都

（京に入りて間もなく宿りける駿河臺の新居、窓を開けば、竹林の崖下、一望甍の谷ありて眼界を埋めたり。秋なれば夜毎に、甍の上は重き霧、霧の上に月照りて、永く山村僻陬の間にありし身には、いと珍らかの眺めなりしか。一夜興をえて匆々筆を染めけるもの乃ちこの短調七聯の一詩也　「枯林」より「二つの影」までの七篇は、この甍の谷にのぞめる窓の三週の假住居になれるものなりき。）

鐘鳴りぬ、
いと莊嚴に
夜は重し、市の上。
聲は皆眠れる都
瞰下せば、すさまじき
野の獅子の死にも似たり。

ゆるぎなき
霧の五浪、
白う照る月影に
氷りては市を包みぬ。
港なる百船の
それの如、燈影洩るる。

みおろせば、
眠れる都、
ああこれや、最後の日
近づける血汐の城か。
夜の霧は、墓の如、
ものみなを封じ込めぬ。

百萬の
つかれし人は
眠るらし、墓の中。
天地を霧は隔てて、
照りわたる月かげは
天の夢地にそそがず。

聲もなき
ねむれる都、
しづまりの大いなる
聲ありて、霧のまに〳〵
ただよひぬ、ひろごりぬ、
黒潮のそのどよみと。

ああ聲は
晝のぞめきに
けおされしたましひの
打なやむ罪の唸りか。
さては又、ひねもすの
たたかひの名殘の聲か。

我が窓は、
濁れる海を
遶らせる城の如、

旅宿に怖れまどへる
詩の胸守りつつ、
月光を隈なく入れぬ。

（甲辰十一月二十一日夜）

二つの影

浪の音の
樂にふけ行く
荒磯邊の夜の砂、
打ふみて我は辿りぬ。
海原にかたぶける
秋の夜の月は圓し。

ふと見れば、
ましろき砂に
影ありて密やかに、
わが足の歩みはこべば、
影も亦歩みつつ、
手あぐれば、手さへあげぬ。

とどまれば、
影もとまりぬ。
見つむれど、言葉なく
ただ我に伴なひ來る。
目をあげて、空見れば、
そこにまた影ぞ一つ。

ああ二つ、
影や何なる。
とする間に、空の影、
夢の如、消えぬ、流れぬ。
海原に月入りて、
地の影も見えずなりぬ。

我はまた
荒磯に一人。
ああ如何に、いづこへと
消えにしや、影の二つは。
そは知らず、ただここに、
消えぬ我、わとり立つかな。

（甲辰十一月二十一日夜）

夢の宴

一

幻にほふ花染の
朧や、卯月、夜を深み、
春の使の風の兒は
やはら光姫の狩衣を
花充つ枝にぬぎかけて、
熟睡もなかの苑の中、
千株櫻の香の夢の
おぼろをおぼろ、月ぞ照る。

二

ここよ、これかのおん裾の
縺れにゆらぐ夢の波
曳きて過ぎます春姫が、
供奉の花つ女つどはせて、
明日の淨化のみちすぢを
評定したまふ春の城。
春は日ざかる野にあらで
夢みに夢を趁ふところ。

三

さりや、萬枝の花衣、
新映つくる櫻樹の
かげに漂ふ讚頌も
聲なき夢の聲にして、
かをり、はたそれ、この國の
温みよ、歌よ、彩波よ。

まろらの天の影こそは
舞ふに音なきおぼろなれ。

四

『梅』は北濱海人が戸へ。
『柳』は、玉頬ゆたかなる
風の兒を率て、狭野の邊の
發句の翁の門を訪へ。
『さくら』と『桃』は殿軍の
女の子をここにつどへよと、
評定のあとに姫神の
下知それぞれにありぬれば、
今宵のわかれ、いざやとて、
夢いと深き歡樂の
宴は春のいのちかも。
しろがね黄金すずやかに
つどひの鳥笛仄に鳴り、
苑は『さくら』の音頭より
ゆる天部の夢の歌。

五

見れば、咲きみつ夢の花、
櫻のかげの匂ひより
つどひ寄せたるものの影、——
和魂、人のうまいより
のがれて、暫し逍遙ふか、——
あゆみ輕らに、やはらかに、
塵つちをはなれつつ、
裸々の美肌ましろなる
乳房ゆたかに月吸ひて、
百人、千人、萬人、
我も我もと春姫が
小姓の選に入らむとか、
つどひよせては、やがてかの
花の女どもに交りつつ、
舞よ、謠よ、恥もなき
ゆめの苑生の興なかば。

六

もつれつ、とけつ、めぐりつつ、
歌の彩絲捲きかへす
舞の花輪は、これやこれ
捲きてはひらく春宵の
たのしき夢の波ならし。
波の起伏身にしめて
舞へば、うたへば、暫しとて
眠りの床をのがれ來し
和魂ただにたごみつつ、
夢は時なき時なれば、
(ああ生たらぬ永生よ)
かへるを忘れ、ひたぶるに
天舞花唱の夢の人。
月はおぼろに、花おぼろ、
おぼろの帳地にたれて、
いま天地の隔てさへ
ゆめの心にとけうせて、
永遠を暫しの天の苑。

七

月は斜めに、舞倦じ、
快樂やうやう傾ぶけば、
見よや、幾群、いくそ群、
みたり、五人、つどひつつ、
歌の音なきどよみにか
ゆられて降れる葩に
みどりの髪をほの白き
花のおぼろの流れとし、
惜しむ氣もなく羽衣を
土に布きては、花の精、
また人の精、ともどもに
夢路深入る睦語。
或は熟睡の風の兒が

ふくらの頬に指ついて、
驚き醒むる兒が額を
『、、あら笑止や』と笑つくり、
或は『柳』の精が背の
枝垂の髪を、たわわなる
さくらの枝に結びては、
『見よこれ戀のとらはれ』と
乳房おさへて打囃す。

八

この時ひとり供奉の女が、
匂ひなまめく圓肩の
髪を滴たるはなびらを
そと拂ひつつ、語るらく、
『あゝこのうまし夢の宴
すぎて幾夜のそのあとよ、
ゆめの心のあとは皆
あつき眞夏の火の空に
やかれむいのちの如何にぞ』と。
きくや、忽ち花『さくら』
肉ゆたかなる胸そらし、
『あゝ悲しみよ、運命よ、
夢は汝等の友ならず。
舞よ、おぼろよ、愛よ、香よ、
いで今、更に一さしを、
春の門出に、この宵の
わかれに舞うて、うたへよ』と、
立てば、『げにも』と、またゆぐる
夢の波こそ春の音や。

九

かくて、やうやう夜はくだち、
かへり見がちに和魂の
わかれわかれて、姫神が
花幔幕の玉輦
よそひ新たになりぬれば、
風の兒はまづ脱ぎ置きし
光ある羽の衣をきて、
黄金の息を吹き出すや、
朝よぶ鐘の朗々と
花のゆめをばさましつつ、
『淨化の路に幸あまれ
光あまれ』と、ひとしきり
つちに淡紅なる花摺りの
錦布き祝ぐ櫻花。
東の空にほのぼのと
春の光は溢れける。

（甲辰十二月二日）

うばらの冠

銀燭まばゆく、葡萄の酒は薫じ、
玉裝花袖の人皆醉ひにけらし。
ふけ行く夜をも忘じて、盃をあぐる
こやこれ歡樂つきせぬ夏の宴。
人皆黃金のかがやく冠つけて、
天下の富をば、華榮をばあつめぬるに、
ああ見よ、靑磁の花瓶、百合の花の
萎れて火影にうつむく、何の姿。
願ふは大臣よ、野に咲く清き花は
ただ野の茨の葉蔭に捨てて置けよ。
野生の裸々なる美し花の矜り、
そは君、この夜の宴にあづかるべく
あまりに貧しく、小さし。許せ君よ、
清きにふさふはうばらの冠のみぞ。

（甲辰十二月十日）

心の聲《七章》

電光

暗をつんざく電光の

花よ、光よ、またたきよ、
流れて消えてあと知らず、
暗の綻び跡とめず。

去りしを、遠く流れしを、
束の間、――ただ瞬きの閃めきの
はかなき影と、きなりよ、ただ『影』と
見もせば、如何に我等の此生の
味さへほこる値さへ、
たのみ難なき約束の
空なる無なる夢ならし。

立てば、秋くる丘の上、
暗いくたびかつんざかれ、
また縫ひあはされて、電光の
花や、光の尾は長く、
疾く冷やかに、縱横に
西に東にきらめきぬ。

見よ、鐵色の空深く
光孕むか、ああ暗は
光を生むか、あらずあらず。
死なし、生なし、この世界、
不滅ぞただに流るるよ。

ああ我が頭おのづと垂るるかな。

かの束の間の光だに
『永遠』の鎖よ、無限の大海の
岸なき波に泳げる『瞬時』よ。
影の上、また夢の上に
何か建つべき。來ん世の榮と云ふ
それさへ遂にあだなるかねごとか。
ただ今我等『今』こそは、
とはの、無限の、力なる、
影にしあらぬ光と思ほへば、
散りせぬ花を、落ち行くことのなき
日も、おのづから胸ふかく
にほひ耀き、笑み足りて、
跡なき跡を思ふにも
隨喜の涙手にあまり、
足行き、眼むく所、
大いなる道はろばろと
我等の前にひらくかな。

（甲辰十二月十一日）

祭の夜

踊りの群の大なだれ、
酒に、晴着に、どよめきに、
市の祭の夜の半ば、
我は愁ひに追はれつつ、
秋の霧野をあてもなく
袂も重くさまよひぬ。

歩みにつれて、迫りくる
霧はますます深く閉ぢ、
霧をわけくる市人の
祭のどよみ、漸々に
とだえもすべう遠のきぬ。

やがて名もなき丘の上、
我はとまりぬ、墓石と。――
寄せては寄する霧の波、
その波の穗と音もなく
なびく尾花は前後、
我をめぐりぬ、城の如。

すべての聲は消え去りて
ここに大なる聲充てり。
すべての人はえも知らぬ
ここに立ちたれ、神と我。
我ひざまづき、聲あげて

祈りぬ、「あはれ我が神よ、
汝を祭る市人の
舞樂の庭に行きはせで、
などかは、弱きこの我を
さびしき丘に待ちはせし。
語れよ、語れ、何事も
きくべきものは我のみぞ。
我は汝の僕よ」と。
答ふる聲か、寂々と
(力あるかな、)深霧は
二十重に捲きぬ、我が胸を。

(甲辰十二月十一日)

曉霧

熟睡の床をのがれ行く
夢のわかれに身も覺めて、
起きてあしたの戸に凭れば、
市の住居の秋の庭
閉ぢぬる霧の幕々と
迫りて、胸にい捲き寄る。
ああ清らなる夢の人、
濁る巷の活動の
塵に立つべく、今暫し、
汝が生命の淨まりの
矜り思へと、霧こそは
寄せて魂をし包むかな。

(甲辰十二月十二日)

落葉の煙

青桐、楓、朴の木の
落葉あつめて、朝の庭、
焚けば、秋行くところまで、
けむり一條蕭條と
蒼小渦の柱して、
天のもなかを指ざしぬ。

ああほほゑみの和風に
搖りおこされし春の日や、
またあこがれの夏の日の
日織る庭に、生命の
きほひの色をもやしける
榮や如何に。——消えうせぬ、
過ぎぬ、ほろびぬ、夢のあと。
今ただ冷ゆる灰のこし、
のぼる煙も、見よ、やがて、
地をはなれて、消えて行く。——
これよろこびのうたかたの
消ゆる歎きか、悲しみか。
さあれど、然れど、人よ今
しばし涙を抑へつつ、
思はずや、この一條の
きゆる煙のあとの跡。

春ありき、また夏ありき。——
その新心地、深緑、
再び、永遠にここには訪ひ來ぬや。
よし來ずもあれ。さもあらば、
この葉を萌やし、光を、生命を
あたへし力、ああ其『力』、また、
今この消ゆる煙ともろともに
消えて、ほろびて、あとなきか。
見ゆるものこそ消えもすれ、
見えざる光、いづこにか
消ゆべき、いかに隱るべき。

さらば、ただこの枯葉さへ、
薄煙さへ、消えさりて、
却りて見えぬ、大いなる
高き力ともろともに、
渾ての絶えぬ生命の

息の光被に融けて入る
不朽のいのち持たざるか。
人よ、にはかに『然なり』とは
答ふる勿れ。されどかく
思ふて、今し消えて行く
けむり見るだに、うす暗き
涙の谷に落とすべく、
われらのいのちあまりに尊ときを
値多きを感ぜずや。

(甲辰十二月十二日)

古瓶子

うてば吹々音さぶる
素焼の、あはれ、煤びし古瓶子、
注げや、滓まで、いざともに
冬の夜寒を笑ひなむ。

今宵雪降る。世の罪の
かさむが如く、暇なく雪は降る。
破庵戸もなき我なれば、
妻なり、子なり、ああ汝。

わらへよ、村酒一酔は
寒さも貧もおかさぬ我が宮ぞ。
去れ、去れ、涙、かなしみよ、
笑ふによろし古瓶子。

世の罪つちに重む如、
ふりぬ、つもりぬ、荒野の夜の雪。
雪は座にまで舞ひ入りて
燭臺のともし盡きなんず。

酒早やなきか、それもよし、
灰となりぬる、寒爐の薪も、早や。
よし、よし、さらば古瓶子、
汝を枕に世外の夢を見む。

(甲辰十二月二十二日)

救済の綱

わづらはしき世の暗の路に、
ああ我れ、久遠の戀もえなく、
狂ふにあまりに小さき身ゆゑ、
ただ『死』の海にか、とこしへなる
安慰よ、眞珠と光らむとて、
渦巻く黒潮下に見つつ、
飛ばむの刹那を、幸と許り、
我をば擱めて巖に据ゑし
ああその力よ、信のみ手の
救済の綱とは、今ぞ知りぬ。

あさがほ

ああ百年の長命も
暗の牢舎に何かせむ。
醒めて光明に生きぬべく、
むしろ一日の榮願ふ。

寝がての夜のわづらひに
昏耗けて立てる朝の門、
(これも慈光のほほゑみよ、)
朝顔を見て我は泣く。

(甲辰十二月二十二日夜)

『心の聲』畢

白鵠

愁ひある日を、うら悲し
鵠の啼く音の堪へがたく、
水際の鳥屋の戸をあけて
放てば、あはれ、白妙の
蓮の花船行くさまや、
羽搏ち靜かに、秋の香の
澄みて雲なき青空を、

見よや、光のしたたりと、
眞白き影ぞさまよへる。

ああ地の悲歌をいのちとは
をさなき我の夢なりし。
ひたりも深き天の海
一味のむねに放ちしを
白鵠に何うらむべき。
落す天路の歌をきき、
ましろき影をあふぎては、
寧ろ自由なる逍遙の
遮りなきを羨まむ。

（乙巳一月十八日）

傘のぬし

柳の門にたたずめば、
胸の奥より捲くに似る
鐘がさそひし細雨に
ぬれて、淋しき秋の落、
絹むらさきの深張の
小傘を斜に、君は來ぬ。
もとより夢のさまよひの
心やさしき君なれば、
あゆみはゆるき駒下駄の、
その音に胸はきざまれて、
うつむきとづる眼には
仄むらさきの靄わきぬ。

袖やふるると、をののきの
もろ手を置ける胸の上、
言葉も落ちず、手もふれず、
歩みはゆるき駒下駄の
その音に知れば、君過ぎぬ。
ああ人もなき村路に
かへり見もせぬ傘の主、
心いためて見送れば、
むらさきの靄やうやうに
あせて、新月野にいづる
空のうるみも目に添ひつ、
柳の雫ひややかに
冷えし我が頬に落ちにける。

（乙巳一月十八日）

落櫛

磯回の夕のさまよひに
砂に落ちたる牡蠣の殼
拾うて聞けば、紅の
帆かけていにし曾保船の
ふるき便もこもるとふ
青潮遠きみんなみの
海の鳴る音もひびくとか。
古城の庭に松笠の
土をはらうて耳にせば、
もも年過ぎしそのかみの
朱の欄めぐらせる
殿の夜深き御簾の中、
千鳥縫ひたる匂ひ衣
行燈の灯にうちかけて、
胸の祕戀泣く姫が
七尺落つる秋髮の
慄ひを吹きし松の風
かすけき聲にわたるとか。
ああさは君が玉の胸、
青潮遠き南の
海にもあらず、ももとせの
古き夢にもあらなくに、
などかは、高き彼岸の
うかがひ難き園の如、
消息もなきふた年を
靄のかなたに祕めたるや。

夕暮にさまよへる
ここの櫻の下蔭に、
今宵おぼろ夜十六夜の
月にひかれて來て見れば、
なよびやかなる弱肩に
こぼれて匂ひ添へにけむ
落花よ、地に布きて、
夢の如くもほの白き。
中にかがやく波の形、——
黄金の蒔繪あざやかに
ああこれ君が落櫛よ。
わななきごころ目を瞑ぢて、
ひろうて耳にあてぬれど、
君が海なる花潮の
響きもきかず、黑髮の
見えぬゆらぎに秘め給ふ
み心さへもえも知らね。
まどひて胸にかき抱き
泣けば、百の齒皆生きて、
何をうらみの蛇や、
ああ二とせのわびしらに
なさけの火盞もえ/\て
痩せにし胸を捲きしむる。

（乙巳二月十八日夜）

泉

森の葉を蒸す夏照りの
かがやく路のさまよひや、
つかれて入りし楡の木の
下蔭に、ああ瑞々し、
百葉を青の御統と
垂れて、浮けたる夢の波、
眞清水透る小泉よ。
いのちの水の一掬、
いざやと下りて、深山の
小猿の如く、勇みつつ、
もろ手をのべてうかがへば、
しら藻は髮にかざさねど
水神か、いかに、笑はしの
ゆたにたゆたにものの影、
紫三稜草花ちさき
水面に匂ふ若眉や、
玉頰や、瑠璃のまなざしや。
ああ一雫掬はねど、
口は無花果香もあまき
露にうるほひ、涼しさは
胸の奥まで吹きみちぬ。

夢と思ふに、夢ならぬ
さと云ふ音におどろきて
眼あぐれば、夢か、また、
木の間まぼろし鮮やかに
垂葉わけつつ駈けて行く。——
さは黑髮のさゆらぎに
小肩なよびの少女子よ。——
ああ常夏のまぼろしよ、
など足早に過ぎ給ふ。
ねがふは君よ、夢の森
にほふ綠の涼蔭に
暫しの安寢守らせて、
（しばしか、夢の永劫よ。）
われ夢守とゆるせかし。
目ざめて仄に笑ます時、
もろ手は玉の泔坏、
この眞清水を御泔水に
手づから君にまゐらせむ。
ああをとめごよ、幻よ。
はららの袖や愛の旗、
などさは疾き足どりに、
天の鳥船のかくろひに、
綠の中に消えたまふ。

（乙巳二月十九日夜）

青鷺

蓮沼添ひの丘の麓、
樝の木立時雨れて
秋の行方をささと
たづねに過ぎし跡や、
青鈍色の雲ばみ、
斑らの濡葉灰に
ゆふべの日射燃えぬ。

野こえて彼方、杉原、
わづかに見ゆる御寺の
白鳩とべる屋根や、
さびしき西の明るみ、
誰が妻死ぬる夕ぞ、
鐃鈸遠く鳴りて、
涙も落つるしじまり。

[illegible]絶えば、[illegible]若樹の
黄朽葉はふり、胸に
振れて、[illegible]をすべりぬ。
ふと見るけはひ、こは何、——
[illegible]の水の

蘆の葉ひたすほとりに
青鷺下りぬ、靜かや。
立つ身あやしと凝視るか、
注ぐよ、我に、小瞳。——
あな有難の姿と
をろがみ心、只今
鳥の目底に迫るや、
尾被きと啼きて
樝の木立夕づけぬ。

(乙巳二月二十日)

小田屋守

身は鄙さびの小田屋守、
苜蓿白き花床の
日照りの小畔、まろび寢て、
足るべらなりし田子なれば、
君を戀ふとはえも云へね、
水無月螢とび亂れ、
暖き風吹く宵の闇を、
ひろがほ草の夢なびき
小田の小徑を匂はすし
都ぶりなるおん袖に、

ゆきずり心ときめかし
その移り香の胸に沁み、
心の栖家君にとて
なさけの小窓ひきしより、
ああ吹く笛にみだれ音や、
みだりごころは、青波の
稚田の畔の根さかれて
夏照り走るぬるみ水、
世に許りがたき貴人の
御姫なる君を追ひぞする。
今は四方田の稻たわわ、
琥珀の玉をむすべるに、
ひめてはなたぬ我が思ひ、
ただわびしらの思寢の
涙とこそはむすぼほれ、
ああ玉苑のふかみ草
大き花咲きむとて
つたなき君様まねけるや。
追ひやらはれし野の鳥の
こよひ畑穗の蔭の戸に
八束穗守る身を忘れ、
小田刈月の秋中月、
君知りしより百夜ぞと
さまよひ來ぬるみ館の

木槿花咲く垣のもと、
灯かげ明るき高窓に
君が弾くなる想夫憐。
ああ鄙さびの小田屋守、
笛なげすてて、花つみて、
花をば千々に裂きすてて、
溝こえ、厚き垣をこえ、
君が庭には忍び入る。

（乙巳[illegible]月二十日）

凌霄花

鐘楼の柱まき上げて
あまれる蔓の幻と
流れて石の階の
苔に垂れたる夏の花、
凌霄花かがやかや。
花を被きて物思へば、
現ならなく、夢ならぬ
ただ曼殊の花の路、
君ほほゑめば霧かをり、
我もの云へば蕾咲く、
歩み音なき遠つ世の
苑生の中の逍遥の

眩ゆきいのち近づくよ。
身は村寺の鐘楼守、——
君近きしより世を忘れ、
孤児なれば事もなく
御寺に匿ひゆるされて、
語もなき身とて夢心地、
君が墓あるこの寺に、
時告げ、法の聲をつげ、
君に胸なる笑みつげて、
わかきいのちに鐘を撞く。——
君逝にたりと知るのみに、
かんばせよりも美くしき
み靈の我にやどれりと
人は知らねば、身を呼びて
うつけ心の啞とぞ
あざける事よ可笑しけれ。
あやめ鳥鳴く夏の晝
御寺まゐりの徒歩の路、
ひと日み供に許されて、
この石階の休らひや、
凌霄花二つ
摘みて、一つはわが襟に、
一つは君がみかむりの
かざしに添へてほほゑませ、

み姉と呼ぶを許りにける
その日、十六かたくなの
わが胸満す匂ひ潮、
おほ葩の、名は知らね、
映ゆき花船うかべしか。
さればこの花、この鐘楼、
我が魂の城と見て、
夏ひねもすの花まもり、
君が遺品の、香はのこる
上つ代ぶりの小忌衣、——
昔好みの君なれば
嘗ては御簾のかげ近き
衣桁にかけし、空薫の
風流もありし香のあとや、——
青草摺の白絹に
袖にかけたる紅の紐、
年の経ぬれば裾きれて
鶉衣となりにたれ、
君が遺品と思ほへば
稚わが身には玉袍と、
男姿にふた襲ね、
人のいふ語は知らねども、
胸なる君と語らふに、
のうぜんかつら夏の花

かがやかなるを、禮するを、
かの世この世の浮橋の
『影の園』なる玉の文字。
花を被きて、石に寢て、
君が身めぐる照る玉の
眩ゆきいのち招きつつ、
ああ招きつつ、迎へつつ、
夕つけくれば、朝くれば、
ほほゑみて撞く互鐘の
高き叫びよ、調和よ、——
その聲すでに君や我
ふたりの魂の船のせて
天の門にし入りぬれば、
人のいふなる放心者、
身は村寺の鐘樓守、
君に捧げし百生命の
この喜悅を人は知らずも。

(乙巳二月二十一日夜)

草苺

青草かをる丘の下、
小唄ながらに君過ぐる。
夏の日ざかり、野良がよひ、
駒の背にして君過ぐる。
君くると見てかくれける
丘の草間の夏苺、
日照りに蒸れて、青麻く、
草いきれする下かげに。
天の日うけて情ばみ
色ばみ燃えし紅の珠、——
鶉の床の丘の邊に
もとより鄙の草なれど、
ああ胸の火よ、紅の珠、——
とどろぎ心ひざまづき、
手觸れて見れば、うま汁に
あへなく指の染みぬるよ。
素足草刈る身は十五、
夏草しげる中なれば、
心の苺はかくれたれ、
くろ髮捲ける藍染の
白木綿君に見えざるや。
過ぎし祭の春の夜、
おぼろ夜深み、酒ほぎの
庭に、手とられ、袖とられ、
君に選られて、はづかしの
唄に盃さされける
ああその夜より、姿よき、
駒もち、田もち、家もちの
君が名にたど頬の熱る。
今君行くよ、丘の下、——
かがやく路を、若駒の
白毛ゆたかの乘樣や、——
聲したてねば、えも向かで
小唄ながらに君行くよ。
ああ草間の夏苺、
天の日うけて情ばみ
色にほみ燃えて、日もすがら
くちびる甘き幸待てど、
醜草なれば、君が園
枝瑠々し林檎の
欄子に盛られ、手にとられ、
君がみ唇に吸はるべき
木の實の幸をうらみがねつも。

(乙巳二月二十一日)

めしひの少女

『日は照るや。』聲は青空、
白鶴の遠きかが啼き、——
ひんがしの海をのぞめる
高殿の玉の階

白石の柱に凭りて、
かく問ひぬ、盲目の少女。
答ふらく、白銀づくり
うつくしき兜をぬぎて
ひざまづく若き武夫、
『さなり。日は今浪になれ。
あざやかの光の旋り、
丘を超え、夏の野をこえ、
今君よ、君が凭ります
白石の圓き柱の
上半ば、なびくみ髪の
あたりまで黄金に照りぬ。
やがて、その玉のみ面に
かがやきの夏のくちづけ、
又やがて、薔薇の苑生の
石彫の姿に似たる
み腰にか、い照り絡みて、
あまりぬる黄金の波は
我が面に名残を寄せむ。』
手をあげて、めしひの少女、
圓柱、そと撫りつつ、
さて云ひぬ、『げに、あたたかや。』
また云ひぬ、『海に帆ありや。
大空に雲の浮ぶや。』

武夫は、つと立ちあがり、
答ふらく、力ある聲、
『ああさなり。海に帆の影、——
いづれそも、遠く隔てて、
君と我がなからひの如、
相思ふとつくに人の
文使乗する船なれ、
紅の帆をばあげたり。——
大空に雲はうかばず、
今日もまた、熱き一日。——
君とこそ薔薇の下蔭
いと甘き風に醉ふべき
天地の幸福者の
我にかも厚き恵みや、
大日影かくも照るらし。』
少女云ふ、『ああさはあれど、
君はただ見ゆるこそ見め。
この胸の燃ゆる日輪、
いのちをも焼きほろぼすと
ひた燃えに燃ゆる日輪、
み眼あれば、見ゆるを見れば、
えこそ見め、この日輪を。』
武夫はいらへもせずに、
寄り添ひて強き吻やき、

『君もまた、えこそ見め、我が
雙眸の中にかくるる
たましひの、君にと燃ゆる
みち足らふ日のかがやきを。』
かく云ひて、少女を抱き、
たましひをそのたましひに、
唇をその唇に、
(生死のこの酔心地)
もえもゆる戀の接吻
接吻ぞ、あおげに二人、
この地に戀するものの、
胸ふかき見えぬ日輪
相見ては、心休むる
唯一の瞳なりけれ。——
日はすでに高にのぼりて、
かき抱く二人、かがやく
白銀の兜、はたまた、
白石の圓き柱や、
また、白き玉の階、
おほまかに、なべての上に
黄金なす光さし添へ、
宮殿も戀の高殿、
天地も戀の天地、
勝ちほこる胸の歡喜は

光なす凱歌なれば、
丘をこえ、青野をこえて、
ひんがしの海の上まで
まろらかに溢れわたりぬ。

（乙巳三月十八日）

来し方よ、破歌車
網かけて、息もたづ／＼、
過ぎにしか、こごしき坂を
あたらしきいのちの花の
大苑の春を見むとて。

《この集のをはりに》

詩はさびし木の精ひそむ山彦のけざむさ
添へて聲かへすごと
身をめぐる愛のひかりに寥しみの影そひ
てくる歌の愁や
鑄し鐘の音に萬づ代のちからある歡喜と
しも我が戀成りぬ
闇に馳せて素琴ひきゆく星人と調かなし
うかりがね渡る

（明治三十六年十二月「明星」所載）

まどろめば珠のやうなる句はあまた胸に
蕾みぬみ手を枕に
青蕾は音して落ちぬほととぎす聴くと立
つなる二人の影に
薄月に立つをよろこぶ人と人饒舌なれば
鳥ききそれぬ
宵闇や鳥まつ庭の燈籠に灯入れむ月のほ
のめくまでを
一瞬も惜しと思ひ思ふ日のあらぬ無聊に
君うらみける
夜の鑰を立ちてかぞへぬほととぎす聴か
で入りける戸の入口に
中津川や月に河鹿の啼く夜なり涼風追ひ
ぬ夢見る人と
夏の月は窓をすべりて盗むごと人の寝顔
に口づけにける
この泉汲めば緑の古瓶の我にしよろし
百合咲く苑は
わが愁は春くる園の花草の雪にも似たり
雪消すらしも

（明治三十八年七月「明星」所載）

あこがれ以後

——〔第二集〕——

第二集の初めに。

明治三十六年十一月中旬、予初めて數篇の十四行詩を澁民の禪房にて作りてより、匆々として茲に四年七ケ月を經たり。當時十八歳の予は今二十三歳となりぬ。最初の一ケ年は美しき生活なりき。純粹なる生活なりき。

三十八年三月十八日に至るまでの作凡そ八十篇、うち七十六篇を輯めて、予が第一詩集『あこがれ』成りき。卷頭一詩を題せられたる上田敏氏は今遠く南歐の美術國に在り。跋文を寄せられたる與謝野氏、猶千駄ケ谷にあれども、其風容おのづから多少の老を見る。予自身にいたりては、其心境、其境遇、共に全く當時の予に非ず。書肆小田島、其行く處を知る者なし。獨り、かの集を獻じたる尾崎行雄氏、今猶東京市長たり、故郷の山河亦依然として舊容を變へざらむ。

『あこがれ』以後の作約四十篇あり。而も眞に多少の新しき興會を感じて作れるもの、前後三回に過ぎず。唯、予自身に於て聊か當時を追想するの資料とすべきのみ。昨年五月、函館に入りて得たる雜詩五篇に至りては、漫然として漂泊の愁を敍べたるにすぎずと雖ども、又、予が心境の漸く變り來れるを示すものなきに非ず。

函館を去りてより、予の詩を思ふの日漸く稀なり。隨つて一篇の得る處なし。唯、時に騷然たる新聞社樓上にありて四五の短歌に一時の興をやれるのみ。

最近一ケ年間に於ける予の生活は、荒涼たる北海の風物を背景にして、凄慘を極めたる白兵戰場になしたる舞踏——と云ふを得べし。四月下旬、予は其恐るべき演舞場を去りて、海路より三度都門に客となりぬ。

予が心は今、月光魂を溶す詩歌の故郷を旅立ちて、白日炎々たる自由の國土——散文の領域に走り去らむとす。然も、稀に異樣なる興に捉へられて、詩を書かむと欲する事なきに非ず。以下に記し置かむとするもの乃ちそれなり。これ眞の詩なりや否や。予之を知らず。唯、予が現時の心境に於て、喪心の求めむとする聲調は正に恁くの如きものなるを信ぜむと欲す。

四十一年五月下旬

本郷菊坂町にて　石川啄木

いざ歌へ、絕間なき戰ひに
疲れはてゝ、節々の痛む時、
いと苦き悲みの迫る時、
汝が子の死ぬばかり病める時、
母に似し物乞ひを見たる時、
汝が戀につくづくと倦める時、
物いはぬ空を見て、
いざ歌へ、その時ばかり、
あはれ、我が餓ゑたる者よ。

花ちる日

『あこがれ』以後、三十八年三月より三十九年十一月にいたる間に作る所合せて二十八篇、うちより二十四篇を抜き一當時を忍ぶのたつきとす。

琴をひけ

沈の香のそよろぎに
わが魂はあくがれぬ。
二人靜の初夏や、
はしけやし黒髪よ、
琴をひけ、沈の香に。

たをやかにうつむくか、
沈の香はゆらぐなり。
手ふれでは鳴るものか、
わが胸も君ふれて
鳴りにしを、琴をひけ。

水無月の青日和、
庭の樹ぞみづみづし。
青海は庭石に、
君が手は夏の譜に、
花あやめかざろひぬ。

歌ひくき爪彈や、
沈の香はそよろぎぬ。
はしけやし黒髪も
そよろぎぬ、風ありて
一室は薫じたり。

（三十八年六月十日盛岡帷子小路にて）

佛頭光

ここは生命の森か、さは、
秀樹の枝の葉の色も
神の息をや染めぬらむ。
幾時や經し、幾日經し、
幻心さまよひて
ふとしもここに入りにたる。

見れば年古る樹々は皆、
古き記憶の底にゐて
呼びいで難き名の如く、
なつかしくして、穉き日
過ぎし事ある故郷の
古道に似ても目は走る。

鳥はいのちの葉の蔭に
妙音の譜を奏でたり。
黒ずむまでに光る葉は、
ホメロスが世の曙に
吹きしままなる獰猛き
風に久遠をはためきぬ。

森を横ぎる川ありて、
すぎゆく我の影をのせ、
涯をも知らに流れ行く。
こは朝なりや、夕なりや、
はたいつの世にや。――我はただ
わが足にこそ歩みたる。

勇みて輕き足音に、
蛇、這へる羽根蟲も
木の根の穴に隱れたり。
ふとしも見れば、永劫の
『わかれ』を刻む石碑に
ここは道分――森の辻。

一つの道は、灰白き
鋪石錆びて坦かに、――
鐘こそ響け、――あはれ、こは
平和の郷の薬の戸に
導き入れり。――人の性
これに迷へる子もありや。

我はためらふこともなく
ただましぐらに進みける。
ゆき、また、ゆけば漸くに、
木の間を少し空見えて、
香の木の實よ、たわわにも
枝に滿ちぬる黃金色。

疲れを知らぬこの旅の
幾時や經し、幾日經し。
猶しもゆけば、葉がくりに
ものの聲あり。――覗へば、
神のやうなる幾人の
人の聲して我招ぐ。

いのちの森に迷ひ入り、
先立ちて來し人ならむ。

『黃金木の實のしたたりの
これは不老の泉ぞ』と
指さす葉蔭、ふと見れば、
常春の香よ、波に鳴る。

諸手を掬めば、水の面、
こはそもいかに、若き日に
ふたたび逢へる我が影の
瞳に泉ぞ宿りたれ。
また指ざされ、手を翳し、
ふりさけ見るや西の空。――

空の半ばを金色の
佛頭光ぞ包みたる。
眩ゆさ、――あはれ、光明の
海の返照――尊とさに、
これ莊嚴の隨一と
歸依の掌底合せぬる。

（三十八年八月二十八日 靜岡市加賀野磧町にて）

落日

爛々と火の如き日は海に落ちむとす。
大空はおしなべて黃金の光なり。
海原も黃金の焔にぞ燬かれたる。
轟き鳴み、砂を吞み、戰の詩を刻む
荒磯の砂丘に立ちつくし、淚垂る。
落つる日は我を、また、我は日を見つめたり。

一日の短きも、弛みなきかがやきに
永遠に動かざる一日となれりけり。
落つる日は何ぞまた明日の日を思はむや。

劫初より九億日、『今』こそは權威なれ。
いやはてのひと時も生々とかがやきて
落つる日の雄力は『永遠』を則れり。

荒獅子を射むとせば、稻妻る日をぞ先づ
十束矢に貫けよかし。『今』こそは『永遠』の
瞳なれ、閃々と前に落ち、後に去る。

いやはてのひと時も、輝けば、空の涯、
海の底、黃金に照り入れり。――こを思へば、
人間は小なりき、時にまた、大なりき。

淚のみいと熱く垂ると見て、日あぐれば、
日は既に落ち去んぬ。――我も亦人なりき。

砂丘に立ちつくし、眠るべき暇なし。

（三十八年八月二十九日
盛岡市加賀野磧町にて）

東京

かくやくの夏の日は、今
子午線の上にかかれり。

煙突の鐵の林や、煙皆、煤黑き手に
何をかも攫むとすらむ、ただ直に天をぞ射せ
る。

百千網巷々に空車行く音もなく
あはれ、今、都大路に、大眞夏光動かぬ
寂寞よ、霜夜の如く、百萬の心を壓せり。

千萬の甍今日こそ色もなく打鎭りぬ。
紙の片白き千ひらを撒きて行く通魔ありと、
家々の門や又窓、黑布に皆とざされぬ。

百千網都大路に人の影曉星の如
いと稀に。——かくて、骨泣く寂滅の死の
都、見よ。

かくやくの夏の日は、今
子午線の上にかかれり。

何方ゆ流れ來ぬるや、黑星よ、眞北の空に
飛ぶを見ぬ。やがて大路の北の涯、天路に聳
る
層樓の屋根にとまれり。啞啞として一聲、
——これよ
凶鳥の不淨の鳥——骨あさる鳥なり、はた
や、
死の空にさまよひ叫ぶ怨恨の毒嘴の鳥。

鳥啼きぬ、二度。——いかに、其聲の猶終ら
ぬに、
何方ゆ現れ來しや、幾尺の白髮かき垂れ、
いな光る鋼捧げし童顔の翁あり。ああ、
黑長裳靜かに曳くや、寂寞の戸に反響して、
沓の音全都に響き、唯一人大路を練れり。

有りとある磁石の針は
子午線の眞北を射せり。

（三十八年八月三十日
盛岡市加賀野磧町にて）

此詩は前二篇と共に雜誌『小天地』第一號に載せたるものなり。而して、其發刊の日乃ち同年九月五日、東京には對露講和の屈辱を憤って國民大會日比谷園頭に開かれ、其夜全都の交番を焼き、又内相官邸を破壞し、數十臺の電車亦難を蒙りき。

深みの心

西風ささとおとして
秋雨すぐる急ぎに、
黄草の丘の凹み
小沼寂き夕さびれ、
ささ音にかなしき涙顔や、
曇りぬ、深みの眞鏡。

雨の洗ひし廓寥、
白雲灰のけはひに、
やぶれの蘆の渚
古水の泥深み、
靜かに宿しぬ、天ゆく雲、
あはれさまたなき思ひを。

ふとまた雲の亂れの
足竝淀む夕方、
間を洩れて、花の
黄金よ、あ、ひたひたと
水面に落ちくる入相日に
明りぬ、深みの底まで。

冷に見ゆらむ華やぎ、
それにさへ、小野の隣りの
沼水の胸に、彌生
花萌く日その春の
温みあるらむ、——祝の潜音、
風吹き、黄草もかをりぬ。

黄草の丘を繞らす
凹みの古沼、深みの
心に、やがて、空ゆ、
啼きわたる白鳥の
おぼろの影あり、ゆらに降りて、
新月さすなる夜は來ぬ。

（三十八年十二月二十日）

たはぶれ

答へもなきに、寄せては
氷れる岩に碎けて
帶とまくたる廣海、
聲白き波々の
穗がしら枯藻をかざすさまも
寒けき荒磯の小犬よ。

岩間の砂の冷たさ、
散らばふ枯藻ふみつつ、
小犬よ、高く吠えぬ、
おごそかに絕間なく
大洋廣みの胸をしぼる
叫びにひとりし答へて。

吠えては、波のさしひき、
冬の日午後の日ざしに
しぶきそのまま凍りて、
きららにも珠散らす
渚邊、波の穗追ひつ、追はれ、
足痕消されつ、印しつ。

津輕の瀨戶の大船
函館がよひ行く帆の
灰の帆足を遲み、
聲かなし海の鳥
翔さへ凍りぬ。——それも見じな、
波追ふ小犬の寒けさ。

出づる日迎へ走せつつ
入日を追ひて走せつつ、
この世さびしき渚、
我も亦人なれば、
興じて見にけれ、波と犬の
たはぶれ、人なき荒磯邊。

（三十八年十二月四日）

かりがね

わが立つ沼の汀に
落ち、また、消えし影あり。
月照る夜半のしぬびに、
星人がしろがねの
箜篌をし奏でて空を行くと、
影のみ見せしや、かりがね。

（三十八年十二月五日）

雨にぬれて

梅の老樹に雨降り、
雨に濡れて、
庭石冷ぞまされ、
おち葉を載せたり。
かくして秋來ぬ、限りなさの
かなしみ石にぞ凭りぬる。

愁ひて泣くに、涙の
雨に濡れて、
君に凭るなる我や、
猶こそ胸の
ときめく温み、石に散れる
落葉にまさると知る日や。

（三十八年十二月五日）

鹿角の國を懷ふの歌

青垣山を繞らせる
天さかる鹿角の國を忍ぶれば、
涙し流る。——今も猶、錦木塚の
大公孫樹、月よき夜は夜な夜なに、
夏も黄金の葉とかはり、代々に傳へて
新らしき戀の譚の笈の音の、
風吹きゆけば、吹きくれば、枝ゆ靜かに、
月の光の白絲の細布をこそ
織ると聞け。
十和田の嶽の古澤の
鬼神める峽の深みに、古ゆ、
こもれる雲の滴りの、足あとつかぬ
岩苔の緑を吸ひて流れ來し
淺瀬わけ路、小男鹿の妻戀ひ鳴くに、
人怖ぢぬ鹿角の國を忍ぶれば、
涙し流る。——その昔、代々に朽ちせぬ
碑や、はた白石の廻廊や、
玉垣、壁畫、銅の獅子、また物語、
のこされど、日月星を生むが如、
人の國なるきらら星——藝術の燭の
生みの親、「愛」こそ先づは若兒らの
相思の眉に照り出でて花とし咲くや、
錦木も色をぞ添へし春の世に、
角笛吹きならす獵夫らが弓の弦緒の
鳴の音も、枝にならべる彩雉子の
番と見れば鳴らざりし昔おもへば、
涙し流る。
神の使の翅かろき
蜻蛉子が告げの泉の淀に
流れはつきぬ米白の水にうるほふ
高草の鹿角の國を忍ぶれば
涙し流る、——その川に潔心の
曙浮め、朝な夕なに研かれて、
み目も清しき色白の鹿角少女が
夕づとめ、——時にま白き雲纏ふ
逆鉾杉の神寂びし根にむら繁る
大木の中は神住む古御堂、
壁の繪綺の大牛も浮きでし見ゆる
日暮時、樹がくれ沈む秋の日の
黄に曳く裾裳みだれ這ふ石階ふみて、
靜々と御供の神米捧げつつ、
伏目にのぼる麻衣が藁束ねせし
黑髮に神代の水の香こそすれ。
かへしい足の小走りに、杉の陰路を
すたすたと、露に濡れたる眞素足に
行きこそ通へ、——はららかす
袖に葉洩れの日を染めて、
神の使の蜻蛉子がいのちの水の
源を告げに來る日をさながらに、——
青駒かへる背が門へ。
その敬虔さ、美しさ、米白川と
もろともに流れ絶えせぬ風流の
錦木立てし若兒らが色にも出る
心映、神代のままを目のあたり
見ると思へば、涙し流る

（三十八年十二月五日夜）

みちのくの神無月

今、みちのくの神無月、花めき散らふ
裳のみだれ、かたむさかかる日の鑄の
韓あからさま透きいれる

漆の木原。——夢白の裾長らかに
枝づたひ幻にひく秋姫が、
わかれ心に、朽箜篌の弛み緒ならす
浮鳴りのそぞ音に走る空名殘、
それとし聞くは、金蝶の
籠ばなれせし千萬羽、——
霜の絹眼の黄染葉の日にひらめきて、
秋の舞、散りに散りしく葉ずれ言。
今、野がへりの田つくりは、
かなた、下田の杉寺の山の上そそり
かたむける五輪、入日を支へ立つ
古塔の尖屋根、
九輪に老いて朽ち落ちし破れのさまも
そのままに影を投げたる廣穂田の、
ことし凶年、みのらねば、穂波も淺く、
さながらに草原めきし畔を指し、
「みのらで枯れし稲よりは、閨の戸までも
來てわめく税吏等が首をこそ
刈るべけれとて鎌とげ。」と
しはがれ聲の高らかに、藁帶したる
老腰の二人、ここをば過ぎゆきぬ。
見れば五輪の空高く
ひらめき出でし九つの晝の星かと
目もはるに輪形にうかぶ白鳩の、

天座やうやうかたむくや、
たちまち落つる天降り矢の、入日に映えて
しろがね箭、つづきに落つる幾筋や、
今、杉寺の廣庭に落葉を焚いて、
老比丘が無量壽品を口ずさむ
褪赭の色の額や射む。
ここ木原路、たえ間なく秋の舞する
黄染葉の、そよ、金摺りの小扇を
ひらくと見しは、尾につづく後の丘の
高公孫樹、ちりのみだれの手狂ひや、
五片六片十二十片、風の煽りに
浮立ちて、蒼の空吹く巴舞ひ、
はららぎ降りて、めでたさの御神樂や、
木原黄殿の夕崩、
今、神無月、舞納。
迥かに、聳る莊嚴の神色迫る
五輪塔、その背がくれにかくろひて、
消えのまぎは香沈む頭光のさびの
透冠、紐とくひまもあらばこそ、
やれにかけたる入相目、
花めき散らひ灼染めしうすき寒げの
裾長の黄紗を高くひきからげ、
天梯遠ににげのびのみだれのさまに、
薄明り、ひそまりかへる漆原、

霜も降るべき冷やぎや。
ふとしも起る人げはひ、近づきまさる
足音にささら鳴りする散葉路、——
さは、金蝶の千萬羽、石ならなくに
ふみしかれ、羽袖あはせて熄らせし
終焉の夢のにじられに
音にたつなげき鳴くやらむ。——
木の間すかせば、影二つ、旅づかれせし
足重の、蕉人めきし扮裝や、
提琴抱ける丈高の、聲の濁りも
力なく、「あはれ八里のむだあるき、つかれし
や。」とぞ
都訛りにふりかへる、五つの紋の
古袷、肩も寒けの三十男。
「否。」と答へて、女聲、
笑みもするらむ嬌めきに、木がくれ見ゆる
村を指し、「君にし添へば、ひもじさも
忘れて、唄もくりかへし、宿さへあらば、
蝦夷が島そこにも行かむ、とは思へ。
ただこの夜さの宿りのみ覺束なし。」と、
みめこそ見えね、額白の、二十歳か、
いづれ、門毎に扇をかざす唄少女、
桃色縫せの長襦袢、褄ばさみせし
縞袴、今悄悄とおちにたれ。

行き過ぎにして、男、また、
琴絃を搔くすさび言、
『安宿の吊洋燈にもかぎはあれ、
とまるすべなき法界屋かな。』

いつしか、見れば、木原路、
散りを急ぎの葉時雨の降る音もたえて
亥中月まつ宵闇や、
遠き羽音は、公孫樹立つ丘のうしろの
麓の沼にかりがね群れて落ちぬらむ。

かなた五輪のいただきに
秋ゆく空の一つ灯のみちしるべとぞ
うるみたる金星青く瞬いて、
今みちのくの神無月、
石の泣く音もききぬべき夜とこそ成りぬ。

（三十八年十二月六日夜――八日夜）

幕びらき

雪ふりぬ。――ところどころに群繁る
古き牧野の白楊の木立の中の
され果てし散葉のささ音しめやかに
白むと見れば、枯枝に花さへ咲きて。

雪ふりぬ。――廣野黄草のあら床に
布きはえわたる白妙の玉の砂は、
誰がために音無輦練りてゆく
御幸大路をつくるらむ、いと爽かに。

雪ふりぬ。――遠近に見る山や、はた
森、村、なべて隱ろひて、人立騷ぐ
大神の劇詩の中の一幕の
今舞ひ了へし靜けさは太古のさまに。

雪ふりぬ、ひと日を。――かくて日の夕べ、
晴れにしあとはおしなべて音もこそなけれ。
落つる日の黄金を孕む横雲の
一沫、あはれ、動ぎなき涅槃の姿。

ふと見れば、雲の眞下に走せちがふ
うなゐ幾人、神の兒の面影なれや、
投げかはす雪の球皆日に映えて、
ああ戰ひの幕びらき、――その雄たけびに。

（三十九年一月十六日）

花ちる日

ああ花散る日、古の道こそひらけ、
南より北に一すぢ、故郷へ。
並木の櫻年老いに、花も一重の
薄雪や、降りこそかかれ、みちもせに、
今春の日はまろらかに、音無輦、
ここ過ぐれ、――蜃氣樓する北の海の
霞の帆ひく貝船へ。

駒の蹄のあと深くみちに彫られし
百年の長き沈默、ものうけに
額をもたげて息づくや、山鶯も
花かげの休らひ、音をぞ潛めつる。

ああ花散る日、かかる日を、丹塗の槍柄
立てなめて、國歸りする途すがら、
奧大名の行列の騎馬の侍、
華やかに跑をゆるめて練りにけむ。

また、喜びに、悲しみに、おのがじしなる
足どりの百千の人や過ぎにけむ。
はた忍ばるれ、幾年の昔、我が世の
春若き戰の門出、かかる日に、
脈は希望の波高き生命の鼓、
ものとなき勇心に歌うたひ、
この道をこそ花踏みて南せし日を。

ああ花散る日、うらぶれて、また歸り來し
我なれや。――綻び多き袖袂、
つくろふとてか降りかかる花の薄雪、
みちもせに埋めにけりな。いたづらに

散り、また散りぬ、かくながら、春はまた來
ぬ。
人の世のいのちの花の散りゆけば、
殘るはただに蒼白き追憶の影、
冷えわたる胸は涙に朽ちぞゆく。
ああ花散る日、うらぶれの
つかれににぶき眼あぐれば、
朧ろに霞む春の空、今暮れかかる
北遠く鐘こそ響け、幽かにも
ああなつかしき黄鐘の調べよ、あはれ、
故郷の昔ながらの人相や、
花ちりしきてほの白き
道ひとすぢの夕まぐれ。
（三十九年三月十九―二十日　於澁民村）

吹角

みちのくの谷の若人、牧の子は
若葉衣の夜心に、
赤葉の芽ぐみ物煙る五月の丘の
柏木立をたもとほり、
落ちゆく月を背に負ひて、
ひと夜明しぬ。
東白の空のほのめき――
天の扉の眞白き礎ゆ湧く水の
いとすがすがし。――
ひたひたと木蔭地に寄せて、
足もとの朝草小露明らみぬ。
風はも涼し。
みちのくの牧の若人露ふみて
もとほり心角吹けば、
吹き、また吹けば、
渓川の石津瀬はしる水音も、
あはれ、いのちの小鼓の鳴の遠音と
ひびき寄す。
ああ靜心なし。
丘のつづきの草の上に
白き光のまろぶかと
ふとしも動く物の影。――
凹みの埒の中に寝て、
心うゑたる曉の夢よりさめし
小羊の群は、靜かにひびき來る
角の遠音にあくがれて、
埒こえ、草をふみしだき、直に走りぬ。
曉の聲する方の丘の邊に。――
ああ歡びの朝の舞、
新乳の色の衣して、若き羊は
角ふく人の角を繞り、
すずしき風に啼交し、また小躍りぬ。
あはれ、いのちの高丘に
誰ぞ角吹かば、
我も亦この世の埒をとびこえて、
野ゆき、川ゆき、森をゆき、
かの山越えて、海越えて、
行かましものと、
みちのくの谷の若人、いやさらに
角吹き吹きて、靜心なし。
（三十九年八月十一日　澁民村）

公孫樹

秋風死ねる夕べの
入日の映のひと時、
ものみな息をひそめて、
さびしさ深く流る。
心のうるみ切なき
ひと時、あはれ、仰ぐは
黄金の秋の雲をし
まとへる丘の公孫樹。
光榮の色よ、などさは

深くも默し立てるや。
さながら遠き昔の
聖の墓とばかりに。

ましろき鴿のひとむれ、
天の羽々矢と降り來て、
黄金の雲に入りぬる。
あはれ、何にか儔へむ。

樹の下、馬を曳く子は、
たはれに小さき足もて、
幹をしふみぬ。ああこれ
はたまた何に似るらむ。

ましろき鴿のひとむれ、
羽ばたき飛びぬ。黄金の
雲の葉、あはれ、法悪の
雨とし散りぞ亂るる。

今、日ぞ落つれ、夜ぞ來れ、――
眞夜中時雨また來め。――
公孫樹よ、明日の裸身、
我はた何と歎はむ。

（三十九年十一月十七日夜）
於澁民村

泣くよりも

八篇
四十一年五月二十四日
本郷菊坂町にて作れる

窓

『ましろき窓のその下を過ぎし事あり、
ゆくりなく。』かくいひ出でぬ、客人は。
火影明るき卓による若き人々、
おのがじし珍らかの戀がたりしたる。

『ましろき窓のその下を過ぎし事あり、
ゆくりなく。ああ、』と腕くみ、『されど、そは、
何處の國か、いつの日の、朝か、夕か、
はた夜か、ふと今我は忘れつ。』と。

『そは椰子の實のおのづから熟れて落ちくる
下か。』『また、一月かげ冴に葡萄葉の
ささやく夜か。』と云ひ囃し、集へる人は
眉あげぬ。『琴のしらべや洩れぬらむ。』

『ましろき窓を、ゆくりなく。――さなり、』
と叫び、
客人は目をこそつぶれ。『そは夏の
夏の日なりき。日ざかりの並木の葉かげ
そよとだに動かぬ市の町はづれ。』

『水色衣の人か。』とぞ、女は立ちて
手をあげぬ。『あらず、亂れし髪ながき
狂へる婦、ひややかに白き歯見せて
笑ひにき。瘋癲院の白き窓。』

何故に

『その人はいかにかしたる。今も猶
君は戀ふるや。』かくいひて、
我が物語聞きゐたる
少女は髪をかき上げぬ。

『否。』と答へて、ゆるやかに
我は煙草の煙吹く。
『一月ばかり過ぎて後、我その人を
見捨てにき。――あはれ七年また逢はず。』

『ああ、何故に、君よ、さは。』
『髪白かりし伯母君が

ひきぞ出でたる洋琴の
戀の思出ききし故。』

白き顔

雲灰いろにちぎれ飛び、
枝を鳴らしてごうと吹く十月末の西の風、
幾百本の櫻樹の葉は一時に亂れ散る。
その葉の雨の彼方より
彼方へ、——あはれ、唯一日
ちらと此方に顏むけて、
いと足早に過ぎゆきし少女子ありき。
晩秋の上野の森の四年前、
人影もなき暮方の
落葉の雨の木隱れに、
ああ、唯一日、白き顏。

泣くよりも

その人に、夢の中にて
いつの年、いつの夜としもわかなくに、
我は逢ひにき。
今は早や死にてやあらむ。

したたかに黑き油を髮にぬり、
病みて死ぬ白き兎の毛の如も
厚き白粉、
血の色の紅をふくみて、
その人は、少女に交り、みだらなる
歌の數々、晴れやかに三味かきならし、
火の如つよく舌をやく酒を呷りぬ、
水の如。

居ならぶは二十歳許りの
酒のまぬ男らなりき。

『何故に、さは歌ふや。』と我問ひぬ、
夢の中にて。
その人は答へにけらく、
醉ひしれし赤き笑ひに、
『泣くよりも。』

嫂

いと長き旅より、我は
なつかしき故家にかへりぬ。
その夕、わが嫂は
子らつどへ、頭撫でつつ、聞かせにき、
馬の話を。
さて曰く、『君何故に
八年の長き間をおのが家に歸らざりしや。
何故に旅に行きしや。』
面染めて我は答へぬ、『その昔、
君はせざりき、馬の話を。』

殺意

『何なれば、汝は敢て
かの人を慘殺したる。』
判官はかくも問ひつつ、
おごそかに立ちぞ上れり。

あをざめし我が罪人は、
『赤インキ、呀。』とぞ叫びて、
膝まづき、打わななきぬ。
『かの君の白き裳裾に
赤インキさと散りし時。』

辯疏

『われなど二君を厭はむ。

さなり、我、などて厭はむ。」
『さらば、など、かの木の下を
かの人と手とりゆきしや。』
かくぞ君われを詰れる。

「さらばとか。など、唯一つ、
聞き給へ、我が辯疏を。
われは唯初めて君を見たる日の
その心もて口づけぬ、かの少女子に。
我つひに二心なし。』

小さき墓

彼は今歸り來りぬ、ふるさとの
古木の栗の下かげに。——
そが下に稚兒こそ眠れ、二十とせを
父が手向の花も見ず。

ああ、二十とせを春くれば、葉ぞ且つ芽ぐみ、
鳥なきぬ、小さき墓のその上に。
また、二十とせを秋くれば、葉ぞ散りしきぬ、
實も落ちぬ、雪も降りぬその上に。

彼は今歸り來りぬ、いと遠き
旅より。——彼は海を見き、山を見き、また、
古の跡と、來ん世の市を見き。
汝が見も知らぬ妹は人に嫁ぎぬ。

されど、今、彼は語らず、外國の
港々の物語、また眉若き
戀人と手とりかはして椰子の樹の
下かげ歩む妹のその幸ひを。

しかはあれ、汝も亦問ふな。稚兒よ、ただ、
その終焉の日の笑に彼を迎へよ。
『汝が父は汝を羨む。』と唯一語。
つめたき碑に口づけて彼は呟やく。

うつくしき敵のなかに一人ゐし若きがほ
どの誇りをおもふ
日もすがら經綸ふ如く日もすがら同じこ
と思ひ漸く倦みぬ
煙草の煙りゆるやかに這ふ天井を眺むる
ことが癖のやうになりぬ
うら悲しき夜の物の音洩れくるを拾ふが
如くさまよひゆきぬ
既にして靜かに思ひ出づる日となりき七
月ばかり經しのち
一言に足るべかりしを戀ふればやまはり
くどくも言ひつつありき

（明治四十二年二月『スバル』所載）

心の姿の研究

夏の街の恐怖

燒けつくやうな夏の日の下に
おびえてぎらつく軌條の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて、
肥つた三歳ばかりの男の兒が
ちよこちよこと電車線路へ歩いて行く。

八百屋の店には萎えた野菜。
病院の窓の窓掛は垂れて動かず。
閉された幼稚園の鐵の門の下には
耳の長い白犬が寢そべり、
すべて、限りもない明るさの中に
どこともなく、芥子の花が死落ち、
生木の棺に裂罅の入る夏の空氣のなやまし
さ。

病身の氷屋の女房が岡持を持ち、
骨折れた蝙蝠傘をさしかけて門を出れば、
横町の下宿から出て進み來る、
夏の恐怖に物も言はぬ脚氣患者の葬りの
列。
それを見て辻の巡査は出かかつた欠伸嚙みし
め、
白犬は思ふさまのびをして、
塵溜の蔭に行く。

燒けつくやうな夏の日の下に
おびえてぎらつく軌條の心。
母親の居睡りの膝から辷り下りて、
肥つた三歳ばかりの男の兒が
ちよこちよこと電車線路へ歩いて行く。

起きるな

西日をうけて熱くなつた
埃だらけの窓の硝子よりも
まだ味氣ない生命がある。

正體もなく考へに疲れきつて、
汗を流し、いびきをかいて晝寢してゐる
まだ若い男の口からは黄色い歯が見え、
硝子越しの夏の日が毛脛を照し、
その上に蚤が這ひあがる。

起きるな、起きるな、日の暮れるまで。
そなたの一生に涼しい靜かな夕ぐれの來るま
で。

何處かで艶いた女の笑ひ聲。

事ありげな春の夕暮

遠い國には戰があり……
海には難破船の上の酒宴……

質屋の店には蒼ざめた女が立ち
燈光にそむいてはなをかむ。
其處を出て來れば、路次の口に
情夫の背を打つ背低い女——
うす暗がりに財布を出す。
何か事ありげな——
春の夕暮の町を壓する

重く淀んだ空氣の不安。
仕事の手につかぬ一日が暮れて、
何に疲れたとも知れぬ疲れがある。

遠い國には澤山の人が死に・・・・
また政廳に押寄せる女壯士のさけび聲・・・・
海には信天翁の疫病・・・

あゝ、大工の家では洋燈が落ち、
大工の妻が跳び上る。

柳の葉

電車の窓から入つて來て、
膝にとまつた柳の葉——
此處にも凋落がある。
然り。この女も
定まつた路を歩いて來たのだ——
旅鞄を膝に載せて、
やつれた、悲しげな、しかし艶かしい、
居睡を始める隣席の女、
お前はこれから何處へ行く？

拳

おのれより富める友に憐まれて、
或はおのれより強い友に嘲られて、
くわつと怒つて拳を振上げた時、
怒らない心が、
罪人のやうにおとなしく、
その怒つた心の片隅に
目をパチパチして蹲つてゐるのを見附けた——
たよりなさ。

あゝ、そのたよりなさ。
やり場にこまる拳をもて、
お前は
誰を打つか。
友をか、おのれをか、
それとも又罪のない傍らの柱をか。

何となく顏がさもしき邦人の首府の大空を秋の風吹く
つね日頃好みて言ひし革命の語をつつしみて秋に入れりけり
今思へばげに彼もまた秋水の一味なりしと知るふしもあり
この世よりのがれむと思ふ企てに遊蕩の名を與へられしかな
秋の風我等明治の青年の危機をかなしむ顏撫でて吹く
時代閉塞の現狀を奈何にせむ秋に入りてことに斯く思ふかな
地圖の上朝鮮國にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聽く
明治四十三年の秋わが心ことに眞面目になりて悲しも

（明治四十三年十一月「創作」所載の中より）

呼子と口笛

はてしなき議論の後

われらの且つ讀み、且つ議論を鬪はすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、
五十年前の露西亞の青年に劣らず。
われらは何を爲すべきかを議論す。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるものの何なるかを知る、
また、民衆の求むるものの何なるかを知る、
しかして、我等の何を爲すべきかを知る。
實に五十年前の露西亞の青年よりも多く知れり。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NAIÓD!' と叫び出づるものなし。

此處にあつまれる者は皆青年なり、
常に世に新らしきものを作り出だす青年なり。
われらは老人の早く死に、しかしてわれらの遂に勝つべきを知る。
見よ、われらの眼の輝けるを、またその議論の激しきを。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

ああ、蠟燭はすでに三度も取りかへられ、
飲料の茶碗には小さき羽蟲の死骸浮び、
若き婦人の熱心に變りはなけれど、
その眼には、はてしなき議論の後の疲れあり。
されど、なほ、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NARÓD!' と叫び出づるものなし。

(1911,6,15. TOKYO.)

ココアのひと匙

われは知る、テロリストの
かなしき心を——
言葉とおこなひとを分ちがたき
ただひとつの心を、
奪はれたる言葉のかはりに
おこなひをもて語らむとする心を、
われとわがからだを敵に擲げつくる心を——
しかして、そは眞面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の
冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌觸りに、
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

(1911,6,15. TOKYO.)

激論

われはかの夜の激論を忘るること能はず、

新しき社會に於ける「權力」の處置に就きて、
はしなくも、同志の一人なる若き經濟學者Nと
われとの間に惹き起されたる激論を、
かの五時間に亙れる激論を。

「君の言ふ所は徹頭徹尾煽動家の言なり。」
かれは遂にかく言ひ放ちき。
その聲はさながら咆ゆるごとくなりき。
若しその間に卓子のなかりせば、
かれの手は恐らくわが頭を撃ちたるならむ。
われはその淺黑き、大いなる顏の
男らしき怒りに漲れるを見たり。

五月の夜はすでに一時なりき。
或る一人の立ちて窓を明けたるとき、
Nとわれとの間なる蠟燭の火は幾度か搖れたり。
病みあがりの、しかして快く熱したるわが頰に、
雨をふくめる夜風の爽かなりしかな。

さてわれは、また、かの夜の、
われらの會合に常にただ一人の婦人なる
Kのしなやかなる手の指環を忘るること能はず。
ほつれ毛をかき上ぐるとき、
また、蠟燭の心を截るとき、
そは幾度かわが眼の前に光りたり。
しかして、そは實にNの贈れる約婚のしるしなりき。

されど、かの夜のわれらの議論に於いては、
かの女は初めよりわが味方なりき。

(1911,6.16. TOKYO.)

書齋の午後

われはこの國の女を好まず。

讀みさしの舶來の本の
手ざはりあらき紙の上に、
あやまちて零したる葡萄酒の
なかなかに浸みてゆかぬかなしみ。

われはこの國の女を好まず。

(1911,6.15. TOKYO.)

墓碑銘

われは常にかれを尊敬せりき、
しかして今も猶尊敬す——
かの郊外の墓地の栗の木の下に
かれを葬りて、すでにふた月を經たれど。

實に、われらの會合の席に彼を見ずなりてより、
すでにふた月は過ぎ去りたり。
かれは議論家にてはなかりしかど、
なくてかなはぬ一人なりしが。

或る時、彼の語りけるは、
「同志よ、われの無言をとがむることなかれ。
われは議論すること能はず、
されど、我には何時にても起つことを得る準備あり。」

「彼の眼は常に論者の怯懦を叱責す。」
同志の一人はかくかれを評しき。
然り、われもまた度度しかく感じたりき。
しかして、今や再びその眼より正義の叱責を

うくることなし。

かれは労働者――一個の機械職工なりき。
かれは常に熱心に、且つ快活に働き、
暇あれば同志と語り、またよく読書したり。
かれは煙草も酒も用ゐざりき。

かれの真摯にして不屈、且つ思慮深き性格は、
かのジュラの山地のバクウニンが友を忍ばしめたり。
かれは烈しき熱に冒されて、病の床に横はりつつ、
なほよく死にいたるまで譫語を口にせざりき。

「今日は五月一日なり、われらの日なり。」
これかれのわれに遺したる最後の言葉なり。
その日の朝、われはかれの病を見舞ひ、
その日の夕、かれは遂に永き眠りに入れり。

ああ、かの広き額と、鉄槌のごとき腕と、
しかして、また、かの生を恐れざりしごとく
死を恐れざりし、常に直視する眼と、
眼つぶれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸は、一個の唯物論者として、
かの栗の木の下に葬られたり。
われら同志の撰びたる墓碑銘は左の如し、
「われには何時にても起つことを得る準備あり。」

(1911.6.16. TOKYO.)

古びたる鞄をあけて

わが友は、古びたる鞄をあけて、
ほの暗き蝋燭の火影の散らぼへる床に、
いろいろの本を取り出だしたり。
そは皆この国にて禁じられたるものなりき。

やがて、わが友は一葉の写真を探しあてて、
「これなり」とわが手に置くや、
静かにまた窓に凭りて口笛を吹き出だしたり。

そは美くしとにもあらぬ若き女の写真なりき。

(1911.6.16. TOKYO.)

家

今朝も、ふと、目のさめしとき、
わが家と呼ぶべき家の欲しくなりて、
顔洗ふ間もそのことをそこはかとなく思ひしが、

つとめ先より一日の仕事を了へて帰り来て、
夕餉の後の茶を啜り、煙草をのめば、
むらさきの煙の味のなつかしさ、
はかなくもまたそのことのひよつと心に浮び来る――
はかなくもまたかなしくも。

場所は、鉄道に遠からぬ、
心おきなき故郷の村のはづれに選びてむ。
西洋風の木造のさつぱりとしたひと構へ、
高からずとも、さてはまた何の飾りのなくとても、
広き階段とバルコンと明るき書斎……
げにさなり、すわり心地のよき椅子も。

この幾年に幾度も思ひしはこの家のこと、
思ひし毎に少しづつ変へし間取りのさまなど

を
心のうちに描きつつ、
ラムプの笠の眞白きにそれとなく眼をあつむれば、
その家に住むたのしさのまざまざ見ゆる心地して、
泣く兒に添乳する妻のひと間の隅のあちら向き、
そを幸ひと口もとにはかなき笑みものぼり來る。
さて、その庭は廣くして草の繁るにまかせてむ。
夏ともなれば、夏の雨、おのがじしなる草の葉に
音立てて降るこころよさ。
またその隅にひともとの大樹を植ゑて、
白塗の木の腰掛を根に置かむ――
雨降らぬ日は其處に出て、
かの煙濃く、かをりよき埃及煙草ふかしつつ、
四五日おきに送り來る丸善よりの新刊の
本の頁を切りかけて、
食事の知らせあるまでをうつらうつらと過ごすべく、
また、ことごとにつぶらなる眼を見ひらきて聞きほるる
村の子供を集めては、いろいろの話聞かすべく……

はかなくも、またかなしくも、
いつとしもなく若き日にわかれ來りて、
月月のくらしのことに疲れゆく、
都市居住者のいそがしき心に一度浮びては、
はかなくも、またかなしくも、
なつかしくして、何時までも棄つるに惜しきこの思ひ、
そのかずかずの満たされぬ望みと共に、
はじめより空しきことと知りながら、
なほ、若き日に人知れず戀せしときの眼付して、
妻にも告げず、眞白なるラムプの笠を見つめつつ、
ひとりひそかに、熱心に、心のうちに思ひつづくる。

（1911,6,25. TOKYO.）

飛行機

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたつた二人の家にゐて、
ひとりせつせとリイダアの獨學をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。

（1911,6,27. TOKYO.）

曠野

路に迷つたのだ！
と氣のついた時は、此曠野に踏込んでから、もう彼是十哩も歩いてゐた、朝に旅籠屋を立つてから七八哩の間は、潦に馬の足痕の新しい路を、森から野、野から森、二三度人にも邂逅した。とある森の中で、人のゐない一軒家も見た。その路から此路へ、何時、何處から迷込んだのか解らない。瞬きをしてる間に、誰かが自分を掻浚つて來て、恁麼曠野に捨てて行つたのではないかと思はれる。

足の甲の草鞋摺が痛む。痛む足を重さうに引摺つて、旅人は蹌踉と歩いて行く。十時間の間何も食はずに歩いたので、粟一粒入つてゐない程腹が凹んでゐる。饑と疲勞と、路を失つたといふ失望とが、暗い壓迫を頭腦に加へて、一足毎に烈しくなる足の痛みが、ずきり、ずきり、鈍つた心を突く。幾何元氣を出してみても、直ぐに目が眩んで來る、耳が鳴つて來る。

戻らうか、戻らうか、と考へながら、足は矢張前に出る。戻る事にしよう。と心が決めても、身體が矢張前に動く。

涯もない曠野、海に起伏す波に似て、見ゆる限りの青草の中に、幅二尺許りの、唯一條の細路が眞直に走つてゐる。空は一面の灰色の雲、針の目程の隙もなく閉して、黒鐵の棺の蓋の如く、重く曠野を覆うてゐる。

習との風も吹かぬ。地球の脊骨の大山脈から、獅子の如く咆えて來る千里の風も、遮る山もなければ抗ふ木もない、此曠野に吹いて來ては、おのづから力が拔けて死んで了ふのであらう。

日の目が見えぬので、午前とも午後とも解らないが、旅人は腹時計で算してみて、もう二時間か三時間で日が暮れるのだと知つた。西も東も解らない。何方から來て何方へ行くとも知れぬ路を、旅人は唯前へと歩いた。

軈てまた二哩許り辿つてゆくと、一條の細路が右と左に分れてゐる。

此處は丁度此曠野の中央で、曠野の三方から來る三條の路が、此處に落合つてゐる。落合つた所が、稍廣く草の生えぬ赤土を露はしてゐて、中央に一つ潦がある。

潦の傍には、鍼線で拵へた樣な、骨と皮ばかりに痩せて了つた赤犬が一疋坐つてゐた。

犬は旅人を見ると、なつかしげにばたばた細い尾を動かしたが、やをら立上つて蹌踉と二三歩前に歩いた。

涯もない曠野を唯一人歩いて來た旅人も、犬を見ると流石になつかしい。知らぬ國の都を歩いてゐて、不圖同郷の人に逢つた樣になつかしい。旅人も犬に近いた。

犬は幽かに鼻を鳴らして、旅人の顏を仰いだが、耳を窄めて、首を低れた。

そして、鼻端で旅人の埃だらけの足の甲を撫でた。

旅人はどつかと地面に腰を下した。犬も三尺許り離れて、前肢を立てて坐つた。

空は曇つてゐる。風が無い。何十哩の曠野の中に、生命ある者は唯二箇。

犬は默つて旅人の顏を瞶めてゐる。旅人も無言で犬の顏を瞶めてゐる。

若し人と犬と同じものであつたら、此時、犬が旅人なのか、旅人が犬なのか、誰が見ても見分がつくまい。饑ゑた、疲れた、二つの生命が

互に瞶め合つてゐたのだ。

犬は、七日程前に、怎した機會かで此曠野の追分へ來た。そして、何方の路から來たのか忘れて了つた。再び人里へ歸らうと思つては出かけるけれども、行つても、行つても、同じ様な曠野の草、涯しがないので復此處に歸つて來る。三條の路を交る交る、何囘か行つてみて何囘か歸つて來た。犬は七日の間何も喰はなかつた。

そして、犬一疋、人一人に逢はぬ。三日程前に、高い空の上を鳥が一羽飛んで行つて、雲に隱れた影を見送つた限。

微かな音だにせぬ。聞えるものは、疲れに疲れた二つの心臓が、同じに搏つ鼓動の響ばかり。——旅人は思つた。

軈て、旅人は袂を探つて莨を出した。そして燐寸を擦つた。旅人の見た犬の目に暫時火光が映つた。犬の見た旅人の目にも暫時火光が閃めいた。

旅人は、燐寸の燃殼を犬の前に投げた。犬は直ぐそれに鼻端を推つけたが、何の香もしないので、また居住ひを直して旅人の顔を瞶めた。七日間の饑は犬の瞼を重く、懈怠くした。莨の烟が旅人の饑を薄らがした。

旅人は、怎やら少し暢然した様な心持で、目の前の、瘦せ果てた骨と皮ばかりの赤犬を、憐む様な氣になつて來た。で手を伸べて犬を引寄せた。

頭を撫でても耳を引張つても、犬は目を細くして唯穏しくしてゐる。莨の烟を顔に吹かけても、僅かに鼻をふんふんいはす許り。毛を逆に撫でて見たり、肢を開かして見たり、地の上に轉がして見たり、瘦せて尖つた顔を兩膝に挾んで見たりしても、犬は唯穏しくしてゐる。終には、細い尾を右に捻つたり、左に捻つたり、指に卷いたりしたが、少し強くすると、犬はスンと喉を鳴らして、弱い反抗を企てる許り。

不圖、旅人は面白い事を考出して、密と口元に笑を含んだ。紙屑を袂から出して、紙捻を一本糾ふと、それで紙屑を犬の尾に縛へつけた。

犬がばたばたと尾を振る。旅人は、燐寸を擦つて、其紙屑に火を點けた。

犬は矢庭に跳上つた。尾には火が燃えてゐる。犬は首をねぢつて其を嚙取らうとするけれども、首が尾まで屆かぬので、きやん、きやんと叫びながらぐるぐる廻り出した。

旅人は、我ながら殘酷な事をしたと思つて、犬の尾を抑へて其紙屑を取つてやらうと慌てて立上つたが、犬は聲の限りに叫びつづけて、凄じい勢ひでぐるぐる廻る。手も出されぬ程勢ひよく、迅く廻る。旅人も、手を伸べながら犬の周圍を廻り出した。

きやん、きやんといふ苦痛の聲が、旅人の粟一粒入つてゐない空腹に應へる。それはそれは遣瀨もない思ひである。

尾の火が間もなく消えかかつた。と、犬の廻り方が少し遲くなつたと思ふと、よろよろと行つて、潦の中に仆れた。旅人は、棒の如く立つた。

きやん、きやんといふ聲も、もう出ない。犬は痛ましい斷末魔の痛苦に水の中に仆れた儘、四本の肢で踠いて、すんすんと泣いたが、其聲が段々弱るにつれて、肢も段々動かなくなつた。

饑ゑに饑ゑてゐた赤犬が、恁うして死んで了つた。

淺猿しい犬の屍を横へた潦の面は、小波が鎮まると、宛然底無しの淵の如く見えた。深く映つた灰色の空が、何時しか黄昏の色に黝んでゐたので。

棒の如く立つてゐた旅人は、驚いて周圍を見た。そこはかとなき薄暗が曠野の草に流れてゐ

る。其顔には、いふべからざる苦痛が刻まれてゐた。

　日が暮れた！　と思ふ程、路を失つた旅人に悲しい事はない。渠は、急がしく草鞋の紐を締めなほして、犬の屍を一瞥したが、いざ行かうと足を踏出して、さて何處へ行つたものであらうと、黄昏の曠野を見廻した。

　同じ様に三度見廻したが、忽ち、

「噫。」

　と叫んで、兩手を高くさしあげたと思ふと、大聲に泣き出した。

『俺の來た路は何方だつたらう?!』

　三條の路が、渠の足下から起つて、同じ様に曠野の三方に走つてゐる。

白骨

はてもなき夏草の野を、
一すぢの白き埃の
幅ひろき路ぞ、西より
東より直に横ぎる。

路のべに、あはれ立ちたる
一もとの名なき大木。
ひろげたる繁葉の枝は
さながらに青き傘。

とある年、とある夏の日、
遙かなる西の方より
辿り來し異國人の
旅の隊三百ばかり。

先達ぞ先づ杖すてて
大木の下に憩へば、
老いたるも若きも共に、
少女子は髪かきあげて、
病ある馬上の人も、
みなべてここに憩ひぬ。

くわと照れる夏の日ざかり、
ここのみは繁れる葉より
雫してたゆることなき
涼風ぞ幹をめぐれる。
さればかの旅の人々
いつとなく深く眠りぬ。

あなあはれ、あなあはれ、
旅人は今も見るらむ、
はてもなき、夏草の野の
大木の下に眠れる
三百の白き骨ども。

（明治四十一年八月「明星」所載）

白い鳥、血の海

變な夢を見た。――

大きい、大きい、眞黒な船に、美しい人と唯二人乗つて、大洋に出た。

その人は私を見るゝ始終俯いて許りゐて、一言も口を利かなかつたので、喜んでるのか、悲しんでるのか、私には解らなかつた。夢の中では、長い間思ひ合つてゐた人に相違なかつたが、覺めてみると、誰だか解らない。誰やらに似た横顔はまだ頭腦の中に殘つてるやうだけれど、さて其誰やらが誰だか薩張當がつかない。

富士山が見えなくなつてから、隨分長いこと船は大洋の上を何處かに向つてゐた。それが何日だか何十日だか矢張解らない。或は何百日何千日の間だつたかも知れない。

其、誰とも知れぬ戀人は、毎日々々、朝から晩まで、燃ゆる樣な紅の衣を着て、船首に立つて船の行手を眺めてゐた。

それは其人が己れの意志でやつた事か、私が命令してやらした事か明瞭しない。

或日のこと。

高い、高い、眞黒な檣の眞上に、金色の太陽が照つてゐて、海――蒼い、蒼い海は、見ゆる限り漣一つ起たず、油を流した樣に靜かであつた。

船の行手に、拳程の白い雲が湧いたと思ふと、見る間にそれが空一面に擴つて、金色の太陽を掩して了つた。――よく見ると、それは雲ぢやなかつた。

鳥である。白い、白い、幾億萬羽と數知れぬ鳥である。

海には漣一つ起たぬのに、空には、幾億萬羽の白い鳥が一樣に羽搏をするので、それが妙な凄じい響きになつて聞える。

戀人は平生の如く船首に立つて紅の衣を着てゐたが、私は船尾にゐて戀人の後姿を瞶つてゐた。

凄じい羽搏の響きが、急に高くなつたと思ふと、空一面の鳥が、段々舞下つて來た。

高い、高い、眞黒な檣の上部が、半分許りも群がる鳥に隱れて見えなくなつた。と、其鳥どもが、一羽、一羽、交る交るに下りて來て、戀人の手の掌に接吻してゆく。肩の高さに伸ばした其手には、燦爛として輝くものが載つてゐた。よく見ると、それは私が贈つた黃金の指環である。

鳥は普通の白い鳥であるけれども、一度其指環に接吻して行つたのだけは、もう普通の鳥ではなくて、白い羽の生えた人の顔になつてゐた。

程なくして、空中の鳥が皆人の顔になつて了つた。と、最後に、やや大きい鳥が舞下りて來て戀人の手に近いたと見ると、紅の衣を着た戀人が、一聲けたたましく叫んで後に倒れた。

黃金の指環を銜へた鳥は、大きい輪を描いて檣の周圍を飛んだ。怎したのか、此鳥だけは人の顔にならずに。

私は、帆綱に懸けておいた弓を取るより早く、白銀の鏑矢を兵と許りに射た。

矢は見ン事鳥を貫いた。

鳥の腹は颯と血に染まつた。

と、其鳥は花の落つる如く、私を目がけて落ちて來た。私はひらりと身を飜して、劒の柄に手をかけると、鳥は船尾の直ぐ後の海中に

落ちた。
白銀の矢に貫かれた白鳥の屍！　其周圍の水が血の色に染まつたと見ると、それが瞬くうちに大きい輪になつて、涯なき大洋が忽ちに一面の血紅の海！
唯一點の白は痛ましげなる鳥の屍である。と思つた、次の瞬間には、それに既に鳥の屍でなくて、燃ゆる樣な紅の衣を海一面に擴げた、戀人の顏であつた。
船が駛る、駛る。矢の如く駛る。海中の顏は瞬一瞬に後に遠ざかる。……
空には數知れぬ人の顏の、羽搏の響きと、帛裂く如く異樣な泣聲。……

流木

わだつみの青き鼓は
とどろけり、去年も今年も。
しらしらと明けゆく朝も
曇りたる夕も、恆に
かはるなきひびきをあげて、
韃鞳と碎くる浪の
浪頭日も夜も白し。

白砂の長き渚は
弓のごと海を抱けり。
ちりしける枯藻のなかに
足痕も印さず。はたや、
沖をゆく帆も見る日なし。
時ありて嵐は來り、
渚邊のところどころに
砂山を築きては去る。

あはれ、その渚の上に
横たはる大き流木、
さしわたし七尺ばかり
砂山に根をうち上げて、
枝もなき長き幹をば
その半ば海に入れたり。
海鳥は時にかがなき、
その上に翼やすめぬ。

われ來り、この流木の
かたはらに、小犬のごとく
寢ころびて、青き鼓の
とどろきを直にぞ聞ける。
身じろがず、荒磯の砂の
つよき香を直にぞ吸へる
あなあはれ、覺むる期もなく。

（明治四十一年八月『明星』所載）

火星の芝居

『何か面白い事はないか?』

『俺は昨夜火星に行つて來た。』

『さうかえ。』

『眞個に行つて來たよ。』

『面白いものでもあつたか?』

『芝居を見たんだ。』

『さうか。日本なら「冥途の飛脚」だが、火星ぢや「天上の飛脚」でも演るんだらう?』

『其麽ケチなもんぢやない。第一劇場からして違ふよ。』

『一里四方もあるのか?』

『莫迦な事を言へ。先づ青空を十里四方位の大さに截つて、それを壓搾して石にするんだ。石よりも堅くて青くて透徹るよ。』

『それが何だい?』

『それを積み重ねて、高い、高い、無際限に高い壁を築き上げたもんだ、然も二列にだ。壁と壁との間が唯五間位しかないが、無際限に高いので、仰ぐと空が一本の絲の樣に見える。』

『五間の舞臺で芝居がやれるのかい?』

『マア聞き給へ。其青い壁が何處まで續いてゐるのか解らない。萬里の長城を二重にして、青く塗つた樣なもんだね。』

『何處で芝居を演るんだ?』

『芝居はまだだよ。その壁が詰り花道なんだ。』

『もう澤山だ。止せよ。』

『その花道を、俳優が先づ看客を引率して行くのだ。火星ぢや君、俳優が國王よりも權力があつて、芝居が初まると國民が一人殘らず見物しなけやならん憲法があるんだから、それは〳〵非常な大入だよ。其麽大仕懸な芝居だから、準備に許りも十ケ月かかるさうだ。』

『お産をすると同じだね。』

『其俳優といふのが又素的だ。火星の人間は、一體僕等より足が小くて胸が高くて、最も頭の大きい奴が第一流の俳優になる。だから君、火星のアアビングや團十郎は、ニコライの會堂の圓天蓋よりも大きい位な烏帽子を冠つてるよ。』

『驚いた。』

『驚くだらう?』

『君の法螺にさ。』

『法螺ぢやない、眞實の事だ。少くとも夢の中の事實だ。それで君、ニコライの會堂の屋根を冠つた俳優が、何十億の看客を導いて花道から案内して行くんだ。』

『花道から看客を案内するのか?』

『さうだ。其處が地球と違つてるね。』

『其處ばかりぢやない。』

『怎せ違つてるさ。それでね、僕も看客の一人になつて其花道を行つたとし給へ。そして、並んで歩いてる人から望遠鏡を借りて前の方を見たんだがね、二十里も前の方にニコライの屋根の尖端が三つ許り見えたよ。』

『アッハハハ。』

『行つても、行つても、青い壁だ。行つても、行つても、青い壁だ。何處まで行つても青い壁だ。君、何處まで行つたつて矢張青い壁だよ。』

『舞臺を見ないうちに夜が明けるだらう?』

『それどころぢやない、花道ばかりで何年とか費るさうだ。』

『好い加減にして幕をあけ給へ。』

『だつて君何處まで行つても矢張青い壁なんだ。』

『戯言ぢやないぜ。』
『戯言ぢやない。さ、そのうちに目が覺めたから夢も覺めて了つたんだ。ハッハハ。』
『酷い男だ、君は。』
『だつて然うぢやないか。さう何年も續けて夢を見てゐた日にや、火星の芝居が初まらぬうちに、俺の方が腹を減らして目出度大團圓になるぢやないか。俺だつて青い鷺の涯まで見たかつたんだが、そのうちに目が覺めたから夢も覺めたんだ。』

古苑

夜の風吹くよ、和らや、
この古苑、
若葉の木の間に、沈み心地、
夜の手に曳かれて、我、今。

旅の身なにか知らむや、
ゆめのいのち、
春ゆく方をぞたづねわびの
さまよひ、今宵はこの苑。

荒れたり、——これや、(知らねど)
古きかたみ、
白石くづれし榻のかたへ
半らは枯れたる櫻樹。

見よ、見よ、照るは三日月、
老櫻の——
殘んのあはれや、——一重花に
若眉さびしのほのめき。

白石小榻くづれて、
長もとせ、
人々ぞ凭らざれ、おもひいでの
涙か、花ちるけはひよ。

いで、いで、夢よ、今こそ、
花降る夜半、
さめきて、うたへや、古き歌を、——
ここにし逢ひけむ二人の。

(戀、皆、花も、なべての
うるはしきは、
市にか葬られ、春も花にて、
古苑、——月さへ沈みぬ。)

(あまき口づけ清らの
あこがれ、はた、
かくこそ荒むや。)——若き我は
くづをれ心のかなしき。

夜の風ほのか。(この身の
とはの棲家、
ありや。)と思ふに、夢に啼くか、
いにしへなつかし、鶯。

旅の身春を追ひきて、
この古苑、
若胸、おもわに、一重花の
口づけしげきをただ泣く。

(『黄草集』より)

二人連

若い男といふものは、時として妙な氣持になる事があるものだ。ふはふはとした、影の樣な物が、胸の中で、右に左に寢返りをうつてじたばたしてる樣で、何といふ事もなく氣が落着かない。書を讀んでも何が書いてあるやら解らず、これや不可と思つて、聲を立てて讀むと何時しか御經の眞似をしたくなつたり、薩摩琵琶の聲色になつたりする。遠方の友達へでも手紙を書かうとすると、隣りの煙草屋の娘が目にちらつく。鼻先を電車が轟と駛る。積み重ねておいた本でも崩れると、ハッと吃驚して、誰もゐないのに顏を赤くしたりする。何の爲に怎うそはそはするのか解らない。新しい戀に唆かされてるのでもないのだ。

或晩、私も其麼氣持になつて、一人で種々な眞似をやつた。讀さしの本は其方のけにして、寺小屋の涎くりの眞似もした、鏡に向つて大口を開いて、眞赤な舌を自由自在に動かしても見た。机の縁をピアノの鍵盤に擬へて、氣取つた身振をして滅多打に敲いても見た。何之助とかいふ娘義太夫が、花簪を擲げ出し、髮を振亂して可愛い目を妙に細くして見臺の上を伸上つた眞似をしてる時、スウと襖が開いたので、慌てて何氣ない樣子をつくろうて、開けた本を讀む振をしたが、郵便を持つて來た小間使が出て行くと、氣が附いたら本が逆さになつてゐた。

たまらなくなつて、帽子も冠らず戸外へ飛出して了つた。暢然歩いたり、急いで歩いたり、電車にも乘つたし、見た事のない、狹い横町にも入つた。車夫にも怒鳴られたし、ミルクホールの中を覗いても見た。一町ばかり粹な女の跟をつけても見た。面白いもので、何でも世の中は遠慮する程損な事はないが、街を歩いても此方が大威張で眞直に歩けば、徠る人も、徠る人も皆途を避けてくれる。

妻を持つたら、決して夜の都の街を歩かせるものぢやない、と考へた。華やかな、晝を欺く街々の電燈は、怎しても人間の心を浮氣にする。情死と決心した男女が怎麼街を歩くと、屹度其企てを擲つて駈落をする事にする。

さらでだにふらふらと唆かされてゐる心持を、生温かい夏の夜風が絶間もなく煽立てる。

日比谷公園を出て少許來ると、十間許り前を暢然とした歩調で二人連の男女が歩いてゐる。餘り若い人達ではないらしいが何方も立派な洋裝で、肩と肩を擦合して行くではないか、畜生奴！

私は此夜、怎麼のを何十組となく見せつけられて、少からず憤慨してゐたが、殊にも其處が人通の少い街なので、二人の樣子が一層睦じ氣に見えて、私は一層癪に觸つた。

と、幸ひ私の背後から一人の若い女が來て、急足で前へ拔けたので、私は好い事を考へ出した。

私は、早速足を早めて、其若い女と肩を竝べた。先刻から一緒に歩いてる樣な工合にして、前に行く二人連に見せつけてやる積りなのだ。

女は氣の毒な事には、私の面白い計畫を知らない。何と思つたか、急に俯いて一層足を早めた。二人連に追附くには結句都合が可いので、私も大股に急いで、肩と肩を擦れさうにした。

女は徐々急ぐ、私も時々急ぐ。たまらない位嬉しい。私は首を真直にして、反返つて歩いた。

間もなく前の二人連に追附いて、四人が一直線の上に列んだ。五六秒經つと、直線が少許歪んで、私達の方が心持前へ出た。

私は生れてから、悠麼得意を覺えた事は滅多にない。で、何處までも末賴母しい情人の僕は、態度をくづさず女の傍に密接いて歩きながら、滿心の得意がそれだけで足らず、些と流眄を使つて洋裝の二人連を見た。甚麼顏をしてけつかるだらうと思つて。

私は不思首を縮めて足を留めた。

親類の結婚式に招ばれて行つた筈の、お父さんとお母さんが、手をとり合つて散歩ながらに家に歸る所だ！

『おや光太郎（私の名）ぢやないか！　帽子も冠らずに何處を歩いてゐるんだらう！』

とお母さんが：：：

私は生れてから、悠麼酷い目に逢つた事は滅多にない！

老人

ひえわたる小暗き隅に
開かざる小さき房あり。
骨立ちて眼凹みし
老人ぞ一人坐れる。

昏々と、あはれ、日も夜も
身動がず、半ば眠れり。
慵きは、朝な夕なの
濁りたる低き咳嗽。

時ありて何かつぶつぶ
呟やきつ、寒き笑ひを
頬にうかべ、かりり、かりりと
一片の骨を噛むなり。

あさましく、かりり、かりり、と、
あはれ、そはすでに幾年
わが胸に死にて横ふ
初戀の人の白骨。

・

時ありて、わななく指を
折りふせて何か數へぬ。
或時は我にそむける
友人を。また或時は、
温かき手とり別れし
なつかしき人の思出。
はた、一人のがれ出でにし
故郷の遠き路程。

時ありて、我に言ふらく。
『何かある、大空を見よ。』
われ答ふ、『何ものもなし。』
『げにさなり、虚し。』と笑ふ。

（明治四十一年八月『明星』所載）

祖父

とある山の上の森に、軒の傾いた一軒家があつて、六十を越した老爺と五歳になるお雪とが、唯二人住んでゐた。

お雪は五年前の初雪の朝に生れた、山桃の花の樣に可愛い兒であつた。老爺は六尺に近い大男で、此年齡になつても腰も屈らず、無病息災、頭顱が見事に禿げてゐて、赤銅色の顏に、左の眼が盲れてゐた。

親のない孫と、子のない祖父の外に、此一軒家にはモ一個の活物がゐた。それはお雪より三倍も年老つた、白毛の盲目馬である。

老爺は重い斧を揮つて森の木を伐る。お雪は輕い聲で笑つて、一人其近間に遊んでゐる。

大きい木が凄じい音を立てて仆れる時、『お雪、危ないぞ。』と老爺が言ふ。小鳥が枝の上に愉しい歌を歌ふ時、『祖父さん鳥がゐる、鳥がゐる。』とお雪が呼ぶ。

丁々たる伐木の音と、嬉々たるお雪の笑聲が毎日、毎日森の中に響いた。

其森の奥に、太い、太い、一本の山毛欅の木があつて、其周圍には粗末な木柵が廻らしてあつた。お雪は何事でも心の儘に育てられてゐるけれど、其山毛欅の木に近づく事だけは、堅く老爺から禁められてゐた。

老爺は伐仆した木を薪にして、隔日の午前に、白毛の盲目馬の背につけては、麓の町に賣りにゆく。其都度、お雪は老爺に背負はれて行く。

雨の降る日は老爺は盡日圍爐裏に焚火をして、凝と其火を瞶つて暮す。お雪は其傍で穩しく遊んで暮す。

時として老爺は、

『お雪坊や、お前の阿母はな、偉えこと綺麗な女だつたぞ。』

と言ふ事がある。

其阿母が何處へ行つたかと訊くと、遠い所へ行つたのだと教へる。

そして、其阿母が歸つて來るだらうかと問ふと、

『歸つて來るかも知れねえ。』

と答へて、傍を向いて溜息を吐く。

お雪は左程此話に興を有つてなかつた。

五歲になる森の中のお雪が、何よりも、喜ぶのは、

『祖父さん、暗くして呉れるよ。』

と言つて、可愛い星の樣な目を、堅く、堅く、閉づる事であつた。お雪は自分に何も見えなくなるので、目を閉づれば世界が暗くなるものと思つてゐた。

お雪は一日に何度となく世界を暗くする。其都度、老爺は笑ひながら、

『あゝ暗くなつた、暗くなつた。』

と言ふ。

或時お雪は、老爺の顏をつくづく眺めてゐたが、

『祖父さんは、何日でも半分暗いの?』

と問うた。

『然うだ。祖父さんは左の方が何日でも半分暗いのさ。』

と言つて、眇目の老爺は面白相に笑つた。

又或時、お雪は老爺の頭顱を見ながら、

『祖父さんの頭顱には怎して毛がないの?』

『年を老ると、誰でも俺の樣に禿頭になるだあよ。』

お雪には其意味が解らなかつた。『古くなつて枯れて了つたの。』

『アノハ。』と、老爺は歯のかけた口を大きく開いて笑つたが、『然うだ、然うだ、古くなつて干乾びたから、髪が皆草の様に枯れて了つただ。』

『そんなら、水つけたら再生えるの？』

『生えるかも知れねえ、お雪坊は賢い事を言ふだ喃。』

と笑つたが、お雪は其日から、甚麼日でも忘れずに、必ず粗末な夕飯が済むと、いかな眠い時でも手づから漆の剝げた椀に水を持つて來て、胡坐をかいた老爺の頭へ、小い手でひたひたとつけて呉れる。水の滴りが額を傳つて鼻の上に流れると、老爺は、

『お雪坊や、其麼に鼻にまでつけると、鼻にも毛が生えるだあ。』

と笑ふ。するとお雪も可笑くなつて、くつくつ笑ふのであるが、それが面白さに、お雪は態と鼻の上に水を流す。其都度二人は同じ事を言つて、同じ様に笑ふのだ。

夕飯が済み、毛生藥の塗抹が終ると、老爺は直ぐにお雪を抱いて寝床に入る。お雪は桃太郎やお月お星の継母の話が終らぬうちにすやすやと安かな眠に入つて了ふのであるが、老爺は仲々寝つかれない。すると、密り起きて、圍爐裏に薪を添へ、パチパチと音して勢ひよく燃える炎に老の顔を照されながら、一つしか無い目に涙を湛へて、六十年の來し方を胸に繰返す。——

生れる兒も、生れる兒も、皆死んで了つて、唯一人育つた娘のお里、それは、それは、親ながらに惚々とする美しい娘であつたが、十七の春に姿を隠して、山を尋ね川を探り、麓の町に降りて家毎に訊いて歩いたけれど、搔暮行方が知れず。媼さんは其時から病身になつたが、お里は二十二の夏の初めに飄然と何處からか歸つて來た。何處から歸つたのか兩親は知らぬ。訊いても答へない。十月末の初雪の朝に、遽かに産氣づいて生み落したのがお雪である。

翌年の春の初め、森の中には未だ所々に雪が残つてる時分お里は再見えなくなつた。翌日、老爺は森の奥の大山毛欅の下で、裸體にされて血だらけになつてゐる娘の屍を發見した。お雪を近かせぬ山毛欅がそれだ。

二月も經たぬうちに媼さんも死んで了つた。——

雨さへ降らなければ、毎日、毎日、丁々たる伐木の音と邪氣ないお雪の清しい笑聲とが、森の中に響いた。日に二本か三本、太い老木が凄じい反響を傳へて地に仆れた。小鳥が愉しげな歌を歌つて、枝から枝へ移つた。

或晴れた日。

珍らしくも老爺は加減がよくないと言つて、朝から森に出なかつた。

お雪は一人樹蔭に花を摘んだり、葉に隠れて影を見せぬ小鳥を追うたりしたが、間もなく妙に寂しくなつて家に歸つた。

老爺は圍爐裏の端に横になつて眠つてゐる。額の皺は常よりも深く刻まれてゐる。

お雪は密りと板の間に上つて——、老爺の枕邊に坐つたが遣瀬もない侘しさが身に迫つて、子供心の埒もなく、涙が直ぐに星の様な目を濕した。それでも流石に泣聲を怺へて、昵と老爺の顔を瞶つてゐた。

暫時經つと、お雪は自分の目を閉ぢて見たり、開けて見たりしてゐた。老爺の目が二つとも閉ぢてゐるのに、怎したのかお雪は暗くない。自分の目を閉ぢなければ暗くない。……

お雪は不思議で不思議で耐らなくなつた。自分が目を閉づると、祖父さんは何日でも暗くなつたと言ふ。然し、今祖父さんが目を閉ぢてゐ

るけれども、自分は些とも暗くない。……祖父さんは平常譃を言つてゐたのぢやなからうかといふ懐疑が、妙な恐怖を伴つて小い胸に一杯になつた。

又暫時經つと、お雪は小さい手で密と老爺の禿頭を撫でて見た。ああ、毎晩、毎晩、水をつけてるのに、此ともまだ毛が生えてゐない。「此頃は少許生えかかつて來たやうだ。」と、二三日前に祖父さんが言つたに不拘まだ些とも生えてゐない。……

老爺がウウンと苦氣に唸つた、胸の上に載せてゐた手を下したのでお雪は驚いて手を退いた。

赤銅色の、逞ましい、逞ましい老爺の顏！怒つた獅子ッ鼻、廣い額の幾條の皺、常には見えぬ竪の皺さへ、太い眉と眉の間に刻まれてゐる。少許開いた唇からは、歯のない口が底知れぬ洞穴の樣に見える。

お雪は無言で其顏を瞶つてゐたが、見る見る老爺の顏が――今まで何とも思はなかつたのに――恐ろしい顏になつて來た。言ふべからざる恐怖の情が湧いた。譬へて見ようなら見も知らぬ猛獸の寢息を覗つてる樣な心地である。

するとお雪は、遙かに、見た事のない生みの母が――常々美くしい女だつたと話に聞いた生みの母が、戀しくなつた。そして、到頭聲を出してわつと泣いた。

其聲に目を覺ました老爺が、

『怎しただ？』

と言つて體を起しかけた時、お雪は一層烈しく泣き出した。

老爺は、一つしかない目を大きく睜つて、妙に顏を歪めてお雪――最愛のお雪を見据ゑた。口元が痙攣けてゐる。胸が死ぬ程苦しくなつて、嘔氣を催して來た。老い果てた心臓はどきり、どきり、と、不規則な鼓動を弱つた體に傳へた。

よみがへれ

『よみがへれ、今、よみがへれ、
魂よ、悲哀の甕を破り、
脱けて木の間の幻の
花の心に甦れ。』
聲はさくらの花に充ち、
花光りする風の羽の
照りのまにまにただよへり。
夢の虚の殘骸に
ささがに小さき哀しみの
目にこそ似たる魂さめて、
（覺醒よ、いのちの苦痛の、）
ほそきうめきに嘆ずらく、
『あゝ今日も亦日はてるや、
また、世に花は咲きぬるや、
かくて永劫、かはらざる
輪廻の路の岩蔭に、
おちて朽ちゆく破甕の
涙の滓に身をひたす
この苦しみのさいなみを
のがれむ暗の世はあらじ。
ああかくて又永劫の
かはらぬ光照る日見て
わが悲しみは新たなり。

（『[illegible]草集』より）

一握の砂

函館なる郁雨宮崎大四郎君
同國の友文學士花明金田一京助君
この集を兩君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを兩君の前に示しつくしたるものの如し。從つて兩君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。
また一本をとりて亡兒眞一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の藥餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千餘首中より五百五十一首を拔きてこの集に收む。集中五章、感興の來由するところ相邇きをたづねて假にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の記念なり。

我を愛する歌

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

×

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず

×

大海にむかひて一人
七八日
泣きなむとすと家を出でにき

×

いたく錆びしピストル出でぬ
砂山の
砂を指もて掘りてありしに

×

ひと夜さに
嵐來りて築きたる
この砂山は
何の墓ぞも

×

砂山の砂に腹這ひ
初戀の
いたみを遠くおもひ出づる日

×

砂山の裾によこたはる流木に
あたり見まはし
物言ひてみる

×

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

×

しつとりと
なみだを吸へる砂の玉
なみだは重きものにしあるかな

×

大といふ字を百あまり
砂に書き
死ぬことをやめて帰り来れり

×

目さまして猶起き出でぬ児の癖は
かなしき癖ぞ
母よ咎むな

×

ひと塊の土に涎し
泣く母の肖顔つくりぬ
かなしくもあるか

×

燈影なき室に我あり
父と母
壁のなかより杖つきて出づ

×

たはむれに母を背負ひて
そのあまり軽きに泣きて
三歩あゆまず

×

飄然と家を出でては
飄然と帰りし癖よ
友はわらへど

×

ふるさとの父の咳する度に斯く
咳の出づるや
病めばはかなし

×

わが泣くを少女等きかば
病犬の
月に吠ゆるに似たりといふらむ

×

何処やらむかすかに虫のなくごとき
こころ細さを
今日もおぼゆる

×

いと暗き
穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

×

こころよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて死なむと思ふ

×

こみ合へる電車の隅に
ちぢこまる
ゆふべゆふべの我のいとしさ

×

浅草の夜のにぎはひに
まぎれ入り
まぎれ出で来しさびしき心

×

愛犬の耳斬りてみぬ
あはれこれも
物に倦みたる心にかあらむ

×

鏡とり
能ふかぎりのさまざまの顔をしてみぬ
泣き飽きし時

×

なみだなみだ
不思議なるかな
それをもて洗へば心戲けたくなれり

×

呆れたる母の言葉に
氣がつけば
茶碗を箸もて敲きてありき

×

草に臥て
おもふことなし
わが額に糞して鳥は空に遊べり

×

わが髭の
下向く癖がいきどほろし
このごろ憎き男に似たれば

×

森の奥より銃聲聞ゆ
あはれあはれ
自ら死ぬる音のよろしさ

×

大木の幹に耳あて
小半日
堅き皮をばむしりてありき

×

「さばかりの事に死ぬるや」
「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答

×

まれにある
この平なる心には
時計の鳴るもおもしろく聽く

×

ふと深き怖れを覺え
ぢつとして
やがて靜かに臍をまさぐる

×

高山のいただきに登り
なにがなしに帽子をふりて
下り來しかな

×

何處やらに澤山の人があらそひて
鬮引くごとし
われも引きたし

×

怒る時
かならずひとつ鉢を割り
九百九十九割りて死なまし

×

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼
このごろ氣になる

×

鏡屋の前に來て
ふと驚きぬ
見すぼらしげに歩むものかも

×

何となく汽車に乘りたく思ひしのみ
汽車を下りしに
ゆくところなし

×

空家に入り
煙草のみたることありき
あはれただ一人居たきばかりに

×

何がなしに
さびしくなれば出てあるく男となりて
三月にもなれり

×

やはらかに積れる雪に
熱てる頰を埋むるごとき
戀してみたし

×

かなしきは
飽くなき利己の一念を
持てあましたる男にありけり

×

手も足も
室いつぱいに投げ出して
やがて靜かに起きかへるかな

×

百年の長き眠りの覺めしごと
呿呻してまし
思ふことなしに

×

腕拱みて
このごろ思ふ
大いなる敵目の前に躍り出でよと

×

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に會ひしに

×

こころよく
人を讃めてみたくなりにけり
利己の心に倦めるさびしさ

×

雨降れば
わが家の人誰も誰も沈める顏す
雨霽れよかし

×

高きより飛びおりるごとき心もて
この一生を
終るすべなきか

×

この日頃
ひそかに胸にやどりたる悔あり
われを笑はしめざり

×

へつらひを聞けば
腹立つわがこころ
あまりに我を知るがかなしき

×

知らぬ家たたき起して
遁げ來るがおもしろかりし
昔の戀しさ

×

非凡なる人のごとくにふるまへる
後のさびしさは
何にかたぐへむ

×

大いなる彼の身體が
憎かりき
その前にゆきて物を言ふ時

×

實務には役に立たざるうた人と
我を見る人に
金借りにけり

×

遠くより笛の音きこゆ
うなだれてある故やらむ
なみだ流るる

×

それもよしこれもよしとてある人の
その氣がるさを
欲しくなりたり

×

死ぬことを
持藥をのむがごとくにも我はおもへり
心いためば

×

路傍に犬ながながと呿呻しぬ
われも眞似しぬ
うらやましさに

×

眞劍になりて竹もて犬を撃つ
小兒の顏を
よしと思へり

×

ダイナモの
重き唸りのここちよさよ
あはれこのごとく物を言はまし

×

剽輕の性なりし友の死顏の
青き疲れが
いまも目にあり

×

氣の變る人に仕へて
つくづくと
わが世がいやになりにけるかな

×

龍のごとくむなしき空に躍り出でて
消えゆく煙
見れば飽かなく

×

こころよき疲れなるかな
息もつかず
仕事をしたる後のこの疲れ

×

空寢入生呿呻など
なぜするや
思ふこと人にさとらせぬため

×

箸止めてふつと思ひぬ
やうやくに
世のならはしに慣れにけるかな

×

朝はやく
婚期を過ぎし妹の
恋文めける文を読めりけり

×

しつとりと
水を吸ひたる海綿の
重さに似たる心地おぼゆる

×

死ね死ねと己を怒り
もだしたる
心の底の暗きむなしさ

×

けものめく顔あり口をあけたてす
とのみ見てゐぬ
人の語るを

×

親と子と
はなればなれの心もて静かに対ふ
気まづきや何ぞ

×

かの船の
かの航海の船客の一人にてありき
死にかねたるは

×

目の前の菓子皿などを
かりかりと噛みてみたくなりぬ
もどかしきかな

×

よく笑ふ若き男の
死にたらば
すこしはこの世のさびしくもなれ

×

何がなしに
息きれるまで駆け出してみたくなりたり
草原などを

×

あたらしき背広など着て
旅をせむ
しかく今年も思ひ過ぎたる

×

ことさらに燈火を消して
まぢまぢと思ひてゐしは
わけもなきこと

×

浅草の凌雲閣のいただきに
腕組みし日の
長き日記かな

×

尋常のおどけならむや
ナイフ持ち死ぬまねをする
その顔その顔

×

こそこその話がやがて高くなり
ピストル鳴りて
人生終る

×

時ありて
子供のやうにたはむれす
恋ある人のなさぬ業かな

×

とかくして家を出づれば
日光のあたたかさあり
息ふかく吸ふ

×

つかれたる牛のよだれは
たらたらと
千萬年も盡きざるごとし

×

路傍の切石の上に
腕拱みて
空を見上ぐる男ありたり

×

何やらむ
穩かならぬ目付して
鶴嘴を打つ群を見てゐる

×

心より今日は逃げ去れり
病ある獸のごとき
不平逃げ去れり

×

おほどかの心來れり
あるくにも
腹に力のたまるがごとし

×

ただひとり泣かまほしさに
來て寢たる
宿屋の夜具のこころよさかな

×

友よさは
乞食の卑しさ厭ふなかれ
餓ゑたる時は我も爾りき

×

新しきインクのにほひ
栓拔けば
餓ゑたる腹に沁むがかなしも

×

かなしきは
喉のかわきをこらへつつ
夜寒の夜具にちぢこまる時

×

一度でも我に頭を下げさせし
人みな死ねと
いのりてしこと

×

我に似し友の二人よ
一人は死に
一人は牢を出でて今病む

×

あまりある才を抱きて
妻のため
おもひわづらふ友をかなしむ

×

打明けて語りて
何か損をせしごとく思ひて
友とわかれぬ

×

どんよりと
くもれる空を見てゐしに
人を殺したくなりにけるかな

×

人並の才に過ぎざる
わが友の
深き不平もあはれなるかな

×

誰が見てもとりどころなき男來て
威張りて歸りぬ
かなしくもあるか

×

はたらけど
はたらけど猶わが生活樂にならざり
ぢつと手を見る

×

何もかも行末の事みゆるごとき
このかなしみは
拭ひあへずも

×

とある日に
酒をのみたくてならぬごとく
今日われ切に金を欲りせり

×

水晶の玉をよろこびもてあそぶ
わがこの心
何の心ぞ

×

事もなく
且つこころよく肥えてゆく
わがこのごろの物足らぬかな

×

大いなる水晶の玉を
ひとつ欲し
それにむかひて物を思はむ

×

うぬ惚るる友に
合槌うちてゐぬ
施與をするごとき心に

×

ある朝のかなしき夢のさめぎはに
鼻に入り來し
味噌を煮る香よ

×

こつこつと空地に石をきざむ音
耳につき來ぬ
家に入るまで

×

何がなしに
頭のなかに崖ありて
日毎に土のくづるるごとし

×

遠方に電話の鈴の鳴るごとく
今日も耳鳴る
かなしき日かな

×

垢じみし袷の襟よ
かなしくも
ふるさとの胡桃燒くるにほひす

×

死にたくてならぬ時あり
はばかりに人目を避けて
怖き顏する

×

一隊の兵を見送りて
かなしかり
何ぞ彼等のうれひ無げなる

×

邦人の顔たへがたく卑しげに
目にうつる日なり
家にこもらむ

×

この次の休日に一日寝てみむと
思ひすごしぬ
三年このかた

×

或る時のわれのこころを
焼きたての
麺麭に似たりと思ひけるかな

×

たんたらたらたんたらたらと
雨滴が
痛むあたまにひびくかなしさ

×

ある日のこと
室の障子をはりかへぬ
その日はそれにて心なごみき

×

かうしては居られずと思ひ
立ちにしが
戸外に馬の嘶きしまで

×

氣ぬけして廊下に立ちぬ
あららかに扉を推せしに
すぐ開きしかば

×

ぢつとして
黒はた赤のインク吸ひ
堅くかわける海綿を見る

×

誰が見ても
われをなつかしくなるごとき
長き手紙を書きたき夕

×

うすみどり
飲めば身體が水のごと透きとほるてふ
薬はなきか

×

いつも睨むランプに飽きて
三日ばかり
蠟燭の火にしたしめるかな

×

人間のつかはぬ言葉
ひよつとして
われのみ知れるごとく思ふ日

×

あたらしき心もとめて
名も知らぬ
街など今日もさまよひて来ぬ

×

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ來て
妻としたしむ

×

何すれば
此処に我ありや
時にかく打驚きて室を眺むる

×

人ありて電車のなかに唾を吐く
それにも
心いたまむとしき

×

夜明けまであそびてくらす場所が欲し
家をおもへば
こころ冷たし

×

人みなが家を持つてふかなしみよ
墓に入るごとく
かへりて眠る

×

何かひとつ不思議を示し
人みなのおどろくひまに
消えむと思ふ

×

人といふ人のこころに
一人づつ囚人がゐて
うめくかなしさ

×

叱られて
わつと泣き出す子供心
その心にもなりてみたきかな

×

盗むてふことさへ悪しと思ひえぬ
心はかなし
かくれ家もなし

×

放たれし女のごときかなしみを
よわき男の
感ずる日なり

×

庭石に
はたと時計をなげうてる
昔のわれの怒りいとしも

×

顔あかめ怒りしことが
あくる日は
さほどにもなきをさびしがるかな

×

いらだてる心よ汝はかなしかり
いざいざ
すこし呿呻などせむ

×

女あり
わがいひつけに背かじと心を砕く
見ればかなしも

×

ふがひなき
わが日の本の女等を
秋雨の夜にののしりしかな

×

男とうまれ男と交り
負けてをり
かるがゆゑにや秋が身に沁む

×

わが抱く思想はすべて
金なきに因するごとし
秋の風吹く

×

くだらない小説を書きてよろこべる
男憐れなり
初秋の風

×

秋の風
今日よりは彼のふやけたる男に
口を利かじと思ふ

×

はても見えぬ
眞直の街をあゆむごとき
こころを今日は持ちえたるかな

×

何事も思ふことなく
いそがしく
暮らせし一日を忘れじと思ふ

×

何事も金金とわらひ
すこし經て
またも俄かに不平つのり來

×

誰そ我に
ピストルにても撃てよかし
伊藤のごとく死にて見せなむ

×

やとばかり
桂首相に手とられし夢みて覺めぬ
秋の夜の二時

煙

一

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

×

己が名をほのかに呼びて
涙せし
十四の春にかへる術なし

×

青空に消えゆく煙
さびしくも消えゆく煙
われにし似るか

×

かの旅の汽車の車掌が
ゆくりなくも
我が中學の友なりしかな

×

ほとばしる喞筒の水の
心地よさよ
しばしは若きこころもて見る

×

師も友も知らで責めにき
謎に似る
わが學業のおこたりの因

×

教室の窓より遁げて
ただ一人
かの城址に寢に行きしかな

×

不來方のお城の草に寢ころびて
空に吸はれし
十五の心

×

かなしみといはばいふべき
物の味
我の嘗めしはあまりに早かり

×

晴れし空仰げばいつも
口笛を吹きたくなりて
吹きてあそびき

×

夜寢ても口笛吹きぬ
口笛は
十五の我の歌にしありけり

×

よく叱る師ありき
鬚の似たるより山羊と名づけて
口眞似もしき

×

われと共に
小鳥に石を投げて遊ぶ
後備大尉の子もありしかな

×

城址の
石に腰掛け
禁制の木の實をひとり味ひしこと

×

その後に我を捨てし友も
あの頃はともに書讀み
ともに遊びき

×

學校の圖書庫の裏の秋の草
黄なる花咲きし
今も名知らず

×

花散れば
先づ人さきに白の服着て家出づる
我にてありしか

×

今は亡き姉の戀人のおとうとと
なかよくせしを
かなしと思ふ

×

夏休み果ててそのまま
かへり來ぬ
若き英語の教師もありき

×

ストライキ思ひ出でても
今は早や我が血躍らず
ひそかに淋し

×

盛岡の中學校の
露臺の
欄干に最一度我を倚らしめ

×

神有りと言ひ張る友を
說きふせし
かの路傍の栗の樹の下

×

西風に
內丸大路の櫻の葉
かさこそ散るを踏みてあそびき

×

そのかみの愛讀の書よ
大方は
今は流行らずなりにけるかな

×

石ひとつ
坂をくだるがごとくにも
我けふの日に到り着きたる

×

愁ひある少年の眼に羨みき
小鳥の飛ぶを
飛びてうたふを

×

解剖せし
蚯蚓のいのちもかなしかり
かの校庭の木柵の下

×

かぎりなき知識の欲に燃ゆる眼を
姉は傷みき
人戀ふるかと

×

蘇峰の書を我に薦めし友早く
校を退きぬ
まづしさのため

×

おどけたる手つきをかしと
我のみはいつも笑ひき
博學の師を

×

自が才に身をあやまちし人のこと
かたりきかせし
師もありしかな

×

そのかみの學校一のなまけ者
今は眞面目に
はたらきて居り

×

田舍めく旅の姿を
三日ばかり都に曝し
かへる友かな

×

茨島の松の並木の街道を
われと行きし少女
才をたのみき

×

眼を病みて黑き眼鏡をかけし頃
その頃よ
一人泣くをおぼえし

×

わがこころ
けふもひそかに泣かむとす
友みな己が道をあゆめり

×

先んじて戀のあまさと
かなしさを知りし我なり
先んじて老ゆ

×

興來れば
友なみだ垂れ手を揮りて
醉漢のごとくなりて語りき

×

人ごみの中をわけ來る
わが友の
むかしながらの太き杖かな

×

見よげなる年賀の文を書く人と
おもひ過ぎにき
三年ばかりは

×

夢さめてふつと悲しむ
わが眠り
昔のごとく安からぬかな

×

そのむかし秀才の名の高かりし
友牢にあり
秋のかぜ吹く

×

近眼にて
おどけし歌をよみ出でし
茂雄の戀もかなしかりしか

×

わが妻のむかしの願ひ
音樂のことにかかりき
今はうたはず

×

友はみな或日四方に散り行きぬ
その後八年
名擧げしもなし

×

わが戀を
はじめて友にうち明けし夜のことなど
思ひ出づる日

×

絲きれし紙鳶のごとくに
若き日の心かろくも
とびさりしかな

二

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聽きにゆく

×

やまひある獸のごとき
わがこころ
ふるさとのこと聞けばおとなし

×

ふと思ふ
ふるさとにゐて日毎聽きし雀の鳴くを
三年聽かざり

×

亡くなれる師がその昔
たまひたる
地理の本など取りいでて見る

×

その昔
小學校の柾屋根に我が投げし鞠
いかにかなりけむ

×

ふるさとの
かの路傍のすて石よ
今年も草に埋もれしらむ

×

わかれをれば妹いとしも
赤き緒の
下駄など欲しとわめく子なりし

×

二日前に山の繪見しが
今朝になりて
にはかに戀しふるさとの山

×

飴賣のチャルメラ聽けば
うしなひし
をさなき心ひろへるごとし

×

このごろは
母も時時ふるさとのことを言ひ出づ
秋に入れるなり

×

それとなく
鄕里のことなど語り出でて
秋の夜に燒く餅のにほひかな

×

かにかくに澁民村は戀しかり
おもひでの山
おもひでの川

×

田も畑も賣りて酒のみ
ほろびゆくふるさと人に
心寄する日

×

あはれかの我の敎へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ

×

ふるさとを出で來し子等の
相會ひて
よろこぶにまさるかなしみはなし

×

石をもて追はるるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

×

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

×

ふるさとの
村醫の妻のつつましき櫛卷なども
なつかしきかな

×

かの村の登記所に來て
肺病みて
間もなく死にし男もありき

×

小學の首席を我と爭ひし
友のいとなむ
木賃宿かな

×

千代治等も長じて戀し
子を擧げぬ
わが旅にしてなせしごとくに

×

ある年の盆の祭に
衣貸さむ踊れと言ひし
女を思ふ

×

うすのろの兄と
不具の父もてる三太はかなし
夜も書讀む

×

我と共に
栗毛の仔馬走らせし
母の無き子の盜癖かな

×

大形の被布の模樣の赤き花
今も目に見ゆ
六歳の日の戀

×

その名さへ忘られし頃
飄然とふるさとに來て
咳せし男

×

意地惡の大工の子などもかなしかり
戰に出でしが
生きてかへらず

×

肺を病む
極道地主の總領の
よめとりの日の春の雷かな

×

宗次郎に
おかねが泣きて口說き居り
大根の花白きゆふぐれ

×

小心の役場の書記の
氣の狂れし噂に立てる
ふるさとの秋

×

わが從兄
野山の獵に飽きし後
酒のみ家賣り病みて死にしかな

×

我ゆきて手をとれば
泣きてしづまりき
醉ひて荒れしそのかみの友

×

酒のめば
刀をぬきて妻を逐ふ教師もありき
村を逐はれき

×

年ごとに肺病やみの殖えてゆく
村に迎へし
若き醫者かな

×

ほたる狩
川にゆかむといふ我を
山路にさそふ人にてありき

×

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

×

あはれ我がノスタルジヤは
金のごと
心に照れり清くしみらに

×

友として遊ぶものなき
性悪の巡査の子等も
あはれなりけり

×

閑古鳥
鳴く日となれば起るてふ
友のやまひのいかになりけむ

×

わが思ふこと
おほかたは正しかり
ふるさとのたより着ける朝は

×

今日聞けば
かの幸うすきやもめ人
きたなき戀に身を入るてふ

×

わがために
なやめる魂をしづめよと
讃美歌うたふ人ありしかな

×

あはれかの男のごときたましひよ
今は何處に
何を思ふや

×

わが庭の白き躑躅を
薄月の夜に
折りゆきしことな忘れそ

×

わが村に
初めてイエス・クリストの道を說きたる
若き女かな

×

霧ふかき好摩の原の
停車場の
朝の蟲こそすずろなりけれ

×

汽車の窓
はるかに北にふるさとの山見え來れば
襟を正すも

×

ふるさとの土をわが踏めば
何がなしに足輕くなり
心重れり

×

ふるさとに入りて先づ心傷むかな
道廣くなり
橋もあたらし

×

見もしらぬ女教師が
そのかみの
わが學舍の窓に立てるかな

×

かの家のかの窓にこそ
春の夜を
秀子とともに蛙聽きけれ

×

そのかみの神童の名の
かなしさよ
ふるさとに來て泣くはそのこと

×

ふるさとの停車場路の
川ばたの
胡桃の下に小石拾へり

×

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし
ふるさとの山はありがたきかな

秋風のこころよさに

ふるさとの空遠みかも
高き屋にひとりのぼりて
愁ひて下る

×

皎として玉をあざむく小人も
秋來といふに
物を思へり

×

かなしきは
秋風ぞかし
稀にのみ湧きし涙の繁に流るる

×

靑に透く
かなしみの玉に枕して
松のひびきを夜もすがら聽く

×

神寂びし七山の杉
火のごとく染めて日入りぬ
靜かなるかな

×

そを讀めば
愁ひ知るといふ書焚ける
いにしへ人の心よろしも

×

ものなべてうらはかなげに
暮れゆきぬ
とりあつめたる悲しみの日は

×

水潦
暮れゆく空とくれなゐの紐を浮べぬ
秋雨の後

×

秋立つは水にかも似る
洗はれて
思ひことごと新しくなる

×

愁ひ来て
丘にのぼれば
名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の實

×

秋の辻
四すぢの路の三すぢへと吹きゆく風の
あと見えずかも

×

秋の聲まづいち早く耳に入る
かかる性持つ
かなしむべかり

×

目になれし山にはあれど
秋来れば
神や住まむとかしこみて見る

×

わが爲さむこと世に盡きて
長き日を
かくしもあはれ物を思ふか

×

さらさらと雨落ち来り
庭の面の濡れゆくを見て
涙わすれぬ

×

ふるさとの寺の御廊に
踏みにける
小櫛の蝶を夢にみしかな

×

こころみに
いとけなき日の我となり
物言ひてみむ人あれと思ふ

×

はたはたと黍の葉鳴れる
ふるさとの軒端なつかし
秋風吹けば

×

摩れあへる肩のひまより
はつかにも見きといふさへ
日記に残れり

×

風流男は今も昔も
泡雪の
玉手さし捲く夜にし老ゆらし

×

かりそめに忘れても見まし
石だたみ
春生ふる草に埋るるがごと

×

その昔搖籃に寝て
あまたたび夢みし人か
切になつかし

×

神無月
岩手の山の
初雪の眉にせまりし朝を思ひぬ

×

ひでり雨さらさら落ちて
前栽の
萩のすこしく亂れたるかな

×

秋の空廓寥として影もなし
あまりにさびし
烏など飛べ

×

雨後の月
ほどよく濡れし屋根瓦の
そのところどころ光るかなしさ

×

われ饑ゑてある日に
細き尾を掉りて
饑ゑて我を見る犬の面よし

×

いつしかに
泣くといふこと忘れたる
我泣かしむる人のあらじか

×

汪然として
ああ酒のかなしみぞ我に來れる
立ちて舞ひなむ

×

蛼鳴く
そのかたはらの石に踞し
泣き笑ひしてひとり物言ふ

×

力なく病みし頃より
口すこし開きて眠るが
癖となりにき

×

人ひとり得るに過ぎざる事をもて
大願とせし
若きあやまち

×

物怨ずる
そのやはらかき上目をば
愛づとことさらつれなくせむや

×

かくばかり熱き涙は
初戀の日にもありきと
泣く日またなし

×

長く長く忘れし友に
會ふごとき
よろこびをもて水の音聽く

×

秋の夜の
鋼鐵の色の大空に
火を噴く山もあれなど思ふ

×

岩手山
秋はふもとの三方の
野に滿つる蟲を何と聽くらむ

×

父のごと秋はいかめし
母のごと秋はなつかし
家持たぬ兒に

×

秋來れば
戀ふる心のいとまなさよ
夜もい寢がてに雁多く聽く

×

長月も半ばになりぬ
いつまでか
かくも幼く打出でずあらむ

×

思ふてふこと言はぬ人の
おくり來し
忘れな草もいちじろかりし

×

秋の雨に逆反りやすき弓のごと
このごろ
君のしたしまぬかな

×

松の風夜晝ひびきぬ
人訪はぬ山の祠の
石馬の耳に

×

ほのかなる朽木の香り
そがなかの蕈の香りに
秋やや深し

×

時雨降るごとき音して
木傳ひぬ
人によく似し森の猿ども

×

森の奥
遠きひびきす
木のうろに臼ひく侏儒の國にかも來し

×

世のはじめ
まづ森ありて
半神の人そが中に火や守りけむ

×

はてもなく砂うちつづく
戈壁の野に住みたまふ神は
秋の神かも

×

あめつちに
わが悲しみと月光と
あまねき秋の夜となれりけり

×

うらがなしき
夜の物の音洩れ來るを
拾ふがごとくさまよひ行きぬ

×

旅の子の
ふるさとに來て眠るがに
げに靜かにも冬の來しかな

忘れがたき人人

一

潮かをる北の濱邊の
砂山のかの濱薔薇よ
今年も咲けるや

×

たのみつる年の若さを數へみて
指を見つめて
旅がいやになりき

×

三度ほど
汽車の窓よりながめたる町の名なども
したしかりけり

×

函館の床屋の弟子を
おもひ出でぬ
耳剃らせるがこころよかりし

×

わがあとを追ひ來て
知れる人もなき
邊土に住みし母と妻かな

×

船に醉ひてやさしくなれる
いもうとの眼見ゆ
津輕の海を思へば

×

目を閉ぢて
傷心の句を誦してゐし
友の手紙のおどけ悲しも

×

をさなき時
橋の欄干に糞塗りし
話も友はかなしみてしき

×

おそらくは生涯妻をむかへじと
わらひし友よ
今もめとらず

×

あはれかの
眼鏡の縁をさびしげに光らせてゐし
女教師よ

×

友われに飯を與へき
その友に背きし我の
性のかなしさ

×

函館の青柳町こそかなしけれ
友の戀歌
矢ぐるまの花

×

ふるさとの
麥のかをりを懷かしむ
女の眉にこころひかれき

×

あたらしき洋書の紙の
香をかぎて
一途に金を欲しと思ひしが

×

しらなみの寄せて騷げる
函館の大森濱に
思ひしことども

×

朝な朝な
支那の俗歌をうたひ出づる
まくら時計を愛でしかなしみ

×

漂泊の愁ひを叙して成らざりし
草稿の字の
讀みがたさかな

×

いくたびか死なむとしては
死なざりし
わが來しかたのをかしく悲し

×

函館の臥牛の山の半腹の
碑の漢詩も
なかば忘れぬ

×

むやむやと
口の中にてたふとげの事を呟く
乞食もありき

×

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく
山に入りにき
神のごとき友

×

巻煙草口にくはへて
浪あらき
磯の夜霧に立ちし女よ

×

演習のひまにわざわざ
汽車に乘りて
訪ひ來し友とのめる酒かな

×

大川の水の面を見るごとに
郁雨よ
君のなやみを思ふ

×

智慧とその深き慈悲とを
もちあぐみ
爲すこともなく友は遊べり

×

こころざし得ぬ人人の
あつまりて酒のむ場所が
我が家なりしかな

×

かなしめば高く笑ひき
酒をもて
悶を解すといふ年上の友

×

若くして
數人の父となりし友
子なきがごとく醉へばうたひき

×

さりげなき高き笑ひが
酒とともに
我が腸に沁みにけらしな

×

呿呻嚙み
夜汽車の窓に別れたる
別れが今は物足らぬかな

×

雨に濡れし夜汽車の窓に
映りたる
山間の町のともしびの色

×

雨つよく降る夜の汽車の
たえまなく雫流るる
窓硝子かな

×

眞夜中の
倶知安驛に下りゆきし
女の鬢の古き痍あと

×

札幌に
かの秋われの持てゆきし
しかして今も持てるかなしみ

×

アカシヤの街樾にポプラに
秋の風
吹くがかなしと日記に殘れり

×

しんとして幅廣き街の
秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ

×

わが宿の姉と妹のいさかひに
初夜過ぎゆきし
札幌の雨

×

石狩の美國といへる停車場の
柵に乾してありし
赤き布片かな

×

かなしきは小樽の町よ
歌ふことなき人人の
聲の荒さよ

×

泣くがごと首ふるはせて
手の相を見せよといひし
易者もありき

×

いささかの錢借りてゆきし
わが友の
後姿の肩の雪かな

×

世わたりの拙きことを
ひそかにも
誇りとしたる我にやはあらぬ

×

汝が痩せしからだはすべて
謀叛氣のかたまりなりと
いはれてしこと

×

かの年のかの新聞の
初雪の記事を書きしは
我なりしかな

×

椅子をもて我を撃たむと身構へし
かの友の醉ひも
今は醒めつらむ

×

負けたるも我にてありき
あらそひの因も我なりしと
今は思へり

×

毆らむといふに
毆れとつめよせし
昔の我のいとほしきかな

×

汝三度
この咽喉に劍を擬したりと
彼告別の辭に言へりけり

×

あらそひて
いたく憎みて別れたる
友をなつかしく思ふ日も來ぬ

×

あはれかの眉の秀でし少年よ
弟と呼べば
はつかに笑みしが

×

わが妻に着物縫はせし友ありし
冬早く來る
植民地かな

×

平手もて
吹雪にぬれし顏を拭く
友共產を主義とせりけり

×

酒のめば鬼のごとくに青かりし
大いなる顏よ
かなしき顏よ

×

樺太に入りて
新しき宗教を創めむといふ
友なりしかな

×

治まれる世の事無さに
飽きたりといひし頃こそ
かなしかりけれ

×

共同の藥屋開き
儲けむといふ友なりき
詐欺せしといふ

×

あをじろき頰に涙を光らせて
死をば語りき
若き商人

×

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

×

敵として憎みし友と
やや長く手をば握りき
わかれといふに

×

ゆるぎ出づる汽車の窓より
人先に顏を引きしも
負けざらむため

×

みぞれ降る
石狩の野の汽車に讀みし
ツルゲエネフの物語かな

×

わが去れる後の噂を
おもひやる旅出はかなし
死にゆくごとと

×

わかれ来てふと瞬けば
ゆくりなく
つめたきものの頬をつたへり

×

忘れ来し煙草を思ふ
ゆけどゆけど
山なほ遠き雪の野の汽車

×

うす紅く雪に流れて
入日影
曠野の汽車の窓を照せり

×

腹すこし痛み出でしを
しのびつつ
長路の汽車にのむ煙草かな

×

乗合の砲兵士官の
剣の鞘
がちやりと鳴るに思ひやぶれき

×

名のみ知りて縁もゆかりもなき土地の
宿屋安けし
我が家のごと

×

伴なりしかの代議士の
口あける青き寐顔を
かなしと思ひき

×

今夜こそ思ふ存分泣いてみむと
泊りし宿屋の
茶のぬるさかな

×

水蒸気
列車の窓に花のごと凍てしを染むる
あかつきの色

×

ごおと鳴る凩のあと
乾きたる雪舞ひ立ちて
林を包めり

×

空知川雪に埋れて
鳥も見えず
岸辺の林に人ひとりゐき

×

寂寞を敵とし友とし
雪のなかに
長き一生を送る人もあり

×

いたく汽車に疲れて猶も
きれぎれに思ふは
我のいとしさなりき

×

うたふごと駅の名呼びし
柔和なる
若き駅夫の眼をも忘れず

×

雪のなか
処処に屋根見えて
煙突の煙うすくも空にまよへり

×

遠くより
笛ながながとひびかせて
汽車今とある森林に入る

×

何事も思ふことなく
日一日
汽車のひびきに心まかせぬ

×

さいはての驛に下り立ち
雪あかり
さびしき町にあゆみ入りにき

×

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

×

こほりたるインクの罎を
火に翳し
涙ながれぬともしびの下

×

顔とこゑ
それのみ昔に變らざる友にも會ひき
國の果にて

×

あはれかの國のはてにて
酒のみき
かなしみの滓を啜るごとくに

×

酒のめば悲しみ一時に湧き來るを
寐て夢みぬを
うれしとはせし

×

出しぬけの女の笑ひ
身に沁みき
廚に酒の凍る眞夜中

×

わが醉ひに心いためて
うたはざる女ありしが
いかになれるや

×

小奴といひし女の
やはらかき
耳朶なども忘れがたかり

×

よりそひて
深夜の雪の中に立つ
女の右手のあたたかさかな

×

死にたくはないかと言へば
これ見よと
咽喉の疵を見せし女かな

×

藝事も顔も
かれより優れたる
女あしざまに我を言へりとか

×

舞へといへば立ちて舞ひにき
おのづから
惡酒の醉ひにたふるるまでも

×

死ぬばかり我が酔ふをまちて
いろいろの
かなしきことを囁きし人

×

いかにせしと言へば
あをじろき酔ひざめの
面に強ひて笑みをつくりき

×

かなしきは
かの白玉のごとくなる腕に残せし
キスの痕かな

×

酔ひてわがうつむく時も
水ほしと眼ひらく時も
呼びし名なりけり

×

火をしたふ蟲のごとくに
ともしびの明るき家に
かよひ慣れにき

×

きしきしと寒さに踏めば板軋む
かへりの廊下の
不意のくちづけ

×

その膝に枕しつつも
我がこころ
思ひしはみな我のことなり

×

さらさらと氷の屑が
波に鳴る
磯の月夜のゆきかへりかな

×

死にしとかこのごろ聞きぬ
戀がたき
才あまりある男なりしが

×

十年まへに作りしといふ漢詩を
酔へば唱へき
旅に老いし友

×

吸ふごとに
鼻がぴたりと凍りつく
寒き空氣を吸ひたくなりぬ

×

波もなき二月の灣に
白塗の
外國船が低く浮かべり

×

三味線の絃のきれしを
火事のごと騒ぐ子ありき
大雪の夜に

×

神のごと
遠く姿をあらはせる
阿寒の山の雪のあけぼの

×

郷里にゐて
身投げせしことありといふ
女の三味にうたへるゆふべ

×

葡萄色の
古き手帳にのこりたる
かの會合の時と處かな

×

よごれたる足袋穿く時の
氣味わるき思ひに似たる
思出もあり

×

わが室に女泣きしを
小說のなかの事かと
おもひ出づる日

×

浪淘沙
ながくも聲をふるはせて
うたふがごとき旅なりしかな

二

いつなりけむ
夢にふと聽きてうれしかりし
その聲もあはれ長く聽かざり

×

頰の寒き
流離の旅の人として
路問ふほどのこと言ひしのみ

×

さりげなく言ひし言葉は
さりげなく君も聽きつらむ
それだけのこと

×

ひややかに淸き大理石に
春の日の靜かに照るは
かかる思ひならむ

×

世の中の明るさのみを吸ふごとき
黑き瞳の
今も目にあり

×

かの時に言ひそびれたる
大切の言葉は今も
胸にのこれど

×

眞白なるラムプの笠の
瑕のごと
流離の記憶消しがたきかな

×

函館のかの燒跡を去りし夜の
こころ殘りを
今も殘しつ

×

人がいふ
鬢のほつれのめでたさを
物書く時の君に見たりし

×

馬鈴薯の花咲く頃と
なれりけり
君もこの花を好きたまふらむ

×

山の子の
山を思ふがごとくにも
かなしき時は君を思へり

×

忘れをれば
ひよつとした事が思ひ出の種にまたなる
忘れかねつも

×

病むと聞き
癒えしと聞きて
四百里のこなたに我はうつつなかりし

×

君に似し姿を街に見る時の
こころ躍りを
あはれと思へ

×

かの聲を最一度聽かば
すつきりと
胸や霽れむと今朝も思へる

×

いそがしき生活のなかの
時折のこの物おもひ
誰のためぞも

×

しみじみと
物うち語る友もあれ
君のことなど語り出でなむ

×

死ぬまでに一度會はむと
言ひやらば
君もかすかにうなづくらむか

×

時として
君を思へば
安かりし心にはかに騷ぐかなしさ

×

わかれ來て年を重ねて
年ごとに戀しくなれる
君にしあるかな

×

石狩の都の外の
君が家
林檎の花の散りてやあらむ

×

長き文
三年のうちに三度來ぬ
我の書きしは四度にかあらむ

手套を脱ぐ時

手套を脱ぐ手ふと休む
何やらむ
こころかすめし思ひ出のあり

×

いつしかに
情をいつはること知りぬ
髭を立てしもその頃なりけむ

×

朝の湯の
湯槽のふちにうなじ載せ
ゆるく息する物思ひかな

×

夏來れば
うがひ薬の
病ある歯に沁む朝のうれしかりけり

×

つくづくと手をながめつつ
おもひ出でぬ
キスが上手の女なりしが

×

さびしきは
色にしたしまぬ目のゆゑと
赤き色など買はせけるかな

×

新しき本を買ひ來て讀む夜半の
そのたのしさも
長くわすれぬ

×

旅七日
かへり來ぬれば
わが窓の赤きインクの染みもなつかし

×

古文書のなかに見いでし
よごれたる
吸取紙をなつかしむかな

×

手にためし雪の融くるが
ここちよく
わが寐飽きたる心には沁む

×

薄れゆく障子の日影
そを見つつ
こころいつしか暗くなりゆく

×

ひやひやと
夜は藥の香のにほふ
醫者が住みたるあとの家かな

×

窓硝子
塵と雨とに曇りたる窓硝子にも
かなしみはあり

×

六年ほど日毎日毎にかぶりたる
古き帽子も
棄てられぬかな

×

こころよく
春のねむりをむさぼれる
目にやはらかき庭の草かな

×

赤煉瓦遠くつづける高塀の
むらさきに見えて
春の日ながし

×

春の雪
銀座の裏の三階の煉瓦造に
やはらかに降る

×

よごれたる煉瓦の壁に
降りて融け降りては融くる
春の雪かな

×

目を病める
若き女の倚りかかる
窓にしめやかに春の雨降る

×

あたらしき木のかをりなど
ただよへる
新開町の春の静けさ

×

春の街
見よげに書ける女名の
門札などを読みありくかな

×

そことなく
蜜柑の皮の焼くるごときにほひ残りて
夕となりぬ

×

にぎはしき若き女の集会の
こゑ聴き倦みて
さびしくなりたり

×

何処やらに
若き女の死ぬごとき悩ましさあり
春の霙降る

×

コニャックの酔ひのあとなる
やはらかき
このかなしみのすずろなるかな

×

白き皿
拭きては棚に重ねゐる
酒場の隅のかなしき女

×

乾きたる冬の大路の
何処やらむ
石炭酸のにほひひそめり

×

赤赤と入日うつれる
河ばたの酒場の窓の
白き顔かな

×

新しきサラドの皿の
酢のかをり
こころに沁みてかなしき夕

×

空色の罎より
山羊の乳をつぐ
手のふるひなどいとしかりけり

×

すがた見の
息のくもりに消されたる
酔ひのうるみの眸のかなしさ

×

ひとしきり静かになれる
ゆふぐれの
厨にのこるハムのにほひかな

×

ひややかに罎のならべる棚の前
歯せせる女を
かなしとも見き

×

やや長きキスを交して別れ來し
深夜の街の
遠き火事かな

×

病院の窓のゆふべの
ほの白き顏にありたる
淡き見覺え

×

何時なりしか
かの大川の遊船に
舞ひし女をおもひ出にけり

×

用もなき文など長く書きさして
ふと人こひし
街に出てゆく

×

しめらへる煙草を吸へば
おほよその
わが思ふことも輕くしめれり

×

するどくも
夏の來るを感じつつ
雨後の小庭の土の香を嗅ぐ

×

すずしげに飾り立てたる
硝子屋の前にながめし
夏の夜の月

×

君來るといふに夙く起き
白シャツの
袖のよごれを氣にする日かな

×

おちつかぬ我が弟の
このごろの
眼のうるみなどかなしかりけり

×

どこやらに杭打つ音し
大桶をころがす音し
雪ふりいでぬ

×

人氣なき夜の事務室に
けたたましく
電話の鈴の鳴りて止みたり

×

目さまして
ややありて耳に入り來る
眞夜中すぎの話聲かな

×

見てをれば時計とまれり
吸はるるごと
心はまたもさびしさに行く

×

朝朝の
うがひの料の水藥の
罎がつめたき秋となりにけり

×

夷かに麥の青める
丘の根の
小徑に赤き小櫛ひろへり

×

裏山の杉生のなかに
斑なる日影這ひ入る
秋のひるすぎ

×

港町
とろろと鳴きて輪を描く鳶を壓せる
潮ぐもりかな

×

小春日の曇硝子にうつりたる
鳥影を見て
すずろに思ふ

×

ひとならび泳げるごとき
家家の高低の軒に
冬の日の舞ふ

×

京橋の滝山町の
新聞社
灯ともる頃のいそがしさかな

×

よく怒る人にてありしわが父の
日ごろ怒らず
怒れと思ふ

×

あさ風が電車のなかに吹き入れし
柳のひと葉
手にとりて見る

×

ゆゑもなく海が見たくて
海に來ぬ
こころ傷みてたへがたき日に

×

たひらなる海につかれて
そむけたる
目をかきみだす赤き帯かな

×

今日逢ひし町の女の
どれもどれも
戀にやぶれて歸るごとき日

×

汽車の旅
とある野中の停車場の
夏草の香のなつかしかりき

×

朝まだき
やつと間に合ひし初秋の旅出の汽車の
堅き麺麭かな

×

かの旅の夜汽車の窓に
おもひたる
我がゆくすゑのかなしかりしかな

×

ふと見れば
とある林の停車場の時計とまれり
雨の夜の汽車

×

わかれ來て
燈火小暗き夜の汽車の窓に弄ぶ
青き林檎よ

×

いつも來る
この酒肆のかなしさよ
ゆふ日赤赤と酒に射し入る

×

白き蓮沼に咲くごとく
かなしみが
醉ひのあひだにはつきりと浮く

×

壁ごしに
若き女の泣くをきく
旅の宿屋の秋の蚊帳かな

×

取りいでし去年の袷の
なつかしきにほひ身に沁む
初秋の朝

×

氣にしたる左の膝の痛みなど
いつか癒りて
秋の風吹く

×

賣り賣りて
手垢きたなきドイツ語の辭書のみ殘る
夏の末かな

×

ゆゑもなく憎みし友と
いつしかに親しくなりて
秋の暮れゆく

×

赤紙の表紙手擦れし
國禁の
書を行李の底にさがす日

×

賣ることを差し止められし
本の著者に
路にて會へる秋の朝かな

×

今日よりは
我も酒など呷らむと思へる日より
秋の風吹く

×

大海の
その片隅につらなれる島島の上に
秋の風吹く

×

うるみたる目と
目の下の黒子のみ
いつも目につく友の妻かな

×

いつ見ても
毛絲の玉をころがして
韈を編む女なりしが

×

葡萄色の
長椅子の上に眠りたる猫ほの白き
秋のゆふぐれ

×

ほそぼそと
其處ら此處らに蟲の鳴く
晝の野に來て讀む手紙かな

×

夜おそく戸を繰りをれば
白きもの庭を走れり
犬にやあらむ

×

夜の二時の窓の硝子を
うす紅く
染めて音なき火事の色かな

×

あはれなる戀かなと
ひとり呟きて
夜半の火桶に炭添へにけり

×

眞白なるラムプの笠に
手をあてて
寒き夜にする物思ひかな

×

水のごと
[illegible]をひたすかなしみに
花の香などのまじれる夕

×

時ありて
猫のまねなどして笑ふ
三十路の友のひとり住みかな

×

氣弱なる斥候のごとく、
おそれつつ
深夜の街を一人散歩す

×

皮膚がみな耳にてありき
しんとして眠れる街の
重き靴音

×

夜おそく停車場に入り
立ち坐り
やがて出でゆきぬ帽なき男

×

氣がつけば
しつとりと夜霧下りて居り
ながくも街をさまよへるかな

×

若しあらば煙草惠めと
寄りて來る
あとなし人と深夜に語る

×

曠野より歸るごとくに
歸り來ぬ
東京の夜をひとりあゆみて

×

銀行の窓の下なる
鋪石の霜にこぼれし
青インクかな

×

ちよんちよんと
とある小藪に頬白の遊ぶを眺む
雪の野の路

×

十月の朝の空氣に
あたらしく
息吸ひそめし赤坊のあり

×

十月の産病院の
しめりたる
長き廊下のゆきかへりかな

×

むらさきの袖垂れて
空を見上げゐる支那人ありき
公園の午後

×

孩兒の手ざはりのごとき
思ひあり
公園に來てひとり歩めば

×

ひさしぶりに公園に來て
友に會ひ
堅く手握り口疾に語る

×

公園の木の間に
小鳥あそべるを
ながめてしばし憩ひけるかな

×

晴れし日の公園に來て
あゆみつつ
わがこのごろの衰へを知る

×

思出のかのキスかとも
おどろきぬ
プラタヌの葉の散りて觸れしを

×

公園の隅のベンチに
二度ばかり見かけし男
このごろ見えず

×

公園のかなしみよ
君の嫁ぎてより
すでに七月來しこともなし

×

公園のとある木蔭の捨椅子に
思ひあまりて
身をば寄せたる

×

忘られぬ顔なりしかな
今日街に
捕吏にひかれて笑める男は

×

マチ擦れば
二尺ばかりの明るさの
中をよぎれる白き蛾のあり

×

目をとぢて
口笛かすかに吹きてみぬ
寐られぬ夜の窓にもたれて

×

わが友は
今日も母なき子を負ひて
かの城址にさまよへるかな

×

夜おそく
つとめ先よりかへり來て
今死にしてふ兒を抱けるかな

×

二三こゑ
いまはのきはに微かにも泣きしといふに
なみだ誘はる

×

眞白なる大根の根の肥ゆる頃
うまれて
やがて死にし兒のあり

×

おそ秋の空氣を
三尺四方ばかり
吸ひてわが兒の死にゆきしかな

×

死にし兒の
胸に注射の針を刺す
醫者の手もとにあつまる心

×

底知れぬ謎に對ひてあるごとし
死兒のひたひに
またも手をやる

×

かなしみの强くいたらぬ
さびしさよ
わが兒のからだ冷えてゆけども

×

かなしくも
夜明くるまでは殘りゐぬ
息きれし兒の肌のぬくもり

黑き箱

ふるさとの港を出でて
七日經ぬ。水や空なる
目路の涯、ただひろびろと、
一すぢの煙だになし。
矢の如く船は走れり。
舷の白き潮沫
その中に浮きつ沈みつ
ただよへる黑き箱見ゆ。

その中に何か入りたる。
脣紅く黑髮長き
生首か。讀む人もなき
文字書ける尊き經か。
はた、空し、虛か。知らず。
漂ひて、浮きつ沈みつ、
破れざるかの黑き箱。
おそろしきかの黑き箱。

(明治四十一年八月「明星」所載)

悲しき玩具

〔一握の砂以後〕

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
凩よりもさびしきその音！

×

眼閉づれど、
心にうかぶ何もなし。
さびしくも、また、眼をあけるかな。

×

途中にてふと氣が變り、
つとめ先を休みて、今日も
河岸をさまよへり。

×

咽喉がかわき、
まだ起きてゐる果物屋を探しに行きぬ。
秋の夜ふけに。

×

遊びに出て子供かへらず、
取り出して
走らせて見る玩具の機關車。

×

本を買ひたし、本を買ひたしと、
あてつけのつもりではなけれど、
妻に言ひてみる。

×

旅を思ふ夫の心！
叱り、泣く、妻子の心！
朝の食卓！

×

家を出て五町ばかりは
用のある人のごとくに
歩いてみたれど——

×

痛む歯をおさへつつ、
日が赤赤と
冬の靄の中にのぼるを見たり。

×

いつまでも歩いてゐねばならぬごとき
思ひ湧き來ぬ、
深夜の町町。

×

なつかしき冬の朝かな。
湯をのめば、
湯氣がやはらかに顔にかかれり。

×

何となく、
今朝は少しくわが心明るきごとし。
手の爪を切る。

×

うつとりと
本の挿繪に眺め入り、
煙草の煙吹きかけてみる。

×

途中にて乘換の電車なくなりしに
泣かうかと思ひき。
雨も降りてゐき。

×

二晩おきに
夜の一時頃に切通の坂を上りしも——
勤めなればかな。

×

しつとりと
酒のかをりにひたりたる
腦の重みを感じて歸る。

×

今日もまた酒のめるかな！
酒のめば
胸のむかつく癖を知りつつ。

×

何事か今我つぶやけり。
かく思ひ、
目をうちつぶり、醉ひを味ふ。

×

すつきりと醉ひのさめたる心地よさよ！
夜中に起きて、
墨を磨るかな。

×

眞夜中の出窓に出でて、
欄干の霜に
手先を冷やしけるかな。

×

どうなりと勝手になれといふごとき
わがこのごろを
ひとり恐るる。

×

手も足もはなればなれにあるごとき
ものうき寐覺！
かなしき寐覺！

×

みすぼらしき鄕里の新聞ひろげつつ、
誤植ひろへり。
今朝のかなしみ。

×

誰か我を
思ふ存分叱りつくる人あれと思ふ。
何の心ぞ。

×

朝な朝な
撫でてかなしむ、
下にして寐た方の腿のかろきしびれを。

×

曠野ゆく汽車のごとくに、
このなやみ、
ときどき我の心を通る。

×

何がなく
初戀人のおくつきに詣づるごとし。
郊外に來ぬ。

×

なつかしき
故鄕にかへる思ひあり、
久し振りにて汽車に乘りしに。

×

新しき明日の來るを信ずといふ
自分の言葉に
譃はなけれど――

×

考へれば、
ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。
煙管をみがく。

×

よごれたる手をみる――
ちやうど
この頃の自分の心に對ふがごとし。

×

よごれたる手を洗ひし時の
かすかなる滿足が
今日の滿足なりき。

×

今日ひよいと山が戀ひしくて
山に來ぬ。
去年腰掛けし石をさがすかな。

×

朝寢して新聞讀む間なかりしを
負債のごとく
今日も感ずる。

×

年明けてゆるめる心！
うつとりと
來し方をすべて忘れしごとし。

×

昨日まで朝から晩まで張りつめし
あのこころもち、
忘れじと思へど。

×

戸の面には羽子突く音す。
笑ふ聲す。
去年の正月にかへれるごとし。

×

何となく、
今年はよい事あるごとし。
元日の朝晴れて風無し。

×

腹の底より欠伸もよほし
ながながと欠伸してみぬ、
今年の元日。

×

いつの年も、
似たよな歌を二つ三つ
年賀の文に書いてよこす友。

×

正月の四日になりて
あの人の
年に一度の葉書も來にけり。

×

世におこなひがたき事のみ考へる
われの頭よ！
今年もしかるか。

×

人がみな
同じ方角に向いて行く。
それを横より見てゐる心。

×

いつまでか、
この見飽きたる懸額を
このまま懸けておくことやらむ。

×

ぢりぢりと、
蝋燭の燃えつくるごとく、
夜となりたる大晦日かな。

×

青塗の瀬戸の火鉢によりかかり、
眼閉ぢ、眼を開け、
時を惜めり。

×

何となく明日はよき事あるごとく
思ふ心を
叱りて眠る。

×

過ぎゆける一年のつかれ出しものか、
元日といふに
うとうと眠し。

×

それとなく
その由るところ悲しまる、
元日の午後の眠たき心。

×

ぢつとして、
蜜柑のつゆに染まりたる爪を見つむる
心もとなさ！

×

手を打ちて
眠気の返事きくまでの
そのもどかしさに似たるもどかしさ！

×

やみがたき用を忘れ来ぬ――
途中にて口に入れたる
ゼムのためなりし。

×

すつぽりと蒲団をかぶり、
足をちぢめ、
舌を出してみぬ、誰にともなしに。

×

いつしかに正月も過ぎて、
わが生活が
またもとの道にはまり来れり。

×

神様と議論して泣きし――
あの夢よ！
四日ばかりも前の朝なりし。

×

家にかへる時間となるを、
ただ一つの待つことにして、
今日も働けり。

×

いろいろの人の思はく
はかりかねて、
今日もおとなしく暮らしたるかな。

×

おれが若しこの新聞の主筆ならば、
やらむ――と思ひし
いろいろの事！

×

石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り來し
バタかな。

×

外套の襟に頤を埋め、
夜ふけに立どまりて聞く。
よく似た聲かな。

×

Yといふ符牒、
古日記の處處にあり――
Yとはあの人の事なりしかな。

×

百姓の多くは酒をやめしといふ。
もつと困らば、
何をやめるらむ。

×

目さまして直ぐの心よ！
年よりの家出の記事にも
涙出でたり。

×

人とともに事をはかるに
適せざる、
わが性格を思ふ寐覺かな。

×

何となく、
案外に多き氣もせらる、
自分と同じこと思ふ人。

×

自分よりも年若き人に、
半日も氣焔を吐きて、
つかれし心！

×

珍らしく、今日は、
議會を罵りつつ涙出でたり。
うれしと思ふ。

×

ひと晩に咲かせてみむと、
梅の鉢を火に焙りしが、
咲かざりしかな。

×

あやまちて茶碗をこはし、
物をこはす氣持のよさを
今朝も思へる。

×

猫の耳を引つぱりてみて、
にやと啼けば、
びつくりして喜ぶ子供の顔かな。

×

何故かうかとなさけなくなり、
弱い心を何度も叱り、
金かりに行く。

×

待てど、待てど、
來る筈の人の來ぬ日なりき、
机の位置を此處に變へしは。

×

古新聞！
おやここにおれの歌の事を賞めて書いてあり、
二三行なれど。

×

引越しの朝の足もとに落ってゐぬ、
女の寫眞！
忘れゐし寫眞！

×

その頃は氣もつかざりし
假名ちがひの多きことかな、
昔の戀文！

×

八年前の
今のわが妻の手紙の束、
何處に藏ひしかと氣にかかるかな

×

眠られぬ癖のかなしさよ！
すこしでも
眠氣がさせば、うろたへて寢る。

×

笑ふにも笑はれざりき、——
長いこと搜したナイフの
手の中にありしに。

×

この四五年、
空を仰ぐといふことが一度もなかりき。
かうもなるものか？

×

原稿紙にでなくては
字を書かぬものと、
かたく信ずる我が兒のあどけなさ！

×

どうか、かうか、今月も無事に暮らしたりと、
外に欲もなき
晦日の晩かな。

×

あの頃はよく譃を言ひき。
平氣にてよく譃を言ひき。
汗が出づるかな。

×

古手紙よ！
あの男とも、五年前は、
かほど親しく交はりしかな。

×

名は何と言ひけむ。
姓は鈴木なりき。
今はどうして何處にゐるらむ。

×

生れたといふ葉書みて、
ひととき、
顏をはれやかにしてゐたるかな。

×

そうれみろ、
あの人も子をこしらへたと、
何か氣の濟む心地にて寐る。

×

「石川はふびんな奴だ。」
ときにかう自分で言ひて、
かなしみてみる。

×

ドア推してひと足出れば、
病人の目にはてしもなき
長廊下かな。

×

重い荷を下したやうな
氣持なりき、
この寢臺の上に來ていねしとき。

×

そんならば生命が欲しくないのかと、
醫者に言はれて、
だまりし心！

×

眞夜中にふと目がさめて
わけもなく泣きたくなりて
蒲團をかぶれる。

×

話しかけて返事のなきに
よく見れば
泣いてゐたりき、隣りの患者。

×

病室の窓にもたれて、
久しぶりに巡査を見たりと
よろこべるかな。

×

晴れし日のかなしみの一つ—
病室の窓にもたれて
煙草を味ふ。

×

夜おそく何處やらの室の騷がしきは
人や死にたらむと、
息をひそむる。

×

脈をとる看護婦の手の
あたたかき日あり
つめたく堅き日もあり。

×

病院に入りて初めての夜といふに
すぐ寢入りしが、
物足らぬかな。

×

何となく自分をえらい人のやうに
思ひてゐたりき。
子供なりしかな。

×

ふくれたる腹を撫でつつ、
病院の寢臺に、ひとり、
かなしみてあり。

×

目さませば、からだ痛くて
動かれず。
泣きたくなりて夜明くるを待つ。

×

びつしよりと盜汗出てゐる
あけがたの
まだ覺めやらぬ重きかなしみ。

×

ぼんやりとした悲しみが、
夜となれば、
寢臺の上にそつと來て乘る。

×

病院の窓によりつつ、
いろいろの人の
元氣に歩くを眺む。

×

もうお前の心底をよく見屆けたと、
夢に母來て
泣いてゆきしかな。

×

思ふこと盜みきかるる如くにて、
つと胸を引きぬ――
聽診器より。

×

看護婦の徹夜するまで、
わが病ひ、
わるくなれともひそかに願へる。

×

病院に來て、
妻や子をいつくしむ
まことの我にかへりけるかな。

×

もう噓をいはじと思ひき――
それは今朝――
今また一つ噓をいへるかな。

×

何となく、
自分を噓のかたまりの如く思ひて、
目をばつぶれる。

×

今までのことを
みな噓にしてみれど、
心すこしも慰まざりき。

×

軍人になると言ひ出して、
父母に
苦勞させたる昔の我かな。

×

うつとりとなりて、
劍をさげ、馬にのれる己が姿を
胸に描ける。

×

藤澤といふ代議士を
弟のごとく思ひて、
泣いてやりしかな。

×

何か一つ
大いなる惡事しておいて、
知らぬ顏してゐたき氣持かな。

×

ぢつとして寢ていらつしやいと
子供にでもいふがごとくに
醫者のいふ日かな。

×

氷嚢の下より
まなこ光らせて、
寐られぬ夜は人をにくめる。

×

春の雪みだれて降るを
熱のある目に
かなしくも眺め入りたる。

×

人間のその最大のかなしみが
これかと
ふつと目をばつぶれる。

×

廻診の醫者の遲さよ！
痛みある胸に手をおきて
かたく眼をとづ。

×

醫者の顏色をぢつと見し外に
何も見ざりき――
胸の痛み募る日。

×

病みてあれば心も弱るらむ！
さまざまの
泣きたきことが胸にあつまる。

×

寢つつ讀む本の重さに
つかれたる
手を休めては、物を思へり。

×

今日は、なぜか、
二度も、三度も、
金側の時計を一つ欲しと思へり。

×

いつか、是非、出さんと思ふ本のこと、
表紙のことなど
妻に語れる。

×

胸いたみ、
春の霙の降る日なり。
藥に噎せて伏して眼をとづ。

×

あたらしきサラドの色の
うれしさに
箸とりあげて見は見つれども――

×

子を叱る、あはれ、この心よ。
熱高き日の癖とのみ
妻よ、思ふな。

×

運命の來て乘れるかと
うたがひぬ――
蒲團の重き夜半の寢覺めに。

×

たへがたき渇き覺ゆれど、
手をのべて
林檎とるだにものうき日かな。

×

氷嚢のとけて温めば、
おのづから目がさめ來り、
からだ痛める。

×

いま、夢に閑古鳥を聞けり。
閑古鳥を忘れざりしが
かなしくあるかな。

×

ふるさとを出でて五年、
病をえて、
かの閑古鳥を夢にきけるかな。

×

閑古鳥！
澁民村の山莊をめぐる林の
あかつきなつかし。

×

ふるさとの寺の畔の
ひばの木の
いただきに來て啼きし閑古鳥！

×

脈をとる手のふるひこそ
かなしけれ——
醫者に叱られし若き看護婦！

×

いつとなく、記憶に殘りぬ——
Fといふ看護婦の手の
つめたさなども。

×

はづれまで一度ゆきたしと
思ひゐし
かの病院の長廊下かな。

×

起きてみて、
また直ぐ寐たくなる時の
力なき眼に愛でしチュリップ！

×

堅く握るだけの力も無くなりし
やせし我が手の
いとほしさかな。

×

わが病の
その因るところ深く且つ遠きを思ふ。
目をとぢて思ふ。

×

かなしくも、
病いゆるを願はざる心我に在り。
何の心ぞ。

×

新しきからだを欲しと思ひけり、
手術の傷の
痕を撫でつつ。

×

藥のむことを忘るるを、
それとなく、
たのしみに思ふ長病かな。

×

ボロオヂンといふ露西亞名が、
何故ともなく、
幾度も思ひ出さるる日なり。

×

いつとなく我にあゆみ寄り、
手を握り、
またいつとなく去りゆく人々！

×

友も、妻も、かなしと思ふらし——
病みても猶、
革命のこと口に絶たねば。

×

やや遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も——
近づく日のあり。

×

かかる日に
すでに幾度會へることぞ！
成るがままに成れと今は思ふなり。

×

月に三十圓もあれば、田舎にては、
樂に暮せると――
ひよつと思へる。

×

今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば、
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

×

いつしかに夏となれりけり。
やみあがりの目にこころよき
雨の明るさ！

×

病みて四月――
そのときどきに變りたる
くすりの味もなつかしきかな。

×

病みて四月――
その間にも、猶、目に見えて、
わが子の背丈のびしかなしみ。

×

すこやかに、
背丈のびゆく子を見つつ、
われの日毎にさびしきは何ぞ。

×

まくら邊に子を坐らせて、
まじまじとその顏を見れば、
逃げてゆきしかな。

×

いつも、子を
うるさきものに思ひゐし間に、
その子、五歲になれり。

×

その親にも、
親の親にも似るなかれ――
かく汝が父は思へるぞ、子よ。

×

かなしきは、
(われもしかりき)
叱れども、打てども泣かぬ兒の心なる。

×

「勞働者」「革命」などいふ言葉を
聞きおぼえたる
五歲の子かな。

×

時として、
あらん限りの聲を出し、
唱歌をうたふ子をほめてみる。

×

何思ひけむ――
玩具をすてておとなしく、
わが側に來て子の坐りたる。

×

お菓子貰ふ時も忘れて、
二階より、
町の往來を眺むる子かな。

×

新しきインクの匂ひ、
目に沁むもかなしや。
いつか庭の青めり。

×

ひとところ、疊を見つめてありし間の
その思ひを、
妻よ、語れといふか。

×

あの年のゆく春のころ、
眼をやみてかけし黒眼鏡、――
こはしやしにけむ。

×

藥のむことを忘れて、
ひさしぶりに、
母に叱られしをうれしと思へる。

×

枕邊の障子あけさせて、
空を見る癖もつけるかな、――
長き病に。

×

おとなしき家畜のごとき
心となる、
熱やや高き日のたよりなさ。

×

何か、かう、書いてみたくなりて、
ペンを取りぬ――
花活の花あたらしき朝。

×

放たれし女のごとく、
わが妻の振舞ふ日なり。
ダリヤを見入る。

×

あてもなき金などを待つ思ひかな。
寐つ、起きつして、
今日も暮したり。

×

何もかもいやになりゆく
この氣持よ。
思ひ出しては煙草を吸ふなり。

×

或る市にゐし頃の事として、
女の語る
戀がたりに譃の交るかなしさ。

×

ひさしぶりに、
ふと聲を出して笑ひてみぬ――
蠅の兩手を揉むが可笑しさに。

×

胸いたむ日のかなしみも、
かをりよき煙草の如く、
棄てがたきかな。

×

何か一つ騷ぎを起してみたかりし、
先刻の我を
いとしと思へる。

×

五歳になる子に、何故ともなく、
ソニヤといふ露西亞名をつけて、
呼びてはよろこぶ。

×

解けがたき
不和のあひだに身を處して、
ひとりかなしく今日も怒れり。

×

猫を飼はば、
その猫がまた爭ひの種となるらむ。
かなしきわが家。

×

俺ひとり下宿屋にやりてくれぬかと、
今日も、あやふく、
いひ出でしかな。

×

ある日、ふと、やまひを忘れ、
牛の啼く眞似をしてみぬ、——
妻子の留守に。

×

かなしきは我が父！
今日も新聞を讀みあきて、
庭に小蟻と遊べり。

×

ただ一人の
をとこの子なる我はかく育てり。
父母もかなしかるらむ。

×

茶まで斷ちて、
わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる。

×

今日ひよつと近所の子等と遊びたくなり、
呼べど來らず。
こころむづかし。

×

やまひ癒えず
死なず、
日毎にこころのみ險しくなれる七八月かな。

×

買ひおきし
藥つきたる朝に來し
友のなさけの爲替のかなしさ。

×

兒を叱れば、
泣いて、寢入りぬ
口すこしあけし寢顔にさはりてみるかな。

×

何がなしに
肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ——
秋近き朝。

×

秋近し！
電燈の球のぬくもりの
さはれば指の皮膚に親しき。

×

ひる寢せし兒の枕邊に
人形を買ひ來てかざり、
ひとり樂しむ。

×

クリストを人なりといへば、
妹の眼が、かなしくも、
われをあはれむ。

筆先にまくら出させて、
　ひさしぶりに、
　ゆふべの空にしたしめるかた。

×

庭のそとを白き犬ゆけり。
　ふりむきて、
犬を飼はむと妻にはかれる。

山杜鵑

若芽萌ゆ木の間の
下路たどり来ぬれば、
遠方小角の音ぞする。
垣朽ちし古牧の
夕月てらせる草の上に
黄牛しづかにまろべり。

落ちてゆく月の丘邊に
牧の子ひとり走れり、
鞭のひびきをきけるや、
牛皆起ちて啼きぬ。
ふとしも木の間に聲ぞ騒げ、
山杜鵑の名告るや。

（『黄草集』より）

雪の夜

雪ふる夜半のともしび、
きえ、また、明る。――音なし。
白髪かづき垂れたる
眞素足の山の翁、
戸外に立つらむ。――戸こそ鳴け、
ふと灯ぞ消えたれ。――風なり。

（『黄草集』より）

高調

花雲の巻

一

ほの白き曙の神、番紅花の色うすき細雲の帷幄を立ち出でて、東の高欄ものとなく匂ひわたれば、あたたかき眠の懐をのがれし許りの萬有の心靈は、ふるへ動く光の征矢におぼつかなきまだきの帕をはがれて、あしたの望に憧るゝ瞳の色はおのづと蒼穹のはてにむかへり。雲路に通ふ風のほがひに音なく明けし湖面は、さわやかなる波のさざめきに朝の祈禱の諸聲をあげて、涯よりはてにめぐりゆく天の新郎をむかへぬ。

水近き牧野の露に清しく起る草笛のやゝにやすれゆく頃、雲にとよもす勤行の鐘五六の銀聲を點じて、影深き尼寺の森より、律なき讃歌をおくれば、遠に流らふ花紫のかすみに、織り交ふ綾絲あへかなる装ひを罩めし湖は、ゆるぎなき波の上に、たとしへもなき清冽の灝氣をただよはしつ。

かゝれば、あざやかなる落紅をふみて、古りたる鐘楼のきざはしを下りしら若き尼は、白檀の煙をひめし紫衣の袖に椿の一枝を輕らつつみて、嫩葉にあはき波の香の渚路を、程近き廢園の老櫟の樹畔にたどりゆくなりき。

二

ながく垂れし衣の裾をふめる妙なる姿に、輕く一張の龜甲琴を抱いて、あふるゝが如き羅の、襞は右手をまいてわづかに支へつ。うつゝなき想にもゆる瞳の、遠き天路の光に徭るゝ限りなき表情の趣き年若き樂人の立像は、沈みゆく落日の影をあびて、肩にしだるゝ藤波の下にましろく輝けり。金絲に絡む老櫟の青葉深く、青磁の花瓶にさゝげし一枝の眞紅くづれし石壇の落椿、むなしき香り今朝のまゝなるも、悲しく暮るゝ春の愁ぞ。

底ひなき縹緑の水を彩りし花雲のすがたの、木陰地を洩るゝ牧笛の消えゆくまゝに、彩なき領ふる夕の神の裳裾にかくれては、眠はふたたび晝のつとめの後を追ひて、萬象の心靈を司らんとす。かすかなる物の音に、悲しき歌の一ふしをかなでて、石像の前にぬかづきし若人は、靜かにうなだれし頭をもたげて、涙にくもる眼に、けだかきすがたを仰ぎぬ。そらだきの薫ひこそむなしけれ、ゆかしき綠の套を胸に波うたせて、ものとなき思ひにくづをるゝ面影の扮裝、そは若ききはの樂人のならひなりけり。おぼつかなき夕暗の光なればか、瘦せたる面の秀でしかたちは、石彫のそれといたくも似かよひて見えぬ。

ほのかなる風に乘りて、黄昏の色あわたゞしう葉隱れによすれば、影なくとびゆく大空の雲をさゝへて高うそびゆる櫟の老樹は、うちふるふ若葉のそよぎに精靈の囁きを傳ふ。力なくたれし手をあげて、うつゝなき心にすたれたる草舍の跡を見まほしし若人は、物狂ほしき様に涙をはらひて、はかなくうつろふ浮雲の影に、消えゆく夕勤の鐘の、訴ふるが如き音をかごなへそめつ。一點、二點……古き追憶の絲は胸のふかみに動きて、あたらしきうれひの波、流るるが如く樂人の心を襲ひぬ。悲しからずや、枯れたる枝の、遂に若葉の色はそはざりけり。培はざりし園の花の、今年は遂に咲かずなりぬと

て恨むに、さても吾運命の似たらずや。

朝の喜に埒をのがるゝ小羊の心は、限りなき自由ののぞみに憧がる。されど水なき廣野にひねもすつかれては夕の色と共に、おのづともとの牧場にかへる者ぞ。希望の光にかけゆく鳥の、餌なき太虚のまことに困じては、遂に翼をひくき古巣の枝に收めぬ。たどりゆく世は、たとへば幸なき雲の影に似たり。七色ほこる夕虹の姿も、あせては同じ白雲のさびしさぞ。見よ、あしたの光に驕りし自在の翅も、夕は彩なき暗に葬らるるにあらずや。太古の如き山よ、湖よ、まこと永遠の命は自然の齢なる哉。巷のやにむすびし七年のわりなき夢は、節低きメロデーの消えゆくまゝに流して、温かき汝の懐に、再び搖籃の昔をねがふ吾なるを、さりとはなど悲しみの淵より救はざるや。住みしかたみの家は跡方もなく壊れて、父や何處、妹やいかに。えしらぬ胸にはゆかしくもはたうらめしき石彫の姿のそれのみ、あやしき默示を語る如く荒れたる苑の叢にのこりて。——

更けゆく宵の湖ふく風は、行き交ふ雲の間より、はかなき下弦の月のかたぶく光をさそひて、夢より淡き明りをあびたる眞白き像は、たぐひなき神々しき面かげにうかびぬ。玉はしる絃のひゞきは咽ぶが如き一連の樂趣をともなひて、かへすともなき藤波のゆるぎ、活ける許りの肩にかゝりつ。月にかなづる一噌の哀音、淙々として夢幻の境にさまよひ、一韓薫妍たる獨唱の、恥をふくめる曲にうつれば、湧きよる涙に惆悵として、うつゝなき心まづ怪しうほのめき、雲を望める石彫の像、波よる羅綾の袖をたちまちにかへして、橄欖のにほひ又なくほのかなる帛をかいやり、もゆるが如き指の、絃にふるゝと見れば、籥乎たる妙調のにはかに破絃の間にとよめくとぞ覺えし。

けふまでも、たびにして、
ゆめみしまどのゆふひかげ、
たゞおもかげになりはてむ、
あすのそらこそかなしけれ。
わがかくふみもたれよまむ、
わがひくこともたれきかむ。
まとゐして、うたはむと、
しらべなれたるうたのきよく、
たゞまつかぜにのこらむ、
あすのそらこそかなしけれ。
あれみよきたにゆくかりも、
とものかずにははなれぬを。

秋草の卷

一

夢と流るゝ月日、さはいへど、若き樂人の心を刺りぬ。

物狂ほしき幻想につれて、かなで出る哀怨の調べ、靜かによする黄昏の波にたゞよひて、遙かなる深谷の幽禽をうながせば、愴暗たる一道の鬼氣湖上を覆ひ、切々たる悲韻鼻聾に供うて老欅の樹畔をめぐりぬ。吾とわが姿ににたる石彫の像を仰ぎ、たえなんとする憶ひ出の絲をたどりて、うたかたの世に影の如きほまれを競ひし、來し方の夢を懷ひ、更に眦をあげて、一度はすてて走りし千古一色の湖上の天地を望むとき、樂人の胸はたとしへもなき悲しみの幽潭にはまりて、吾とはしらず寂滅の大夢を思ひぬ。

さすらひの亂れ心地は、秋草の花の野にほゝゑむ頃となりて、一きはのうれひをそへぬ。そぼふる秋雨のかなしき音に出でゝ、宿りの窓にしぶく宵々の夢は、たへがたき想像につれて、影なき父の行方に迷ひ、沁み入るが如き尼寺の鐘には、うつゝならぬ痛切の怨に誘はれつ。されど一度とけ難き疑ひのきづなにひかれて、吾からに怪しきねがひを思へば、たちまちにしてほ

のかなるかゞやきの眠るか瞳にうつるなりき。

世をすてし心は、さはれ、藝苑の花にゑひしうつゝなき驕慢をともなひて、大なる自然の搖籃にむかし年らの歡樂を思へり。かくておのづから、絕痛なる悲觀に沈みつゝも、行方しれぬ父と妹をも面かげにして、したひぬ。

悲しからずや、色もあせし秋草の花の、あしたに置かん白霜の辛さをしらで、ひたすらに、夕の星にあこがるも身は。

二

ひと日、うらゝかなる小春のひと日、奇しき運命のかみの力に弄せられて樂人の心は寂滅のさかひに近きぬ。——

秋寒の嵐すさまじき雨のひと夜、くしき緣をなひて合宿のつれ／＼なる心を、すゞろはしき樂人がかなでし一曲の悲調にかたむけし老僧は、あくる朝、かれを伴ひて諸共に、荒れたる園の石彫のすがたに詣でつ。

霜に萎みし高木の葉の、音なく落つる秋のしづけさは、夢むるが如き朝の波にたゞよひて、湖はたぐひなき平和の相恰を裝へり。ゆるぎなきあさの大氣にとよむ尼寺の鐘は、今し最後の一杵を湖のあなたに葬りて、畵ける如き老櫟の樹下に、二人の姿は影の如く草ふみぬ。

ほのかなる光を眉の間によせて、九皐につらなむる高鶴の姿さながらなる老僧は、徐ろに語り出でつ、夢の如き一連の歌物語は、息たえなんとする金鈴兒の露に喞つが如く、あやしき恨をともなひて樂人の胸にひゞきぬ。——

、、、、、、、、、、、、、、、。罪多き子よ、七年のむかし、なが姿の一度この里に消えし夕、捨てられし父はゆくりなくも心狂ひそめぬ。すゞろはしき譫語に汝が名を呼びて、ひたすらに泣きあかせし暫らくは、年若き妹の身にして、如何に愁ひ多き日なりきよ。

春の一日、そぼふる雨の窓に、嘗而なれがかきすてし一曲の譜を誦して、それよりは彼が心にはしなくもゆるが如き願ひを起しつ。おぼつかなき記憶をたよりにて、若き汝が姿は、やせたる父の鑿の手にのぼりぬ。

嘗ては彫塑のわざに、藝苑の名をきそひし身なれば、幸なき半生を鍬にまかせし腕なりとも抑へ難き狂ひ心地はおそろしき者ぞ、永き二年の春をすごして、幾度かこぼたれし彫像は遂になりぬ。雲にほゝゑむ面影の、生けるが如き汝がすがたは、見よ、五年の今にして、かはらぬ色をあしたの露にほこれり。

さすらひの杖を止めて、ゆくりなきえにしをこの里にむすびしその夕よ。あやしからずや、吾は雲水の身を汝が家に休めつゝありき。やせたる腕をなぐるが如く胸におきて、吾とわが技の神々しきたくみに見とれし彼れは、俄かに立ちあがりつ。物におびえし眼は、あやしき色にもえて、たゞならぬ笑ひに蒼ざめし顏をひらき、たふるゝが如く身をかへして、たちまちに窓をたどり出でぬ。如何に、罪多き子よ、汝が姿は再び父の心を破りたり。驚けるは吾のみかは、心よわき汝が妹は、恐れのあまり、色をうしなひて、動きもやらぬ石像の前にたふれつ。…

罪多き子よ、汝がたづぬる父の行方は……、陰慘たる黃昏の湖の底に、とこしへに破れし心を、寂滅の大夢に葬りぬ。其夜、雲を捲いてあらぶる狂亂の嵐起りて、啾々たる天地の慟哭たとへもなく物凄かりしか。

浮雲の如き現世の望みの、如何に慘酷なる犧牲を要するかを思ひ、罪多き子よ、世の程のほまれを追ひて、けがれたる塵の世の片をふみし汝は、恐ろしき極みならずや、遂に父の命をうばひぬ。…

年わかき妹は、吾すゝめにしたがひて、春の如き齡を尼寺の朝夕の鐘に葬る成道の友となりつ。

如何に罪多き子よ、そはやいつとせの昔となりぬ。父のうづみし水は今も深碧に、石にのこせし鑿のにほひは今もあきらかなれど、人は年々にかはりゆくものぞ。めぐりゆく因果の道をなれは恐ろしと思はざるや。……

三

杖にたよる老僧の、破衲風を孕める姿は、漂零として雲ふかき坂路にきえぬ。

されど、色を失ひし樂人は、神の如き石像の前に伏して、永く〳〵頭をだにえあげざりき。

…………めぐりゆく因果の道をなれは恐ろしと思はざるや？……

叫雲の巻

一

妬みの神よ、美しき犠牲の陰府にさそはるゝは霜枯れの葉の一つ〳〵秋風に散りゆくに似たり。實をもむすばで夜嵐にやぶるゝ春の花の、まこと悲しき縁に非ずや。

底しれぬ秘密の色ふかき幽潭の、湧きよる高潮音なくくだるゝ岸をふみて、とこしへに心ふしなひし樂人は影の如く立てり。たゞならぬ眼光のそれも、ありにし父の面影にして。

おそろしき夕の雲のたゝずまひ北にとけて、破碇の矢叫びはやに亂れぬ。墨の如き一道の毒氣うなづらかけて流るれば、あとはあらぶる叫雲の嵐、鬼哭の雨。

二

魔者の呵責かたくななるに、萬有はおのづと口をつぐみぬ。

今は最後のひと時ぞ、地の上に生ある者、吾がのろひを受くるべき時は來りぬ。

眞なき世には、大水の音も響きなく、火焔の目も光なし。首先よ、末後よ、まづ汝が七の星をなげうたずや。……

父もかゝりき、吾もかくなり。朝な〳〵石彫の像に捧げし花の主よ、なれも亦かゝらずや。

幸なき漂零の世に、味氣なき成道も何の興ぞ。

なやみよ、とこしなへに此世の人を襲へ。……

三

雲を貫く紫電のひらめきと共に、叫喚のすさびに交りて鐃々たる狂韻老櫟の樹下に起りつ。

眠るが如き蓮歩の玉人、たちまちにして絶滅の悲戀と現じ、更に雲をよぶ長嘯の慟哭にうつりて、一連の樂趣狂瀾のうちに亂るれば、あはれ痛恨の一曲、ふし半ばにして、千古の高調絃むなしくたえぬ。

　のぞみにあらぬのぞみにて
　このよをゆかむすべあらば

* * * * *

四大にあらぶる狂亂の嵐すでにやみて、波のみ高き黝色のうなづらは、又なく細き新月の光にゑがかれつ。太虚のおもては今し無限の沈默に襲はれぬ。

あゝこの無限の沈默よ。暗より暗に葬られゆく大なる秘密の沈默よ。樂人は身を起して岩頭より、渦巻く高潮の幽潭をのぞめる時、あはれ早や此世ならぬ光に瞳は沈みたりき。

四

年は去りぬ、又去りぬ。雲にとよもす尼寺の鐘あかつきを傳ふれば、渚路の草ふむ尼の春老いし姿あゆみ遲々として、石彫の像のみ永く千古の色をほこりぬ。

されど、天絃の高調ひと度たえては、深碧の湖心月むなしうして、遂に竄棄の妙韻をつたへざりき。

たま〳〵にさすらひゆきし世なりきや夕の雲の嵐にとけし。

（明治三十五年七月發行、「常陽」中學校校友會雜誌第四號所載）

手を見つつ

戀は昔の事。取出でて言ふべきほどの事もなし。されば常ならぬこの懈ましさを假に名づけて若葉のわづらひとや言はむ。訪ひくる人を謝して、昨日も今日も枕に打臥しぬ。

あまり音なきに、もはや霽れたるかと頭もたぐれば、さにあらず、初夏の雨猶しめやかに注けり。やゝありて再び同じことを繰りかへすに、雨なほ降れり、あらず、庭はたゞ細やかに煙れることもとの如し。筋立ちたる己が手をつくづくと見つつ、ふと思出たることこそあれ。

幾年の前なりけむ、我なほ故郷の學堂にありし頃、聲太く眼大いなる友ありて我と親しかりき、その友、よく談り、よく笑ひ、よく泣きぬ。その言葉は水の流るゝが如くならずして、恰も角立ちたる黑き石の山上よりまろび落つるに似たりき。さればその觸るゝ所かならず火を發し響を起しぬ。我に詩を教へ、書を讀むの樂みを教へ、また、夜を徹して語れども盡きぬ青春の憧憬を教へたる、みな彼なりき。情の激する時、彼泣きぬ。我もまた泣きぬ。彼の眉を揚ぐる時は我の肩を聳かす時なりき。彼は我を見て弟と呼びぬ。我は兄とは思はざりき、しかしながら好き友なりき。

「君は頭を洗ふことなきにや？」

かく我の問ひしことあり。友は「ハハ」と高く笑ひぬ。彼の頭には常に雲脂といふもの白かりしなり。また、その衣は垢に染み、その袴は破れたりき。

彼を知るものはまたその少年を知りたるべし。齢は其頃十三にや滿たざりけむ、眉若く、色白く、常に懶しげなる微笑を其顏に絕たざりき。友の行くところ、その少年の行かざるはなかりき。程なくして我も亦その少年と知己になりぬ。また程なくして、その少年の姉とも知己になりぬ。

名はお艶さんと言ひぬ。うれしかりきと言はむか、怖ろしかりきと言はむか、目眩みきと言はむか、我は知らず。はじめて送りし文の返し事を、その人より得たる夜、我は眠ること能はざりき。胸には嵐の吹き、潮の逆卷ける如くにて、口よりは唱名なんどの如くその人の名のみぞ洩れたる、わが驚きは、たとへば目盲ひたる人の遽かに太陽の光を見たらむ如くなりき。新たなる世界に歩み出でたらむ如くなりき。——誰しもおぼえあることなれば詳しくは書かず。

あくる日、我は直ちにこの事を友に告げぬ。友も驚きたるべし。はじめはさらでだに大いなる目を廣く見開きて、火の如くなれるわが顏を見まもりてありしが、

「そは、可からむ……かの人の爲にも。」

かく言ひしその聲のすこし顫ひしは！　あはれ、その聲のいまだ消えざるに、我等二人は旣に千里の溝を隔つるなかとはなりしなりけむ。破れたる袴の膝をムヅと攫めるその手、白く、肌理あらく、而して大なりき。友には非凡なる人に見つべき性の多かりしが——

親しき友に——然り、さばかり親しかりし友に別れたることも、我には何ばかりの悲みにもあらざりき。眉若き少年は日毎に我と遊ぶやうになりぬ。それより月三たびか四たび圓かりし後、友の姿は學堂に見えずなりき。父なる人の亡せしとか聞きぬ。

戀はたとへば乳の如し。そを吸ふあひだはそれにまさる甘きもののなき樣思ふめれど、年や

やゝ長けて種々のもの口にする頃となれば、何となく聰さかりしもの〻樣にぞ思ひ殘さるゝ。——かく言ふは、また、我と心に辯疏するわが日頃の癖にやあらむ。——さて、それより三歳ばかり經し後の事なり。髮をきらむと刃物取上げし女の腕を抑へて、いたくも我の困じたる夜ありき。しかすがに淵瀬に身を投ぐることもなくて、親の言ふがまゝ、その市にても德高き人と言ひなさるゝ、さる教師の許に嫁ぎ行きしが、子一人まうけて後、肺をやみてこの世をはかなくせしとか傳へぬ。或る時わが伯母なる人、かの女のわすれがたみの男の子、貌容のいたくも我に似かよひたりと密かに告げたる事ありしが、そは恐らくは誤なるべし。

一昨年の秋の初め、我、樺太の旅を了へての歸るさに、青森より汽車に乘りぬ。淺蟲を過ぎ、野邊地を過ぎても猶心づかざりしが、沼崎とか言へる小さき停車場を、今しも我等の汽車の發車せむとする間際なりき。わが車窓の前に立ちて、汚れたる手套嵌めし左手を高くさし上げ、朗かに警笛を吹き鳴らしたる男あり。ふと其横顏を見し時のわが驚きやいかに！　汽車は呀と思ふ間もなく揺ぎ出でぬ。

そは彼なりき、擬ふべくもあらぬ彼なりき。

我は次の驛を待つまでもなく、列車の中を通りて後部車掌室に彼をたづねぬ。

「忘れ給ひしか、〇〇君？」

「あ、君は△△君!?」

かく言ひし彼の目には、瞬く間なつかしげなる光の閃くと見えて、やがて消えぬ。いふまでもなく昔のことを思出してにはあらず。その時、我はわが服の彼より美なるを恥づるの心ありき。

「はからざる邂逅なりき。」

「げに。」

「げにはからざる邂逅なりき。」と、我は同じ事のみ繰り返しぬ。「別れて幾年にかなりつらむ……君も少しく老いたる樣見ゆ。」

「君は常に若し。」

その時我は言はう樣なき屈辱を感じぬ。彼の目は直と我を見つめてありき。その態は廣きこの世に何の憚るところも無しといふが如くなりき。その顋を埋めたる鬚は黑かりき。

「何處にか住み給ふ？」と、やゝありて我はまた問ひぬ。

「青森に。」

「青森の何處に？」

「ハハ。」と彼は高く笑ひぬ。「聞いて何の用をかなす？」

「げにさなり。」と我は心に思ひき。

氣拙き邂逅なりしかな。

卯月の夜半

眠れる人はさめてこそ
まことの暗を知るべけれ。
さめたる人は眠にぞ
まことの光したしまむ。

卯月の夜半の花の窓、
夢の樹蔭に身はさめて、
（ねむりか、あらず、永劫の
ゆめの中なるさめ心地。）

天地つつむ花の香の
うるほひふかき影の世や、
さめてさめざる一瞬に
光と暗を忘れける。

（『黄草集』より）

秋風記

綱島梁川氏を弔ふ

小引

明治四十年八月二十五日夜の函館大火は驚くべき慘劇を演出して一時殆ど區の生命を絕てり。予當時彌生尋常小學校に代用敎員たり薄給僅かに十二金遂に一家數人の口を糊すべからず。乃ち函館日々新聞の招に應じ未だ校を辭せざるに暑中休暇を幸とし入りて同社に遊軍たり給十五金の約成る。生れて初めて新聞記者となり僅かに八日を經。火起りて社先づ燒け學校亦烏有に歸す。社は容易に立つ能はざるものの如く學校亦無資格者陶汰の噂頻りなり。九月に入り札幌に在る詞友東希徵向井永太郎君より飛電あり來りて北門新報社に入れ月十五金を給せむと。乃ち其月十三日夕星黑き燒跡に名殘を惜みて秋風一路北に向ひ翌十四日札幌に着き向井君の宿なる北七條西四丁目四、田中方に假寓を定む。翌日初めて露堂小國善平君に逢ふ。君は予と同縣宮古の人今北門の硬派記者たり予を同社に推薦したるは此人なり。十六日より出社し伊藤和光君と共に宿直室にありて校正の事に從ふ。「秋風記」は乃ち此哀れなる校正子が入社の辭にして載せて十八日の紙上にあり。後數日畏友梁川綱島榮一郎氏の訃に接し悲風千里より來るの感あり弔文を草して餘白を借る。連載三日而して其最後の日乃ち二十七日に實に予が小樽日報の創業に參加するの約已に成りたる時にして同日夕予は愴惶行李を整へて小樽に向へりし也。滯在僅々二週日のみ。丁未の秋靜かなる札都の夢は玆に名殘を此二篇に留む。

於小樽花園町　啄木識

秋風記

◎遂に予は放浪の民なり、コスモポリタンの徒なり、天が下家なき兒なり。今年五月の初め、一人みちのくの花を後にして潮速き津輕の海を渡り、巴港灣頭に居をトしてより僅かに百二十有餘日、朝に大森の濱の濤聲を友とし、夕碧血碑畔の暮風に嘯けども、身世の匆劇徒らに苦思を釀すこと多く、胸裡深く飄泊の愁を藏しては又心頭白雲を浮べ、肘を曲げて石上に眠るの閑なし。焉んぞ秀句一絕陶として世を忘るるの興あらむや。友白村とよく飲み白鯨よく歌ふ、相共に携へて高頭笑傲し、漫に世事を罵りて以て僅かに悶を遣りき。八月廿五日の夜、火帝東風に乘じ、其威あたるべからず、紅舌立所に萬戶を舐め盡して熱風海波を沸かし、須臾にして函館の全市殆んど烏有に歸し了んぬ。予一人心に快哉を絕叫して、天火人火、地に革命到るとなせり。人よ、予を以て徒らに世を呪ひ人を咀ふ者となす勿れ。鯨兒尺池に入れば、其水必ず溢る。予が胸中の心火、滅せむとして滅せず、其煙出るの路を知らず、乃ち筆舌をかりて反逆の聲をなすのみ。寧ろ憐れむべから

ずや。

九月十三日夜、星黒き焼跡の風に送られて、予は鐵車一路北遊の途につけり。龜田驛にて友と別るれば身はむさ苦しき車室の中にありて腰下す席もなし。窓を明けて南天臥牛山を望む、沈として眠るが如く劫初より覺めざるが如し。其麓に連れる萬點の火光は予が爲めに懷かしき人々の夢を語りて囁くが如く瞬けり。莊嚴なる夜――歴史以前より變る事なき夜の力は、浩蕩の彼方より迫り來りて予が心を壓しぬ。漸やく一席を得て腰を下し、腕を拱いて瞑目すれば新らしき流離の愁泉の如く湧き來りて涙の味はいとも苦かりき。

翌曉小樽に下車、數刻にして再び車中の人となり、錢函驛を過ぐれば眼界忽ち變じて、秋雲浦を含める石狩の大平原を眺めぬ。赤楊の木立を交へたる蘆荻の間より名知らぬ鳥の飛び立ちたるを見て、何とはなく露西亞の田園を行く思ひしぬ。ツルゲネーフが「獵夫日記」さてはト翁が「コサツク」中の銑獵の章など心に殘れる爲めなるべし。午後一時少し過ぎて身は既に美しき北の都の人なりき。

札幌は實に美しき北の都なり。初めて見たる我が喜びは何にか譬へむ。アカシヤの並木を騒がせ、ポプラの葉を裏返して吹く風の冷たさ。札幌は秋風の國なり、木立の市なり。おほらかに靜かにして人の香よりは樹の香こそ勝りたれ。大なる田舍町なり、しめやかなる戀の多くありさうなる鄕なり、詩人の住むべき都會なり。此處に住むべくなりし身の幸を思ひて、予は喜び且つ感謝したり。あはれ萬人の命運を司どれる自然の力は、流石に此哀れなる詩人をも捨てざりけらし。

札幌に似合へるものは、幾層の高樓に非ずして幅廣き平屋造りの大建物なり、自轉車に非ずして人力車なり、朝起きの人にあらずして夜遲く寢る人なり、際立ちて見ゆる海老茶袴に非ずして、しとやかなる紫の袴なり。不知、北門新報の校正子、色淺黒く肉落ちて世辭に拙く眼のみ光れる、よく此札幌の風物と調和するや否や。

綱島梁川氏を弔ふ

一

仰げば秋晴一碧の天、蒼遠たり、廓寥たり、呼べど答へず、叫べども應ぜず、熒如として宛然一大圓鏡の如く、然も何の寫す所がない。俯せば默々として四大に横はるの地、之を敲けば唯寥々の音ありて地心に響くを聞くのみだ。山死し、林眠り、百歩にしてよく一葉の落つるを聞くべく、流れの水は沈んで、淵を臨めば底なる魚の鱗も數へらるゝ。樹々風に騒いで其幹石の如く堅く、草色光褪せて葉末に重き露の冷たさ。大氣は沈靜にして淸冽、胸を披けば涼爽の氣が立所に骨に沁む。何處を見ても一點浮華の影なく、一塵の立ちて舞ふものがない。げに秋の聲一度立てば、見る物聞く物皆寂然として、些の浮氣なく、些の僞りなく、しめやかに氣が引き緊つて、事物おのづから嚴肅にして眞面目、恰も禪定の境に入つた樣である、こゝに春の夢心地なく、夏の倦怠さなく、總てが氣の弛みの微塵もなき赤裸々の狀である。人此間に立ちて如何に聲を大にして呼ぶとも、其聲遂に空焉、然も照々たる晴光萬物に光被して、云ひ難き一味和樂の温かさが乾坤に充ち滿ちて居る、秋は覺醒の時である、圓熟の時である、諸有色彩の力が弱つて、動かざる物と物との間に、流れてやまざる生命の、永劫の活動を靜觀すべき時である、人が四邊の喧噪から振返つて、一人深く己が心の聲を聞くべき時である。秋の明哲と森嚴と和樂とは生命の奥秘に悟入した哲人

の心である。予札幌に入りて僅かに數日、秋意既に深くして吹く風の冷たさに身も心も緊り、胸の曇りが吹き拂はれて、何かは知らず深い問題の數々に心が向いて行く。此時に當り、突如として秋の如き悟入の人梁川綱島榮一郎氏の訃に接した。

「綱島榮一郎儀養生不相叶昨夜十二時遂に永眠致候間此段御通知申上候」といふ十五日付の黑枠の葉書は極めて明白である。何の奇もない。死は由來最も赤裸々な事實である。然し此赤裸々ほど永劫に解き難き祕密が復と此世にあらうか。世は今秋である。飾りもない僞りもない赤裸々の秋である、此秋の赤裸々のうちに躍る生命の面目も亦永劫に解き難き祕密ではなからうか。予の心は今、大いなる白刃の斧を以て頭を撃たれた樣な氣持がする。況んや予は故人の友の中の寂れなる一人である。梁川氏は實に予の爲めに師であつた、恩友であつた。予の短かき過去の中には、故人の深き同情の外には何物も心を動すことの出來なかつた時代さへあつたのだ。

やるせなき悲みが潮の如く胸に湧いて、今我が心は聲もなく泣くのである。君の死を聞いて悼まぬ人は無からう。一度君の名を知り君の文を讀んだ人は、今皆一樣に君のために哭してあるだらう。然し予は何故か、君のために眞の心を以て泣くのは、廣い世に予一人のみである樣な氣がする。斯くいふのは或は僭越であるかも知れぬ。僭越であるか無いか、それは知らぬが予は唯然く感ずるのである。予の此心を解する人は恐らく有るまい。然し故人が在天の靈のみは、必ず予の此心を諒として哭れる事と信ずる。故人は其生前、癒えざる病の床に居乍ら、筆を取つて一代の求道者を導いた人である。其沈練にして遠神の情趣裕なる文は、說き難く示し難き言外の理を說いて常によく讀む人の心に新らしい力を與へたものであつた。然し予は決して其說によつて故人に歸依した者では無い。予が故人の說に服し難き事は其理由と共に嘗て故人に書き送つた所である。文章は人格の發露である、然し文章其物が故人の全人格ではなかつた。此人格あり、初めて故人は其文によつて一代の人を動かしたのである、靈界の偉人であつたのである。予が其の說に全くは歸依しかね乍ら、然も猶故人の前に踞くを辭せざるのは、實に斯くいふ予自身が、深くも故人の人格の光に溫ためられ、其湖の如き同情を、宛然法恵の雨露の如く身に浴びたからである。我が悲みを以て人よりも一層眞なものであるとする予の心が、少なくとも故人にのみは諒とせらるゝに違ひないと信ずるのは、予自身に於て決して僭越でない、放言でない。然し今は故人の說を是非し評騭する時ではない。且つ、よしや是非し評騭して妥當な結論を得るとしても、それは予と故人との溫かき心の交りに何の影響もない增減もない事である。予は唯、予の心の中にありて永劫に死せざる故人に對して我が思を述ぶれば足りるのである。

二

懷へば二歲餘の昔である。三十八年の五月中旬、塵の都の煩はしき生活に倦み果てて、漫ろに行春の故山の空、曉の林に鳴く閑古鳥の聲の忍ばるゝ頃、新たに梓に上せた「あこがれ」の一卷を懷にして、予は梁川氏を訪れたのであつた。故鄕の禪房に藥餌を友として、白蘋の花を浮べた水鉢の前に氏の文を愛讀した頃から、何日か一度は親しく淸咳に接したいものとは思うて居たが、とりわけて京に入りての後幾日、林外前田君を訪ねて氏の手紙――予が前田君の雜誌に寄せた詩を批評された――を見せられて以來、一層其心を深くして居たものの、牛込市ヶ谷の奥といへば東京の山中、身世の匆

忙に追はれて寧日なき身には、この時迄遂に氏の門を叩く機會がなかつたのである。空晴れて温かく、らうかはしき電車の響きも遠き大久保余丁町は靜かなもの。玄關に立ちておとなへば、氏の令弟なる建部氏が懇懃に取次に出られた。病室にてもお構ひなくばと請ぜられて裏庭へ廻る。廣からぬ庭の青葉を皐月の日光が照りかへして、そことなき初夏の匂ひの心地よさに、先づ胸の中すがすがしく、籬に咲き殘る山吹の花を數へて、廻緣に上れば、障子の中に打沈んだ咳の聲が聞えた。室は六疊の塵一つなき清らかさ。主人の君は白布に掩うた寢具の上に半ば起き上つて、積み重ねた蒲團に凭れて居らるゝのであつた。あはれ十年病臥の人、肉落ち骨痩せて、透き入る許り蒼白き頰には幽かに紅の色がさして居る。これが恐る病を身に持つ人の習ひであるとか聞く。組み合せた纖細き指に目を落して打出でらるゝ言葉は枯れて居る。深い淵の底に沈んだ古への鐘の音の如く枯れてある。不圖面を上げ給へば、我が心の奥まで照すかと見ゆる雙の目の輝きよ。神の惠みを思ふより外に餘念もなき谷間の花の譬とも云はれよう。千萬無量の慈悲の光を湛へた靈魂の鏡とも云はれよう。世を忘れ身を忘れて、目前此崇き人に接した予の心地は譬へ樣もなかつた。予は實際、如何に此世の煩はしさに心惑ひて泣く時でも一度此時の事を思へば、云ひ知らず敬虔の情に打たれて、そことしもなき安心の嬉しみを味はふのである。話題は主に詩と宗教の事であつた。「基督の詩」を說いた人、「詩よりして神に之き神よりして詩にゆく」と眞信の醍醐味を道破せられた人にとつては、詩と宗教とは遂に二つの物ではなかつた。學者博士といはれ、一代の先覺者といはるゝ人にさへよくよく一篇眞の聲をなした詩だに味ふことの出來ぬ輩の多い世に、詣り深き此人の言葉の節々は、如何に年若き予の心を動かしたであらう。日影暖かき障子を明け放せば、青葉の風が疊の上を辷る。話頭は進んで、或は深き寂寥の中に我と我が心に親しむ世外の歡びを語り合ひ、又予の詩に關して嬉しき助言の數々を垂れられた。氏自身の事に就いて最後に云はれた語は次の如くであつた、曰く、我明らかに大いなる神の心を感じたり。神を感じたるものは自己の尊とき使命を自覺せざるを得ず。我如何にして我が使命を現すべきか。我今病あり、立つ能はず、行ふ能はず、乃ち唯一管の筆を以て此の使命を世に傳ふべきのみ。これ我が唯一の神に負へる務也。神の恩寵は深く大いにして限りなし、我が心はいと安らかなり、と。

「揭梁川先生之病室、禁喫煙與長座。主治醫香村生」と題した丈一尺許りの杉板が柱に揭げられてゐた。予は程なくして、此敬虔なる靈界の征服者が、十年一日の如く血を吐く病に臥して、神の恩寵に勇む道場、殘んの山吹籬に散る靜けき病室を辭したのである。そして生き返つた樣な新らしい樂みを胸に藏して、其後二日目か三日目の霧冷かなりし曉、飄然と歸去來を賦して都門を去り、大江戸の夏に背いて岩手の山の麓の人となつた。あはれ彼の日の短かき逢瀨、それこそ實に予と故人梁川氏との交りに於て、最初の、而して又最後の逢瀨ではあつたのだ。

歸り來て、居を杜陵城下に卜して間もなく、一夜氏の夢を見て何となく心安からず、直ちに書を裁して安否を問ふと、「小生が大兄の夢に入りし日、恰も咯血の事あり、本日漸く筆をとる程に成り申候、一種の靈的感應に候ふべし」云々といふ返事が來た。靈的感應の語、之を梁川氏の語として初めて予は深く感ずる所があつた。此後一年許りの間、予も亦健康衰へ、剩さへ一身内外の事甚しく予の心を痛まし

めて、予は殆んど朝夕を分たず、魂を苦き涙の中に浸し、人知れぬ煩悶に骨も肉も刻まるゝ思を嘗めたが、思餘る時々は必ず筆を嚙んで心の數々を梁川氏に訴へたものである。氏も亦常に喜んで予の爲に貴重な時間も惜まず、溢るゝ許りな同情を傾けて返事を惠まるゝのであつた。予が曩に故人の同情の外には何物も心を動かし能はざる時代さへあつたといふたのは、乃ち此當時の事である。其中に予の、あこがれ一を詳細に批評した手紙も貰つた。これは同年九月盛岡から出した雜誌小天地にも揭げてある。

昨年の初め、予は弱り果てた身心の健康を養はむとして、生立の記念多き澁民の林中に、人知れず隱れてから、互ひに消息も卜斷えて居たが、今年の年賀の文には、「小生の病狀もよろしき方に候間御安心被下度」といふ喜ばしい便があつた。五月津輕の海を越えて函館の人となつて以來、暇ある每に起居を傳へて居たが、當時の予の詩を評して「一誦して哀調人に迫る」云々と書かれた葉書こそ、今となつては、予が貰つた故人の最後の水莖の跡となつてしまつたのである。札幌に入りて僅かに數日、まだ一葉の葉書さへ出さぬうちに、何とした事ぞ、我がなつかしき君が長なへの眠りに入りし通知に接せむとは。葉書に縁どつた黑の枠、君は其中に我は其外に、幽明境を異にして、あはれ我が此心、秋風に託して抑奈邊の天に告げようぞ。窓の外、草は亂れて、思も長く風も長く、世は恰も秋、我が眼はあへなくも曇るのである。

三

噫、我が梁川氏は遂に此世を去られた。今の世に於て、多少宗教とか、文學とか、哲學とかに心を入れた者で、我が梁川氏の名を知らぬ人はあるまい。既に其名を知つて、未だ其文を讀まぬ人はあるまい。既に一度といへども其文を讀んで、未だ我が梁川氏を慕はぬ人はなからう。實に故人の深沈なる確信と明徹なる思索と引緊つて溫味のある文とは、如何に潰れた人の心にも、必ず一味彷彿たる安心の涼風を吹き込まねばやまぬ力を有つて居た。世は過渡の時、人は彼方に行き此方に彷ひ、迷は迷を生んで、一代の風潮其歸趣を知らざる時、一切の眩惑を洗ひ落した赤裸々の心魂を以て、靈魂の在家を探れよと叫んだのが、乃ち我が梁川氏である。我等如何に世の所謂學者博士の淺墓な論議に敬意を拂はうとしても、遂に故人が少なくとも來るべき時代の精神的墮落に向ふ人心を呼び返へして、疲れたる足を休むべき樹蔭を敎へ、渴したる喉をうるほす一掬の淸水を與へた恩人、秋風の如き深沈の聲を以て人の心の塵を吹き拂つた哲人、敬虔なる人生の戰士、一代の先覺者であつた事は、認めざるを得ぬ。己を空しうして人を充たし、よし一切を失はしむるとも、己が信じて世の第一の寶とする物を凡ての人に得させむとした故人の心は、少なくとも故人と世を同じうした我等の、永く記して忘るべからざる所である。

予は故人の深く大いなる人格の前には、宛然廓寥たる秋天を仰ぐ樣な心地を以て跪づいた者である。故人の溫かき同情には、荒野の花の夏の雨を喜ぶ如く、喜んで身も濡し心も濡して浴した者である。予は故人に對し、師と呼ぶ、兄と呼ぶ、親しき友と呼ぶ、我が諸有友の中の最も大いなる一人と呼ぶ。そして又、故人の文を讀むに當つても、最もよく同情し、最もよく解し、よく解した一人である事を信ずる。同情して居ながら、然も何故に其說に服し、其理に歸依しなかつたか？　一切を放擲して此秋の如き情人の人の前に平伏しなかつたか？

これは大問題である。人生に於ける最後の大問題である。要するに、人生は兩面である。こ

の兩面は、永劫より永劫に亙る人生の眞面目である。人生を平坦な一面體と思ふのは、地球を平面であるといふ様なものである。人生の兩面は何に基くか。曰く、「生命」の二つの慾望に基く。二つの慾望とは何であるか。曰く、自己發展の意志と自他融合の意志である。予に言はせると、何人に限らず人は必ず其性格に兩面を具へて居る。所謂神も亦兩面の性格を具へて居る。(こは梁川君も認められたる者の如し、病間錄二一五頁「愛」冒頭參照)引包めて言へば、宇宙の根本性格が兩面を具へて居るのだ。(此兩面觀に出立する予の哲學は、予が少なくとも現在に於て、以て最高の思想とする所のものである。)梁川君は人生の一面よりして神に之き、予は他の一面に立つて居る。予は故人の說を解し且つ同情して、然も其說に服する事の出來なかつたのは此爲である。其說に服せざるに不拘、其人格に服したのは、何の爲であるか。之も亦明白な問題である。人生の兩面は永劫に亙る兩面であるけれども、之を一體に包有するものは綜合的個性である。換言すれば偉大なる人格である。二が一になるとは可笑い様だが、其二が本來人生といふ一體の二つの面に過ぎないのだから論理上決して怪むに足らぬ。

此故に、相異れる兩面に出立する人生最底の二大思潮、——假に基督教的及反基督教的と名く——は、其究竟に於て相一致する、否、畢竟同一なものである。唯此境に達するものは、論理の力ではない、綜合的個性乃ち天才のみである。予が、梁川君の說に服せずして其人格に服し、基督教と一致する能はずして、然も耶蘇基督を以て最大人とするのは此爲である。矛盾でもない、撞着でもない。

故人と予との間は、其持する見解に相異あるに不拘、遂に其爲に何の障りもなかつた。故人は何處迄も予の大いなる友である、予は何處迄も故人の哀れなる友である。予の大いなる友は、今既に此世を去つた。取殘された哀れなる友は、今己が心に刻まれて永劫に死せざる友に向つて此言をなしたのである。友の永眠は九月十四日の夜十二時であつたとやら。十四日は予が初つて此秋風の鄉なる札幌に入つた日である。予が北の都の第一夜の夢を結んだ時、友は永久にさめざる夢路に辿り入つたのであらう。人の世の三十五歲、人はいざ知らず、予は決して友の爲めに短かかつたと云はぬ。既に久遠の生命を捉へた哲人梁川にあつては、地上の五年十年、畢竟何する者ぞ、彼は明らかに生死の問題を超越した達人であつたのだ、と、取殘された哀れなる予は、今辛くもみづから慰むるのである。

銃頭を起し照準をさだめたるその時我に
神なし神なし

何時見ても金の無さ相な顏ならむいかに
いかにとつめ寄る男

投げやりし爆彈の爆ぜぬ如くにも張合ぬ
けし今年の秋かな

歌へるは誰ぞや悲しきわが歌をすこし浮
れし調子とりつつ

波來り波去る如く怪しきかな同じことの
み胸に去來す

何となく可笑しき日ありうつらうつら物
忘れせし如き心地に

秋の風海をわたりて殺到す小兒ちまたに
犬と闘ふ

わが少女孕めりといふあはれあはれかか
る諷刺は我未だ聞かず

(明治四十二年五月『スバル』所載の中)

卓上一枝

（一）

●「どうにか成る」てふ思慮は人間の有する一切の知識中の最も大なる知識なりとは、神祕家マアテルリンクの言へる所なり。人既に死生の大事に會す。其力量、其思慮、遂に及ばず。茲に至つて撫然として嘆じて曰く、「どうにか成る。」

●人は常に何者よりも先づ自己を信ぜんとす。然も其力の遂に及ばざるを悟るや、又奈何ともする由なし。乃ち其身心を一擲して、動かすべからざる自然の力に屈服し了る。「どうにか成る」の一語は實に斯くして人生最甚深の聲たらずんば非ず。

●然れども此一語は、蓋じ深く自己を信じ深く個性の權威を是認する者にとりて、此上なき屈辱の聲たらざるなからんや。されば、一面時として自暴自棄の嗟聲たる事あり。然も再度此境に思念し來れば、自然の力に屈服するは却つて動かすべからざる自然の力を以て自己の力とする所以なる事あり。

●ライフイリュージョン（生活幻像）と謂ふ語あり。人をして其無意識の生活を持續せしむる一切の不確實なる慾念、若くは幻影を指して謂ふ。生活幻像は時として希望と稱せられ理想と命名せらる。内、極めて不確實にして、外、徒らに美名を飾るもの。人生由來虛僞多焉。

●一切の生活幻像を剝落したる時、人は現實暴露の悲哀に陷る。現實暴露の悲哀は涙なき悲哀なり。何となれば人一切の幻像に離れたる時唯虛無を見る。虛無の境には熱もなし、涙もなし、唯沈默あるのみ。此境に入れる者は所謂平凡なる悲劇の主人公なり。どうか成ると言ふ人なり。

●吾人は自然派の小說を讀む每に、一種の不安を禁ずる能はず。此不安は乃ち現實暴露の悲哀也。自然主義は自意識の發達せる結果として生れたり。而して其吾人に教訓する所は唯一あるのみ。曰く、「どうにか成る。」「成る樣に成る。」

●吾人は自然主義文學に對する世論の囂々たるを厭ふ。先づ一切の不確實なる成心を除却して、然る後靜かに思ふ可き也。乞ふ問はむ、「人生を司配する者、汝なりや將た彼なりや。」

（二）

●自然主義の發達は、青春の人に歡ばれ、中年以上の人に嫌はる。此現象を見て直ちに自然主義が若き情慾の赤裸々なる描寫を敢てするに歸するは非なり。人は生れて眞なり。漸く老いて漸く虛僞を知る。既に其心的活動の靜止するに至つて、茲に社會的經驗に依つて得たる生活概念を固定し、此概念より組織せる虛僞の法則を作つて人生自然の眞を掩ふ。技巧過重の弊に陷れる文藝を革めんとして生れたる自然主義が、若き人に歡ばれて老いたる人に嫌はる、蓋し故あるなり。

●個性の獨創力は吾人も亦之を是認す。然も之を渾然たる大自然の創造に比較し來れば、廣狹自らにして明かなり。殊に況んや作家が技巧を過重して彫琢之事とするに至つては、淺小なる自家概念に束縛せらるゝ事益々甚しくして、人生自然の眞と相去る事遂に千里萬里の遠きに到る。茲に於てか自然主義あり、一切の法則と虛僞と誤れる概念とを破壞して、在るが儘な

る自然の眞を提げ來る。

●「我は我によつて我の中に我を見る」といふ語、古印度の吠陀讃歌にあり。自然主義は、我によつて我の中に見たる自然の我を以て、一切の迷妄を照破し、一切の有生を率ゐて、一先づ「自然に歸」らしめんとする運動なるのみ。

（三）

●春來らんとして大風雪到る。噫、春來らんとして大風雪到る。家々戸を閉し、息をひそめて爐を擁す。爐中蓄し炭火の氣熾んなるべし。不知、人此境にありて、果して何事をか思念する。

●爐中の火、如何に熾んなりとも、消盡して眞白き灰を殘すの時あるべし。若き人々よ、三度目を瞑りて思へかし。諸子が胸には打沸る紅の血の焰をあげて、生命の活火燃えたり。然れども其火亦何日しか消え盡す時のなからんや。燃えたる火は消ゆべく生れたる者は死すべし。

●噫、若き者は遂に老ゆるぞかし。

●新風九旬、一刻の春宵價千金のみならんや。歌へよ、醉へよ、舞へよ、若き人々。爐の火消えて、汝が生命の火も消えん。春來らんとして大風雪到る。爐を擁して我が感深し。

●「適者生存」の語あり。我等恐らくは今の世に適せじ。されば早晩我等に死ぬべき時來らん。然れども人々よ、眞に永遠に死に果つべき者、果して我等なるべきか、はた彼等なるべきか。

●目を上げて社會を見るの時、我が目殆ど皆裂けんとす。目を落して靜かに社會を思ふの時、我が心、忸怩として黯然たり。不知、此社會を奈何。一念茲に到る毎に、我が耳革命の聲を聞き、我が目革命の血を見る。人は自然に叛逆す、我等は人に叛逆を企つべきのみ。自然に背く者は眞と美に背く者なり。見よ、一羽の鳥だに天空を翔るの翼あるに非ずや。

（四）

●超人（ユーベルメンシュ）なる語あり。フリイドリッヒ・ニイチェ、その半生の心血を注いで「ザラツストラ如是說」に筆を執るや此語を案出し來つて、彼が理想的人格に命名す。ニイチェ不遇、遂に狂してワイマルの瘋癲病院に死し、其名漸く高くして「超人」の一語魔語の如く全歐青年の心に響き渡れりき。北方の巨星イブセン、其作る所の散文劇「ボルクマン」中に一漢子をして此語を語らしむ。

●ニイチェが超人の理想は高くして遠し。心力體力共に人間に超え、自ら呼吸し、自ら思想し、自己の意志によりて自己の生活を營み、絕對なる肯定の世界に在りて、自己竝びに一切を司配する者なり。彼の強きことは希臘の諸神の如し。彼は唯弱きことを以て唯一の罪惡とす。一切の歷史、一切の法則、一切の道德、一切の權威、一切の義務、皆齊しく彼の眼中に無き所なり。

●ニイチェは二十歲にして一大學の助教授たりき、彼は先づ其職務と苦鬪したり、剩さへ彼は多病の資、胸中猛烈なる思想の反噬を藏して、外、病と戰ひ貧と爭へり。彼の一生は多奇なかりしと雖も亦慘澹たる戰ひの一生たり。彼は狂する迄戰つて茲に敗くる事を知らぬ全人格を認めぬ。超人の語は茲に於てか生じぬ。

（五）

●ニイチェの思想的系統は、ショウペンハウエルの子なり。ダンチヒの哲人、世界意志の一元論を立して哲學史上に一大新時期を劃す。貧燈一穗、白眼にして世を看、拮据心血を涸らして其哲學系統を組織し、既にして其道德論を作すに當りて、此俊秀なる天才の精力亦遂に老ゆ、彼は、人生に於ける一切の矛盾撞着爭鬪

混亂を以て個々人活意志の固執に歸し、生活意志の棄却を以て道德の第一議論となせり。然れども、彼既に意志を以て世界の第一元とする以上、此道德論は明らかに彼か哲學の最大矛盾にして、ショウペンハウエルが思想的自殺なり、一切は既に意志を以て立つ、意志の棄却は直ちに人生の破滅たらずして何ぞや。

●ニイチェはショウペンハウエルに入りて其究極を叩き、出でゝ更に自家獨創の哲學を築き上げたり。自家獨創と云ふと雖も然も之實はショウペンハウエル哲學の自然的歸結なり。ニイチェは其鋭利なる眼光を以て先師が思想的醜蹟を道德論に發見し、茲に猛然として詩人的興奮を示し、意志萬能、個性獨住の熱烈なる人生觀を打成し來れり。超人ザラッストラは斯くて彼か最後の理想的絶人なりき。

●「我思想す、故に我在り」とは、近世哲學の鼻祖デカルトが早くも説ける所なり。一切を疑ひ來つて然も自己一人の存在は遂に疑ふの餘地なし。既に自己を肯定す、嚢に疑ひ盡したる一切も亦當に肯定し得べし。茲に至つて暗黑なる否定の世界は一躍して絶對なる肯定に入り、光明遍照して又一陰翳なし。此肯定の世界を司配する者唯自己あるのみ。何となれば、自己ありて然る後に一切ありたればなり。個性の權威は此理に立ちて初めて動かす能はず。

●意志は永遠より永遠に亙る。過去一切の歴史は、人類生存の意志が僅々六千年間に成し得たる短時日の記錄に過ぎざるなり。されば其中に、吾人の未來を規範し得べき何等の權能あることなし。過去の歴史を顧眄して低徊する國民は漸くにして退歩す。過去の經歷を公言して誇驕する人は漸くにして衰耗す。歴史は過去のものなるが故に須らく之を過去と共に葬るべし。新人は唯將に新歴史を作るべきのみ也。ニイチェが一切の歴史を無視する所以此處にあり。

●一切の習慣と云ひ道德といふ社會的法則も亦、新らしき肯定の世界にありては何等存在の理由あること無し。道德とは、弱者の卑怯なる自衞的制約のみ、然らずば、墮落せる凡人社會にのみ必要なる防腐劑のみ、自ら思想し自ら司配する獨立の個性にありては何の要かあらん。

●進化論を是認する者は、啻に過去に於ける進化を是認するに止まらずして、又當に未來に於ける進化をも是認せざるべからず。猿猴の化して人類となる事或は望むべからざらん、然も人間が人間以上たらんとするの希望は、如何なる力を以てしても之を滅却する事能はじ。然らば即ち、吾人がニイチェと共に超人の理想に行くも何の不可かあらん。

●天才ニイチェ、病を友として終生娶らず、孤獨寂寥の境に等身の著述を殘して狂す。彼の說一時全歐の青年を風靡し、餘波絶東の海濱を洗うて、往年中央の論壇ニイチェに關する論爭喧噪を極めたりき。現時我邦の各階級に自意識の瀰漫せる事、因をニイチェ論に發する事多し。自然主義の興起亦間接に彼に負ふ所なしと云ふべからず。彼に對する俗論の非難は、恰も現時自然主義に對するそれの如かりき。然も彼は云へりき、「一人の天才を作らんが爲めには千萬の凡人も又當に犧牲とすべし」と。吾人は假令一世を擧げて吾人を責むるとも、猶喜んで此高俊なる天才の言に聞かんと欲す。

（六）

●矛盾あり、撞着あり、茲に爭鬪を生じ、血を見、涙を見る。慘たる哉、人生は宛然として混亂を極めたる白兵戰場なり。

●我等生を享けて世に處す。笑ふ可きか、はた泣く可きか。笑ふ者には泣くべき時來らむ、泣

く者には笑ふべき日到らむ。噫、我等生を享けて此混亂の世にあり、笑ふ可きか、はた泣く可きか。人は、人の生るゝを吉とし、人の死するを凶とす。然れども一日として人の死せざる日なく、一日として人の生れざる日なし。

●人、此混亂より脫出せんとして常に焦慮す。宗教と哲學と、玆に於てか生ず。既に宗教あり、哲學あり、解脫安立の三昧に入れる者また無きに非ず。然れども吾人は思ふ、宗教と哲學とありて、果して幾分の混亂をか此人生より減じ得たる！

●予嘗て林中の禪房に起臥し、日夕閑寂に居て獨り瞑想に耽り、朝、山に遊んで藥草を採り、夕、足を淸溪に洗うて魚鱗を驚かす。暢々として人生を思ひ、思ふ事深くして疑惑更に疑惑を生む、既にして一元二面論を立し、人生萬事解し得たりとしき。

●白き事實の如き一葉の紙にも表裏あり。陰を見て陽を見ざるものは陰に死し、陽を知りて陰を知らざるものは陽に窮す。ダンチヒの哲人は一切の眞底に意志の聲を聞けり。ニイチェ更に百尺竿頭一步を進めて猛烈なる意力の個性論を說く。其意高くして遠し、然れどもニイチェの見たる所は唯自己擴張の意志而已。若し夫れ自他融合の意志に至つては彼之を捨てて土の如し。リヒャルド・ワグネル、僅かに這間の消息に探入して、其革命樂詩に謳ふ所一再ならざりしと雖も未だ以て到れりとすべからず。根本意志に兩面あり、自己擴張の意志は其一面にして、「自他融合の意志は其他面なり。宇宙に此兩面あり、人生に此兩面あり、個人に此兩面あり。人生一切の事、皆此兩面に歸結して剩す所なし。

●一切の矛盾、一切の撞着、凡そ人生を混亂せしむる一切の因は皆此人生自らの兩面に胚胎し、而して其一切の混亂は、此兩面を調節したる最後の理想的人格の豫想によつて解決し得らる。此立論は予が唯一の哲學なりき。此一家の哲學を立てて予は一切の懷疑霧散したりとせりき。

●然れども悲い哉、予の哲學は予に敎ふるに一事を剩したり。曰く、笑ふ可きか、はた泣く可きか。笑ふべきものならば生きもせむ、泣くべきものならば寧ろ死して墓田に眠を貪るに如かじ。予、此生死の大疑を解く能はずして、弊衣破帽、徒らに雲水を逐うて天下に放浪す。心置くべき家もなく纏るべき袂もなし。

●予は、予の半生を無用なる思索に費したるを悲しむ。知識畢竟何するものぞ。人は常に自己に依りて自己を司配せんとす。然れども一切の人は常に何者にか司配せらる。此「何者」は遂に「何者」なり。我等其面を知らず、其聲を聞かず。之を智慧の女神に問へども默して敎ふる所無焉。

木犀

羽白き鳳に
うちのりて、紫の
晶玉の門ちかく
とび來ぬと、目ざむれば、
おばしまにただひとり、
わが醉はさめはてぬ。
庭ひろき宵暗に
木犀のかをりのみ
いと高く流れたり。

（『黃草集』より）

一握の砂

×

年若き旅人よ、何故にさはうつむきて辿り給ふや、目をあげ給へ、常に高きを見給へ、かの蒼空にまして大いなるもの、何處にあるべしや。如何に深き淵も、かの光の海の深さにまさらず、如何に高き穹窿もかの天堂の高さに及ばじ。目は恆に彼處にあり。たとひ何事を忘るゝとも、わが頭の上の限りなき高さを忘れ給ふこと勿れ。常に目をあげよかし。よし其爲めに、足蹠上の石に躓づきて倒るゝとも、其傷の故に爾の生命を危くすることなからむ。又、蛇ありて爾の脚を嚙むとも、其毒遂に靈魂の花までも枯らすには至らじ。

チスレリーの言ひけらく、青年にして上を仰がずして下を見、其精神の發揚せざるものはこれ地上に匍匐す、べきもの也。

けだかき百合の花は下見てぞ咲く。然れども人々よ、かく思へかし、人の目にふれぬ荒野の百合だにも、其生ひ立つや、莖は皆天を指す也。

×

手に鍬もちて野に立つ人よ、爾何處を耕さむとするや。何故に早く其の鍬を下さざるぞ。野のあまり廣きが故に心迷ひたるか。はた、あまりに地の瘠せたるを惑ふか。

爾の立つ所を深く掘れよかし。さらば清き泉湧き來らむ。これ哲人の訓也。たゞひたすらに爾の立つ所を深く掘れよかし。さらば必ず清き泉湧き來らむ。爾の堪へ難き心の渇を癒すも其泉なり。

又いかに廣き野をも、潤ほしつくして餘りあらむ。いかに瘠せたる土も、その盡くるなき泉の水を灌がば、必ず肥えたる土とならむ。

×

稚兒を見よ。其目の清しきはみ空の星の如く、其頰のふくよかに麗はしきは、なべての花にも木の實にも劣らず。物見るに怖れといふものを知らず、泣くにも笑むにもわが心のまゝにて、欲しと思ふ物あれば手をさしのぶるに誰憚ることなし。神の如き無邪氣とは之なるべし。とりわけて心ひかるゝは、母の乳房にすがれる時也。眞白き胸に顏おしつけて、ひたすらに勢ひよく吸ふさまは、さながら一切の生命を吸ひ盡さむとするものの如し。赤子とはよくも謂ひけるものかな。かく許り赤裸々に、かく許り公明に、かく許り清くして又かく許り弛みなきいのちに充ち滿ちたるもの、げにまたと此世にあるべきやうもなし。昔は賢女コルネリヤ、一婦人のために其所持の寶玉を見むことを望まるゝや、己が愛兒を指して、彼等こそ我が第一の寶玉なれと答へき。まことに然り。たゞ可愛しといふのみにては、恐らくは其意足らじ。神の如く無邪氣なる小兒ほど、何物にもまして貴きものはなからむ。

いかなる人と雖も、先づ世に出るや皆かくの如きなり。然も其最後の日の相同じからざる、何なれば我等の常に見る所の如き乎。人を見、人の言語を多く知るに從つて人は漸く不安を知る也。羞恥を知る也。笑ふにも泣くにも時機を見ることを知る也。我とわが心の自由を殺しゆく也。かくて其日は漸くに天眞の淨き光を失ひ、物を言はむとし、事を爲さむとするに當

りても先づ其事の人のために善なりとせらるべきか、はた惡なりとせらるべきかを顧みるを知り、果は人の思惑にのみ心を牽かれて、心ならざることを言ひ、又は行ふに至り、茲に一切の惡德生る。かくして、其初め薔薇の蕾の如き口より一切の生命を吸はむとしたりしもの、漸くにして自己の生命の月と共に萎み、月と共に衰へゆくを感じ、いひ難き恐怖と悲痛と寂寞に動かされて、靈魂の飢渇堪へがたく、遂には路傍溝中の汚水をも爭うて飲まむとするに至る。この汚水は即ち虛榮也、黃金也、僞善也、迷信也、

かくの如くして、かの小兒の心の全く死し盡したる時、人は之を稱して成人したりと謂ふ。小兒は成人の父なりとは湖畔の詩人が歌へるところなりき。然れども之を今の世に見るに、人は成人たらむとして先づ小兒を殺さざるべからず。噫、神は小兒を作りき、然れども人は成人を作りぬ。草美しき武藏野の上に、日の照し、月の照す、昔にかはらねども、野邊は昔の野邊ならず。誰か東京に入りて古への武藏野を見出しうる者あらむや。草あり、樹あれども紅葉を潛めて其葉生色なく、虛榮と黃金と僞善と迷信に飢ゑたる二百五十萬の人間は、晝となく夜となく血を絞つて雌獅子の如く叫べる也。自然は人類の父母なりき。哀むべき父母は今隨所に其愛兒のために手を咬まれつゝあり、人は自然を殺戮し了らむとして、先づわが小兒の心を殺し盡す。噫、これ豈最も憎むべき叛逆ならざらむや。我等常に思へり、願へり、祈れり、我等をして自然ならしめよと。蓋し自然は、恆に其在るがまゝにして、善ならず又惡ならざれども、然も永なへに眞にして且美なるものなれば也。

然らば即ち小兒こそ誠に成人の父たるべきなれ。大人とは畢竟小兒の成長したるものの謂なるべきのみ。我等何故に赤裸々たる能はざるか。公明なる能はざるか。天眞なる能はざるか。大いなる聲にて物いふ能はざるか。行かむとして行き、爲さむとして爲し、心の儘に笑ひ又泣く能はざるか。その理あるなし。然らば即ち、我等は正に『正しき叛逆』の兒たらざるべからざる也。永なへに眞にして且美なる自然の爲めに憎むべき叛逆を企てつゝある人類に向つて、我等の『正しき叛逆』は最も勇敢に戰はれざるべからず。我等の戰士よ十分に權を蓄へよかし、錆びたる劍をいや更に研げよかし、新らしき旗をつくれよかし、時來らば汝が青駒に鞍おけよかし。たゞ忘るるとも、鎧と甲と楯をば作る勿れ。我等は常に赤裸々ならむ。

これ精鋭なる銃丸と雖も貫く能はざる我等唯一の圓盾也。背後を顧慮する勿れ、たゞ驀然として進め、進みて彼等を牛の如く屠り盡せ。恐るゝ勿れ、彼等の武器は鋭しと雖も皆脆し、我等一度彼等が唯一の殺人器たる『教育』を破壞し盡さば、彼等また何によりてか戰はむ。

世に最も貴きもの三つあり。一に曰く、小兒心。二に曰く、小兒心。三に曰く、小兒の心。あゝ、生れたる儘にて死ぬる人こそ、この世にて一番エラキ人なるべきなれ。

×

適者生存の語あり。思ふに、我等恐らくは今の世に適せじ。されば早晩敗れて死ぬべきの時、我等の上に來らむ。

然れども、眞に永劫に死し果つべき者、我なるべきか、はた彼なるべきか。

×

我六歲にして初めて鄕校に上りし時より今に至るまで、「怠る勿れ」といふ語を聞かされし事、抑も幾千回なりけむ。たゞ聞かされしか

みならず、我みづからも亦、同じ語をもて心を戒めしこと一再ならず。稍長じては、人のために此語をもて戒めたる場合も決して少なからざりし。噫、「怠る勿れ」かく謂ひて戒むる人も、かく謂ひて戒めらるゝ人も、多くは皆怠りてあるこそ淺ましけれ。こゝに大方の人のために、忘るべからざるサルヴァンテスが言あり。曰く、時と稱する大時計には、唯一語の記されあるのみ、曰く「今」又曰く、人はいづれ追々といふ途を過ぎて、遂には決して能はずといふ家に至るもの也。

古詩にも亦同じ意味なるがあり。曰く、無窮其物といへども、一分時の損失を回復するの力あることなし。

閃々と前に落ち後に去る「今」こそは、誠にこれ「永遠」の瞳なるべき也。「今」を捉へよ。然らずんば「永遠」は汝の手より逃げ去らむ。前頭に髪あれども後頭なめらかに禿げて、一度のがせば、追へども追へども捉へ難き「機會」は即ち此「今」也。沙翁の句に曰く、予は時を浪費せり、今や時予を浪費せむとす、と。

×

予は眞理よりも寧ろ眞理を求めてやまざる心を貴しとすとは、哲人スピノザが謂へる所也。ガリリオ、地球回轉説を唱道して當時の教法に觸れ、捕へられ一獄裡の人となるや、一本の麥藁よりして、空洞なる鐵棒は却つて立體鐵棒よりも堅固なる事を悟りき。彼が悟れる所は疑ひもなく眞理なり。然れども、誰れか、ガリリオが獄中猶且眞理を求めてやまざりし心よりも、猶この眞理を貴しとするものぞ。求めよ、さらば與へられむ。一切を求めしむる心ありて、初めて一切は與へらるべし。世には殆んど與へらるることなき人あり、少しく與へらるゝ人あり、多く與へらるゝ人は甚だ少なし。これ他なし、求めてやまざる心の少なきが故なり。

我等も亦、美其物よりも、寧ろ美を求めてやまざるの心を貴しとすべき也。A thing of beauty is a joy forever. いつの世にか美の乏しきを憂へむ。たゞ憂ふべきは、美を求めてやまざる清淨の勇氣の果して我が心に充ち滿ちたりや否やにあり。之を小兒の前に置けば、金剛石と硝子片と何の選ぶ所なき也。美は何處にもあれど、求めざる人のためには唯錯落たる土塊のみ、石礫のみ。美の神は妬みの神なりといへるミケルアンジェロが心こそ偲ばるれ。

いとも貧しき一美術家ありき。常に物置二階にありて、孜々として其業を勵みぬ。壁破れ、柱歪み、一燈煢々として影淡き所、髪は亂れて蓬の如く、面容憔悴して骨徒らに高く、目のみぞ火の如く燃えたる。彼はかくの如くして、寢を忘れ食を忘れ、日夜營々として其鑿を動かせるなりき。一夜、夜漸やく更けて四隣闃たる時、彼は靜かに鑿を捨てて立てり。其目はたとへなき悦びに輝き、其頬は仄かに紅を潮して、いひがたき滿足の微笑を湛へたり。見よ、彼が前に立てる神工生けるが如き一背像を。神ならでげにかくも眞に迫れるものを作りうべしとは思はれざる程なり。彼は今しも之を作り了へたる也。其心の歡び何ものにか若かむ。仄かなる燈火の影さへに、此時一きは明くなれるやうなりき。然も此背像は、唯一個の土偶に過ぎざる也。貧しき彼は大理石の一塊をだに購ふ事能はざりき。既にして彼は歩を移して破れたる窓を開けり、時は恰も秋。萬點の星斗燦として九皐に花を散らし、寥々たる銅色の夜天は嚴かに大地を壓して、何かは知らぬ大いなる祕密の前に、いひ知れず心の躍るもけだかし。大氣はいと冷やかに窓より流れ入りて、消えみ明るみする燈火あやふくも滅えなむず。烈しき霜は來らむとすと呟やきて、彼は窓を閉ぢ、再び

土偶の前に來りつ。作り了へたるのみなれば烈しき霜夜の寒さ或は之を破りなむ。されども貧しき彼は、此室内を温むべき一本の薪をも有せざる也。是に於て、彼は其着たる襤褸を脱して此背像を掩ひぬ。かくて漸やくにしてそれを守り得たりしも、夜明けて後、人其室に入りしに、彼は恰も忠實なる奴隷の如く其作れる背像の下に打臥して、閉ぢたる目は再び開かず、幽かなる微笑を殘して凍死してありき。

噫、汝よ、美を求めてやまざる清淨なる勇氣は、つねにかくの如き也。これ豈此世に於ける最も貴きものならざらむや。彼は死せり。然れども之れ却つて永遠に生くるの道なりき。美は永遠の悦樂也、美を求めてやまざる心ある人は、乃ち又其生命を永遠と共にする人なるべき也。彼は凍死したりき。然れども其背像は美しき大理石にかたどられて今猶巴里美術館中にありといふ。

×

一切を疑ひ盡して、然も遂に疑ふ能はざるもの一あり。自己の存在即之也。旣に我の存在を否定する能はず、勢ひ又彼の存在をも肯定せざるを得ざる也、茲に於てか世界は改造せられ、一切皆肯定の域に入り來る。此新らしき世界にありては、前に無意義たりしもの、生命を有せざりしもの、錯落として互に關係を有せざりし者、皆新らしき意義、新らしき生命、新らしき關係を有して、千百の波瀾を包括したる大靜寧あり、限りなき矛盾を容れて破れざる大調和あり、悲哀の中に歡喜あり。希望は常に眉間に輝き、勇氣はつねに全身に溢る。其眠るや山の如く、其叫ぶや獅子の如く、其行くや嵐の如く、其瞑想するや林の如し。而して其仁慈は鳩の如く、其戰鬪は大海の如し。

かくの如き人は、常に唯一の標準を有するのみ也、即ち我也。我みづからを以て一切の標準となしうるの人は幸ひなるかな。何となれば、彼は先づ最初に我自身の存在を認め、然る後に世界一切の上に其存在を承認したり、彼にありては、世界即ち自己一人の世界也。即ち彼は世界の帝王たれば也。我みづからを以て一切の標準となしうるの人は幸ひなるかな。

×

左に林中の譚を記さむ。

人あり、ひとり林中を行く。樹上幾十尺枝に一疋の猿あり、下瞰して人に問うて曰く、人よ、我は汝等の祖先なるに、汝等何故今我が族を嘲るや。

人曰く、愚なるかな汝、我等文明の人類にして若し汝等猿族の子孫なりとせば、かくいふ我が子孫に古人の如き大英雄の現はれやすらむ。これ想ふべからざる事也。

猿の曰く、噫、人間は憐むべきかな。汝等は既に過去を忘れたり。過去を忘れたるものには、將來に對する信仰あることなし。憐れなる人間よ、滅亡の時早晩汝等の上に來らむ。汝等は進み來りし事と共に更に進みゆくべき事をも忘れたるなれば、今日かくあるが如くにして、遂に死するの外あらじ。

人少しく怒を帶びて曰く、いふ勿れ、汝は猿にあらずや。分を知れよかし。汝は僅かに三本の毛の足らざりし故に、遂に我等萬物の靈長と伍するを得ざりき。思へば可哀想也。汝は家を有たざるにあらずや。又我等の如く衣服を纏ふことをも知らざる也。而して汝等が木の實を喰へる時、我等人間が如何に美味なるものを食しつゝあるかも亦汝等の知らざる所なるべし。

猿笑うて曰く、我何ぞ我が毛三本足らざるを

要へむ。我が毛は四季を通じてこの身を守る自然の衣服也。よし更に二三本増すとも、幾何の温かさか加はらむ。また我が家なしと汝笑へども、今汝は我が家の中に入り來りたるにあらずや。我が家は啻に此處の森のみにあらず、世界いづれの所の森林か我が家たらざらむ。汝斷りもなく我が家に入り來り作ら、何故に挨拶はし給はざりしぞ、そは恐らく禮に厚き人間の道にあらじ。

人聲を荒らげて曰く、降りて來よ、降りて來よ、迅く降りて來よ。我が前に立ちて再び今の言葉を繰り返せ。

猿の曰く、亂暴なる事をいふ客人かな。我は此家の主人なれば、何處に居るとも我が勝手なり。禮に厚き人間よ、汝こそ先づ主人のもとめに從はざるべからじ。願はくは此枝上に來て橡の實にても召し上り給へ。

人枝上を見上ぐれば、猿は遙かに下瞰しつつ、手にて招けり。人は徒らに眼を怒らして仰ぐのみ。

既にして猿復曰く、噫、憐れむべきは人間なるかな。汝等手にて立つこと能はず、又足にて攫むこと能はざれども、見よ我四肢は足にして同時に手なり。其形狀によりて察するに、汝等の四肢も亦其初め兩樣の働きをなしたりし事明らか也。然も今は能はず。疑ひもなく汝等の四肢の歷史は退步の歷史也、遂には何の用をもなさざる時代來らむも知れず。これ畢竟怠慢の結果也。汝等にありて、怠慢の歷史のみぞ日々に進步したるなれ。見よ、汝等が稱して文明の機械といふもの、何れか汝等が怠慢を助長する惡魔の手たらざる。

人叫んで曰く、小賢しき獸よ、迅く降りて來よ。

猿の曰く、凡そ世界に汝等許り常に退步したるものはあらじ。汝等の祖先なる我等を見よ、我等は平面の上を自在に動きうると共に、かく又上下にも自由に動く也。然も汝等は唯平面に動くのみならずや。汝等も其初め樹上に住ひき。然も好んで爬蟲の屬に墮して、地上に下れり。これ墮落にあらずして何ぞや、深く考へ見よ、汝等の立てる地平線と、我が居る樹上と、何れか天に近くして何れか地獄に近きぞや。

人復叫んで曰く、憎むべき獸よ、思ひ知れよかし、我等若し世界中の森林を皆伐り盡さば、汝果して何處にか住まむとすらむ。恐らくは人間の前に叩頭して哀れみを乞ふの外あらじ。

猿曰く、嘖々、汝は遂に人間最惡の思想を吐き出せり。汝等は隨所に憎むべき叛逆を企てて自然を殺さむとす。自然に叛逆するは取りも直さず之れ眞と美とに對して奸惡なる殺戮をなす也、汝等は常に森林を倒し、山を削り、河を埋めて、汝等の平坦なる道路を作らむとす。然れどもその道は眞と美の境——乃ち汝等の所謂天に達するの道にあらずして、地獄の門に至るの道なるを知らざるか。汝等既に祖先を忘れ、自然に背けり。噫、人間ほど此世に呪はるべきものはあらず。

猿はかく謂ひ了りて殆んど人間を憐れむの情に堪へざらむとするものの如し。樹下の人は齒ぎしりしつつ踵をかへし、林を出で去らむとす。猿俄かに問うて曰く、客人よ、汝何處に行かむとするや。

人聲をふるはして答へて曰く、暫らく待ちて居よ。我は先刻より汝の言を多謝す。故に我今わが小銃を採り來つて、汝に酬いむとする也。

言未だ終らず、忽ち數個の橡の實何處よりか飛び來つて人の頭を擊てり。呀と思ふ間なく、樹上俄かに枝鳴り葉戰ぎ、老猿既に林中にあらず。蓋し彼は、枝をわたり宙を飛んで、遠く白

實落日の深山に遁れ去りたるならむ。

×

知識の過重されたる事既に久し。

知識その物には何の價値あることなし。唯、人間の探つて以て何らかの資料となすに至つて初めて相應の價値を生じ來る。

萬事を知りて然も一事をも爲さざる人は、何事をも知らず、又爲さざる人と共に、人生の無用の長物也。知る知らざるに關せず、自ら爲すあるの人は乃ち生甲斐あるの人なり。かるが故に、世には博士といはるゝ人にして一農夫にも劣る人多き也。

共和政治の定義を知らずして世界を治め能ふ者あり。地球の圓形たるを知らずして、地球の大半を支配したる者あり。これトマス・ブラウンが言へる所、以て吾人が座右の銘とするに足る。

×

無形の始より此世にありたるもの何なるべき乎。

答へて曰く、眞と美と生命と。

然らば善と惡とは如何。

答へて曰く、善と惡とは初めよりある理なき也。何事かの成されたる時、人は初めて、それは善也、或は惡なりといふ。故に道德は人間の作れる所、故に又人間によつて破壞されうるもの也、眞人は道德なる防腐劑を要せず。眞にして美なる者は永なへに眞にして美なる也。それは善にもあらじ、又惡にもあらじ。

うたた寢

すぎてゆく聲あり、——木の間花に
靜かに降る法惠の雨に似たり。
或は、今、ゆめみし丘の公孫樹、
現にぞ光流の冠を見よと
こがね雲、ちぎれの葉をしふるや。

うたた寢の幻心地、あはれ、
すぎてゆく聲にしさめて、ひとり、
病ごころ、ときめき來ければ。けにや
葉はおちし林檎の苑のかなた、
中津川きよき水瀬の石に
うたふすずしき聲音、——うれし、
顫音のここにぞかよひ來なる。

川の音、——と思ひ、とぢし眼には、
うかび來ぬ、常磐の海の姿、
廣廣と涯さへ知れぬ蒼み。——
ここにして萬の川を合せ、
ここにして萬の舟のいのち
浮きぬ、また、沈めるありと、見れば、
さながらにわが行く夢の院家。
今遠く夢の大波寄する
ひびきとしきくは、——川音、あはれ
すぎてゆく聲なり。かくて
我はまた深く眠りぬ。

（『黄草集』より）

食ふべき詩

詩といふものに就いて、私は隨分長い間迷うて來た。

啻に詩に就いて許りではない。私の今日迄歩いて來た路は、丁度手に持つてゐる蠟燭の蠟の見る〳〵減つて行くやうに、生活といふものゝ威力の爲に自分の『青春』の日一日に減されて來た路筋である。其時々々の自分を辯護する爲に色々の理窟を考へ出して見ても、それが、何時でも醒る日の自分を滿足させなかつた。蠟は減り盡した。火は消えた。幾十日の間、黑闇の中に體を投出してゐたやうな狀態が過ぎた。やがて其暗の中に、自分の眼の暗さに慣れて來るをぢつとして待つてゐるやうな狀態も過ぎた。

さうして今、全く異なつた心持から、自分の經て來た道筋を考へると、其處に色々言ひたい事があるやうに思はれる。

以前、私も詩を作つてゐた事がある。十七八の頃から二三年の間である。其頃私には詩の外に何物も無かつた。朝から晩まで何とも知れぬ物にあこがれてゐる心持は、唯詩を作るといふ事によつて幾分發表の路を得てゐた。さうして其心持の外に私は何も有つてゐなかつた。――其頃の詩といふものは、誰も知るやうに、空想と幼稚な音樂と、それから微弱な宗教的要素（乃至はそれに類した要素）の外には、因襲的な感情のある許りであつた。自分で其頃の詩作上の態度を振返つて見て、一つ言ひたい事がある。それは、實感を詩に歌ふまでには、隨分煩瑣な手續を要したといふ事である。譬へば、一寸した空地に高さ一丈位の木が立つてゐて、それに日があたつてゐるのを見て或る感じを得たとすれば、空地を廣野にし、木を大木にし、日を朝日か夕日にし、のみならず、それを見た自分自身を、詩人にし、旅人にし、若き愁ひある人にした上でなければ、其感じが當時の詩の調子に合はず、又自分でも滿足することが出來なかつた。

二三年經つた。私がその手續に段々慣れて來た時は、同時に私がそんな手續を煩はしく思ふやうになつた時であつた。さうして其頃の所謂『興の湧いた時』には書けなくつて、却つて自分で自分を輕蔑するやうな心持の時か、雜誌の締切といふ實際上の事情に迫られた時でなければ、詩が作れぬといふやうな奇妙な事になつて了つた。月末になるとよく詩が出來た。それは、月末になると自分を輕蔑せねばならぬやうな事情が私にあつたからである。

さうして『詩人』とか『天才』とか、其頃の青年をわけも無く醉はしめた揮發性の言葉が何時の間にか私を醉はしめなくなつた。戀の醒際のやうな空虛の感が、自分で自分を考へる時は勿論、詩作上の先輩に逢ひ、若くは其人達の作を讀む時にも、始終私を離れなかつた。それが其時の私の悲しみであつた。さうして其時は、私が詩作上に慣用した空想化の手續が、私のあらゆる事に對する態度を侵してゐた時であつた。空想化する事なしには何事も考へられぬやうになつてゐた。

象徵詩といふ言葉が、其頃初て日本の詩壇に傳へられた。私も『吾々の詩は此儘では可けぬ。』とは漠然とながら思つてゐたが、然し其新らしい輸入物に對しては、『一時の借物』といふ感じがついて廻つた。

そんなら何うすれば可いか？　其問題を眞面目に考へるには、色々の意味から私の素養が足らなかつた。のみならず、詩作その事に對する漠然たる空虛の感が、私が心を其一處に集注する事を妨げた。尤も、其頃私の考へてゐた「詩」と、現在考へてゐる「詩」とは非常に違つたものであるのは無論である。

二十歳の時、私の境遇には非常な變動が起つた。郷里に歸るといふ事と結婚といふ事件と共に、何の財産なき一家の糊口の責任といふものが一時に私の上に落ちて來た。さうして私は、其變動に對して何の方針も定める事が出來なかつた。凡そ其後今日までに私の享けた苦痛といふものは、すべての空想家——責任に對する極度の卑怯者の、當然一度は受けねばならぬ性質のものであつた。さうして殊に私のやうに、詩を作るといふ事とそれに關聯した憐れなプライドの外には、何の技能も有つてゐない者に於て一層強く享けねばならぬものであつた。

詩を書いてゐた時分に對する回想は、未練から哀傷となり、哀傷から自嘲となつた。人の詩を讀む興味も全く失はれた。眼を瞑つた樣な積りで生活といふものの中へ深入りして行く氣持は、時として丁度痛い腫物を自分でメスを執つて切開する樣な快感を伴ふ事もあつた。又時として登りかけた坂から、腰に繩を付けられて後ざまに引き下される樣にも思はれた。さうして、一つ處にゐて段々其處から動かれなくなるやうな氣がして來ると、私は殆んど何の理由なしに自分で自分の境遇其物に非常な力を出して反抗を企てた。其反抗は常に私に不利な結果を齎した。郷里から函館へ、函館から札幌へ、札幌から小樽へ、小樽から釧路へ——私はさういふ風に食を需めて流れ歩いた。何時しか詩と私とは他人同志のやうになつてゐた。曾々以前私の書いた詩を讀んだといふ人に逢つて昔の話をされると、嘗て一緒に放蕩をした友達に昔の女の話をされると同じ種類の不快な感じが起つた。生活の味ひは、それだけ私を變化させた。「——新體詩人です。」と言つて、私を釧路の新聞に伴れて行つた溫厚な老政治家が、或人に私を紹介した。私は其時程烈しく、人の好意から侮蔑を感じた事はなかつた。

思想と文學との兩分野に跨つて起つた著明な新らしい運動の聲は、食を求めて北へ北へと走つて行く私の耳にも響かずにはゐなかつた。空想文學に對する倦厭の情と、實生活から獲た多少の經驗とは、やがて私にも其の新らしい運動の精神を享入れる事を得しめた。遠くから眺めてゐると、自分の脫出して來た家に火事が起つて　見る見る燃え上がるのを、暗い山の上から瞰下すやうな心持があつた。今思つてもその心持が忘られない。

詩が內容の上にも形式の上にも長い間の因襲を蟬脫して自由を求め、用語を現代日常の言葉から選ばうとした新らしい努力に對しても、無論私は反對すべき何の理由も有たなかつた。「無論さうあるべきである。」さう私は心に思つた。然しそれを口に出しては誰にも言ひたくなかつた。言ふにしても「然し詩には本來或る制約がある。詩が眞の自由を得た時は、それが全く散文になつて了つた時でなければならぬ。」といふやうな事を言つた。私は自分の閱歷の上から、どうしても詩の將來を有望なものとは考へたくなかつた。曾々其等の新運動にたづさはつてゐる人々の作を時折手にする雜誌の上で讀んでは、其詩の拙い事を心潛かに喜んでゐた。

散文の自由の國土！　何を書かうといふきまつた事は無くとも、漠然とさういふ考へを以て、

私は始終東京の空を戀しがつてゐた。

釧路は寒い處であつた。然り、唯寒い處であつた。時は一月末、雪と氷に埋もれて、川さへ大方姿を隱した北海道を西から東に横斷して、來て見ると、華氏零下二十一三十度といふ空氣も凍つたやうな朝が毎日續いた。氷つた天、氷つた土。一夜の暴風雪に家々の軒の全く塞つた樣も見た。廣く寒い港内には何處からともなく流氷が集つて來て、何日も何日も、船も動かず波も立たぬ日があつた。私は生れて初めて酒を飮んだ。

遂に、あの生活の根調のあからさまに露出した北方殖民地の人情は、甚だしく私の弱い心を傷つけた。

四百噸足らずの襤褸船に乘つて、私は釧路の港を出た。さうして東京に歸つて來た。

歸つて來た私は以前の私でなかつた如く、東京も亦以前の東京ではなかつた。歸つて來て私は先づ、新らしい運動に同情を持つてゐない人の意外に多いのを見て驚いた。といふよりは、一種の哀傷の念に打たれた。私は退いて考へて見た。然し私が雪の中から抱いて來た考へは、漠然とした幼稚なものではあつたが、間違つてゐるとは思へなかつた。さうして其人達の態度には、丁度私自身が口語詩の試みに對して持つた心持に類似點があるのを發見した時、卒然として私は自分自身の卑怯に烈しい反感を感じた。此反感の反感から、私は、未だ未成品であつた爲に色々の批議を免れなかつた口語詩に對して、人以上に同情を有つ樣になつた。

然し其爲に、熱心に其等新らしい詩人の作を讀むやうになつたのではなかつた。其等の人々に同情するといふ事は、畢竟私自身の自己革命の一部分であつたに過ぎない。勿論自分がさういふ詩を作らうといふ心持になつた事もなかつた。「僕も口語詩を作る。」といつたやうな事は幾度も言つた。然しさういふ時は、「若し詩を作るなら、」といふ前提を心に置いた時か、でなくば口語詩に對して極端な反感を抱いてゐる人に逢つた時かであつた。

その間に、私は四五百首の短歌を作つた。短歌！　あの短歌を作るといふ事は、言ふまでもなく彼上の心持と齟齬してゐる。

然しそれには又それ相應の理由があつた。私は小説を書きたかつた。否、書くつもりであつた。又實際書いて見た。さうして遂に書けなかつた。其時、丁度夫婦喧嘩をして妻に敗けた夫が、理由もなく子供を叱つたり虐めたりするやうな一種の快感を、私は勝手氣儘に短歌といふ一つの詩形を虐使する事に發見した。

やがて、一年間の苦しい努力の全く空しかつた事を認めねばならぬ日が來た。

自分で自分を自殺し得る男とはどうしても信じかね乍ら、若し萬一死ぬ事が出來たなら……といふ樣な事を考へて、あの森川町の下宿屋の一室で、友人の剃刀を持つて來て夜半潛かに幾度となく胸にあてて見た……やうな日が二月も三月も續いた。

さうしてる間に、一時脱れてゐた重い責任が、否應なしに再び私の肩に懸つて來た。

色々の事件が相ついで起つた。

「遂にドン底に落ちた。」斯ういふ言葉を心の底から言はねばならぬやうな事になつた。

と同時に、ふと、今迄笑つてゐたやうな事柄が、すべて、急に、笑ふ事が出來なくなつたやうな心持になつた。

さうして此現在の心持は、新らしい詩の眞の

精神を、初めて私に味はせた。

「食ふべき詩」とは電車の車内廣告でよく見た「食ふべきビール」といふ言葉から思ひついて、假に名づけたまでである。

謂ふ心は、兩足を地面に喰つ付けてゐて歌ふ詩といふ事である。實人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩といふ事である。珍味乃至は御馳走ではなく、我々の日常の食事の香の物の如く、然く我々に必要な詩といふ事である。——斯ういふ事は詩を既定の或る地位から引下す事であるかも知れないが、私から言へば我々の生活に有つても無くても何の増減のなかつた詩を、必要な物の一つにする所以である。詩の存在の理由を肯定する唯一つの途である。

以上の言ひ方は餘り大雜駁ではあるが、二三年來の詩壇の新らしい運動の精神は、必ず此處にあつたと思ふ。否、あらねばならぬと思ふ。暫く私の言ふのは、其等の新運動にたづさはつた人達が、其の精神に感じた事を、私は今初めて切實に感じたのだといふ事を承認するものである。

新らしい詩の試みが今迄に受けた批評に就いて、二三言つて見たい。

「なりとである若くはただの相違に過ぎない。」と言ふ人があつた。それは日本の國語がまだ語格までも變る程には變遷してゐないといふ事を指摘したに過ぎなかつた。

人の素養と趣味とは人によつて違ふ。或内容を表出せんとするに當つて、文語によると口語によるとは詩人の自由である。詩人は唯自己の最も便利とする言葉によつて歌ふべきである、といふ議論があつた。一應尤もな議論である。然し我々が「淋しい」と感ずる時に、「あゝ淋しい」と感ずるのであらうか、將又「あな淋し」と感ずるであらうか。「あゝ淋しい」と感じた事を「あな淋し」と言はねば滿足されぬ心には徹底と統一が缺けてゐる。大きく言へば、判斷――實行――責任といふ其責任を回避する心から判斷を胡魔化して置く状態である。趣味といふ語は、全人格の感情的傾向といふ意味でなければならぬのだが、往々にして、その判斷を胡魔化した状態の事のやうに用ひられてゐる。さういふ意味ならば、少くとも私にとつては極力排斥すべき意味である。一事は萬事である。「あゝ淋しい」を「あな淋し」と言はねば滿足されぬ心には、無用の手續があり、回避があり、胡魔化しがある。其等は一種の卑怯でなければならぬ。「趣味の相違だから仕方がない。」とは人のよく言ふところであるが、それは、「言つたとてお前には解りさうにないからもう言はぬ。」といふ意味でない限り、卑劣極まつた言ひ方と言はねばならぬ。我々は今迄議論以外若くは以上の事として取扱はれてゐた「趣味」といふものに對して、もつと嚴肅な態度を有たねばならぬ。

少し別な事ではあるが、先頃青山學院で監督か何かしてゐた或外國婦人が死んだ。其婦人は三十何年間日本にゐて、平安朝文學に關する造詣深く、平生日本人に對しては自由に雅語を驅使して應對したといふ事である。然し、其事は決して其婦人がよく日本を了解してゐたといふ證據にはならぬではなからうか。

詩は古典的でなければならぬとは思はぬけれども、現代の日常語は詩語としては餘りに蕪雜である、混亂してゐる、洗練されてゐない、といふ議論があつた。これは比較的有力な議論であつた。然し此議論には、詩其物を高價なる裝飾品の如く、詩人を普通人以上、若くは以外の如く考へ、又は取扱はうとする根本の誤謬が潜んでゐる。同時に、一現代の日本人の感情

は、詩とするには餘りに蕪雜である、混亂してゐる、洗練されてゐない。」といふ自滅的の論理を含んでゐる。

新らしい詩に對する比較的眞面目な批評は、主として其用語と形式とについてであつた。然らずんば不謹慎な冷笑であつた。唯其等現代語の詩に不滿足な人達に通じて、有力な反對の理由としたものが一つある。それは口語詩の内容が貧弱であるといふ事であつた。

然しその事は最早彼此いふべき時期を過ぎた。

兎にも角にも、明治四十年代以後の詩は、明治四十年代以後の言葉で書かれねばならぬといふ事は、詩語としての適不適、表白の便不便の問題ではなくて、新らしい詩の精神、即ち時代の精神の必要であつた。私は最近數年間の自然主義の運動を、明治の日本人が四十年間の生活から編み出した最初の哲學の萌芽であると思ふ。さうしてそれが凡ての方面に實行を伴つてゐた事を多とする。哲學の實行といふ以外に我々の生存には意義がない。詩が其時代の言語を採用したといふ事も、其尊い實行の一部であつたと私は見る。

無論、用語の問題は詩の革命の全體ではない。

そんなら（一）將來の詩はどういふものでなければならぬか。（二）現在の諸詩人の作に私は滿足するか。（三）抑も詩人とは何ぞ。

便宜上私は、先づ第三の問題に就いて言はうと思ふ。最も手取早く言へば私は詩人といふ特殊なる人間の存在を否定する。詩を書く人を他の人が詩人と呼ぶのは差支ないが、其當人が自分は詩人であると思つては可けない、可けないと言つては妥當を缺くかも知れないが、さう思ふ事によつて其人の書く詩は墮落する……我に不必要なものになる。詩人たる資格は三つある。詩人は先第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」でなければならぬ。第三に「人」でなければならぬ。さうして實に普通人の有つてゐる凡ての物を有つてゐるところの人でなければならぬ。

言ひ方が大分混亂したが、一括すれば、今迄の詩人のやうに直接詩と關係のない事物に對しては、興味も熱心も希望も有つてゐない――餓ゑたる犬の食を求むる如くに唯々詩を求め探してゐる詩人は極力排斥すべきである。意志薄弱なる空想家、自己及び自己の生活を嚴肅なる理性の判斷から回避してゐる卑怯者、劣敗者の心を筆にし口にして僅かに慰めてゐる臆病者、暇ある時に玩具を弄ぶやうな心を以つて詩を書き且つ讀む所謂愛詩家、及び自己の神經組織の不健全な事を心に誇る假患者、乃至は其等の模倣者等、すべて詩の爲に詩を書く種類の詩人は極力排斥すべきである。無論詩を書くといふ事は何人にあつても「天職」であるべき理由がない。「我は詩人なり」といふ不必要な自覺が、如何に從來の詩を墮落せしめたか。「我は文學者なり」といふ不必要な自覺が、如何に現在に於て現在の文學を我々の必要から遠ざからしめつゝあるか。

即ち眞の詩人とは、自己を改善し自己の哲學を實行せんとするに政治家の如き勇氣を有し、自己の生活を統一するに實業家の如き熱心を有し、さうして常に科學者の如き明敏なる判斷と野蠻人の如き率直なる態度を以て、自己の心に起り來る時々刻々の變化を、飾らず僞らず、極めて平氣に正直に記載し報告するところの人でなければならぬ。

記載報告といふ事は文藝の職分の全部でない事は、植物の採集分類が植物學の全部でないと同じである。然し此處ではそれ以上の事

は論ずる必要がない。兎もかく前言つたやうな「一人」が前言つたやうな態度で書いたところの詩でなければ、私は言下に「少くとも私には不必要だ」と言ふ事が出來る。さうして將來の詩人には、從來の詩に關する知識乃至詩論は何の用をもなさない。——譬へば詩、抒情詩はすべての藝術中最も純粹なものであるといふ。或時期の詩人はさういふ言を以て自分の仕事を恥かしくないものにしようと努めたものだ。然し詩は總ての藝術中最も純粹な者だといふ事は、蒸餾水は水の中で最も純粹な者だと言ふと同じく、性質の說明にはなるかも知れぬが、價値必要の有無の標準にはならない。將來の詩人は決してさういふ事を言ふべきでない。同時に、詩及詩人に對する理由なき優待を自ら峻拒すべきである。一切の文藝は、他の一切のものと同じく、我等にとつては或意味に於て自己及び自己の生活の手段であり方法である。詩を尊貴なものとするのは一種の偶像崇拜である。

詩は所謂詩であつては可けない。人間の感情生活（もつと適當な言葉もあらうと思ふが）の變化の嚴密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。從つて斷片的でなければならぬ。——まとまりがあつてはならぬ。（まとまりのある詩即ち文藝上の哲學は、演繹的には小說となり、歸納的には戲曲となる。詩とそれらとの關係は、日々の帳尻と月末若くは年末決算との關係である。）さうして詩人は、決して牧師が說教の材料を集め、淫賣婦が或種の男を探すが如くに何等かの成心を有つてゐては可けない。

粗雜な言ひ方ながら、以上で私の言はんとするところは略解る事と思ふ。——いや、もう一つ言ひ殘した事がある。それは、我々の要求する詩は、現在の日本に生活し、現在の日本語を用ひ、現在の日本を了解してゐるところの日本人に依て歌はれた詩でなければならぬといふ事である。

さうして私は、私自身現在の諸詩人の詩に滿足するか否かを言ふ代りに、次の事を言ひたい。——諸君の眞面目な研究は、外國語の知識に乏しい私の羨やみ且つ敬服するところではあるが、諸君は其研究から利益と共に或禍ひを受けて居るやうな事はないか。假に若、獨逸人は飲料水の代りに麥酒を飲むさうだから我々もさうしようといふやうな事……とまでは無論行くまいが、些少でもそれに類した事があつては諸君の不名譽では在るまいか。もつと率直に言へば、諸君は諸君の詩に關する知識の日に〳〵進むと共に、其知識の上に或る偶像を捧へ上げて、現在の日本を了解することを閑却しつゝあるやうな事はないか。兩足を地面に着ける事を忘れてはゐないか。

又諸君は、詩を詩として新らしいものにしようといふ事に熱心なる餘り、自己及び自己の生活を改善するといふ一大事を閑却してはゐないか。換言すれば、諸君の嘗て排斥したところの詩人の墮落を再び繰返さんとしつゝあるやうな事はないか。

諸君は諸君の机上を飾つてゐる美しい詩集の幾册を焼き捨てて、諸君の嘗て新運動の初期の心持に立還つて見る必要はないか。

以上は現在私が抱いてゐる詩についての見解と要求とを大まかに言つたのであるが、同じ立場から私は近時の創作評論の殆んど總てについて色々言つて見たい事がある。

（四十二年十一月）

きれぎれに心に浮んだ感じと回想

○

数寄屋橋で電車を降りると、出社の時刻まてには、まだ半時間の餘裕があった。不圖、あの物靜かな銀座の裏通りを歩いて見る氣になった。

仰げば空は晴れて、澄んで、微細な隅々までも染み込むやうな秋の温かさに、額が廣くなるやうな氣持のする日であった。風も無かった。

さうして街々の南側の並木からは、乾いたアカシヤや柳の葉が、安心した死方をするやうに、一片二片散ってゐた。

並木！　私は並木が好きだ。

と、其並木の下を、高價な焦茶色の外套を着た一人の老紳士が、太目の洋杖を鋪石に鳴らしつつ、靜かに行きつ戻りつしてゐた。其樣子は、人を待合はしてゐるやうにも、又、何の用もないやうにも見えた。脊は高くなかったが、すらりとして、我々の時代の日本の富有な老人によくある、せせこましい、或はだらしのない、或は辛うじて生きてるやうな、或は人を淩ぐやうな不愉快な體つきではなかった。緩やかに運ばれる赤革の靴が、輕さうであった。

行き過ぎる時に、高い葉卷の香が私の顏に響いた。

微笑が、ひとりでに私の口もとに浮んだ。「幸福！」と私は心の中で言った。老紳士の顏には、適度に働いて來た人の柔かな滿足の表情があった。葉卷を銜へた口を覆ふやうになった髭は、半分以上白かった。

「將來の日本」といふものを暗示するやうな出來事、若くは物に、今迄も我々は毎日のやうに出會ってゐる。然しそれらは、多くは若い人々──然らずんば、日に日に移って行く時代のながれに浮き沈みして、己れ自身の老を忘れてゐる人々によって、爲されたり、或は爲されつつあるところのものである。其處には希望と共に苦痛と不安とがある。若くして生活の勞苦といふものを知った私には、それらの事物に對して、冬の終りに春を待つやうな心持を持つことが出來なくなった。日本が現在の富──物質上にも理想上にも──を得る爲には、今迄にも隨分過度の努力を要した。此上更に何日までこんなはげしい戰を戰はねばならぬかと思ふと、丁度夏の初めのめっきりと暑さを感じた日に、むさ苦しい室の中で眞夏の酷暑を思ひやるやうな心持がする。

又私は、今迄に澤山の老人を見た。然しそれらの老人は、大抵、過度の努力をした從來の日本の爲に年を老ったやうな人達であった。今の日本の老人に洋服を着せたら、恐らくは十人に九人迄はポンチ畫の種にならずには濟むまい。

「我々の將來の滿足！」と私は思った。そして幾度も幾度も振返って其老紳士を見た。

若しや乘捨てた馬車でもあるかと見廻したが、それらしい物は見えなかった。若し其時、生々した眼をした若い女が何處からか出て來て、その紳士と手を組んで、並木の下を歩き出したなら、私はまたどれだけ喜んだか知れない。

○

私には、行った後、言った後、書いた後、若

くは行りつゝ、言ひつゝ、書きつゝ、自分の熱し過ぎる事を悔ゆるやうな場合が多い。すべてに對して平靜公明な心を欲しいものだと時々思ふ。

然し森先生の小說を讀む每に、私は何か別のものが欲しくなる。森先生は餘に平靜である、餘りに公明である、少くとも我々年若い者が御手本とするには。

私は近頃、先生が「假面」を書かれた心を解する緒を何處かへ失つたやうな心持がする。

○

何日か友人と本鄕四丁目の藥師の緣日へ行つた時、ある薄汚い門の下に、古雜誌を並べて賣つてゐる老爺がゐた。何氣なく見ると、其中に明治二十八年頃の「少年世界」が一册あつた。私は躍り上るほど嬉しかつた。幼かつた日の自分に邂逅したやうに思つた。そして買つた。

友人は笑つた。が、其時の私の心持は、一所になつて笑ふには餘りに眞面目であつた。

雜誌には、思軒氏の譯した「十五少年」が載つてゐた。歸つてからそれを讀んで、心ゆく許り幼時の追憶に耽りたいと思つた。然し今日迄、つひぞ手に取つて見た事もない。

價はたしか二錢五厘であつた。その二錢五厘は凡そ私の今迄に費つた金のうちで、最も贅澤な費目の一つであつた――と私は思ふ。

○

同じやうな事がある。矢張其友人と、或日、札幌の話をした時、話の中の女の名を不圖忘れて了つて、どうしても思出せなかつた。それから二三日の間、機會があると考へて見たが、矢張思出す事が出來なかつた。その女といふのは、私が一昨年の秋、二週間札幌に泊つてゐた家の娘であつた。スヰイトピイとかいふ花を机の上の瓶にさして、その前で小聲に讃美歌を歌ひながら、針仕事をしてゐる大人しい娘であつた。

一週間か其餘も經つてからである。其友人と日が暮れてから、本鄕の通りを散步してゐると、色々の花を列べてある植木屋の露店の前に來て、突然、私はその女の名を思出した。大切な落し物を拾つたよりも猶嬉しかつた。そして友人に話した。

友人は「あゝ、さうでしたか。」と言つた。私は口を緊んで、「また贅澤な喜び方をした。」と思つた。

○

或る中年の醫師から、何かの序に梅毒の話を聞かされた事がある。人が梅毒に罹ると、その第一期のうちは、自分の體に確かに梅毒の症候のある事を知り、乃至はそれに對する藥を服用してゐるまでも、猶、「自分は梅毒患者だ」とはつきりは思ひ得ないさうである。さうして見す見す病狀を昻進させるやうな事を敢てするものなさうである。

面白い事だと思つて聞いた。同じやうに、自分の生活は二重の生活だと氣が付いてゐながら、我々にはそれを統一せねばならぬといふ――大事を考へずにゐる場合が多い。さうして全く疲れ果てて了ふまで、二重三重の生活に何處までも沈んで行く。

○

島崎氏は製圖家だ。といふやうな事を、島崎氏の作を手にしてゐない時に、時々私は考へることがある。

精巧なる製圖。普通の讀者が、讀んで面白くないといふのも其爲めである。圖を解する人が見ると、どの作も、どの作も、よく整つて、す

きが無く、それぞれに意味も籠つてゐて、周到な用意を認めずにゐられないのも其爲である。さうして亦何となく生氣の無いのも。――とやうに思へる。

それと關聯した意味からではないが、田山氏には眞面目な建築師といつたやうな態が見える。

日本橋は架替工事中である。私は毎日午前と午後に、あの假橋の上を電車で通る。通るやうになつてから九箇月になるが、工夫共は毎日同じやうな仕事許りしてゐる。それでも何日の間にか、どんな事にも動きさうにない二基の柱礎が出來上つた。――田山氏の事業が今やうやう土臺だけ出來たといふ意味ではないが、日本橋の工事を考へると、不思議に田山氏の事が連想される。

○

嘗て「長者星」といふ不愉快な題の小說が或新聞に出初めた頃、其作者に就いて友人と語つた事があつた。「彼は一種の建築師だ。」私は言つた。「彼は描かず、語らず、寫さず、說かず、歌はず、何も無いところへ色々の石を集めて來て、物語の筋を巧みに組み上げて行く。」

「さうして今度の作には、大隈伯や名高い實業家の談話といふやうな珍らしい石まで集めて來た。」と友人は言つて笑つた。

田山氏を建築師と言ふのと、小杉氏を建築師と言つたのとは、全で意味が違ふ。然し假に二人とも建築師だとすれば、小杉氏の建てる家は上野の博品館のやうなものである。

そんなら田山氏は？

私は、「田山氏自身の家を。」と答へたい。

田山氏の藝術論なり作物なりが、全然私を感服させたといふのではない。然し私は、何によらず、又誰によらず、眞面目に「自身の家」を建てゝゐる人は偉いと思ふ。

「誰だつて畢竟自身の家を建てゝゐる。」と言ふ人があるかも知れない。然しさう言ふ人の意味と私の意味とは違ふやうである。

○

馬車馬！　馬車馬！　前の馬の後に跟いて、重い車を挽きながら、喘ぎ喘ぎ汗を流して坂路を登る馬車馬！

又一方には、突然横合から飛び出して來て、火のついたやうに吠え立てるかと思ふと、何時の間にか並木の下に倒れてゐる饑ゑた瘦犬！

又一方には、「急〳〵と危い。急〳〵と危い。」と言ひながら、何時しか時代のはぐれ者になつて了つた盲牛！

…………。

人生は悲慘だ。然し今の文壇はもつと悲慘だ。

○

「俺の家の廂は低すぎて、暗くて困る。一體廂などといふものは無くても可いものだ、壞して了はう。」と一人が言つた。すると、「全くだ。俺の家では、廂なんか以前に壞れて了つた。屋根まであらかた壞れた。實に明くつて可い。」といふ者が二三人現れた。

それを聞いて、「成程。」と思つた人達は、急いで各自の家へ歸り、今迄は其爲に家の中が暗いのだとも思つてゐなかつた廂は勿論、居室の屋根までも大急ぎに壞しにかかつた。「もつと明く、もつと明く。」といふので、終ひには戶を破り、壁を潰し柱を斷つた。全で競爭の姿だ。中には又、夜寢るに困るので、戶も壁も屋根も表面だけ取はづすやうな仕掛にしたものも多かつた。

斯くして道義的觀念の破產者が、其處にも此

処にも現はれた。初めからこの破産者は、時を得顔に大手を揮つて歩くやうになつた。

風が吹く。雨が降る。寒い冬が來る。

道徳そのものを、無理に推込められた牢獄と思つたのは、間違ひであつた。お互ひが、雨を防ぎ、風を防ぎ、寒い冬を防ぎ、安らかに眠るべき「家」であつた。

道徳は利己だ、と人が言ふ。それで可いではないか。

我々は新らしい「利己の家」を建てねばならなくなつた。

○

人間を實際以上に評價してゐた事は、人間それ自體の生活を改善する上に刺戟を與へた功績はあつたけれども、畢竟、過去の人間の抱いた夢想中の最も大なる夢想であつた。

人間を實際以下に評價する事は、人間それ自體が特に偉いものだといふ謬想を破るべき自省を促した效果はあつたけれども、遂に、現代の人間が抱くあらゆる謬想中の最も大なる謬想である。

言ふ心は、「人間も他の動物の司配されると同じ法則に司配されるものだ。」といふのは可い。それだけなら何の差障りもない。が、「だから、人間の一切の行爲中、他の動物も有するだけの範圍以外の事は、總て虚僞である。」といふやうな考へ方をするのは、恐るべき誤謬だといふのである。

○

世の中には、「よく世話をする人」と言はれる人がある。其人自身、必ずしも富んでゐる譯でも、地位が高い譯でもないが、何か人に頼まれると、必ず何等かの滿足を與へるやうに盡力する。雨の日、風の日、決して勞を厭はない。時としては自ら進んで人の世話を引き受ける。

私は人に何か（譬へば就職の口など）頼まれると、直ぐ喜んで應ずる。其時の私は、誰よりも好意があり、誰よりも同情が深い。あれかこれかと其人の爲に考へて見る。それは決して僞りではない。さうして、私と話してゐる間だけでも、其人が無職業から來る不安を幾分でも和げてゐるのを見るのが滿足である。

然し私は、一應聞合せる位の事はするけれども、未だ嘗て其人を滿足せしむる爲にした「出來るだけ盡力」をするといふ約束を正直に履行した事がない。

長い間「よく世話をする人」と私とは、全く違つた頭腦を持つた人間のやうに思つてゐた。

到頭私は、餘りに利己の念の盛んな自分の性質に厭はしい侮蔑の情を感ずるやうになつた。[illegible]足、下足、放たれる事の出來ない「利己の罠」ほど苦しい縛が何處にあらうか。私は一日でも可いから、自分に對すると同じ熱心を以て、必要を感じて、人の爲めに盡してみたいと此頃思ふ事がある。

○

問題がより大きい時、或は其問題に眞面に立向ふ事が其時の自分に不利益である時、我々は常に、何等かの無理な落着を拵へて自分の正直な心を胡麻化し、若くは回避しようとする。止むを得ない事ではあらうが、一度「自己の徹底」とか「生活の統一」とかいふ要求を感じて來た時に見れば、それは言ふ迄もなく一種の恥づべき卑怯である。

自分自身の昨日迄を省み、新聞、雜誌、著書等によつて窺はれる日本現代の思潮に鑑み、私は今特に此一事を千倍萬倍に誇張して言ひたいやうな心持がする。

長谷川天溪氏は、嘗て其の自然主義の立場か

ら、國家といふ問題を取扱つた時――一見無造作に見える苦しい胡麻化しを試みた。（と私は信ずる。言ふが如く、自然主義者は何の理想も解決も要求せず、在るが儘を在るが儘に見るが故に、秋毫も國家の存在と抵觸する事がないのならば、其所謂舊道德の虛僞に對して戰つた勇敢な戰も、遂に同じ理由から名の無い戰になりはしないか。從來及び現在の世界を觀察するに當つて、道德の性質及び發達を國家といふ組織から分離して考へる事は、極めて明白な誤謬である――寧ろ、日本人に最も特有なる卑怯である。

その事あつて以來、長谷川氏の言は、常に一處に立止まつてゐるやうに私には見える。言ふ事、說く、事凡てその時までに言つた事を繰返し、若くは補正してゐるやうに見える。

田山氏も亦、嘗て「自然主義を單に文藝上の問題として考へて見たい。」といふ意味のことを何かで述べられた。氏の立場としては諒とすべき言葉であるが、一方から見れば、其處に、或物を回避した態度がないと言へない。

田山氏の強味（偉い點）は、氏が、徹頭徹尾、何の躊躇なく、何の煩悶なく、率直に、大膽に、「予は文學者なり。」といふ自信を力強く把持してゐるところに存する。さうして私は、氏の作を讀んだ時、作其物に對する感じ以外に、常に作者自身に對しての或る不滿の情を經驗する。其不滿足は、一言に言へば、即ち、田山氏が徹頭徹尾文學者であるといふ事である。

氏は其作品中の方法論として平面描寫といふ事を提撕した。さうして其主張の實行は氏の作物中の或物に於て滿足して可なる程度の成功を吾人に示した。（尤も氏の作と言へば直ちに其描寫の成功不成功のみを檢めようとする諸評家の對症療法的批評には、私は餘り贊成する事が出來ない。田山氏は其人達の見てゐる以上に、もつと大きい野心家であると私は思ふ。）氏がこれを提撕し且つ實行した意は、言ふ迄もなく、作物より虛僞及び不確實――嚴密なる經驗及び觀察（間接經驗）に基かざる想像（氏は之を漫然空想と呼んだ爲に種々の誤解もあつたやうだ。）――を排除しようといふのであらう。これを作其物の精神から言へば、凡ての作物は、吾人が實際上の經驗から得る「人生の歸結に對する豫想――豫感、暗示、以上の、或は以外の事を表現しよう（謂ふ所の解決といふ事を私は斯う解釋してゐる。）とする虛僞に陷つてはならぬといふ事であらう。

田山氏の意見は、よく私にも解る。が、其作を讀んだ時に感ずる作者自身に對する私の不滿足は、氏が、謂ふ所の解決といふ事に對して、（空想といふ事を漫然と考へたと同じやうな漫然たる考へ方をしてゐるのではあるまいかといふ事である。換言すれば解決といふ事を餘程空想的に考へてゐはしまいかといふ事である。解決その物を漫然と總括的に空想であると考へてゐはしまいかといふ事である。對人生の態度に「批評」といふ事を餘り輕く考へてゐはしまいかといふ事である。（氏の批評的態度が極めて不滿足な狀態にある事は、「妻」其他氏自身を主人公としたと認められる作物に於て、其主人公の性格描寫が殆んど失敗に近い程幼稚な程度にある事が證明する。）――どうも思ふ事が明瞭に言へないが引きくるめて言へば、氏は人生を「描くべき事實」として取扱ふ事即ち氏自身「文學者なり」といふ自信にあまりに熱心なる爲に、文學者といふ職業を離れたる赤裸々な田山氏自身と人生との關係を不問に付して置くやうな傾きがないかと思ふ。――否、確かにあると思ふ。文學と言ふ物が氏の場合に於て、餘りに專門的な物になつてゐはしまいか。普通「人」は實行し且つ觀照しつつあるものであるが、氏

には餘りに其觀照——第一線の態度が多過ぎはしまいか。私は田山氏と人生との間に、常に一定の距離が保たれてゐるやうな感じを不滿足に思ふ。田山氏は文學を人生に近づかしめた、さうして遠ざからしめた。

（まだ言ひ足らぬが、）さうして其處に、私の今の心持から言へば、田山氏の人としての卑怯があると思ふ。私は田山氏の作を讀む毎に、眞面目な心持を要求される。然し未だ嘗てそれ以上を要求された事がない（或は作者はそれ以上を望まぬのかも知れないが）。

以上、二氏に對して卑怯呼ばりをしたのは、私の小さな滿足を求める爲ではない。近頃私は、事々に、第一期の梅毒患者のやうな近代人の心持——特に、我々日本人の不幸なる性情に就いて、苦しく思ふ。——

ああ、頭が少し熱くなつて來た。「二重の生活」といふものに對する私の此倦厭の情は、どうしたら分明と人に解つて貰へるだらうか。

○

永井氏の作が發賣を禁止されたのは、其作に現はれたる非愛國的思想の爲であるといふ。それは虚であらうが、氏の作にさういふ傾のあるのは事實である。

然し私は、近頃、氏の「新歸朝者の日記」を讀んだ時程、不愉快に感じた事はない。あの作には永く東京にゐて金を使つた田舍の小都會の金持の息子が、故郷へ歸つて來て、何もせずにぶらぶらしてゐながら、土地の藝者の野暮な事、土臭い事を、いや味たつぷりな口吻で逢ふ人毎に說いてゐるやうな趣きがある。

○

國家！ 國家！

國家といふ問題は、今の一部の人達の考へてゐるやうに、そんなに輕い問題であらうか？（啻に國家といふ問題許りではない。）

昨日迄、私もその人達と同じやうな考へ方をしてゐた。

今、私にとつては、國家に就いて考へる事は、同時に「日本に居るべきか、去るべきか」といふ事を考へる事になつて來た。

凡ての人はもつと突込んで考へなければならぬ。今日國家に服從してゐる人は、其服從してゐる理由に就いてもつと突込まなければならぬ。又、從來の國家思想に不滿足な人も、其不滿足な理由に就いて、もつと突込まなければならぬ。

私は凡ての人が私と同じ考へに到達せねばならぬとは思はぬ。永井氏は巴里に去るべきである。然し私自身は、此頃初めて以前と今との德富蘇峰氏に或聯絡を發見する事が出來るやうになつた。

○

書きたいと思つた事の十分の一も書かぬうちに、編輯者との約束の日が過ぎて催促の葉書が來た。言ひたいと思つた事も、日を經ればまた私の心から去つて了ふのが常である。私は、言ひたい事を言ふべき舞臺を澤山に持つてゐる人を羨ましいと思ふ。

（四十二年十一月二十五日朝）

一年間の回顧

一

自然主義は文學を解放した。少くとも、しようとした。これは最近數年間に於ける日本文學上の一大事實である。此事實が明治文學史の頁を以前と以後に劃然として區別するものである事に就いては、後世の史家も必らず吾人と意見を共にすべきものである。私は一時々々の現象を過信し、誇張する不聰明な批評家に與しない。同時に、自己の干與しなかつたあらゆる運動と事件とを成るべく實價以下にのみ評價せんとする卑怯な人達にも同じない。

一度解放された文學の主潮は、然し乍ら色々の理由から、まだ行くべき處まで行かずに、途中で停滯し、弛緩しようとする傾向を作つた。如何なる事件、如何なる運動にあつても、時々斯ういふ事に出會す事は免れないものである。而してそれは明治四十二年前半期に於ける我が文壇の概勢であつた。「色々の理由」のうちには、我我は大體に於て、自然主義者それ自身の主張に自己及び自己の文學を全然解放するだけの力の無かつた事（換言すればそれだけの力を得る程までに深い反省を積んでゐなかつた事）と、外部に有力なる刺戟者のゐなかつた事とを數へる事が出來る。今から考へて見て、丁度一年以前、自然主義は今や確實に文壇を占領したと呼號して明治四十二年を迎へた一批評家の言には、一は喜ぶべき、一は悲しむべき兩樣の意味があつたやうに思はれる。

何を以て停滯弛緩の傾向といふ歟。それは、現時の文學的主潮に呼吸を合してゐる人達が各自あの當時の自分の狀態を回想したならば、其處に何となく氣脱けのした、敵を失つたやうな（戰鬪力の散漫した）、一段落のついたやうな心持のあつた事を發見して必らず私の言を承認する事と信ずる。若し此處に一例を擧げて言ふならば、彼の「觀照と實行」に關する自然主義者同志の長談義の如きは、最もよく私の觀測の正しい事を證據立てるものである。あれこそ眞の無駄話であつた、少くとも無駄話に終つた。本來を言ふならば、觀照と實行とは性質の違つたものである。さういふ必要の有無は別として、若し強ひて兩者を說明するならば、觀照は觀念的實行であるといふ德田秋江氏の意見が最も妥當である、從つて實行乃ち實際的行爲は直接したる觀照であるとも言へる、而して文學その物は廣い意味に於て觀照の所産であり、作家の文學的製作の努力は實行の一種であり、讀者が文學的作物を讀むといふ行爲は「觀照せんが爲」といふ目的を置いた準備的實行、學生の勉强と同じである。理窟はこれだけである。若しも此間に更にこれ以上の說明をしようとするならば、それは頭の不透明な人間か、然らずば或る强烈な主觀を發表せんとするに當つて適當なる推理と言語とを見出しかねた人の詠嘆的の所爲であらねばならぬ。尤あの問題は、若し眞に充實した主觀を有つた人の間に眞面目に論議せられたならば、當然、文學と實生活との關係から實際的な文學の目的論を生み、更に作家と實生活上の諸問題との交渉に及んで、其處に進歩したる日本人の反省を一層深くすべき鍵を見出したであらうと思はれる。が、事實に於て、當時の論壇は目的論に向はずして、本性論に還つた。島

村抱月氏の如きは、美學者の言ひ古した假象論から一歩も踏み出してゐない藝術論（題は忘れたが、）隔一線の態度といふ事を言つた論文を擔ぎ出して、成るべく敵及び第三者から乘ぜられまいとする政黨の主領の演說的な言議を試みた。店構へを新らしくして景氣をつけた店で一番上等な櫛笄を買はうとして、昔風な本鼈甲の品物を出されたやうな心持を以て私はあの一文を讀んだ。若しもあの時島村氏と自然主義を催起した時代の精神との間の關係を實際以上に見てゐたなら、私は乾度あの瞬間から自然主義を單に文學上の作風若くは樣式上の新流行に過ぎぬと誤信して了つたかも知れぬ。其の頃、相馬御風氏は亦或雜誌の上で「自然主義者最後の試練は觀照の一事なり」といふ意味の意見を力說した。あの議論を讀んで笑つたといふ人は別に聞かなかつたが、然し若し其論旨を男女關係の上に當嵌めて、「新時代の夫婦の第一の條件は愛なり」と言つたなら、皆笑つたに違ひない。文學は昔から觀照の所產である如く、夫婦は昔から愛を以て成立つたものである。以上は一例に過ぎぬけれども、さういふ解り切つた本性論まで事新らしく持ち出さねばならなかつた明治四十二年前半期の文壇の傾向は、作家の方で目星しい自分の閱歷を書き盡して了つたやうな狀態と共に、一般に弛怠の色を呈してゐた。譬へていふならば、「自然主義の第一期」といふ銀行が、あの頃になつて急に營業資金の不足を告げ、新株の募集も出來ず、廻收も出來ず、遂々固定資本なり積立金なりに手を付けたといふ狀態である。つまり頭が空になつてゐたのである。而して觀照と實行に關する問題は何時の間にか燗冷めの酒の如くなつて捨てられて了つた。あの問題に事實上の解決を與へたものは、私の僅かに畏敬する岩野泡鳴氏の樺太行である。岩野氏は蟹の罐詰業を營まんが爲に明治四十二年の夏と秋とを帝國の最北の領域に送つた。故人長谷川二葉亭氏の露國行の眞意を眞に解する事の出來なかつた文壇の人々は、岩野氏の此行に對しても全く冷淡であつた。（彼等は無論熱心であるべき一つの理由をも有つてゐないには違ひない。）此一事は言ふまでもなく何等日本の文學に關係してゐない、ゐないけれども、然し乍ら、常に目的論を回避し、實生活を顧慮する事を屑しとせざる現時の文學者批評家の、卑怯な、空想的な態度には關係してゐないと言へぬ。

二

第二十五帝國議會が終りに近づいて、「政界縱斷」といふ言葉が政友會の天下に慊らぬ政界の一部の人々に異樣な響きを以て傳唱されてゐた頃、丁度文壇の一方にも「文界縱斷」といふ不思議な言葉が、事ありげに言ひ交されてゐた。進步、大同、又新、戊申の大合同は桂卿の起たなかつた爲に遂に成らなかつたけれども、自然主義反對者の連衡は文藝革新會といふ名の下に形作られた。此革新會は、然し乍ら、其の後の經過を見るに、自然主義が文學上に生んだところの時代の精神そのものに對して、何等否定の理由をも、從つて權能をも有つてゐない點に於て、事實、自然主義に反對する文學的運動といふよりは、自然主義のジヤアナリズムに反對したところの矢張一種のジヤアナリズムといふべきである。革新會の意義と效果とは其處にある。而して、過去に於ても、現在に於ても、又將來に於ても決してそれ以上のものでも、それ以下のものでもない。從つて革新會はそれ自身が明治四十二年の文壇に特殊な、若くは重要な意義を附與したのでは決してない。唯之が自然主義に對する最初の實際的反動であつ

た事と、その反動が、前に言つたやうな狀態に遭遇してゐた自然主義それ自身に取つて一の新らしい刺激であつた事を此處にはいふだけである。

右の事實は、永井荷風氏の作物が自然派非自然派を通じて一般讀書界から異常な歡迎を享けた事實、森田、小宮、安倍諸氏――一新聞記者の所謂青年大學派の崛起した事實、及び過去一年間に起つた色々の事實と共に、明治四十二年に於ける教養ある日本人が――も少し狹く言へば明治の日本人の最初の哲學の萌芽であるところの自然主義的精神が、更に一層其反省を深くせねばならぬ必要があつた事と、而して其新らしい反省が漸く始められた事とを、外部(假に)から暗示するものである。營業資金に窮した銀行は、利上をするか、新株を募集するか、兎も角も其營業方針の上に或る更正を必要とするに當つて、先づ一般經濟界の實情と趨勢とを究めなければならなかつたのである。

而して、自然主義者自身の、海外文學に對する一層の研究とか、實生活に對する眞面目な考量(これは片上天弦氏が十二月の「文章世界」に「人生問題中心の年」といふ題で指摘したと同じ傾向を指す。島村氏の所謂第一議論なども此傾向に含まるべきであらう。此傾向に對して、私は田中喜一氏の批評に重要な教訓を認めるけれど、一般批評家は未だ同氏の批評の根據を了解する程に嚴密な考量を重ねてゐないやうに見える。)とか、作家が漸く、個性の發揮に努めるやうになつたとか、すべて其等の新らしい傾向といひ得るだけの傾向は、内部(假に)から同一の事を暗示するものである。

以上は實に過去一年間に於ける日本文學の主潮の推移の意味である、と私は見る。斯くの如き推移は、決して彼の觀照と實行に關する論議の如く、風の如く消え去るべきではない。新らしい反省の後には新らしい開眼と新らしい活動が出來なければならぬ、私は此の推移の前途に對して、少くとも、彼の第二十六議會に於ける地租輕減論の運命とか、工場法實施後に於ける一般勞働者の思想上の變化とかに對すると同一の熱心と興味とを以て注意するものである。自然主義的思想は明治の日本人の最初の哲學の萌芽である。同時に文學上に於ける自然主義の運動は、其維新以後に於ける新らしい經驗と反省とを包含する時代精神の要求に應ずるやうに文學を改造するところの努力であるとも言へる。從つて、議論の時代は既に過ぎた、これからは實行の時代であるといふやうな言葉は、凡て物を速斷して後で言ひ直す人の口か、然らずば既に思想上の行き詰りに達して更に一躍する必要を感ぜずにゐる一種の落伍者の口からのみ出るべきものである。又世には、自然主義が衰微しかけたとか、非自然主義の議論はすべて時代遲れだとかいふ風な事を公言する人もあるが、我々は決してさういふ膚淺、且つ不謹愼、且つ不聰明な言に耳を假すべきでない。四十何年の間の日本國民の新經驗と新反省とを包含したところの時代の精神は、休みもせず、衰へもせず、時々刻々に進み且つ進んでゐる。この恐るべき精神は、無論、今日迄の、及び今日の文壇の狀態にはまだまだ滿足しないのである。彼此考へ合せて見て目を瞑ると、其處に私は遠く、「將來の日本」の足音を聞く思ひがする。私は勇躍して明治四十三年を迎へようと思ふ。

三

日本現時の狀態は、敢て文學界に限らず、すべて、もつと深い、もつと強い反省を必要とする狀態である。いかなる時代にあつても反省を要しない時代はないのであるが、私は日本の

巻煙草

四十二年の文壇で最も活動した人は誰かと見るに、その事實上に效果を殘した點に於て矢張、田山氏と永井氏を第一に推さねばならぬ。

「妻」に現はされた田山氏の人生觀照の態度の案外幼稚な程度にあることは、材料の選擇に甚だ不聰明で、從つて作を極度に冗漫ならしめた事や、主人公の性格の全く現はれてゐない事や、其心理的經過が頗る徹底してゐない事などによつて略推斷する事が出來る。それが、「田舍教師」になつて來ると、作者との關係の無い事件を取扱つた所爲もあらうが、假令ば他の作家なら省きさうな事柄を省かなかつたところにもそれ相應に見識が見え、從つて平面描寫論を唱へるに至つた氏自身の理窟以外の根據も頷かれた。そして、日露戰役といふ大舞臺を背景にして主人公の淋しく死んで行くところに、私は田山氏の未だ何人にも公言しなかつた或る野心を見た、この野心を私は田山氏に取つて正當なる且つ最良なる野心であると認める。細かく言つて來れば我々も色々の缺點(一例を擧げれば讀賣記者の指摘した、清三が肺病に罹つてからの生理的心理の狀態を閑却した事など)を認めぬ譯には行かぬけれど、何しろ、「田舍教師」一篇が明治四十二年に遺した重要なる記念の一つである事は爭はれない。

序だから言つて置くが、現時の批評家が此大作に對して纏まつた批評を一人も公にしなかつたといふ事は、現時の文學上批評を解する上に忘れてはならぬ事實である。「努力の結果である、乃ち大作である。」といふやうな批評が、若し批評と言ひうるなら極めて無意義な批評といはねばならぬ。

「寫眞」といふ短篇で失敗して「田舍教師」で成功した田山氏の野心を認容する立場からは無論のこと、あらゆる方面から考へて見て、同じ人の「罠」が唾棄すべき作である事は明白である。表白の大膽、形式の自由といふ二つの理由が、一部の人々をしてあの作を買はしめたけれども私には、所詮、田山氏の人生觀にはまだ〳〵幼稚と不聰明と不統一とが夥しく含まれてゐるといふ事を、同じ人の徹底しない論文を讀む時以上に思はせたに過ぎなかつた。そして、あの作には、他の作に於て甚だ少ないところの作家としての不眞面目な氣分が到る處に雜入してゐる。

あゝいふ憐むべき誇張は、然し乍ら田山氏を研究するものの決して見のがしてはならぬところのものである。私は何時か田山氏と性慾問題との關係を論じて、併せて文學書發賣禁止の標準を內務大臣に提示しようと思つてゐる。

○

永井荷風氏については澤山言ひたい事があるけれども此處には唯、氏の活動が明治四十二年以後に於ける最も注意すべき現象である事と、氏自身、色々の意味から考へて、最も有力なる作家の一人である事とを言ふに止めようと思ふ。

人は氏の感情を清新だといふ。それは或程度まで事實である。然し私は、氏の感情は清新といふよりも放恣であると言つた方がもつと適當なやうに思ふ。永井氏の放恣なる感情は、貧弱な日本人の感情生活を雨露の如く濡ほした。多くの青年は、蟻が熱して腐つた林檎に集る

やうに、氏の作の甘く、悩ましく、艶めかしい香ひに酔はされた。

たゞ我々は、如何にこの放恣なる感情の持主を取扱ふべきかについては、十分の考量を費やさねばならぬ事を忘れてはならぬ。

單に感情の清新といふ事だけから言へば、氏よりも水野葉舟氏の方が一層清新であるといふべき理由がある。少くともあの「隅田川」といふ作の如きは、部分々々には立優つた記述もあつたけれども全體として作の價値は硯友社一派の往時の作風以上に一歩も踏み出してゐなかつた。これはあながちあの作に何とか庵蘿月とかいふ昔風の人間が出てゐるから言ふのではない。

「新歸朝者の日記」の中に、男が何とかいふ女に文通を始めるところがあつた。彼處までも感心して成る程外國風だなどと思ひ乍ら讀んだ人は、無論私の言に首肯せぬであらう。

○

四十二年前半期の營業資金缺乏時代から、日本の文學者の海外文學に對する研究が一層眞面目になつたのは事實である。無論それは惡い事ではない。

と同時に、誰某は此處まで行つたから我々も其處まで行かなければならぬとか、「新らしい試み」とかいふ言葉が頻々と耳に入るやうになつた。これは多少戒心すべき事と思ふ、少し沒同情な言ひ方かも知れぬが、人の作を研究するよりも自分自身及び自分の生活する時代と國狀とを研究する方が先きではあるまいか。

文學者が呉服屋や美術商や玩具屋でない限り、「新らしい試み」といふ事は無意義ではあるまいか。事新らしく云ふまでもないが文學は自己の發表である。試み試みと自分でいふ人は、發表の形式の研究者であつて、發表すべき自己その物を閑却してる人のやうに見えないことがないでもない。

○

何と言つても、一番なつかしい人は島崎藤村氏である。

四圍の事物につれて自分の心も騷ぎ立つてる時、その騷ぎ立つてる心の片隅に空虚を感ずる時、私は誰よりも島崎氏に逢ひたい。然し私はまだ一度しかこのなつかしい人の家に入つて見た事がない。或時は途中まで出かけて行つて、もう夕飯だと氣がついて歸つて來た事もあれば、又或時は、氣を變へて、活動寫眞の人込の中に我を忘れよう〳〵としてゐる自分を見出した事もある。が島崎氏に逢ひたいと思ふだけでも、私には何等かの慰藉である場合が多い。

○

世の中には、自分及び自分の仕事を何の考量比較を費すことなくして特に他人及び他人の仕事より尊貴なものとし、何者よりも侵さるゝを許さぬものとしてゐる人がある。例へば、藝術家及び藝術家志望者が自己の天分及び藝術その物に特別な權威あるものの如く考へてゐるが如きである。私はさういふ人の意外に多く存在する事を同情を以て認めてゐる。何故なれば、其等の人々は、さういふ空想を力強く把持してあらゆる道理と事實との前に目を瞑つて過す外には、自己の生活を是認するの途を有たぬ人であるからである。從つて、其等の人々から其の捧げてゐる偶像――架空の信念を奪ふことは、即ち其等の人々の生命を絶つことである。

私は、さういふ憐れむべき人々の言ふ事を聞く時、笑ひたくなるよりも先きに悲しみたくなる。心を空しうして考へて見れば、實際それは滅びかゝつたいのちを取りとめようとして跪い

てある老人の斷末魔よりも悲しいことである。何故なれば其等の人々は多くまだ年若い人々であるからである。

然し其等の人々は決して何事に對しても謙遜ではない。よしや凡てに對して反抗するだけの氣力は無いまでも、猶且謙遜するといふ事を知らない。謙遜する事を知らないのみならず、事實を事實として承認する事を寧ろ恥辱とする風がある。

さういふ自信とさういふ自矜(プライド)!

世には何時からともなく藝術家の自信、藝術家のプライドを寛容し、默認し、其生活の誤謬と言動の自恣とに追求しない風がある。その一般社會から寛容、默認されてゐる所の藝術家の自信とプライドとが若し此處に言つたやうな自信とプライドとであつたならば、私は、世に藝術家ほど憐れむべきものはないと思ふ。

弱者! 自らの弱者たることを認容するを怖れて、一切の事實と道理とを拒否する自墮落な弱者! 私は、希くは再びさういふ弱者になりたくない。

○

「藝術」の偶像の崇拜者よ。爾の迷信を深くせよ。考へるな。物を言ふな。

若しも、「爾の藝術とは抑々何ぞ。」と問ふ者があつたなら、「言つたつてお前には解らない。」たださう答へて去れ。

ただ、ただ爾の迷信を深くせよ。然らずば爾の前には破産あるのみである。

○

安價といふ言葉が流行して來た。

告白せねばならぬだけの誠實なる反省なくして告白された告白は、安價たる告白と呼ばれた。安價なる理想といふ言葉もあつた。

象徴といふ事は表現の手段である。既に手段であるが故に、先づ象徴すべき何物かがあつて、然る後に象徴といふ手段が用ひらるべきである。而してその「何物か」は、必ず其儘では言葉にも形にも表はし得ない、奥深く祕んでゐるところの意味(といふと餘り極限するやうであるが、我々は或意味を感得するに當つて、理性の上に享受する場合もあれば、感情に攝取する場合もある。)でなければならぬ。

若しも象徴といふ事が、單に形を變へ、言葉を變へて表はすといふ事に過ぎなかつたら、それは無用の手數である、言葉の遊戯である、まやかしである、人造金のやうなものである。私は唾棄する。

又若しも、人生に對して何らの誠實なる反省を有たぬところの人が、漫然と放埒なる空想で拵へ上げた不自然な作を以て之が象徴文學であるといふやうな場合があるとすれば、象徴文學といふものは、賣るべき品物がなくてする奸商の廣告のやうなものである。さういふ行爲に對して、實際社會には制裁があるけれども文學上には無い。やがて我々には「安價な象徴」に堪へぬ時代が來る事であらう。

○

浪漫主義は弱き心の所産である。如何なる人にも、如何なる時代にも弱き心はある。從つて浪漫主義は何時の時代にも跡を絶つ事はないであらう。最も強き心を持つた人には最も弱き心がある。最も強き心を持つた時代には最も弱き心がある。

十二月十日の朝日新聞に載つた阿部峙樓氏の「驚嘆と思慕」といふ、情理並び到れる一文は、はしなく私の心を動かした。「自然主義の浪漫的要素を力說したい」といふ氏の心境には言ひがたき懷しさがある。

が、あのうちに氏は、吾人の生活は、「新鮮なる心を失ひて新鮮なる心を愛するの念は愈々募り、生命の尊とさをしみじみと感ずるのに、生命の疲勞次第に身に迫るを覺ゆる生活」であるとして、そして「此の如き狀態に在りて眞正に生きようとする努力の行き途は、唯驚嘆を思慕する情を強め、驚嘆し得ぬ心を悲しむ哀愁の念を深めて、此方面より生命の源に遡るより仕方がない。」と言つてあつた。

果して我々には、實にさうするより外に眞正に生きる途が無いのであらうか。我々の理性は、此の近代生活の病處を研究し、解剖し、分析し、而して其病源をたづねて、先づ我々人間が抱いて來たところのあらゆる謬想を捨て、次で其謬想の誘因となり、結果となつたところの我々の社會生活上のあらゆる缺陷と矛盾と背理とを洗除し、而して、少くとも比較的滿足を與へるところの新らしい時代を作る爲め生活改善の努力を起さしめるだけの用をなし得ぬものであらうか。毒を食はゞ皿までといふ風に、何の反省なしに此の不幸なる生活に沈湎せねばならぬのであらうか。私は現時の自然主義者非自然主義者を通じて大多數の評論家の言議に發見する性急なる思想――出立點から直ぐに結論を生み出し來る沒常識を此のなつかしい言葉の中にも發見せねばならなかつた事を悲む。

浪漫主義は恐らくは我々の心の底に永久に生きるものであらう。それは私も認める。然し私は、どう考へても、この身體、この心を全く盲目的に感情の命令の下に投げ出して了ふ事は出來ない。人間の生活を司配して來たものは人間それ自身である。近代の我々の生活にして我々に不幸なるものであるとすれば、その不幸は人間自らの謬想と不用意の招いた當然の結果でなければならぬ。既に然りとすれば、我々の損失を償ふ者は矢張我々自身の外にない。即ち、我々は我々の自己を徹底し、統一し、其處に我我の行くべき正當なる途を發見し來つて生活を改善せんが爲に、先づ何よりも先きに自己及び自己の生活を反省せねばならぬではないか。

阿部氏の言はんとした事と、私の言はうとする事とは、或ひはかけ離れてゐるのかも知れぬ。それにしても、阿部氏は私の言を認めぬであらうか。

（四十二年十二月二十三日夜）

海邊の春の夜

えも見ぬ花の鳥影、
朧月夜、
春の淡海のかなた
おぼろのけしきを
見しとて、海士が子、ひとり船を
漕ぎ出し話もおもほゆ。
水平線のほのめき、
月のけはひ。
浪みな匂ふ浦回
少女はうたへり。
網干す櫻の枝に花の
搖曳、雲かとばかりに。
汀に足を洗ひて、
波に散らふ
花、片足に斑ら。
かへらぬ海士が子
おもへば、旅の身、わが故郷
今宵の岸こそ忍ばゆ。

（「黄草集」より）

性急な思想

一

最近數年間の文壇及び思想界の動亂は、それにたづさはつた多くの人々の心を、著るしく性急にした。意地の惡い言ひ方をすれば、今日新聞や雜誌の上でよく見受ける「近代的」といふ言葉の意味は、「性急なる」といふ事に過ぎないとも言へる。同じ見方から、「我々近代人は」といふのを「我々性急な者共は」と解した方が其人の言はんとするところの内容を比較的正確に且つ容易に享入れ得る場合が少くない。

人は、自分が從來服從し來つたところのものに對して或る反抗を起さねばならぬやうな境地（と私は言ひたい。理窟は凡て後から生れる者である。）に立到り、そして其反抗を起した場合に、其反抗が自分の反省（實際的には生活の改善）の第一歩であるといふ事を忘れてゐる事が、往々にして有るものである。言ひ古した言ひ方に從へば、建設の爲の破壞であるといふ事を忘れて、破壞の爲に破壞してゐる事があるものである。戰爭をしてゐる國民が、より多く自國の國力に適合する平和の爲といふ目的を沒却して、戰爭其物に熱中する態度も、その一つである。さういふ心持は、自分自身の其現在に全く沒頭してゐるのであるから、世の中にこれ位性急な（同時に、石鹸玉のやうに張りつめた、そして、いきり立つた老人の姿勢のやうに隙だらけな）心持はない。……さういふ心持が、善いとも、又惡いとも言ふのではない。が、さういふ心持になつた際に、當然氣が付かなければならないところの、今日の仕事は明日の仕事の土臺であるといふ事――從來の定說なり習慣なりに對する反抗は取りも直さず新らしい定說、新らしい習慣を作るが爲であるといふ事に氣が付くことが、一日遲ければ一日だけの損だといふのである。そして其損は一人の人間に取つても、一つの時代に取つても、又それが一つの國民である際でも、決して小さい損ではないと言ふのである。

妻を有ちながら、他の女に通ぜねばならなくなつた、或はさういふ事を考へねばならなくなつた男があるとする。そして、有妻の男子が他の女と通ずる事を罪惡とし、背倫の行爲とし、唾棄すべき事として秋毫寬すなき從來の道德を、無理であり、苛酷であり、自然に背くものと感じ本來男女の關係は全く自由なものであるといふ原始的事實に論據して、從來の道德に何處までも服從すべき理由とては無いのだと考へたとする。其處までは可い。若しも其際、問題の目的が――然らば男女關係の上に設くべき、無理でなく、苛酷でなく、自然に背くものでないところの制約はどんなものであらねばならぬか――といふ事であるのを忘れて了つて、既に從來の道德は必然服從せねばならぬものでない以上、凡ての夫が妻ならぬ女に通じ、凡ての妻が夫ならぬ男に通じても可いものとし、乃至は、さうしない夫と妻とを自覺のない狀態にあるものとして憫れむに至つては、性急も亦甚だしいと言はねばならぬ。其結果は、啻に道德上の破産であるのみならず、凡ての男女關係に對する自分自身の安心といふものを全く失つて了はねば止まない、乃ち、自己其物の破産である。問題が親子の關係である際も同じである。

二

右の例は、一部の人々ならば「近代的」といふ事に緣が遠いと言はれるかも知れぬ。そんなら、此處に一人の男（假令ば詩を作る事を仕事にしてゐる）があつて、自分の神經作用が從來の人々よりも一層鋭敏になつてゐる事に氣が付き、そして又、それが近代の人間の一つの特質である事を知り、自分もそれらの人々と共に近代文明に醸されたところの不健康（には違ひない）な狀態にあるものだと認めたとする。それまでは可い。若しも其際に、近代人の資格は神經の鋭敏といふ事であると速了して、恰も入學試驗の及第者が喜び勇んで及第者の群に投ずるやうな氣持で、（其實落第者であり乍ら。――及第者も落第者も共に受驗者である如く、神經組織の健全な人間も不健全な人間も共に近代の人間には違ひない。）其不健全を恃み、且つ誇り、更に、其不健全な狀態を昂進すべき色々の手段を採つて得意になるとしたら、どうであらう。其結果は言ふまでもない。若し又、さうしなければ所謂「新らしい詩」「新らしい文學」は生れぬものとすれば、さういふ詩、さういふ文學は、我々――少くとも私のやうに、健康と長壽とを欲し、自己及自己の生活（人間及び人間の生活）を出來るだけ改善しようとしてゐる者に取つては、無暗に強烈な酒、路上でも交接を遂げたさうな顏をしてゐる女、などと共に、全然不必要なものでなければならぬ。時代の弱點を共有してゐるといふ事は、如何なる場合の如何なる意味に於ても、且つ如何なる人に取つても決して名譽ではない。

性急な心！　その性急な心は、或は特に日本人に於て著るしい性癖の一つではあるまいかと、私は考へる事もある。古い事を言へば、あの武士道といふものも、古來の迷信家の苦行と共に世界中で最も性急な道德であるものと言へば言へる。……日本は其國家組織の根柢の堅く、且つ深い點に於て、何れの國にも優つてゐる國である。從つて、若しも此處に眞に國家と個人との關係に就いて眞面目に疑惑を懷いた人があるとするならば、其人の疑惑乃至反抗は、同じ疑惑を懷いた何れの國の人よりも深く、強く、痛切でなければならぬ筈である。そして、輓近一部の日本人によつて起されたところの自然主義の運動なるものは、舊道德、舊思想、舊習慣のすべてに對して反抗を試みたと全く同じ理由に於て、此國家といふ既定の權力に對しても、其懷疑の鋒尖を向けねばならぬ性質のものであつた。然し我々は、何を其人達から聞き得たであらう。其處にも亦、呪ふべく恐れむべき性急な心が頭を擡げて、深く、強く、痛切なるべき考察を回避し、早く既に、恰も夫に忠實なる妻、妻に忠實なる夫を笑ひ、神經の過敏でないところの人を笑ふと同じ態度を以て、國家といふものに就いて眞面目に考へてゐる人を笑ふやうな傾向が、或る種類の青年の間に風を成してゐるやうな事はないか。少くとも、さういふ實際の社會生活上の問題を云々しない事を以て、忠實なる文藝家、潑剌たる近代人の面目であるといふやうに見せてゐる、或ひは見てゐる人はないか。實際上の問題を輕蔑する事を近代の虛無的傾向であるといふやうに速了してゐる人はないか。有る――少くとも、我々をしてさういふ風に疑はしめるやうな傾向が、現代のある一隅に確に有ると私は思ふ。

三

性急な心は、目的を失つた心である。此山の頂きから彼の山の頂きに行かんとして、當然經ねばならぬところの路を踏まずに、一足飛

びに、足を地から離した心である。危い事此上もない。目的を失つた心は、その人の生活の意義を破産せしめるものである。人生の問題を考察するといふ人にして、若しも自分自身の生活の內容を成してゐるところの實際上の諸問題を輕蔑し、自己其物を輕蔑するものでなければならぬ。自己を輕蔑する人、地から足を離してゐる人が、人生について考へるといふそれ自體が既に矛盾であり、滑稽であり、且つ悲慘である。我々は何をさういふ人々から聞き得るであらうか。安價なる告白とか、空想上の懷疑とかいふ批評のある所以である。

田中喜一氏は、さういふ現代人の性急な心を見て、極めて恐るべき笑ひ方をした。曰く、「あらゆる行爲の根柢であり、あらゆる思索の方針である知識を有せざる彼等文藝家が、少しでも事を論じようとすると、觀察の錯誤と、推理の矛盾と重疊百出するのであるが、是が原因を繹ねると、つまり二つに歸する。其一つは彼等が一時の狀態を永久の傾向であると見ることであり、もう一つは局部の側相を全體の本質と考へることである。」

自己を輕蔑する心、足を地から離した心、時代の弱所を共有することを誇りとする心、さういふ性急な心を若しも「近代的」といふのであつたならば、否、所謂「近代人」はさういふ心を持つてゐるものならば、我々は寧ろ退いて、自分がそれ等の人々より多く「非近代的」である事を恃み、且つ誇るべきである。さうして、最も性急ならざる心を以て、出來るだけ早く自己の生活その物を改善し、統一し徹底すべきところの努力に從ふべきである。

我々日本人が、最近四十年間の新らしい經驗から惹き起されたところの反省は、あらゆる意味に於て、まだ淺い。

若しも又、私が此處に指摘したやうな性急な結論乃至告白を口にし、筆にしながら、一方に於て自分の生活を改善するところの何等かの努力を營み——假令ば、頽廢的といふ事を口に讃美しながら、自分の腦神經の不健康を患うて身の療治をし、夫婦關係が無意義であると言ひながら家庭の事情を緩和すべきある努力をなし、そして其矛盾に近代人の悲しみ苦しみ、乃至絕望があるとしてゐる人があるならば、其人の場合に於て「近代的」といふ事は虛僞である。我々は、さういふ人も何時かは其二重の生活を統一し、徹底しようとする要求に出會ふものと信じて、何處までも將來の日本人の生活についての信念を力強く把持して行くべきであると思ふ。

(四十三年二月)

燕

南の枝につばめは
巣こそくへれ。
若軟草の青牀、
戀はるる二人は
新苑花垣ゆひて守る。
ああ、この春風うれしき。

つばめうたふ。
柳しづれて、濡羽の
うたもうれしや、新苑、
けふこそ、二人は
濡れてぞ擁きぬ、しのび心。
ああ、この春雨はづかし。

(『黄草集』より)

硝子窓

『何か面白い事は無いかねえ。』といふ言葉は不吉な言葉だ。此二三年來、文學の事に携さはつてゐる若い人達から、私は何回此不吉な言葉を聞かされたか知れない。無論自分でも言つた。――或時は、人の顏さへ見れば、さう言はずにゐられない樣な氣がする事もあつた。

『何か面白い事は無いかねえ。』

『無いねえ。』

『無いねえ。』

さう言つて了つて口を噤むと、何がなしに焦焦した不愉快な氣持が滓の樣に殘る。丁度何か拙い物を食つた後の樣だ。そして其の後では、もう如何な話も何時もの樣に興を引かない。好きな煙草さへ甘いとも思はずに吸つてゐる事が多い。

時として散步にでも出かける事がある。然し、心は何處か、行きたくつても、何處といふ行くべき的が無い。世界の何處かには何か非常な事がありさうで、そしてそれと自分とは何時まで經つても關係が無さうに思はれる。しまひには、的もなくほつき廻つて疲れた足が、遣場の無い心を運んで、再び家へ歸つて來る事になる。――まるで、自分で自分の生命を持餘してゐるやうなものだ。

何か面白い事は無いか！

それは凡ての人間の心に流れてゐる深い浪漫主義の嘆聲だ。――さう言へば、さうに違ひない。然しさう思つたからとて、我々が自分の生命の中に見出した空虛の感が、少しでも減ずる譯ではない。私はもう、益の無い自己の解剖と批評にはつくづくと飽きて了つた。それだけ私の考へは、實際上の問題に頭を下げて了つた――若しも言ふならば、何時しか私は、自分自身の問題を何處までも机の上で取扱つて行かうとする時代の傾向――知識ある人達の步いてる道から、一人離れて了つた。

『何か面白い事は無いか。』さう言つて街々を的もなく探し廻る代りに、私はこれから、『何うしたら面白くなるだらう。』といふ事を、眞面目に考へて見たいと思ふ。

○

何時だつたか忘れた。詩を作つてゐる友人の一人が來て、こんな事を言つた。――二三日前に、田舍で銀行業をやつてゐる伯父が出て來て、お前は今何をしてゐると言ふ。困つて了つて、何も爲ないでゐると言ふと、學校を出てから今迄何も爲ないでゐた筈がない、何んな事でも可いから隱さずに言つて見ろと言つた。爲方が無いから、自分の書いた物の載つてゐる雜誌を出して見せると、『お前はこんな事もやるのか。然しこれはこれだが、何か別に本當の仕事があるだらう。』と言つた。――

『あんな種類の人間に逢つちや耐らないねえ。僕實際弱つちやつた。何とも返事の爲やうが無いんだもの。』と言つて、其友人は聲高く笑つた。

私も笑つた。所謂俗人と文學者との間の間隔といふ事が其の時二人の心にあつた。

同じ樣な經驗を、嘗て、私も幾度となく積んだ。然し私は、自分自身の事に就いては笑ふ事が出來なかつた。それを人に言ふ事も好まなかつた。自分の爲事を人の前に言へぬといふ事は、私には憤懣と、それよりも多くの羞恥の念

とを與へた。

三年經ち、五年經つた。

何時しか私は、十七八の頃にはそれと聞くだけでも懷かしかつた、詩人文學者にならうとしてゐる、自分よりも年の若い人達に對して、すつかり同情を失つて了つた。會つて見て其の人の爲人を知り、其の人の文學的素質に就いて考へる前に、先づ憐愍と輕侮と、時としては嫌惡を注がねばならぬ樣になつた。殊に、地方にゐて何の爲事も無くぶらぶらしてゐながら詩を作つたり歌を作つたりして、各自他人からは兎ても想像もつかぬ樣な自矜を持つてゐる、そして煮え切らぬ謎の樣な手紙を書く人達の事を考へると、大きな穴を掘つて一緖に埋めて了つたら、何んなに此の世の中が薩張するだらうとまで思ふ事がある樣になつた。

實社會と文學的生活との間に置かれた間隔をその儘にして笑つて置かうとするには、私は餘りに「俗人」であつた。——若しも私の文學的努力(へと言ひ得るならば)が、今迄に何等かの效果を私に齎してゐたならば、多分私も斯うは成らなかつたかも知れない。それは自分でも悲しい心を以て思ひ廻す事が無いでもない。然し文學的生活に對する空虛の感は、果して唯文壇の劣敗者のみの問題に過ぎないのだらうか。

此處では文學其物に就いて言つてるのではない。

文學と現實の生活とを近ける運動は、此の數年の間我々の眼の前で花々しく行はれた。思慮ある作家に取つては、文學は最早單なる詠嘆や忘我の國ではなくなつた。或人はこれを自家の忠實たる記錄にしようとした。或人は其の中に自家の思想と要求とを託さうとした。又或人にあつては、文學は卽ち自己に對する反省であり、批評であつた。文學と人生との接近といふ事から見れば、假令此の運動にたづさはらなかつた如何なる作家と雖も、遂に此の運動を惹起したところの時代の精神に司配されずにゐる事は出來なかつた。事實は何よりの證據である。此意味から言へば、自然主義が確實に文壇を占領したといふのも敢て過言ではないであらう。

觀照と實行の問題も商量された。それは自然主義其物が單純な文藝上の問題でなかつた爲には、當然足を踏み入れねばならぬ路の一つであつた。——然し其の商量は、遂に何の滿足すべき結論をも我等の前に齎さなかつた。嘗て私は、それを自然主義者の精密と觀た。が、更に振回つて考へた時に、問題其物のそれが當然の約束でなければならなかつた、と言ふよりは、寧ろ自然主義的精神が文藝上に占め得る領土の範圍——更に適切に言へば、文藝其物の本質から來るところの必然の運命でなければならなかつた。

自然主義が自然主義のみで完了するものでないといふ議論は、其處からも確實に認められなければならない。隨つて、今日及び今日以後の文壇の主潮を、自然主義の連續であると見、ないと見るのは、要するに、實に唯一種の名義爭ひでなければならない。自然主義者は明確なる反省を以て、今、其最初の主張と文藝の本性とを顧慮すべきである。そして其の主張が文藝上に働き得るところの正當なる範圍を承認すると共に、今日までの運動の經過と、それが今日以後に及ぼすところの效果に就いて滿足すべきである。

それは何れにしても、文學の境地と實人生との間に存する間隔は、如何に巧妙なる外科醫の手術を以てしても、遂に縫合する事の出來ぬものであつた。假令我々が國と國との間の境界を地圖の上から消して了ふ時はあつても、此の

間隔だけは何うする事も出來ない。
　それあるが爲に、蓋し文學といふものは永久に其の領土を保ち得るのであらう。
　それは私も認めない譯には行かない。が又、それあるが爲に、特に文學者のみの經驗せねばならぬ深い悲みといふものがあるのではなからうか。そして其の悲みこそ、實に彼の多くの文學者の生命を滅すところの最大の敵ではなからうか。
　すでに文學其物が實人生に對して間接的なものであるとする。譬へば手淫の如きものであるとする、そして凡ての文學者は、實行の能力、乃至は機會、乃至は資力無き計畫者の樣なものであるとする。
　男といふ男は女を欲する。あらゆる計畫者は、自ら其の計畫したところの事業を經營したいと思ふ。それが普通ではなからうか。
（假令世には、かの異常な手段に依つてのみ自己の慾望を充たしてゐる者が、それに慣れて了つて、最早正當な方法の前には何の感情をも起さなくなる樣な例はあるにしても。）
　故人二葉亭氏は、身生れて文學者でありながら、人から文學者と言はれる事を嫌つた。坪内博士は嘗てそれを、現在日本に於て、男子の一生を託するに足る程に文學といふものの價値なり勢力なりが認められてゐない爲ではなからうか、といふ樣に言はれた事があると記憶する。成程さうでもあらうと私は思つた。然し唯それだけでは、あの革命的色彩に富んだ文學者の胸中を了解するに、何となく不十分に思はれて爲方がなかつた。
　又或時、生前其の人に親しんでゐた人の一人が、何事によらず自分の爲た事に就いて周圍から反響を聞く時の滿足な心持といふ事によつて、彼の獨歩氏が文學以外の色々の事業に野心を抱いてゐた理由を忖度しようとした事があつた。同じ樣な不滿足が、それを讀んだ時にも私の心にあつた。
　又、これは餘り勝手な推量に過ぎぬかも知れぬけれども、内田魯庵氏は嘗て文學を利器として實社會に肉薄を試みた事のある人だ。其の生血の滴る樣な作者の昂奮した野心は、あの「社會百面相」といふ奇妙な名の一冊に書き止められてゐる。その本の名も今は大方忘られて了つた。そして内田氏は、それ以後もう再び創作の筆を執らうとしなかつた。其處にも何か我々の考へねばならぬ事があるのではなからうか。
　トルストイといふ人と内田氏とを幷べて考へて見る事は、此際面白い對照の一つでなければならない。あの偉大なる露西亞人に比べると、内田氏には如何にも日本人らしい、性急な、そして思切りのよいと言つた風のところが見える。

○

　自分の机の上に、一つ濟めば又一つといふ風に、後から後からと爲事の集つて來る時ほど、私の心臓の愉快に鼓動してゐる時はない。
　それが餘り立込んで來ると、時として少し頭が茫乎として來る事がある。「こんな事で逆上せてなるものか！」さう自分で自分を叱つて、私はまた散りさうになる心を爲事に集める。其の時、假令其の爲事が詰らぬ爲事であつても、私には何の慾もない。不平もない。頭腦と眼と手と一緒になつて、我ながら驚くほど敏活に働く。
　實に好い氣持だ。「もつと、もつと、もつと急がしくなれ。」と私は思ふ。やがて一しきり其の爲事が濟む。ほつと息をして煙草をのむ。心よく腹の減つてる事が感じられる。眼にはまだ今

迄の急がしかつた有樣が見えてゐる樣だ。「ああ、もつと急がしければ可かつた！」と私はまた思ふ。

私は色々の希望を持つてゐる。金も欲しい、本も讀みたい、名聲も得たい、旅もしたい、心に適つた社會にも住みたい、自分自身も改造したい、其他數限りなき希望はあるけれど然しそれ等も、この何にまれ一つの爲事の中に沒頭してあらゆる慾得を忘れた樂みには代へ難い。――と其の時思ふ。

家へ歸る時間となる。家へ歸つてからの爲事を考へて見る。若し有れば私は勇んで歸つて來る。が、時として何も差迫つた用事の心當りの無い時がある。『また詰らぬ考へ事をせねばならぬのか！』といふ厭な思ひが起る。『願はくば一生、物を言つたり考へたりする暇もなく、朝から晩まで働きづめに働いて、そしてバタリと死にたいものだ。』斯ういふ事を何度私は電車の中で考へたか知れない。時としては、把手を握つたまま一秒の弛みもなく眼を前方に注いで立つてゐる運轉手の後姿を、何がなしに羨ましく尊く見てゐる事もあつた。

――斯うした生活のある事を、私は一年前まで知らなかつた。

然し、然し、時あつて私の胸には、それとは全く違つた心持が卒然として起つて來る。丁度忘れてゐる傷の痛みが俄かに疼き出して來る樣だ。抑へようとしても抑へきれない、紛らさうとしても紛らしきれない。

今迄明かつた世界が見る間に暗くなつて行く樣だ。樂しかつた事が樂しくなくなり、安んじてゐた事が安んじられなくなり、怒らなくても可い事にまで怒りたくなる。目に見、耳に入る物一つとして此の不愉快を募らせぬものはない。山に行きたい、海に行きたい、知る人の一人もゐない國に行きたい、自分の少しも知らぬ國語を話す人達の都に紛れ込んでゐたい……自分といふ一生物の、限りなき醜さと限りなき慾然さを心ゆく許り嘲つてみるのは其の時だ。

（四十三年六月）

春月

春月や、高士臥すなる大林の
若芽する小夜のかをりにあくがれて、
水咽ぶ岨路を小鹿いそぐらむ。
おしなめてもの柔らかに白銀を
蒸す如し、目路のかぎりをつつむなる
月光に包まれ、はたや、吸ひぬれば
あはれ、わが靜心なく物思ふ
たましひの若さは胸に躍るなり。

岨路ゆく小鹿は、今宵、生れし夜の
母が乳の甘きかをりや思ふらむ。
我も亦小鹿の如く、いづかたと
知らず、はた、誰が栖むとしも知らなくに、
人の世のいのちの森の若芽なる
かをりにぞあくがれそめぬ、春の夜。

（『黄草集』より）

一利己主義者と友人との對話

B　おい、おれは今度また引越しをしたぜ。

A　さうか。君は來るたんび引越しの披露をして行くね。

B　それは僕には引越位の外に何もわざわざ披露するやうな事件が無いからだ。

A　葉書でも濟むよ。

B　しかし今度のは葉書では濟まん。

A　どうしたんだ。何日かの話の下宿の娘から縁談でも申込まれて逃げ出したのか。

B　莫迦なことを言へ。女の事なんか近頃もうちつとも僕の目にうつらなくなつた。女より食物だね。好きな物を食つてさへ居れあ僕には不平はない。

A　殊勝な事を言ふ。それでは今度の下宿はうまい物を食はせるのか。

B　三度三度うまい物ばかり食はせる下宿が何處にあるもんか。

A　安下宿ばかりころがり歩いた癖に。

B　皮肉るない。今度のは下宿ぢやないんだよ。僕はもう下宿生活には飽き飽きしちやつた。

A　よく自分に飽きないね。

B　自分にも飽きた。飽きたから今度の新生活を始めたんだ。室だけ借りて置いて、飯は三度とも外へ出て食ふことにしたんだよ。

A　君のやりさうなこつたね。

B　さうかね。僕はまた君のやりさうなこつたと思つてゐた。

A　何故。

B　何故つてさうぢやないか。第一こんな自由な生活はないね。居處つて奴は案外人間を束縛するもんだ。何處かへ出てゐても、飯時になれあ直ぐ家のことを考へる。あれだけでも僕みたいな者にや一種の重荷だよ。それよりは何處でも構はず腹の空いた時は飛び込んで、自分の好きな物を食つた方が可いぢやないか。（間）何でも好きなものが食へるんだからなあ。初めの間は腹のへつて來るのが樂みで、一日五回づつ食つてやつた。出掛けて行つて食つて來て、煙草でも喫んでるとまた直ぐ食ひたくなるんだ。

A　飯の事をさう言や眠る場所だつてさうぢやないか。毎晩毎晩同じ夜具を着て寢るつてのも餘り有難いことぢやないね。

B　それはさうさ。しかしそれは仕方がない。身體一つならどうでも可いが、机もあるし本もある。あんな荷物をどつさり持つて、毎日毎日引越して歩かなくちやならないとなつたら、それこそ苦痛ぢやないか。

A　飯のたんびに外に出なくちやならないといふのも同じだ。

B　飯を食ひに行くには荷物はない。身體だけで濟むよ。食ひたいなあと思つた時、ひよいと立つて帽子を冠つて出掛けるだけだ。財布さへ忘れなけや可い。ひと足ひと足うまい物に近づいて行くつて氣持は實に可いね。

A　ひと足ひと足新しい眠りに近づいて行く氣持はどうだね。ああ眠くなつたと思つた時、てくてく寢床を探しに出かけるんだ。昨夜は隣の室で女の泣くのを聞きながら眠つたつけが、今夜は何を聞いて眠るんだらうと思ひながら行くんだ。初めての宿屋ぢや此方の誰だかをちつとも知らない。知つた者の一人もゐない家の、行燈か何かついた奥まつた室に、

やはらかな夜具の中に緩くり身體を延ばして安らかな眠りを待つてる氣持はどうだね。

B　それあ可いさ。君もなかなか話せる。

A　可いだらう。毎晩毎晩さうして新しい寢床で新しい夢を結ぶんだ。(間)本も机も棄てちまふさ。何もいらない。本を讀んだつてどうもならんぢやないか。

B　ますます話せる。しかしそれあ話だけだ。初めのうちはそれで可いかも知れないが、しまひには屹度おつくうになる。やつぱり何處かに落着いてしまふよ。

A　飯を食ひに出かけるのだつてさうだよ。見給へ、二日經つと君はまた何處かの下宿にころがり込むから。

B　ふむ。おれは細君を持つまでは今の通りやるよ、屹度やつて見せるよ。

A　細君を持つまでか。可哀想に。(間)しかし羨ましいね。君の今のやり方は、實はずつと前からのおれの理想だよ。もう三年からになる。

B　さうだらう。おれはどうも初め思ひたつた時、君のやりさうなこつたと思つた。

A　今でもやりたいと思つてる。たつた一月でも可い。

B　どうだ、おれん處へ來て一緒にやらないか。可いぜ。そして飽きたら以前に歸るさ。

A　しかし厭だね。

B　何故。おれと一緒が厭なら一人でやつても可いぢやないか。

A　一緒でも一緒でなくても同じことだ。君は今それを始めたばかりで大いに滿足してるね。僕もさうに違ひない。やつぱり初めのうちは日に五度も食事をするかれ知ない。しかし君はそのうちに飽きてしまつておつくうになるよ。さうしておれん處へ來てまた引越しの披露をするよ。その時おれは、「たうとう飽きたね。」と君に言ふね。

B　何だい。もうその時の挨拶まで工夫してるのか。

A　まあさ。「たうとう飽きたね。」と君に言ふね。それは君に言ふのだから可い。おれは其奴を自分には言ひたくない。

B　不相變厭な男だなあ、君は。

A　厭な男さ。おれもさう思つてる。

B　君は何日か――あれは去年かな――おれと一緒に行つて淫賣屋から逃げ出した時もそんなことを言つた。

A　さうだつたかね。

B　君は屹度早く死ぬ。もう少し氣を廣く持たなくちや可かんよ。一體君は餘りアンビシャスだから可かん。何だつて眞の滿足つてものは世の中に有りやしない。從つて何だつて飽きる時が來るに定つてらあ。飽きたり、不滿足になつたりする時を豫想して何にもせずにゐる位なら生れて來なかつた方が餘つ程可いや。生れた者は屹度死ぬんだから。

A　笑はせるない。

B　笑つてもゐないぢやないか。

A　可笑しくもない。

B　笑ふさ。可笑しくなくつたつて些たあ笑はなくちや可かん。はは。(間)しかし何だね。君は自分で飽きつぽい男だと言つてるが案外さうでもないやうだね。

A　何故。

B　不相變歌を作つてるぢやないか。

A　歌か。

B　止めたかと思ふとまた作る。執念深いところが有るよ。やつぱり君は一生歌を作るだらうな。

A　どうだか。

B　歌も可いね。こなひだ友人とこへ行つたら、やつぱり歌を作るとか詠むとかいふ姉さ

んがゐてね。君の事を話してやつたら「あの歌人はあなたのお友達なんですか。」つて吃驚してゐたよ。おれはそんな俗人に見えるのかな。

A 「歌人」は可かつたね。

B 首をすくめることはないぢやないか。おれも實は最初變だと思つたよ。Ａは歌人だ！ 何んだか變だものな。しかし歌を作つてる以上はやつぱり歌人にや違ひないよ。おれもこれから一つ君を歌人扱ひにしてやらうと思つてるんだ。

A 御馳走でもしてくれるのか。

B 莫迦なことを言へ。一體歌人にしろ小說家にしろ、すべて文學者といはれる階級に屬する人間は無責任なものだ。何を書いても書いたことに責任は負はない。待てよ、これは、何日か君から聞いた議論だつたね。

A どうだか。

B どうだかつて、たしかに言つたよ。文藝上の作物は巧いにしろ拙いにしろ、それがそれだけで完了してると云ふ點に於て、人生の交渉は歷史上の事柄と同じく間接だ、とか何んとか。（間）それはまあどうでも可いが、兎に角おれは今後無責任を君の特權として認めて置く。特待生だよ。

A 許してくれ。おれは何よりもその特待生が嫌ひなんだ。何日だつけ北海道へ行く時青森から船に乘つたら、船の事務長が知つてる奴だつたものだから、三等の切符を持つてるおれを無理矢理に一等室に入れたんだ。室だけならまだ可いが、食事の時間になつたらボーイを寄こしてたうとう食堂まで引張り出された。あんなに不愉快な飯を食つたことはない。

B それは三等の切符を持つてゐた所以だ。一等の切符さへ有れあ當り前ぢやないか。

A 莫迦を言へ。人間は皆赤切符だ。

B 人間は皆赤切符！ やつぱり話せるな。おれが飯屋へ飛び込んで空樽に腰掛けるのもそれだ。

A 何だい、うまい物うまい物つて言ふから何を食ふのかと思つたら、一膳飯屋へ行くのか。

B 上は精養軒の洋食から下は一膳飯、牛飯、大道の燒鳥に至るさ。飯屋にだつてうまい物は有るぜ。先刻來る時はとろろ飯を食つて來た。

A 朝には何を食ふ。

B 近所にミルクホールが有るから其處へ行く。君の歌も其處で讀んだんだ。何でも雜誌をとつてる家だからね。（間）さうさう、君は何日か短歌が滅びるとおれに言つたことがあるね。此頃その短歌滅亡論といふ奴が流行つて來たぢやないか。

A 流行るかね。おれの讀んだのは尾上柴舟といふ人の書いたのだけだ。

B さうさ。おれの讀んだのもそれだ。然し一人が言ひ出す時分にや十人か五人は同じ事を考へてるもんだよ。

A あれは尾上といふ人の歌そのものが行きづまつて來たといふ事實に立派な裏書をしたものだ。

B 何を言ふ。そんなら君があの議論を唱へた時は、君の歌が行き詰つた時だつたのか。

A さうさ。歌ばかりぢやない、何もかも行きづまつた時だつた。

B しかしあれには色々理窟が書いてあつた。

A 理窟は何にでも着くさ。たゞ世の中のことは一つだつて理窟によつて推移してゐないだけだ。たとへば、近頃の歌は何首或は何十首を、一首一首引き拔いて見ないで全體として見るやうな傾向になつて來た、そんなら何故それらを初めから一つとして現さないか。

一々分解して現す必要が何處にあるか、とあれに書いてあつたね。一應尤もに聞えるよ。しかしあの理窟に服從すると、人間は皆死ぬ間際まで待たなければ何も書けなくなるよ。歌は――文學は作家の個人性の表現だといふことを狹く解釋してるんだからね。假に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌ふにしてもだね。なるほどひと晩のことだから一つに纏めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で一分は六十秒だよ。連續はしてゐるが初めから全體になつてゐるのではない。きれぎれに頭に浮んで來る感じを後から後からときれぎれに歌つたつて何も差支へがないぢやないか。一つに纏める必要が何處にあると言ひたくなるね。

B　君はさうすると歌は永久に滅びないと云ふのか。

A　おれは永久といふ言葉は嫌ひだ。

B　永久でなくても可い。兎に角まだまだ歌は長生すると思ふのか。

A　長生はする。昔から人生五十といふが、それでも八十位まで生きる人は澤山ある。それと同じ程度の長生はする。しかし死ぬ。

B　何日になつたら八十になるだらう。

A　日本の國語が統一される時さ。

B　もう大分統一されかかつてゐるぜ。小說はみんな時代語になつた。小學校の敎科書と詩も半分はなつて來た。新聞にだつて三分の一は時代語で書いてある。先を越してローマ字を使ふ人さへある。

A　それだけ混亂してゐたら澤山ぢやないか。

B　ふむ。さうするとまだまだか。

A　まだまだ。日本は今三分の一まで來たところだよ。何もかも三分の一だ。所謂古い言葉と今の口語と比べて見ても解る。正確に違つて來たのは、「なり」「なりけり」と「だ」である。だけだ。それもまだまだ文章の上では併用されてゐる。音文字が採用されて、それで現すに不便な言葉がみんな淘汰される時が來なくちや歌は死なない。

B　氣長い事を言ふなあ。君は元來性急な男だつたがなあ。

A　あまり性急だつたお蔭で氣長になつたのだ。

B　悟つたね。

A　絕望したのだ。

B　しかし兎に角今の我々の言葉が五とか七とかいふ調子を失つてるのは事實ぢやないか。

A　「いやにさびしき夜なるぞや。」「なんてさびしい晩だらう。」どつちも七五調ぢやないか。

B　それは極めて稀な例だ。

A　昔の人は五七調や七五調でばかり物を言つてゐたと思ふのか。莫迦。

B　これでも賢いぜ。

A　とはいふものの、五と七がだんだん亂れて來てるのは事實だね。五が六に延び、七が八に延びてゐる。そんならそれで歌にも字あまりを使へば濟むことだ。自分が今迄勝手に古い言葉を使つて來てゐて、今になつて不便だもないぢやないか。成るべく現代の言葉に近い言葉を使つて、それで三十一字に纏りかねたら字あまりにするさ。それで出來なければあ言葉や形が古いんでなくつて頭が古いんだ。

B　それもさうだね。

A　のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解することが出來る。歌の調子はまだまだ複雜になり得る餘地がある。昔は何日の間にか五七五、七七と二行に書くことになつてゐたのを、明治になつてから一本に書くことになつてゐた。今度はあれを壞

すんだね。歌には一首一首各異つた調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B　さうすると歌の前途はなかなか多望なことになるなあ。

A　人は歌の形は小さくて不便だといふが、おれは小さいから却つて便利だと思つてゐる。さうぢやないか。人は誰でも、その時が過ぎてしまへば間もなく忘れるやうな、乃至は長く忘れずにゐるにしても、それを思ひ出すには餘り接穗がなくてたうとう一生思ひ出さずにしまふといふやうな、内から外からの數限りなき感じを、後から後からと常に經驗してゐる。多くの人はそれを輕蔑してゐる。輕蔑しないまでも殆ど無關心にエスケープしてゐる。しかしいのちを愛する者はそれを輕蔑することが出來ない。

B　待てよ。ああさうか一分は六十秒なりの論法だね。

A　さうさ、一生に二度とは歸つて來ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらない歌が一番便利なのだ、實際便利だからね、歌といふ詩形を持つてるといふことは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。（間）おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。（間）しかしその歌も滅亡する。理窟からでなく内部から滅亡する。しかしそれはまだまだ、早く滅亡すれば可いと思ふがまだまだだ。（間）日本はまだ三分の一だ。

B　いのちを愛するつてのは可いね。君は君のいのちを愛して歌を作り、おれはおれのいのちを愛してうまい物を食つてあるく。似たね。

A　（間）おれはしかし、本當のところはおれに歌なんか作らせたくない。

B　どういふ意味だ。君はやつぱり歌人だよ。歌人だつて可いぢやないか。しつかりやるさ。

A　おれはおれに歌を作らせるよりも、もつと深くおれを愛してゐる。

B　解らんな。

A　解らんかな。（間）しかしこれは言葉でいふと極くつまらんことになる。

B　歌のやうな小さいものに全生命を託することが出來ないといふのか。

A　おれは初めから歌に全生命を託さうと思つたことなんかない。（間）何にだつて全生命を託することが出來るもんか。（間）おれはおれを愛してはゐるが、其のおれ自身だつてあまり信用してはゐない。

B　（やや突然に）おい、飯食ひに行かんか。（間、獨語するやうに。）おれも腹のへつた時はそんな氣持のすることがあるなあ。

（四十三年十一月）

病める兒のむづかる朝の食卓よ旅をおもひて箸をはこべり

用のある人のごとくに家を出で上野の山に來て落葉踏む

子のために買ひしおもちやの機關車をもてあそびたる朝のひと時

（明治四十三年十二月『スバル』所載の中）

歌のいろ〱

（一）

○日毎に集つて來る投書の歌を讀んでゐて、ひよいと妙な事を考へさせられることがある。―此處に作者その人に差障りを及ぼさない範圍に於て一二の例を擧げて見るならば、此頃になつて漸く手を着けた十月中到着の分の中に、神田の某君といふ人の半紙二つ折へ横に二十首の歌を書いて『我日下の境遇』と題を附けたのがあつた。

○讀んでゐて私は不思議に思つた。それは歌の上手な爲ではない。歌は字と共に寧ろ拙かつた。又その歌つてある事の特に珍らしい爲でもなかつた。私を不思議に思はせたのは、脱字の多い事である。誤字や假名違ひは何百といふ投書家の中に隨分やる人がある。寧ろ驚く位ある、然し恁麼に脱字の多いのは滅多にない。要らぬ事とは思ひながら數へてみると、二十首の中に七箇所の脱字があつた。三首に一箇所の割合である。

○歌つてある歌には、母が病氣になつて秋風が吹いて來たといふのがあつた。僻み心を起すのは惡い〱と思ひながら何時しか夫が癖になつたといふのがあつた。十八の歳から生活の苦しみを知つたといふのがあつた。安らかに眠つてゐる母の寢顔を見れば涙が流れるといふのがあつた。弟の無邪氣なのを見て傷んでゐる歌もあつた。金といふものに數々の怨みを言つてゐるのもあつた。終日の仕事の疲れといふことを歌つたのもあつた。

○某君は一體に粗忽しい人なのだらうか？ 小學校にゐた頃から脱字をしたり計數を間違つたり、忘れ物をする癖のあつた人なのだらうか？―恁麼事を問うてみるからが既に勝手な、作者に對して失禮な推量で、隨つてその答へも亦勝手な推量に過ぎないのだが、私には何うもさうは思へなかつた。進むべき路を進みかねて境遇の犠牲となつた人の、その心に消しがたき不平が有れば有る程、元氣も顔色も人先に衰へて、幸運な人がこれから初めて世の中に打つて出ようといふ歳頃に、早く既に醫しがたき神經衰弱に陷つてゐる例は、私の知つてゐる範圍にも二人や三人ではない。私は「十八の歳から生活の苦しみを知つた人」と「脱字を多くする人」とを別々に離して考へることは出來なかつた。

○某君のこの投書は、多分何か急がしい事のある日か、心の落着かぬ程嬉しい事でもある日に書いたので、斯う脱字が多かつたのだらう。さうだらうと私は思ふ。然し若し此處に私の勝手に想像したやうな人があつて、某君の歌つたやうな事を誰かの前に訴へたとしたならば、その人は果して何と答へるだらうか。

○私は色々の場合、色々の人のそれに對する答へを想像して見た。それは皆如何にも尤もな事ばかりであつた。然しそれらの叱咤それらの激勵、それらの同情は果して何れだけその不平なる青年の境遇を變へてくれるだらうか。のみならず私は又次のやうな事も考へなければならなかつた。二十首の歌に七箇所の脱字をする程頭の惡くなつてゐる人ならば、その平生の仕事にも「脱字」が有るに違ひない。その處世の術にも「脱字」があるに違ひない。―私の心はいつか又、今の諸々の美しい制度、美しい道德

をその儘長く我々の子孫に傳へる爲には、何れだけの夥しい犧牲を作らねばならぬかといふ事に移つて行つた。さうして沁々した心持になつて次の投書の封を切つた。

（二）

○大分前の事である。茨城だつたか千葉だつたか乃至は又群馬の方だつたか何しろ東京から餘り遠くない縣の何とか郡何とか村小學校内某といふ人から歌が來た。何日か經つて其の歌の中の何首かが新聞に載つた。すると間もなく私は同じ人からの長い手紙を添へた二度目の投書を受け取つた。

○其の手紙は候文と普通文とを捏ね交ぜたやうな文體で先づ自分が「憐れなる片田舍の小學教師」であるといふ事から書き起してあつた。さうして自分が自分の職務に對し兎角興味を有ち得ない事、誰一人趣味を解する者なき片田舍の味氣ない事、さうしてる間に豫々愛讀してゐる朝日新聞の歌壇の設けられたので空谷の跫音と思つたといふ事、近頃は新聞が着くと先づ第一に歌壇を見るといふ事、就いては今後自分も全力を擧げて歌を研究する積だから宜しく頼む。今日から毎日必ず一通づつ投書するといふ事が書いてあつた。

○此の手紙が宛名人たる私の心に惹起した結果は、蓋し某君の夢にも想はなかつた所であらうと思ふ。何故なれば、私はこれを讀んでしまつた時、私の心に明かに一種の反感の起つてゐる事を發見したからである。詩や歌や乃至は其の外の文學にたづさはる事を、人間の他の諸々の活動よりも何か格段に貴い事のやうに思ふ迷信――それは何時如何なる人の口から出るにしても私の心に或反感を呼び起さずに濟んだことはない。「歌を作ることを何か偉い事でもするやうに思つてる、莫迦な奴だ。」私はさう思つた。さうして又成程自ら言ふ如く憐れなる小學教師に違ひないと思つた、手紙には假名遣ひも文法の違ひもあつた。

○然しその反感も直ぐと引込まねばならなかつた。「羨ましい人だ。」といふやうな感じが輕く横合から流れて來た爲めである。此の人は自分で自分を「憐れなる」と呼んではゐるが、如何に憐れで、如何にして憐れであるかに就いて眞面目に考へたことのない人、寧ろさういふ考へ方をしない質の人であることは、自分が不滿足なる境遇に在りながら全力を擧げて歌を研究しようなどと言つてゐる事、しかも其歌の極平凡な敍事敍景の歌に過ぎない事、さうして他の營々として刻苦してゐる村人を趣味を解せぬ者と嘲つて僅に喜んでゐるらしい事などに依つて解つた。己の爲る事、言ふ事、考へる事に對して、それを爲ながら、言ひながら、考へながら常に一々反省せずにゐられぬ心、何事にまれ正面に其問題に立向つて底の底まで究めようとせずにゐられぬ心、日毎々々自分自身からも世の中からも色々の不合理と矛盾とを發見して、さうして其の發見によつて却つて益々自分自身の生活に不合理と矛盾とを深くして行く心――さういふ心を持たぬ人に對する羨みの感は私のよく經驗する所のものであつた。

○私はとある田舍の小學校の宿直室にごろごろしてゐる一人の年若き准訓導を想像して見た。その人は眞の人を怒らせるやうな惡口を一つも胸に蓄へてゐない人である。漫然として教科書にある丈の字句を生徒に教へ、漫然として自分の境遇の憐れな事を是認し、漫然として今後大に歌を作らうと思つてる人である。未だ嘗て自分の心内乃至身邊に起る事物に對して、その根ざす所如何に深く、その及ぼす所如何に遠きかを考へて見たことのない人である。日毎々々に新聞を讀みながらも、我々の心を後から

と急がせて、日毎に新しく展開して來る時代の眞相に對して何の切實な興味をも有つてゐない人である。私はこの人の一生に快よく口を開いて笑ふ機會が、私のそれよりも屹度多いだらうと思つた。

〇翌日出社した時は私の頭にもう某君の事は無かつた。さうして前の日と同じ色の封筒に同じ名を書いた一封を他の投書の間に見附けた時、私はこの人が本當に毎日投書する積なのかと心持眼を大きくして見た。其翌日も來た。其翌日も來た。或時は投函の時間が遲れたかして、一日置いての次の日に二通一緒に來たこともあつた。「また來た。」私は何時もさう思つた。意地惡い事ではあるが、私はこの人が下らない努力に何時まで飽きずにゐられるかに興味を有つて、それとはなしに毎日待つてゐた。

〇それが確七日か八日の間續いた。或日私は、「たうとう飽きたな。」と思つた。その次の日も來なかつた。さうして其後既に二箇月、私は再び某君の墨の薄い肩上りの字を見る機會を得ない。來ただけの歌は隨分夥しい數に上つたが、ただ所謂歌になりさうな景物を漫然と三十一字の形に表しただけで、新聞に載せる程のものは殆どなかつた。

〇私はこの事を書いて來て、其後某君は何うしてゐるだらうと思つた。矢張新聞が着けばただ文藝欄や歌壇や小說許りに興味を有つて讀んでゐるだらうか。漫然と歌を作り出して漫然と罷めてしまつた如く、更に又漫然と何事かを始めてゐるだらうか。私は思ふ。若し某君にして唯一つの事、例へば自分で自分を憐れだといつた事に就いてでも、その如何に又如何にして然るかを正面に立向つて考へて、さうして其處に或動かすべからざる隱れたる事實を承認する時、其某君の歌は自からにして生氣ある人間の歌になるであらうと。

（三）

〇うつかりしながら家の前まで歩いて來た時、出し拔けに飼ひ犬に飛着かれて、「あゝ喫驚した。こん畜生！」と思はず知らず口に出す——といふやうな例はよく有ることだ。下らない駄洒落を言ふやうだが、人は喫驚すると惡口を吐きたがるものと見える。「こん畜生」と言はなくとも、白なら白、ポチならポチでいゝではないか——若し必ず何とか言はなければならぬのならば。

〇土岐哀果君が十一月の「創作」に發表した三十何首の歌は、この人がこれまで人の褒貶を度外に置いて一人で開拓して來た新しい畑に、漸く樂しい秋の近づいて來てゐることを思はせるものであつた。その中に、

　燒あとの煉瓦の上に
　Syoben をすればしみじみ
　秋の氣がする

といふ一首があつた。好い歌だと私は思つた。（小便といふ言葉だけを態々羅馬字で書いたのは、作者の意味では多分この言葉を在來の漢字で書いた時に伴つて來る惡い連想を拒む爲であらうが、私はそんな事をする必要はあるまいと思ふ。）

〇さうすると今月になつてから、私は友人の一人から、或雜誌が特にこの歌を引いて土岐君の歌風を罵つてゐるといふ事を聞いた。私は意外に思つた。勿論この歌が同じ作者の歌の中で最も優れた歌といふのではないが、然し何度讀み返しても惡い歌にはならない。評者は何故この鋭い實感を承認することが出來なかつたであらうか。さう考へた時、私は前に言つた「こん畜生」の場合を思ひ合せぬ譯に行かなかつた。評者は屹度歌といふものに就いて或狹い既成概念を有つてる人に違ひない。自ら新し

い歌の鑑賞家を以て任じてゐ乍ら、何時となく歌は斯ういふもの、斯くあるべきものといふ保守的な觀念を形成つてさうしてそれに捉はれてゐる人に違ひない。其處へ生垣の隙間から飼犬の飛び出したやうに、小便といふ言葉が不意に飛び出して來て、その保守的な、苟安的な既成概念の袖にむづと噛み着いたのだ。然し飼犬が主人の歸りを喜んで飛び着くに何の不思議もない如く、我々の平生使つてゐる言葉が我々の歌に入つて來たとて何も吃驚するには當らないではないか。

○私の「やとばかり桂首相に手とられし夢みて覺めぬ秋の夜の二時」といふ歌も或雜誌で土岐君の小便の歌と同じ運命に會つた。尤もこの歌は、同じく實感の基礎を有しながら桂首相を夢に見るといふ極稀れなる事實を内容に取入れてあるだけに、言換へれば萬人の同感を引くべく餘りに限定された内容を歌つてあるだけに、小便の歌ほど歌として存在の權利を有つてゐない事は自分でも知つてゐる。

○故獨歩は嘗てその著名なる小説の一つに「驚きたい」と云ふ事を書いてあつた。その意味に於ては私は今でも驚きたくない事はない。然しそれとは全く別な意味に於て、私は今、驚きたくないと思ふ。何事にも驚かずに、眼を大きくして正面にその問題に立向ひたいと思ふ。それは小便と桂首相に就いてのみではない。又歌の事に就いてのみではない。我々日本人は特殊なる歴史を過去に有してゐるだけに、今正に殆どすべての新しい出來事に對して驚かねばならぬ境遇に在る。さうして驚いてゐる。然し日に百回「こん畜生」を連呼したとて、時計の針は一秒でも止まつてくれるだらうか。

○歴史を尊重するは好い。然しその尊重を逆に將來に向つてまで維持しようとして一切の「驚くべき事」に手を以て蓋をする時、其保守的な概念を嚴密に究明して來たならば、日本が嘗て議會を開いた事からが先づ國體に牴觸する譯になりはしないだらうか。我々の歌の形式は萬葉以前から在つたものである。然し我々の今日の歌は何處までも我々の今日の歌である。我々の明日の歌も矢つ張り何處までも我々の明日の歌でなくてはならぬ。

(四)

○机の上に片肘をついて煙草を吹かしながら、私は書き物に疲れた眼を置時計の針に遊ばせてゐた。さうしてこんな事を考へてゐた。——凡そすべての事は、それが我々にとつて不便を感じさせるやうになつて來た時、我々はその不便な點に對して遠慮なく改造を試みるが可い。またさう爲るのが本當だ、我々は他の爲に生きてゐるのではない、我々は自身の爲に生きてゐるのだ。たとへば歌にしてもさうである。我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて來た。其處でこれは歌それぞれの調子に依つて或歌は二行に或歌は三行に書くことにすれば可い。よしそれが歌の調子そのものを破ると言はれるにしてからが、その在來の調子それ自身が我々の感情にしつくりそぐはなくなつて來たのであれば、何も遠慮をする必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはどし／＼字あまりもやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか歌にならないとかいふ勝手な拘束を罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へば可い。かうしてさへ行けば、忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない。假に現在の三十一文字が四十一文字になり、五十一文字になるにしても、兎に角歌といふものは滅びない。さうして我々

はそれに依つて、その刹那々々の生命を愛惜する心を滿足させることが出來る。

○こんな事を考へて、丁度秒針が一回轉する程の間、私は凝然としてゐた。さうして自分の心が次第々々に暗くなつて行くことを感じた。——私の不便を感じてゐるのは歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置とそれから歌ぐらゐなものである。謂はゞ何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の眞に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろ〳〵の事に對しては、一指をも加へることが出來ないではないか。否、それに忍從し、それに屈服して、慘ましき二重の生活を續けて行く外に此の世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に辯解しては見るものの、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、知識賣買制度の犧牲である。

○目を移して、死んだもののやうに疊の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。

（四十三年十二月）

くだかけ

土井晩翠君に送れる

初日はのぼりぬ、あな〳〵この國には
光の使の鳥さへえ鳴かぬや、と、
うつけし聲々亞細亞を領ずる時し、
聞いたり、——東の花苑花を踏みて、
けだかさ、ををしさ、王者のほこり見する
雞ほがらに鳴きぬるその初聲。——
あかつき殘れる夜影の雲もつひえ、
ああその聲よりこの國朝となりぬ。
見よ、今、花苑花降るあさぼらけを
覺めずや、いざ。とぞ促がす御宣ありと
をさなき心の夢の瞳ひらきぬれば、
あでなり、大花生花啄みつつ、
歌うて立ちぬるくだかけ。——その冠に
天の日もえたり。——我ただ仰ぎ入りぬ。

（『黃草集』より）

野の花

千萬世のむかし、天の穗の
露ひと雫野におちて
うるほひ沁みし惠まれの、
さは、花種のくはし芽の
花とし咲くや、世々に、また
今もよ咲きぬ。——野はひろく、
蒼蒼き世に、朽ちぬ日の
常磐心のときめきに。

仄には咲けれ、めぐまれの
野の花、あはれ、ひと花に、
天の祕れの光宮の
花燈に照らふものみなの
心ぞさくと、にほへばや、
咲き、また散りぬ、祝の日の
ことぶき、——二日三日年ら
生の日光のふところに。

（『黃草集』より）

時代閉塞の現狀

（強權、純粹自然主義の最後及び明日の考察）

（一）

數日前本欄（東京朝日新聞の文藝欄）に出た「自己主張の思想としての自然主義」と題する魚住氏の論文は、今日に於ける我々日本の青年の思索的生活の半面――閑却されてゐる半面を比較的明瞭に指摘した點に於て、注意を値するものであつた。蓋し我々が一概に自然主義といふ名の下に呼んで來た所の思潮には、最初からして幾多の矛盾が雜然として混在してゐたに拘らず、今日まで未だ何等の嚴密なる檢覈がそれに對して加へられずにゐるのである。彼等の兩方――所謂自然主義者も亦所謂非自然主義者も、早くから此矛盾を或程度までは感知してゐたに拘らず、共に其「自然主義」といふ名を最初から餘りにオオソライズして考へてゐた爲に、此矛盾を根柢まで深く解剖し、檢覈する事を、さうしてそれが彼等の確執を最も早く解決するものなる事を忘れてゐたのである。斯くて此「主義」は既に五年の間間斷なき論爭を續けられて來たに拘らず、今日猶其最も一般的なる定義をさへ與へられずにゐるのみならず、事實に於て既に純粹自然主義が其理論上の最後を告げてゐるに拘らず、同じ名の下に繰返さるゝ全く別な主張と、それに對する無用の反駁とが、其熱心を失つた狀態を以て何時までも繼續されてゐる。さうして凡て此等の混亂の渦中に在つて、今や我々の多くは其心内に於て自己分裂のいたましき悲劇に際會してゐるのである。思想の中心を失つてゐるのである。

自己主張的傾向が、數年前我々が其新しき思索的生活を始めた當初からして、一方それと矛盾する科學的、運命論的、自己否定的傾向（純粹自然主義）と結合してゐた事は事實である。さうしてこれは屢後者の一つの屬性の如く取扱はれて來たに拘らず、近來（純粹自然主義が彼の觀照論に於て實人生に對する態度を一決して以來）の傾向は、漸く兩者の間の溝渠の遂に越ゆべからざるを示してゐる。此意味に於て、魚住氏の指摘は能く其時を得たものといふべきである。然し我々は、それと共に或重大なる誤謬が彼の論文に含まれてゐるのを看過することが出來ない。それは、論者が其指摘を一の議論として發表する爲に――「自己主張の思想としての自然主義」を說く爲に、我々に向つて一の虛僞を強要してゐる事である。相矛盾せる兩傾向の不思議なる五年間の共棲を我々に理解させる爲に、其處に論者が自分勝手に一つの動機を捏造してゐる事である。即ち、其共棲が全く兩者共通の怨敵たるオオソリテイ――國家といふものに對抗する爲に政略的に行はれた結婚であるとしてゐる事である。

それが明白なる誤謬、寧ろ明白なる虛僞である事は、此處に詳しく述べるまでもない。我々日本の青年は未だ嘗て彼の強權に對して何等の確執をも釀した事が無いのである。從つて國家が我々にとつて怨敵となるべき機會も未だ嘗て無かつたのである。さうして此處に我々が論者の不注意に對して是正を試みるのは、蓋し、今日の我々にとつて一つの新しい悲しみでなければならぬ。何故なれば、それは實に、我々自身が現在に於て有つてゐる理解の猶極めて不徹底

の状態に在る事、及び我々の今日及び今日までの境遇が彼の強權を敵とし得る境遇の不幸よりも更に一層不幸なものである事を自ら承認する所以であるからである。

今日我々の中誰でも先づ心を鎮めて、彼の強權と我々自身との關係を考へて見るならば、必ず其處に豫想外に大きい疎隔(不和ではない)の横たはつてゐる事を發見して驚くに違ひない。實に彼の日本の總ての女子が、明治新社會の形成を全く男子の手に委ねた結果として、過去四十年の間一に男子の奴隷として規定、訓練され(法規の上にも、教育の上にも、將又實際の家庭の上にも)、しかもそれに滿足――少くともそれに抗辯する理由を知らずにゐる如く、我々青年も亦同じ理由によつて、總て國家に就いての問題に於ては(それが今日の問題であらうと、我々自身の時代たる明日の問題であらうと)、全く父兄の手に一任してゐるのである。これ我々自身の希望、若くは便宜によるか、父兄の希望、便宜によるか、或は又兩者の共に意識せざる他の原因によるかは別として、兎も角も以上の状態は事實である。國家てふ問題が我々の腦裡に入つて來るのは、たゞそれが我々の個人的利害に關係する時だけである。さうしてそれが過ぎてしまへば、再び他人同志になるのである。

（二）

無論思想上の事は、必ずしも特殊の接觸、特殊の機會によつてのみ發生するものではない。我々青年は誰しも其或時期に於て徴兵檢査の爲に非常な危惧を感じてゐる。又總ての青年の權利たる教育が其一部分――富有なる父兄を有つた一部分だけの特權となり、更にそれが無法なる試驗制度の爲に更に又約三分の一だけに限られてゐる事實や、國民の最大多數の食事を制限してゐる高率の租税の費途なども目撃してゐる。凡そ此等の極く普通な現象も、我々をして彼の強權に對する自由討究を始めしむる動機たる性質は有つてゐるに違ひない。然り、寧ろ本來に於ては我々は已に業に其自由討究を始めてゐるべき筈なのである。にも拘らず實際に於ては、幸か不幸か我々の理解はまだ其處まで進んでゐない。さうして其處には日本人特有の或論理が常に働いてゐる。

しかも今日我々が父兄に對して注意せねばならぬ點が其處に存するのである。蓋し其論理は我々の父兄の手に在る間は其國家を保護し、發達さする最重要の武器なるに拘らず、一度我々青年の手に移されるに及んで、全く何人も豫期しなかつた結論に到達してゐるのである。「國家は強大でなければならぬ。我々は夫を阻害すべき何等の理由も有つてゐない。但し我々だけはそれにお手傳するのは御免だ！」これ實に今日比較的教養ある殆ど總ての青年が國家と他人たる境遇に於て有ち得る愛國心の全體ではないか。さうして此結論は、特に實業界などに志す一部の青年の間には、更に一層明斷になつてゐる。曰く、「國家は帝國主義で以て日に増し強大になつて行く。誠に結構な事だ。だから我々もよろしくその眞似をしなければならぬ。正義だの、人道だのといふ事にはお構ひなしに一生懸命儲けなければならぬ。國の爲なんて考へる暇があるものか！」

彼の早くから我々の間に竄入してゐる哲學的虚無主義の如きも、亦此愛國心の一歩だけ進歩したものである事は言ふまでもない。それは一見彼の強權を敵としてゐるやうであるけれども、さうではない。寧ろ當然敵とすべき者に服從した結果なのである。彼等は實に一切の人間の活動を白眼を以て見るが如く、強權の存在に對しても亦全く没交渉なのである――それだ

け絶望的なのである。

かくて魚住氏の所謂共通の怨敵が實際に於て存在しない事は明らかになつた。無論それは、彼の敵が敵たる性質を有つてゐないといふ事でない。我々がそれを敵にしてゐないといふ事である。さうして此結合(矛盾せる兩思想の)は、寧ろさういふ外部的原因からではなく、實に此兩思想の對立が認められた最初から今日に至る迄の間、兩者が共に敵を有たなかつたといふ事に原因してゐるのである。(後段參照)

魚住氏は更に同じ誤謬から、自然主義者の或人々が嘗て其主義と國家主義との間に或妥協を試みたのを見て、「不徹底」だと咎めてゐる。私は今論者の心持だけは十分了解することが出來る。然し既に國家が今日まで我々の敵ではなかつた以上、また自然主義といふ言葉の内容たる思想の中心が何處にあるか解らない狀態にある以上、何を標準として我々はしかく輕々しく不徹底呼ばはりをする事が出來よう。さうして又其不徹底が、たとひ論者の所謂自己主張の思想から言つては不徹底であるにしても、自然主義としての不徹底では必ずしも無いのである。

すべて此等の誤謬は、論者が既に自然主義といふ名に含まるゝ相矛盾する傾向を指摘して置きながら、猶且それに對して嚴密なる檢覈を加へずにゐる所から來てゐるのである。一切の近代的傾向を自然主義といふ名によつて呼ばうとする笑ふべき「羅馬帝國」的妄想から來てゐるのである。さうして此無定見は、實は、今日自然主義といふ名を口にする殆んど總ての人の無定見なのである。

(三)

無論自然主義の定義は、少くとも日本に於ては、未だ定まつてゐない。從つて我々は各々其欲する時、欲する處に勝手に此名を使用しても、何處からも咎められる心配は無い。然しそれにしても思慮ある人はさう言ふ事はしない筈である。同じ町内に同じ名の人が五人も十人も有つた時、それによつて我々の感ずる不便は何れだけであるか。其不便からだけでも、我々は今我々の思想其者を統一すると共に、又其名にも整理を加へる必要があるのである。

見よ。花袋氏、藤村氏、天溪氏、抱月氏、泡鳴氏、白鳥氏、今は忘られてゐるが風葉氏、青果氏、其他――すべて此等の人は皆齊しく自然主義者なのである。さうして其各々の間には、今日既に其肩書以外には殆ど全く共通した點が見出し難いのである。無論同主義者だからと言つて、必ずしも同じ事を書き、同じ事を論じなければならぬといふ理由はない。それならば我々は、白鳥氏對藤村氏、泡鳴氏對抱月氏の如く、人生に對する態度までが全く相違してゐる事實を如何に說明すればよいのであるか。尤も此等の人の名は既に半ば歷史的に固定してゐるのであるから仕方が無いとしても、我々は更に、現實暴露、無解決、平面描寫、劃一線の態度等の言葉によつて表された科學的、運命論的、靜止的、自己否定的の内容が、其後漸く、第一義慾とか、人生批評とか、主觀の權威とか、自然主義中の浪漫的分子とかいふ言葉によつて表さるゝ活動的、自己主張的の内容に變つて來た事や、荷風氏が自然主義者によつて推讃の辭を贈られた事や、今度また「自己主張の思想としての自然主義」といふ論文を讀まされた事などを、どういふ手續を以て承認すれば可いのであるか。其等の矛盾は啻に一見して矛盾に見える許りでなく、見れば見る程何處迄も矛盾してゐるのである。かくて今や「自然主義」といふ言葉は、刻一刻に身體も顏も變つて來て、全く一箇のズフィンクスに成つてゐる。「自然主義とは

何ぞや？　其中心は何處に在りや？　斯く〳〵我々が問を發する時、彼等の中一人でも起つてそれに答へ得る者があるか。否、彼等は一樣に起つて答へるに違ひない、全く別々な答を。

　更に此混雜は彼等の間のみに止まらないのである。今日の文壇には彼等の外に別に、自然主義者といふ名を背じない人達がある。然し其等の人達と彼等との間には抑も何れだけの相違が有るのか。一例を擧げるならば、近き過去に於て自然主義者から攻撃を享けた享樂主義と觀照當時の自然主義との間に、一方が稍贅澤で他方が稍つゝましやかだといふ以外に、何れだけの間隔が有るだらうか。新浪漫主義を唱へる人と主觀の苦悶を說く自然主義者との心境に何れだけの扞格が有るだらうか。淫賣屋から出て來る自然主義者の顏と女郎屋から出て來る藝術至上主義者の顏と其表れてゐる醜惡の表情に何等かの高下が有るだらうか。少し例は違ふが、小說「放浪」に描かれたる肉靈合致の全我的活動なるものは、其論理と表象の方法が新しくなつた外に、嘗て本能滿足主義といふ名の下に考量されたものと何れだけ違つてゐるだらうか。

　魚住氏は此一見收攬し難き混亂の狀態に對して、極めて都合の好い解釋を與へてゐる。曰く、「此の奇なる結合（自己主張の思想とデターミニスチックの思想の名が自然主義である」と。蓋しこれ此狀態に對する最も都合の好い、且最も氣の利いた解釋である。然し我々は覺悟しなければならぬ、此解釋を承認する上は、更に或驚く可き大罪を犯さねばならぬといふ事を。何故なれば、人間の思想は、それが人間自體に關するものなる限り、必ず何等かの意味に於て自己主張的、自己否定的の二者を出づることが出來ないのである。即ち、若し我々が今此論者の言を承認すれば、今後永久に一切の人間の思想に對して「自然主義」といふ冠詞を附けて呼ばねばならなくなるのである。

　此論者の誤謬は、自然主義發生當時に立歸つて考へれば一層明瞭である。自然主義と稱へらるゝ自己否定的の傾向は、誰も知る如く日露戰爭以後に於て初めて徐々に起つて來たものであるに拘らず、一方はそれよりもずつと以前――十年以前から在つたのである。新しき名は新しく起つた者に與へらるべきであらうか、將又それと前から在つた者との結合に與へらるべきであらうか。さうして此結合は、前にも言つた如く、兩者共敵を有たなかつた（一方は敵を有つべき性質のものでなく、一方は敵を有つてゐなかつた）事に起因してゐたのである。別の見方をすれば、兩者の經濟的狀態の一時的共通（一方は理想を有つべき性質のものでなく、一方は理想を失つてゐた）に起因してゐるのである。さうして更に詳しく言へば、純粹自然主義は實に反省の形に於て他の一方から分化したものであつたのである。

　かくて此結合の結果は我々の今日迄見て來た如くである。初めは兩者共仲好く暮してゐた。それが、純粹自然主義にあつては單に見、而して承認するだけの事を、其同棲者が無遠慮にも、行ひ、且つ主張せんとするやうになつて、其處に此不思議なる夫婦は最初の、而して最終の夫婦喧嘩を始めたのである。實行と觀照との問題がそれである。さうして其論爭によつて、純粹自然主義が其最初から限定されてゐる劃一線の態度を正確に決定し、其理論上の最後を告げて、此處に此結合は全く内部に於て斷絶してしまつてゐるのである。

（四）

　斯くて今や我々には、自己主張の強烈な欲求が殘つてゐるのみである。自然主義發生當時

と同じく、今猶理想を失ひ、方向を失ひ、出口を失つた狀態に於て、長い間鬱積して來た其自身の力を獨りで持餘してゐるのである。既に斷絶してゐる純粹自然主義との結合を今猶意識しかねてゐる事や、其他すべて今日の我々青年が有つてゐる內訌的、自滅的傾向は、この理想喪失の悲しむべき狀態を極めて明瞭に語つてゐる。――さうしてこれは實に「時代閉塞」の結果なのである。

見よ、我々は今何處に我々の進むべき路を見出し得るか。此處に一人の青年が有つて教育家たらむとしてゐるとする。彼は教育とは、時代が其一切の所有を提供して次の時代の爲にする犧牲だといふ事を知つてゐる。然も今日に於ては教育はたゞ其「今日」に必要なる人物を養成する所以に過ぎない。さうして彼が教育家として爲し得る仕事は、リーダーの一から五までを一生繰返すか、或は其他の學科の何れも極く初歩のところを毎日々々死ぬまで講義する丈の事である。若しそれ以外の事をなさむとすれば、彼はもう教育界にゐる事が出來ないのである。又一人の青年があつて何等か重要なる發明を爲さむとしてゐるとする。しかも今日に於ては、一切の發明は實に一切の勞力と共に全く無價値である。――資本といふ不思議な勢力の援助を得ない限りは。

時代閉塞の現狀は啻にそれら個々の問題に止まらないのである。今日我々の父兄は、大體に於て一般學生の氣風が着實になつたと言つて喜んでゐる。しかも其着實とは單に今日の學生のすべてが其在學時代から奉職口の心配をしなければならなくなつたといふ事ではないか。さうしてさう着實になつてゐるに拘らず、毎年何百といふ官私大學卒業生が、其半分は職を得かねて下宿屋にごろ／＼してゐるではないか。しかも彼等はまだ／＼幸福な方である。前にも言つた如く、彼等に何十倍、何百倍する多數の青年は、其教育を享ける權利を中途半端で奪はれてしまふではないか。中途半端の教育は其人の一生を中途半端にする。彼等は實に其生涯の勤勉努力を以てしても猶且三十圓以上の月給を取る事が許されないのである。無論彼等はそれに滿足する筈がない。かくて日本には今「遊民」といふ不思議な階級が漸次其數を増しつゝある。今やどんな僻村へ行つても三人か五人の中學卒業者がゐる。さうして彼等の事業は、實に、父兄の財產を食ひ減す事と無駄話をする事だけである。

我々青年を圍繞する空氣は、今やもう少しも流動しなくなつた。強權の勢力は普く國內に行亘つてゐる。現代社會組織は其隅々まで發達してゐる。――さうして其發達が最早完成に近い程度まで進んでゐる事は、其制度の有する缺陷の日一日明白になつてゐる事によつて知ることが出來る。戰爭とか豐作とか饑饉とか、すべて或偶然の出來事の發生するでなければ振興する見込の無い一般經濟界の狀態は何を語るか。財產と共に道德心をも失つた貧民と賣淫婦との急激なる增加は何を語るか。或は又今日我邦に於て、其法律の規定してゐる罪人の數が驚くべき勢ひを以て增して來た結果、遂に見す／＼其國法の適用を一部に於て中止せねばならなくなつてゐる事實（微罪不檢擧の事實、東京竝びに各都市に於ける無數の賣淫婦が拘禁する場所が無い爲に半公認の狀態にある事實）は何を語るか。

斯くの如き時代閉塞の現狀に於て、我々の中最も急進的な人達が、如何なる方面に其「自己」を主張してゐるかは既に讀者の知る如くである。實に彼等は、抑へても／＼抑へきれぬ自己其者の壓迫に堪へかねて、彼等の入れられてゐる箱の最も板の薄い處、若くは空隙（現代社會

組織の缺陷に向つて全く盲目的に突進してゐる。今日の小說や詩や歌の殆どすべてが女郎買、淫賣買、乃至野合、姦通の記錄であるのは決して偶然ではない。しかも我々の父兄にはこれを攻擊する權利はないのである。何故なれば、すべて此等は國法によつて公認、若くは半ば公認されてゐる所ではないか。

さうして又我々の一部は、「未來」を奪はれたる現狀に對して、不思議なる方法によつて其敬意と服從とを表してゐる。元祿時代に對する回顧がそれである。見よ、彼等の亡國的感情が、其祖先が一度遭遇した時代閉塞の狀態に對する同感と思慕とによつて、如何に遺憾なく其美しさを發揮してゐるかを。

斯くて今や我々青年は、此自滅の狀態から脫出する爲に、遂に其「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達してゐるのである。それは我々の希望や乃至其他の理由によるのではない、實に必死である。我々は一齊に起つて先づ此時代閉塞の現狀に宣戰しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷めて全精神を明日の考察――我々自身の時代に對する組織的考察に傾注しなければならぬのである。

（五）

明日の考察！　これ實に我々が今日に於て爲すべき唯一である、さうして又總てである。

その考察が、如何なる方面に如何にして始めらるべきであるか。それは無論人々各自の自由である。然し此際に於て、我々青年が過去に於て如何に其「自己」を主張し、如何にそれに失敗して來たかを考へて見れば、大體に於て我々の今後の方向が豫測されぬでもない。

蓋し、我々明治の青年が、全く其父兄の手によつて造り出された明治新社會の完成の爲に有用な人物となるべく教育されて來た間に、別に青年自體の權利を識認し、自發的に自己を主張し始めたのは、誰も知る如く、日清戰爭の結果によつて國民全體が其國民的自覺の勃興を示してから間もなくの事であつた。既に自然主義運動の先蹤として一部の間に認められてゐる如く、樗牛の個人主義が卽ち其第一聲であつた。（さうして其際に於ても、我々はまだ彼の既成強權に對して第二者たる意識を持ち得なかつた。樗牛は後年彼の友人が自然主義と國家的觀念との間に妥協を試みた如く、其日蓮論の中に彼の主義對既成強權の壓制結婚を企ててゐる。）

樗牛の個人主義の破滅の原因は、彼の思想それ自身の中にあつた事は言ふまでもない。卽ち彼には、人間の偉大に關する傳習的迷信が極めて多量に含まれてゐたと共に、一切の「既成」と青年との間の關係に對する理解が遙かに局限的（日露戰爭以前に於ける日本人の精神的活動があらゆる方面に於て局限的であつた如く）であつた。さうして其思想が魔語の如く（彼がニイチエを評した言葉を借りて言へば）當時の青年を動かしたに拘らず、彼が未來の一設計者たるニイチエから分れて、其迷信の偶像を日蓮といふ過去の人間に發見した時、「未來の權利」たる青年の心は、彼の永眠を待つまでもなく、早く既に彼を離れ始めたのである。

この失敗は何を我々に語つてゐるか。一切の「既成」を其儘にして置いて、其中に、自力を以て我々が我々の天地を新に建設するといふ事は全く不可能だといふ事である。斯くて我々は期せずして第二の經驗――宗教的欲求の時代に移つた。それは其當時に於ては前者の反動として認められた。個人意識の勃興が自ら其跳梁に堪へられなくなつたのだと批評された。然しそれは正鵠を得てゐない。何故なれば其處には

たゞ方法と目的の場所との差違が有るのみである。自力によつて既成の中に自己を主張せむとしたのが、他力によつて既成の外に同じ事を成さんとしたまでである。さうして此第二の經驗も見事に失敗した。我々は彼の純粹にて且つ美しき感情を以て語られた梁川の異常なる宗教的實驗の報告を讀んで、其遠神淸淨なる心境に對して限りなき希求憧憬の情を走らせながらも、又常に、彼が一個の肺病患者であるといふ事實を忘れなかつた。何時からとなく我々の心にまぎれ込んでゐた「科學」の石の重みは、遂に我々をして九皐の天に飛翔する事を許さなかつたのである。

第三の經驗は言ふまでもなく純粹自然主義との結合時代である。此時代には、前の時代に於て我々の敵であつた科學は却つて我々の味方であつた。さうして此經驗は、前の二つの經驗にも増して重大なる教訓を我々に與へてゐる。それは外ではない。「一切の美しき理想は皆虛僞である！」

かくて我々の今後の方針は、以上三次の經驗によつて略限定されてゐるのである。即ち我々の理想は最早「善」や「美」に對する空想である譯はない。一切の空想を峻拒して、其處に殘る唯一つの眞實――「必要」！ これ實に我々が未來に向つて求むべき一切である。我々は今最も嚴密に、大膽に、自由に「今日」を研究して、其處に我々自身にとつての「明日」の必要を發見しなければならぬ。必要は最も確實なる理想である。

更に、既に我々が我々の理想を發見した時に於て、それを如何にして如何なる處に求むべきか。「既成」の內にか。外にか。「既成」を其儘にしてか、しないでか。或は又自力によつてか、他力によつてか、それはもう言ふまでもない。今日の我々は過去の我々ではないのである。從つて過去に於ける失敗を再びする筈はないのである。

文學――彼の自然主義運動の前半、彼等の「眞實」の發見と承認とが「批評」として刺戟を有つてゐた時期が過ぎて以來、漸くたゞの記述、たゞの說話に傾いて來てゐる文學も、斯くて復た其眠れる精神が目を覺して來るのではあるまいか。何故なれば、我々全青年の心が「明日」を占領した時、其時、「今日」の一切が初めて最も適切なる批評を享くるからである。時代に沒頭してゐては時代を批評する事が出來ない。私の文學に求むる所は批評である。

はつはつと心煙しもえさかる巽あがり
の風吹きこしや

おのれ先づ心落しぬ風に似る少女の心
手に取るとして

海の鳥ふところに入るかく思ひ潮にのり
來し君を抱きぬ

美き蛾みな火にこそ死ぬれよしゑやし心
燒かえて死なまし我も

鼓なす互みの心おもしろく休まず鳴るを
ききて抱きぬ

君を戀ひ君を得つるを恐ろしき懲罰と
知るわりなきかなや

早雲動かむとせず大空に我が戀眠ると
見てさびしき

磯ゆけば浪きてわれの靴跡を消せりわれ
はた君忘れ行く

（明治四十年九月 明星所載）

平信

（與岡山君書）

一

親愛なる岡山俵七君。——

また／＼長い御無沙汰をしてしまつた。何だかもう、何時からの御無沙汰だつたかを思ひ出すのさへ、億劫なやうな氣がする。此處へ引越した事も、お知らせしたつたやうでもあり、また、お知らせしようと思つただけで爲なかつたやうでもある。

僕の病氣は此頃また少し面白くなくなつた。つい一週間前までは、毎日三十七度五分以上には上らない事になつてゐた熱が、何うやらまた權衡を失つて來て、一昨日——その日は天長節で、さうしてその日の晩に行火にあたりながら、ひよつと此手紙を書く事を思ひ立つたのだが——も、昨日も、今日も、成るべく服むなと醫者から戒められてゐる、解熱の頓服を服まねばならなかつた。殊に今日などは朝から用心して寐てゐたのに、午後になると遂々三十九度近くまでも熱が出た。此頃の小春の日影の温かく障子に射す日にも、綿入に羽織を重ねて、剩けに莫大小の厚いシャツまで着込んでゐる背中から、ザワ／＼と不氣味な寒氣のして來る時には、四圍が俄かに薄暗く、冷く、寂しく、味氣なくなつて行くやうに思はれる。さうして、敷いてある蒲團の中にもぐり込んで、その熱の下るまでは、何時間も、何時間も、丁度犯した罪の報いに心を責められてゐる人のやうに、ぢつと身動ぎもせずに息を殺して寐てゐる氣持！實際僕は今、毎日々々ただ熱の出る事を心配して生きてゐるやうなものだ。さうしてその心配一つの爲めに、殆ど總ての自由を縛られて、目に見えない牢の中に入つてゐるやうなものだ。長いこと——さうだ、ほんとに長いことだ——僕はあの下駄といふ物を穿いた事がない。

何しろもう健康に見棄てられてから十箇月にもなる。腹にたまつた悪い水の重さの爲めに不自由な身體を、あの病院の純白な臥床の上に仰向に載せて、生れて初めて安全な休息所を見付け出したやうな氣持でスヤ／＼と眠つた晩の事も、それから四十日の後、もうその臥床の上の單調な生活にすつかり飽きてしまつて、これは退院する時に着るのだと言つて拵へさせた羽織の出來上つたばかりに、その新しい羽織を着て、「退院した」といふ喜びを味はつて見たかつたばかりに、君、その時はそれ程生きた世の中が戀しかつた！——無理矢理に醫者の同意を得て病院の門から出て來たものの、靜かに曳かせた俥が電車通の目まぐるしい雜鬧の中に來ると、急にまた今までの靜かな處に逃げ歸りたいやうに思つた日の事も、今ではもう新しい記憶ではなくなつた。そればかりではない、あの朝早くから夜の十二時過までも、騒々しい電車馬車の響に絶えず話聲も擾亂される二階に寐てゐて、人の顏さへ見れば食ひつくやうに議論をしたかつたり、病氣などは自分で癒らうと思へば一晩のうちにでも癒るやうに思つたりして、しよつちゆう昂奮した狀態にゐた頃の事も、七月にひどくブリ返した時、毎日々々九十度の酷暑の中に、しかもあの西日の烈しい窓の下で、額と胸に夜晝氷嚢をあてがひながら、自分の葬式の費用の出處を繰返し／＼考へてゐた事も、何だ

かもうずつと遠い――時としては二年も三年も前の事のやうにさへ思はれる。冬が春になり、春が夏になり、さうして秋がまたそれに取つて代つた時候の推移は、街や野に出て見なくても、衰弱した身體には却つて著るしく感じられた。その日〳〵の天氣模樣、服む藥の味の變化、御用新聞の論調……乃至色々の健康な時には氣も付かずに濟むやうな些細な事柄までが、病勢の消長や家庭の革々の出來事につれて、この十箇月の間の僕の氣分を、それからそれと細かに變らせて行つた。

二

さうして今は、どうやら身體ばかりか、心までも病み疲れたといふ風に、我ながら怪しまれる程ぼやけてゐる日が多い。何も爲ないで暮らすのは毎日の事だが、時としては、その上に更に何も考へずに、たゞ、隣家の白癡兒の不思議な叫び聲を聞きながら、夕を迎へる事さへある。「早く健康な人になりたい」といふ希望は何時しか切實の度を減じて、「何時になつたら癒る事やら」といふやうな半ば絶望的な氣持が續く。熱の高い日は殊にさうだ。

母――君も知つてゐる筈の、あの腰のすつかり曲つてしまつた僕の母は、僕の爲めに茶斷ちをして平復を祈つてゐてくれる。君、六十幾歳の今日まで何一つ娛樂といふものを有たなかつた僕の母にとつては、喫茶といふ事はその殆ど唯一の日常の慰めでもあり、贅澤でもあつた。僕はまだずつと幼かつた頃から、母が如何に滿足氣な樣子をして、朝々の食事の後の一杯の茶を啜つたかを見知つてゐた。人が白湯を割らずには飮まないやうな濃いのを、母は殊に好んで美味さうにして啜るのであつた。その好きな茶をふつつりと斷つてしまつた母の心は、僕にもよく解る、さうして十分感謝してゐる。が、悲しい事には――實際悲しい事だ！――僕は僕の母の心をよく知つてゐると共に、また、さうした心づくしの畢竟何の役にも立たない事をもよく知つてゐるのだ。よしや母が、その好きな茶を斷つたばかりでなく、その食を斷ち、その呼吸を斷つたとて、その爲めに僕の熱が一分一厘だつて下りはしない。……

つい此間も、去年生れて間もなく死んだ僕の子供の命日に、母は些かの供物をした佛前に線香を手向けながら、「眞坊（これがその死んだ兒の名前だつた）、お父さんや母さんの病氣の早く癒るやうに守れよ」と言つた。その時僕は丁度夕の食卓に就いて箸を取り上げた處だつたが、母の言葉の終るか終らないに、兩の眼には思はず涙があつまつた。君、僕は僕の眼に涙のあつた事を嬉しいと思ふ。さうして又神に祈り、佛に祈り、茶斷ちといふ犧牲的行爲までも敢てして、絶えず僕の爲めに心を勞してくれる母を持つた事を此上ない幸福だと思ふ。しかしさう思ふ事と、死んだ眞坊が僕や妻の病氣の癒るやうに守つてくれるか否かといふ事とは、全く關係のない問題だ。僕の熱を下げてくれるものは、やつぱりあの大學病院の若い醫學士の書いた處方箋通りの、ピラミドン零コンマ二、乳糖零コンマ五といふ解熱劑に違ひない――科學の力に違ひない。

三

此處まで此手紙を書いてから、三日經つた。その間僕は、食事の時や新聞を讀む時間の外、大抵おとなしく寐て暮らした。さうして何度も何度も繰返して、この手紙の事、この手紙に書かうと思つた事に就いて考へてゐた。

時には檢温器と相談の上で、もぞくさ起き出して來ては、この机の前に坐つた。しかし一旦取り上げたペンは、やがて一字も書かずに煙管

か、飲料の茶碗かに持ち代へられねばならなかつた。さういふ事も何度も繰返した後には、僕は何時でももう此手紙を書く事を止めようといふ氣になつた――此手紙ばかりでなく、一生文章といふものを書くまいといふやうな自棄の心にさへなつた。さうしてまたもぞくさと蒲團の中に逃げ込まねばならなかつた。

或晩、やつぱり同じ事を考へてゐながら、何時しか神經が昂つて來て、いくら眠らうと思つても眠れない氣持になつた。眞暗な室の中に三時間もさうして目を開いてゐた末に、とう／＼僕は一人で起きて電燈の捻子をひねつた。丁度一時だつた。火鉢には火が絶えて、鐵瓶にももう少しの餘温もなかつた。間もなく妻も目を覺まして起きて來た。

「おい、俺はやつぱり駄目だよ」叱り付けるやうな調子で出し抜けに僕はかう言つた「俺はもう書く事なんか止さう。俺の頭にある考へはみんな書く事の出來ない考へばかりだ。書いて書けない事はないが、書いたつて發表する事が出來ない。」

「さうですねえ。」妻はかう答へた。さうして適當な言葉を見出さない時に何時もする通り、眼を急がしくパチ／＼さしてゐた。

「しかし俺の考へは間違つてゐない。」

二人は火のない火鉢を中にして、稍暫し無言のまゝ相對してゐた。そのうちに妻は火箸で灰を突つき出した。

「寢よう。」

かう言つて再び床の中に入つてからは、僕はただ一生懸命になつて眠る事に努めた。目を瞑つて、自分の呼吸を百まで數へては、また繰返し／＼數へた。やがて少し進んでゐる隣家の時計が二時を打つた。翌る日は寢不足のために常よりも一層氣分が惡かつた。

しかし今朝になつたら、僕の心もまた變つた。君、僕はやつぱり「時機を待つ人」といふ悲しい人達の一人である外はない。――蒼い皮肉にその日／＼を紛らしたり、一生何事にも全力を注いで働らくといふ事なしに寂しく死んでゆく、意氣地のない不平家の一人である外はない。苟くも信ずる所があれば、それを言ひ、それを行ふに、若しも男兒であれば何の顧慮する所もない筈だ。しかし僕は不幸にして、今の心ある日本人の多くと同じやうに、それの出來ない一人だつた。

かういふ諦めは必ずしも今朝に始まつた事ではない。今のやうな思想が頭に宿つて以來、既に長い間僕は「時機を待つ人」だつた。今にその時機が來る。」さう思つては辛くも自分を抑へて來た。無論さうして自分を抑へる事を卑怯だと思ふ疚しさは、常に僕の心にあつた。さうしてその疚しさは、博士とか先覺者とか言はれる人達の今日主義の意見に接して、それを卑怯だと罵る時でさへも、僕の心を去らなかつた。しかし僕には年老つた兩親があり、妻子がある。何の顧慮もなく僕が僕の所信に從ふといふ事は、それらの人々に取つては直ぐに悲惨な飢餓の襲來を意味してゐた。

君、僕は平生隨分諦められ難い所までも諦めてゐる。

四

岡山君。

此頃僕は、もう餘程以前に友人から借りてあつて、しかも何故といふ事もなく讀まずに置いた「THE TERROR IN RUSSIA」といふ册子を取り出して讀んでみた。

此册子が公爵クロポトキンの著で、さうして英國議會の露西亞問題委員會の發行にかかる事は君も御存じであらう、君、君はその事たと

ひ單に譏誚的な著述に過ぎないとは言ひながら、ここに就いて、どんな感じを抱かれるか。誰しも著者の名が今日本でどんな取扱ひを受けてゐるかを知つてゐて、さうしてそれは止むを得ない事だといふ事を強制的に思はせられてゐる人ならば、事その事に對する多少の驚きと、同盟國の國民に對する一種の羨望の情とを經驗することなしには此冊子の最初の頁を開く事が出來まい。(かう僕が言ふのは、無論著者の思想そのものには何の關係もない事だ。)

「我々日本人は不幸だ!」この事はこんな小さな事柄からさへも、ひし〳〵と僕の心に沁む、不幸の自覺はその人を二重不幸にする。僕は今迄に、何度目を堅く瞑つて、この憐れな島國に生れた事を怨んだか! この島國の子供騙しの迷信と底の見え透いた僞善の中に握りつぶされたやうな長い一生を送るよりは、寧ろ露西亞のやうな露骨な壓制國に生れて、一思ひに警吏に叩き殺される方が増しだといふ事を考へたか!

クロポトキンの冊子には、數限りなき實例と統計とを以て、露西亞の監獄や裁判所や警察や官僚專制の國家に於ける、官權の横暴と人民の慘苦とが事細かに記述されてあつた。さうしてそれらの事實は、殆ど皆、露西亞といふ國以外では見る事も、聞く事も出來ないやうな、恐ろしい、むごたらしい、みじめな事ばかりであつた。無告の民が何の理由もなく突然拘引されて行つて、無裁判の儘で何時までも〳〵留めて置かれたり、ひどい拷問を受けたり、死刑を行はれたりした例は數へる事も出來なかつた。或男はたつた一圓五十錢ばかりの金を盜んだだけで絞首臺に上された。或一人の女は或盜人を一寸匿まつてやつたといふだけで同じ運命に遭遇した。又或教育ある人士は、いきなり拘引されて、いきなり監獄に打ち込まれて、さうしてひどく撲うたれたので、看守長に飛びついて其鼻を嚙み切つた。彼はその爲めに癲狂院に送られたが、其處へ送られてからほんとに發狂してしまつた。若し夫れ新らしい思想を抱く者の蒙つた迫害に至つては殆ど筆紙の盡す所ではない。言論、結社、信仰の自由を保證した一九〇五年十月の皇帝の宣言は空文であつた。さうして一方には秘密警察の官吏や、皇帝の特別の保護を受けてゐる『露西亞人同盟』といふ不思議な團體が、白晝公然國家の權力と金力とを利用して戰慄すべき罪惡を遂行した。内相プレエヴェ、セルギウス大公、ボグダノヴィッチ將軍、その他近年の露西亞に行はれた大暗殺の主謀者が、十六年間も奉職してゐるアゼフといふ秘密警察官吏であつたといふ事實は、全露西亞を震駭せしめた。國會の議員の名望ある數人は、同盟の毒手に斃れた。しかも其暗殺者の或者は、肺病で死にかゝつてゐる他の無關係の男(或條件で買收した)に取り代へられようとしたり、或者は官權の秘密保護によつて逃亡した。又或共犯者は、監獄に入つてからも、同盟の本部から月給を貰つてゐた。

監獄の慘状に至つては更に〳〵ひどい。總ての監獄は充滿し、その多くは定員の三倍も四倍もを收容してゐた。さうして壞血病と窒扶斯とが到る處の監獄に流行した。しかも設備の不完全な多くの監獄では、病囚と普通の囚人とを一所にして置く外はなかつた。その結果は即ち次の如くであつた。或監獄では千三百人の勞役囚の六割五分が壞血病に罹された。或監獄(定員三百六十人)では千二百人の在監者の中に五百人の窒扶斯患者があつた。或監獄では看守全部が囚人から傳染して窒扶斯に罹つた。キエフの市では一九〇八年に於ける窒扶斯患者總數九千百五十人の中、二千百八十五人は囚人であつた。又或視察官の報告によると、或

地方の監獄では、五年間に二千五百人（一年平均五百人）の囚人が窒扶斯で死んで、しかも猶猖獗を極めてゐた。或死刑囚は窒扶斯に罹つて、四十度の熱のために譫言を言つてる儘絞首臺に上された。さうして驚くべき事には、囚人は窒扶斯に罹つて死んでも、監獄醫から死亡證明書の出るまでは、その兩足の鐵の鎖が取り去られなかつた。

五

露西亞の囚人の恐怖は、しかし、たゞ壞血病と窒扶斯だけではなかつた。彼等は皆毎日のやうに叩かれたり、蹴られたり、時としてはそれ以上の責苦をも受けなければならなかつた。肋骨が折れ、齒が缺け、顎が破れ、手や足が利かなくなる程虐められた例は決して珍らしくなかつた。或囚人は人相のすつかり變つてしまふまで其顔を壞された。或囚人は餘り烈しく打たれた爲めに口や鼻から夥しく出血して、二三日經つと死んでしまつた。さうして監獄醫はこれに病氣死亡の證明書を出した。又或監獄では、「囚人にして窓に近づく者あらば、遠慮なくその頭部を覘ひて射殺すべし」といふやうな命令が下つた。すべて是等の事は囚人の心を險惡にした。彼等はよく反抗し、よく飢餓同盟（食物拒否）を企て、またよく自殺した。自殺の方法の中には、刃物や毒藥が得られないので、自分の着衣に石油を注いで、それに火をつけて燒け死ぬといふのがある。妙齡の美人であつた政治犯人ヘレン・スミルノフもオデッサの獄でさうして死んだ。

ストリイピンが首相になつた前年、即ち日露戰爭の濟んだ年までは、露西亞全體の囚人の數は八萬五千に過ぎなかつた。それが彼の就職した年（一九〇六年）たつた一年の間に、一躍十一萬一千人（二萬五千人増加）になり、一九〇七年には十三萬八千人（二萬七千人増加）に、一九〇八年には十七萬人（三萬二千人増加）に、さうして此冊子の著された一九〇九年（一昨年）の二月一日には十八萬一千百三十七人（二箇月間に一萬一千餘人増加）になつてゐた。若し此勢ひがその後までも續いたとすれば（續いたに違ひない）、今はもう彼の就職當時に比して、全露西亞の囚人が殆ど三倍に増加してゐる譯になる。君、我々にして今この數字の暗示する無量の意味に就いて考へる事を避けなかつたならば、つい二月前に彼がとう／＼キエフの劇場で暗殺者の手にかゝつた事も、畢竟彼自身のなした或る深酷なる約束の結果であつた事が解るではなからうか。

かういふ状態の下に置かれた露西亞の人民は、その最初の國會に向つて先づどんな事を要求したであらうか。一九〇六年五月十日、新たに選ばれた人民の代表者が、今しも第一ツマの開院式の擧げられんとするタヴリダ宮に向つて集まつて行く途中、街々を埋めた群集の中から一つの大きな叫びが起つた――

「大赦！　大赦！　大赦が先だ！」

さうして老志士ペトルンケエヴィッチの悲壯なる大赦請求演說が、實に此露國最初の國會の劈頭第一の演說であつた。

しかし此第一議會が、或地方に於いて八名の死刑囚が判決全部を否認して控訴しようとするに拘らず、州の總督がそれを許さないといふ事件に就いて、死刑延期と控訴受理とを政府に要求した時には、政府はその八名を即時死刑にするやうに總督に電命して置いて、さて「政府委員をして次の如く議場に答辯せしめた。「調査の結果、該事件は既に死刑執行濟になつてゐる事が判明しました。不幸にしてもう議論をする時機が過ぎてゐます。」

又或地方で、醫者のロマノフスキイといふ者

が何の理由でともなく突然檢擧され、軍法會議によつて三年の流刑を申渡されたが、それは全く何等かの誤解であるといふ事が判つた。判決文には、被告の職業が「小學教師」となつてゐた、さうして其名前までが「ロマノフ」と變つてゐた。醫者の妻はこの事件の調査を電報で國會に請願して來た。國會は殆ど毎日この種の請願を受付けねばならなかつた。さうして質問書が後から〳〵と政府に提出された。しかし其等の質問書は總て皆同じ答辯を受けなければならなかつた――同じ不滿足な答辯を。

六

これらの記述を、僕はその或頁は枕の上で、或頁はこの机の上で、また或頁は、たゞ一脚しかない椅子を縁側に持ち出して、日向ぼつこをしながら讀んだ。さうして或時は眼を閉くし、或時は齒を喰ひしばり、或時は嘆息を吐き、また或時は眼を本の上から放して、世界中で最も苦しんでゐる人々の爲めにやるせない思ひやりの心を味はつた。さうして始終一種の緊縮した不安と憤怒の情に驅られてゐた。

君、僕は露西亞人ではない。繰返して言ふが、僕は露西亞人ではない。随つてその露西亞人がどんな生活をしてゐようと、僕には別に何の關する所もない筈だ。

水無月

五月十八日夜、露堂白鯨二君と共に、苜蓿社樓上に話し、席上題を求めて「水無月」を得、燈下筆を染めて各一詩を得たり。

砂山は長くつゞきて、水無月の
日は照りかへり、砂は蒸す。
海草の香はいと強く
流れぬ。あはれ、日に醉ひて
啼くなる鳥の礫雲雀、
歌はも高し。

大空に雲は浮ばず。大牧の
青の廣みの夏の草
日に臥すさまや、浪なげる
海のかなたに、白羊の
群とし見ゆる心安の
帆こそは遊べ。

ふみゆけば、踵に砂の心地よし。
身は漂泊のたゞ一人、
渚に寄せて花と咲き、
くだけてかへる浪の音に
思ひぬ、遠きふるさとの
母の渚邊。

砂ひかる渡島の國の離磯や、
我は小貝を、我が母は
若布ひろふとつれ立ちし
濱茄子かをる緑叢に
朝風すなる若き日の
あはれ水無月。

(『ハコダテの歌』より)

書簡

明治三十四年

×

御轉宅の儀むかしならばお祝ひ申上べきの所に候へども、忙はしき世の中、今度より廢し申候。

小生も一昨日轉宅仕候。この度は猪川さんらに近くて嬉しく候。「にぎたま」の一號は、來る十五日までに發行の筈、猪川兄の和歌論出る筈に候。公選の結果編輯人五人あり候へども瀧川君の外自覺する人なく、綴方の小生目がまはる樣に候。「一六〇五」は十七日に出る由に候。表裝の競爭する筈に候。校友會雜誌は十月廿五日原稿〆切、今度はなにか出すべいかと考へ居候。山邊君らの「東雲」昨日出き候。綴、緒の卷二冊、何れも百二十枚許り、讀んであきれ候。「にぎたま」にて批評せんと思ひ居候。熱心なところ感服と申すべく候。

去る六日誌友會を津志田にて開き申候。南瓜會は二三度やり候。此内に定期演説會ひらく筈。落梅集、明星、面白く候。この内に長い手紙差上べく候。亂筆御免。

若し逢ひたらば田子さんへよろしく。原稿ほしく候。餘は次便にて。

十月八日　　盛岡市四ツ家町二七長屋、田村方　翠江生拝

金田一京助様

明治三十五年

×

蚊は責める。暗くはなる。どうしよう。洋燈點けるも大儀だからつて、例の屋根の上へゐざり出て、こんな字を書き申し候。どうか御免なさい。抑も段々夜が白み初めると、蚊がぶんとやつて飛んで、どつかへ隠れる。つんぶり御天道様が山へおかくれになると、せわしい程、僕を責めつける。正しく夜の帳が共にこれらの醜惡を誘引するでせうか。果た共に包みむることでせうか。さなく吾れに罪を問ふのでせうか。此等の問題を考へると幾百年來吾れに犯した罪があつて、それをかう毎夜々々せめつけるのである。その罪をまづ考へて見ようなら、第一に來るのは筆無精で人に手紙を出さず、薄情な奴だ、人の前をいゝかげんに造らつてる奴だ、「此處にこ女の子の泣き聲がする、笛の音を聞く」と、人に思はせる事、手紙のかき樣の亂暴なこと、學校を逃げ出すくせのあること、かう感じ來ると、夜の帳は全くこれ等の醜惡凡てを包みさることと思はれる。安眠中は手紙かきの事も忘れて筆無精だといふ事を自らいふこともやめて、學校を逃げ出すこともない。此に於てか吾れ夜の定義を下し申し候。

夜は何にも知らぬものなり

善い哉言、罪をあがのふとして次ぎの遺かき申すべく候間、今はしつかり暮れ候らへば、こゝに擱筆致し申すべく候程をゆるし被下度願上候。

（九、一八）

花明様　まゐる

×

先日はわざ〳〵御見送被下、誠に難有奉謝候。一昨日は雑司ケ谷の宿へ一泊、昨日當家に引うつり候。景色よき所に候。實は今日親しい人へは後からと思うて書きはじめた手紙がすでに二十數本になつて、すつかりつかれましたから、この端書には何も申しません。御手紙ください。二三日中に私も差し上げます。

嵐は稚蘭のわかさにふきはずよ、みだれて雲の地にとき夢

都鳥の[illegible]の遠き市にたえずねがはく紬の時つ花たびね

市に入りて名なきすぐせをはづべしや花の著をぞ風つよき都

十一月三日　東京市小石川區小日向臺町[illegible]　白　蘋　生

小林花眠様

明治三十六年

[illegible]

人の世には喜びて泣く事少くして、悲しみて泣くことのみ多く候。若し今の小生に溢れ出る涙ありとせば、そは必ず前者の場合なるべく候。何故ぞといぶかり玉ふな。あらゆる自然と人とは今我が心の巷の塵を洗ひ清め居り候。古くして益々新たなる自然の情趣は申すに及ばず、友の一語、父母小妹の一擧手、戀人の一盼……若し生に病者の最好藥劑はと問はゞ、生はたゞちに故郷にかへれと申べく候。種々の事云ひたし、きゝたし。二三日にも出發するけれど、試驗すまば是非共澁民迄杖を曳き玉へ。

36—2—28　Shibutami. H. I.

小林花眠様
瀬川深様
岡山殘紅様

×

御端書只今拜見しました何日でも不變嬉しい者は親しい人の心の内でありますことに今の様な寂しい場合には。

やくにも立たず悪口許り上手な私に御滿會への出席御許しめ被下誠に難有存じます。私も出て皆様の御詩も拝聴し又御様の悪口も鍛へて見度く思ひますけれども毎日におい薬をのんで顔をしかめては砂糖こもりを補り〳〵日を暮して居ると云ふ有様ですから御察しを希上ます、毎日夕刻には薬取旁々醫師の家迄散歩します、褐色な空の處々に彫まれた星の荘厳な光は何時でも何か秘密な事を私にしらせます、譬へて見ますると今高樓の上では巡査を門番にして置き乍ら、明るいアーク燈の下で勝負事、飲酒、喧嘩、其他あらゆる卑しい事をやつて居る、又他の一方の貧民は明日の糧を神に祈つて、裏長屋の隅は温かい涙をその可愛い子供の上に流して居る、そして又世の所謂善人と悪人との無數の人は、各々其の薔薇或は悪の爲に頭脳を碎いて居る……、と斯う云ふ様な、そして酷しい寒い空下ろしの風は其れ等の社會のあらゆる矛盾と混亂とを打つて一團として裂けよと許り私のはれて居る頬に吹きつけます、遠くからは村の若者の笑ひ興ずる聲がおぞゐる様な笛の音に混つて陰森たる夜の色を縫ふが如くきこえ、草の黄なる田の畔は千頃寂として處々にまぶさうな村落の燈が見えて居ります病みて悲ひて思ひに堪へずしてこの暗黒の路を辿る私

の心、云はずともの事であります、然し乍ら決して情の悪い譯ではありません早く全快させようとの親心に感じて銘じての服薬であります、薬の苦い事無類であります涙の出る程、大丈夫亦涙なきにしも非ず呵々。

詩に於て自然の聲と情の響きと私は何れをも取ります、尚ぶべきは Heavenment Genius で決して、人まねの厭味ある僞情詩ではありません、要するに左甚五郎の作つた者は、鼠でも葡萄でもはた獅子でも何れも皆生きてゐます、ライダルの雜木林も、ウオズヲルスに歌はれると天品の詩となり、長安の貧家の妻でも李白の筆に上れば清調高愁の愛女となります、何れ吾等の尚ぶべき處は他人の畑の瓜も梨もとらずに自分の圃に適した豆なり粟なりはた林檎なりサフランなり無花果なり葡萄なりを植ゑて、たえず培うて吾も樂しみ又隣の人をも樂しませると云ふ事と思ひます、そして若し甘い果物でも出たら外國へ貿易へ出すなり、大阪の博覧會へ出すなり、それは當人の勝手でありませう。

理窟は兎もあれ私は兄の自然詩に大いに難有味を持つ一人です。

御清會の時皆様へ宜しくとか何とか御傳聲を願ひます、世の中のある人は『僕を誤解されては困る』稱と云ふ事をよく云ひます、然し私は『誤解する』と云ふ事は其『する』人の不見識な者と思ふから決して此方から『するな』と賴み入る樣な事はしません、と云つて之れ決して自ら驕るのではありません、見識とは白を白とみ黒を黒と見る事であるから自分が黒である場合に黒と見てもらへばそれで誤解されたのでないのだ、所が世の中では黒を青とみ又は灰色や紫や黃色や等を間違ふから仲々又以て興味ありだ、或人は岩の樣に堅くなりたいと云ひ又或人は水の性を以て任じて居る、或者は水素の樣に輕くてはいかんと云ひます、私は有ゆる場合に通じて居たいと思ひます、御忙しい處へ用もないむだ口はもうよしませう試験や例會が濟んだら何卒殘紅兄を無理にでも引つ張つてこの山寺へやつて來てください之は近頃重大な御願事である又其の時豐巻剛とか云ふ人をも出來るなら御同伴になつては如何です大いに打ち連れ立つて生出野に雲雀の春禽の賦をきゝませう。

三月十九日夕　白蘋生

花郷詞兄　梧右へ

×

九月十七日朝。

御分袂以來御無音の罪は誠に生の慚ぢ入る所である。兄の筆跡を見るにつけ、また兄が富士の山の眺めを讃へた三洲館のほとりを思ふにつけ、生は限りなき回想の波動を胸に湛へながら、はしなくも今、兄の温い友情の泉を掬した。相わかれてから、秋は新しく地の上に見舞うて、滿林の風哀れ今や搖落の趣きをつくして居る。梨の落葉のあはたゞしう窓をうち、小菊の花咲き亂れた寂寥の庭から、此返し文送ることの、我が喜は如何程であらうぞ。

一度回想の絲のひし／＼とこの胸を捲くとき、慰安、懺悔、の錯雜な諸々の感情は、雲の如、果た稻妻の如、脈の血も溢れよと我心頭を襲うて來る。嘗て東都落塵の日、身も心も弱り衰へた自分のために、盡してくれた兄の好意はどれ程であつたらう。果た杜陵高會の時に、燃え初む高我情操の曙を、文藝の花壇に導いて吳れた主なる人は誰であつたらう。既に生の感情の麻痺し去らざるに於て、少くとも兄は我半涯（生？）の恩人ではないか。生の樣に執着の強い人間には往時の事は凡て戀しくてたまらぬ。かくて更に考へて來ると二人のまじはりは

決して今に於てたえるべき性質のものではないではなからうか。

生が今年の春、また迎へた上野の櫻も見ずに歸郷してから、殆んど五ケ月の間は絶えず憂鬱の友となつて居た。其間の事情は實に察するに難くもない次第である。然し生の健康を失して、漸く身心の衰弱を起したのは決して其當時の事ではなかつた。生が嘗て大橋圖書館で卒倒するまで眩暈を感じた事があつた。また、昨秋の頃からは筆は取つて見ても、何も書く事が出來なかつた。それこれ思ひあはすと生が今春の運命は遂に免れることの出來なかつた者らしい。それはともかく、生の歸郷は決して名譽ではなかつた。其失敗の兒が、更に五ケ月の間不快の日を寂しい村に送つたとすれば、兄はまさに生の無禮を許して呉れるであらう。

人間が活動の境遇から靜止の狀態に立ちかへつた時は、必ず非常に鋭利な哲學的思索の斧を以て、過去の事實を解釋する者である。例へばこゝに戀する者がある。それが一旦失戀して其活動が靜止せねばならなくなると、必ずそこに、あきらめ、若しくは、自暴、もしくは厭世と云ふ樣な事になる。これは何れも哲學的思索の齎した結果であるのだ。人間は凡て斯くの如くである。さらば生が歸郷後の、徑路なる回顧は、生の心を如何樣に可憐にした乎。

生が若し此處で自分の人生觀とか、何とか云ふものを述べようならばこれ恐らく、先輩たる兄に對して禮をかくものであらう。たゞ生は生の身體の健康が快復すると同時に、生の心も亦漸く快復して、今では多大の煩悶をもち乍らも猶一縷の光明にいたる路を失はずに居ると云ふ事丈を申上げませう。生の眼には若い、高い希望の光がうつつて居る。そして其光明の周圍には多くの先輩や友人やの輕蔑した顏付や、嘲笑の眼付などが數限りもなく浮遊して居る。嫉み多き運命の女神が何れを助け玉ふかは、今生の想像することを措いて、誰も知るものはあるまい。あゝ time alone can prove! 今茲で兄輩に兄の友人に對する生の關係を言明するもあながち、無用の事ではあるまい。

初め、僕が歸村してから、杜陵に於ける生の友人はしきりに書をよせて兄や猪川、佐々木の諸氏の事を傳へた。生は頗る冷淡であつた。由來人の事柄や評判に[illegible]した事の多い自分であるから他人の噂の如きは生に取つて何ばくの痛痒をも與へなかつた。其後生が日夜の懊惱たる心胸を重ねて、初めて戀の何物たるか、果た「人」の如何なるかを探りはじめた時、其冷淡は更に度を進めた。曖昧な同情、根本の愛によつて、「自己」の何物たるかを覺得するに於て、世の賞讃主義は何程の注意に値するであらう。最も自己の本性に忠實なる人は、やがて最も他の人に忠實なる人ではないか。利己主義と利人主義、我の所謂)とは雲泥の差である。眞に自己を愛するものは、又他の者をも一汎に愛すべき者である。然しこれを以て、生の友情に對して冷淡と思うて呉れてはこまる。

實は兄の「一片の眞情」と云ふのは「誤解」でなくて永久に生は「無垢な人間」であるかもしれぬ。唯生とても恩に報いるに仇を以てする人間ではない。向後の生及び兄は、また昔の通りではなつべからざる友人でなければならぬ。誤解されては困るが有體に申せば、猪川兄や佐々木君に對しては、生は現在及び將來（おそらく）に於て、甚だ冷淡である。恐らく兄と雖ども「冷淡なるべからざる」理由を其間に發見することは出來ぬであらう。

生は兄に借財して居るが其後未だ何も藥代と變じて相不變、失敬してゐる。誠に面目ない譯である。透谷の句に「折れたまゝ咲いて見せたる百合の花」と云ふのがあるが、藝術の人の

尊大なる作品を現じて遺憾ないと思うて居る。あゝこの微香があつて初めて、不朽なる光明が来るではないか。苦みや悲しみの底、遙かに人の世の喧噪をはなれた所に、無限の喜悦光明の泉と云ふ苦根がある。若しこの若根の上に立つて静かに祈つる事のない人があつたら、たとひ其人の言葉は低く、葉はしは枯れてあつても、僕は堅く信じて其人の靴の紐を結ぶであらう。

杜陵の友、海外や花巻や皆健全であます。兄は今如何に暮らし居ふか。生も本年末若しくは来年早くまでには再び京通に読書子となるつもりで居ります。

秋の風寒く、夕暮の星高き山寮に一人こもりて、愁しげきこの子の、はかない想のかず／＼はこの次の便をまちませう。今日はこれにて筆をとめ、遙かに兄の御健康を祈る。さらば、

九月十七日

ソグネルの像掲げたる窓に鐘の音きゝつゝ　　白蘋拝

[illegible]大兄　御もとへ

口占

星もう落葉思ひたる魂にこそ

秋は[illegible]一瘦になりけり。

花びらや、地にゆくまでの瞬きに、

閉ぢずもがもか[illegible]の窓。

×

本郷二十二日午前拾一時半

消印の書状拝読してから日は早や六度夕暮の山にかくれた。寂寥、苦悶、煩悶、……それらはやがて我生涯の伴侶でがなあらう。兄への前便投函した翌日の頃から、哀れ身はまた心地すぐれずなつて今は朝暮薬の味にのみ親しむと云ふ形影の姿となつた。再び運命の冷やかな手に弄れて、残忍なる病魔の擒となつては、にはかに秋風のうらめしい身の痩せやう……誰れ恨むではないがさりとはかよわき布衣の子、或は生れぬさきから不運の型で鋳られたのかも知れぬ。繰り返し／＼御筆の跡はとりひろげたまま窓なる風になぶらせて置いて、さて心の勇まぬ程に今まで御無音に過ごして来た。昨夜は頭痛熱相つゞいで襲うて、遂に一睡の安眠をもなしえなかつたので、今夜の労れも一通りでない。枕頭の時計はもはや十一時をすぎて、病燈影はかなく、窓の外には淅瀝として落葉の音、天地の愁に咽ぶかの樂。多大の苦心をもてきえ入る心をひき立てながら、僕はこの筆を取り上げたのだ。

御情けの程は一々身にしみて讀みかへした。今更に僕は何も云ふの要もない。たゞ／＼向後の友情の「満足」と云ふ花環に捲きまかれて、隔意なからむことを信じ且つ祈るのである。曾て貧時の交を思ふ者は必ずまづ人生に最も貴重なる積極的の財産は愛であると云ふことを首肯するであらう。我この上に何をか喃々せんやだ。只一言す。曾て僕の保持した「愛」と云ふことに就いての觀念は、「我を愛するもののみを愛す」と云ふ、大に偏狭なものであつた。愛は包容である。一體である。融合である。その後から考へて来て、現在の僕は人生と云ふ混亂矛盾の渦中に或る明瞭な光明を認める様になつた。「自己」と云ふ事を深く／＼考へると、遂には勇躍して犠牲の要求に應じ大なる意志は單に自己擴張のみではなくて更に自他を融合し、外界を一心に[illegible]する者であることを自覚して了ふ。この自覚が電光の如く人心にインスパイアした時、信仰と希望の礎は初めて確然たる地盤をうるのである。（さふ僭越の言を許せ）されば他の人が若し自分に敵した時、非常なる

「白負」はその攻撃迫害に冷然として自分の品位を保つ丈の余裕と度量とを與へるのだ。かくして最後の勝利は遂に黙する者の手中に来るのである。

有體に云へばこれは僕の信仰告白である。兄は必ず同情を以てこの一布衣の子のためにこの言を味うてくれる事と思ふ。そしたなら僕の諸川兄や何に對する態度も御了解されるであらう。そしてこの愛の觀念の變化はやがて僕自身一切の變化であるのだ。

僕は人のキャラクターを琢磨するのは唯一つ、自ら困苦し、自ら煩悶するの外はないと思うてゐる。そして願くは自分も成る丈多くの困難をへたいと希望してゐるのだ。

二

頭痛はまた盛んになりさうになつて来た。あとは紙も少しだからかいつまんで二つ三つ。

僕は不止得また蟄居の寂寥を忍ばねばならぬ。快復次第出たいとは思ふが、或は田舎で屠蘇をのむ様になるかもしれぬ。然し来春までには是非出たいと思うてゐる。弱い程つまらぬ事はない。

病む者でなくては病のくるしみ、健康の愉快を知らぬ。僕は切に兄の御自愛を祈る。

白馬會を何卒知らせて下さい。一學燈のワグネル論見たいものだが何月頃のなかから出てますか。

病程つまらぬ者はない。萬事に根氣つゞかなくなる。今夜はこれで失敬します。氣分のよい時手紙は時々上げます。後藤兄や原さんへよろしく。敬白

前柴さんを夢にみました。をかしい。　かしこ。

九月廿八日夜

病瘦　白蘋　拜

董舟兄　御もとへ

○

うらぶれや心の憂さは拂ひかね、ほゝけし頬に秋の蠅うつ。

○

小さくも吾は蠶の子詩の愛兒、歌はゞ足らん君に相似る。（窓の蟋蟀に）

○

この思似ずや青火に導かれ、掩ふ霧白う墓に立つそれ。

面白い事あつだら知らしてくれ玉へ。

明治三十七年

×

拜啓

年新らしくなりて京の寒さ如何に候べきか。未だ御秀容に接したる事なき野人の小生が、うちつけに文など差上げ申さんこと、禮を缺く萬々なるは元より知らざる所に非ず候へど、日夕の憬仰禁め兼てこの筆を取り上げ申候。唐突の罪御宥恕被下候はゞ、幸之れに過ぎ不申候。

一昨の夏と覺え候。先生の故樗牛氏に與へられたる前後二回の開書、太陽誌上にて拜見致し候時、稚き迷ひに胸悶えたる小生には、云ひ知らず尊き光の影と仰がれ候ひき。人が三寸匣底に似たる形式の網中に小さき眠りを貪れる間に立ちて、生と光とを夢深く埋めたる長夜の闇を打拂ふべく叫ばせ玉ひたるこの天來の響の、如何に鋭く、又強く、新らしき呼吸を我らの上に植ゑられしよ。殊更に、所謂道學先生の、若々しき心を蔑視する教育におひ立ち候ふ身の胸には、如何の希望をか吹きこませ玉ひし。申す迄もな

く、小生の先生に對し奉らむ事となるに至りたる端緒の因縁はこの時に其端を開き申し候。

その年の秋、小生は[illegible]を辭して、[illegible]しき[illegible]の途に乘り出すべく、住吉の校舍を退き、漂然として東都の巷に放浪生活をはじめ申し候。胸にはいやかなる幻想を描ける身に候ひしかど、その夢も次第に破られて、冷たき都の冬枯れたる街頭に、敗殘されたるはたゞ失敗と病とを贏ちえたる身に候ひき、樗牛先生の[illegible]床を傳へ聞きて、夕暮迫に徹する江戸川べりに立ちつくしつゝ、雲低き空を仰ぎて心密かに祈りを捧げたるも此頃に候。さて病苦堪へ難く、心の重き痛みいや更につのりて、敗殘の身を故山に葬ふ可く、相成り候ひしは、昨[illegible]まだ深き頃の事にて候ふ。歸り來て、苦悶懊惱の間に、先づ思ひ出でたるは、曾て先生の御書にて聞き知りたるワグネルの研究に御座候。元より學淺く、資乏しき身に候へば、彼の巨人が胸中を闡き盡すなどは思ひも及ばぬ儀に候へど、二三の書を友に、日々想ひに耽りて、又得る所無きに候はざりき。はかなき夢想見に過ぎざる私、敢てワグネルを研究したり等とは申すまじく候。たゞ、力の限り小さき成心を沒して、空想の翼たゆまざるまゝに、彼の偉大を想像し、飢ゑたる胸の底に發掘し出したりと申さば事足るべく候。ああかくて先生は、知らざるうちに未見の一徒弟のために、尊き光の導者と成られ申し候。

さてかくある間に、小生は、詩の淨樂と、愛の溫かき安慰のうちに、限りなき希望を抱ひ申し候。こゝに、我が[illegible]生涯の歷史と數限りなき煩悶とを申上げんは、あまりに不躾なる事に候へば差し控へ申し候。たゞ、惱みうち重り來りても猶且つ一道の光明をはなれざる孤境の樂しみを此間に學びえたりと申さば、思ふに、先生も、我おとなびたる幼き言葉をおかしと御笑ひ下さるべきか。

満都の青年が讃あげてよびあへる先生の目出たき御歸國も、小生はたゞ遙かに心のうちにて御祝ひ申したるまでに、早やそれも半年の昔と相成り申し候。秋來健康漸く克復の道をえて、今は早や全く病魔の手をはなれんとする小生の欣び極まりもなく候。あゝ先生よ、先生は今大都の文壇に高嘯して其聲天下に響き渡るの人、小生の如き乳臭の一青年が書を奉るだに甚だ不倫の事に屬せん。先生にして若し今後小生のために師と呼ぶの榮を許し玉はゞ、わが願ひ或はそれにて事足る可く候。

昨秋十一月の始め、病怠るにつれて我が畢生の望みなる詩作の事に思ひ立ち、ふとしたる動機より一の新調を發見し、爾後營々として人知らぬ樂みの中に筆を進め居り候。十二月の號竝びに新年のそれにて、數篇を、明星誌上に載せ候ひしが、よく先生の御一顧を値ひせしや否や。元より之れ、未だ人に知られざる野生ひの名なし草、たゞ世の人の笑ひを又なき前進の糧として、他日のためを計らんずる處女作に候へば、匂なく色なきを却つて當然の事と思ひ居り候。今、先生の御高壽を仰がんとするの書を奉るに當りて、先づ年來憧憬の記念として、惡作數篇を集したる一詩集『いのちの舟』遙かに先生の御膝下に捧げまゐらせ候ふ。御笑覽被下候はば、あゝ小生が欣びこれに過ぎ不申候よ。

はてなく廣き詩の海、世の波のたえまもなく襲ひ來る中に危くも夢の影追ふかぢなし舟の私、哀れ、先生の御導き玉はらん日を待ちわぶる者に御座候ふ。生れてより僅かに十有九春をむかへたる許りながら、早くも一家の難を負うて立たざるべからざる身の、比較的生活の事に遠き文苑に幼き[illegible]やしをいとなまんは、思ふに甚だ迂に近き事に候はん。たゞ心一度そこに凝りては、又動かすに由なき性を如何とも致し難

く候。今、大才異腕の彬々たる文界に覚束なき小生の歌口を試みんとするは、誠に翼弱る白鴻の雲に雀のたよりなく交はるにも似たるべく候。たゞ、眞と美とに捧げたる健闘の一念に至りては、小生の潜かに、何人にも劣らず、又何者の犯すをも許さゞる所と信ずる者に御座候。ワグネルが事に就いては先生の御調教を仰ぎたき事多々有之候へども、他日を期してこゝには何も申述べまじく候。よく〳〵解しもえぬくせに事々しく語をつらねんは、徒らに先生の御怒りを買ふに過ぎざるを思へばに候也。若しその研究の方針手段等につきて御高誨を賜はらば、小生が小さき望みなる彼の偉人の評傳を作る上に、無上の光榮なるべくと存じ候。小生の初めて手にしたるは英文の一傳記に候ひしが、その後辛苦してドイツ語の獨學に勵み居り候。何れ遠きうちには彼の偉人の一端を洩らして御批評を仰ぎ奉りたく思ひ居り候。十二月の「明星」に出でたる「ワグネルの思想」うれしく拝見致候。先生が深く研究なされたる雑誌時代思潮の……由、友人より傳承仕り候。現代の思想に、又た文界に、あまりに不毛なる時節に候ふべきぞ、遙かに御祝ひ申上候。拙著何日頃世に現はれ申すべきか。鶴首して待たれ申候。貴き誌上に、小生ら如き者の遣作をも許さるゝや否や。心こめて御愛護の程、如何にと窺ひ申上候。

客臘樗牛先生の忌日には、こゝの小庵にてささやかなる追想會いとなみ申し候。「全集」先生の御盡力の下に漸く世に出で候由、蟄居以來、多く新刊の書に縁絶ち居たる小生の、他日そを手にせん折を思ひてたゞ地下の、あらず天上の故人のために祝し居り候。

来らん春の日を待ちて、先生の御高容をも拜しまゐらせ度、又かた〴〵、生活のたづきを求むべく、如何にもして上京仕りたく存じ居候。

くだらぬ事長々と申述べて、御暇少なかるべき先生には、さぞ御迷惑の御事と、誠に御申譯無之候。小生は日頃の思ひ、つゝまず語りつくして、甚だ心地よく覺え申候。蕪辭多く禮を失する者多からん。願くは御海容被下度候。さらばこれにて筆擱き可申候。御高誨賜はらん日を胸にうかべつゝ。　草々頓首。

三七、一月十三日　　　啄木三尺の園にて

石川啄木　拜

姉崎先生　御侍史

唐突の罪いくへにも御許し被下度候。

拜啓

×

落寞たる寒村に蟄居して、日夕寂寥を友とする名なし草の私が、文明の大陸に高名を轟かす大兄に向つて、唐突にも御厚情を求めたいと云はゞ、或は甚だ不倫の事かも知れませぬ。然し乍ら、日頃の景仰遂に禁じかねて、未知の一孤友が胸襟を披いた此書と申し上げたなら、恐らくは大兄も己が愚衷を諒とせらるゝであらうと存ずるのです。

過ぐる元旦の朝の一地方新聞で、誠に僭越な次第ではあつたが、大兄の詩集「東海より」に對する私の評論を公にしました。その號は數日前郵送致した筈ですから、この文を御落手になる前に、御清覽を汚すべき事と思はれます。

私の、初めて大兄の名を知りましたのはこの國の諸新聞に出た、紹介や批評やらを讀んだ時でありましたが、永く病氣を故山に潛めた身には、元より新刊の書を手にすることも多くありませなんだ。たゞ遠方の花園を垣の外から眺める樣な心地で御噂をきいて居つたのです。それを、フロム・ゼ・イースタン。シーの一卷が、さ

る奥から遊られて、常ふる窓に黙想に耽つて居た私の手に入りました時、あはれその時、この胸を躍する歓びの波は、抑々如何に高かつたでありませうか。暫らくは讀みもせずに、何だか尊い寶を自分の手に握つた樣な思ひし乍ら、それを抱きました。申すまでもなく、其後の私の興味は全く大兄の詩に擒にせられたので、筆を投げ、睡眠をさへ忘れて、ひたすらにこの幽妙なる迷宮の奥殿をきはめでは止まじと、幾度となく繰りかへしたのです。さて、讀みもてゆく事の度かさなるにつれて、禁ずべからざる或る感情が、段々に私の心に湧き出でた。言葉に、また行間に、美しい調のかげにかくれて居る一の神秘力が、この彷彿たる敬慕の情を挑發し出したのは、當然の結果であると云はねばなりませぬ。そして又、年若くして早く辛酸たる生活場裡に苦闘を經、重霧の如き痛根に迫られ乍ら、猶且つ處世の道に縁遠い詩の浮楽を捨てかぬる私の、一躍して成功の花環を握られた大兄を羨望するに至つたのも、決して無理ではない事で御座いませう。

私はこゝで大兄の詩に對する感想を述ぶる事をいたしますまい。それは既に「詩談一則」のうちに、概略を陳じて置いた筈で御座います。

あゝその胸を刻む幽高の調、清新の筆、更に、この奔湍の樣な大兄の天才が今歐米の天地を衝動して居ると云ふ空前の壯事、これらを思ひ浮べた時、如何に私の心が躍つたでありませうか。又一轉して、詩人と云ふ境遇が我が社會に於てどれ程はかない者であるかに考へ及んだ時！　あゝ申しますまい。あらゆる不滿足が怒濤の如く一時に漲つたその時の私の胸…

云はずとも詩人は、現世を超脱した理想界の人に相違はないが、さてあり乍ら、猶不幸にも高い修養と、衣食の道をはなるゝ事が出来ぬのであります。それ等のものは、我が日本の、物質以上の力を解しえぬ社會に於て得る事が能ひませうか。詩人が胸中の別天地が、いかに美しく崇くあつても、全く現世を度外に措いては、その浮楽を現ずることが出来ぬ。失望と破綻とがこゝに至つて鋭く起つて来ます。海をこえてトリトンの笛に憧れんと云うた古詩人の嘆きも、實に無理ならぬので御座いませう。歐米の地と雖ども、詩人皆々が幸福な位置にあるとは限りますまい。幾多の天才が涙と血とに染めだした悽惨たる傳記は、私も一つ二つならず讀みました。然し乍ら、現在に於ける彼我の状態を比較したならば、奈何で御座いませう。

私は必ずしも安楽な生活・榮華の生涯を願ふ者ではありませぬ。たゞ、生活と修養の點にもおのづから難易の度がある。あらゆる希望と、自分の生命なる理想を抛つても、安全な衣食の方の奴隷となる事が、如何にして若き血潮の滿身に溢るゝ我らに滿足が出来ませう。否寧ろ、心死して肉體のみ生き長らへんよりは、常久の平和を、死の深淵に求めるかたが優つて居るのであります。あゝ米國！　米國！　そこにはた易い方法によつて修養し衣食する道のあると云ふ米國！　現にその國で、その道によつて、未知の一大詩友が嶄然たる成功の樓臺を築き上げたのではないか。……

私は決して大兄の天才に私の淺才を較べる者ではありませぬが、かく記し来つたなら、恐らく大兄は己が希望の奈邊にあるかを御感得なさる事と存じます。げに、洋濤遥かに大兄の撞き出した詩の巨鐘の、哀れむべき一青年に及ぼした餘響は、單に詩興一面の感化ではなくて、私が幼時より心がけて居た、米國行の志望に、強く制すべからざる加燃力を與へたのであります。此に至つて、大兄に對する私の敬慕は一層深い感謝と共に胸の中に燃えて居るのです。たとひ如何なる事があつても、私は是非この

望みを果たさなくつてはならぬ。或はこれは、自國に於ての學者さへない、いはゆるペニーレス・ボーイの、私に取つて、あまりに突飛な、分外な、又遂行し難い希望でありませう。實にか、分外だ、それは己が熟知する所ではない。あゝただこの一事が、私の生涯の進路をひらく唯一の鍵ではないか。さらばその鍵を握り、なつかしい大兄の御顔に接すべく、如何にして己が渡航の機會——否費用を見附たらよいであらうか。

あゝ大兄よ、少なくとも之れは、私の未だ嘗て遭遇した事のない大問題であるのです。如何にして？如何にして？私は未だ知りませぬ。ただ私は心に期してそのたのしき日の必ずあるであらう事を信じて居ります。……

私は十七歳の年、學途半ばに袂を拂うて、盛岡の校舎を退き、飄然として希望の影を追ふべく東京に走りました。詳しい事を申し上げるのは失禮にあたりませうから、申しますまい。ただ一箇年の間に、他人ならば十年もかゝつて初めて知る深酷な人生の苦痛を、鋭く胸に刻みつけられたのです。越えて昨年、乃ち大兄が欧米大陸に渡つた十八歳の日と同齢の年の初めに、醫すべからざる病根と病苦とを抱いて悄然と故山に横臥する身となつたのでした。その後の十ケ月間は、私に取つて尤も暗澹たる、また重大なる時日でありました。凡ての光明にそむかせようとする煩悶、暗黒の幕の中に身を葬らんとする病魔……その骨髄に徹する苦悶の間に、ただ一路の慰藉を與へたのは、かの御著「東海より」を送つた一女友のみであつたと申せば、當時の私の境遇は大兄の御想像に御委せ申してもよいでせう。病の故を以て萬事をうち捨てて居つた身も、十一月の頃から健康漸く恢復し初めたので、專心作詩に從ふの緒もこゝに開かれたのです。希望に導くらしい十九歳の新年を迎へてから、未だ一ケ月もたゝぬ今日、早や私の身は完く健全になり、旦暮自由に詩筆を走らすことが出來る様になりました。

あゝ然し、私の胸にはまた新らしい病が起りました。外でもない、それは渡米熱と申す、前のよりも更に強い、可貴の様な希望です。日本の詩は未だ研究時代にありますので、吾々の述作も甚だ困難と申さねばなりませぬ。詩友としてはかの有名な與謝野鐵幹君らに尤も親しんで居りますが、吾々新詩社々友の熱心が若し他日我邦の詩を大成せしむる一助ともならば、いかに嬉しいで御座いませう。私の詩は昨十二月の『明星』誌以後續々公にしてありますが、二三の大家がいち早く書簡を寄せて來た外には格別の批評をも受けてをりませぬ。詩稿を御送り申して御高評をえたいとは存じますが、この文を一刻も早く差し上げたいので、それは近日中あとから御郵送いたします。何卒今後御誘導あらんことを念じて、今日はこゝに擱筆致します。唐突の段は幾重にも御許し被下たい。御健全を祈る。

三七、一〇二　岩手縣岩手郡澁民村四二、にて

啄木、石川一　拜

野口米次郎樣　侍史

Miss Morning (Glory) を彼女がアメリカ日記の著者に封じ上げ候。

×

玉書忝なく拜見致し候うてより夜に夢を南關に起らす事旣に一旬、友の吟骨を千曲河畔に移すを送り、村醪に杯を、心漸く靜めて、今宵こゝに遲延なくも凍れる筆を取り上げ申候。野人由來禮を知らず。先きに唐突にも一封の蕪詞を捧げて先生の御高訓を待つや、先生速かに我を容れ玉ひぬ。久しく世の幸に背き佇ふ身の

上に取りて、これ如何に喜ばしき事に候ひしか。殊更に今申し上ぐる迄もなく、ひたすらに涙を以て御厚情に謝するの外無之候。

「戰へ、大に戰へ」の御高論すぐる頃太陽一號にて拜見の榮を得候。勇心禁ぜず、竊かに、まのあたり御教訓を受くるの思ひして、幾度か繰り返し候ひけむ。烏許がましき事は申上ぐべき限りに非ず候へど、一點の怯惰は即ち萬事を毀すの原頭」なるを思はず、やゝもすれば杳として惰眠を貪り、安逸の策に就かむとする我等、慄然として思はず襟を正さゞるをえず候。「今の一生は前後只一度の此生、永生のたづき遂にこの生を措いて何處にか求めうべき。既に靈の囁きに聞き、永生の悲願、久遠の榮光に身を捧げば、一路信仰の赴く所、戰の一語は避くべからざる我等に必須なる者。」茲に至つて小生は彼の日蓮が斷頭臺上にい、榮光の願念、ワグネルのい、勇まい、しき愛に多大の同情なき能はず候。先生の說き玉ふ所は、體して以てわが生涯を貫くの精神たらざるべからずと感じ申し候。あゝたゞ、結果と云ひ、感と云ふ彼の、古來幾多の熱血者を縛して、其健闘の歷史を暗中に葬り去りたる事尠からざるを思へば、卷を掩うて涕泣日暮を忘るゝの悲風とせざるべからず候。嗟々。

一昨の夕、帝國文學會よりの來信に、嘗て送り候ひし小生の詩稿に關し、「それと殆んど同じもの「時代思潮」の方へも參り居り候とか云々と申し來り候が、先日御手許に捧げ候ふ蕪詞は、既に他誌に掲げ、又掲げむとする者のみ（西伯利亞の歌を除きては）に候故、若しもや御統監の雜誌の餘白を瀆すの幸あるべきかと、別紙新作三篇を錄して更に御送り申上候に付、御一讀の上、如何にとも御處分被下度御願申上候。今日は終日苦吟、忽ちに凍る禿筆の穗先を、絶えず爐にあぶりつゝ、「鶴飼橋」「おもひ出」の二作をえ申候。小生詩作の事を初めてより僅かに三ケ月に滿たざるの現時、種々の格調を試むるは或は修養のみちにあらざるべきかとも存じ候へど、自己の目には瓦礫を列らねても猶明珠と見るなる稚き藝術家の自惚、時としては我乍ら不埒の兒とあきれ申候。句法に措辭に瑕瑾定めて百出の事と存じ候、何卒御玉斧を加へ被下度候。鶴飼橋は門を去る十町足らずの畑道のつくる所、水鳴玉を轉ずるの北上河上に架したる釣橋に御座候。右は十丈の崖壁、左は河楊の藪を交へたる一望の河原、下の方、長江岩手の山影を浮べて、四時の眺め云ひ難き風情の有之候へど、小生は特に夜半瘦影を踏んで月色を吸ふの孤境をこの橋絶好の詩趣と存じ候。川向ひなる一詩友を訪ひてのかへるさは、げに幾度か深更曉近くなるをも忘れてこゝに苦愁を洗ひ、低迷する夜氣に親しみて、超世の驕樂を貪り候ひけむ。或時は稚き心に其沈黑なる崖下を物恐ろしく思へる日も候ひしかど、たとへば書を繙いて頁毎にランニングタイトルの先づ目に付く如く、一度この橋を想へば、清冽の瀨氣身に沁むの感有之候。只此詩、餘りに自家の情感をうたふに急にして、看者の感想如何を省みざるの嫌ひ（尤もこれは小生の詩全體と申してもよかるべくや）なかるべきかと存じ候。先生如何に候べきか。

客臘より、一度脫稿して又燒き捨てたる劇詩「沈默の聲」、近者また其第一齣を作り終り申候。單に結構を劇曲的に致したる丈けにて、演劇上言語、動作の審美的功果等、特に前者とは全く背反致し居る事に候へば、或は劇詩の名を冠らすべからざるやも知れず候。

思ふ存分の者作つて見たき勇氣一點の事業、覺束なき者に候。何れ他日を期して御高評仰ぎまつるべく候。御詩作の事に就き一言申上度きは、嘗て試みたる四四四六の新調の外に、近

來また五六六を一句とする最新調を發見しえたる事に御座候。日本の詩に押韻の法の不可能なるは今更申す迄もなく、從つて、其吟誦の要約として音樂的性質を與へんとせば、種々の格調を以て異なる詩想に調和せしめざるべからざる儀と存じ、さてこそ力をこの方面に注ぎ居候。在來の七五、五七等の外に、小生が「鶴飼橋」に套用したる泣菫氏の八六調その他八七調、七々調、四七六調、五八五調等、多々ある先進諸氏の經營に對して、小生は大に感謝致し居候。小生のそれに果して永遠の生命あるべきや否や、小生はたゞ今後必ず出現すべき天才に向つて、材料を作り置かんと存じ候。五六六調の試作として「錦木塚」の一長詩計畫致し居候。脫稿したる前三節丈け數日前鐵幹君へ送りたる筈に候へば、或は二月號の「明星」にて公評を求むるやも計られず候。

「時代思潮」初號の御發刊何日頃に候べきか。その大獅子吼の花々しさ、想ひうかべては待ち兼ぬる心地の致されて候。何れ近きうちとは推し申候へど、儂のこなたより花見る思ひ堪へ難く候かな。去る頃一論を草して「太陽」に投じ候處、嘗しく一先づ云々と云ふ懇ろなる言語戰ひたる許りに戰敗けたる白鳩の如く舞ひもどり候。これにて小生が出京費の出所も一先づ途絶したる運命に御座候。思へば稚き事致し候ひしよ。遮莫。何時までかこの沈滯寂寞の寒村に蟄居致しうべき。蛟龍來りて我を誘はゞ、たとひ無間の幽境になりとも雄奔したき勇みの胸、あはれ戰の場に走らん餘裕を有せざるをはかなく嘆かれ候。戰敗れて悔いざる覺悟は持ち乍ら、戰ふの道なくして徒らに黄土とならば如何!!! 噫、不平骨に徹して、餘憤遂にこの醜言を先生の前に吐き申候。御宥し被下度候。

あゝ先生よ、「時代思潮」は、校正なり何になりと、小生が五尺の軀を動かすの餘地無之候べきか。よしや病餘の骨弱くとも、詩興彷彿として一味の慰藉胸にあらば、如何なる健鬪と雖ども耐へ難き事あるべからずと存じ候。疑もなく之れ先生に取りて、意外且つ無禮の御願ひと覺召し被遊べく候。あゝげに小生は未だ御高容に接したる事もなく、たゞ疎墨一封を以て先生を驚かしまゐらせたるのみの身に候、さもあれ、若し先生にして、兒をこの苦境に救ひ、窮厄の盡頭に一望の戰路を開き玉はゞ、兒の幸福はたゞに「今」の幸福のみに非ざるべく候。犬馬の勞何ぞまた辭せんや。先生にして之を許し玉はゞ、小生は衣を賣り書を賣りて直ちに先生の膝下に馳せ參じ可申候。油漸く盡きんとして燈光明滅しきりに候へば、亂筆こゝに禿穗を休ましむべく候。唐突の御願ひ、成否の如何にかゝはらず、今後の御誘導切に祈り上げ申候。終にのぞみて遙かに先生の御健康を禱る。妄言多罪。草々。

三七、一月廿七日夜

啄木拜

嘲風先生　御侍史

二伸、

樗牛會の規約誠に難有拜受いたし候。二三日前の岩手日報にて一寸縣民に紹介いたし候。

×

おゝ友よ。

近來四事漸く匆忙に際し、打ち絶えて御無音にのみ過し候事疎懶先づ以て面目なき次第に御座候。年明けては私もこゝに十九の春、病愁名殘りなくあとを潛めて、また生來の情懷も思ふまゝに貪りえず、心何となく忙はしき此頃の、思ひもよらぬ御無沙汰、友よ願くは惡し

くな戀し玉ひそ。車中にての御端書頂戴して既に二旬、そこなる三洲會上の御消遣、近況如何に候や。寂寞枯禪の身、故もなく都の空の戀しまれて候。物毎に新しき風雲を起すも都、事毎に活躍たる思想の激るも都、實れ、一ケ年の沈默より今醒め出で候へば、南の空の戀しさも殊に禁じかねて候ふぞかし。御消息御洩し被下度候。一月の上旬、友岡部君が姉君の永眠に際して、悲しき運命を幽谷寺畔に弔ふべく、私愴惶出盛致し候ひし時、僅かのすがひにて兄に御拜眉の期をえ兼ね候ひしは、未だに口惜しき事と存じ居り候。兄も御承知の候べし、去る二月一日、仙臺[illegible]會の序を以て姉崎嘲風博士盛岡に來り杜陵館神に一夕の公演を開かれ申候。當日夕刻、かねて文通致し居り候事とて、博士の急信に接し、夜の九時と云ふに私取る者も取り敢へず、雪踏好摩に車使を驅りて、杜陵に參り、同夜會果てゝ後、頃しも十五夜の冬の月仰ぎそむるまで旅館高與樓上にビールの杯をあげて數時間の歡會を縱にし申候。翌二日、午前にステーシヨンに於て嘲風氏と袂をわかち、夜、岡山君の病氣を見舞うて、そこに小林君に會し、種々兄の御噂承りて、いや更に御面晤をえざりしを悔やみ申候。後悔何日も先に立てぬ者と、苦笑致し候。

東西思潮の接觸浩洋として四海に迫るの今日、文星日凋落して文壇の一大轉機漸く動き來る事と存じ候へば、野居低唱の身乍らに、猶且つ、多少自らを恃みて覺悟せざる能はず候。客臘の「明星」に初めて處女詩作を掲げてより、有力なる若干の味方をも得候事とて、近來はひたすらに類を見ざる勇氣を覺えて、全く希望の子と成れるかに感ぜられ、寒庵燈下に一人故もなき微笑に魅入られ居り候。年稚き此小才が心掛け、殊勝なりなど御賞めに預り度候。呵々。

藝術は藝術のための藝術にて、功名などは副産物のまた副産物なりとは、常々鐵幹氏等と申し交し居る事に候へば、詩勢未だ全くも定まらざる今日早くも大家を氣取るの人多きに堪へざる場合、願くは退いて兢々述作に勵み、潜かに超世の理想に憧るゝを樂しみと致し度き所存に御座候。僭越なる言葉を敢てせば、詩は理想の花、神の影、而してまた我生命に候也。十二月以來の明星各號、竝びに本月の「帝國文學」に出づべき惡詩の諸作御覽被下候はゞ何卒御高評仰ぎたきものに候。自作に對する親友の忠言程、うれしきものは無之候。明月よりは時代思潮へも毎號寄稿の約有之候。

* * * *

先刻こゝまで書き來りて、金矢朱絃君の來訪に接し、止むなく筆を止めて、閑談流るゝ如く數刻を過し、只今丈歸りて、本郷八日後六時便消印の御葉書落手致し候。先づ何と申さんか。手に取りて讀むれば、目にうつる清風幽林の影、そこより響く美しき鳥の聲の、耳にはきこえず候へど、私の魂も浮かれ出で候。さてこの色は、綠に非ず、蒼に非ず、石楠に非ず、私は一人友情の色と申し候。病重くもあらぬ日、往にし夏の我幾度か、かゝる森の中、かゝる景色に我も畫中の人となりては、天よりひゞく諸々の聲、地よりどよむ草々の歌に耳すまして、憐める胸を慰め暮らしけむ。早速の書架に毛筆子の林なす筆立を代へて、たてかけたる美しの御繪を、すべらぬ様にとの用意には、ヴァイオレットインクの小さき壺、かくて私、この小書堂の主人公とすまし居り候。

蕪詩御覽に入りし由、恥かしくも亦うれしく候。

「號外とび、車かける」てふ都の空、あらず、今はこれ闔國の風情皆然り。戰の一語は我らに取りて實に天籟の如く鳴りひゞき候。急電直

下して民心恟々の如し。非役の軍卒は既に老いたる父母可愛き妻子に別れて續々召集に應じて行きぬ。そこの辻、こゝの軒端には、農人肩をあげて胸を張り、氷を踏みならし、相賀して hey! hey! の野語勇ましくも語る。醉漢棒をひつさげてザールの首級に擬し、村兒群呼して「萬歳」の土音雷の如し。愛す可き哉、嘉すべき哉。日東詩美の國、かくの如くして未だ滔天の覇氣死せざる也。小生は、あらゆる不平を葬り去りて、この無邪氣なる愛國の民と共に軍歌を唱へんと存じ候。明日は紀元の佳節、小生は郷校に村人を集めて、一席の悲壯なる講話を仕るべく候。號砲あり、露艦二隻仁川に封鎖せらると。健筆毫として筆に華ある武人、寸筆を握せて彈の如き文章、立たざるべからず、叫ばざるべからず候。小生は近く「愛國の詩」を賦して、唱へんとして歌なき民衆にそなへんと存じ候。我は何故にかく激したるか。知らず、たゞ血は滞るなり、眼は燃ゆる也。快哉。日は暮れて、森の帝、雪光に映じて、色彩の調和益々美しく相成り候。

近頃は實際大にゆるみ候へば、今宵も、寂院御下、自讃の香煙だ閑、啓蒙宏々、書籍漫々、今になても快を叫え候。今夜人質定まらば、翠色を塗へて、長詩天の歡地の旗を映ずべく候。

野口氏の英詩、兄は如何御覽被遊候や、小生は去る甲辰元旦の日報にて聊か邦人のために紹介致し置き候。近頃氏と文通を初め申候。

去る頃、上田寅次郎兄に會ひて、一夜、清談をえ申候。

小生は本月中に、二三週間滯在の見込にて上京致す可く候。三月は改めて都門の人たらんつもり。何れ歡會の日は永々の相見ざる情緒語り交し可申候。

お文賜りたく候。今日はこれにて擱筆。祈御清康。

三七、二の十、夜　　　　啄　木

野村大兄　侍史

P、S、

都門の諸友近況如何。繁多き話乍ら、御葉書渇望にたへず候。草々。

×

梅の蕾我が瞳よりも小さく、野邊の草路玉蜻の影未だ燃えねど、吹く風袖に薫る菫の若葉曙の光に潤ひて、門田の畦夜は霜華さへ添へつれば、この里にも春のけはひ漸くいちじろく相成り候。我のみは何日に變らず、或は曉日子孕む光の雲、或は深潭に浸ぶる夜の吐息と、旦暮の想ひ姿さまざまに胸を襲ひては、哀れ樂しくも悲しきみちの奥の四月に候哉。都は滿城の櫻雲に人の心もその香と共に漂ひつべき頃と覺え候。恥おろひの色ほのかなる庭樹の一二輩、そよ風の波に乘りて或は師が運ばすみ筆の下に舞ひや來らむ。と思へば戀しき空のあなたや。我、ひねもすの想ひに馳りては、物のあやめもわかず、望みやる雲の緒に見えざる途の何處にか、我らが故郷なる大天と連なる光の門のありて、そこ常綠の南の國、愛と希望の老知らぬ子等が、口に永生の譜を誦して、眞白き信の階石輕ろやかに登るらんとのみ覺えて、あゝ師の君よ、叫はぬ勇みに一人あこがるゝ事茲に幾何の日ぞ。憐みては我れ歌ひつ。歌ひては更らになやみつ。さてこの消し難き心の叫を愚かなりとは責め給ふな。はた我が望みの的を何處なりとは問ひ玉ふな。憧れて、慕ひて、身も心も謙ひつゝ、無限の「今」を遠き理想の門と極を限りに漂ひ進まば、的なくし

て猶極みなき的の我には候ふぞかし。見えざる故郷より、見えざる力によりて生れ來し我らには、實に見えざる界のなべてこそたぐひもなく慕はしく候へ。師よ、せめては南園一輪の櫻の色、汝があこがれの香りぞとて、我に送り賜はらずや。

師がこ度大學の昔のみ座占められし事は、先きつ日、さる友の言葉に我も聞き侍りぬ。後ればせ乍ら、我がことほぎの心をもみ胸に汲ませ玉へ。たゞ師よ、我はこ度の事、師の君のさまで喜び玉ふべしとは思ひ候はず。げにニイチエの尊きはバーゼルの一講座を占めたるためには候はざりき。されば我らは、師のために祝ひの歌書かんよりは寧ろ親しく師の福音に接しえん學府の人々のために喜びの聲合はすを尤もと存じ候よ。さはされ、師が愛のみ教へに接しえぬ田舍居の身の悲しさや。

櫻花號の「明星」なる我が詩、或は早や師がみ目にも入りつらん。今宵風なき窓にひとりかの「暮鐘」を吟じて、云ひしらぬ曇りを眼の底に宿し侍りぬ。あゝ我筆稚くてこの想ひ遂に人の心に徹らぬめり。天壇と云ふ人、「帝文」に有明が詩を評するの語に、百萬の味方を自己の詩に於て見出す者に非ざるよりは詩人たる者焉ぞ能く之に堪ふる事をえんと云へる、讀み行きて我れ思はず聲を止め候ひき。あゝ師の君よ。廣き世も狹く候かな。狹くして更らに廣く候かな。思ひ迫りては我早や何の言葉をか出さん。

我近頃、しきりに太平洋の波のかなた、ロッキイの山嶽走る自由の國に參りたく、夜な〳〵思ひに耽り居候。彼方の友は、來れと云ひ、我も行かんと思ふ。思ひ思へど、身は遂に終始孤境の資なきみなしごに候。飛ばんとして翼なく、立たんとして足なし。神は、あゝ、我を蚯蚓の如く地中に歌へとて作りしや。

窓前の芝蘭一株、ふくよかなりし蕾の、いつしか萎れて香りも見せず、枯れ果て申候、ふと得たる神來の聲を、筆取り上ぐる間に逸しつらん悲しみにも似て、私、誠に名殘惜しく覺え候。

かゝる僻陬にも「思潮」の好評嘖々として響き居り候

今宵は玆に筆を擱す。草々。

三七、四月十二日夜　　梅咲かぬ國の　啄木

嘲風先生　御侍史

いつも乍ら亂筆御免

×

卅五年の極月、菊坂町にて御高容に接してよりトント御無沙汰致し居候處、五日附の御葉書一昨日の夕難有落手、遽かに往時の夢の忍ばれて、その夜は京地落塵の古日記などひもとき申候。兄の御動靜に關しては乍蔭多少聞知致し居りたる事も候ひしが、今親しく御書面に對して又更らに淡き記憶など呼び起し申候。「五月姬」御掲載被下難有存じ候。生が故山に蟄居致し候うてより既に十五閲月、物寂びたる片田舍にさしたる快心の事のあらう筈も無之、新刊物などにも一向に緣遠くのみ過し候事とて、詩壇近來の風雲などにも隔霞對岸の怨みなき能はず候。泡鳴兄の先頃の御消息(白百合に出たる)の如きは生にとりて誠に嬉しきものに候ひき。思ふに堪へがたき所、考へて得たる所を心おきなく語らはむ友も無き孤境の沈吟の身、御察し被下度候。惟ふに今の日本は、詩壇と限らずあらゆる方面に於て、數年來暗々のうちに迫り來れる思想の伏流の、漸々熾熱の氣を負うて清新なる聲を響かし初めたる時代には候はざるべきか。元より臆測に過ぎず候へど、

我詩壇の如きも、詩想に於て、格調に於て、何となく東方の曙光の段々盲索の時代を照らさんとするかの様の感禁じ難く候。この上は我と我が力をたよりに飽く迄勇奮致すの外無之事と存じ候。兄の詩、益々出でゝ益々熱烈、奔天の情、想、たとへば實に夏花少女の紅焔の胸にも似たりや。みちのくの北邊に低唱血を啼く生には、極熱緑土の軟風に醉はされる様に候。小生の悪詩數篇、諸誌上にて公に致し候ふもの、御清唱に上り候ふ由、恥かしくも喜ばしく候。何卒御詳評をたまはり度く、それのみ待たれ候。生の詩作、近頃、何らかの轉機に迫り居る様感じ居り候。花あやめ咲きそめたる許りの禪房裡、生がこの頃の心地こそ怪しき事に候。毎日大方の時間は、詰らぬ様にて又面白き社交のためにつぶれ候へど、斑鳩、閑古鳥の聲も打交ぜて杜鵑しば鳴く窓の下、たゞひとり苦茗を啜りつゝの思ひは追ひ難く捉へ難く、さてあり乍ら常に胸をはなれず我をあらぬ方に導き候。年若きものの望みとや申すべき。はた又永き靜默の煩ひとや申すべき。貲さへあらば再び都門にさすらひて、この無聊消沈の境を脱し度く存じ候へど、我も岩崎をおさへに持たぬ許りに、それさへはたし難く候。何なりとも自活のたづきとなる程の事有之候はゞ、何卒御世話被下度候。あゝ飄々として天地一沙鷗、夢魂不斷の逍遙ぞ我がいのちに候哉。

申上げたき事澤山有之候へど、午後の集配時間さし迫り候へば、今日はこゝに擱筆可仕候。本月は十五日頃までに蕪稿差上可申候。御社中へよろしく。いかに軍國の秋なればとて、詩の國の事忘れはつるは、我れらの敵のみならず、彼等自分の敵なるべく候。頓首。

三七、六月八日　　岩手　啄木

林外大兄　侍史

×

三十七年七月盡日午後九時、沸る湯の松風の音嘈々と、花瓶の姫百合香ひなまめく燈の下、歌節哀れな機織蟲の夜の聲に耳傾け乍ら、靜かに友を戀ひつゝ、この文をば認める。

來る八月の五日に我村でも祝勝會提灯行列を催しようと云ふので、野生今日は學校に行つて雜務に執掌し、只今漸く歸つて來た所である。

風信は三時頃落手、今また繰り返して讀んだ。あゝ兄よ、生は如何に平淡を裝ふとしても、雙の眦を霑ほす事なしに、斯くの如き親しい友の消息を讀む事は遂に出來得なんだ。涙が若し男子の恥辱であるなら、生は好んで女にも成らう、相共に悲喜を分ち、又、相共に互ひの心を解される友の外には、幸か不幸かこの世に一人のたよるべき者、ひとつの雨凌ぐ木陰をだに有せぬ生は、溢れ來る涙を以て友のおとづれを迎へ、迸り出る涙を以て我消息を書き送る程、かなしくも亦樂しき慰藉を知らぬのである。數へ來れば眞の友と云ふ者は誠に少ない者だ。誠に少ないけれども、既に眞の友を得た以上は、自分の幸福はかの百萬の富にも比する事が出來ぬ。たとひ自分は空しく草莽の間に埋るにしても、男にまれ女にまれまことの友の愛と云ふ者は永遠なる生命である。已に我らの愛が永遠であるとすれば自分も亦不朽の祝福を享けて居る人間と云はねばならぬ。あゝ兄よ、幾度か浮世の荒い鹹風に泣き、四周の社會の交際なる者の甚だ無意義な事が多いのに憤つた生が、斯くの如き清き幸福の全く神の者であると信じては、兄の切實なる手紙にも不思一滴二滴情の露

を催すに至る樣になつた今迄の心境！　あゝ男の涙が卑怯であるなら、生は願くはたゞ女になりたい。光榮の歴史が殺伐の記錄の上に立つて居る如く、光榮ある人生とは涙血の壁畫をめぐらした莊嚴の殿堂ではあるまいか。

昨夜こゝまで書いて急に詩興の湧くを覺え、筆を擱んで三時間許り沈吟したが、遂に一句をも生む事が出來なかつた。生は既に四十日許りも斯の樣な苦痛を經驗して來て居るから、別段に驚きはせぬ、否寧ろ、近來自分の詩が或る一大轉機に迫つて居る事を自覺して居るので、却つて斯くの如き煩悶を尊とんで居る。然し今朝になつて起き出て見れば、頭痛もする、不快である。あゝ兄よ、自分は詩のうちに百萬の味方を發見し、不朽の光を信ずる者でない限り、此の如き苦痛を嘗めて居乍ら、讀者も少なく、安全な生活をする事も出來ぬ詩人の事業に堪へうる事が叶ふものか。吾輩、常に惑ふ、斯の如き深い健鬪の苦楚が、かの不夜の巷に酒香を友とし伽語の花を弄ぶ富者の安逸に優つて居ると知る人は今の世に幾人あらうか。あゝ否、我望む所は富ではなかつた、世上の名譽でも幸福でもなかつた、我はたゞ、この世を超え、この軀を脱して、「永遠」を友とし生命とするが爲めに、此土に送られ、又去るべきである。何の躊躇する所があらう。何の顧慮する所があらう。かくの如くして我は世の苦痛をも樂しみと見、苦痛のうちに却つて眞の光明の囁やきを聞く事が出來るのである。神が故なくしてこの自分を作つた筈はない。乃ち或る使命は必ず自分の呱々の聲と共にこの世に齎らされたに相違ない。その使命こそ我生涯の精力健鬪によつて、永遠の建設を成就すべき者ではあるまいか。斯く考へて來れば、自分乍ら自分の聲に恍惚として醉ふ樣な氣がする。

兄よ、生は嘗て兄の宗教的傾向を慶すべき事と書き送つた樣に記憶して居る。そして生はひそかに思ふ、我々の宗教は昔の人の如く他力教ではならぬ、この世界に神、乃至人間以上の力の實在する事は、無論否定する事の出來ぬ精神狀態にまで意識されて居るが、それかと云つてその無上者の命令にさへ從ひ、讃美して居れば次期の生活に於て永遠な、無垢な、和樂平等な祝福を得る位の宗教心では、とても我ら有意志の人間の本然のネセシチーを滿足する事が出來ぬ、少なくとも世界が歴史と共に無限の發達進化を追うて行く者なるを知つて居る文明の世の我々を滿足させる事が出來ぬのである。そこで生は前にも云うた如く、兄の宗教も亦、生と同じく、又凡ての宗教家と同じく、人間以上の靈智の力を認め、その力が萬有の根源である事を認め、更らに自己も亦その力の分出であると觀じ、その分出が決して無意義の者でないと觀じ、かくて我ら生存の妙機を得て、その意義のために健鬪し努力するのが、乃ち人間の道であると結論して茲に第一義の宗教に達し、それから、神の力と云ふ者は由來超意識のものであるが、それの世界を司どつて居る狀態から探入して、神と云ふ者が世界の根本意志なるを悟り、その意志が意力たると同時に又萬有に通ずる「愛」によつて整然進歩すると云ふ事に明徹するに至つて、茲に偉大高俊の人格乃ち宗教的人格の理想を確立し、初めて眞人の境に呼吸達入して教の奧祕を斷定するに至る樣に歸着するであらうと信じて疑はぬのである。生は假りに便宜のため之を人格的宗教と呼んで居る。眞の宗教とは、説教や教論の意味ではなくて、その人の人格に體現せられたる表示の謂である。其證據には、如何なる偉大な宗教でも、その宗教史は必ず信仰墮落の記錄であるではないか。佛陀や基督やマホメットや、皆高潔無比

なる信仰の人であるが、彼らの人格的表示をはなれて、何處に所謂佛陀教基督教回々教が存在するか。其人格の勢力が時處を隔てて漸々感化の力が直接でなくなるに從つて、その宗教が漸々衰頹するのは理の當然である。乃ち我らの宗教は經典を唯一の力とする樣な事ではなくて、直ちに神に親しみ、神の道のために健闘する底の宗教心でなくてはならぬ。と云うても生は決して法華經や聖書の價値を云々するのではない、我らは宜敷これらの神聖なる書を取つて隨意に自家信仰の糧としなくてはならぬ。

それから前に云つた、眞人、乃ち宗教的人格はキリストや佛陀や乃至凡ての古來偉大なる、人のうちに見る事が出來、自己發展と自他包攝、換言すれば意志と愛との、完全に表示された者の謂である。

兄よ、生の生涯の基礎たる信仰は、大抵叙上の樣な者である。詳しく云へば限りがないけれど、要するに、我一の生存の意義は天與の事業のために健闘努力して「眞人」の人格に到達しようと云ふにあると信ずるのである。斯の如き眞人は、乃ち人に現はれたる神で、その光輝は確として「永遠」の上に燿やくのである。神は先づ人と人との間の「愛」によつて、永遠に入るの門を開き、無上理想界の神祕の消息を人間に洩らした。而して更らに、神の大意志の永遠なるが如く我らの意志も亦永存せねばならぬと云ふ人間の本然なる要求によつて、我ら人間を遂に「永遠の國」のうちに入れ玉ふのである。歷史が我らに敎ふる斯の如き祝福の人は、生涯不斷の健闘者でなかつた者はない。あゝ思へば、神の智の宏大無邊なる、神の愛の渾圓微妙なる、到底人間の智の量り知る所ではない。生は斯く感じ、斯く信じて詩のために努力して居る、又將來、詩とは限らず凡て我が赴く所にこの信念によつて行動しようと思うて居る。それ故に我に於ては詩は乃ち宗教である。信仰は乃ち我生命である。我詩の一篇一句と雖ども、決して彼の歷史的信仰個條と教會の形式とのために生きて居る僞宗教家が百萬言の說教に劣る者ではない。若し生が他日議會に立つて、國家の利害を論議する事があつたら、その財政上の事を云ふに當つても、我言は必ずや彼等僞善者の說教より、より多くの神の旨に叶つてるのであらうと思ふ。

こゝまで書いて、生は何だか傍若無人な事はあるまいかと氣が付いた。然し乍ら兄、この手紙は自分に恥づる樣な僞りを云ふために書くのではない。親しき友の前に自分の所思を陳ずるに當つて、何の顧慮する所があらう。世の人が見たら或は狂者の言と云ふかも知れぬ。あゝ兄、世に眞面目な狂者ほど同情すべき者はないではないか。

八月三日朝。かき次ぐ。

一昨日こゝまで書いたが、淸岡の方から例の一件の返書が來ないので、實はガッカリ元氣がなくて、遂失敬して居た。その待ちに待つて居る回答が來ないのに、兄に對しては申譯がないし、自分乍ら不信任な樣な氣がして、本早朝再度の請求書を淸岡に向け發送した。それから二十分許り經過しての今、なつかしく兄の端書を落手。今更の樣に申譯がないのである。何れ二三日のうちには成否が知れるだらうが、淸岡君の方でも、この間電氣會社の常任社長に選擧されたので、多分、內外の事務一時に起つて豫想外の繁忙で居るのだらうから、あながちに彼の冷淡を責める事も出來ぬし、彼れ此れして責任は野生の瘦肩に丈け負ふ事にして、一先兄に御詫をして置かねばならぬ。尤も淸岡君と小生との間には日報社の事に就いて或る約束があるのだから、たとひ今度は機熟せずして兄の

入社の一件失敗に終る樣な事があつても、兄さへ先頃の手紙の樣に出て見たいと云ふ御心があらせらるるなら、此事に就き、生は十分の責任を以て出來る丈けの事なら、犬馬の勞をも厭はずに盡す氣である。兎に角、此方から口を出して置いて斯樣に成否がまだ解らぬとあつては、生は甚だ兄に申譯がない。這般の我心狀何卒御憫察を乞ふ。

倘萬一をおもん計つて、生は、好機會のあつたのを幸ひに、縣會の上野廣成氏の方へも、兄の方頼んで置いた。(不濟の罪は御許し願ふ、これも惡い氣でしたのでないから。)その方もまだどうか解らぬ。此度の事は、兄の心配許りではなく、野生自身の心配(?)だ。こんな事は我口から云はれぬ事だが、何れ成否以外に吾らの友情を益々進めたい者だ。二三日のうちには吉か凶か御返事はあげる。但しそのうちによい口があるなら、此方はどうにもするによいから、斷然きめて貰ひたい。

野弟の詩についての兄の御言葉、誠にうれしく思つて居る。現代の我々の詩が、實際少數の讀者しか持たぬのは事實だ。已に思想に於て一世紀も進歩してると論じてる人もある。それから大ていの人が國民詩人を要求してるのも大事實だ。兄の通りの要求をした人に坪内逍遙氏もある。吾らは自己の詩に動かすべからざる信念を持して居ると共に、又好んで江湖の意見をも聞く者である。但し一應ことわつておかねばならぬのは、我らは無暗に自分の詩を高尚らしく見せるためなどに、比較的むづかしい言葉や新造語を用ゆるのではない事だ。つまり日本文學の新生命は我らの雙肩にあるので、有體に考へてる事を申上ぐれば、東西の思潮を融合した世界的文學は、今後吾らによつて建設されるのだ。所が日本語は悲しい事に未だ十分詩語として發達して居らぬ、それで吾國語に十分な豐富、十分な基礎を作らんがために、我らの今の事業は、一面では慥かに研究時代である。研究時代であるから、大膽な用語、大膽な句法、大膽な格調も勢ひ出てくる。世人が我らの詩をわからぬと云ふのは多分以上の點から胚胎してる樣だ。

然しこの意見は我らの美術的技巧上の問題で、我らは決して、文字の奴隸となつて詩を作るのではない。詩は云ふまでもなく我らの生命の聲である、理想の面影である。が、それを詩の形に作成するには技巧も要する譯なのだ。敍上の意見はかくの如くして生れる。

兄の御説の如く、平易な詩必ずしも惡詩でない。(又同樣にむづかしい言葉を用ゐても惡い筈がない。要するに詩の高下は文字の難易以上である。)

生の詩は今漸く一段落を告げて、新らしい時期に入らんとしつゝある。明星の七月號に出た生の「アカシヤの蔭」を兄は見られたか。あれは隨分苦心慘澹の餘に出た作だが、思ひ切つて平易な語を用ゐた所もある。一體自分から考へれば、自分の詩だとて別に特別な文法や言語で書いたのでないから、讀む人にわからぬと云ふのは不思議な位だ。且つまた、多くの讀者をえ、早く大名を擧げたいために詩を作る樣な事は、到底自分らの藝術的良心が許さぬ。

露伴の「心のあと」御覽になつたさうだが、あれは大に注目すべき明治詩界の大作たると共に、又、格調、用語の選擇に於て少なからざる失敗を含んで居るのも事實だ。それはとも角、日本には哲理詩や、宗教詩が今迄殆んどなかつたのに、あの作の出たのは、實に愉快でならぬ。生は露伴の詩に於て、有力なる同盟者を得た樣な氣がする。

一體美は宇宙乃ち神の影で、また、それの神祕を開くべき鍵である。で、廣き意味に於て何らかの信仰なくして眞の詩人たる事は出來ぬ。

（これは詩許りでなく、凡この事業もさうだが）但しその信念には程度がある。「自然」に滿足する人と、「自然」を司る力を求むる人との差別は茲に於て生ずる。生が鐵幹よりも泣菫有明を好み、テニソンよりもバイロン、シエレーを好み、紅葉よりも露伴を好み、貫之よりも西行を好み、ロングフエローよりもホイツトマンを好み、マイエルビールよりワグネルを尊としとするのは全くこれがためだ。ターレントよりゼニアスは高價だ。地平線下と地平線上とは天と地だ。

田鎖兄黒澤尻に行かれて、多少寂しくなつた。小野兄より一昨日長書信來た。彼は健在、

　鹿兒島市山下町四四〇、大迫方

に居る

例の一件はどうか不惡二三日待つてくれ玉へ、賴む、

亂筆御ふるに不文、失禮な段はどうか御宥恕をこふ、生も出盛したいが本月は少し力のはひつた作を出したいと思ふから、まだどうも遊びに行くわけにいかぬ。

賞人から皆けてルーズベルト大統領の「奮闘的生活」を讀んで居る、彼は天外の言ふ友らしいテ。頓首。

三七、八月三日　　澁民にて　石川啄木

伊東大兄　侍史

二白、

阿兄へ手紙上げないで居たから逢つたらよろしく、

兄の母堂へもよろしく、

×

拜啓

四日以前、故山より廻送し來りたる兄の都信、圖らずもこの北海小樽が濱にて落手、薫たる遊子の歡喜無限、幾度となう旅灯燄々たる下に薫讀仕候。

その後の御無沙汰は偏へに御詫申上候。小生去る月の廿八日、上京に先立ちて暫らく北海の秋に遊ぶかばやと、遽かに思ひ立ちては、もとより天下俯仰の寂寥兒、旅もよひもソコ〳〵に、午後四時四十分、好摩が原の蟲の音に送られて鐵車窓裡の人と相成り、十有九ケ月閉居の生活より忽ちに秋風一路天馬の跡を追ふの遊子と變じ申候。

第一夜は尻内の旅舍に塒を定めて朽欄に凭る悵の旅烏、梅の落葉と共に鋭くもさし來る十九夜許りの月光に、人戀ふる胸を照らさせて、先づ先づこの度の旅日記の第一頁に云ひ盡し難き一陣の悲風を紅の涙と點じ、翌日は未だ明けはなれぬ朝まだきに車中に入り、下河原湖上の秋曉に無限の詩歡を貪ぼり、三四時間野邊地が濱に下車して、咲き殘る濱茄子の花を摘み、赤きその實を漁童と味はひなどして再び車便一驅青森に着、その夜そこに冷たき夢を結び申候。第三日は陸奥丸に投じて海波平穩、津輕海峽を渡り、函館の埠頭に上りて初めて北海の人となり、谷地頭九郎君の寓居に一泊して大に今昔を語り、翌十月一日、午後三時、獨逸船ヘレーン號に便乘して徐ろに巴港灣頭を出で、海上二十時間、船首幾度か北轉して、浩洋たる秋光北溟の上に第四夜を明かし、翌二日の午前十一時、無事この小樽港に入り、足、波止場に上るや否や、馳せて幾年相逢はざりし姉が家に造り着き申候。もとより歸氣なる生の事とて、何の通知もなく訪ね來りたる譯に候ひしが、驚く顏を見んと室に上れば、こは如何に、姉は病床に呻吟して、みとりの人々枕邊に居並び、物靜かなる秋の日の病室、いや更らに薫やかなるに、

小生却つて一驚を喫し申し候。途々さすらひ來つて圖らずも姉の病床に侍す、誠にヒョンな事に候。家郷を出でて今日は既に正に二週日、この地に參りてよりも早や一旬の日と相經ち申し候。

ヘレーン號にて、彼ら船員の獨逸人や水夫の支那人らと、破格たる英語にて會話したるは誠に痛快に候ひき。尤も親しくしたるは船長のゲッセンと機關長のヘルマンの二人、日露戰爭に就いての意見や、日本の風光の美なる事などに就き、大に怪氣焰を吐いてやり候。ヘルマン氏は生と共にロングフェローの詩集など合誦致し候。その夜、廿一日の月、光も冷たくマストにかゝりて、黝黒なる海波に白沫を碎きつゝ船の進むけはひ、心も洗はるゝ許り清き海上の秋夜に、生は夜いと更くる迄甲板に立ちて、殆んど筆舌に盡し難き感懷に咽び申候。

たゞ〳〵御想像被下度候。

小樽上陸後、病む姉の枕邊の睦語りのひま〳〵に、小樽新聞社をも訪ひ、學校などをも歷觀致し、又、寄せては碎くる寂浪の岸邊にもさまよひ申候。北海の空氣、風光、社會の狀態等、兄と語らまほしき事山々有之候へど、それは他日御面接の日の御土產として、書き殘すべく候。チッとして御待ち被下度候。呵々。

伊東兄黑澤尻に教鞭を執られ候ふ事、思へば奇緣なり。但し飯が九圓は誠に遺憾、これも目下の所、詮方なき次第と同兄も諦らめ、小生も、諦らめ居候。何れそのうちに何とか工夫もつくべく候。田鎖兄、紫波の方に參らるゝ筈なりしが、如何なりしかその後音沙汰なし、兄の御手紙は早速同兄へ郵送仕候。小野兄とは九月以後絕信。このうちに何とか云ひ送るべくと存居候。

せつ子さんも甚だ壯健、乍他事御安神被下度候。この夏は、僅か二三日の相違にて御紹介申す能はざりしは實に遺憾、九月に入りてよりも縣社の祭典をしほに、母なる人や妹等と共に來遊、その間、小生は恰も一愛の金城鐵壁の中にある樣の思ひ致し候。相別れて第四日目、小生はこの旅に出でたる儀に候。この頃、米國の一醫師、戀愛も亦一種のバチルスの作用なるを研究せりとか。さらば小生の如きは多分全身そのバチルスに化し居る事と存候、呵々。

兄よ、小生は折入つて兄に御伺ひ申度き事有之候。正直を處世の第一義と定め玉ふ兄なれば、必らず正直に御答へ被下事と存候。御伺申すは餘の儀には無御座、津田糸子孃と申さるゝ水澤の人、芳紀正に二十三、本年四月迄とか黑澤尻の學校に教鞭を採られ、その後、何日だか知らぬが兄と相前後して上京しなされし由、盛岡女學校の出身とか聞き及び候ふが、その婦人兄は御存じなく候ふや否や。これは或る確かなる筋よりの探偵報告にて、間違ひのない正眞、カナメの所に御座候。同人間には、兄が一生懸命これを祕して、女人を五里霧中に迷はしめたるを兎や角申す人も有之候が、然し小生らは、必ずしもイクラ親しいからとて兄の祕密を悉皆聞かねばならぬと云ふ譯も無之候故、何とも申すまじく候。たゞ大に兄のために、自己の過去を追想しつゝ、慶賀に堪へざる者に候。紫の雲につゝまれたる樣の初戀の人の心理にては、之を祕する、必ずしも故意あるに非ざるべく、大に美しき事と存候。たゞ何日までも我らにその「祝福」を頒たざるに於ては、大に水臭し、大に野暮なり。生は兄と共に、何れ劣らぬ聖愛の勝利者として四方より羨まれむ事をこよなく樂みに致す者に候。何れ上京の上、燈下客室相對して兄の幸福をも祝ひまゐらすべくと存じ候。

逍遙先生の講義有之候由御うらやみ上げ候。

生は廿日頃までに歸村、多分廿五日あたりは都門の秋風を呼吸致しうべくと存候。萬事は御面晤の期に讓る。川兄阿兄にもよろしく御鳳聲を乞ふ。

北海の詩幾篇御土産に致すべく候

三十七年十月十一日　　北海小樽にて　啄木

翠淵大兄　侍史

×

師よ。窓の外に聞ゆるは、雪の聲ならずや。その灰かなるおとづれに、燈々たる灯の光に、埃となり行く火鉢の埋火に、あゝ今都の冬の夜は更けぬ。力なくも取りぬるは此筆、沈み行く心の聲に促がされて。師よ、起こば男の子の、劍をとも縮まぬ身ながらに、かゝる夜かゝる時、作はらむにはこの心餘りに堅く候ふぞよ。

師よ。誰が愁人のすさびか、悲しくも美しき尺八の音につれて、雪の聲こそは今名殘もなく、この室に沁み渡る、おゝかの聲！　今曉二時、日さめて重き頭を枕に埋めたる時、先づ耳に入りにしは、げにかの聲なりしよ。聲なき聲！

灰かなる他界のおとづれ！　我はこれをしも唯一の友として今日のひと日を送り侍りぬ。雪、雪、擁るゝ故山の「冬」は犇々と胸に迫りぬ。こは都の雪ならず、故鄕に降れると同じ雪なり。地のものに非ずして、同じ空より落ちしもの也。彼女の白羽の冠、ふる鄕の山々にも置かれぬ、と幾度か既に雁の音づれの傳へ來しけむ。あゝ雪の天國、そは我が故鄕なりき。今日の日記に誌しぬ、この日ひと日、我はたゞ故鄕、たゞ故鄕を思へり、と。

師よ、我は活動を夢みて飄々都門に入れり。入りて未だ五旬ならざるに何ぞ故山を戀ふるのかくも深きや。あゝ師よ、我をばたゞ哀れなる夢みる人とはおぼし玉ふな。世の戰に敗れて早くもまた故山の安逸を欲するものとはおぼし玉ふな。瘦袖孤節の遊子、旅にしてふる鄕をしたふは、猶池の清き者が天上の故鄕を戀ふるが如きのみ。我をして故鄕をしたふを罷めよと云ふはやがて我をして馬の如く牛の如く巷の塵に働けと云ふに等しき也。齡も心もいと稚なき我の故鄕を思ふは、慈母の懷をなつかしむ赤子のそれ也。母の乳房をはなれて稚兒は泣く。おもしろや、おもしろや、あゝこの淚こそ汚れたる世の貴とき清き珠には候はずや。

師よ、我はこの頃たれこめて頭痛と戰うては、苦吟の筆を嚙みつゝ過しぬ。頭の痛みも身の瘦せも血を吐く思も、胸に金鳴銀響、天籟の聲すと思へば、何か厭はじ、厭はれじ。萬人の心を刺し貫くべき一首の警束だにえさせなば、喜んでこのいのちをも捧げなんず。不愧心之天。この一念には病も貧も刃も百萬の人も何かは勝ちうべき。

師よ、師は去る九日の讀賣新聞にて、「白百合」を評したるうちにいたくも我が詩を非難したる時評子の一文を見玉ひしや。そは我が詩を非難したるものに非ずして今の詩を非難したるものなりき。友の多くは乃ち端書を寄せて我に、失望する勿れ、これたゞ一新聞記者の愚言のみと云ひぬ。而して師よ、友よ喜べと云へるはたゞ一人我が水魚の交ある友のみなりき。我を知る者この廣き世にたゞ一人かと思ひて我は淚ありき。さて思へらく、この批評はもとより我らの詩を知る者の言に非ず、然れどもこれ時代の詩に對する一部の要求を確かに傳へたるものなり、と。かくて我はこの評者と語るの頗る趣味ある事なるべきを思うて、過日所用の序でに日就社を訪ひ、評者、正宗白鳥と會見しぬ。師よ、我は疑もなく失望したり。彼繰り返し

繰り返し曰く、我は詩を評するの心なし、今の時、詩人を評ふべきは克く詩に通ずるの人のみなるべき也、我の如きたゞ新聞記者たる責任に迫られて止むなく筆を取れるのみ、と。我は心に泣きぬ。あゝ今の世の批評家、多謝す皇天、爾等糧を得んがために筆を文藝の事に用ふとならば、我何をか云ふ所あらむ。

彼又曰く、余君を知らざりしが故にたゞ白百合派の・老將とのみ思ひて君の詩を引ける也、と。

昔者神の子の頭にユダヤ人の捧げたるは茨の冠たりき。今の賢明なる批評家に捧ぐべきもの、それたゞ、憫むの一語乎。あゝ師よ、稚なき我に暫しは不遜なる激語を許せ。

師よ。刃向ふものに逢ふ毎に我は層一層の勇氣を感ず。嘗て知名なる一詩人と語れる時、彼口を極めて今の世を罵り、彼等民衆は遂に一句の詩をも容るゝの餘裕なしと云へるに、我は乃ち答へて、世の低ければ低き程詩人の使命はいや更に重からずや、我は寧ろ今の世に生れたる幸福を天に謝す、と云ひぬ。師よ、かく思はずしては何處に我らの浮む瀬のあるべき。我に味方あり、強き味方あり、百萬の味方あり、乃ちたゞこれこの愧ぢざるの心。

師よ。愛こそはあらゆる悲しみ苦しみの底なる喜びの眞珠なれ。苦境のうちに滿足を見出すこと、これ蓋し今の我にありては必至の要求也。一週間以前、自らの筆によりて得たる所二十金、貧に瘦せます父母へと送り侍りけるに、今日なつかしき母の愛と喜びに溢るゝたより着きぬ。我は泣けり。かくしも人を喜ばせうべくば、我は喰はずもよし、飮まずもよし。探るに異樣の響ある懷中の銅片數顆、あゝ如何にしてこの年を過すべきと惑ひける我も、師よ、今が今よりは、淋しくもあらず悲しくもあらず。富者の萬燈よりも貧女の一燈こそは佛の旨にも叶ふとかや。千金を贏ちえたるの喜も、ありつ丈けの財を傾けて購ひ來る貧乏德利三合の村酒に心隔てぬ友と醉ふ心地にはかへ難かるべし。富よ去れ、文明よ去れ、錢あまつて書澤山讀む人も羨まじ。たゞ我は愛と共にありと思へば、苦も苦ならず、涙も女々しくは出でず。光ある力は却つて此の無一物の境より滾々として湧き出づるぞかし。仄かなる雪の聲に耳を傾くれば、手を煩はし心を煩はす「物」の一つもなき身は、あはれこれ赤裸々の佛の子神の子。心の天は机邊の燈よりも明るき心地して、世に立ちて戰ふにも何の不安もなく虛飾もなく躊躇もなし。人生の味は恐らく電燈花の如きレストウラントにも大學の講堂にもあらじ。病める時、貧しき時こそは我と我が心に語る機會多きものと思へば、嘗て湘南の濱邊にさすらひ玉ひし故樗牛師に、三千里外より寄せられけむ師の御文讀みたくなりぬ。貧しき書架を探れど、無し、無し。讀まねど讀みぬる心地し侍る。

身も心もよろづ貧しきこそげにこよなき幸に候へ。人はよく、理想と現實の乖離破綻の間にありて我等如何にすべきと喞ち候へど、欣求不撓の心こそはまことに、求むるものよりも、尊きもの。かゝる心が生ける理想なりと知らば、乖離破綻のあればある程、力も勇みもいや更らに强くなり候。

夜は音もなく更け渡り候。我はこれより寒夜の薄き衾に、あたゝかき故鄉の夢をば結ばむず。

三七、十二月十四夜　　啄木

嘲風先生　侍史

二白

今年は十也七日を餘すのみと相成り候、師はことしも除夜をば清見潟に送らむとし玉ふか。本月思潮の〆切は例月より早く候や。このうちに蕪稿携へて、また御清話伺ひ上げたく存候

×

拜啓
一昨日貴信に接して誠になつかしく拜見致候。兄は羨ましく候。
今日は二三の友の歸國を上野に送るべき日、朝來歸思動きて禁ぜず候。而して兄よ。生はこの日に於てこの不吉なる手紙を書かむ事は、誠に心苦しき事に有之候。
これから小石川迄ゆかねばならず候に付取急ぎ有體に申上候。それは外でも無之候が、あゝ外でも無之候が……
本月太陽へ送りたる稿、〆切おくれて新年號へは間にあはぬとの事、天溪より通知あり、この稿料ゝ、來る一月の晦日でなくては取れず又あてにしたる時代思潮社より申譯狀來り、これも違算。
かくの如くして違算又違算、自分丈けは呑氣で居ても下宿屋が困り、故家が困つては、矢張呑氣で居られず。全く絶體絶命の場合と相成申候。
一月には詩集出版と、今書きつゝある小説とにて小百圓は取れるつもり故、それにて御返濟可致候に付、若し／＼御都合よろしく候はば、誠に申かね候へども、金十五圓許り御拜借願はれまじくや。
世の中には金で友情を破る樣な事も澤山有之候事故、これは實に何とも申かねる次第に候。然し乍ら／＼この場合は、ありたけの路を講じて見ねばならぬ場合故、面皮を厚うして申上る譯に候。御都合わるければ、その御返事丈にて滿足可致候。亂筆にて御申譯なけれど、先は御願事迄、取急ぎ早々

十二月二十五日　　啄木生

花明大兄　侍史

昨夜千駄ヶ谷のテッカン兄をとうてはなし申候。

明治三十八年

×

拜啓
御上京の日が、日一日と近づくは、やがて小生の御無沙汰が日一日と延ばされたる譯、何とも御申譯なき次第に有之候。
舊年末にはトンダ御願ひ、早速御聞き上げ被下候ふ事、御芳情誠に／＼感謝に不堪候。直ちに端書をば差上げし筈に候ひしが、或はこの郵便時間不調の場合故遲達はせざりしやと心配仕居候。何はともあれ御蔭にて安々と越年候事、一に兄の御高懷による儀と落淚致候。
さて明け渡りぬるこの春、故里の雪は紅か紫か、千里何處も同風の新光に諸人の心の琴も同じ調に喜びの節傳へたる事と存候。羨ましき御家は兄歸られて殊にやはらぎの俤、御清福の程奉熱禱候。
京の春は、旅順の陷落に沸る許りの騷ぎ、花電車と云ふものに小生は初めて乘つて見候。
お正月にツントすまし込む奴は、まだ悟り切れぬ連中なるべく、など悟つた風な眞似をして散々急はしく祝ひ廻り候。加留多戰の徹夜なども明けてのお白粉顏が存分をかしみのあるもの、但しそのまゝ宿にかへつて來て婢に笑はるるなどに至つては少しをかしみが過ぎる也。
一昨五日は新詩社の新年會、めづらしくも上田敏・馬場孤蝶・蒲原・有明・石井柏亭などの面々も出席、女子大學よりは戀衣の山川登美子・増田まさ子のお二方見え候ひき。早天より終日氣焰の共進會と云つた樣な痛快のあつまりに

て、又文壇への謀反も二つ三つ共議に上り申候。合計にて二十七八名も有之候。蒲原有明といふ男、條理喰へぬ様な奴に候へど、又案外お手のものに候。話して見ては林外などよりも氣のない奴、小生には少々好からぬたくらみも有之候。呵々。

席上にて公開したる女詩人達よりのお年玉、贈られる人の歌に因んだものにて、平野萬里君へは「み膝に置かむ戀しくばつけ」にて美しい手毬一つ、川上櫻翠君へは「み手を知りしは夢かあらぬか」にて、うす紅の手袋。蒼梧君へは「…夜戰に出づる敵ともなり綾羅の袂玉の手に死なむ」にて淡紅色の木綿にて縫ひ上げたる長い袂一つ。鐵幹氏へは「ひする十六我れ二十八」を判じ物的にやりたるには滿座拍手致候。これに奮慨して男の方も平田露花、川上櫻翠、大井蒼梧の數君、急案急製、やがて女詩人方へ、矢張り公開の御年玉をやる事と相成り候處、奇想天外。登美子女史へ「たま〳〵燭は百にも増さむ」にて燭臺へ蠟燭十本許りを一束に立てゝ火を點じたるを出したるなど、就中一座を驚かし申候。夜に入りて大方は散會。殘つたる主人夫妻と、山川・増田の二女史、蒼梧・萬里・茅野蕭々と小生と八人にて徹宵吟會を催し、皆々多少作有之候ひしが、小生は十六行の一詩と外に未完の長詩一章を得申候。但し二時頃より、終日の舌戰の勞ありたるためか、蕭々先づたふれ、主人たふれ、蒼梧たふれ、隣室の秀様泣き出したるに晶子女史も座を立たれて殘れるは門人、それも曉に一時間許りは息ひ申候。昨朝は女詩人達のお手料理あつさりしたるはお歌に似合はぬを却つて趣味ある事に舌を鼓し候。宿にかへれるは午前十時、机上にありたる急信二三に返書認めて午後二時より就床、暮に二時間許り起きて晩餐を了り、たゞちに又華胥の國に遊びて今朝は八時漸く目さまし申候。この寢坊には我乍ら驚き申候。

明星一號は既に御覧被遊候や。綱島氏の一文と泣菫氏の詩、上田氏の譯詩「春の夜」、それから平野萬里が「小曲三章」これは三嘆也。小生は二月號にて少し變つたものを御目にかけたく存じ候。矢張詩也。本年の明星は評壇に多少活動致す筈に候。小生先月の何となき不健康、それは脚氣の前徴なりし事、今に至りて解り申候。病も暇多き時はよろしく候へど、目下の身にとりては歸郷すべくあまりに世の中が活々致し居る事故、チト困り候。

青森にお出で遊ばされし由、御詩懐の情鳴、弟様への御涙には我もこゝにてもらひ泣き致し候。

せつ子御伺ひ申せしや否や。端書は出してやりたる筈に記憶致し居候が、洋絃に熱中して兄をお伺もせぬとならば、これは叱るべき事也。

御上京は一日も早からむ事、鶴首して待ち上げ候。堀合兄にはまだ逢はず候。都門に入らるゝは何日の何時にや御知らせ被下度、何だかもう一年も逢はぬ様な氣致し候。久し振りにて御清話承るの日、この二三日のうちなるべきか。すべてはその日に讓り申候。早々。

三十八年一月七日朝

啄木生

花明兄 御侍史

二伸 小生も本年は既や二十歳に候。小生に取りてはこの位の滑稽天下に無之候。

×

今日は朝來引きも切らざる來客に、五時頃林

外出のかへられたる頃は聊か頭痛をも覺え候ひしまゝ、少々自暴氣味にて、所用も打棄てゝ新詩社演劇會稽古會を見むと上野の花月亭に參り、只今十時半歸り候へば、もとの宿より廻送し來れる一進の書信几上にあり。兄の御葉書不取敢拜誦仕候。

三月十日事情ありてこの拂方町に轉宿し、早速葉書丈けは差上げ置きし筈に候が、御文の趣にてはどうやらそれを御落手遊ばさざりし樣にも見え候。局員多く野戰郵便に廻りしとかにて通信事務敏捷を缺く目下とは云へ、不審に不堪候。確かに差上げし筈に控帳にも有之候へど、何とも御申譯無之儀に御座候。不惡御諒恕被下度候。

その後の御無沙汰は何とも御詫の致し樣も無之候ふ次第、何れ不日御拜眉の上にてトクと御話も可致候へど、故郷の事情と、詩集の編輯や校正や、おまけに病氣や、友人の困難やにて殆んど目もまはるといふ有さま。故郷の事にては、この春以來小生も懊惱に懊惱を重ね煩悶に煩悶を重ね、一時は皆ナンデモ捨てゝ田舍の先生にでも成らうとも考へた位。結局は矢ツ張本月中には一家上京の事に不止得相運り申候。幸か不幸かはさて置き、先づ以て年來事御安心被下度候。詩集の方は題は「あこがれ」と致し、上田敏氏の序詩一篇有之候。數日前印刷の方も全部出來上りと相成り候へども、和田英作氏の表紙畫未だ出來ざる爲め猶こゝ四五日の後にあらざれば製本濟とならざるべく候。私事の勞苦に疲れて夜な〳〵は人なき孤島の生活など羨むの涙に枕をぬらす小生には、この初兒の誕生を待つこと、心苦しくもあり、いとはしくもあり、この一卷によりて益々この世の中との緣が堅くなる事と思へば、寧ろ火中してしまひたき事も有之候へど、自分で自分の卑怯を叱つて顯目一番氣を持ち直し居候。かく申せば多くの女は皆一笑に附し申候。その笑程小生にとりて無情に見えるもの無之候。然し大都の花の盛り時にこれを心ある友びとに捧げうる事と思へば、又うれしき樣の心地も致し候。獻本は御察し被下度候。兄の御手許に捧ぐるもこゝ四五日のうちにありと覺え候。何れお暇の節あらためて御精評願上候。

兄よ、天下に小生の恐るべき敵は唯一つ有之候。そは實に生活の條件そのものに候。生活の條件は第一に金力に候。小生は金の一語をきく毎に云ひ難き厭惡と恐怖を感じ申候。小生は少くとも惡人には無之候。然もたゞこの金のために、否金のなき爲め、貧なる爲めに、親に不孝の子となり、友に不義の子と相成るにて候。茫々たる未來の事を思ふ毎に、小生はまづこの恐るべき敵に切齒せざるをえず候。

必ずしも金を恐るゝに非ず。金の人心を司配する勢力の豫想外なるを恐るゝに候。かく申したりとて決して兄のみは誤解遊されぬ事と信じ申候。若し今回の故家の一件が小生の頭上に落下する事猶二年の後なりしならば、とは小生の常に運命の女神に對して呪咀する所の一語に候。兄よ何卒御賢察被下度候。小生はこの外に何も云はず、否云ひえず候。

神よ願はくは余をして生活の條件のために心を要せしむる勿れ。それ以上の事は余自ら成就しうるの自信あり。然らざれば、願くは凡ての同情を余より奪ひ去れ。これあるうちは余は永久に惡人たらざらむとして苦悶せざるべからざる也。

兄よ、小生が此世に於て尤も羨ましきものは、常に眞に愉快なる精神を持ちうるの人也。人に對する小生は人の如く笑ひもし、高く談りもす。然れどもその言葉、その笑、それらは、あゝ、常に空虚ならざる笑なりや、言葉なりや――

兄よ、もはや小生をして沈默せしめよ。願くば沈默せしめよ。

兄は新詩社の演劇會を何と思ひ玉ふや、小生は時々俳優たらむと思ふことあり。十五日には是非御來會あれ。岩田君の佐山一郎を見ば、兄は必ず泣き玉はむ。

社の盛岡遊說は延期。

萬事御面晤の日にゆづる。

四月十一日夜　　啄木　拜

金田一京助様

堀合兄によろしく。兄と堀合兄と三人集る期なかるべきや

×

（前文截斷）……この中津川の川音封じ込むる一書、恐らく兄は意外としたまふらむ、生の一家、雙親と小妹と愛妻と、共にこゝに新居を營みてより既に夢の如く十數日を送り申候、同じく京地にありし日も、兎角身世の匆忙に追はれて、相見る事甚だ稀、況して飄々として五旬の前、鐵車一路都門を辭してよりは、いつもの癖の狀袋の表書だけはして置き乍ら、荏苒として遂に一通の假信さへ差上げず、失禮致し候、その後、兄には別にお變りもなかりしや、よし、ありたりとも小生の境遇に比しては何の事もなかるべくと存候。その後、生が鄉友間に得たる豫想外の地位は、小生の豫て知り、また今も明かに存じ居る所、但し小生は、この事に就いて何事も語るまじく候、啄木は啄木に候、たとひ大江さかしまに流るゝ事ありとも、我は遂に我也、生は或る一の『機會』の必ず來るべきを信ずるが故に、それ迄暫時沈默を守らむと存じ居候ひし處、兄が生の住所を問ふの飛信妻が家に來れりと聞き、兄は矢ッ張り兄なりき（呵々）と思うて早速この筆を取り上げ候、生は貧乏也、この一事は誤つて生をして普通の人間に伍せしめたり、他に何もあるなし、但し生は今、既に貧乏に安住するをうるの覺悟をえたり、この一念は云ふまでもなく富よりも何よりも尊し。時として生は、世の中のアマリに馬鹿くさく、塵塚の樣なるに奮慨する事有之候へども、奮慨するのも馬鹿くさき事故、生は今、最良なる方法として、最愛の友を自己に見出し申候、而してまた、最高度の「愛」のみ人生のすべてを解釋するを事實に於て見るを得候。過去數ケ月間、小生を司配したる、誰も知らぬ秘密の運命あり、これは他日一夕の茶話として兄にも語るの日あるべきか、

人生の趣味と價値とはその平和ならざる事にあり、波瀾洶湧する事にあり、而して生の心がその波の底の千古の岩の如く不變なりと思へば、更に趣味の多きを覺え候、

小生は結婚いたし候、何卒御よろこび下され度候、諸兄にも御傳へ被下度候、天下の口クデナシのゴロツキの小生が、杜陵の青嵐に胸の塵臭吹き拂はせて一家團欒のうちに無上の「愛」の寶果をむさぼりつゝあるとは、さても奇妙なる事に候

而してこの寂光の淨土にありて、休む事なき勇猛心が何かまたおもしろき事を孕みつゝある事を御承知被下度候、日月の光暗くならぬうちは小生も死に申さず候、

露のポテムキン號はオデッサに於て謀叛を起し候由、痛快の事に候、日本の精神的社會に、ポテムキンの如き「自由」の堅艦は無之候ふべきか、……（後文截斷）

――〔右六月某日伊藤圭一郎氏宛〕――

×

君いまさぬ不來方の古城の跡は日にけに哀しき蟲の聲に埋もれゆき申候やがては淅瀝たる落葉の音、滿城の秋思を戸ぼその三日月にさゝやく時も遠からじと覺え候。ちり煙立ちのぼるなる都門にも秋の風早や吹き過りぬらむ。別にお變りもあらせられず候や。

おわかれ致し候てよりも、とかく心地輕々しき日とては無之、さるからに又さびしさに物思ひ暮らすべき枕上の人ながら、旦暮何くれとなき匆劇に、暫しの暇もある樣にて無き始末、おたよりも致さゞりし罪は何卒おゆるし被下度候。

すぐる頃のお文うれしき事限りもなく拜しまゐらせ候ひしが、さりとは我が小天地にかばかり厚き同情を寄せ玉ふ兄ありと思ふに、事はおろそかに出來ぬ樣、深き身にしみ／＼といたし候。御地の書店への發送は意外に遲れ候ひしが多分月の半ば頃よりは本郷あたり、人氣立つ店頭にさらされ候事ならんと存じ候。小天地の事、幸にして誰も惡くいふ人は無い樣に候へど、たゞ新詩社中の一小部分の人々は、岩野君、清水君、綱島君等の作を載せたる事に就て、多少考ふる所あるらしく、小生をして旗幟を鮮明にせよといふ樣な意味の手紙を寄せたる人も有之候。しかれども、詩は人類の產物にして必しも新詩社の專賣特許にあらざる以上、これらの批評はよろしく大人物の一笑に附し去るべき事かと存じ候。小生は第二號卷頭に二十頁許り、「鎖門一日」と題する長評論を掲げて聊か自家の主張を天下に公に致したく存じ居候。二號には泣菫・有明・月郊・泡鳴諸氏の作も載せる筈に候。

先日の國民大會の騷ぎ如何に候ひしや。小生も若し在京中ならば、勇敢なる放火隊の先頭に白鉢卷してかけ聲勇ましく交番の一つや二つは一人でも燒いてみせたきものをと、これは都門の人々うらやましく候。いづれ一生中には一度かゝる千載の快事に逢ひたきものと念ひ居候。

二號以下はさま／＼の都合にて每月十日發行の事といたし候。從つて〆切は二十八日に候間若し御暇有らせられ候はゞ何なりとお惠み被下度願上候。

小生目下は每日々々胸中に新計畫を成就しては壞し／＼いたし居候。來年の四月は徵兵檢査の事とて、それまでに一つ思ひ切つた事せねばならぬ譯、男と生れた罰に樣々の事のみ有之候。小生が「小天地」を出したる事について世人は小生今後いかなる事をするやに就いて臆測し居る樣に候が、とにかく小生の行く所、必ず「小天地」てふ雜誌は同伴すべく、よしや休刊する事有之候ふとも小生のいのちのある限りは小天地の壽命はつきざる筈に候。凡そ雜誌の經營位は男子一人の事業としては一小些事にすぎず候へども、とにかく何年かの後には、小天地社の特有船が間斷なく桑港と橫濱の間を航海し、部數三十萬位づつ發行する樣にやるべく候。斯うなくては雜誌なんてつまらぬ事に候。然らずんば又、澁民あたりへ小天地活版所を起し、紙數を十頁位にして卵白の鳥子紙を用ゐ、自ら書き、自ら印刷し、自ら製本して、一部二圓位のものを百部以上刷らぬことにしてやつても見たく候。呵々。

今や秋意滿天下、嘗て市塵にまみれし小生の心、杜陵に隱れて茲四閱月、漸く昔日の小兒の心にかへりたる樣の心地致し候。「一秋」と「貧困」とは今の吾身に神の言葉の如く尊とく候。草々。

九月二十三日夜

中津川畔

啄木拜

花明大兄　御侍史

二白、
獨逸語の獨學愈々初めたく存じ居候が、ジャーマンコースと獨和辭典の小さなのと、獨語の小說か詩か論文の內容の難易に不拘、價の最も安いのと、いくら位で買はれ申すべきや何卒お知らせ被下度願上候。

×

兎角快からぬことのみ多きこの頃を、度々なつかしきお手紙に接し、田舍に隱れ候ふ私を忘れ給はぬお情け、誠に難有存じ居候、今日はまた、美しきお歌お惠み下され、下手の横好きのこゝの二人、首をあつめて幾度となく清吟仕候、いづれはこれ天上の調、伏して仰ぐべきには候へど、『秋霧は』の一絕など、身も魂も打込みて、緣の日ざし机の上に這ひくるをも忘れ、かたみに吟じ合ひ申候、

私、二つの敵あり、貧乏には打勝ちも致すべく候へども、不健康には致し方もなく、この頃また、西日あかるき窓の下、枕の上より天井のフシ穴數へる日のみ多きには閉口の至りに候、

小生の如き性質のものに取りては、健全の時よりも病の天地に高臥して却つて幾多の新らしき聲をきくこと、生來の經驗に徵しても明かに候へど、さりとて、厨に米なくなりゆく日を數へながら、晏然として仰臥禪を學んでも居られず、この苦思慘澹の中に病の眞味殊に深しなど苦笑しては居り候ふもこの浮世の波穩かならぬものと、毎日々々今更の樣に感じ居候、

小天地二號には十一月には是非出す考へに候、原稿も大分あつまり居り候、初號の批評、數々あり候ふ中に、新小說にほめられしたんか、チト意外に候ひき、此頃拔萃帳をこしらへ、去年あたりからの新聞雜誌にて小生をひやかしたり叱つたりした記事を貼りつけ居候、白髮を頂いてのち、これを繰りひろげ候はゞ、如何に興多き事なるべきかと、時々一人でニッコリ致し居候、

初號に岩野泡鳴兄などの詩を載せ候ふことについて、江戶表の先輩諸先生方の中に御機嫌よからざるお方も有之やに承はり候が、萬あるべからざることゝは存じ候へども、如何あるべきか。尤も平野萬里兄などよりは、この事に關し、堂々たる反對のお手紙を頂戴いたし候ひし、乃ち、「泡鳴などの詩は詩と思はず」とのお言葉に候ひき、この樣の事に關しては小生小癪乍ら少しく云うてみたき事も有之候へど、當分さしひかへ居候、兄も新詩社の一人、小生も社友名簿を濟す一人、その小生より兄に申上ぐるも如何に候へども、明星誌上岩野君に對する前後二回の評論は、少なくとも、詩壇の或る一黨派のためのみならず、廣く國詩の發達に忠實ならむとする批評家の言としては、多少矛盾撞着したる所なく候ふべきや。小生とても岩野君の「駿信」の愚劣――少なくとも、小生の胸中の理想の詩人が斯ういふ事をしたりと考へての上の判斷によりて、――且つ自己の品性を傷くるものたることは、敢て公言するを憚らず候、たゞ何故に、初めは詩壇に新らしく造詣する所ありたるの詩が、只この一事によりて、詩とも思はれぬ樣なものに急に下落したるべきや、岩野君は或は新詩社の誰よりも言語上の知識について劣り居るかも知れず候、然し乍ら、岩野君の如き性格の人にありては、自己と他とを比較して見るなどと云ふことは出來ざる相談なるべく、またよしや、假りに自己の言語上の知識が淺薄なるを知り居るにしても、一度心絃に天來の聲をきける時、彼は果して、自己の修辭が不完全なりとの理由を以てその興を空しく逸し去ること、よく成しうべきや否や、たとひ修辭に缺點ありとも、既にその內容に於て詩壇に造詣する所ある程のものならば、眞に詩を愛するものは、決し

てその修辭の一缺點のみを以てその詩の價値を悉皆沒し去る樣の事は無き筈と存ぜられ候、かく申し候ふとて、小生は必ずしも岩野君を極力辯護して、我が詩業の師たり父たり、はた最も親善なる友たる新詩社に楯を突かむとするものには無之候　岩野君の詩が未だ完全なるものに非ざるは不肖も亦之を知る、たゞ現在の岩野君の地位境遇に對して小生甚だ同情にたへざるものあり、一言ひそかに兄に訴ふる所以なり、

小天地誌上、小生の躊躇するものさへ甚だ多く候へば、兄らが見たら何と思はるるかと、心配にたへぬ事少なからず、何卒御海容被下度候、然しこれは明星の經營にも親しく盡力し玉ふ兄には、雜誌編輯のいふにいはれざる幾多の困難なる事情の排しがたきを知り玉ふ筈なれば、（特に創刊當時に於て）十分御憐察下さるゝ事と存候、いづれ兄らのお情け深き御援助によつて小天地も小生も段々に大人になるべき事と信じ居候、

先日のおたよりにて、病間錄おひもとき遊ばされ候由承はり候ひしが、小生も、著者の君よりのお情けの一本によりて、名殘なくこの尊とくも温かき寂光梵音の呼吸を吸ひ申候、小生は、二十五絃と病間錄の二書によりて、この世にいともなつかしく尊とき二人の人格者を發見したるの歡喜を兄に告ぐるをうるを幸とするものに候、いづれこれは小天地の二號にて心の限りかき染め申す考へに候、

（以上十五日午後）

當地詩界の現狀お尋ね被下候ふに對し、左に少しく申述候、一言にして云へば、手前味噌には候へども、この不來方の古城の跡は、將來最も有望なる文學市の一つに候ふべく候、東北は日本のスカンヂナビヤなりとは先頃の碎雨兄のおたよりにも有之候ひしが　げにさもありつべきか、こゝには關西乃至は關東諸州の如き清明もしくは廣濶の空氣著しく缺乏致し居候へども、その代り峻峭、素朴、深刻、沈靜等の別樣の趣に富み候、このスカンヂナビヤ的寒冷の天地に一路春溫の風致を導びくもの、北上八十里の流域あり、盛岡は實にその流域の地方源頭に近き、一種蒼古の姿ある一小市に候、されば南の一方を除いては皆山を繞らしたるにかかはらず、——スカンヂナビヤ的風趣の中にありて、——何となく特別の溫味ある、優しき、暢やかなる空氣を藏し候、盛岡は東北の京都なりとは、よく旅する人の云ひ殘したる言の葉に候、かゝれば此處に、峻峭と素朴と深刻と沈靜の山嶽的なる東北の氣象が、一脈の風趣を啓いて一種異なりたる文藝の花を見るに至るべきは、理の正に然るべき所なるべきか、

東北の史を案ずれば、南部馬と鐵瓶と金と鐵との名產地たる南部藩（南部の中心は申す迄もなく盛岡に候）は、同時に、當時の一般的文學たる俳句（殊に）及び和歌漢詩等に於ても大に優勝の地位を占め居るを發見すべく候、（小天地初號にありたる俳人素郷の事をお讀みなされ候うても多少はわかるべく候、）明治文學と岩手との關係は、唯一山田美妙あるのみに候へど、この維新後の當地方の萎微振はざりしは、文學のみならず、政治實業凡ての方面に於て、皆維新當時の政治史上の一大打擊及びその後の壓抑の結果に外ならず候、しかしこの意氣銷沈は決して永久にのこるべき理由なく、いつかは覺めざるべからず、否現に覺め來りつゝ有之候、

盛岡に來らむものは、市の中央を流るゝ（北上の支流）中津川の上に、二つまで、錆色蒼然たる古銅の擬寶珠を有する橋を見るべく候、昔は上中下の三橋共これを有し候ひしが、洪水のために下の橋流されてより、上中の二橋にのみ殘り居候、これについて面白くも趣味ある譚こ

そ候へ、むかし南北朝時代、當地の藩主南部利直公も逐々と吉野の行宮に走せ參じて勤王の誠心をつくしまゐらせ候ひしが、後村上帝の御時とかや、月も花も朧ろに霞む春の夜、夜な〳〵時ならぬ鹿の聲きこえ候ひしかば、人々うれしからぬ事に思はるゝ中に、帝も御心を傷め玉ひて、誰か歌よみてかのいまはしき鹿の啼く音をとゞむるものなきかとの御諚に、利直公即ち

春霞秋立つきりにまがはねば思ひ忘れて鹿やなくらむ

と一首の國風を詠じ、後の山に立札しけるにその夜より鹿鳴かずなりける。帝の御感斜めならず、公に賜ふに「松風」と號する硯面を以てし、又加茂川の橋の擬寶珠を移し模する事を許されたりと、この優しきいはれ持つ擬寶珠こそ乃ちこの盛岡に異樣の雅致あらしむる上の橋中の橋のそれに候、兄よ、これら幾多の趣味ある事共を有する盛岡は、住む人の心に何らかの詩情を養ひ來るべき事、必ずしも有うべからざる事にはあらざらむと思はれ候、

(十六日)

(十八日午後書きつぐ)

全國中、市としての盛岡の地位は甚だ劣弱なるべく候、人口は三萬五千、電燈は丁度一ケ月前より初めてこの市を照したるばかりに候、名四種ある新聞の内、二種は目下休刊し居り、名産の羽二重機業も衰微として振はず候、たゞこの不景氣の中に一つ奇怪なる現象と申すべきは、市内に七ケの書肆あり、店頭は主として文學書類を美々しく飾り居事に候、地方には讀者少なき筈の「明星」も三十部は確かに市中に入り込み居り、白百合でさへ十部は有る由、文學雜誌と名のつくものの每月の賣上り高は少なくとも三百五十乃至四百部との事に候　これに文學專門ならぬ種類をも加へ候はゞ、實際驚くべき數に上り申すべく候、人口の多少を考へ、學校の數を比較せば、文學書の購讀力に於ては、全國はいざ知らず東北地方にては先づ第一位と申して間違なく候、自分の事を申すも可笑しく候へど、「あこがれ」の如きも意外なる程賣れ居候、尤もこれは地方的關係もあることなれば、標準にはならぬかとも存ぜられ候へど、近來に於ける當市の新詩の盛んなること驚くべき次第に候、小生日夕彼等熱烈なる愛詩家に接し、實に無限の感慨に打たるゝを禁ぜず候、再昨年の秋、小生はたゞ文學を愛するの故を以て教師諸氏の怒を買ひ、學校の迫害にたへずして、袖を拂つて飄然郷門に走り、爾後母校の校門を陰府の入口の如く考へしことも一再ならず候ひしが、再昨年も今も、依然として學校の文學に對する迫害少なからざるに不拘、素朴なる杜陵の青年が極めて眞面目に文學を愛し、其處に一團、此處に一團と祕密結社樣の文學會を起し、案外輕薄ならざる態度を以て美を愛し居候事、小生には實に何とも云はれず、うれしくも又重大事に見え候、兄よ、小生は、實に少なからぬ責任を負ふものに候、當市に於て、嚴かに發行せられたる文學書としては、本年春發行の「菜花集」(農學校の有志を中心としたるもの)あり、案外に見るべきものあり、又目下、中學校を中心としたる詩文集「ひなげし」及び故人となりたる詩人白命の「白命遺稿」印刷中との事に候　共に三百頁以上なるべく總クロース美本との事に候、

紙盡きんとす、詳細は他日またお知らせ申すべく候、たゞ終りに、盛岡が實に有望なる一文學市たることをくり返し申上候　草々

三十八年十月十八日　杜陵　病啄木

櫻翠樣　御侍史

病のため、來客のため、この一信、前後四日かゝり候、懈怠とばし叱り給ふな、

明治三十九年

×

年は新らしく成り候うても、別に新らしき事もなき世に候かな。南の窓に冬の日あかく照り映え、そともの壁にかけたる干菜のかさかさと鳴りて、風の音のさすがに淋しき日。さて又幾度かけさ枕の上にて御書拝し候ひぬ。繰り返し候ひぬ。

今少しく兄と語らばやと思ふ事あり、近きわたりならば、訪ねもゆくべきを、よぎなくこの筆を取り上ぐ。

『我考ふ、故に我在り』てふデカルトの一提言は意味深いかな。見よ、この世の事、物、すべてを疑ひつくして、然も僕遂に疑ふべからざるは、唯一つ、『我の存在』には候はずや。

存在には意義あり。乃ち又、力あり。人間のあらゆる信念といふもの、畢竟ずるに皆、この『我の存在』の自覺に伴ない來る當然の事實也。小生や生れて頑迷、確なきより人の言ふ事に耳だも貸さぬ性質に候ひき。みづから斯うと思ひ極めたる事には父母の言葉さへ馬耳東風にきゝ流して、善かれ惡かれ、我意を通さでは止まぬ程に候ひき。長じては學才等輩に秀で、人に神童などと稱へられて益々この性を増長せしめ候ひぬ。友人の言を顧みで、中學卒業に先立つ數月にして飄然都門に入りしも、この性あればの事也。都門に入りて四ケ月、人に下るといふ事を知らず、人の常に行く路を厭ひて、僅か十七歳の身乍ら自矜傲り高うし、遂に病を得、友の笑を買ひ、默然として故山に病骨を横ふるに至りしも、この性あればの事也。忘れもせず、その後の藥餌に身を埋めし一ケ年許りの間よ。今ははや再昨年の昔と成り候ひぬ。はやる心と萬不如意の寂しき病中生活と、いかに小生をして人知れぬ苦鬪の中に惱ましめしぞ。凡ての意義、凡ての價値、いづれか皆小生の疑ひの目に意義なく價値なきものたらざりし。小生が幾度か自ら死せむとしたる經驗は實に此際の事に候。あゝ見よ、かくて遂に自ら疑ふことも能はず動かす能はざる一事實ありき。そは實に『我の存在』なりき。

バイブルを讀み、法華經を讀み、猶且つ眞に解く能はざりし小生は、この『我の存在』の一意識に觸るゝに當つて、俄然として醒めたるが如く候ひき。生存の意義と價値とはかくして朧ろ氣に我が暗黒なる胸中に一道の光明を投げ、幼きより我がいのちなりし自負の一念は、又かくして別箇の意味に於て我が枯槁の生活に復活したり。この時に當りて、リヒャード・ワグネルの偉大なる思想こそ、小生の此の意識をして益々明瞭ならしむる唯一の力に候ひしか。

ワグネルの樂劇の根柢たる意思擴張の愛の猛烈なる世界觀には、根本より小生の性質と相符合するを得るの理由あり。彼は同じくショウペンハウエルより出で乍ら、トルストイと共に意志消滅の謬説に陷らず、又ニイチェと共に意志擴張のみの極端に走らざりき。この相反したる二思想の間に、微妙なる一大發見は彼の天才によつて見出されたり。乃ち、意志擴張の愛の健鬪的勇氣によつてのみ到達せらるべき神人握手の妙境也。かくて彼が作中のヒーローは皆此の理想の戰士也。彼等にはたゞ愛と戰あるのみ、固より生死省みるの暇なき也。而して彼自身の一生は又實にかくの如き勇敢なる戰士の好模範なりき。ワグネルの我に與へたる教訓の偉大なる事、それ幾何なりしとするぞ。

『我の存在』の自覺は、云ふ迄もなく當時の小生の、心身二様の病をして克復せしむる重大の一轉機に候ひき。かくて一切の面目は新しく成れ

り。小生の世界觀（？）の根柢は斯くして小生の胸中に据ゑられたり。（この世界觀とも云ふべきものにつきては今詳說するよりは他日お目にかゝりたる時お話致さんと存じ候。）

この後、小生は專心詩筆をとれり。又、この自覺によつて、早く十四歲の頃より續けられし小生と節子との戀愛は、小生に取りて重大なる意義を有するを意識するに至れり。兄よ、「自己の次に信じうべきものは戀人一人のみ。」何となれば、戀人は我ならぬ我なれば也。我の次に最も明瞭なる存在は乃ち戀人なれば也。我を信ずる事は、やがて押しひろめて我と同じ人間なる凡ての人を信ずるをうべき理由と成る。之れ小生の如き自矜孤負の性にして、猶且つ比較的廣き交際を有したる原因也。然も兄よ、不幸にして小生は、昨年中、この「我を信ずる如く人をも信じ得」といふ理由の、少なくとも現時の社會には適合すべからざる幾多の事件に遭遇したりき。僞善者天下に充つ！ この一語は昨年の小生の實に幾度となく心中に絕叫したる所に候ひき。わが足を噛みたるものは他家の犬にあらずして、わが家の飼犬なりき。犬は由來獸類の一なれば、その性陋劣なるも致方なき事とは云へ、彼等自らは何事をも成しえずして、徒らに人を妬み、面相對しては巧言令色、しかもかげに廻りては人を中傷誹謗する事さながら不倶戴天の仇の如し。兄よ、小生が昨年中に受けたる種々の迫害が、年末に至りて切實なる追懷の情に訴へられ、その不平の餘憤が、はからずも「古酒新酒」中に幾分を發せられたるもの、又餘儀なきに非ずや。

『英雄はとこしなへに英雄の世界に於てのみ解せらる。』兄よ、小生は英雄にあらざるかも知れねど、小生を解するもの寥々として今の世に少なきの事實を如何。今にして知りぬ、この世に處するたゞ愛と戰の二途のみなるを。

『愛は萬事を解する唯一の道なり。』兄よ、兄は何故に兄が滿身の同情は小生をして毫も心強うせしめず、と云ひ玉へるや。兄は或はかの「古酒新酒」を誤解し玉へるに非ざるか。

勝敗死生もとより掛念する所に非ず。我等愛する者よ、たゞ將に勇敢なる理想の戰士としてこの世にあらむ哉。我死せん時、兄よ願くは來つて我が墓上に劒と花束とを供へよ。

三十九年一月十八日　　啄木生拜

迷宮兄　御侍史

紙がないから、これで左樣なら

×

拜復、本日御葉書正に落手、永々御無沙汰いたし居候事とて、誠に恐縮に不堪候、何分御存じの通りの一家の有樣故、心にもなき疎遠仕り候次第に候へば、不惡御諒察被下度候、

偖て、かねて月末迄の日延べお願申置候ひし所、二十五日には是非共御返金申上げねばならぬ今日の仰せ、もとより當方の惡いのに候へば、一言も申上ぐる所無之候、實は私も去る十四日より愈々當村小學校に奉職の事と相成り、目下毎日出勤罷在候が、去る廿一日の月給日にも請求致し候ひしも俸給金村役場より出來ず、お葉書によつて今日も催促に參り候ひしも矢張り駄目、これは昨年の凶作の影響にて村稅未納者多く、村費皆無のために候、誠に困り入り候、最も私一人でなく、學校の職員四人共同樣にて、融通の餘裕もなく、いづこも同じ秋の夕暮に御座候　役場にては、月末迄には何とかして拂ふと申居り候が、誠に御申譯無之、厚顏の至りに候へども何卒それ迄御待ち被下度、伏して願上候、俸給さへ出來れば、スグ爲替にて御送りする樣、かねて

母とも相談いたし居候ひし次第に候。間、此際まげて御待ち被下度候。廿五日に若し御出被下候ふとも、兎ても工面出來る道無之候間、何卒左樣御承諾被下度願上候。

父は先頃より歸宅、目下寶德寺に再住の運動にて多忙を極め居候。これは多分來月中には決定する事と存じ候ふが、その上は私も大に助かる譯にて、喜び居候。

學校の方の調査物種々山堆いたし居候ふ中にて取急ぎ一書御返事申上候。前述の次第何卒不惡御諒察被下度、伏して願上候。草々

四月二十三日夜　　石川一

太田駒吉樣　御侍史

×

兄よ、何と御申譯の言葉もなし、今朝日報紙上にて「春の賓」をよみ、のがれ難きこの身の罪をひし〲と、胸に感じ候ひき。げに兄が深厚なる同情と友誼に比して、我が疎遠の罪の、いかに大に、且つ長く候ふぞよ。

連日の疲勞のためにや、今日は就職以來初めて不快を覺えて教壇に立つをえず、一日戸を閉めて懶眠を貪り申候。只今日さむれば、戸を洩る午後五時頃の日ざし、きら〲と枕頭の茶器に躍れり。戸はわざと開けさせず、僅かに微光をたどりてこのペンを取り上げ申候。

兄よ、何卒我が疎遠の罪を許されよ、正直に自白すれば、一は繁忙のため、又一は、僅か三錢の郵券代を有する日の甚だ少なかりしがため、我は心ならずもこの罪を重ね候ひき。

笑ひ給ふ勿れ、啄木は今、月給八圓の代用教員に候ふ也、而して村役場の慈悲深き、この驚くべき多額の俸給をすら、仲々拂つてくれぬに候。明治の聖代が詩人を遇するの道、又至れる哉。春燈靜夜、時として倣天の興趣油然として湧くことあり、しかも机上を探つて一葉の紙片をもえざる事多し、かゝる時、小生はたゞ瞑目して苦茗を啜るのみ。寄贈を受けつゝある明星と帝文の外に、凡百の雜誌乃至新刊舊刊の書、一も手にする事なし、君願はくは、時に讀み古しの雜誌の寄贈を惜む勿れ。

かゝる境にありて、我が唯一の樂しみは、故山の子弟を敎化するの大任也。小生は蓋し日本一の代用敎員ならむ、兄よ、願くはこの小さき自負を公言するをゆるせ、朝起きて直ちに登校す、受持は尋常二年也、十分休み毎には卒業生に中等國語讀本を教ふ、放課後は夕刻まで英語の課外教授をなす、一日自分の時間といふものなし、夜は種々の調査、來客等に忙殺せらる。(二へつゞく)

(二)又、時々近隣の女生徒を集めて、作文の教授をなすことあり。我が談話をきかんとする青少年の來襲に逢ふことあり。

兄よ、かくの如きは乃ち我が現在の日課なり、我が在職は蓋し長からざらむ、しかも我は、その長からざる間に於て、十分に人格的基礎を有する善美なる感化を故山の子弟が胸奥に刻まむことを期す。これ詩人たる予の本能的要求なり、これ實に何らの報酬をも豫期せざる我が心靈の希望なり、而して兄よ、予はこの希望の實現を確信せざらむと欲するもえず、予は就職以來日猶淺し。しかも誰かまた予の如く生徒の心服を買ひうるものぞ、予が就職以前の杞憂は、放浪に慣れたる予が、果して中途にして倦怠に陷らざるをうるや否やの問題なりき、而して現在の心配は、予は果して豫定の一ケ年位にてこの神聖なる教壇を退きうるや否やの問題なり、兄よ、詩人のみよくひとり眞の教育者たりうるには非ざるか。

人生に對する予の不平は日々に益々多し、生活

の苦悶も亦日に甚だし、八圓の月給がよく一家五人を養ひうるの理遂になきなり、然れども一切の不平は却つて予が精神を鼓舞するの良薬なり、鼓舞せられたる精神の火は、日夜我が紅唇を迸り出でて、神の如く無垢なる子弟の血に燃え移りつゝあり、感化は畢竟救済なり、一國の王とならむよりも、一人の人を救済するは大なる事業なり、今の世に於て愉快なる、若しくは、壮大なる事業と稱せらるゝもの、多くは却つて空虚なり、吾人は事をなさんとするに先立ちて まづ何ものか眞に充實したる事業なるやを考へざるべからず、二三日前はしなくも月城の來訪に接しこれを感ずること深し。

故山に隠れてより盛岡に出しことなし、徴兵検査は首尾よく徴集免除、一昨夜盆踊りを踊りたり、おもしろかりき、閑あらば來遊あれ、鶴首してまつ。短信意を盡さざるを惜む。

八月十一日夕　　岩手郡渋民村　石川啄木

小笠原迷宮様

×

三十九年八月十六日、早朝、

この夏は、毎朝五時前に起床、水汲む村孃と立交りて驛の端れの清き泉に顔洗ふを例と致し候、それより葉山の小路にさまよふこと二三十分、かへり來て朝餉たうべ候ふに、馬鈴薯の汁、胡瓜の香の物、田苑の味はひ何物にも較べ難く覺え候、かくて心静かに机に向ひ候、澁茶啜りつゝ此筆を執る。

お手紙は二三日前嬉しく拜讀致し候ひき、いといと久しかりし御無沙汰の罪、我から心恐ろしう相成候、夢々君を忘れしとには無之候、京より歸りて六旬、仲々に忙しく過し候ひし乍ら、敢て一時間二時間の暇なかりしといふに非ず、正直に自白すれば、實は三錢の郵税に事缺き候ふ事常にて、處世交友の道を知らずとには無く、心にあり乍ら罪を重ね候ふ次第、御察し被下度候、かゝる事に於ては、小生常に不幸に御座候、致し方なき事なれば、くだくだしく御申譯は致さず、唯兄の御高察を仰ぎ候。

去る六月の上京は、實に種々なる用件を兼ねて候ひき、僅か片路の汽車賃を役場より前借して、飄然と出掛け候ひしが、淹留十日、所感滿腔、げに兄にも葉書一枚出さゞりき、御許し被下度候、小生この村に來てより、村内は種々なる問題の下に今猶葛藤を續け居り候。それらの問題の中にて、老父寳徳寺再住の件に關し、在京の曹洞宗務局に運動せんとするは小生上京の第一の用件に候ひし、而して此外小生自身の用件一二にあらず、幾多の企畫と希望とを抱いて上野驛に下車致し候ひしが、足都門の土を踏み、轟然たる大都會の響をきき、口未だ一語を出さざるに、小生は既に泣かむ許りに感じ候ひき、あゝ兄よ、大都の生活を羨やみ、大都の文人と相伍せむとするは非なり、極めて非なり、小生が上京は必ずしも向來東京に移住せむとしてにはあらざりき、然れども小生は實に斯く感じ候ひき、少なくとも小生の性格は今の東京に適せず、小生は文界の軌道を歩むを以て此上なき不得策なりと感じたり、而して飽く迄も自らは一個の遊星ならざるを感じたり、兄上、小生は斯くして都門の土を踏める一刹那に於て既に胸中の幾多の企畫を暗中に埋め去り候ひき、而も東京は急しき所、十日の間は實に暇なく動き、暇なく讀み、暇なく感じ候ひき、宿りしは千駄ヶ谷の新詩社に候。

兄よ、人間の巣なる都會に居て大詩人といはれむよりも、田舎の代用教員となりて神の如き兒女より先生と呼ばれむ方遙かに小生には滿足な

り。人生は永劫の事實也、都會にのみあるに非ず。されば、詩人は必ずしも多くの人間を要せず、唯彼は人生と共に活くべきのみ。

本年に入りてより、小生は一切の新刊書を讀まず候ひき、而して十日滯京の間に小生は多くの小説詩集を讀むの好機を得候ひき、これ小生に於て極めて重大なる幸福に候ひき、小生は感激したり、而して奮慨したり、「僕だつて小説を書ける」とは小生歸鄉の際の唯一の土産に候ひき。

歸來數日にして、七月三日となりぬ、この日の夕暮より小生は異常の勇氣を以て、小説に筆を染め候ひぬ、爾來一ケ月は小生完たく小説以外に何物をも考へず候ひき、一週に三夜位づつ徹夜して筆を驅れり、やがて百四十枚許りなる『おもかげ』一篇は脱稿し、更に長き『雲は天才である』半分程出來上りたり、小生は『おもかげ』を小山内君に送り置けり、遠からず何處かの雜誌に現はるゝならむと存じ候。

數月以前に發行せらるべかりし第二詩集は、都合ありて荏苒致し居候ひしが、上京の際當分出さぬ事に本屋へ斷りて參り候。これは小生少しく感ずる所あればに候、小生は現時に於て他の先覺諸先生と競爭的の行動を取るを潔しとせず、小生は單獨に小生ならむことを欲す、兄よ、小生が過去に於て多少の名ありしとすれば、そは空名なり、小生はこの空名を凡ての人に忘れて貰ひたく候、然して後に新らしく石川啄木なる者の生存を認めて貰ひたく候、兄よ、この心筆に盡し難し、然れども小生の胸裡の感動は決して淺からず。

暑中休暇は小生の早くより鶴首して待ちたる所に候ひき、小生はこの八月中に少なくとも三百枚の小説と一脚本とを書かむと期待し居り候ひき、然し乍ら今日十六日、既に半月を過して一枚も書かず、これ一は原稿紙の缺乏の爲め元氣沮喪したると、一はこの二三日前迄、ツマラヌ事乍ら少し心配な事ありしために候。心配はなくなりたれど、紙はなく米はなし、本月分の月給は既に〱前借してあり、如何にせばやと首傾げ居り候、この月はダメなり、人生常に意の如くならず、小山内君より送つてくるべき原稿料を待つうち、五人一家のいのちを續ぐ方法に就いて考へつゝあり候。

小生は小生の小説に就いて自信あり。

小生は意を安んじて筆を取らむがためには、先づ生活を安固にする方法を講ぜざるべからずと感じ申候、代用教員は愉快なれど、八圓の月給は小生をして意を安んぜしめず、生活費だけを毎月取る工夫なきやと考へ居候、或は不遠小生の一身上に一變動起るやも知れず、尤も未定。

蚊帳も吊らず、袷着て過し候ふは今年の夏が初めてに候。

小生の最大希望は『空虚なき生活』を送らむ事なり。

去る九日、花明兄より「ジャーマン・コース」一冊と獨和辭典とシルレル、ハイネ、レナウ、ケルネル等の袖珍詩集とを貰ひ、その日の夕方より獨逸語獨學に腐心致し居候、甚だ有望。九月に入らば既に詩集を讀みうるに至るならむと存じ居候。

小生澁民に來てより自分の意志を試驗致居候、煙草は刻煙草だけにし、朝は五時前に起き、極度の粗食に堪へ候、等些末の事より、日常注意致し居候ふに、人間は氣の持ちやうにて如何なる事にも忍耐が出來るものなる事を發見致し候。

小生は二三年を北海道に過して見んとの志望あり。

去る十三日は舊暦六月二十四日にて當地愛宕神社の例祭、夜は盆踊有之候ひしが、小生は思ふ

存分大に踊り申候。孟蘭盆が待遠しく候、千古の格言あり、曰く、「諸民の盆踊は人生最大の快事なり。」投稿を望むとて或る田舍雜誌より三錢切手封入の手紙參り候ふに、その切手を利用してこの亂筆を敢て致し候、草々頓首

啄木生拜

迷宮大兄 御侍史

御令弟へよろしく乞御鳳聲、

×

拜啓

再々御セツキ申す樣にて誠に心地恥かしき次第に候へども、今月分の、本日頂戴いたし度存候が、如何に候ふべき乎、別紙受領證差上候に付、何卒御願申上候、それから、米箱の窮乏にかてゝ加へて、過日丸善書店へ代金引換便を以て注文いたし置き候ひし書籍も明日あたりはくる筈に相成り居候次第に候故、誠に申兼候へども、去る二十一日參上の際、金二圓の內借證差上置き候ひしが、別に何月分俸給の內よりとも記入せざりし樣記憶いたし居候が、若し出來うる事ならば、アレを來月分の內へ廻し、本日は受領證記載の金額全部頂戴いたし度く懇願に堪へず候所、如何に候ふべきや、何卒特別の御憐愍を以て御寛典の御取計らひ被下度、伏して願上候也

二十九日「月不詳」

石川一拜

駒井村長閣下 虎皮下

明治四十年

×

先夜はいと夜ふけ候ふ頃まで御書見の御邪魔いたし御申わけ無之候、待てど〳〵咲かざりし何とかいふ片假名名の鉢の花もよく、かへりの戸口の白根葵、大き葉大き花、色のいづれも淺かりしが殊更になつかしく、御話のさま〴〵と共に思出して、今日も猶心新らしく覺え候、偖て私事、昨日にて商業會議所の方御用濟と相成、今日より閑散の身と相成候、松岡君は既に役所に出られて、机二つの此室、只今私一人に候、吹く風磯の香誘ひ來よと開けたる窓より、隣りの小學校の唱歌の聲頻りに聞え來り候、この聲は、過ぐる一歲の間、口に云ひがたき滿足に居し代用教員の生活を忍ばしむる事少なからず候、漂泊の兒は、事々に故鄉を忍び候、諸民の五月六月は一年中の最も樂しき時、かの杜やいかに、かの川いかならむなど思ひ候へば、うら若きみちのく初夏の天地、さやかにも幻に立ちて我が涙を誘ひ候、鄉校の風呂、いと風流にて、屋根といふもの設けず、晝は雲を夜は星を心のまゝに見る樣に出來居候ひしが、去年の丁度今頃の事、宵暗に灯を遠ざけて、用もなき宿直の夜の心安さ、一人湯の中に身を浸して物思ひ居り候ひしに、折から校後の森の青葉の中より月のぼり候ひければ、あまりの風流に何事も忘れて、一時間半許りも打過し候て、名をよべば雨の日も風の日もアイと答ふる老小使にいたく心配させし事も候ひし、思出さば數限りもなし、一昨日、頭病みて勤めの方休み、拜借の、少年行、讀み候ふ時も、みづから教へし兒等を目の前に見る樣にて、又この身の稚かりし日さへ思ひ合され、離れてのなつかしさほど悲しきはなければ、心のまゝハンケチ濡らし申候、子供らしとお笑ひ下さるまじく候、人、とは大きくなれる子供の謂と私は恒に信じ居候、社會といふペンキ屋の手にかゝつて、子供らしさを全たく隱

して了ひ候ふ大人は、決して私の所謂、人、にはこれなく候、この子供らしさは、私白髪になるまでも是非持つて行きたく候、いらざる事書きつけ候うて大切の用忘れ候、アノ入社の辭、何卒小さい活字になし下され度奉願上候、大きい活字を喜ぶ時代は、私まだ年若く候へど、既に過ぎ申候、却つて今の私、心苦しく候、或る手段としてとやらのお話も候ひしが、それは失禮乍ら千古のお心得違ひに候べし、私の名そんな役になどか立ち候ふべき、雜誌は賣るべきもの、これは定義也、弘く賣るには別に手段も方法もあるべく、私も少しは考有之候、これはいつかお話も可致候、兎も角も入社の辭の大きな活字だけは御免下され度候、他鄕に居て職を失ひ候ふ心地は、故里の百姓家の一室にひとり殘り、賃仕事などし給ふ六十の母を思ふにつけて、いや更に深きを覺え候、早々

水無月一日

啄木拜

大島經男様　御侍史

×

啓

お別れしてより既に十二日、暑さが日增に加はつて、僕の原稿紙稿の單衣も餘程キタナク相成候、其間、天下無類の電報一通、ハガキ二葉、封書二通、其最後の一通は只今拜見仕候、然も僕の方で書くのが今初めて也、怠けたるかな怠けたるかな、怠け候ふ理由は後文を讀んで御自得被遊度、僕自身では御無沙汰の御申譯などと人らしき顏は不致候、

兄に別れての夜は、總勢にて、市をひやかし乍ら歸り候ひき、浮出しの蟹の模樣ある土瓶一つ、出刃庖丁一梃買ひ求め候ふに、白鯨君ガラにもない元氣にて値切ツてくれ、五錢だけ儲け候、其場の光景思出しても滑稽に候、値切ればまけるとは、何と世の中の事面白く候はずや、此夜白鯨君手本を示して後、世の中が不正直だから僕等も大に不正直にやらうと云ふ事に、我等一同以心傳心に一決、其後僕が或る古道具屋にて食卓一臺購ひ候節、早速舶來の不正直をふりかざし、一圓二十錢といふのを九十錢に負けらせ、空前の大成功をいたし候、呵々、此風で行つたら、早晩僕等も藏を立てる樣になるかも知れずと心配いたし居候、

翌二十八日の夕方、並木翡君まゐり、入口にて立話致居候處へ〒脚夫が來て、石川タクボクといふのは此處ですかと申候、然りと答へ候處、何故表札を出して置かんかと叱りとばされ、こゝに書いてあると威張り返し候ふに、あひにく硝子戸は開けて置いた場合故、外からは例の石川啄が見えなかつたのに候、僕大いにテレテ、一體何用ですと申候に、一通の電報を渡し、名刺なりとも貼り附けて置かなくちやいかんと捨臺詞を殘して退參いたし候、サテ手に殘ツたものは幾何見ても電報也、電報といへば直ちに非常事件を連想する僕の非文明的な頭腦は、少なからず狼狽いたし候、剩へ發信人はミとあり、僕の妹の名の頭字もミに候、不取敢封きつて見候ふに、恁麼長い電報は僕今迄見た事なし、一生に唯一度といふ文句がすぐ目につき候、流石の僕も目を皿の如くせざるをえず候ひき、一度讀んで何が何だか不可解、二度目にはハハア歌だなと解り、。ミも光子のミではなくして宮崎の。ミなる事判明いたし候、然し電文に間違ありたるため、其道に通曉せる白鯨君の說明をうる迄は、仲々意味がとれず候ひき、但し、大不平の何なりしやは、其後兄のお手紙で大笑ひする迄は矢張想像もつか

ず候ひき、電文は左の如し、曰く、

一セウニタタ一ドミルフンマン六コトニ
アリヌヲカシカラスヤダイフヘイコカゲ
ヲセヲムネンミナイルレトモユルナツト
ニクニム

岩見澤の和田氏には早速雜誌發送致させ候、

原稿不足にて三十一日に締切るをえず、翌日も矢張駄目、但しかの寫眞は一日の夕刻に出來上り、又同日日高國下下方なる大島氏より手紙まゐり候ひき、大島氏の共同運輸丸はアノ日の翌日の午後三時になつて初めて出帆したる由、アキレ蛙とは此事此事、

二日の午後八時には、僕玄海丸の一等船室に在りたり、此行並木君の周旋による、一等室の美美しさには、僕少なからず浮れ出し、遂々柄にもなく葡萄酒を飲んで、一人で天下太平をキメ込み申候、但しボーイにコンミッションをやつたので左程の失敗も不致候間御安心下され度候、翌三日午前三時拔錨、九時青森上陸、十一時汽車に乘りて、車窓より初めて蟬の聲をきき、又青田の風を吸ひ申候、感多少に候ひき、小湊驛に下車して、中學校時代よりの友、今度岡山のハイアースクールを卒業して來た瀨川藻外を訪ね、燒くが如き炎熱に汗流し乍らビールの杯をうち合せ、夕刻再び車中の人となりて野邊地に下り、凹凸極まりもなき道を腕車にゆられ乍ら、常光寺と申す禪院にまゐり候、八十二歳なる老僧は乃ち我が伯父君にして、父も此處にあり、老母は僕よりも早く着し居候ひき、其夜の心地は宜敷お察し下され度候、翌早朝母と共に出發、青森より石狩丸の二等客と成り、海上極めて平穩、僕も母も平氣で晝飯も濟し、午後四時無事歸函。これにて僕の身邊漸やく少しく纏まりがつき申候、歸り來て當惑いたし候ふは、原稿がまだ出來て居なかつた事に候、

翌五日長きお消息うれしく拜見いたし候、目のあたり逢ふ樣にてホントに嬉しかりし、麥酒の如く味なく、洋服の如く窮屈なる御生活はお察し申上候、出發の前夜の出來事特にお知らせ下され候ふには、人事ならず思はれ候、我等は何日までも今の樣に、悟つた風の顔付などはせず、人生の深き〳〵匂ひと味ひに醉うて居たきものに候……何だか理窟めいた事が云つて見たくなり候、然し今日はやめる、

人の原稿を作りかへて長くしたりなどして、昨夜一先大體の編輯を終り、今日午前小野活版所に渡してまゐり候、十六日に發行の豫定に候、實際今度は苦心致し候、兄の歌、あとにて熟讀低誦いたし候ふに、想は獨特也、但し其想の云ひ現はし方が少なからず横路に踏み入れるの恐みあり、兄にして一旦此横路から出て本道を行かれたならそれこそ大變なことになるべく候、矢張近頃の作風を少し御參考迄に見らるるがよからむ、兄がそんなことで怒る馬鹿でないことを承知の僕故、同人と鳩首して苦心の結果、縱横にナヲシ候、名前は生田白桃に致し候、

社の前途について大に考ふる所あり、口先だけの發展は到底效力なき故、今度愈々積極的方針を取ることに致し、既に同人及び澤田氏等の贊同をえ候、今月の號にて豫告する筈に候、兄も無論贊成して下さる事と信じ申候、第一は、基金募集の廣告を雜誌に出して區内の金持を說き廻る事、第二はその金を初めから無いもののつもりにて、九月十五日紙數百頁以上の特別號を出し、爾後引つづき定價十五錢に値上の事、十月以後も毎號六十頁以上の事、社友(男も女も)をつのる事、九月の大冊發行後四五日にして例の音樂會をひらく事、雜誌は部數を多くし、先づ第一に東京へ百部、札幌小樽へ各三十部販路を擴張する事、……等に候、若し金が少しも集まらなかつたら、今迄通りで

繼續し音樂會だけやる事、そして兄の歸函を待ッて例の「北海少年」を初める事、
成功したら大に威張る事、
失敗しても大に威張る事、
僕にはこれでも仲々元氣がある。
特別號に原稿集まる豫算あり、若し集まらなかつたら僕一人ででも百頁二百頁は書く。君も三十一日迄に是非何かかいてくれ給へ、卷頭にはイブセンの社會劇でも一つ譯して出さうかと存候、兎に角大に氣を吐かむとする也。
計畫だけでも痛快に候はずや。

只今小樽の姉の許に居り候ふ妹より、脚氣にて轉地の必要あり、九日の朝七時行くといふハガキ參り候、噫君々、世の中〳〵、この狹い家に四人とは、サテ〳〵夏は暑苦しいものに候ふかな、お天道樣は僕を餓死せしめる譯でもあるまいが…　桑原々々、
岩崎君の脚氣は兄の藥にて大方よし、吉野君の細君の一件は今日か明日かと待ち居候、十日前ならむ、妻も健全、京ちやんは日每に可愛くなる、頓首、八月八日午後三時擱筆

啄木生

郁雨大兄　御侍史

お別れの間際に申上げし事、是非々々御決心あらむ事、心より祈居候、
姉君へのお手紙は既に投函致させ候、
妻よりよろしくと申出候、

×

今迄の御無音は罪萬死に當る、實は其後其日其日に心變り、筆とる心地にならざりし故に候、實際氣儘な話に候へ共、性分と思つてお許し下され度候、月の初め津輕の海を渡つて野邊地迄行き老母をつれてまゐり候、間もなく小樽にありし小妹も脚氣で轉地といふ名で其實矢張り自分の家庭が戀しがつてまゐり候、一家かくて大に賑々しく相成候ふに從つて小生の病的反逆心の發作も稀になる樣になり候へど、これ或は家庭人を殺す所以なるやも知れず候、いのち！　いのち！　いのちの發展が休息した時、世界滅盡の夕が來るべく候、少なくとも自分は「人らしい顏」の男になるべく候、小生は死なぬ覺悟に候、何をいつてるやら解らず、
十八日より感ずる所あつて日々新聞社に入り、大に面白がり珍しがり居候ひし所去る廿五日の夜に、小生らの當地に於ける一切の企畫を灰燼に歸せしめ候、既に通信をえられたる事と存候が同夜十時二十分東川町より出火、折柄の猛烈なる山背に煽られて天下無類の壯觀を極め六時間にして、函館五分の四、戶數一萬五千を燒き盡し候、ナント〳〵、小生生れてよりアレ位ハンドルングの雄大にして悲壯を極め、且つ意味甚深なる芝居を見た事無之候、光景は何人も形容すること能はじ、火なる哉、火なる哉、函館の根本的革命は眞赤な火によつて成し遂げられ候、殘れるは多く云ふに足らぬ貧乏町に候へば、先づ以て過去の函館其物が世界より燒き飛ばされたりと思召被下度候、一夜一億圓の仕事とは一寸人間共に出來ぬ事に候、刻一刻に自然に背ける函館が、一本のマッチによつてペロリと消えて了つたなど、惘れて物がいへず、自然が營む深刻なる滑稽は之也、混雜といへば混雜、慘狀といへば慘狀、實に人間の語でアノ夜の光景は云ひ表されぬに候、狂へる雲、狂へる風、狂へる火、狂へる人、狂へる巡査、狂へる犬、イヤハヤ、アノ狂へる雲の上には狂へる神が狂へる下界の物音に浮氣を起して舞踏でもやつて居た事に候ふべし、狂はざりし者は、家内の狼狽を鎭めむと火

事最中に盆踊をやつた小生位のものに候ふべし、實にこれとても第三者から見たら狂へる盆踊なりしやも知れず、學校で殘つたのは住吉東川若松高砂の四校、アトは皆燒けたり、女學校など兩遊廓と共に一つも殘らず、役所で殘つたのは區役所稅務署裁判所測候所稅關米國領事館の六、アトは支廳も黑犬の警察も郵便局も英露領事館も何もかも灰、新聞は北海一つ殘り候、銀行も皆やけ郵船會社など倉庫諸共昇天、家を失へるもの六萬餘、大抵は學校とか寺院とかへ入り込みたり、區役所で黑い握り飯を喰はせ居候、同人では並木君全燒、同君アノ夜當直にて、大働き、暑くて居れなくなつて舟に乘りて逃げしに舟やけて沈沒、海中を泳いでとうとう「助けて吳れ」と呼びし由、艀に助けられて翌日は死人の樣な顏色、小生の所で飯食ふ迄は生きた人と思はれざりし、貴下の居られし林中の家は、下の遺愛のお婆さんの家はやけしもとうとう助かり候、小生も午前三時頃まで市中を飛んで步き候ひしも靑柳町が二方面から火の手に攻め立てられし故、不止得公園裡の松林に老母や小兒をやり一番おくれて道具も持ち出し候ひしも運か不運か燒け殘り、人が燒けた時自分がアンケラカンとして本を讀んでゐるのも氣の毒に候、白村白鯨兩君とも矢張燒けず、函每にやり置き、未だ同社の都合にて印刷せざりし第八册の原稿全部羽化昇天、紅苜蓿は矢張り貴下が居られなければ生きる事出來なかりしと見え候、これにて函館區と運命を共にし世界より消え去り候ふ事と思召下され度候、

區民の一割は既に小樽方面及び內地へ向けて尻に帆かけたり、永持輕口先生も燒き出されて早くも東京に退却、然し火事は面白い者、末廣町の豪商も銀行の頭取も何もかも、寢卷に兵兒帶のまゝで逃げ出せし事とて目下の所小生等と同等にて火事は財產よりも主として階級を燒きたる樣に候、神は平等を好み給ふなり歟、兎も角函館はモハヤ今迄通りに恢復の見込今後十年間はなかるべく、小樽益々全盛なるべし。當地にては我々の企畫一分一厘も希望を剩さず、一昨廿七日向井君道廳より出張にて來られ候、同君の家もやけざりし、同じ日午後四時大隅丸にて松岡君歸函、日ン玉を白黑せられ候、茲に於て相談一決、

苜蓿社同人は本年中に札幌に引上げの事！

向井君は明後三十一日數通の履歷書を携へて歸札せらるべく、松岡君は矢張同日頃一先づ小樽の知人の許へ避難せらるる筈、（因に同君は兎も角故鄕の方片附けて一人で來られしに候）小生は向井君の運動效を奏し次第先づ第一に札幌に入り雜誌の準備に取かかり、出來うべくんば新聞を一つ占領して後日の用に供すべく、其次は吉野君細君の御產　今迄延引）が濟んだら矢張單身出札、細君と子供らは半年間仙臺に歸す豫定、（同細君は琴の名人故仙臺で半年復習して來て札幌で琴の樂堂をひらく筈）岩崎君は九月局の方で判任官になる筈の由故、その上にて出札の事、並木君はまだ家の方ではアンコの地位にて自由がきかぬ故離れてゐて援助の事、雜誌は必ず來年一月迄に出す事、萬事積極的方針で今度の火事の如く暴れ出す事…以上は集つて正式に相談した譯ではなく候へど、この六疊室で決せられたる善後策の要項に候、敗軍の將は馬から落ちても意氣に變りはなく、軍配團扇のカケ引き穴可賢、

目下一番困り候ふは、米屋もやけ炭屋もやけ通帳ドレもコレも用をなさず、立秋に入りて既に二旬、懷中秋風にて物價騰貴、スキな煙草もロクにのめぬ一事に候、實際今後は燒けぬ者の方が萬事恩典洩れにて困るべく候、この點から考へても燒けた方が痛快なりし者をと愚擬申候、呵々、

サテ街をあるけば方々にて、自分が一寸でも教へた生徒に逢ひ、聞けば大抵焼けたと申候、小生無暗に無暗に……

光明の裏面に暗黒あり、浮氣の後には後悔が來る所以、昨日一日の雨にて全市の焼跡劫初の寂寞にかへり申候、出でて望めば宛然死の都也、戰後の光景とはこんなものにや、實に名狀しがたき淋しさに候、蓋し函館は死したる也、死んだ都を御覽になりたくば、否々、世界一の名優のやつた大芝居を見なかりしが殘念に候はゞ、この焼跡見にお出なされ度候、魚油肥料の倉庫今日にいたるも猶煙を絶たず候、草々頓首

四十年八月二十九日夜

啄木拜

大島經男様 御侍史

(記し殘し候、万平君の臥龍窟も焼け申候、見舞にゆき候處、焼跡より何か拾ひ居候ひき挨拶例の如し)

×

今朝湯屋にて綱島梁川先生の訃音を載せたる新聞を讀み、變な氣持になつて歸り候ふ處、習志野へゆくといふ吉野君のハガキ參り候、君、君、君、「今度の電報はいよ〳〵最後なるべければ顏を見に行くにて候」といふ文句を讀んで、小生どんな心地したか御察し被下度候、人の居ない處へ行つて一人泣きたく相成候、函館が無暗に戀しく成り候、歸りたく候、何とかしたくなり候、今朝程同室の虚僞子の顏の癪にさはつた事無之候、無理ではなく候、御察し被下度候

吉野君の事は何と書けばよいか解らぬから書かぬ事にする、願くは僕と二人前、吉野夫人を御慰め被下度候、失禮かは知らぬが、僕の代理をつとめて貰ふ人君の外に無之候

今日は小生入札以來初めて好天氣に候ふに、何とした厄日に候ふぞ

殆んど書く事が無くなり候、否々、まだ書く

一昨日小樽なるせつ子より手紙參り候、焼跡出發の際に於ける諸兄の御親切詳しく書き越し候、小生は何と云つて御禮すればよいか解らず候

御禮のかはりに一つ君に喜んで貰ふ事が有之候、喜ばしい事かどうかは知らぬが、自分は喜んで貰ふつもりに候、外ではなし、小生が今迄餘りに生活とか其他のために心を勞して自分の本領を忘れむとして居た事を自分自身で自覺致し候、忘られたる文士? 否、自分で忘れむとしたる「誤れる天才」は今はかなき眠りより覺め申候、我が天職は矢張文學の外何物でもなかりき、此の「復活したる自覺」によつて如何なるものが期待されうるかは疑問とするも、兎も角小生自身は今再び新らしき心地にかへり申候、小生は右の報道を成すをうるを目下、少なくとも目下に於て、何よりの樂みと存候

住吉學校の廊下で腰掛の塵を拂つて僧服めいたものを着た君と話した事が頭に浮び來り候、せつ子が戀しく候、京子も見たく候、それから出立の日乃ち吉野君の御喜びの日、同君が「今盛んにやつて居ます」といつて炭の粉だらけの手を流しで洗つて居た樣が目に浮び候、又橘訓導が茶を汲んで出す時の手つきが思出され候、函館百二十日間の短生活が、小生にとつて甚だ有意義なりし事を君と吉野君と皇天に向つて感謝致候

札幌は詩人が一生のうち一度は必ず來て見る價値ある所に御座候、「靜けく大なる田舍町」と評せば最も適切なるべくや、四邊の風物が何となく外國風にて風俗も餘程内地ばなれがし、そして人は皆日本人なるが面白く候はずや、停

車場の前通りなるアカシヤの街樾の下をゆく人
くる人皆緩やかなる歩みを運び居候
社の小國君は純正社會主義者に候へど赤裸々
にして氣骨あり眞骨頭あり、我黨の士に候、新
聞は今正味六千刷り居候が、整理其路を得ず
財政の方は困難にて、給料など仲々期日に拂ふ
ことなく、現に先月分がまだ渡らぬ由に候、
妻子呼び寄せも少し考物に候、今度出る小
樽日々新聞の三面主任にならぬかと小國君申し
候故、よい様に取計つてくれ玉へと申置き
候、小生は萬事自然の力に任せるつもりに候、
これは小生の處世法として最もよき方法なる事
は兄も認めらるるならむ、雜誌の方の事は未だ
見當つかず、出しうるものとすれば小樽で出す
も札幌で出すもさしたる相違なからむ、何れこ
の事については更に熟考致すべく候、君、母
君及びおこうちゃん秀ちゃんによろしく御傳へ
被下度候、秋の日ホカ〳〵と障子に照り、頭
がボーッとして參り候間擱筆仕候

九月二十日朝

啄木拜

岩崎兄御侍史

吉野君の夫人へよろしく頼みます、
松岡君はまだ無官の太夫、白石村といふ
ところの役場に口があるか、未だきまら
ぬ。多分ダメならむ、黒石へ手紙やつて
金送らせると申居候
並木君へ明日手紙かく

北門に歌壇起したよ

×

先日は唯無暗に世の中情けなくなりて悲しきハ
ガキ書き候ひしが、今夜は大に元氣を以て此
筆取り上げ候
同宿の松岡君より來る三十日頃兄札幌に來らる
る由承はり申候、何ともいへず心賴もしく
待たれ候、その時までにはこの六疊間が僕と
せつ子と京子と三人の家庭になるのに候　豚
汁でもつついて大につもるお話致すべく候
小生當地に入つてより、後に殘りし一家は十六
日に燒跡をひき上げて小樽なる姉の許に落ちつ
き居候ひしが、今朝せつ子一人一寸參り、四五
日中に來札の事にきめて只今六時四十分の汽車
にて歸りゆき候、母や妹は當分妹の許に
居る筈に候
さて北門の方は貧乏にて駄目なる事昨日も今日
も變らず、然し少なくとも來月十日頃迄には別
の方にやゝ割のよい口出來る筈に候、乃ち北
海タイムスに入るか、然らざれば今度新らしく
山縣勇三郎氏が起す小樽日々新聞に入る事とな
るべく候、成るべくなら札幌を離れ度ないと
存居候へど、所詮はこの高低によるべく、又
新らしき新聞は萬事に面白かるべく候へば、今
の處どちらとも解らず候、兎に角小生の身が
生活上少し工合よくなるべきは事實に候、
何卒御安心被下度候、小樽日々にゆくとすれ
ば三面の主任といふ役目の由、タイムスでも校
正子でなく外交係でなく、いはゞ遊軍の地位
になるべしと存居候
小生は更に一の喜ばしき新報道を兄に向つて書
きうるを悦び候、そは外でもなし、今迄小生
は生活その他のために心を苦しむる事多く、
何日となく自分の天職を忘れむとする様の傾向
有之候ひし所大に感ずる所あり、生活の方
は命さへ續けば薯喰つてもよしといふ意氣込に
て今後は大に「復活したる自覺」を以て文學の
ために努力する決心を起し候、小生は樂天家
に相成候、人は仲々死ぬものに非ず必ずどう
かなるもの也といふ信仰を以て、大にやるべく
候、この第二回の覺醒が小生のため決して安

價なるものに非ざるは兄も諒とし玉ふならむ、天下初めて太平也、何卒御安心被下度候、「札幌」なる「大いなる田舍町」は盛んに小生の氣に合ひ候、妻も大に札幌說を主張いたし候、實際札幌は詩人の住むべき都と存候。
萬事は御面晤の時に讓るべく候、京子頗る健全、這つて步く樣に相成候
向井君親子三人及び松岡君共にこの一家にあり、宿の主婦は親切に候、松岡君について函館の同人は大に不滿を抱き居れり、この事はお目にかゝる日にお話し致さんか
旭川は隨分寒いでせう、ヌタップカムシュペ山に降雪もありし由、然し馬の手入を卒にさせる見習士官殿は左程苦しくもなからむなど想像いたし候、草々

〔九月〕二十一日夜　　啄木

郁雨大兄　御侍史

×

今日かはたれ時の薄暗がり時、驛夫に牽かせたる大八車を先立てゝ中央停車場の驛長官舍を出で、こゝ名も優に美しき花園町の、トある南部煎餅賣る店に移り住みたる男女四人有之候、四人の一人は小生にてあとは母とせつ子と可愛き京ちやんに候、室は二階二間、六疊と四疊半にて何れも床の間あり、思ひしよりは心地よく候、貸家貸間拂底の當地にてかゝる贅澤、小生にとりて[illegible]なる室を見つけ候ふは全たく天佑なるべく候、襖一重にて奥の隣座敷には咳拂ひ嚴めしき賣卜者先生御本陣を構へられ候、されば此家の入口には

姓名判斷

と記されたる大なる朴の木の看板かけられ居るは申す迄もなく、若し小生例の藪醫者めいたる一張羅の紋附羽織きて此家より出つ入りつ致し候はゞ、近隣の人は多分姓名判斷氏の新弟子とや評し候ひなむ、小生今迄隨分樣々な人間とも交り候ふ事の候へど、賣卜先生と襖一重に住むなどは、天の配劑殆んど其妙を極めたる次第にて、神意忖るべからず、ひたすら感恩仕候
早速せつ子と共に買物に出かけて洋燈火鉢箒花瓶炭入など買うて參り候に、程なく雨ふり出で候、ふり出でたるは秋雨に候、聞ゆるものは隣室の咳拂ひと淋しき雨の音のみに候、行李やら鐵鉢やら蒲團やら洗面器やら、雜然として堆かき室の中程少し取片附けて、小さからぬ火鉢に御存じの鐵瓶松風の音を立て候、明るき吊洋燈は靑柳町にて求め候ひしのより立派に且つ派手に御座候、「わが家庭」といふ云ひ難く安けき滿足は、今名殘もなく小生の胸に充ち滿ち居候
夜通りの金棒の響きこえ候、函館のより忙しく候、總じて小樽は忙しき市に候、札幌に「都」の字を用ゐ候ふ小生は、この小樽をば「市」と呼ぶの適當なるを覺え候
サテ兄の御ハガキと廻送し下されたる郵便物今朝拜見致候、それ前の長き〳〵御手紙は札幌を立つ日の朝に拜しまゐらせ候ひしが、詳しく御報らせ下され候ふ吉野兄の事、何と申す言葉も無之候、誠に何とも申し樣なく候、御察し下され度候、同君の留守宅をば小生の分の二人前御見舞下され度候、浩介君健かなりや否や、奥さんの產後何ともなかりしや、小生は實際毎日の樣に思出しては空想致居候、現在の小生には、故鄕よりも何處よりも函館が戀しく候
木立の都、秋風の都、美しき戀の澤山ありさうなる都、詩人の住むべき都なる札幌を見捨て候ふ事、小生にとりては實に由々敷損害に

有之候、然しこの事は何卒御追究下さる間敷候、北門新報の校正子よりは小樽日報の遊軍の方月給が大枚五兩の相違に候、しかのみならず社長も主筆もどんな譯か小生の言に耳を傾け一二ケ月の後には報酬もあげるなどと申居候、悲しき事に候はずや、然し小生をして小樽に入らしめたるは別に二つの原因が有之候、一つは此度の社が創業時代――萬事自由にして然も無限の活動を豫期しうべき時代たる事に候、今一つは札幌に居て遂に松岡蕗や亡國の髭を蓄へたる向井君らと朝夕を共にする苦痛――我と我が魂の腐蝕しゆくを感ずる不快の境遇――に堪へ難かりし事に候、向井君は好人物には相違なく候へど、畢竟するに時代の滓に候、最も淺薄なる自暴自棄者に候、詮じつめれば胸中無一物の人に候、小生は衷心より一切の勇氣を消耗し盡したる人に候、向井君に同情致居候へど、然し一度共に語れば何といふ理由なしに一種の不快を禁ずる能はず候、この不快は然し、要するに人生の最も悲慘なる「平凡なる悲劇」に對し、小生の精神が起す猛烈の反抗に外ならず候

社は新築の大家屋にて、萬事整頓致居、編輯局の立派なる事本道中一番なる由に候、活字の如きも新らしきもの許り三十萬本も有之、六號だけにて九千本と申候へば、資本の潤澤にして景氣よき事御察し下され度候、資本主は山縣勇三郎氏にて、同氏の令弟なる當地中村組の中村定三郎氏の手許より請求次第金はいくらでも出る次第に候、實際の理事者にして社長の名義を出し居るは白石義郎といふ道會議員にて、財産もあり又釧路新聞をも持ち居る人に候、年に一萬位は捨ててもよいといふ道樂半分の新聞とは面白く候はずや、野口雨情君も入社せられ候、至極温厚にして、謙遜家としては日本一なるべく、天下一の好人物と保證仕候

初號は十五日に（二十頁以上）發行、同日披露會をひらき、一週間休刊、二十三日より毎日六頁にして出す筈に候、鐵道の無賃乘車券下附になり候はゞ、時々函館に遊びにまゐるべく候

八九日頃までに初號の分何卒玉稿御惠み下され度願上候、この件並木君小林君等へもよろしく願上候、澤田氏御病氣御平癒に候はば、これ又何卒よろしく御取入り被下度願上候、社に於ける小生の地位は頗る好望に候間、恥かしい乍ら御安心被下度候

宮崎君は十一月歸函の際小樽に三四日遊ぶべき旨本日手紙參り候、待ちこがれ居候、出來うる事ならその時一緒に函館へ遊びにまゐり度存居候

妻眠さうになり候故今夜はこれにて擱筆仕るべく候、大島君は仰の如く都會に隱るべき人なるべく候、アノ人も矢張悲しく痛ましき人の一人たるを免れず候、母君おこうちやん秀ちやん弘さんを初め澤田氏御夫人吉野君の奥さん並木君等へよろしく御鳳聲被下度候、此方にて老母とせつ子よりよろしくと申出候、雨の音しきりに、京ちやん目をさまし候、草々

四十年十月二日夜　　小樽にて

啄木拜

正様御もとへ

×

大島先生　御侍史　　　啄木拜

御なつかしき三日附の御葉書、函館より廻送をうけて去る八日夕落手、うれしさ限りなく初めて心を安んじ申候、心を安んじ候と申さば、嘸かし何の故にかくも借遞の事を云ふにや

と御不信も可有之候、サテ何より先きに書き初むべき乎、先づ〳〵ズット遡りて丁度一月前の事より順々に申上べく候、

天の火に燒かれたる函館の燒跡にはよい加減に見切りをつけ、札幌に乘り込むべき事は、八月中に差上げし手紙に記しまゐらせ候ひし樣記憶致居候、九月になりてより向井君より手紙來り電報來り、頻りに促がされて、遂に十三日の夕七時、星黑き燒跡の臭ひ吹く秋風に送られて、私事短かゝりし青柳町百二十餘日の生活を切上げ、飄然として一路北に向ひ、翌日アカシヤの街樹に秋雨蕭やかなる札幌には入り候ひき、不取敢北七條なる向井君の宿に腰を下し、翌日よりは月給十五圓、北門新報の校正子に出世致し、家内共は私より遲れて十六日に函館を立ち、小樽の姉が許に當分厄介になりて、札幌にて貸家見つけ次第呼びよせる筈に相成候ひしが、函館の火は此處に迄影響して市中殆んど一軒の貸家なく、札幌てふ美しく靜かなる北の都に入りての初めての當惑は此事に候ひき、越えて十七八日の頃、並木君より手紙來て、大兄に宛てたる岡君及び岩崎君の手紙共に「本人行先不明」と附箋されて歸りたる旨申越し候、其翌日は小生が函館出立の前日投函したる葉書矢張同樣の附箋にて舞ひ戾り、二三日して、札幌着を御知らせしたる葉書亦同樣の運命にて歸り來り候ひき、誰に問へども一向相解らず、さうかうする間に向井君の葉書も舞ひ戾り候、一切の情誼を自ら御拒み遊ばされ候ふ大兄も願くは此際に於ける小生共の心中をば御諒察被下度候、東京に御出なされたるには非ずやなどとも話合ひ候ひしも、何しろ行先不明とは無限に末廣き扇の樣にて、數知れぬ人の世の路々、何方と定むべき由もなかりしに候、斯く申さば餘りに世俗的な心配の仕樣と御笑ひも可有之候半乎、兎角するうちに只今の社へ口かかり校正が天職でも無ければと早速承諾し、滯札僅か二週日にして、二十七日の夕、向井君の猫箱の如き四疊半にて汲みたる別盃の醉未だ醒めぬうちに此小樽には參り候、木立の都、秋風の鄕、しめやかなる戀の澤山ありさうなる都、大いなる田舍町に似て物となく靜かに住心地よき札幌に別れ候ふは、小生に於て決して樂しき事には無之候ひき、然も十五圓の校正子より二十圓の記者の方が、貧乏に倦み果てたる小生には好もしかりしに候、且つ小樽には家内共も居る事なり、又、豫想外に氣の合ひたる野口雨情君も共にといふ譯故、「俗惡の小樽」といふ代りに「活動の小樽」と呼ぶ事にしてこの惡泥の市に入り込みしに候、

問ひ合せ置きたる手紙の返事追々諸友より參り候ひしも、失禮乍ら大兄は依然として雲中の人に候ひき、一日に第一回の編輯會議を開き、二日に漸くこゝ花園町に人の家の二階二室借りて移り候ひしが、爾後本日に至るまで匆忙日夕を分たず、御葉書に雀躍してより既に五日、今日は今日はが遂今日までこの手紙延引仕候次第に候、

大兄よ、願くは小生の厚かましき言葉のふしぶし御寬恕下され度候、

御葉書にて御近況略承はり候、失禮乍ら悲しき思致候、田園の生活は大兄の所期と相去る百里千里かと察せられ候、噫、何と申してよかるべきか、大兄よ、願くは都會に御出下され度候、唯都會に御出下され度候、假令厭なこと山々有之候共、願くは都會に御出下され度候、

世に己が故鄕を慕はぬ人はなかるべく候、然し一度故鄕に歸りて日を重ね月を重ね年を重ね候はゞ、必ずや再び旅の空が戀しかるべく候、自然は人間の故鄕に候ふべし、人間のみの間に伍する凡百の不滿と煩瑣とは、人をして自然

を慕ふこと母の如くならしめずんば止まじ、然れども一度自然の懐に歸入して日を重ね月を重ぬるに從ひ、何人も或る煩悶を感ずるに至るべく候、こは自然若しくは自然の中に生活する比較的自然なる人間、乃至一切我以外のものに對する煩悶に非ずして、「閉塞せられたる我」が其閉塞を破らむとする心の反逆なるべく候、乃ち自發的のものにて如何に之を抑制するとも遂に其效なかるべく候、我無くば世に何物もなかるべし、我既に生けり、生ける以上は我既に有るなり、我既に在り、如何にして此我の我を閉塞し了り得べきや、

大兄よ、小生は理窟を云ふことは極めて下手に候、下手な理窟はやめに致候、唯願くは都會に御出遊ばされ度候、そして、人間なる私共をも友と御呼び下され度候、函館の埠頭にてお別れ致候時、風なき港の波をゆくらゆくらに行く艀舟の上、白の上衣着てうつむき給ひし大兄は、共同運輸丸に到り着くまで一度も私共の方をふり返り給はざりき、人に別れて悲しかりし事は幾度も有之候へど、あの時許り淋しかりし事は無之候、大兄よ、人は如何に一切と斷たむとするも猶遂に空氣には包まれ居るには候はざるか、アノ時の事は御恨めしい様な氣いたし候、私の申す事は多分御氣に障る點多からむと恐縮致候、サテこれから少しまた私の萬事申し上ぐべく候、この度の社は山縣男三郎氏が、收支相償ふに至るまでは年に一萬圓づつは捨ててもよしといふ隨分の大仕掛にて新たに起されたるものにて候、但し社主自身は別に關係せず道會議員にして釧路新聞の社主たる白石義郎氏が直接の經營者に御座候、別に政治上の機關といふでもなく、云はゞ道樂が六分でやるのだとは白石社長の言に候、社長は至極の好人物にて私如きさへ一點の不平無之候、以前は福島縣選出、代議士に候ひし人に候、初號は明後十五日に十六頁にして出す筈にて、其準備のため隨分目も廻し申候、編輯局は主筆岩泉江東外野口君、小生、他に四人にて現在は七人、まだ一名這入る筈に候が目下未定、小生初めは二十圓の約束に候ひしが、社長何の見る所かありけむ三十か三十五枚出すやうにすると申居候、野口君は三面、小生は二面の主任とか編輯長とかいふイカメシイ名のついた椅子に据ゑらるゝ由に候、現在は初號發刊まで臨時分擔にて一同大車輪にやり居候、主筆に對しては同僚一同大不平あり、小生なども可愛がられるけれども其動物的な人相はイヤでたまらず、野口君と共に目下種々企畫罷在候、小生の理想は遠からず編輯局に一種異様なる共和政治を布く事に御座候、只今二時の時計をきき候へば驚いて擱筆仕候、草々、

明治四十年十月十三日夜

明治四十一年

×

御ハガキ拜見せし時の嬉しさ!天が下家なき放浪の兒は北海の天に孤嘯して感慨多少。一家皆無事。京子は五六歩立ちてあるき候。

小生は明日午前九時出發釧路に向ふ。釧路新聞を擴張するためなり。途中帶廣を見てゆく。家族はこゝへ殘してゆく。委細は彼地より。今後の宛名は、

釧路國釧路港釧路新聞社内

一月十八日　　小樽花園町　石川啄木

金田一花明様

×

先日はなつかしき御葉書頂戴、尚又小樽の京子の方へも綺麗な繪葉書御恵み被下候由、うれしく〳〵御禮申上候。あの御葉書は小生が釧路に入りてより始めての東京便りに候ひし、お江戸の春の如月は、流石に早や梅の花などチラチラ綻びそめ候ふ由、五日目六日目に着く東京の各新聞見る毎に、「そちらの空なつかしく、あの小路を恁う行つてと、大學の通りから赤心館へ參る路をもよく思出し候。御卒業後の事は一向御動靜を詳らかにせず居候ひしに、新詩社の同人名簿にて初めて大學院に御出の御事承知仕候ひし、零度以下の寒さの國に居て東京の事を思ふは、失意の子が好運の人を思ふと相似たるべき乎、

此釧路が日本地圖の如何なる個所にあるかは、よく御存じの御事なるべくと存候。雪に埋れたる北海道を横斷して、二十一日夜當地に着し候ひしより、連日の快晴にて雲一つ見ず、此の方平原の上に雌阿寒雄阿寒兩山の白裝束を眺め候ふ心地に、駿河臺の下宿の窓より富士山を見たると大に趣きを異にし居候、寒は至つて少なく候へど、吹く風の寒さは耳を落し鼻を削らずんば止まず、下宿の二階の八疊間に置火鉢一つ抱いては、怎うも恁うもならず、一昨夜行火（？）を買つて來て机の下に入れるまでは、いかに墨を温めて置いても、筆の穗忽ちに氷りて、何ものをも書く事が出來ず候ひし、朝起きて見れば夜具の襟眞白になり居り、顔を洗はむとすれば、石鹸箱に手が喰付いて離れぬ事屢々に候、北グルと書いて逃ぐると訓む、北へ〳〵と參り候ふ小生は、取も直さず生活の敗將、否、敗兵にて、青雲の上に居る人の露だに知らぬ夢を、夜毎見居る事に御座候、

澁民の故園の一年有餘は、樂しく候ひし、あけて昨年の四月、郷先生としての掉尾の大活動をやり、自ら號令して破天荒な同盟休校を初めた爲め、首尾よくも免職となりて一家離散とは、舊道德の所謂天罰覿面なるべし、五月五日飄然として津輕の海を渡り、臥牛山下に足を留め候ひしが、三ケ月許りして漸く一家を再び其地に集め候ひし、函館はよき所に候ひし哉、青柳町の僑居は永く〳〵忘られぬ幾多の追憶を殘し候、商業會議所の雇、彌生小學校の代用教員、函館日々新聞の遊軍記者、とり〳〵に新しき經驗を積み候ひしが、天が墮落せる函館の區民に下し給ひし八月二十五日夜の火ほど凄じくも壯快なりしはなかるべく候、あの大火を見たる人に非ずば、眞に人間の言語の不完全なるを知りたりとは申され間敷候、幸にして類燒だけは免れ候ひしも、新聞社もやけ、學校もやけ、又、傍ら經營し居りし月刊雜誌「紅苜蓿」も、秋期特別號の原稿全部印刷所と共に煙となり、再興の見込なくなり申候、それにも増して殘念なりしは、友人の許にやつて置きし自作の長篇小説一篇、これ又烏有に歸し候ふ事に候、但し此大火によつて、深沈なる人生の活面目の一端を悟了したると、幾多新しき小説の材料を得たるとは、忘れ難き天の恩惠に御座候。

九月三日夕、燒跡の星黑き夜風に送られて、翌日札幌に入り、アカシヤの葉にはためく秋風、窓前の芝生に注ぐ秋雨に、云ひがたく珍らかなる「木立の都」の秋を愛で候ひしが、北門新報の校正係は決して愉快なる職業には無之候ひし、居る事僅かに二週日、小樽日報の創業に參加する事となりて、泥深き小樽に入り候ひしが、野口雨情君亦小生と共に三面子たり、十月一日第一回の編輯會議開かれ、同十五日初號十八頁出し候ひしが、何分、寄集り者の事とて、編

輯局裡に不穏の空氣充ち、所謂新聞記者許り多くて不愉快なりしまゝ、初號發刊以前より主筆排斥運動を起し、其ため野口君眞先に敵の首主にあげられ一同月末に退社、アトは小生唯一人にて奮鬪又奮鬪、十一月末までには最初八人なりし記者中主筆以下六人迄遂々斷頭臺に上せ、新人物を入れ候ひしが、寢食を忘れて毎日十五時間位も社のために働き候事、日報社最初の三面主任が功勞亦多大なるものと申すべきか、呵々、十二月中旬に至り、最後の根本的改革を遂行せんとせしも時機未だ至らず、社長氏が板挾みの苦境にあるを見るに見かねて、斷然退社、何と云つても出社せず、遂に生來の我儘を小氣味よく通し候ひしは聊か痛快に候ひし、但しそのため今年の新年は寔に新年らしからざる新年を迎へ申し候、日報は日本事業家中にても麒麟兒を以て目さるゝ山縣勇三郎氏出資し、前福島縣選出代議士にして目下當釧路を代表する道會議員たり、本道に於ける在野黨の主領たる白石義郎氏社長に候ひき、此釧路新聞も亦同社長の所有に候。

白石社長は度量海の如き篤實の老紳士に候が、嘗ては國事犯を犯して河野廣中氏らと共に獄につながれたる事もあり、又、眞理實行論一といふ急激なる自由主義の世界統一論を著したる事などもあり候ふ人なれば、胸の奥にはまだ若若しい革命思想を抱き居り、小生とは所謂支那人の肝膽相照す底の點あり、小生日報を退きしも小生を捨つるを欲せず、種々好意を盡しくれ候ひしが、五月の總選擧迄に現在の釧路新聞を擴張して釧路十勝二國を命令の下に置く必要あり、其擴張の大責任を小生に是非やつてくれよとの事にて、小生は釧路クンダリ迄流れてくる氣はなく候ひしも、情誼上止むなく承諾し、擴張の基礎出來次第日報に歸るも何處へ行くも小生の自由といふ約束の下に此度同氏と同道、雪の北海道を橫斷したる譯に候、

小生着釧の翌日、社は今回新築の煉瓦造の小さいけれど氣持よき建築へ移轉仕り候、現在の編輯局は前々よりの主筆と小生と外に二名に候が、早晩更に二三名增員すべく、新聞は目下普通の新聞より一廻り小さき形（三陸新聞と同じ）に候が、註文中の新印刷機及び活字着次第多分三月一日より普通の新聞に擴張し、引續いて六頁新聞とする筈にて、目下は現在の形にて二日置位に六頁出す事にいたし候、小生著任と共にまづ編輯長といつた樣な役にて、早速編輯の體裁を全部改め、毎日自分で一頁以上書くと云ふ俳談をやり居候、所が讀者より讀者感謝の手紙まであり社の關係、大に滿足しかけてくれ、讀者の中でをかしく相成候、實際やつて見れば新聞記者も面白いものに候、但し毎日一面に政治上の事、外交や經濟の事まで書くと聞いたら、大兄などは吹き出して笑はるる事と存じ候、呵々、滑稽はそれのみならず、四日許り前に當町愛國婦人會の支部の會合ありたる際臨席いたし候ひしに、無理に乞はれて辭する道なくなり、芝居をやる氣にて二十世紀の婦人といふ題にて一場の演說をやりて、少なからず釧路婦人を驚かし、翌日の新聞に其演說筆記を載せ候事など、殆んど滑稽の極かと存じ候、來る二日には社の新築祝として盛大な宴會を催す筈にて、準備委員長といふ名稱を頂戴した小生は、一昨夜徹夜して新築の福引二百本許り工夫いたし候、

釧路は案外氣持よく候、都合によつたら三月小樽に歸らずに二三年當地に居ることにし、家族ども三月頃呼寄せんかとも考へ候、これは社の方の要求にて候が、七分通りは小生も同意なり、社長は此間小生に時計買つてくれ候が、若し長く居る樣になれば、社で家を買つて小生を入れてくれる由に候、二三年居れ

ば、屹度今迄の借金をすまし、且つ自費出版やる位の金はたまるべしと存候、呵々、

今日は孝明天皇祭にて休み、

まだ〳〵澤山書く筈に候ひしも、釧路築港問題に關する有志協議會に出席すべき時間と相成候間、遺憾乍らこれにて擱筆仕候、文壇の事についても大に申上度事有之候、草々、

四十一年一月三十日午後一時　釧路にて

啄木拜

花明大兄　侍史

二白　アイヌには急がしくてまだ逢はず候が、當町より十四五町の春採湖と申す湖の近所に部落あり、道廳で立てたアイヌ學校ありて永久保春湖と申す詩人が校長の由、遠からず訪問して見るつもりに候　それから社長の所に、明治初年の頃何とかいふアイヌ研究者が編纂したアイヌ語辭典(但し語彙)の稿本(未だ世に公にせられざる)がある由、これもいつか見たく存居候、

小生が長く居る樣だつたら本年の夏御來遊如何、

中央公論のアレは面白く拜見仕候ひし、

今日以後の日本に、明星がモハヤ時勢に先んずる事が出來なくなつたと思ふが如何、自然主義反對なんか駄目々々、

お情を以て梅の花一つ御送り被下度候、

×

昨夜當町釧路座に催したる慈善薩摩琵琶會の際、釧路北東兩新聞記者合同し餘興として芝居三幕演じ候、小生就中上出來にて大に喝采を博し候、釧路は我儘の出來る所に御座候、

十日程前より、或必要のため每夕淺酌低唱の境に出入致し、藝妓三人許りに少し宛惚られ申候、酒は小さい盃にて十位は飲める樣に相成候、小生の方ではチットモ惚れ申さず候へど、そのため每日宿醉の氣味と急がしさの爲め、先日のなつかしき御手紙に對し、返事申遲れ御申譯なく候、釧路の藝者はお客を呼ぶにダンサンと申候、ダンサンは旦那樣の少しヒネクレタのに御座候、

釧路は小樽より萬事心地よく候、着釧早々種種調査いたし候ふに、將來隨分面白き事があるらしく候、殊に況や來るとすぐ「豆ランプ」といふ異名をつけられ、何處へ行つてもモテルに於てをやに候、社の方より悉々の話もあり、茲に意を決して一二年釧路の人たる覺悟いたし、來月あたりは家族も當地へ呼びよせる事にいたし候、何でも人間は多少に不拘我儘の出來る所に居るに限るものと信じ候、一二年居れば小生でも自費出版の資金位は何とかなりさうに候、六十迄は生きる決心故、少しも急ぐ必要なしと、乃ち何とかなる迄居る事にいたし候ふ次第に候、

大に君等と論じたい事山々あるけれども、時計は既に一時、隣室の鼾聲雷の如く耳に響き候間、それはお預りにいたし候、

三月中旬紙面擴張まではウント俗になつて釧路を研究し、然る後、專心創作に從ふつもりに候、

「北海道の人間」は益々面白くなり候、藝妓小静は下町式のロマンチック趣味の女にて、鏡花の小説で逢つた樣な女也、この下宿の主婦は體量三十貫もありさうな珍無類の肥大婦人にて、鹿角辯マル出しに御座候、それから古川某といふ男あり、話をする時舌をペロ〳〵と出し候

「若い時は二度ない」と藝者小静が歌ひ申候

これ眞理なり、兩君、釧路に逃げて來られては

如何に候や、來たなら必ず口は見つけてあげる、若い時は二度ないと拙者小言がうたひ申候、　草々頓首

二月十七日夜　　　啄木

武治君
紅花君　侍史

×

或所に一人の年老つた母親が居たとする、其頼りに思ふ唯一人の息子が、飄乎某地を去ると許りで、海に入つて幾日消息が無いとする、そして米が無くなつたとする、無理算段をして某地に居る姉娘の許へ汽車で行つたとする、……こゝまではまだよい……其汽車が途中或停車場に着いた、時は夕方、同車の人が皆辨當を買つて食つたとする、そして此老いたる女は、乘車券一枚の外、懐中一厘一毛もなかつたとする。……君、若しこれが小説であつたら、否、小説にだけあつて、事實に無かつたら、世の中も住み悪くないかも知れぬ、と考へて僕は――。

宮崎君の好意に對して、僕、全く云ふ語が無い。頼む、願くは僕の居ない時君等から十分御禮をいうてくれ玉へ、自分から、口先で禮を云ふのは、何だか却つて此厚意を侮辱する様な氣がする、考へても見てくれ玉へ、此度の上京は、實際、啄木一生の死活問題だ――君、泣く程の切ない心地は、僕が一人居る時、常に、過ぎる位味はうて居る、どうか、人の前、特に親しい君等の前では、啄木を、聲の高い、口を大きく開いて笑ふ、よく女の話をする……と云うた風の男にして置いてくれ玉へ、頼む、

君、僕は此度の上京の前途を、どうしても悲觀する事が出來ぬ、若し失敗したらといふ事も考へては居るが、僕はどうしたものか、失敗する前に必ず成功(?)する様な氣がする、理窟もいらぬ、何派、彼派も要はない、只まつしぐらに創作だ、

野口雨情君も本月中に上京、一昨日逢つた、
與謝野氏の手紙、郁雨兄へ送つた、見玉へ、
明日の夜汽車で行かうと思ふ、
京子は大きくなつて居る、室の中を縦横無盡に走せ廻る、いろんな事を喋る。
矢張僕は一家の主人で人の子の父であつた。と思ふと頭がモ少し禿げてくれゝばよいと思ふ、
小樽日報半瓦解、八頁が又もとの四頁、吉野君、當分斷念がよからう、或は或時期の間休職を餘儀なくされるかも知れぬ、凡ての設備が半分位に縮少されたげな、そして今日まではまだ續けてゆくだけの金の見込がつかぬらしい、委細は逢つた時、
正さん、小樽へ來て「照葉狂言」を見つけて讀んだよ、なつかしいの何のつて、何だか悲う、自分の稚ない時の事を書いたのではないかと思はれる位。
母と妻と子と、子にして夫にして而して父なる僕と四人で行く、岩見澤の方の交渉、先以て不調だつた。

［四月］十七日午後四時頃　　啄木

岩崎兄
吉野兄

封ずるに當つて氣がついた、隨分斷片的な手紙をかいたものだ

×

（京子インキ壺を覆してこんなにいたし候、見えぬ所はよろしく御推讀被下度候）

畢竟不確實極まるイリュージョン――極言すれば人生の虚僞に過ぎざらむとするを覺知いたし居候うては、矢張平然として路行く人に伍して前に行り進む事能はず……所詮私は「生活」に適合する能はざる人間にして、人生の落伍者也、身も心も宇宙の浮浪漢なりといふ感じが、一種の暴風的歡喜を伴ひて私の心を荒らし申候。

此暴風的歡喜は、畢竟するに自暴自棄の聲に御座候。一種の狂的發作に御座候――自暴自棄に疲れたる心は、やがて又一切虚無の怖ろしき思想に、一種の安逸を貪らんとし、やがて又、再び孤獨の寂寞に涙もなく泣かむとするにて候。

之を横に見たる時、「人生」は際涯なき平面なり。前後左右、唯これ波瀾重疊なる未解決の血の海なり。未解決なり、故に其唯一の結論は「虚無」。

之を縦に見たる時、「人生」は初めあり、而して終りあり……個人全解放の時代は、かくて私の最後の理想の時代に候ひき。

縦はどこまでも縦にして、横はどこまでも横なり。私の心中には此二つの大いなる矛盾あり。遂に相一致せず。既に野心見なるが故に、私は常に革命を欲す。「現狀打破」は私の今迄殆んど盲目的に常に企て來れる所に御座候。

釧路に於ける七十日間の生活は、殆んど生死の大權を提げて私の若き心に威迫を試み候。

大兄よ、私釧路に入りて、生れて初めて酒といふものの飲み習ひ候ひぬ。時としては連夜旗亭に沈醉して、また天日の明きを見ず。醉うて歸りて寢ね、覺めて社に行き、黙々筆を走らして編輯を〆切れば、足また旗亭に向ふ。吉井君の所謂「おけ〳〵と頭を亂すもろ〳〵のみだらの曲」をおもしろと聞くてふ悲しき事もまた私の自ら經驗したる所。時としては、醉快く發して、白眼世を視、豪語四隣を空しうし、盃を銜んで快を呼び、絃歌を聞いて天上の樂としたる事なきに非ず。然し乍ら、噫然し乍ら、いかに醉ひ候ふとも、我を忘るゝ事なきこそ痛ましくは候ひけれ。時としては、飲めども〳〵醉はざる事あり、眼睛を盃底に落して、腕を拱ぎ、悚惕として獨り心臓の鼓動を聞く。云ふべからざる孤獨の感、酒と共に苦く候ひき。銚子を捧へて我をして亂醉するを許さゞりし一妓の情に、辛くも慰められたる事あり。又夢い、い、なき眠りを唯一つの望みとしたる夜あり。然して遂に、感情の滿足なき生活には到底堪へ得べからざる事を、幾度まで經驗いたし候ひぬ。人は矢張昔から情の動物に候ひけり。一切が無くとも感情の滿足さへあれば、心足ず。これなき生活は、假令他の一切を具備するとも、小生如きにはとても駄目に候。

人は愛情の滿足を、若き女に求め、家庭に求め、趣味に求めむとす。然れども小生は遂に天が下の浮浪漢なり。之を若き女に求めむには我が心老いたり。之を家庭に求めむには我が性あまりに我儘に過ぎ、而して之を趣味に求めむには、我が趣味あまりに怠惰的なり。所詮は之を自己自らに求むる外に途なきを悟り候ひぬ。「創作的生活」(專念創作に從ふ生活)はかくて現在の私の最大なる希望、唯一の希望に候ひき。(二十一日夜)

(以下二十二日夜書きつぐ)

御高書は着函するとすぐ郁雨兄より渡されて拜見いたし候ひき、失禮乍ら御言葉多く當らず。唯々面を赤う致候。かの卓上一枚の如きも編輯局裡の走り書、畢竟するに私胸中の矛盾をそのまゝ表白したるものに過ぎず候。

氣を休める。僕、行つても見たいがそんな事には云はゞ、察してくれ給へ。
君、感謝するといふ外に僕は何も云ふ事がない。

［五月］二十八日午後二時　　　啄木

郁雨さま

かいた原稿はまだかたが付かぬ。今日も昨日も雨、
今ペンをとつて紙に向つてるが、どれを今度は書かうと思案中

×

去月二十五日未明、三河丸の甲板から思出多き北海の山々に訣別して、雨を吹く曉の風身にしみ〴〵と哀れを覺えました、翌日荻の濱に寄港して僅か五時間の春、廿七日夕刻、初夏の横濱に上陸、廿八日午後三時、目にあざやかなる緑の雨の中に都門の客となりました

爾後一ケ月、かう〳〵と思つた此手紙、なぜ書きえずに居たのか解りません、御無沙汰のお詫は幾重にも申上げます

書けば書くによい事が山々あります、然し今日は――昨日から、此頃打續きの霖雨のせゐか心地がすぐれず、床の中にころがつてをります、雨は今朝あがつたが、袷に繻袢かさねても痩腕に粟が出來る位寒い

陰雨三日霽。
暑消塵不動。
窓前一風過。
竹葉似秋聲。

など、出鱈目を云つて煙草を吹かして見ても、あまり非人情な心地になれません

昨夜、ふとした氣紛れから古い日記を出して讀みましたが、思出される事ばかり多くて曉近くまで眠れませんでした。今日も私の頭の中は思出ばかり

一の姉は一生貧乏して肺病で死んで、其娘に行方知れずになつたのもあります、この姉は今岩見澤にゐて私と仲がよくない、妹は札幌、父――老いたる父は野邊地の寺、直角に腰の曲つた母と妻と目下ヂフテリヤで死にさうになつてる兒は函館、一家離散した人は、雨のふるのをイヤがります

イヤ〳〵こんな事をかくのぢやなかつた、何四五ケ月も經てば皆東京に呼びますよ

東京は、其日暮しの議論をする人の澤山ある所です。自然主義についても敵味方兩方から、隨分耳章魚にきかされました、然し私は――イヤ議論はヤメました、天下をねらふ野心兒は、須らくおとなしくして居るべしです、兎に角東京の人は急がしさうです

此間ツルゲーネフの On the eve といふやつをよみました、仲々うまく書いてるので、失敬な奴だと多少憤慨して讀んでましたが、讀了して而して遂に、次の様な事を考へました、曰く、ツル先生は矢張十九世紀の大文豪で、啄木は先生の骨の腐つた時に生れた野心兒だ、と

文豪といはれる人に限つて、屹度小説を小説にして了ふからいけません、小説にしなくたつて小説は仍且小説ぢやないでせうか。よしや小説でなくたつて構はぬぢやありませんか。ツル先生が今の世に居ると、私は少し困つただらうと思ひます

「菊池君」といふのを書き出したのが、あまり長くはなるし、中途でイヤになつて、「病院の窓」九十枚、二三日前に脱稿しました。まだ賣らずにおきましたが、フトしたら七月の中央公論に出るかもしれません

長篇をかきたくて仕方がありませんが、書き了へぬうちに空腹になる心配があるから困ります。一つは「二人」一つは「舞踏」

二人」は男二人で、「舞踏」は虚無の淵の上の舞踏です

此間一日、詩をかきたいと思つた日があつて、四時間許りに八篇作りました

ふと今、近代人の情緒といふ事を考へました。昔の小説にある人物は、戀人が一人あるとほかの女はまるで目に見えなかつた樣だが、同じ時期に戀人を二人も持つて、そして平氣で苦んでるのが近代人ぢやないでせうか

けさ頭を洗はなかつたので、何だか髪の根がムヅ痒くて困る心地がよくありません、

私は此頃、いい、だまじめに考へてゐます、まじめに書かうと思つてゐます、と、その側らから、五年もかかつて世界の文壇の一角を確實に占領しかねたら筆をやいて代用教員になるなり海上に浮ぶなり、どつちにせよ二度と東京を踏むなといふ不まじめな聲がします

改めて又そのうちに手紙をかきます。時々先生も御近況御もらし下さい

五月二十九日　　　　啄木

大島經男先生　御侍史

×

復啓

何となき疲れに、枕を取出して横になり候處、片目な小さい女中が、君のお手紙持つてまゐり候。讀んで了つて今起きた所が、遠雷の響聞え候。窓前の公孫樹すこし許り芽立ちまゐり候。雷鳴の日に障子明け放ちたる許り心地よき事無之候。

さて、氣の弛むと共に手紙怠り候事、罪は此方が多かるべし、何卒御宥し被下度候。父上樣にも改めて禮狀差上べく存居候も、つい失禮。何から何までの君の御厚情に對しては、口先のお禮など及ぶべき事ならず、所詮は一日も早く、會心の作にてもお目にかけたくと、それのみ念願いたし居候。

お蔭にて一命を繋けたる京子の事は、今日改めて書くまでの事もなかるべしと存候。但、少し有のまゝなる小生近來の動靜お知らせ可致候。と申しても別に他奇あるにあらず、綠の都の第三信今迄遅延したるは、一には筆の方急がしかりしためにも候へど、又一には毎日の籠城にて珍らしき事見聞せざりしために御座候。

初めて筆をとりたるは、五月八日の午後二時からに候ひしが、それは例の『菊池君』、廿日かかつて唯六十六枚しか書かなかつたから、遲筆御想像被下度、小樽釧路の新聞記者生活が如何に小生の創作の筆を荒らしたか、御想察被下度候。　さて、それが餘り長くなるので、途中で結構を變へる必要を感じたので、五月十八日、新たに『病院の窓』の稿を起し候ひしが、これは釧路新聞の佐藤といふ男（催眠術の先生）をモデルにしたのにて、肉慾の事と、胸中に絶ゆる事なく、下り坂一方の生活のために廉恥心なくなり、朝から晩まで不安である人間を描き候。舞臺は無論釧路に候。

『病院の窓』は二十六日午後三時半九十一枚脱稿いたし候。要したる日數九日間、うち、二十四日には朝に京子發熱の、君からの最初の手紙ありし事とて、その日は妙な心地に暮らし變な詩など五つ六つ書き候ひし。二十枚書いた日も候ひし。これを脱稿したる日は、滿足の情よりも疲勞の方が重くて、夕方には何とも云へな[illegible]に頭は、妻に出す手紙を投函した歸り、歩きながら涙ぐみ候ひし。

二十七、八、九の三日間は、いふも女々しき心地に打過し、古き日誌など繙きて、足一歩も外を出でず。この頃より不眠症の奴に捕はれ、大抵暁になつて人の起きてからでなくては眠れず、

関して在日二三論義を闘行いたし居候。

五月三十日、「母」十一枚、「■■」二十一枚脱稿いたし候。これは極めて簡単なるものに候が、六月十五日附の君のお手紙を、余程書き直して此中に無断借用仕候。呵々。

三十一日夜、猛興を得て「天鵞絨」起稿いたし候ひしが、筆路雲の流るる如くにて、去る四日午後三時頃、恰も並木君が来てゐた時脱稿をしながら、全部九十四枚脱稿いたし候。二日の日の如きは三十余枚かき候ひし、大抵起床は十時十一時、夕方は友人が来て四時間位■談、夜は二時半まで書けば、下宿で貸してくれた小さい洋燈故、油がつきて見るまに消えて了ひ候。油のつきる迄書いたと思ふ満足は、一寸他人に無き事と存候。一日の中で蒲団を延べて枕につき、眠るまでは眠れず。妙想雲の如く湧くは此時に候。

四日「天鵞絨」を完結した時、残る所の原稿紙僅かに四枚、其夜「病院の窓」(これは先に中央公論にやらんとして、あまり長い為無事に戻つたもの)と「天鵞絨」を持つて森先生を訪ねしも留守。置いてまゐり候ひしが、帰りに人通少なき高等学校側の砲車置場の木柵によりて片割月を眺めいと苦き涙を流し申候。

其後も翌五日も、六日も、紙なくして書く能はず、且又帰郷の報を受けて、頭が馬鹿になる様な気いたし候。六日夕方、暫らく二週間振りにて千駄ケ谷にまゐり、詩人夫婦及び馬場孤蝶、平田禿木、長江に逢つて来、昨七日は女中に厳命して七時半に起して貰ひ、平野君を訪ひ候、午後は金田一君と共に上野に太平洋画会を見候。

これぞと云ふものもなけれど、吉田博といふ人の世界写生旅行成績書数百枚、いづれも種々なる色彩と種々なる情景を大胆に書きこなしたるものにて、多少怖るべき手腕を示し居候。埃及の「月夜のスフィンクス」とモ一つ、■中気にあひ候。石川寅治の「静物写生、金魚」は其巧妙人の目を驚たしめ候。

其帰路吉井勇君に逢ひ、一緒に宿に帰りて昨夜十時半迄快談いたし候。誠に〳〵小生の好きな男にて、其性格既に新小詩人輩を抜んず、此人の前途ほど面白きものはなかるべく、今は非常に象徴的なドラマを書き居候。其想は、マアテルリンクに似て、而して更に熱烈に更に不完全なるものに候。

今日は短篇「■■」の稿を起し候へども頭常の如くならず、これは今朝町内の大掃除だとて早く起された為なるべきか。由来小生は早起をすると、他国の気が頭の中を吹く様な気いたし候、

さて此手紙かき初めし時雷鳴あり、しかも程なくして大雷となり、一時間許りの間、直径五分位の大きい雹が降り候。壮快この事に候ひし。今は全く■と晴り候。

晴れかへりたる夕空、所々雹の為に裂けたる公孫樹の葉を動かす風もなし。

生田君に頼んでおいた件、まだ便りなし。森先生より先刻手紙まゐり、あの原稿は二つとも春陽堂へやつたが後藤宙外の出京次第何とかきまるべく何れ後便にと云つてまゐり候。十五日までに決つてくれれば可いと存居候。そしたら先月分の下宿料も払へるし、少しは余計に原稿紙も買へる事と存候。うまい物も少し食つてみたく、相成候。健康は、別段悪い事もなく候故御安心被下度候。

常夏会大賛成。まだ〳〵書きたい事は沢山あるが、何うも頭が重くなつてきた。兎も角も啄木は病気せぬ程度に於て死物狂ひだと同人諸君に御伝へ被下度候。草々

六月八日夕■

郁雨兄 侍史　　　啄木

二月もたてば余程よくなるつもりだ。

今月十五日までには、少くとも三篇かく意氣込だ。

委細後便、小生の家へよろしく賴む。

×

毎日筆と相撲をとつて、苦しんで、汗を流してると、手紙を書く程オックウな事はない。然し今日は成るべく詳しく僕の近況と所感を書かうと思つてペンをとつた。

四日は第一土曜日。例の如く森先生のお家の會。平野吉井二君が僕の所に集つて、三人で出かけたのは午後四時。與謝野氏が雑誌の校正が急がしくて、佐々木君は水戸へ旅行で、何れも缺席、主人と、僕ら三人と北原君と伊藤左千夫老の六人。左千夫老は田舍の村長然として無邪氣な面白い男だよ。十一時まで歌つたり喘したりした。面白い歌もあつた。森先生の奥様は美しい人だよ。上品な二十八九位に見える美しい人だよ。令孃は一人で六歳。茉莉子といふ名から氣に入る。大きくなつたらどんな美人になるか知れない程可愛い人だ。一ヶ月前からピアノを習ひに女中をつれて俥でゆくさうで、[illegible]君が代を一人でやる位になつたさうだ。羅馬字で MARI, MORI と書いて見せたりする。可愛いよ。

五日には正宗白鳥君を訪問した。頗るブッキラ棒な人間で虚禮といふものを一切用ゐない。僕は大すきだ、この大將、箱崎町へ淫賣を買ひに頻々行くといふので猶更面白い。今月の趣味の「世間並」にその事が書いてある。あの妙な主人公が正宗君の性格そのまんまだ。五日にも「十二時です」と女中に起された。昨日もさうだ。今日も、「もうお晝でムいます」で起された。

昨日は午後を金田一君と趣味ある議論(!!)をしたり、ペンを取つたり、煙草を吸つたりして暮した。夕方から二三時間大學の前の夜店の前を、ゆきつかへりつ唯一人うろついた。小說の低級趣味は餘り感心しないが、夜の都の街の低級趣味だけは悪くない。性慾の壓迫をうけて、それとも知らずに唯何物かを求めて歩いてる男と女、それに交つて歩いてると、その時だけは僕も何だか輕い空氣を吸つてる様な氣がする。二人づれの人を弔らひ、つれのない人を憐んで、僕は唯一人、妙な輕い笑を浮べながら、明るい夜の街を辿つたのだ。美しい人を人込み中に見送つたり、立つて硝子やの店を見てると、美しくない人の袖に觸られたりした。その二三時間のうちに千人近くの人を見送り、千人近くの人に逢つた。最後に、藥瓶をさげた、腰の曲つた白髪のお婆さんを見て、目をつぶつて歸つて來た。僕が街頭に低徊して輕く他と自分を嘲つて、頭の中に何一つ面倒な事を考へてない時ですら、人生は其怖ろしき謎を見せる事をやめない。老いたる母！　といふ感じが胸にひらめくと、僕は早速宿へ歸つてきた。

そして二時まで「刑餘の叔父」の稿をついだ。此頃は才にまかせる事なく、少し定見を以て書いてるので、仲々遅筆になつたよ。この數日間毎日腐心してゐてまだ二十五枚しか書かない。

二時に枕について、何日でも寢てから讀む事にしてあるゴルキイの Three of them を讀んだ。うまい。實にうまい。ツルゲーネフを古いと言つて友人を驚かした僕もゴリキイには感心してるよ。昨夜讀んだ所は、主人公が人殺しをして金を盗んだ(出來心で)そのアトの心理的描寫が何とも云へず眞に迫つて、一點の虚僞なく書かれてあつた。面白くて／＼、やゝつかれてランプを消した時は、戸の隙をもる曉の光に障子が所々白くなつてゐて、方々で四時の時計が鳴つたつけ。

かくて今日は十二時に起きされて、枕の上で三通の消息を讀んだ。一つは京子の病狀、また醫者にかかつた事を報じてよこした妻の葉書。一つは筑紫なる菅原芳子からの長い長い手紙。どんな人か見た事はないけれど、字も優しく、歌もやさしい。この手紙にかいてよこした歌が急に數段の進歩を示してゐる。望みのある女詩人だよ。僕のお弟子のうちでは。—そして手紙によると、一人娘なので兩親の商業をつがねばならぬ身なさうで、兄弟でもあればすぐにも東京に行きたいと言つて來た。人は、殊にも女は、戀をすると急に歌がうまくなるね。まだ見ぬ人の温かい消息ほど、罪のない仄かな樂しみを與へるものはない、

サテ、も一つは君からの初めての消息。「繰返拜見いたし候」とはよく書く文句だが、この三通だけは實際三度も枕の上で繰り返して讀んだよ。そして、僕は、泣かず笑はざる、極めてジミな心地になつた。——近頃僕は實際涙を流すことがなくなつた。總ての事が、泣くよりもモット悲しく、笑ふよりもモット深い意味がある樣に許り思へる。泣かず笑はざる心地を抱く事が日益に多い。その心地の時ほど、僕の心の靜かな時はなく、僕の心の眞面目な時はない。時として僕はその心地に堪へきれなくなつて、大聲をあげて泣きたくなる。然し涙も出なければ聲も出ない。フイと立つて金田一君の室へ行つて、さんざん浮氣を言つたり、惚けたりして大笑ひしてくる。

すべての人間が持つてゐて、そしてすべての人間が秘してゐる動物的傾向！ それを露骨に言つて、自分を嘲り人を嘲る。僕は近頃馬鹿に虚飾といふ事を憎んでゐる。人が話をしても、すぐその「下手な譃」が耳につく。僕は何事でも大膽に露骨に告白してゐる。そして、時としては、その自己の告白——一切の人間の正になすべき告白——の爲に、却つて云ふ許りなき苦痛を感ずる。すき歩き、浮氣論、作歌、哄笑、……何れも皆、僕の心が一切の現實を暴露した、泣かず笑はざる「眞面目」の苦痛から脱出せむとする一種の逃路だ！ 而して遂に、その逃路も結局は「女」に行くのだ。女！ 女！ 金があつたら酒と女！

時として、死ぬ事を考へる。平氣で、何の恐怖なく考へる。日記にも書いてあるよ。一週間前に、丁度一週間前に、僕は辭世の歌、自殺の方法まで考へた。然し矢張死ななかつた。あんな時、誰か一緒に死なうといふ見も知らぬ人——たとへば筑紫の芳子の樣な——が來たら、屹度死んだに違ひない。芳子！ 芳子！ ああ、俺一人なら死ぬに苦はないが！ と考へる。然し、實際は俺一人でないからこそ死にたくもなるのかも知れぬ。痛ましい譯だ。かなしい譯だ。

兎に角人生は苦痛だ。神など無論無い。靈魂もない。あるのは永劫不變の性格の根のみだ。それが何よりの苦しみだ。そして君、人間も遂に動物だ。上等下等の階級はあるが、矢張動物だよ。無いと信ずる「神」といふものに、祈つてみたい樣な心地さへする。泣かず笑はざる「眞面目」の苦痛！

獨歩——瀕死の獨歩は、「予は極度まで人生一切の歡樂を味ひ盡さざりし事を最も遺憾に思ふ」といふ樣な事を云つたさうだ。——

君、僕の現在かく生きてゐる唯一つの理由——自分でこしらへた理由は、人間はその一生のうちに、最も大膽に、最も露骨に、最も深く、最も廣く、人生一切の悲喜哀樂のすべてを味はつて、——理智では知る事の出來ぬ人生の眞の面目を實地に味ひつくして、そして死ぬ人が「眞の人間」——英雄だ、——少くとも僕の理想だといふ、苦しい〳〵覺悟唯一つ。何事も知らなくてもよい。總てを味つてみたい。刹那々々をも無

僞に過ぎずに、深く廣く一切の人生の苦痛と歡樂を味はひたい。無信仰だ！ 無道徳だ！

僕は僕の小説に於て、自分が先づ素裸體になつて、一點の祕すところなく告白しようと思ふ。そして一切の人物を提へ來つて、矢張り僕と共に素裸體にしようと思ふ。仕立屋の縫つた衣服をきてゐるうちは駄目だ、虚僞だ。まづ裸體にならなければならぬ。裸體になつた上で、寒かつたら寒いやうな、暑かつたら暑いやうな、それ相應な衣服を新らしく作らなければならぬ。君、これは決して空論ではない、僕の自暴自棄の語ではない。全くだ。かくて僕は、すつかり裸體になつてしまつた上での新らしい衣服に、新時代の新道徳といふ樣なものを微かに望んでゐる。

僕にとつて、小説は僕自身の告白だ（廣い意に於て）、そして人間の虚僞を剝いてしまふ爲の唯一の武器だ。現狀を打破して新世界を作る爲めの唯一の武器だ。

モウパッサンの自殺！ それを或評家が評して、彼は自己の告白に替へかねて自殺した、と言つたさうだ。ああ。

近頃君の手紙――と、いつかの吉野君の手紙程――僕の心をゑぐつた手紙はない。この手紙で見ると、君も矢張泣かず笑はざる心境に居る樣だ。自嘲とは何たる情けない事だらう。君、僕は泣きたいけれども涙が出ない。

「常に且つ敗れて二我を今居らむ」「何なればかくは」の歌、何れも僕自身の心を歌つてくれたやうなものだ。

何故人は「時」といふものに勝つ事が出來ないだらう。四方八方壓迫だ。酒盃を手にし、女と寢るときのみ、その壓迫がなくなる樣な氣がする。僕は時として、イヤ今、君も吉野君も皆、親も妻も子も、知つた奴が皆死んで了へばよいと言ふやうな氣がする。苦笑した。『二三年いや昨年あたりまでは情、熱、火、の僕であつたよ君、僕ながらもなつかしい僕であつた』と言つた君、ああ、おれは何とも言ふ事が出來ない。君、その、「我ながらなつかしい我」の時代は、僕にあつてはもう六七年の昔になつてしまつた。

僕と同じ年輩な人は、皆僕より多少若いよ。僕はそれを考へると、世の中の人間を皆ヒヤカシたくなる。酒と女、それを思ふ時のみ、ただその時のみ、僕も矢張若いかなしい次第だと自分を客觀して一ゐる。

君、君の心持は十分わかつたよ。

大島君は、何だか毎日一寸位づつ土の中へ沈んでゆく樣な氣がする。自分で自分の墓穴を掘つてるのぢやあるまいか！

吉野君の事――ああ、

吉野君と二人で、さんざん酒をのんで、そして、公爵夫人か何か、素的なスマした、ハイカラな美人をトッつかまへて來て、廣い廣い霧のかかつた曠野か深い林の奧へ擔いで行つて、仆れた木に縛つて、二人でさんざん×××末、その女を嬲り殺しに殺して了つたら、二人は初めて莞爾と得意な微笑を浮べる事が出來るだらうといふ樣な氣がする。

アトは何も書きたくない――

桔梗色のリボン！ 大賛成だ。君、願くは大膽に耽溺してくれたまへ。大膽に醉つてくれたまへ。戀するによいだけ猛烈に戀したまへ。若し君にして眞に戀する事が出來なかつたら、その人をして戀せしめよ。あらゆる手段を以て猛烈に戀せしめよ。抱け、口づけよ。くすぐれ。泣かせろ。

そして、若し君がその人と結婚したくなつたら

結婚したまへ。然しそれは僕に無關係だ。

萬一、君がその人をイヤになつたら、戀の無事と僞りに飽きたら、十分、否、十二分にその人の心を破つて捨てたまへ。然る時、眞に戀する能はざる僕等は、同類が又一人新らしく出來たと、手をうつて笑つて喜ばうではないか。

とはいふものの、然し、僕は矢張、さうは出來ないよ。そんな思ひきつた事が出來たら、と思ふだけだ。

矢張、僕らは饑ゑてゐる。情を貪りたい。……時に十人でも二十人でも自分を思つてくれる人を欲しい。そして、それを皆、就かず離れずに遠くに結んで置きたい。これは恥かしいが、僕現在の眞の心持だ！

僕は、若し性慾の壓迫に耐へきれぬ事があつたら、昨年の吉井君の樣に藝妓女郎を買ふかも知れぬ。ズット下つては正宗君と共に淫賣屋へ走るかも知れぬ。然し、君、然しだ。少しでも自分の思ふ人とは肉に及びたくない。のみならず、どつちでも心を打明けずに、逢つた時は普通の話ばかりして、そして互ひに仄かに心に思ひ合つてゐたい。死ぬまで仄かに思はれてゐたい。若し危險が迫つたら、早速、その一髪の際へ行つた時にその女を捨つべしである。黑髪の香と肌の香に目まぐるしくなつた時、ツと立つべしである。そして一生の間、その女の温かい情を思出として胸深く秘めておくべしである。

――尤もこれは實地の場合には、この通りにゆくか怎か疑問だが。

戀を永續するものと思ふのは、若き日の夢だ。必ずさめる。戀の無事と僞りは、眞綿で首をしめる樣に若い心を壓迫して殺して了ふ。戀を唯一度しか出來ないか怎か、それは今でも僕は疑問だ。「初戀は唯一度しかない」といふのが眞理らしい。

處女の戀は皆一樣で、平凡だ。僕は、「まだみぬ戀」「逢はざる戀」「ズット年長者との戀」「ズット年少者との戀」「人妻の戀」「無類の淫亂女との戀」（自分の外にも同時に澤山男を持つてゐる）といふ樣な、妙な戀を、時として欲する事がある。

吉井君の『嵐よりややややはらかく胸をふく嫉妬にまさる趣きはなし』といふ歌が好きだ。誰かに猛烈な嫉妬をされてみたい。

何だか滅茶苦茶になつた。

創作上に於ける僕は、この頃になつて（先月半月許り小說をかけなくて仕方なしに歌など作つた。その煩悶の結果、初めて十分の自信をえた。少し考へる事があるので、當分、小兒になつて、或は小兒の事を、書くよ。

君の歌は評判がよい、嬉しいよ。君、どうか盛んにやつてくれ玉へ。與謝野氏も先頃逢つた時きいてみたら「岩崎君の進んで行く路はよい路だと思ふ」テナ事を言つてゐた。尤も君、與謝野氏は、その最も得意とする短歌の批判上でも、矢張關西趣味、上ッ走り趣味に偏してゐる傾向があるから、氏の添删ぶりは必ずしも最高の標準ではないと思ひ給へ。うまいにはうまいがね。

宮崎君は、やれば必ず人並以上にやる人だのに、怎してやる氣を出さぬのだらう。常夏會は如何。一つ盛んにつついてみたまへ。

然し君、短歌は君も早晩捨てなければなるまい。そして長詩も捨てなければなるまい。日本の新時代の文學は、矢張小說とドラマだ。此間蒲原君に逢つたが、同君でさへ詩を見くびつてゐる。泣菫は勿論死んだ。誰一人詩に極力謳歌してる人はない。與謝野氏の樣な頭の古くなつた人だけだ。詩は矢張或る意味に於て遊戯に

近い。

然し、才人はないものだ。女流作者なんて皆駄目だよ。お幸ちゃんに歌をやらしたまへ。是非やらしたまへ。屹度アノ人は非常な才を持つてゐる。一つ、日本の女詩人に仕立てようぢやないか。屹度成功する。作つたのを送りたまへ。何處かの雜誌に出すよ。まだ書きたい事は澤山あるが、今日はこれで失禮、皆樣へよろしく、何だか氣がおちついた樣だ。

並木君は可愛い男だよ。無邪氣だね。時々來る。モ少しで歸函するといふのが癪にさはる。

四十一年七月七日　　啄木

岩崎　正　樣　侍史

×

君、上京以來、徹夜は別として、今朝ほど早起した事がない。眠つたのは二時間許り、蚊の奴に攻められて目が覺めた、癪にさはつて／＼仕方がなかつたが、暗の中でヤケに團扇づかひをしてると、一聲許り烏が啼いた。夜が明けるのだと諦めて、立つて雨戸を一枚明けた。水――よりも淡い黎明の世界に、そよとの風も吹かぬ。遠くで蜩が二疋許り鳴く。いつもなら蜩をきくとスグ故鄕を思出すのだが、今朝は寢足らぬ頭腦がボンヤリしてゐた所爲か思出さなかつた。やがてチュッ／＼と雀の聲。隣りの寺で朝づとめの太鼓が鳴り出した。――それが濟むと雀の聲が、一層喧しくなつて、五時の時計がそちこちで鳴つた。窓の下を牛乳配達、戸をあける音、咳拂ひの聲……といふ順で七月二十九日がスッカリ明け放れた。

朝飯が濟んで莨を一本のんでると、女中の持つて來た四通の手紙のその一通は君のであつた。うれしかつた。早速讀んでこの卓子に凭ると、目の前の二階の家に朝日が淡くさした。蟬の聲が聞え出した。今日もさぞ暑い事だらう。

御無沙汰のお詫をする。――白狀すると、實は此一ケ月許りの間、君に手紙を書くといふ事が僕にとつて少なからぬ苦痛であつた。苦痛といふ言葉には君多少不快を感ずるだらう。僕も實は感じのよい字と思はぬ。何故苦痛だつたかといふに、僕は何も書かずにゐたからだ。藝術的良心といふ奴が、少なからず麻痺してゐたからだ。怠けたのではないが、事實は怠けたと同樣だ。何も書かずにゐて君へ手紙をかくのは苦痛だよ。家へ手紙かくのも苦痛だよ。最近の二十日間に至つては、すべて苦痛であつた。僕生れてからこんな苦痛を感じた事がない。が、また、此頃位眞面目だつた事も今迄にない。眞面目――赤裸々な眞面目ほどの苦痛はまたとない。

今日だつて不眞面目ではないが、苦痛は輕くなつてゐる。三日許り前に武雄君へ稍々輕快な手紙をかいたが、アレは對手が輕快な男だから輕快な手紙をかいたので、僕自身は決して輕快でなかつた。然し昨日の夕方からは僕自身も輕快になりかけて來た。これは確たる心的動搖があつての變化だから、當分變るまいと思ふ。兎に角この手紙は何の苦痛なしに書いてるから安心してくれ玉へ。

此一ケ月間に僕の經驗した――ひそかに經驗したメンタルテンペストは、今朝になつて考へると頗る興味のある、且つ意義のある事であつたと思へる。いづれこれは他日作物に描く機會がある事と思ふ。且つ面白い事でもないから今日は書くまい。然し僕は實際こんな暴風、――殆んど一點の慰みも隙もない暗黑苦痛を感じたのは初めてだ。

マアこんな事はやめよう。兎に角僕は遂に死に

かれた。猛烈に戰つて遂に生存慾に敗けた。僕を此怖ろしき思想から脱せしめむと全力を盡してくれた金田一君に謝する。一昨日下宿屋から追放令が下つて、僕は半日九十三度の炎天の下、知らぬ町をさまよつたりしたが、それも金田一君が中に立つて、兎も角追放令だけは解除された。

蒼茫たる宇宙の間に僅かの時間を與へられて生きてゐるのが我ら人間だ。價値も何もあつたものでない。人生に定義がないから、眞とは何ぞ美とは何ぞ。皆不可解だ。藝術にも定義なく、從つて價値なく、自己にも定義なく價値がない。考へると死ぬ外はない。虚無だ。

いゝ、いゝ、盲動あるのみ。これが僕の得た目下の結論だ。君、遂に盲動あるのみだ。眞に眞面目に考へると、死ぬ外ない。遂に遂に盲動あるのみだ！

八月は大に書く。大盲動をやる。今でさへ九十三度なんていふから八月の暑氣が想像される。千葉縣の宮内省の牧場のあるところで、三里塚といふ五十戸許の村が露西亜式な面白い所で、そこへ行くと一日二十錢位で過せるといふ事をきいたから、そこへ行つたらウント書けるだらうと思つてるけれど、書肆が無情だから駄目だ。下宿にゐるより半額で一ヶ月過せるのだが。

君、昨夜七時半、僕は一人千駄ヶ谷のステーションに降りた。軌道に添うた夏草の路、蟲が秋ならなくに草間に泣いてゐるぢやないか！

珍らしく與謝野氏の宅に來客なく、唯大倉書店の番頭が來てゐて、主人は、「言の泉」の校正を急がせられてゐた。

四疊半にツギ目なしの蚊帳、其天井の中央に穴をあけて電燈を中へ入れたものだ。穴は絞つてあるから蚊が入らぬ。主人と僕と晶子さんと番頭と四人その中に籠城して話した。千駄ヶ谷は蚊が多い。

番頭は無言で扇をパタつかせてゐた。主人は辭書と首ッ引やり乍ら時々口を出す。晶子さんと僕はあたり構はず色々た人色々な事を語つた。姉と話してるやうな氣がする。

校正が終つてから、新詩社解散問題の話となつた、主人は今後十ケ年計畫で新らしく修養しつつ創作をしたい爲が第一、第二が財政、第三が明星が既に……といふので百號には廢刊するに至つた旨天下に謝する文をかくさうだ。さてその後繼雜誌の件、僕は合議政治に絶對的不賛成をとなへ、一かバッかの議論をした。退社連中との連繋に強硬説をとなへ、平野に編輯の全權を與へて第二明星を起すことを唱道し、若し數頭政治をやるなら僕は加名せぬと、僕の説にして而して硬い口調でやつつけた。晶子さんはわかつたらしい。それで八月十日頃に社友に協議會をひらく事にして來た。僕は然しその時缺席しようと思つてる。

脱社するのだから、在來の社友はその雜誌に無關係になる。頁數が六十か八十の菊版だから投書もあまりとる事が出來なくなる。君、僕は我が黨の士を捨てて此同盟に加はる事は斷じてしない。

君、睡眠不足の爲か、思ひきつて長いものをかくつもりだつたのが、怎うも氣がのらなくなつた。アトは明日でも正君、書く。家の方の事、謝するに言葉がない。僕は何にもいはぬ。八月は大に盲動をやる。僕の現在と家の事とを思ふと氣が滅入る外はない。察してくれ玉へ。

—七月二十九日午前

啄木

郁雨兄

常夏會盛んにやり給へ。

×

八月二十三日附新詩社宛の御手紙、二十七日の

午後に平野君が屆けてくれて嬉しく拜見いたし候ひし、爾後、千駄ヶ谷の徹夜百首會、鷗外博士お宅の歌の會など打續き、剩へ、去る六日には俄かに思立ちてこの新らしき宿に移り候ふ事とて、靜かに机に向ふ暇もなく、遂また御無沙汰を續け候。御申譯なく候。お變りもなき由、何よりなり。少なからず怖れを抱いた東京の夏、過ぎて了へば左程でもなかつた樣に思はれ候。幸ひにして頑健。

僕は運の惡い時に上京したるものの如し。今年前半期に於ける一般經濟界、殊にも出版界の不景氣は十年來にない位の由にて、書肆は皆原稿の買入手控への態。春陽堂などは鷗外氏を介して僕の「病院の窓」買入の約束をして置き乍ら、今になつてまだ稿料拂ひかね、掲載もせず候。花形役者ならざる限り、何人の原稿でも半年位寢せられる事常例の由、トント閉口致候、但しこの秋からは少しづつ景氣引立つならむとの事。

夏は僕、すべての方面に於いて惡戰をしたり。僅に歌を作つた位にて何にも書かず。生の懊惱、創作上の煩悶、搗て加へて、危ふく宿なしにならむとして九十何度の炎天の下、一日汗と塵だらけになつて大都の中を彷徨したなんか、我乍ら小說じみて可笑くも思はれ候。九月に入りて意氣漸く復す。二ケ月許りの豫定にて、近々長篇に稿を起す考へに候。

『明星』廢刊の事、萬朝の生田長江が約を破つて發表して了つた爲、意外に早く世に傳はり、喫驚いたし候。公平に見て、現時の歌壇は萬葉古今新古今以後の盛觀なり。この隆運は一に明星の功に歸すといつてもよかるべく候。廢刊は悲しけれども色々の事情ある事故致方なし。新雜誌の件、實の所を白狀すれば僕にとつては厄介なれど、與謝野夫妻との數年來の深き交誼上、不止得編輯に名を列ぬるを承諾したるものにて、僕の抱負主張は別の方にあるなり。尤も承諾した上は餘り無責任でも居られ間敷、責任あると共に權利もあり、兄等の作を載せる事については十分の力を盡すべく候、但し初號はどうしても來年の一月になるべく、題號は森博士の言を容れて『すばる』と九分通り決定いたし居候。すばるは辭書を見たまへ。金牛星座にあたる七つの星の名なり。マアテルリンクが初めて白耳義で出した象徵主義の詩の雜誌の名も『ラ、プレーヤ』乃ちすばるに候ひき。

東京は面白い所なり。有がたい所でもなく貴い所でもなく、唯面白い所なり。金を澤山持つてゐて、東京人と共に生活するも面白かるべし。僕の如き者が、下宿屋の窓より彼等の生活を無遠慮に觀察してゐるに至つては更に面白し。

數年前に讀んだ本に『アティックフィロッファー』といふありき。「屋根裏の哲學者」の義。其貧思想家をかりて縱橫に大都の文明と社會狀態とを批評したるものなりき。僕の今度の室は三階にあり。東京の下宿屋中最も建物が立派だといはれる此下宿の三階にあり。而して此の下宿中の最も小さき最も低價なる室なるなり。僕、自ら「三階の哲學者」を以て任じ、日夕東京を眼下に目下して勝手な事を思ふ。亦快。

喜劇の價値は、劇中の人物の眞面目なるだけそれだけ大なり。此原理にして眞なる限り、東京は蓋し大なる喜劇の舞臺なり。都會の人には心に餘裕なし。故に彼等のやる事、つまらぬ事にも一種の眞面目なる態度あり。

之を僕の接近してゐる社會にのみ限りて見るも、東京は、遂に面白き所たる資格を失はざるものの如く候。東京には、その日暮らしの議論を毎日々々眞面目になつて吐いてる人無數

にあり。此等の人は一生喋つて死ぬ人に候。偶には立派な議論をする人あり。（現今立派ない、議論とは實際の人生と成るべく縁の遠い議論の事なり。）これらの人は一生顏をしかめて死ぬ人に候。

要するに、議論は何人にも出來る事なり。脱糞すると同じ。故につまらぬ事の限りなり。

創作家と稱する人々の社會も亦面白し。ゴク少數者を除外例とし、大體を二分するを得。第一種の人は勤勉なる鈍物共なり。田山花袋君などを筆頭とし、酒をのめば必ず醉ふもの、女といふものは常に弱き者、などといふことを知れる若き多望なる鈍物無數なり。これらの人は一生汗を流して死に、死んで批評家に惜まれて忘らるる人々なり。第二種の人々は老若無數の變種を含む。一言にして言へば覺めざる人々なり。（一 古き夢よりさめざる人あり。（二 若き夢より覺めざる人あり。（三 覺めむことを怖れて、夜が明けても寢てゐる人あり。（四 夢の覺め方が何人も同じなるを知らで、何とかして自分一人特別な覺め方をしようと無用なる苦痛をしてゐる人あり。（一）は××博士、××××など筆頭なるべく、（二）は年若くして文學に志す人の大多數なり。（三）は××、××、××の徒。（四）は胃弱の如く大抵の人に少しづつ必ずあり。代表者はやゝ當らざれども泡鳴などか。此等の外、覺むるといふことを知らざる聖代の逸民あり。最も愛嬌に富みたるは此種の人々にて、隨分多數なり。文壇の餘興的人物としてこんなのも或は必要ならむ。最も無邪氣なる例は兒玉花外などなるべし。此等何千人といふ覺めざる人は皆それ相應に寢言をいふぞ面白き。

誤まられたる自然主義の影響といふべきデカダン的氣風は文學を語る青年の間に澎湃たり。彼等に於ける唯一の眞摯なる事は肉慾を語ることなり。深く深く眞面目に告白し得ざる人は無論憐れなる不幸の人なれど、告白と廣告とを間違ひたる彼等も亦憐れむべし。其得意になりて語る所は、種々なる機會に於ける閲歴なり。彼等は閲歴の豐富を以て唯一の誇りとす。僕その間に交りて、ケロリとした顏をし乍ら、色々と詭辯を弄して遂々アラン限りの事を白状させるなり。大抵の奴はその恥づべき事を語るに事實以上に附加して語る。何と面白き世の中には候はずや。毎週月曜日は予の安息日なりといへる男あり。其故を問へば、月曜には必ず日本橋の待合に行つて淫賣を買ふ事に定めたりと答ふ。此男は歌壇に名ある××の令息なり。呵々。

「牛肉と馬鈴薯」に於ける故獨歩の唯一の希望は、心より驚かむことなりき。彼は死して一躍文豪となれり。名はどうでもよし、僕は獨歩を愛す、敬せざれども極愛す。彼のいふ所概ねよし。

東京人は驚かざる人種なり。何を見ても何を聞いてもサッハリ驚かざる人種なり。善き意味に於ても惡き意味に於ても、都會人は大人なり。小兒にあらず。彼らの心は痲痺して、何事にも平氣なり。平氣なるが故に、その心に動搖少く苦勞少し。動搖と苦勞も貴いかな。

兩君足下、少し眞面目になりて物いはむ。

兩君足下、東京人の眞面目は、輕薄なる、日常の眞面目なり。我らは然るべからじ。東京人は地方人に比して思潮に觸るる事早く、且つ廣し。然も彼らの觸れ方は淺し、輕し。我らは然るべからじ。東京人の觀察は薄し、廣し。我らは然るべからじ。東京は武藏野にあるが故に山なし、平坦なり。故に東京人は山を知らず。時勢の推移の山一つ來る毎に、彼らは直ちにその上に驅け上り、我らのエブエレスト峯はこれなりとす。最近の山は自然主義なりき。

我らはかくの如くなるべからじ。我らは一切の慣習より脱して、眞に新しき心を開いて觀ざるべからず。善、惡、神聖、墮落、清、濁、これら一切の古きマガヒ物の尺度を捨てて、我自ら深く眞面目に思想せざるべからず。思想する事と議論することとは別なり。思想せざる人も議論す。

僕は自然主義を是認す。然れども自然主義を以て唯一の理想なるが如くいへる人々に同ずる能はず。

デカダン的氣風に隨喜するものは癡者なり。然れども又これを以て腐敗呼はりするものも同時に癡者なり。……

僕は一切を是認す。然れども輕々しく結論するを敢せず。眞の作家は、人の心理を知悉すると共に、時代の心理を透觀せざるべからず。問ふ、兩君はいかにか今の時代を見る？

すべての存在に必ず理由あり。而して世に一として滿足なる事なし。今迄の學者詩人哲人の作れる結論は多し。然れども世には未だ一の結論なし。人生自らが未だ結論に達せず、三階の哲學者は今何事をかなさむと企てつつあるものの如し。（紙がなくなるので不得要領に終つた）

電車にのる人、白地の浴衣を着たるが日に〳〵稀になりて、新秋遂に都門に入れり。わが窓天に近く地に遠し。一碧寥寥として目に廣く、眼下一望の窪谷を隔てて小石川臺に對す。急雨杳かに下より聞え、秋風遮るものなくしてほしいまゝに室に充てり。獨り秋風に坐して秋思深し。草々。

四十一年九月九日午後　啄

兩　君（並木翡翠）（高田紅果）侍史

澤田ナンカ馬鹿ダヨ。今後怠けずに手紙かく。

×

罪萬死にあたる。

さて小生は非常の勇氣と喜びを以て此ペンをとり候、今度島田三郎氏主筆の東京毎日新聞へ小説かくこと今朝確定。今載つてるのが終ればすぐそのあとへ出る筈にて第一回は四五日中に出るのに候。題は、鳥影、六十回位の豫定、稿料は、貧乏社故、まだスッカリした事は解らねど一日一圓位なるべしとの事に候。これから興味ある多忙！　近いうちに詳しい手紙さしあげます。

十月二十六日午後　本郷森川町にて　啄木

宮崎大四郎様
岩崎　正様

明治四十二年

×

障子一重の廊下では、來た許りの肥つた女中が、「今日は頭が痛くて死にさうだ、斯うして枕を抱いてると目がまはるやうだ。」と鄕言にこぼしてゐる。窓の外は煙るやうな小雨、坂下を豆腐屋が喇叭を吹いて通る。煮豆賣の鈴の音も聞える。遠かの砲兵工廠では、試驗射擊の銃聲が絶間なく響いてゐる。……午前十時。

今迄の長い〳〵御無沙汰は何とも申譯の辭がない。内外多事なのと、書かねばならぬことが餘りに澤山あるやうな氣がするのとで、つい濟まないと思ひ乍ら今日が今日まで御無沙汰を續けて來た。久振りのお手紙は、そのうちに書かれてある母の手紙――と共に二十七日の朝に拜見した、そして直ぐに返事を書かうと思つてると、

太田から電話が掛つて來たので――スバル三號は太田が編輯した、纏めてないので困つて了つて、前日も來てくれといふので、夜の十二時までもスケに行つた――止むなく三秀舍――印刷所――に積んで行つた、そして午後二時頃までに全部校了にして了ひ、晦日の晩までに製本させる樣に無理に事務長に承諾さして、そして太田に別れ、約束があつたので小石川の奧に知人を訪ね、夕刻からは兩國でのパンの會。集つたのは太田と僕と石井柏亭君山本鼎君とモ一人の女優畫家。話題は藝術上のムーヴメントといふこと、結婚問題、社會改革問題……酒の勢ひで皆氣焔をあげた。そして十時頃に打揃うて淺草に電車を驅つたが、活動寫眞が濟んでゐたので、また或家でビールをのみ、歸りに太田と二人で妙な汚ないところでスシを食つて歸つたのが十二時半。明日九時頃來てくれといふ北原のハガキが來てゐたので直ぐ寢たが、ヒドク神經が昂奮してゐて二時過ぎまで眠れなかつた！

一昨日乃ち二十八日には十時頃に起きてすぐ牛込の北原宅へ行つた。鈴木鼓村君――音樂家――が來てゐた。――この人が僕の「鳥影」を大學館へ賣つてくれる筈なのだ。(アレは自分でも少しも自信のないホンの新聞物だから可成小さい本屋から出さうと思つたのだ。そして鈴木君と二人雨の中を大學館に行き、十日頃にまた來てくれとの九分通り有望な妥協を作つて、また北原の所へゆき、歸つたのは夕方。…晦日が雨が降るなんか隨分不景氣な話だ。この月の僕の收入は春陽堂から無理やりにとつた原稿料二十二圓七十五錢だけ――去年やつた原稿の分だ、登載前で出せぬといふのを無理に言つたので一枚二十五錢に值切られたのだ――そのうちから上京後初めて今朝出かけに傘などを買ひ、昨夜の會費も拂つたので、十圓だけ下宿屋に拂つた。三四ケ月が滯つてるところへ十圓だけでは甚だ以てヒドイのだが、奇妙なことには此下宿では多少僕を信用してくれる、――信用はしてゐないかも知れぬが、他の人に對する樣に出て行けがしのことは言はぬ……ヅキ〳〵頭が痛むので早く寢て枕の上で『オスカーワイルド、藝術と道德』といふ本を讀んだ。

この本のことを白狀しよう。二十六日に太田から來てくれといはれて三秀舍にゆく時、懷中に五圓札が四枚あつた。これをこまかくしなくては電車にのれぬ、何を買つてこまかくしようかと路々方々の店や勸工場を見ながら、何でも最も必要な、安い物を買ふつもりで、とう〳〵神田まで歩いてしまつた。そして東明館といふ勸工場も、買ひたい物が無數にあるに不拘、イヤ〳〵これよりも必要なものがある――と考へて何も買はずに出て了つた。そしてフラリと中西屋――書肆――へ入つた。君、背皮の金文字が燦爛として何千册の洋書の棚に竝んでゐる前に立つたとき、僕は自分の境遇を忘れ、函館を忘れ、下宿屋のツケを忘れ、三秀舍を忘れ、……何もかも忘れた。忘れたのではない、それらを壓倒する或新しい氣持に今が今までの堅い心を破られた。オスカーワイルドが最近英國詩人中の異彩であつたこと、その思想の世紀末的空氣に充ちてゐることは多少聞いてゐた、そのワイルドの思想を覗ふべき一册の紫表紙の本が鋭くも僕の目を射た、『高いに違ひない。馬鹿な止せ、〳〵、』と胸の中で叫びながら、僕は遂に番頭に言つた――

『これはいくら？』

『三圓五十錢でムいます。』

『それその通り高い！』と僕は胸の中で言つた。その癖、殆んど本能的に僕は財布を出して五圓札一枚を番頭の手に渡した！ 君、許してくれ。既に何年の間、本といふ樣な本を一册も買ふことの出來なかつた僕の、哀れな、憐れな、憫

れな慾望は、どうしても此時抑へることが出來なかつたのだ、「止せ」と思ひながら財布を出した、「馬鹿！」と心で叫びながら買つて了つた。

僕はその時、函館の商業會議所でエンサイクロペヂア、ブリタニカの臭ひを嗅いだことを思出した。

そして何か惡事でも働いた時の樣な氣持で中西屋を出たのだ——

そして其本を晦日の晩に讀んで了つた。そして、昨日三月一日、朝のうちに近所の古本屋へ行つて一圓三十錢に賣つて來た。とう／＼僕は二圓二十錢の損をして了つた。——これは滑稽ではない、僕にとつて最も眞面目な悲しみだ！

そして午後、晝飯を食ふとすぐ出かけて、初めて京橋なる東京朝日新聞に出社した。この事は家へハガキを出しておいたから君も聞いたかも知れぬ。同社に二十何年勤めてゐる佐藤といふ編輯長がある、盛岡の人で、今では社の重鎭だ。この人に突然賴んだところが早速承諾してくれて、アキのないのを無理に入れてくれることになつたのだ。月給二十五圓、夜勤手當一夜一圓宛、但し午前一時頃までで徹夜ではない。三月分は三十五圓許りの約束——同社は年度替になつてるので、四月からでなくては實は入れられなかつたのださうだ。それで當分これといふ仕事はない、年度が變るまで編輯局に居てチョイ／＼手傳つてくれさへすればよいとの事——夜勤は三日置位なさうだが、平日は午後一時半から五時半頃——第一版の刷上るまで——四時間位しか出てゐなくとも可いとの事だ。至極呑氣なもの、これで金を貰つては濟まぬと思ふ程だ、朝日は東京の各新聞中でも時事報知と共に最も基礎の固い大新聞だ、そして佐藤氏は、腰掛でなく長くやる積りでこゝ一二ヶ月だけ薄給でも我慢してくれと言つてゐた。僕の『有望』も古いものだが、今度こそは最も有望だ、朝日では、惡い事さへしなければ決してやめさせぬ社ださうだ、そして三年以上勤めると年金がつくとの事だ、これで先づ、僕の東京生活の基礎が出來たと言つてもよい。安心してくれ給へ。

君、モ一つ君に安心して貰ふことがある。僕は三年も田舍にゐて碌々本も讀まなかつたオクレを、八ケ月間かゝつて取返した。正直にいふが、去年上京する時、僕は小說家になつて乾度成功してみせる樣なことを言つてゐたが、今から見ればアレは譃だ。當時の僕は、生活に適合せぬ男だといふ、所謂現實暴露の悲哀の外に何も持つてなかつた。そして當時の僕には、自信も何もなかつたが、嘗てやらうと思つて、事情の爲にやれなかつた文學をやつてみる外にモウ何の路も自分の前になかつた。が、それについての自信もなかつたよ。君の深大なる好意によつて三河丸に乘つたが、その薄暗い船室の中で、アノ晩僕は劇しく泣いたつけ。それは母や妻子や君らに別れたその悲みで泣いたのではない、『僕に小說をかけるだらうか？』といふ自ら自分を信用できぬその悲みに泣いたのだ。

（來客にさまたげられてるうちに今晝飯が濟んだ。モウ出社の時刻。この續きを今夜書く）

三月二日午後零時半

啄木

郁雨大兄

二白

三月末までに何とかして金を送つて家族をよびたいと思つてる。家の方賴む。

×

（前便のつゞき。——昨夜は所用の爲め外

出、つひにこの續信を書くことが出來たかつた。今朝は七時に起きた。空は晴れてゐるが、寒いカラ風が硝子窓を騷がしてゐる。富士がハッキリ見える。今迄新聞を讀んだ。――午前九時。）

僕、長く地方にゐて、讀書に親しまず、煩瑣な俗事に勞れてゐた爲に、比較的明敏な僕の頭が少なからず衰へてゐた、沈滯してゐた。そして時代におくれてゐた。刻々に來る糾轉を攝取してそれを統一して行く力を失つてゐた。事物と事物の間の相違を鋭く看取する批評の眼も鈍つてゐた。そして又、田舍新聞でメ茶ク茶に書いたので、筆も惡く滑る癖がついてゐた。――以上は僕と同じく地方に年を過したものの免れえない衰退だ。――そして、そして、僕には。。自信がなかつた。行りやう管かなかつた、僕は東京を征服せんとして來たのでなく、地方で敗れて逃げ戻つて來たやうなものであつた。

時代思潮の大勢だけは、漠然乍ら僕自身も感じてゐた。然し乍ら、作物は其時代と作者自身の性格と結合して初めて生れるものだ。僕は現代の空氣を呼吸しながらも、その空氣と僕の性格との契合點若くは相違點が何處にあるかを知ることが出來なかつた。

一方に於て、同年輩の文學者の間で僕は生活に關する知識に於て最も豐富であつた。（つまり閱歷だ。これは君も是認するだらう。）だから、彼等の言動には僕からは子供らしく見えて仕方ない事が多かつた。

上京當時の僕は、今になつて回顧してみると、實に非常な臆病者だつた。自信のない者は常に内心臆病ならざるを得ない。だから、子供らしく見える奴等の言動までも、恥かしい話だが、僕は多少感服して見てゐた。――そして僕はお先眞暗なので、その間の矛盾をどうともすることが出來なかつた!

五月から六月にかけて、僕は非常な速力で以て四篇の小說を脫稿した。（内一篇だけ今度新小說に出る。アトはその後間もなく賣る氣がなくなつて今猶手許にある。）僕はそれらを惡作だとは思へなかつた。然しだ、決して佳い作だとも思へなかつた――詰り何の自信もなかつたのだ、盲目だつたのだ。

そして一方には劇しい生活の苦痛がヒシヒシと迫つてゐる。そして僕自身の生活をすら奈何ともすることが出來なかつた。

「自分」ほど自分にとつて甘いものはない。と共に、また、「自分」ほど自分にとつて意地惡いものはない。君、現代を素描し盡した自意識」は僕にもあつた、――生活上の知識の多いだけそれだけ、僕の自意識は強かつた。僕は人さへゐなければ自分で自分を批評し、現嘲し、冷罵し、輕蔑した。自己の性格のあらゆる點を知りつくして、而してその性格を奈何ともすることの出來ない時ほど人間の苦しい時はない。僕は過去に隱れたかつた。モウ前に進む勇氣も方角もないのだから、戀しいものは過去だけしかなかつた。僕は時々泣いた。

そして幾回か死なうと思つた。そして死ねなかつた。幾回かまた田舍に引込まうと思つた。そして引込めなかつた。人に對しては飽迄東京でやると言つた。また、その時は自分でもその積りだつた。然し、いかにして東京でやる積りだつたか? 君、僕には一の自信もなかつたのだ!

僕が當時あまり人を訪ねなかつたのは、電車賃のない爲許りではない、衣服のあまり汚なくなつてゐる爲許りではない。訪ねても利益がないと思つた爲でもない。臆病だつたのだ。

その當時最も多く僕を訪ねて來た新らしい女は、○○君だ。彼は一日おき位に來ては氣焰を吐いて行つた。（氣焰ではない、實はホラだつ

た！僕はそれに内心では壓迫をうけてゐた。

『ホラだ！　誇張してゐる！　空想だ！　馬鹿な奴だ！』

と思ひながらも、僕は○○にまで壓迫を感じてゐた。その壓迫からのがれ初めたのは、予が七月の明星に歌を百首も出した時からだ。自分で作つてみて、僕は漸々歌に對する批評が出來るやうになつた。そして○○の歌は決して恐るるに足らぬことを知つた。僕が作つたのが在京の明星社友を刺戟して、その後の半歳は歌が急に盛んになつた。これは君らにも雜誌の上で見えたであらう。程なくして僕は、○○に僕と同じ性格の缺點を認めた。予は毎日の樣に日記に○○を罵倒した。――それはその同じ缺點から脱しようとする予の努力であつた。秋になつて予は○○の壓迫から遂に脱した。

換言すれば、僕は○○のすべてを知り盡して了つた。そして、その價値なきことを知つて了つた。第一戰はかくて僕の勝に歸した。毎日の樣に來る○○に對して、僕はモウ何の壓迫を感じなかつた。

○○に代つて僕を壓迫したのは××だ。○○の歌が放恣なる空想に過ぎぬと思つた時、××の歌の方が僕の趣味に適して來た。この敵は○○よりも少し手剛かつた。何故なれば、晶子さんは××を餘程深く信任してゐる。そして××は、一見、寡言で、どこかドッシリした所のある、何となく賴母しいところのある樣な男だ。○○の浮調子とは違ふ。一體人はすべての觀察に於て因襲に捉はれ易いものだ。自分の信ずる人の賞める人をば、始めからいゝ人の樣に思ふ。その理窟で、僕も大分××を信じてゐた。信じてゐるだけ壓迫が強かつた。一緒に千駄ケ谷から歸る時など、××は電車の中でアタリ構はず大きな欠伸などをする。そして默つて僕などを見ることなどがある。そんな時には、僕は何といふことなく非常な壓迫を感じて、あらぬ方を見ながら、心では此男を殺して了ひたい位に怒つてゐた。――この氣持は或は君に解らぬかも知れぬ――

かゝる間に僕の書き出してみた短篇は三十篇以上もある。そして何れも未完のまゝでやめて了つた！　察してくれ給へ。

スバルに對する僕の態度の最初消極的であつたことは、去年九月か八月の手紙で君も承知だらう。その成立には、今から見ると政治的興味がある。それは恁うだ――

去年一月吉井北原太田らの退社は新詩社及び與謝野氏にとつて殆んど致命傷であつた。二月（晶子さんの言）××が、明星は百號でよすといふ與謝野氏の言をきゝ、乃ち晶子さんに自分らで別に雜誌を起さうと内約した。××の其態度は、大隈伯を退かしめた進歩黨の野心家大石正巳に似てゐる。野心家？　然り。そのうちに僕が上京した。また、○○はその歌を發表すべき機關がないので弱つてゐた。野心家××は乃ち○○を懷柔して、新雜誌を起すを口實として再び新詩社に近かしめ、廢刊に先立つて明星に○○をして再び歌を出さしむるに至つた。僕は當時から多少××の心が讀めてゐたので（且つは又自分の生活上の必要から。）八月の社友相談會以前に與謝野氏夫妻に向つて多數政治の雜誌の弊を說き、

『一番先きに喧嘩するのは、モシ僕がはひつてゐるとすれば、乾度僕ですよ。』

とまで極言した。然し相談會で××○○僕の三人がやることに決した時は、僕は一應辭した上で、餘儀なく情誼上ひき受けてはおいた。約束した金尾文淵堂は十一月末になつても何ら準備をしなかつた。（金がなくて）××は一人で奔走して平出君に金を出させることにした。

僕と○○はアトでその報告をうけただけだ。
十二月になつて愈々いそがしくなると、何しろ三人のうちで雜誌編輯上の事をやれるのは僕一人だ、其處で編輯の大體は××が獨擅でやつてゐたが××と○○は毎日僕の三疊半に來た。つまりこの室が編輯局だつた。當時僕は、毎朝十時頃××に起され、話をしながら毎日の小說を十二時頃までに書いて送り、のこる半日半夜を全くそのために費した。三人中最も熱心だつたのは無論××だ。何故といへば彼は「自分の雜誌」といふ氣でゐたのだ。その熱心は然し、餘り度を過してるので、「雜誌一冊に憊廢に無中にならなくてもよささうなものだ」と思はれる位、却つて滑稽に見えた。
○○は無論、熱心な××も、紙が一聯何百枚あつて、一枚から何頁とれるかも、又、活字の號數も、薩張知らなかつた。推して知るべし。
或時こんな會話があつた。
××『口語詩なんて詰らない。僕の方の雜誌では毎號攻擊してやらうぢやないか。』
○○『ああ、僕等の方の雜誌で』
石川『僕は然し、口語詩はいゝと思ふ——理論上いゝと思ふ。尤も、今迄に出た作物の價値は別問題だが……』
××『それアさうさ、理論上はさうだが、アンナ作物を出して威張つてるから癪にさはるんだ。』(と不快な顏をした。××はすぐ不快な顏をする男だ)
石川『アハヽヽ。やるサ。大いに。』
××の「僕の方」と○○の「僕らの方」とを比較し、更に僕の第三者的態度を見れば、當時の三人の關係が分る。そして××は最も熱心で、僕は熱心でなくてゐて一番役に立ち、○○はチッとも役に立たなかつた。(○○君は、やる氣がなかつたといふよりは、やれない人なのだ。)
ところへ以て來て、○○は、××嫌ひな蒲原有明君から油をかけられて、僕へ不平を打明けた。○○の言分では、『明星がスバルに變り、消息のアトの與謝野生が××生に變るだけだ。こんな雜誌なら僕はイヤだ。これでは明星と何の變化がない。』といふ意味であつた。つまり××の專橫を憤慨したのだ。實際また○○は北原太田に對して恥かしくなつたのだ。
是より先き、僕は毎日一緒にゐる間に、××を研究し盡した。彼は決して其表面に見えるやうな大人風な男ではなかつた。彼は、ウソは言はぬ代り決してホントの事も言はぬ男だ。そして陋劣な、女々しい、感情的な、僞善家だ。そして其文學觀が僕と全然一致しなかつた。從つて、雜誌に對する考へもまるで違つてゐた、僕から見れば、××はスバルを自分の雜誌にしようとしてゐることが明白で、そして其性格は到底僕と合はず、其主張主義共に何の根柢がなく、古いコンベンションに捉はれてゐた。——即ち僕は、僕一人でスバルと絕緣する機會あることを信じてゐた。で○○が不平を言ひ出すと、僕は一方にそれを煽り立てると共に、一方にそれを牽制してゐた。これは頗る狡猾な態度で、その事は××初め何人にも知らせずにゐた。そしてこれによつて、予は全く、嘗て敵であつた○○を自分の思ふまゝにあやつつてゐた。
そして一方に於て、予は心中に於て××を蹴つた。
第二戰終つて四十一年は暮れた。是より先き、僕は非常な勢ひで太田正雄君(木下杢太郎)と接近してゐた。太田はエライ男だよ。
君、上京以來八ケ月間かゝつて、僕は今迄なくしてゐた自信を見つけ出した。僕は正月になつて、急に何といふことなく中心に賴むところが出來た。
そして一月八日のスバルの內部相談會には、(出席者與謝野氏平出君外合せて十人)僕は思

ふだけ何でも言つた。そして總ての事は僕の立言が成立して、××の立言は皆破れた。かくて事實上××の壓迫を脱した。そして、二號を僕一人でやつた。歌を六號にしたのは、單に紙數の都合ではない。紙數の如何に不拘あゝやる積りだつた。上田敏さんと太田君平出君がこれを贊成してゐた。（外の人には默つておいた。）これは僕の文藝上の主張が歌の樣な遊戲分子の多いものを排斥する結果だ。それについての××と僕の喧嘩は雜誌で見たであらう。あれを××の發見した日の夕方、電車の中で××が僕に喰つてかゝつた。僕は生欠伸をし乍ら返事してやつた！

それだけなら何でもないが、その後ホントの喧嘩になつた。然し喧嘩は全然僕の勝利に歸した。平出君（出資者）は全然雜誌の方針に於て僕の意見に贊成だと公言した。そして××が僕によこした喧嘩の手紙があつたのを、『スバルではアノ××君の手紙を何人も認めないから』とまで言つた。

勝つた予は、平出君に對する友情によつて、一二ケ月だけ署名人に僕の名を貸すことにして、そして三號は太田にやらした。僕も太田も今後は一切スバルに手をつけぬつもりだ。そして××にスバル呉れて了ふつもりだ。君、三號からは君にもスバルを送らぬ。

八ケ月かゝつてオクレを取返した僕は、この二ケ月の間、思想的に武裝して過した。そして今こそ一個人としても、作家としても立派な自信を得た。君、これからだ。これからこそ初めて僕はすべてに戰ふ勇氣と自信がある。このことを詳しく書きたいが紙がつきたから今日はやめる。――かうなつたのも君のおかげだ。多謝する。僕は今初めて僕の思想を統一し、アラユル物に對して直視することが出來る樣になつた。（そのうちにこの續信を書く）

三月二日午前十一時　　啄木

郁雨大兄

岩崎君によろしく。

×

君、今朝の氣持つたらない、尤も今朝といつた所で今十時半に起きたところだ、そして君の手紙をよんで顏を洗つて來てすぐこのペンをとつたのだ、昨夜も四時頃迄起きてゐたのだ。この三日間病氣届を出して社を休んでる、それは中島孤島君が書きさへしたら金にしてくれるといふから「木馬」といふのを書くためだ、ところが思ふ樣にはかどらない。

「朝日（君は讀賣といつたがそれは君の思違へだ）へ入つたのは君事實だよ、但し夜勤をしてないから二十五圓だ。

何といつてよいか解らぬ、皆が死んでくれるか俺が死ぬか、二つに一つな樣な氣がする。母のいふ事、妻のいふ事、君の言つてくれる事、皆無理は少しもないと知つてるので苦しい悲しい。ヒョットすると（例へば母でも突然やつこくれば）僕が短氣を起してどんな事をするか知れぬ樣に君も妻も思つて心配してくれるが、僕は悲しい。今迄も僕はよくそんな風な事を言つたり、したりして家族をおどした。おどしたのだ。母などの言ふ事に少しも無理はないと思ふけれど、三疊半にゐる所へ來られたりしてはどうする事も出來ないから、さうしておどしておくより外はないのだ。僕だつて何んでそんな事したいものか。

先月末に呼ぶ樣に言つてやつたのもウソではないのだ。ところが「鳥影」は大學館にも遂々賣れなかつた。察してくれ● それから家を持つだけ

の金の方を貸してくれる筈だつた北原は「邪宗門」の方が意外に金がかゝつたので矢張駄目だつた。（君、アノ本は易風社から出たが、實は本屋の名前だけ借りたので自費出版なのだ）

今迄の滯りで下宿屋がイヂメる。先月は入社早々前借して入れた。今月もあまりイヂメられるので、モウ十五圓だけ前借して入れた。そして僕は毎日の電車賃を工夫して社に通つてるといふ有樣だ。

が、二十五圓といふ基本さへあれば、家族が來てもどうかかうか暮せる。

たゞ、家を持つ金、旅費、それから下宿屋に納得させる金、それだけが問題だ。それさへあれば、僕はこんな――

實狀はこの通り。何の秘密もない。たゞ苦しい。花はさいたが、僕には何のことわりなしに散つてしまつた。

とにかく基本だけは出來たのだから、モ少し待つ樣に母や妻へ言つてくれ玉へ。頼む。何とかいたら可いか解らぬので手紙もやらずにゐた。

何日の間やらう〳〵と思ひつゝ、手紙をかくのがおそろしさにそのまゝにしておいた、一圓ある。別封、どうか母へやつてくれ玉へ。

君の健康！　あゝそれに僕はちつとも責任がないか！

（四月）十六日　　　　啄　木

宮崎大兄　御侍史

×

まだ返事は來ませんでせうか。私は私から手紙を出したことを、若しやあなたに全幅の信任を捧げることが出來なかつた爲と思はれはしないかと心配してゐます。歸るでせうか、歸らぬでせうか。

私には新しき無言の日が初まりました。私はこの、一寸のひまもなく冷たい壁に向つてゐるやうな心持に堪へられません。然しこの心持をそらすやうないかなる方法もとりたくありません。誰とも話はしたくもないが、あなたには逢ひたい。

（十月）七日午前十時　　　　はじめ拜

金田一京助樣

×

拜復。御手紙は昨夕難有々々拜受仕候。何しろまだ二三回しか通信差上げぬ事とて全く思ひ設けざる場合に候へば、一しほ身にしみて如何に先生のこの身を愛し給はるかも思ひ知られ、雀躍する程よろこびて小切手七圓頂戴仕候。御高恩の程誠に〳〵御禮の言葉も無御座候。十幾年前先生の御薫陶の下にありたる四尺足らずの洟垂しが、後に至りて斯く迄先生の御世話になるべしとは、先生の夢にも思し給はざりし御事と存候。今日は日曜に候ひし故銀行には明朝參るべく候。これが私の生れて初めて銀行に金をとりにゆく新經驗に御座候。何となく怖ろしい樣の氣持に候。

病妻に關しての御同情のお言葉、胸をさゝる思ひして感銘仕候。今は洗ひざらひ恥を申上ぐる外なし。實は本月二日の日、私の留守に母には子供をつれて近所の天神樣へ行つてくると言つて出たまゝ盛岡に歸つて了ひ候。日暮れて社より歸り、泣き沈む六十三の老母を前にして妻の書置讀み候ふ心地は、生涯忘れがたく候。晝は物食はで飢を覺えず、夜は寢られぬ苦しさに飲みならはぬ酒飲み候。妻に捨てられたる夫の苦しみの斯く許りならんとは

思ひ及ばぬ事に候ひき。かの二三回の通信は全く血を吐くより苦しき心にて書き候。私よりは、あらゆる自尊心を傷くる言葉を以て再び歸り來らむことを賴みやり候。若し歸らぬと言つたら私は盛岡に行つて殺さんとまで思ひ候ひき。昨夕に至り、先生のお手紙と同便にて返事參り候　病氣がなほつたら歸ると言つてまゐり候。弱るには非常に弱つてをり候へど、行く二三日前から顏色などは殆んど健康體の如かりし筈。無理な言分かも知れず候へ共、娘を貧乏させたくなさの先方の親達の心が、更に何日何十日この私にかゝる思ひをさせる積りにかなど怨まれ候。過去一年間の全く一切の理想を失へる生活より、漸々この頃心を取直してこの身のつゞく限りは働かむと思立ちたる折も折の此打擊に御座候。御存じも候はん如く私は非常に反抗心の強き男に有之候。それが今度は反抗どころか、全く妻の爲に意氣地なき限りの手紙をも書き候ふを、若しこの上長くこの儘にしておかれるやうにては、その間に、私は自分で自分の心がどうなるか解らず候。歸つて來ると決心した以上は、出來ることなら一日も早く歸つてくれる方、恐らくは二人の生涯の爲ならむと存候。

少くも私の爲には節子の居らぬ間は唯苦しい心地あるのみに候。さればと言つて、今迄ロクに養生もさせかねた事故、「病氣の爲」と言はれては、それを無理にとも言ひかね候。然し歸つてさへくれば今度の御厚志の分も手つかずにあり、また夜の目も寢ずにでも醫療の料だけはつゞけるつもりに候。無論先生にこんな事までお願ひ出來るとは存ぜず、かゝる事お耳に入れて御心配かけるさへ心苦しき次第に候へど、若し道にてなど荊妻にお逢ひなさる樣の事の候はゞ、よく〳〵右の私の心お說き聞け被下、一日も早く歸つてくるやう御命じ被下度伏して願上げ奉り候。萬一にも實家の方にて何のかんのと節子の歸りを長びかせるやうの事あらば、その時こそ私は、二人の將來のすべてを犧牲にするだけの、心ゆく限りの復讐をいたすべく候。妻の家出の第一の原因は、私の老母との間柄に存するものの如く候。それについては私は時代の相違てふことの如何に悲しきかを感じ居候。然しそれも母も每日泣いてゐるうちに早く歸つてさへ吳れゝば、雨ふつて地堅まる結果に立到るべきを確信いたし居候。旅費は送つてやつた筈に候故、この事若し機會有之候はゞ節子

にまで何卒御申し聞け被下度候。かく記し來りて餘りなる失禮に自ら驚き申候。右はくれぐれも萬一道にてお逢ひ遊ばす樣の事あらばの事に御座候。いつも〳〵の不愉快な事許りの手紙、恐れ入り申候。先生の御高恩は實際膽に銘じ居候。いつかは御拜眉を得て親しく御禮申述ぶる機もあるべきかと存候、先は不取敢、草々

〔十月〕十日夜九時

啄木拜

新渡戸先生　御侍史

今夜淸岡氏にも御禮狀認め申候、それから通信はなるべく地方に關するものとのお言葉、私も出來るだけさうする覺悟に候へど、さう〳〵あつらへ向きの種も無之候に付、何卒御察し被下度候。出來るだけはやり可申候。それからこの通信の外に、時々在京盛岡人の近情を寫實風に短かい言文一致で報ずるのを差上げてみるつもりに御座候、

×

昨夜は失禮、今曉歸つてまゐりました。御安心

被下度候。明日から社にも出かけるつもりです。今日展覧會へ行つて來ましたよ

（十月二十六日夕

はじめ

金田一京助様

×

拜啓、今日は今日けと思ひ乍ら、何の彼のと落着く暇なき生活を致し居り、またまた飛んでもない御無沙汰仕候。何とも御申譯無御座候。先月は立續けに無理の事許り御願ひ致し、これも何と御禮申上げてよきやら解らぬ次第、荊妻の事に關しても色々と御心配下され候事本人より承り、感銘に不堪候。お蔭にて其後は至極無事、妻の病氣も略全快、只今にては一人にて家事萬端働らき候樣に相成候間何卒御安心被下度奉願上候。偏へに先生のお蔭と存居候。

何と申しても東京も最早冬に御座候。見ぬうちに菊も末と相成候由に御座候。故郷の冬は寒い乍らに何となく溫かきなつかしさ有之候へど、東京のそれは一向なつかしくも何ともなく候。漂泊者の心理といふものは格別なものにて、事につけ物に觸れ故郷の事思出し候。さて通信は毎々下らぬ事のみお送り致し、慚愧に堪へず、それに午前出社前に何か少しの事あれば、つい善く時間を失ふ譯にて、成るべく避け居候へど午前の來客などは何よりの禁物、書きかけて出社する事など間々有之候。夜の汽車で送つても翌日の編輯に間に合ひ候や否や。夜十一時の汽車には郵便なしと誰だつたかに教へられたるを信じて今迄夜には書かずに居候次第に候ふが、それが若しウソだつたら誠に愚な事致し候譯に相成候。

一ケ月半で三十回にもならず、誠に心苦しく存居候。

數日前大信田君上京、いろ／＼盛岡の事を聞き申候。盛岡に四新聞は何としても多過ぎるなど話し合ひ候。時事や公論はよく立つて行くものと不思議に感ぜられ候。小生も北海道時代の苦い經驗のお蔭にて少しは地方新聞の內幕も存じ居るつもりに候へど、公論の廢刊せぬのだけは何としても不思議に御座候。不謹愼な事を申す樣に候へど、御社にても八戸に支社でもお置き遊されては如何に御座候や。さうふやうな機關さへあれば、去年からの藩時代の話などにて今迄に隨分青森縣下の舊領に讀者をえられたる事なるべしと存居候、又他日東京盛岡間に長距離電話のきくやうになる時は、（而して青森まではきかぬ期間）盛岡の新聞の大に乘ずべき機會なるべきかなども存候。無論これ等はホンの書生論に候ふ事申す迄も無御座候。御一笑被下度候。一生に一度は自分の新聞といふものを持つて見たいと存候。これも無論空想乍ら。

あまりの御無沙汰に心せめられて取急ぎ御詫迄に御座候。今度金田一花明君にお嫁さんを貰ふ問題起り、昨夜その見合の席に小生も同席致候。但しきまるか何うか不明に御座候。よく二人にて先生の御噂仕り候。御淸適の程祈上奉り候。草々

（十一月）十七日夜

啄木拜

新渡戸先生　御侍史

荊妻よりもよろしくと申出候、

明治四十三年

×

新年の御慶芽出度申納めます、長らく御消息を

知らずにゐましたところへ御祝詞を戴きまして誠に嬉しう御座いました、實は先生は横濱に來られたとか東京に歸られたとかいふ噂もありましたので、いつかは思ひがけなくお目にかかる機會がありさうで、いつだつたか並木君に逢ひました時も、「電車に乘つてると大島さんがヒョッコリ乘つて來さうに思はれる事がある」と談り合つたこともあつた次第でした、その後――さ樣十一月中でしたらうか、函館日々の月曜文壇に岩崎君が書いたうちに、「大島君が北海タイムスで純文學鼓吹をやつてゐるし云々」の事がありましたので、さては札幌にゐられるのかと思つてゐました。

函館にゐてお世話になつた頃を考へるとボーッとしてまゐります、あの頃私は實に一個の憐れなる、卑怯なる空想家でした、あらゆる事實、あらゆる正しい理を回避して、自家の貧弱なる空想の中にかくれてゐたにすぎません、私の半生を貫く反抗的精神、その精神は、然し乍ら、つまり自分で自分に反抗してゐたに過ぎません、それと氣がつかずに、唯反抗その事にやりどころなき自分の感情を託して、咨嗟し、慷慨し、自矜してゐた臆病な無識者は、遂に内外兩面の意味に於て「破產」を免かれませんでした、自然主義は、私のこの思想上の破產に對して決して救濟者ではありませんでした、寧ろ執達吏のやうな役目を以てあらはれました、上京後一歲有餘の私の努力――その空しき努力は、要するにこの破產が一時的の恐慌から起つたのでなく、長き深き原因に基づいたものである事を明らかにしたに過ぎません、最近昨年秋の末私は漸くその危險なる狀態から、脫することが出來ました、私の見た惡い夢はいかに長かつたでせう、

あの頃あなたの頭にあつた問題は詳しい事は知りませんけれども）私のズット以後に至つて初めて忖度する事の出來たところです、あなたは時代に先んじてゐられた、それ故にあなたはそれを適當に發表する途を得ずに苦しんでゐられた、その事を私は切實に感じた事があります、そして先生は、實に唯「底知れぬ人」「自己を虐待してゐる人」「寂しい人」としてのみ我々の目に殘つてゐました、あの頃の事を思ふと、私は今あなたに數々お詫を申さなければならぬやうな氣がします、何にしてもあなたが再び社會の表面に出られたといふ事には、私は悦こばずにはゐられません、

そして私は、同時に日本人の發達に對しても亦悦ばずにはゐられません、義理と人情の衝突とか理想と實際の衝突とか名附けられてゐた日本人の煩悶は、いかに急激に深く且つ内容の豐かなものに進步したでせう、現在の日本には、恰も昨日迄の私の如く、何らの深き反省なしに日本國といふものに對して反感を抱いてゐる人があります、私はそれも止むを得ぬ現象と思ふけれども、然し悲しまずにはゐられません、私は考へます、遠い理想のみを持つて自ら現在の生活を直視することの出來ぬ人は哀れな人です、然し現實に面相接して、其處に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐な人でなければなりません、かくて私は現在の殆んどあらゆる批評家の言に反對せねばならぬのです、既に我々は我々の現在のいかなる狀態にあるかを知りました、この狀態は決して滿足すべきものではありません、我々は乃ち進んで、このやうな狀態になつたところの原因を探求し、闡明し、而して更に創造者の如き勇氣を以て現在の生活を改善し、統一し、徹底させねばならぬのではありますまいか、人生――狹く言つて現實といふものは、決して固定したものではない、隨つて人間の理想といふものも固定したものではない、我々は時々刻々自分の生活

「内外」を豐富にし擴張し、然して常にそれを統一し、徹底し、改善してゆくべきではないでせうか、あらゆる思想、あらゆる議論の最後は、然して最良の結論は唯一つあります、乃ち實行的、具體的といふ事です、（と私は思ひます、）私は以上の意味に於て新らしい個人主義を力強く把持して行かうと思ひます、同じ理由から私は、機會があつたら新日本主義といふものを說かうと思つてゐます、

現在の日本には不滿足だらけです、そして私自身も現在不滿足だらけです、然し私も日本人です、乃ち私は、自分及び自分の生活といふものを改善すると同時に、日本人及び日本人の生活を改善する事に努力すべきではありますまいか、

以前の狀態の反動でもありませうが、私は人間の理性の權威を認めずにはゐられません、特に私は色々の人の文學上の議論を讀む每にこれを力說したく思ひます、人は感覺の鋭敏といふ事を「近代的」といふことの一つの特徵として、それを誇張し標榜し、文藝上の作物の價値判斷の標準とまでします、それを惡いとは言はぬ、然しあらゆる意味に於て、時代の病處を共有してゐるといふ事は、人間の名譽ではないではありますまいか、近代人の作物に近代人の特徵の現はれるのは無論あたりまへの話である、その時代の特徵を知らぬ位の人は無論その時代に無用の作家には違ひない、然しその價値判斷の標準は、時代の特徵を澤山持つてゐるか否かでなくて、さういふ特徵をもつた時代に對する作者の態度如何にあるべき事と私は思ひます、總じて私は、一切の文藝は作者の把持する哲學の奴隸でなければならぬと思ふ、從來の意味に於ての詩人といふものの如きは、少くとも私の現在に於ては、玩具屋とか新聞位にしか必要がありません、文藝は廣い意味に於て全然ジョアナリズムであつて可いと思ふ、作者の哲學（プラクチカルな）（生活意識の統計）から人生乃至其一時代を見たところの批評。此意見の具體的說明でなければならぬと思ふ、（此意見から行けば、描寫といふ事についても最も的確な斷定が與へられると思ひます、）

現實を論ずる人が現實に囚はれて、現實を固定したものの如く考へると共に、個性といふことを論ずる人も同じ謬謬に陷つてはゐないでせうか、個性といふものを既に出來上つたもの、ギヴンファクトと考へることによつて我々の思想がどれだけ停滯してゐるか知れないと私は思ひます、歷史は人類の或る不明な假りに意志の傾向を示してゐます、同時に一個人の一生は其人の意志の傾向と其經路とを語る、現在生きてゐるところの人間には、意志と意志の傾向あるのみであつて、決して固定したものではない、自己とか個性とかいふものは、流動物である、自らこれを推し進めて完成すべき性質のもので、そして生きてゐる間――精神的活動のやまぬ間は形を備へぬものである、と私は思ひます、そして、前に申上げた自己の生活の改善、統一、徹底といふことは、やがて自己を造るといふのではありますまいか、

申上げて御批評を仰ぎたいと思ふことは澤山ありますが、とても書ききれません、とも角私は踴躍して明治四十三年を迎へました、

現在私は朝日新聞社で校正をやつてをります、傳道婦として北海道にある妹をのぞいては父も母も妻も子も今は私の許にまゐりました、

私は私の全時間をあげて（殆んどこの一家の生活を先づ何より先きにモット安易にするだけの金をとる爲に働らいてゐます、その爲には、社で出す二葉亭全集の校正もやつてゐます、田舍の新聞へ下らぬ通信も書きます、それでも私にはまだ不識不知空想にふけるだけの頭

にスキがあります、目がさめて一秒の躊躇なく床を出で、そして枕についてすぐ眠れるまで一瞬の間斷なく働くことが出來たらどんなに愉快でせう、そして、さう全身心を以て働らいてゐるときに、願くはコロリと死にたい、――から思ふのは、兎角自分の弱い心が昔の空想にかくれたくなる其疲勞を憎み且つ恐れるからです、

札幌！　私のすきな札幌！　ゐたのは二週間にすぎませんでしたが、思出は少なからずあります、そして今、私の知つてゐる或る美しい、そして悲しい人が其處で長い病の床についてゐます、私は今後その人の名とあなたの名によつて札幌を思出すことが一層多いでせう、あ、それから一つ喜んでいたゞきたい事があります、それは、以前から惡緣でつながつてゐたスバルと今度全く内部の緣をきりました、編輯兼發行人の名も變へました、――かうして私は、すべて古い自分といふものを新らしくして行きたく思ひます、

一月九日夜八時

啄木

大島經男様 御侍史

雪が見たくなりました、

×

君、

長い／＼御無沙汰だつた、年が暮れて明けた、もう三月も半ばになつた、あと半月でそろ／＼櫻が咲かうといふのだ、

讀書を廢し、交友に背き、朝から晩まで目をつぶつたやうな心持でせつせと働いてゐた僕にも、流石に時候の變化だけは毎日々々感じられた、梅見には行かなかつたけれども、その一枝づつを携へた女づれ――多分新橋あたりの藝者だつたらう――と電車に乘合した時、事實の上に春の既に我等に近いた事を知つた、そしてこの一週間許り前から、電車線路に照つてゐる日光にも、どうやら春らしい温かみがあつた、「もう春が來る！」さういふ感じは、僕に取つても何がなく嬉しかつた、さうしてるところへ、昨日は終日雪が降つた、降つては消え、降つては消えしても七寸位は積つた、しきりなしに降るのを見てゐると、「春の雪の悲しみ」とでもいふ樣な感情が僕の心にあつた、そして急にまた冬の樣になつた、今日も一日耳をきる樣な風が東京中に吹いた、踏みつぶされた雪どけの泥濘の中を、東京中の人は皆寒さうに肩を窄めて歩いてゐたつけ、先刻歸りに、懷手をして電車の中に腰かけてゐると、何といふ事はなく「人間のみじめさ」といふ樣な事が考へられた――飯をくつてホッとして此手紙を書き出したんだ、

君の方は多分御無事の事と思ふ、此方も無事だ、十二月の末に野邊地から老父も出て來た、都合によると、今月の末にはまた旭川にゐる妹のやつも來るかも知れない、何しろ家内繁昌だ、（少くとも頭數だけは、）から繁昌しては、どうせ一軒家を持たねばならぬのだが、そこまではまだ「此のかせぎ人」がかせぎかねてゐる。――それでも今年になつてからは、何だ角だと言つて月に總計四十圓から四十五圓位とれる勘定だ、以前にくらべると餘程樂にならねばならぬのだが、不思議に何處も樂になつたやうな所も見えない、とはマア言ふものの米味噌の心配だけはしないで其月を送れるのだから、矢張少しはよくなつてるのだらう、ヒョッと途中で金でも拾つたら、お上へ屆けるなんて殊勝氣は出さずに、早速それを敷金にして引越をしようと思つてるが、これて仲々そんなうまい事もないものだ、年のうちに

はと思つたのが出來なかつた、花の咲く迄にと思つたのも出來さうにない、せめて今度は夏までに是非引越したいものだと思ふが、それもどうだか？

十一月からかゝつた二葉亭全集の校正はやうやうアト一週間位でしまひになる、隨分割に合はぬ仕事をしよひ込んだものだ、

――然しお蔭で二葉亭といふ「非凡なる凡人」をよほど了解する事が出來た、

先月短篇一つ書いた、「道」といふのだ。これは來月かその次の號の新小說に出る筈だ、（センにやつておいたのは取戾すことにした、）

平凡な、そして低調な生活をしてゐると、文學といふ事を忘れてくらす日が三日に一日はある、然し忘れてゐても捨てはしない、これから徐々とやる積りだ、そして一度は僕の文學的革命心の高調に達する日が屹度來るものと信じてゐる………

去年の秋の末に打擊をうけて以來、僕の思想は急激に變化した、僕の心は隅から隅まで、もとの僕ではなくなつた樣に思はれた、僕は最も確實なプラクチカルフィロソフィーの學徒になるところだつた、身心兩面の生活の統一と徹底！　それが僕のモットーだつた、僕はその爲に努めた、隨分勤勉に努めた、そして遂に、今日の我等の人生に於て、生活を眞に統一せんとすると、其の結果は却つて生活を破壞になるといふ事を發見した、――君、これは僕の机上の空論ではない、我等の人生は、今日既に最早到底統一することの出來ない程複雜な、支離滅裂なものになつてゐる、――この發見は、實行者としての僕の爲には、致命傷の一つでなければならなかつた、そして僕は、今また變りかけてゐる、――確とした事ではないが、僕は新らしい意味に於ての二重の生活を營むより外に、この世に生きる途はない樣に思つて來出した。無意識な二重の生活ではなく、自分自身意識しての二重生活だ、自己一人の問題と、家族關係乃至社交關係に於ける問題とを、常に區別してかゝるのだ、

無論二重の生活は眞の生活ではない、それは僕も知つてゐる、然しその外に何ともしやうが無いのだから止むを得ない、

「生活それ自身がワナだ！」さう思ひ到つた時、僕は急にこの世の中から逃出したかつた、そして遂に逃出すことの出來ないワナだと思つた時から、僕は今迄より強くなつた、所詮のがれる事が出來ないのだから、そのワナにかゝつた振りをしてゐて、そして、自分自身といふものを、決して人に見せない樣にするのだ……つまらぬ事をかいた、自分の方の事許りかいて濟まなかつた、何となく君に手紙をかきたくなつて書き出したのだ、何れまたそのうちに、僕は今一寸外出せねばならぬ。頓首。

三月十三日夜　　　啄木

宮崎君

皆さんによろしく
君の近況もきゝたい、
岩崎君は？
並木にはちつとも逢はん、
澁民の者で、僕が弟々と呼んでゐた少年（中學一年迄修業、年十八位）今函館に行つてゐる、質屋の番頭にやとはれてゐるさうだ、君の世話で何かも少し氣のきいたところへ使つて貰へないものだらうか、少し傲慢なところはあるけれども、才氣煥發な、そして見どころのある少年だ、僕はもつと都合がいゝと呼寄せて學問させたいと思つてるんだけれども、それも出來ぬ、齋藤佐藏と言つて、僕が澁民の代用教員時代そいつの家の二階を借

りて住んでゐたのだ、
函館はまだ寒いだらうね、

×

手紙の來た日、すぐ返事を書く積りだつた。小包の着いた時も、すぐ返事を書く積りだつた。それ以來、毎日々々君へ返事を書くといふことを一つの樂しみにして暮らした。花は四日の間僕の机の上と佛樣の前とに飾つてゐて、今朝になつてすつかり枯れて了つた。北海道の花を机の上に眺めるといふことは、東京の如何なる贅澤者も思ひ及ばぬことである。それに反して、東京で書く手紙を函館で讀むといふことは、君に取つて畢竟何でもない。——何でもなくても可いね?!

君の手紙はなつかしい手紙だつた。手紙を讀みながら僕も一緒に大森濱の波の音を聽いた。あの波の音！ 僕が海といふものと親しんだのは、實に彼の青柳町の九十日間だけであつた。嵐のあとの濱邊の上を歩いたこともあつた。潮水に身を浸してもみた。秋近い五時が深く海面を罩めて、ガスの灰色の中から白浪の崩れて來るのを眺めながら、卷煙草を吸ふ女の背後から近づいて來るのを感じたこともあつた。砂山の頂に南國の木の實を埋めたことも忘れはしない。——All the sweet dreams sunk and disappeared into the deep past! 僕は君の手紙の上にひたと目を留めて、讀むでもなく讀まぬでもない幾分時を過した。色々の事が僕の心を掠めて去つた。

また悲しい手紙だつた！「一人になりたい！」君もさう思ふか？ 然し其の希望は、我々人間の抱き得る最も深い、最も悲しい希望であると共に、又、あらゆる我々の希望の中の最も不可能な希望ではあるまいか？「一人に！」それは我々全人類の負うてゐる運命と、その今日まで作り來つたところの歴史とを根柢から覆へすところの希望である。——惡く取りたまふな。僕が今迄如何に深く君と同じ希望を抱いてゐたかは、君のよく知るところである。

一人になりたいと思つてゐる男が細君に逃げられて泣いた。——若しも「一人になりたい。」といふ希望が我々の最も悲しい希望であるならば、同時に、この事實も亦我々の遭逢する最も悲しい事實の一つではあるまいか？

檢事のやうな眼を以て運命の面を見つめようぢやないか。「お前は俺の爲に笑ふ氣か、笑はぬ氣か」と言ひながら見つめようぢやないか。——僕は今見つめてゐる。僕はもう僕の運命なり、境遇なり、社會の狀態なり、乃至は僕自身の性格なりに對して反抗する氣力を無くした。長い間の戰ひではあつたが、まだ勝敗のつかぬうちに僕はもう無條件で撤兵して了つた。そして今、檢事のやうな冷やかな眼で以て「運命」の面を熟視してゐる。「俺の爲に笑ふ氣か、笑はぬ氣か」と言つて熟視してゐる。いくら熟視しても笑ひさうにないが、先方が笑はなければ、此方の眼も益々冷酷になるばかりのことだ。決して損はない。

然し此頃思ふには、「運命」といふ奴は決して左程恐るべき敵ではないらしい。どうもさうらしい。此方が冷やかな眼をしてゐれば、先方も冷やかな顏をしてゐるけれども、此方で先に笑つて見せさへすれば、どうやら先方でも愛想笑ひ位はしてくれさうだ。運命といふ奴も人情を持つてゐるとすれば正に斯うあるべきだが、僕には其處がまだ明瞭しない。從つて僕はまだ一度だつて笑つて見せはしない。先方で笑はぬ以上は何うあつても僕の方からは笑はぬことにしてゐる。

謎のやうなことを書いたが謎ではない。透徹し

た理性の前には運命といふ唯一人ある許りだ。運命と面を突き合してるといふ外に彼の生活は無い。君、[illegible]びを好む弱者の持つべき最良の武器は、透徹したる理性の外にはなかつた！

宮崎君のことを心配してる。手紙は書かないが心配してる。何うかならんかな？　ほんとに何うかならんかな？

吉野は？　朝鮮へ行くとかいふのは？

文學はやめる必要のない者と思ふ。やめるといふのは畢竟今迄文學を過信してゐた反動だと思ふ。我々はも少し人間の他の諸活動と平均のとれた待遇を文學に對して與へようぢやないか？　やりたくない時はやらぬ、やりたくなつたらやる。それで好いぢやないか？「文學的生活」に對する空虚の感については、今月の「新小説」に此とばかり書いた筈だ。

君は好い兄弟を持つてゐる。僕はさう思ふ。

妹さんは何うしてるね？　あの人は立派な女になる人だ。女學校を卒へたら必ず東京へ出し給へ。出すについての方法はその時になれば屹度出來るよ。それは僕は保證するよ。さうして今から「東京へ出す女」として教育したまへ。「次の時代」の爲に我々も或程度までは犧牲にならうぢやないか？　あの人はたゞの人の細君とするには餘りに惜しい人だ。

緑郎さんには二十五になるまで世の中を歩かせるが可いね。僕はひそかにさう思つてる。若しも彼の人の持つてる石片が寶石であれば、二十五になつた時、疲勞と自墮落と惡智慧の代りに、驚くべき文學的手腕を持つて歸つて來るよ。獅子の子は千仞の谷に落せといふぢやないか。

「創作」は今度自選歌號といふものを出すさうだ。僕へも今日催促に來て、珍歌二十三首と十七の時の寫眞とを持つて行つた。先月「昴」の新年相談會が上野の精養軒であつたが、僕は故意に出席しなかつた。それで可いね？

先月の末からかゝつて「我等の一團と彼」といふものを書いてる。もう六十何枚書いたが、まだ三十枚位はかけさうだ。書いて了つて金にかへるまでに、若し僕にも一度これを書き直す時間が有るとすれば、これは僕が今迄に於て最も自信ある作だ。「道」は僕が或る目的を置いて書いた小説の最初のものであつたが、後に至つてその目的の置き處の誤まつてゐたことを發見した。從つて全然失敗してゐた。今度の作では、僕は「道」に於て單に一般的に老人と青年の關係に置いた目的を、もつと極限して現代の主潮に置いた。――書きあげもしないうちから餘り講釋をするのはやめるが、兎に角僕はコツ／＼と少しづつの時間で毎日いくらかづつ書いてゐる。昨日までは袷を着て汗を流しながら書いた。――東京はもう夏だ。夏の東京は好いぜ。も少し經つと、大學の前へズラリと夕刻から植木屋の店が出る。カンテラの煙が、いろ／＼の木や花にからまる。その前を浴衣を着た幾萬の男女がゾロゾロ／＼／＼と歩く。――歩かなくては暑くて寢られないのだ。どうだ、この夏やつて來ないかね？　それまでに轉宅するよ。

先月轉宅するつもりで宮崎君から金を送つて貰つたら、見つけた家を人にとられて、それからまた探してるうちに、僕と節子が何方も健康を害してとう／＼いつの間にか金はなくなつた。僕のは畢竟風邪に過ぎなんだのだらうが、無理をして出社するので、夕方は毎日熱が出て困つたよ。三十九度位に上るんだものね。歸つて來ては發汗劑にアンチピリンを飲んで、一晩汗をとつて、翌朝になると卵なんかで元氣をつけて・は出社するんだ。運命と睨めつくらをする所以だ！　然し今はもう何方も可い。おやぢが眼病を患つてる。脚氣の氣味で歩けなくなつた

のは小豆を食はしたら大分直つたやうだ。いろいろ事故が起るもんされ。妻は近頃迷信を起して「これは屹度家が悪いのだらう」と言つてゐる。今月は賞與の貰へる月だからそれで愈々轉宅するつもりだ。やつて來ないか？　僕の案内法は一手販賣の新案特許だ。兩國橋や泉岳寺なんかへは伴れて行きやしない。獨りで體操をする玩具を賣る店から消閑貸間探し法、電車の只乗り、木戸錢三錢の芝居、チョイト〳〵、梅干も候、焼鳥の立喰ひは申すに及ばず、凡そ東京といふものを理解するに必要な場所へは何處でも御案内する。その代り御馳走はしない、しないぢやないが、出來さうがない。僕の社に行つてる間は、暑いから晝寝をするなり、涼しい圖書館へ行つてゐるなり、それは君の御勝手だ。長くなつた。さよなら。おつ母さんよろしく。此方の皆もよろしくと言つてる。

四三、六、十三日

岩崎君　　　　啄

僕も函館へ行きたいねえ、行きたくなつたよ。夏休みは一週間づつ二度あるけれどもなあ。

[illegible]なんて子はまだ頭の中で熟しない。

×

拜啓、とんと御無沙汰に打過し居候ふうちに世はいつしか秋の半ばと相成候、何時も乍らの怠慢何とも御申譯なき次第、平に御海容の程奉願上候、先生には相不變御清適の御事と拜察、御惠投を忝うする紙上にて時折の御筆の跡を拜見しては色々と御近況遙かに想像仕り居候、故國はも早や紅葉の期に入り候ふべく、一計先生式に申せば鑛山が自然のイルミネーションを施すの日も近かるべくと存候、それかこれかと思廻せば、戀しきは今も昔も津志田の芋子の味、舊櫻山の社務所跡を借りて南瓜煮て喰ひし少年時代の歌會の事などまで覺束なく思出でられ候、何と申しても盛岡は矢張好いところに候、發展などせずに、不來方城が昔の儘に萋々として草の繁つてゐた方更に好かりしかも知れず、但しこれは小生の内緒の述懐に候、何時かは一度歸つて見たいものと存居候へど、先づ〳〵これは當分お預りの問題、殘念に御座候、

東京も數日來白衣を着たる人目につかぬ樣に相成候、塵だらけの空氣乍ら、相應に天も高く見え、何とはなしに身も心も引緊るやうにて、素袷肌に心地よく、何か書くならこれからといふ時候に御座候、氣も張りも脱けたやうな一夏を過して、小生も近頃は多少元氣恢復、やるだけの事はやつて見る氣を起し候、唯困り候ふは、荊妻上京以來殆んど一日として健康なりし事なく、先の醫者は胃腸が悪いと申し候ひしが、薩張捗々しからぬ爲別の醫者に見せ候所、局所の肋膜炎とかの由、老母が居り候故炊事の方の心配はなく候へど、藥餌の料は足らず、子供は暴れる、誠に早や致方なく御座候、小生は二十四に候へど、舊暦の數へ年では二十五、厄年だからと母の申し候、そんな事はない筈に候へど、兎に角厄年などいふ年は無い方がよく候、呵々、

この手紙、普通の手紙ならばまだ〳〵申上度き事澤山有之候へど、實はお願ひの手紙に候、潛かに先生の御意見を伺ひ奉り度事有之候、失禮の段は幾重にも御容赦被下度候、實は小生唯今佐藤北江氏のお世話にて東朝社に出て居り、二十五圓貰ひ居候、これではどうしても足らず候、現在は表記の床屋の二階二間を借りて居り候へば、自分でも實は感心する位切詰めた生活致居候へど、それでも足らず候、

殊に荊妻の病氣、尤も日増少し宛よくなり居候、あと二月も氣長く藥用と養生をすれば直ると醫者申候へど、今のところ殆んど閉口の體、以前は困れば借金するを何とも思はぬものに候ひしが、近頃それは出來るだけ罷め居候爲、寧ろ滑稽に近き事件毎日の樣に家庭内に起り候、されぱと言つて、まとまつた創作などは一定の社の方の務めあれば迚々出來申さず、それで色々勘考仕り候ふ上にて思付き候ふは、毎日通信を書いて送ることにして地方の新聞よりいくらか貰ふ工夫あるまじきかとの一案に御座候、これだけの事ならば毎朝新聞を讀んでから一時間か一時間半の時間あれば出來る事故、さして苦痛にもある間敷と存候、それで成るべく多方面の事を(見、聞き、又は新聞の燒直しにて)通信したきものと存じ候、報酬は、無論いくらにても生活のたしにさへなればよいといふ程度にて宜敷いのに御座候、日報には現在「東京だより」もある事故、如何かとは存じ候へど、先生の御指金にて、小生をお救ひ下され候ふ御積りにて御採用の事叶ふまじく候や、誠に〱御申譯なく候へど、萬一出來さうの事なら可然御取計ひを仰ぎ度偏へに願上奉り候、尤も御採用被下候ふ上は、決して怠け申すまじく、又成可「東京だより」と衝突せぬ樣の手心にて材料を選び毎日一段位、(但し日曜は休み)御送り致度き積りに御座候、

右用事ながら御高見奉伺候、先は御願事迄　草々頓首

九月二十八日午後

石川啄木拜

新渡戸先生　御侍史

題は「百回通信」とし、百回書きたら又百回といふやうに致さんかと存居候、「國民」の「東京だより」が差當りのお手本に候、

×

妹よりも姉の方が矢張先だつた、せつ子今曉二時大學病院の產婦人科分室で男の兒を生んだ、京子の時も輕かつたさうだが、それよりももつと輕かつたと言つて本人が驚いてゐる、何方も至極健全、殊に赤ン坊は大きい、同じ夜中に生れた三人の子供のあつた中、一番大きいさうだ、何と名をつけたものかと只今思案中、

眞白なる大根の根のこゝろよく肥ゆる頃なり男生れぬ

十月の朝の空氣に新しく息吸ひそめしすこやかの兒よ

十月の產病院のしめりたる長き廊下のゆきかへりかな

先日丸谷君に逢つて社會主義の議論をした、それから並木君に半年振で逢つて函館の消息をきいた、仲々盛んらしいね、行つて見たかつた。並木丸谷と僕の三人で近々某所に一大夜會を開き、同時に假面會の本部を東京におき、函館のを支部と命名する動機を提出して早速可決確定する事になつてゐる

秋になつて皆健康になつた。僕も耳鳴りがしなくなつた、どうも急がしい、今月から三日に一晩の夜勤、二葉亭の仕事、歌の選、まるでヒマがない、歌壇は莫迦に景氣が可い

函館に行つてみたいね、どうも行つてみたい、來年は是非行きたいと思ふ、君も來年の花の時分に奥さんとお子さんと三人づれでやつて來ないか、それまでには僕も少し生活狀態を改造するつもりだ

エヽト、何だつけかまだ書くべき事があつたつ

けが、どうも思ひ出せなくなつた、何だつたらう、どうも思ひ出せない、いづれまたそのうちに

十月四日夕　　啄木

郁雨兄

奥さんの手紙今朝ついた、病院に持つて行つてやつた。

思ひ出した〳〵、省三さんのことだ友達の人は僕のゐない時許り來たので甚だ遺憾だつた、辭書二冊はかつた、それから五圓預つてあるが、あれはどうしよう、金で送つた方がいゝか、何か買物でもあるか、省三さんにきいてくれたまへ

×

君の手紙を今讀んだ、ぢき今だ、便所へ行つて歸つてくると、君も踏んだ筈の梯子段の下から三段目のところに載つけてあつた、梯子を上り乍ら封をきつて一分間ばかりのうちに讀んで了つた、間髮を入れず返事をかく

（返事といつたところで何も書くことはない、お祝ひ有がたう、産婦と子供は明日あたり退院する、どつちも丈夫

君の希望通り男でさうして丈夫だ、名前は眞一とつけた、吉野君の長男も同じだつたか知れないと思ふ、考へたけれど恰好な名がなかつたから、社の編輯長の名を無斷で盜んだのだ、肥滿した、さうして氣持のいい位男らしい人だから、おれの子供もさうなつてくれると可い、僕も近頃何とかして肥りたいと思つてゐる

大硯と親しくなつたといふのは、何だかうれしいやうな氣がする、一しよに飮みたい、よろしく言つてくれ玉へ

難產に難產を重ねてゐた僕の歌集は、不思議にも今度眞一の產婆をつとめた、眞一の生れた日二十圓で東雲堂に賣つた、今原稿書替中、來月中頃までに出る、名前は「一握の砂」とあらためた、可い名だらう、僕はどこまでも僕式だ、一首三行に書くことにした、今度新しく作つたのが大分ある、北海回顧の歌（百首餘）は「忘れがたき人々」といふ題で一まとめにして入れる、いかに文學をイヤになつた君でもこれだけは興味を有つて讀まずばなるまい、若崎君が幼時橋の欄干に糞を塗つた話まで歌つてあるからね

君が講談をよむ氣持は僕にも解る、僕の頃（？）だつたが、僕は近所の貸本屋にある講談物を全部讀んで了つた、然し君は今君の本來に歸つたといふが、それは解るもんか

函館には行きたいと思つてるよ、さよなら

［十月］十日午前　　啄木

郁雨大兄

少し天機を洩らさうか

○

やめた〳〵

序文は藪野椋十が書く、これも所謂僕式な思ひつきだらう

×

久し振りのお手紙なつかしく拜見いたし候、早速お返事差上ぐべきのところ、荊妻分娩のことありて延引、御申譯無之候、御無音の一件については何卒この際を年期にして精算の上帳消しに願度、多謝々々、

兄は昔乍らに頗る御謙遜被遊候へども、小

生は兄の御現狀に對して却つて敬意を拂ひ居るものに候、これは小生年來の惡癖なる臨機應變の出鱈目には御座なく、むづかしき理窟は存せず候へども、廣き意味に於て自己の生活といふものを確立するといふことは人間の成功なるべきかに存じ候、多年放浪の境遇にゐて境遇にも思想にも根柢といふものの動搖を常に感じ來れる小生にはいつでもそんな氣が致し候、いろ／＼の不合理を壓搾的に集めたる如き都會生活を致し居りては一層その感を深うすることにて、今迄も心より兄を羨みたること一再ならず、小生の胸底には今猶嘗て考案したる地方新聞の見本なる者藏せられ居り候、小生の地方思慕の情はまた啻に生活の確立といふ事よりのみならず、現在の都府なるものが誤れる社會組織の結果なりてふ思想に關係いたし候、それは兎も角小生は此機會を以て兄に對する敬意を内密に發表する幸福に遭遇したるを喜び候、何卒今後小生を見ること、かの多くの文人雅客と同一ならざらんことを希望いたし候、

さてお中越のコスモス會の一件に候が、小生は歌をつくることをよい事とも惡い事とも思量せず、若し會の人々にして、自分等が詩人なりてふことに空虚なるアムビションを滿足せしむるやうの人々ならば寧ろ不贊成に候へど、兎も角も我が盛岡にそのやうの會の在るといふ事はおもしろき事に候、右は多分兄も全然同意せらるゝところと存候、

コスモス會に關する事に於ては、小生は一切を兄に御委任申上候、御迷惑かも知れず候へど、何卒そのつもりにて會の人々にお話し下され度、兄の承諾は乃ち小生の承諾也、小生の出來うると思はるゝ事は何によらず兄に於て御承諾被下度、それにて小生は少しも苦情申すまじく候、

たゞ小生が「歌人」たることを名譽とも光榮とも存ぜざる者なることは、兄に於て了解しておいて頂き度候、文學に對する迷信は數年前に於て既に小生の心より消え失せたり、文學的活動が他の諸々の人間の活動より優れりといふ理由一つもなし、といひて殊更に輕蔑する譯でもなけれど、――而して其處には色々の議論あることなれど――兎も角も小生は、小生の歌の他人の歌よりも優れむことを希望する者には無之、歌を歌はざる小生の他の歌を歌はざる人人より劣らんことを憂ひ居るものに候、文學者たらむよりも先づ人間たらむことを欲する者に候、現在の小生の心持は、色々の意味に於て、歌を捨てたる兄より同情をうけ得べき多くの理由ありと信ず、

右の心持は多分小生の歌のうちにも現れ居ることならん、歌集『一握の砂』來月上旬東雲堂より發行することになり居ることに候が、その時は何れ一本を寄せて提灯を叩いて頂くべく候、――批評といはずして敢て提灯といふ、小生の歌を作るは金のためではなけれど、これを雜誌に寄せ、本にするは主として經濟上の理由に基くが故に候、呵々、

瀨川君！　小林君！　往時夢の如し、盛岡に行つて見たし、何とかして兄の新聞を見せていただく工夫はなきものにや、

まだ書きたき事有之候へど、出勤時間さし迫り候まゝ擱筆いたし候、今度生れたるは男の子にて眞一と命名いたし候、「一握の砂」が產婆の役をつとめたる次第に候、草々

○

十月の產病院のしめりたる
長き廊下のゆきかへりかな

○

十月の朝の空氣に新しく息
吸ひそめし赤坊のあり

○
眞白なる大根の根のこゝろよく
肥ゆる頃なり男生れぬ

十月十日午前　　　　　　啄　木　拜

岡山大兄　御侍史

×

拜復、御弔詞忝く存じ奉り候、お言葉の自然の力、あまりの不思議に瞠目するのみと申さんか、あつけにとられたりと申さんか、悲しみて悲しみ深く到らず、さりとて嬉しき事はちつともなく、誠に言ひ難き妙な氣持に御座候、今日午後淺草のとある普請中の寺にて細雨の中に佛葬をいとなみ、老父と一友を煩して火葬場に送り候、子供の事に候へば多分今頃は早や灰となり候頃にや候らむ

お送り下され候ふ見本組、矢張四六版に願ひたく、體裁の儀は朱書いたし置候、仰せの如く序文は書きかへねば都合をかしく候に付、あの一枚だけ一寸お送り戻し下され度願上候、

それからこの組方は土岐氏の "NAKIWARAI" と同じ大いさ(四六版ニテ竪五分許リ短カキ)でなければ少々變なるべしと存じ候に付、製本の時は忘れずにお指圖被下度、また紙は少しは色が黑くてもよろしく候に付ラフの成るべくザラザラするのに願度候、表紙は「泣笑ひ」と同質同色、但し本紙は同書よりも厚くすること、製本は四角、背には何も書かざること、それから表紙に貼りつける繪は名取氏の方にて出來次第お送り致すべく、包紙は白地へよき程のところに赤色にて横に

一握の砂　歌集
石川啄木著
東雲堂版

とすること、それから見返しは本文と同質の紙の厚目なのを無地にて用ふること、右件々何卒願上候

それから十一月十五日に初號の出る雜誌「曠野」(麹町富士見町六の八)が一頁だけ無料廣告出してくれると申し候間右へ廣告文及び木版お送り下され度、同誌へ既にお送り下され候ふ由の廣告はお取消被下度候、猶、朝日新聞へ出す廣告文は一應御相談被下度願上候、右不取敢當用まで草々

十月二十九日夜十二時五分前　　　　啄　木　拜

西　村　兄　侍史

×

御香奠多謝、早速、法名「孩兒」と書かれた小さい位牌の前に手向けてお線香をあげた、

今日は服喪休暇の最終日だ、今日になつてもやつぱりまだ變な氣持がする、氣がぬけたといはうか、物足らぬといはうか、さびしいといはうか、どうも變な氣持がする

死んだ晩は父と僕とでお通夜した、明くる二十八日は急がしかつた、寺もなければ、習慣も違つてゐる、隨分まごついた、それでも夕方までには準備が出來て、夕飯がすむと間もなく家人だけで入棺した

入棺したばかりのところへ丸谷君が來てくれた、丸谷君が歸ると原稿貰ひの雜誌記者が二人、それとも知らずにやつて來た、そこへ社から人が來てくれた、並木君が來た、社と並木丸谷二君の外には誰へも知らせなかつた

並木君を葬儀委員長に頼んだ、翌二十九日は朝

から小雨が降つてゐた、土曜日だつた、十二時半頃に並木君と丸谷君が來てくれた、老父が棺を抱き、京子が位牌を持つて並木君に抱かれ、四臺の俥が今出ようとするところへ、一臺の俥が大急ぎで來た、前夜來た雜誌記者から聞いて吃驚して來たといふ與謝野氏だつた、俥は五臺になつて雨の中を淺草の寺に向つた

與謝野氏は寺から歸つて行つた、遺骸は並木君と老父とが守つて一里半許りある火葬場へ向つた、丸谷君が京子を抱いて、僕と二臺の俥がまた雨の中を家まで歸つた

やがて火葬場からも歸つて來た、その晩は二友と十時頃まで話した

それが僅か三日前の事だが、何だか二月も前のやうにも思へる

三十日に老父が火葬場へ行つて骨を拾ひ、寺に納めた

どうも變な氣がする、色々の意味で打擊だつた

せつ子は、惡い方ではないが服藥をつゞけてゐる、出來るだけは養生もさしてゐる、晝には起きてゐるが時々横になつてゐる、二三日の中に醫者を變へようと思つてゐる

もう今日から十一月だ、なんて早いんだらう、もう大晦日が目の前に來てゐる、また一つ年をとるのだ

子供の生れた日の朝に本屋に渡した歌集が、葬式の晩に見本組が出來て來た、體裁は丸谷並木二君と相談した、十五日と本屋はいふが二十日頃でなくちや出ないんだらう

文部省展覽會は並木君も丸谷君も見たさうだが、僕はまだ見ない

吉野君から東京へ來たいと言つて來た、ある有力な人に運動を頼んである、出來ると可いと思つてゐる、出來さうだとも思つてゐる、岩崎君も來ればいゝなア、さうして君は春と秋とを東京で暮らすといふやうになるといゝなア

僕は疲れたくないと思つてゐるが、矢張疲れてゐるらしいね、子供が死んでつく〴〵さう思つた

十一月一日　　　　啄木

郁雨兄

お子さんと奥さんはどうだね

御兩親にもよろしく、それから省三さんにも

×

すぐに返事を書きたかつた、また書かうともした、然しとう〳〵今日迄書けなかつた、近頃僕の頭は疲れてゐる、おつくうだ、直ぐやめたくなる、新年號の約束でそのため破約してしまつたのもある、書きたい事は澤山あるのだが書けないのだから仕方がない、何とかして夜勤でもやめる工夫をしないことには、身體が續きさうでないやうな氣がして來た、然し隔日へやるのは乾度二十五日頃までに屆くやうに送る、大硯病客からも手紙を君のと同じ日に貰つたが、まだ矢張返事を出さずにゐる、よろしく、

おや〳〵、本題が後になつてしまつた、僕は君のあの手紙を見、さうして新聞に載つた君の文章と廣告とを見た時程、この數年の間に最も心強く感じた事がない、これは噓いつはりもなく正直に言ふのだ、大丈夫だ、よし〳〵。

おれは死ぬ時は函館へ行つて死ぬ—その時斯う思つたよ、何處で死ぬかは元より解つた事でないが、僕をして斯う思はせた君の深い同情に對しては、僕は實際何とかせねばならぬ位有がたく思ふ、僕の心を諒とせよ、

大硯もいゝ男だなア、僕は大硯の處へも一部送るやうに本屋に言ひ附けてあつたのだが、アノ手紙を書いた時はまだ着いてゐなかつたと見える、然しもう着いたらう、

君の批評を讀んで、（さう〳〵、君、どうしたのか十五日の新聞、乃ち君の〈一〉の載つてる筈のが、僕のところへ來ない、途中でどうかしたのだらう、この手紙つき次第日々社へ電話をかけて一枚送らしてくれ玉へ）君が眞向から書いてくれるのが何より心持が可い、何しろ歌集を二號標題で批評するといふ事が、明治の新聞に未曾有なことだ、況んやそれを何日も〳〵續けるといふ事をやだ、更に況んやそれを最も人の目につく第二面に載せるといふ事をやだ、田舍でなくては出來ぬ事でもあらうが、僕は矢張死ぬ時は函館で死にたいやうに思ふ、

いつだつけ、丸谷君から君が演說の修行をしてゐるといふ話をきいて嬉しかつた、君を議會に出さうぢやないかと僕は戲談に言つた事があつたが、然しそれは戲談ぢやない、君の進むべき路は矢張其處だよ、

昨日社から賞與を五十四圓貰つた、子供の葬式、野邊地の老僧が死んで父が行つて來た時のいゝ、おくれ、それから僕の君も知つてる筈の下宿屋ののこり、そんなのを拂つたら今朝はもうない、この賞與の計算は何う勘定しなほしてみても二十五圓許り足りない、僕の頭は暗い、つくづく厭になつた、來年から家計の獨立を謀らうと思つて、月十圓の金が欲しさに夜勤もやつた、然しもう厭になつた、年でも改まればまた元氣も出るかも知れないが、少くとも今の所では僕は何もかも厭だ、一年間保險付といふ枕時計を去年の十月買つたつけが、一年過ぎたら正直にも先月から狂ひ出した、止つて〳〵しやうがないので、シコタマ石油を注してやつたところが、今度は一時間に十五分から二十分位進む、狂つた時計に對して僕には悲しい思ひがある、油！　油！　油？　君、僕はどうしても僕の思想が時代より一歩進んでゐるといふ自惚を此頃捨てる事が出來ない、若し時間さへあつたら、乾度書きたいと思ふ著述の考案が今二つある。一つは「明日」といふのだ、これは歌を詠ずるに託して現代の社會組織、政治組織、家族制度、教育制度、その他百般の事を批評し、昨日に歸らんとする舊思想家、今日に沒頭しつゝある新思想家——それらの人間の前に新たに明日といふ問題を提出しようといふのだ、も一つは「第二十七議會」といふのだ、これは來年の議會を傍聽した上で、今の議會政治のダメな事を事實によつて論評し議會改造乃ち普通選擧を主張しようといふのだ、おや〳〵もう紙が盡きる、皆さんへよろしく、節子は心配はないが藥はまだ飮んでる、（分娩以來半月許り中止したつきり）

十二月二十一日　　啄木

郁雨兄

×

君、とう〳〵今度も亦君に迷惑をかけてしまつた、何時でも今度ばかり〳〵と思ふのだが矢つぱり思ふやうにいかない、それは僕にはイザといふ場合に賴む人が君の外に無いからでもある、また誰に頭を下げるよりも君に下げるのが快いからでもある、濟まない事だとつく〴〵思ふ、意氣地ない事だとつく〴〵思ふ、

金を握つた時でなければ頭の輕く明るくなることのない生活については、君は幸ひにして知るまい、實際眞面目に自分の心を檢査して見るに、僕の心の明るくなり、輕くなるのは、殆んど全く、金のツラを見た時と、友人なり未知の人なりの自分に對する好意が手紙とか新聞とか雜誌によつて表はされたのを見た時の外にはない、「自己を恃め」と君はいふかも知れない、僕も恃みたい、然しその自己が、既に健康の心配

を惹起すほどの勞役に服してゐながら、猶且少しでも僕の苦痛を減じさしてくれないのだから仕方がない、僕の今迄毎月取つた金は、一家の生活費には不足な位ではない、然しそれが前々からのおくれで甚だ不規則になつてゐるので、月の五日頃になるともう子供の小遣も僕の電車賃も無くなるといふ狀態だつたのだ、君、僅か十錢か二十錢の金の用途に就いて一時間も二時間も苦い面をして考へねばならぬとは、あまりに不愉快な生活ではあるまいか、さういふ事が毎月何回となくあるのだ、それで、不時の事がよしや無いにしても、月末に入る金は月末拂ひの諸費途とそれら小さいやりくりの尻ぬぐひ及び借金の月賦とにフイになつて、その月もまた同じ事を繰返さねばならなくなる、僕は今度の一月からこれを何とか救濟する方法を講じて、一ケ月間の家計の獨立を企てようと前から考へてゐた、その爲に賣るべく書きかけてある原稿もある、それは然し今迄の僕の時間と健康とが完成せしめなかつた

文學士金田一君の收入は月四十圓(講座に休み有れば更に一日一圓の割にて減ず)である、さうして月十圓の家に住み、これといふ不足なく夫婦樂しく暮してゐる、僕が秋以來の月收は歌壇夜勤の手當共四十三圓であつた、乃ち中學を卒業しない僕の方が三圓から五圓位迄多く取つてゐる、然し兩家の生活は全く比べ物にならぬ、これ何に原因するか、君、君は僕の歌集の評の中に社會主義は夢だと書いてあつたが、少くとも僕の社會主義は僕にとつて夢でない、必然の要求である、金田一家と僕の一家との生活を比較しただけでも、養老年金制度の必要が明白ではないか

この年末の僕一家の支出豫算總額は百三十圓(この内約三分の二は、妻の約三ケ月の醫藥料下宿屋その他に對する借金也)であつた、それに對する收入には二十五圓の不足があつた、その二十五圓は君の好意によつて補はれた、僕はそれで可い筈だつた。然し愈々時日が切迫してくると共に、僕の立てた豫算は幾多の缺點を暴露した、餅も搗かねばならなかつた、年始狀も出さねばならなかつた、質も出さねばならなかつた、質の利子も拂はねばならなかつた、火鉢の緣がとれたり洋燈がこはれたりした、子供の下駄も買はねばならなかつた、老人達にも幾分の小遣を上げねばならなかつた、かくて原稿紙に書いておいた豫算案は赤く黑く幾度か修正された。さうしてとう／＼また十五六圓の不足が正確になつた、數ケ月前から妻と母とが口やかましく言つてゐた僕の衣服の問題は、かくてペッソリ消えた、二人は昨日から僕の古物を綿入に仕立直してゐる、僕は平生衣服なんかどうでも可いと笑つてゐる、笑ふのは決して正直ではないが男にはそれだけの諦めがあり得る、然し女にはさう笑へないらしい

以上不愉快な事を書きつらねた、生活の不安は僕には既に恐怖になつた、若しかうしてゐて老人でも不意に死んだらどうして葬式を出さう、そんな事を考へて眠られない事すらある、子供にしたところで、小學に行くまで此の儘に置くと(君は僕の家族の事をよく知つてゐる筈だ)決して順當な發達をしさうにない、出來るならこれも幼稚園にやりたい……君、僕のこの一年間の惡闘が、僕の現在をどれだけも救はぬのみならず、また僕の將來に何物も貢獻してゐない、僕はこの事を感じた、そこで僕はこの一月から少し方針を變へようと思ふ、さう思つて僕は、二葉亭の仕事のあるを口實に(口實ばかりではないが)、夜勤をやめることにした、今迄は生活の事許りを尊重して來たのを、今後は生活と共に健康と才能をも尊重しなければならぬと思ふ、さうしてこの才能を尊重するとい

ふ事を出來るだけ生活の尊重に一致させて行きたい(つまり原稿をかいて賣りたい)僕の今迄の收入は

月給二十五圓、夜勤十圓、歌壇八圓

計四十三圓

だつた、一月以後は

月給二十八圓(これだけ今度昇つた)歌壇八圓

計三十六圓

といふ定收になる、三十六圓あれば一家五人の生活費は間に合ふ、たゞ不足なのは下宿屋に對する月賦五圓(今迄やつたのは殆んど利子にしかなつてゐないさうだ、何時までつゞくことやら)と社に於ての辨當料とか煙草代とかその他の小遣である、

君、君は右の新方針に贊成してくれるか、君の厚意を思ふだけそれだけ、何だか僕の狀態をなるべく詳しく知らせねばならぬやうな氣がしてこゝまで書いた、

佛派卓三は君の弟君省三さんだと睨んだ、最初の一回しか送つてくれないがアトも是非見たい、それから君の分の第一回の載つてる新聞も送つてくれ給へ、切拔帳に貼るわけにゆかないので困つてゐる

新年になつたら元氣な手紙を書きたいと思ふ、どうもまだ頭の調子がホンタウでない

十二月三十日午前　啄木

郁雨兄

僕は然し來年は屹年いゝ年だらうと思つてるよ、御幣をかつぐやうだが今年は後厄だつたからなア

明治四十四年

×

瀬川君、なつかしい手紙だつた、年明けてから一度も遊ぶ暇の無かつた處、昨夜は二人の友人に誘はれて散歩に出かけた、出かける時入口で君の手紙を手にした、さうして直ぐに封を切つて讀みながら歩いた、歩くに隨つて街燈の影が手紙の上を明るくし、また暗くした、僕の住所を態々東雲堂に問合してくれたといふ處まで讀んだ時、何だかもうこの儘家に歸つて、直ぐに返事を書きたいやうな氣がした、それだけ君がなつかしく、また君の温かい情に感謝された、本郷三丁目の停留場に立つた、夜風にはためく長い手紙を凍つた電車線路になびかせながら、靜かに卷き納めた、卷き納めて、さうしてそれをイムバネスのポケットに藏つた時は、丁度、あの澁民の寺堤(用水池)の土手で、君がよく盛岡や江釣子村から寄越してくれた手紙を讀み了つた時のやうな氣持になつてゐた、

「さうだ、瀬川君があつたのだ!」と僕は電車の中で思つた。それは此頃僕が、或人に京都に對してはさつぱり憧憬を持つてゐないと話した事についてであつた、京都には上田氏がゐる、薄田氏がゐる、茅野も行つてゐる、然しそれらの人々は何だか僕と親しくなれない人々だ、京都の山、京都の水、京都の女は美しいといふが、僕は現在その「京都」といふ固有名詞によつて連想される純日本的の趣味に對して、殆んど何の愛着を感じてゐない、京都に對して憧憬がないと言つた僕の言葉には僞りがない、然しその時、濟まない事だが、君といふ人の京都にゐることを僕は忘れてゐたのだ、「さうだ、瀬川君がゐる!」僕はさう思つた、君、僕はまづこの事について君にお詫びをしなくてはならぬ、

家に歸つたのは遲かつた、腹が一杯で、さうして多少の醉ひも殘つてゐた、僕は妻の酌んでく

れた茶を啜りながら、青塗の瀬戸の火鉢にもたれて、もう一度君の手紙を讀んだ、一瀬川君も變つたらう、然し僕も變つた——さうしてその變り方が多分同じだ。」さう思ひながら昨夜僕は眠りについた。

二人の變り方が同じだといふ事について、今日先づ書きたい、君は段々詩に遠ざかり、愛着が薄らいだといふが、それは僕にしても同じである、僕の今作る歌はもう昔我々の作つた意味に於ての歌ではない、君は詩を作らなくなつた、僕は詩を作れなくなつた、昔した單純な戀を再び繰り返すことの出來ない如く、昔作つたやうな詩——今も若い人の作るやうな詩を作れなくなつた、自分の感情を弄んで喜んだ時代とその當時の心持は今でもなつかしくないではない、然しもう僕等には、そんな努力は馬鹿氣てゐて二度と出來ない、

僕の今作る歌は極めて存在の理由の少いものである、僕はその事をよく知つてゐる、言はゞ作つても作らなくても同じ事なのだ、君は今日記といふものを書いてゐるかどうか知らないが、僕の今の歌は殆ど全く日記を書く心持で作るのだ、日記も人によつて上手下手があらう、然し日記は上手下手によつて價値の違ふものではない、さうしてその價値は全くその日記の持主自身の外には關係のないものだ、「僕はかう感じた(或はかう考へた)」これ僕の今の歌の全體である、その外に意味がない、それ以上に意味がない、

隨つて作つても作らなくても同じものである、さうしてこの、作つても作らなくても同じだといふ事は、決して議論ではない、實際に於て僕は、作りたいやうな氣持のしない事が何日、何ケ月つゞいたとて、少しも何とも思はない、平氣である、たゞ僕には、平生意に滿たない生活をしてゐるだけに、自己の存在の確認といふ事を刹那々々に現はれた「自己」を意識することに求めなければならないやうな場合がある、その時に歌を作る、刹那々々の「自己」を文字にして、それを讀んでみて僅かに慰められる、隨つて僕にとつては、歌を作る日は不幸な日だ、刹那刹那の僞らざる自己を見つけて滿足する外に滿足のない、全く有耶無耶に暮らした日だ、君、僕は現在歌を作つてゐるが、正直に言へば、歌なんか作らなくてもよいやうな人になりたい

君は僕を解してくれたといふ、僕もさう信ずる、これだけ言へば君は更に僕の歌に對する態度も解つてくれたに違ひない、たゞ僕には其處に一つの悲しみがある、僕の歌は全く他の歌人の歌と意味を異にしてゐるのであるが、それでも兎も角歌といふものを作つてゐる以上、人から歌人と見られることもあれば、自分でも歌人らしい氣持になることがある、僕は他人から詩人扱ひ、歌人扱ひされると乾度一種の反抗心を起す、「おれはそんな特別な珍品ぢやない、おれはたゞの人間だ、立派な一人前の人間だ」と心に叫ぶ、が、すぐその後から、他人の歌と自分の歌とを比較してプライドを持つたりする、僕は歌を作るために生活してゐる人の生活に對して殆ど何の尊敬も同情も持つてゐない、さういふ生活は片輪だと思ひ、空虚だと思ふ、隨つてさういふ人の歌と自分の歌とを比較したとて何にもならぬことをよく知つてゐる、比較するといふのが既に自分を卑下する所以だと思つてゐる。それでも時々比較する、感心することもあればプライドを持つこともある、これ僕の悲しみである、同時に弱味である、この弱味は、更に時として僕に、イヤでもオウでも何日までに何首作らねばならぬといふやうな約束を承諾せしめる・・・

〰〰〰〰〰〰

君は瀬川君であり、僕は石川一である。君は醫

家たらんとしてその專門の學術を修めてゐる人であり、僕は一新聞社の雇人として生活しつつ將來の社會革命のために思考し準備してゐる男である、その石川一が右に言つたやうな心持で歌を作り、その歌を金に代へんとして一冊にした、金に代へると同時に、自分の感じたこと考へた事に同感してくれる人を求める心も無論あつた、友人たる君はそれに同感してくれた、しかも非常な同情を以て同感してくれた、さうしてその同感を遙かに僕に告げてくれた、

僕は心から君の手紙を感謝した、しかもそれが、僕の歌の巧いとか拙いとかいふ事、或は三行に書いたことの是非とか他の歌人との比較上の得失とかは一切スキにして、たゞ全くそれらの歌に現はれた僕自身に同感してくれたといふことに、僕の滿腹の感謝があつた、

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

君、僕は三十九年の夏以來盛岡も澁民も見ない、年々一度彼の地を見舞ふ君は幸福である、新聞は毎日と日報が來るから讀んでゐるが、盛岡も大分變つたらしい、岡山は毎日の編輯長をしてゐて、今度の歌集に對して三日間ばかり批評してくれた、僕等と同じやうな變り方があのおとなしい男にもあつた、小林は體が惡くて醫專を卒業もせずにブラ〳〵してゐるらしい、もう三年も手紙を寄越さない、猪川浩は久しく行方不明であつたが、近頃毎日に入社したとか新聞に書いてあつた、

瀨川君、今年は是非何處かで逢はうではないか、多分この夏は君の卒業する時期だらうと思ふが、その時東京にやつて來ないか、小港以來の盃を擧げようではないか、君も君の世の中への新出の祝ひに僕の盃を受けることを不本意とは思つてくれまい、僕の重ね得る盃の數は四つか五つに過ぎないが、話はいくらでもある、君に逢ひたがつてゐるのは僕ばかりではない、今では父も母も妻も此處に來てゐる、京子はとつて五つのアバレ盛りだ、妹は今名古屋の耶蘇の學校にゐる、バイブルウーマンになるんださうだ、

妹は天國の存在を信じてゐる、悲しくも信じてゐる——僕はかう思つてゐる、君はどういふ信仰を持つてるか知らないが、僕は確實なる人間本位論者だ、

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

君は知らない筈だが、北海道は僕の第二の故郷だ、今度の歌集も北海道で一番賣れるだらうと思つてゐる、函館の一新聞の如きは、頼みもしないのに二段抜きの氣のきいた廣告を雜報の中へワリ込みで二週間もつゞけて出してくれた、さうしてその掲げてゐる批評はもう二十何回かになつてゐるがまだ終らない、恐らくこんな長い批評を受けた歌集は何處にもあるまい、同じ函館の外の新聞も十何回かの批評を出した、小樽の新聞でも札幌の新聞でも釧路の新聞でも特に署名した批評をのせてくれた、

さうしてアノ「忘れがたき人々」の二に歌つてある人は、石狩原野の中の大きい農牧場にゐる、札幌郊外の名高い林檎園の娘さんであつたが、こんど來た年賀の手紙によると、去年の五月にその農牧場へお嫁さんに行つたさうである、過去一年間僕は向うから來た手紙に返事を出さずにゐた、さうして今度初めて苗字の變つた賀狀を貰つた、異樣な氣持であつた、——お嫁には來ましたけれど心はもとのまんまの智惠子ですから——と書いてあつた、さうして自分のところでこさへたバタを送つてくれたと書いてあるが、東北線の汽車事でおくれてるのでまだ着かない、

思はずトンでもない事を書いた、兎に角北海道はなつかしい所だ、

僕は今東京朝日に出てゐる、出てからもう足かけ三年になる、明けて去年の九月から歌壇を設けて僕が選をしてゐる、尤もこれは片手間でやるので、本職は別に下らない事をやつてゐる、選者樣になりきつたのでないから安心してくれたまへ、

眞一は可愛い顏をした僕の長男だつたのに惜しいことをした、たつた二十四日生きて死んだ、妻はその後健康が惡くて、丁度大晦日まで藥をのんだ、今は然しよくなつた、老父は每日七種の新聞をよんでゐる、母はいよ〳〵腰が曲つた、さうして僕の生活は矢張苦しい、年とつた親に一日でもいゝから樂をさして殺したいものと思ふ、

さうして僕は必ず現在の社會組織經濟組織を破壞しなければならぬと信じてゐる、これ僕の空論ではなくて、過去數年間の實生活から得た結論である、僕は他日僕の所信の上に立つて多少の活動をしたいと思ふ、僕は長い間自分を社會主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない、無論社會主義は最後の理想ではない、人類の社會的理想の結局は××主義の外にない（君、日本人はこの主義の何たるかを知らずに唯その名を恐れてゐる、僕はクロポトキンの著書をよんでビックリしたが、これほど大きい、深い、そして確實にして且つ必要な哲學は外にない、×××主義は決して暴力主義でない、今度の××事件は政府の壓迫の結果だ、そして僕の苦心して調査し且つその局に當つた辯護士から聞いたところによると、アノうちに眞に××を企てたのは四人しかない、アトの二十二人は當然××にしなければならぬのだ）然し×××主義はどこまでも最後の理想だ、いゝ實際家は先づ社會主義者、若しくは國家社會主義者でなくてはならぬ、僕は僕の全身の熱心を今この問題に傾けてゐる、「安樂を要求するは人間の權利である」僕は今の一切の舊思想、舊制度に不滿足だ、

君、僕はこの手紙を書くに約三時間かゝつた、今日は社は休みだつた、さよなら、

四十四年一月九日

石川一

瀬川深樣

×

一月ももう半ばになつた。今年になつてから莫迦に氣がせいてゐるので妙にかう感じられる。今日歸つて來て君のハガキを讀んだところだ。日日も落手した。岩崎君の書いてくれたのの最初の新聞も今朝着いた。函館は僕の第二の故鄕だ。君があれだけ書いてくれるについては、君も色々の意味からであらうが、僕の方でも色々の意味から感謝してゐる。三四日前に大硯にも手紙を出しといた。

吉野君の事については僕も言葉がない。同君の就職口については社の黑澤といふ人が盡力してくれてゐる。然しそれも或は今度の打擊で駄目になりやしないかと思つてる。上京がのびやしないかと思つてる。何しろ不幸な男だ。今日僕は同君の弟君（喜代志さん）の訪問を社で受けた。本所の停車場にゐたのをやめて、十七日に臺灣の製糖會社へ行くと言つてゐた。さうして兄の事を心配してゐた。口は容易にない。ないでもないが二十五圓以上といふ口は容易にない。そこで僕は吉野君からもう一通履歷書を送つて貰つて、も一人別の人にも賴まうと思つてゐる。その人は一度「ウン」と言ひさへすれば、時期の早晩は別として、鐵のやうにたしかなんだ、乃ち僕をして今日あらしめた編輯長だ。

吉野君を早く上京させたい心に於て、君も僕も變りはないと思ふ。吉野君が商會に來たらよろしくたのむ。同君が釧路新聞へ書いてくれた「一握の砂」の批評も今朝着いた。

新年になつてから珍らしい事が二つあつた。一つは橘智惠子がいつの間にか北村智惠子になつてゐた事だ。空知郡北村といふ處の北村農牧場にゐる。自分のところで作つたバタを送るといつて來た。も一つは大島君の手紙だつた。タイムスで餘りよくない地位にゐるらしい。大島君の事を思ふと性格といふ事が強く感じられる。何故あゝまで自分をいぢめねばならぬだらうか。何故あゝまで自分の能を隱さねばならぬだらうか。同君の結婚は去年の九月だつたさうである。對手の事は何とも書いてない。さうして、「その爲め前にも增して平凡軟化したるやうにて、つまらぬ事したりとコボされ候。」と書いてあつた。境遇についてはそれとなく不平を處々に洩らしてあつた。健康はあまり好くないらしい。

三四日前の讀賣に僕と土岐哀果君との歌のことが書いてあつた。去年の前半期は牧水、夕暮二人の歌が歌壇の中心だつたが、年末に近づくと共に我々の頭は哀果啄木二人の歌に司配されるやうになつたといふ意味だつた。楠山正雄といふ奴が書いたのだ。當り前さとは思つたが、實は少し氣持がよかつた。哀果と僕と妙に併稱されてゐる事は君も知つてゐよう。

ところが一昨夜その土岐から電話で會見を申込まれた。今迄お目にかゝらなかつたのが不思議だと向うで言ふから、僕もさう思ふと言つた。さうして昨夜この室で會見した。二人は一合五勺許りの酒で陶然と醉つた。讀賣には、兩氏共僧家の出で新聞記者を職業にしてる外に何の類似もないが――といふやうな事が書いてあつたが、二人は酒に弱い事も瘦せこけてゐる事も、何處やら平凡ぎらひなところも似てゐた。尤も僕の直ぐに感じたところでは、土岐は僕より慾が少ない、從つて單純である。土岐は自分自身に苦痛を感ずることなくして人を諷刺したり皮肉つたりする事の出來る人だ。さうしてその頭は明るくて擧動が重くない。土岐は僕よりもまだ／＼歌を樂んでゐる。――とかういふのは、つまり、土岐の方が僕よりもずつと可愛い男だといふ事になる。

その時二人で雜誌を出さうぢやないかといふ相談が起つた。

君、僕はその事について書きたい。

今や歌壇に二人の時代の來てゐること（二人といふのは少し謙遜だが、然し土岐の歌は僕には他の何人のよりも面白く思はれるのは事實だ。）或は來らんとしつゝあること、或は又二人が來させようと思へば來るやうな機運になつてゐることは、どうも餘程事實らしい。僕は歌を以て本領とする者ではないが、然しこの機運だけは空しく逸がしてやりたくない。これ僕がこの相談に贊成を與へた理由の一。

僕には年來出したいと思つてゐる雜誌がある。僕は是非いつかそれを出したいと思ふ。然し僕は、僕がその雜誌（或は週刊新聞）を出すのは決して近い將來でない事を知つてゐる。今はまだその時機でもないし、且つそれには少くとも千五百圓の金がいる。ところが歌の雜誌だとその晩の計畫では五十圓あれば出來る。月給百圓くれなければイヤだといつて何もしないで餓ゑるよりはその百圓に達する希望を以て三十圓の下役になる方が得だ。これ僕の贊成を與へた理由の二。

そこで僕は土岐の計畫のいさゝかおつちよこちよいなのを否認して、極めて眞面目に相談した。花々しくなくても可いから基礎の堅いものを作りたい。かく二人はすべてのことを最少限に見

積つた。僕が數年前田舍で出した小天地ですら三百賣れたといふので、三百五十部の讀者だけは確實なものとした。それで初號は菊版四十八頁（丁度紙三枚）で四百部印刷しようといふのだ。尤もあまり薄いから、一聯五圓位のあついのを使ふ。四十八頁で四百部だとこの用紙千二百枚乃ち二聯と二百枚で價格は次の如くである

一二、〇〇　紙代

一六、八〇　組代（一頁三十五錢にて四十八頁）

六、〇〇　表紙及製本費（一部一錢五厘）

計　三四、八〇

これが實費である。五十圓といふのはこれに朝日歌壇の投書家などへやる直接ハガキ廣告及び新聞廣告の費用を加へた概算である。さうして最初二人は五圓づつ出してそれは最初から損とすることにきめた。

かくてこの出來上つた雜誌のうち五十部を寄贈用とし、三百五十だけ賣る。定價は二十錢では高いし十五錢では算盤に合はないから十八錢（郵税二錢）とする。直接購讀者へは定價通り賣るのだけれど假りにすべてを發賣元への卸値段にすると、七掛けで一部十二錢六厘、三百五十部で

四四、一〇

といふことになる。即ち豫算總額五十圓から初號に於て五圓九十錢の缺損、二人の出資十圓を前述の如く勘定に入れないとすれば四圓十錢の利益、更にまたハガキ廣告だけで新聞廣告をやめ、そしてそのハガキ代及びその印刷代だけを二人の負擔とすれば、九圓三十錢の利益となる。この最後の計算に從へば四百部中二百七十七部賣れると收支償ふ譯である。この金は二號の印刷代を拂ふまでには發賣元から回收出來る事であり、且つまた一號が出てから一ケ月のうちには多少前金申込者があるに違ひない。君、三百五十部といふ數は猶且僕等の自惚れだらうか。君等があれだけ僕のことを書いてくれて、それで北海道に二十部賣れないだらうか。さうしてその雜誌の内容は決して歌だけではない。讀者を多く得るための計畫も――外の雜誌にはない所の――も二つ位ある。

君、そこで問題は金の事である。十圓は二人で出すとして四十圓の問題である。そのうち二人が議論に議論して次のやうな豫算を立てた。

ハガキ廣告は三百枚出す。大に頭を下げて半ケ年分の前金購讀を頼んでやる。（郵税共一圓十錢）このハガキが百枚について三人三分五厘――即ち十人だけの心は動かすらしい。十五人といひたいが、萬一豫算が狂つては困るから十人にする。この收入は

一一、〇〇

それから君等のやうな人達に頼んで勸誘して貰ふ分を上岐の分僕の分合せて矢張最少限十人とすると、これも

一一、〇〇

計　二二、〇〇

といふことになる、尤も僕はこの豫算を信ずることが出來ない。何故なれば、小樽でさへ僕が頼んでやれば直ぐ承諾する奴が三人ある。その三人が假りに一人だけ僕の未知の人を勸誘してくれるとすると四人だ。小樽に四人あれば函館でその二倍ないといふ筈はない（から信じても可いだらうね）、それに岩手縣にだつて直ぐ承諾するのが四人はある。

これだけで十六人になる。前金購讀者が日本全國に二十人なかつたらそれこそ日本は闇だ。かりに二十人として、此處に豫算總額五十圓に對し十八圓の缺陷がある。即ちこの四十四年の僕

をして張合ある生活をなさしむるための問題は、かゝつてこの十八圓にある。

當り前から言へばこれは半分づつ二人で心配すべきだ。それはさうに違ひない。然し僕はまたかう思ふ。聯合といふ事は長いうちには屹度どうにかなるものだ。僕はその時この雜誌を僕のものにしたい……この事については僕は今色々考へ中である。金！　金！　この問題になると僕はいつでも困つちまふ。

丁度こゝまで書いた處へ丸谷君が來た。丸谷君が歸つて行つてから一時間の餘もだまつて煙草をのんでゐたら頭がおく／＼痛くなつて來た。この手紙のつゞきは一兩日中にかく。

［一月］十四日　　　　啄木

郁雨兄　侍史

正君へよろしく

君の省三さんへも

×

前略、考へたところが發表前にまだ御相談せねばならぬ事が三つも四つもあります、僕はやるからにはホントにやりたいと思ひます、ホントの雜誌を出してそしてそれを永續させたいと思ひます、明日先に社に行つた方が電話をかけることにして、時間を打合して會はうぢやありませんか、そしてもう少し研究しようぢやありませんか、

創作やスバルが千部うれる以上僕らの雜誌だつてさう馬鹿にしたものでもない、今夜僕は四百刷つて三百五十賣る計畫を立てたが、何とかなりさうですよ――金の事も、

二月十四日夜　　　　啄木

哀果兄　侍史

×

その後失敬、金の足らない分を保證してくれるといふ手紙が來た、印刷所の見積書も一軒だけ取つてあるが、これは何れ御相談の上、明二十八日午後六時から例の小さい談話會を僕んとこでやりませう、どうぞ來て下さい、お菓子か果物十錢代持寄りの事、

一月二十七日　　本郷弓町二ノ十八喜之床方

石川啄木

土岐善麿様

×

拜復。

二十三日附のお手紙正に難有拜見仕候。すぐにお返事差上ぐべき處、恰も頭の中に時化が起り居り、兎やかう致し居り候ふうちにとう／＼今夜まで延引仕候。御容赦被下度候。

御申聞けの件は、難有お受け仕候。小生のやうなものでもお役に立てば、誠にうれしき次第に御座候。然しお手紙にありたる小生の舊作の名を讀み候ふ時は、少からず喫驚いたし候。あんなのまで讀んで記憶してゐる人あるかと思へば、急かに四方八方に色々の眼があるやうにて、何かなし氣味が惡いやうにも存じ候事に御座候。小生は歌壇の事には一切口を出す資格なきものに候へ共、大兄が今雜誌をお出しになるといふ事は、歌壇内外の狀勢の必然の要求なるべしと密かに存じ居候。而してそれが一般文壇に交渉ある雜誌なりといふ事も、多分また廣い原因を背後に控へ居ることと奉拜察候。

金田一君には久し振りにて一昨夜お目にかゝ

り、大兄の御事も伺ひ候。その夜は同君の令閨が女としての苦しきつとめの第一回を經驗遊ばされ候由にて、同君歸りて間もなく迎への人まゐり、昨日となりてうれしき葉書まゐり候。生れたるは女の兒の由に候。

「樹木と果實」は極めて薄いものにて、雜誌と名づくるさへ恥かしきやうのものに候。初めは大分遊戲的な意味の多きハンフレットを出さうといふ話に候ひしも、それはどうにも頭に角のある小生の趣味に合はず、すつた揉んだの末、小さくともよいから、いざと言つたら直ぐ拳固を振り上げるやうな生眞面目ものにしようといふ事に相成、日下方々の友人に賴んで前金購讀の約束をして貰つてる最中に御座候。暢氣な企てと人は申すべく候へど、無から有を生み出さんとすること、當人は隨分苦しく存じ候。短歌の革新など申すは實は半分營業的政略にて、小生の意味では、出版法による雜誌としての可能の範圍に於て、讀者の注意を國民生活の實際に向けるやうな方針の下に編輯いたしたく、ほんとを言へば、保證金を納める雜誌を出して眞向から政府を痛罵してやりたいのに候へど、金がなければそれすら出來ず、それは當分諦め候ふ次第に御座候。首尾よく雜誌か出來候はゞ御一笑被下度候。

一友へ空氣焔の手紙書き候ふ餘勢を以て、つまらぬ事まで書きそへ申候。御容赦被下度、候。

猶本郷の方へお出遊ばされ候節はお立寄り被下度、夜六時半以後は大抵在宅、場所は喜之床と申す床屋の二階に候へば直ぐ解り申候。そのうちに此方よりもお伺ひ致したく存じ居候。草々不一。

一月二十九日夜　石川啄木

荻原大兄　侍史

×

おめでたう御座います。はじめは女の方がいゝといふ事ですよ。生れたといゝ、しらせは好い氣持なものですね。今日井泉水君へ返事を出す時も早速知らせてやりました。

生れたといふ葉書みて、
ひとしきり、
額をはれやかにしてゐたるかな。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

そられ見ろ、
あの人も子をこしらへたと、
何か氣の濟む心地にて寢る。

「一月二十九日夜　石川一

金田一京助樣

×

僕の腹の一件だがね、今日大學でみて貰つて急に笑ひ事ではなくなつた、漫性腹膜炎といふ奴で、餘り馬鹿にされないさうだ、仕方がないから僕もあまり馬鹿にしないことにして一兩日中に入院する、

但し痛くはないのだから結局入院した方が怠けるだらうとも思つてゐる、勉強も出來るだらうと思つてゐる、外の病氣とは違ひ、何しろ腹がふくれ出しただけなのだから、どうもまだ可笑しい、

二月一日　本郷弓町二ノ十八　石川一

土岐哀果樣

×

こなひだの手紙にも僕の腹のことを書いてやつた筈だつたが、今日は專らその腹についての報告をする。

昨日久木といふ友人同伴で大學病院へ行き、三浦內科の青柳といふ醫者に診察して貰つた。

はち切れさうにふくれた腹を一目見て、「あゝいけない〳〵、これあ可けません。」と醫者が言つた。さうして叩いてみたり推してみたりして、ひよいと寢臺から離れて窓側の椅子に腰かけ、大事さうに腕組みをして、「すぐ入院しなくてはいけません。遲れては可けません。今日處方を書いてあげてもいゝが上げずにおきませう。一日や二日藥をのんだつて何ンにもならないから……」と言つた。

「痛くないんだから、仕事をしながら治療するといふやうな譯にいきませんか。」

「そんなノンキな事を言つてゐたら、あなたの生命はたつた一年です。」

「腹膜炎ですか。」

「さうです。漫性ですから痛みがないのです。何しろ一日も早く入院する外に途はありませんよ。[illegible]を見るでせう？ さうでせう、內臓が非常に壓迫されてゐるから。かうして十日も經つと飯も食へない位ふくらんで來ます。そして餘病を併發します。」

「どうも大分おどかされますね。」

「おどかしぢやありません。痛くないからあなたは病氣を輕蔑してゐるらしいが。腹膜炎は、腹に起ると胸に起るだけの相違で肋膜炎と同じやうなものです、兄弟です。肋膜から肺になるやうに腹膜からもなります。腦膜炎も起します。」

「入院したら何ケ月かゝるでせうか？ 一月もかゝるでせうか？」

「冗談ぢやありません。とても何ケ月などと言ふことは出來ません。すつかり治るにはマア五年間ですな。五年間は醫者のいつた通りにしてゐないと再發します。」

「しかし五年間入院してゐるんぢやないでせう。社の方へ屆けておく必要もあるんですが、マア何ケ月と言つたらいゝでせう？」

「さう！ とてもはつきり言へないが、それぢやマア三ケ月と言つたらいゝでせう。」

これは昨日の正午から一時頃までの間の話である。

かう言はれて歸つて來たが、それでも僕はまだ可笑しかつた。「腹がふくれただけなんだもの！」そんな氣がした。然しまた「一年だけの生命」といふことが妙に頭を壓迫した。

君、僕はすぐ入院の決心をした。僕の狀態はどの方面から考へても今僕に入院なんかを許さない。夜勤をやめたのは既に遲かつたが、遲かつたにしても僕はまだ死にたくない。

僕は入院する。大學の施療に。

明日入院する。

ホントに三ケ月かゝるものとすれば、僕が再び浮世の人となるのは、もう花が散つて青葉になる頃だらう。

僕は痛くない病氣で入院してみたいといふことをよく言つたことがある。今その時機が來た。然し僕の意味では、病氣して病院にでもはひつてゐれば、その間だけ一切の責任が解除される――それを欲したので病氣そのものを欲したのではなかつた。僕は入院するが、入院するために僕の責任は一層重くなるのだからあまり目出たくもない。

病院で書く。雜誌も出す。僕の現在の第一の心配は、醫者が果してそれだけの自由を許すかどうかである。動くと餘計水がたまるのださうだが、萬一寢たまゝ動くな、なんか言はれると往生だ。

しかし屹度すぐ直るよ。僕は病氣を苦にしないたちだから。腹の水と共に僕の不幸までも醫者がなくして呉れるなら、猶可いと思つてゐる。

二月二日　　　　啄木

郁雨大兄

正君外諸君へよろしく。
雜誌はよし多少發行日がおくれるにしても屹度出す。

×

女ならぬ悲しさには、腹のふくれたること目出たき前兆にてはなかりし由にて、昨日午後此處の寢臺に身を横たへ申候。痛みなければ今猶自らは滑稽と存じ候へど、お醫者樣の目には可笑しからずと見ゆ、慢性腹膜炎とやらにて、ことによれば三月も此處にゐねばならぬ由に候、お子さま日にまし可愛くおなりなされ候事なるべし

〔二月〕五日朝　　大學病院青山内科十八號
石川啄木

金田一京助樣

×

新年のお手紙は、私の新年のよろこびの中の最も深いよろこびの一つでした、實は此方の同志の間では、今猶あなたがタイムスに居られるか何うかも疑問だつたのです、詳しい御消息で、色々と北海道のことを思ひ出し、またあなたの御近事を想像いたしました、そして長い手紙を上げる積りでした――實際その時は澤山申上げねばならぬことがあるやうに思はれたのでした、併し今はもう大方それを忘れてしまひました、居が變れば心も變るとかで、今此處に斯うして寢臺の上に起き直つてゐると、どうやらこの私が、喜之床（新井）の二階でいつでもいらいらした心持を持つてゐた私とは少し違ふやうな氣も致します、今も併し申上げたいと思ふことは色々あります、少くとも二つあります、その一つは近頃その結末のついた特別裁判事件であります、たしか一年前に私は、私自身の「自然主義以後」――現實の尊重といふことを究極まで行きつめた結果として自己そのものの意志を尊重しなければならなくなつた事――國家とか何とか一切の現實を承認して、そしてその範圍に於て自分自身の内外の生活を一生懸命に改善しようといふ風なことを申上げた事かあるやうに記憶します、それは確かにこの私といふものにとつて一個の精神的革命でありました、その後私は思想上でも實行上でも色々とその生活改善」といふことに努力しました、併しやがて私は、その革命が實は革命の第一歩に過ぎなかつたことを知らねばなりませんでした、現在の社會組織、經濟組織、家族制度……それらをその儘にしておいて自分だけ一人合理的生活を建設しようといふことは、實驗の結果、遂ひに失敗に終らざるを得ませんでした、その時から私は、一人で知らず〳〵の間に Social Revolutionist となり、色々の事に對してひそかに Socialistic な考へ方をするやうになつてゐました、丁度そこへ傳へられたのが今度の大事件の發覺でした、恐らく最も驚いたのは、かの頑迷なる武士道論者ではなくて、實にこの私だつたでせう、私はその時、彼等の信條についても、又その Anarchist Communism と普通所謂 Socialism との區別などもさつぱり知りませんでしたが、兎も角も前言つたやうな傾向にあつた私、少い時から革命とか暴動とか反抗とかいふことに

一種の憧憬を持つてゐた私にとつては、それが丁度、知らず／＼自分の歩み込んだ一本路の前方に於て、先に歩いてゐた人達が突然火の中へ飛び込んだのを遠くから目撃したやうな氣持でした。

それはまあ何うでもいゝとして、一言申上げておきたいのは、今度の裁判が、×××裁判であるといふことです、私は或方法によつて今回の事件の一件書類紙數七千枚、二寸五分位の厚さのもの十七册をも主要なところはずつと讀みましたし、公判廷の事も秘密に聞きましたし、また××が獄中から辯護士に宛てた陳辯の大論文の寫しもとりました、あの事件は少くとも二つの事件を一しよにしてあります、×××××を首領とする××、×××××、×××××の四人だけは明白に七十三條の罪に當つてゐますが、自餘の者の企ては、その性質に於て×××であり、然もそれが意志の發動だけで豫備行爲に入つてゐないから、まだ犯罪を構成してゐないのです、さうしてこの兩事件の間には何等正確なる連絡の證據がないのです、

併しこれも恐らく仕方がないことでせう、私は何時も、理想的民主政治の國でなければ決して裁判が獨立しうるものでないと信じてゐますから、

書きたい事は澤山ありますが、いづれこれは言ふ機會もあらうと思ひますから今はやめます、申上げたいも一つは、雜誌の事であります、今度三月一日から「樹木と果實」といふ雜誌を出すことになりました、表面は歌の革新といふことを看板にした文學雜誌ですが、私の眞の意味では、保證金を納めない雜誌としての可能の範圍に於て、「次の時代＝新しき社會」といふものに對する青年の思想を煽動しようといふのが目的なのであります、發賣禁止の危險のない程度に於て、しよつちゆうマッチを擦つては青年の燃えやすい心に投げてやらうといふのです、私と似た歌を作る土岐哀果と二人で編輯することになつてゐます、丸谷君も何か助けてくれる筈です、金の方の事は、私の手で集めうるだけの前金及び寄附をあつめて、不足だけを宮崎郁雨から出して貰ふことになつてゐます、詳しくは申上げませんが、どうぞ十五日頃までに何か書いて頂きたいものです、それからお知合の方に若し出來たら前金申込を勸めて頂きたいものです、（委細は本月のスバル及び創作の廣告にありますが、定價一部十八錢郵税二錢、半年分前金一圓十錢、一年分同二圓十錢）

この計畫に對して私の今度の入院は一大打撃でした、然し此處でも書くことは許されてゐますから、やつぱり廣告した通りの期日には出さうと思つてゐます、最初は五百部位しか刷りません、菊版で頁も六七十頁位のつもりですが、紙は厚くしたいと思つてゐます、かうして極く小規模にやつてゐるうちには、何れ發展の機もあるだらうと思ひます、二年か三年の後には政治雜誌にして一方何等かの實行運動――普通選擧、婦人開放、ローマ字普及、勞働組合――も初めたいものと思つてゐます、またさしあたり文壇の消色主義や曲學阿世の徒に對する攻撃もやりたいと思ひます、一つ二つ珍無類の面白い趣向もあるのですが、それはまあ申しますまい、

私の病氣といふのは慢性腹膜炎とかで腹に水がたまつたのです、一月の半頃からだん／＼腹がふくれ出し、何だか腹に力がはひるやうで氣持がよいと思つてゐますと、しまひには皮がピカ／＼光る程ふくれて始終壓迫を感じ、起居に多少の不自由を餘儀なくされるやうになつたから、友人の勸めで醫者に見せたのです、驚くも何ともありません、入院しなくちや駄目だといはれて一昨日午後フラリとやつて來て此施療

室の寢臺に上つたのですが、喫煙その他大抵の自由は許されてあります、氣がおちついて却つていゝ鹽梅です、但し事によると三月位かゝると言はれてこれにはやゝ閉口してゐます、窓へ行つてみると、この古風なシックヒ塗の建物の二階の窓近くまで櫻の枝がのびて來てゐますが、これが咲くまでには出たいものだと昨日も思ひました、社の方は三月や四月休んでも構はないのですがいろ／＼やりたい事があるのでイヤになります、然しまあかうしてゐるうちに少し靜かに考へるには却つて好都合かも知れません、腹がふくれて入院するとは何だか自分ながら滑稽です、醫者には可笑しくないと見えて糞や小便などを試驗してくれます、同室の人は二人ですが、一人は二十三、一人は十七、どちらもヘッポコ醫者の誤診のため病氣を惡くしたといふ人々です、隣室には十七位の盲人で、腦に癌(?)が出來たといふ少年がゐて、朝晩を問はず終日寢臺の上に起き直つて、何か口の中で祈りながら、一生懸命手を合せて拜んでゐます、看護婦にきくと、目の見えるやうにと祈つてるのださうで、時々變な運動をしたり可笑い事を言つては笑はれてゐますが、私は可哀想で仕方がありません、可哀想とは思ひながら矢張可笑いと笑ふから、結局同じ譯ですが、東京はこの頃、ホカ／＼と暖かです、昨日丸谷君が見舞に來てくれて、初めて議會を傍聽した話をしてゐました、惰氣滿々で駄目だつたと言つてました、私は出來ることなら毎日議會へ行つてみて、そして濟んでから、第二十七議會といふ本を書いて議會無用論――改造論を唱へてやりたいと考へたことがありましたが、病院にゐては駄目です、病院にゐなくても金と時間がなくちや駄目です、何のかんのと色々ならべました、奧樣及び向井兄へよろしく願ひます

「二月六日」

大島先生侍史　　啄木拜

×

この手紙はもつと早く着く筈でありましたが、入院以來何だか妙に怠け者になつてしまつてとうとうこんなに延びました、用向は一昨日米内山健助君が見舞に來てくれられた時話した所が、同君から詳しく言つてやつて呉れるとの事でしたから、此處には簡單に書きます、雜誌「樹木と果實」發行の企ての事は、「スバル」「創作」二誌の廣告で御承知下すつたことと思ひますが、あれは土岐君と共に私が今後出來るだけ死身になつてやらうとしてゐる仕事なのであります、廣告文にも多少書いておいた筈でしたが、雜誌の目的は、單に文學雜誌たるのみでなく、い、い、い、い、保證金を納めざる雜誌としての可能の範圍に於て、現代の社會組織、經濟組織、政治組織乃至いろ／＼の制度に對する根本批評を青年が進んでやるやうな機運を作りたいといふにあります、今迄我々青年は餘りにすべてのことを父兄に任せ過ぎてゐた、私はさう感じます、それも、任せておいて少しも差支がなければその方も可いのですが、事實に於て、我々青年の父兄の營業方針は今やこの日本といふ一つの銀行を恐るべき取付の日に導いてゐます、ごく簡單な一例を擧げれば、彼等は今猶日本魂といふものが日本の隅々にまで充滿してるやうに言ひますけれども、毎年徴兵檢査を受ける壯丁の少くとも十分の九までは、皆その檢査を一生の大厄と思つてゐます、帝國軍人といふことが既に名譽ではなくて苦痛であることは、君もよく御存じの筈です、いくら立派な建物を持つた銀行でも、一度かういふ資本缺乏の事實が暴露すれ

ば、忽ち取付に會つて破産する外ありません、さうしてからいふ矛盾は今やすべての事に認められます、日本は漸くその營業方針を變へなければならなくなつた、さうしてそれを變へる者は我々青年の外にありません。我々は嘗て我々の好きなロシヤの青年のなした如くに、我々の目を廣く社會の上に移し、出來うべくんば、我々の手と足とをも他日その方に延ばしたいと思ふのであります、我々は文學本位の文學から一足踏み出して「人民の中に行」きたいのであります、それでこの手紙の意味は、君の贊成と援助とをこの企ての上に期待する我々の心を表はすにあります、雜誌の經濟は、我々の力を盡して集めうるだけを集め、その不足を函館の一友から借りることになつてゐます、それで若し御贊成下さることが出來たならば、早速前金購讀者を御勸誘していたゞきたいのであります、企てに對して、私の入院は一つの打撃でありました。昨日土岐君が來て、何なら發行日を十日か半月延ばさうと言つてゐました、それはまだきまりませんが然し出すには蛇度出します、そしてどんな苦痛があつても繼續します、前金は發行所乃ち私の家へ送つて頂いても、此處へでも何方でもよろしう御座います、それから申しかねますが、前記の事情で不足分の借金をする都合がありますから、出來るだけ早く……いづれ米内山君からも申上げて下さる筈です、

〰〰〰〰〰〰

私の病氣は漫性腹膜炎とかなさうで、去る四日に入院しました、別に痛みはないのですが、腹がだん／＼膨れるのです、七日に第一回の手術をやつて濃黄色の水を一升五合許りとりましたが、手術中に貧血を起して中止しました、また二三日中に下腹に穴をあけられることと思つてます、痛くないだけに氣分は殆ど變りなく、食はせられるだけのお粥では不足な程食慾もありますが、困つたことには長くなりさうな事です、ことによると今年の花はこの病院の窓から眺めねばならぬかも知れません、

奥さんによろしく

二月十四日朝　　啄木

孤舟兄侍史

高野君へは小天地の時の借金をまだ拂はずにあるのでお願ひしにくいのですが、兄からどうぞよろしく

×

予にとつては、病院は牢獄でもない、また小なる宇宙でもない。矢張病院である。獨歩には靈魂に對する信仰があつたが、予は頑固なる唯物論者である。其處に二人の悲しき相異がある。

予は初め病院を自分の安息所とする積りで入院した。安息所としての效は確かにあつた。體重も增したし、門内散歩も一昨日から許された。——安息は確かに予の健康に必要であつた。そして多分まだ／＼必要だらう

（コノアトにまだ書くつもりだつたが、書きかけてゐるところへ丸谷君が來て話してゐるうちに忘れてしまつた）

二月十五日朝　　青山内科十八號室　石川生

並木武雄樣

×

一昨日はありがたう、あの日四時頃になつて漸く胸の水をとつたが、醫者の不熟練のためか僕の肋膜の堅いためか、突いても／＼穴があかなくてひどい目にあつた、さうして折角穴があい

たら、機械が少しこはれて空氣がはひるために中止だ、水はまだ背中の方に殘つてゐるさうである

熱は今日は三十七度三分まで下つてゐる、然しまだ寢てゐなくちやいけないさうだ、つくづく病氣と病院と金のないのがイヤになつてしまつた、尤も胸の方さへよくなれば腹はもう退院してもいゝ程度までよくなつてるさうである、今朝醫者が、退院したら當分田舍にでも行つて遊んだらいゝでせうと言つた

三月十八日　　五號室　石川啄木

土岐善麿様

×

發熱以來丁度二週間目で寢臺の上に起き上つて手紙を書く、今日やうやう温度表の青い點が赤線の下にさがつた

君の久しぶりの詳しい手紙は昨日讀んだ、讀んでさうして、「あゝみんなが急がしい」と思ふと、頭がぐらぐらするやうに感じた、僕は今隨分ひどく衰弱してゐるので、あの手紙にあつた色々の事が記憶にはあるが、どうも適切な感じとして浮んで來ない、そのうちで子供が少しよくないとあつた事と岩崎君の一件が何だか氣にかゝる、變な言ひ草だが、僕でさへこの三年我慢をし通した、岩崎君は我慢しないかしら

どうも頭がフラフラする

送つてくれた金はたしかに受取つた、有難く受取つた、それを雜誌の方につかふべきか、自分の療養につかふべきかについては、君の迷つた如く僕も迷つた、其處には迷はねばならぬ事情があつた、しかし僕は今日になつて決心した、君、あの二十圓は全部雜誌の方に入れる事にする

四月には是非初號を出す、初號はしかし全部土岐の方で編輯する、多分僕は一行も書けないだらう（この手紙を書いてるのさへ醫者が見たら決して喜ばぬだらうから）

しかし僕の病氣はずつといゝ、腹の方はもう少し水が殘つてるに過ぎなくなつた、熱の出たのが偶然の幸福となつて、水が汗になつて出たんださうである、たゞその熱と共に肋膜炎が起つて來た、最初は腦膜炎の心配もあつたらしく、新聞讀むことさへ禁じられてゐたが、幸ひその方は無事だつた、それで三四日前に肋膜の水をとる手術をやつたが、穴があかなくてひどい目にあつた、折角あいたかと思ふと、今度は機械に損所が出來て中止した、ためにまだ背中の方に水が殘つてゐるためにまだ寢てゐなければならぬのだ

然し間もなくその水は薬のために征服されるらしい、さうして其處の部分さへ直ればもうやがて退院させられるらしい

無論施療患者の退院は病氣の全快を意味するのではない、退院して家へ歸つて自費で薬をのむといふことだ、それにしてもその退院が待遠しくなつた、衰弱しきつたからだを俥にのせて、何十日目に本鄕の通りへ出たら、どんなに人間の活動が面白く目に映るだらうと思つてゐる

もう疲れたからやめる

三月十日

郁雨兄　　啄木

×

拜啓、昨日は雪の降る中を態々お出下され何とも恐れ入りました、殊にまた今度の御配慮につきましては全くお禮を申上げる言葉のない次第で御座います、何だかから空おそろしくなりました。

此處に居る間は、自分勝手にとる養生品の外は全く官費なんですが、その代りアトは薬をのんで養生すればなほるといふ程度にさへなればズン／＼退院させられるので、退院してからの事が多少心にかゝつてゐました、然しその方の心配も今度の御配慮で全く無くなつた譯で御座います、

昨日は午後になつてまた少し熱が出ましたが、今朝はまた平温に復しました、自分ではもう退院も間もない事と思つてゐます、御同情に酬いるためにも一日も早くなほらねばならぬと心がけてゐます

三月十二日朝　　石川　一

佐藤先生　御侍史

皆々様へはよろしくお願ひいたします

×

郁雨君、一昨日十五日の午後に退院した

退院はしたが、當分の内はベッドの上に寝てることは病院の寝臺の上に寝てゐるとの相違にすぎない、腹の方も胸の方も八分通りはよくなつたが、これからウント養生しなくては肺になる恐れがあると醫者が言つた、又、熱が全くなく／＼なるまで家で寝てゐて、スッカリなくなつたら二ヶ月も海岸へ轉地しろと言つた、然し、僕にそんな金があるものか、今薬を三種のんでゐる、その一種は莫迦に高い

昨日と一昨日は天氣が惡くて全く弱つたが、今日は青空を見た、僕の今のからだは便所へ行つて來るだけでガッカリする

またいつか書く

雜誌はたしかに四月に出る、一切萬事土岐に頼んである

［三月］十八日　　啄木

宮崎君

×

あの晩——もう大分前だが——は少し熱が出たつけ。しかし翌日はもう何ともなかつた。實際淺草がすつかりイヤになつちやつた。ところで雜誌の件だがね。毎日僕達のハガキが舞ひ込むんで弱つたよ。何とも返事の出しやうがないんでね。今朝並木君が來て、昨夜から全權を任されて三正舍へ行つた顛末といふのを聞いた。さうして三正舍のいふ通りになつてゐては、かの小資本の印刷業者よりも更に小資本なる我々の方が困るばかりの結果になるといふことを信ぜざるを得なかつた。そこで一應君に相談すべきではあつたが臨機の處置として契約破棄の宣告のハガキを出した。その意味は、我々の間に全然新しく相談をし直す必要があると思つたからである。詳細面晤。

四月二十六日午前十時半　　本郷弓町二ノ十八　　石川　一

土岐善麿樣

×

一昨日は失敬。

僕は先刻君にあてた長い手紙を書き出したが途中で根氣がなくなつてやめた。しかしその儘にしては置かれないと思つて今夜はこの短かい手紙を書く。

土岐君、雜誌をやめようぢやないか。一昨日君と別れるまでは僕はどうかかうか自分を欺いてゐたが、昨日の朝になつて卒然としてそれに堪へられぬ氣持になつた。さうして一日考へて晩に丸谷君に來て貰つて贊成を得た。君がやある

と言ひ出した時は不贊成で、今になつて僕から更に同じ事を言ひ出すとは如何にも變だが、實際やめたくなつたのだから仕方がない。僕は矢張諸君から評された如く、かいゝかたまりだつた、しかも少々厄介な、かいゝかたまりだつた。

不取敢今日はこれだけを君の耳に入れて置く。行く事は出來ないし、詳しい手紙を書きたいんだが、今日は頭がかゆくて駄目だ。

四月十八日午後二時半　　啄木

土岐君

×

あの時も失敗、その後も失敗、僕が時々新聞に出るので喜んでゐる、僕は依然として變りなしだ、矢つぱり毎日熱が出る、それが平均して見て三週間前と少しも變らないので此頃は少々ばかり悲觀してる、何とかして早く健康になる工夫はないものかしら、

王正會の野郎まだ金をよこさない、並木君の話では月末でなくちや取れまいといふことだつた、あれが來たら前金をすつかり返してやらうと思ふから、どうかあの十圓も手紙に入れてなりと送つてくれたまへ、

も少し氣分がよくなつたら借りてゐる本を持つて遊びに行きたいと思つてゐる、この頃はもう養生する金もなくなつたし、何か書きたいにも書く程の勇氣も出ないし、實に下らない世の中になつた、仕方がないから獨逸語の研究でも始めようかと思つてゐる、早く直りたい〳〵、さよなら、

四月二十七日　　啄木

土岐兄侍史

×

永々御無沙汰いたし、何ともお申譯ありません、先月までのあらましの事は加藤樣まで申し上げた筈で御座いましたから、多分お聞き下すつた事と存じて居ります、ところが今月になりまして、三日頃に三十八度餘の發熱あり、びつくりして近所の醫者に來て貰つた事がありましたが、去る十一日に至り、更に突然四十度三分といふ高熱に冒され、爾來一昨日まで晝夜殆ど間斷なく氷嚢をつけて暮らしました、昨日は夕方に八度三分になつた外は朝も夜も七度五分位でした、幸ひ熱の割合に體の中の方は別段惡くならないさうで（肋膜炎のアトが少し許り水を持ちかけた外ですが、お蔭でまたすつかり疲れきつてしまひました、今のところまだ一向食慾もありません、

この夏中は、出社はおろか散歩も出來さうにありません、誠に申譯ない次第で御座います、昨日今日のやうに涼しいとよう御座いますが、晴れた日にはこの室にまともに西日がさしますのでどうにもかうにもやりきれません、まだ申上げる事があつたやうですが、忘れてしまひました、加藤樣へよろしくお傳へを願ひます、

七月二十二日午前　　石川一

佐藤先生

二葉亭全集の方もあまりおくれますので一人で心を苦しめてゐますが、その事について池邊主筆に申上げたいと思ひますけれど、今日はつかれましたからやめました

×

親愛なる少尉宮崎君。

君の軍隊生活の始まつたことは一昨日の午前に知つた。あの繪葉書の演習の光景は、少なからず僕を樂しませた。文句を讀んでからひよいと裏を見ると、小丘の連亙した一望の原野が展けて、砲兵陣地が布いてある。それは丁度僕が中學の二三年頃に盛岡附近で行はれた演習そのまゝの光景であつた。その時僕は、授業のある日にまで何里の路を驅けあるいて見物した。軍人志願だつた僕！　發火演習に小隊長になるのが何よりの樂しみだつた僕！　繪葉書を見てゐると、その當時の僕がさながら自分の弟か何ぞのやうになつかしく僕の眼に浮んだ。少くともその日一日は、しつくりと身に合つた軍服を着て佩劍を心地よく鳴らして歩く君を平和論者たる僕が心の底で羨んでゐた。

此處まで書いて來たところが、もう何も書くことがないやうな氣がする。イヤ、どの問題もどの問題も底の知れないやうな問題で、それを今書くのが非常に億劫なやうな氣がする。――この頃少しまた神經衰弱の氣味で、僕も商賣藥一定の力を借りなければ眠れない状態にゐるものだから心が疲れてゐるらしい。君の入隊は、その日々の勤務に餘に興味を有たせるかどうかは知らないが、平生と全く調子の違つてゐるといふだけでも君の心身に何等かの效があるだらう。僕に至つては毎日々々つまらない單調な日を送つてゐるに過ぎない。毎日々々日が長い、毎日々々職業が欲しい。この頃は、友人が大抵東京にゐないのと、ゐても日中は暑く夜はまたこの家が大分へンピな處にあるのとで、客が少ない。毎日きまつて僕の目に入る顏は、父の顏、母の顏、妻の顏、妹の顏、子の顏――この五つの顏の外にはない。髮を五分刈にして以來、鏡に映る自分の顏を見ることさへ滅多にない。毎日耳に入る聲も、これら家族の聲と近所の子供らの騷ぐ聲、それから自分の小言を言つたり子供を叱つたりする聲位なもの。單調と、その單調の間に伏在する家族のいきさつとが殆ど僕を殺さんとする。僕は變化が欲しい、何でも可いから變化が欲しい。

目ぼしい本は皆質屋に私の袷と一しよに入つてゐるし、質にもやれない、禁りきれた社會主義の禁書類は、引越の時以來支那鞄の底にそのまましまつてあるし、僕は殆んど全く讀書することすらない。昨年以來讀んだのが芭蕉、蕪村の句集と古詩韻範といふ漢詩の本だけだと聞いたら、君も多少の哀れを催してくれるだらう。芭蕉は時々感覺を心地よく働かした句はあるけれども、概してイヤに理窟ばつた月並のひねくれが並べてあるので好かないし、蕪村は好きには好きだけれど、二度讀み三度讀めば、矢張り常套の配合法が目について興味索然とする。古詩では李白や杜甫の自在な手法も面白いが、僕は寧ろそれ以前の簡古素朴な作風を愛する――現在の僕の生活とかけ離れてゐることの甚だしいだけそれだけ愛する。

朝に四種、夕方に郵便で來る三種の新聞だけは眞面目に讀んでゐる。毎日々々同じやうで變つた記事や論説の間から、時々時代進展の隱微なる消息が針のやうに頭を刺す。

それが僕には、時として樂しみであり、時として苦痛である。昨日は豫告された桂内閣總辭職の日であつた。僕は寢てゐて團扇をつかひ乍ら、もう今頃は閣議が終つて首相の參内した頃だらうと思つてゐた。子供が隣りの家へ遊びに行つてゐて大聲に泣いてゐた。午後になると果して總辭職の號外が出た。――それらの事が自分に何の關係もなしに行はれてゐるといふことが、外の人には淋しい事でないだらうか。

僕の現在の生活は全く無方針である。少くとも健康の恢復しない間は、方針の立てやうがない。神經衰弱の氣味になつてから食慾が少

し過ごしたが、肋膜の方は順當な經過をとつてゐる。もう引續き三十七度五分以上の熱は出ない。たゞこの七度五分までの熱がいつまで續くやら、それが解らない、以前にも三月の末から先月の大發熱までは矢張毎日々々これだけの熱がつゞいてゐたのだから。妻の方は氣分の惡い日は寢、好い日は殆んど平生と變りない顏附をして起きてゐるが、咳はずつと少くなつた。いくらかづつよくなりつゝある事は事實であるらしい。僕は今では日中の半分は起きてゐられるやうになつた。

ところが此處にまた一人僕の家に病人がふえた。一週間許りの間何となく元氣がなく、少し下痢するといつてゐた母が、一昨日の夕方にはひどくやつれた顏をしてとう〳〵食卓に就かなかつた。あとで額に手をあてゝみると、驚いた、まるで火のやうに熱い、早速檢溫器で計ると三十九度一分あつた。妻は近所の醫者へ、妹は冷し氷を買ひに行つた。やがて醫者が來た。腸加答兒で、熱もそのためだといふ診察であつた。それから心臟が大分前から惡いと見えてひらいてゐるから、熱のために脈搏が烈しくなるやうなことがあれば心臟部を冷やさなくてはいけないと言つた。僕はヒヤリとした——心臟の惡くて時々動悸のすることは僕も前から知つてゐた。知つてゐながら、この二年半の間三分の二は一家の炊事を殆んど母一人にして貰はねばならぬ事情の下にあつた。床屋の二階にゐる頃、母が梯子の中途で、動悸がすると言つて、鍋などを持つたまゝ暫らく休んでゐる事が何度もあつた——

母はそれ以來寢てゐる人になつた。おも湯と玉子の外は何も食はしてはいけないさうである。一日二日のうちに、便所へ行くさへ大儀なくらゐやつれて衰へた。醫者は毎日來る。昨夜も十時頃になつてから三十九度の熱が出て來たため、僕がフラ〳〵するからだで氷を買ひに行つた。熱の下り始めぬうちは誰か起きてゐねばならぬと思つてゐると、やがて下つて來たのでほつと安心した。その晩は妻は夕方から氣分が惡いと言つて寢てゐるし、妹も晝のつかれでグッスリ假寢をしてゐた。やるせない氣持で母に氷嚢を取かへてやつたり熱をはかつてやつたりした。

この頃は、やかましかつた晝の蟬が少し少なくなつて、夜は蟲が鳴く。晝は流石に九十度近い暑さで苦しいが、夕方からはもう空氣に秋が交つてゐる。

早く丸谷君が歸つてくれゝば可いと思つてゐる。並木君は家族全部上京して巢鴨に家を構へた。こなひだ來た時は大分新生活に興味をもつてゐるやうな話だつた。土岐君は九月の末あたりに歌集を出すといふので大分氣乘りがしてゐるらしい。讀賣の「戸外と室内」には近頃投書がなくて困るさうだ。オヂャンになつた雜誌へ來た投書を廻してやらうと思つてゐる。富田碎花といふ男がこの春頃からだん〳〵所謂「危險思想」を抱くやうになつて、この夏は名古屋から越前越後佐渡の方へ詞友をたよりに旅行に行き、方々からその土地の歌人四五名連署の繪葉書を寄越す。繪葉書にまで時々不穩な文句があるので少々弱ることがある。

八月二十六日夜

啄木

宮崎兄 侍史

こなひだ滑稽なことがあつた。鹿角にゐる親戚から父宛の書留が來た。何の用かと思ふと、「釜石の親戚よりの通知によれば御令息一樣御病死の由」云々と書いて、御香奠の爲替を封入し、「何卒お花の一本も佛前におそなへ下され度候」とあつた。釜石にゐる從兄弟の醫者が非常に

讀みにくい手紙を書く男だから、多分その手紙を讀みちがへたものだらう。お蔭で僕も生きながら佛樣になつた譯だ。翌日はその佛樣がお香奠の禮狀をかいた。

×

この手紙をかいてしまつたところが妻がかへつて來た。今迄左方の肺尖加答兒だつたのが、左はよほどよくなつてゐるが、新たに右の方が惡くなつたさうだ。それで今日は注射をしたさうである。二三ヶ月通へ、さうすれば直ると醫者が言つたさうだ。

今日は嬉しい日だ。君の手紙と丸谷君の青森ステエションで書いた葉書とが一しよに着いた。家内は昨日の朝食事をしてゐた時に着いた。配達夫がその場で金を拂つて行つてくれた。何しろ思ひがけなかつたのと、スタンプに「近文二線」とあつてそれが何と讀むか解らなかつたので、君の外にはないと思ひ乍らも首を捻つた。配達は差出人も何も聞かなかつたので何の事もなかつたが、アトで旭川通の妹の説明で愈々君からだと納得した。自分の小遣までかうして僕のために割いて送つてくれたのかと思ふと、うれしくもあり、悲しくもあり、少し手垢のついた紙幣を前にして思はず涙ぐんだ。それが今日の手紙で、君の俸給だと知つた時に、また同じ思ひを繰返した。君、くだ〳〵しいお禮の言葉は言はないよ。お蔭でこの月末も助かつた。今月は引越に附帶した種々の費用やら新病人の發生やらで豫想外に出費が嵩み、明日の社からの前借だけでは拂ひにも足らない位で弱つてゐたところだつた。この頃は早く米が安くなつてくれゝば可いと思つて、毎日新聞の米價を見るが、仲々安くなりさうにない。

君の今日の手紙は僕に不思議に強い印象を與へた。

言はゞ君自身が手紙の上に躍動してるやうに思はれた。同僚が夜になると皆「女」に走る時に君が一人居殘つてゐるといふ所をよんだ時は、（失敬な事をいふやうだが）丁度ツルゲエネフの小説をよんで性格描寫の妙處に讀み至つた時のやうな感じであつた。何といふこともなくたゞさう感じたからその儘書く。

丸谷君は一の關に寄つて三日か四日に着京するさうだ。

丸谷君は今一生で一番樂しい時代にあるのぢやないかしら。一の關は一晩位にして早く來てくれゝば可い。

内閣か愈々變つた。昨日は寢てゐて號外を見て多少の感があつたよ。丸谷君が來たら一つ大いに政治論をしようと思つてゐる。

君、來年の總選擧には、君等の同志會から誰か一人中立の人物を立てゝ運動してみてはどうだね。選擧といふ事にも慣れておく必要があると思ふ。今は大抵の人間がもう小橋みたいな政治屋はいけない事を知つてゐるから案外成功するかもしれない。

此間手紙をかいたばかりだから何も別に珍らしい事もない。妻は今日は病院通ひの日で出て行つてまだ歸らない。母はスッカリ弱つてしまつたが、それでも醫者はだん〳〵よいと言つて、昨日からおも湯が粥に變つた。妹が來てゐるので助かるよ。京子は毎日隣近所へ遊びに行つては喧嘩をして困る。一町四方へ聞えるやうな聲をして泣くのが手にとるやうに聞える。それでも歸つて來た時今日も泣いたナ一といへば、泣かないと強情をはつてゐる。

八月三十一日

啄木

宮崎兄

×

拜啓、久々にて御手紙拜見。相不變御壯健にて、日夕村事に御盡力の趣大慶此事に御座候。

殊に今回はまた豫て熱心に、御唱導被遊たる小學校舍新築の工事、愈々首尾克く落成の運びに至り候由、大兄を初め村民諸君の御滿足推察に不難、態々の御通報に接して小生に於ても誠に欣喜に堪へざる所に御座候。故山の敎育の面目それこれよりして、新たならんか、釋迦に說法の類ながら猶この上の御奮勵希望に不堪候、偖て右に就き校內裝飾の資として小生の寫眞御徵發の御命令の處、小生如きまでがその選に入りたる事その事の是非は別として、現在小生の境遇の遂に貴命に應ずる能はざるを奈何、小生由來寫眞をとるといふ事にあまり興味を有せず、從つて之を試みざること多年いつぞやも或る雜誌より強要せられて、止むなく十七歳の秋に寫したるもの唯一葉ありたるを與へやり候樣の次第、而して現在は本年一月以來の病氣猶快復に至らず、醫者より外出を禁じられ居候有樣にて寫眞屋にゆく事も不叶。折角の御言葉に背くこと誠に、心苦しく候へども、何卒御寛恕の程奉願上候、病氣は最初漫性腹膜炎との事にて、二月初め大學病院に入院、良好の經過をとりつゝありしに、同月末高度の發熱と共に肋膜炎を併發しその後、單調なる病院生活にうむに及んで無理矢理に醫師を說き伏せて退院は致し候ひしも、何分漫性の事とて思ふ樣に捗々しからずそれでも、五月頃には大分快方に向ひ候ひしに梅雨期に入りてより、また／＼面白からず先月中旬にはとう／＼再び四十度以上の發熱を見るに至り、前後十餘日も晝夜氷嚢のお蔭一つにて生命を繫ぎ候始末。その時は醫師も悲觀的の注意を家人に與へたる程に候ひし處惡運未だ盡きずその後どうやらまた持ち直し、客を避くるの意味にて家人に守られて表記に病床を移し候以來は經過更に順當、發熱も每日三十七度五六分を程度とするまでに低下し、食慾も進み候、只今にては、つゞけて、二時間位起きてゐても左程の疲勞を感ぜぬ位にまで漕ぎつけ候、自分でも年內は靜養の決心を致し居候へども、何分旣に七ケ月餘も活社會に遠ざかり居る事なれば、每日々々退屈この上なく、客あれども發熱の危險のため快よく議論することも出來ず、これが何よりの苦痛に御座候。小生澁民村を去りて旣に五年、その間やゝ深大なる思想の變遷を經驗し、世事に對する見解また自ら異る。近くは內閣授受の事あり

申し上げたき事多々有之候へど、今日はさしひかへ候、惟ふに我が日本に一大變革期の來る蓋し遠からざるべきか。

この事旣に××事件を緣として、二十七議會當時より人心の歸向漸く改まれるに知るべし、今次の西園寺內閣瓦解の時は即ちまた政界諸勢力の關係に或る進轉を見るの時ならむ、而してその時以後に於て隱れたる潮流は漸次地上に流出し來らむ、

病床ひとり靜かに世事を看測して多少の感あり、僅かに吾人青年の發言の機會また遠からざるべきを思うて慰む、大兄所思如何。

八月三十一日　　　啄木　拜

畠山亨樣　侍史

老父はじめ家人一同よりよろしくと申出候

×

夏中はお世話になつた、さてお前の立つた翌日乃ち一昨日京子がひどく熱が出たのですぐ醫者を呼んだが、夜になつて益々ひどく、四十度六分まで上り、夜明けまで眠らずに氷嚢をとりかへてやつた、風邪が原因で肺炎を起したのださうで、今日は少しよかつたが、今夕方また急に四十度近い熱が出て來たので頭や心臓を冷してゐる、どんな犧牲を拂つてもよいから殺したくないと思ふ、金はお前の立つた翌日すぐ出來たが、右の次第で萬一の場合の用心のため使はずに（ツヾク）

一九月二十六日夕　東京市小石川區久堅町七四ノ四六　石川一

石川光子殿

（ツヾク、ある、それに氷だけでさへ一日に五十錢もかゝる、あの衣類は今月の末まで待つて貰へまいか、

お前の知つてゐるあの不愉快な事件も昨夜になつてどうやらキマリがついた、家に置く、然しこの事についてはもう決して手紙などにかいてよこしてくれるな、それからいねの方の事件も一昨日先方から來て相談し、昨夜人を賴んでいねと一しよに行つて貰つて離縁狀も衣類もとつて了つた、今日小樽の姉からお前宛に來た手紙を廻送した筈だが、父の事が書いてあつたら至急知らしてくれ、

一九月二十六日夕　東京小石川久堅町七四ノ四六　石川一

石川光子殿

×

誠に恐れ入りますが、今日差上ぐべき筈のもの、どうか御延期を願ひます。何とも濟みませんですけれども。この頃は少し咳が出ますので、困つてゐます。何しろあまりハカがゆかないから、そのうちに醫者にすつかり處方を變へて貰ふ相談をしようと思つてゐます。熱は平生矢張七度五分位が頂上ですが、からだを動かすとか、一日寝ないでゐるとかすると、どうしても成績がよくありません。默つて寝てゐる日は七度二分位にしか上らないこともあります。一昨日は大掃除だといふので、午前に少し許りからだを使つたところがすぐ八度近く發熱しました。先日闘君が久し振りに血色のよい顏をして來て、池邊さんのやめられたことを知らしてくれました。私がかうして寝たり起きたりブラブラしてゐる間に、世の中が私と全く關係なしにズン〳〵變つてゆくことを思ふと、どうせ健康でゐても大勢に關係のない人間でありながら、矢張何だか唯一人取殘されて行くやうな氣がします。

革命戰が起つてから朝々新聞を讀む度に、支那に行きたくなります。さうして支那へ行きさへすれば、病氣などはすぐ直つてしまふやうな氣がします。

十一月一日　石川一

佐藤眞一樣

×

一年末といふ鋭い爪を持つた怪物が毎日朝から晩まで頭の底を引掻いて困る。その引掻き方が一日々々烈しくなるのだから弱つちやつた。大分盛んなやうだね。僕は一首も出來ない。ところで假りにクロの自傳だね、富田が僕へ直接屆けたと言つて來たがホントウだらうか。年末になつたから一寸お問合せする。それから長い間借りつ放しておいたお詫をする。

いつかの「街の一角」で僕の今度の年始狀が大分念の入つたものだといふことを承知した。僕にも一枚くれるだらうね。僕の方からのは明日年賀郵便に出すよ。

〔十二月〕二十八日夜　小石川區久堅町七四ノ四六號　石川一

土岐善麿樣

明治四十五年

×

謹賀新年

もう間もなく我々が交際を始めた一周年記念日が來る。この一年の間に、君が病中の僕に對してそゝいでくれた友情が、友のすくない僕にとつてどれだけ貴といものであつたかは、君も知つてゐてくれるだらう。僕はそれを年をとるまで忘れたくないと思ふ。

どうか今年はいゝ事が澤山あつてくれ——君のためにもさうして僕のためにも。

一九一二年元旦　石川一

土岐善麿樣

×

謹賀新年

今も猶やまひ癒えずと告げてやる文さへ書かず深きかなしみに

四十五年元旦　東京市小石川區久堅町七四ノ四六　石川一

岩崎正樣

×

謹賀新年

とう〳〵去年は病氣のうちに送つてしまひました。從つて御無沙汰ばつかりで何とも濟みません。寒いのがよくないやうですから、春暖の頃までは多分かうして行火に寢てゐなくてはならないだらうと思つてゐます。

四十五年元旦　小石川　石川一

金田一京助樣

×

「早稻田文學」を落手した。

あのザボンについて、も一度禮を言はなければならぬ。あの晩半分食つた時には、何となく日本の果物らしくない味を賞美しただけだつたが、昨日晝に殘りの半分を出した時は、僕は思はず聲を放つて喜んだよ。晝の光で見ると、あの厚い皮の內部の柔かい所が何とも言へない程なつかしい薄紅い色をしてゐるぢやないか。

君の來た日は朝から氣分がよく、今日あたり來るだらうと思つてゐた君が來てくれたので一日愉快に暮らしたつけが、昨日は少しまたいけなかつた。しかし暮の三十日から出てゐた熱がもう三十八度の上にはのぼらなくなつた。

今朝また机の位置を變へた。さうして新らしい机を一脚ほしくて仕方がなくなつた。

一二年一月七日午前　小石川區久堅町七四ノ四六　石川啄木

土岐哀果樣

×

拜復。昨夜お手紙を拜見いたしました。重ね重

れの御配慮、何とも有難う存じます。

無論私の現狀は萬事がお察しの通りです。寒氣のために去年の八九月頃よりは却つて惡い方で以前は朝だけは體溫が殆ど平溫になつてゐたのが今では三七度臺を下る事が全くありません。さうして殊に暮の三十日の日以來は、三八度以上に上ることも珍らしくないのです。それだのに藥も飲んだり飲まなかつたりしてゐる有樣です。「こんな風ではいけない」と每日思つてるのですけれども、熱つために內職に何か書くといふ事も出來ないので、どうにも仕方がないのです。ですから入院は私の進んで希望する處であります。施療を受けるといふ事だつて、自分では不名譽とも何とも思つてゐません。もうちやんと一度青山內科五號室で食心棒な電車の運轉手や最後出て隣の米搗爺さんや、鼻のひしやげた肴屋の大將などと一しよに、おし着せの棒縞の着物を着て過した經驗があるのですもの。何分よろしく願ひます。太田さんにも然るべく御鳳聲を願ひます。ですが、どうか手續だけでも少しの間待つて頂きたう御座います。折角御骨折つて下すつたのに斯う申すと、病氣をたてにする事に不熱心なやうで心苦しう御座いますけれども、決してさうではありません。老母は此頃ひどく健康を害して寢てゐるのです、さらでだに六十五年の過勞で、とても直視するに忍びない程骨と皮ばかりになつたからだが、去年の夏一月許り腸加答兒をやつて以來、めつきり衰へてゐたのでしたが。それが實は四日許り前から三十八度以上の熱があり、日に何度も〳〵咳と一しよに血を吐いたのです。もう今迄に御飯茶碗に二つ位は吐いたらうと思ひます。それですつかりまゐつてしまつて、平生寢てゐるといふ事のきらひだつたのが、昨日から床を離れません。吐いた血は肺から出たのか、それとも豫てから惡かつた心臟や胃に關係してゐるのか、それは醫者ならぬ私には分りませんが、兎も角も極めて不祥事ですから或は今度の打擊で再び起たない事になりはすまいかと心配してゐるので御座います。何しろからだがからだなものですから、少し音がないと心配でならず、夜などは二度も三度も妻に生きてゐるか否かを確かめさせる位です。去年賴んだ醫者なら余の用意なしにも來て貰へるので、呼びにやりましたが、あいにくその醫者は十二月以來、脊髓病とかで動けないでゐるとやらで役に立たず、仕方がないから或る友人に原稿料前借（雜誌から）の事を賴んでやつてあります。さうしてその返事が多分今日中に來る筈ですから、希望通り行つたらすぐ別の醫者を呼ぶつもりです。

唯今私の家は、この母と私共病夫婦と子供との四人だけなのですから、母のことがどうにかかうにか心配のない事にならないうちはどうしても私一人出て行く譯にいかないのであります。私の入院した後に萬一の事でもあつては大變ですし、それにまた私一人を力にしてゐる母の事ですから、私がゐなくなつたら、それ一つでも衰弱を增すに違ひありません。恥を申上なければ分りませんが母と妻との間に圓滑を缺いてゐるといふやうな事情もあるのです。

醫者が來て大丈夫だといひましたら四五日經過を見た上ですぐ入院の支度をいたします。その時はまた手紙を差上げてお願ひいたします。どうかそれまで手續の方を待つて頂きたう御座います。

それから戶籍の方の事ですが、一昨年子供の生れる時までは寄留屆も出さずにおいたのでしたが、出產屆を出す時ちやんともう本籍を東京市に移してありますので、それ以來市民の一人になつてゐる筈であります　尤もまだ一度も

納稅の通知をうけた事がありません。戶主は不在ですけれども、必要なれば戶主の印もあります。草々

一月二十二日

石川一拜

佐藤眞一樣

×

前略、老母の病氣、或る行違ひのため一日に醫者が二人來て見ましたが、診察の結果は二人共意見が一致し、さうしてそれが豫想以上に私を驚かしました。

喀血したからこそ「或は……」と思つたものの、それまでは少しも私共は知らずにゐたのでしたが、母には何年前よりとも知れない痼疾の肺患があつて、左肺が殆どその用をなさなくなつてゐるのださうです。知らずに過した後悔は先に立ちません。さうして非常に老衰してゐる處への喀血ですから、十中七八はこの寒中にたふれるだらうとの事です。事によると數日中かも知れないといふので、もう遠方にゐる姉や妹へ通知してやりました。喀血はとまり、氣分もはつきりしてゐるやうですけれど、寢たつきりです。もう第三期なんださうですから、金があつても恢復は出來ない事、金がなければ猶更の事、私もあきらめました。しかしこの儘默れて入院する事はどうしても出來ません。出來るだけは思ひきつて藥や滋養をとらせたいと思つてゐます。

母の病氣の事が分ると共に、去年からの私一家の不幸の源も分つたやうに思はれます。私がかうして一年も直りかねてゐたのも、つまりは結核性の體質だつたからでせう。尤も私の病氣はまだ肺結核にはなつてゐず、肋膜の患部に近い部分にラッセルが聞えるだけの程度だと、これについても昨日の醫者は二人共同じ事を言つて行きました。さうして現在のんでゐる藥を見せたところが、「これで可い、これ以上の方法はツベルクリンの注射と轉地だけだ」と言ひました。私は是非いつか注射をうけたいと思ひます。それから妻の結核性肺尖加答兒も、矢張母の病氣を知らずにゐた結果としか思はれません。これは病院でツベルクリン注射の結果、十二月中に檢鏡及び藥物反應試驗の上、結核菌の存在しない事に確定し、それ以來血色もよくなり、體重も增しました。たゞまだ寒氣のために加答兒が直らないで咳をするため、相不變病院通ひをしてゐます（一週二度）。

申上げねばならぬ事がまだあつたやうですけれど、熱をおかして何本も手紙をかいたあとで、頭がつかれてしまひました。いづれまたアトで申上げますから、どうぞ惡しからず。

母の事がどうかなつてもまだ私のからだが直りさうがなかつたらお願ひしますから太田さんにも然るべくお願ひいたします今の處は、此方からは私の藥をきらさないやうにするが專一だと思つてます（妻のは病院からたゞ貰つてますから）亂筆多罪。

一月二十四日午後

一拜

佐藤先生　御侍史

×

その後また御無沙汰。もう「黃昏に」の校正は始まつてゐるだらうね。早く見たいものだ。こなひだ君の歌について「學生」にかゝうと思つたが、途中でやめちやつた。やつぱりひとまとめにしてでなくちや書きにくい。この頃熱が我儘をはたらいて困る。高壓手段を

取つてしきりに解熱劑を用ゐてゐるが、仲々うまくいかない。そこへもつて來て數日前から老母が床についちやつた。醫者は、今明兩月の寒さを過ごすことが出來ないかも知れないと言つてゐる。善い事がどつさり來る筈の四十五年が、一月早々からこの通りぢや、僕も少しがつかりだ。一體誰が僕をいぢめるのかな。いくらいぢめたつて仲々降參なぞする僕ぢやないのに。

醫者が頗る横平な奴なので、來るたんび癪にさはる。さうしてそれが癪にさはると僕は何だか生き甲斐があるやうな氣がする

一月二十七日夕　小石川久堅町七四ノ四六　石川一

土岐善麿樣

×

自分ではかけないからお友達に代筆して貰ふ

母の病氣、實は今まで知らせないで居たが、一月中旬すぎに、一週間ばかり續けて喀血して床についたのであつた、喀血といへば肺結核の特にないから、びつくりして醫者を呼んだが、診斷の結果は何年前からとも知れない肺結核であるとの事であつた、初めはそんな筈はないと思つたが、去年俺が入院して居る時に多少喀血した相だし、それ以前からよく咳をして居た事はお前も承知の通りである、それから田村の姉も肺病で死んで居るし、母にきいて見ると母の兩親も今の言葉で言へば肺病で死んだらしい、それやこれや考へ合せると、醫者の言ふ事がやはり本當だ、それを知らずに居たために節子や俺も危險な目を見たのだ、

右の様な次第だから、母の夜具蒲團着物等は一切賣り拂ひ、かたみなどは誰にもやらぬ事にした、櫛かんざしは棺の中へ入れてしまつた、

俺も母の死ぬよほど前から毎日三十九度以上の熱が出るが床に就いて居たため同じ家に居ながらろく／＼慰めてやる事も出來なかつた、お前の手紙は死ぬ前の晩についた、とてもあれを讀んで聞かせても終ひまで聞いて居れる様な容態ではないので節子が大略を話するとお前から錢が來たといふ事だけがわかつたらしかつた、それからその晩何時頃だつたかはよく記憶しないが「みい、みい」と二度呼んだ、みいは居ないと言ふと、それ切り音がなくなつたが、この外に母はお前に就て何も言はなかつた、翌る朝、節子が起きて見た時にはもう手や足が冷たくなつて息はして居たがいくら呼んでも返事がない、そこで俺も床から這ひ出して行つて呼んで見たがやつぱり同じ事だ、すぐ醫者を迎へたが、その醫者の居るうちにすつかり息が切れてしまつた、お前の送つた金は藥代にならずにお香料になつた、

葬式は丸谷さんや土岐さんが一切世話をして呉れて九日の午後に行ひ、その晩火葬に附して、翌日淺草松清町の等光寺に納骨した、葬式の時はいね夫婦が來た、

頭を氷で冷やしながら、これまで、しやべつたが、もう何もない様だ、くれぐれも言ひつけるが俺へ手紙をよこす時用のないくだ／＼した文句をかくな、お前の手紙を見るたびに俺は癇癪がおこる、

三月二十一日　一

光子殿

年譜

此の年譜は、もと新潮社から「石川啄木全集」の巻尾の年譜を、日頃座右に置いて訂正増補してゐたものである。改造社の「石川啄木集」がこれを必要とする由につき、前の年譜の正誤をすべき義務をもつてゐた私は、こゝにその機會を取つたのである。尚このさきも、この年譜だけはいくらかづゝでも自分で追々とより正しいより精しいものに育てゝ行きたい考で、大方の叱正を希ふものである。終りに、本年譜の作成にあたりては、吉田孤羊君より、得易からざる資料の寄與にあづかりたることを明記して、謝意を表す。

昭和三年六月十六日

金田一京助

明治十九年　**一歳**

【二月】二十日、岩手縣岩手郡玉山村大字日戸常光寺に生まる。父は同寺住職石川一禎師。母は葛原氏、名はかつ子、盛岡市外龍谷寺住職佛禎對月師の妹。これより先、二女子あり、長はさだ子（後に田村氏夫人）次はとら子（後に山本千三郎氏夫人）。啄木は即ち第三子、一と命ぜらる。（尤も此デイトは戸籍上の事で、實は臘月押詰つての誕生だつたといふ）。

此歳同郡澁民村寳徳寺に移る。以後二十歳までこの寺がその家であつた。

明治二十四年　**（六歳）**

【三月】澁民村の小學校へあがる。穎異、神童の名あり。學友工藤千代治君と首席を爭ふ。

明治二十八年　**（十歳）**

【三月】澁民村小學校卒業。

【四月】笈を負うて盛岡に出づ。同市仙北町の母方の伯父、工藤經象氏に寓して市立の高等小學校へあがる。（當時その同級に伊東圭一郎氏あり、二年に小笠原謙吉氏、三年に阿部修一郎氏、四年に金田一京助等あり、始めて相識る）。

この學年中、上級の小笠原氏が回覽雜誌「筆戰」を見て羨ましくて堪らず、負けぬ氣になつて忽ち獨力にて又一雜誌を綴つて對抗す。

明治三十一年　**（十三歳）**

【三月】高等小學四年へ進級。

【四月】岩手縣立盛岡中學校入學。阿部修一郎君首席、詩人は即ち第二席。一等小さな組、丁一年級へ編入されて、第三席以下に伊東圭一郎、小野弘三、小澤恒一の諸君あり。以後此數氏と交遊日に篤し。

明治三十二年　**（十四歳）**

【三月】中學二年へ進級。

當時海軍に志あり、同志の上級先輩に現海軍兵學校教頭海軍大佐及川古志郎氏あり、就いて「天地玄黄」「東西南北」を見、始めて與謝野寛氏の歌風に親炙す。且つ金田一京助が同中學に於ける唯一の與謝野氏社中の同人なる由を聞き、之を訪ひて「明星」を借りて歸り、遂に新詩社に入る。

回覽雜誌を編輯し、翠江と號し、新詩社風の短歌を作る。同時に學課の方漸く荒む。

此年又市内新山小路田村氏方に寓して、裏合せ垣根續きの隣家なる堀合忠操氏の愛孃節子さんと相知る。即ち後年の石川節子夫人なり。

明治三十三年　**（十五歳）**

【三月】中學三年へ進級。

文學、哲學の書を渉獵すること益々急に、同時に學校の課業は愈々荒廢す。窓から教場を脱して城山の草に寝る日次第に多し。

ユニオン會漸く活躍、阿部、小野の二君は級の正・副級長として正面に立ち、詩人は即ち帷幄の裡に在りて畫策し、自ら參謀長の觀あり、以てクラスメイトの牛耳を執る。而も此間に、詩人は、その文學的感化を小澤君に、政治的社會的趣味及宗教的感化を、伊東君に負ふところありたるが如し。

此夏、上野驛勤務だつた山本千三郎氏方へ來る。[illegible]には、これが初度の上京。但し上野の杜を逍遥し、森に親しんで歸つた。

此冬、足尾銅山の鑛毒問題あり。同人輩起し、號外賣りをして醵金す。此時偶々八甲田山雪中行軍凍死の事變あり、號外日に幾度となく出でて、凍死者搜索の經過を報じ、逐次凍死者の氏名を發表す。詩人等爭うて號外を求む。依つて、巨額の金員を得て足尾の被害者に義捐す。

明治三十四年　（十六歳）

【二月】詩人のクラスより延いて殆んど全校のストライキ起り、學校動搖す。

【三月】ストライキ成功し、試驗無しにて四年へ進級。教職員殆んど全部の更迭あり、生徒には一人の犠牲者もなし。その大ストライキの總參謀に詩人が居たのである。

【五月】回覽雜誌「三日月」を編輯。翠江と號す。

【九月】回覽雜誌「爾伎多麻」を編輯。その初號に、美文「秋の愁ひ」及び短歌「秋草」三十首を發表。

【十月】誌友會を市外津志田に開く。

移轉。盛岡市四ツ家町二十七長屋、田村方居住。

【十一月】田村氏の移轉と共に移轉して盛岡市仁王小路三十番戸に居住す。

明治三十五年　（十七歳）

【一月】自ら發起して「文庫」誌友會を盛岡多賀の水月亭に開催、同人の來會するもの三十五六。

麥羊の號を用ふ。

【三月】中學五年に進級す。但し學課の方は殆んどそつち除け。其割りに席次は大した下席には降らなかつた。

偶々盛岡中學校へ赴任せし新詩社の大井蒼梧氏を推戴、同級の金子、細越、中館の諸氏及び、一級下の瀬川花鈴、小林花郷、岡山殘紅諸氏と白羊會を組織す。

長詩『牧舍の賦』を白蘋の號で校友會雜誌に出す。白蘋は、遊座氏の寺の池中に白い花を浮けて美しく咲いてゐた水草の名。

【七月】暑中休暇にて故郷に歸臥す。遊座氏の禪房は日夕同人を送迎して殆んど寧日なし。美文「高調」を白蘋の號で校友會雜誌に載す。

【八月】五日、古木、小林等の四人を迎へて夜半まで大騒ぎをして遊ぶ。翌日更に瀬川花鈴を遙々黑澤尻より迎ふ。

暑中休暇の一ケ月は、朝夕詩人の交友を送り迎へて、嚴父が年末までの豫想の米を食ひ盡し、あまつさへ庫裡の畳は、詩人が九月學校へ出ると共に空になつてゐたといふ。これは嚴父が後年によく物語られることだつた。

【九月】[illegible]大に白羊會同人を會して内丸公園に歡會を開く。

【十月】雜誌「明星」五號に始めて白蘋の號で歌一首載る。曰く「血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひこゝに野にさけぶ秋」。

此月中學を半途退學して上京す。或は學費が無くなつたから、「面倒臭い、何も中學位卒業しなくたつて俺は立つて行ける」と豪語して飛び出したものだつたともいひ、或は又

代數をなさけて落第點をつけられたのに業を煮やし、友人金子君、小澤君などの出京に促されて飛び出したものだつたともいふ。

【十一月】三日、小石川區小日向臺町三丁目九十三、大館方に在り。

第三「明星」六號に短歌一首、曰く「夢はかくて、戀はかくしてはかなげに過ぎなむ世とも人の云はじ云へ」。

二十九日、友人へ書き送つて曰ふ、「病の爲、生計の資を得ん爲に殆んど筆紙に親む能はざるを如何せんや」と。恐らく此當時の眞相。

【十二月】「岩間よぢて天のよそほひ地のひびき聞くひかりの陸奥を見る」以下三首、第三「明星」七號に載る。

「盛中校友會雜誌」に、白蘋の名で「玫瑰」(短歌九首)載る。

明治三十六年（十八歳）

【一月】東京の正月を迎ふ。

【二月】小石川の窩に病む。嚴父遙々迎へに上京し携へて歸村す。

澁民村の禪房に病骨を養ふ。書を花郷に寄せて曰く、「一女の一語、父母小妹の一擧手、戀人の一盻……若し病者の最好藥劑はと問はば生はたゞに故郷にかへれと申すべく候」云々。

【七月】「このおきな筆を立てゝは虎のごと瞻は少女のとめ針のごと(イブセンの像に)」以下四首、「明星」卯歳七號。

【八月】書を花郷へ寄せて曰く、「うつろより憐みもてくる影の如秋は吾頰の瘦に入りけり」。

ロセッチのソネットを讃仰し、蒲原有明氏の「獨絃哀歌」を又なく愛誦す。

【十一月】「根負ひて悲風ひとたび胸に入り泣くに涙ぞみな石となる」以下四首「明星」卯歳第十一號。

故山に悠遊すること十閲月、病の衰ふると共に詩境漸く熟し來り、一日田圃の畔を吟行しつゝふと四八六の韻律を體得し、長詩「杜に立ちて」以下數篇の作あり。蓋し詩集「あこがれ」の詩篇はこの時以來のものにかゝる。

【十二月】長詩「愁調」(「杜に立ちて」以下五篇)「明星」卯歳第十二號に載る。始めて啄木と署名す。恩師與謝野氏に乞ひて得たる雅號。但し、衆未だ之を知らず、優麗なる韻律はやくも時人の耳を聳つ。

一日、長詩「海の怒」、三日「荒磯」、五日「夕の海」、十四日「森の追懷」、月末「おもひで」成る。

明治三十七年（十九歳）

【一月】元日の「岩手日報」紙上にヨネ野口の「東海より」を紹介評論す。

長詩「いのちの舟」「孤境」「錦木塚」「鶴飼橋に立ちて」成る。

【二月】姉崎博士の來遊を、盛岡市高與旅館の樓上に訪ひて夜更くるまで語る。

【三月】長詩「落瓦の賦」「山彦」成る。

【四月】長詩「曉鐘」「暮鐘」「夜の鐘」及「塔影」成る。

【五月】長詩「黄金幻境の夢の花」しらべの海「五月姫」「ひとりゆかむ」「花守の歌」「月と鐘」「我なりき」「閑古鳥」成る。

【六月】長詩「ほとゝぎす」「マカロフ提督追悼の詩」「金甌の歌」「アカシヤの蔭」「ひとつ家」「壁なき家」成る。

【八月】長詩「鷗」「光の門」「寂寥」「黄金向日葵」「我が世界」「黄の小花」成る。

【九月】長詩「寂寥」、十九歳の時の小照と共に「明星」に出づ。長詩「高風吟」「光の門」外一篇「白百合」に出づ。

五日、長詩「君が花」「波は消えつゝ」「柳」「愛の路」「落ちし木の實」「秘密」「あゆみ」成る。

十七日、長詩『江上の曲』の作あり。

廿八日、故郷を立ちて尻内に至る。北海道へ赴く途なり。

三十日、青森を立ちて津輕海峡を渡る。初度の北海行。

【十月】 長詩『秋風高歌』を、『時代思潮』に發表。

一日、函館より小樽へ。獨逸船ヘレン號。

二日、小樽上陸。

七日、小樽稻穗町山本千三郎氏（二番目の姉さんの嫁がれたおうち）方にあり。「毎日病める姉の枕邊にて旅の思ひにふけり居り」（林外氏への書簡）

十九日、北海の旅より歸郷。

二十八日、故郷を立ち出京の途に上る。

三十一日、（三度目の）上京、向ヶ岡彌生町三、村井方に止宿す。

【十一月】 長詩『白羊調』（「君が花」「波は消えつゝ」以下四篇）を『白百合』に發表す。長詩『秋風高歌』を『時代思潮』に發表す。『盛中校友會雜誌』に、感想『秋草一束』を載す。

八日、[illegible]神田駿河臺袋町八、養精館内に。

十四日、長詩『清絶』成る。

十八日、長詩『天火盞』『壁畫』『炎の宮』成る。

十九日、長詩『のぞみ』成る。

廿一日、長詩『眠れる都』『二つの影』成る。

廿八日、轉宿、牛込區砂土原町三丁目二十一、井田芳太郎方。

【十二月】 長詩『新聲二首』を『時代思潮』へ、『天火盞』『壁畫』及『炎の宮』を『白百合』へ、『のぞみ』を『明星』へ、『野路』を『太陽』へ發表す。

一日、姉崎博士を訪ふ。

此月、長詩『夢の宴』『いばらの冠』成る。

十一日、長詩『電光』『祭の夜』成る。

十二日、長詩『曉霧』『落葉の煙』成る。

二十二日、長詩『古瓶子』『救濟の綱』『あさがほ』成る。

明治三十八年 （二十歳）

【一月】 長詩『夢の宴』を『曉聲』に、『心の聲』（『電光』『祭の夜』）を『明星』に發表す。

五日、新詩社新年會。此夜、主人夫妻に山川、増田の二女史と大井蒼梧、平野萬里、茅野蕭々の諸氏と共に、一夜百首會の試みあり。然れども眞面目に面と向つて競技的氣分になれなかつた詩人は、氣まぐればつかりいつて碌に作らなかつた。

十八日、長詩『白羽の鵠船』成る。

漸く詩人としてその名が高くなる一方に段々、舊友の多くから離れて行つたのも此頃であつた。其には色々な原因もあつたらうけれど、年少客氣の詩人は、生活といふことに就てはまだ全く無考へであつた。要するに詩では食つて行けなかつたので、自然無理な生活をしてゐたのである。其ために友人や先輩、故舊や恩人に、知らず／＼金錢上の迷惑をかけたり、心ならぬ不義理を重ねたりなどしたのである。かうして四方に幾多非難の聲を生じると同時に、郷黨や舊知の間には數多の惡聲が起つてゐたのである。其中に恐らく最も悲しい最も深い[illegible]の一つは多年自分が牛耳を執つて來た中學の[illegible]時代からの無二の腹心であり、後援であつた舊友達のユニオン會から受けた絶交の宣言であつたであらう。併し詩人は最後まで此等の舊友をば毛頭怨みも惡みもしてはゐなかつた。

【二月】 長詩『いばらの冠』を『白百合』に載る。

十八日、長詩『落葉』成る。

十九日、長詩『泉』成る。

二十日、長詩『青衣』『小田屋守』『春の花』成る。

二十一日、長詩『草苺』成る。

詩集出版の企圖漸く熟す。

【三月】長詩「擱生ごゝろ」（落櫛以下五篇）「明星」に出づ。
十日、牛込揥方町に轉宿。
十八日、長詩「めしひの少女」成る。
十九日、詩集「あこがれ」の卷頭に揭げた序詩「沈める鐘」成る。

【四月】長詩「めしひの少女」（三）「明星」に出づ。
十一日、書簡に云ふ、「神よ願はくは余をして生活の條件のために心を要せしむる勿れ、それ以上の事は余自ら成就しうるの自信あり。然らざれば願はくは凡ての人の同情を余より奪ひ去れ、これあるうちは余は永久に惡人たらざらむとして苦悶せざるべからざる也」云々。鄕里の兩親が寺を出られ、一家の生活上の全責任が一時に詩人の雙肩にかゝつて來たのがこの頃の事か。其は、三月二日附を以て、石川一禎氏一家の原籍變更屆出が岩手郡澁民村役場に出て居り、四月二十五日を以て、盛岡市仁王第三地割帷子小路七十九番地へ轉籍になつてゐるからである。
十五日、新詩社同人演劇會を江東伊勢平樓に開く。ヒロインの死ぬ幕に、幕の陰で鶯を鳴かす役を勤める。

【五月】長詩『古苑』以下三篇を「明星」に發表す。
詩集出づ。『あこがれ』といふ。上田敏博士の序詩、與謝野氏の跋、鄕友石掛友造君の裝幀、書肆も亦盛岡から出て來てゐた作人小田島黃花の經營する小田島書房。
中旬、網島梁川氏を病床に訪ふ。
二十日、處女詩集『あこがれ』を抱いて東京を去り、歸鄕の途に就く。友に書を致していふ、「ふるさとの閑古鳥を聽かんとして」立つと。さうであつたにちがひないけれど、それと共に、或は生活の壓迫も、詩人をして「落ちびと」たらしめた一大原因であつた。
下旬、歸鄕の途次、仙臺に下車して廣瀨川の岸に滯留十日、土井晚翠氏を其居に訪ひ、又、同鄕の友にて當時醫學專門に居た小林花鄕、猪狩五山に逢ふ。「わかば衣」の一文、長詩『くだかけ』（晚翠におくる）及「夏は來ぬ」の作あり。

【六月】四日、盛岡に出で、帷子小路八番戶に寓居。こゝに年來の戀人で約婚の間柄であつた堀合節子さんと結婚し、兩親及令妹光さんと一家五人の家庭を形造る。
九日、稿を起せる隨筆『閑天地』、日々「岩手日報」紙上を賑はす。その「我が四疊半」最もよく新婚の夢あたゝかなる當時の身分竝に境遇を寫す。
十日、長詩「琴をひけ」の作あり。
十一日、「妹よ」「明滅」及び「この心」の作あり。
二十五日、家を同市中津河畔なる加賀野川原町四番戶に移す。

【七月】長詩「杜陵雜詩」三篇（「妹よ」「琴をひけ」「この心」）を「明星」に發表す。
四日、長詩「さみだれ」の作あり。
當時の心持を「江畔雜詩」に序して云ふ。「さきには一人の親縁さへなき客舍の人たりし身が、今はあたゝかなる愛の新苑に心の限り甘き慰めを呼吸するなり」「さきには塵埃を吸ひ煤煙に黃ばめる日光を浴びしに、今は些のけがれなき新鮮の空氣を吸ひ、些の遮りなき天日の影を直ちに浴ぶる也」云々。更に「一家をこの中津川の畔にうつしてより、日夕潺湲たる水の音に耳を洗ひ、それともなき夏瘦せの病軀を綠かをる樹かげの椽に安らへては、あはれ久しく塵に染みし我が心、いつしか再び昔の浄けさにかへれる如く」云々。
十六日、大に知友を會して歌會を催す。

【八月】六日、「岩手日報」に、『岩手縣師範學

つてゐた。それでも段々高等科の地理歴史をも受持ち、教へてゐる中に子供らが無上に可愛くなり、終に全我を擧げ一眞劍に打ち込み、自分の人格を無垢なる故郷の少年に鑄込まうとしてゐた。放課後も夕刻まで英語を教へ、十分毎の休みには、卒業生へ『中等國語讀本』を講義してやるといふ熱心さ、自ら公言して日本一の代用教員といふ。

又友人に書を裁していふ、「詩人のみ眞の教育家なるべし」。「詩人の眞實の友は評家にあらず、讀者にあらず、たゞ神の如く無邪氣なる田園の兒女あるのみ」。又曰く、一時として傾天の興趣油然として湧くことあり、しかも机上を探つて一葉の紙片をも得ざること多し。かゝる時たゞ瞑目して苦茗を啜るのみ」と。又曰く「人生に對する予の不平は日々に益々多し、生活の苦闘も亦日に甚だし。八圓の月給がよく一家五人を養ひうるの理遂になきなり。然れども一切の不幸は却つて予が精神を鼓舞するの良薬なり。鼓舞せられたる精神の火は日夜我が紅唇を迸り出でて、神の如く無垢なる子弟の血に燃え移りつゝあり、感化は畢竟救濟なり、一國の王とならむよりも、一人の人を救濟するは大なる事業なり」云々。

同校先輩女教員に上野さめ子女史あり、又後に來た人に堀田ひで子女史あり。

【六月】 十日、農繁休業を幸ひ、役場から月給を前借して上京、一つは第一詩集の出版を相談のため、又一つには寶德寺後燈問題の場合ゆゑ嚴父のため曹洞宗の宗務局へ運動の用向きなども兼ねた。千駄ケ谷の與謝野氏へ十日程滯留してゐたが、運動は皆無効に歸したらしかつた。たゞ色々新刊の小説を讀む機會を得、「俺だつて書ける!」といふ氣になつて歸國した。

【七月】 三日の夕から異常な勇氣を以て小説の稿を起した。處女作『おもかげ』を脱稿し小山内薫氏へ送つて適當の雜誌へ周旋方を賴んだ。その外に『雲は天才である』を半分程書き上げた。

【八月】 金田一へ、ドイツ語をやりたい、適當な本を欲しいと云つてやる。

九日、ジャーマンコースと、ハイネの詩集など金田一より送り來る。ついて、ドイツ語の獨學を始む。

十一日、長詩「吹角」の作あり。

十三日、村の祭の夜、出でて村の娘や若者と一緒に躍る。

十六日、一友人に書き遣つて曰ふ、「紙はなく、米は無し。本月分の月給は既に〳〵前借してあり。如何にせばやと首傾げ居候。この月はダメなり。人生意の如くならず。小山内君より送つて來るべき原稿料を待つうち、五人一家の命を續く方法に就て考へつゝあり候」。

たうとう此夏は蚊帳をつらず、袷を着てとほす。

それでも、盆が來れば、村人の間へ交つて盆踊をして夜を徹して興じたり、又しやう事なしにドイツ語の猛練習などをやり、一ケ月で村で唯一のドイツ語の相手、村醫の瀬川氏へドイツ語で手紙を書いた。

當時のことを、教兒だつた秋濱三郎氏が後年(二十一年目の昭和二年の啄木忌に)その追憶をから書いた。「夜は又毎晩押しかけて英語や歌などを教はり、日曜日などには朝から詰掛けてお咄をねだつたものである。先生は街路に面した障子に向けて据ゑられた机に倚られ煙草をくゆらし乍らいろ〳〵な咄をなされた。西郷南洲、日蓮、ナポレオン、ビスマルク等記憶に殘つてゐる。先生は咄にも飽きると目玉を廻されたり、耳を動かしたり、顏を歪

めなどしてわたし共を笑はした。夏の夕方は北上の川邊や鶴飼橋、村の端、お寺の堤などを大きな聲で詩を吟じながら散歩されたものだ。いつも子供等はそのまはりをとりまいてついてあるいた」（「岩手日報」）。

【十一月】 十七日夜、長詩「公孫樹」「雪の夜」の作あり。

二十二日、小說「葬列」脫稿。

二十三日、感想「林中書」起稿。（「盛中校友會雜誌」四十年三月、第九號所載）。

【十二月】 二十九日、長女生る。京子と名づく。

この月の「明星」に未完の小說『葬列』發表。

明治四十年　（二十二歲）

【一月】 函館の文學雜誌「紅苜蓿」に長詩「公孫樹」「かりがね」「雪の夜」を發表す。

【二月】 「紅苜蓿」に、長詩「鹿角の國を憶ふの歌」を發表す。

【三月】 相變らず窮乏の生活。共に首席を爭うた昔の同級生、當時の役場の書記である工藤氏に、米を二升貸してくれといふやうな手紙を屢々書いた。或時は夕食がない爲、食はずに一家早寢をした。或時は朝めしがない爲に、食はずに登校し、食はずに歸宅した。併し當の本人は存外氣樂さうにかまへて、宿の二階でヴァイオリンなどを彈く。一家飢に沈默する夜などは、故意に冗談を云つてみんなを笑はす。

この冬の內に起つた出來事であつた。母堂が或る朝突然大聲に「はじめ！」「はじめ！」を連呼された。吃驚して詩人が行つて見ると、嚴父の臥床がもぬけの空になつてゐた。深夜に雪を踏んで家出をされたらしいのである。それは每日每日にあまる困窮の生活を坐視することが出來なくなつて、口の一つだけでも減してやらば、みなのものがいくらか、樂にもならうと、ひとり誰にも圖らず決行されたことだつた。憂にとざされ、淚にむせんで日を送つてゐると、二三日すぎて、母方の親戚の米內氏から消息があつて、安心した。それは、奧中山驛へついて、倒れてゐる嚴父を見出したのは、偶々米內氏で、事情を聞いて、嚴父へ汽車賃をあげて、青森縣下の野邊地の對月老師の許へ立たしてあげたといふことであつたから。

【四月】 校長遠藤某氏に對する反感から、或は茶目式の興味から、生徒を引率して自分の作つたストライキの歌を高唱させながら校門を出た。當時の教兒の水上波治馬君が後に啄木一周忌に「岩手日報」へ寄せた「在職時代の啄木」に據ると、かくて、校舍から南方約一里ばかりの野原まで行つて其處で高等科生全部が相談して三日間休むことにきめ、ストライキの歌を歌ひながら散じたのであつた。併し、この爲に遂に母校の代用教員を免ぜられてしまつた。

【五月】 四日、令妹光子さんを連れて故郷を立つ。

五日、津輕海峽を渡つて函館に着く。光子さんは棧橋からすぐに小樽行の汽車に乘じて姉君（山本千三郎氏夫人）の方へ赴く。是より先函館には東京新詩社の同人大島經男（流人）氏を始めとして宮崎大四郎（郁雨）岩崎正（白鯨）吉野章三（白村）並木武雄（翡翠）松岡政之助（蕗堂）の諸氏が苜蓿社といふのを組織し、雜誌「紅苜蓿」を出してゐ、啄木の長詩を貰つて掲載しなどしてゐた。是に於てその招きを受け、入つて直に「紅苜蓿」を主宰することになつたのである。

『一握の砂』の中「忘れがたき人人」は、北海漂泊の想出。其前半は則ち此時の事にかゝる。「をさなきとき」及「おそらくは」は岩崎氏を、「とるに足らぬ」は大島氏を、「大川の」及び「智

慧とその」は宮崎氏を、「悲めば」及び「若くして」は吉野氏を、歌へるもの。
十八日、白鯨、露堂の二氏と苜蓿社樓上、題を求めて長詩「水無月」の作あり。
二十六日、長詩「年老いし彼は商人」及び「辻」「笛に」「馬車の中」等の作あり。
此月、一時函館商業會議所の雇となる。苜蓿社の同人澤田信太郎氏（天峯、現朝鮮銀行司事）の紹介であつた。
【六月】 長詩「水無月」を「紅苜蓿」に發表す。
三十日、長詩「戀」の作あり。
此月、彌生小學校の代用教員となる。多分吉野白村氏の周旋。月收十二圓。
【七月】 七日、夫人節子さん遂々京ちやんをおんぶして故郷より來る。同人皆桟橋まで迎へに行く。それから同人諸氏の助力で、どうかこうか青柳町へ一家を持つ。
此月、小説「漂泊」を書く。「紅苜蓿」七月號に載る。又大木頭の名で、同誌に「六月の雜誌界」を書く。
【八月】 短歌「世に一の反逆の子は三つばかり御酒をまゐりて圓寝するかな」「我を見る時のみ貌に見ゆる子のあれと願ひぬ安からぬ人」以下十五首「明星」に載る。
三日、母堂を迎ふべく、青森へ立つ。この日並木君の盡力で函館丸の一等船室へ入れてもらつて函館から青森へ、更に汽車で青森から野邊地へ向ふ。野邊地には、伯父葛原對月師の許に、嚴父あり、又母堂もあとから見えてこゝに居られたので、翌四日、母堂を伴ひて野邊地を立ち、青森より石狩丸にて函館へ歸る。是に於て久しく離散せる一家再び一所に落着く。小樽の姉君の許に身を寄せてあつた妹さんもこゝに來り合す。
「紅苜蓿」第八號特別號の編輯に熱中す。
十八日、齋藤大硯氏の紹介にて、函館日々新聞社に入り、その遊軍記者となる。月收十五圓也。月曜文壇、日々歌壇を起し、又「辻講釋」といふ題にて評論を草す。
二十五日、函館の大火。座暖まる暇もなく、折角の學校も、新聞社も、而して「紅苜蓿」の原稿全部も、その印刷所と共にみな焼失す。苦心の長篇小説「面影」又厄に遭ふ。同人四散、苜蓿社沒落。
手記に、「百二十有餘日、此地の生活長からずといへども又多趣なりき。一人も知る人なき地に來て多くの友を得ぬ。多くの友を後にして、我今函館を去らんとするなり」。
【九月】 短歌「磯ゆけば浪來てわれの靴跡を消せりわれはた何を忘れゆく」以下八首「明星」に。
上旬、小學校辭職。
十三日、函館を立つて再び流轉の生活。翌十四日札幌に入る。これは、同縣人小國露堂氏（「北門新報」の硬派記者）の推薦と、同人向井永太郎（夷希微）が斡旋の結果であつたやうだ。向井氏の宿なる北七條西四丁目四番地、田中方に假寓。
十六日、北門新報社に出社、佐藤和亮氏と共に編輯局室にて校正の事に從ふ。月收十五圓。一家族は此日函館を立ちて小樽の姉君方へ落着く。
十九日、友人へ書を寄せて訴へて曰ふ、「函館を立つ日、與謝野氏より、東京に來ては如何との手紙ありしが、迷へる兒は未だ返事出さず居候。行くにしても母と妹は小樽へ置くとして妻子をつれて行つては困る事は同じ也。どうすればよいのか。天下無茶苦茶也」。
然併、二十日の書信に曰ふ、「喜んで貰ふ事が有之候……外ではなし、小生が今迄餘りに生活とか其他のために心を勞して自分の本領を忘れむとして居た事を自分自身で自覺

の因も我なりしと今は思へり。一毆らむといふに毆れとつめよせし昔の我のいとほしさかな」。何でも相手が息をきらして拳を亂下して來たとき、詩人は、指一本ささずだまつて打たれて、あははははと笑つてやつたさう。相手がかん〳〵に怒つて衝きとばして來たので、詩人は、團子の樣に床の上へころんださうだが、起きもやらず、又、あはははと笑つてやつたさうだ。

此小樽在住の間に、『隨筆』冷火録』、小說『牛乳壜』の作あり。

當時のことを『小樽のかたみ』に序していふ、「予の日報社編輯局にある、前後僅かに八十日、其日夕筆にしたる所、所謂尋常の三面記事に過ぎず、然も其爲に殆んど自己みづからの時間を有する能はず、一冊の書を讀まず、一通の書信をも靜に書く能はざりしと雖も、追想一番し來れば這間に得たる所實に甚だ多きに驚かずんばあらず、予は此活知識が他日必ず予を益する事あるべきを思へり』と。

明治四十一年 （**二十三歳**）

【一月】 日報社を退き一文なしの寒い正月を迎ふ。

日報社長白石義郎氏其才を惜み、その「釧路新聞」擴張の爲めに釧路行を勸む。

十九日、朝、京ちやんをおんぶした夫人に見送られつゝ吹雪の中の小樽驛を白石社長と共に釧路に向つて發す。當時の事『子を負ひて』以下歌三十首、『一握の砂』の『忘れがたき人人』。

釧路新聞社に入るや、まづ編輯長といふ格、大木頭の名で、『雲間寸觀』と題して、政治、經濟、社會の各方面に渉る評論を執筆する外、釧路詞壇を起して、おもはれ人の名で自作をも發表し、又長詩短歌を募つて選をする等、大に活動し、こゝにも亦著々得意の境地を拓く。

二十六日、愛國婦人會に臨席して「新時代の婦人」と題する卽席演說をやる。

【二月】 二日、本社新築落成祝賀會に新聞記者團の演劇あり。自ら脚本『無冠の帝王』を書いてその主人公に扮し、大に氣を吐く。此間に土地で一等の歌妓に愛された艷話もある。「わが醉ひに心痛めてうたはざる女ありしがいかになれるや」以下「その膝に枕しつつも我がこころ思ひしはみな我のことなり」など二十首の歌は是。（『一握の砂』の『忘れがたき人人』二）。

『感想』手を見つつ』及『卓上一枝』の稿あり。

【三月】 『釧路新聞』豫期どほりの擴張の基礎ほゞ成ると共に、中央文壇自然主義勃興の風潮を遙かに望見して食指動く。下旬から出社せず、悶々終に上京を決心す。

【四月】 「明星」四號に應募歌「瓶」を選す。

書を友人に送つていふ、「此度の上京は實際啄木一生の死活問題だ――君、泣く程の切ない心地は、僕が一人居る時、常に過ぎる位味はうてゐる。どうか、人の前、特に親しい君等の前では、啄木を聲の高い、口を大きく開いて笑ふ、よく女の話をする……と云つた風の男にして置いてくれ玉へ」と。

二日、酒田川丸にて釧路を立つ。陸中宮古に寄港して七日に至つて函館に着く。去年五月初めて函館に上陸してから約一年、その時買つた足駄チビて齒が一寸も橫に出てゐるのを穿いて北海道を一周して來た。

十四日、小樽に赴き、二十二日、家族をまとめて一同函館へ出づ。諸友相談の結果、宮崎郁雨君の好意で、家族は同地へ置いて、まづひとり上京することに一決す。

二十五日、早曉三河丸にて函館を立つ。家族をば、定收入にありつくまで、宮崎氏が預つてくれることになつた。

二十七日、横濱へ着く。

翌日上京、まづ千駄ケ谷の與謝野氏を訪ふ。

二十九日、入京、本郷菊坂町の赤心館といふ下宿に金田一京助を訪ねる。手荷物一つなく着のみ着のまゝ、瓦斯絣の綿入へ紡績飛白の羽織を着て、ステッキを持つてゐた。「荷物一つないから、知らぬ下宿では置くまいから」といつて、其まゝ同室に二人でゐる。

【五月】同室してゐてはお互に話ばかりしてゐていけないからと、金田一の室から、テーブルと椅子を運んで二階の一室へ陣取る。

「詩は、もうダメ。今度は小説を書くのだ」と云つてゐたがそれでも、『泣くよりも』『以下数篇の詩を書いた。小説は書き澁りながら苦んでゐたが、最初『菊池君』といふのを書いた。

十八日、『病院の窓』起稿。（二十六日脱稿）。

三十日、『母』を草す。

三十一日、『天鵞絨』起稿。

【六月】長詩『泣くよりも』『あによめ』『殺意』『辯疏』を「明星」に發表す。

四日、『天鵞絨』脱稿。

小説ならばと思つた其小説は、雜誌へ載せて貰へなかつたので又々やはり生活難に迫はれる。いら／＼して苦しさうな日を送つた。

そのうちに、一夜寝ねかけて數十首の歌を作つてゐた。以後それが毎夜々々續いて忽ちの間に數百首を數ふるに至つた。後に出た『一握の砂』は當時の感興に成るもので以後の歌集だつた。

【七月】「明星」に、短歌『石破集』百十四首を發表す。「石ひとつ落ちぬる時に面白し萬山を撼る谷のとどろき」以下、この中に著名な「東海の小島の磯の」や「頰に傳ふ涙のごはず一握の砂を示しゝ人を忘れず」だの「たはむれに母を背負ひて」の親孝行の歌などがあつた。

又同誌に散文詩『曠野』『白い鳥、血の海』『火星の芝居』『二人連』『祖父』出づ。又同誌上應募短歌「風」の選をやつてゐる。

四日、森鷗外博士宅の短歌會に、左千夫、白秋、勇、萬里の諸氏と會す。

五日、正宗白鳥氏を訪ね、殆んど無言の對面をして感心して歸る。

好んで本郷通りの この頃の夜の街を散歩した。

書いても／＼小説が取つて貰へず、無收入のまゝで下宿料のみ嵩む。督促が段々急になる。悶々として苦み抜いて、或時は殆んど自暴自棄して死なんとまでした。

此頃宮崎氏へ與へた手紙に、「蒼茫たる宇宙の間に僅の時間を與へられて生きてゐるのが我等人間だ。價値も何もあつたものでない。人生に定義がないから、眞とは何ぞ、美とは何ぞ、皆不可解だ。藝術にも定義なく、從つて價値なく、自己にも定義なく價値がない。考へると死ぬ外はない。虚無だ。盲動あるのみ。これが僕の得た目下の結論だ」と。

【八月】「明星」に、短歌四十首發表。その中に「怒る時必ず一つ鉢を割り九百九十九割りて死なまし」だの「一塊の土に涙し」だの「大聲にふるさと人を罵りて皆に石うたれのがれ出でにき」などあり。長詩四篇『流木』『黒き箱』『老人』『白骨』又同誌に出づ。又應募短歌「見」の選をやつてゐる。

十二日、徹夜短歌競技會が千駄ケ谷にあり。與謝野氏、同夫人、白秋、勇、萬里、蒼梧、雅子の諸氏と。

【九月】五日、千駄木の森博士邸の歌會に參す。

六日、金田一と共に本郷森川町一番地、新坂上の蓋平館別莊へ移り、その三階の三疊間にて富士を望む見晴らしの好い一室に起臥することとなる。今迄の長い壓迫から逃れて何も

かも新しい心持になり、殊に今迄聞かずにゐた蟲の音の一ぱいに立昇つて來るのを聞いて涙をながして寝ねかねた。色々故郷を思ふ歌、秋の歌などが出來た。

【十月】「明星」に短歌「虫干集」百二首發表。主に「一握の砂」中の「秋風のこゝろよさに」その他思郷の歌、秋風のうたなど。

栗原古城氏の周旋で、「東京毎日新聞」へ、新聞小説を書く事となる。

【十一月】「明星」終刊號に短歌謎五十二首及び長詩三篇（わが少女も「物なやみ」「おどろき」）發表。

「東京毎日新聞」へ小説『鳥影』を連載す。

【十二月】舊「明星」同人の間に「スバル」發刊の議あり。

四日、小説「赤痢」脫稿、「スバル」初號の爲。

「スバル」編輯相談のために、吉井勇、平野萬里、太田正雄の諸氏交る〳〵來訪。その相談をしながら、傍ら毎日午前中に「鳥影」の續稿を書く。

明治四十二年　（二十四歳）

【一月】雜誌「スバル」の初號刊行、小説「赤痢」載る。

八日、「スバル」の内部相談會、與謝野、平出兩氏以下十氏と共に會合相談、第二號の編輯を委任され、一人で二月號の編輯をやることになる。

今迄書いた小説は、皆周圍の人々を書いたので本當に自分を書いたのは無かつた。愈々これから本當に自敍傳のつもりで自分を書いて行かうと決心して、まづ取掛かつた振出しは、澁民村小學校の代用教員が、ストライキをやつて村を飛び出す所で、「足跡」と題する一篇であつた。

【二月】「スバル」第二號發刊、小説「足跡」を發表す。自分の意見で、短歌をだに思ひ切つて全部六號に組んだので、同人間に物議を起した。

「足跡」は今迄のものの中、著者が最も苦心した作であつたにも拘らず、不幸にも早稲田文學一子が一言に「あれは誇大妄想狂だ」とけなしたのに、なぜか非常にがつかりしてあとを續ける氣を失つた。

此頃又悶々の幾週間が續く。考へあぐみて或日仕方なさに、同國人の緣故（本當に其丈の緣故）ある「朝日新聞」の編輯長なる佐藤北江氏へ宛て、履歴書に手紙を添へ、「私は斯々斯くの者ですが、どうか使つて頂きたい。但、私は生活の爲三十圓を必要とする」といふ履歴書を出してやると、兎に角逢つて見ようといふ返事が來た。會見の席上「校正でもやるか」と聞かれ「幾ら呉れますか」と出たら、「いや、三十圓欲しいといふことぢやないか」と返されて、「それならやります」と答へて歸つて來た。

二十四日、佐藤氏より手紙あり、愈々來月一日より午後に出社すべしと云ひ來る。

二十七日、パンの會、太田正雄、石井柏亭、山本鼎氏等と會す。

【三月】一日、正午より京橋なる朝日新聞社へ出勤す。校正係り、月收二十五圓。但し、外に夜勤料を合せて三十圓以上となる計算。

三日、友人への手紙に記して云ふ、「僕は今始めて僕の思想を統一し、あらゆる物に對して直視することが出來るやうになつた。今こそ一個人としても、作家としても立派な自信を得た。君これからだ。」

【四月】在函館の母堂が一日も早く東京へ來たがられる。まだ下宿の支拂をしなくちや出れないし、下宿へは勿論引取れないし、まだそれ所ではないと、悶々しながら制しとめてゐる。

自ら自己實現說に近づき國家主義に傾いて來た。

九日、大島氏へ寄せた書に「遠い理想のみを持つて自ら現在の生活を直視することの出來ぬ人は哀れな人です。然し現實に面接して其處に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐な人でなければなりません。人生――狭く言つて現實といふものは、決して固定したものではない。隨つて人間の理想といふものも固定したものではない。我々は時々刻々自分の生活（內外の）を豐富にし、擴張し、然して常にそれを統一し、徹底し、改善してゆくべきものではないでせうか……現在の日本には不滿足だらけです。然し私も日本人です、そして私自身も現在不滿足だらけです。乃ち私は自分及自分の生活といふものを改善すると同時に、日本及日本人の生活を改善する事に努力すべきではありますまいか……自己の生活の改善、統一、徹底といふ事は、やがて自己を造るといふ事ではありますまいか」と。

【二月】 中島孤島氏の紹介で春陽堂に後藤宙外氏を訪ひ、小說『道』を金に代ふ。評論『性急な思想』を草す。現實を離れて抽象的な理想に猪突する時弊を痛論す。一面は即ち過去の自己に對する自責の聲。

『二葉亭全集』の校正に、貴重な夜の時間を上野の圖書館に費し、一々原本にあたつて忠實嚴正にやつてゐた。後には自分で五圓を投じて自宅へ借り出して原本にあたつてゐた。こんなに迄してゐることは誰にもわかることでもなし、それ丈骨折ばえのある事か疑問な位だが、さうせずには居れない程、故人に傾倒し、其一字一語の使ひ方にも敬虔な注意を拂つてゐたのである。

【三月】 十三日の手簡中に、「一生活を眞に統一せんとすると、其の結果は却て生活の破壞になる……此發見は實行者としての僕の爲には致命傷の一つでなければならなかつた。そして僕は今また變りかけてゐる」と云つて二重生活の避けがたい事を悲み、意識した二重生活を肯定し、そして又「生活それ自身がワナだ！ さう思ひ到つた時、僕は急にこの世の中から逃出したかつた、そして遂に逃出すことの出來ないワナだと思つた時から、僕は今迄より強くなつた」と。

【四月】 『新小說』に小說『道』出づ。

この頃『朝日新聞』及び『東京毎日新聞』に作歌を發表す。前年初夏以後初めての作。

又この月、北海道にゐた令妹光子さん、名古屋の聖使女學院に入ることを許され、十七日入京、滯在數日の後名古屋へ。

【五月】 『我が最近の興味』を草す。又小說『我等の一團と彼』を起稿す。民衆といふものに對する愛――少くとも興味が濃厚に出て來た。

【六月】 『新小說』に評論『硝子窓』發表。

十三日、岩崎正氏への手簡に云ふ、――「一人になりたい！ 君もさう思ふか？ 然し其希望は、吾々人間の抱き得る最も深い、最も悲しい希望であると共に又あらゆる我々の希望の中の最も不可能な希望ではあるまいか？」

又曰ふ――「運命といふ奴は、決して左程恐るべき敵ではないらしい。どうもさうらしい。此方が冷やかな眼をしてゐれば先方も冷やかな顏をしてゐるけれども、此方で先に笑つて見せさへすれば、どうやら先方でも愛想笑ひ位はしてくれさうだ。運命といふ奴も人情を持つてゐるとすれば正に斯うあるべきだが、僕には其處がまだ明瞭しない。」

この月××事件發覺、思想上に大きな衝動を受く。

これからぼつ〳〵社會主義の本を探し出す。
又この月、苦心して校正した『二葉亭全集』第一卷市に出づ。
【七月】光子さん休暇にて上京、九月初旬に及ぶ。
【八月】感想文『紙上の塵』を草す。
【九月】十五日、「朝日新聞」に、啄木選の歌壇が出來、歌を募集して其の選をすること發表さる。藪野椋十氏の好意であつた。
この月末、本籍を東京本郷弓町二ノ十八に移す。
【十月】四日、東雲堂と歌集出版の約成り、この日、二十圓で『一握の砂』の原稿を賣る。丁度同日大學病院で長男眞一君生る。産後、節子さん服藥年末に及ぶ。
二十七日、夜半、眞一君死去。
二十九日、淺草區永住町了源寺に葬儀を營み、同夜火葬に附す。
三十日、同寺、新井家(間借をしてゐる床屋)の墓地を借りて埋葬す。
【十一月】八日、伯父對月老師九十の高齢を以て盛岡に歿せらる。
歌集『一握の砂』刊行。
『一利己主義者と友人との對話』を草す。

愛兒死すれど、金田一來り弔せず、歌集を送れども、金田一答へず、金田一を憤る情あり。
【十二月】『歌のいろ〳〵』を草す。「歌は私の悲しい玩具である」と結んだ。土岐氏が選んだ第二歌集『悲しき玩具』の名の出所。
節子夫人は、やつぱりぶら〳〵藥餌に親しんでゐる。少しのゆるみの程もなく、又又生活難が追ひかけて來た。
『二葉亭全集』第二卷出づ。この仕事について、内田魯庵翁に度々逢ふ。
此頃、或出來事の刺激を受けて考へ方に峻しい變化を生じた。又零碎の小遣で古本屋をあさり、これまで出た限りの社會主義的な本を得ては耽讀してゐた。所詮行く所まで行かなければ、引返すことの出來ない熱心さを以て、嚴しく突込みながら。
二十九日、年越の融通を賴みに、宮崎氏へ電報で、「一日一日苦しくなりぬ頭いたし、君のたすけを待つ身となりぬ」と打つ。

明治四十四年　(二十六歲)

【一月】雜誌「創作」に『方角』(短歌九首)載る。
九日、瀨川氏への手紙にいふ、「自分を社會主義者と呼ぶことを躊躇してゐたが、今ではもう躊躇しない。勿論社會主義は最後の理想ではない」。餘程思想が嚴肅になりかゝる。
十日、クロポトキンの『青年に訴ふ』を讀んで感激す。
十二日、哀果、啄木、始めて逢ふ。但この日はまだ單に電話を通しての會話に止まつた。哀果から啄木へかけたのである。
十三日、啄木の方から哀果を讀賣新聞社に訪ね、一緒に歸る。此日は哀果、啄木方へ同道し、始めて對座してゆつくり語り合ひ、一合五勺の酒に二人陶然となる。雜誌刊行の談も出る。
十四日、雜誌の畫策を進める。財政上の援助を其となく宮崎氏に謀つて快諾を得。
二十二日、××事件關係記錄整理に一日を費す。
二十六日、××事件特別裁判一件書類を耽讀す。
二十九日、雜誌發行について、諸方へ宣傳の手紙を出す。雜誌の名は「樹木と果實」と定まる。
金田一を介して「層雲」の荻原井泉水氏へ連絡がつく。歌と俳句との差はあるが、二人の間

には一味相通ずるものがあつたやうだ。同じく偶像破壞者で、同じく新しい物の建設者であつたから。尤も荻原君の方からまづ啄木を見出して接觸を求めて來たのであつた。

【二月】 一日、去年の秋頃から已に下腹がふくれて來て、「おほどかな心來れり歩くにも腹に力のたまるが如し」など喜んでゐたのが、段々餘り脹れ出すので、氣になつて來たから、太田正雄氏の好意で大學病院三浦内科で診察して貰ふと、慢性腹膜炎とわかり、入院手術を要すと云ひ渡された。

三日、若山牧水氏始めて啄木を訪ふ。

雜誌「創作」に『都合わるき性格』（短歌二十首）載る。

四日、青山内科第十八號に入院す。

六日、ベッドの上から北海道の大島氏へ宛て、去年の一月一切の現實を肯定した自己實現說が、このまゝの社會組織の許では不可能の事に思へて來たと論じて、現實否定の聲を放つてゐる。

七日、手術す。經過は好き方。

十五日、やつぱり、「予は強固たる唯物論者である」と云ひ切つてゐる。

十六日、「函館日々新聞」へ寄せた「郁雨に與ふ」起稿。

下旬に到り、發熱日々續く。

此月谷靜湖氏の歌集「靑笑」出づ、啄木の序文あり。

【三月】 早稻田文學に「眼の位置」短歌十三首載る。「創作」に「寝臺より」短歌十八首載る。

病勢やゝ衰ふ。

十五日、退院。弓町の寓に靜養仰臥す。

下旬、腹膜の水殆んど無くなり、多少元氣づく。

二十四日、クロポトキンの英譯「革命家の思出」を讀み初む。

【四月】 七日、土岐、並木の二氏と淺草まで行き肉屋へ上つたりして歸ると又發熱す。

少々の手違ひで雜誌が出しがたくなり、十八日に至り到頭絶望、發行を斷念す。

病長びくので悲觀す。

二十四日、「平民新聞」所載邦譯トルストイの日露戰爭論「爾曹悔改めよ」の筆記を始む。

二十七日、土岐氏への書簡に「此頃はもう養生する金もなくなつたし、何か書きたいにも書く程の勇氣も出ないし、實に下らない世の中になつた」。

依然として寝たり起きたりの日暮らし。

【五月】 二日、「戰爭論」を寫し終ふ。

いくらか病勢退る。

【六月】 ひきつゞき、七度五分ぐらゐに熱が降つてゐる。

十五日、長詩「はてしなき議論の後」「ココアのひと匙」「書齋の午後」成る。

十六日、長詩「激論」「墓碑銘」「古びたる鞄をあけて」成る。

二十五日、長詩「家」成る。

二十七日、長詩「飛行機」成る。

この月節子夫人の生家、堀合氏一家揃つて函館に移住す。

【七月】 雜誌「創作」に、『はてしなき議論の後』（詩六篇、『呼子と口笛』）載る。

この頃であつたらうか、も少し前であらうか、杖につかまつて休み〳〵、弓町から森川町まで歩いて金田一を訪ね、今自分が思想上の一轉機にあること、並にアナキズムの重大な誤謬を發見したといふことを物語つて、態々安心してもらひに來たのだと云つた。そして「自分の今到達した思想の傾向については、自分ながらまだ適當な名を知らない。強ひて云へば――こんな反對な二名辭を結附けるの

が可笑しいけれど、外に自分は今云へないから假にいふならばと云つて、社會主義的帝國主義といふ表現を用ひ、そして、病床に危坐して火を吐くやうに現代の社會組織を呪咀した口から、涙ぐましく一切の現實を此儘肯定しようとする血の出る樣な言葉が響いた。

七月中、再び發熱、肋膜がわるいさう。

十八日、午前光子さん名古屋から見えて、同日正午又北海道へ向けて去る。

二十八日、節子夫人容態惡し。大學病院で診察して貰ふと、肺尖カタールだといはる。

【八月】夫人容態益々惡し。炊事萬端老いたる母堂の一手でやられる。二折り返しに腰の曲つた老體の一々階段を上下されるあぶなさ、見て居れず。二階の間借ゆゑ、何かと不便が多いし、氣を換へる爲にも、それがよからうと、家を探す。

五日、夫人貸家を探して來る。

七日、小石川區久堅町七十四番地に日當りのいゝ家を見つけて移轉す。

少しはよい方で、物價も順調なれど、病氣が長びくので、たうとう神經衰弱の氣味になり、食慾減退し、七度五六分の熱仲々とれず。心配す。

十日、光子さん旭川から來られ、十二日から看護にあたらる。

下旬、母堂また病む。一家みな病人。光子さん看護にあたらる。

二十六日、夜おそく母堂三十九度の高熱を發し、病詩人起きて、ふら〳〵し乍ら冷し氷を買ひに出掛けた。

【九月】節子夫人、今まで左の肺尖のみだつたのに、左がよくなりかけて、更に右の肺尖が犯されてゐたこと分明し、がつかりする。

十四日、光子さん去る。

十五日、京ちやん肺炎。

十七日の光子さんへの手紙、「お前の知つてるあの不愉快な事件も、昨夜になつてどうやらきまりがついた。家に置く。然しこの事については、もう決して手紙などに書いてよこしてくれるな」。

【十月】クロポトキンの英譯『ロシヤの恐怖』を筆記す。

【十一月】三日、感想『平信』の稿を起す。

【十二月】三十日、又發熱、此後漸く熱降らず。

明治四十五年　（二十七歳）

【一月】大抵寢てゐる日多し。

下旬、又熱が少しく高まる。母堂は終に不治の床に就く。

【二月】七日、母堂永眠。「自分達夫婦は奥に寢て、母ひとり次の室に寢てゐたから、誰にも看護らるゝこともなく、夜が明けたら、冷たくなつてゐたのだ」と云つて、はてしも無く悲しんでゐた。

【三月】母堂の永眠後、元氣なく、衰弱が著しく目だつて來た。

【四月】初旬、櫻が滿開の休日だつた、金田一がたづねて行つたら、自分で「ひよつとしたら、今度はだめだ」と云つた。「醫者は」と聞くと、「藥代を滯るものだから、來てくれない」と云ふ。「いくら自分で生きたいと思つたつて、こんなだもの」と、自分で夜具をあげて腰を見せた。一寸骨のやうだつた。「是ぢやいけない、兎に角、好な甘い物を食べて肥らなきや」と云つたら、「甘いものどころか、米さへも無い」と笑つた。金田一は引返して、丁度脱稿した『言語學』を金に替へて、すぐ病床へ持つて行つたのであつた。

土岐氏が『悲しき玩具』の稿料二十圓を持つて行つてやり、自分で、飲んで見たいといひ〳〵してゐた或る賣藥（死んだ時まだ半分殘つ

てゐたのを買つたのも此の頃の事か。
七、八日頃、電報にて、室蘭、山本氏方にあり
し嚴父呼びかへさる。
十三日、夜中から金田一の名を呼ぶのだつたさうで、節子夫人夜が明けると、迎への車をやる。金田一の顏を見ると、一言「たのむ」と呼んだ。暫くして若山牧水氏が來ると、落ちついて雜誌の次號計畫などをして、二人で樂しさうに雜談を始めた。九時半頃又俄に險惡になつて嚴父と夫人と若山氏に見護られ乍ら永眠した。
十四日、茶毘に附す。
十五日、土岐哀果氏の生れた淺草等光寺に埋葬。會葬者三百人餘、哀果氏令兄土岐月章師始め土岐家一統の篤い同情の下に盛大なる法要が營まれたのであつた。
二十二日、嚴父また室蘭へ立たる。
四月末日、節子夫人久堅町の悲しい家を疊んで、立たうと荷物を玄關に出して車を呼びに出たあとへ、明巣ねらひが入つてそつくり行李を持つて行つた。
【五月】 教會の方のコルバン夫人といふ人の厚意と、土岐氏の配慮で、節子夫人姙娠八月の病軀を房州北條の地に養ふこととなる。
【六月】 十四日、節子夫人北條にて二女房江さんを擧ぐ。
二十日、土岐氏編「悲しき玩具」出版。

大正元年

【九月】 節子夫人函館へ赴き、公園近傍の家に二人の孃ちやんとわびしく住む。

大正二年

【一月】 夫人の病勢募り、函館市豐川病院に入院す。
【五月】 五日、夫人臨終。母堂・宮崎氏夫妻みな枕頭にあつまる。夫人、鉛筆で、「京子の事をよく賴む」と書き、また與謝野さん、金田一さん、土岐さん、森さん、夏目さんと名を列擧して、「知らせてあげてください」と云つて、そして「京子の事をたのんで」、それから宮崎氏を顧みて「妹（氏の令室）を可愛がつてやつてください」と云ひ、そして目をとぢて、「もう死ぬから、皆さん左樣なら」と云つてから、二三分してまた目を開き、「仲々死なないものですねえ」と云つた時は、もう皆が泣いてゐた時だつたといふ。それから、もう一度「皆さん左樣なら」と云つて目をとぢた。

昭和三年七月五日印刷
昭和三年七月十日發行

現代日本文學全集 第四十五篇

著作權所有

著者 石川一

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(4) 一一二一番・一一二二番・一一二三番・一一二四番

株式會社秀英舍印刷